八千代市権現後遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—

1984

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

八千代市権現後遺跡

―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―

本文編

1984

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

八千代市内の河川は、新川をはじめ大、小の河川が支谷を形成して市の北部に位置する印旛沼に注いでおり、河川流域は恵まれた自然環境をなし、旧石器時代をはじめ歴史時代に至る数多くの遺跡が所在しております。

千葉県の北西部に位置するこの地域は、縦横に通過する鉄道や国道など交通網の整備が進んでおり、首都30 km圏に位置することなどから工業団地や住宅団地の建設が近年盛んに行われています。

住宅・都市整備公団では、このような首都圏における急激な社会増に対応する施策の一環として萱田地区において土地区画整理事業を計画しました。

千葉県教育委員会では、用地内に所在する埋蔵文化財の取扱について、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねた結果、できるだけ公園、緑地に取り込んだ開発計画の中で遺跡の現状保存を図る一方、現状保存が困難な遺跡については十分な記録保存の措置を講じることになり記録保存に当たっては、財団法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、昭和52年度から調査を実施しているところです。

このたび、昭和52年度から55年度にわたり発掘調査を実施して、旧石器時代の局部磨製石斧や平安時代の墨書人面土器をはじめ多くの遺物と遺構を検出した「権現後遺跡」の発掘成果を報告書として刊行する運びとなりました。

本書が学術資料としてはもとより教育資料として広く活用されるとともに、文化財保護思想の普及に貢献できればと、願ってやみません。

終りに当たり、発掘調査から報告書刊行までいろいろご指導をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係諸機関各位のご協力にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和59年3月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　今　井　　正

凡　　例

1．本書は、八千代都市計画事業萱田特定土地区画整理事業の実施に伴い事前調査した八千代市権現後遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和52年４月１日から昭和56年３月３日の間において四次にわたり実施した。

3．発掘調査の実施は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部の依頼により、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。

4．権現後遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード八千代市（221)、千葉県文化財センター遺跡コード（001）を使用し、221－001とした。

5．整理作業は、昭和53年４月１日から昭和57年３月31日の間において四次にわたり実施した。

6．本書の作成および執筆は、調査部長白石竹雄、部長補佐天野努の助言のもとに、序章第１節、第２節３項、第３節１・４項、第IV部第１～３章、第４章第２節、第Ｖ部、終章第６～８節を阪田正一、第III部、終章第５節を加藤修司、序章第２節１・２項、第３節２～４項、第Ｉ部、第II部、第IV部第４章第１節、終章第１節～第４節を橋本勝雄がそれぞれ分担し、阪田が全体をまとめた。

7．本書に使用した空中写真は、有限会社エアー・フォト・サービス（図版２、36、37－１、127、128－２、129）ならびに森昭写真事務所（図版３、37－２、38、39）に委託したものである。

8．花粉分析ならびに鉱物分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、終章第１節第１項、第２節第１項に分析報告を掲載した。

9．図版１の空中写真は、昭和49年２月10日株式会社千葉日報社撮影のものを使用した。

10．図１の地形図は、国土地理院発行の５分の１、佐倉を使用した。

11．墨書人面土器の判読については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第１調査室　佃幹雄、考古第３調査室　森郁夫、巽淳一郎、資料調査室　今泉隆雄、埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室　工楽善通の各氏にご教示をいただいた。

12．発掘調査から報告書刊行にいたるまでご指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、同千葉北部開発事務所、八千代市教育委員会、地元関係諸機関各位にご協力をいただいた。

本 文 目 次

序　文

凡　例

序　章…… i

第1節　発掘調査に至る経過…… i

第2節　遺跡の概観……iii

第3節　調査の経過……xiii

第Ⅰ部　旧石器時代…… 1

第1章　段丘面と旧石器時代の遺跡の立地…… 3

第2章　層位と文化層…… 3

第1節　自 然 層…… 3

第2節　文 化 層…… 7

第3章　遺構と出土遺物…… 7

第1節　はじめに…… 7

第2節　第1文化層…… 8

第3節　第2文化層……11

第4節　第3文化層……15

第5節　第4文化層……78

第6節　第5文化層…… 110

第7節　第6文化層…… 125

第8節　表面採集遺物…… 138

第9節　炭化物の集中地点…… 140

第4章　ま と め…… 144

第1節　石器群の変遷…… 144

第2節　ブロックの性格…… 150

第3節　礫　　群…… 155

第4節　搬入石材…… 156

第Ⅱ部　縄文時代…… 159

第1章　層位と出土状況…… 161

第１節　層位と出土状況…… 161
第２節　縄文包含層の調査…… 161
第２章　縄文時代の遺物…… 163
第１節　土　　器…… 163
第２節　石　　器…… 175
第３章　ま と め…… 185
第１節　土　　器…… 185
第２節　石　　器…… 186

第III部　弥生時代…… 187
第１章　弥生時代の概観…… 189
第２章　遺構と出土遺物…… 189
第１節　はじめに…… 189
第２節　第Ｉ群の遺構と遺物…… 190
第３節　第II群の遺構と遺物…… 223
第４節　第III群の遺構と遺物…… 249
第５節　第IV群の遺構と遺物…… 258
第６節　第Ｖ群の遺構と遺物…… 379
第３章　ま と め…… 382
第１節　印手式をめぐる後期弥生式土器の様相…… 382
第２節　弥生時代集落の変遷…… 390

第IV部　古墳時代…… 397
第１章　古墳時代の概観…… 399
第２章　中期の遺構と出土遺物…… 399
第１節　はじめに…… 399
第２節　第Ｉ群の遺構と遺物…… 400
第３節　第II群の遺構と遺物…… 407
第３章　後期の遺構と出土遺物…… 435
第１節　はじめに…… 435
第２節　第Ｉ群の遺構と遺物…… 436
第３節　第II群の遺構と遺物…… 441
第４章　ま と め…… 465

第１節　古墳時代中期の様相…… 465
第２節　古墳時代後期の様相…… 469
第Ⅴ部　歴史時代…… 475
第１章　歴史時代の概観…… 477
第２章　遺構と出土遺物…… 477
第１節　はじめに…… 477
第２節　第Ⅰ群の遺構と遺物…… 478
第３節　第Ⅱ群の遺構と遺物…… 564
第４節　第Ⅲ群の遺構と遺物…… 609
第５節　第Ⅳ群の遺構と遺物…… 656
第６節　その他の遺構と遺物…… 710
第３章　ま と め…… 716
第１節　遺構について…… 716
第２節　遺物について…… 722

終章…… i
第１節　鉱物分析の結果とその評価…… i
第２節　花粉分析の結果とその評価…… xxii
第３節　旧石器時代の総括…… xxii
第４節　縄文時代の総括…… xix
第５節　弥生時代の総括…… xix
第６節　古墳時代の総括…… xx
第７節　歴史時代の総括…… xxi
第８節　結　　言…… xxiii

挿 図 目 次

図1　萱田地区の位置と周辺の遺跡群 …… iv
図2　昭和52年度第1次～第3次確認調査範囲 …… xiii
図3　昭和52年度第1次・第2次本調査範囲 …… xiv
図4　昭和53・54年度本調査範囲 …… xv
図5　昭和55年度本調査範囲 …… xvii
図6　小グリッド配置図 …… xix
図7　段丘面と旧石器時代遺跡の立地 …… 2
図8　標準層序と鉱物分析サンプル採取位置 …… 4
図9　遺跡土層断面図 …… 5
図10　ブロック配置図 …… 9
図11　第1文化層出土遺物実測図 …… 11
図12　第23ブロック遺物出土状況図 …… 12
図13　第23ブロック出土遺物実測図 …… 13
図14　第2文化層ブロック外出土遺物実測図 …… 15
図15　第9ブロック出土遺物実測図 …… 16
図16　第9・10ブロック遺物出土状況図 …… 17
図17　第12ブロック出土遺物実測図(1) …… 20
図18　第12ブロック遺物出土状況図 …… 21
図19　第12ブロック出土遺物実測図(2) …… 23
図20　第13ブロック遺物出土状況図 …… 25
図21　第13ブロック出土遺物実測図 …… 25
図22　第14ブロック遺物出土状況図 …… 29
図23　第14ブロック出土遺物実測図(1) …… 32
図24　第14ブロック出土遺物実測図(2) …… 33
図25　第15ブロック遺物出土状況図(1) …… 37
図26　第15ブロック遺物出土状況図(2) …… 41
図27　第15ブロック出土遺物実測図(1) …… 44
図28　第15ブロック出土遺物実測図(2) …… 45
図29　第15ブロック出土遺物実測図(3) …… 46
図30　第15ブロック出土遺物実測図(4) …… 47

図31　第16ブロック出土遺物実測図(1) …… 50
図32　第16ブロック遺物出土状況図 …… 51
図33　第16ブロック出土遺物実測図(2) …… 53
図34　第16ブロック出土遺物実測図(3) …… 53
図35　第17ブロック出土遺物実測図 …… 56
図36　第17ブロック遺物出土状況図 …… 57
図37　第18ブロック遺物出土状況図 …… 60
図38　第18ブロック出土遺物実測図 …… 61
図39　第20ブロック遺物出土状況図 …… 63
図40　第20ブロック出土遺物実測図(1) …… 64
図41　第20ブロック出土遺物実測図(2) …… 64
図42　第20ブロック出土遺物実測図(3) …… 65
図43　第21ブロック遺物出土状況図 …… 67
図44　第21ブロック出土遺物実測図(1) …… 68
図45　第21ブロック出土遺物実測図(2) …… 68
図46　第22ブロック遺物出土状況図 …… 70
図47　第22ブロック出土遺物実測図 …… 71
図48　第27ブロック遺物出土状況図 …… 72
図49　第27ブロック出土遺物実測図 …… 74
図50　第３文化層ブロック外出土遺物実測図(1) …… 75
図51　第３文化層ブロック外出土遺物実測図(2) …… 76
図52　第１ブロック遺物出土状況図 …… 79
図53　第１ブロック出土遺物実測図(1) …… 80
図54　第１ブロック出土遺物実測図(2) …… 81
図55　第２ブロック遺物出土状況図 …… 85
図56　第２ブロック出土遺物実測図(1) …… 87
図57　第２ブロック出土遺物実測図(2) …… 87
図58　第２ブロック出土遺物実測図(3) …… 88
図59　第３ブロック遺物出土状況図(1) …… 91
図60　第３ブロック遺物出土状況図(2) …… 92
図61　第３ブロック出土遺物実測図 …… 93
図62　第４・５ブロック遺物出土状況図 …… 95
図63　第４・５ブロック出土遺物実測図 …… 96

図64　第６ブロック遺物出土状況図 …… 99
図65　第６ブロック出土遺物実測図(1) ……100
図66　第６ブロック出土遺物実測図(2) ……100
図67　第６ブロック出土遺物実測図(3) ……101
図68　第７・８ブロック遺物出土状況図 ……103
図69　第７・８ブロック出土遺物実測図 ……104
図70　第19ブロック遺物出土状況図 ……106
図71　第19ブロック出土遺物実測図 ……107
図72　第24ブロック遺物出土状況図 ……111
図73　第24ブロック出土遺物実測図(1) ……112
図74　第24ブロック出土遺物実測図(2) ……113
図75　第24ブロック出土遺物実測図(3) ……114
図76　第25ブロック遺物出土状況図 ……116
図77　第25ブロック出土遺物実測図(1) ……117
図78　第25ブロック出土遺物実測図(2) ……118
図79　第25ブロック出土遺物実測図(3) ……119
図80　第25ブロック出土遺物実測図(4) ……120
図81　第25ブロック出土遺物実測図(5) ……121
図82　第25ブロック出土遺物実測図(6) ……122
図83　第25ブロック出土遺物実測図(7) ……123
図84　第５文化層ブロック外出土遺物実測図 ……124
図85　第10ブロック出土遺物実測図(1) ……126
図86　第10ブロック出土遺物実測図(2) ……127
図87　第10ブロック出土遺物実測図(3) ……129
図88　第11ブロック遺物出土状況図 ……133
図89　第11ブロック出土遺物実測図(1) ……134
図90　第11ブロック出土遺物実測図(2) ……135
図91　第６文化層ブロック外出土遺物実測図 ……137
図92　表面採集遺物実測図 ……139
図93　炭化物出土状況平面模式図 ……141
図94　Ｃ－２・６・７・８炭化物集中地点 ……142
図95　権現後遺跡の旧石器時代石器群の変遷(1) ……145
図96　権現後遺跡の旧石器時代石器群の変遷(2) ……146

図97　第４文化層第１～６、７・８ブロック母岩別資料相関図 …… 152
図98　縄文包含層遺物出土状況図 …… 162
図99　縄文包含層縄文土器実測図 …… 163
図100　縄文時代土器実測図(1) …… 164
図101　縄文時代土器実測図(2) …… 165
図102　縄文時代土器実測図(3) …… 166
図103　縄文時代土器実測図(4) …… 168
図104　縄文時代土器実測図(5) …… 168
図105　縄文時代土器実測図(6) …… 169
図106　縄文時代土器実測図(7) …… 170
図107　縄文時代土器実測図(8) …… 171
図108　縄文時代土器実測図(9) …… 172
図109　縄文時代土器実測図(10) …… 173
図110　縄文時代土器実測図(11) …… 174
図111　縄文時代石器実測図(1) …… 178
図112　縄文時代石器実測図(2) …… 180
図113　縄文時代石器実測図(3) …… 181
図114　縄文時代石器実測図(4) …… 182
図115　縄文時代石器実測図(5) …… 183
図116　縄文時代石器実測図(6) …… 184
図117　弥生時代第Ⅰ群遺構分布状況図 …… 190
図118　D001号遺構実測図…… 191
図119　D001号遺構炉跡実測図…… 191
図120　D001号遺構出土遺物実測図…… 192
図121　D026号遺構実測図…… 193
図122　D026号遺構炉跡実測図…… 193
図123　D026号遺構出土遺物実測図…… 193
図124　D027号遺構実測図…… 194
図125　D027号遺構炭化物出土状況図…… 195
図126　D027号遺構炉跡実測図…… 195
図127　D027号遺構出土遺物実測図…… 196
図128　D028号遺構実測図…… 197
図129　D028号遺構炉跡実測図…… 198

図130　D028号遺構出土遺物実測図…… 198
図131　D029号遺構実測図…… 199
図132　D029号遺構炭化物出土状況図…… 200
図133　D029号遺構炉跡実測図…… 200
図134　D029号遺構出土遺物実測図(1)…… 201
図135　D029号遺構出土遺物実測図(2)…… 202
図136　D030号遺構実測図…… 203
図137　D030号遺構炭化物出土状況図…… 204
図138　D030号遺構炉跡実測図…… 204
図139　D030号遺構出土遺物実測図(1)…… 205
図140　D030号遺構出土遺物実測図(2)…… 206
図141　D031号遺構実測図…… 206
図142　D031号遺構炉跡実測図…… 207
図143　D031号遺構出土遺物実測図…… 207
図144　D033号遺構実測図…… 208
図145　D033号遺構炉跡実測図…… 208
図146　D033号遺構出土遺物実測図…… 208
図147　D036号遺構実測図…… 209
図148　D036号遺構炉跡実測図…… 209
図149　D036号遺構出土遺物実測図…… 209
図150　D037号遺構実測図…… 210
図151　D037号遺構炉跡実測図…… 210
図152　D037号遺構出土遺物実測図…… 211
図153　D038号遺構実測図…… 212
図154　D038号遺構炉跡実測図…… 212
図155　D038号遺構出土遺物実測図…… 212
図156　D039号遺構実測図…… 213
図157　D039号遺構炉跡実測図…… 213
図158　D039号遺構炭化物出土状況図…… 214
図159　D039号遺構出土遺物実測図…… 214
図160　D040号遺構実測図…… 215
図161　D040号遺構炉跡実測図…… 215
図162　D044号遺構実測図…… 215

図163　D053号遺構実測図…… 216
図164　D053号遺構出土遺物実測図…… 216
図165　D069号遺構実測図…… 217
図166　D069号遺構炉跡実測図…… 218
図167　D094号遺構実測図…… 218
図168　D094号遺構炉跡実測図…… 218
図169　D185号遺構実測図…… 219
図170　D185号遺構出土遺物実測図…… 220
図171　D186号遺構実測図…… 221
図172　D186号遺構炉跡実測図…… 221
図173　D186号遺構出土遺物実測図…… 221
図174　D187号遺構実測図…… 222
図175　D187号遺構炉跡実測図…… 222
図176　D187号遺構出土遺物実測図…… 222
図177　弥生時代第II群遺構分布状況図 …… 224
図178　D002号遺構実測図…… 225
図179　D002号遺構炉跡実測図…… 225
図180　D002号遺構P 3 平断面図…… 225
図181　D002号炭化物出土状況図…… 226
図182　D002号遺構出土遺物実測図…… 226
図183　D003号遺構実測図…… 227
図184　D003号遺構炉跡実測図…… 227
図185　D003号遺構出土遺物実測図…… 227
図186　D004A号遺構実測図…… 228
図187　D004A号遺構炉跡実測図…… 229
図188　D004A号遺構出土遺物実測図…… 229
図189　D004B号遺構実測図…… 231
図190　D004B号遺構炉跡実測図…… 231
図191　D004B号遺構出土遺物実測図…… 231
図192　D006号遺構実測図…… 232
図193　D006号遺構炉跡実測図…… 233
図194　D006号遺構出土遺物実測図…… 233
図195　D009号遺構実測図…… 234

図196　D009号遺構炉跡実測図…… 235
図197　D009号遺構出土遺物実測図…… 235
図198　D054号遺構実測図…… 236
図199　D054号遺構炉跡実測図…… 237
図200　D054号遺構出土遺物実測図…… 237
図201　D070号遺構実測図…… 238
図202　D070号遺構炉跡実測図…… 238
図203　D070号遺構出土遺物実測図…… 239
図204　D073号遺構実測図…… 239
図205　D073号遺構炉跡実測図…… 240
図206　D073号遺構出土遺物実測図…… 240
図207　D074号遺構実測図…… 240
図208　D075号遺構実測図…… 241
図209　D075号遺構炉跡実測図…… 242
図210　D075号遺構出土遺物実測図…… 242
図211　D076号遺構実測図…… 243
図212　D076号遺構炉跡実測図…… 244
図213　D076号遺構出土遺物実測図…… 244
図214　D079号遺構実測図…… 245
図215　D079号遺構炉跡実測図…… 245
図216　D080号遺構実測図…… 246
図217　D080号遺構炉跡実測図…… 246
図218　D080号遺構出土遺物実測図…… 247
図219　D162号遺構実測図…… 247
図220　D162号遺構出土遺物実測図…… 248
図221　弥生時代第III群遺構分布状況図 …… 249
図222　D130号遺構実測図…… 250
図223　D130号遺構炉跡実測図…… 250
図224　D130号遺構石製遺物層位別分布図…… 251
図225　D130号遺構石製遺物平面分布模式図…… 252
図226　D130号遺構出土遺物実測図…… 252
図227　D137号遺構実測図…… 253
図228　D137号遺構炭化物出土状況図…… 254

図229　D137号遺構炉跡実測図…… 254
図230　D137号遺構出土遺物実測図…… 254
図231　D138号遺構実測図…… 255
図232　D138号遺構炉跡実測図…… 256
図233　D138号遺構出土遺物実測図…… 256
図234　M014号遺構実測図…… 257
図235　M014号遺構出土遺物実測図…… 257
図236　弥生時代第IV群遺構分布状況図 …… 259
図237　D098号遺構実測図…… 260
図238　D098号遺構炉跡実測図…… 260
図239　D098号遺構出土遺物実測図…… 260
図240　D101号遺構実測図…… 263
図241　D101号遺構炉跡実測図…… 263
図242　D101号遺構出土遺物実測図…… 264
図243　D103号遺構実測図…… 264
図244　D103号遺構炉跡実測図…… 265
図245　D103号遺構出土遺物実測図…… 265
図246　D109号遺構実測図…… 266
図247　D109号遺構炭化物出土状況図…… 267
図248　D109号遺構炉跡実測図…… 267
図249　D109号遺構出土遺物実測図…… 268
図250　D110号遺構実測図…… 269
図251　D110号遺構炉跡実測図…… 269
図252　D110号遺構出土遺物実測図…… 269
図253　D111号遺構実測図…… 270
図254　D111号遺構炉跡実測図…… 271
図255　D111号遺構出土遺物実測図…… 271
図256　D113号遺構実測図…… 272
図257　D113号遺構炉跡実測図…… 272
図258　D114号遺構実測図…… 273
図259　D114号遺構炉跡実測図…… 273
図260　D114号遺構出土遺物実測図…… 273
図261　D115号遺構実測図…… 274

図262　D115号遺構炉跡実測図……275
図263　D115号遺構出土遺物実測図(1)……276
図264　D115号遺構出土遺物実測図(2)……277
図265　D116号遺構実測図……277
図266　D116号遺構炉跡実測図……278
図267　D116号遺構出土遺物実測図……278
図268　D117号遺構実測図……279
図269　D117号遺構炭化物出土状況図……280
図270　D117号遺構炉跡実測図……280
図271　D117号遺構出土遺物実測図……281
図272　D118号遺構実測図……282
図273　D118号遺構炉跡実測図……282
図274　D118号遺構出土遺物実測図……282
図275　D119号遺構実測図……283
図276　D119号遺構炉跡実測図……284
図277　D119号遺構出土遺物実測図……284
図278　D120号遺構実測図……285
図279　D120号遺構炉跡実測図……285
図280　D120号遺構出土遺物実測図……286
図281　D121号遺構実測図……287
図282　D121号遺構炉跡実測図……287
図283　D121号遺構炭化物出土状況図……288
図284　D121号遺構出土遺物実測図……288
図285　D122号遺構実測図……290
図286　D122号遺構炉跡実測図……291
図287　D122号遺構出土遺物実測図……291
図288　D123号遺構実測図……292
図289　D123号遺構炉跡実測図……292
図290　D124号遺構実測図……293
図291　D124号遺構炉跡実測図……294
図292　D124号遺構出土遺物実測図……294
図293　D125号遺構実測図……295
図294　D125号遺構炉跡実測図……295

図295　D125号遺構出土遺物実測図…… 295
図296　D126号遺構実測図…… 297
図297　D126号遺構炉跡実測図…… 297
図298　D126号遺構出土遺物実測図…… 298
図299　D128号遺構実測図…… 299
図300　D128号遺構炉跡実測図…… 299
図301　D128号遺構出土遺物実測図…… 299
図302　D129号遺構実測図…… 300
図303　D129号遺構炉跡実測図…… 300
図304　D129号遺構出土遺物実測図…… 301
図305　D140号遺構実測図…… 302
図306　D140号遺構炉跡実測図…… 302
図307　D140号遺構出土遺物実測図…… 303
図308　D141号遺構実測図…… 303
図309　D141号遺構炉跡実測図…… 304
図310　D141号遺構出土遺物実測図…… 304
図311　D145号遺構実測図…… 305
図312　D145号遺構炉跡実測図…… 306
図313　D145号遺構出土遺物実測図…… 306
図314　D146号遺構実測図…… 307
図315　D146号遺構炉跡実測図…… 308
図316　D146号遺構出土遺物実測図…… 308
図317　D147号遺構実測図…… 309
図318　D147号遺構炉跡実測図…… 309
図319　D147号遺構出土遺物実測図…… 309
図320　D151号遺構実測図…… 310
図321　D151号遺構炉跡実測図…… 311
図322　D151号遺構出土遺物実測図…… 311
図323　D154号遺構実測図…… 312
図324　D154号遺構炉跡実測図…… 312
図325　D154号遺構出土遺物実測図…… 312
図326　D155号遺構実測図…… 313
図327　D155号遺構炉跡実測図…… 314

図328　D155号遺構出土遺物実測図…… 314
図329　D156号遺構実測図…… 315
図330　D156号遺構炉跡実測図…… 315
図331　D156号遺構出土遺物実測図…… 315
図332　D157号遺構実測図…… 316
図333　D157号遺構炉跡実測図…… 317
図334　D157号遺構出土遺物実測図…… 317
図335　D159号遺構実測図…… 318
図336　D161号遺構実測図…… 319
図337　D161号遺構炉跡実測図…… 319
図338　D161号遺構出土遺物実測図…… 319
図339　D168号遺構実測図…… 320
図340　D168号遺構炉跡実測図…… 320
図341　D168号遺構出土遺物実測図…… 320
図342　D179号遺構実測図…… 321
図343　D179号遺構炉跡実測図…… 321
図344　D179号遺構出土遺物実測図…… 322
図345　D181号遺構実測図…… 323
図346　D181号遺構出土遺物実測図…… 323
図347　D095号遺構実測図…… 324
図348　D095号遺構炉跡実測図…… 324
図349　D095号遺構出土遺物実測図…… 324
図350　D096号遺構実測図…… 325
図351　D096号遺構炭化物出土状況図…… 326
図352　D096号遺構炉跡実測図…… 326
図353　D096号遺構出土遺物実測図…… 327
図354　D097号遺構実測図…… 329
図355　D097号遺構炉跡実測図…… 329
図356　D097号遺構出土遺物実測図…… 330
図357　D100号遺構実測図…… 331
図358　D100号遺構炉跡実測図…… 331
図359　D100号遺構出土遺物実測図…… 331
図360　D102号遺構実測図…… 332

図361　D102号遺構出土遺物実測図…… 333
図362　D104号遺構実測図…… 334
図363　D104号遺構炉跡実測図…… 334
図364　D104号遺構出土遺物実測図…… 335
図365　D105号遺構実測図…… 335
図366　D105号遺構炉跡実測図…… 336
図367　D105号遺構出土遺物実測図…… 336
図368　D107号遺構実測図…… 337
図369　D107号遺構出土遺物実測図…… 337
図370　D108号遺構実測図…… 339
図371　D108号遺構炉跡実測図…… 339
図372　D108号遺構出土遺物実測図(1)…… 340
図373　D108号遺構出土遺物実測図(2)…… 341
図374　D134号遺構実測図…… 342
図375　D134号遺構炉跡実測図…… 342
図376　D134号遺構出土遺物実測図…… 343
図377　D142号遺構実測図…… 344
図378　D142号遺構炉跡実測図…… 344
図379　D142号遺構出土遺物実測図…… 345
図380　D143号遺構実測図…… 346
図381　D143号遺構炉跡実測図…… 346
図382　D143号遺構出土遺物実測図…… 347
図383　D144号遺構実測図…… 348
図384　D144号遺構炉跡実測図…… 348
図385　D144号遺構出土遺物実測図…… 348
図386　D148号遺構実測図…… 350
図387　D148号遺構炉跡実測図…… 350
図388　D148号遺構出土遺物実測図…… 351
図389　D149号遺構実測図…… 351
図390　D149号遺構出土遺物実測図…… 352
図391　D150号遺構実測図…… 353
図392　D150号遺構炉跡実測図…… 353
図393　D150号遺構出土遺物実測図…… 354

図394　D152号遺構実測図…… 355
図395　D152号遺構炉跡実測図…… 355
図396　D152号遺構出土遺物実測図…… 355
図397　D153号遺構実測図…… 356
図398　D153号遺構出土遺物実測図…… 357
図399　D158号遺構実測図…… 357
図400　D158号遺構炉跡実測図…… 358
図401　D158号遺構出土遺物実測図…… 358
図402　D167号遺構実測図…… 359
図403　D167号遺構炉跡実測図…… 359
図404　D167号遺構出土遺物実測図…… 360
図405　D169号遺構実測図…… 361
図406　D169号遺構炉跡実測図…… 361
図407　D170号遺構実測図…… 362
図408　D170号遺構炉跡実測図…… 362
図409　D170号遺構炭化物出土状況図…… 362
図410　D170号遺構出土遺物実測図…… 363
図411　D171号遺構実測図…… 363
図412　D171号遺構炉跡実測図…… 364
図413　D171号遺構出土遺物実測図…… 364
図414　D173号遺構実測図…… 365
図415　D173号遺構炉跡実測図…… 365
図416　D173号遺構出土遺物実測図…… 366
図417　D174号遺構実測図…… 367
図418　D174号遺構炭化物出土状況図…… 367
図419　D174号遺構炉跡実測図…… 368
図420　D174号遺構出土遺物実測図…… 368
図421　D175号遺構実測図…… 369
図422　D175号遺構炉跡実測図…… 369
図423　D175号遺構炭化物出土状況図…… 370
図424　D175号遺構出土遺物実測図…… 370
図425　D178号遺構実測図…… 371
図426　D178号遺構出土遺物実測図…… 371

図427　D180号遺構実測図…… 372
図428　D180号遺構炉跡実測図…… 373
図429　D180号遺構出土遺物実測図…… 373
図430　D182号遺構実測図…… 374
図431　D182号遺構炉跡実測図…… 374
図432　D182号遺構出土遺物実測図…… 374
図433　D183号遺構実測図…… 375
図434　D183号遺構炉跡実測図…… 376
図435　D183号遺構出土遺物実測図…… 376
図436　D184号遺構実測図…… 377
図437　D184号遺構炉跡実測図…… 377
図438　D184号遺構出土遺物実測図…… 377
図439　D191号遺構実測図…… 379
図440　D191号遺構炉跡実測図…… 379
図441　D191号遺構出土遺物実測図…… 379
図442　M010号遺構実測図…… 380
図443　M010号遺構遺物出土状況図…… 381
図444　M010号遺構出土遺物実測図…… 381
図445　M011号遺構実測図…… 381
図446　後期弥生式土器の様相(1) …… 383
図447　後期弥生式土器の様相(2) …… 384
図448　古墳時代中期第Ⅰ群遺構分布状況図 …… 400
図449　D034号遺構実測図…… 401
図450　D034号遺構炉跡実測図…… 401
図451　D034号遺構出土遺物実測図…… 402
図452　D035号遺構実測図…… 403
図453　D035号遺構炉跡実測図…… 403
図454　D035号遺構石製遺物平面分布模式図…… 404
図455　D035号遺構石製遺物層位別分布図…… 405
図456　D035号遺構出土遺物実測図(1)…… 406
図457　D035号遺構出土遺物実測図(2)…… 407
図458　古墳時代中期第Ⅱ群遺構分布状況図 …… 407
図459　D131号遺構実測図…… 408

図460　D131号遺構炉跡実測図…… 408
図461　D131号遺構石製遺物平面分布模式図…… 409
図462　D131号遺構石製遺物層位別分布図(1)…… 410
図463　D131号遺構石製遺物層位別分布図(2)…… 411
図464　D131号遺構石製遺物層位別分布図(3)…… 412
図465　D131号遺構出土遺物実測図…… 413
図466　D132号遺構実測図…… 414
図467　D132号遺構炉跡実測図…… 415
図468　D132号遺構Ｐ５内遺物出土状況図…… 415
図469　D132号遺構Ｐ６内遺物出土状況図…… 415
図470　D132号遺構石製遺物平面分布模式図…… 416
図471　D132号遺構石製遺物層位別分布図(1)…… 417
図472　D132号遺構石製遺物層位別分布図(2)…… 418
図473　D132号遺構石製遺物層位別分布図(3)…… 419
図474　D132号遺構石製遺物層位別分布図(4)…… 420
図475　D132号遺構出土遺物実測図(1)…… 421
図476　D132号遺構出土遺物実測図(2)…… 422
図477　D132号遺構出土遺物実測図(3)…… 423
図478　D132号遺構出土遺物実測図(4)…… 424
図479　D132号遺構出土遺物実測図(5)…… 425
図480　D132号遺構出土遺物実測図(6)…… 425
図481　D133号遺構実測図…… 427
図482　D133号遺構炉跡実測図…… 427
図483　D133号遺構炭化物出土状況図…… 428
図484　D133号遺構石製遺物平面分布模式図…… 429
図485　D133号遺構石製遺物層位別分布図(1)…… 430
図486　D133号遺構石製遺物層位別分布図(2)…… 431
図487　D133号遺構石製遺物層位別分布図(3)…… 432
図488　D133号遺構石製遺物層位別分布図(4)…… 433
図489　D133号遺構出土遺物実測図(1)…… 434
図490　D133号遺構出土遺物実測図(2)…… 435
図491　古墳時代後期第Ⅰ群遺構分布状況図 …… 436
図492　D005号遺構実測図…… 437

図493　D005号遺構カマド実測図……438
図494　D005号遺構出土遺物実測図……438
図495　D008号遺構実測図……439
図496　D008号遺構カマド実測図……439
図497　D008号遺構出土遺物実測図……440
図498　古墳時代後期第II群遺構分布状況図 ……442
図499　D099号遺構実測図……443
図500　D099号遺構粘土遺構実測図……443
図501　D099号遺構出土遺物実測図……444
図502　D112号遺構実測図……445
図503　D112号遺構カマド実測図……446
図504　D112号遺構出土遺物実測図……446
図505　D135号遺構カマド実測図……447
図506　D135号遺構実測図……448
図507　D135号遺構出土遺物実測図……449
図508　D136号遺構実測図……451
図509　D136号遺構カマド実測図……452
図510　D136号遺構出土遺物実測図(1)……453
図511　D136号遺構出土遺物実測図(2)……454
図512　D136号遺構出土遺物実測図(3)……455
図513　D139号遺構実測図……457
図514　D139号遺構カマド実測図……458
図515　D139号遺構出土遺物実測図……458
図516　D172号遺構カマド実測図……459
図517　D172号遺構実測図……460
図518　D172号遺構出土遺物実測図……461
図519　D176号遺構実測図……462
図520　D176号遺構カマド実測図……462
図521　D177号遺構実測図……463
図522　D177号遺構カマド実測図……464
図523　D177号遺構出土遺物実測図……464
図524　歴史時代第Ⅰ群遺構分布状況図 ……478
図525　D007号遺構実測図……479

図526　D007号遺構遺物出土状況図(1)…… 480
図527　D007号遺構遺物出土状況図(2)…… 481
図528　D007号遺構炭化物出土状況図…… 482
図529　D007号遺構カマド実測図…… 482
図530　D007号遺構出土遺物実測図(1)…… 483
図531　D007号遺構出土遺物実測図(2)…… 484
図532　D007号遺構出土遺物実測図(3)…… 485
図533　D007号遺構出土遺物実測図(4)…… 486
図534　D007号遺構出土遺物実測図(5)…… 487
図535　D007号遺構出土遺物実測図(6)…… 488
図536　D011号遺構実測図…… 491
図537　D011号遺構炭化物出土状況図…… 492
図538　D011号遺構出土遺物実測図…… 493
図539　D012号遺構実測図…… 494
図540　D012号遺構Aカマド実測図…… 494
図541　D012号遺構Bカマド実測図…… 495
図542　D012号遺構出土遺物実測図…… 496
図543　D013号遺構実測図…… 497
図544　D013号遺構カマド実測図…… 497
図545　D013号遺構出土遺物実測図…… 498
図546　D014号遺構実測図…… 500
図547　D014号遺構Aカマド実測図…… 500
図548　D014号遺構Bカマド実測図…… 500
図549　D014号遺構出土遺物実測図…… 501
図550　D071号遺構実測図…… 502
図551　D071号遺構カマド実測図…… 502
図552　D071号遺構出土遺物実測図…… 503
図553　D072号遺構実測図…… 504
図554　D072号遺構炭化物出土状況図…… 505
図555　D072号遺構Aカマド実測図…… 505
図556　D072号遺構Bカマド実測図…… 505
図557　D072号遺構出土遺物実測図…… 506
図558　D077号遺構実測図…… 508

図559　D077号遺構カマド実測図…… 508
図560　D077号遺構出土遺物実測図…… 510
図561　D078号遺構実測図…… 511
図562　D078号遺構カマド実測図…… 512
図563　D078号遺構出土遺物実測図(1)…… 513
図564　D078号遺構出土遺物実測図(2)…… 514
図565　D081・D082号遺構実測図 …… 516
図566　D081号遺構カマド実測図…… 517
図567　D081号遺構出土遺物実測図(1)…… 518
図568　D081号遺構出土遺物実測図(2)…… 519
図569　D082号遺構カマド実測図…… 520
図570　D082号遺構出土遺物実測図…… 521
図571　D083号遺構実測図…… 522
図572　D083号遺構Aカマド実測図…… 523
図573　D083号遺構Bカマド実測図…… 523
図574　D083号遺構出土遺物実測図…… 524
図575　D084号遺構実測図…… 526
図576　D084号遺構カマド実測図…… 526
図577　D084号遺構床下状況図…… 527
図578　D084号遺構出土遺物実測図…… 528
図579　D085号遺構実測図…… 529
図580　D085号遺構カマド実測図…… 529
図581　D085号遺構出土遺物実測図…… 530
図582　D086号遺構実測図…… 532
図583　D086号遺構カマド実測図…… 532
図584　D086号遺構出土遺物実測図…… 533
図585　D090号遺構実測図…… 534
図586　D090号遺構カマド実測図…… 535
図587　D090号遺構出土遺物実測図…… 535
図588　D091号遺構実測図…… 536
図589　D091号遺構カマド実測図…… 537
図590　D091号遺構出土遺物実測図…… 537
図591　D092号遺構実測図…… 538

図592　D092号遺構カマド実測図…… 539
図593　D092号遺構出土遺物実測図…… 539
図594　D093号遺構実測図…… 540
図595　D093号遺構カマド実測図…… 541
図596　D093号遺構出土遺物実測図…… 542
図597　D163号遺構実測図…… 543
図598　D163号遺構カマド実測図…… 543
図599　D163号遺構出土遺物実測図…… 544
図600　D164号遺構実測図…… 545
図601　D164号遺構炭化物出土状況図…… 545
図602　D164号遺構出土遺物実測図…… 546
図603　D165号遺構実測図…… 547
図604　D165号遺構出土遺物実測図…… 547
図605　D166号遺構実測図…… 549
図606　D166号遺構カマド実測図…… 550
図607　D166号遺構出土遺物実測図…… 551
図608　H001号遺構実測図…… 552
図609　H004号遺構実測図…… 552
図610　H005号遺構実測図…… 553
図611　H006号遺構実測図…… 554
図612　H007号遺構実測図…… 554
図613　H007号遺構出土遺物実測図…… 555
図614　H008号遺構実測図…… 555
図615　H008号遺構出土遺物実測図…… 556
図616　H011号遺構実測図…… 556
図617　P001号遺構実測図…… 557
図618　P001号遺構出土遺物実測図…… 558
図619　P002号遺構実測図…… 559
図620　P002号遺構出土遺物実測図…… 560
図621　P003号遺構実測図…… 561
図622　P003号遺構出土遺物実測図…… 561
図623　P004号遺構実測図…… 562
図624　P004号遺構出土遺物実測図…… 562

図625　M008号遺構実測図…… 563
図626　歴史時代第II群遺構分布状況図 …… 564
図627　D010号遺構実測図…… 565
図628　D010号遺構カマド実測図…… 566
図629　D010号遺構出土遺物実測図(1)…… 567
図630　D010号遺構出土遺物実測図(2)…… 568
図631　D015号遺構実測図…… 569
図632　D015号遺構カマド実測図…… 569
図633　D015号遺構出土遺物実測図…… 570
図634　D016号遺構実測図…… 571
図635　D016号遺構カマド実測図…… 571
図636　D016号遺構出土遺物実測図(1)…… 572
図637　D016号遺構出土遺物実測図(2)…… 573
図638　D016号遺構出土遺物実測図(3)…… 574
図639　D017号遺構実測図…… 575
図640　D017号遺構カマド実測図…… 576
図641　D017号遺構出土遺物実測図(1)…… 577
図642　D017号遺構出土遺物実測図(2)…… 578
図643　D018号遺構実測図…… 579
図644　D018号遺構カマド実測図…… 580
図645　D018号遺構出土遺物実測図(1)…… 581
図646　D018号遺構出土遺物実測図(2)…… 582
図647　D055号遺構実測図…… 583
図648　D055号遺構炭化物出土状況図…… 583
図649　D055号遺構カマド実測図…… 583
図650　D055号遺構出土遺物実測図…… 584
図651　D068号遺構実測図…… 586
図652　D068号遺構カマド実測図…… 586
図653　D068号遺構出土遺物実測図…… 586
図654　D188号遺構実測図…… 588
図655　D188号遺構カマド実測図…… 589
図656　D188号遺構出土遺物実測図(1)…… 590
図657　D188号遺構出土遺物実測図(2)…… 591

図658　D189号遺構実測図…… 593
図659　D189号遺構Aカマド実測図…… 593
図660　D189号遺構Bカマド実測図…… 594
図661　D189号遺構出土遺物実測図(1)…… 595
図662　D189号遺構出土遺物実測図(2)…… 596
図663　D190号遺構実測図…… 597
図664　D190号遺構Aカマド実測図…… 598
図665　D190号遺構Bカマド実測図…… 598
図666　D190号遺構出土遺物実測図(1)…… 599
図667　D190号遺構出土遺物実測図(2)…… 600
図668　H010号遺構実測図…… 602
図669　H014号遺構実測図…… 603
図670　H014号遺構出土遺物実測図…… 603
図671　H015・H016号遺構実測図 …… 604
図672　H017号遺構実測図…… 605
図673　P017号遺構実測図…… 606
図674　P017号遺構出土遺物実測図…… 607
図675　P018号遺構実測図…… 608
図676　P019号遺構実測図…… 608
図677　M021号遺構実測図…… 609
図678　歴史時代第III群遺構分布状況図 …… 610
図679　D019号遺構実測図…… 611
図680　D019号遺構床下状況図…… 612
図681　D019号遺構Aカマド実測図…… 612
図682　D019号遺構Bカマド実測図…… 613
図683　D019号遺構出土遺物実測図…… 614
図684　D020号遺構実測図…… 615
図685　D020号遺構カマド実測図…… 616
図686　D020号遺構出土遺物実測図(1)…… 617
図687　D020号遺構出土遺物実測図(2)…… 618
図688　D021号遺構実測図…… 620
図689　D021号遺構床下状況図…… 621
図690　D021号遺構カマド実測図…… 621

図691　D021号遺構出土遺物実測図…… 622
図692　D022号遺構実測図…… 624
図693　D022号遺構カマド実測図…… 625
図694　D022号遺構出土遺物実測図(1)…… 626
図695　D022号遺構出土遺物実測図(2)…… 627
図696　D023号遺構実測図…… 628
図697　D023号遺構カマド実測図…… 628
図698　D023号遺構出土遺物実測図…… 629
図699　D024号遺構実測図…… 630
図700　D024号遺構カマド実測図…… 632
図701　D024号遺構出土遺物実測図…… 633
図702　D025号遺構実測図…… 634
図703　D025号遺構貝殻出土状況図…… 635
図704　D025号遺構床下状況図…… 636
図705　D025号遺構カマド実測図…… 636
図706　D025号遺構出土遺物実測図…… 637
図707　D087号遺構実測図…… 640
図708　D087号遺構カマド実測図…… 640
図709　D087号遺構床下状況図…… 641
図710　D087号遺構出土遺物実測図…… 642
図711　D088号遺構実測図…… 644
図712　D088号遺構カマド実測図…… 644
図713　D088号遺構出土遺物実測図…… 645
図714　D089号遺構実測図…… 646
図715　D089号遺構カマド実測図…… 647
図716　D089号遺構出土遺物実測図…… 648
図717　D160号遺構実測図…… 650
図718　D160号遺構カマド実測図…… 651
図719　D160号遺構出土遺物実測図…… 651
図720　H002号遺構実測図…… 652
図721　H003号遺構実測図…… 653
図722　H013号遺構実測図…… 654
図723　P009号遺構実測図…… 654

図724　P009号遺構出土遺物実測図…… 655
図725　P016号遺構実測図…… 655
図726　P016号遺構出土遺物実測図…… 656
図727　歴史時代第IV群遺構分布状況図 …… 657
図728　D040号遺構出土遺物実測図…… 658
図729　D041号遺構実測図…… 659
図730　D041号遺構カマド実測図…… 660
図731　D041号遺構出土遺物実測図…… 660
図732　D042号遺構実測図…… 661
図733　D042号遺構床下状況図…… 662
図734　D042号遺構カマド実測図…… 662
図735　D042号遺構出土遺物実測図…… 663
図736　D044号遺構出土遺物実測図…… 664
図737　D045号遺構実測図…… 665
図738　D045号遺構カマド実測図…… 665
図739　D045号遺構出土遺物実測図…… 666
図740　D046号遺構実測図…… 667
図741　D046号遺構炭化物出土状況図…… 668
図742　D046号遺構カマド実測図…… 668
図743　D046号遺構出土遺物実測図…… 669
図744　D047号遺構実測図…… 671
図745　D047号遺構カマド実測図…… 672
図746　D047号遺構出土遺物実測図(1)…… 673
図747　D047号遺構出土遺物実測図(2)…… 674
図748　D048号遺構実測図…… 675
図749　D048号遺構出土遺物実測図…… 676
図750　D049号遺構実測図…… 677
図751　D049号遺構カマド実測図…… 678
図752　D049号遺構出土遺物実測図…… 678
図753　D050号遺構実測図…… 679
図754　D050号遺構カマド実測図…… 679
図755　D050号遺構出土遺物実測図…… 680
図756　D051号遺構実測図…… 681

図757　D051号遺構カマド実測図…… 682
図758　D051号遺構出土遺物実測図(1)…… 683
図759　D051号遺構出土遺物実測図(2)…… 684
図760　D052号遺構実測図…… 685
図761　D052号遺構カマド実測図…… 685
図762　D052号遺構出土遺物実測図…… 686
図763　D057号遺構実測図…… 686
図764　D057号遺構カマド実測図…… 687
図765　D057号遺構出土遺物実測図…… 687
図766　D059号遺構実測図…… 688
図767　D059号遺構カマド実測図…… 689
図768　D059号遺構出土遺物実測図…… 689
図769　D060号遺構実測図…… 690
図770　D060号遺構カマド実測図…… 690
図771　D060号遺構出土遺物実測図…… 691
図772　D061号遺構実測図…… 692
図773　D061号遺構床下状況図…… 693
図774　D061号遺構カマド実測図…… 693
図775　D061号遺構出土遺物実測図…… 694
図776　D062号遺構実測図…… 695
図777　D062号遺構床下状況図…… 696
図778　D062号遺構カマド実測図…… 696
図779　D062号遺構出土遺物実測図…… 697
図780　D063号遺構実測図…… 698
図781　D063号遺構カマド実測図…… 698
図782　D063号遺構出土遺物実測図(1)…… 699
図783　D063号遺構出土遺物実測図(2)…… 699
図784　D064号遺構実測図…… 700
図785　D064号遺構床下状況図…… 700
図786　D064号遺構カマド実測図…… 701
図787　D064号遺構出土遺物実測図…… 701
図788　D065号遺構実測図…… 702
図789　D065号遺構カマド実測図…… 702

図790　D065号遺構出土遺物実測図…… 703
図791　D066号遺構実測図…… 704
図792　D066号遺構カマド実測図…… 704
図793　D066号遺構出土遺物実測図…… 705
図794　D067号遺構実測図…… 706
図795　D067号遺構出土遺物実測図…… 707
図796　H009号遺構実測図…… 708
図797　H012号遺構出土遺物実測図…… 708
図798　H012号遺構実測図…… 709
図799　P006号遺構実測図…… 709
図800　P006号遺構出土遺物実測図…… 710
図801　P015号遺構実測図…… 711
図802　P015号遺構出土遺物実測図…… 711
図803　溝出土遺物実測図 …… 715
図804　遺跡表採品 …… 715
図A　遺構配置図 …… 付図

表　目　次

表 1　植生自然度の区分と全国・千葉県・八千代市植生比率 …… v
表 2　第 1 文化層ブロック外出土石器組成表 …… 8
表 3　第 1 文化層ブロック外出土石器計測表 …… 8
表 4　第23ブロック出土石器組成表 …… 11
表 5　第23ブロック母岩別資料石器組成表 …… 13
表 6　第23ブロック出土石器計測表 …… 13
表 7　第 2 文化層ブロック外出土石器組成表 …… 14
表 8　第 2 文化層ブロック外出土石器計測表 …… 14
表 9　第 9 ブロック出土石器組成表 …… 16
表10　第 9 ブロック母岩別資料石器組成表 …… 16
表11　第 9 ブロック出土石器計測表 …… 16
表12　第12ブロック出土石器組成表 …… 19
表13　第12ブロック母岩別資料石器組成表 …… 23
表14　第12ブロック接合資料一覧表 …… 23
表15　第12ブロック出土石器計測表 …… 24
表16　第13ブロック出土石器組成表 …… 26
表17　第13ブロック母岩別資料石器組成表 …… 26
表18　第13ブロック接合資料一覧表 …… 26
表19　第13ブロック出土石器計測表 …… 26
表20　第14ブロック出土石器組成表 …… 27
表21　第14ブロック母岩別資料石器組成表 …… 28
表22　第14ブロック接合資料一覧表 …… 28
表23　第14ブロック出土石器計測表 …… 31
表24　第15ブロック礫群の母岩別資料 …… 35
表25　第15ブロック出土石器組成表 …… 35
表26　第15ブロック母岩別資料石器組成表 …… 36
表27　第15ブロック接合資料一覧表 …… 39
表28　第15ブロック出土石器計測表 …… 40
表29　第16ブロック出土石器組成表 …… 48
表30　第16ブロック母岩別資料石器組成表 …… 49

表31　第16ブロック接合資料一覧表 …… 49
表32　第16ブロック出土石器計測表 …… 54
表33　第17ブロック出土石器組成表 …… 55
表34　第17ブロック母岩別資料石器組成表 …… 55
表35　第17ブロック接合資料一覧表 …… 56
表36　第17ブロック出土石器計測表 …… 59
表37　第18ブロック出土石器組成表 …… 59
表38　第18ブロック母岩別資料石器組成表 …… 61
表39　第18ブロック接合資料一覧表 …… 61
表40　第18ブロック出土石器計測表 …… 61
表41　第20ブロック出土石器組成表 …… 62
表42　第20ブロック母岩別資料石器組成表 …… 62
表43　第20ブロック接合資料一覧表 …… 64
表44　第20ブロック出土石器計測表 …… 66
表45　第21ブロック出土石器組成表 …… 66
表46　第21ブロック母岩別資料石器組成表 …… 67
表47　第21ブロック接合資料一覧表 …… 68
表48　第21ブロック出土石器計測表 …… 69
表49　第22ブロック出土石器組成表 …… 69
表50　第22ブロック母岩別資料石器組成表 …… 71
表51　第22ブロック接合資料一覧表 …… 71
表52　第22ブロック出土石器計測表 …… 71
表53　第27ブロック出土石器組成表 …… 73
表54　第27ブロック母岩別資料石器組成表 …… 73
表55　第27ブロック接合資料一覧表 …… 73
表56　第27ブロック出土石器計測表 …… 73
表57　第３文化層ブロック外出土石器組成表 …… 76
表58　第３文化層ブロック外出土石器計測表 …… 77
表59　第１ブロック出土石器組成表 …… 78
表60　第１ブロック母岩別資料石器組成表 …… 78
表61　第１ブロック接合資料一覧表 …… 82
表62　第１ブロック出土石器計測表 …… 82
表63　第２ブロック出土石器組成表 …… 84

表64　第2ブロック母岩別資料石器組成表 …… 84
表65　第2ブロック接合資料一覧表 …… 88
表66　第2ブロック出土石器計測表 …… 89
表67　第3ブロック出土石器組成表 …… 90
表68　第3ブロック母岩別資料石器組成表 …… 90
表69　第3ブロック接合資料一覧表 …… 90
表70　第3ブロック出土石器計測表 …… 93
表71　第4・5ブロック出土石器組成表 …… 94
表72　第4・5ブロック母岩別資料石器組成表 …… 94
表73　第4・5ブロック接合資料一覧表 …… 96
表74　第4・5ブロック出土石器計測表 …… 97
表75　第6ブロック出土石器組成表 …… 98
表76　第6ブロック母岩別資料石器組成表 …… 98
表77　第6ブロック接合資料一覧表 …… 99
表78　第6ブロック出土石器計測表 …… 101
表79　第7・8ブロック出土石器組成表 …… 102
表80　第7・8ブロック母岩別資料石器組成表 …… 102
表81　第7・8ブロック接合資料一覧表 …… 105
表82　第7・8ブロック出土石器計測表 …… 105
表83　第19ブロック出土礫群の母岩別資料 …… 107
表84　第19ブロック出土石器組成表 …… 108
表85　第19ブロック母岩別資料石器組成表 …… 108
表86　第19ブロック接合資料一覧表 …… 109
表87　第19ブロック出土石器計測表 …… 109
表88　第24ブロック出土石器組成表 …… 110
表89　第24ブロック母岩別資料石器組成表 …… 110
表90　第24ブロック接合資料一覧表 …… 112
表91　第24ブロック出土石器計測表 …… 112
表92　第25ブロック出土石器組成表 …… 115
表93　第25ブロック母岩別資料石器組成表 …… 118
表94　第25ブロック接合資料一覧表 …… 119
表95　第25ブロック出土石器計測表 …… 122
表96　第5文化層ブロック外出土石器組成表 …… 124

表97　第５文化層ブロック外出土石器計測表 ……124
表98　第10ブロック出土石器組成表 ……125
表99　第10ブロック母岩別資料石器組成表 …… 126
表100　第10ブロック接合資料一覧表 ……128
表101　第10ブロック出土石器計測表 ……128
表102　第11ブロック出土石器組成表 ……131
表103　第11ブロック母岩別資料石器組成表 ……131
表104　第11ブロック接合資料一覧表 ……136
表105　第11ブロック出土石器計測表 ……136
表106　第６文化層ブロック外出土石器組成表 ……137
表107　第６文化層ブロック外出土石器計測表 ……137
表108　表面採集石器組成表 ……138
表109　表面採集石器計測表 ……140
表110　炭化物集中地点の規模 ……141
表111　各文化層ごとの石材の変遷 ……157
表112　縄文石器組成表 ……176
表113　縄文石器計測表 ……177
表114　弥生土器の共伴関係 ……385
表115　炉および炉周辺出土土器使用痕一覧 ……389
表116　弥生時代第Ⅰ群の土器出土状況 ……390
表117　弥生時代第II・III群の土器出土状況 ……392
表118　弥生時代第IV群A、Bの土器出土状況 ……394
表119　ローム層の鉱物組成表 …… ii
表120　鉱物分析試料表 …… iii
表121　花粉分析成果表 …… xiii

図　版　目　次

図版１　遺　跡

萱田地区遺跡群と周辺の空中写真

図版２　遺　跡

１．昭和52年度調査区全景（南東より）

２．昭和52年度調査区全景（南西より）

図版３　遺　跡

１．昭和53年度調査区全景（西より）

２．昭和53年度調査区全景（南西より）

図版４　旧石器時代

１．旧石器時代調査風景（東より）

２．旧石器時代調査風景（西より）

３．旧石器時代調査風景（北より）

図版５　旧石器時代

１．土層断面（数字は鉱物分析サンプル採取位置）

２．ローム層土層断面

図版６　旧石器時代　第２、３文化層遺構、第２文化層遺物

１．第２文化層第23ブロック石器出土状況（北西より）

２．第２文化層第23ブロック出土石器群

３．第３文化層第12ブロック石器出土状況（南西より）

図版７　旧石器時代　第３文化層遺構

１．第３文化層第13ブロック石器出土状況（東より）

２．第３文化層第14ブロック石器出土状況（東より）

３．第３文化層第15ブロック石器出土状況（北より）

図版８　旧石器時代　第３文化層遺構

１．第３文化層第16ブロック石器出土状況（北より）

２．第３文化層第17ブロック石器出土状況（東より）

３．第３文化層第18ブロック石器出土状況（南より）

図版９　旧石器時代　第３文化層遺構

１．第３文化層第20ブロック石器出土状況（北より）

２．第３文化層第21ブロック石器出土状況（北より）

3．第３文化層第22ブロック石器出土状況（東より）
図版10　旧石器時代　第３文化層遺構、遺物
1．第３文化層第27ブロック石器出土状況（南より）
2．第３文化層第９、12ブロック出土石器群
図版11　旧石器時代　第３文化層遺物
第３文化層第13～15ブロック出土石器群
図版12　旧石器時代　第３文化層遺物
第３文化層第15ブロック出土石器群
図版13　旧石器時代　第３文化層遺物
第３文化層第16～18、20ブロック出土石器群
図版14　旧石器時代　第３文化層遺物、第４文化層遺構
1．第３文化層第20、21、27ブロック出土石器群
2．第４文化層第１、２ブロック石器出土状況（北より）
図版15　旧石器時代　第４文化層遺構
1．第４文化層第１ブロック石器出土状況（南より）
2．第４文化層第１ブロック石器出土状況（南より）
3．第４文化層第２ブロック石器出土状況（南より）
図版16　旧石器時代　第４文化層遺構
1．第４文化層第４・５ブロック石器出土状況（南より）
2．第４文化層第６ブロック石器出土状況（南より）
3．第４文化層第６ブロック石器出土状況（西より）
図版17　旧石器時代　第４文化層遺構
1．第４文化層第７・８ブロック石器出土状況（南より）
2．第４文化層第７・８ブロック石器出土状況（北より）
3．第４文化層第19ブロック石器出土状況（南より）
図版18　旧石器時代　第４文化層遺構
第４文化層第１～３、４・５ブロック出土石器群
図版19　旧石器時代　第４文化層遺物、第５文化層遺構
1．第４文化層第６、７・８、19ブロック出土石器群
2．第５文化層第24、25ブロック石器出土状況（北より）
図版20　旧石器時代　第５文化層遺構
1．第５文化層第24ブロック石器出土状況（西より）
2．第５文化層第24ブロック石器出土状況（東より）

３．第５文化層第24ブロック石器出土状況（西より）
図版21　旧石器時代　第５文化層遺構、遺物
１．第５文化層第25ブロック石器出土状況（西より）
２．第５文化層第25ブロック石器出土状況（北西より）
３．第５文化層第24ブロック出土石器群
図版22　旧石器時代　第５文化層遺物
第５文化層第24、25ブロック出土石器群
図版23　旧石器時代　第６文化層遺構
１．第６文化層第10ブロック石器出土状況（西より）
２．第６文化層第10ブロック石器出土状況（東より）
３．第６文化層第11ブロック石器出土状況（南より）
図版24　旧石器時代　第６文化層遺構、遺物
１．第６文化層第11ブロック石器出土状況（南より）
２．第６文化層第10ブロック出土石器
図版25　旧石器時代　第６文化層遺物
第６文化層第10、11ブロック出土石器群
図版26　旧石器時代　遺物
ブロック外出土石器群
図版27　縄文時代　遺構、遺物
１．縄文包含層遺物出土状況
２．縄文土器　早期
図版28　縄文時代　遺物
縄文土器　早期
図版29　縄文時代　遺物
縄文土器　早期、前期、中期
図版30　縄文時代　遺物
縄文土器　後期
図版31　縄文時代　遺物
縄文土器　後期
図版32　縄文時代　遺物
縄文土器　後期
図版33　縄文時代　遺物
縄文土器　後期

図版34　縄文時代　遺物
縄文時代　石器
図版35　縄文時代　遺物・
縄文時代石器
図版36　弥生時代
1．弥生時代第Ⅰ群空中写真（南より）
2．弥生時代第Ⅰ群空中写真（東より）
図版37　弥生時代
1．弥生時代第II群空中写真（南より）
2．弥生時代第III、IV群空中写真（南より）
図版38　弥生時代
1．弥生時代第III、IV群空中写真（西より）
2．弥生時代第IV群空中写真（南西より）
図版39　弥生時代
1．弥生時代第IV群空中写真（南西より）
2．弥生時代第III、IV群遺構分布状況
図版40　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D001号遺構全景
2．D026号遺構全景
3．D027号遺構全景
図版41　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D027号遺構炭化柱検出状況
2．D028号遺構全景
3．D029号遺構全景
図版42　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D029号遺構炭化物出土状況
2．D029号遺構遺物出土状況
3．D029号遺構遺物出土状況
図版43　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D030号遺構全景
2．D030号遺構遺物出土状況
3．D030号遺構遺物出土状況
図版44　弥生時代　第Ⅰ群遺構

1．D031号遺構全景
2．D033号遺構全景
3．D036号遺構全景
図版45　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D037号遺構全景
2．D038号遺構全景
3．D039号遺構全景
図版46　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D040号遺構全景
2．D044号遺構全景
3．D053号遺構全景
図版47　弥生時代　第Ⅰ群遺構
1．D069号遺構全景
2．D094号遺構全景
3．D185号遺構全景
図版48　弥生時代　第Ⅰ群遺構、遺物
1．D186号遺構全景
2．D187号遺構全景
弥生時代第Ⅰ群出土遺物
図版49　弥生時代　第Ⅰ群遺物
図版50　弥生時代　第Ⅰ群遺物
図版51　弥生時代　第Ⅱ群遺構
1．D002号遺構全景
2．D002号遺構炭化物出土状況
3．D002号遺構炭化柱検出状況
図版52　弥生時代　第Ⅱ群遺構
1．D003号遺構全景
2．D004Ａ号遺構全景
3．D004Ａ号遺構遺物出土状況
図版53　弥生時代　第Ⅱ群遺構
1．D004Ｂ号遺構全景
2．D004、054号遺構分布状況
3．D006号遺構全景

図版54　弥生時代　第II群遺構
1．D009号遺構全景
2．D054号遺構全景
3．D054号遺構遺物出土状況
図版55　弥生時代　第II群遺構
1．D070号遺構全景
2．D073号遺構全景
3．D074号遺構全景
図版56　弥生時代　第II群遺構
1．D075号遺構全景
2．D076号遺構全景
3．D079号遺構全景
図版57　弥生時代　第II群遺構、遺物
1．D080号遺構全景
2．D162号遺構全景
弥生時代第II群出土遺物
図版58　弥生時代　第II群遺物
図版59　弥生時代　第III群遺構
1．D130号遺構全景
2．D137号遺構全景
3．D137号遺構炭化物出土状況
4．D138号遺構全景
図版60　弥生時代　第III群遺構、遺物
1．M014号遺構全景
2．M014号遺構遺物出土状況
弥生時代第III群出土遺物
図版61　弥生時代　第IV群A遺構
1．D098号遺構全景
2．D101号遺構全景
3．D103号遺構全景
図版62　弥生時代　第IV群A遺構
1．D109号遺構全景
2．D109号遺構遺物出土状況

3．D110号遺構全景
図版63　弥生時代　第IV群A遺構
1．D111号遺構全景
2．D113号遺構全景
3．D114号遺構全景
図版64　弥生時代　第IV群A遺構
1．D115号遺構全景
2．D115号遺構遺物出土状況
3．D116号遺構全景
図版65　弥生時代　第IV群A遺構
1．D117号遺構全景
2．D117号遺構炭化物出土状況
3．D117号遺構炭化物出土状況
図版66　弥生時代　第IV群A遺構
1．D118号遺構全景
2．D119号遺構全景
3．D120号遺構全景
図版67　弥生時代　第IV群A遺構
1．D121号遺構全景
2．D122号遺構全景
3．D123号遺構全景
図版68　弥生時代　第IV群A遺構
1．D124号遺構全景
2．D125号遺構全景
3．D126号遺構全景
図版69　弥生時代　第IV群A遺構
1．D128号遺構全景
2．D129号遺構全景
3．D140号遺構全景
図版70　弥生時代　第IV群A遺構
1．D141号遺構全景
2．D145号遺構全景
3．D145号遺構遺物出土状況

図版71　弥生時代　第IV群A遺構
1．D146号遺構全景
2．D147号遺構全景
3．D151号遺構全景
図版72　弥生時代　第IV群A遺構
1．D154号遺構全景
2．D155号遺構全景
3．D156号遺構全景
図版73　弥生時代　第IV群A遺構
1．D157号遺構全景
2．D159号遺構全景
3．D161号遺構全景
図版74　弥生時代　第IV群A遺構
1．D168号遺構全景
2．D179号遺構全景
3．D181号遺構全景
図版75　弥生時代　第IV群A遺物
図版76　弥生時代　第IV群A遺物
図版77　弥生時代　第IV群A遺物
図版78　弥生時代　第IV群B遺構
1．D095号遺構全景
2．D096号遺構全景
3．D096号遺構遺物出土状況
図版79　弥生時代　第IV群B遺構
1．D096号遺構遺物出土状況
2．D096号遺構遺物出土状況
3．D097号遺構全景
図版80　弥生時代　第IV群B遺構
1．D100号遺構全景
2．D102号遺構全景
3．D104号遺構全景
図版81　弥生時代　第IV群B遺構
1．D105号遺構全景

2．D107号遺構全景
3．D107号遺構遺物出土状況
図版82　弥生時代　第IV群B遺構
1．D108号遺構全景
2．D108号遺構遺物出土状況
3．D134号遺構全景
図版83　弥生時代　第IV群B遺構
1．D134号遺構遺物出土状況
2．D142号遺構全景
3．D143号遺構全景
図版84　弥生時代　第IV群B遺構
1．D143号遺構遺物出土状況
2．D144号遺構全景
3．D148号遺構全景
図版85　弥生時代　第IV群B遺構
1．D149号遺構全景
2．D150号遺構全景
3．D152号遺構全景
図版86　弥生時代　第IV群B遺構
1．D152号遺構遺物出土状況
2．D153号遺構全景
3．D158号遺構全景
図版87　弥生時代　第IV群B遺構
1．D167号遺構全景
2．D170号遺構全景
3．D170号遺構遺物出土状況
図版88　弥生時代　第IV群B遺構
1．D171号遺構全景
2．D173号遺構全景
3．D173号遺構炉検出状況
図版89　弥生時代　第IV群B遺構
1．D173号遺構遺物出土状況
2．D174号遺構全景

3．D174号遺構炉検出状況
図版90　弥生時代　第IV群B遺構
1．D175号遺構全景
2．D175号遺構遺物出土状況
3．D175号遺構炉検出状況
図版91　弥生時代　第III群B遺構
1．D178号遺構全景
2．D178号遺構遺物出土状況
3．D178号遺構遺物出土状況
図版92　弥生時代　第IV群B遺構
1．D180号遺構全景
2．D180号遺構炉検出状況
3．D182号遺構全景
図版93　弥生時代　第IV群B遺構
1．D182号遺構炉検出状況
2．D183号遺構全景
3．D184号遺構全景
図版94　弥生時代　第IV群B遺構
1．D184号遺構遺物出土状況
2．D184号遺構遺物出土状況
3．D191号遺構全景
図版95　弥生時代　第IV群B遺物
図版96　弥生時代　第IV群B遺物
図版97　弥生時代　第IV群B遺物
図版98　弥生時代　第IV群B遺物
図版99　弥生時代　第IV群B遺物
図版100　弥生時代　第IV群B遺物
図版101　弥生時代　第V群遺構
1．M010号遺構全景
2．M010号遺構遺物出土状況
3．M010、011号遺構分布状況
図版102　古墳時代　中期第I群遺構
1．D034号遺構全景

2．D034号遺構遺物出土状況
3．D035号遺構全景
図版103　古墳時代　中期第Ⅰ群遺構
D035号遺構遺物出土状況
図版104　古墳時代　中期第Ⅰ群遺物
図版105　古墳時代　中期第Ⅱ群遺構
1．D131号遺構全景
2．D131号遺構遺物出土状況
3．D132号遺構全景
図版106　古墳時代　中期第Ⅱ群遺構
1．D132号遺構遺物出土状況
2．D132号遺構遺物出土状況
3．D132号遺構遺物出土状況
図版107　古墳時代　中期第Ⅱ群遺構
1．D132号遺構遺物出土状況
2．D132号遺構遺物出土状況
3．D132号遺構遺物出土状況
図版108　古墳時代　中期第Ⅱ群遺構
1．D133号遺構全景
2．D133号遺構遺物出土状況
3．D133号遺構遺物出土状況
図版109　古墳時代　中期第Ⅱ群遺構、遺物
1．D133号遺構遺物出土状況
古墳時代中期第Ⅱ群出土遺物
図版110　古墳時代　中期第Ⅱ群遺物
図版111　古墳時代　中期第Ⅱ群遺物
図版112　古墳時代　中期第Ⅱ群遺物
図版113　古墳時代　中期第Ⅱ群遺物
図版114　古墳時代　後期第Ⅰ群遺構
1．D005号遺構全景
2．D008号遺構全景
3．D008号遺構遺物出土状況
図版115　古墳時代　後期第Ⅰ群遺構、遺物

1．D008号遺構遺物出土状況
古墳時代後期第Ⅰ群出土遺物
図版116　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D099号遺構全景
2．D099号遺構遺物出土状況
3．D112号遺構全景
図版117　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D135号遺構全景
2．D135号遺構遺物出土状況
3．D136号遺構全景
図版118　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D136号遺構炭化物出土状況
2．D136号遺構遺物出土状況
3．D136号遺構遺物出土状況
図版119　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D136号遺構炭化物出土状況
2．D136号遺構遺物出土状況
3．D136号遺構遺物出土状況
図版120　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D139号遺構全景
2．D172号遺構全景
3．D172号遺構ピット検出状況
図版121　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構
1．D172号遺構カマド検出状況
2．D176号遺構全景
3．D176号遺構カマド検出状況
図版122　古墳時代　後期第Ⅱ群遺構、遺物
1．D177号遺構全景
2．D177号遺構カマド検出状況
古墳時代後期第Ⅱ群出土遺物
図版123　古墳時代　後期第Ⅱ群遺物
図版124　古墳時代　後期第Ⅱ群遺物
図版125　古墳時代　後期第Ⅱ群遺物

図版126　古墳時代　後期第II群遺物
図版127　歴史時代
1．歴史時代第Ⅰ群空中写真（南より）
2．歴史時代第Ⅰ、II群空中写真（東より）
図版128　歴史時代
1．歴史時代第II群遺構分布状況（北西より）
2．歴史時代第III群空中写真（東より）
図版129　歴史時代
1．歴史時代第IV群空中写真（南東より）
2．歴史時代第IV群空中写真（西より）
図版130　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D007号遺構全景
2．D007号遺構遺物出土状況
3．D007号遺構カマド検出状況
図版131　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D007号遺構遺物出土状況
2．D007号遺構遺物出土状況
3．D007号遺構遺物出土状況
4．D007号遺構遺物出土状況
図版132　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D011号遺構全景
2．D012号遺構全景
3．D013号遺構全景
図版133　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D014号遺構全景
2．D071号遺構全景
3．D072号遺構全景
図版134　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D077号遺構全景
2．D078号遺構全景
3．D081号遺構全景
図版135　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D082号遺構全景

2．D083号遺構全景
3．D084号遺構全景
図版136　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D085号遺構全景
2．D086号遺構全景
3．D090号遺構全景
図版137　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D091号遺構全景
2．D092号遺構全景
3．D093号遺構全景
図版138　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D163号遺構全景
2．D163号遺構カマド検出状況
3．D164号遺構全景
図版139　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D165号遺構全景
2．D166号遺構全景
3．D166号遺構遺物出土状況
図版140　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．H001号遺構全景
2．H004号遺構全景
3．H005号遺構全景
図版141　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．H006号遺構全景
2．H007号遺構全景
3．H008号遺構全景
図版142　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．H011号遺構全景
2．P001号遺構全景
3．P002号遺構全景
図版143　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．P003号遺構全景
2．P004号遺構全景

3．P001、D077、090号遺構分布状況
図版144　歴史時代　第Ⅰ群遺構、遺物
1．D077、090号遺構分布状況
歴史時代第Ⅰ群出土遺物
図版145　歴史時代　第Ⅰ群遺物
図版146　歴史時代　第Ⅰ群遺物
図版147　歴史時代　第Ⅰ群遺物
図版148　歴史時代　第Ⅰ群遺物
図版149　歴史時代　第Ⅰ群遺物
図版150　歴史時代　第Ⅰ群墨書土器
図版151　歴史時代　第Ⅰ群墨書土器
図版152　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D010号遺構全景
2．D010号遺構遺物出土状況
3．D015号遺構全景
図版153　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D016号遺構全景
2．D016号遺構遺物出土状況
3．D017号遺構全景
図版154　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D018号遺構全景
2．D055号遺構全景
3．D055号遺構遺物出土状況
図版155　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D068号遺構全景
2．D188号遺構全景
3．D188号遺構カマド検出状況
図版156　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D188号遺構遺物出土状況
2．D188号遺構遺物出土状況
3．D189号遺構全景
図版157　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D189号遺構遺物出土状況

2．D189号遺構カマド検出状況
3．D190号遺構全景
図版158　歴史時代　第II群遺構
1．D190号遺構カマド検出状況
2．D190号遺構遺物出土状況
3．H014号遺構全景
図版159　歴史時代　第II群遺構
1．H015、016号遺構全景
2．H017号遺構全景
3．P017号遺構全景
図版160　歴史時代　第II群遺構
1．P018号遺構全景
2．P019号遺構全景
3．M021号遺構全景
図版161　歴史時代　第II群遺物
図版162　歴史時代　第II群遺物
図版163　歴史時代　第II群遺物、墨書土器
図版164　歴史時代　第II群墨書土器
図版165　歴史時代　第II群墨書土器
図版166　歴史時代　第III群遺構
1．D019号遺構全景
2．D019号遺構遺物出土状況
3．D019号遺構下部検出ピット
図版167　歴史時代　第III群遺構
1．D019号遺構下部検出ピット遺物出土状況
2．D020号遺構全景
3．D021号遺構全景
図版168　歴史時代　第III群遺構
1．D021号遺構掘り方検出状況
2．D022号遺構全景
3．D022号遺構カマド検出状況
図版169　歴史時代　第III群遺構
1．D023号遺構全景

2．D024号遺構全景
3．D025号遺構全景
図版170　歴史時代　第III群遺構
1．D025号遺構貝殻検出状況
2．D025号遺構掘り方検出状況
3．D087号遺構全景
図版171　歴史時代　第III群遺構
1．D088号遺構全景
2．D088号遺構カマド検出状況
3．D089号遺構全景
図版172　歴史時代　第III群遺構
1．D160号遺構全景
2．H002号遺構全景
3．H003号遺構全景
図版173　歴史時代　第III群遺構
1．H013号遺構全景
2．P009号遺構全景
3．D045、046、H009号遺構分布状況
図版174　歴史時代　第III群遺物
図版175　歴史時代　第III群遺物
図版176　歴史時代　第III群遺物、墨書土器
図版177　歴史時代　第III群墨書土器
図版178　歴史時代　第III群墨書土器
図版179　歴史時代　第IV群遺構
1．D041号遺構全景
2．D041号遺構カマド検出状況
3．D042号遺構全景
図版180　歴史時代　第IV群遺構
1．D045号遺構全景
2．D046号遺構全景
3．D047号遺構全景
図版181　歴史時代　第IV群遺構
1．D048号遺構全景

２．D050号遺構全景
３．D051号遺構全景
図版182　歴史時代　第IV群遺構
１．D052号遺構全景
２．D057号遺構全景
３．D057号遺構カマド検出状況
図版183　歴史時代　第IV群遺構
１．D059号遺構全景
２．D060号遺構全景
３．D061号遺構全景
図版184　歴史時代　第IV群遺構
１．D061号遺構カマド検出状況
２．D062号遺構全景
３．D062号遺構カマド検出状況
図版185　歴史時代　第IV群遺構
１．D063号遺構全景
２．D063号遺構遺物出土状況
３．D063号遺構遺物出土状況
図版186　歴史時代　第IV群遺構
１．D064号遺構全景
２．D065号遺構全景
３．D065号遺構カマド検出状況
図版187　歴史時代　第IV群遺構
１．D066号遺構全景
２．D067号遺構全景（部分調査）
３．H009号遺構全景
図版188　歴史時代　第IV群遺構
１．H012号遺構全景
２．P006号遺構全景
３．P006号遺構遺物出土状況
図版189　歴史時代　第IV群遺物
図版190　歴史時代　第IV群遺物
図版191　歴史時代　第IV群遺物、墨書土器

図版192　歴史時代　第IV群墨書土器
図版193　歴史時代　その他の遺構
1．P015号遺構全景
2．P015号遺構遺物出土状況
3．P015遺構遺物出土状況

序　　章

第1節　発掘調査に至る経過

住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部（前日本住宅公団首都圏宅地開発本部）は、首都圏における急激な人口増加に対応する施策の一環として、千葉県八千代市萱田地区において土地区画整理事業を施行することを諸法に基づき立案した。首都圏都市開発本部は事業地に所在するであろう埋蔵文化財について地元八千代市教育委員会との協議を経て、昭和50年2月、千葉県教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無についての照会をした。

このため、県教育委員会は、首都圏都市開発本部に遺跡の分布調査を事前に実施するよう指示し、併せて分布調査実施機関として財団法人千葉県文化財センターを指定した。そこで当文化財センターは、県教育委員会の指導により首都圏都市開発本部との間に遺跡分布調査の委託契約を締結し、昭和50年11月17日から12月31日まで調査を実施した。

分布調査の結果、約100haの事業地は新川方面より入る2か所の大きな谷によって台地が3分される自然環境を呈している関係であろうか、遺物散布地は谷に面する台地上に歴史時代の遺物を中心に、地点によっては旧石器時代や縄文時代、或いは古墳時代前期が重複する20か所と塚1基を確認した。

その後、昭和51年11月、首都圏都市開発本部から埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての照会が県教育委員会にあった。県教育委員会では先の遺跡分布調査の成果に基づいて公園・緑地等により現状保存の措置をとられるよう、首都圏都市開発本部に回答した。その後首都圏都市開発本部より公園・緑地等による保存措置が計画上困難であるため再協議の申請があり遺跡の取扱について再三にわたり協議した結果、現状保存を図る一方、現状保存が困難な遺跡については十分な記録保存の措置を講ずることに決定した。

記録保存に当っては当文化財センターが調査機関の指定を受け、県教育委員会の指導により首都圏都市開発本部との間に遺跡発掘調査の委託契約を締結し、昭和52年4月1日より本格的な発掘調査を開始することとなった。

委託契約に先だって調査内容について県教育委員会と当文化財センターとの間で協議が重ねられた結果、萱田地区における遺跡の分布状況については昭和50年度に実施した遺跡分布調査の成果があるわけであるが、調査の性質上遺跡の時代相や範囲について確定できるものではなく、また畑地以外の土地については調査が実施できなかった事情もあるため、分布調査の成果を踏まえて遺構等の位置・種類・規模・範囲等について全体的な確認調査を実施し、その後、確認された遺跡の調査を実施するという基本方針がとられることとなった。

しかし、発掘調査用地の確保について、首都圏都市開発本部が努力されたが諸般の事由から全体的な確認調査を実施することが不可能となったため、昭和52年度当初契約については事業地の北側、八千代市萱田字権現後453番地他 17.2 ha の確認調査を 4 月 1 日から11月30日の間に実施し、協議のうえ確認できた遺跡の一部を12月 1 日から昭和53年 3 月31日までの間に調査可能な範囲を選定し発掘調査を実施することとなった。

第2節　遺跡の概観

1．地理的環境（図1、図版1）

権現後遺跡は千葉県八千代市萱田字権現後453番地他に所在する。

遺跡のある下総台地は関東地方南東部に広がる低平な台地である。標高は約20mから30mで、東側は太平洋、西側は江戸川、北側は利根川低地帯、南は市原市、東金市附近で房総丘陵と接する。

下総台地の基本的性格は隆起海岸平野であり、浅海底で形成された平坦な地形が地盤の隆起と海面の低下の結果、陸地化し台地化したもので、地盤の運動の様式や速度に差があり海面低下も一様でないためいくつかの段丘面に細分されるという[註1]。

杉原重夫によれば、下総台地は古いものから下総上位面、下総下位面、千葉第1段丘、千葉第2段丘という4つの段丘面に区分され、これらはそれぞれ武蔵野台地の淀橋面、成増面、本郷面、立川面、相模野台地の下末吉面、小原台面、三崎面、陽原面に対比されるという[註2]。

本遺跡はこのうち、下総下位面にあたり印旛沼に続く新川（印旛沼疏水路）にむかって北東に突出した舌状台地の南半部にあたる。遺跡の周辺は北側を台地中央部に東南に走る道路、南側を低湿な谷津田、東側を飯綱神社とその東側を南北にのびる道路によって区画されている。また西端部には、旧石器時代から古墳時代の集落があり南側に開口する小規模な谷津によってくぎられている。なお、南側は急崖になっているが、これは第2次大戦後の風水害による土砂崩れと土取りによるものである。したがって、以前は台地の範囲は谷津田の附近まで南側にさらに数百m広がっていたことが想定できる。

遺跡附近の主要な水系として新川があるが新川はかつて平戸川と称され、北流し桑納川と合流しつつ、印旛沼へ注いでいた。ところが、昭和40年に資源開発公団の手により開さく工事が完了するに及んで流れが逆方向に変り河幅(75m)、深さとも増し印旛沼疏水路として機能する様になった。さらにこれと接続して東京湾に注ぐ花見川の開さく、水資源開発公団大和田排水機場の完成により現在は印旛沼の活水に大きな役割を果している[註3]。

権現後遺跡の名は、遺跡南東端にある飯綱神社（権現）に由来する。飯綱神社は約460年前の室町時代末期に創建されたと伝えられ、祭神は「宇賀文御魂尊（稲荷大神）」である。周囲はうっそうたる社そう林におおわれ、附近では自然植生が残存する数少ない地域の一つである。

本遺跡は調査前には遺跡平坦部は畑地で、谷にのぞむ斜面部はコナラ、クヌギ等の雑木林となっており比較的人為の痕跡が加わっていた。

八千代市は昭和33年に八千代住宅団地の完成以後、八千代台、大和田、勝田台の駅周辺の市街化が著しく、また昭和36年に遺跡南面部に位置する八千代工業団地が完成するに及んで、開発が進展していた。村上団地や附近の千葉ニュータウンに造成に伴い、大規模な集落遺跡が発

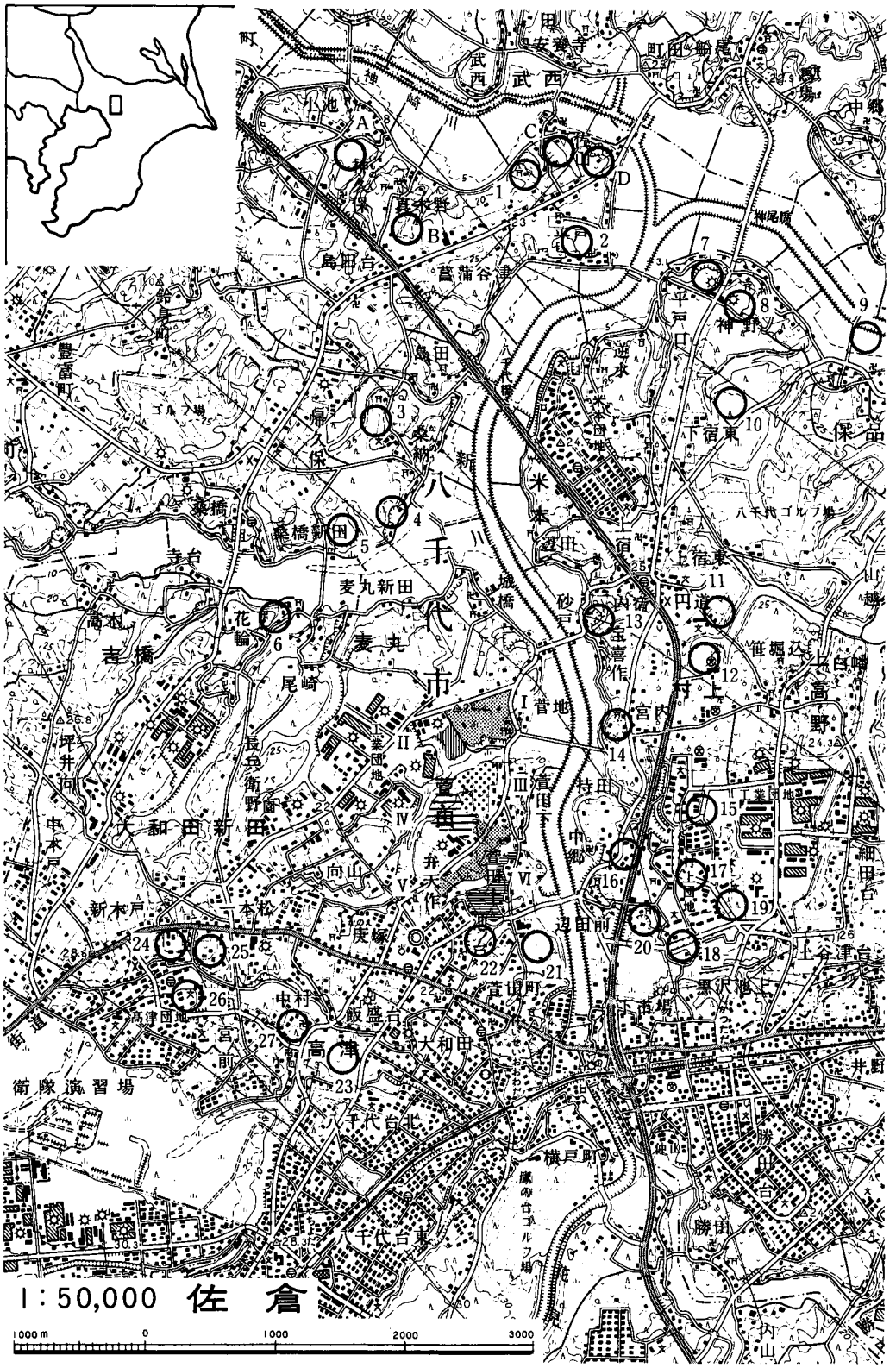


図1 萱田地区の位置と周辺の遺跡群

見されている。遺跡の多くは河川によって樹枝状に開析された台地縁辺部に見られ、その様なことから権現後遺跡は下総台地における遺跡立地の典型とみることができよう。

2．自然環境（表１）

(1) 現在の自然環境

権現後遺跡のある八千代市は暖温帯に属している年平均気温14°C、年降水量 1.447 mm である。[註4]

照葉樹林帯の北限にあたり原植生はスダジイ、アカガシ、シラガシ、シロダモ、などの常緑葉樹となっている。しかしながら、開発地域にあたり、自然植生はほとんど残存しておらず、わずかに、社そう林と屋敷林に潜在自然植生の顕在化がみられるに過ぎない。

また近年、セイタカアワダチソウ、ブタクサなどの帰化植物が優占し、他の植物の領域を蚕食しつつある。

表１　植生自然度の区分と全国・千葉県・八市代市の植生比率
（1978『八千代市の歴史』より抜すい）

植生自然度	植生区分	(1) 全国の植生比率	(2) 千葉県の植生比率	(3) 八千代市の植生比率
1	市街地，造成地など緑がほとんど残っていない地区	3.1%	10.6%	23.5%
2	畑，水田など耕作地と60%以上緑におおわれた住宅地	22.7	49.5	49.0
3	果樹園，桑園，茶畑，苗圃など樹園地	1.5	10.3	—
4	シバ群落など背丈の低い草原	1.6	0.7	—
5	ササ群落，ススキ群落など背丈の高い草原	1.9	0.5	4.2
6	常緑針葉樹，落葉針葉樹，常緑広葉樹などの植林地	20.9	21.4	21.2
7	武蔵野の雑木林（クヌギ，コナラ林）のように人間の手が加えられた天然林	21.0	11.6	—
8	ブナ，ミズナラ再生林，シイ，カシ萌芽林など一度伐採されたが自然に復元された林	4.5	3.3	2.1
9	エゾマツ，トドマツ，ブナ林のように多層の植物社会を形成する原生林	21.7	0.4	—
10	高山植物帯，高層湿原，自然草原のように単層の植物社会を形成する地区	1.1	1.7	—

註(1)，(2)環境庁19763：自然環境保全調査報告書，第１回緑の国勢調査　(3)八千代市広報広聴課1976：自然度１が23%の八千代市，広報やちよNo.190； 3

現存植生図、植生自然度図によれば八千代市の植生の傾向は以下のとおりである。

① 八千代市植物目録によると、八千代市に生育している植物は730種である。うち木本類123種、草本類552種、シダ類55種である。[註5] 植物自然度では１、２、５、６、８などがみられ、中でも植生自然度１及び２が圧倒的である。

② 平均的な台地周辺の植物分布は台地平坦部にクロマツの植林が多く見られ、斜面にはコナラ、クヌギ、イタシデなどの雑木林が見られる。コナラ、クヌギなどは薪炭材として有用で

ある。

③　わずかに自然植生をとどめる社そう林の調査（9か所）によれば高木層、亜高木層に照葉樹林が少なくクロマツ、スギ、ヒノキなどの常緑針葉樹林が優占している。照葉樹林のスダシイ、アカガシ、シラガシ、シロダモ、モチノキなどの低木層がみられる場合もあるが人為が介在するとこれらも見られない。

権現後遺跡はクロマツの植林、クヌギ、コナラ等の雑木林、工場地帯、緑の多い住宅地にかこまれている。

権現後遺跡に近接する飯綱神社はクヌギ、ヒノキが50%を占め、相対的に人為の影響が強い。八千代市生物基礎調査団によると、DBH（胸高直径）10 cm 以上の樹種は、183本を数え、その結果をまとめると以下のようになる[註6]。

○樹種は、スギ、クロマツ、スダシイ、シラカシ、モチノキ、ケヤキ、イヌシデ、ソメイヨシノ、エノキ、イロハカエデ、モミ、イチョウ、ヒノキ、ハリギリ、ユズリハ、モッコク、タブ、コウヤマキ、ゲッケイジュ、トサミズキ、シロダモ、コブシの計24種にわたる。若い樹木が多く、スギ、ヒノキなどの植林がめだつ。自生した樹種は、スダジイ、タブ、シロダモ、モチノキ、モミなどであり79%が人為による樹種である。

○これらの樹木は耕作、定期的な伐採、採草、植林、下草刈り、部分的な火入れなどの人為的干渉によって存続してきた。

○本遺跡周辺の植生は飯綱神社境内とそれに隣接した南北にのびる道路沿い（東部地域）及びヲサル山の南側斜面部に残されている(西部地域)。東部地域はスギの植林と孟宗竹の群落によって構成されている。これらは崖線に沿って分布しているが孟宗竹は勢いがあり、他の植物を駆逐しつつある。スギの群落は幼木がなく直径20m程度の若木が中心となっている。

○ヲサル山の南側に広がる斜面部では、クヌギ、コナラ等の落葉広葉樹が繁茂しており平坦地から斜面にかけヒノキが植林されていた。

○当地の自然植生が最も良くあらわれているのは、飯綱神社南側斜面に残る照葉樹林であり、樹種はアカガシ、スダジイ、シラカシ、モチノキなどが観察される。

(2)　湧　　水

水は人類の生存に不可欠の要素である。現在、権現後遺跡周辺では水道が普及し、井戸を使用する事はあまりなくなったが過去には井戸、湧水を利用したと言われている。

さて、井戸を利用する場合には深さによって帯水層が違ってくる。一つは下末吉ローム層の青灰色粘土層を不透水層とする宙水、いま一つは成田層に帯水する本水である。

周辺の地域では、井戸は成田層までほりさげ、より安定した本水を獲得していた模様であるが湧水地点では下末吉ローム層上面の宙水が湧き出している。

遺跡周辺の湧水地点は飯綱神社南側崖線部に一か所、遺跡南側の谷津田などにあり往時はた

えることなく清冽な地下水が流れていたが、現在は下水道の普及、近隣の工業団地の地下水のくみあげ、森林の伐採、宅地化により、地下水位が低下し湧水が止まっていると言う。

権現後遺跡内では井戸状遺構は明確でなく、過去には附近の自然の湧水もしくは、附近を流れる平戸川の水流に求めることが妥当であると考えられ、特に日常の飲料水の確保には、湧水が広く活用されたものと推測される。

ちなみに川崎市黒川東遺跡の調査では、附近の湧水地点を発掘したところ粘土層より水を溜めるピットやそのために使用された打製石斧などが出てきたという[註7]。湧水地の調査によって当時の水資源の活用するさまを明らかにしていくことも重要であろう。

註

1　千葉県企画部企画課『土地分類基本調査』昭和55年

2　杉原　重夫「地形の発達」『市川市史』１所収　昭和49年

3　八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史』昭和53年

4　註３の文献に同じ

5　大野　景徳『千葉県八千代市植物目録』昭和55年

6　八千代市生物基礎調査団『八千代市生物基礎調査報告』昭和55年

7　黒川遺跡調査団『黒川東遺跡』昭和55年

3．歴史的環境（図１）

八千代市は、市の北部に位置する印旛沼と、その水系にかかわる河川が大小の支谷を形成しているため、きわめて恵まれた自然環境の中に位置していると言えるであろう。市のほぼ中央部を流れる新川は、開さくの結果、現在は千葉市の花見川に続いているが古くは平戸川と呼ばれた河川であり、流域には数多くの遺跡が分布している。八千代市教育委員会の遺跡分布調査によれば、市内には264か所におよぶ遺跡が確認されている。遺跡の時代を一瞥すれば旧石器時代から歴史時代までとても幅広い時間の経過の中で形成されていることが窺知できる。

さて、萱田地区遺跡群をとりまく周辺の遺跡がどのような分布状況を呈しているか、台地ごとに見てみたい。

まず、神崎川と新川に挟まれ、さらに神崎川から入る柏谷津と新川から入る西ノ谷津に区画された島田台を中心とする地域には旧石器時代から歴史時代までの遺跡が位置している。旧石器時代ではＡの妙正神社遺跡[註1]、Ｂの松原遺跡[註2]、Ｃの新久遺跡[註3]、Ｄの佐山寺ノ下遺跡[註4]などがある。松原遺跡では削器、佐山寺ノ下遺跡ではナイフ形石器が検出されている。縄文時代の遺跡は市の指定文化財であるｉの佐山貝塚がある[註5]。佐山貝塚は熱田神社の社そう林から隣接する畑地に大きな広がりをもつ縄文時代後期を中心とする点列馬蹄形貝塚で、堀之内式、加曽利Ｂ式など

の土器片や磨製石斧、石棒などが出土している。弥生時代の遺跡は特に提示すべきものはない。古墳時代では2の平戸台古墳群が位置している[註6]。古墳群の中には中世の塚があるものの、古墳は円墳で7基が確認されている。古墳時代ではその他、五領期から鬼高期にかけての遺物を散布する遺跡が多く認められる。歴史時代の遺跡は国分期が多く認められるが遺跡の実態は表面的な観察のため不分明である。その他中世の板碑、特に題目板碑が小池、神久保(いものくぼ)、真木野(まきの)、佐山、平戸台において数多く分布している[註7]。

次に、桑納(かんの)川と先に記した柏谷津・西ノ谷津の両谷津に挟まれた桑納の地域には旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。縄文時代の遺跡は後期が多いようであるが遺跡の実態については表面的な観察のため不分明である。弥生時代の遺跡は5の桑橋(そうのはし)新田遺跡がある[註8]。遺跡は桑納川に南面する台地上に成形された後期の遺跡で、住居跡と方形周溝墓が検出されている。方形周溝墓は4基あり、多量の土器と伴に勾玉やガラス玉などが出土している。古墳時代の遺跡は4の桑納古墳群がある[註9]。1基は径25.5m、高さ2mの円墳で木棺直葬の主体部が墳頂下 20cm で検出され、直刀、剣、鉄鏃、鉄地金銅張飾り金具片などが出土している。1基は主軸長34mの帆立貝式古墳で墳丘裾部が1m幅のテラス状を呈しており、この部分から円筒埴輪や天冠人物埴輪が出土しているが主体部については不明である。歴史時代では3の桑納前畑遺跡[註10]がある。

次に、桑納川には直交するように南にのびる支谷がいくつか認められるが、その中で花輪・上谷の谷津と石神の谷津に挟まれた吉橋、花輪の地域には縄文時代と歴史時代の遺跡が認められている[註11]。歴史時代の内散布地を除けば6の吉橋城跡が位置している。築造は15世紀中頃と言われ、直線連郭式の構造を呈している。郭は二郭ありいずれも土塁にて区画された台形の平面形を呈している。城主は千葉氏の系統である高木伊勢守胤貞と伝えられている。

次に、新川と神崎川が合流する地点、鳥ケ谷の谷津と栗谷の谷津に挟まれた神野の地域には旧石器時代から歴史時代の遺跡が認められている。旧石器時代の遺跡はEの大山遺跡で剝片が確認されている[註12]。縄文時代の遺跡は8の神野貝塚がある[註13]。縄文時代中期の阿玉台式、加曽利E式、後期の堀之内式、加曽利B式が散布する地点貝塚である。土器片の他に打製石斧、磨製石斧、石鏃、磨石、敲石や土偶などが出土している。9は沖積地に立地する大江間遺跡である[註14]。印旛沼の干拓工事の際に刳舟が出土したため調査が行われた。刳舟の他に後期の加曽利B式、安行I・II式、晩期の安行III式の土器片も出土しており、縄文時代の生活行動を把握するうえで貴重な資料となっている。刳舟はカヤ材を用いたもので、長さ6.54m、幅約0.4mを計り4か所に梁が認められる。古墳時代の遺跡は7の神野芝山古墳群と10の保品栗谷古墳がある[註15]。神野芝山古墳群は円墳4基が認められているが、調査された2号墳は耕作時に偶然発見された古墳である。よって墳丘が削平され主体部のみ遺存する古墳の存在も考えなければならないであろう。2号墳は径30mの円墳で、主体部は雲母片岩を用いた箱式石棺である。石棺は長さ2.4m、幅1mで

蓋石は4枚からなっている。主体部からは勾玉、なつめ玉、管玉、刀子、鉄鏃などとともに10体前後の人骨が雑然とした状況で出土している。既に消滅しているが4号墳出土と伝えられる石枕が現存しており、粘土槨の主体部をもつ古墳から出土したものと想定されている。また、鏡の出土もあったと伝えられている。保品栗谷古墳は2基の古墳が存在していたが、1基は戦時中の開墾によって封土が削平された際に石棺が発見され調査されたものである。主体部は緑泥雲母片岩をもって構築されており、箱式石棺の構造を呈している。石棺からは直刀、刀子、鉄鏃、勾玉などが出土している。弥生時代と歴史時代の遺跡は表面的な観察であるため実態については分明でないが歴史時代の内中世の板碑が神野、米本逆水、保品の地に広く分布している。本尊種子は阿弥陀如来一尊のものと三尊のものが認められるものの、一尊種子が圧倒的に多い[註16]。この地域の板碑群のあり方と先に記した小池、佐山等の地域に分布する板碑を対比すると、新川を境にした宗派の違いが明瞭に把握できる。

次に、新川と新川に向って東方からのびる森谷津、西谷津に挟まれた阿蘇(あそ)内宿の地域には、弥生時代から歴史時代の遺跡が認められている。弥生時代の遺跡は1の阿蘇中学校東側遺跡がある[註17]。後期の住居跡9軒と方形周溝遺構が調査されている。2は村上新山遺跡で後期の住居跡と思われる遺構が1軒調査されている[註18]。古墳時代の遺跡は4の七百余所神社の境内にある市の指定文化財である七百余所神社古墳がある[註19]。径15m、高さ3mの円墳で、新川の沖積地を望む台地先端部分に構築されている。歴史時代の遺跡は3の米本城跡がある[註20]。築造は15世紀中頃と言われ16世紀中頃に最大の陣容を整えたと考えられている。直線連郭式の構造を呈している。郭は四郭あり、いずれも土塁によって区画された方形の平面形を呈している。IIIの郭と小字内宿南との間、それに二の堀に土橋が認められる。南側のI・II郭は土取工事のため残っておらず、大手についても不明である。堀は箱薬研で幅15m、深さ2mを現状で測量できる。城主は村上綱清と伝えられており、近くには菩提寺であった長福寺が位置している。長福寺には伝村上綱清の墓として市の指定文化財になっている軟質砂岩製の五輪塔が位置している[註21]。その他、奈良・平安時代の遺物散布地が8か所で確認されている[註22]。

次に、新川と辺田前の谷津(旧阿蘇沼)、それに上相女北側の谷津、向原提上の谷津に挟まれた村上の地域には、旧石器時代から歴史時代の遺跡が認められている。旧石器時代の遺跡には、奈良・平安時代の集落遺跡として著名な17の村上込の内遺跡内で確認されている。ナイフ形石器、エンドスクレイパー、グレイバー、ポイントなどが出土している。縄文時代の遺跡は後期堀之内式、加曽利B式が散布する9か所が確認されているが遺跡の実態は不分明である。弥生時代の遺跡は先の17の村上込の内の他に15の名主山遺跡がある[註23]。両遺跡とも後期の住居跡が検出されている。出土遺物は少ない。古墳時代の遺跡は20の市指定文化財である根上神社古墳がある[註24]。主軸長40mを計る前方後円墳で前方部と後円部のくびれ部分に根上神社が位置するため完全な形状を保っていないが八千代市内において唯一の前方後円墳である。歴史時代の遺跡は

15の名主山遺跡、17の村上込の内遺跡、18の村上第1塚群[註25]、19の村上第2塚群[註26]がある。名主山遺跡は村上込の内遺跡とは向原提上の谷津をへだてて位置しており、「加」の墨書土器が特徴的である。村上込の内遺跡は154軒におよぶ大集落跡を形成する遺跡であり、「来」、「毛」の墨書土器が特徴的である。村上第1塚群は円墳2基と塚13基から構成される。塚は方形2基、他は円形である。遺物は寛永通宝が5枚出土した程度である。村上第2塚群は方形2基、円形6基で構成されている。この内には村上供養塚が含まれる。遺物は第1塚群に比較すると豊富で、燈明皿、玉、常滑と思われる壺、それに寛永通宝などが多量に出土している。築造は17世紀中頃と考えられている。16の殿内遺跡は、たたら遺跡である。

次に、萱田地区の遺跡群についてみてみたい。Iの権現後(ごんげんうしろ)遺跡[註27]、IIのヲサル山遺跡[註28]は、新川から東方に長くのびる須久茂谷津と桑納川から南にのびる津金の谷津に挟まれた麦丸の地域に位置している。権現後遺跡は旧石器時代から歴史時代の遺跡で、ヲサル山遺跡は旧石器時代から古墳時代前期を中心とする遺跡である。IIIの北海道(ほっかいどう)遺跡[註29]は須久茂谷津と寺谷津に挟まれた河岸段丘上に位置する遺跡で旧石器時代から歴史時代の遺跡である。IVの坊山遺跡[註30]は北海道遺跡の位置する台地の基部近くに形成された旧石器時代を中心とする遺跡である。Vの井戸向遺跡[註31]は北海道遺跡の位置する台地にあるが、寺谷津に沿って位置する旧石器時代から歴史時代の遺跡である。VIの白幡前(しらはたまえ)遺跡[註32]は寺谷津と池ノ谷津に挟まれる台地に位置する旧石器時代から歴史時代の遺跡である。これらの遺跡群は新川の対岸に位置する村上込の内遺跡ときわめて有機的な関係を有していたと考えられる。

次に、萱田地区の南側、池ノ谷津と中島から入る小さな谷津によって区画される地域に弥生時代から歴史時代の遺跡が位置している。弥生時代の遺跡は、22の川崎山遺跡[註33]で後期の住居跡と古墳時代中期の住居跡が調査されている。古墳時代中期の住居跡は石製模造品の工房跡で臼玉、なつめ玉、勾玉などが出土している。歴史時代の遺跡は21の池の台遺跡[註34]である。住居跡4軒と掘立柱建物跡1棟が調査されている。「山堤」、「冨」の墨書土器が出土している。

次に、高津の谷津と勝田川に挟まれる地域には東京湾水系と印旛沼水系の分水領に近いことに原因するのであろうか遺跡の所在数はきわめて少ない状況である。23の高津新山遺跡[註35]は旧石器時代から歴史時代までの遺跡である。現在確認調査が進められているが、旧石器時代の遺物ではナイフ形石器、エンドスクレイパーが出土している。縄文時代の遺物では中期加曽利E式、後期加曽利B式、晩期の大洞A′式などの土器片が出土している。弥生時代および古墳時代については不明である。歴史時代では住居跡2軒が確認されている。またグリッドから遺物が多量に出土しており、その中には「堤」がヘラ書された坏形土器が出土している。先の川崎山遺跡出土の「山堤」と関連があるやも知れない。

次に、高津の谷津と花輪、上谷の谷津に区画される新木戸の地域で、丁度萱田地区が位置する台地の基部にあたるが、前の地域と同様分水領に近いためか遺跡数は少ない。縄文時代の遺

跡は24の木戸前遺跡[註36]と、25の梅屋敷遺跡[註37]がある。木戸前遺跡は縄文中期阿玉台式、加曽利E式の土器が認められ、梅屋敷遺跡は中期加曽利E式の土器が認められている。弥生時代と古墳時代の遺跡は不明である。歴史時代の遺跡は26の高津遺跡[註38]と27の高津館跡[註39]がある。高津遺跡は平安時代の住居跡が検出されている。高津館跡は市街化が著しい地域に位置するため、その全容を把握することはできないが方形に廻ると考えられる土塁と空堀が遺存している。築造は鎌倉期以降で、当地域の土豪の館跡と考えられている。

以上、大きな台地ごとに遺跡の時代相を瞥見してきたが、新川流域に多くの遺跡が位置しており、しかも、村上込の内遺跡に代表されるような奈良・平安時代の大集落跡が分布する特徴を呈している。このような傾向は今後各遺跡間の資料を検討することによって古代における共同体の実態を把握するうえで貴重な資料になるだけではなく、古代末期より中世にかけての歴史的空白を埋める材料になるものと考えられる。

註

1　八千代市史編さん委員会『八千代市の遺跡』昭和53年

2　註1の文献に同じ

3　註1の文献に同じ

4　註1の文献に同じ

5　註1の文献に同じ

6　八千代高校『史学報』2　昭和46年

7　註1の文献に同じ

8　註1の文献に同じ

9　註1の文献に同じ

10　睦小学校北方遺跡調査会『桑納前畑遺跡』昭和53年

11　八千代市教育委員会『八千代市中世館城址調査報告』昭和51年

12　註1の文献に同じ

13　註1の文献に同じ

14　玉口　時雄他「印旛沼出土の刳舟」『古代』3　昭和26年

15　大川　　清「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代』11　昭和28年

16　註1の文献に同じ

17　八千代市遺跡調査会『阿蘇中学校東側遺跡』昭和55年

18　村上新山遺跡発掘調査団『村上新山遺跡発掘調査報告書』昭和53年

19　註1の文献に同じ

20　註1、11の文献に同じ

21　註１の文献に同じ

22　千葉県都市公社『八千代市村上遺跡群』昭和50年

23　名主山遺跡調査団『名主山』奥付なし

24　註１の文献に同じ

25　ａ註21の文献に同じ

　　ｂ八千代市村上古墳群発掘調査団『八千代市村上古墳群』昭和54年

26　ａ註22の文献に同じ

　　ｂ八千代市教育委員会『村上供養塚発掘調査報告書』昭和49年

27　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』３　昭和56年、４　昭和56年

28　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』７　昭和58年、８　昭和58年

29　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』５　昭和56年

30　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』６　昭和57年

31　註28、30の文献に同じ

32　註28の文献に同じ

33　八千代市遺跡調査会『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告』昭和55年

34　八千代市遺跡調査会『池ノ台遺跡発掘調査報告書』昭和55年

35　八千代市教育委員会『高津新山遺跡』昭和57年

36　註１の文献に同じ

37　梅屋敷遺跡発掘調査団『八千代市梅屋敷遺跡』昭和54年

38　高津公団遺跡発掘調査団『千葉県八千代市高津遺跡発掘調査概報』昭和45年

39　註11の文献に同じ

第3節　調　査　の　経　過

1．調査経過の概略（図2～5、図版2、3）

(1)　昭和52年度事業

昭和52年度は萱田地区における発掘調査実施の初年度にあたるため、直ちに発掘調査を開始する体制がとれず、5月4日までを準備期間とし、現地事務所の設置や基準点測量等を実施した。実際の発掘調査は5月16日より開始したが、調査対象面積 17.2 ha の内 12.64 ha については用地の確保ができないため、やむを得ず 4.56 ha を確認調査して6月11日をもって一時中断し、4.56 ha 内で確認できた遺構の調査を実施することになった。遺跡名は字名である権現後の地名を用い、権現後遺跡と命名した。

用地の確保については首都圏都市開発本部が積極的に交渉を進められたため、12.64 ha の内 8.44 ha については目処がつき、9月16日から確認調査を再会できることになり、12月26日まで実施した。しかし、4.2 ha については最終段階まで用地の確保ができなかったため、契約変更の必要が生じた。

そこで、県教育委員会、首都圏都市開発本部、当文化財センターの三者で契約変更についての協議をした結果、調査対象面積を 13 ha とし、遺構調査実施範囲は 5 ha を目途として実施

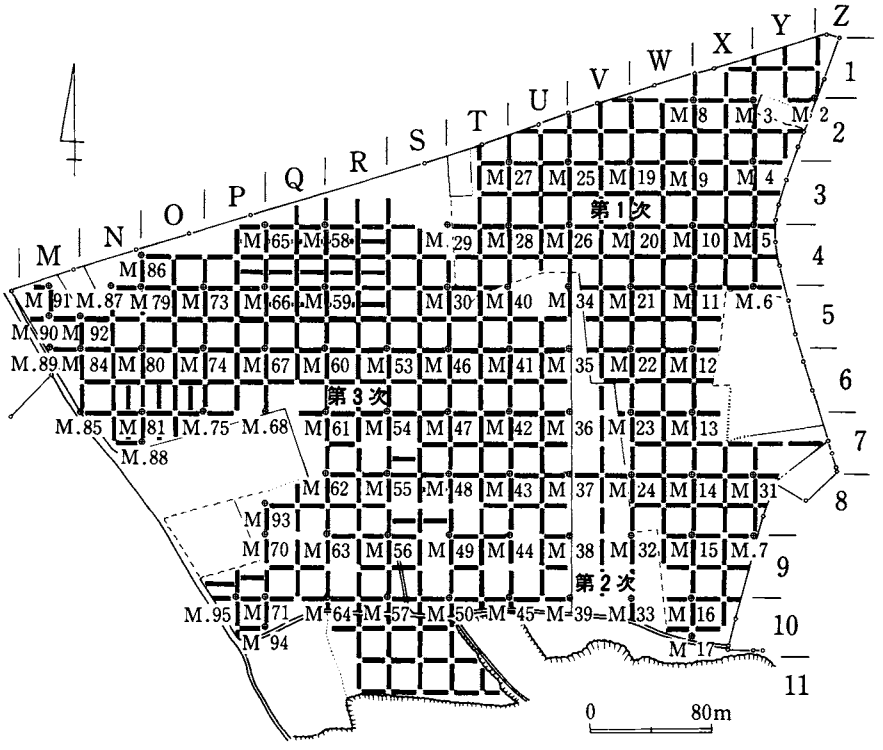


図2　昭和52年度第1次～第3次確認調査範囲

図3 昭和52年度第1次・第2次本調査範囲

することになった。既に 4.56 ha については遺構調査を実施しており、歴史時代の住居跡を中心に50軒余調査が終了していた段階であり、遺構調査実施範囲を拡大することによって、特に歴史時代の住居群の西側地域での状況を把握する目的にもつながるため、表土層を除去し遺構調査を継続した。

遺構調査は12月20日をもって 6.5 ha の範囲について終了し、弥生時代から歴史時代の集落跡を検出することができた。翌、昭和53年1月9日から旧石器時代の調査を実施し、局部磨製石斧をはじめ多量の遺物を検出することができた。

昭和52年度の担当職員は下記のとおりである。なお○印は直接現場担当者、◎印は直接整理担当者である。

調査部長　西野　元
班長　鈴木道之助　(53. 3. 31まで)
調査研究員　○阪田正一　(52. 9. 1から)
調査研究員　○深沢克友　(52. 8. 1から)
調査研究員　○大原正義
調査研究員　○高田　博　(52. 9. 1から)
調査研究員　○石田広美　(52. 6. 1から10. 31まで)

(2) 昭和53年度事業

昭和53年度の発掘調査は、52年度からの継続調査となった。52年度中に確認調査を実施した6.5 ha の内遺構の所在が確認できた 4.3 ha の範囲について遺構調査から旧石器時代まで調査を実施した。また、台地南側に位置する須久茂谷津の沖積地について、古代における沖積地利用の有無を把握するため 0.7 ha の範囲で調査を実施した。

調査の結果、台地上においては弥生時代から古墳時代後期の集落跡を検出し、中でも古墳時代中期の石製模造品工房跡の検出は当地域において初見となるものであり注目できるものとなった。沖積地の調査は水位がきわめて高く、著しい湿田の傾向が把握できた。歴史時代の遺物を検出したが具体的な利用状況について良好な資料を得ることは困難であった。また、北海道遺跡との関係が窺える点があるため、水田部については北海道遺跡の報告時に掲載する予定である。

53年度事業は、権現後遺跡の発掘調査の他、52年度に実施した権現後遺跡の資料整理作業と、この時期に至って発掘用地が萱田字北海道、同井戸向地域において確保されたため約 20 ha の範囲について確認調査を実施した。当初の目的であった全体的な確認調査が用地の確保と相俟って順調に実施できる見通しがたった。

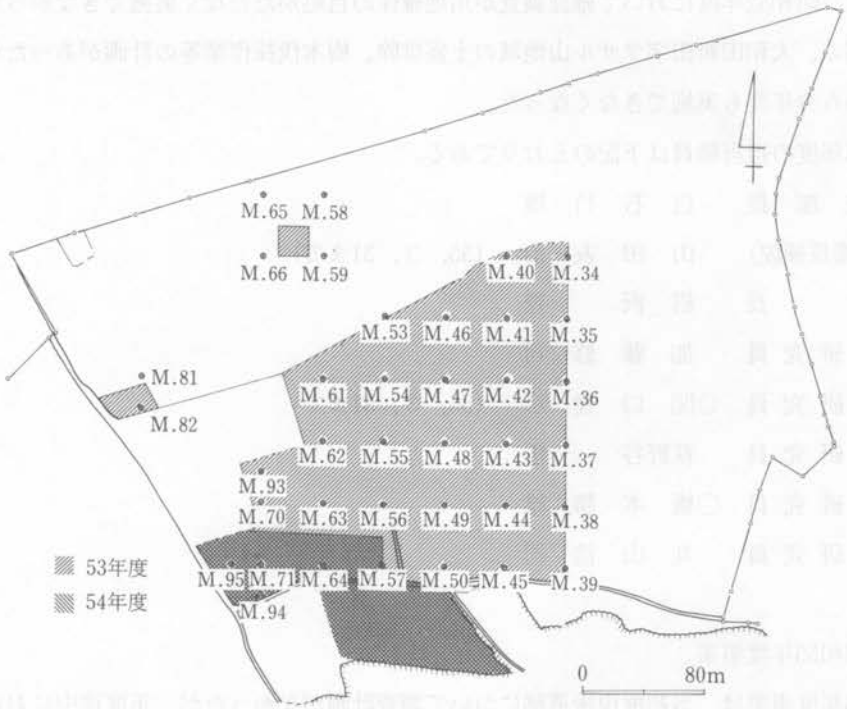


図 4 昭和53・54年度本調査範囲

昭和53年度の担当職員は下記のとおりである。

調　査　部　長　　西　野　　元　（54．3．31まで）
班　　長　　沼　沢　　豊
主任調査研究員　○堀　部　昭　夫　（53．8．1から　54．3．31まで）
調　査　研　究　員　◎阪　田　正　一　（54．3．31まで）
調　査　研　究　員　○大　原　正　義　（54．3．31まで）
調　査　研　究　員　　瀬　戸　久　夫　（54．1．1から　3．31まで）
調　査　研　究　員　○高　田　　博　（53．7．31まで）
調　査　研　究　員　○加　藤　修　司
調　査　研　究　員　○関　口　達　彦

(3)　昭和54年度事業

昭和54年度の発掘調査は、53年度からの継続調査で、旧石器時代の発掘調査を 0.75 ha の範囲について実施した。また、53年度に実施した権現後遺跡の資料整理を併せて実施した。その他、54年度事業としては、北海道遺跡の遺構調査、白幡前遺跡の遺構調査から旧石器時代までの調査、大和田新田字坊山、同字弁天作、萱田字井戸向、同白幡前の地域 28 ha の確認調査を実施した。昭和52年度において確認調査が用地確保の目処がたたなく実施できなかった権現後遺跡西側の、大和田新田字ヲサル山地域の土盛排除、樹木伐採作業等の計画があったが、諸般の事由から今年度も実施できなくなった。

昭和54年度の担当職員は下記のとおりである。

調　査　部　長　　白　石　竹　雄
班長(部長補佐)　　山　田　友　治　（55．3．31まで）
班　　長　　沼　沢　　豊
調　査　研　究　員　　加　藤　修　司
調　査　研　究　員　◎関　口　達　彦　（55．3．31まで）
調　査　研　究　員　　萩野谷　　悟
調　査　研　究　員　○橋　本　勝　雄
調　査　研　究　員　　丸　山　浩　司

(4)　昭和55年度事業

昭和55年度事業は、当初権現後遺跡について調査計画がなかったが、年度途中において、首都圏都市開発本部より支障物件の移転や山林の樹木伐採が終了したので 0.75 ha の範囲で発掘調査の追加依頼があった。そこで、県教育委員会、首都圏都市開発本部、当文化財センターの

三者より協議した結果、10月から翌年2月までの期間で調査を実施することになった。この発掘調査によって一部未調査部分が残るもののほぼ権現後遺跡の全体を把握することができた。

昭和55年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長　白石竹雄
調査部長補佐　栗本佳弘　(56. 3. 31まで)
班長　沼沢豊　(56. 3. 31まで)
調査研究員　加藤修司　(56. 3. 31まで)
調査研究員　○萩野谷悟
調査研究員　○橋本勝雄
調査研究員　○丸山浩司　(56. 3. 31まで)
調査研究員　今泉潔

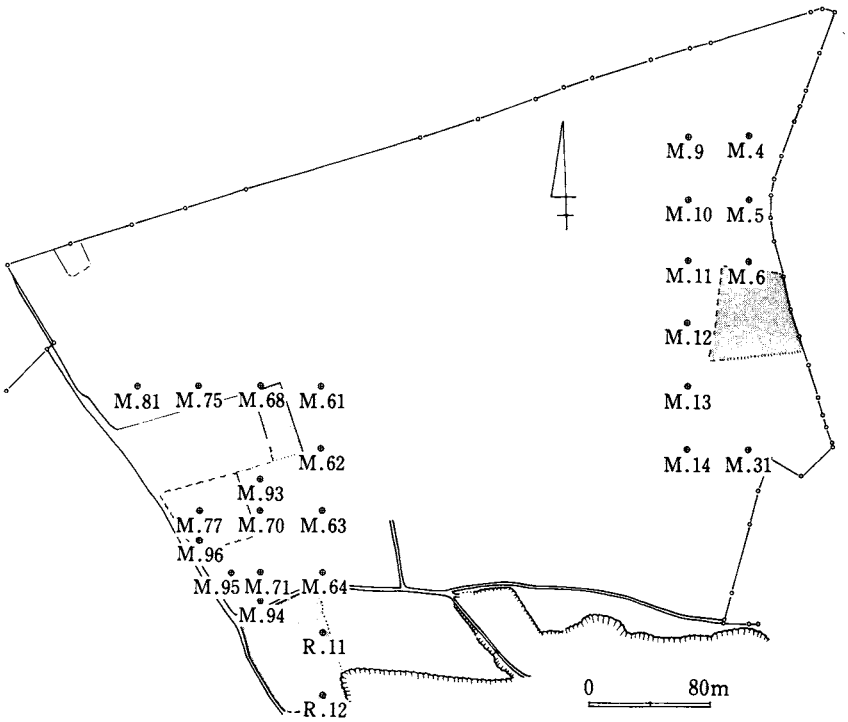


図5　昭和55年度本調査範囲

(5)　昭和56年度事業

昭和56年度においては権現後遺跡に関する発掘作業の計画はなかったが、昭和54、55年度に発掘調査した分の内、旧石器時代に関して図面等の整理作業から遺物の実測作業までを実施した。対象となったのは5ブロックで、頁岩製のナイフ形石器等を出土しているブロックである。

昭和56年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長	白石竹雄	
調査部長補佐	中山吉秀	(57．3．31まで)
班長	阪田正一	
調査研究員	萩野谷悟	
調査研究員	◎橋本勝雄	
調査研究員	今泉潔	(57．3．31まで)
調査研究員	沢野弘	(57．3．31まで)
調査研究員	藤岡孝司	
調査研究員	水野郁子(現 倉内)	

(6) 昭和57年度事業

昭和57年度における権現後遺跡に関する作業は、53～56年度の過年度において実施した基礎的な整理作業を進展させ、権現後遺跡の発掘成果を整理、分析し、原稿執筆まで実施した。

諸作業を実施している過程で、昭和55年度に発掘調査を実施したD189号遺構出土遺物の中に、人面と9文字の墨書が認められる坏形土器を発見した。全国的に見ても類例は少なく貴重な発見となった。なお、このことについては6月29日付の新聞で大きく報道されたところである。

昭和57年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長	白石竹雄	
調査部長補佐	天野努	(58．3．31まで)
班長	阪田正一	
調査研究員	◎加藤修司	(58．3．31まで)
調査研究員	◎橋本勝雄	
調査研究員	金丸誠	
調査研究員	藤岡孝司	
調査研究員	水野郁子(現 倉内)	(58．3．31まで)
調査研究員	宮城孝之	(58．3．31まで)

以上、調査の経過について概略を記してきたが、発掘調査及び整理作業については別項にも記載しているので併せて参考にしていただければ幸である。

2．調査の方法（図6）

調査は、まず遺跡北端に位置する三角点P－2（公共座標ではX＝29.122.227Y＝25.086.545）を基準として真北にむけて40m×40mの大グリッドを遺跡全体に設定した。

公共座標を使用した目的は、遺跡全体の絶対的な平面的位置づけをするとともに開発によって後世に地形的な変動があった場合の遺跡、および遺跡内の遺構の位置の復元、さらに将来隣接地区で埋蔵文化財調査の実施された際の目安として有効性を持っているからである。

40m×40mの大グリッドは、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で表示し、さらに4m×4mの小グリッド（00～99）を100の枡目に区分して、位置を決定した。

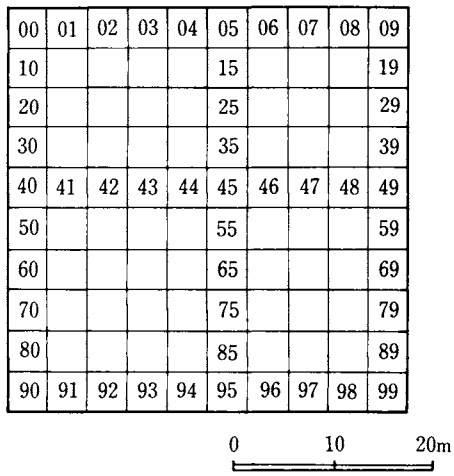


図6 小グリット配置図

小グリットは南北方向に4mごとに0～90番台、東西方向に4mごとに各数字の1けたが0～9となっており北西隅の杭を基準にして命名した。

例えば、大グリッドでA－1地区の場合、小グリッドではA－1－00～99という表示となる、この際、大グリッドの北西隅は、A－1－00、南西隅は、A－1－90、北東隅は、A－1－09、南東隅はA－1－99ということになる。

遺構の調査については、確認調査の成果に基づき、台地全面を機械によってソフトローム上面に至るまで表土層を除去し、ジョレン掛けによって遺構の落ち込み確認を行った。

検出した遺構については、発見の順に001号遺構から遺構番号を付し、さらに遺構の種類ごとに略号をつけた、ちなみに、住居跡はD、土壙はP、掘立柱建物跡はH、溝状遺構および方形周溝遺構等はMとした。

遺構は、住居跡の他、掘立柱建物跡、土壙、溝状遺構、方形周溝遺構を検出した。調査方法はいずれも住居跡を基準とした調査方法をとった。

住居跡の調査方法は四分割法に基づき、土層観察用のベルトを十字に残し、遣り方測量により、水糸の方眼を組み、遺物の平面的位置を縮尺1/20で記録し、出土層位、出土レベルを遺物台帳に記載した。

具体的な手順としては、まず土層観察用のベルトの観察により、住居跡の廃絶から埋没に至る堆積の状況をとらえながら、4つの区域の層位的発掘を実施した。

その際、遺物の出土地点はすべて図面上に記録した。これらはのちに行う整理作業におい

て、遺物の廃棄から埋没に至る過程を厳密にとらえることにより、住居跡の時期、遺物の位置的性格等について、図上復元を可能にし、調査時のデータと相互に比較検討し、総合的な所見を得る場合の便をはかったからであり、最終的に、データの集積により同一時期の集団の行動様式をとらえることを念頭においていた。

次に土層断面図を作成し、ベルトをはずし遺物をすべて取りあげたのち、内部施設を精査した。その内カマド、炉については別に微細図（平面図および土層断面図）を作成した。

特にカマドの土層断面図は焚き口から、煙出し部に至る長軸方向、および焚き口付近と煙道部の短軸方向の土層断面図を作成した。

遺構写真については、住居跡は全景、遺物出土状況、カマド等の検出状況などを撮影し、その他の遺構については遺物出土状況、全景等を撮影した。その後、床下の調査を実施し、住居等における貼床の状況および素掘りの状況を把握した。

最後に全域にわたって、空中写真を撮影し、集落部分の全調査を終了させた。

旧石器時代の調査は、遺跡全体に確認グリッドを設定し、武蔵野ローム層上面まで試掘を行なった。その成果に基づき、石器が出土したグリッドを中心として調査区を広げ、ブロックの検出にあたった。一部は部分的に調査が行われた地区もあったが、U－8～10、V－8～10、W－9～10地区にあたる東地区、P－9～10、Q－8～10、R－7～11、S－7～11、T－7～8、T－10～11地区にあたる西地区でブロックが広範にみられたため、ほぼ全域にわたって面的な調査を進めた。

出土遺物は、出土地点、出土層位、出土レベルを図面上に記録したのち（縮尺1/20）、ブロックの全景写真を撮影し、その後さらに掘りさげ遺物の有無を確認し、図面上に追加していった。

ブロックの調査の他に、遺跡内各所に設置した土層観察用の断面より土層断面図を作成した。

旧石器時代の調査としては、他に炭化物の集中地点の調査を行ったが検出した面より1cmごとにジョレン掛を行いこれを炭化物がなくなるまで続け、平面分布、垂直分布を図面上に記録していった。なお、ブロック・炭化物の略号はそれぞれS・Cとした。

3．整理の方法

(1) 旧石器関係

整理の方法については、各工程に沿った形で経過を記述していく。

出土した資料は水洗、註記の後、各文化層ごとにまとめ、図面整理と併行して、ブロックごとに分類し、容器に収納した。

図面の整理に際しては全体の出土状況を把握すべく、平面分布図より、垂直分布図を作成し、これに土層断面図を投影し、調査時の所見を勘案し、総合的に出土層位を判断した。その上で

さらにブロックごとにまとめあげ文化層ごとのブロックの平面的な位置づけを決定した。

次に、各ブロックにおける母岩別資料について分類し、接合資料の検討を行った。この際の手順としては大よそ同一母岩にまとめあげてその中より接合資料を抽出することにつとめた。また同時に接合資料一覧表、母岩別資料石器組成表を各ブロックごとに作成した。

この操作によって得られるデータは当時の技術面の研究、時間的あるいは空間的な石器群の位置づけ、ブロック間の相関関係など、当時の人間の行動様式の復元について基礎的な資料として活用することができる。

次に石器の実測図は基本的には剥片、砕片以外の器種、および接合資料に限り実測したが、ブロックによっては若干の違いがある。実測図を執る場合には、特に剥離面の切り合い関係(新旧関係）に注意し、剥片より完成品に至るまでの製作技術をできるだけ反映させるようにした。また、随時側面図を配し、石器の全体の形状が把握できるように努めた。

トレースの際には、外形線を0.3㎜、剥離面の境界線を0.2㎜の線号を用い、剥離面のリング、フィシャーなどの傷跡は丸ペンを使用した。

挿図作成の際には、石器実測図について、まず各ブロックごとにまとめあげ、石器群の配置は器種ごとに掲載し、記述の便をはかった。また、接合資料については剥離された順序が理解できるように最も古く剥離されたものから順次ならべ、接合状態を最後に提示した。

また石器分布図は平面分布図と垂直分布図をタイアップさせ、接合状況を同時に示すようにした。

石器は器種ごとに出土地点を表示し、石器群の分布が密集する垂直分布図には、平面図に比べ小さめのドットを用いて図示した。

挿図組みが終了した後、整理の過程で作成した図、表等を参考にして、原稿執筆にとりかかる。原稿執筆は、ブロックの分析を中心としてブロック個々の状況、ブロック間の状況等について文化層ごとの事実記載を基盤として、ブロック間の相関関係の解明を意図して実施した。

調査時におけるブロックの認定は、遺物の数量、平面的な広がりなどの出土状況を念頭において実施したが、整理途上時に図面整理と遺物整理などのタイアップの結果、調査時のブロック認定が必ずしも適切でない場合がなかったわけではない。

1つは、ブロックとは認めがたい例(S－9)。また、互いに近接した位置にあり、調査時に分離されていたものがさまざまな整理の結果、統合された例（S－4・5，S－7・8)、平面的な広がりでは重複したが、文化層がことなり2つに分離する必要性が生じた例（S－10）などがある。これらの呼称については、図面台帳等の番号がすでに登録されており、できるかぎり、調査時の番号を使用することに努めた。これは後に資料の再検討を実施する際に、資料の検索を容易にするという意味をあわせもっている。

調査時に、第1ブロックから第28ブロックまで命名したが、その中で第1～第3ブロック、

第6ブロック、第11～第25ブロック、第27ブロックは調査時の命名と変りはない。まず、消滅し、ブロック外出土とした例は第9、第26、第27ブロックであり、また、統合した例は第4・5ブロック、7・8ブロック、さらに2つに分離できたブロックは第10ブロックである。調査時の第9ブロックが消滅したわけであるが、第10ブロックが2つに分離できたため新たな名称は用いず、本報告では第9ブロック、ならびに第10ブロックをそれぞれ呼称することにした。結果として、第1、2、3、4・5、6、7・8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、27という各ブロックの呼称となった。

(2) 遺構関係

遺構関係の整理方法は、遺構の年代幅がかなりあるところであるが、一応共通した方法をもって実施することにした。特に集落遺跡の調査という事もあって、実際の現場作業において多くの記録が図面化してあるため、この整理を骨子として全体を進捗させる必要があった。

図面整理は、現場作業において遺構から出土した遺物について全点にわたり出土位置、標高、それに層位を明記して取りあげているので、まず、遺物の出土状況について平面的分布状況と、垂直的分布状況を机上で復元できるよう整理した。

写真整理は、現場作業において、4×5判、2B判、35㎜判を使用して撮影しているので、各々のサイズ別に整理し、併せて4×5判については遺構ごとに台紙に貼り付けて整理をした。また、2B判、35㎜判はフィルムを切り離すことができないため写真台帳を作成し、ネガの所在を容易に検索できるようにした。さらに、35㎜判カラースライドはスライドファイルにて遺構ごとに整理し、便宜的にA、B、Cの3セットを作成した。

遺物復元作業は、各遺構ごとに接合し、石膏をもって補強した。実際の復元作業に際しては各々の遺構ごとに出土した遺物を全点にわたり遺物の特徴を調査して台帳に記載した。また、接合関係を有した遺物については遺物番号を抽出し、先に図面整理で作成した平面図、垂直分布図にマークしていった。この一連の作業は、集落遺跡において生活を営んでいた人間の行動を把握することを目的としたものである。

遺物実測作業は、復元作業が完了した遺構から順次実施し、用紙はB列3判の方眼ケント紙を用いた。実測にあたっては遺物の調査という事を考慮し、註書きによって実測の表現の限界を越える部分を補足した。また、拓本の必要な土器についてはその旨図上で指示しスムーズに採拓できるよう考慮した。

その他の整理作業として本報告時の一助となればと考え、復元作業や実測作業時に得た所見を整理作業ノートを作成して記載した。図面類は、諸作業が終了した段階でマイクロフィルム化を図った。また、整理上において必要に応じてマイクロフィルムによって縮少、拡大等の作業を実施し、これらの第2原図は種別、遺構別にファイルした。

以上の基礎整理の後に遺構図面トレース、遺物図面トレースを実施し、終了した遺構から順次挿図作成を実施した。また、写真図版もこれと併行して実施し、すべての挿図および図版の作成が終了した時点で原稿執筆を実施した。

なお、報告文中の遺構番号は現場調査時に使用した番号をそのまま使用した。

4．日誌抄

昭和52年度の発掘調査

昭和52年度は萱田地区における発掘調査実施の初年度にあたるため、4月は発掘調査に伴う消耗品の購入等諸準備におわれ、実際に調査体制が整ったのは5月下旬過になってしまった。現場においては、現地詰所の建設や飲量水確保のためのさく井等を実施した。

5月16日(月) 21—00～90トレンチの遺構確認調査を開始する。これとは別に調査補助員の休憩所設置作業を実施する。

5月18日(水) 遺構確認調査を継続して実施する。11—00～10と12—10～20において住居跡の落ち込みを確認するが、確認面での遺物散布がみられず、時期について不明である。

5月19日(木) 11—00～10と12—10～20において確認できた住居跡のプランを検出することにより、おおよその時代が把握でき、さらに今後の確認調査における落ち込みの把握根拠にもつながるため拡張作業を実施した。

5月20日(金) 14—00～90、15--00～90、16—00～90トレンチの確認調査を実施する。14--60で溝2条、15—70で溝2条と幅8mにおよぶ落ち込みを確認した。この部分から鬼高式の土器が検出できたため、鬼高期の住居跡と考えられる。また、先に拡張作業を実施した11—00～11では弥生時代の一辺3mの住居跡を、12—10～20では北カマドをもつ1辺3mの歴史時代の住居跡を検出した。

5月27日(金) 本日より南北トレンチを20m間隔の確認調査に移行した。21—05～95、22—05～95、23—05～95トレンチを確認調査し、23—75において住居跡のコーナーを確認した。

5月30日(月) 23—05～95トレンチ、23—45で住居跡コーナーを確認。25—05～95トレンチ、25—85で覆土中にハマグリ、シオフキ等の貝殻を充満する歴史時代の住居跡と考えられる落ち込みを確認した。

6月4日(土) 23—50～59、24—50～59トレンチの確認調査を実施する。今後の確認調査は、耕作物等により調査用地が確保できない見通しがでてきたため、一時中断し遺構調査に切り変える必要が生じた。そのため確認調査が終了している地域より表土層を除去するための準備作業を併せて実施することになった。

6月11日(土) 本日で一時トレンチ確認調査を中断し、約4.5 haにおよぶ表土層の除去作業に移行する。また、これと併行して遺構確認調査によって遺構が検出できなかった地域について、一部旧石器時代の確認調査を開始した。

6月23日(木) 表土層の除去作業が面的に終了している地域について、遺構確認面を精査し、確認調査で検出できなかった遺構の所在を確認する作業を開始した。

7月11日(日) 表土層の除去作業と確認面

の精査作業を継続して実施する。発掘調査がかなり大規模になってきたため、調査区域の外郭線に沿うように安全柵を設置する作業を実施した。また、調査区域外に泥水等が流出しないよう斜面部分には土嚢を積んだ。

7月18日(月) 先に11—00～10で拡張した住居跡をD001号遺構とし発掘調査を開始した。この調査は遺構調査時における遺物の出土状況、覆土の堆積状況、遺構の遺存状況を事前に把握する目的をもって実施した。

7月21日(木) D001号遺構調査時の排土作業を円滑に進めるためキャリアの使用を開始する。

7月23日(土) 表土層の除去作業と確認面の精査作業を継続する。U—4—63地点でソフトローム層上面から尖頭器が出土した。

7月30日(土) 本日をもって表土層の除去作業を終了する。

8月1日(月) 本日より遺構調査を開始する。D002、D003。

8月20日(土) D007は歴史時代の住居跡で覆土上層よりかなり多量の遺物が出土するため調査に時間がかかっている。

8月26日(金) D007より巡方の裏金と思われる銅製品が出土したため、極少遺物の出土に注意をはらった。

9月1日(木) 他地域での発掘調査事業の終了に伴って、本事業に新たに2名の職員が配置され、遺構の調査も広範囲に展開することになった。D007からは相変らず遺物が多量に出土しているが、本日鉈尾の裏金と思われる銅製品と鉄製紡錘具を検出した。

9月13日(火) 住居跡覆土の排土はキャリア、一輪車を使用して実施していたが、広範囲に遺構調査が展開しており充分にカバーできない状況に至ったため、ベルトコンベアーを動入して人力による排土のための運搬距離を縮少し効率の良い遺構調査ができるように設置した。設置にあたっては漏電遮断器を併設するとともに、調査補助員に対し安全教育を実施した。

9月16日(金) D007より鎌、鉄斧を相ついで検出した。さらに、カマド左脇より灰釉陶器が土師器の坏と重った状況で出土した。また、本跡は焼失した住居であることが炭化物、焼土の検出によって確認できた。6月11日以降中断していた確認調査が用地の確保ができたため再開することになった。

9月27日(火) D027の床面近くに多量の炭化物とともに弥生式土器が使用されたままのごとくほぼ完形で出土した。炉を中心とした範囲には特に顕著であった。

10月10日(月) D025は調査前より貝殻が堆積しており注意されていた住居跡であるため、調査に際しては貝殻の堆積状況を地形実測のように測量し、10cm区画で厚さ5cmずつのサンプルを全体にわたり採集すべく開始した。貝殻はハマグリ、シオフキが主体のようである。D035の床面直上から銅鏃を検出した。D035は石製模造品の工房跡であり、臼玉、剣形品、それに原石が出土した。出土土器は和泉式土器である。

10月20日(金) 調査区北部区域における住居跡の分布状況が、歴史時代に一般的に見られる状況よりきわめて散満な状況を呈しているため、遺構確認面を再三にわたり精査したところ、新たに9軒(D058～D066)の住居跡を検出した。この9軒の覆土はほとんどがロームブロックを混入している。

10月24日(月) 新たに検出した9軒の住居跡の調査を開始した。

11月9日(水) 9月16日以降遺構調査と併

行して実施していた遺構確認調査が終了した。住居跡と考えられる落ち込み40か所、溝2条を確認した。また、臼玉の未成品や小剝片が検出できたので、石製模造品工房跡の存在も考えられる。

11月14日(月) D029の床面近くに多量の炭化物とともに弥生式土器が使用されたままのごとくほぼ完形に近い状況で出土した。既に調査が終了しているD027、D030それにD029はいずれも弥生時代の住居で、しかも近接しており、さらに焼失した住居跡であることは注目できる。

12月1日(木) 現地詰所および調査補助員の休憩所が遺構調査区域に設置してあるため、これを調査区域外に移設する。

12月12日(月) 調査が終了した遺構について、炉、カマドの調査を開始した。さらに床面下にも調査を実施し、竪穴住居跡の掘りかたの状況を検出する作業を併せて開始した。

12月20日(火) 遺構調査の終了に伴い、遺跡全体の空中写真撮影を実施した。幸に天候にも恵まれて良好な写真を得ることができた。

12月23日(金) 既に調査が終了しているD027で炭化した柱材が直立したままの状況で検出してあるので、この部分を切り取って保存をすべく作業を実施した。切り取り作業については当センター研究部の指導により実施した。

12月27日(火) 発掘器材の点検、安全柵等の点検を実施、昭和52年の発掘調査を閉鎖した。

昭和53年1月9日(月) 本日より発掘調査作業を再開した。旧石器時代の確認調査を実施するための調査区設定作業等を実施する。

1月17日(火) V－9－48グリッドの第Ⅶ層でチャートの剝片を検出した。

1月24日(火) V－9－68グリッドの第Ⅶ層で黒曜石製のナイフ形石器、剝片、砕片を検出した。また、W－9－64グリッドにおいて黒曜石剝片を検出した。このためV、W－9の地域の内約250m²について本調査を実施することとした。

1月26日(木) V－9－05グリッドの第Ⅳ～Ⅵ層において黒曜石の砕片を検出した。

2月6日(月) 本日までで218か所のグリッド確認調査が終了した。遺物が確認できたのは、台地南側に多く、北側に至ると少なくなるという状況が把握できた。

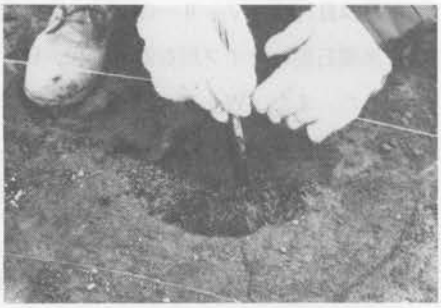
2月14日(火) 本日をもって旧石器時代の確認調査を終了する。1月24日から拡張しているV、W－9の地域はブロックとして検出することができなかった。しかし、V－9－60グリッド近くまで拡張したところで確認調査時に検出できなかったブロックの一部を検出したため、新たにこの地域の拡張を開始した（第2、3、4、5ブロック）。

2月16日(水) 1月26日にV－9－05グリッドで検出した部分を中心とした地域について拡張作業を実施した（第1ブロック）。

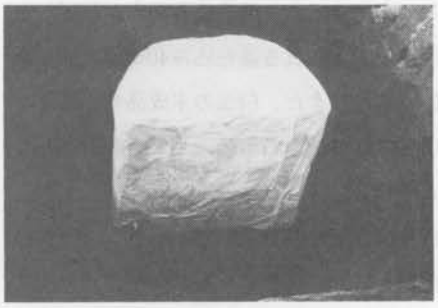
2月25日(土) 第1ブロックならびに第2ブロックの調査を開始する。いずれも黒曜石を主体とするブロックである。

3月15日(水) 2月17日より拡張を実施しているW－9－64グリッドを中心とした地域の調査を開始する(等6ブロック)。黒曜石を主体とするブロックである。また拡張時に検出したブロック（第7～10ブロック）の調査も同時に開始した。これらのブロックは黒曜石のほかに頁岩、チャートの母岩が認められる。

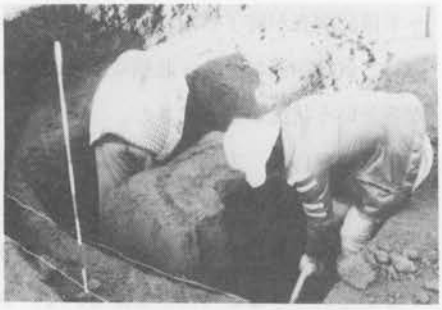
調査はベルトコンベアー等の機械を動入しつつ進めた。一部実測、写真撮影作業を残す



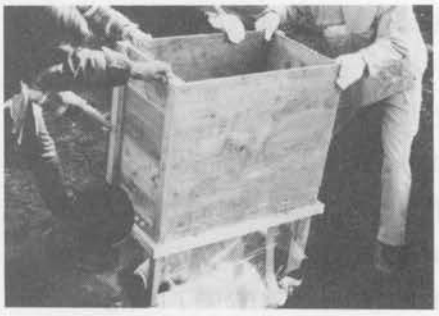
1．炭火物の清掃をする



5．和紙によって炭化物等を被覆する



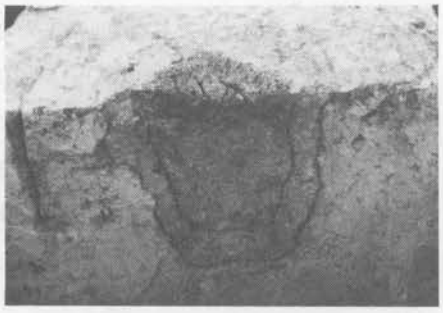
2．周辺を掘り下げる



6．木枠を固定する

3．取り上げ方の検討をする

7．発泡ウレタンを注入する



4．取り上げる前の炭化物と柱穴の状況

8．炭化物を取り上げる

D027号遺構における炭化物の取り上げ状況

が発掘作業は3月29日に終了した。この間に第11ブロックからは砂岩製の局部磨製石斧が出土するなど、多くの貴重な資料を得ることができた。

昭和53年度の調査

昭和53年度の調査は、52年度に継続する調査で、昭和53年度調査区域の西側地域について調査を実施した。4月中は遺構確認面の精査と、52年度調査地区の残務作業を実施し、5月9日より本格的な遺構調査を開始した。

5月9日(火) 表土層の除去作業の進捗関係から西側地域より調査を実施することとし、D105より調査を開始した。

5月24日(水) D113～D117の調査を開始する。この中には確認面の落ち込みが最も大きいと思われるD115がある。52年度調査において、カマドが構築される歴史時代の住居跡を多く検出したが、この西側地域では認められず、いずれも弥生時代後期を中心とする住居跡群である。D115のような大形の住居跡とD113のような小形の住居跡の関連が注目できる。

6月5日(月) D118～D129の調査を開始する。またD100～D110まで調査が終了している遺構について、炉の断面および床下の調査を実施する。今後、炉および床下の調査については遺構を長時間にわたり放置することが好ましくないので、写真撮影等が終了した段階で直ちに実施することとした。

6月15日(土) D141～D155の調査を開始する。52年度の遺構確認調査の際に、南側地域で滑石の剝片を検出しているため、表土層除去作業を慎重に行う。遺構の調査を実施しているD130、D132、D133より多量の滑石の剝片等が出土しはじめた。工房跡と断定して良いであろう。また大形住居跡D115の調査が終了した。

7月4日(火) D150からD157の調査を開始する。D130、D132、D133からは多量の剝片が出土しており、D132では今日までのところ約33,000点を出土しており、中には臼玉未成品も多く含まれている。

7月8日(土) D151は長径約4.5mの小形な円形住居跡であるが、ほぼ完形の土器2点が出土した。2点とも口縁部を下に倒立をした状況で検出した。土器は弥生時代後期の北関東系の甕形土器である。

7月20日(木) D163～D167の調査を開始する。D163～D166は52年度の調査地域に接して位置する住居跡で、カマドの存在から歴史時代の住居跡であることが明らかになった。

8月8日(火) D130、D131、D133からは相変らず多量の滑石の剝片が出土しているが、D132は床面精査の段階に至ったため、遺物の出土はほぼ終了したと思われる。

8月15日(火) ほぼ遺構の調査も終りに近い段階に至ったが、最も西側に位置し、公道下にかかるD095や、一部黒色土を掘り込んで構築しているD096について平面形の再精査を実施し、調査を開始する。

8月25日(金) 空中写真撮影を実施すべく、確認面、遺構内の清掃を実施する。

8月28日(月) 空中写真撮影を実施する。天候に恵まれ、良好な写真を得ることができた。

8月31日(木) 多量に遺物を出土していたD130、D133が本日をもって終了した。また、西側地域のD096も終了したため、D131の調査が残るものの、旧石器時代の確認調査を開始すべく、グリッド設定作業等を実施する。

10月13日(金) 本日までのところ、ほぼR

－9、S－10、11、U－7、8、9の地域の確認が終了した。遺物が検出できたのは、R－9、S－10、U－8で計3か所である。

10月27日(金) 本日までのところ、P－10、Q－9、10、R－10、11、S－11、T－10、11の地域の確認調査が終了した。遺物を検出したのは、Q－9、R－10、11、S－11で、計7か所である。

11月6日(月) U－8地域について本調査を開始する。早くもIV～VI層で剝片2点が出土した。

11月9日(木) 本日までのところP－9、R－7、8、S－7、T－7の地域の確認調査が終了した。遺物を検出したのは、P－9、R－7、8で、計4か所である。

11月16日(木) 本日までのところP－8、T－8の地域の確認調査が終了した。遺物が確認できたのはT－8、1か所であった。

12月12日(火) 本日をもって残る地域の確認調査もすべて終了した。確認できたのは合計21か所にかる。しかし、一部で本調査を実施しているU－8の地域ではブロックとしてのまとまりを検出することができない状況にある。

12月27日(水) 本日をもって昭和53年の調査を閉鎖すべく、調査区域沿の安全柵、及び深掘部分で調査上支障のない範囲の埋めもどしを実施し、終了した。

昭和54年1月8日(月) 本日より現場作業を再開する。R－7を中心に拡張本調査を実施している第12ブロックからは次第に遺物出土量が少なくなる傾向が認められる。

1月24日(水) 本日をもって第12ブロックの調査を終了する。

1月27日(土) 本日よりS－7地域を中心に拡張本調査を開始する。

2月6日(火) 本日よりQ－8の地域を中心に拡張本調査を開始する（第13ブロック)。

3月8日(木) 本日をもってQ－8の地域を中心とした本調査を終了する（第13ブロック)。また、Q－9の地域を中心に拡張本調査を開始する（第14ブロック)。

3月29日(木) 本日をもってQ－9地域の本調査を終了する(第14ブロック)。器材の点検、および環境等を整備し、昭和53年度の発掘調査を終了する。なお、9ラインより南側の地域について確認している部分は昭和54年度に発掘調査することとなった。

昭和53年度の整理作業

昭和53年度の整理作業は、昭和52年度に実施した 6.5 ha の発掘調査によって得られた資料の基礎的な整理作業として、図面、写真整理から遺物実測作業まで実施した。

4月3日(月) 図面整理を開始する。またこれと併行して遺構ごとの出土遺物全点について調査を開始する。

4月27日(木) 遺構ごとの出土全点についての調査を終了する。本日より遺物の復元作業をD001号遺構から開始する。

7月27日(木) 遺物復元作業を終了する。ただし、石膏による補強については未完である。接合状況の一覧表の作成を開始する。

8月25日(金) 接合状況の一覧表の作成を終了する。この一覧表に基づき平面、垂直分布状況図中に遺物出土状況をマークする作業を開始する。

9月5日(火) 権現後遺跡が畑地として使用されていた段階で、牛蒡を収穫する時にトレンチャーを使用したためか、溝状の攪乱を受ける遺構が少なくないため、出土した遺物が本来の一括性を有するものであるか否かを

判断するために、覆土の攪乱度合の算出作業を開始した。

9月11日(月) 攪乱度合の算出作業が終了した。94軒中49軒が攪乱を受けており、度合の高い遺構では60%を示す結果が得られた。復元作業においても遺物が大きな力によって破損しているものがあり、本来一個体と考えられる土器であっても破片が抽出できない例は、このような攪乱のためと判断できる。

10月31日(火) 本日をもって石膏による補強作業を終了する。本日より遺物実測作業を実施する。

12月4日(月) 本日をもって図面整理を終了する。また、接合状況についても図中にマークする作業を終了する。写真整理を開始する。

1月18日(木) 本日より採拓作業を開始する。歴史時代の遺物については底部あるいは胴部の叩き目等を採拓し、弥生時代の遺物については破片について採拓をする。

3月19日(月) 遺物実測が一部残るもののほぼ全体の整理作業を終了した。整理した資料は、遺構別に区分できるものは遺構別にファイルし、また、遺跡ごとに区分するものはロッカー等の収納機器を用いて整理した。

昭和54年度の発掘調査

昭和54年度は遺跡西部の南端部に残った、調査区域（0.75 ha）について、旧石器時代の調査を実施した。この地域は、昭和53年度より継続的に調査しており、P－9～10、Q－9～10、R－9～11、S－10～11、T－10～11地区が本年度の対象地域である。

検出したブロック、炭化物集中地点はそれぞれ第15ブロックより第21ブロック、C－44～C－55となっており対象地域は台地の縁辺部にあたり、これに沿った状況で多くのブロックを検出した。

4月2日(月) 昭和54年度調査開始。R－10、R－11地区の調査を開始する。

4月7日(金) 確認調査で検出したR－11地区の第15ブロック、第16ブロック、R－10地区の、第17ブロックを調査する。このうち、第15ブロックは長径約10mにおよぶ楕円形の大規模なブロックになる可能性があり、安山岩製石器群が多くみられる。

4月23日(月) S－10地区で未確認の第18ブロックを検出した。頁岩製のナイフ形石器を含む小規模なブロックと思われる。Q－9地区でC－50、Q－10地区でC－51をそれぞれ調査を実施する。

5月7日(月) S－10地区で確認調査時に未確認であったブロックを検出した（第19ブロック）。礫群であると思われる。あわせてC－52の調査を実施する。

5月18日(金) Q－10地区の第20ブロック、第21ブロックの調査を実施する。共に未確認のブロックである。第20ブロックは微細なチップを大量に含む黒曜石製の石器群で、第21ブロックは安山岩製石器群で構成される小規模なブロックである。

5月25日(金) 一部において補足の意味をもって確認調査を実施する。2×2mの小グリットをR－10～11地区およびS－10～11地区に設定し、武蔵野ローム上面までほりさげた。同時にC－53の調査を実施する。

6月5日(火) S－10地区のC－54、R－11地区の、C－55の調査を実施する。

6月18日(月) Q－10－00からR－10－00に至る土層断面図を作製する。また、パリノ・サーヴェイ株式会社が来跡し、鉱物分析用サンプルを採取する。

昭和54年度の整理作業

昭和54年度の整理作業は昭和53年度に実施した 4.3 ha の発掘調査によって得られた資料の基礎的整理作業として、図面、写真整理から遺物実測作業を実施した。

4月5日(木) 遺構ごとに出土遺物全点について調査を開始する。

4月17日(火) 本日より遺物復元作業を開始する。

5月10日(木) 遺構ごとの出土遺物全点調査が終了したため、本日より遺物実測作業を開始する。

7月21日(土) 本日をもって復元作業を終了した。本日から滑石製模造品工房跡より出土した石製品の水洗、註記作業を開始した。作業にあたっては出土量が数万点におよぶため、成品、未成品、剝片等の別を直ちに検索できるよう配慮した。

11月12日(月) 本日で工房跡関係の整理作業が終了した。本日より採拓作業を開始する。歴史時代の遺物にあっては底部、胴部を、弥生時代の遺物にあっては胴部の破片について実施することとした。

12月1日(土) 本日で遺物実測作業を終了する。

12月3日(月) 本日より図面整理を開始する。整理の方法については別記のとおり、平面的、垂直的分布状況について実施する。

12月27日(木) 採拓作業は本日をもって終了する。

2月12日(火) 遺物実測作業は一応終了したところであるが、各遺構における器種構成上のバランスを図るため補足的な実測作業を実施した。

3月31日(月) 本日をもって、図面整理および補足実測作業を終了し、昭和54年度の整理作業を終了する。

昭和55年度の調査

当初権現後遺跡の調査計画はなかったが、支障物件の移転や山林の樹木伐採が終了したため、3地点合計 0.75 ha の範囲について追加調査の依頼があり、10月から翌年2月までの期間において実施した。3地点は通称、梨園、山林、鶏舎と呼称している部分である。

10月1日(水) 山林部分について調査区等の設定作業を実施した。

10月8日(水) 本日より遺構調査を開始する。遺構は昭和53年度調査の最終遺構番号に続けて付すこととした。

11月21日(金) 遺構調査がほぼ終了したため、全体写真を撮影するため確認面の清掃を実施する。

11月25日(火) 本日より旧石器時代の確認調査を開始する。また鶏舎部分の調査区設定作業を実施する。

12月1日(月) Q－11－44グリッドの第Ⅶa層より頁岩の剝片4点を検出した。

12月8日(月) 本日よりQ－11－24、44グリッドを中心とする地域を本調査に向けて拡張作業を実施する。鶏舎部の調査を開始する。

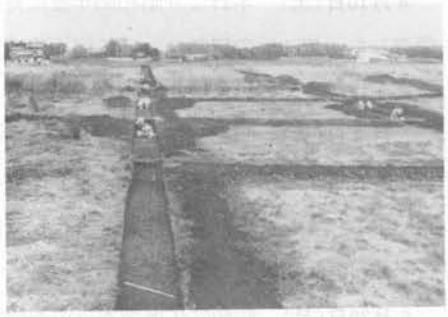
12月19日(金) Q－10－44、86グリッドを中心とする地域を本調査に向けて拡張作業を実施する。

12月23日(火) Q－10－83地区の調査を終了する。

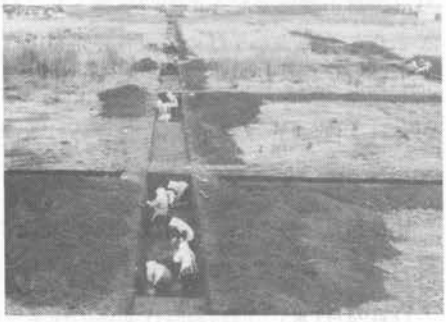
12月25日(木) Q－11－24、24地区、Q－10－44地区の調査を終了する。

12月26日(金) 鶏舎部分の遺構調査を終了し、全体の写真撮影を併せて実施する。また、旧石器時代の調査区設定も行う。

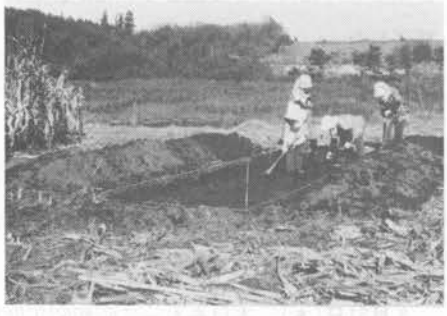
1月7日(水) 鶏舎部分の旧石器確認調査



1．遺構確認調査風景



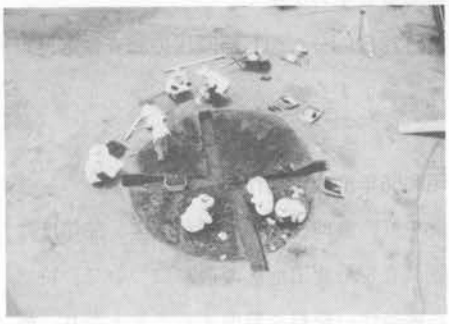
2．遺構確認調査風景



3．遺構確認調査風景

4．遺構確認調査風景（雪中）

5．遺構確認面精査風景



6．遺構調査風景

7．遺構調査風景（雪中）

8．遺構実測風景

を開始する。

1月12日(月) X－6－48グリッドを中心とする地域を本調査に向けて拡張作業を開始する。

1月20日(火) 本日をもって旧石器時代の調査を終了する。

2月3日(火) 本日より梨園部分の調査を開始する。遺構は1軒のみである。

2月16日(月) 遺構調査が終了したため旧石器調査に主力を注ぐ。

2月28日(土) 旧石器時代の調査は本日をもって終了する。

昭和56年度の整理作業

56年度の整理作業は、昭和54年、55年度に発掘調査した萱田地区の遺跡について、特に旧石器時代の資料を整理することとなり、権現後遺跡についても旧石器時代の5ブロックを対象に実施した。作業の内容は図面整理、写真整理、遺物実測まで実施した。実施した期間は、昭和56年4月13日から5月9日までである。

昭和57年度の整理作業

昭和57年度の整理作業は過年度に調査した成果を整理、分析し原稿執筆までの作業を実施することとなった。即ち、権現後遺跡の発掘調査報告書刊行に向けて作業を実施した。

4月10日(土) 本日より昭和55年度に発掘調査した 0.75 ha の資料について図面整理から実測作業までの諸作業を開始した。

5月4日(火) 昭和55年度調査分の遺物復元作業を終了した。引き続き遺物実測作業を開始する。また、これらの作業と併行して旧石器の石器計測表等の諸作業を実施した。

6月28日(月) 昭和55年度調査分の遺物実測作業を実施している過程で発見した人面を伴う墨書土器について全国的に見てもきわめて希有な遺物であるため、記者会見を行う。旧石器計測表の作成を終了する。

8月2日(月) 昭和55年度調査分の遺物実測作業を終了する。

8月24日(火) 旧石器時代関係の挿図作成及び一部原稿執筆を開始する。

11月24日(水) 旧石器時代関係の作業を終了する。また一部手直しを生じた拓本の採拓作業を8月12日より実施していたが、これも終了した。

12月8日(水) 集落関係の挿図作成を開始する。

12月20日(月) 11月15日より実施していた遺物写真撮影が本日をもって終了した。また、原稿執筆を開始すべく準備をする。

3月31日(木) 本日をもって昭和57年度整理作業をすべて終了する。

第Ⅰ部　旧石器時代

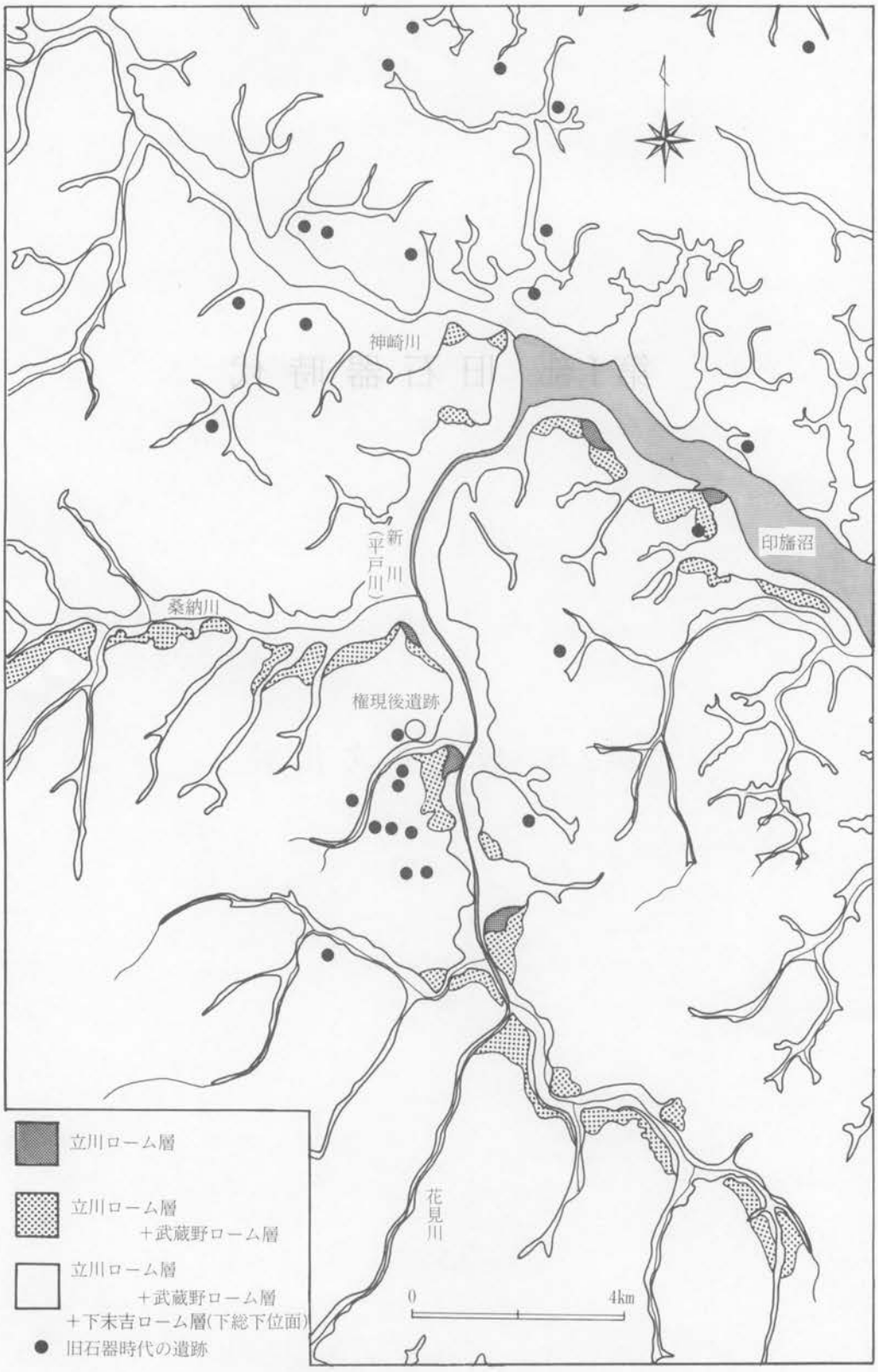


図7　段丘面と旧石器時代遺跡の立地

第１章　段丘面と旧石器時代の遺跡の立地

権現後遺跡の周辺の旧石器時代の遺跡は、過去に開析された樹枝状谷に沿って立地しており、その多くは一例を除き下総下位面にのっている。いずれも20m～25mの標高をもつ台地上にあり、あるものはその先端部、谷津の奥部、あるものはその縁辺部に位置し、谷津に面している。

当時の海面は海退期にあたり、最も寒い20,000年～18,000年前（ウェルム最寒期）には現在よりも100m前後の海面低下がみられたと言われている。したがって、当時は、さらに100mほど高さの増した高所にあたっていたものと推測される。また、現在の谷津は、後世の堆積作用によって、土砂が埋積されてきたのでさらに比高差のある見晴らしの良い高所に遺跡が立地していたものと考えられる。

権現後遺跡のある台地上には９か所の旧石器時代の遺跡が発見されている。これらの遺跡は、入り組んだ谷あいの小支谷に面しており、傾斜面になだらかにおちる台地縁辺部に存在している。また、遺跡群は、平戸川(現在の新川)、神崎川などの印旛沼水系にあたり、水系に沿う形で立地しているが、飲料水の供給水を求めてやってくる鳥獣が、旧石器時代人に都合の良い場所として、活用されたものと推測される（図７）。

第２章　層位と文化層

第１節　自　然　層

１．層序区分（図８、図版５）

自然層は、表土より下末吉ローム層上面に至るまで16枚、さらに、下末吉ローム層を３枚、計19枚に分層できた。層厚は表土層が約0.5m、立川ローム1.3m～1.9mに、武蔵野ローム2m～2.6mを測る。しかし、下総台地西部では、これまでローム層の基本層序は佐倉市星谷津遺跡の成果に基づき、ハードローム最上部をⅣ～Ⅴ層と表記するのが通例であった。しかしながら、その後の千葉県内における調査の進展に伴い、部分的な修正が必要となった。本遺跡を含め萱田地区における台地平坦部のハードローム最上部についてⅤ層にあたる場合が多いことが発掘調査や整理作業中の所見として得ることができた。

自然層の命名の仕方としては、Ⅲ層からⅥ層に至るまでは武蔵野台地と共通であるが、Ⅶ層以下は、それぞれⅦ層を細分する形をとり、Ⅶａ、Ⅶｂ、Ⅶｃ層とし、最下層をⅧ層とした。これは千葉県において星谷津遺跡の調査以来、立川ローム層の最下部がⅧ層という認識が一般的であるため、種々の混乱をさける意味でⅦ層を３つに細分した。これらの層は、武蔵野台地

におけるⅦ、Ⅷ、Ⅸ、そして最下位層をX層という名称と対応するものである。Ⅳ層はほとんどの場合肉眼観察できず、条件が良く（降灰時の地形、風向等）降灰量の多い場所に散見されるにすぎないことが判明した。このように層序区分に支障をきたした原因として、一つにはソフトローム（Ⅲ層）の直下に必ずⅣ層があるものという先入観と、第1黒色帯（Ⅴ層）が黒色帯としては色が淡く、識別しがたい点にあったものと思われる。この点については本遺跡の調査時においては知見が得られておらず、ハードローム層上部のⅣ～Ⅵ層にあたる累層を1つの層（Ⅳ層）として捉えていたため、従来どおり第2黒色帯上部をⅤ層、間層帯をⅥ層、下部をⅦ層としていた。

そこで、本報告では調査時のⅤ層～Ⅶ層を各々Ⅶa層～Ⅶc層に訂正し、Ⅳ層については大きくⅣ～Ⅴ層およびⅥ層と区分することとした。武蔵野ローム層の層序区分に関しては、R－11－55、S－11－54、T－11－53地区の深ぼりセクションで観察する限り、6枚に分層し得た。鍵層として、T・P（東京パミス、50,000年前）が径2～3cmのブロック状に堆積している様子が看取し得たが、武蔵野ローム層に関しては今後さらに細分し得る可能性があり、検討の必要があろう。下末吉ロームは水成堆積を示し、青灰色粘土層となっている。これは7万年前には当地が浅海底もしくは湿地であったことを物語っており、湿地に生えていたと思われる植物性灰化物を大量に含有している。なお付近の露頭面の観察により下末吉ローム層以下は古小貝川によって形成された河成層の竜ケ崎砂層から以下海成層に連続すると言われている。

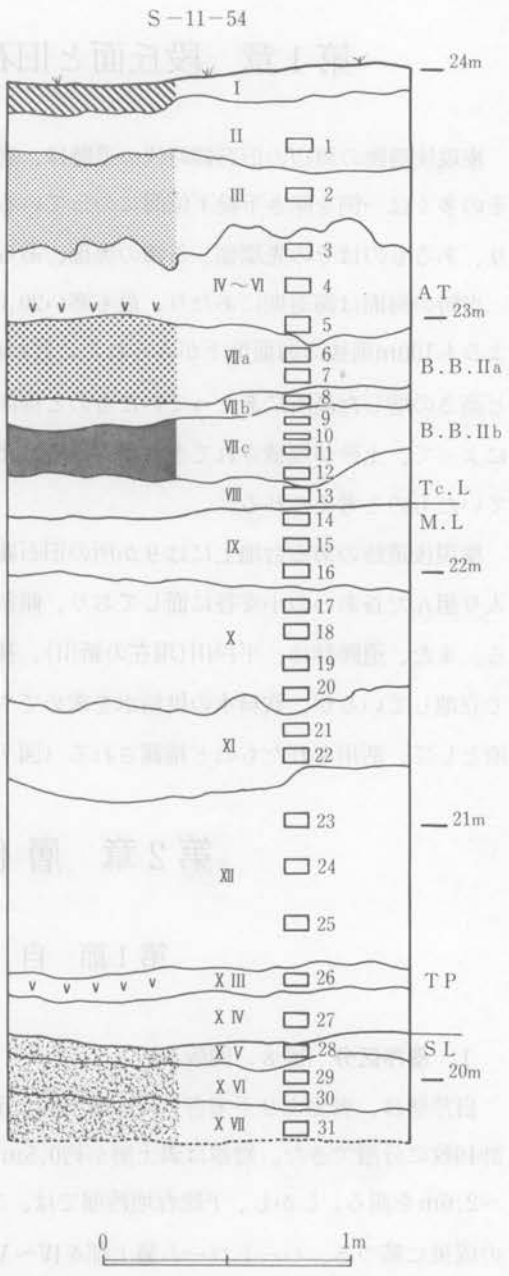


図8 標準層序と鉱物分析サンプル採取位置

遺跡内で最も標準的な土層として、遺跡内南端の平坦なS－11－54地区を選んで解説を加え

る。当地は標高24mとなっている。

2．立川ローム層（図8、9、図版5）

Ⅰ層　表土（耕作土）暗褐色土層、厚さ約 40～50 cm で空隙が大きく軟質である。

Ⅱ層　暗褐色土層、ソフトロームに至る漸移層である。やや粘質性を帯び密度はあまり高くはない。場所によってはⅡ層とⅠ層の間に黒色土が介在する場合がある。

Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層、いわゆるソフトロームである。空隙があり、軟質、粘性は若干

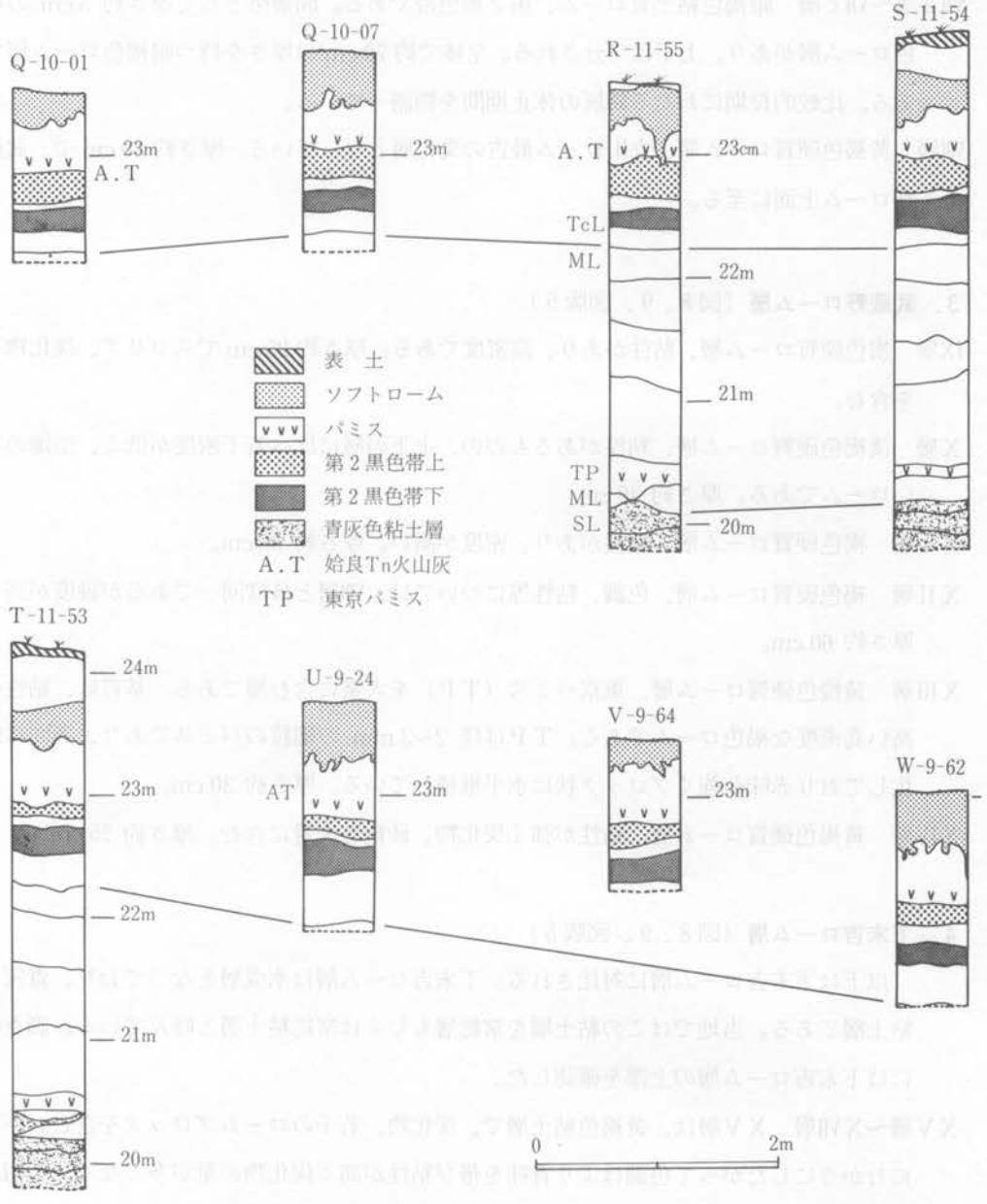


図9　遺跡土層断面図

ある。ソフトロームの生成はローム層の膨軟化によるものと一般に言われている。

IV層～V層　黄褐色硬質ローム層、厚さ 30～40 cm で調査時にIV層とV層の識別については困難であったことはすでに述べた。その原因はV層（第1黒色帯）の濃度が特に低く分層は困難なことによる。ここでは暫定的ながらIV～V層としておく。

VI層　黄褐色硬質ローム層、22,000年～21,000年前に降下した広域火山灰、ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）を含む層である。厚さ約 20 cm、図8では、線引きしていないが下位のVIIａ層直上にあたるものと考えられる。

VIIａ層～VIIｃ層　暗褐色粘土質ローム、第2黒色帯である。間層帯として厚さ約 5 cm の褐色ローム層があり、上下に二分される。全体で約 70 cm の厚さを持つ暗褐色ローム層である。比較的長期にわたる降灰の休止期間を物語っている。

VIII層　黄褐色硬質ローム層、立川ローム最古の文化層となっている。厚さ約 30 cm で、武蔵野ローム上面に至る。

3．武蔵野ローム層（図8、9、図版5）

IX層　褐色硬質ローム層、粘性があり、高密度である。厚さ約 25 cm でスコリア、炭化物等を含む。

X層　淡褐色硬質ローム層、粘性があるものの、上下の層に比べ若干密度が低く、空隙の多いロームである。厚さ約 40 cm。

ＸＩ層　褐色硬質ローム層、粘性があり、密度が高い。厚さ約 50 cm。

ＸII層　褐色硬質ローム層、色調、粘性等については、VIII層とほぼ同一であるが硬度が高い。厚さ約 60 cm。

ＸIII層　黄橙色硬質ローム層、東京パミス（ＴＰ）を大量に含む層である。基質は、粘性の高い高密度な褐色ロームである。ＴＰは径 2～3 mm の細粒のパミスであり、表面は酸化しており赤味が強くブロック状に水平堆積している。厚さ約 30 cm。

ＸIV層　黄褐色硬質ローム層、粘性が強く炭化物、砂粒を大量に含む。厚さ約 25 cm。

4．下末吉ローム層（図8、9、図版5）

以下は下末吉ローム層に対比される。下末吉ローム層は水成層となっており、青灰色粘土層である。当地ではこの粘土層を常総層もしくは常総粘土層と呼んでいる。調査時には下末吉ローム層の上部を確認した。

ＸＶ層～ＸVII層　ＸＶ層は、黄褐色粘土層で、炭化物、若干のロームブロックを含む。下位にむかうにしたがって色調はより青味を帯び粘性が高く炭化物の量が多くなる。ＸVI層とＸVII層になると斑状の褐鉄鉱および高師小僧を含むようになる。

第2節　文　　化　　層

権現後遺跡では、6つの文化層に区分できる。

第1文化層（II層段階）ブロックは形成せず、遺物は単独出土である。

第2文化層（III層段階）第23ブロック

第3文化層（IV～V層段階）第9、12～18、20～22、27ブロック

第4文化層（VI層段階）第1～3、4・5、6、7・8、19ブロック

第5文化層（VIIa層段階）第24、25ブロック

第6文化層（VIIc層段階）第10、11ブロック

以上の文化層より、ナイフ形石器を主体として、尖頭器、石錐、削器、掻器、ピエス・エスキーユ、石斧、石核、剝片、砕片等が出土した。出土状態の全般的な傾向は、第1、2文化層の遺物は点在する傾向にあり、第3文化層は遺跡西部地区に広範に分布し、第4文化層はV－9－00を中心とした東部地区に偏在する。各文化層とも石器群は30 cm～50 cm程度のレベル差を持って出土しているが、隣接する武蔵野台地に比べ、立川ロームは2mと、およそ2分の1の厚さしかないため文化層の同定は困難であったためIV～VI層は主として従来の型式学的所見に依拠した。ブロックの石器群の堆積状況と現地表面の堆積状況には若干の異なる様相が認められる場合があった。例えば、第6ブロック、第11ブロックのように現在は平坦地であるにもかかわらず石器群が水平堆積ではなく傾斜堆積している場合があり、過去の地形堆積とのギャップがみられた。

第3章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

本遺跡では、台地の縁辺部に沿って24ブロック（石器集中地点）とその周辺より都合4,518点（うち礫片1点）の石器群を検出した（図10、図版4）。

自然層では、III層（ソフトローム）直上よりVII層に至るまで連綿と出土し、6つの文化層がとらえられ長期にわたる生活の痕跡が存在した。

多量に検出した資料の報告手順としては、母岩別資料、接合資料の検討にはじまり石器組成、石器技術に関連して個々のブロックについて報告するが、ブロック個々の解説に入る前にブロックの検討について基本的な考えを明らかにしておくことにする。

ブロックは、調査時には感覚的、視覚的な所見に基づき単なる石器群の集中か所としてとらえて進捗させる必要があるため、歴史的な資料性は見い出せない。したがって、発掘調査を進

める上での設定基準と言えよう。調査時において単なる石器群の集中か所であったブロックは母岩別資料、接合資料をはじめとするさまざまな分析の後に、ブロックの離合集散ができるわけで、その結果として有機的な類縁関係が強いブロック同志を抽出することができる。これをユニットと呼称することにしたい。ただし、本遺跡においては個別のブロックにとどまりブロック間の結びつきは希薄であり、ユニットの性格を具備するものはほとんどないため、ブロックとして暫定的に捉えておきたい。

第2節　第　1　文　化　層

1．第1文化層出土資料（図11、表2、3）

III層直上に生活面を持つ文化層である。遺物は単独出土であり、ブロックは形成しない。有舌尖頭器2点、柳葉形尖頭器1点があり、数量的には少ない。

出土遺物　1は柳葉形尖頭器である。表裏とも平坦な剝離面によって構成されている先端部を呈し、基部は欠損している。2、3は有舌尖頭器である。縁辺部は細かな鋸歯状を呈する。調整は平坦な交互剝離が用いられ断面形は凸レンズ状を呈し、ともに小瀬ヶ沢タイプと思われる。石材は2はチャート、1、3は安山岩である。

有舌尖頭器は芹沢の編年によれば隆線文系土器群を伴う時期にあたる[註1]。ここに提示した例はいずれも欠損し、単独出土である。

註

1　芹沢　長介「新潟県中村遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』2　昭和41年

表2　第1文化層出土石器組成表

器種＼石材	安山岩		チャート		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—
尖頭器	1	50	—	—	1	33
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	1	50	1	100	2	66
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—
刃こぼれある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	—	—	—	—	—	—
砕片	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	2	67	1	33	3	100

表3　第1文化層出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			重量 g	挿図番号	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚					
1	S−10−11−2	尖頭器	4.6	1.4	0.6	5.0	図11−1	無	無	安山岩
2	S−10−11−1	有舌尖頭器	4.5	1.3	0.4	2.3	図11−2	有	無	安山岩
3	U−4−63−1	有舌尖頭器	7.6	1.6	0.5	10.9	図11−3	有	無	チャート

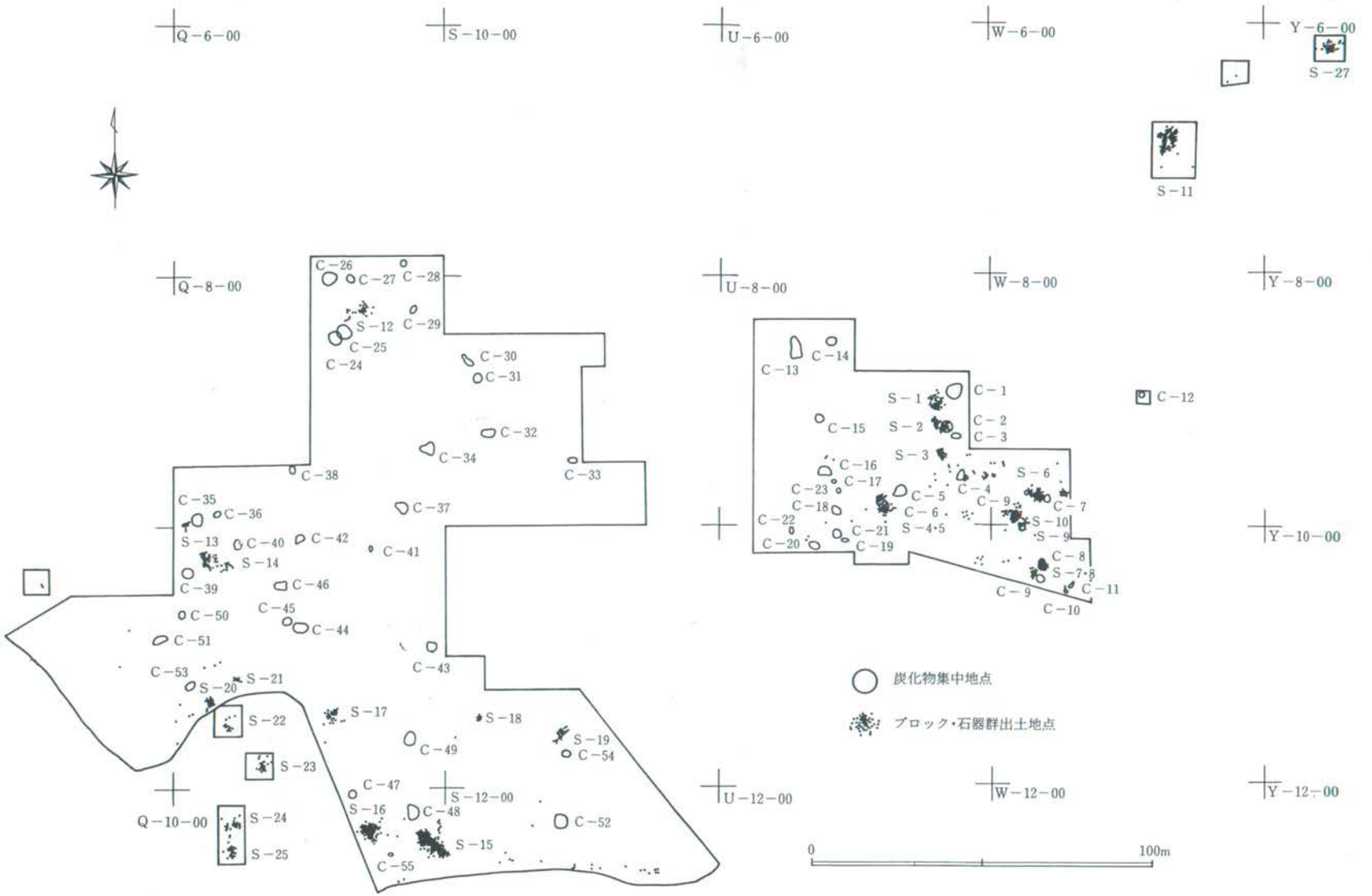

Q－6－00
S－10－00
U－6－00
W－6－00
Y－6－00
S－27
S－11
Q－8－00
U－8－00
W－8－00
Y－8－00
C－26
C－27
C－28
S－12
C－29
C－25
C－24
C－30
C－31
C－32
C－34
C－33
C－38
C－35
C－36
C－37
S－13
C－40
C－42
C－41
S－14
C－39
C－46
C－45
C－50
C－44
C－51
C－43
C－53
S－21
S－20
S－22
S－17
S－18
S－19
C－54
C－49
S－23
C－47
S－12－00
S－16
C－48
C－52
Q－10－00
S－24
S－25
S－15
C－55
U－12－00
W－12－00
Y－12－00
C－14
C－13
C－1
C－12
S－1
C－15
S－2
C－2
C－3
S－3
C－16
S－6
C－17
C－23
C－5
C－4
C－9
C－7
C－18
C－6
S－10
C－22
S－4･5
S－9
C－21
C－20
C－19
C－8
S－7･8
C－11
C－9
C－10
Y－10－00
炭化物集中地点
ブロック・石器群出土地点
0
100m

図10 ブロック配置図

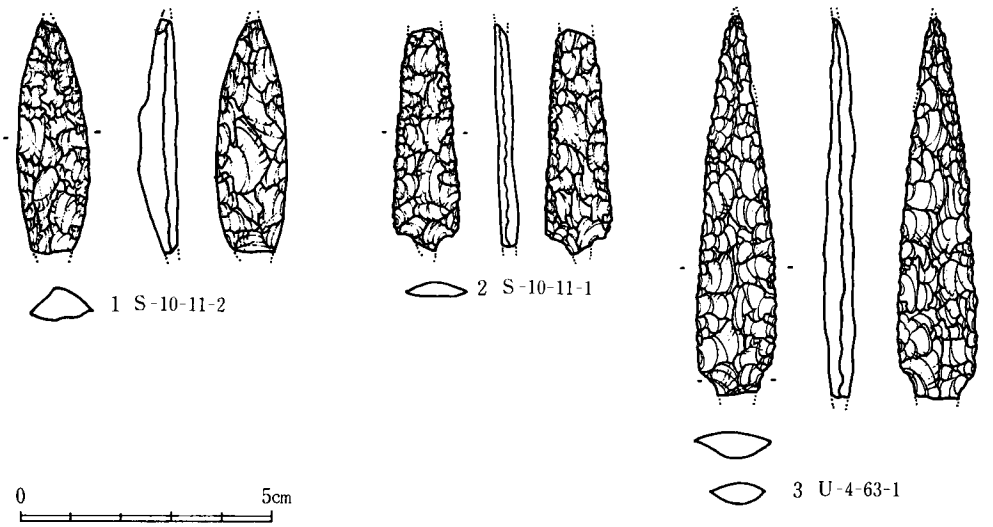


図11 第1文化層出土遺物実測図

第3節 第 2 文 化 層

1．第23ブロック（図12、13、図版6－1、2、表4～6）

出土状況 ソフトローム上部からV層上部に石器群が分布する。ソフトロームに密であり、最大レベル差 60 cm、最も濃密な部分は約 30 cm の幅を有する。この地区はソフトローム直下の層がV層であり、全体の形状は円形を呈し、中央部に密集し細かな砕片が分布し周囲に剝片、ナイフ形石器、敲石等の利器が分布する。平面形は5.20m×4.40m程度の大きさである。

出土遺物 総計81点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、敲石1点、剝片7点、砕片71点となっている。1、2はナイフ形石器で、それぞれ1側辺加工、2側辺加工となっており、小形である。いずれも横長剝片を素材としている。3は敲石である。熱をうけ表裏が赤化し表裏とも部分的に剝落している。

技術的特徴 石器群の原石は珪質頁岩の円礫である。石核は存在しないので具体的な剝片生産技術を復元することは困難であるが、ナイフ形石器の他、剝離面の観察によると平坦な打面により横長剝片を一方向に連続的に

表4 第23ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	2	2.5	2	2.5
尖頭器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	—	—	7	8.8	7	8.6
砕片	—	—	71	88.8	71	87.7
石核	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—
敲石	1	100	—	—	1	1.2
計	1	1.2	80	98.8	81	100

加撃することによって生産している。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、加工具と考えられる敲石以外の母岩は1種類に限られ、作業行為は一回性のものと推定される。接合資料はない。

まとめ　遺跡内では少なくとも完結したブロックとして認定し得る。搬出された石核は、ブロック外においても出土していない。全体に出土数量が少ないため特徴を捉えにくいが、剥片生産と石器調整を反映したブロックと言えよう。

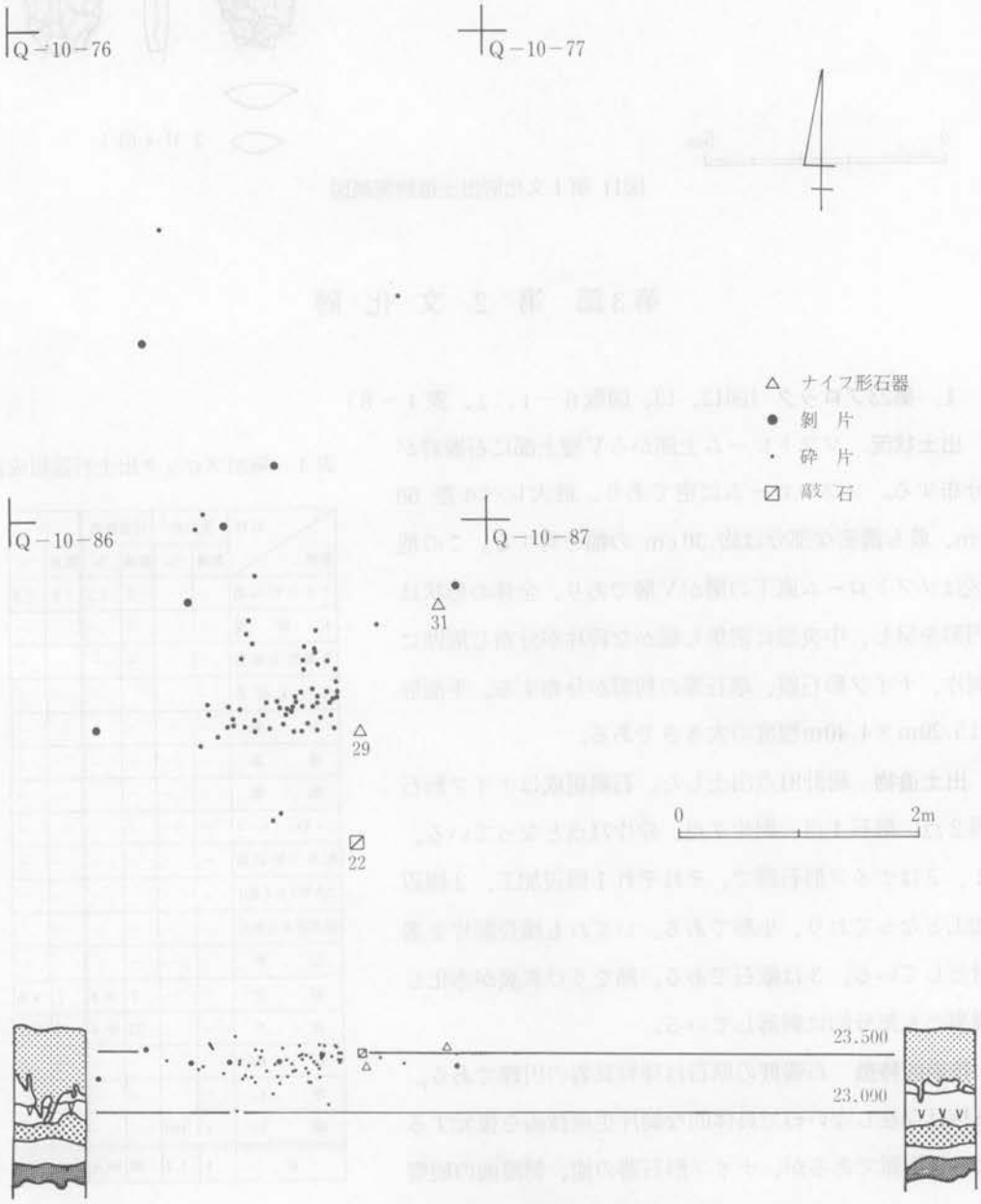


図12 第23ブロック遺物出土状況図

表５　第23ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
安山岩１	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
珪質頁岩１	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	71	—	—	80
計	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	71	—	1	81

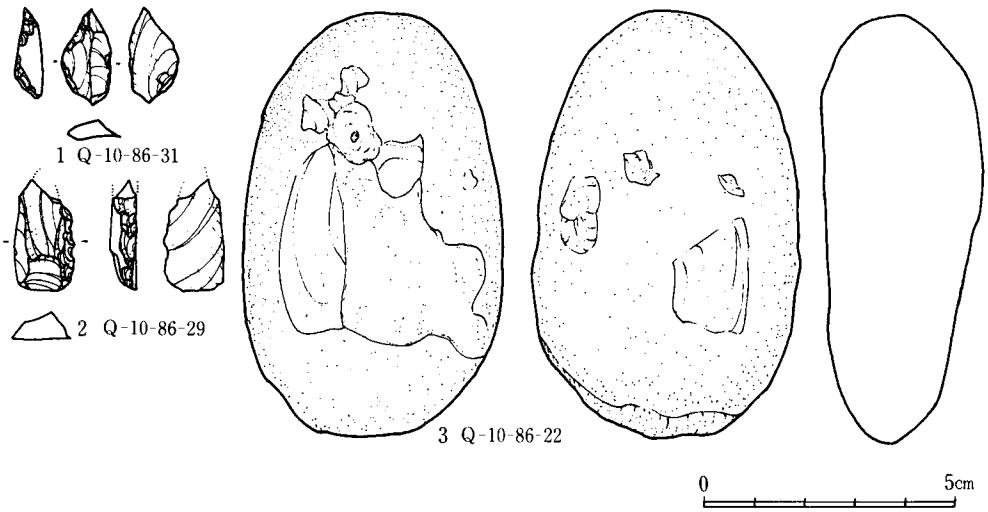


図13 第23ブロック出土遺物実測図

表６　第23ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q－10－86－29	ナイフ形石器	2.2	1.2	0.5	55°	1.4	図13－2	1側辺	有	無	珪質頁岩
2	Q－10－86－31	ナイフ形石器	1.2	1.8	0.4	45°	0.6	図13－1	2側辺	無	有	珪質岩石
3	Q－10－86－22	敲石	8.3	5.3	3.1	—	191.9	図13－3	——	無	有	安山岩

２．第２文化層ブロック外出土資料（図14、表７、８）

総計29点出土している。石器組成はナイフ形石器１点、東内野形尖頭器２点、掻器１点、２次加工ある剥片４点、使用痕ある剥片１点、剥片７点、砕片１点となっている。

出土遺物　１～２は東内野形尖頭器である。両面加工の木葉状尖頭器に斜めにフルーティング（樋状剥離）をほどこしている。断面は凸レンズ状を呈する。３～５は２次加工ある剥片である。３は主要剥離面側に連続的な２次加工があり、５は横長剥片を素材として、１側辺に２

次加工がみられる。4はナイフ形石器である。横長剝片を素材として2側辺加工、先端部の一部に若干欠損した刃部がみられる。

表7　第2文化層ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		砂岩		玉髄		粘板岩		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	14.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5.9
尖頭器	1	14.2	1	33									—	—	2	11.7
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—											—	—		
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	100	—	—	1	5.9
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	14.2	2	66	1	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—	4	23.5
使用痕ある剝片	1	14.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5.9
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	3	42.8	—	—	1	50.0	1	100	2	66.7	—	—	—	—	7	41.2
砕片	—	—	—	—	—	—	—	—	1	33.3	—	—	—	—	1	5.9
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	7	41.2	3	13.3	2	13.3	1	6.7	3	20.0	1	6.7	0	0	17	100
礫片	—	—	3	25.0	—	—	5	40.7	—	—	—	—	4	23.3	12	—

表8　第2文化層ブロック外出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	X－6－48－1	ナイフ形石器	3.1	1.8	0.6	20°	3.3	図14－4	—	有	無	黒曜石
2	S－11－54－4	掻器	4.6	3.9	1.4	45°	33.5	——	—	無	無	粘板岩
3	Q－10－40－1	使用痕ある剝片	2.1	1.7	0.4	—	1.2	——	—	無	無	黒曜石
4	Q－10－40－1	二次加工ある剝片	2.3	1.3	0.8	—	1.8	——	—	無	無	黒曜石
5	S－11－26－1	二次加工ある剝片	3.7	4.3	0.9	—	12.1	図14－5	—	無	無	頁岩
6	U－9－56－1	石核	4.3	3.6	2.2	—	35.0	——	—	無	無	玉髄
7	表面採集	東内野型尖頭器	4.9	2.5	0.7	—	7.9	図14－2	—	有	無	黒曜石
8	D－726.59	東内野型尖頭器	4.9	1.9	0.6	—	5.3	図14－1	—	有	無	頁岩
9	X－6－47－1	二次加工ある剝片	1.5	1.3	0.8	—	2.1	図14－3	—	有	無	珪質頁岩

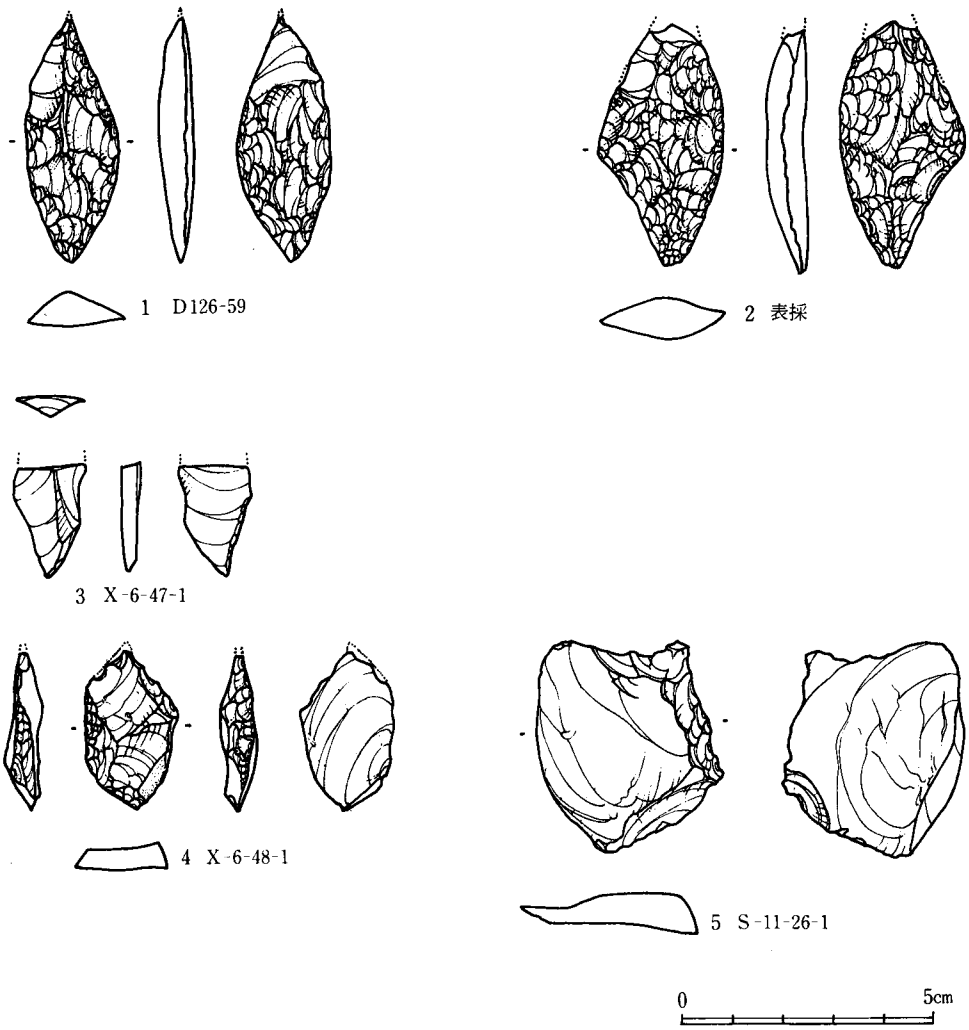


図14 第2文化層ブロック外出土遺物実測図

第4節 第 3 文 化 層

1．第9ブロック（図15、16、図版10－2、表9～11）

出土状況 第10ブロックの西側に隣接するブロックであり、一部は互いに重複して出土している。石器群はⅦa層より出土しており第10ブロックがⅦc層より出土しているのに対して明瞭に区分される。平面分布は散漫な分布状況を示しており、大きさは長径約5m、短径3mほどである。

出土遺物 総計10点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、削器1点、剝片3点、砕片4点となっている。1～2はナイフ形石器である。いずれも縦長剝片を素材としており2側辺加工である。1については周辺部には明瞭な刃こぼれがみられる。3は削器である。ぶ厚い剝片

を素材として2側辺より急角度な2次加工がほどこされている。

技術的特徴　剥片生産技術を復元しうるほどの出土量はない。ナイフ形石器は縦長剥片を素材として急角度な刃つぶし加工がなされているものが見られる。

母岩別資料・接合資料とブロック　4つの母岩が識別できた。内、利器は黒曜石1、頁岩1、砂岩1で各1点ずつみられ、いずれも単独の母岩となっている。剥片、砕片は頁岩に集中している。母岩別資料接合資料では他のブロックとの類縁関係はみとめられない。

まとめ　断片的な資料であり、ブロックの内容的評価はできない。

表9　第9ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	12.5	1	100	2	20
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	1	100	—	—	—	—	1	10
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	—	—	3	37.5	—	—	3	30
砕片	—	—	4	50.0	—	—	4	40
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1	10.0	8	80.0	1	10.0	10	100

表10　第9ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	4	—	—	7
砂岩1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
計	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3	4	—	—	10

表11　第9ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	W—9—82—1	削器	3.4	2.4	1.0	—	7.1	図16—3	1側辺	有	無	黒曜石
2	W—9—91—11	ナイフ形石器	2.6	1.4	0.4	25°	1.0	図16—1	不明	有	有	珪質頁岩
3	W—9—91—23	ナイフ形石器	3.2	1.1	0.5	35°	1.5	図16—2	2側辺	無	無	砂岩

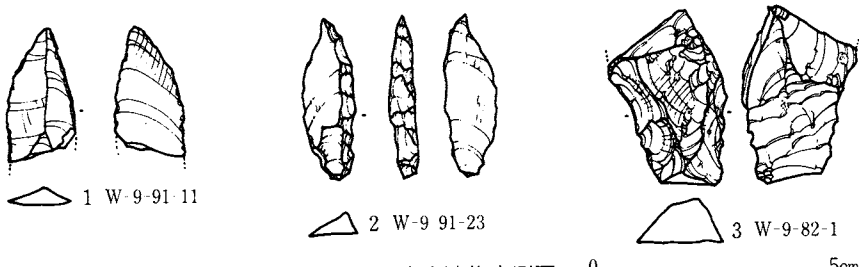


図15 第9ブロック出土遺物実測図

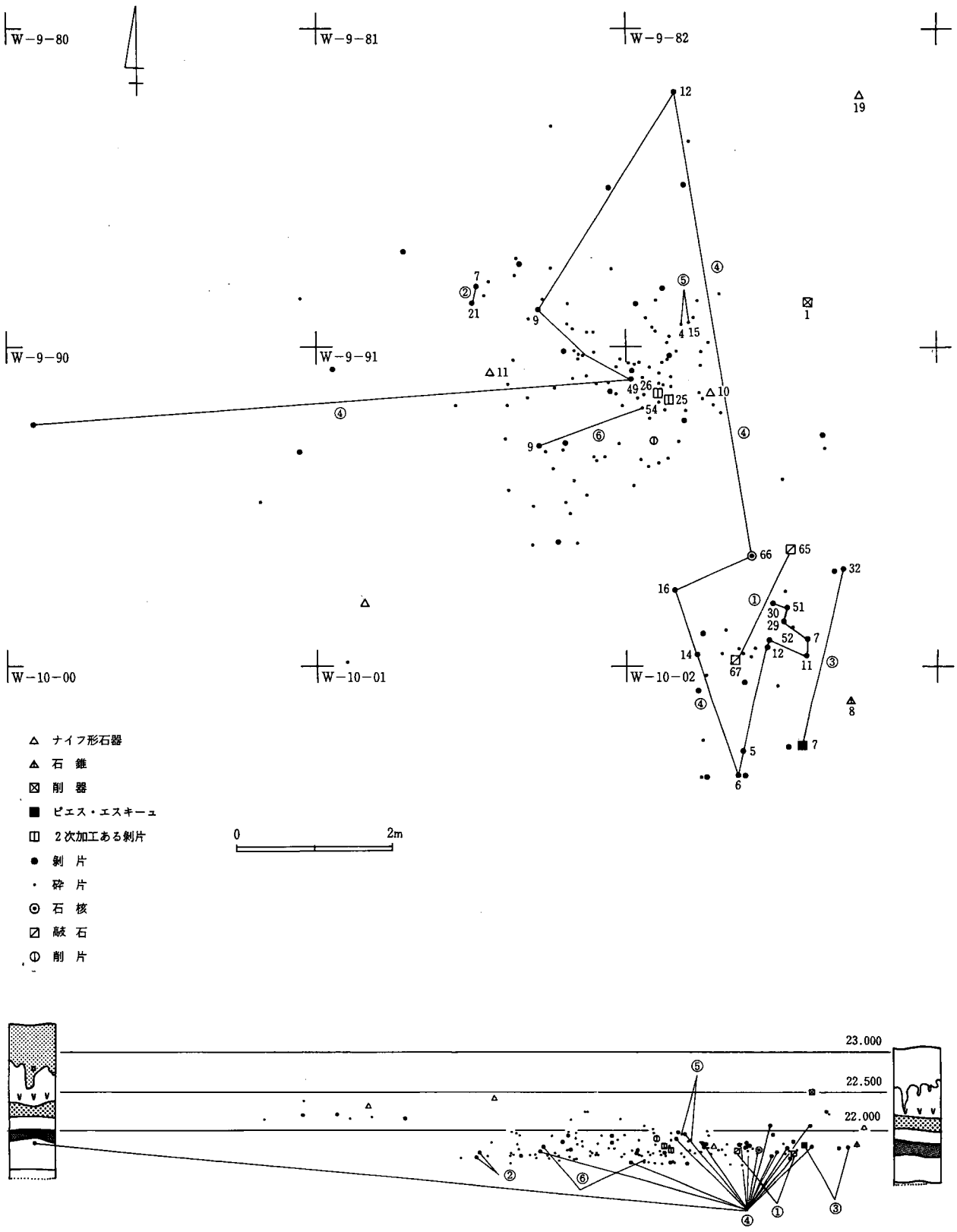


図16 第9・10ブロック遺物出土状況図

2．第12ブロック（図17～19、図版6－3、表12～15）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上部にわたる。特にハードローム上部より遺物が多量に出土している。最大レベル差70cm、密集部分では約30cmを測る。平面形は東西に長く、長径約10m、短径約4mと細長く広範囲に分布している。利器と剥片、砕片が一か所に共存し、それぞれの分布域に違いはみいだせない。

出土遺物　総計37点出土した。石器組成は尖頭器1点、ナイフ形石器2点、削器6点、（接合資料に勘定すると2点）石錐1点、掻器1点、2次加工ある剥片3点、使用痕ある剥片2点、剥片7点、砕片13点、石核1点となっている。この内、利器が15点（全体の42.9%）となっており、これは他のブロックに比較して非常に高い率である。1、2はナイフ形石器である。1は断片的な資料であり尖頭器の可能性も否めない。2は切り出し形のナイフである。3、4は使用痕のある剥片、5は平坦な竪縞剥離のほどこされた掻器の1部である。6は2次加工のある剥片で、主要剥離面側に2次加工が観察される。7は片面加工の石錐であり、先端部の断面形はD字形を呈し、左方向へやや彎曲している。8は尖頭器で、平坦な打面を有する幅広な剥片を素材として背面側に急角度は周辺加工が認められ、さらに主要剥離面側に平坦な調整が見られる。9は石核と剥片の接合資料である。ぶ厚い横長剥片を素材として主要剥離面側に数面の細かな剥離面が、背面側に平坦な打面より長軸方向に剥離面が観察される。主要剥離面側の剥離面からみると削器の可能性も否めない。10、11は削器、12は2次加工ある剥片の接合資料である。共に横長剥片を素材としており周辺加工で、再加工が行われたことを窺わせる資料である。

表12　第12ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	黒曜石 数量	黒曜石 %	安山岩 数量	安山岩 %	チャート 数量	チャート %	玉髄 数量	玉髄 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	1	2.9	1	100	—	—	—	—	2	5.4
尖頭器	1	2.9	—	—	—	—	—	—	1	2.7
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	1	2.9	—	—	—	—	—	—	1	2.7
掻器	1	2.9	—	—	—	—	—	—	1	2.7
削器	(4)(2)	17.7	—	—	—	—	—	—	6	16.2
ヒエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	3	8.8	—	—	—	—	—	—	3	8.1
使用痕ある剥片	1	2.9	—	—	1	100	—	—	2	5.4
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	7	20.7	—	—	—	—	—	—	7	18.9
砕片	12	35.4	—	—	—	—	1	100	13	35.2
石核	1	2.9	—	—	—	—	—	—	1	2.7
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	34	91.9	1	2.7	1	2.7	1	2.7	37	100

技術的特徴　原石は黒曜石のみ識別可能である。角礫であるが大きさは不明である。剥片生産技術の実態を充分に窺わせる資料はない。かわって石器調整技術にみるべきものがあり、第3次加工と言うべき再加工がほどこされているものがみられる（図18－10、19－11、12）。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材としては黒曜石32点を主体として、その他安山岩1点、玉髄1点、チャート1点が存在する。黒曜石の母岩別資料は5種類、計22点識別できたが、接合資料はすべて黒曜

石である。内、１例は剝片生産技術、他４例は石器調整を反映した接合資料である。２、４は削器の調整に関係する資料であり、接合資料２は一部折断の後、刃部形成している。接合資料４は刃部再生の好例である。接合の範囲は広範囲にわたり直線距離にして接合資料３は8.30m、接合資料４は9.0mとなっており全体として南西から北東へ接合関係を持つ傾向にある。

まとめ　接合資料、石器組成等を検討すると本ブロックは石器調整段階を強く反映したブロックであることが知られる。この時期の石器組成をほぼ網羅している。

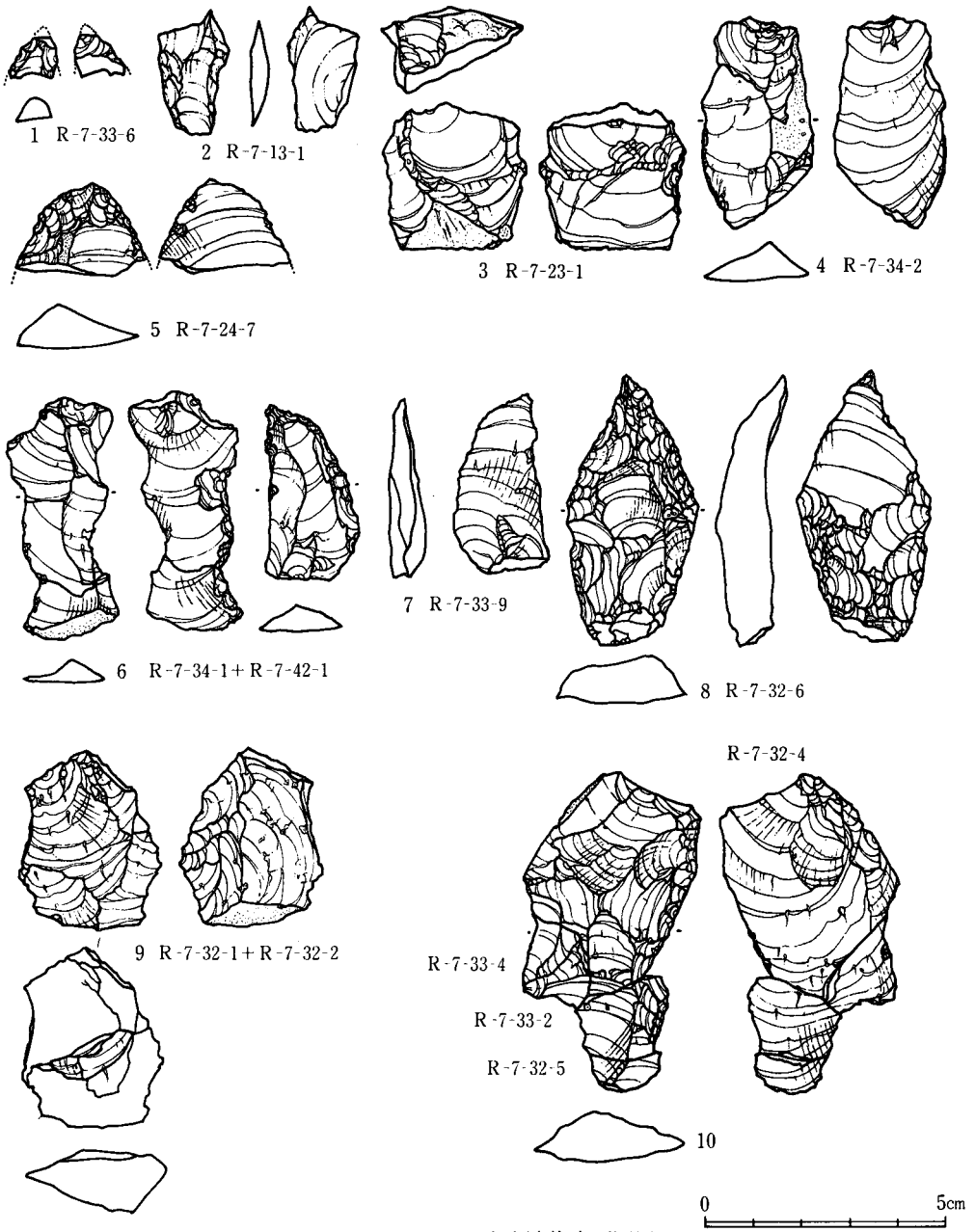


図17 第12ブロック出土遺物実測図(1)

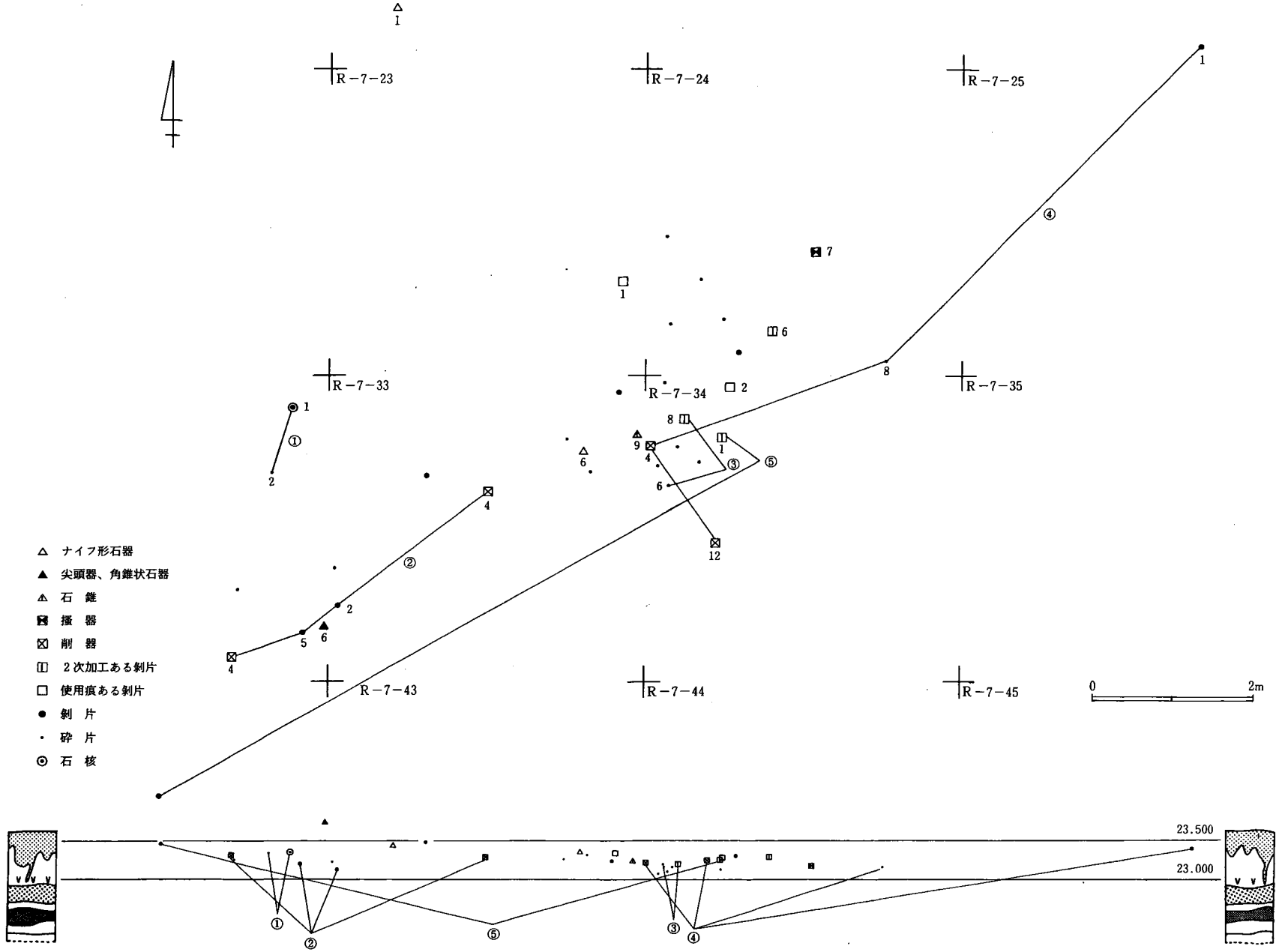


図18 第12ブロック遺物出土状況図

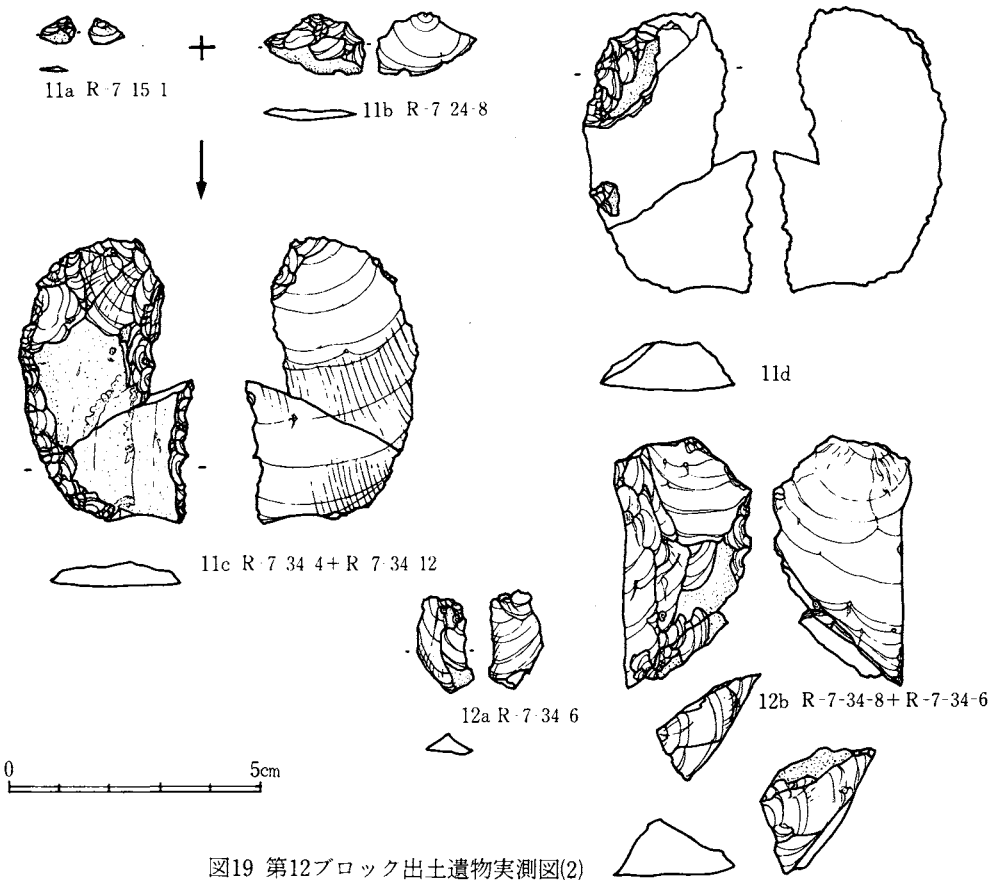


図19 第12ブロック出土遺物実測図(2)

表13 第12ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	2
〃 2	—	—	—	—	—	1	(4) 1	—	—	1	1	—	—	2	—	—	10
〃 3	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2
〃 4	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	2	—	—	5
〃 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	3
安山岩 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
玉髄 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
計	1	—	—	—	1	1	8	—	—	2	2	—	1	8	1	—	25

表14 第12ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石 1	剥片（先端部） 石核	（R－7－32－2）（剥片）→（R－7－32－1）（石核）	2
2	2	黒曜石 2	削器（破片 1） 折断剥片｛先端部、中間部各 1｝	｛（R－7－32－5）＋（R－7－33－2）｝＋｛（R－7－32－4）（削器）＋（R－7－33－4）（破片）｝	4

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
3	3	黒曜石 3	二次加工ある剝片 1 加工片 1	(R－7－34－6)→(R－7－34－8)（二次加工ある剝片）	2
4	4	黒曜石 4	削器（尖頭器？） 2 砕片 2	(R－7－34－12)（削器)→(R－7－34－4)（削器） →(R－7－24－8)→(R－7－15－1)	4
5	5	黒曜石 5	二次加工ある剝片 (基部＋先端部)	(R－7－34－1)＋(R－7－42－1)	2

表15　第12ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R－7－13－1	ナイフ形石器	2.6	1.5	0.5	40°	1.6	図18－2	1側辺	無	無	安山岩
2	R－7－33－6	ナイフ形石器	1.0	0.9	0.5	—	0.3	図18－1	2側辺	有	無	黒曜石
3	R－7－24－7	掻器	1.8	2.7	0.9	—	2.9	図18－5	—	有	無	黒曜石
4	R－7－32－4 R－7－33－4 R－7－33－2 R－7－32－5	削器	6.0	4.4	1.1	—	3.5	図18－10	1側辺	有	無	黒曜石
5	R－7－34－4 R－7－34－12	削器	7.4	3.1	1.1	—	16.0	図19－11	1側辺	有	無	黒曜石
6	R－7－32－6	尖頭器	5.5	2.8	1.1	—	13.8	図18－8	全周	無	無	黒曜石
7	R－7－33－9	石錐	3.7	2.2	0.7	—	3.9	図18－7	先端部周辺	無	無	黒曜石
8	R－7－34－2	使用痕ある剝片	4.3	2.4	0.9	—	5.9	図18－4	—	無	有	黒曜石
9	R－7－24－6	二次加工ある剝片	1.9	0.5	0.4	—	0.2	——	1側辺	有	無	黒曜石
10	R－7－34－1	二次加工ある剝片	3.7	2.1	0.6	—	3.4	図18－6	1側辺	有	有	黒曜石
11	R－7－34－8	二次加工ある剝片	4.5	3.5	1.4	—	15.0	図19－12	1側辺	無	無	黒曜石
12	R－7－32－1	石核	3.6	2.9	1.3	—	11.4	図18－9	—	無	無	黒曜石
14	R－7－23－1	使用痕ある剝片	2.8	3.0	1.7	—	11.9	図18－3	—	無	有	チャート

3．第13ブロック（図20、21、図版27－1、11、表16～19）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上部までのレベル差30cmに集中して分布している。平面分布は小さくまとまり、長径3.0m、短径2.0mにわたる。利器と剝片、砕片の分布に大きな違いはみいだせない。

出土遺物　総計26点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、尖頭器1点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工ある剝片4点、剝片14点、砕片5点となっている。全体の数量が少く充分な器種構成を示していない。1は横長剝片を素材として、1側辺に急角度な調整がみられる尖頭器で、2は横長剝片を素材として、2側辺に急角度なブランテングがほどこされたナイフ形石器である。3は削器と思われる。右側辺に2次加工がほどこされている。

技術的特徴　石材としては、安山岩、珪質頁岩が見られるが原石の形状が判明したのは、珪

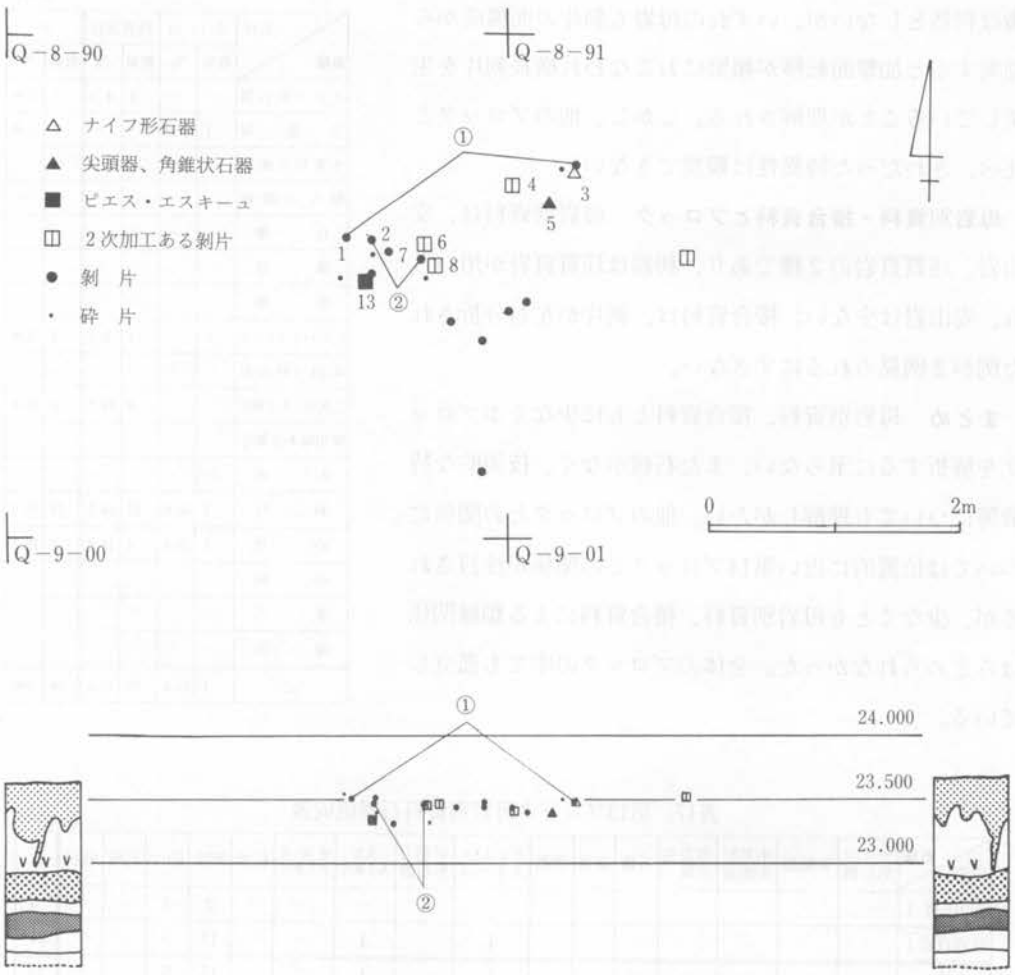


図20 第13ブロック遺物出土状況図

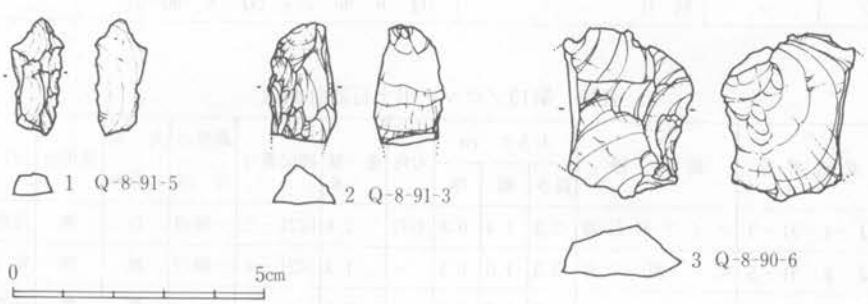


図21 第13ブロック出土遺物実測図

質頁岩であり、円礫、安山岩は不明である。剝片生産技術は判然としないが、いずれの母岩も剝片の面構成から勘案すると加撃面転移が頻繁におこなわれ横長剝片を生産していることが理解される。しかし、他のブロックと比べ、きわだった特異性は観察できない。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、安山岩、珪質頁岩の2種であり、利器は珪質頁岩が用いられ、安山岩は少ない。接合資料は、剝片が左右分折された例が2例見られるにすぎない。

まとめ　母岩別資料、接合資料ともに少なく本ブロックを解析するに至らない。また石核がなく、技術的な特徴等についても理解しがたい。他のブロックとの関係については位置的に近い第14ブロックとの関係が注目されるが、少なくとも母岩別資料、接合資料による類縁関係はみとめられなかった。全体のブロックの中でも孤立している。

表16　第13ブロック出土石器組成表

器種＼石材	安山岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	4.5	1	3.8
尖頭器	1	25.0	—	—	1	3.8
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	1	4.5	1	3.8
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	4	18.2	4	15.4
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	2	50.0	12	54.5	14	53.9
砕片	1	25.0	4	18.2	5	19.3
石核	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	4	15.4	22	84.6	26	100

表17　第13ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	4
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	4	—	—	13	3	—	—	21
計	—	—	—	—	—	—	—	1	—	4	—	—	15	5	—	—	25

表18　第13ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	珪質頁岩1	剝片 (左右分断)	(Q－8－90－1)＋(Q－8－91－1)	2
2	2	〃	剝片	(Q－8－90－7)＋(Q－8－90－2)	2

表19　第13ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	Q－8－91－3	ナイフ形石器	2.3	1.4	0.8	不明	2.8	図21－2	一側辺	有	無	珪質頁岩
2	Q－8－91－5	尖頭器	2.3	1.0	0.5	—	1.3	図21－1	一側辺	無	無	安山岩
3	Q－8－90－13	ピエス・エスキーユ	1.3	0.7	0.7	—	0.6	——	—	無	無	珪質頁岩
4	Q－8－90－6	二次加工ある剝片	2.5	3.3	1.0	—	8.2	図21－3	一側辺	有	無	珪質頁岩

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
5	Q－8－90－8	二次加工ある剝片	1.7	2.1	0.4	—	1.1	——	一側辺	無	無	珪質頁岩
6	Q－8－91－4	二次加工ある剝片	2.5	1.2	0.5	—	1.5	——	一側辺	無	無	珪質頁岩
7	Q－8－91－8	二次加工ある剝片	1.5	2.3	0.4	—	1.2	——	一側辺	有	無	珪質頁岩

4．第14ブロック（図22～24、図版7－2、11、表20～23）

出土状況　ソフトローム上部からハードローム上半部に分布しており最大レベル差約60cm、密集した部分で約25cmとなっている。隣接する第13ブロックに比べ、レベル的にはやや深い。平面分布は長径8.60m、短径6.00mとなっており、細かに見ると東西の2つのまとまりに区分される。西半部の大きなまとまりでは石核とともに剝片、砕片の多量のまとまりが見られる。一方、東半部の小さなまとまりには相対的に利器が多くみられる。

出土遺物　石器組成は非常にヴァラエティーに富み、石錐を除いてこの時期のほぼすべての器種が網羅されている。総計295点出土した。石器組成はナイフ形石器5点、尖頭器4点、彫刻刀形石器1点、削器2点、掻器1点、ピエス・エスキーユ2点、2次加工のある剝片2点、使用痕ある剝片1点、敲石1点、剝片43点、砕片230点、石核3点からなる。1～3はナイフ形石器である。1、2は切り出し形、3は截頂石刃となっている。いずれも急角度な刃つぶし加工がほどこされている。4、5は周辺加工の尖頭器であるが尖頭状削器の可能性もある。6、7は削器である。7については掻器の可能性もあるが断片的な資料であり明確ではない。8はいわゆる円盤状石核で、安山岩の円礫を原材として片面を求心的に剝離している。9は敲石で、両端が尖りぎみの円礫を用いており下端部に敲打痕がみられる。10は剝片と石核との接合資料である。黒曜石の角礫より不定形の剝片を生産している。

表20　第14ブロック石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		花崗岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	(2)1	1.1	(2)	12.5	—	—	—	—	5	1.7
尖頭器	(2)	0.7	(2)	12.5	—	—	—	—	4	1.4
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	1	0.4	—	—	—	—	—	—	1	0.3
削器	2	0.7	—	—	—	—	—	—	2	0.7
ピエス・エスキーユ	2	0.7	—	—	—	—	—	—	2	0.7
彫刻刀形石器	1	0.4	—	—	—	—	—	—	1	0.3
二次加工ある剝片	2	0.7	—	—	—	—	—	—	2	0.7
使用痕ある剝片	1	0.4	—	—	—	—	—	—	1	0.3
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	41	14.8	1	6.3	1	100	—	—	43	14.6
砕片	220	79.4	10	62.5	—	—	—	—	230	78.0
石核	2	0.7	1	6.3	—	—	—	—	3	1.0
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	1	100	1	0.3
計	277	93.9	16	5.4	1	0.3	1	0.3	295	100

技術的特徴　石材としては黒曜石の角礫、安山岩の円礫が用いられており、前者は接合資料5に代表されるように打面調整を行いつつ周辺部を加撃し、不定形剝片を生産している。これ

によって得られた剝片は、いずれも先端部が主要剝離面側に彎曲し幅広な形態を有する。後者は自然面の打面より求心的に生産され横長に近い剝片を生産している。3、5は安山岩製石器である。3は平坦な打面の縦長剝片を素材としており本ブロックの主要な剝片生産基盤とは無関係である。石器調整技術ではナイフ形石器、尖頭器に調整の角度と剝離面の大きさなどを主なる特徴として、互いに共通性が窺われる。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材としては黒曜石、安山岩、頁岩、花崗岩などがある。この中で黒曜石が圧倒的な数量を保有するが、母岩別資料の識別が困難であり、充分な検討は出来ない。ただし石材のレベルではすべて器種が出揃っている。接合資料は13例みられる。利器同志の接合資料（接合資料1～4）剝片と石核との接合資料（接合資料5）などが注目される。

まとめ　本ブロックは黒曜石を主要な石材としていること、石器組成が多岐にわたること、石器の欠損品が多いことが指摘できる。このような状況は第12ブロックとの近似性が指摘しうる。しかしながら、主要な母岩別資料が識別しにくい黒曜石であるためただちに同時性を確定することはできなかった。

表21　第14ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	—	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	1	—	8
黒曜石2	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
安山岩1	(2)	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	1	—	13
安山岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
花崗岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	13	2	1	26

表22　第14ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	安山岩1	ナイフ形石器 (基部＋先端部)	(Q－9－12－12)＋(Q－9－12－14)	2
2	2	安山岩1	尖頭器（基部＋先端部) 加工片	(Q－9－23－11)＋(Q－9－23－15) ←(S－9－22－126)（加工片）	3
3	3	黒曜石1	尖頭器 (先端部＋基部)	(Q－9－23－2)＋(Q－9－13－1)	2
4	4	黒曜石2	ナイフ形石器 (先端部＋基部)	(Q－9－24－1)＋(Q－9－23－18)	2
5	5	黒曜石3	剝片2 石核（2分割）	(Q-9-22-33) (Q-9-22-104)　→(Q-9-32-1)(石核)＋(Q-9-22-80)(石核)	4
6	6	黒曜石3	剝片（剝片＋断片）	(Q－9－12－9)＋(Q－9－12－10)（断片）	2

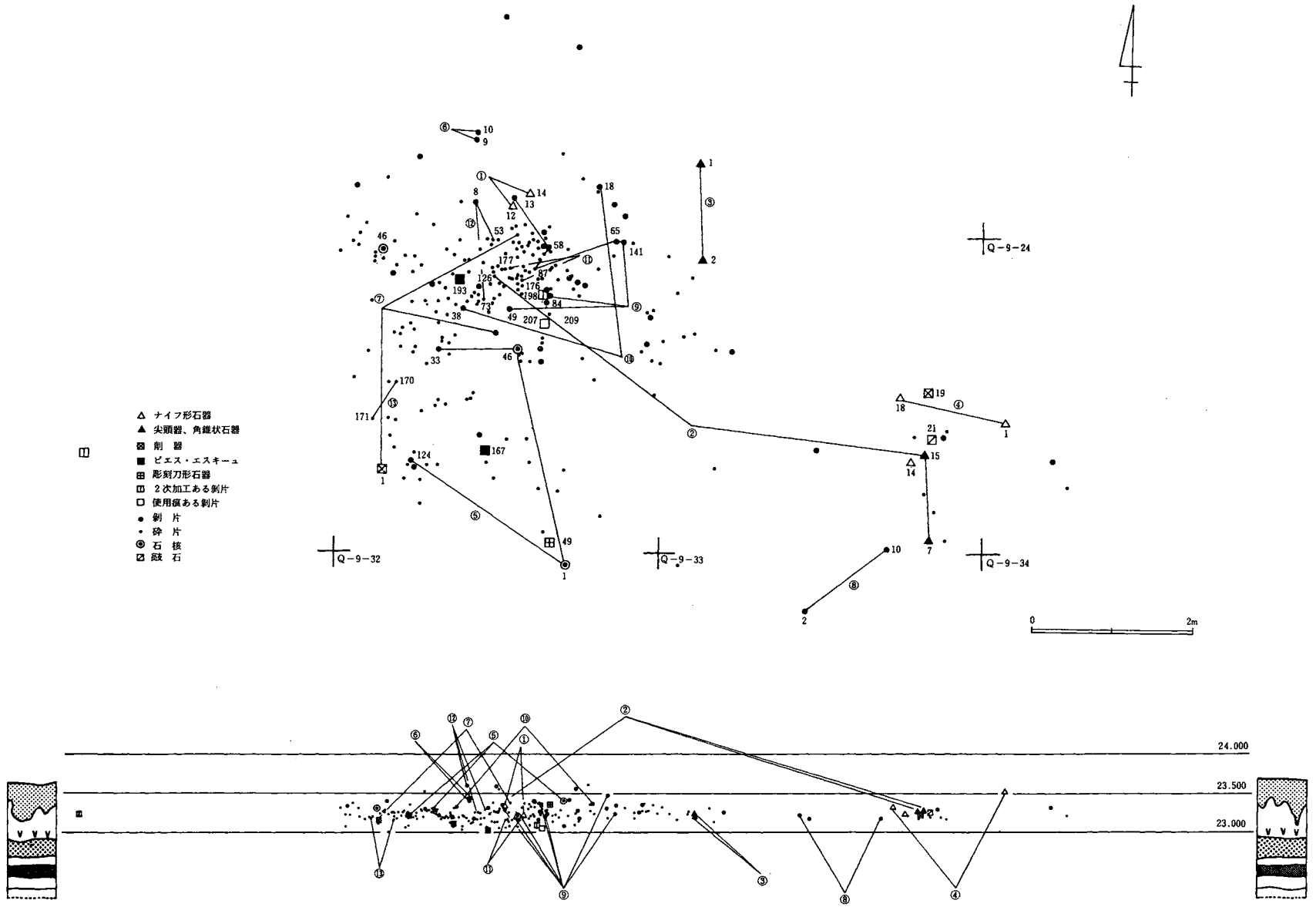


図22 第14ブロック遺物出土状況図

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
7	7	黒曜石 3	削器1、破片1、加工片	(Q-9-12-11)(加工片)→{Q-9-22-48 / Q-9-22-1(削器)}(Q-9-12-11)を剥離と同時に分断	3
8	8	黒曜石 3	剥片（先端部、基部）	(Q－9－23－10)＋(Q－9－33－2)	2
9	9	黒曜石 3	剥片7	(Q-9-22-49)(Q-9-22-84)(Q-9-22-58)(Q-9-22-65)(Q-9-22-141)(Q-9-12-13)	7
10	10	黒曜石 3	剥片（左右分断）	(Q－9－12－18)＋(Q－9－22－38)	2
11	11	黒曜石 3	砕片2	(Q－9－22－176) → (Q－9－22－177)	
12	12	黒曜石 3	剥片(二次加工ある) 加工片(基部、先端部)	(Q-9-22-75)(基部)＋(Q-9-22-53)(先端部)→(Q-9-12-8)(二次加工ある剥片)	3
13	13	黒曜石 3	剥片（基部＋先端部）	(Q－9－22－170)＋(Q－9－22－171)	2

表23　第14ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q－9－12－12 Q－9－12－14	ナイフ形石器	6.1	2.8	0.9	30°	14.8	図23－3	先端部折断	有	無	安山岩
2	Q－9－23－14	ナイフ形石器	1.6	1.3	0.8	50°	0.7	図23－1	不明	有	無	黒曜石
3	Q－9－23－18 Q－9－24－1	ナイフ形石器	4.7	2.2	1.0	45°	7.0	図23－2	2側辺加工	有	無	黒曜石
4	Q－9－22－1	削器	2.2	3.5	1.2	60°	7.1	図23－6	—	有	無	黒曜石
5	Q－9－23－19	削器	2.4	2.8	0.5	30°	3.0	図23－7	—	有	無	黒曜石
6	Q－9－13－1 Q－9－23－2	尖頭器	6.4	3.2	0.9	—	16.0	図23－4	—	有	無	黒曜石
7	Q－9－23－11 Q－9－23－15	尖頭器	7.5	2.5	1.1	—	18.3	図23－5	—	有	無	安山岩
8	Q－9－22－99	彫刻刀形石器	3.1	1.1	0.8	—	2.5	——	—	無	無	黒曜石
9	Q－9－23－21	敲石	9.1	4.3	4.1	—	198.4	図24－9	—	無	無	花崗岩？
10	Q－9－22－167	ピエス・エスキーユ	5.2	2.3	1.7	—	19.5	——	—	無	無	黒曜石
11	Q－9－22－193	ピエス・エスキーユ	1.2	2.5	0.4	—	0.8	——	—	有	無	黒曜石
12	Q－9－22－209	使用痕ある剥片	0.8	1.0	0.5	—	0.2	——	—	有	有	黒曜石
13	Q－9－22－198	二次加工ある剥片	0.9	1.6	0.7	—	0.3	——	—	有	有	黒曜石
14	Q－9－21－1	二次加工ある剥片	2.2	1.8	0.5	—	1.9	——	—	有	有	黒曜石
15	Q－9－22－46	石核	4.9	4.8	2.1	—	56.5	図23－8	—	無	有	安山岩
16	Q－9－22－80	石核	2.3	1.7	2.1	—	9.5	図24－10	—	有	有	黒曜石
17	Q－9－32－1	石核	4.0	2.9	2.2	—	19.6	——	—	有	有	黒曜石

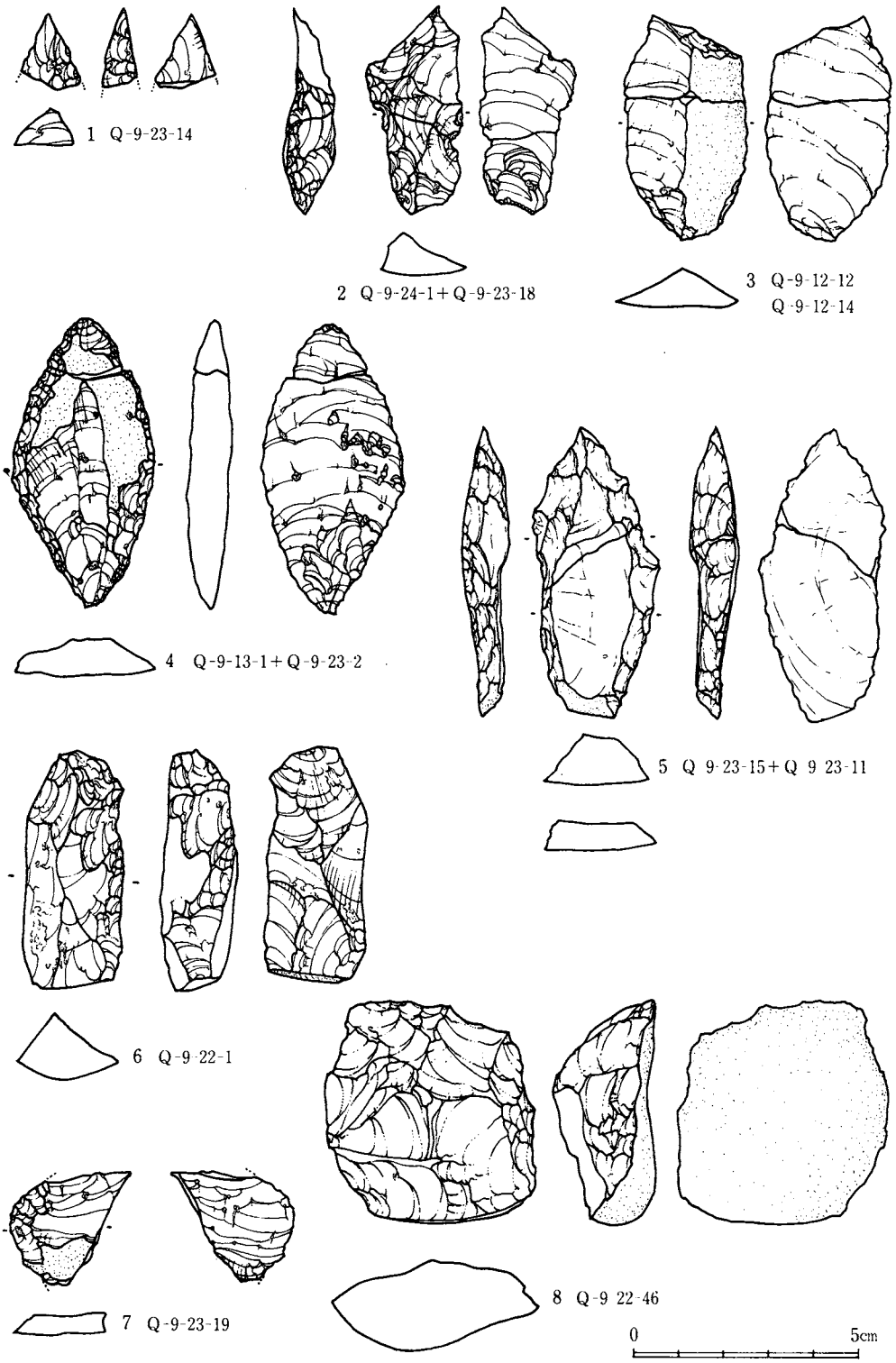


図23 第14ブロック出土遺物実測図(1)

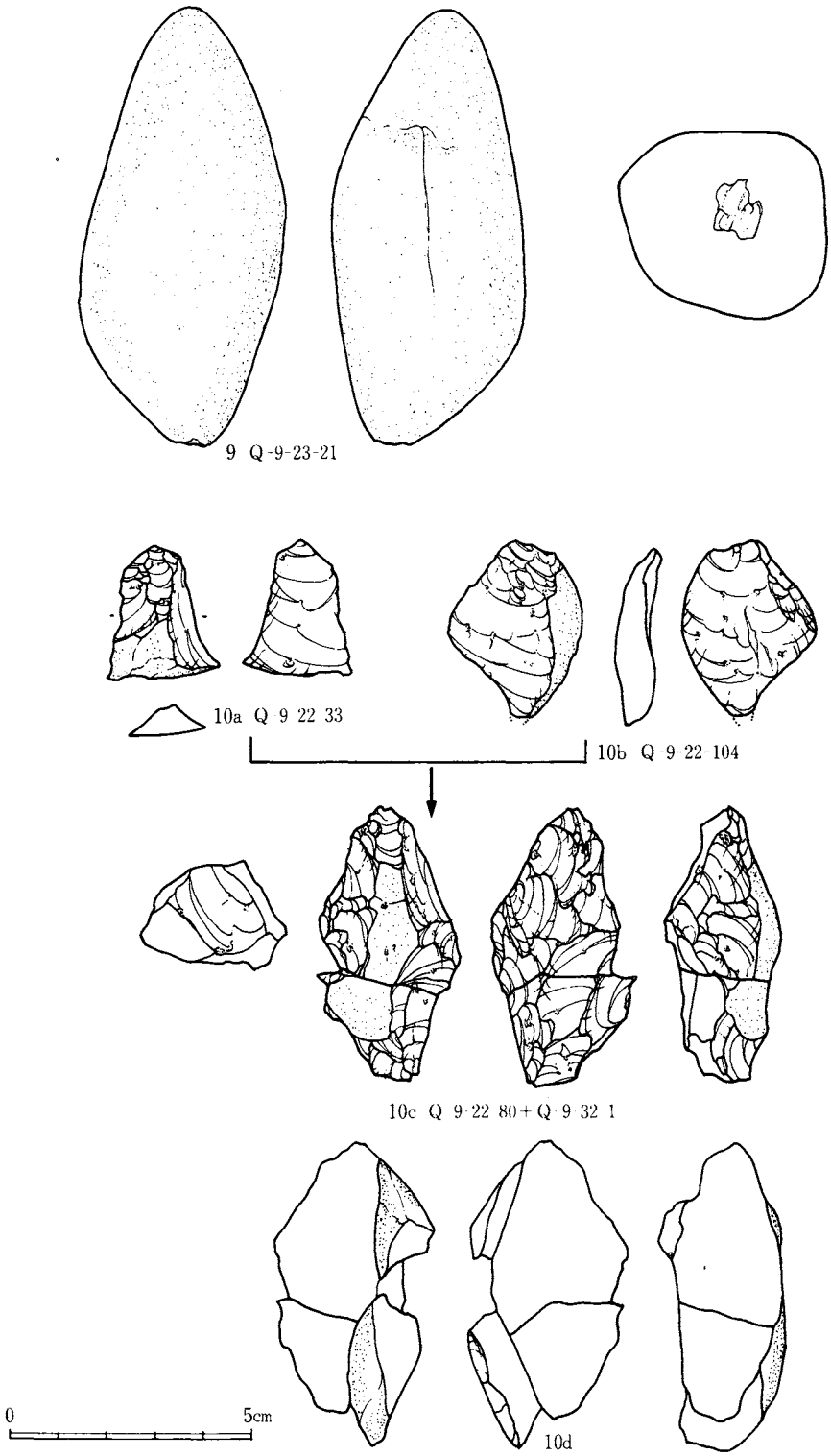


図24 第14ブロック出土遺物実測図(2)

5．第15ブロック（図25～30、図版7－3、11、12、表24～28）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上部にかけて密集して分布しており、垂直分布では遺物出土状況の疎密に差がみられない。過去の層理面に沿って西へ若干傾斜している状況を呈している。レベル差は30cm、平面分布は他のブロックに比べきわめて広く密集しており、長径18.50m、短径12.00mで最大規模を誇る。利器、剝片、砕片、石核、礫片、敲石とも均一に散在しており分布に偏りが見られない。また接合状況も互いに近接した位置はむろんのこと、接合資料32のごとく、ブロック内で広域に接合する例がみられる。特に礫片にその傾向が強く、石器類はむしろ近接した位置で接合する傾向にある。分布範囲はブロック全域に広がるが、周辺には焼土塊、炭化物の出土はみられなかった。

出土遺物　石器群は総計680点出土した。礫片が65点（9個体）出土している。他のブロックに比べ、石器の数量と母岩の数に格段の違いが見られ、他をはるかに凌駕している。石器組成はナイフ形石器27点、削器1点、2次加工のある剝片5点、敲石3点（うち2点は接合資料）、剝片152点、砕片479点、石核10点（うち1点は接合資料）、原石（搬入石材？）2点となっている。このうち原石としたものについては礫群の構成礫の可能性も考えられ、その性格は不明瞭である。1～22、24、25はナイフ形石器である。形態分類では大別すると以下の4種類が存在する。

a．切り出し形を呈する例。この場合には幅広な縦長剝片と、横長剝片を素材にした2種類がみられる。1～5、17～21、24、25がこれに該当する。

b．細身で狭長な形態を呈する例。縦長剝片を素材とした例で、6、8、10、12、13がある。

c．先端部の一部に刃つぶし加工をほどこした例。7が該当する。幅広な縦長剝片の先端部に加工痕がみられる。

d．不定形を呈し幅広な例。9、11、15、16、20、22がある。

23は削器の欠損資料である。26は2次加工のある剝片で、大形剝片の欠損品を転用した例と思われる。27～32は石核である。27はピエス・エスキーユの可能性が高い例で剝片を素材としており、主要剝離面側下端部に小さな複数の剝離面が観察される。28は複数の方向より横長剝片を生産した石核である。29は幅広な縦長剝片を得ている例である。30、31は自然面を打面として求心的に横長剝片を生産している例である。32は本ブロックの石核としては特異であり円礫の一端にあらかじめ平坦な打面を作出し、打面調整を行いつつ幅広な縦長剝片を生産した痕跡をとどめている。33、34は扁平な円礫を利用した敲石である。33は一端に、34は上下両端及び両面に敲打痕が残存する。

技術的特徴　石器群の石材としては、安山岩、玄武岩、珪質頁岩、頁岩の円礫4種であり、砂岩、チャートはそれぞれ敲石、原石（？）として利用されていたらしい。4種の石材のうち、頁岩は剝片1点、原石1点であり、技術的な特徴を充分知りうる資料とは言いがたく、安山岩、

表24　第15ブロック礫群の母岩別資料

状況 / 石材	受熱の内容	作業行為
砂岩 3	全体に赤化	付着物なし
砂岩 4	全体に赤化	付着物なし
砂岩 5	一部赤化	付着物なし
凝灰岩 1	一部赤化	リング状に褐鉄鉱が付着
チャート 1	一部赤化（割れ面赤化）	付着物なし
安山岩 1	全体に赤化	黒色タール状
安山岩 2	黒化あるいは赤化(割れ面赤化)	付着物なし
安山岩その他	全体に赤化	付着物なし
石材不明 1	全体に赤化	付着物なし
石材不明 2	全体に赤化	付着物なし

表25　第15ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		玄武岩		珪質頁岩		頁岩		砂岩		チャート		凝灰岩		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	17	3.1	2	2.9	(2)(2)3	14.9	1	33.3	—	—	—	—	—	—	—	—	27	4.0
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	1	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.1
ヒエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	2	0.3	1	1.4	2	4.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	0.7
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	130	23.3	18	26.1	3	6.4	1	33.3	—	—	—	—	—	—	—	—	152	22.4
砕片	397	71.3	48	69.6	34	72.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	479	70.5
石核	(2)8	1.8	—	—	1	2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	1.6
原石	—	—	—	—	—	—	1	33.3	—	—	1	100	—	—	—	—	2	0.3
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)1	100	—	—	—	—	—	—	3	0.4
計	557	82.0	69	10.0	47	7.0	3	0.4	3	0.4	1	0.1	0	0	0	0	680	100
礫片	17	26.2	—	—	—	—	—	—	18	27.7	16	24.6	8	12.3	6	9.2	65	—

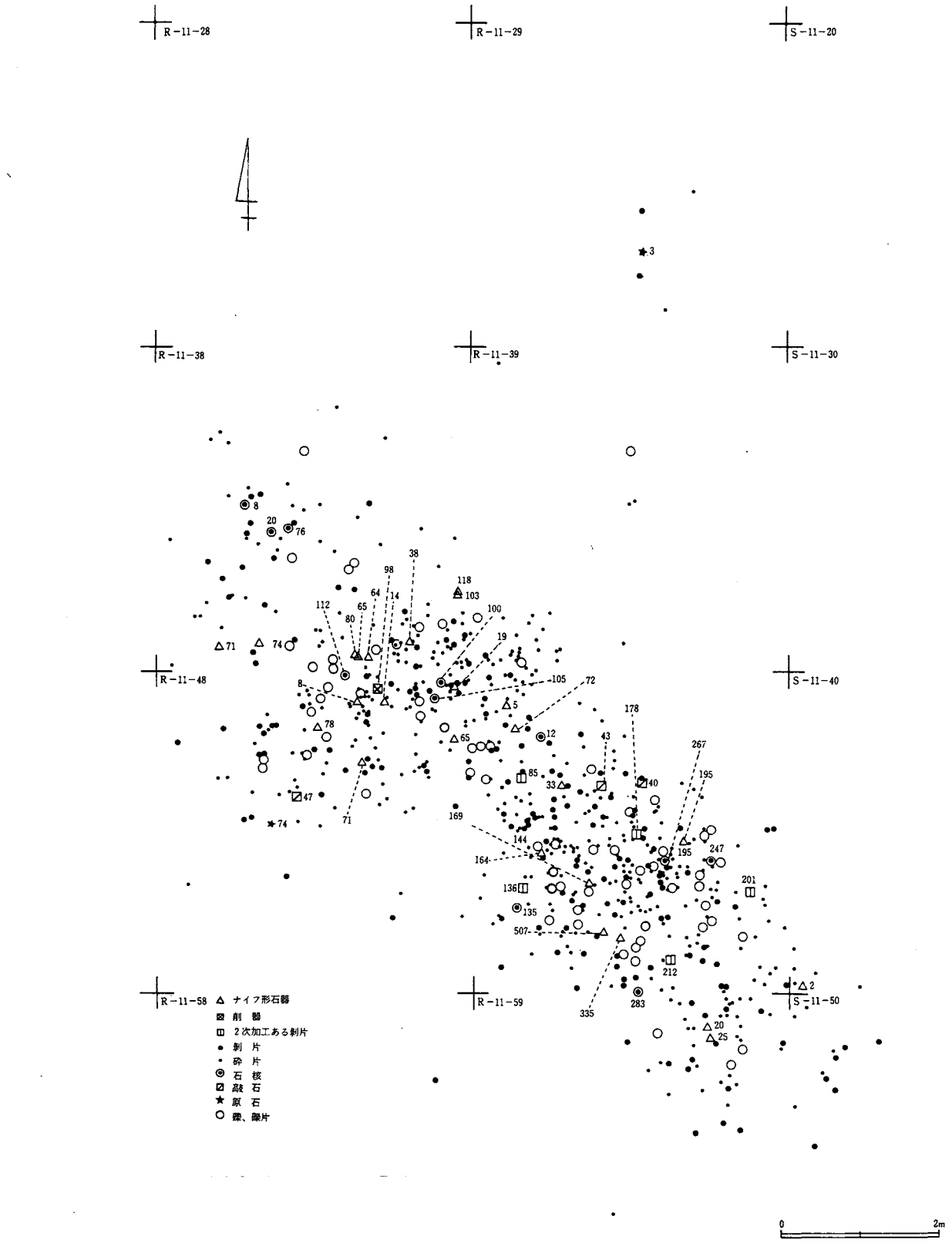
玄武岩、珪質頁岩について記述することにする。これらの石材はいずれも剥片生産から石器調整まで窺わせる。剥片生産の段階では概して円礫もしくはぶ厚い剥片を素材として、平坦打面もしくは自然面打面より求心的に加撃し、剥片生産を実施している。打面調整はほとんどみら

れない。その結果得られた剝片は多くの場合その一部に自然面を残存し、ポヂティブバルブの明瞭な横長、もしくは幅広な縦長剝片となっている。前述の27～31の石核はこうした工程を良く反映している。ナイフ型石器における調整技術は安山岩製のナイフ形石器では、平坦な刃つぶし加工が多くみられるのに対して、珪質頁岩製のナイフ形石器はいずれも急角度であり、いわゆるヘルワンリタッチに属する例（6、12、15）がみられる。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は総計33の母岩を識別し得た。内訳はチャート2種、砂岩6種、珪質頁岩9種、頁岩1種、玄武岩1種、安山岩3種、凝灰岩1種、石材不明2種となっている。この内安山岩3種、砂岩3種、チャート1種、凝灰岩1種、石材不明2種は礫片の母岩別資料である。石器群の母岩別資料はチャート1種、砂岩3種、珪質頁岩10種、頁岩11種、玄武岩1種になっており、石材の多くを占める安山岩は母岩別資料の識別は不可能であった。

表26　第15ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	原石	礫	剝片	砕片	石核	敲石	計
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
安山岩2	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	(2)(5)	—	—	—	—	7
安山岩その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)(2)(3)	—	—	—	—	7
玄武岩1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	17	33	—	—	54
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	22	—	—	25
珪質頁岩2	(2) 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	6
珪質頁岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
珪質頁岩4	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	—	—	5
珪質頁岩5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩9	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
珪質頁岩その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	5
頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
砂岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
砂岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	2
砂岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
砂岩4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2) 2	—	—	—	—	4
砂岩5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(12)	—	—	—	—	12
砂岩その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
チャート2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)(3)(7) 4	—	—	—	—	17
凝灰岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(7) 1	—	—	—	—	8
石材不明1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
石材不明2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(5)	—	—	—	—	5
計	11	—	—	—	—	—	—	—	—	3	2	64	21	66	1	3	171



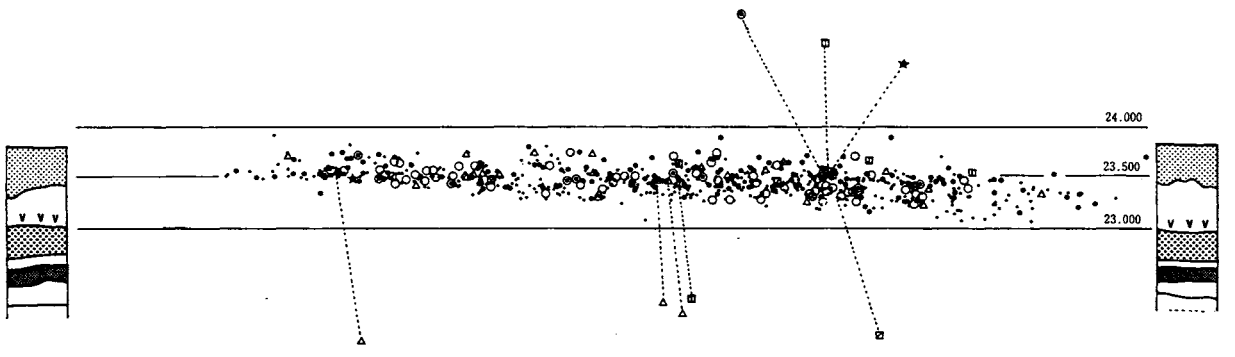


図25 第15ブロック遺物出土状況図(1)

表27　第15ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	1	砂　岩　2	敲石＋破片	(R－11－49－43)＋(R－11－49－40)	2
2	2	珪質頁岩1	剥片4	(R－11－49－316)→(R－11－49－303)→(R－11－49－210)→(R－11－49－213)	4
3	3	珪質頁岩1	剥　片(同一個体)	(R－11－49－60)＋(R－11－49－233)	2
4	4	珪質頁岩1	剥片2	(R－11－59－36)→(R－11－49－179)	2
5	5	珪質頁岩2	ナイフ形石器 (基部、先端部)	(R－11－49－72)＋(R－11－48－14)	2
6	6	珪質頁岩4	ナイフ形石器 (基部、先端部)	(R－11－38－118)＋(R－11－38－103)	2
7	7	安山岩2	円礫片2(加　熱)	(R－11－49－150)＋(R－11－49－226)	2
8	8	安山岩2	円礫片5 (加　熱)	(R-11-39-28)＋(R-11-48-55)＋(R-11-48-72)＋(R-11-48-81)＋(R-11-49-220)	5
9	9	安山岩他	円礫片2(加　熱)	(R－11－49－172)＋(R－11－49－89)	2
10	10	安山岩他	円礫片3(加　熱)	(R－11－49－167)＋(R－11－49－20)＋(R－11－49－26)	3
11	11	安山岩他	円礫片2(加　熱)	(R－11－49－349)＋(R－11－59－22)	2
12	12	チャート2	円礫片	(R-11-49-258)＋(R-11-49-326)＋(R-11-49-244)＋(R-11-49-337)＋(R-11-49-46)＋(R-11-49-281)＋(R-11-49-276)	7
13	13	チャート2	円礫片	(R－11－49－277)＋(R－11－49－182)＋(R－11－49－309)	3
14	14	チャート2	円礫片3 (加　熱)	(R－11－49－286)＋(R－11－49－279)＋(R－11－49－269)	3
15	15	凝灰岩1	円礫点7 (加　熱)	(R-11-48-5)＋(R-11-38-30)＋(R-11-48-11)＋(R-11-48-37)＋(R-11-48-23)＋(R-11-38-90)＋(R-11-38-3)	7
16	16	玄武岩1	ナイフ形石器1 二次加工ある剥片 剥　片	(R-11-59-25)(ナイフ形石器)→(R-11-59-1)＋(R-11-49-219)→(R-11-49-178)＋(R-11-49-285)(二次加工ある剥片)	5
17	17	玄武岩1	ナイフ形石器1 剥　片1	(S－11－40－2)→(R－11－59－10)	2
18	18	玄武岩1	剥　片(基部、先端部) 剥　片	(R－11－59－4)＋(R－11－49－183)→(R－11－49－268)	3
19	19	玄武岩1	剥　片2	(R－11－49－221)→(R－11－59－18)	2
20	20	玄武岩1	剥　片(先端部、基部)	(R－11－59－27)→(R－11－49－145)	2
21	21	安山岩他	剥片(頭部、先端部)	(R－11－49－48)＋(R－11－49－211)	2
22	22	安山岩他	剥片2 石核1	(R－11－49－271)→(R－11－48－41)→(R－11－48－43)(石核)	3
23	23	安山岩他	剥片2	(R－11－49－101)→(R－11－49－99)	2
24	24	安山岩他	剥片(頭部、先端部)	(R－11－38－77)＋(R－11－49－75)	2
25	25	安山岩他	円礫片2(安山岩の礫塊)	(R－11－49－62)＋(R－11～49－63)	2
26	26	安山岩他	剥片(頭部、先端部)	(R－11－38－17)＋(R－11－38－22)	2
27	27	安山岩他	剥片2	(R－11－38－40)→(R－11－38－35)	2

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
28	28	安山岩他	石核1 剥片1	(R−11−48−112)+(R−11−48−116)	2
29	29	安山岩他	石核片2(左右分断)	(R−11−49−247)+(R−11−49−267)	2
30	30	安山岩他	剥片2	(R−11−38−43) →(R−11−49−9)	2
31	31	安山岩他	剥片(頭部、先端部)1 剥片(完形品)1	(R−11−38−42)+(R−11−38−115)→(R−11−38−48)	3
32	32	安山岩他	剥片2	(R−11−39−29) →(S−11−50−10)	2
33	33	安山岩他	剥片2(左右分断)	(R−11−38−67)+(R−11−38−16)	2
34	34	安山岩他	剥片(頭部、先端部各1)	(R−11−48−51)+(R−11−48−56)	2
35	35	安山岩他	ナイフ形石器1(破片) 剥片2	(R−11−49−85)→(R−11−48−129)→(R−11−38−96)	3
36	36	砂岩4	円礫片	(R−11−49−163)+(R−11−49−174)	2
37	37	石材不明	円礫片	(R-11-48-111)+(R-11-49-77)+(R-11-48-122)+(R-11-49-7)+(R-11-49-8)	5
38	38	砂岩5	円礫片	(R-11-38-25)+(R-11-38-39)+(R-11-38-58)+(R-11-38-61)+(R-11-38-62)+(R-11-38-79)+(R-11-38-81)+(R-11-39-05)+(R-11-48-4)+(R-11-48-79)+(R-11-48-133)+(R-11-48-139)	12

表28　第15ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R−11−38−38	ナイフ形石器	3.6	2.4	1.0	55°	9.3	図27−11	1側辺	無	無	安山岩
2	R−11−38−64	ナイフ形石器	2.7	2.5	1.2	55°	6.4	図28−21	1側辺	有	無	安山岩
3	R−11−38−65	ナイフ形石器	2.7	1.2	0.8	40°	1.9	図27−4	2側辺	無	有	珪質頁岩
4	R−11−38−71	ナイフ形石器	3.3	2.6	1.4	55°	7.1	図28−16	1側辺	有	無	安山岩
5	R−11−38−74	ナイフ形石器	3.6	3.0	1.6	40°	13.6	図28−24	1側辺	有	無	安山岩
6	R−11−38−80	ナイフ形石器	3.5	1.8	0.7	40°	3.4	図27−8	2側辺(基部付近のみ)	無	有	安山岩
7	R−11−38−103	ナイフ形石器	2.3	1.3	0.7	55°	1.6	図27−12	2側辺	無	無	珪質頁岩
	R−11−38−118	ナイフ形石器	1.0	0.5	0.3	55°	0.1	——	2側辺	無	無	珪質頁岩
8	R−11−48−8	ナイフ形石器	2.1	2.4	0.1	(45°)	5.1	図28−20	1側辺	有	無	安山岩
9	R−11−48−14	ナイフ形石器	2.2	1.3	0.8	55°	1.7	図27−13	1側辺	無	有	珪質頁岩
	R−11−49−72	ナイフ形石器	3.5	1.7	0.9	55°	4.2	——	2側辺	無	有	珪質頁岩
10	R−11−48−19	ナイフ形石器	1.2	1.0	1.0	70°	0.8	図28−14	不明	有	無	安山岩
11	R−11−48−65	ナイフ形石器	2.9	3.0	1.4	(45°)	11.6	図28−25	1側辺	有	無	安山岩
12	R−11−48−71	ナイフ形石器	3.2	1.4	0.9	45°	2.7	図27−3	2側辺	無	不明	頁岩
13	R−11−48−78	ナイフ形石器	2.7	1.4	0.7	60°	2.8	図28−17	2側辺	無	不明	安山岩
14	R−11−49−5	ナイフ形石器	3.8	2.2	0.6	25°	4.7	図27−9	1側辺	無	不明	安山岩
15	R−11−49−33	ナイフ形石器	2.7	2.3	0.7	(45°)	2.4	図28−15	1側辺	有	無	珪質頁岩

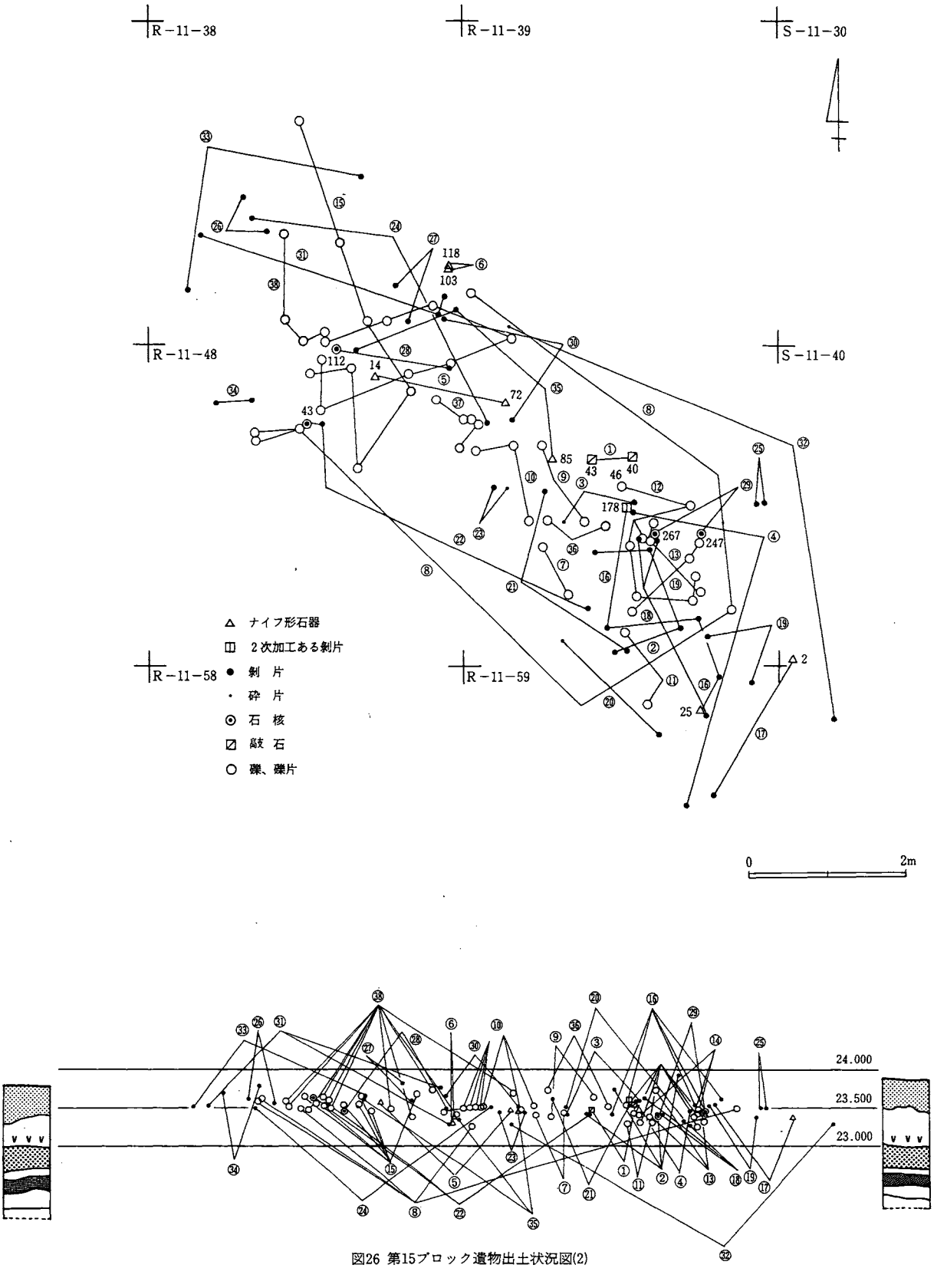


図26 第15ブロック遺物出土状況図(2)

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
16	R－11－49－144	ナイフ形石器	4.5	1.9	0.9	70°	6.3	図27－10	基部周辺2側辺	無	無	安山岩
17	R－11－49－169	ナイフ形石器	2.7	1.5	0.5	35°	1.8	図27－2	2側辺	無	不明	安山岩
18	R－11－49－195	ナイフ形石器	2.7	1.1	0.7	75°	1.9	図27－6	2側辺	無	有	珪質頁岩
19	R－11－49－207	ナイフ形石器	2.6	1.4	0.5	40°	1.7	図27－1	1側辺	無	有	安山岩
20	R－11－49－335	ナイフ形石器	2.7	2.0	0.8	30°	4.3	図28－19	1側辺	有	無	安山岩
21	R－11－59－20	ナイフ形石器	2.8	2.0	0.7	45°	4.4	図28－22	基部周辺2側辺	無	無	安山岩
22	R－11－59－25	ナイフ形石器	2.5	1.6	0.6	45°	2.0	図27－7	1側辺	無	無	玄武岩
23	S－11－41－1	ナイフ形石器	3.1	1.5	0.8	40°	4.0	図27－5	2側辺	無	無	安山岩
24	S－11－40－2	ナイフ形石器	3.2	1.9	0.7	50°	3.5	図28－18	1側辺(部分的)	有	無	玄武岩
25	R－11－49－85	ナイフ形石器	2.9	2.5	0.9	50°	6.0	——	1側辺	有	無	安山岩
26	R－11－48－98	削器	2.4	2.7	0.8	—	5.9	図28－23	—	無	無	安山岩
27	R－11－49－136	二次加工ある剝片	2.1	1.3	0.7	—	1.9	——	—	有	無	安山岩
28	R－11－49－85	二次加工ある剝片	2.9	2.6	0.9	—	6.0	——	—	有	無	安山岩
29	R－11－49－178	二次加工ある剝片	4.5	3.4	1.2	—	13.4	——	—	無	無	玄武岩
30	R－11－49－201	二次加工ある剝片	4.7	2.0	1.3	—	6.9	図29－26	—	有	無	頁岩
31	R－11－49－212	二次加工ある剝片	1.8	3.0	0.7	—	3.0	——	—	有	無	頁岩
32	R－11－48－47	敲石	8.1	6.6	3.4	—	256.8	図30－34	—	無	無	硬砂岩
33	R－11－49－40	敲石	3.8	2.8	1.2	—	14.5	図30－33	—	有	無	硬砂岩
	R－11－49－43	敲石	6.9	5.0	2.6	—	111.1	——	—	有	無	硬砂岩
34	R－11－38－8	石核	3.0	1.4	2.9	—	13.5	——	—	無	無	安山岩
35	R－11－48－105	石核	3.7	2.5	1.3	—	11.8	図29－27	—	無	無	安山岩
36	R－11－38－20	石核	4.2	3.6	1.5	—	23.1	図29－30	—	無	無	安山岩
37	R－11－48－100	石核	4.6	1.8	1.6	—	13.7	——	—	有	無	安山岩
38	R－11－49－135	石核	1.3	2.1	3.1	—	17.3	図29－28	—	無	無	安山岩
39	R－11－48－112	石核	1.5	3.8	3.5	—	26.2	——	—	無	無	安山岩
40	R－11－49－12	石核	5.0	3.2	1.7	—	26.5	図29－31	—	無	無	安山岩
41	R－11－38－75	石核	5.0	2.9	1.0	—	13.2	図29－29	—	無	無	頁岩
42	R－11－49－247	石核	2.4	4.1	1.3	—	11.8	——	—	有	無	安山岩
	R－11－49－267	石核	2.7	4.6	1.6	—	23.2	——	—	有	無	安山岩
43	R－11－49－283	石核	2.0	3.4	4.7	—	62.7	図29－32	—	無	無	安山岩

a．石器群の母岩別資料・接合資料について

石器群の母岩は石器製作工程をすべて網羅した資料はないが、石器調整技術を反映した母岩（玄武岩1、珪質頁岩4）がみられる。しかしながら分析に有効的な資料とは言いがたく、また、石器群の大半を占める安山岩については、母岩の識別が困難であった。接合資料は計

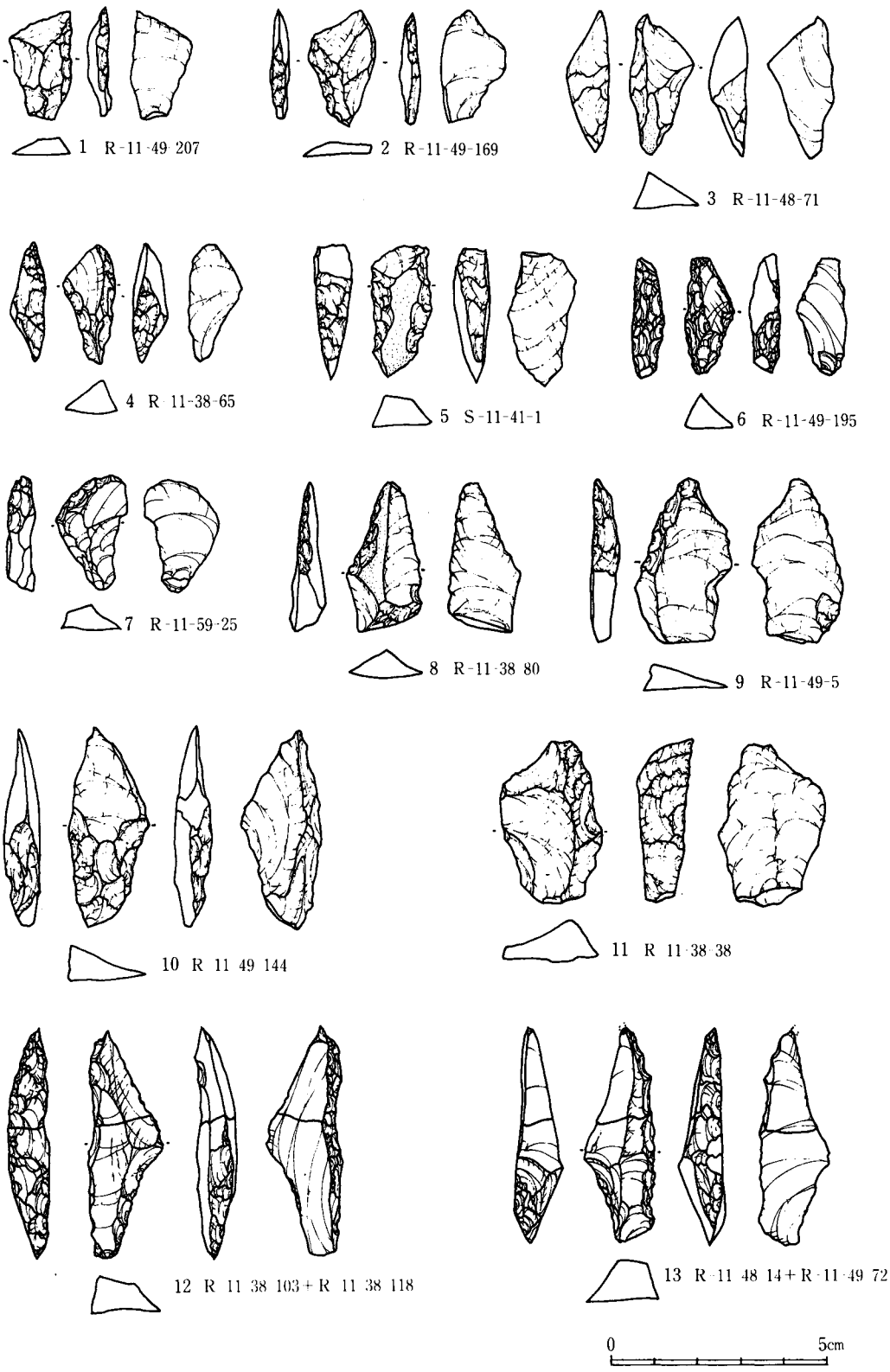


図27 第15ブロック出土遺物実測図(1)

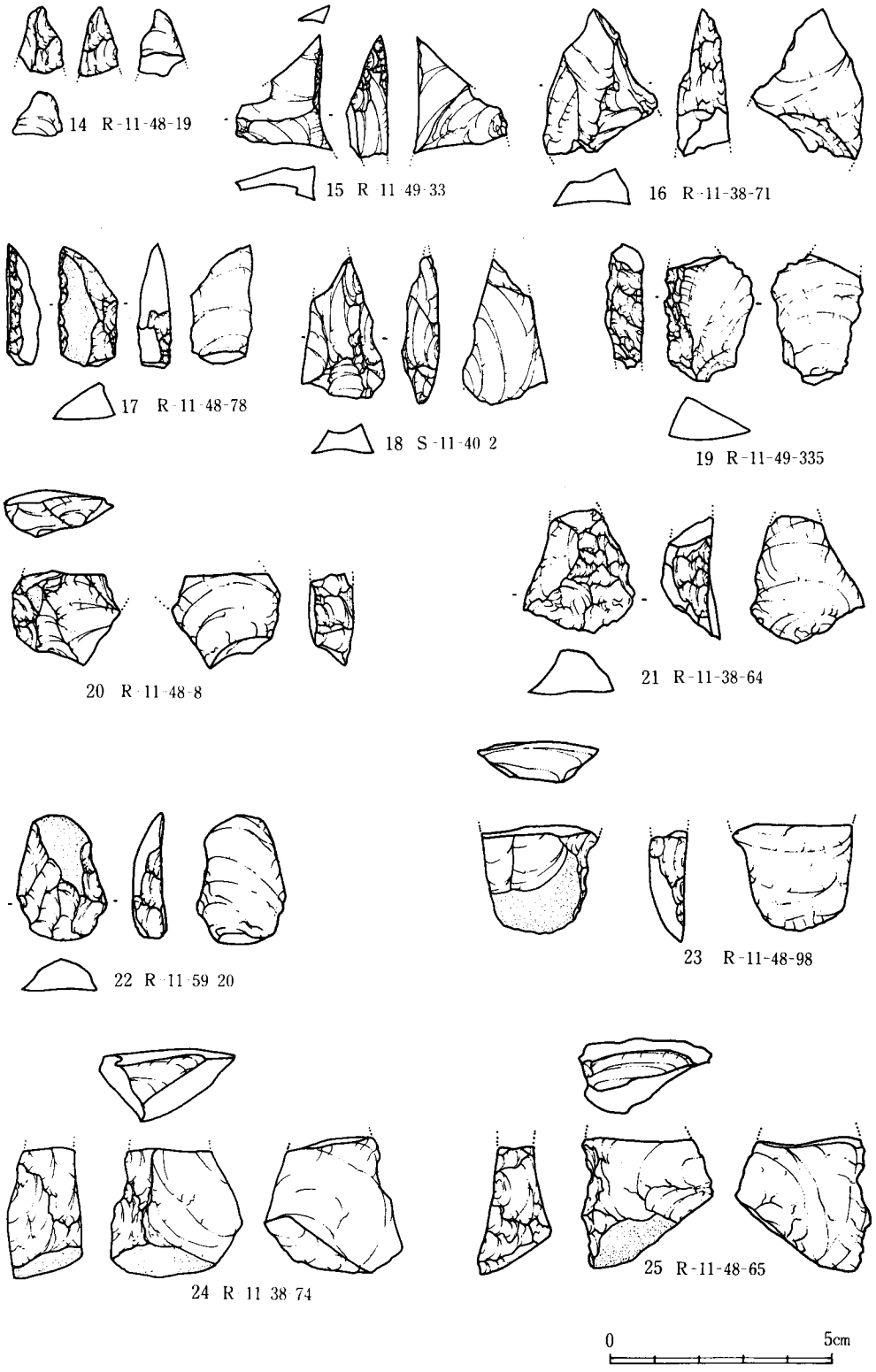


図28 第15ブロック出土遺物実測図(2)

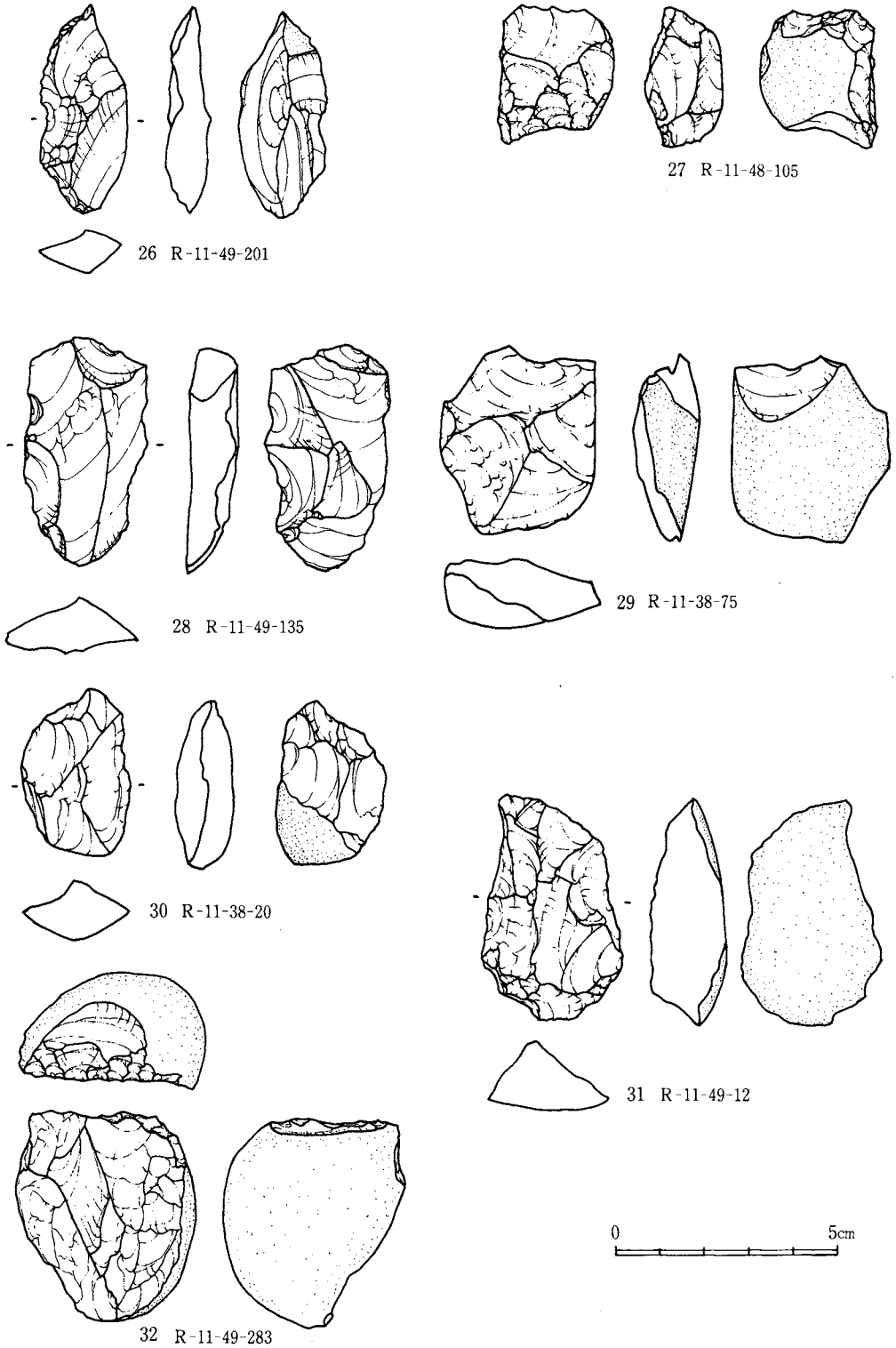
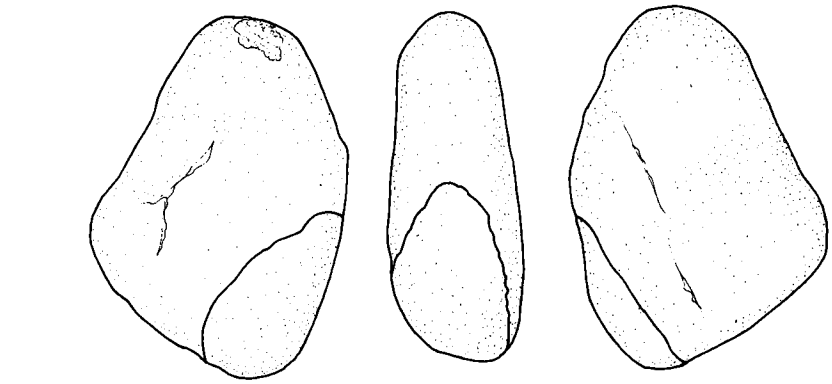
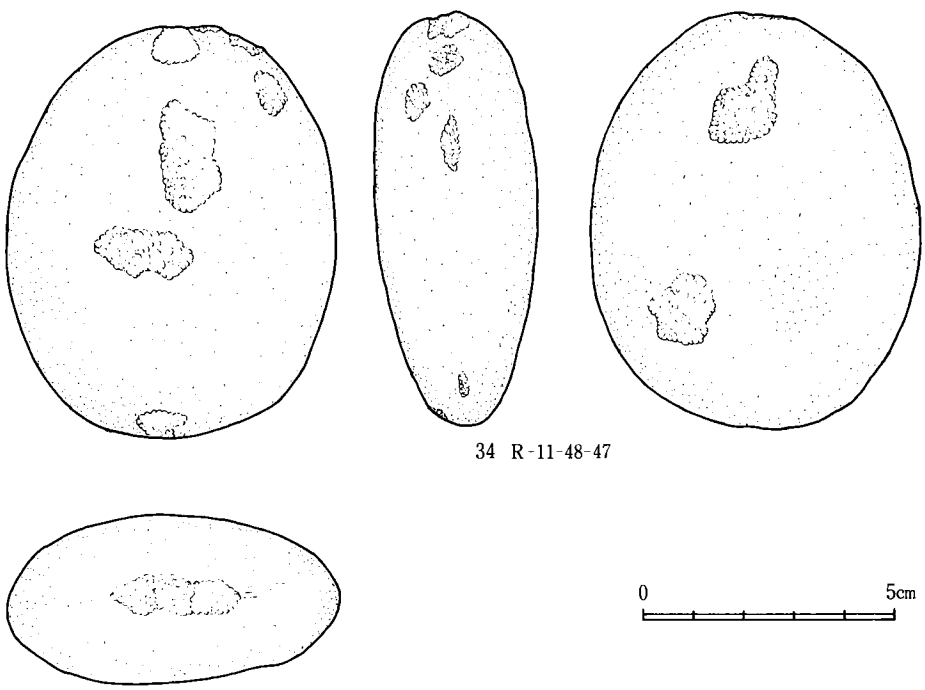


図29 第15ブロック出土遺物実測図(3)



33　R-11-49-40＋R-11-49-43



34　R-11-48-47

図30 第15ブロック出土遺物実測図(4)

38例みられるが、ブロック内で非常に良く接合し、個々の接合資料は互いに接近した距離で接合する傾向にある。

b．礫群について

礫については全体を復元しうる資料は全くなく10個体65点（総重量766.49ｇ）を検出した。個々の母岩の特徴は表24のとおりである。

まとめ　本ブロック内の石器の出土状態を検討すると以下のとおりである。

①全体の石器群がコンパクトにブロック内に集中している。

②母岩別資料が多岐にわたること。

③接合資料がブロック内で非常に良くまとまっていること。

④欠損した石器群が多くみられること。

以上の諸点より第15ブロックは廃棄、即ちゴミ捨て場の色彩が濃いものと推測される。

6．第16ブロック（図31～34、図版８－１、13、表29～32）

出土状況　ソフトロームの下半部よりハードローム上面にかけて分布し特に密な部分はハードローム上面となっている。他のブロックに比べ、レベル差が約40 cmとあまりなく、ほぼ水平に分布している。平面分布は長径2.70m、短径1.50m、全体に疎密の差がなく均一に分布している。剝片、砕片、石核は普遍的に見られるが、利器は外縁部に偏在している。

出土遺物　総計151点出土した、内訳はナイフ形石器１点、２次加工ある剝片２点、使用痕のある剝片１点、剝片54点、砕片87点、石核５点、敲石１点となっている。１は自然面打面を有する幅広な縦長剝片を素材としたナイフ形石器であり、平坦な刃つぶし加工がほどこされている。２は石核である。剝離面の状態より平坦な打面より複数の方向から横長剝片を生産した

表29　第16ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		閃緑岩		頁岩		チャート		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	14.3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.7
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	0.7	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—	2	1.3
使用痕ある剝片	1	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.7
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	49	35.0	4	57.1	—	—	1	50	—	—	—	—	54	35.8
砕片	86	61.4	—	—	1	100	—	—	—	—	—	—	87	57.6
石核	3	2.1	2	28.6	—	—	—	—	—	—	—	—	5	3.3
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	1	100	—	—	1	0.7
計	140	92.7	7	4.6	1	0.7	2	1.3	1	0.7	—	—	151	100
礫片	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—	1	50	2	…

痕跡をとどめる。左右に分断しているが中央部の加撃方向に沿って割れ面が伸びている。3は2次加工のある剝片である。主要剝離面側の頂部に大き目の2次加工が3面、及び左側辺の一部、先端部に不連続な2次加工がみられる。4は幅広な剝片である。

技術的特徴　原石は黒曜石、安山岩、閃緑岩、頁岩、チャートなどである。黒曜石は角礫、他は円礫である。主要な石材は黒曜石であり全体の93%を占めている。技術的な特徴を窺わせる資料は、接合資料1、接合資料7である。接合資料1は、板状の剝片を素材として縦長剝片を生産している。また接合資料7は、黒曜石の角礫に平坦な打面を設定して、横長剝片を生産している。これらはいずれも、規格剝片を生産せず、打面を頻繁に転移することによって不定形（主として横長の）剝片を生産している。本ブロックの石器群を通観すると以上の剝片生産基盤が全体に反映していることを特徴としている。

表30　第16ブロック母岩別資料石器組成表

器種／母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫片	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	28	—	—	41
黒曜石2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	33	56	3	—	94
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
安山岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	4
閃緑岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—		1
頁岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	1	51	85	4	1	146

表31　第16ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	安山岩3	剝片（基部、先端部） 石核	(R－11－23－1)＋(R－11－34－1)→(R－11－33－4)(石核)	3
2	2	黒曜石1	剝片(先部、先端部) 剝片1	(R－11－24－13)→(R－11－24－2)＋(R－11－34－54)	3
3	3	黒曜石1	剝片（先端部） 剝片	(R－11－34－9)→(R－11－24－17)	2
4	4	黒曜石1	剝片2	(R－11－33－5)→(R－11－24－16)	2
5	5	黒曜石1	剝片(基部、先端部) 剝片	(R－11－24－18)＋(R－11－35－5)→(R－11－33－6)	3
6	6	黒曜石1	剝片（左右分断）	(R－11－34－52)＋(R－11－34－51)	2
7	7	黒曜石2	剝片2 石核	(R－11－25－5)→(R－11－34－74)→(R－11－34－90)(石核)	3

No.	接合資料	母岩別資料	内　　訳	内　　容	数量
8	8	黒曜石 2	石核（左右分断）	(R－11－34－21)＋(R－11－34－49)	2
9	9	黒曜石 2	剝片（基部、先端部）	(R－11－35－6)＋(R－11－34－57)	2
10	10	黒曜石 2	剝片（基部、先端部）	(R－11－34－6)＋(R－11－34－82)	2

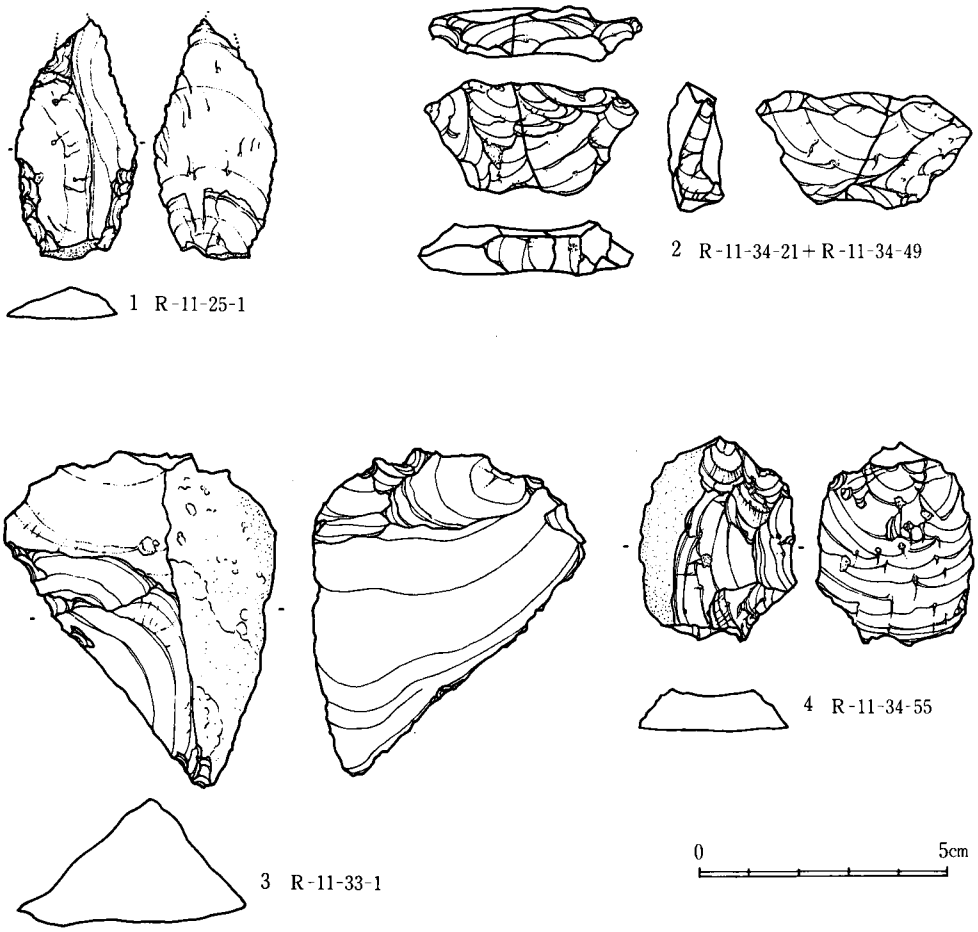


図31 第16ブロック出土遺物実測図(1)

母岩別資料・接合資料とブロック　黒曜石２種、安山岩３種、閃緑岩１種、頁岩２種、砂岩１種、チャート１種と、母岩はヴァラエティーに富む。黒曜石の母岩別資料は識別しやすく、大きく２種にわかれることが理解される。本ブロックの母岩別資料は計10の母岩識別ができたが剝片生産に関与する母岩（黒曜石１、２）と単独で利器を構成する母岩（安山岩２）などが注目される。しかし一連の工程を復元しうる母岩は黒曜石２のみである。黒曜石２については第12ブロック、第14ブロック、第20ブロック、第22ブロックの黒曜石と類似する。好例として

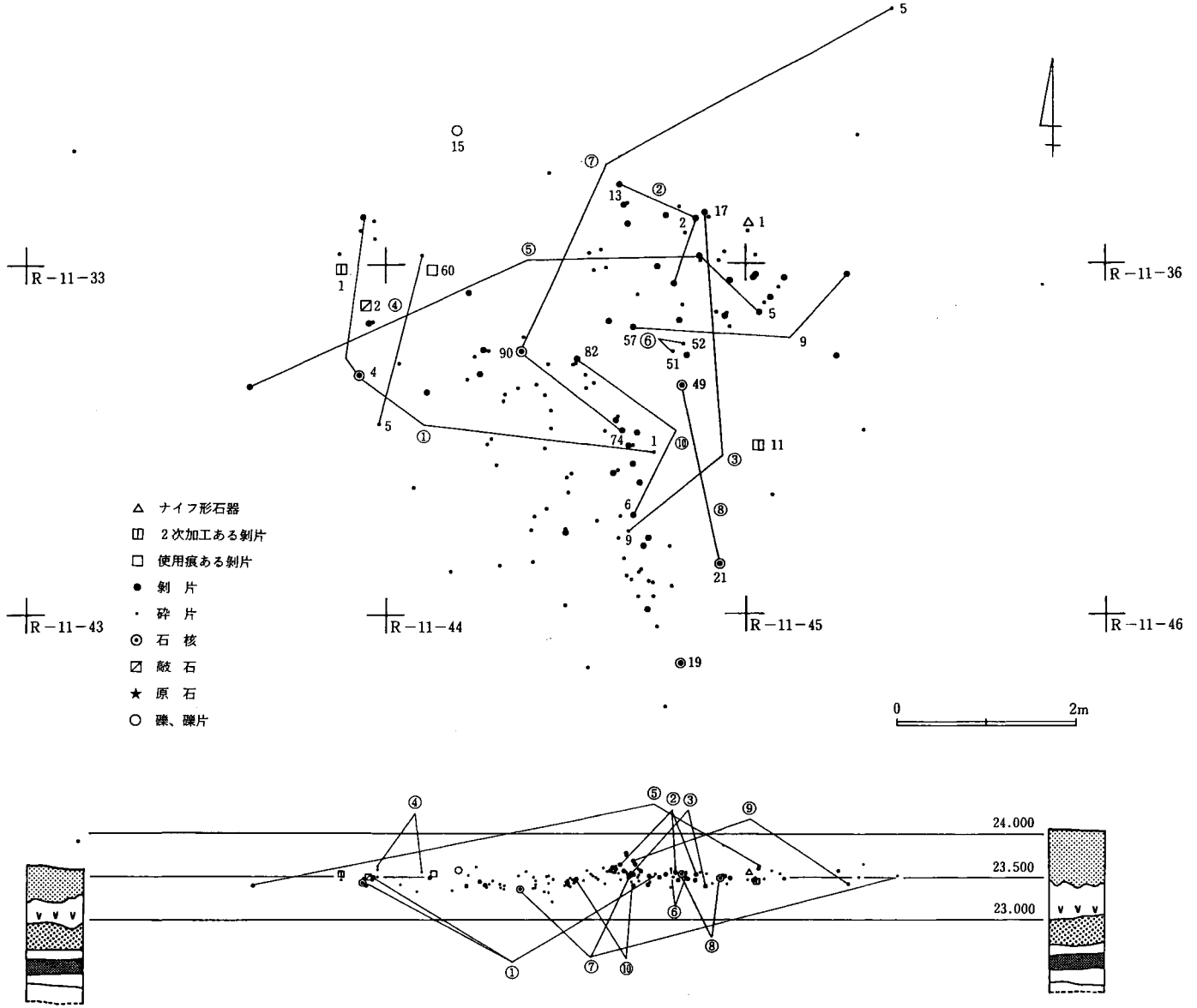


図32 第16ブロック遺物出土状況図

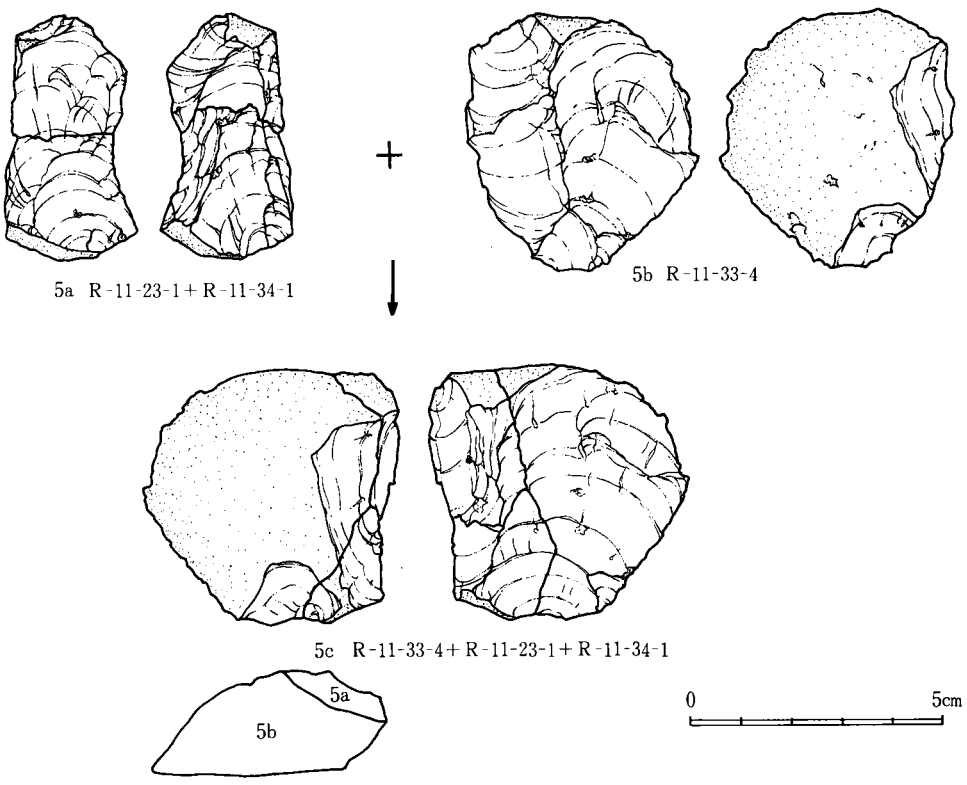


図33 第16ブロック出土遺物実測図(2)

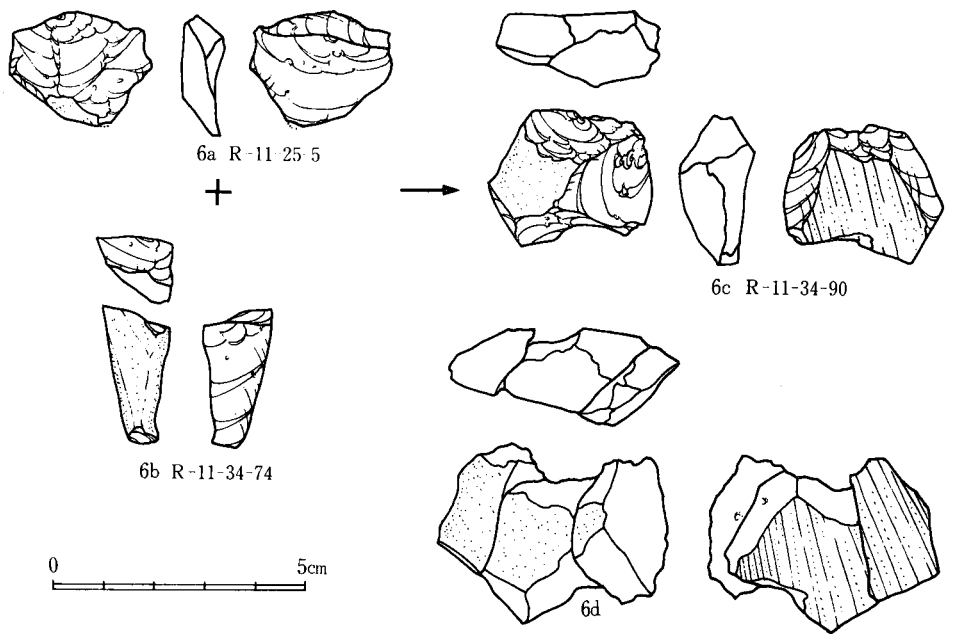


図34 第16ブロック出土遺物実測図(3)

は接合資料7を指摘しうる。なお、この他の母岩については部分的で、しかも散発的であり内容的評価をなし得ない。

まとめ　石器組成は貧弱であり、剝片生産、石器調整の色彩が濃いブロックである。黒曜石の肉眼的観察によれば、第12、14、20、22の各ブロックと近似しており、また、剝片生産基盤に関連がみいだされる。

表32　第16ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R−11−25−1	ナイフ形石器	4.7	2.4	0.8	35°	7.7	図32−1	2側辺	無	不明	安山岩
2	R−11−34−60	使用痕ある剝片	2.4	2.1	0.8	—	2.9	——	—	有		黒曜石
3	R−11−33−1	二次加工ある剝片	6.8	5.3	2.5	—	58.1	図32−3	—	無	無	頁岩
4	R−11−35−11	二次加工ある剝片	0.1	0.8	0.5	—	0.2	——	—	有	無	黒曜石
5	R−11−33−2	敲石	7.5	4.8	3.6	—	182.3	——	—	無	無	チャート
6	R−11−33−4	石核	2.3	4.7	5.0	—	45.6	図33−5	—	無	無	安山岩
7	R−11−34−19	石核	1.6	1.3	1.1	—	2.7	——	—	無	無	黒曜石
8	R−11−34−21 R−11−34−49	石核	4.4	2.5	0.9	—	9.2	図32−2	—	有	無	黒曜石
9	R−11−34−90	石核	3.2	2.6	1.5	—	11.9	図34−6	—	無	無	黒曜石

7．第17ブロック（図35、36、図版8−2、13、表33〜36）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上面に集中して石器がみられる。レベル差約30 cm で、特にハードローム上面に多くの出土をみた。平面分布では長径5.70m、短径4.50mの範囲に集中している。利器と剝片、砕片、石核の別なく混在しており、器種ごとに偏在する様子は分布の上からはみられない。

出土遺物　総計38点出土している。内訳は、削器1点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片1点、剝片11点、砕片21点、石核3点となっており、数量のわりに多様な石器組成である。1は、2次加工のある剝片である。断片的であるため明らかでないが削器の可能性もある。2は使用痕のある（刃こぼれがある）剝片で、主要剝離面側の右側辺に連続的な刃こぼれが見られる。3〜5は石核である。3は剝片を素材として、主要剝離面側より剝片を生産している。4、5は舟底形の石核である。剝片の主要剝離面をそのまま利用した平坦な打面より下端に向って剝片生産を行っている。6は削器で、大形の剝片の一部に2次加工を行っている。調整は主要剝離面側が平坦、背面側が急角度である。

技術的特徴　石器群の石材は、泥岩、珪質頁岩の円礫を使用しているが、泥岩は剝片1点の

みであり、その実態は不明である。ここでは珪質頁岩が検討に値する母岩であると言える。技術的な側面を窺わせる接合資料がなく、充分な検討は出来ないが、剝片、石核等の観察によれば平坦な打面より横長剝片を生産した痕跡が窺われる。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材は珪質頁岩、泥岩、安山岩、流紋岩等である。珪質頁岩は母岩別資料が7、泥岩は単独である。この内珪質頁岩7は2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、砕片、石核が見られ、剝片生産から石器調整を反映しているが、他の母岩はこれらの工程上の一部である。安山岩、流紋岩等の礫は加熱され表面の風化、損耗が著しい。母岩別資料の識別は相対的に容易であるが、接合資料は1例（接合資料2）にすぎず、他は礫片となっている。

表33　第17ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	泥岩		珪質頁岩		安山岩		流紋岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	1	2.7	—	—	—	—	1	2.6
ヒェス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	1	2.7	—	—	—	—	1	2.6
使用痕ある剝片	—	—	1	2.7	—	—	—	—	1	2.6
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	1	100	10	27.0	—	—	—	—	11	29.0
砕片	—	—	21	56.8	—	—	—	—	21	55.3
石核	—	—	3	8.1	—	—	—	—	3	7.9
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1	2.6	37	97.4	0	0	0	0	38	100
礫片	—	—	—	—	8	88.9	1	11.1	9	

表34　第17ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ヒェス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
安山岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(5)	5
安山岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
安山岩4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
流紋岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
泥岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	11	—	—	13
珪質頁岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	3	10	2	—	17
珪質頁岩5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	2
珪質頁岩6	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	12	21	3	9	48

まとめ　珪質頁岩を主たる石材とした小規模なブロックである。石材については他のブロックとの関連性はない。自己完結的なブロックと言えよう。

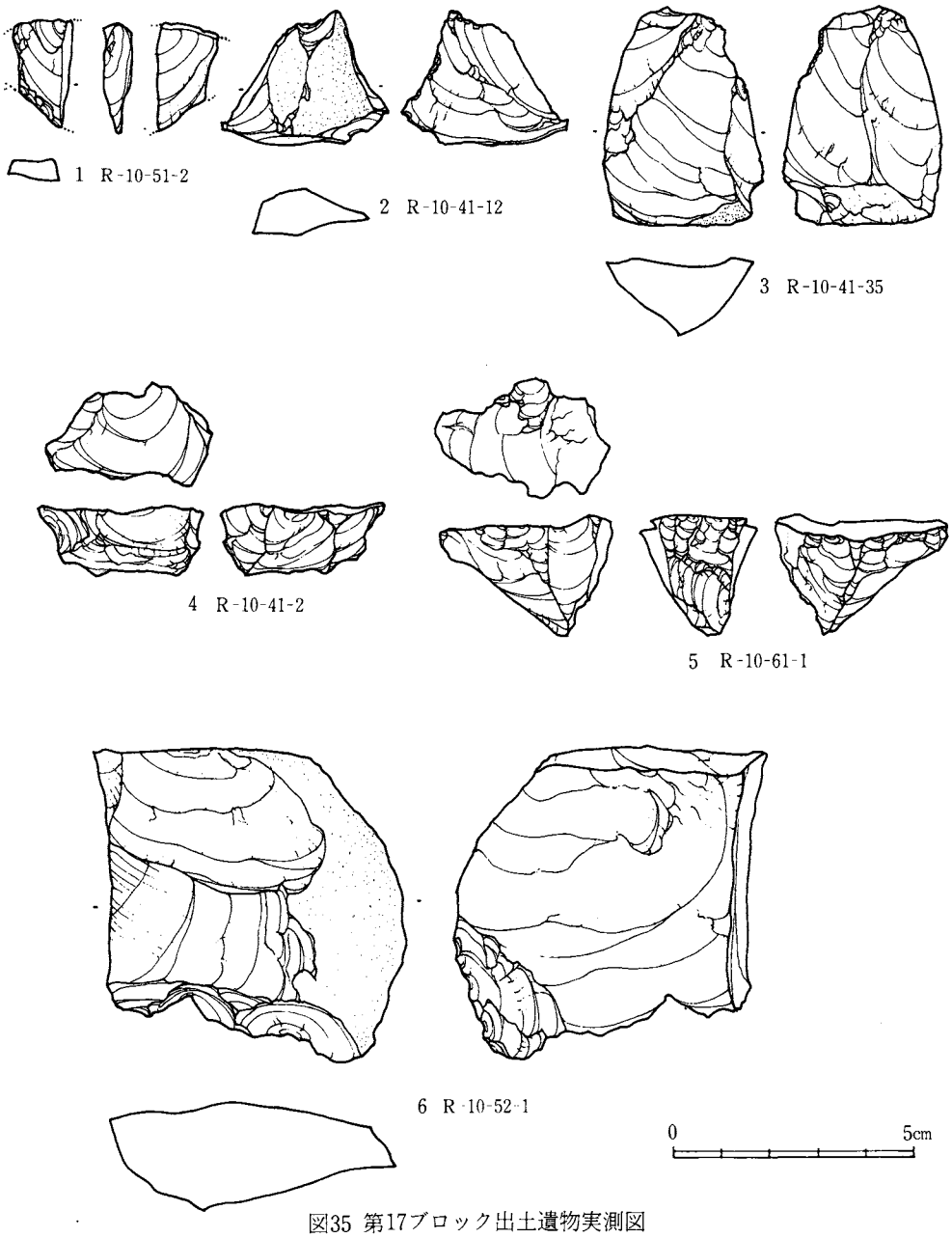


図35 第17ブロック出土遺物実測図

表35　第17ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	1	安山岩 2	加熱による剥落礫片	(R-10-41-7)+(R-10-41-8)+(R-10-41-9) +(R-10-41-10)+(R-10-41-11)	5

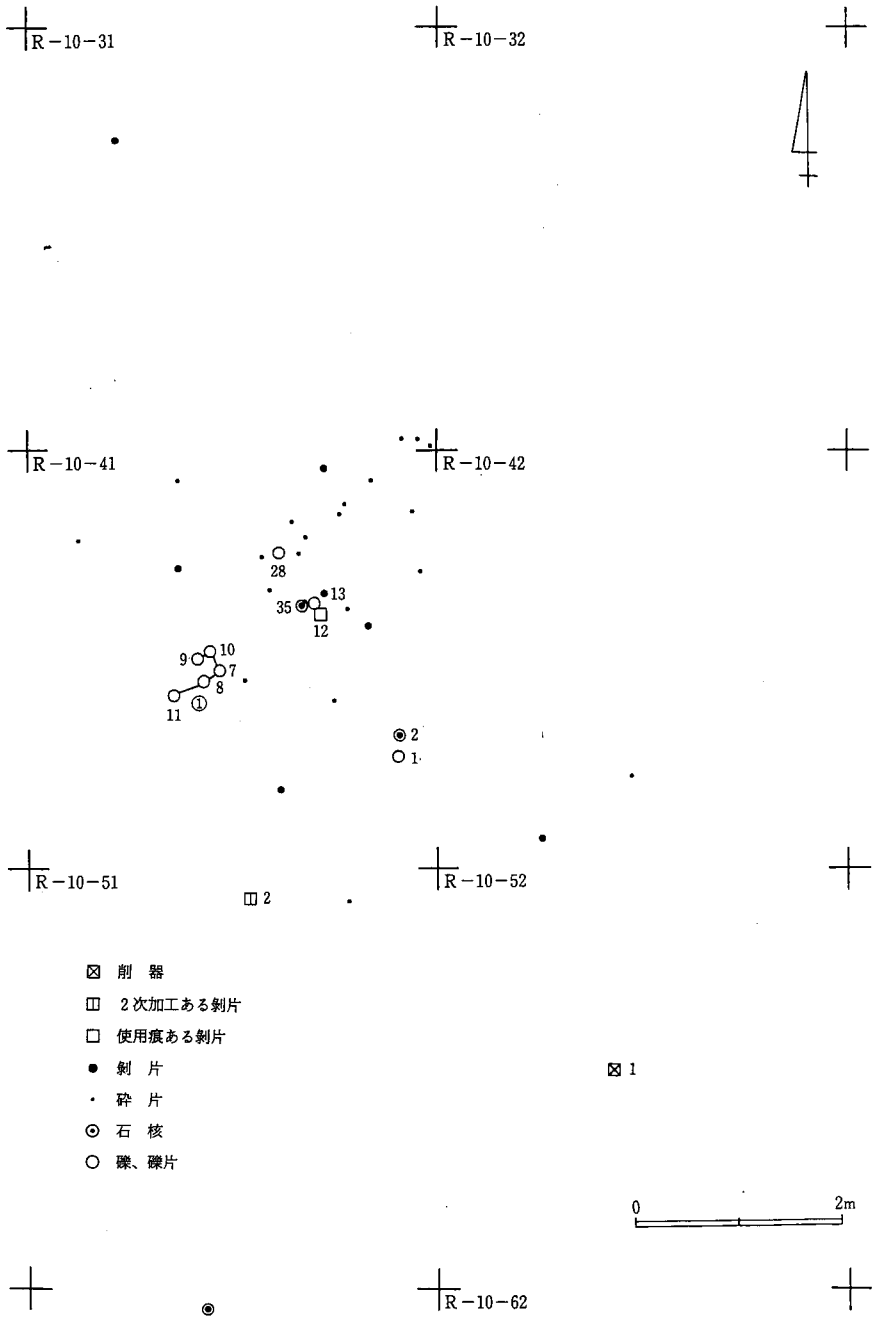


図36 第17ブロック遺物出土状況図

表36　第17ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R－10－52－1	削器	6.2	6.9	2.2	—	99.0	図36－6	—	無	無	珪質頁岩
2	R－10－41－12	使用痕ある剥片	2.7	3.4	1.2	—	7.7	図36－2	—	有	有	珪質頁岩
3	R－10－51－2	二次加工ある剥片	2.2	1.2	0.6	—	1.5	図36－1	—	有	無	珪質頁岩
4	R－10－41－2	石核	3.4	2.0	1.3	—	7.2	図36－4	—	無	無	珪質頁岩
5	R－10－41－35	石核	4.5	3.5	1.4	—	22.0	図36－3	—	無	無	珪質頁岩
6	R－10－61－1	石核	3.5	2.4	2.0	—	11.2	図36－5	—	無	無	珪質頁岩

8．第18ブロック（図37、38、図版8－3、表37～40）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上部にかけて出土する。レベル差約 20 cm、平面分布は長径約2.70m、短径約1.70mとなっており非常に小規模であり、第4文化層では最小のブロックとなっている。

出土遺物　総計25点出土している。石器組成はナイフ形石器1点、削器1点、ピエス・エスキーユ1点、剥片3点、砕片19点となっている。1は打面再生剥片中央部付近で折損している。2は2側辺加工のナイフ形石器である。先端部は欠損している。3は礫片を素材としたピエス・エスキーユである。上下両端に細かなつぶれが見られ、両極加撃の痕跡をとどめる。4は両面加工の削器である。表裏とも急角度な調整痕がみられる。なお、1、3、4については表採であり分布図に図示していない。

表37　第18ブロック出土石器組成表

器種＼石材	安山岩 数量	%	細粒砂岩 数量	%	チャート 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	4.3	—	—	1	4.0
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	1	4.3	—	—	1	4.0
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	1	100	1	4.0
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	1	100	2	8.7	—	—	3	12.0
砕片	—	—	19	82.6	—	—	19	76.0
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1	4.0	23	92.0	1	4.0	25	100

技術的特徴　石材は安山岩1点、細粒砂岩23点、チャート1点である。いずれも円礫を原材としているが大きさ等については不明である。この中で細粒砂岩が大きな割合を占める。剥片生産技術については資料的に少なく充分に検討し得ない。ただし剥片の面構成、打面の形状などを観察すると平坦な打面より打面転移を頻繁にして横長剥片を生産したことが推定される。それにしても石核はなく、全体像は不明瞭である。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は識別しやすく全資料にわたって認定し得た。その結果、石材と母岩別資料は合致し、1対1の関係が見られた。安山岩、チャートは各1点であり、

細粒砂岩が数量的に優位な母岩となっている。細粒砂岩には石核は存在しないが、剝片２点、砕片19点、ナイフ形石器１点、削器１点と剝片生産から石器調整を反映した母岩である。ただし、接合資料が同一個体の剝片の分断資料が２例見られるのみで工程上後者に有効な資料になっている。

まとめ　小規模なブロックであるが、母岩別資料が完結しており、他のブロックとの類縁関係は考えられない。自己完結的なブロックである。石器製作工程については、資料的な欠落が見られ、遺跡外にブロックを求めなければなるまい。

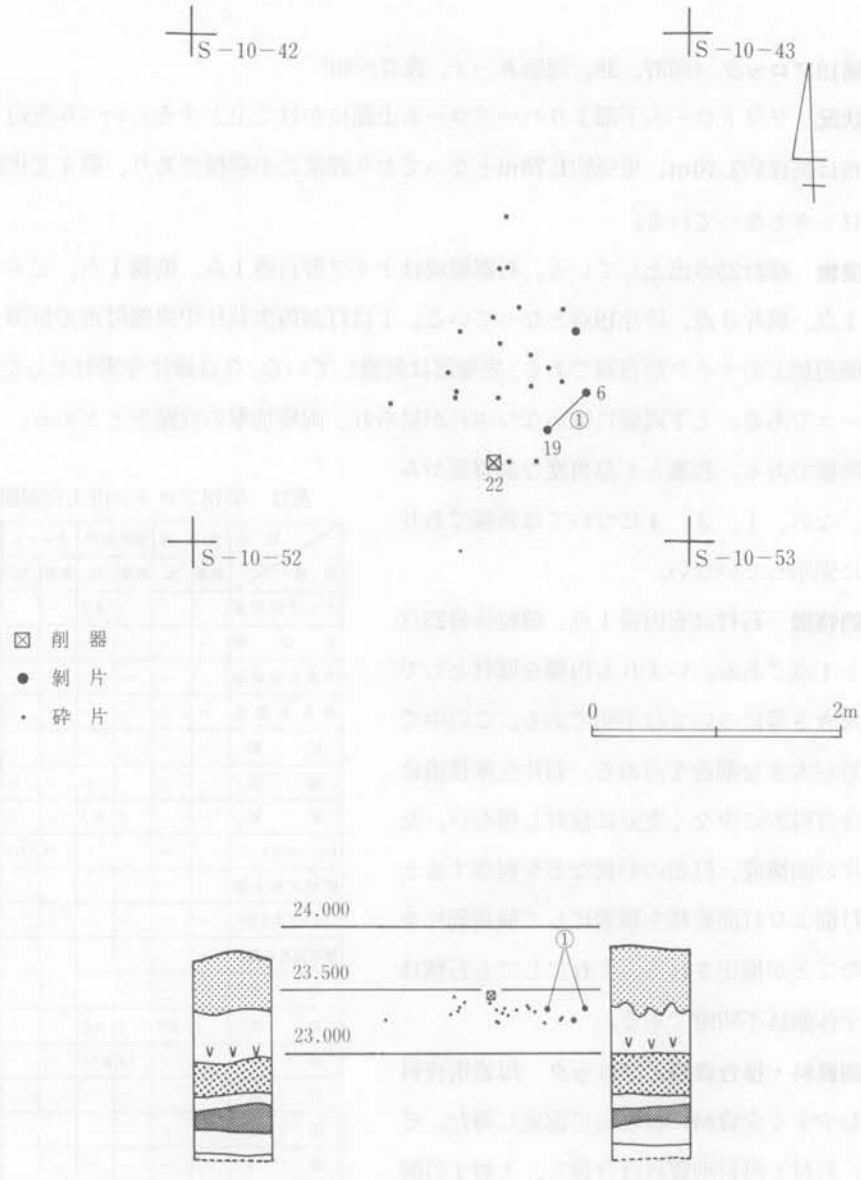


図37 第18ブロック遺物出土状況図

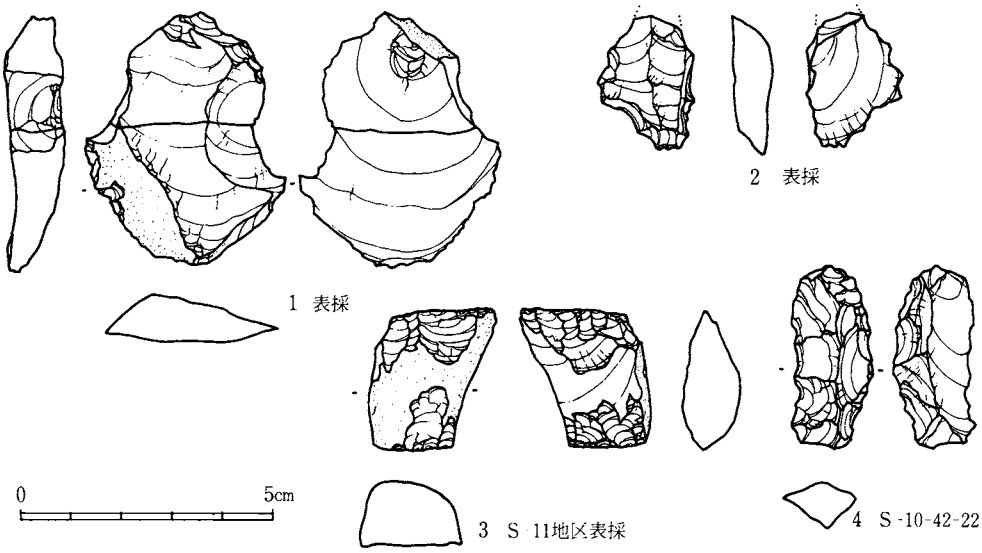


図38 第18ブロック出土遺物実測図

表38 第18ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
細粒砂岩1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	2	19	—	—	23
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	3	19	—	—	25

表39 第18ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	細粒砂岩1	剥片2	(S−10−42−19) → (S−10−42−6)	2

表40 第18ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R−10地区表採	ナイフ形石器	2.7	1.9	0.7	—	3.5	図38−2	2側辺	有	不明	細粒砂岩
2	S−10−42−22	削器	3.5	1.5	0.9	—	5.4	図38−4	—	有	無	細粒砂岩
3	S−11地区表採	ピエス・エスキーユ	2.8	2.4	1.4	—	11.8	図38−3	—	無	無	チャート

9．第20ブロック（図39〜42、図版9−1、13、14−1、表41〜44）

出土状況 ハードローム上面に濃密に分布している。レベル的には第3文化層のブロックに比べ若干深い。レベル差 50 cm、平面分布では長径4.40m、短径2.80mであり密度の高い北東

側と低い南西側とに分かれる。剝片、砕片、石核、利器の別なく混在しており互いに分布の違いは見い出せない。

出土遺物　総計218点を数える。石器組成はナイフ形石器１点、掻器２点、２次加工のある剝片１点、使用痕のある剝片２点、剝片17点、砕片191点、石核３点、敲石１点となっている。１、２は掻器である。いずれも大形の黒曜石製横長剝片を素材としており急角度な刃部が形成されている。いずれも欠損品である。３は敲石の破損品で、一端に敲打痕がある。

表41　第20ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		砂岩		チャート		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	0.6	—	—	—	—	—	—	1	0.5
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	2	1.1	—	—	—	—	—	—	2	0.9
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピェス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	0.6	—	—	—	—	—	—	1	0.5
使用痕ある剝片	2	1.1	—	—	—	—	—	—	2	0.9
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	9	5.1	3	9.7	—	—	5	45.5	17	7.8
砕片	160	91.4	27	87.1	—	—	4	36.4	191	87.5
石核	—	—	1	3.2	—	—	2	18.2	3	1.4
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	1	100	—	—	1	0.5
計	175	80.3	31	14.2	1	0.5	11	50.5	218	100

技術的特徴　原石は黒曜石が角礫の他、安山岩、チャート、砂岩はいずれも円礫となっている。剝片生産技術は２通りみられる。１つは両設打面（平坦打面、自然面打面）より、不定形剝片を生産している。打面再生が一回行われている。生産された剝片のうち大形の剝片は抜きとられ存在しない(接合資料２)。いま１つは自然面を打面として求心的に加撃し剝片を生産している。結果として円盤形石核が出来上る。この円盤形石核は、第14ブロック（No.8）に類似する（接合資料１)。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材としては黒曜石、安山岩、砂岩、チャート等が見られる。このうち石材としては黒曜石が圧倒的な割合を占める。母岩別資料の構成は黒曜石１種、チャート１種、安山岩２種、砂岩１種である。黒曜石は肉眼的観察ではすべて同一母岩と思われ、利器はすべて黒曜石によって占められているが、チャート、安山岩は剝片生産の段階にと

表42　第20ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピェス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石１	1	—	—	—	—	—	2	—	—	1	2	—	9	160	—	—	175
安山岩１	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	21	1		24
安山岩２	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂岩１	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
チャート１	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	2	2	—	9
計	1	—	—	—	—	—	2	—	—	1	2	—	17	183	3	1	210

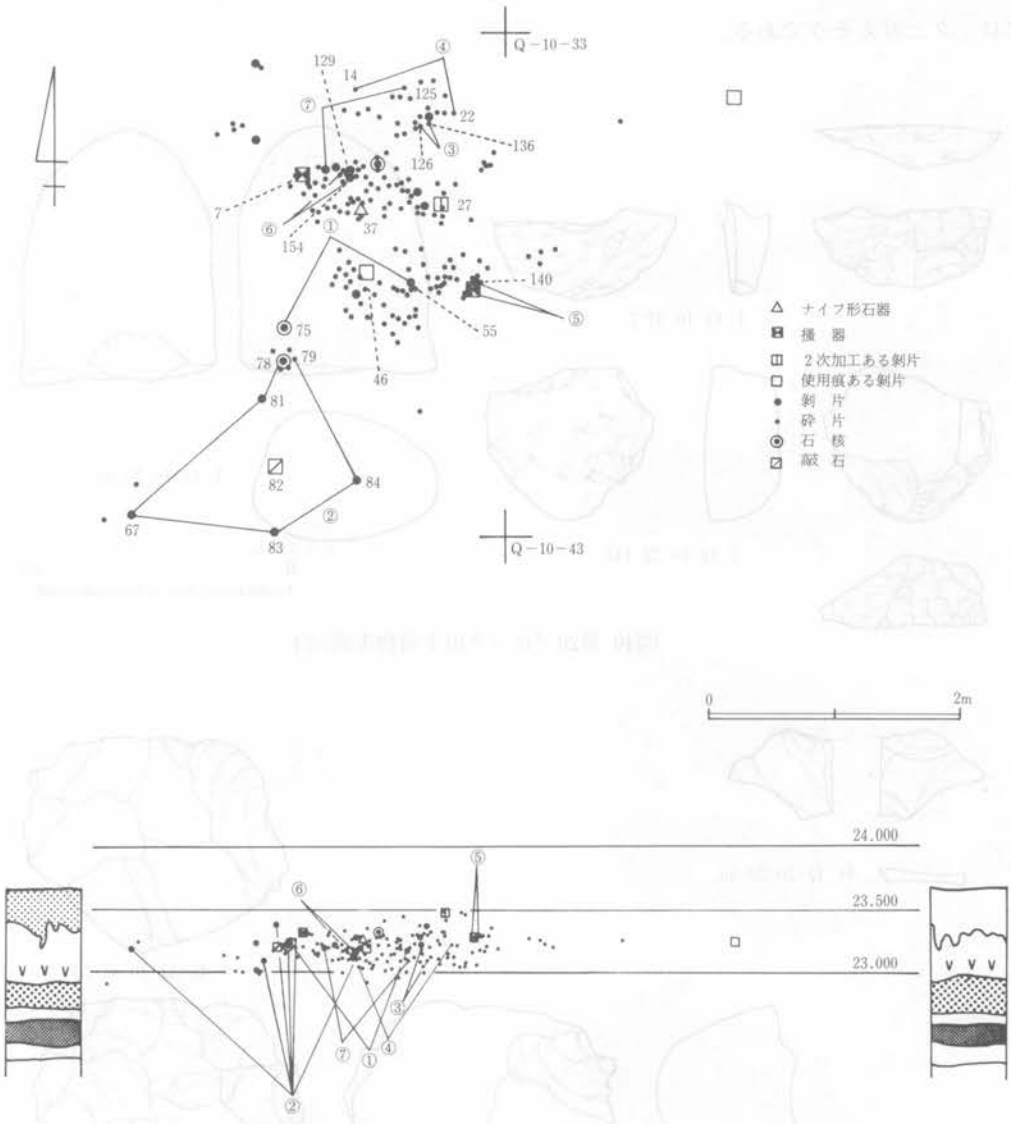


図39 第20ブロック遺物出土状況図

どまっている。接合資料は７例みられるが、チャート（接合資料１、２）に有意な資料があるものの、他は剥片同志や、もしくは剥片の分断資料となっている。接合資料１、２については、前頃で記述したので再述はさけたい。いずれも円礫を原材として剥片を生産しており、潜在的な節理に沿って不規則な割れ面を露呈し、比較的良好な目的剥片は、遺跡外へ搬出されているものと思われる。

まとめ　夾雑物を多量に含んだ漆黒色の黒曜石を主要な石材としたブロックである。ブロック内の石器群の分布は稠密であり、利器の多くは破損し機能の終焉をうかがわせブロック内で

は接合しない。また石器の素材となりうる様な良好な剥片がない。したがって、廃棄の色濃いブロックと言えそうである。

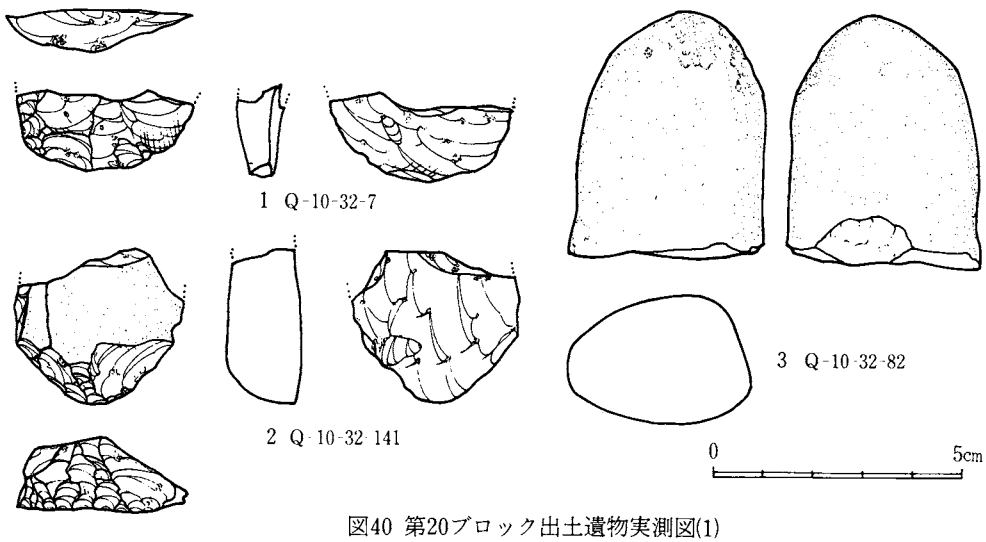


図40 第20ブロック出土遺物実測図(1)

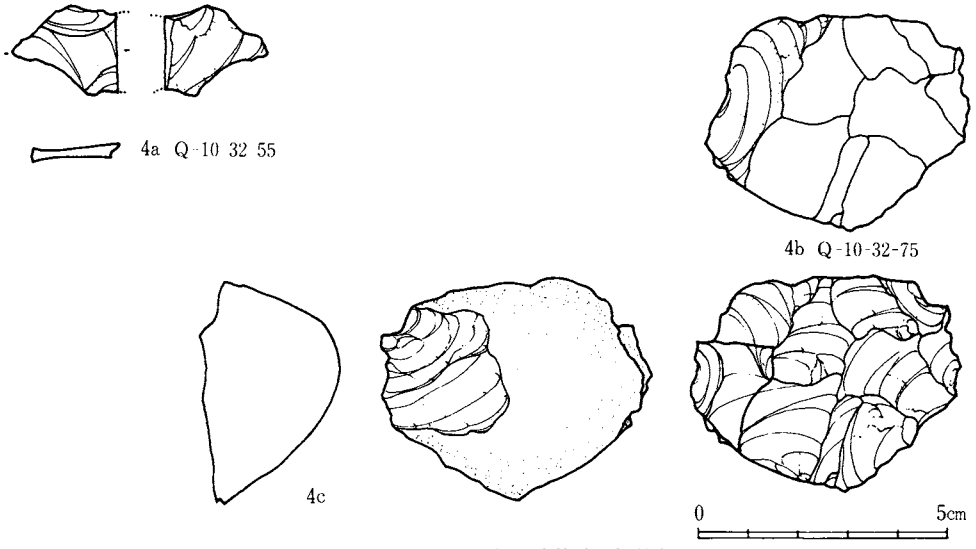


図41 第20ブロック出土遺物実測図(2)

表43 第20ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	チャート1	剥片1 石核1	(Q-10-32-55)(剥片)→(Q-10-31-75)(石核)	2
2	2	チャート1	剥片5 石核1	(Q-10-32-84+Q-10-32-79)(打面再生剥片)→ (Q-10-32-81)(剥片)→(Q-10-32-83)(剥片)→ (Q-10-32-78)(石核) (Q-10-32-67)(剥片)	6

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
3	3	安山岩 1	剥片（先端部左右分断）	(Q－10－32-126)＋(Q－10－32-136)	2
4	4	安山岩 1	剥片 2	(Q－10－32-14) → (Q－10－32-22)	2
5	5	黒曜石 1	掻器＋断片(ハジケ)	(Q－10－32-140)＋ (Q－10－32-141) (掻器)	2
6	6	黒曜石 1	剥片（基部＋先端部）	(Q－10－32-154)＋ (Q－10－32-129)	2
7	7	黒曜石 1	剥片（左右分断）	(Q－10－32-125)＋ (Q－10－32-10)	2

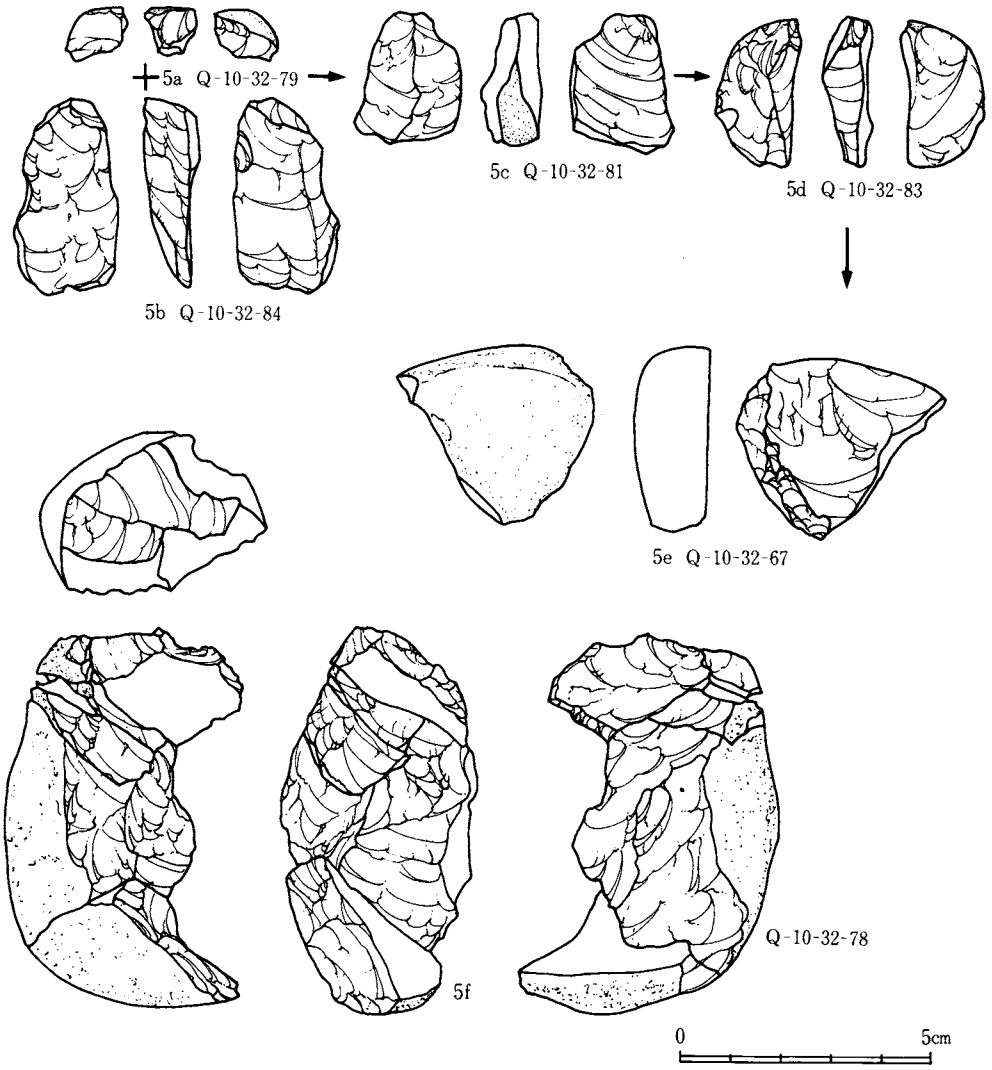


図42 第20ブロック出土遺物実測図(3)

表44　第20ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q－10－32－37	ナイフ形石器	1.1	0.4	0.3	不明	0.2	——	不明	有	無	黒曜石
2	Q－10－32－7	掻器	1.8	3.6	0.9	—	4.2	図40－1	—	有	無	黒曜石
3	Q-10-32-141	掻器	2.9	3.4	1.4	—	13.8	図40－2	—	有	無	黒曜石
4	Q－10－32－46	使用痕ある剝片	1.4	1.7	0.5	—	1.0	——	—	有	有	黒曜石
5	Q－10－33－6	使用痕ある剝片	4.1	4.1	0.9	—	9.5	——	—	無	有	黒曜石
6	Q－10－32－27	二次加工ある剝片	1.0	1.0	0.9	—	0.8	——	—	有	無	黒曜石
7	Q－10－32－82	敲石	4.9	3.7	2.4	—	75.4	図40－3	—	有	無	砂岩
8	Q－10－32－17	石核	4.4	2.7	0.8	—	11.1	——	—	無	無	安山岩
9	Q－10－32－75	石核	4.1	4.8	2.6	—	50.1	図41-4b	—	無	無	チャート
10	Q－10－32－78	石核	3.0	5.4	4.4	—	62.7	図42-5f	—	無	無	チャート

10. 第21ブロック（図43～45、図版9－2、14－1、表45～48）

出土状況　ソフトローム下面からハードローム上面にかけてレベル差約 30 cm で遺物が集中している。全体に数量が少ない。平面分布では長径5.00m、短径2.00mであり散漫な分布状況を呈する。

出土遺物　総計13点ある。全体に数量が少なく、充分な分析が出来ない。石器組成はナイフ形石器2点、角錐状石器1点、剝片8点、砕片1点、石核1点となっている。1は角錐状石器の欠損品である。ぶ厚い剝片を素材として2側辺に急角度な調整痕が見られる。2はナイフ形石器である。剝片の1側片に刃つぶし加工がほどこされている。

表45　第21ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	安山岩 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	(2)	15.4	2	15.4
角錐状石器	1	7.7	1	7.7
木葉形尖頭器	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—
削器	—	—	—	—
ピェス・エスキーユ	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—
剝片	8	61.5	8	61.5
砕片	1	7.7	1	7.7
石核	1	7.7	1	7.7
原石	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—
計	13	100	13	100

技術的特徴　石材は安山岩の円礫を使用としている。接合資料1によれば平坦な両設打面より縦長剝片を生産している状況が看取され、生産された剝片の多くはブロック外に搬出されている。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材はすべて安山岩であり母岩別資料の識別は困難であったが、自然面の違いによってかろうじて2つの資料を識別し得た。安山岩1は接合資料1を含む母岩別資料である。剝片生産により石器調整を具象している。

まとめ　数量、分布範囲において本ブロックは極めて小規模

なブロックであるが、母岩別資料安山岩１より剥片生産から石器調整を反映したブロックと言えよう。

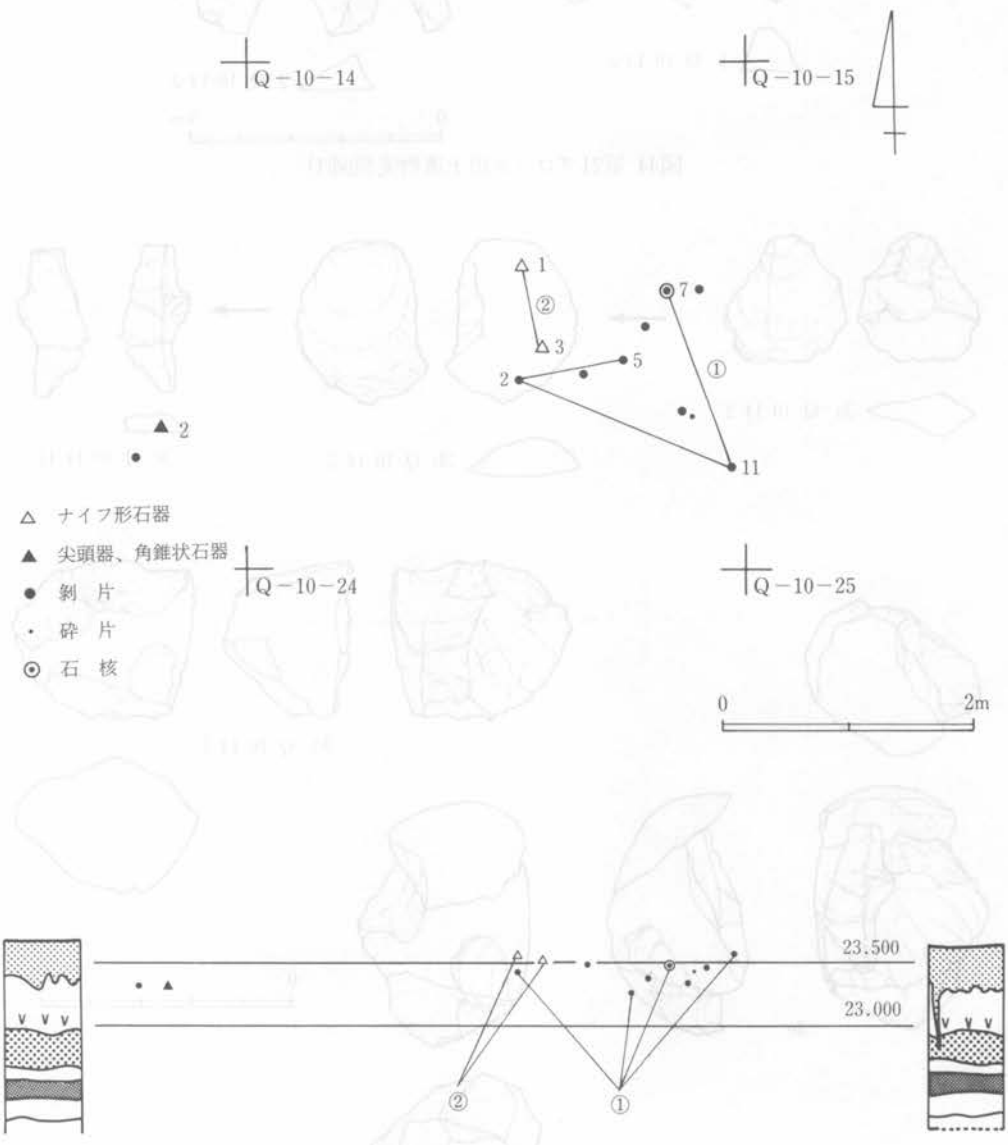


図43 第21ブロック遺物出土状況図

表46 第21ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
安山岩１	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	8
安山岩２	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
計	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	1	—	10

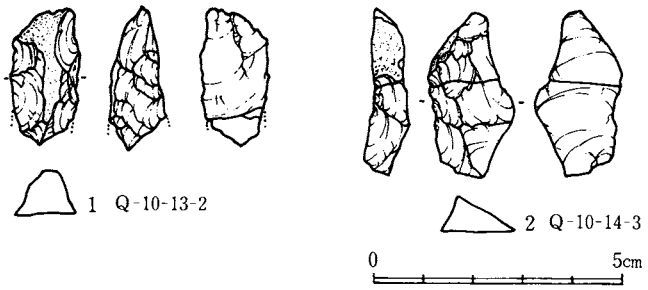


図44 第21ブロック出土遺物実測図(1)

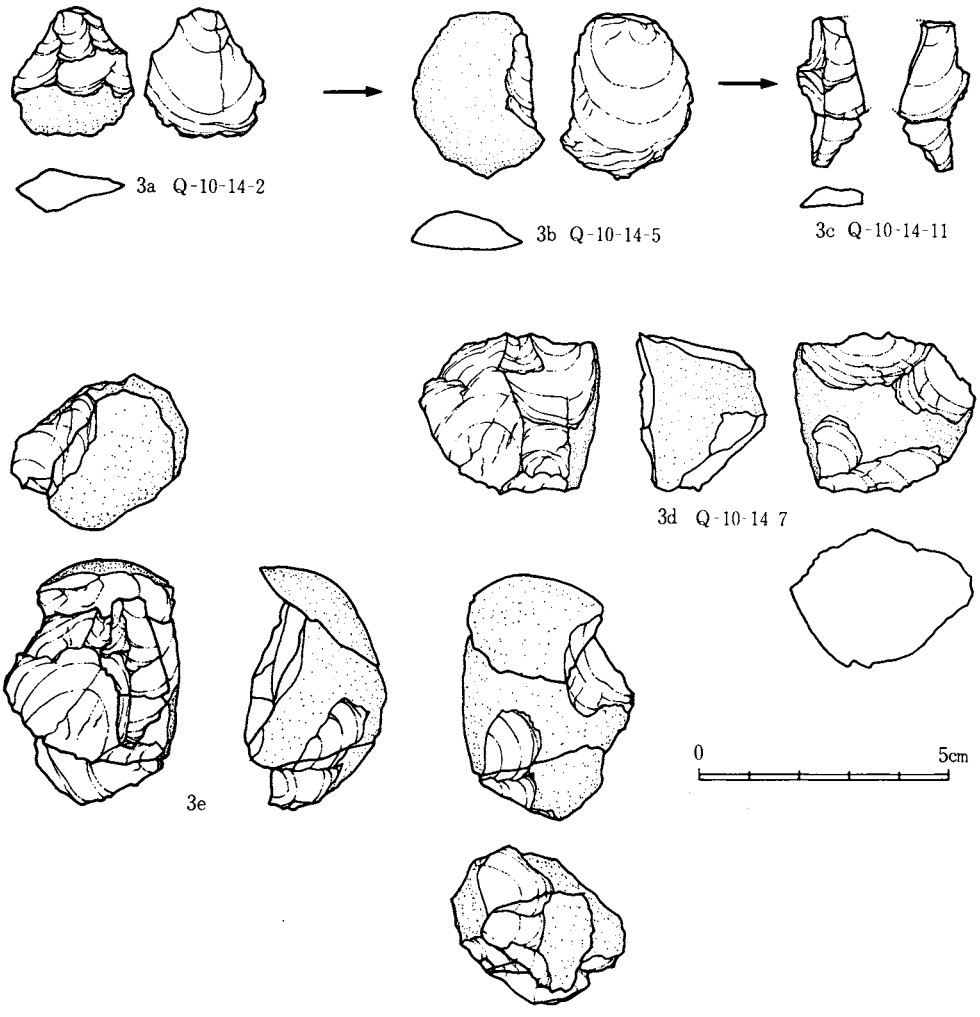


図45 第21ブロック出土遺物実測図(2)

表47 第21ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	安山岩 1	打面作出剥片 2 剥片 1 石核 1	{(Q-10-14-5) (Q-10-14-?)} →(Q-10-14-11)→(Q-10-14-7)(石核)	4

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
2	2	安山岩 2	ナイフ形石器 (基部＋先端部)	(Q－10－14-3)＋(Q－10－14-1)	2

表48　第21ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q－10－14－1 Q－10－14－3	ナイフ形石器	3.3	1.7	0.8	350	39	図44－2	1側辺	無	無	安山岩
2	Q－10－13－2	角錐状石器	2.8	1.4	1.1	—	3.9	図44－1	—	有	無	安山岩
3	Q－10－14－7	石核	2.0	3.5	2.9	—	28.7	図45－3	—	無	無	安山岩

11. 第22ブロック（図46、47、図版9－3、表49～52）

出土状況　ハードローム上面に散漫に分布している。レベル差約 40 cm、平面形長径3.50m、短径2.80mで、他のブロックに比べ小規模である。

出土遺物　総計24点出土している。石器組成は彫刻刀形石器1点、掻器1点、剝片12点、砕片9点、敲石1点となっている。1は掻器である。板状の厚みのある大形剝片を素材しており、調整は先端部および左側辺基部にみられる。角度は急角度で60°～80°となっている。2は敲石の半欠品である。一端に敲打痕が見られる。

技術的特徴　石器群の総量が少なく、石核、接合資料等が出土していないので不明瞭であるが、剝片の中には平坦打面で先端部主要剝離面側に内彎しているものが多くみられる。第14ブロック、第20ブロックに近似した剝片生産技術が推定される。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は黒曜石1種、安山岩1種、砂岩1種をかぞえる。安山岩、砂岩は各1点ずつであり、黒曜石が他を凌駕する。黒曜石1は夾雑物を大量に含み漆黒色の母岩である。石核は欠くものの剝片生産より石器調整を反映しているものと推定される。接合資料は黒曜石の中に1例みられ、これは、横長剝片同志の接合資料である。

まとめ　小規模なブロックである。母岩別資

表49　第22ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石 数量	%	安山岩 数量	%	砂岩 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	1	4.5	—	—	—	—	1	4.2
削器	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	1	4.5	—	—	—	—	1	4.2
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	11	50.0	1	100	—	—	12	50.0
砕片	9	41.0	—	—	—	—	9	37.4
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	1	100	1	4.2
計	22	91.7	1	4.2	1	4.2	24	100

料の中で主体をなす黒曜石は石核を欠き他のブロックへの移動を示唆しており、同一母岩を保有する隣接の第2ブロックとの母岩の相関関係が暗示される。

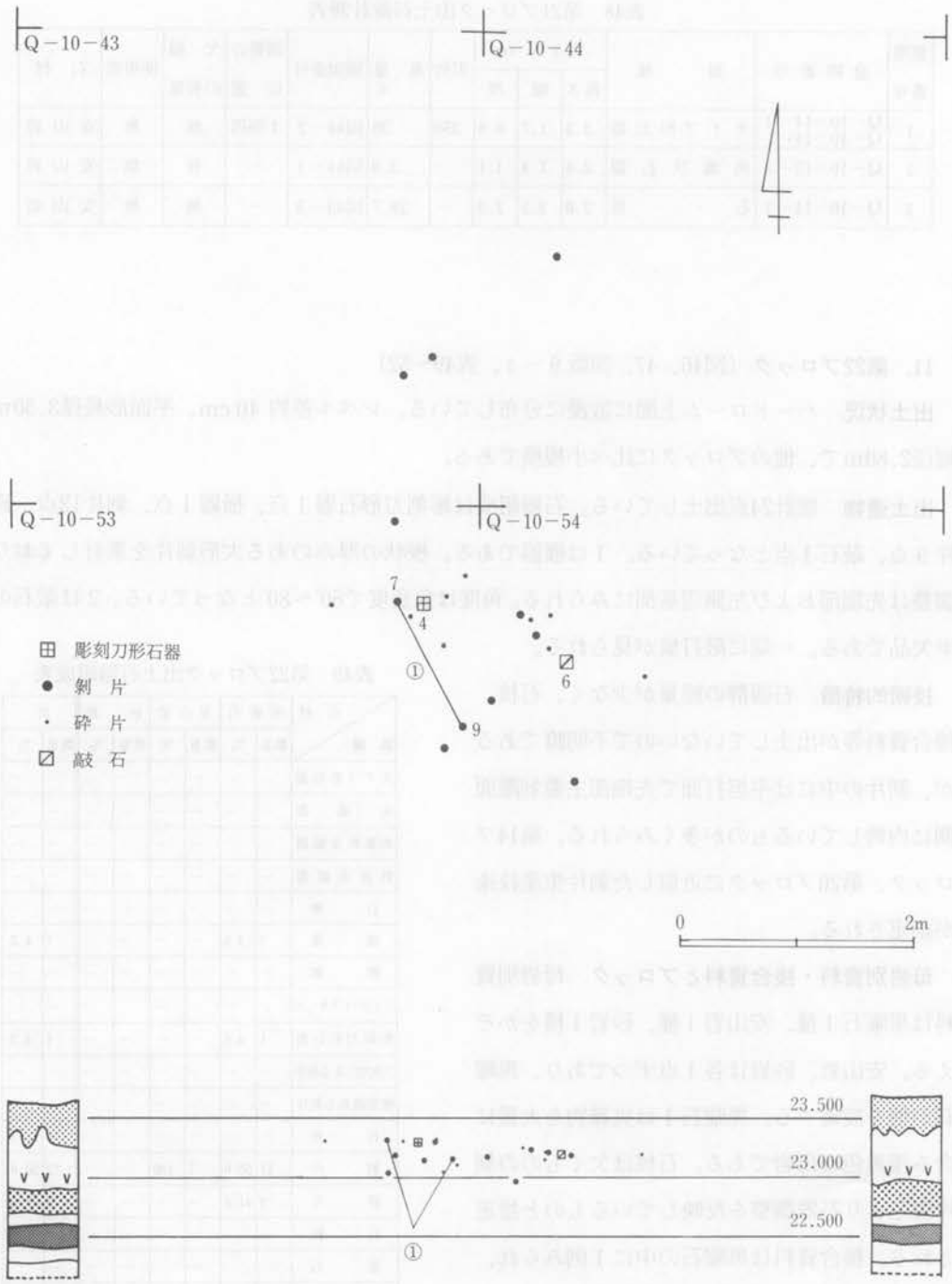


図46 第22ブロック遺物出土状況図

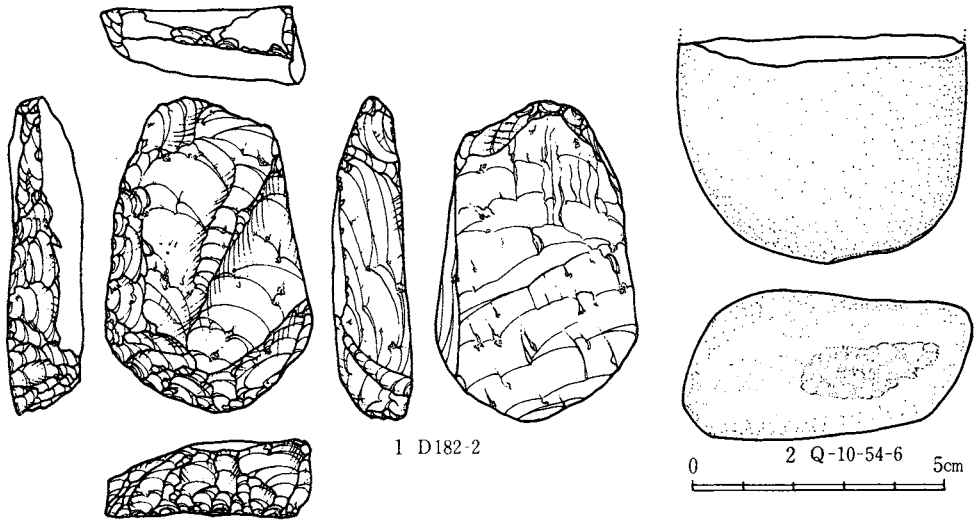


図47 第22ブロック出土遺物実測図

表50 第22ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	11	9	—	—	22
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	12	9	—	1	24

表51 第22ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石 1	剥片（側辺部） 剥片	(Q—10—53—7)→(D182—1)+(Q—10—53—9)	3

表52 第22ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q—10—53—4	彫刻刀形石器	2.0	1.3	3.1	—	7.9	—	—	無	無	黒曜石
2	D182—2	掻器	6.2	3.9	1.5	—	41.5	図47—1	—	無	無	黒曜石
3	Q—10—54—6	敲石	4.7	5.4	3.0	—	112.8	図47—2	—	有	無	砂岩

12. 第27ブロック（図48、49、図版10—1、14—1、表53～56）

出土状況 ソフトローム下部よりVI層上部に至るまで広範囲に分布しておりレベル差（約50cm）が大きいが、とりわけソフトローム下部よりハードローム上部に濃密に分布している。平

面形は径5.00m×3.30mのほぼ楕円形を呈する。石核は外縁部に見られるが、利器は内外を問わず剥片、砕片とともにブロック内全域にわたる。位置的には遺跡北東部に孤立して存在する。

出土遺物　総計47点出土した。石器組成はナイフ形石器4点、2次加工ある剥片3点、剥片21点、砕片18点、石核1点となっている。1～4はナイフ形石器で、いずれも横長剥片を素材としており、1、3は2側辺加工、2、4は1側辺加工となっている。3、4はいわゆる角錐状石器に近い。5、6は2次加工ある剥片である。剥片の一部に部分的に2次加工がみられる。

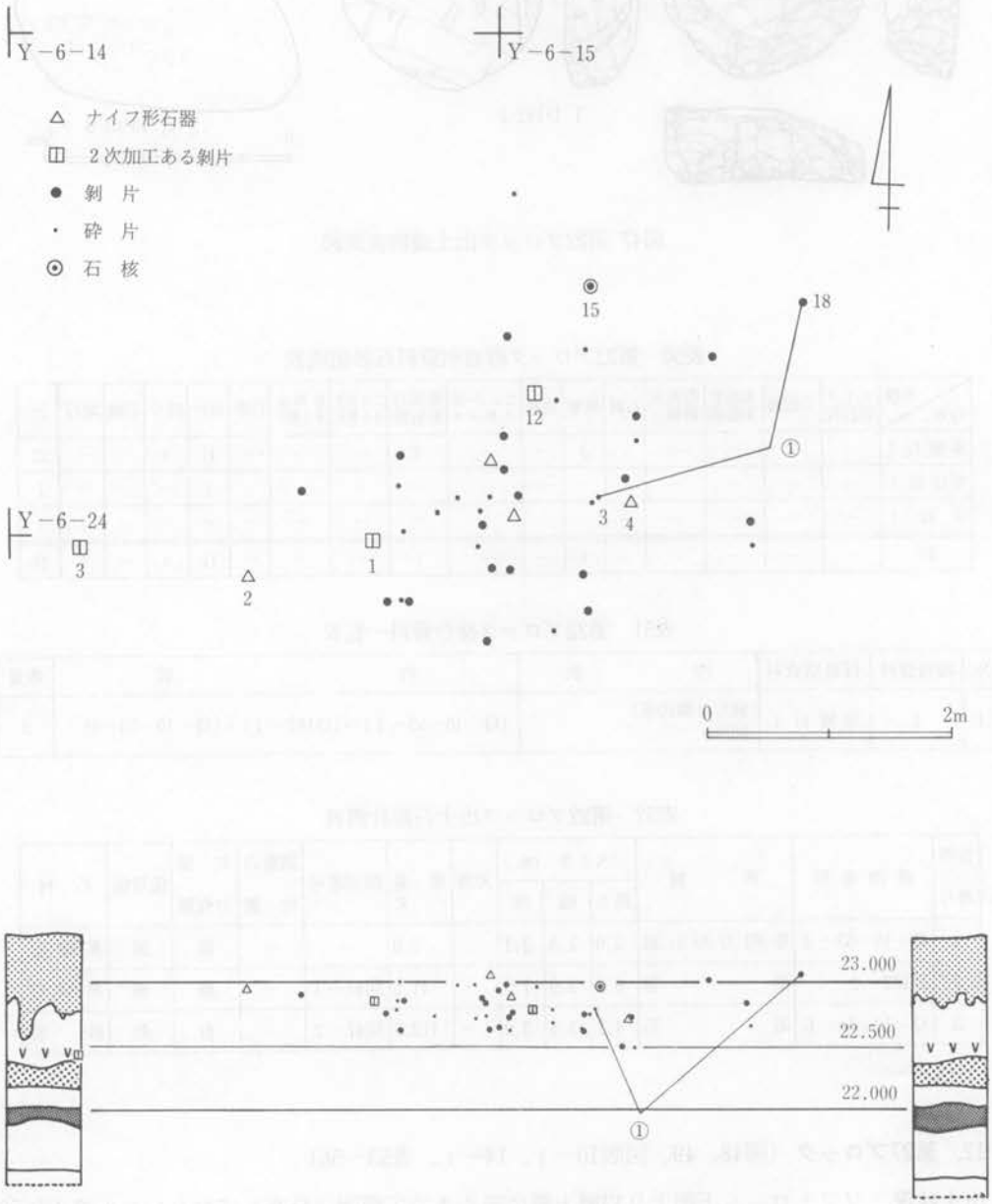


図48 第27ブロック遺物出土状況図

技術的特徴　黒曜石の角礫と安山岩の円礫とが原材として用いられている。剝片生産技術は剝片の背面側の面構成によれば、複数の互いに異なった方向からの加撃痕が観察される。また打面は平坦であり、先端部は主要剝離面側へ内彎している。したがって、石核は円盤形石核に近いものが予想される。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材は黒曜石と安山岩の2種に限定される。母岩別資料も同様に、黒曜石1種、安山岩1種が識別された。黒曜石1は夾雑物を大量に含み粗悪な材質である。石器群は利器が少なく、剝片、砕片が多い。ここでは器種ごとの石材選択の傾向が窺える。接合資料は一例あり、これは剝片が石核より剝離の際、加撃点より加撃方向に沿って分断された例である。

まとめ　石器組成はナイフ形石器を主体として、これに剝片、砕片、石器等が加わっている。母岩別資料に他のブロックとの近似性をうかがえるものはなく、孤立したブロックと言えよう。

表53　第27ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	4	28.6	4	8.5
尖頭器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	3	9.1	—	—	3	6.4
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	16	48.5	5	35.7	21	44.7
砕片	13	39.3	5	35.7	18	38.3
石核	1	3.0	—	—	1	2.1
原石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	33	70.2	14	29.8	47	100

表54　第27ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	16	13	1	—	33
安山岩1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5	—	—	14
計	4	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	21	18	1	—	47

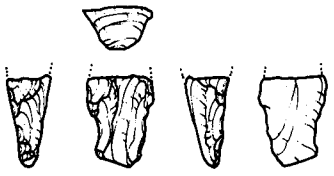
表55　第27ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石1	剝片（左右分断）	（Y−6−15−3）+（Y−6−15−18）	2

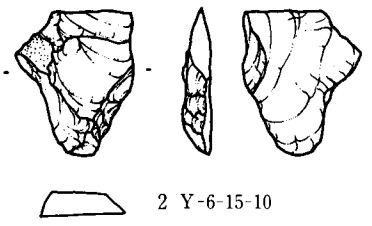
表56　第27ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Y−6−14−11	ナイフ形石器	3.3	1.4	1.0	40°	4.7	図49−4	1側辺他辺折断	無	無	安山岩
2	Y−6−15−4	ナイフ形石器	1.7	1.3	0.8	—	1.6	図49−1	2側辺	有	無	安山岩
3	Y−6−15−10	ナイフ形石器	2.9	2.4	0.6	40°	3.7	図49−2	1側辺	無	無	安山岩

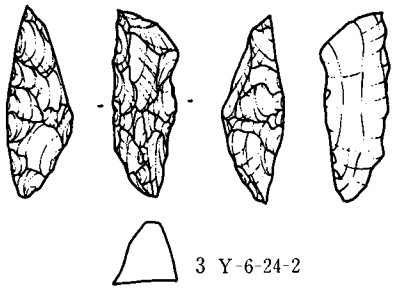
整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
4	Y－6－24－2	ナイフ形石器	3.7	1.3	1.2	60°	8.1	図49－3	2側辺	無	無	安山岩
5	Y－6－15－12	二次加工ある剝片	2.2	2.4	0.8	－	3.8	図49－5	－	有	無	黒曜石
6	Y－6－24－1	二次加工ある剝片	2.1	2.1	0.7	－	2.2	図49－7	－	無	無	黒曜石
7	Y－6－24－3	二次加工ある剝片	2.4	3.0	1.2	－	8.1	図49－6	－	無	無	黒曜石
8	Y－6－15－15	石核	2.3	1.7	2.2	－	11.9	－	－	無	無	黒曜石



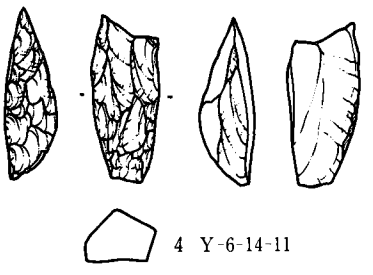
1 Y-6-15-4



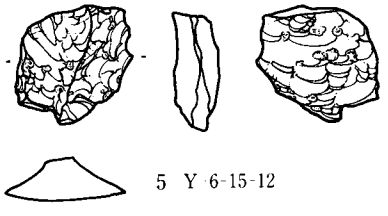
2 Y-6-15-10



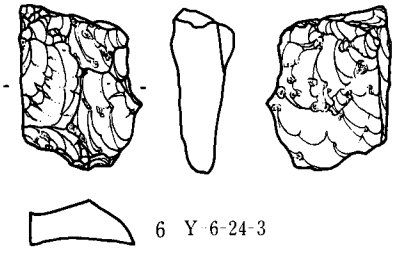
3 Y-6-24-2



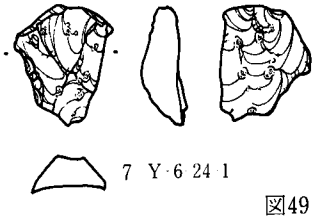
4 Y-6-14-11



5 Y-6-15-12



6 Y-6-24-3



7 Y-6-24-1

図49 第27ブロック出土遺物実測図

13. 第３文化層ブロック外出土資料（図50、51、表57、58）

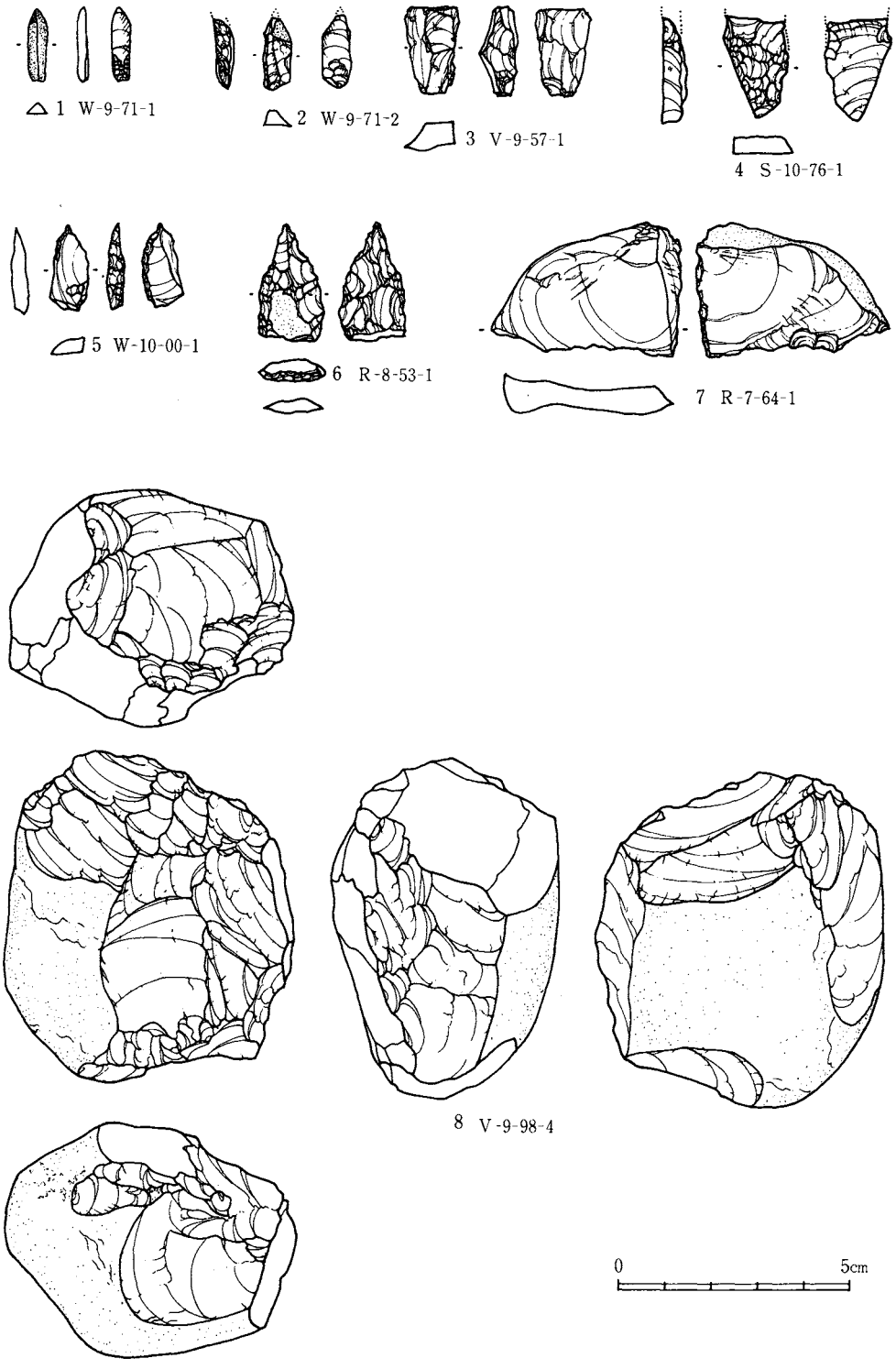


図50 第３文化層ブロック外出土遺物実測図(1)

ブロック外より総計52点出土した。石器群は、ナイフ形石器４点、角錐状石器２点、石錐１点、２次加工のある剝片３点、使用痕のある剝片１点、剝片25点、砕片12点、石核４点となっている。

出土遺物　１～４、10はナイフ形石器である。１は細石刃様の素材の主要剝離面側にインバースリタッチ、及び先端部の一部に刃つぶし加工がほどこされている。２は１側辺加工、10は２側辺加工、３は左側辺を折断、右側辺が刃つぶし加工となっている。４は右側辺に刃つぶし加工、先端部が欠損、５、９は小形の尖頭器である。５は石錐とも考えられる。６は石錐で左側辺

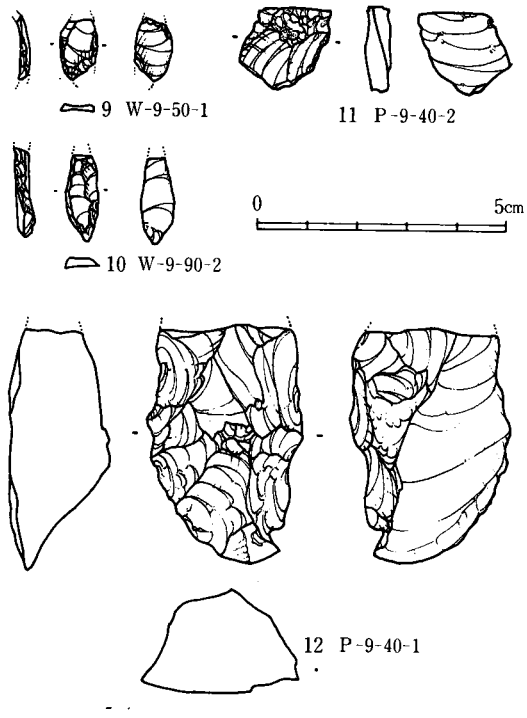


図51 第３文化層ブロック外出土遺物実測図(2)

表57　第３文化層ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		玄武岩		珪質頁岩		頁岩		砂岩		チャート		メノウ		凝灰岩		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	3	17.6	—	—	—	—	—	—	1	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	7.6
角錐状石器	1	5.9	—	—	—	—	—	—	1	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3.8
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	1	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.9
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	2	11.8	—	—	—	—	—	—	1	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	5.8
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	1	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.9
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	5	29.4	3	60.0	2	66.7	1	50.0	5	41.7	5	100	3	60.0	—	—	1	100	—	—	25	48.1
砕片	5	29.4	2	40.0	1	33.3	—	—	2	16.7	—	—	2	40.0	—	—	—	—	—	—	12	23.2
石核	1	5.9	—	—	—	—	1	50.0	—	—	—	—	—	—	1	100	—	—	1	100	4	7.7
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	17	32.7	5	9.6	3	5.8	2	3.8	12	23.1	5	9.6	5	9.6	1	1.9	1	1.9	1	1.9	52	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	75.0	—	—	—	—	3	25.0	12	

に樋状剝離面が存在する。7、12は使用痕のある剝片である。7は下縁部にみられる。相対的に大きな二つの剝離面は新しい。8、13は石核である。8は円礫を原材として加撃転移が頻繁にみられる。13は剝片素材の石核であり、主要剝離面より加撃し横長剝片を生産している。

表58　第3文化層ブロック外出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	S−10−76−1	ナイフ形石器	2.3	1.4	0.6	—	1.7	図50−4	2側辺	有	無	黒曜石
2	N−9−71−1	ナイフ形石器	1.7	0.4	0.2	40°	0.2	図50−1	インバースリタッチ	無	無	黒曜石
3	W−9−71−2	ナイフ形石器	1.6	0.7	0.4	45°	0.4	図50−2	1側辺	有	無	黒曜石
4	W−9−90−2	小形ナイフ	1.7	0.7	0.2	30°	0.4	図51−10	2側辺	有	有	頁岩
5	W−10−00−1	尖頭器	1.7	0.8	0.4	—	0.5	図50−5	—	有	無	頁岩
6	W−9−50−1	小形尖頭器	1.3	0.8	0.2	—	0.2	図51−9	—	有	無	黒曜石
7	R−8−53−1	石錐	2.5	1.5	0.5	—	1.5	図50−6	—	無	無	頁岩
8	R−7−64−1	使用痕ある剝片	2.5	4.1	0.8	—	9.2	図50−7	—	無	無	頁岩
9	P−10−6−1	二次加工ある剝片	2.9	2.4	1.7	—	7.8	—	—	無	無	黒曜石
10	V−9−57−1	二次加工ある剝片	1.9	1.2	0.7	—	1.5	図50−3	—	有	無	黒曜石
11	P−9−40−2	二次加工ある剝片	1.7	1.8	0.5	—	1.3	図51−11	—	有	無	黒曜石
12	Q−10−3−2	石核	3.2	2.8	1.2	—	9.5	—	—	無	無	黒曜石
13	S−11−26−1	石核	5.5	7.1	2.8	—	86.2	—	—	無	無	瑪瑙
14	V−9−98−4	石核	4.7	6.1	6.3	—	280.2	図50−8	—	有	無	不明
15	P−9−40−1	石核	4.6	3.1	2.1	—	27.3	図51−12	—	無	無	珪質頁岩

14. 第3文化層のまとめ

ソフトローム下部よりハードローム上部にかけてみられる石器群は、S−12〜18、20〜22、27ブロックである。11ブロックのうち母岩別資料の上で他のブロックと比べ独立したブロックはS−15、S−17、S−18、S−27である。これらの母岩はいずれも遺跡外より搬入され自己完結的なブロックと言える。

母岩については、互いに共通性をもつブロックとしてS−12、14、16、20、22の5ブロックがある。共に夾雑物を大量に含んだ特徴的な黒曜石を主体的な母岩としている。これらはすべて石器群についても周辺加工の尖頭器、切り出し形ナイフ、掻器などを具備し、同一時期の所産を思わせる要素が多分にある。

15ブロックは、原石から剝片、砕片、石核、成品に至るまで一連の石器製作工程をすべて反映している例であり、中に26の母岩別資料をもち、他のブロックに比べきわめて豊富な内容を持っている。15ブロックの母岩のうち安山岩を除けば他のブロックにみられない母岩で構成さ

れており、内容からみれば自己完結的なブロックと言える。また、このブロックは加熱の痕跡をもつ破砕礫を数多く含み礫群としての性格も考えられるが、炭化物、焼土等は検出されず原位置を保っている可能性は低い。第17ブロックはナイフ形石器とピエス・エスキーユ、削器を含むブロックであるが、ともに数量的な保証はない。

第5節　第　4　文　化　層

1．第1ブロック（図52～54、図版14—2、15—1、2、18、表59～62）

出土状況　本ブロックは台地平坦部にあたり、遺物はほぼ水平に堆積しているVI層上部からVIIa層にかけて分布しているが、VI層下部に集中して出土する傾向にある。平面形は長径5m、短径4.50mとなっており、密集した部分にはナイフ形石器、使用痕のある剝片、削器、ピエス・エスキーユ等の利器が集中しており、散漫な部分には剝片が多く分布している。

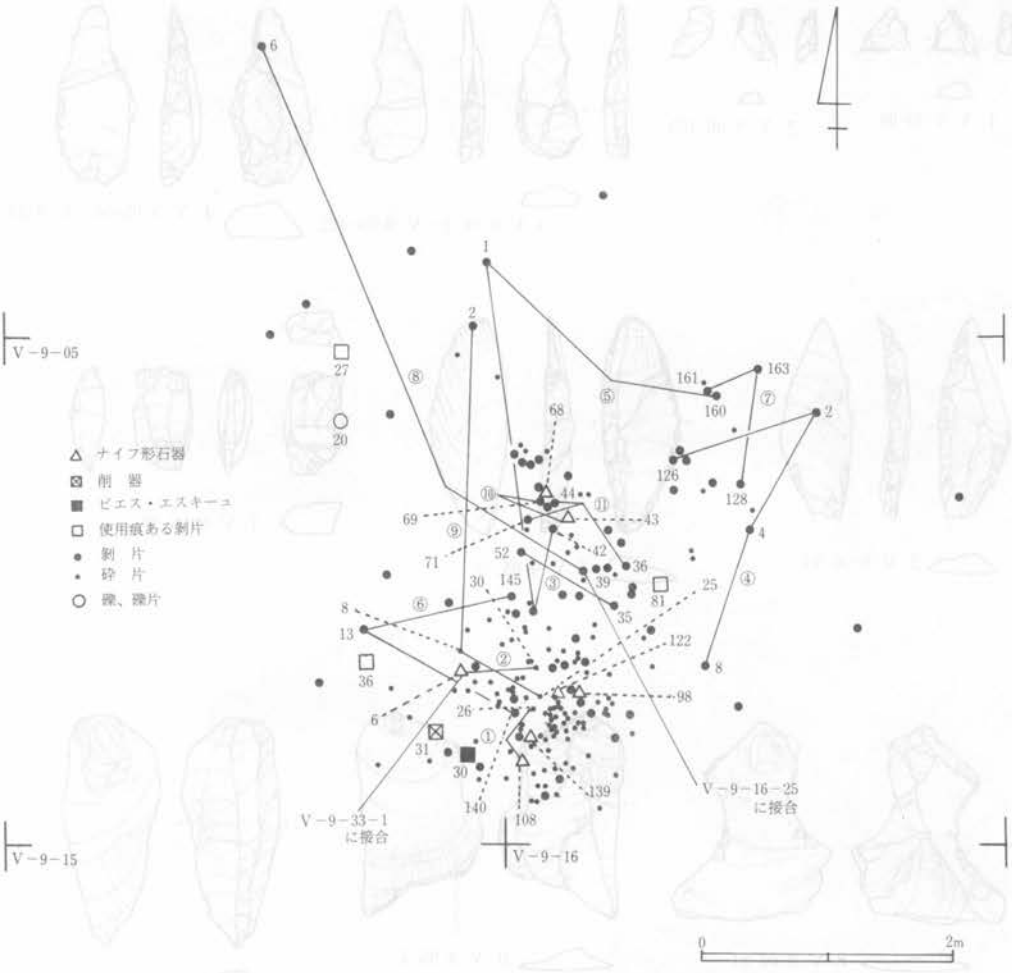
出土遺物　総計195点出土した。石器組成は、ナイフ形石器7点、削器1点、ピエス・エスキーユ1点、使用痕のある剝片3点、剝片37点、砕片146点となっている。1～5はナイフ形石器

表59　第1ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石 数量	黒曜石 %	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	チャート 数量	チャート %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	(2)(2)3	3.6	—	—	—	—	7	3.6
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	1	0.5	—	—	—	—	1	0.5
ピエス・エスキーユ	1	0.5	—	—	—	—	1	0.5
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	3	1.6	—	—	—	—	3	1.5
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	35	18.1	1	100	1	100	37	19.0
砕片	146	75.6	—	—	—	—	146	74.9
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	193	99.0	1	0.5	1	0.5	195	100

表60　第1ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	(2)2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	5
黒曜石2	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	3
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	2
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	21	—	—	41
黒曜石5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	4	—	—	6
黒曜石6	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	4	4	1(S-2)	—	11
黒曜石7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	4
黒曜石8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—	7
黒曜石9	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	7	—	—	—	—	—	1	1	—	—	3	—	33	36	—	—	82



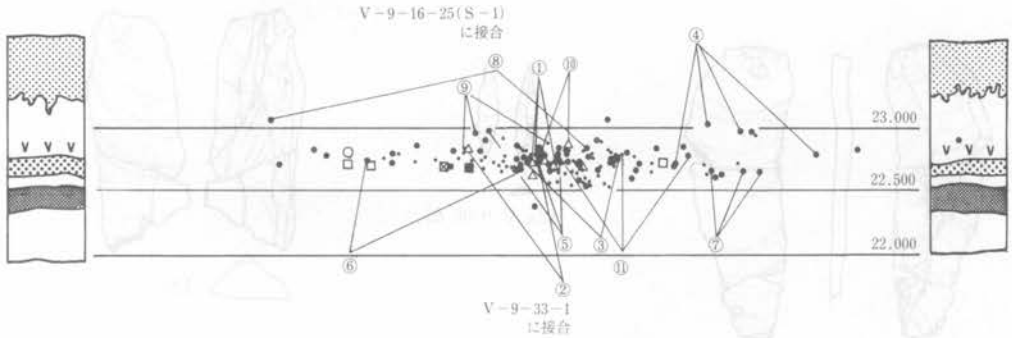


図52 第1ブロック遺物出土状況図

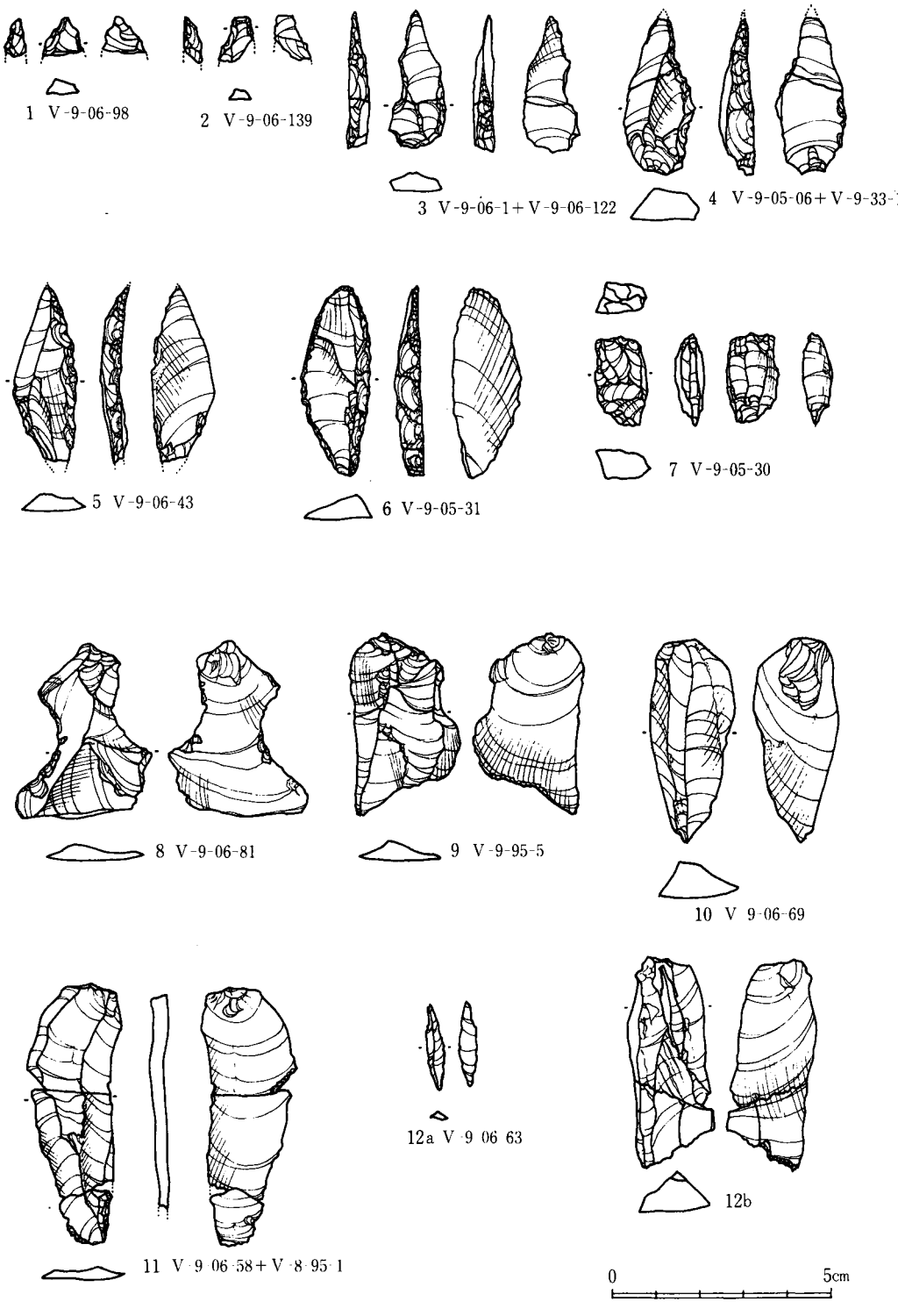


図53 第1ブロック出土遺物実測図(1)

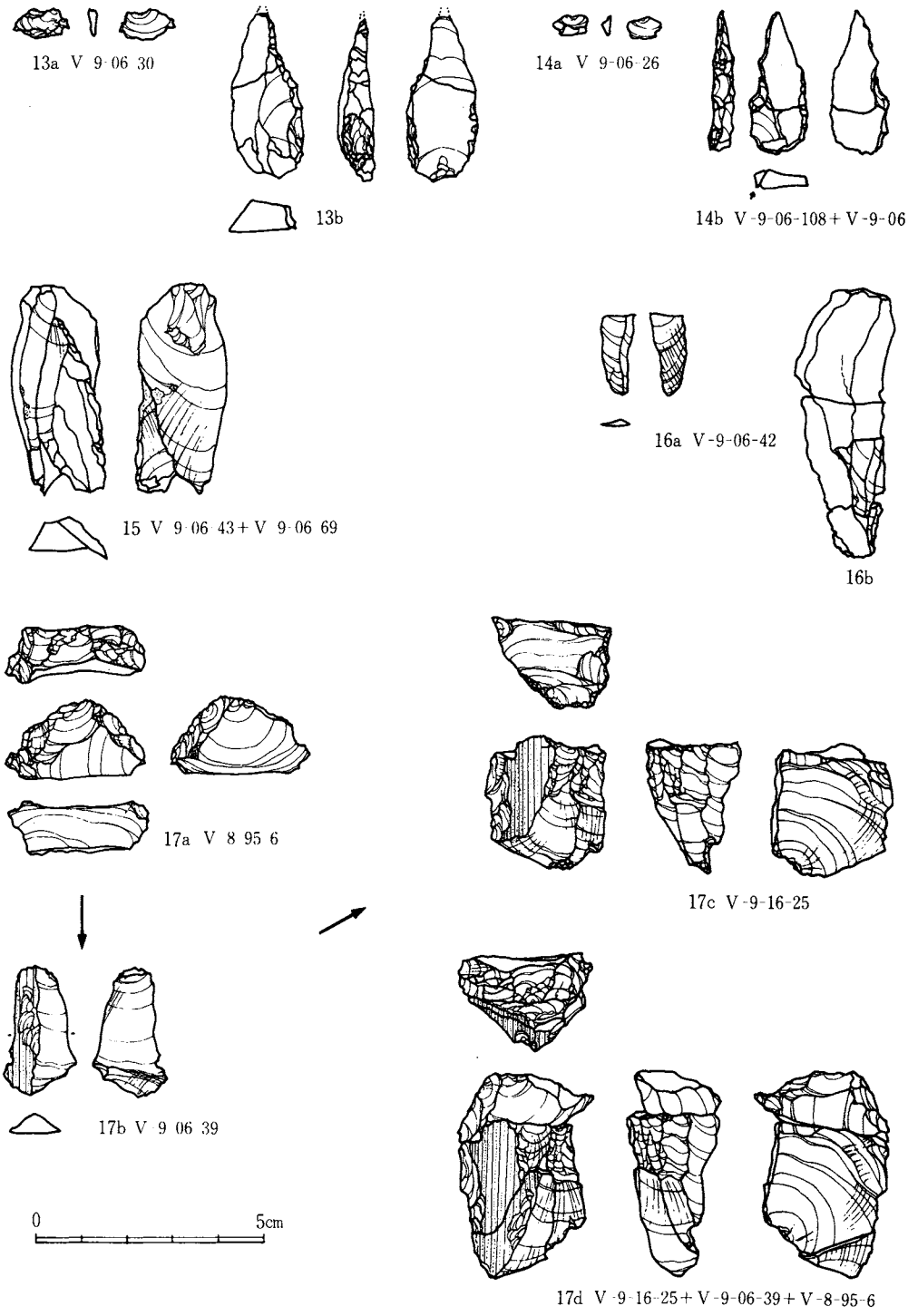


図54 第1ブロック出土遺物実測図(2)

表61　第1ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石1	ナイフ形石器（基部／先端部／加工片）	(V－9－06－108)＋(V－9－06－122)＋(V－9－06－26)	3
2	2	黒曜石2	ナイフ形石器（基部／先端部／加工片）	(V－9－33－1)＋(V－9－05－6)＋(V－9－06－30)	3
3	3	黒曜石4	剝片（基部、先端部）	(V－9－06－55)＋(V－9－06－35)	2
4	4	黒曜石4	剝片（基部、中間部） 剝片　2	(V－9－06－126)←(V－9－06－2)（基部)＋(V－9－06－4)（中間部）←(V－9－06－8)	4
5	5	黒曜石4	剝片（基部、中間部2） 剝片(先端部二次加工あり)	(V－8－95－1)＋(V－9－06－58)＋(V－9－06－160)←(V－9－06－42)（二次加工あり）	4
6	6	黒曜石4	剝片基部（断片3）	(V－9－06－140)＋(V－9－06－145)＋(V－9－05－13)	3
7	7	黒曜石4	剝片（基部、中間部） 剝片	(V－9－06－161)＋(V－9－06－163)←(V－9－06－128)（剝片）	3
8	8	黒曜石6	打面再生剝片 剝片、石核	(V－8－95－6)→(V－9－06－39)→(V－9－16－25)	3
9	9	黒曜石7	加工片3	(V－9－05－8)→(V－9－06－25)→(V－8－95－2)	3
10	10	黒曜石8	ナイフ形石器1 剝片1	(V－9－06－43)→(V－9－06－69)	2
11	11	黒曜石8	剝片 剝片（基部1、中間部2）	(V－9－06－36)（基部)＋(V－9－06－71)（中間部)＋(V－9－06－44)（中間部)←(V－9－06－63)	4

表62　第1ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	V－9－05－6 V－9－33－1	ナイフ形石器(先端) ナイフ形石器(基部)	3.9	1.5	0.7	45°	1.5	図53－4	1側辺	有	有	黒曜石
2	V－9－06－43	ナイフ形石器	3.9	1.5	0.4	45°	2.4	図53－5	2側辺	無	有	黒曜石
3	V－9－06－68	ナイフ形石器	0.7	0.3	0.1	—	0.1	—	—	有	無	黒曜石
4	V－9－06－98	ナイフ形(先端)	0.8	1.0	0.5	45°	0.1	図53－1	2側辺(一部)？	有	無	黒曜石
5	V－9－06－108 V－9－06－122	ナイフ形石器(基部) ナイフ形石器(頭部)	3.2	1.3	0.5	30°	1.2	図53－3	2側辺	有	無	黒曜石
6	V－9－06－139	ナイフ形石器(先端)	1.1	0.9	0.4	—	0.1	図53－2	2側辺(一部)？	有	無	黒曜石
7	V－9－05－31	削器	4.2	1.6	0.5	—	3.0	図53－6	—	無	無	黒曜石
8	V－9－05－27	使用痕ある剝片	2.2	1.3	0.4	—	0.8	—	—	有	有	黒曜石
9	V－9－05－33	使用痕ある剝片	2.5	1.8	0.6	—	2.2	—	—	無	有	黒曜石
10	V－9－06－81	使用痕ある剝片	4.1	3.2	0.5	—	4.3	図53－8	—	無	有	黒曜石
11	V－9－05－30	ピエス・エスキーユ	2.0	1.2	0.7	—	1.5	図53－7	—	無	無	黒曜石

である。1、2は先端部破片であり、3～5は2側辺加工のナイフ形石器である。3、4は中央部より折損した資料であり、上下に接合している。6は削器である、全周に2次加工が及ぶ

が右側辺の調整がナイフ形石器の2次加工と共通しており、ナイフ形石器の転用例かと推定される。7はピエス・エスキーユである。上下両端に微細なつぶれがみられる。8は使用痕のある剝片である。9～12は縦長剝片であり、ナイフ形石器の素材と考えられる。

技術的特徴　利器の石材はいずれも黒曜石である。黒曜石は角礫を原材としており、打面調整、打面再生とはさみ、縦長剝片を生産している。接合資料8は剝片生産技術の一端を示した資料であるが、打面再生剝片と石核、縦長剝片が接合している。また、接合資料10は、ナイフ形石器と剝片との接合例である。

母岩別資料・接合資料とブロック　石材は大きく黒曜石、チャート、頁岩にわかれる。母岩別資料は黒曜石9種、チャート、珪質頁岩各1種となっている。数量的には195点のうち黒曜石が193点と他の石材を圧倒的に凌駕している。接合資料は11例あるが、これらの中には剝片生産に関与するもの6例（接合資料4・5、7・8、10・11）、石器調整（特にナイフ形石器）に関与するもの3例（接合資料1・2、7）などが存在している。なお、ブロックを越えて接合した例が1例みられる。接合資料8の石核（V－9－16、25）がこれにあたり、第2ブロックに帰属する。

まとめ　本ブロックは黒曜石を石材として、ナイフ形石器の製作技術を反映したブロックである。第2ブロックの石核と、本ブロックの剝片との接合例があり、剝片生産技術をはじめとする技術基盤の類似性と時期的に近接していることが窺われる。

2．第2ブロック（図55～58、図版15－3、18、表63～66）

出土状況　VI層上部よりVIIa層に至るまで分布しており、最も密な部分はVI層下部である。全体の分布状況を東西、南北セクションで観察すると舟底状を呈し、あたかも窪地に堆積したかの様相である。しかしながら、調査時において住居跡、土壙等の遺構は検出できず、詳細は不明である。平面形は長径6.20m、短径4.50mとなっており、中央部に密な部分があり、外縁にむかうにしたがって漸減する。

出土遺物　総計404点出土した。石器組成はナイフ形石器5点、使用痕のある剝片2点、2次加工のある剝片1点、ピエス・エスキーユ3点、剝片42点、砕片345点、削片5点、石核1点となっている。器種が少なく石器製作に関連する石器群の色彩が濃い。1～5はナイフ形石器である。いずれも縦長剝片を素材としており急角度な刃つぶし加工を常態としている。1は2側辺加工で先端部が欠損する。2も2側辺加工、3は先端部破片、4は1側辺加工であり局部的である。5は左側辺の一部に刃つぶしがみられ、右側辺の主要剝離面側に刃こぼれが観察された。先端部は欠損する。なお石核については第1ブロックと接合関係にあり、第1ブロックの剝片、打面再生剝片とともに図示してある。

技術的特徴　技術的特徴が窺える資料としては、黒曜石、珪質頁岩を石材とするものに限ら

れる。1つは打面調整を行いつつ、時として打面再生をまじえ、縦長剥片を生産する剥片生産技術が優勢である。剥片生産基盤によって、生産されたナイフ形石器は全体に細身で狭長な形態のものが存在する。

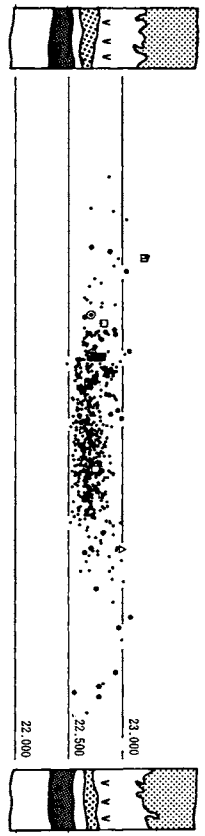
表63　第2ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩1		珪質頁岩		チャート		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	(2)3	1.3	—	—	—	—	—	—	5	1.2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	2	0.5	—	—	1	4.3	—	—	3	0.7
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	1	50	1	0.3
使用痕ある剥片	2	0.5	—	—	—	—	—	—	2	0.5
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	39	10.3	—	—	3	13.0	—	—	42	10.4
砕片	329	86.8	1	100	14	60.9	1	50	345	85.4
石核	1	0.3	—	—	—	—	—	—	1	0.3
削片	—	—	—	—	5	21.7	—	—	5	1.2
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	378	93.6	1	0.2	23	5.7	2	0.5	404	100

母岩別資料・接合資料とブロック　石材は、黒曜石、安山岩、頁岩、チャートと多岐にわたるが、そのうち黒曜石は404点中378点と大きな比重を占めている(チャート2点、珪質頁岩23点、安山岩1点)。黒曜石は9つの母岩が識別され、これらはいずれも半透明で、夾雑物を含まず良質な母岩である。珪質頁岩はピエス・エスキーユとスポールを主体とした全体としてきわめてまとまりのある母岩である。接合資料は10例あり、黒曜石8例、珪質頁岩2例となっている。その中で黒曜石10は剥片生産から石器調整技術に至る工程を反映している。他に特筆すべき接合資料としては、接合資料1がある。これはピエス・エスキーユとスポールとの接合資料である。各スポールは共に側面形が直線的であり、打面部はつぶれている。ピエス・エスキーユは剥片素材であり、上下両端が微細な剥

表64　第2ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	削片	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	6	—	—	7
黒曜石2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	6	—	—	9
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	5	—	—	8
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	7	—	—	8
黒曜石5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3
黒曜石6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	3
黒曜石8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	3
黒曜石9	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	3	11	—	5	20
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
チャート2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
計	2	—	—	—	—	—	—	1	—	4	1	—	12	41	—	5	66



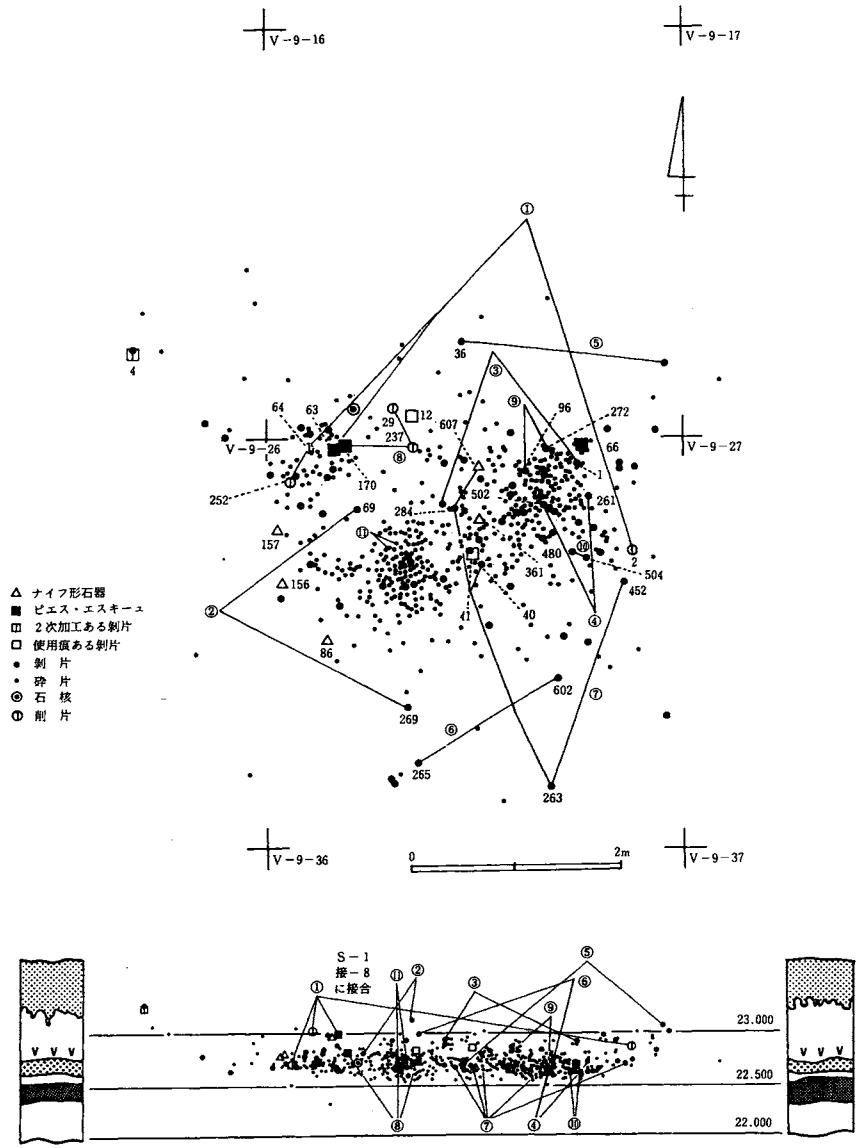


図55 第2ブロック遺物出土状況図

離面で構成されている。

まとめ　石器群はナイフ形石器を主体としており、単純な器種構成を示している。第1ブロックとは接合関係がみられ、同時性が明瞭である。

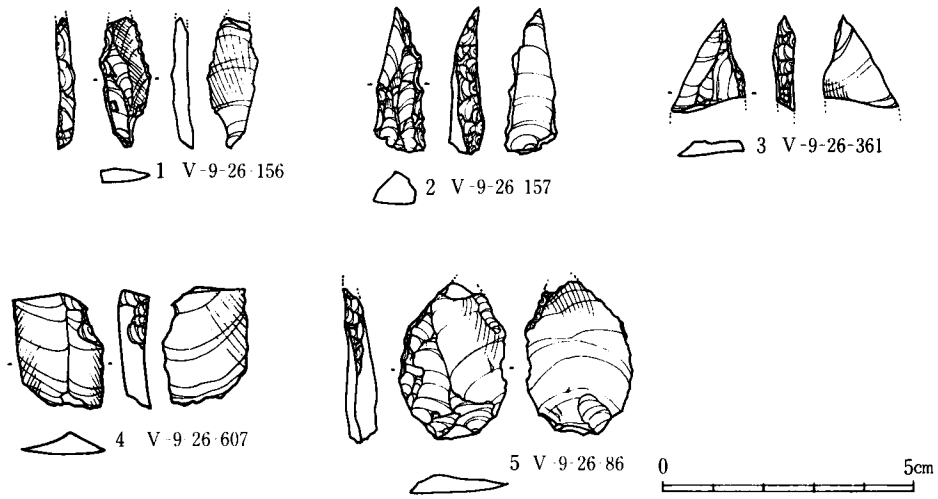


図56 第2ブロック出土遺物実測図(1)

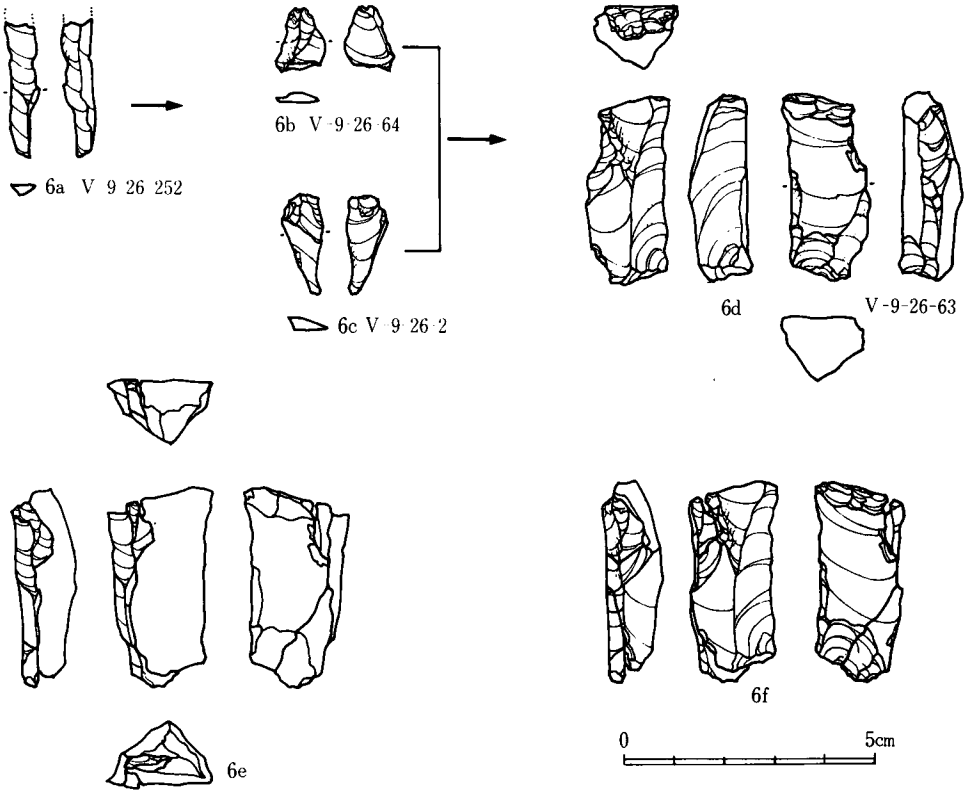


図57 第2ブロック出土遺物実測図(2)

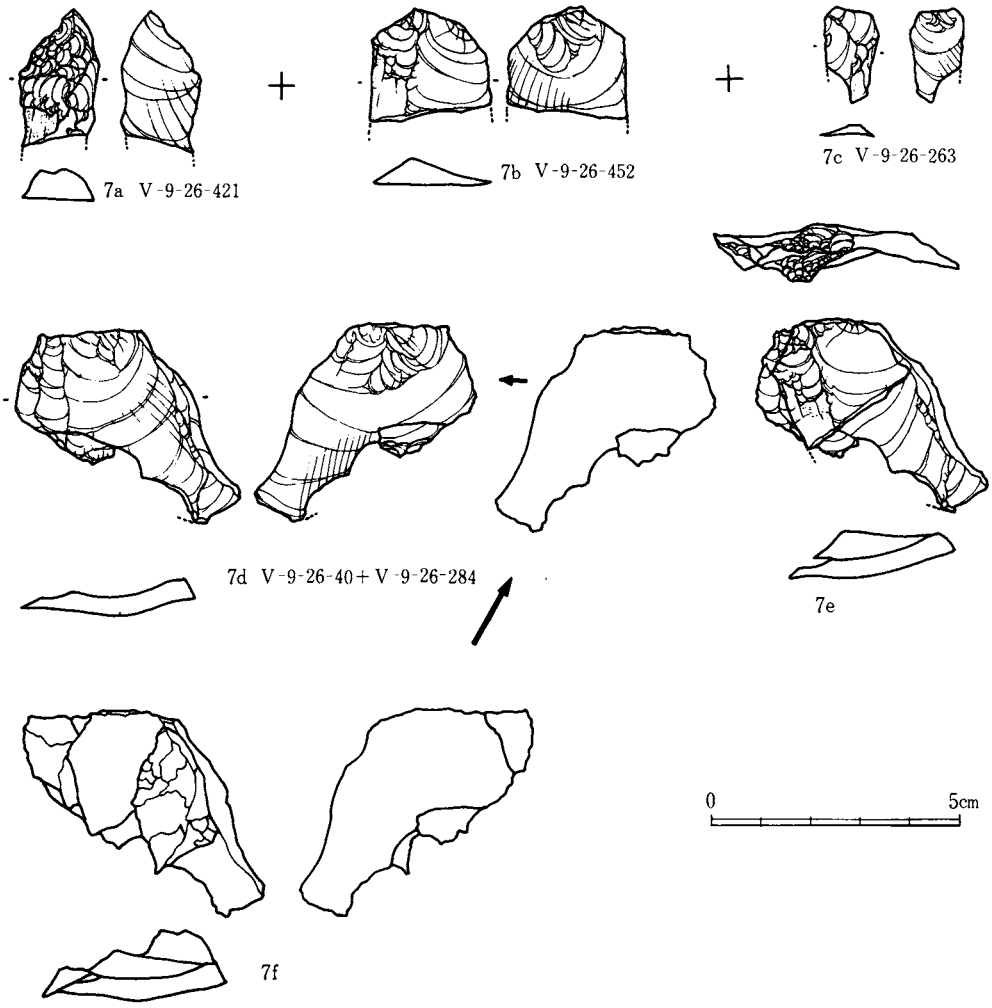


図58 第2ブロック出土遺物実測図(3)

表65 第2ブロック接合資料一覧表

No	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	珪質頁岩1	スポール3 ピエス・エスキーユ	(V-9-26-252)｛(V-9-26-64) (V-9-26-2)｝→(V-9-26-63)	4
2	2	珪質頁岩1	剝片（基部、先端部）	(V－9－26－269)＋(V－9－26－69)	2
3	3	黒曜石7	剝片2	(V－9－26－9)→(V－9－26－53)	2
4	4	黒曜石10	剝片（基部、断片）	(V－9－26－261)＋(V－9－26－502)	2
5	5	黒曜石10	石核（左右分断各1）	(V－9－16－2)＋(V－9－16－36)	2
6	6	黒曜石10	剝片2	(V－9－26－265)→(V－9－26－602)	2
7	7	黒曜石10	剝片（本体十断片） 剝片2 ナイフ（1部）1	(V-9-26-421)(ナイフ)→(V-9-26-452)(剝片基部)→ (V-9-26-263)→(V-9-26-40)＋(V-9-26-284)(断片)	5
8	8	黒曜石10	スポール2 ピエス・エスキーユ1	｛V－9－16－29 V－9－26－237 V－9－26－170｝スポール｝同時	3

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
9	9	黒曜石10	剥片（基部中間部）	(V－9－26－96)＋(V－9－26－272)	2
10	10	黒曜石10	剥片断片2	(V－9－26－504)＋(V－9－26－480)	2
11	11	黒曜石10	剥片断片2	(V－9－26－201)＋(V－9－26－203)	2

表66　第2ブロック石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	V－9－26－86	ナイフ形石器	3.0	2.1	0.6	20°	2.9	図56－5	1側辺	有	無	黒曜石
2	V－9－26－157	ナイフ形石器	2.9	1.0	0.7	55°	1.6	図56－2	2側辺	無	無	黒曜石
3	V－9－26－421	ナイフ形石器(基部)	2.6	4.5	0.7	不明	2.3	図58-7a	1側辺	有	—	黒曜石
4	V－9－26－156	ナイフ形石器	2.5	1.0	0.3	25°	0.7	図56－1	2側辺	有	有	黒曜石
5	V－9－26－361	ナイフ形石器(先端)	1.7	1.5	0.4	(40°)	0.6	図56－3	—	有	無	黒曜石
6	V－9－16－12	使用痕ある剥片	2.5	1.0	0.3	—	0.4	—	—	有	有	黒曜石
7	V－9－26－47	使用痕ある剥片	1.5	3.1	0.4	—	1.0	—	—	有	有	黒曜石
8	V－9－15－4	二次加工ある剥片	2.9	1.4	1.2	—	4.8	—	—	無	無	チャート
9	V－9－16－25	石核	2.8	2.5	1.7	—	10.1	図54-17c	—	無	無	黒曜石
10	V－9－26－63	石核もしくはピエス・エスキーユ	3.5	1.8	1.0	—	6.3	図57－6	—	無	無	頁岩
11	V－9－26－170	ピエス・エスキーユ	2.4	1.4	1.2	—	2.3	—	—	有	無	黒曜石
12	V－9－26－353	ピエス・エスキーユ	2.3	1.2	0.7	—	1.4	—	—	無	無	黒曜石
13	V－9－26－607	ナイフ形石器	2.3	1.7	0.6	40°	1.7	図56－4	—	有	無	黒曜石

3．第3ブロック（図59～61、図版18、表67～70）

出土状況　VI層上部からVIIa層に広がるが、最も分布が密な部分はVI層下部である。レベル差は最大60cmとなっており、凸レンズ状の垂直分布を呈する。平面分布は非常に密集しており、集中部分にすべての接合資料が存在する。

出土遺物　総計821点出土している。石器組成はナイフ形石器4点、使用痕のある剥片1点、剥片18点、砕片797点、石核1点となっており、単純な器種構成であり、石器製作を強く反映した資料といえよう。1、2は縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。1は基部破片、2は先端部に砕片が接合し、完形となる資料である。1の刃つぶし加工が主要剥離面側より背面側にむかって一方向の加撃によるのに対して、2は背面側と主要剥離面側の双方より加撃され、90°に近い調整面を形成している。3は縦長剥片で、ナイフ形石器の素材となりうる資料として提示した。左側辺の連続的な小剥離面が新しい。4は珪質頁岩製の石核である。平坦な単設打面となっており、縦長剥片を生産したことをうかがわせる剥離面によって構成されている。

技術的特徴　石材は、黒曜石と珪質頁岩の2種によって構成されている。このうち主要な石

材は黒曜石であり、全体の99.9%を占める。珪質頁岩は、先述の石核1点のみであり、生産された剝片はなく、詳細は不明である。黒曜石製石器群は目的剝片を縦長剝片としており、これを素材として、1側辺、2側辺加工の細身のナイフ形石器を生産していることが推定される。ただし、目的剝片は少なく、ブランティングの際に出現する小形の調整剝片が大多数を占めている。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、黒曜石3種、珪質頁岩1種が識別された。黒曜石は良質で透明度が高く、識別は困難であり、断片的な資料にとどまらざるを得ない。また、珪質頁岩は石核1点であり、同様に評価し得ない。接合資料は9例あり、いずれも良質の黒曜石である。内訳は剝片どうしの接合例8例、ナイフ形石器の先端部と基部との接合例が1例である。これらはいずれも同一個体の破片の接合例である。

まとめ　本ブロックは、ナイフ形石器を主体として石器調整の色彩が濃い。出土状態は他のブロックに比べ極めて稠密な状況を呈する。

表67　第3ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	(2)2	0.5	—	—	4	0.5
尖頭器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	1	0.1	—	—	1	0.1
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	18	2.2	—	—	18	2.2
砕片	797	97.2	—	—	797	97.1
石核	—	—	1	100	1	0.1
原石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	820	99.9	1	0.1	821	100

表68　第3ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	5	2	—	—	8
黒曜石2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	6	6	1	—	14

表69　第3ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石1	剝片 (加撃点で左右に分断各1)	(V－9－46－576)＋(V－9－46－88)	2
2	2	黒曜石10	加工片1 ナイフ形石器1	(V-9-46-381)＋(V-9-46-636)(ナイフ形石器)	2
3	3	黒曜石10	剝片(中間部、先端部)	(V－9－46－465)＋(V－9－06－494)	2
4	4	黒曜石10	剝片(基部、先端部)	(V－9－46－463)＋(V－9－46－405)	2
5	5	黒曜石10	剝片(中間部2)	(V－9－36－13)＋(V－9－26－251)	2

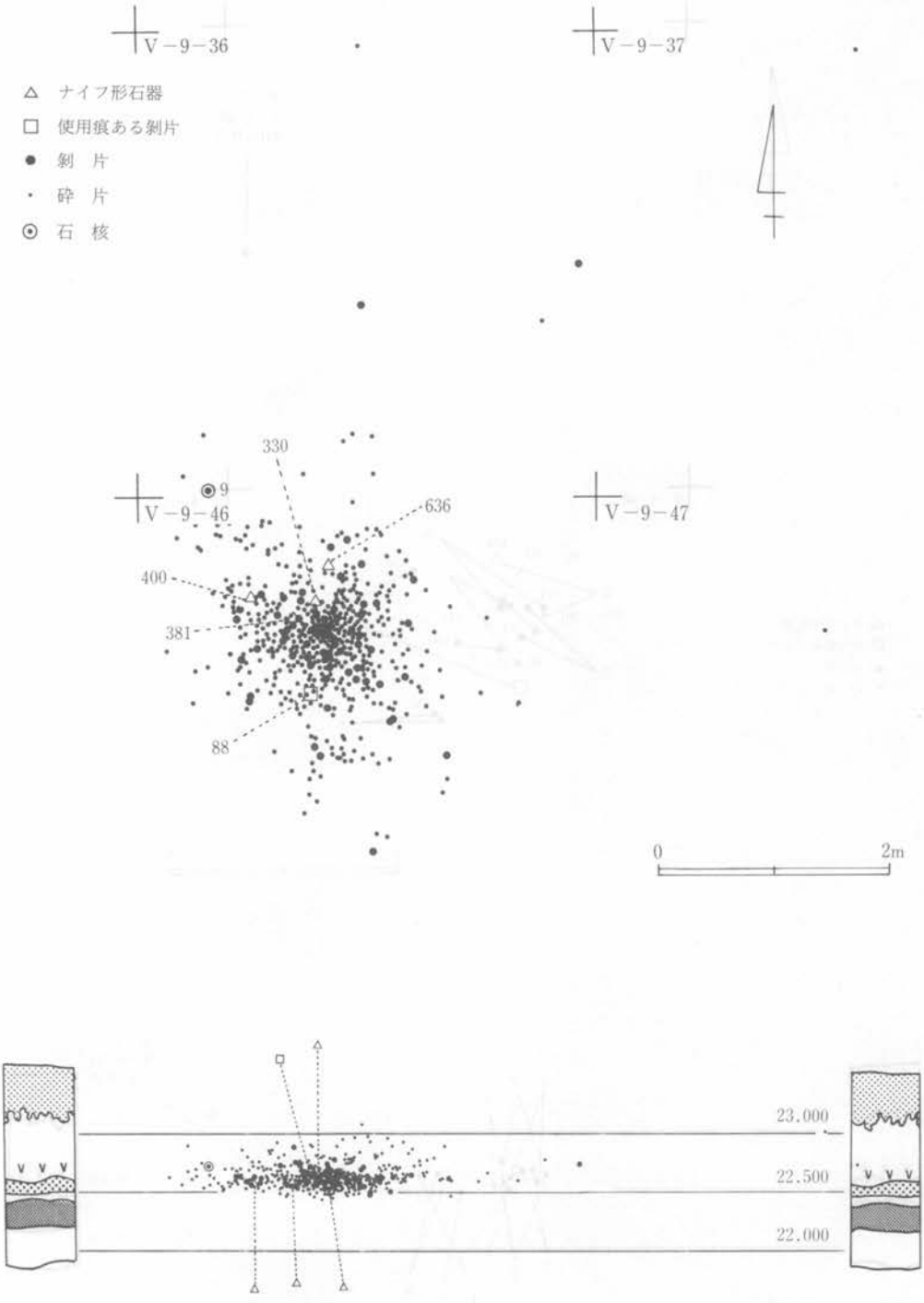


図59 第3ブロック遺物出土状況図(1)

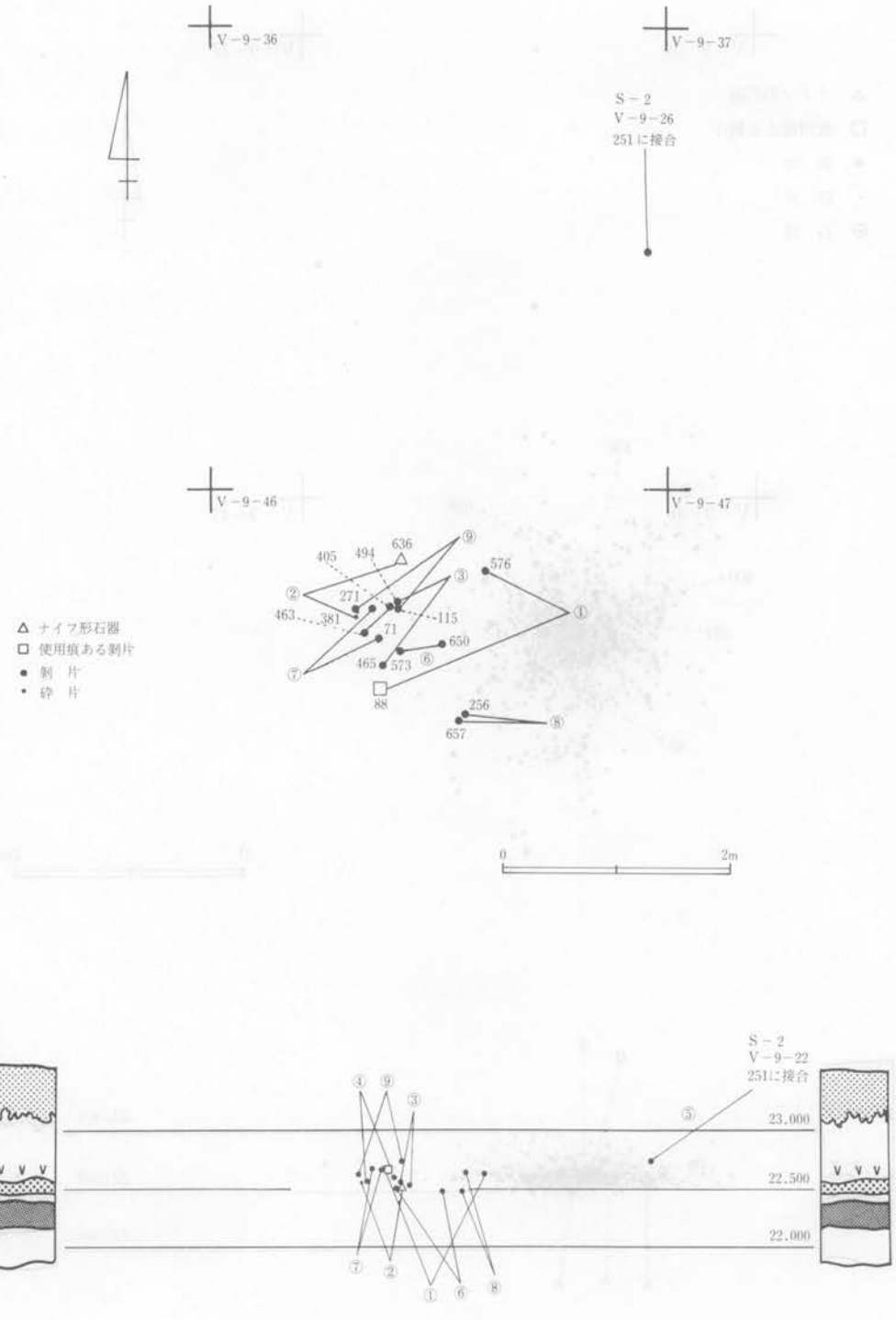


図60 第3ブロック遺物出土状況図(2)

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
6	6	黒曜石10	剝片（断片2）	（V－9－46－573）＋（V－9－46－650）	2
7	7	黒曜石10	剝片（中間部2）	（V－9－46－95）＋（V－9－46－71）	2
8	8	黒曜石10	剝片（基部、中間部）	（V－9－46－256）＋（V－9－46－657）	2
9	9	黒曜石10	剝片（中間部、先端部）	（V－9－46－115）＋（V－9－46－271）	2

表70　表3ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	V-9-46-330	ナイフ片	0.9	0.5	0.3	—	0.1	—	不明	有	無	黒曜石
2	V-9-46-381 V-9-46-636	ナイフ形石器先端 ナイフ形石器	5.7	1.4	0.6	45°	3.5	図61-2b 図61-2a	2側辺	有 有	無 無	黒曜石 黒曜石
3	V-9-46-400	ナイフ形石器	2.7	1.7	0.4	30°	2.0	図61－1	基部2側辺	有	無	黒曜石
4	V-9-46-88	使用痕ある剝片	1.4	1.3	0.4	—	0.5	—	—	無	無	頁岩
5	V-9-36-9	石核	4.1	2.3	0.8	—	13.7	図61－4	—	有	無	粘板岩

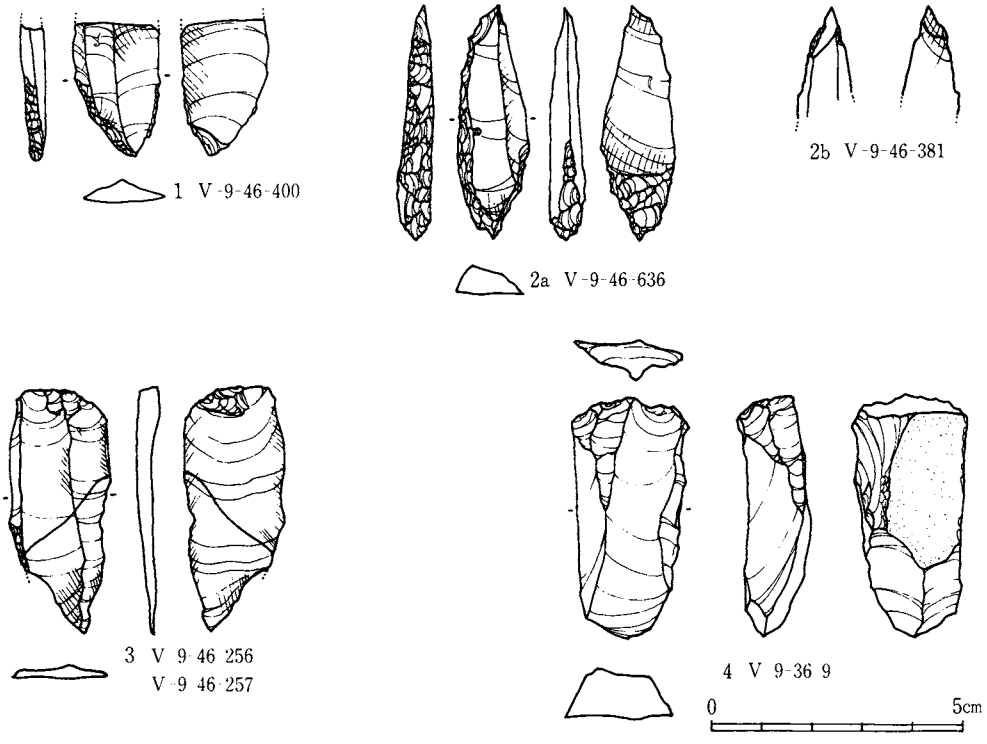


図61 第3ブロック出土遺物実測図

4．第4・5ブロック（図62、63、図版16—1、18、表71～74）

出土状況　本ブロックは、VI層下部よりVII a層に分布しており、レベル差約40cm、特にVI層下部に多数集中している。平面分布では長径約7.0m、短径約5.5mとなっており、北側の集中部分と、南側の散漫な部分とに細分される。

出土遺物　総計135点出土した。石器組成はナイフ形石器7点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片3点、剝片14点、砕片110点となっている。1～6はいずれも縦長剝片を素材としたナイフ形石器である。この内、1、3、5、6は2側辺加工、2、4は1側辺加工となっている。4は上下が折損している。7、8は使用痕（刃こぼれある）のある剝片、7は右側辺、8は両側辺に微細な刃こぼれがある。

表71　第4・5ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		石材不明		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	(2)5	5.3	—	—	—	—	—	—	7	5.2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	0.8	—	—	—	—	—	—	1	0.7
使用痕ある剝片	3	2.3	—	—	—	—	—	—	3	2.2
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	13	9.9	1	50	—	—	—	—	14	10.4
砕片	107	81.7	1	50	2	100	—	—	110	81.5
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	131	97.0	2	1.5	2	1.5	—	—	135	100
礫片	—	—	—	—	—	—	4	100	4	—

表72　第4・5ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
黒曜石1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	3	6	—	—	11
黒曜石2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	10	—	—	13
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
黒曜石7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	14	—	—	15
黒曜石8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	4	—	—	7
黒曜石9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
黒曜石10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—	—	5
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	スホール(1)	—	—	—	1
砂岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)1	4
計	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	13	40	—	4	63

技術的特徴　石器製作に関与する石材としては、黒曜石、珪質頁岩等があるが、黒曜石が主体的な石材として考えられる。剥片生産技術は、単設打面であり、打面調整を行い縦長剥片を生産している。

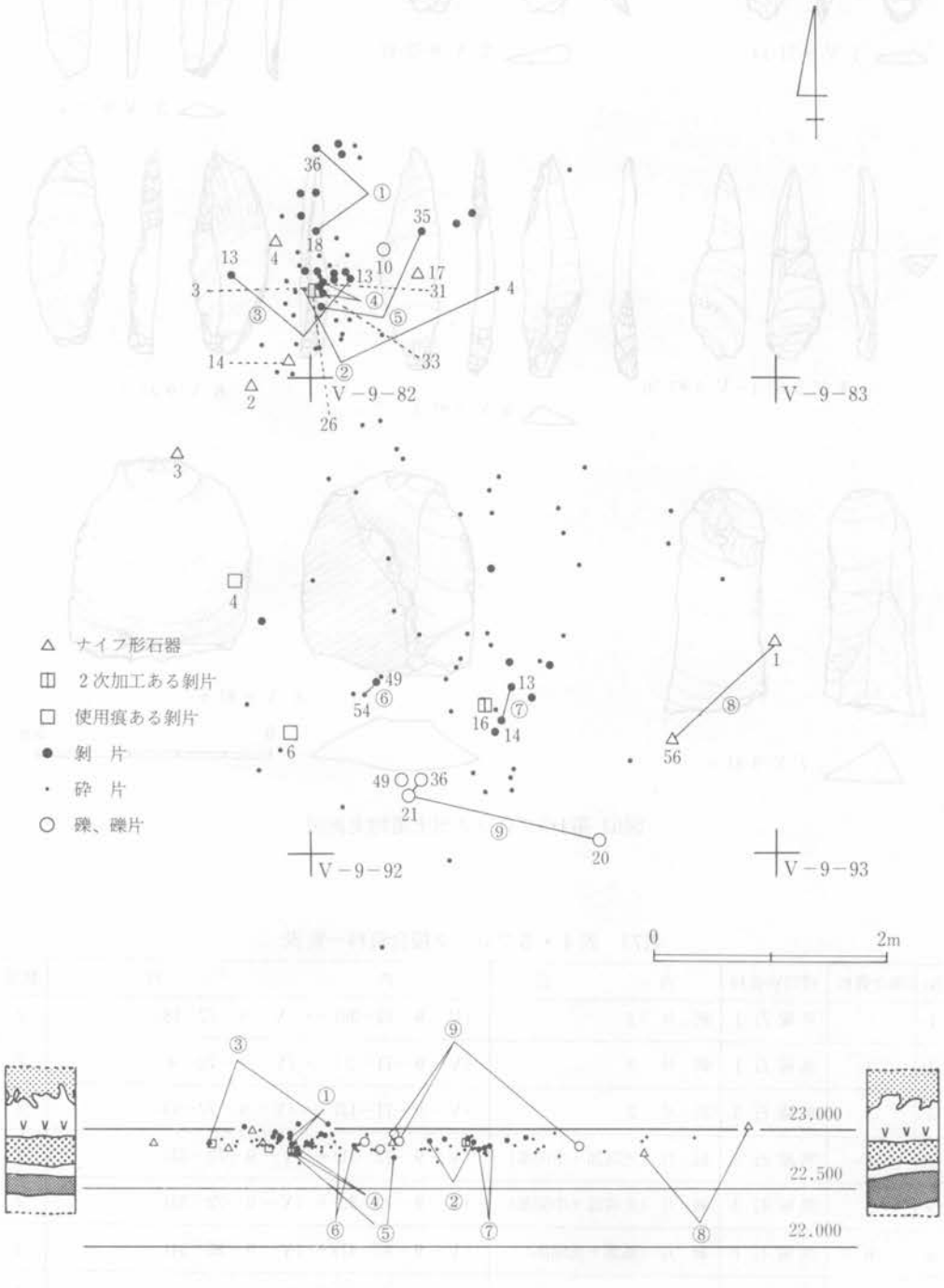


図62 第4・5ブロック遺物出土状況図

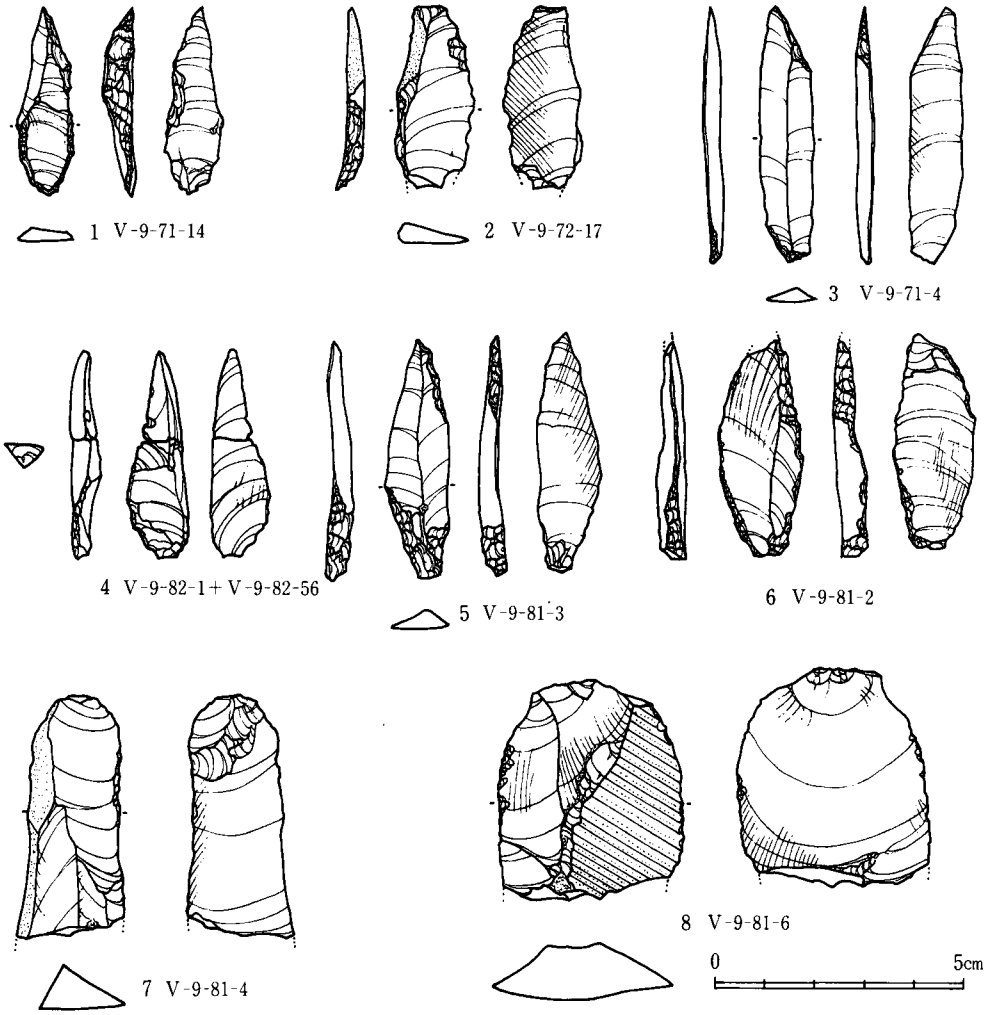


図63 第4•5ブロック出土遺物実測図

表73 表4・5ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石 1	剝片 2	(V－9－72－36) → (V－9－72－18)	2
2	2	黒曜石 1	剝片 2	(V－9－71－3) → (V－9－72－4)	2
3	3	黒曜石 3	剝片 2	(V－9－71－13) → (V－9－72－13)	2
4	4	黒曜石 3	剝片 (先端部＋中間部)	(V－9－72－31)＋(V－9－72－33)	2
5	5	黒曜石 3	剝片 (先端部＋中間部)	(V－9－72－32)＋(V－9－72－35)	2
6	6	黒曜石 7	剝片 (基部＋先端部)	(V－9－82－47)＋(V－9－82－54)	2
7	7	黒曜石 8	剝片 (基部＋先端部)	(V－9－82－13)＋(V－9－82－14)	2

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
8	8	黒曜石 その他 1	ナイフ形石器 (基部＋先端部)	(V－9－82－1)＋(V－9－82－56)	2
9	9	砂岩 1	剝片(礫片) 3	(V-9-82-21)→(V-9-82-20)→(V-9-82-36)	3

第74　第4・5ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	V-9-71-4	ナイフ形石器	5.1	1.1	0.3	25°	1.5	図63－3	2側辺	無	有	黒曜石
2	V-9-71-14	ナイフ形石器	3.7	1.1	0.5	65°	1.6	図63－1	2側辺	無	無	黒曜石
3	V-9-72-17	ナイフ形石器	3.6	1.5	0.4	20°	1.9	図63－2	1側辺一部	有	有	黒曜石
4	V-9-81-2	ナイフ形石器	4.2	1.7	0.5	20°	2.9	図63－6	2側辺	有	無	黒曜石
5	V-9-81-3	ナイフ形石器	4.7	1.3	0.5	30°	2.0	図63－5	2側辺	無	無	黒曜石
6	V-9-82-1 V-9-81-56	ナイフ形石器(基部) ナイフ形石器(先端)	4.0	1.2	0.5	30°	－	図63－4	1側辺	有	無	黒曜石
7	V-9-81-4	使用痕ある剝片	4.7	2.0	1.0	－	－	図63－7	－	有	有	黒曜石
8	V-9-81-6	使用痕ある剝片	4.2	3.7	1.2	－	－	図63－8	－	有	有	黒曜石
9	V-9-72-26	二次加工ある剝片	2.1	1.1	0.2		0.5	－	－	有	無	黒曜石
10	V-9-82-16	二次加工ある剝片	1.3	1.3	0.2	－	－	－	－	有	無	黒曜石

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩は黒曜石10種、珪質頁岩2種、砂岩1種が識別された。黒曜石は多岐にわたり、また、各母岩とも数量的に少なく分析にたえない。また珪質頁岩はビュアリン・スポール、砕片各1となっており、数量的に少ない。砂岩は円礫片で加熱によって破砕されている。接合資料は9例あり、黒曜石製資料は8例、砂岩の礫片の接合資料が1例ある。黒曜石は同一個体の分析資料が5例、剝片どうしの資料が3例存在するが、特に技術的側面を検討しうる資料とはいえない。

まとめ　本ブロックも良質透明の黒曜石を石材とした石刃素材のナイフ形石器を主体的な器種としている。

5．第6ブロック（図64～67、図版16－2、3、19－1、表75～78）

出土状況　VI層下部より、VIIa層にかけて出土し、VI層下部に集中している。レベル差が他のブロックに比べて大きく約70cmとなっている。本ブロックは自然地形に沿って東にむかって傾斜しており、分布も帯状を呈する。分布密度は集中しているものの局所的な密度の差異はみられず平均している。大きさは長径7.80m、短径3.20mをはかる。

出土遺物　石器群は総計130点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、使用痕のある剝片1点、2次加工のある剝片3点、剝片27点、砕片97点となっており、他に円礫が1点みられる。

全体に石器製作を強く反映した資料と言えそうである。1、2はナイフ形石器である。1は2側辺加工で基部破片、2は横長剝片を素材として、右側辺に部分的な刃つぶし加工がほどこされている。3は剝片である。

技術的特徴　石器群の石材は大きく、黒曜石と珪質頁岩とに区分される。黒曜石は角礫を呈しており全体の大きさは不明である。技術的側面を窺わせる資料としては接合資料1、2が存在する。接合資料1は剝片4点の接合資料である。剝片は概して縦長であり、調整打面を有し、背面側の剝離面はいずれも長軸方向の加撃痕をとどめる。接合資料2では剝片6点が接合しているが、いずれも薄手で先端部が主要剝離面側に内彎している。打面は調整打面となっている。この中で接合資料1は剝片生産技術を反映した資料と言えそうである。

表75　第6ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	1.6	—	—	—	—	2	1.5
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	3	2.4	—	—	—	—	3	2.3
使用痕ある剝片	1	0.8	—	—	—	—	1	0.8
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	23	18.3	4	100	—	—	27	20.8
砕片	97	77.0	—	—	—	—	97	74.6
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	126	97.0	4	3.1	—	—	130	100
礫片	—	—	—	—	1	100	1	—

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、石器群では黒曜石5種、珪質頁岩3種、他の礫片として砂岩1種が識別されたが、黒曜石は他のブロックと同様に識別が困難であり、数量的な出土がなく、詳細は不明である。また珪質頁岩はすべて識別し得たものの、断片的な資料であり、いずれも剝片となっている。接合資料は7例みられたが接合資料の技術的な特徴はすでにのべた。接合資料1、2以外の5例は剝片の欠損例であり、充分な技術的な特徴を記述することはできない。

表76　第6ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	3	—	—	5
黒曜石2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	7	—	—	14
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	7	27	—	—	36
黒曜石5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	6	5	—	—	12
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
砂岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	—	25	42	—	1	73

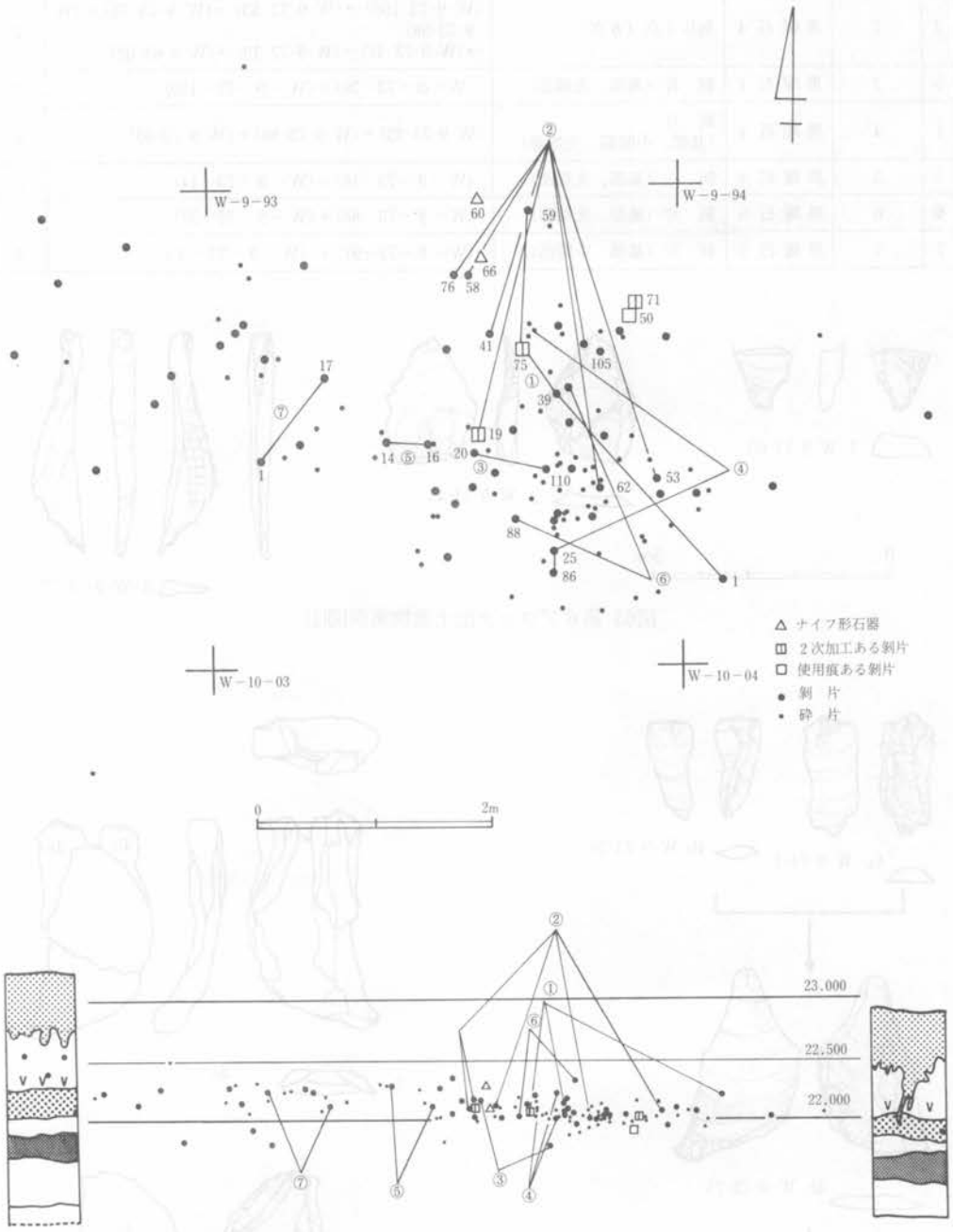


図64 第6ブロック遺物出土状況図

表77 第6ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石 4	剥片3点 二次加工ある剥片1	{(W-9-74-1) (W-9-73-59)} →(W-9-73-75)(二次加工ある剥片) →(W-9-73-39)	4

No.	接合資料	母岩別資料	内　　訳	内　　容	数量
2	2	黒曜石 4	剝片7点（6点）	(W-9-73-105)→(W-9-73-53)→(W-9-73-76)＋(W-9-73-58) →(W-9-73-41)→(W-9-73-19)→(W-9-63-62)	7
3	3	黒曜石 4	剝　片（基部、先端部）	(W－9－73－20)＋(W－9－73－110)	2
4	4	黒曜石 4	剝　片 （基部、中間部、先端部）	(W-9-73-25)＋(W-9-73-86)＋(W-9-73-65)	3
5	5	黒曜石 4	剝　片（基部、先端部）	(W－9－73－16)＋(W－9－73－14)	2
6	6	黒曜石 5	剝　片（基部、先端部）	(W－9－73－88)＋(W－9－73－38)	2
7	7	黒曜石 5	剝　片（基部、中間部）	(W－9－73－97)＋(W－9－73－1)	2

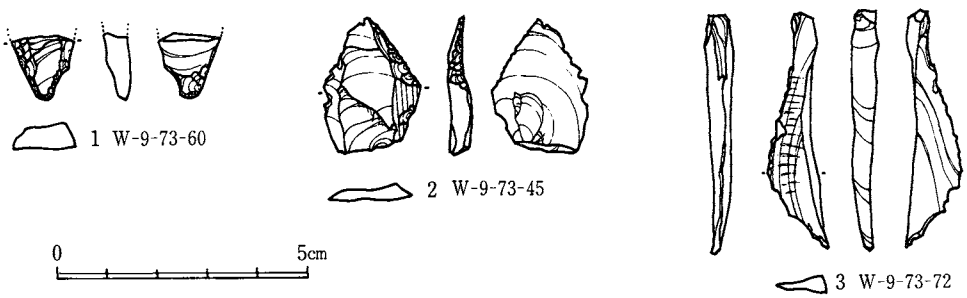


図65 第6ブロック出土遺物実測図(1)

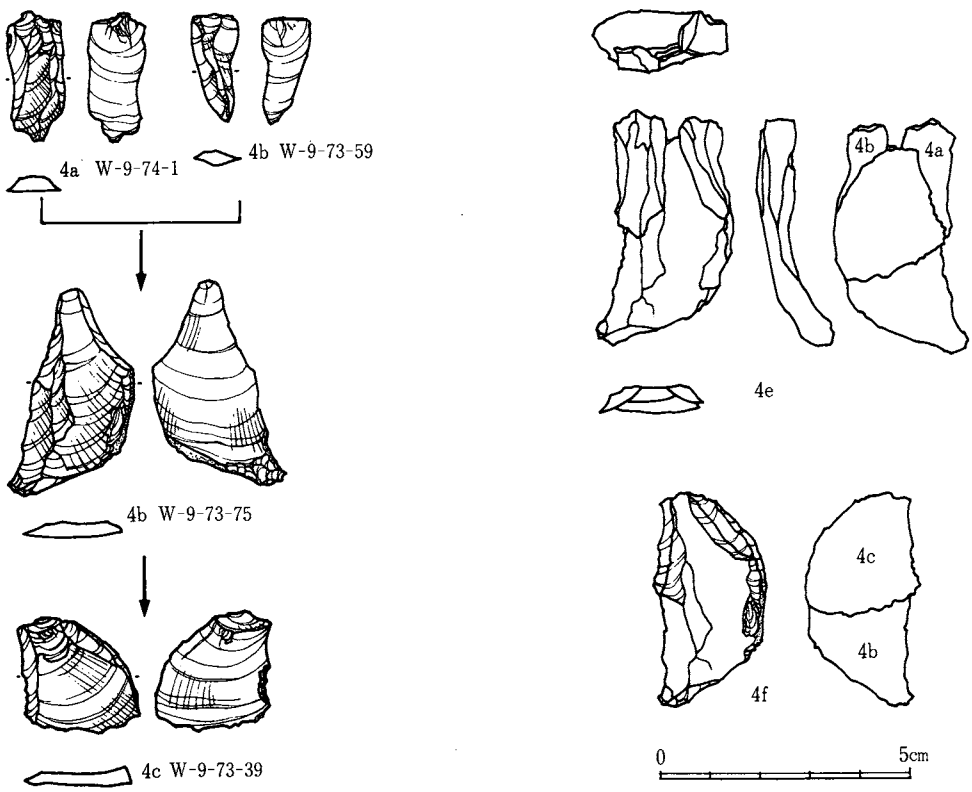


図66 第6ブロック出土遺物実測図(2)

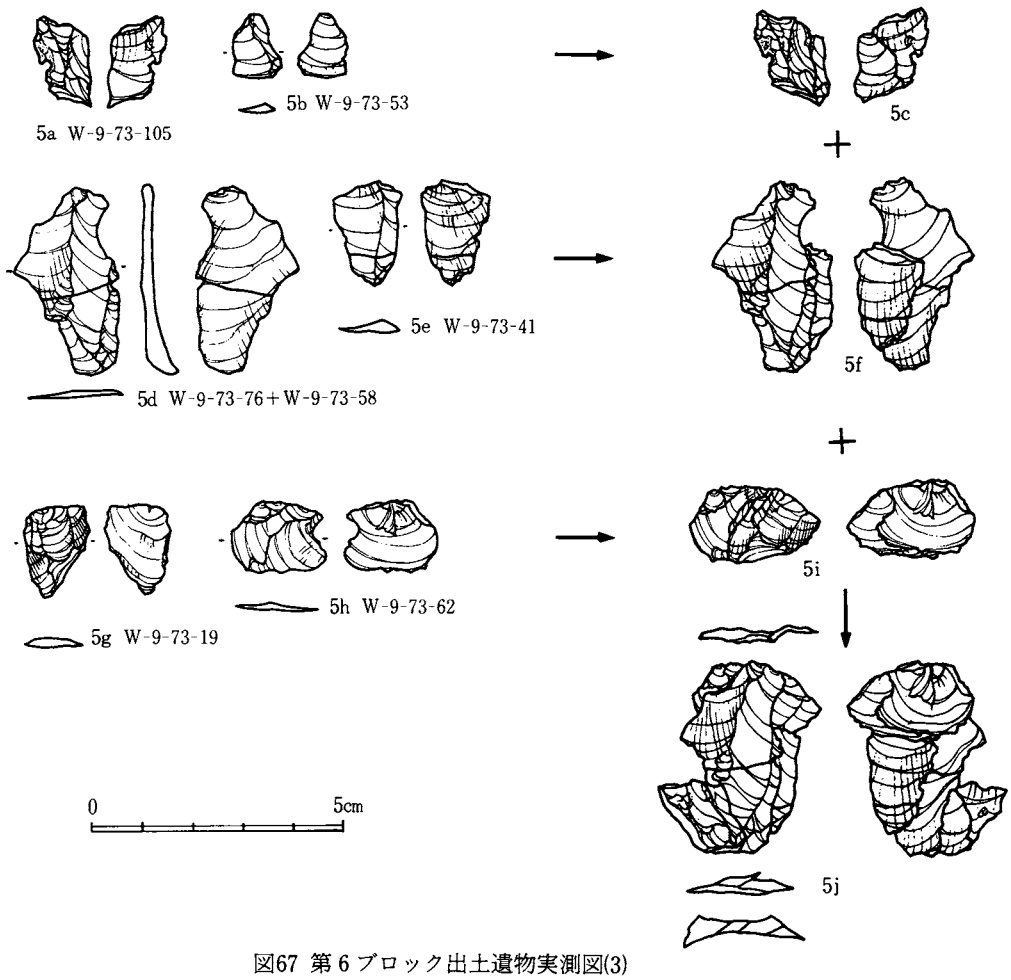


図67 第6ブロック出土遺物実測図(3)

まとめ 本ブロックは良質、半透明の黒曜石が主要な石材となっており、石器群はナイフ形石器を中心としている。剝片、砕片等がみられるが、石核、敲石等がなく一連の石器製作工程はたどれない。

表78 第6ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	W－9－73－60	ナイフ形石器(基部)	1.3	1.3	0.5	－	0.6	図65－1	2側辺	有	無	黒曜石
2	W－9－73－66	ナイフ形石器	1.2	1.3	0.5	－	0.6	－	－	有	無	黒曜石
3	W－9－73－50	使用痕ある剝片	2.6	1.1	0.3	－	0.9	－	－	有	無	黒曜石
4	W－9－73－71	二次加工ある剝片	0.7	0.9	0.1	－	0.1	－	－	有	無	黒曜石
5	W－9－73－75	二次加工ある剝片	3.9	3.8	0.5	－	3.2	図65－3	－	有	無	黒曜石
6	W－9－73－19	二次加工ある剝片	1.8	1.3	0.2	－	0.3	図67－59	－	有	無	黒曜石

6．第7・8ブロック（図68、69、図版17— 1、2、19— 1、表79～82）

表79　第7・8ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜岩 数量	黒曜岩 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	(2) 11	3.3	13	3.3
尖頭器	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—
削器	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—
使用痕ある剝片	1	0.3	1	0.3
石斧	—	—	—	—
剝片	18	4.6	18	4.6
砕片	361	91.8	361	91.8
石核	—	—	—	—
原石	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—
計	393	100	393	100

出土状況　VI層上部よりVIIa層に至るまで分布しているが、特にVI層下部に密集している。自然の傾斜に沿って石器群の分布は東方へ緩やかな斜面堆積を呈する。平面形は長径約7.5m、短径約3.2mであり、特に北東側に密である。南西側の希薄な部分には利器はあまり存在せず、北東側に集中する傾向にある。

出土遺物　総計392点出土した。石器組成はナイフ形石器13点、使用痕のある剝片1点、剝片18点、砕片361点となっており、利器はナイフ形石器が大勢を占める。1～10はナイフ形石器である。1～4、10は先端部資料である。5～8は縦長剝片を素材として2側辺加工がほどこされた例である。9は基部加工、10は先端部をたち切るかのように平坦に刃つぶし加工され、11は使用痕のある剝片であり、両側辺に刃こぼれがみられる。

技術的特徴　剝片生産技術については、石核、目的剝片があまり存在しないので明確な評価はできないが、ナイフ形石器は縦長剝片を素材としており、2側辺加工を基調として裏面調整がみられるものが多く、一方、調整の際の砕片が多数存在することや、目的剝片が少ないことなどより、石器調整をより強く反映しているものと推定される。

母岩別資料・接合資料とブロック　夾雑物を含まず良質の黒曜石のみを石材としている。そのうち母岩は8つに分類される。ナイフ形石器は12点の内、母岩別資料4種が識別できた。接合資料はナイフ形石器同志の接合例、剝片とナイフ形石器との接合例、ナイフ形石器の基部と先端部の接合資料、剝片同志の接合資料が、各1例、および剝片の基部と先端部との接合資料

表80　第7・8ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
黒曜石2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
黒曜石5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
黒曜石6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	10			12
黒曜石7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	8	—	—	11
黒曜石8	(2) 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	5
計	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	9	18	—	—	35

2例となっている。これらのうち特筆すべき資料としては、ナイフ形石器どうしの接合例がある。これらはいずれも素材剥片の加撃点を先端部におきバルブを除去し尖頭部をつくりだしている。2側辺加工で、裏面調整がみられ、互いに技術的な共通性がみいだされる。

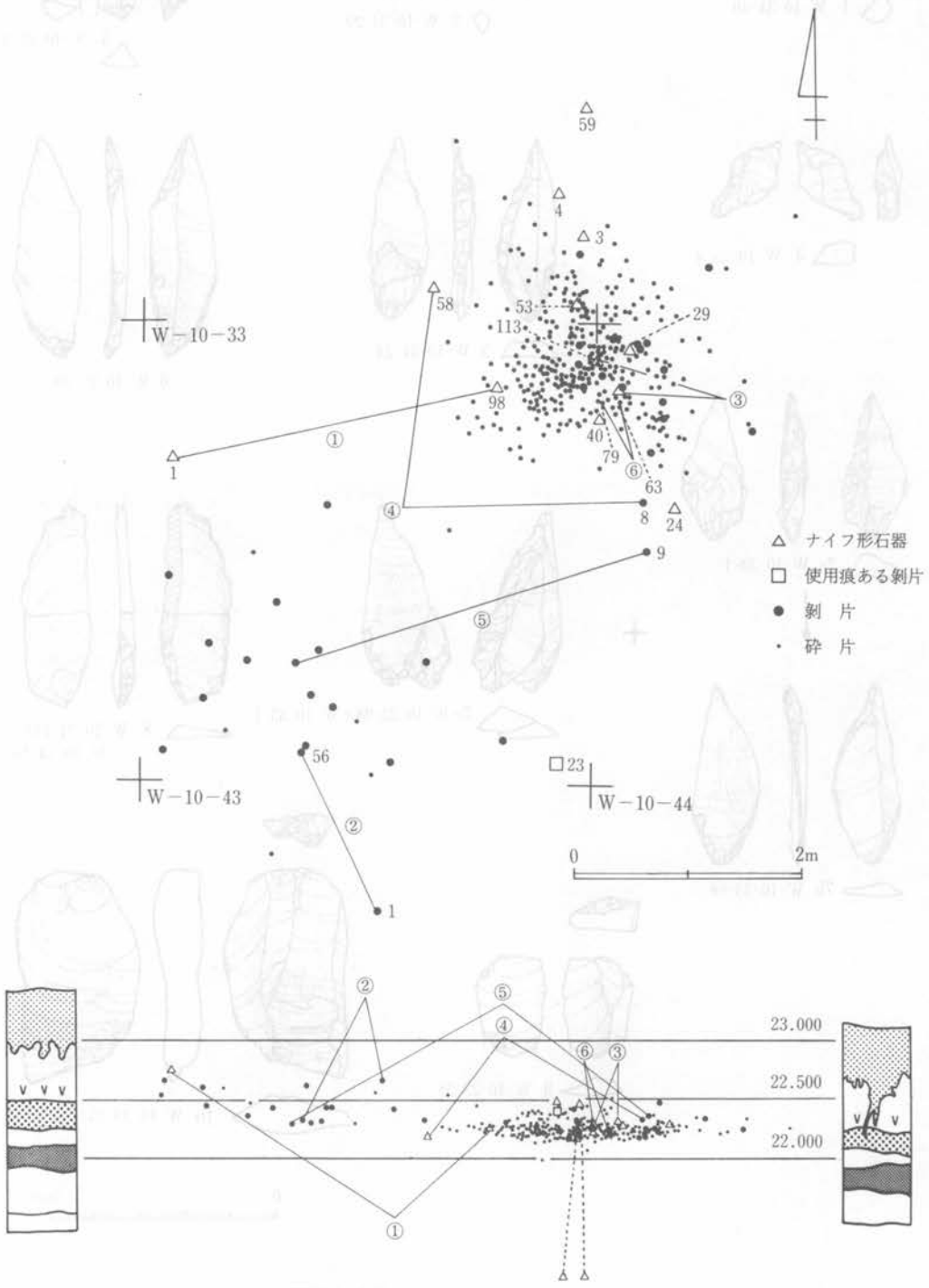


図68 第7・8ブロック遺物出土状況図

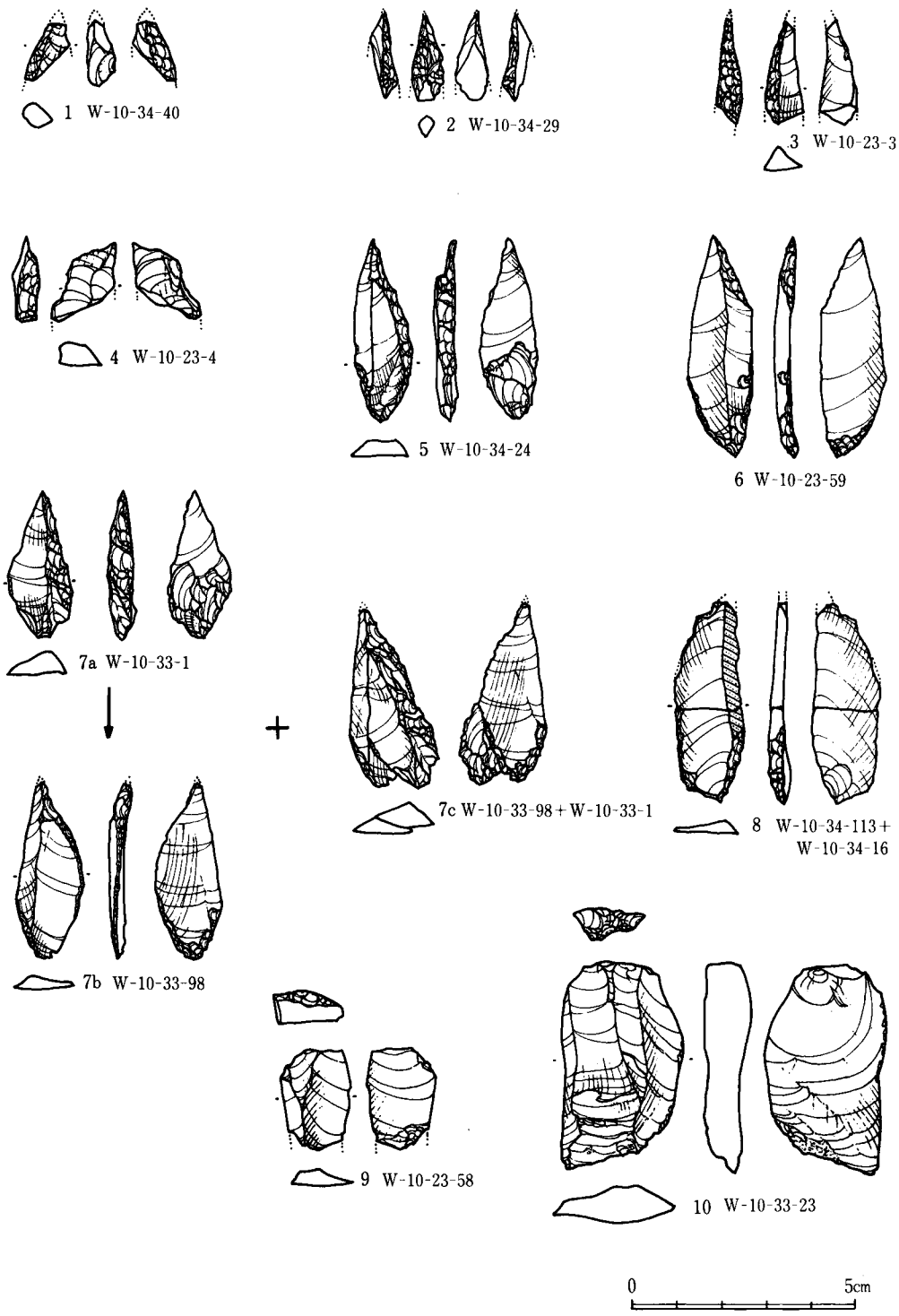


図69 第7・8ブロック出土遺物実測図

まとめ　石材は、黒曜石に集約されており、石器群はナイフ形石器を中心としたブロックである。目的剥片の数量が少なく、調整剥片が大量にみられる。

表81　第7・8ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	黒曜石1	ナイフ形石器2	(W−10−33−1) → (W−10−33−98)	2
2	2	黒曜石6	剥片（基部、先端部）	(W−10−43−1)＋(W−10−33−56)	2
3	3	黒曜石8	ナイフ形石器(基部、先端部)	(W−10−34−16)＋(W−10−34−113)	2
4	4	黒曜石8	剥片1（截頂石刃1）	(W−10−23−58) → (W−10−34−8)	2
5	5	黒曜石その他	剥片2	(W−10−34−9) → (W−10−33−15)	2
6	6	黒曜石その他	剥片（基部，先端部）	(W−10−34−79)＋(W−10−34−63)	2

表82　第7・8ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	W−10−23−3	ナイフ形石器(先端)	2.4	0.9	0.6	45°	0.6	図69−3	1側辺	有	無	黒曜石
2	W−10−23−4	ナイフ形石器(断片)	2.1	1.1	0.5	—	0.9	図69−4	—	有	無	黒曜石
3	W−10−23−53	ナイフ形石器(先端)	1.6	0.4	0.7	—	0.2	—	—	有	無	黒曜石
4	W−10−23−58	ナイフ形石器	2.2	1.6	0.6	40° 30°	1.6	図69−9	剥片先端	有	無	黒曜石
5	W−10−23−59	ナイフ形石器	4.9	1.5	0.3	25°	2.0	図69−6	2側辺	無	有	黒曜石
6	W−10−33−1	ナイフ形石器	3.2	1.4	0.6	40°	1.7	図69-7a	2側辺	無	無	黒曜石
7	W−10−33−98	ナイフ形石器	3.8	1.6	0.3	35°	1.5	図69-7b	2側辺	無	無	黒曜石
8	W−10−34−16	ナイフ形石器	2.0	1.5	0.3	20°	1.1	図69−8	基部付近	有	無	黒曜石
	W-10-34-113	ナイフ形石器(先端)	2.4	1.5	0.4	—	1.0	—	2側辺	有	無	黒曜石
9	W−10−34−24	ナイフ形石器	4.0	1.4	0.4	45°	2.5	図69−5	2側辺	無	無	黒曜石
10	W−10−34−29	ナイフ形石器(先端)	1.9	0.7	0.7	65°	0.5	図69−2	—	有	無	黒曜石
11	W−10−34−40	ナイフ形石器(先端)	1.3	0.7	0.6	—	0.2	図69−1	—	有	無	黒曜石
12	W−10−33−23	使用痕ある剥片	4.6	2.8	0.9	—	10.3	図69−10	—	無	有	黒曜石

7．第19ブロック（図70、71、図版17−3、19−1、表83〜87）

出土状況　VI層下部よりVIIa層上面に良くまとまっており、レベル差約20cmに密集している。石器群は礫群に挟在し、相互の出土位置の違いは見い出せない。平面分布では長径約6.20m、短径約2.50mに分布している。

出土遺物　石器群は総計9点出土した。石器組成は剥片4点、砕片3点、石核1点、敲石1

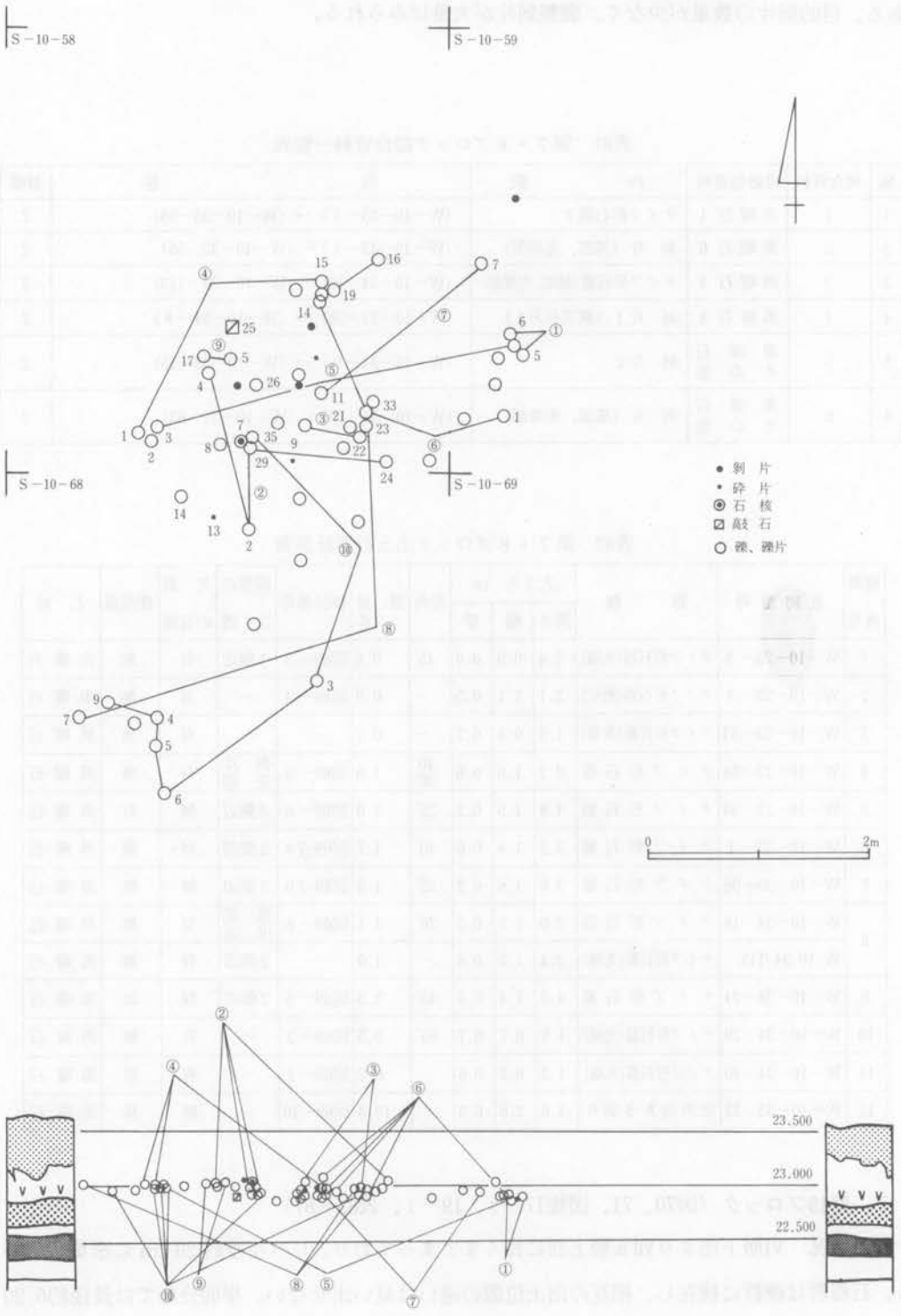


図70 第19ブロック遺物出土状況図

点となっている。礫群の構成礫は49点出土している。1は石核である。大形剝片の主要剝離面を打面として横長剝片を生産したものと推定される。2は上半部が欠損した敲石で、下端部に敲打痕がみられる。

技術的特徴　石器群の出土数が少なく技術的特徴は多くを語れない。前述のとおり、図71—1の石核より、剝片生産の一端を推定するにとどめておく。

母岩別資料・接合資料とブロック　石器群の母岩別資料は珪質頁岩1種、黒曜石1種をかぞえるが、このうち珪質頁岩1について石核と剝片、砕片とがみられ、剝片生産の様相が知られる。石器群については接合資料はない。礫群はいずれも破片で接合して完形品になるものはな

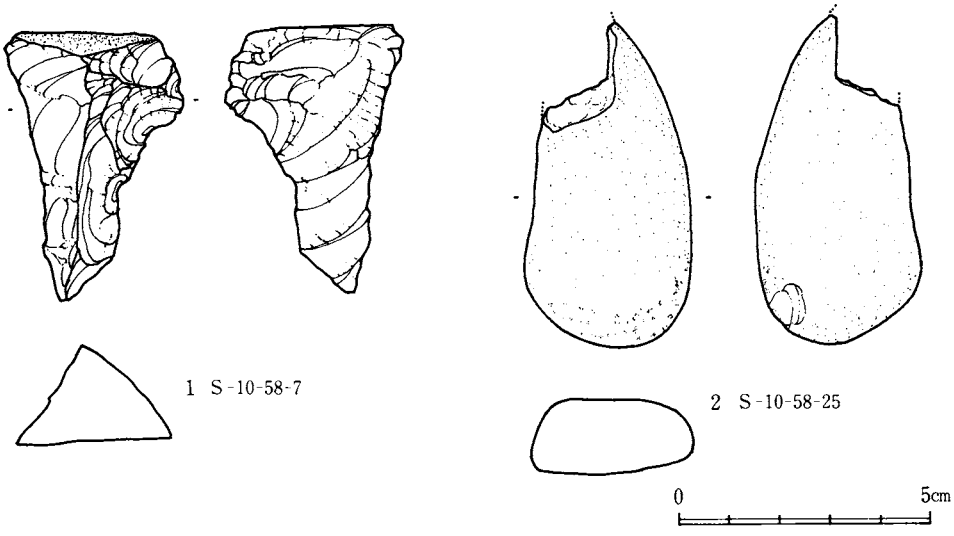


図71 第19ブロック出土遺物実測図

表83　第19ブロック出土礫群の母岩別資料

状況 / 母岩	表面の変化	付着物	その他
砂岩2	一部赤化	なし	破片
花崗岩1	一部赤化	なし	破片
花崗岩2	一部赤化＋剝落	なし	破片
安山岩1	赤化せず	黒色付着物	破片
安山岩2	一部赤化	なし	破片
安山岩3 (チャート?)	黒化一部赤化	なし	破片、割れ面黒色付着物
安山岩4	全面赤化	なし	破片
安山岩5	全面赤化	なし	破片
石材不明	約半分赤化	なし	破片

い。母岩別資料は安山岩5種、花崗岩2種、砂岩1種が識別でき、8個体分の礫が確認された。総重量は1824.6gである。接合状態では35.7～406.2gの範囲にあるが、完形に復元すると推定約1,500gが最大のものと認定できる。分布範囲はブロック内に集中しており、他のブロックとの接合関係は全くなかった。割れ面が赤化した例と赤化しない例が接合しており、破損した礫の再利用の可能性が示唆される。

表84　第19ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		砂岩(1)		安山岩		花崗岩		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	1	33.3	3	60.0	—	—	—	—	—	—	—	—	4	44.5
砕片	2	66.7	1	20.0	—	—	—	—	—	—	—	—	3	33.3
石核	—	—	1	20.0	—	—	—	—	—	—	—	—	1	11.1
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	1	100	—	—	—	—	—	—	1	11.1
計	3	33.3	5	55.6	1	11.1	—	—	—	—	—	—	9	100
礫片	—	—	—	—	6	12.2	21	42.8	5	10.2	17	34.6	49	—

まとめ　本ブロックは小規模な礫群として認定される。周辺のロームには肉眼では受熱の痕跡、および炭化物の集中などの特徴はみられない。構成礫のうち多くは破砕し、接合の結果完形品になるものはなく多くの礫片がブロック内では欠落している。

表85　第19ブロック母岩資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫片	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	3
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—	—	—	2
安山岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(6)	—	—	—	—	6
安山岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)3	—	—	—	—	5
安山岩4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)(2)3	—	—	—	—	8
安山岩5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
花崗岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—	—	—	2
花崗岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)	—	—	—	—	3
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	1	—	5
砂岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
砂岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)(4)	—	—	—	—	6
石材不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(6)	—	—	—	—	6
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	39	4	3	1	1	48

表86　第19ブロック接合資料一覧表

No	接合資料	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	1	砂　岩　2	礫片断片的（155.0g）	（S－10－59－5）＋（S－10－59－6）	2
2	2	砂　岩　2	礫片断片的（35.7g）	（S－10－58－29）＋（S－10－58－4）＋ （S－10－58－24）＋（S－10－68－2）	4
3	3	花崗岩 1	礫片断片的（74.3g）	（S－10－58－9）＋（S－10－58－22）	2
4	4	花崗岩 2	礫片½（343.4g）	（S-10-58-1）＋（S-10-58-2）＋（S-10-58-15）	3
5	5	安山岩 1	礫片⅓（406.2g）	（S－10－59－4）＋（S－10－58－3）	2
6	6	安山岩 2	礫片⅙（239.7g）	（S-10-58-18）＋（S-10-58-16）＋（S-10-58-14）＋ （S-10-59-1）＋（S-10-58-33）＋（S-10-58-19）	6
7	7	安山岩 3	礫片断片的（108.4g）	（S－10－59－7）＋（S－10－58－11）	2
8	8	安山岩 4	礫片断片的（67.0g）	（S-10-58-23）＋（S-10-58-21）＋（S-10-68-7）	3
9	9	安山岩 4	礫片断片的（59.2g）	（S－10－58－17）＋（S－10－58－5）	2
10	10	石材不明	礫片¼（131.4g）	（S-10-68-6）＋（S-10-68-4）＋（S-10-68-3）＋ （S-10-58-35）＋（S-10-68-5）＋（S-10-68-9）	6

表87　第19ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重　量 g	挿図番号	調整の位　置	欠　損 の有無	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚							
1	S－10－58－25	敲　石	6.4	3.3	1.8	—	12.4	図71－2	—	有	有	砂　岩
2	S－10－58－7	石　核	3.6	5.4	2.0	—	20.3	図71－1	—	無	無	珪質頁岩

8．第4文化層のまとめ

Ⅵ層からⅦa層に至る文化層である。S－1～3、4・5、6、7・8、19がこれに該当する。この中で母岩別資料より独立したブロックはS－19である。S－19は礫群であり、これに少数の石器が共伴している。S－1～3、4・5、6、7・8は良質半透明の黒曜石を石材とするブロック群であり、このうちS－1とS－2には接合資料が存在し、母岩にも共通性がみられる。石器群はナイフ形石器を主体としており、これ以外の器種はみられない。ナイフ形石器は縦長剥片を素材としており、素材の2側辺を加工し、打面部を除去しているのが通例である。また全体の形状はすらりとした細長いものが多く切り出し形ナイフはみられない。いずれのブロックにも剥片生産および石器調整を反映した目的剥片、調整剥片などの資料がみられる。中でも剥片生産技術では石核打面調整、時として打面再生がみられ、かなり発達した石刃技法の存在が推察される。

第6節　第　5　文　化　層

1．第24ブロック（図72～75、図版19－2、20、21－3、22、表88～91）

出土状況　ソフトローム下部よりⅧ層上面に至るまでレベル差70cmで、幅広く分布しているが、分布の中心はⅦa層となっており、ソフトローム下部とⅦa層出土の石器群が接合している状況にある。平面分布は長径5.00m×短径3.40mとなっており、ほぼ円形のプランの中央部に密な部分があり、石核、ナイフ形石器、彫刻刀形石器等がみられる。

出土遺物　総計60点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、彫刻刀形石器2点、剥片43点、砕片11点、石核2点となっている。1、2はナイフ形石器である。互いに形態的に類似している。2は縦長剥片を素材として2側辺加工となっている。3は彫刻刀形石器で、ぶ厚い横長剥片を素材として1側辺にフラットな彫刻刀面を二条作出している。

表88　第24ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	珪質頁岩		チャート		メノウ		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	1.8	1	100	—	—	2	3.3
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	1	1.8	—	—	1	25.0	2	3.3
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	40	72.7	—	—	3	75.0	43	71.8
砕片	11	20.0	—	—	—	—	11	18.3
石核	2	3.6	—	—	—	—	2	3.3
原石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	55	91.7	1	1.7	4	6.7	6.0	100

技術的特徴　剥片生産技術については、接合資料1、2より以下の技術基盤が窺える。

a．板状剥片を素材にした石核で、上下両端に平坦な打面を設定したのち上下に加撃面転移し、4点以上の剥片を生産している。剥片は横長で不定形を呈する（接合資料1）。

b．平坦な打面を設定したのち、数回（3回以上）の加撃面転移を経て縦長剥片を生産している（接合資料2）。

接合資料1、2はともに母岩別資料珪質頁岩

表89　第24ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 ＼ 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	43	6	2	—	53
チャート1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
メノウ1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
メノウ2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
メノウ3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	2	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	46	6	2	—	58

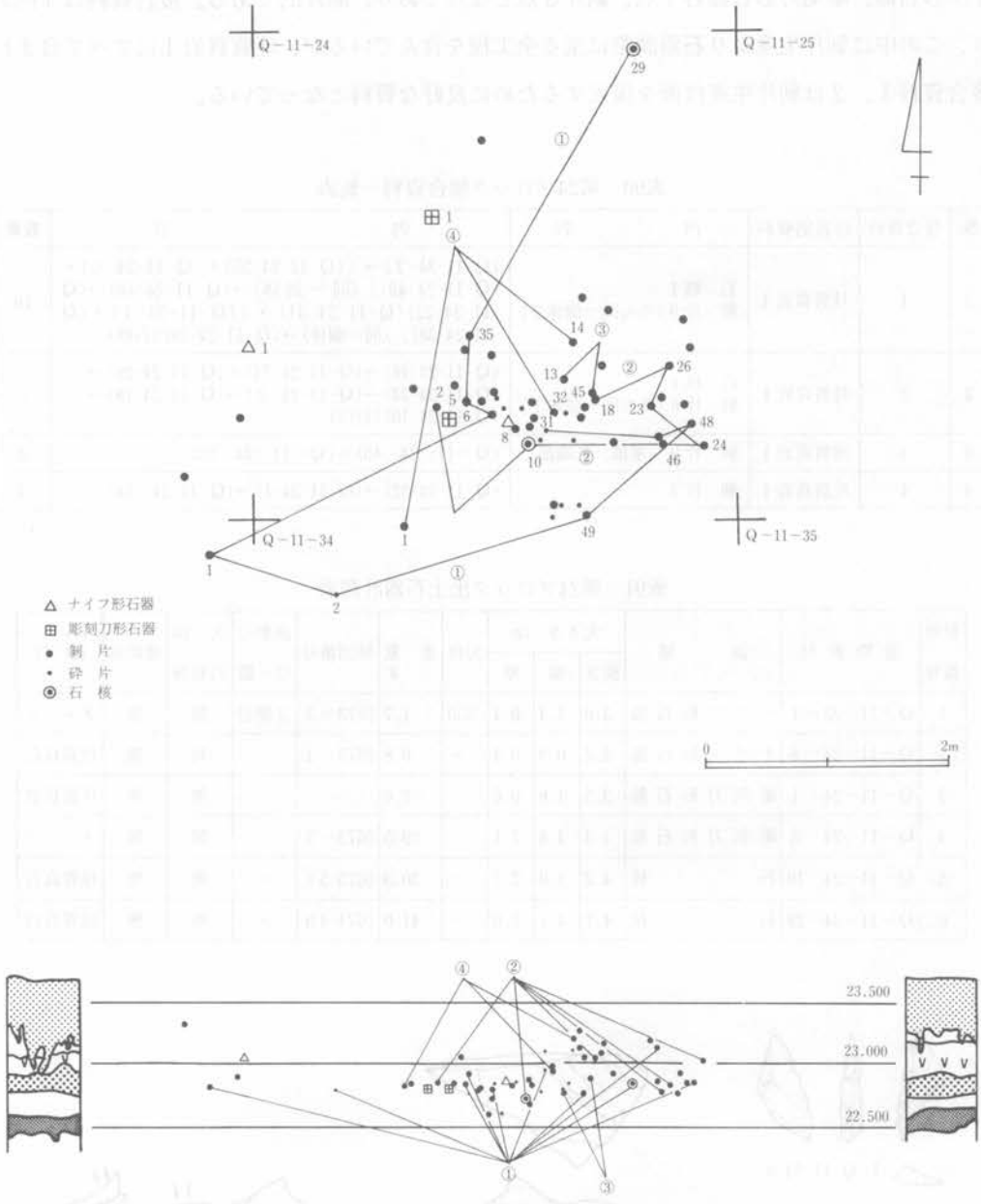


図72 第24ブロック遺物出土状況図

1に属するが、同一母岩にナイフ形石器が存在する。しかしながら断片的な資料のため、剥片生産技術ａ、ｂのいずれによって生産されたかは不明である。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、珪質頁岩１種、チャート１種、メノウ３

種である。珪質頁岩1が主体をなし、全数量の91.7%を占め、チャート1、メノウ1～3はナイフ形石器、彫刻刀形石器各1点、剝片3点となっており、断片的である。接合資料は4例あり、この中に剝片生産より石器調整に至る全工程を含んでいるが、珪質頁岩1にすべて含まれ、接合資料1、2は剝片生産技術を復元するために良好な資料となっている。

表90　第24ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	珪質頁岩1	石　核1 剝　片9(うち同一個体2)	(Q-11-34-2)→〔(Q-11-24-35)+(Q-11-24-6)+(Q-11-24-49)〕(同一個体)→(Q-11-24-48)→(Q-11-24-22)(Q-11-24-31)→〔(Q-11-33-1)+(Q-11-24-38)〕(同一個体)→(Q-11-24-29)(石核)	10
2	2	珪質頁岩1	石　核1 剝　片6(うち同一個体1)	(Q-11-24-46)→(Q-11-24-24)+(Q-11-24-26)→(Q-11-24-23)→(Q-11-24-2)→(Q-11-24-18)→(Q-11-24-10)(石核)	7
3	3	珪質頁岩1	剝　片2(基部、先端部)	(Q—11—24—45)+(Q—11—24—13)	2
4	4	珪質頁岩1	剝　片3	(Q-11-24-32)→(Q-11-34-1)→(Q-11-24—14)	3

表91　第24ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q—11—23—1	ナイフ形石器	3.0	1.4	0.4	550	1.7	図73—2	2側辺	無	無	チャート
2	Q—11—24—8	ナイフ形石器	2.2	0.9	0.4	—	0.8	図73—1	—	有	無	珪質頁岩
3	Q—11—24—1	彫刻刀形石器	3.5	1.6	0.6	—	2.6	—	—	無	無	珪質頁岩
4	Q—11—24—5	彫刻刀形石器	4.3	4.6	2.1	—	29.5	図73—3	—	無	無	メノウ
5	Q—11—24—10	石核	4.2	3.0	2.2	—	30.3	図75-5f	—	無	無	珪質頁岩
6	Q—11—24—29	石核	4.7	4.7	2.0	—	41.0	図74-4h	—	無	無	珪質頁岩

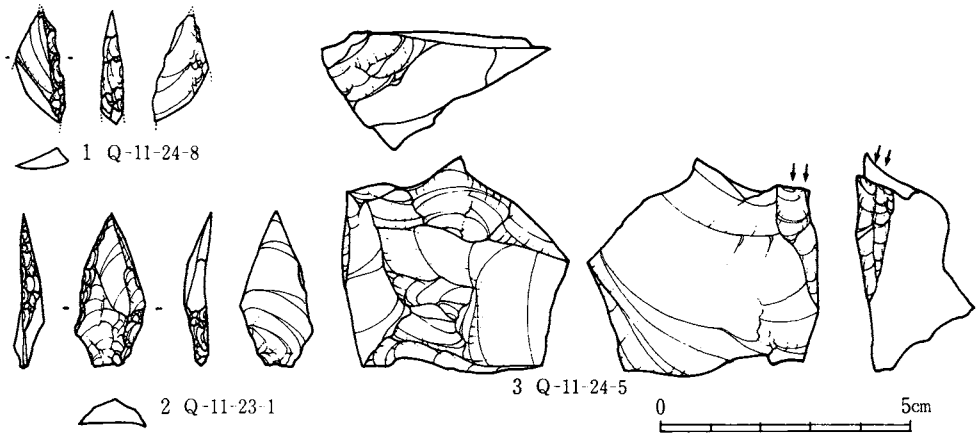


図73 第24ブロック出土遺物実測図(1)

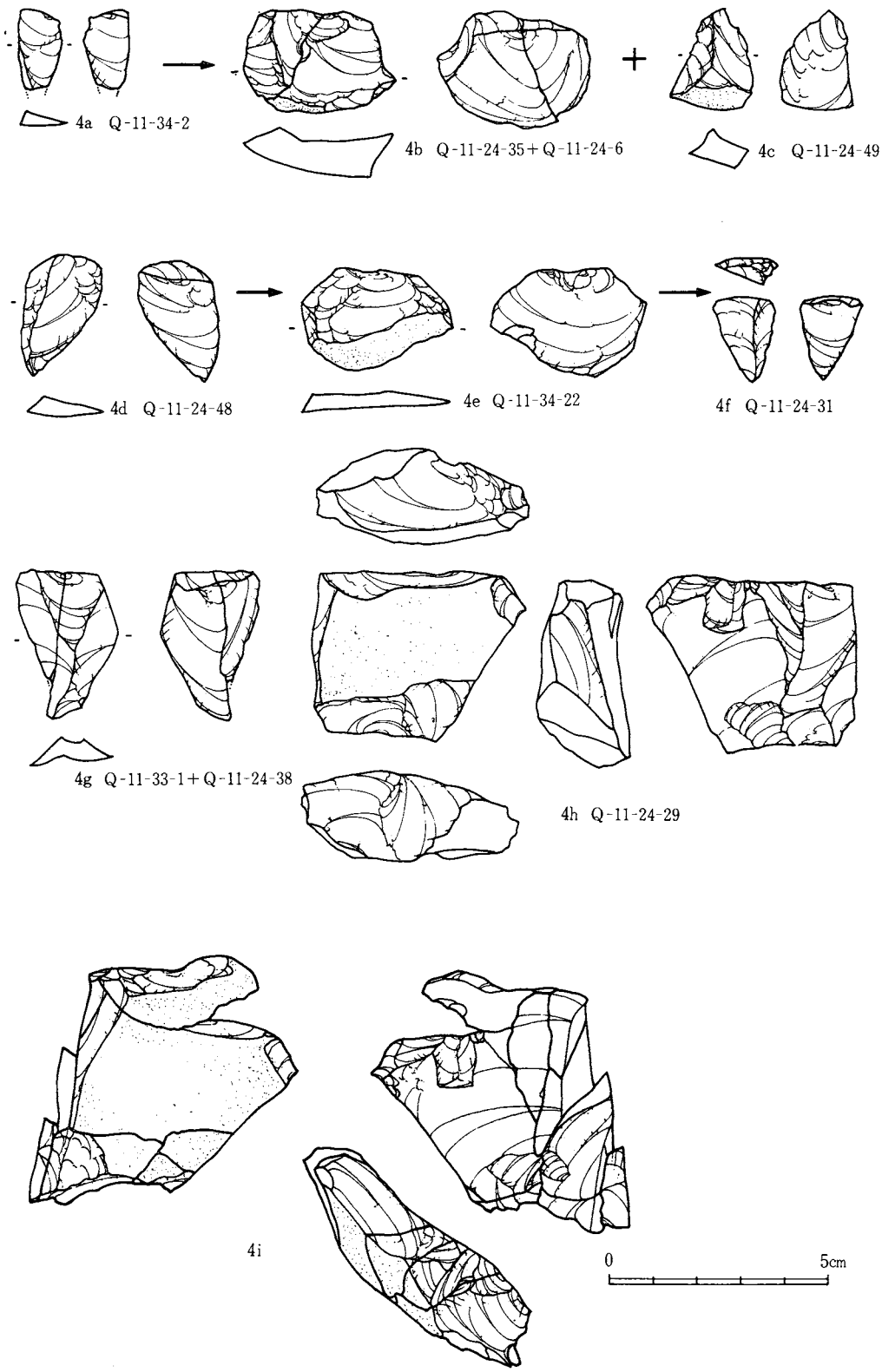


図74 第24ブロック出土遺物実測図(2)

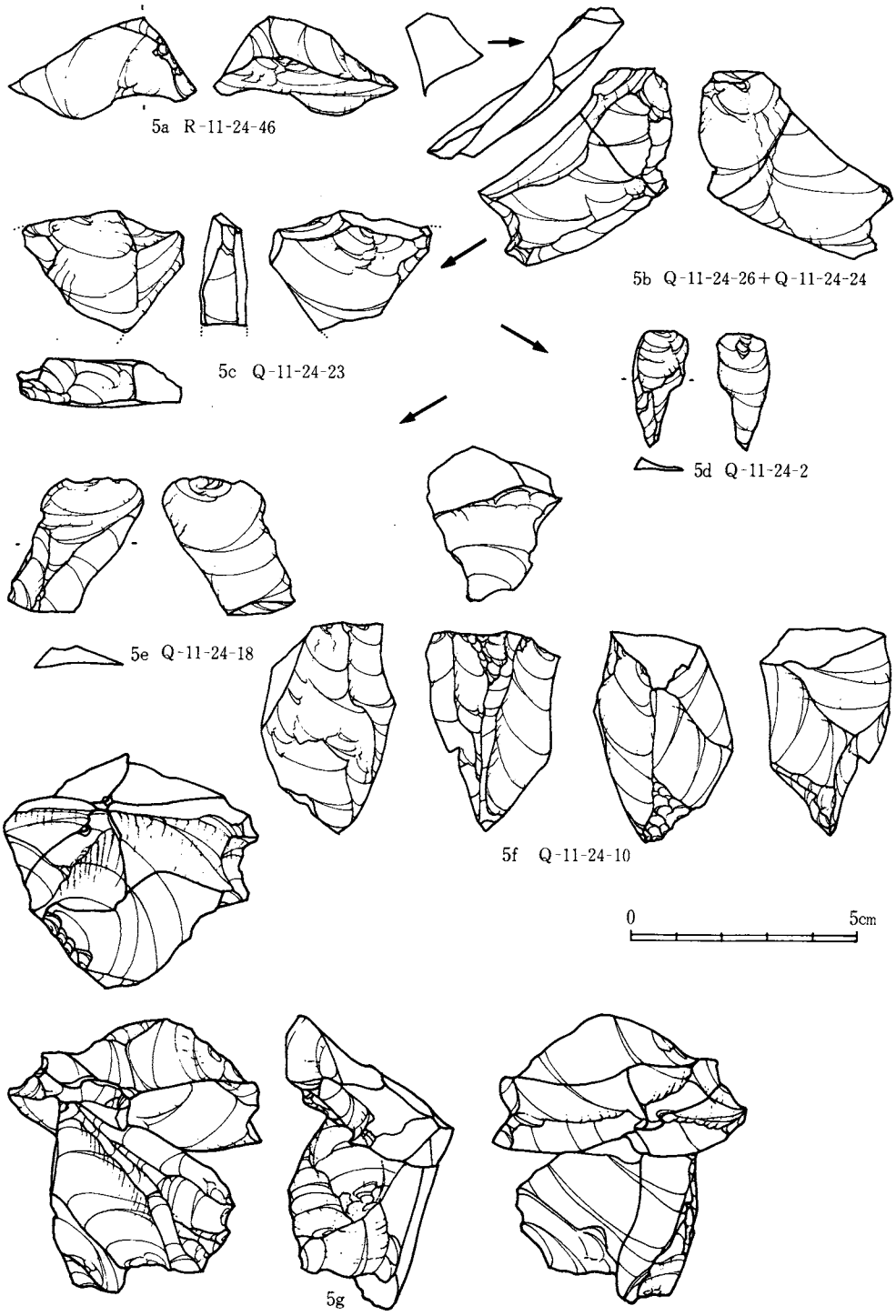


図75 第24ブロック出土遺物実測図(3)

まとめ 本ブロックは、石器製作技術、特に剥片生産技術について注目すべき資料が出土した。同一母岩の中で板状剥片を素材として横長剥片を生産する技術と縦長剥片を生産する技術

とが併存している点で一つの母岩が部位ごとに有効に活用される技術体系として考えられる（珪質頁岩１）。石器調整技術に関しては、同一母岩のナイフ形石器が１点出土しているのみであり、詳細は不明である。しかし、刃つぶし加工の際にみられる調整剝片がみられることから本ブロックにそのような技術的背景があったことは確実であり、製作された石器群は他所に存在するものと考えられる。

２．第25ブロック（図76～83、図版19－２、21－１、２、22、表92～95）

出土状況　ソフトローム下部よりⅧ層上部にかけて出土しているが、特にⅦａ層より密に出土している。レベル差約 60 cm である。南西にむかって緩く傾斜する地域にあたり、平坦部分ではハードローム上面がⅤ層であるのに対して、下方の傾斜部分ではⅧ層上面までソフトローム化している。なお現地表面は傾斜しているのに対して遺物は、ほぼ水平に堆積している。平面形は径3.70mのほぼ円形を呈しており、分布密度は均一である。石核が南側に偏在している他、器種ごとの分布に偏りはみられない。

出土遺物　総計60点出土した。石器組成はナイフ形石器３点、彫刻刀形石器１点、２次加工ある剝片１点、剝片44点、砕片７点、石核４点となっている。１、２はナイフ形石器である。１は横長剝片を素材とした１側辺加工で、平坦な打面が残存する。２は縦長剝片を素材とした２側辺加工のナイフ形石器である。打面部は除去されている。３～５は大形の縦長剝片である。

技術的特徴　本ブロックの石材としては、黒曜石、珪質頁岩、チャート、メノウなどがみられるが、その中で珪質頁岩製の石器群に剝片生産技術に関する良好な接合資料がみられた。その他の石材については詳細は不明である。珪質頁岩は10の母岩に識別できたが、このうち剝片生産技術を如実に示す資料として４つの接合資料が存在する。以下接合資料の解説に沿って本ブロックの技術的側面を記述していく。

接合資料１は剝片どうしの接合資料である。１と２の剝片の背面側は、逆方向もしくは互いに斜交する剝離面によっておおわれている。また、打面は自然面打面であり、大形の円礫を求心的に加撃し、

表92　第25ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	黒曜石		珪質頁岩		チャート		メノウ		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	2	3.6	1	100	－	－	3	5.0
尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
有舌尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	1	1.8	－	－	－	－	1	1.7
二次加工ある剝片	1	50	－	－	－	－	－	－	1	1.7
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	－	－	43	76.8	－	－	1	100	44	73.2
砕片	1	50	6	10.7	－	－	－	－	7	11.7
石核	－	－	4	7.1	－	－	－	－	4	6.7
原石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計	2	3.3	56	93.3	1	1.7	1	1.7	60	100

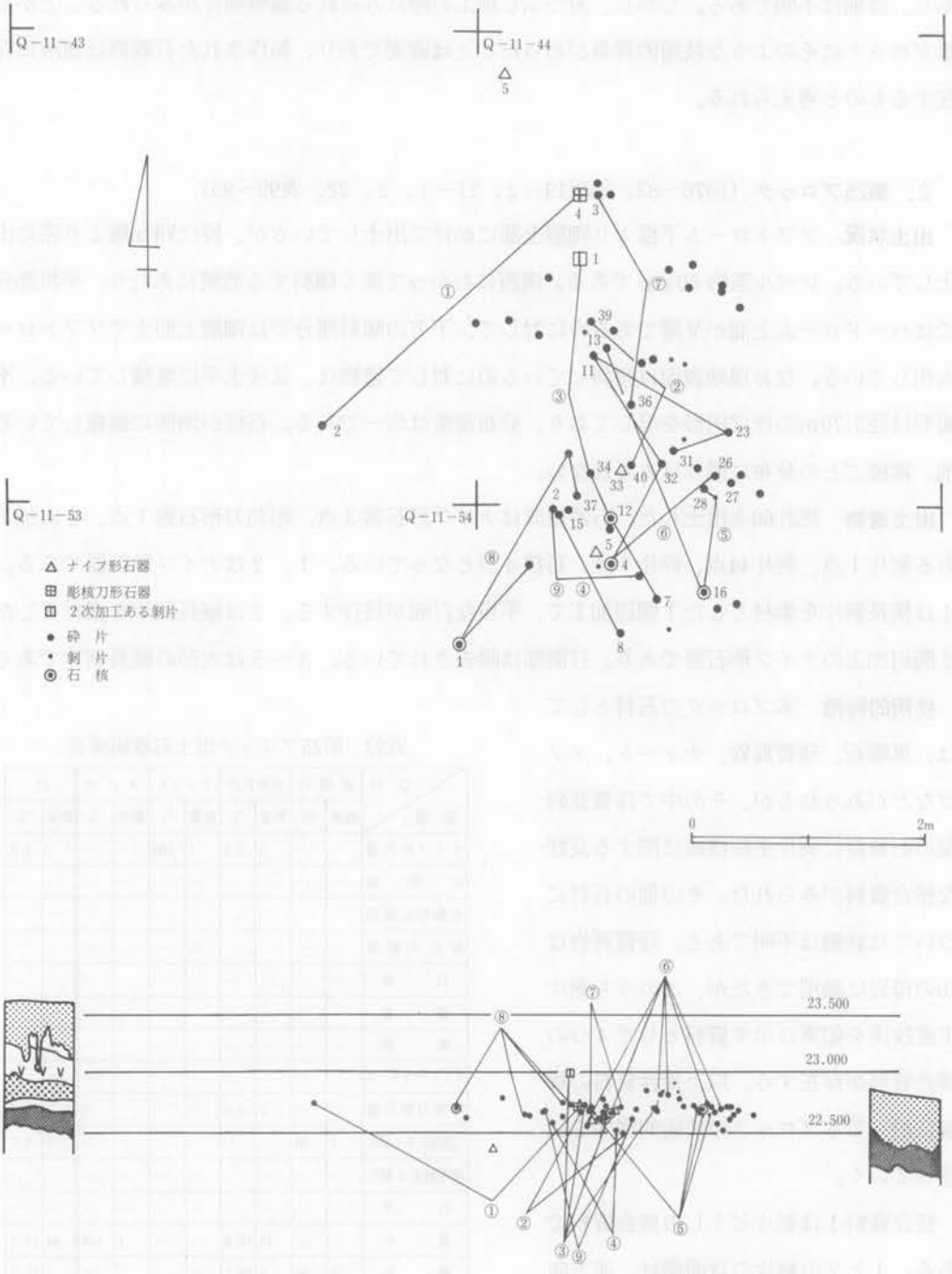


図76 第25ブロック遺物出土状況図

寸づまりの剥片を生産する技術が窺える。なお、2は彫刻刀形石器としたが石核の可能性も考えられる。接合資料3は平坦な単設打面より打面調整をせず、縦長剥片を生産している。生産された剥片のうち多くは欠落しており、欠損品(2)や不定形の剥片(1)が残されている。接合資料5は大形剥片を素材とした石核の平坦な両設打面より縦長剥片を生産している状況を示している。1は加撃面形成剥片、2は2次加工のみられる縦長剥片、3は横長剥片である。生産された剥片の多くは欠落している。接合資料6は打面が複数みられ、加撃面転移が頻繁である。打面調整はなく平坦打面であり、同一母岩の加撃面再生剥片により打面再生産が行われたことが推定される。生産された剥片の形状は縦長というよりむしろ寸づまりの横長剥片に近い。接合資料7は加撃面再生剥片どうしの接合資料であるが、加撃方向は約60°に交差している。接合資料8は平坦な両設打面より縦長剥片を生産する技術を表示している。以上の事実を総合すると第25ブロックの剥片生産技術の特徴としては、打面は両設打面で、例外なく平坦打面となっており、打面調整はみられず打面再生が時としてあったことが窺われる。なお、目的剥片は縦長剥片であり、先端部は尖らず鈍端をなす。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、珪質頁岩10種、メノウ1種、チャート1種、黒曜石1種が識別された。石材では珪質頁岩が量的に大きな割合を占めているが（93.3

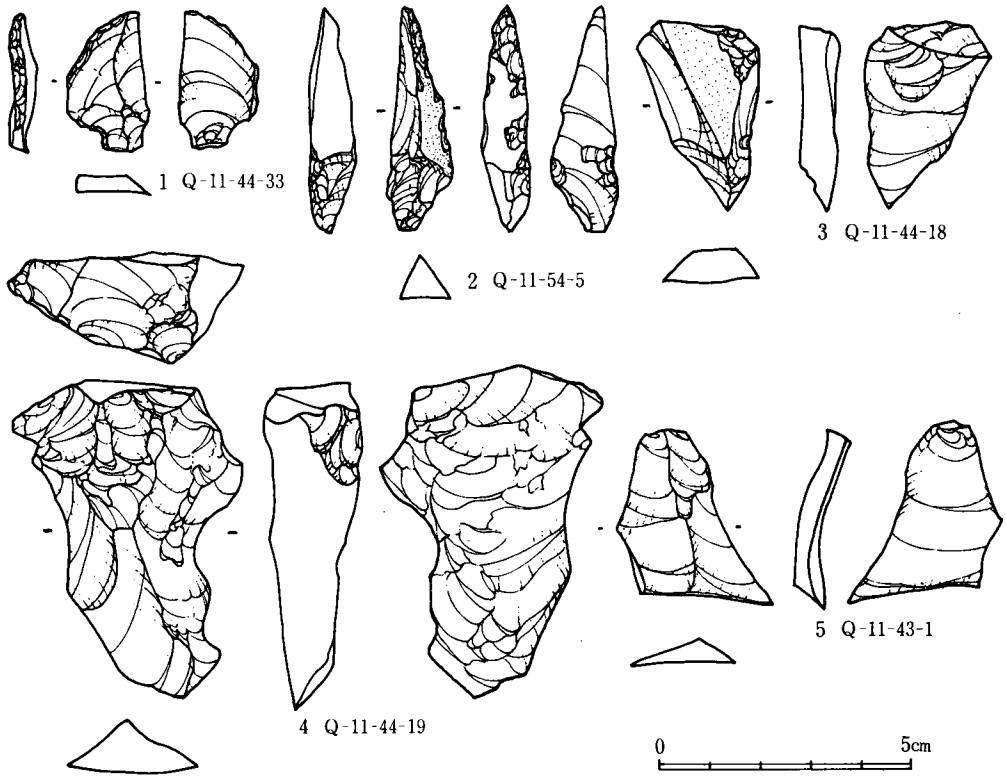


図77 第25ブロック出土遺物実測図(1)

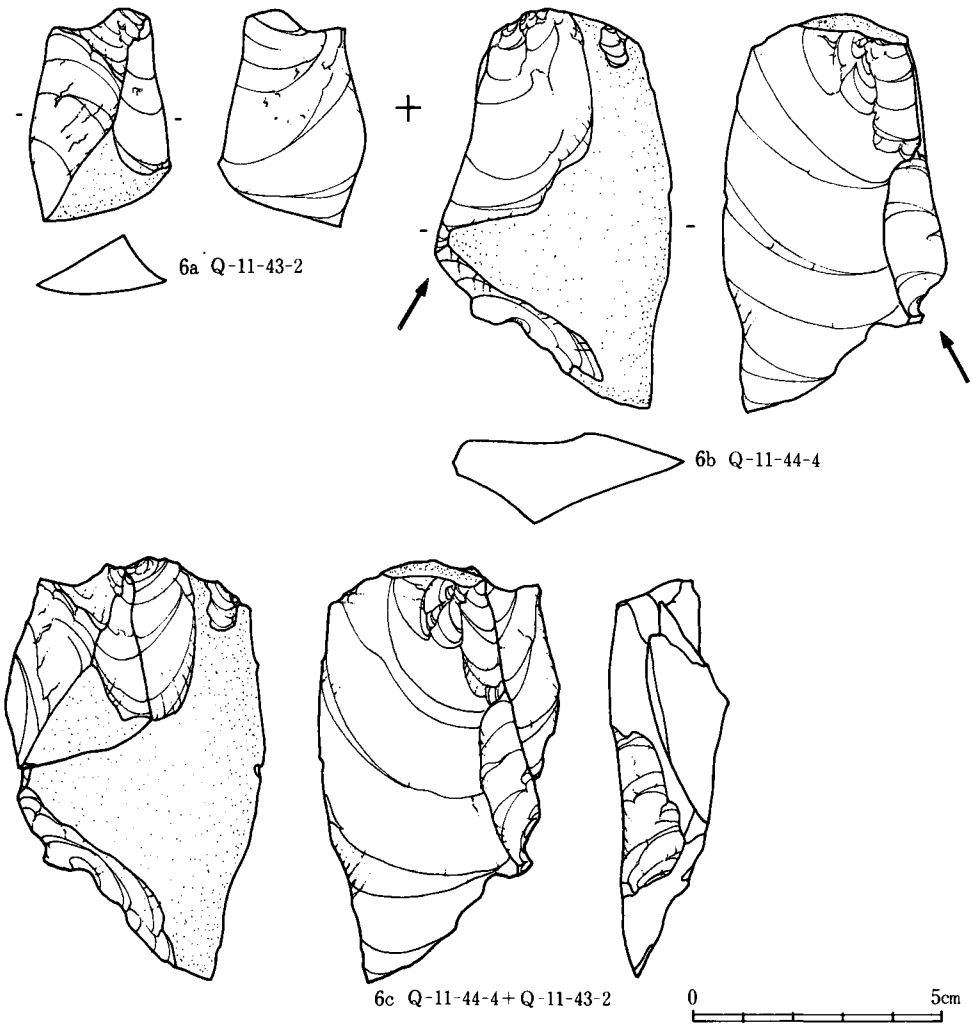


図78 第25ブロック出土遺物実測図(2)

表93 第25ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	2
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	5	—	—	—	6
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	3	1	—	14
珪質頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	1	2	—	13
珪質頁岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
珪質頁岩 5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	1	—	8
珪質頁岩 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩 8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩 9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1

器種 / 母岩	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
チャート1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
メノウ1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		—	—	1
計	3	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	41	5	4	—	55

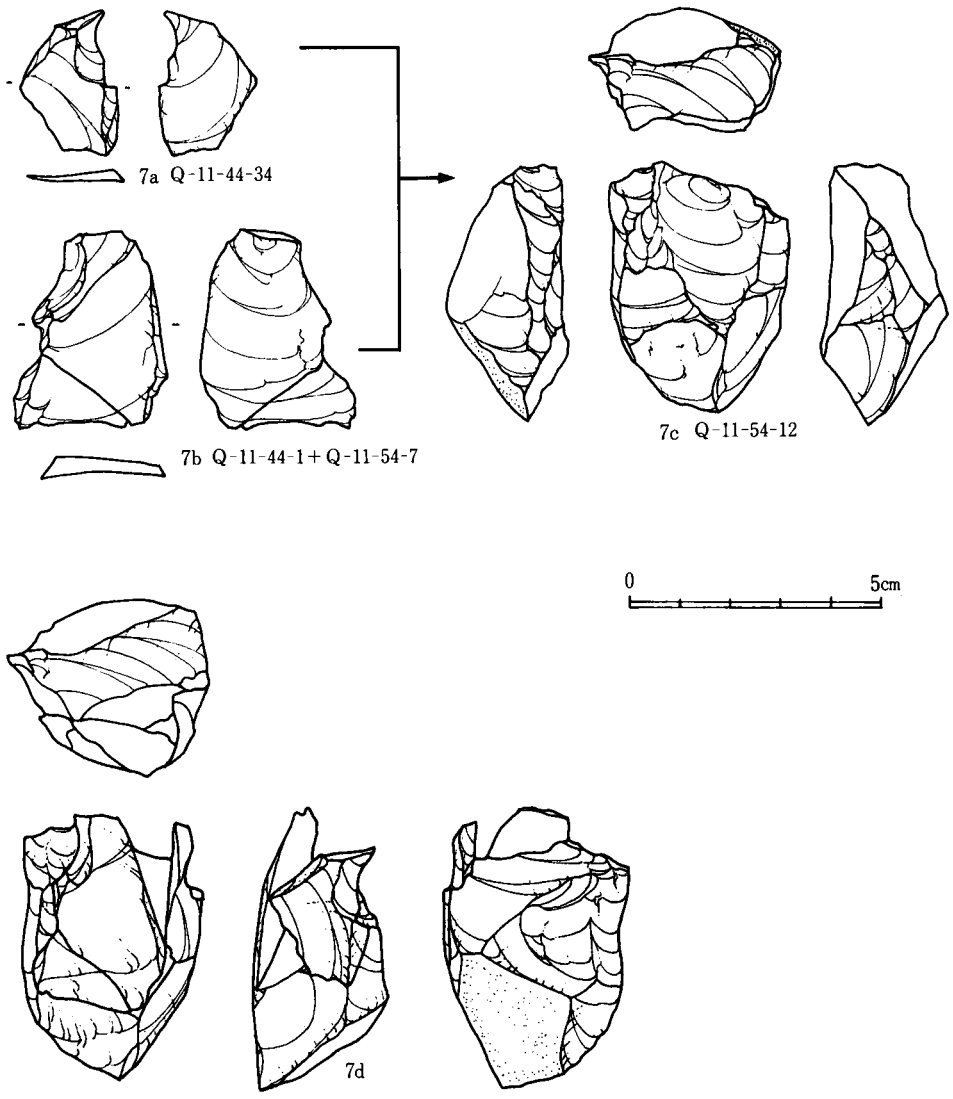


図79 第25ブロック出土遺物実測図(3)

表94 第25ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	珪質頁岩1	剥片 彫刻刀形石器	(Q-11-43-2)(剥片)→(Q-11-44-4)(彫刻刀形石器)	2
2	2	珪質頁岩2	剥片2（基部、先端部）	(Q−11−44−40)＋(Q−11−44−39)	2

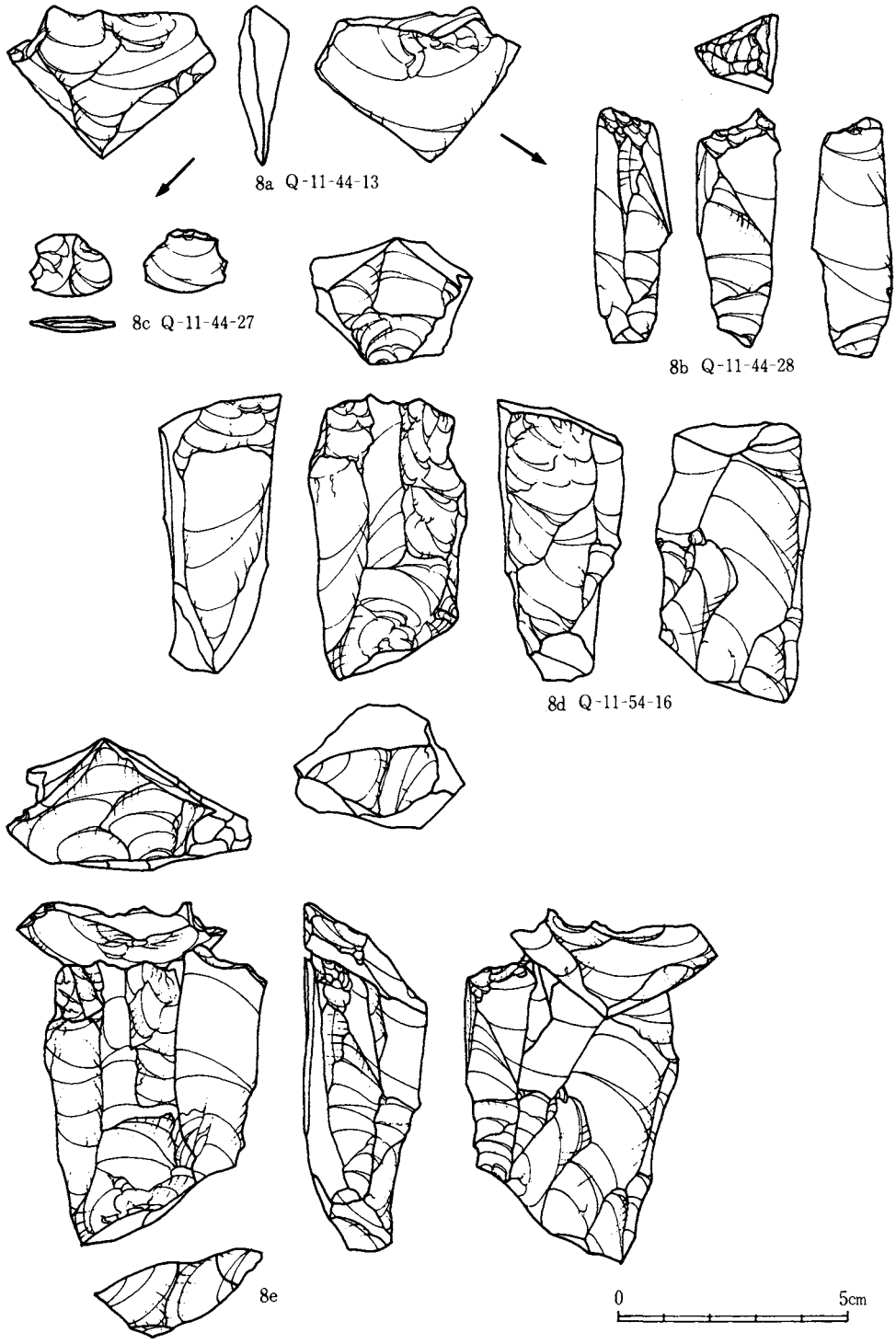


図80 第25ブロック出土遺物実測図(4)

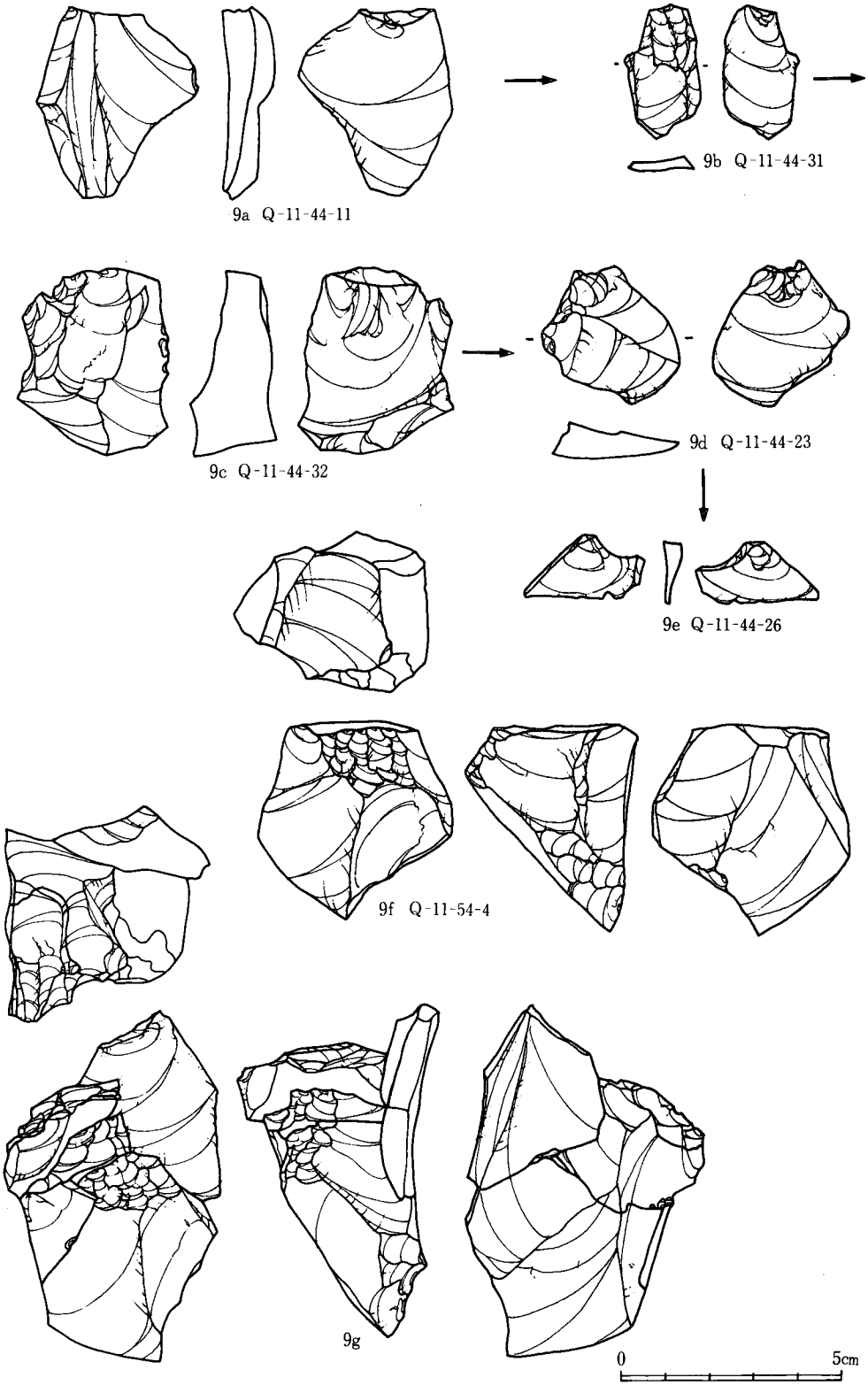


図81 第25ブロック出土遺物実測図(5)

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
3	3	珪質頁岩2	剝片3（同一個体1） 石核1	{(Q-11-44-1)+(Q-11-54-7) (Q-11-44-34)} →(Q-11-54-12) (石核)	4
4	4	珪質頁岩2	加撃面再生剝片2	(Q—11—54—15) → (Q—11—54—8)	2
5	5	珪質頁岩3	加撃面形成剝片1 剝片2、石核1	(Q-11-44-13)(加撃面形成)→{(Q-11-44-27) (Q-11-44-28)} →(Q-11-54-16)(石核)	4
6	6	珪質頁岩3	剝　片5 石　核1	(Q—11—44—11)→(Q—11—44—31)→(Q—11—44—32)→(Q—11—44—23)→(Q—11—44—26)→(Q—11—54—4)(石核)	6
7	7	珪質頁岩3	加撃面再生剝片　2	(Q—11—44—36) → (Q—11—44—3)	2
8	8	珪質頁岩5	剝　片　3 石　核　1	(Q—11—54—1) → (Q—11—44—35) → (Q—11—44—37) → (Q—11—53—1)(石核)	4
9	9	珪質頁岩6	剝　片2	(Q—11—54—2) → (Q—11—54—6)	2

表95　第25ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	Q—11—44—5	ナイフ形石器	1.7	1.2	0.5	不明	0.9	—	不明	有	無	チャート
2	Q—11—54—5	ナイフ形石器	4.4	1.3	0.9	60°	4.0	図77—2	2側辺	無	無	頁岩
3	Q—11—44—33	彫刻刀形石器	2.7	1.6	0.4	35°	1.9	図77—1	1側辺	無	無	頁岩
4	Q—11—44—4	彫刻刀形石器	7.8	4.7	1.8	—	58.7	図78-6b	—	無	無	頁岩
5	Q—11—44—1	二次加工ある剝片	2.3	1.1	0.5	—	5.0	図79-7b	—	有	無	黒曜石
6	Q—11—53—1	石核	3.4	2.5	2.0	—	18.3	図83-11d	—	無	無	頁岩
7	Q—11—54—4	石核	5.1	4.6	2.8	—	56.9	図81—9f	—	無	無	頁岩
8	Q—11—54—12	石核	4.4	3.6	2.2	—	37.8	図79—7c	—	無	無	頁岩
9	Q—11—54—16	石核	5.7	3.5	2.7	—	51.9	図80—8d	—	無	無	頁岩

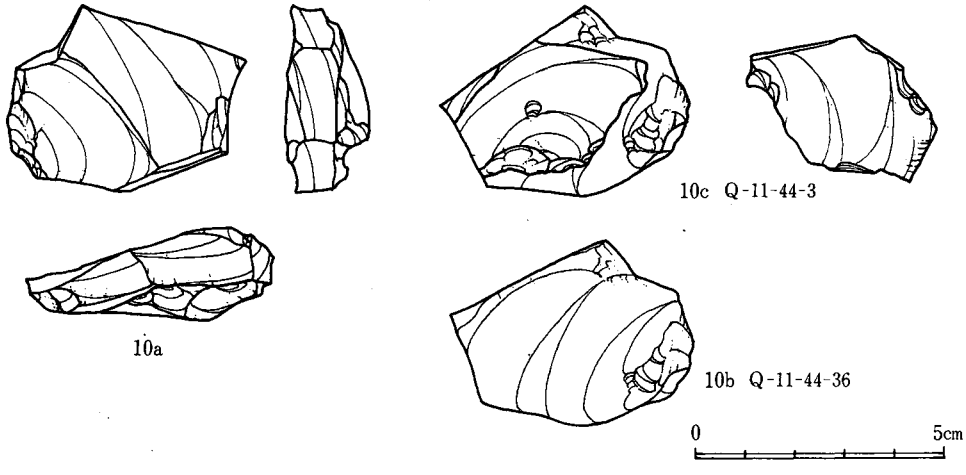


図82 第25ブロック出土遺物実測図(6)

%)、他の石材はいずれも少ない。珪質頁岩の中で特に2、3は接合資料より剥片生産技術を反映していることが窺われる。具体的な内容については前述したので割愛することにするが、生産された剥片のうち、その多くはブロック外へ搬出されている。

まとめ　端的に言えば本ブロックは利器が少なく剥片生産技術を強く反映しているものと言えよう。このような技術的な特徴は北側に近接する第24ブロックと強い関係が認知されるが、母岩別資料、接合資料による相関関係がなく、生産された石器群（剥片、利器）の相互の交流はみとめられない。したがって、直接的なつながりは証明できない。

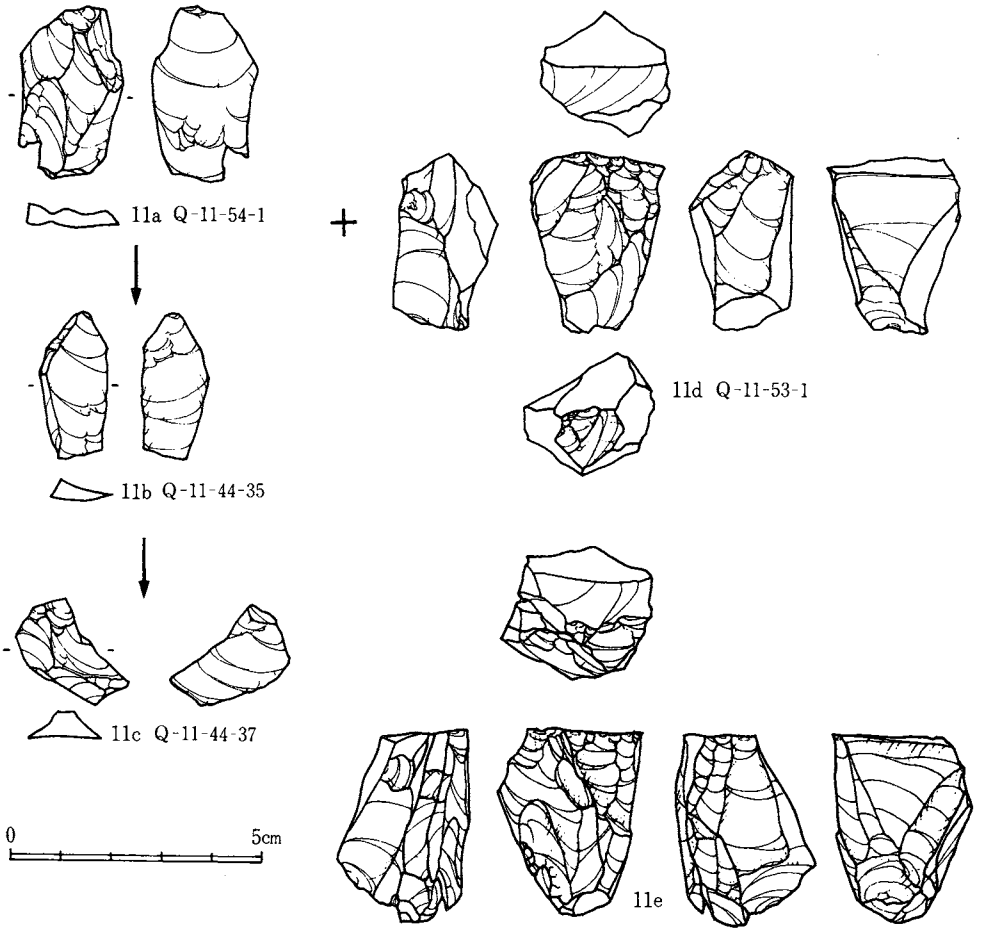


図83 第25ブロック出土遺物実測図(7)

3．第5文化層ブロック外出土資料（図84、表96、97）

総計24点出土した。内訳はナイフ形石器1点、2次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片

1点、剥片11点、砕片9点となっている。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とした2側辺加工で、先端部が欠損している。

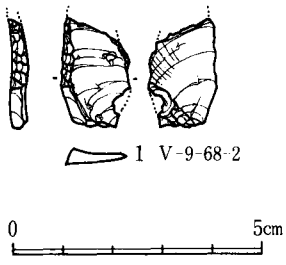


図84 第5文化層ブロック外出土遺物実測図

表96 第5文化層ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		チャート		凝灰岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4.2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	1	20.0	—	—	—	—	1	16.7	2	8.3
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	1	20.0	—	—	1	4.2
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	—	—	4	80.0	2	33.3	3	60.0	2	33.3	11	45.8
砕片	1	50.0	—	—	4	66.7	1	20.0	3	50.0	9	37.5
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	2	8.2	5	20.9	6	25.0	5	20.9	6	25.0	24	100

表97 第5文化層ブロック外出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	V－9－68－2	ナイフ形石器	2.3	1.4	0.3	—	0.9	図84－1	2側辺	有	—	黒曜石
2	V－9－68－1	使用痕ある剥片	2.6	2.8	1.1	—	7.6	—	—	無	有	チャート
3	T－11－43－2	二次加工ある剥片	4.4	2.6	1.5	—	13.4	—	—	無	無	安山岩
4	V－9－69－3	二次加工ある剥片	3.7	2.2	1.2	—	5.6	—	—	無	無	凝灰岩

4．第5文化層のまとめ

Ⅶa層中に生活面を持つ文化層である。第24、25ブロックがこれに該当する。これらのブロックはいずれも母岩が独立しており、ブロック内で母岩が完結している。石器群は、ナイフ形石器を主体としており、それ以外は彫刻刀形石器が1点存在するのみである。ナイフ形石器はいずれも縦長剥片を素材とした2側辺加工である。剥片生産技術は平坦な打面より時として打面再生を行いながら縦長剥片を生産している。

第7節　第　6　文　化　層

1．第10ブロック（図15、85～87、図版23－1、2、24、25、表98～101）

出土状況　Ⅶ層下部よりⅧ層上面に至るまで分布しており、その中で密集した位置はⅦa層である。平面形ではさらに2つのまとまりに細分しうる。1つは北西側に広がるまとまり、いま1つは南東側に広がるまとまりである。前者は少数の利器に剝片、砕片が集中するまとまり、後者は円盤形石核と破損した敲石が近接して出土しており、石核より剝離された剝片がここより広範囲に散在している。

出土遺物　総計152点出土している。石器組成はナイフ形石器2点、石錐1点、2次加工のある剝片2点、ピエス・エスキーユ1点、敲石2点(接合して1点)、剝片27点、砕片115点、石核1点、削器1点となっている。1、2はナイフ形石器である。いずれも縦長剝片を素材として、2側辺に急角度な刃つぶし加工をほどこしている。3は石錐である。横長剝片を素材として、剝片の先端部は片面加工である。4、5はピエス・エスキーユとスポールとの接合資料で、両極打撃の痕跡がみられる。6は敲石である。上下両端につぶれ、両面に敲打痕がみられる。上下に接合しており、欠損面の観察より使用途上で欠損したものと思われる。

表98　第10ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		砂岩		チャート		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1.3
尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
有舌尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	1	16.7	－	－	－	－	1	0.7
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	1	3.3	－	－	－	－	－	－	1	0.7
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	2	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1.3
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	12	10.6	15	50.0	－	－	－	－	－	－	27	17.7
砕片	98	86.0	12	40.0	3	50.0	1	100	1	100	115	75.6
石核	－	－	1	3.3	－	－	－	－	－	－	1	0.7
削片	－	－	1	3.3	－	－	－	－	－	－	1	0.7
敲石	－	－	－	－	(2)	33.3	－	－	－	－	2	1.3
計	114	75.0	30	19.8	6	3.9	1	0.7	1	0.7	152	100

技術的特徴　石材は黒曜石、珪質頁岩、チャートがみられる。剝片生産技術を如実に示す資料は珪質頁岩6のみである。珪質頁岩6は片面に自然面を残す盤状のあらわり礫を素材として求心的に加撃し、横長剝片を得ている。打面は平坦打面もしくは自然面打面となっている。目的剝片は最大厚が打面付近にあり、先端部にむかうにしたがって先細りとなり、不定形な横長剝片となっている。生産された剝片の内、本ブロックに残存している資料はすべて欠損しており、大形で良好な剝片は搬出された形跡がみられる。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、砂岩3種、頁岩7種、黒曜石5種、チャ

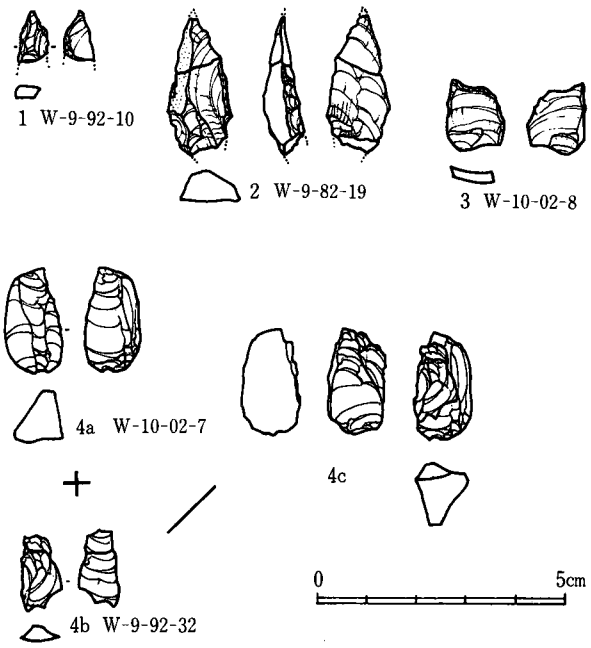


図85 第10ブロック出土遺物実測図(1)

表99 第10ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母名	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	削片	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
黒曜石 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
黒曜石 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	4	20	—	—	25
黒曜石 5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	16	—	—	22
頁 岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
頁 岩 2	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	3
頁 岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
頁 岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁 岩 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁 岩 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	5	1	1	21
頁 岩 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2
砂 岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	3
砂 岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
砂 岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
石材不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
計	2	—	—	—	1	—	—	1	—	1	—	—	26	53	1	2	87

ート1種、石材不明1種が識別された。これらの資料は石器製作技術の上では一連の工程を反映しているものとは言いがたく、断片的な資料にとどまり、工程上まとまった資料とは言えな

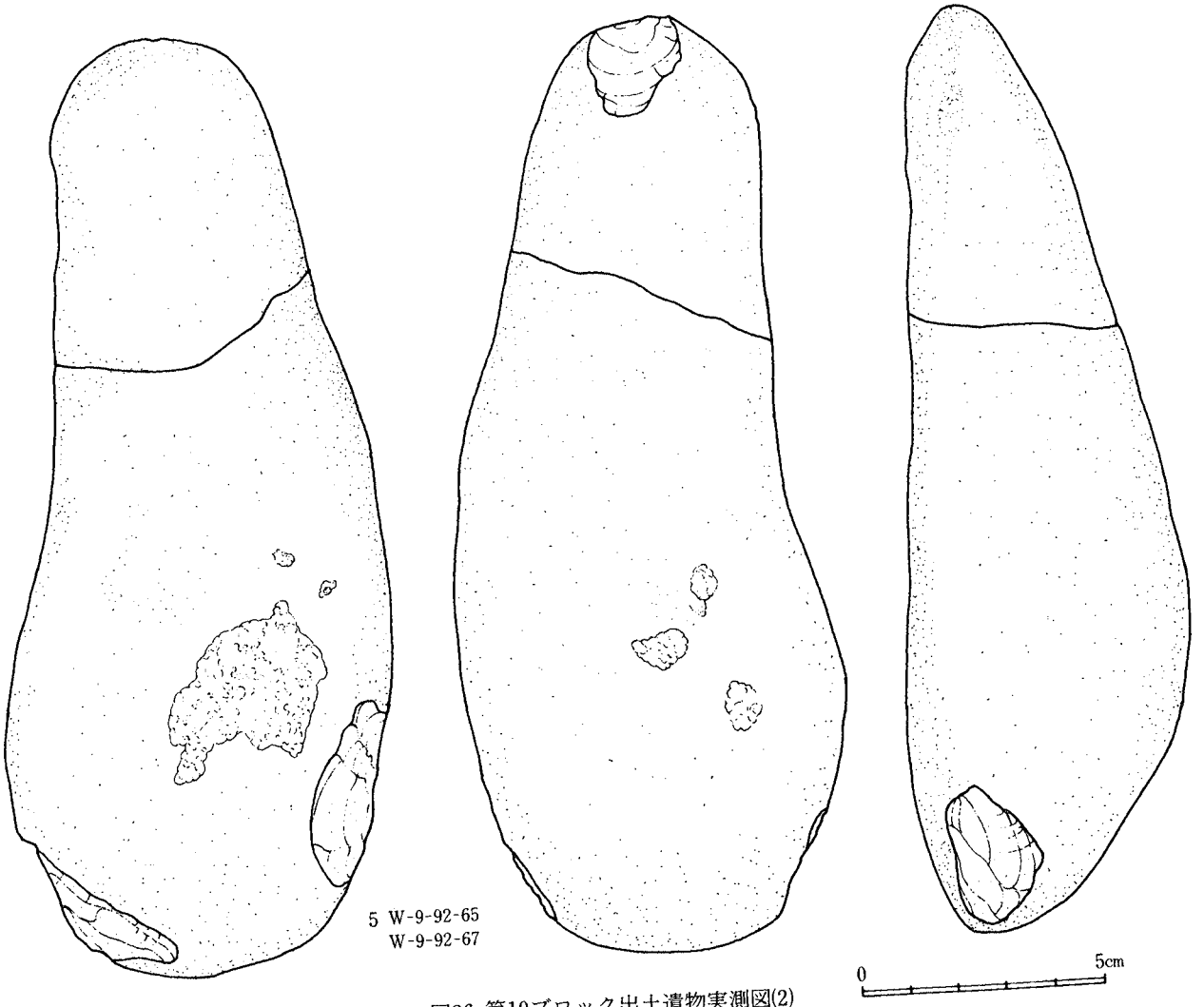


図86 第10ブロック出土遺物実測図(2)

い。その中で珪質頁岩6は剥片生産技術を明示するものとして注目される。

まとめ　本ブロックの石器群は利器が少なく、主として石器製作技術を反映したブロックである。注目すべき資料としては接合資料4（頁岩6）があるが、出土状況をみると石核と敲石が、互いに近接した位置にあり、これを中心として頁岩6が飛散しており、石器製作時の状況を示すものと考えられる。

表100　第10ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	砂岩 1	敲石1個体 2	(W－9－92－7)＋(W－9－92－67)	2
2	2	頁岩 1	剥片（断片1）	(W－9－81－21)＋(W－9－81－7)（断片）	2
3	3	頁岩 2	ピエス・エスキーユ1 スポール1	(W－10－02－7) (W－9－92－32)	2
4	4	頁岩 6	石核1 剥片11（15）	(W-9-81-9) (W-9-92-49) →(W-9-92-51) ※W-9-92-29位置不明 ＋(W-9-92-52)→(W-9-92-27) →(W-9-90-3)→(W-9-92-14) ＋(W-10-02-5)→(W－10-02-6) (W-9-92-11)→(W-9-82-12) ＋(W-9-92-12)→(W-9-92-30) ＋(W-9-92-16) →W-9-92-66（石核）	16
5	5	頁岩 7	砕片 加熱による剥落	(W－9－82－4)＋(W－9－82－15)	2
6	6	黒曜石 5	剥片2 同一個体より剥落	(W－9－91－9)＋(W－9－92－54)	2

表101　第10ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	W－9－82－19	ナイフ形石器	2.8	1.3	0.3	50°	1.7	図85－2	2側辺	有	無	黒曜石
2	W－9－92－10	ナイフ形石器	1.0	0.7	0.3	－	0.2	図85－1	－	有	無	黒曜石
3	W－9－92－25	二次加工ある剥片	2.1	1.2	0.6	－	0.9	－	－	有	無	黒曜石
4	W－9－92－26	二次加工ある剥片	1.0	1.7	0.5	－	0.6	－	－	有	無	黒曜石
5	W－10－02－7	ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	1.7	図85-4a	－	無	無	白色泥岩
6	W－10－02－8	石錐	1.5	1.1	0.3	－	0.4	図85－3	－	無	無	頁岩
7	W－9－92－65	敲石	13.8	7.6	5.9	－	190	図86－5	－	有	有	砂岩
	W－9－92－67	敲石	6.9	5.0	4.1	－	970	図86－5	－	有	有	砂岩
8	W－9－92－66	石核	10.7	7.0	4.3	－	255.1	図87-6o	－	無	無	頁岩

2．第11ブロック（図88～90、図版23－3、25、表102～105）

出土状況　Ⅶa層中からⅦc層上面にかけて分布しているが、Ⅶc層上面に密となっている。ブロックの位置が東にむかって緩かに傾斜する地区にあたり、本ブロックも地形面にそって東方へ傾斜している。平面分布は均一な分布密度を呈するが細かにみると、北東側と南西側との

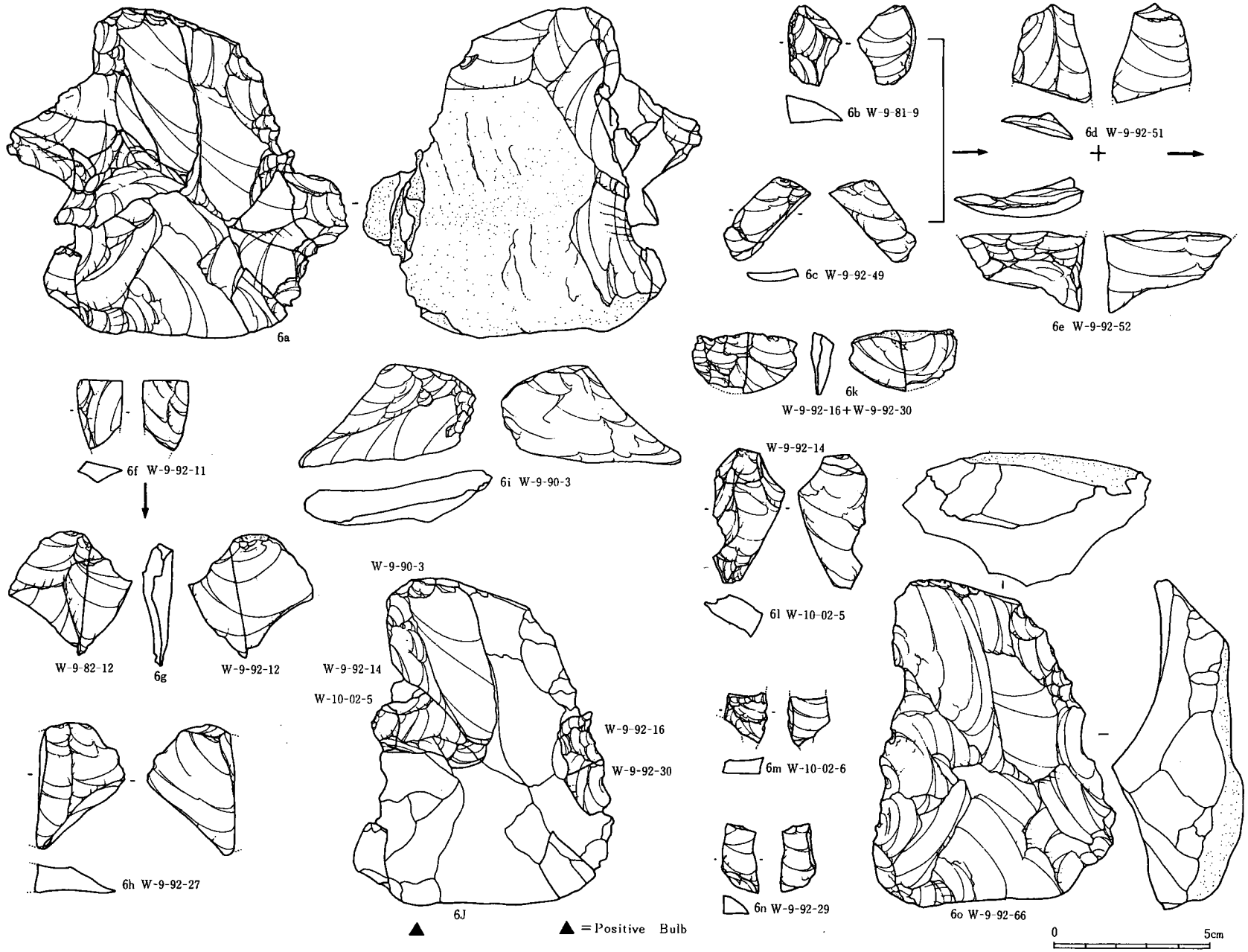


図87 第10ブロック出土遺物実測図(3)

表102　第11ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		珪質頁岩		砂岩		チャート		メノウ		粘板岩		花崗岩		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.4	—	—	—	—	—	—	1	0.7
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.4	—	—	—	—	—	—	1	0.7
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.4	—	—	—	—	—	—	1	0.7
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	2.9	—	—	—	—	1	6.7	7	9.7	—	—	—	—	—	—	9	6.1
使用痕ある剝片	—	—	1	6.7	—	—	—	—	2	2.8	—	—	—	—	—	—	3	2.0
石斧	—	—	—	—	1	33.3	—	—	—	—	1	100	—	—	—	—	2	1.3
剝片	16	47.1	11	73.3	—	—	(3) 7	66.7	27	37.5	—	—	—	—	(3) 5	100	72	48.6
砕片	17	50.0	3	20.0	2	66.7	4	26.7	31	43.1	—	—	—	—	—	—	57	38.5
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2.8	—	—	—	—	—	—	2	1.4
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	34	23.0	15	10.1	3	2.0	15	10.1	72	48.6	1	0.7	—	—	8	5.4	148	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	100	—	—	1	—

表103　第11ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	14	19	—	—	34
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5		—	—	5
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
珪質頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
珪質頁岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
珪質頁岩 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	3
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	2
砂岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)	—	—	—	3
チャート 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
チャート 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	3	1	—	—	5
チャート 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		2	—	—	2
チャート 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—	—	2
メノウ 1	1	—	—	—	—	1	—	1	—	5	—	—	12	27	—	—	47
メノウ 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	—	5
メノウ 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	4	1	—	7
メノウ 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
メノウ 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	—	—	3

母岩＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
メノウ7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—		—	—	—	1
メノウ8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	3
メノウ9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
粘板岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
石材不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3) 5	—	—	—	8
計	1	—	—	—	—	1	—	1	—	9	3	2	66	60	2		145

2つのまとまりが看取される。

出土遺物　総計148点出土した。石器組成は掻器1点、削器1点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工のある剥片9点、使用痕のある剥片3点、石斧2点、剥片72点、砕片57点、石核2点となっている。1、5、8は2次加工ある剥片である。1、3、5は幅広な縦長剥片を素材としており、2次加工は1、5、8がインバースリタッチとなっている。なお、5、8については削器の可能性が高い。2は削器で、幅広な縦長剥片を素材として、右側辺に2次加工がほどこされている。4は掻器である。幅広な縦長剥片を素材として先端部に急角度な2次加工をほどこしている。6、7は使用痕のある剥片で、いずれも右側辺に連続的な刃こぼれがみられる。9はピエス・エスキーユであるが、事前に調整された大形の剥離面が多数みられ石核として使用後転用されたものと思われる。10～12は石核である。10はぶ厚い剥片を素材として主要剥離面側上端部に加撃し、横長剥片を生産しており、3つに破砕されている。13、14は局部磨製石斧である。13は楕円形を呈する大形の石斧である。素材は研磨痕が側辺部の剥離面を除いてほぼ全面に及んでいるので不明である。周辺部より調整を連続的に加えたのちほぼ長軸方向に研磨して仕上げている。刃部は鋭い作業縁をなし、両刃である。刃線は直線である。刃部には使用痕を観察できないが、周辺部には手擦れと推定される磨耗痕がある。なお片面に敲打痕がみられる。14は小形の石斧である。礫素材で周辺加工ののち刃部のみ研磨し作出している。刃部には線状痕が長軸方向および、やや斜めの方向にみられ、細かな刃こぼれがみとめられる。基部が欠損している。

技術的特徴　石材はメノウ、チャート、安山岩、粘板岩、珪質頁岩などがみられるが、いずれも円礫である。剥片生産技術はいずれもぶ厚い剥片を素材として加撃面転移が頻繁で平坦打面より幅広な剥片を生産している。

母岩別資料・接合資料とブロック　母岩別資料は、メノウ9種、チャート5種、珪質頁岩6種、砂岩2種、安山岩1種、粘板岩1種、石材不明1種と多岐にわたる。ハードローム上半部にみられた黒曜石が姿を消し、メノウ、チャート、頁岩、安山岩などが数量的に大きな比重を占める。接合資料は8例ある。内訳は、剥片の分断資料4例、剥片どうしの接合資料2例、石核の分断資料1例、加熱による剥片の欠損資料1例となっている。

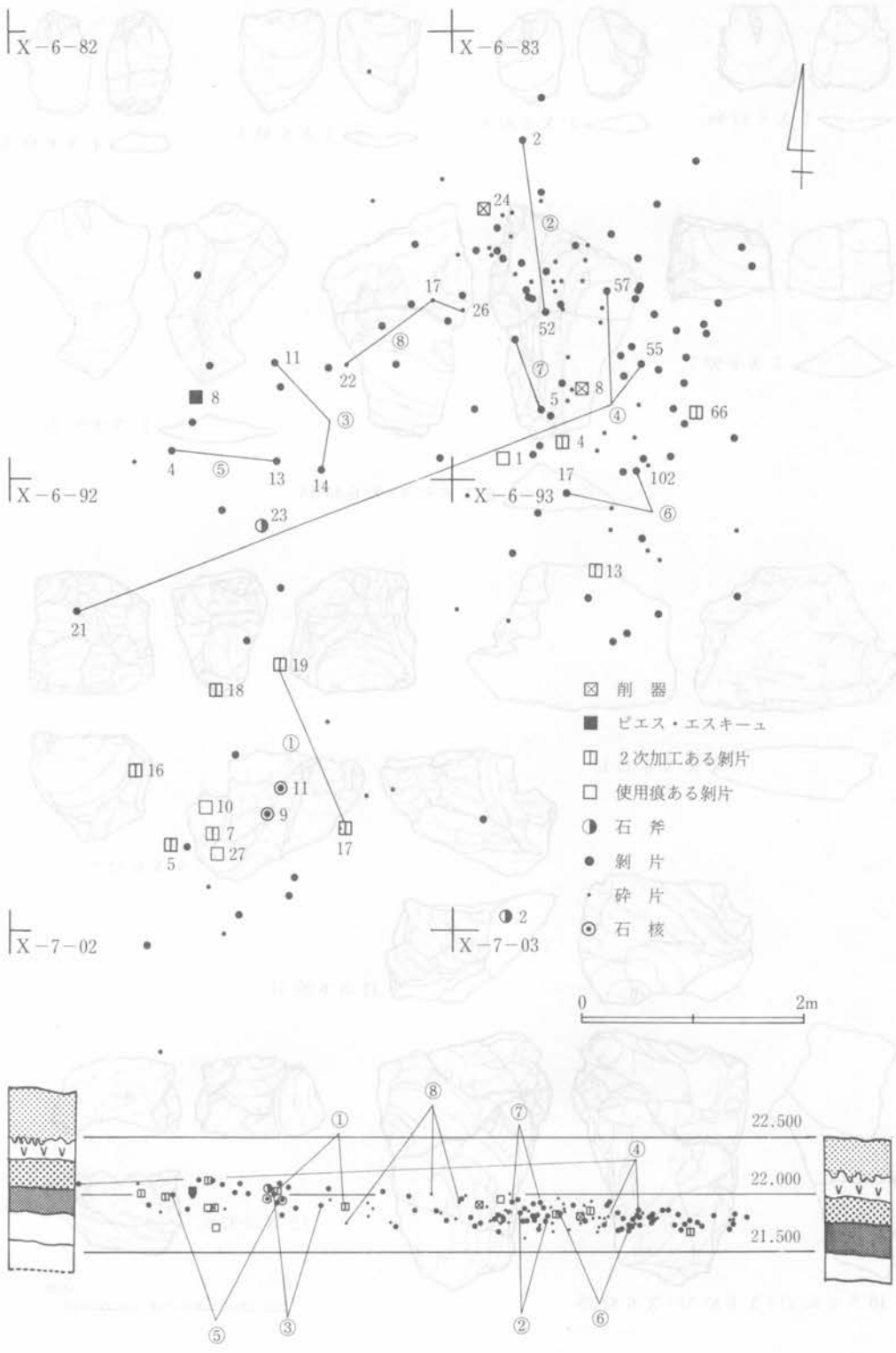


図88 第11ブロック遺物出土状況図

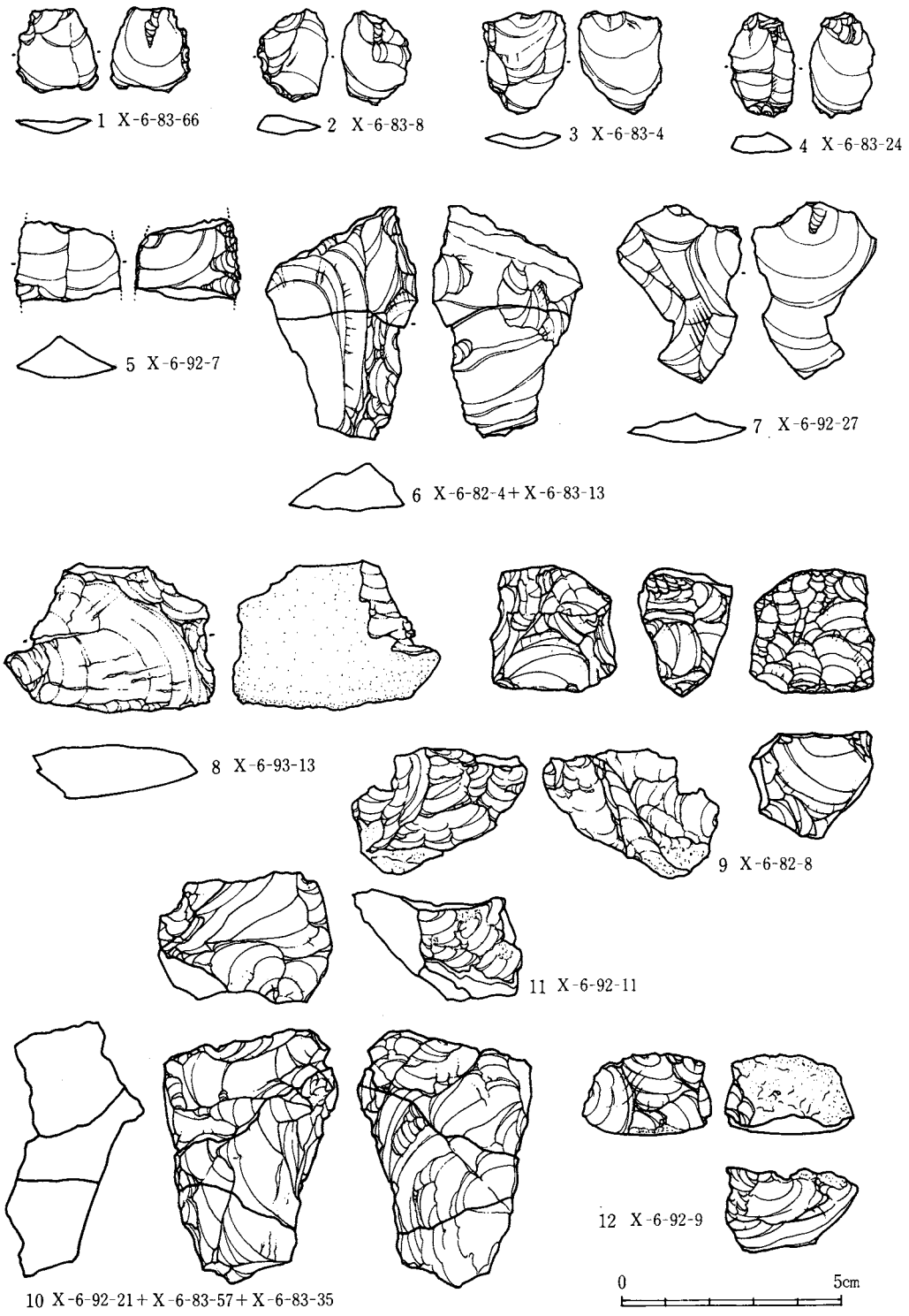
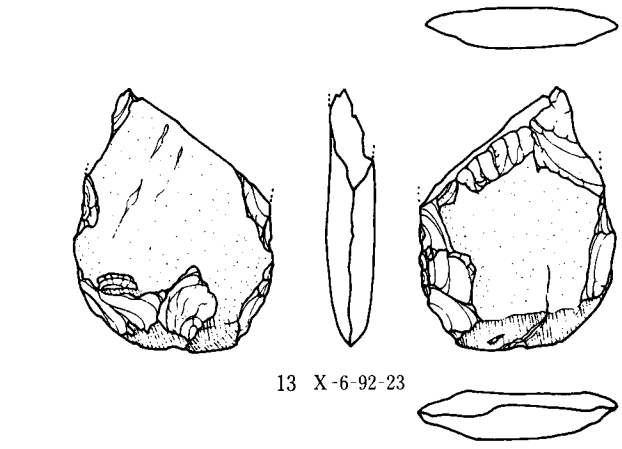


図89 第11ブロック出土遺物実測図(1)



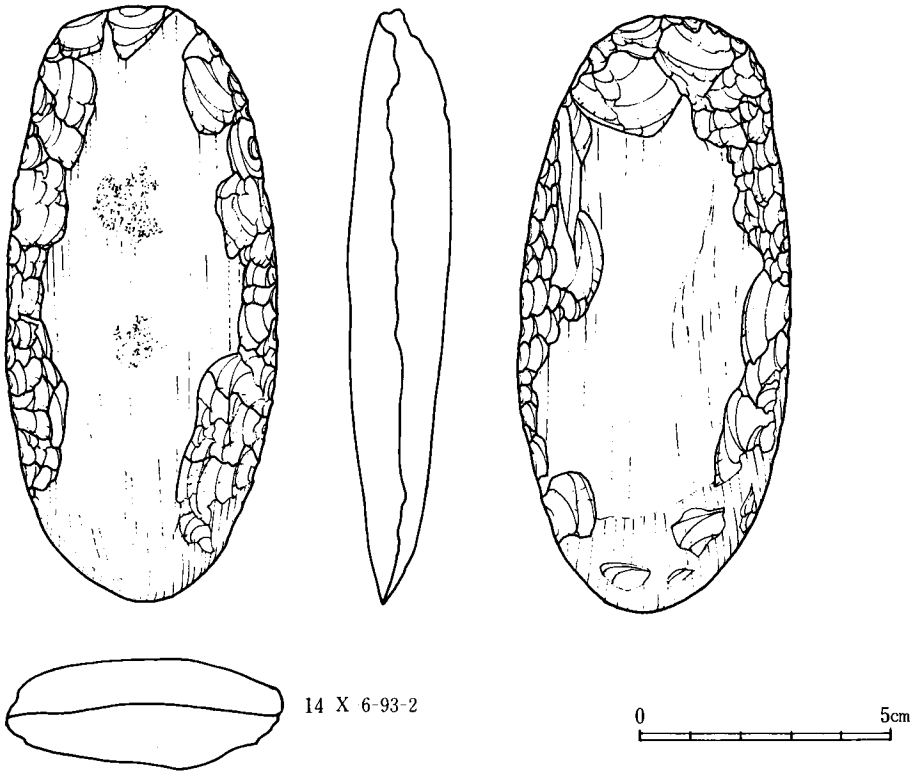


図90 第11ブロック出土遺物実測図(2)

まとめ　石器組成では楕円形の石斧を保有している。この種の石斧は県内では山武郡芝山町新東京国際空港 No. 55 遺跡[註1]、千葉市六通金山遺跡[註2]、佐倉市臼井南遺跡[註3]などで出土例が知られ、近年資料的な増加が認められる。出土層位はⅦ層～Ⅷ層に限定され時期的な示標となっている。

本ブロックの位置、石器組成、石材等を勘案すると、自己完結的であり、他のブロック（第10ブロック）との類縁関係はみとめられない。

表104　第11ブロック接合資料一覧表

No.	接合資料	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	1	メノウ1	剥片（基部中間部）	(X－6－92－19)＋(X－6－92－17)	2
2	2	メノウ2	剥片（基部、先端部）	(X－6－83－53)＋(X－6－83－25)	2
3	3	メノウ3	剥片2	(X－6－82－11) → (X－6－82－14)	2
4	4	チャート1	石核	(X-6-92-21)＋(X-6-83-57)＋(X-6-83-35)	3
5	5	チャート5	剥片（中間部、先端部）	(X－6－82－13)＋(X－6－82－4)	2
6	6	珪質頁岩4	剥片2	(X－6－93－17) → (X－6－83－82)	2
7	7	安山岩1	剥片（基部、先端部）	(X－6－83－5)＋(X－6－83－11)	2
8	8	石材不明	剥片（焼けハジケ3）	(X-6-83-26)＋(X-6-82-17)＋(X-6-82-22)	3

表105　第11ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	X－6－83－8	削器	1.9	1.6	0.5	40°	1.5	図89－2	1側辺	有	有	メノウ
2	X－6－83－24	掻器	2.3	1.5	0.5	－	1.9	図89－4	－	無	無	メノウ
3	X－6－82－8	ピエス・エスキーユ	2.6	2.8	2.0	－	15.0	図89－9	－	無	無	メノウ
4	X－6－83－1	使用痕ある剥片	2.1	1.7	0.3	－	0.9	－	－	無	有	頁岩
5	X－6－92－10	使用痕ある剥片	2.5	1.9	0.6	－	2.3	－	－	無	有	メノウ
6	X－6－92－27	使用痕ある剥片	4.0	2.8	0.7	－	5.2	図89－7	－	無	有	メノウ
7	X－6－83－4	二次加工ある剥片	2.2	1.9	0.3	－	1.6	図89－3	－	無	無	メノウ
8	X－6－83－66	二次加工ある剥片	1.9	1.8	0.5	－	1.4	図89－1	－	無	無	メノウ
9	X－6－92－5	二次加工ある剥片	2.3	1.5	0.6	－	1.6	－	－	無	無	メノウ
10	X－6－92－7	二次加工ある剥片	1.8	2.4	0.9	－	4.3	図89－5	－	有	無	メノウ
11	X－6－92－16	二次加工ある剥片	1.7	1.8	0.4	－	1.4	－	－	無	無	チャート
12	X－6－92－17	二次加工ある剥片	1.1	0.8	0.2	－	0.1	－	－	有	無	メノウ
13	X－6－92－18	二次加工ある剥片	2.5	1.8	0.4	－	1.7	－	－	無	無	メノウ
14	X－6－92－19	二次加工ある剥片	1.5	1.4	0.3	－	0.4	－	－	有	無	メノウ
15	X－6－93－13	二次加工ある剥片	4.7	3.3	1.4	－	1.7	図89－8	－	無	無	安山岩
16	X－6－92－23	石斧	5.0	4.0	0.8	－	22.2	図90－13	－	有	無	粘板岩
17	X－6－93－2	石斧	11.7	5.4	1.9	－	190.0	図90－14	－	無	無	砂岩
18	X－6－92－9	石核	3.0	2.7	1.5	－	8.6	図89－12	－	有	無	メノウ
19	X－6－92－11	石核	3.9	2.3	2.6	－	16.2	図89－11	－	無	無	メノウ

3．第6文化層ブロック外出土資料（図91、表106、107）

ブロック外より総計21点出土した。内訳はナイフ形石器1点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工のある剥片1点、石核2点、剥片12点、砕片4点となっている。ナイフ形石器は、平坦な打面を有する。縦長剥片を素材としており、基部1側辺に微細な刃つぶし加工がほどこされている。

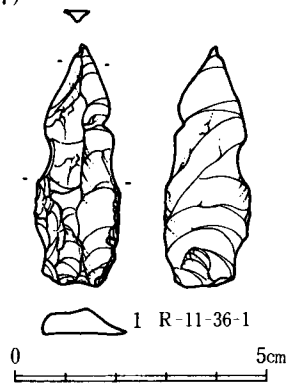


図91 第6文化層ブロック外出土遺物実測図

表106 第6文化層ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山石		頁岩		砂岩		チャート		玉髄		メノウ		石材不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20.0	—	—	—	—	—	—	1	4.8
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	1	25.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4.8
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	1	25.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4.8
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	1	25.0	2	100	1	100	4	100	2	40.0	2	50.0	—	—	—	—	12	57.1
砕片	1	25.0	—	—	—	—	—	—	1	20.0	2	50.0	—	—	—	—	4	19.0
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20.0	—	—	1	100	—	—	2	9.5
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4	19.0	2	9.5	1	4.8	4	19.0	5	23.8	4	19.0	1	4.8	—	—	21	100
礫片	—	—	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—	—	—	1	50	2	—

表107 第6文化層ブロック外出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
1	R－11－36－1	ナイフ形石器	4.6	1.8	0.7	35°	4.7	図91－1	基部1側辺	無	無	チャート
2	V－9－98－3	二次加工ある剥片	3.2	2.8	0.6	—	4.0	—	—	有	無	黒曜石
3	T－9－86－1	石核	3.0	2.5	1.6	—	10.5	—	—	無	無	メノウ
4	V－10－22－1	石核	2.3	4.4	3.8	—	0.3	—	—	有	無	チャート
5	W－10－16－3	ピエス・エスキーユ	2.1	1.4	0.8	—	2.0	—	—	無	無	黒曜石

4．第6文化層のまとめ

自然層ではⅦc層に相当する。第10、第11ブロックが該当し母岩別資料、石器群の内容より、いずれも独立したブロックとなっている。第10ブロックは円盤形石核と横長剝片を主体とし、剝片生産の痕跡を反映した石器群である。生産された剝片を素材としたナイフ形石器は存在しない。第11ブロックでは局部磨製石斧と寸づまりの剝片を素材とした石器群がみられる。なおブロック外では縦長剝片を素材とした基部整形のナイフ形石器が1点出土している。

註

1　古内　　茂「No. 55 遺跡」『三里塚』昭和46年

2　千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン11—六通金山遺跡—』昭和56年

3　小田　静夫「石神第1地点」『臼井南』昭和50年

第8節　表面採集遺物

表採資料（図92、表108、109）

住居跡、土壙等の遺構の覆土より出土し、2次的な移動が存在するものを一括した。総計77点出土しており、石器群はナイフ形石器4点、尖頭器1点、角錐状石器2点、削器1点、2次加工のある剝片6点、使用痕のある剝片3点、剝片34点、砕片24点、石核2点となっている。1～4はナイフ形石器である。1～3は1側辺が折断面となっており、台形状を呈している。刃つぶし加工は急角度である。4は縦長剝片を素材として、基部周辺は2側辺加工となっている。5、6は周辺加工の尖頭器である。6は角錐状石器であり、第3文化層に比定できる。7～10はいずれも縦長剝片を素材として2側辺に2次加工がほどこされている。この他、東内野型尖頭器が2点、表採資料として登録されているが、この分に関しては第2文化層で記述した。

表108　表面採集石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		玄武岩		白色泥岩		珪質頁岩		頁岩		砂岩		チャート		石材不用		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	3	8.8	—	—	—	—	—	—	1	16.7	—	—	—	—	—	—	—	—	4	5.2
角錐状石器	2	5.9	—	—	—	—	—	—	1	16.7	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3.9
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
有舌尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	1	3.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.3
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	5	14.8	1	4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	7.8
使用痕ある剝片	3	8.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3.9

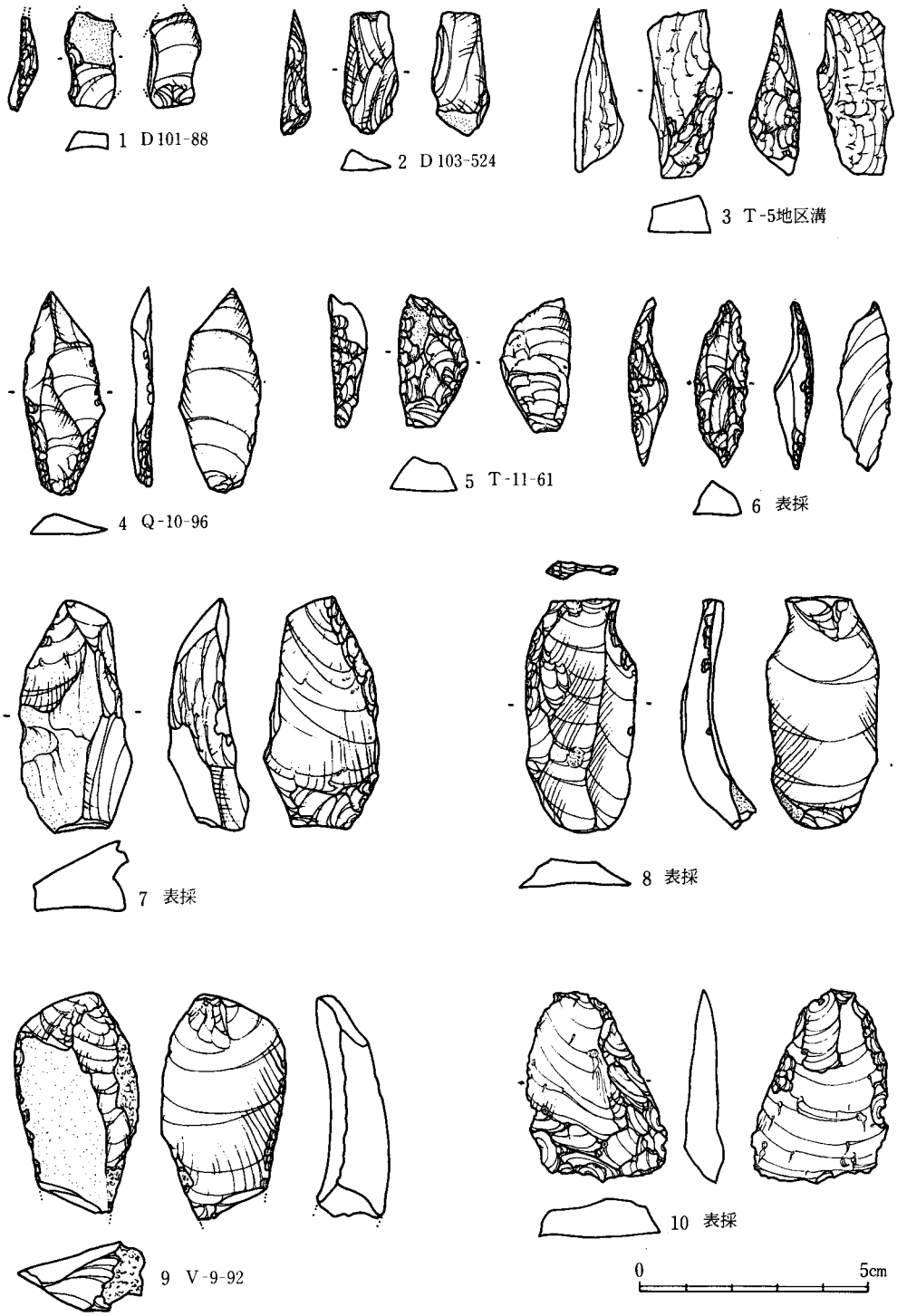


図92 表面採集遺物実測図

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		玄武岩		白色泥岩		珪質頁岩		頁岩		砂岩		チャート		石材不用		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	5	14.8	15	68.2	1	100	1	50.0	2	33.3	5	83.3	2	66.7	3	100	—	—	34	44.2
砕片	13	38.2	6	27.3	—	—	1	50.0	2	33.3	1	16.7	1	33.3	—	—	—	—	24	31.2
石核	2	5.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2.6
原石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	34	44.2	22	28.6	1	1.3	2	2.6	6	7.8	6	7.8	3	3.9	3	3.9	—	—	77	100
礫片	—	—	3	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—	1	16.7	—	—	2	33.3	6	—

表109　表面採集石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	調整の位置	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚							
1	Q—10—96	ナイフ形石器	4.4	1.7	0.4	30°	3.4	図92—4	2側辺(先端基部周辺)	無	有	頁岩
2	D101—88	ナイフ形石器	2.1	1.2	0.4	—	0.9	図92—1	1側辺他辺折断	有	—	黒曜石
3	D103—524	ナイフ形石器	2.7	1.2	0.7	35°	1.9	図92—2	1側辺他辺折断	無	有	黒曜石
4	T—5地区溝	ナイフ形石器	3.7	1.5	1.0	25°	5.1	図92—3	1側辺他辺折断	無	有	黒曜石
5	T—11—61	尖頭器	2.9	1.5	0.7	—	2.8	図92—5	—	無	無	黒曜石
6	表採	角錐状石器	3.6	1.1	0.8	—	2.5	図92—6	—	無	無	珪質頁岩
7	表採	角錐状石器	2.5	1.8	1.5	—	5.1	—	—	有	無	黒曜石
8	表採	スクレパー	5.0	2.4	1.4	—	16.5	—	—	無	無	黒曜石
9	R—10—19	使用痕ある剝片	2.6	1.7	0.6	—	1.6	—	—	無	有	黒曜石
10	V—8—84	使用痕ある剝片	3.1	4.1	1.4	—	8.4	—	—	無	有	黒曜石
11	V—9—14	使用痕ある剝片	3.4	1.3	0.5	—	2.1	—	—	有	有	黒曜石
12	P—9—99	二次加工ある剝片	4.7	3.5	0.7	—	14.7	—	—	有	有	安山岩
13	V—9—92	二次加工ある剝片	4.5	2.7	1.3	—	15.1	図92—9	—	無	無	黒曜石
14	W—10—03	二次加工ある剝片	3.8	4.7	1.3	—	15.2	—	—	無	無	黒曜石
15	表採	二次加工ある剝片	4.2	2.9	0.8	—	10.1	図92—10	—	無	無	黒曜石
16	表採	二次加工ある剝片	4.7	2.5	0.8	—	11.0	図92—8	—	無	無	黒曜石
17	表採	二次加工ある剝片	4.5	2.9	1.2	—	12.9	図92—7	—	無	無	黒曜石
18	D103—229	石核	1.8	1.4	1.1	—	2.6	—	—	無	無	黒曜石
19	D103—491	石核	2.6	1.9	1.1	—	4.8	—	—	無	無	黒曜石

第9節　炭化物の集中地点

炭化物は調査区域全域にわたってみられるが特に集中している部分に関して調査した。出土層位はハードローム上面にあり計55か所にわたり集中地点がみられ、その分布状況には種々の傾向がみられる（図93、94）。

① 全体の出土状態については均一な分布密度を呈し台地の縁辺部また平坦部を問わず同様の密度で存在し遺物の分布が希薄な部分と濃密な部分とでは大きなへだたりはない。

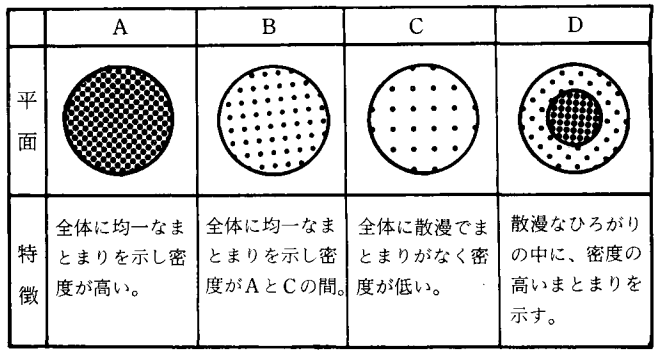


図93 炭化物出土状況平面模式図

② 個々の分布状態をたどると、まず、平面形は大きさ長径0.5m～2.3m、短径0.35m～2.1mの規模である。また垂直分布については深さ 3～20 cm 程度である。平面分布の密度はAタイプ7か所、Bタイプ17か所、Cタイプ14か所、Dタイプ17か所である（表110）。小規模な集中地点ほど散漫な傾向がある。

③ 石器群と重複する炭化物集中地点は4か所あり（C－2とS－2、C－6とS－4・5、C－7とS－6、C－8とS－7・8）、いずれも東地区に限られている。

表110 炭化物集中地点の規模

No.	平面分布		垂直分布	No.	平面分布		垂直分布	No.	平面分布		垂直分布
	大きさ(長径×短径)	分類	(深さ)		大きさ(長径×短径)	分類	(深さ)		大きさ(長径×短径)	分類	(深さ)
1	2.5m×2.0m	B	8cm	20	1.50m×1.0m	B	10cm	39	1.80m×1.50m	A	15cm
2	1.5m×1.35m	B	10cm	21	1.20m×0.9m	B	14cm	40	1.50m×1.0m	B	7cm
3	1.7m×0.8m	C	6cm	22	0.9m×0.9m	C	15cm	41	0.75m×0.5m	B	5cm
4	1.7m×0.85m	B	6cm	23	0.6m×0.7m	A	5cm	42	1.50m×1.0m	B	8cm
5	2.4m×1.25m	D	10cm	24	2.1m×2.1m	D	15cm	43	1.85m×1.50m	B	5cm
6	2.3m×1.05m	D	10cm	25	2.1m×1.7m	D	7cm	44	1.30m×1.20m	B	6cm
7	1.3m×0.9m	B	12cm	26	2.1m×1.8m	D	15cm	45	1.70m×1.45m	B	4cm
8	1.0m×1.0m	C	6cm	27	1.0m×1.0m	D	10cm	46	1.55m×1.00m	D	7cm
9	1.2m×1.0m	D	6cm	28	1.0m×0.9m	D	8cm	47	2.00m×1.70m	D	10cm
10	0.5m×0.35m	C	2cm	29	1.3m×0.9m	D	16cm	48	2.20m×1.30m	A	7cm
11	1.3m×0.8m	C	10cm	30	2.1m×0.85m	B	10cm	49	1.10m×0.80m	A	10cm
12	0.9m×0.55m	D	10cm	31	1.5m×1.0m	B	6cm	50	1.10m×0.80m	D	8cm
13	2.0m×1.30m	D	10cm	32	2.2m×1.1m	B	10cm	51	2.1m×0.8m	C	3cm
14	1.8m×1.30m	C	3cm	33	1.6m×1.1m	B	7cm	52	1.9m×1.1m	A	15cm
15	1.25m×1.05m	C	5cm	34	2.35m×1.75m	C	6cm	53	1.35m×1.3m	A	20cm
16	1.70m×1.10m	D	5cm	35	1.75m×1.50m	D	15cm	54	1.15m×1.05m	A	17cm
17	0.5m×0.35m	C	2cm	36	0.7m×0.40m	C	2cm	55	1.0m×0.55m	C	5cm
18	1.5m×0.9m	C	3cm	37	1.85m×1.30m	D	15cm	—	———	—	—
19	1.05m×0.5m	C	5cm	38	1.15m×0.9m	B	5cm	—	———	—	—

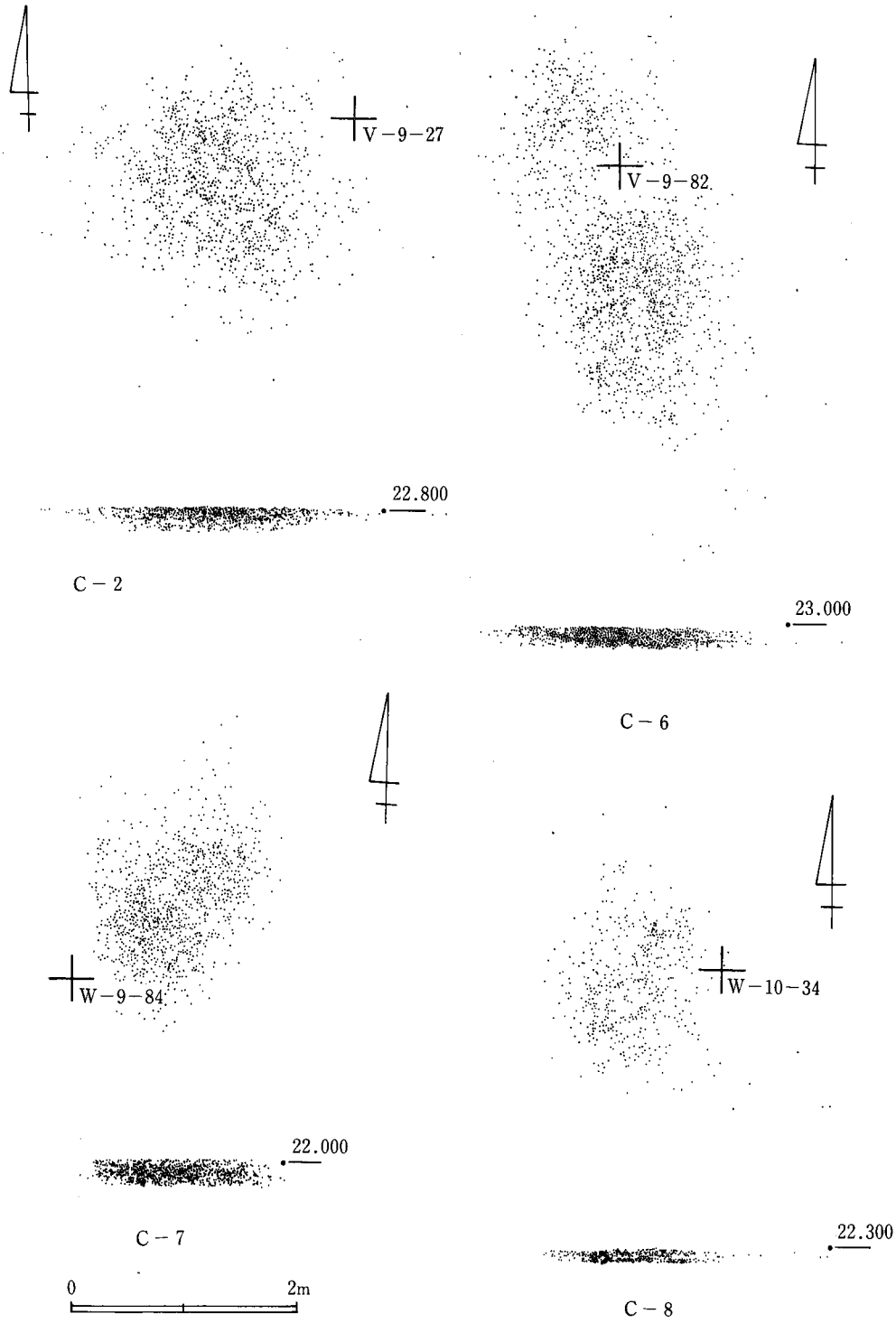


図94 C－2・6・7・8炭化物集中地点

④ 炭化物の箇所に伴い、焼土塊や加熱の痕跡のある石器群は一切検出できず、礫群も共存していない。炭化物については以下の生成過程ａ～ｄが想定されている[註1]。

ａ．燃料として利用された残品

ｂ．居住のため用いられた木材の炭

ｃ．野火または必要があって行なわれた野焼

ｄ．環境条件による泥炭化

このように、成因については多岐にわたる。従来の調査例では分布の傾向から人為的、自然的要因かは判断しがたい。例えば静岡県寺谷遺跡では調査区の内外を問わず炭化物の分布密度に変化がみられなかったというが[註2]、当遺跡では石器群の出土がまばらなＲ－９－00～Ｒ－10－00、Ｔ－９－00～Ｔ－11－00付近と相対的に石器群が密集して出土している東地区部分とでは炭化物の集中地点の分布密度において大きな変化はみられなかった。また、東京都前原遺跡では等高線に沿って帯状に分布しているが[註3]、当遺跡ではいくつかのグループが径40～60ｍの馬蹄形、もしくは円形にくみあわされ６つのグループに大別しうる。このような状況が当時の自然環境とどのように合致するか否かは不明であるが、それにしても、日常生活において火の使用は不可決であったから当然炭化物集中地点の中にもその痕跡があるものと推測される。しかしながら種々の状況証拠を総合しても東京都高井戸東遺跡、同鈴木遺跡等で検出されたような炉跡を確定することはできなかった[註4]。最近Ｘ線回折分析によって地熱の痕跡を明らかにする分析が寺谷遺跡でこころみられているが、ここでも立証しうるほどのデータは得られていない。

註

1　庄司　太郎「炭化物分析」『中山谷遺跡』昭和52年

2　磐田市教育委員会『寺谷遺跡』昭和55年

3　小田　静夫他『前原遺跡』昭和51年

4　ａ小田　静夫他『高井戸東遺跡』昭和52年

ｂ鈴木遺跡調査団『鈴木遺跡』Ⅰ、Ⅱ　昭和53、55年

第4章　ま　と　め

第1節　石器群の変遷

1．I期

Ⅶc層に生活面を持つ石器群で、最も古い段階である。石器群としては局部磨製石斧、スクレーパーなどを保有しているが量的には貧弱である。剥片生産技術としては、求心的に横長剥片を生産する技術と平坦な単設打面より横長剥片を生産する技術がみられる。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材として基部に細かな2側辺加工がほどこされている。石材は黒曜石がなく、メノウ、チャート、頁岩などによって構成されている。ブロックの分布は希薄である。第10、11ブロックがこの段階に相当する。I期の第10、11ブロックの石器群については類例として三里塚No.55遺跡[註1]、臼井南遺跡[註2]が対比される。

2．II期

Ⅶa層に生活面を持つ石器群である。石器群としては、ナイフ形石器、削器、彫刻刀形石器などがみられる。両設打面より、縦長剥片を生産している。打面転移は頻繁にみられるが打面調整はない。石材は、珪質頁岩、メノウなどがみられる。第19、24、25ブロックがこれに該当する。第24、25ブロックの石器群については現在のところ類例は報告されていない。

3．III期

Ⅵ層に生活面を持つ石器群である。石器群としては、ナイフ形石器、削器などがみられるが、種類は少なく、ナイフ形石器が中心となっている。剥片生産技術は高度に発達し両設打面より打面調整を行ない剥片を生産している。さらに必要に応じて打面再生がほどこされ、同一規格の石刃を組織的に生産している痕跡がみられる。当遺跡では石核、石刃の数量は少なくナイフ形石器の調整段階の調整剥片が大量にみられる。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材として2側辺加工、1側辺加工、基部2側辺加工のものがみられ多岐にわたるが、切り出し形ナイフはみられない。この時期のブロックはグリッドU－9－00、U－10－00からW－9－00、W－9－10にかけて偏在しており1つのグループを形成する。石材は良質の黒曜石によって占められ、これに珪質頁岩、砂岩が少量伴う。S－1～8がこれに該当する。III期は木苅峠、IV2期に相当する石器であるが、ローム層の層序区分の問題、石器群の内容、剥片生産基盤の違いなどの諸点について再検討する必要がある。木苅峠IV2期は従来武蔵野台地 phase II a 期（IV層上～中部）に比定されていた[註3]が、これは出土状態と石器群の内容、技術的側面より事実誤認の可

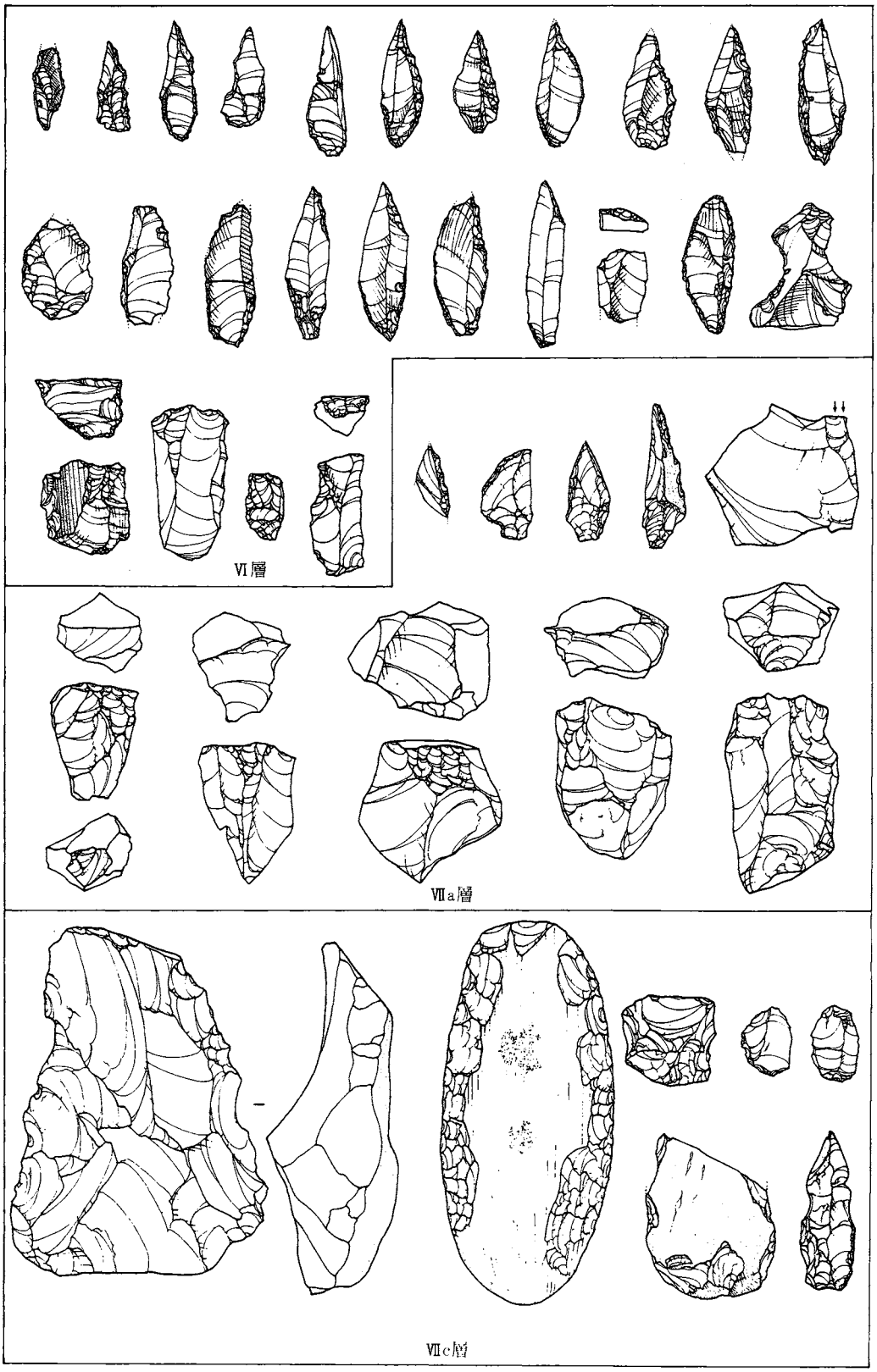


図95 権現後遺跡の旧石器時代石器群の変遷(1)

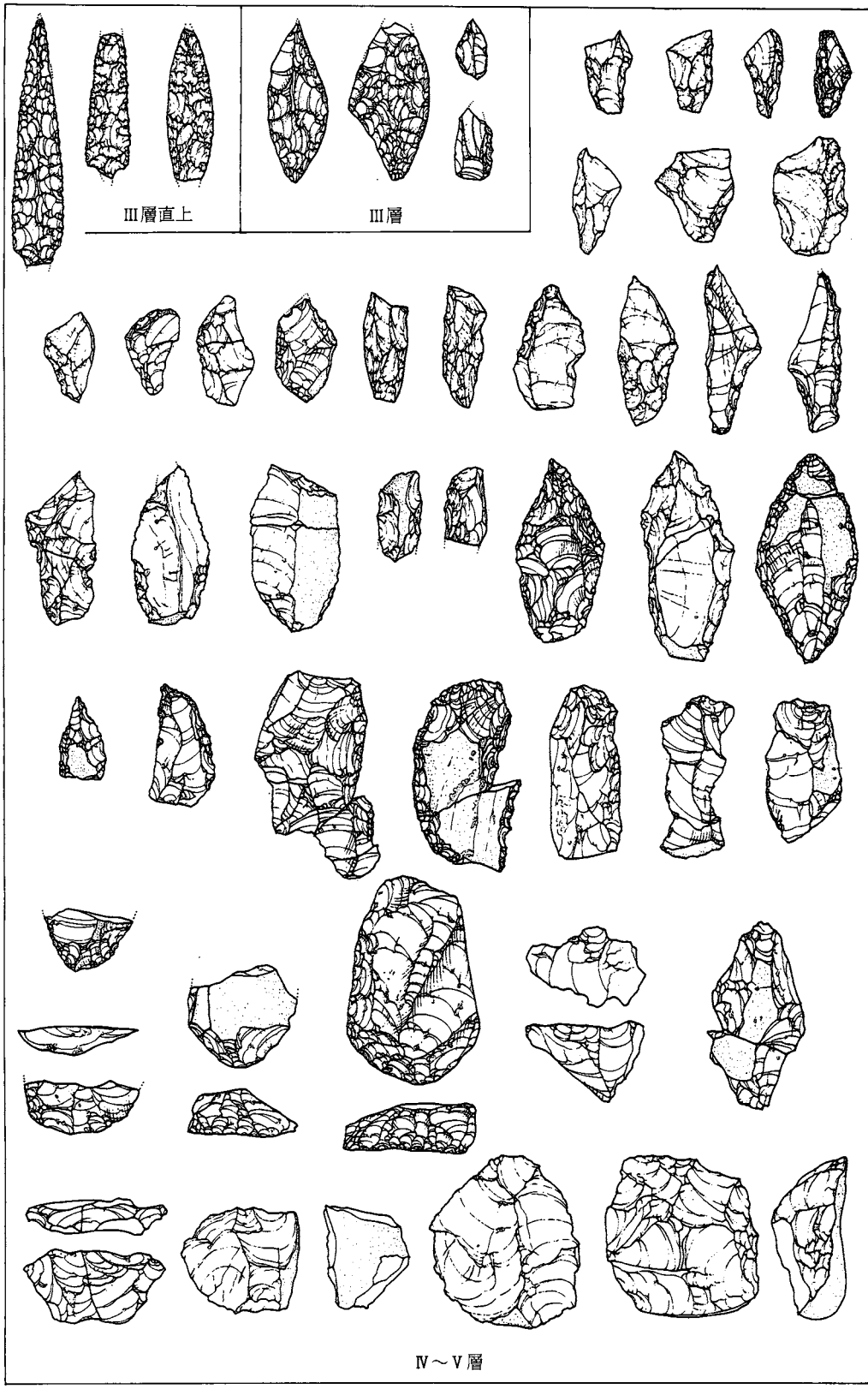


図96 権現後遺跡の旧石器時代石器群の変遷(2)

能性が高い。このことは、当時下総台地におけるローム層の層序区分に対する認識が充分なものではなかったことに起因するものと思われる。石器群の出土したIVａ層下位は第２黒色帯(IVｂ層）の直上に位置し、また、ハードローム上部はこの付近ではＶ層上部付近にあたるものと考えられる。しかもレベル的にはハードローム上部より 20～30 cm ほどで下位にあたり明らかにVI層にあたるものと考えられ、石器群としては phase II b 期に顕著にみられる切り出し形ナイフがない。また、木苅峠IV２期（第１、４、７ユニット）石器群はナイフ形石器を主体として削器、掻器などがみられるが剝片生産技術は武蔵野台地の小平市鈴木遺跡VI層でみられるような高度な石刃技法が存在する。[註4]

鈴木遺跡VI層では石核を丹念に調整して、打面調整時として打面再生が行われ、両設打面の石刃石核より多量の石刃が生産されている。その一方で横長剝片を生産する技術はほとんどみられない。このような剝片生産技術を背景としたナイフ形石器は概して縦長で刃つぶし加工の精緻なものとなっている。石材は良質半透明の黒曜石が多用されていることを特徴とする。

さらに、これより上位から出土した木苅峠VI期（第23、24ユニット）はIII２期の一部（第22ユニット）に武蔵野台地IV層下部に相当する石器群を保有することからＶ層段階に対比される資料であることが推察される（図95)。

４．IV期

IV層～Ｖ層に生活面を持つと考えられる石器群である。権現後遺跡で最も広範囲に出土する石器群である。総計13ブロックを検出している。石器群はソフトロームとハードロームの境界付近より出土することが多く、層位的に分離することは困難である。したがって、技術、型式学的な検討が中心になっていることをあらかじめ断っておく。石器群は切り出し形を呈するナイフ形石器を中心として周辺加工の尖頭器、角錐状石器、削器、掻器を具備し、ナイフ形石器は切り出し形が主体的である。剝片生産技術は多様であるが従来の剝片を生産する技術と交互剝離によって寸づまりの横長剝片を生産する場合が看取される。先述のとおりこの時期の石器群を層位的に分離することは不可能である。第15ブロックは、明確な結論は避け、とりあえず便宜的にIV期として統轄しておいた。ただし第27ブロックについては角錐状石器、削器、ナイフ形石器を保有しIV層下に対比できる資料であることは確実であろう。さらに、IV層下部に比定されるブロックとしては、第27ブロックの他、第13、21ブロックが考えられる。これらは、いずれも石器群に角錐状石器を伴う。一方、IV層中～上部の段階と考えられる石器群は、幅広で周辺加工の尖頭器を共通の石器として保有する第12、14ブロックがこれに該当するものと考えられる。第15～18、20、22ブロックの帰属は明瞭ではないが、切り出し形ナイフを中心として、剝片生産基盤に石刃技法を持たないことから、第15、20、22はIV層下部～Ｖ層に位置するものと推測される。第16～18ブロックに関しては出土状態や石器組成をIV層中に限定できるこ

とは確実であるが、資料的に少なく、しかも時期決定できる器種がないため明言を避けたい。なお、V層については武蔵野地域でも対比資料が少ない。IV期については細分の可能性が残されている。

5．V期

ソフトローム中に生活面を持つ石器群である。ブロックとしては、第23ブロックのみであり、充分な検討にたえない。石器群は、横長剝片を素材としたナイフ形石器であり敲石が共存している。石核が欠落しており、剝片生産技術は不明である。石材はブロック外にみられず、その意味では自己完結的なブロックと言える。ブロック外より、東内野型尖頭器、スクレーパー、ナイフ形石器が出土している。V期は、小形の横長剝片を素材としたナイフ形の石器であるが、下総台地における対比資料は今のところない。相模野台地では月見野IV遺跡 ＬＩＨ 下底（ＢＩ上面）で出土した小形のナイフ形石器の一群[註5]がこれに対比される可能性が高い。しかし、いずれにしろ資料的に少ないために断定はできない。

6．VI期

ソフトローム直上に生活を持つ石器群である。いずれも、住居跡覆土中、土壙内、あるいは単独出土であり、ブロックを形成していない。石器群は、有舌尖頭器、木葉形尖頭器、小形のナイフ形石器がみられる。有舌尖頭器は縁辺部が鋸歯状を呈し、舌部が明瞭で細身のいわゆる小瀬ケ沢型である。

房総半島における石器群の編年は鈴木道之助の業績によるところが大きい。鈴木編年は、小田静夫によって提唱された武蔵野台地の編年に準拠して構成されている[註6]が、層序区分や石器群の技術基盤について検討する必要があると思われる。下総台地の旧石器時代の編年を困難にさせている要因としては、相模野、武蔵野台地に比べローム層が薄く石器群がレベル差（約 30 cm～50 cm）を有して出土することにある。先述したが下総台地では台地平坦部では、ハードローム上面が武蔵野台地におけるＢ．Ｂ．Ｉ（Ｖ層）であり上位のIV層はソフトローム層中にとりこまれている場合が多い。したがって、層序区分を行う場合には以上の点に留意し、地形に即した形で対応していかなければならず、編年研究については隣接地域の成果をふまえ検討していかなければならない（図96）。

註

1　古内　茂「 No. 55 遺跡」『三里塚』昭和46年

2　小田静夫「石神等１地点」『臼井南』昭和50年

3　鈴木道之助「木苅峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書』III　昭和50年

4　鈴木遺跡調査団『鈴木遺跡』Ⅰ、Ⅱ　昭和53、55年

5　明治大学考古学研究室、月見野遺跡調査団『概報月見野遺跡群』昭和44年

6　鈴木道之助「千葉県の遺跡」『日本の旧石器文化』2　昭和50年

参考文献

1　鈴木道之助「概説、一房総における先土器文化の概要と変遷」『千葉県文化財センター研究紀要』1　昭和51年

2　服部実喜「武蔵野台地における先土器時代石器群出現期の様相」『神奈川考古』12　昭和56年

3　加藤有司、戸田正勝「武蔵野台地における旧石器時代について」『武蔵野』59－2　昭和56年

4　神奈川考古学同人会主催「シンポジウム、南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」昭和57年

5　戸田正勝「ナイフ形石器の形態に関する一考察――形態A・形態Bの再検討一」『野州史学』6　昭和57年

6　小田静夫、C・T・キーリー『武蔵野公園遺跡』Ⅰ　昭和51年

7　小田静夫『調布市仙川遺跡』昭和49年

8　S. Oda and C・T・keally「Japanese Preceramic Cultural Chronology（日本先土器時代の編年）」昭和50年

9　戸田正勝「東京都小平市鈴木遺跡の石斧」『考古学研究』23－2　昭和51年

10　小田静夫「千葉県における先土器文化(3)」『史館』6　昭和51年

11　近藤義郎「先土器時代の集団構成」『考古学研究』22－4　昭和51年

12　小田静夫「先土器時代の東京」『どるめん』15　昭和52年

13　春成秀爾「先土器、縄文時代の画期について」『考古学研究』22－4　昭和52年

14　赤沢　威、小田静夫、山中一郎『日本の旧石器』立風書房　昭和55年

15　鈴木次郎、矢島国雄「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1)　昭和53年

第2節　ブロックの性格について

1．I期

第10ブロック、第11ブロックが該当するが、互いに母岩別資料が異なり、相関関係はみられない。したがって、ブロック個々の分析にならざるをえない。

第10ブロックの母岩は、黒曜石が多いが個々の黒曜石の石質が類似しているため母岩別資料を識別できる率が少ない。ここではブロック内の黒曜石製石器群が広範囲に分布し、剝片、砕片が多いことなどにとどめておく。このブロックを語る際には母岩別資料頁岩（接合資料4）が大きな役割を演じている。頁岩6はきわめて母岩が識別しやすくブロック内に広く分布している。興味深い点は南東隅の小さなまとまりに石核があり、これに接するかのように破砕された敲石が出土している。母岩別資料はここを中心として北方へ飛散していることが窺われる。そして接合状況をみるかぎり大形の剝片は存在せず、小形で折損した剝片が多い。また、石器製作に良好な素材や完成品が存在しない。同様の母岩は他の地域に存在しないので遺跡外へ搬出された可能性が高い。また、石器の調整剝片は存在せず、剝片生産にかかわる母岩別資料かと思われる。このような石核と敲石、剝片の出土状況は剝片生産時の飛散状況を暗示しているかのように思われる。

第11ブロックは、第10ブロックが本遺跡で石器製作時の状況を良く反映したブロックであるのに対して、平面分布図では利器と剝片、砕片が混在しており、数量のわりに母岩別資料は多岐にわたるが、この中でメノウが大きな割合を占めている。特にメノウは完成品と剝片、砕片があり、これらの存在から石器調整を反映している母岩であることが理解される。他の母岩はいずれも器種に偏りがみられる。

2．II期

第24ブロック、第25ブロックが該当する。共に珪質頁岩の母岩別資料が主体となっており、母岩別資料に共通性はみられない。

第24ブロックは母岩別資料は5つ識別できた。その中で、石器製作の一連の工程を窺わせる資料は存在しない。完成品は、いずれもそれぞれ独立した母岩であり、他より搬入されたことを示唆している。母岩別資料では珪質頁岩1が主体となっており、その中で接合資料1、2は、剝片生産技術を良く窺わせるものである。接合資料1は板状の剝片を素材としており主要剝離面を打面として、横長剝片を生産する技術がある。一方、接合資料2は縦長剝片の生産を意図した技術を窺わせ対照的である。石器調整の段階ではナイフ形石器が1点みられるが調整剝片等は出土していない。

接合資料2で見られるような縦長の良好な剝片は、本ブロックからは出土していない。珪質

頁岩以外の母岩では、チャート、メノウがあるがいずれも数量が少なく、利器、剝片等に使用され、本ブロックで製作されたというよりもこれらの母岩は他のブロックから製作搬入されたことが想定される。

第25ブロックは珪質頁岩を母岩とする一群が中心となっている。珪質頁岩の他は数量的保証がなく検討にたえない。珪質頁岩1は、自然面を大きくし、残存する大形板状剝片生産の初期工程を反映しているかに思われるが確実なことは不明である。珪質頁岩の母岩の中では珪質頁岩2、珪質頁岩3が主要な資料である。これらの母岩別資料と、その中に存在する接合資料を総合すると以下の事実が知られる。

①技術的な側面では、剝片生産段階を具備している。平坦な単設もしくは両設打面より時として打面再生をまじえ縦長剝片を生産しているが、剝片の打面は大きいポジティブバルブを呈している。打面調整はない。

②出土状況は1か所に集中しており、剝片生産時の飛散状況を表示するものではない。

第24、25ブロックは位置的に互いに近接しているうえに先述のごとく、母岩別資料につながりがない。層位的にあるいは剝片生産技術のうえで、つながりを暗示させる資料と思われるが、有機的な関係を証明するには至らなかった。

3．III期

第1～3、4・5、6、7・8ブロック、第19ブロックが該当する。第19ブロックは礫群であり、これに少量の剝片、砕片、石核が伴うが、このブロックに関しては第1～3、4・5、6、7・8ブロックとの関係が母岩別に共通性がみられないので事実記載にとどめておくことにする。

第1～3、4・5、6、7・8ブロックは母岩別資料に石器組成、技術基盤、立地等に多くの共通性がみいだされる。母岩別資料については、黒曜石はいずれも夾雑物を含まず良質で漆黒色もしくは半透明であるが、表面の光沢、流理構造などにより、各ブロックは以下のように識別した。これに他の母岩を加えた結果各ブロックの母岩別資料の内訳は以下のようになる。

第1ブロック　黒曜石9種　珪質頁岩1種　チャート1種

第2ブロック　黒曜石9種　安山岩1種　珪質頁岩1種　チャート1種

第3ブロック　黒曜石3種　珪質頁岩1種　石材不明1種

第4・5ブロック　黒曜石10種　珪質頁石2種　砂岩1種

第6ブロック　黒曜石5種　珪質頁石2種　砂岩1種

第7・8ブロック　黒曜石7種

母岩別資料のうち黒曜石の占める割合が高いが、他の母岩別資料は少量である。黒曜石は一般に母岩別資料の識別が困難であり、ここでも同様であったが、これらのブロックの間の母岩

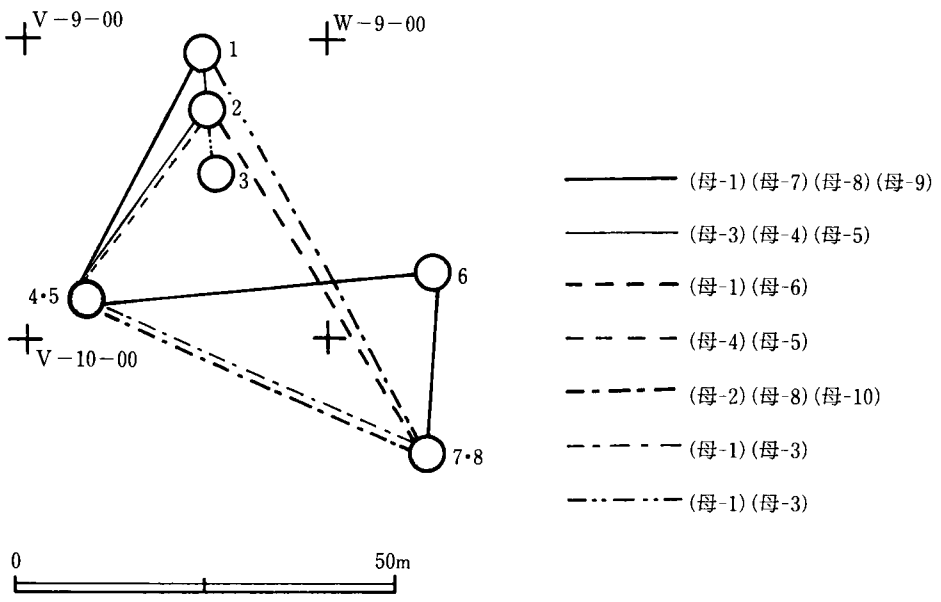


図97　第4文化層第1～3、4・5、6、7・8ブロック母岩別資料相関図

別資料の共通性を図示すると図97のようになる。

接合資料では第1ブロックの剝片2点と第2ブロックの石核2点が接合し、両者の密接な関係を窺わせる。黒曜石以外の母岩については互いに共通性は見いだせず量的な保証がないが、黒曜石以外の母岩から作出されたものはピエス・エスキーユ、ピエス・エスキーユスポール、剝片、砕片、石核などがみられ、ナイフ形石器はなく、器種ごとの石材の選択の傾向がここに窺われる。

第1～3、4・5、6、7・8ブロックはいずれも石器製作を反映しているが、石器製作時の飛散状況とわかるブロックはない。わずかに第1ブロックがややこれに近い状況を呈しているものと推定できる。特殊な状況を呈するブロックとしては、第2ブロック、第3ブロックなどがこれにあたる。第2ブロックについては落ちこみの中に堆積している状況が窺われ、しかも遺物も密集した出土により、利器、剝片、砕片を問わず混在し、この中で良く接合している。したがって、廃棄されたまとまりと考えられよう。なお、第2ブロックの東半部は炭化物の集中がみられ垂直分布と合致する。第3ブロックも同様に遺物が集中し、接合資料の状況より廃棄のパターンが窺われる。

第1～3、4・5、6、7・8ブロックを1つのグループとして捉えたが、第1、2ブロックについては接合資料より同時性を捉えられたが、その他の第3ブロックについて、なお、短期間の時間差が介在している可能性もある。

4．IV期

13か所のブロックのうち石材のうえで独立したブロックは第15、17、18ブロックである。これらのブロックの石材はいずれも遺跡外より搬入され自己完結的なブロックと言えよう。石材については互いに共通性を持つブロックは第９、12、14、16、20～22、26である。これらのブロックでは共に夾雑物を大量に含んだ黒曜石を主体的な石材としている。しかしながら、これらのブロック間の黒曜石の母岩の判別は困難であり、接合資料はなかった。したがって、ブロック間の厳密な同時性は直ちに語れず、個別のブロックの内容を記載するにとどめておく。

第９ブロックは、ナイフ形石器３例、剝片、砕片を保有する散漫なブロックであり、出土状況等について特記すべきものはない。

第12ブロックは、東西方向に幅広く分布するブロックである。接合資料はスクレーパーの欠損品（接合資料２～５）が互いに約８～９m離れていたものが接合する。特に接合資料２、４は再加工の痕跡がみられる。第13、17、18、21、22ブロックは保有する石器群が少なく検討の対象外とした。

第14ブロックは利器の多くが欠損し、ブロック内で互いによく接合する。機能の終焉を窺わせ、廃棄のブロックの色彩が色濃い。

第15ブロックは本遺跡では最大のブロックであり、石器組成、母岩別資料は多岐にわたり、しかも破損礫が混存し、分布も稠密であり疎の部分がない。また接合資料はブロック内で良くまとまっている。ゴミ捨場として利用された地点であり、廃棄の性格をもつものであると思われる。

第16、20ブロックも同様に石器の破損例が多くブロック内で良く接合している。

5．V期

ブロックは、第23ブロックのみであり、ブロック外にも共通の母岩は存在しない。したがって、自己完結的なブロックと言える。

母岩別資料は敲石を除き１種であり、珪質頁岩製の剝片、ナイフ形石器などがあり、石核を欠き石器製作工程では調整段階を反映している。

出土状態は、敲石が外縁部にあり、南側に石器群の密集部分があるというように、北にむかうにしたがって漸減している。これは、石器製作時の飛散状況が想起される。

ブロックが存在する部分は台地平坦部であり、入為堆積による分布状況の変化がないかぎり一次的な状況を示唆しているものと考えられる[註1]。ソフトロームについては垂直的な移動は考えられるものの、水平的な移動についてはさほど考慮に入れる必要がないらしい[註2]。

ブロック内の石器群については、石器製作工程の中での位置づけ、加工具の存在より以下のように分類される。

a．剝片＋砕片

b．剝片＋砕片＋利器　第1、4・5、6、7・8、9、18、19、22、23ブロック

c．剝片＋砕片＋石核

d．剝片＋砕片＋石核　第2、3、11、12、17、21、24、25、27ブロック

e．剝片＋砕片＋石核＋敲石　第19ブロック

f．剝片＋砕片＋石核＋利器＋敲石　第10、14、15、16、19ブロック

なお、この内、a・cは存在しない。これらの組合せを母岩別資料によってまとめあげることにより、まず、製作技術上の位置づけの最小単位、そして各ブロックの母岩別資料をまとめあげることにより作業行為の全体像がうかびあがってくるものと仮定される。個別のブロックによって人間の行動様式を追究できるものではないが、相互に補完し合う複数ブロックの存在が必要である。個別のブロックによってすべての作業が行われ、その場にすべての石器群が残された例は全くなく、すべてのブロックは石器製作の面から不完全な石器組成を呈する。また、石器群の出土位置も原位置を保っていることはおそらくないであろう。すべてのブロックは遺棄と廃棄の行為が多かれ少なかれ干渉しあって成立しているものと思われるが、本遺跡では母岩別資料あるいは、接合資料によって、複数のブロックがグループを形成した時期は、第III期の第1～3、4・5、6、7・8ブロック以外にはなく、他に有機的な関係を窺わせるグループは検出されていない。

註

1　岡村道雄「長野県石子原遺跡の再検討」『中部高地の考古学』昭和53年

2　羽鳥謙三「粘土鉱物分折」『中山谷遺跡』昭和52年

参考文献

1　小林達雄「旧石器文化研究史上における鈴木遺跡までの道のり」『鈴木遺跡II』昭和55年

2　稲田孝司「旧石器時代の小集団について」『孝古学研究』24―2　昭和52年

3　安蒜政雄「遺跡の中の遺物」『どるめん』15　昭和52年

第3節　礫　　群

本遺跡における礫群は台地平坦部より3か所検出した。その内容は礫群を中心としたブロックが1か所（S－19)、礫群と石器群とが共伴した例が2か所（S－15、S－17）みられるが、これらの礫群は互いに接合関係、母岩別資料の類似性がみられず、有機的な関連性はたどれない。

これらの礫群の特徴は以下のとおりである。

①破片が多く全形を窺わせる資料が全くない。

②破損面（割れ面）が赤化している例がしばしばみられる。これは加熱によって礫が破損した後に再び使用された可能性を示唆し、使用頻度の多寡にかかわる問題を指摘しうる。全体的に赤化している例が多い。

③付着物については、ほとんどみられず、わずかに1例だけ黒色のスス状の付着物がみられる。

④分布状況については第19ブロックは分布が小範囲に限定できる。一方、第15ブロックは広範囲に広がり石器群と分布範囲が一致している。第17ブロックについては小規模であるため検討にたえない。

金山によって礫群の出土状態についての検討が行われている[註1]が、それによれば廃棄の状態と遺棄の状態とに分類している。

(1)遺棄された状態

形態が比較的整った円形ないし矩形状の緻密なまとまり。構成礫が挙大粒の焼け礫でスス状、タール状黒色付着物が認められる。完形、破損礫に接合関係がかなりの確率でみとめられ、全個体の復元が可能で、孤立的である。

(2)廃棄された状態

形態が大小に富む。不整形のまばらなもので、礫の赤化の度合いが強く付着物がおびただしい。破損礫が圧倒的に多く、接合関係が礫群内はもとより礫群間にある。

これに対して本遺跡では上述のように、いずれも廃棄の状態と考えられ機能終焉を窺わせる資料と言えよう。

武蔵野台地の礫群が下総台地に比べ大規模でそれを構成する礫の大きさも凌駕するのは石材の入手が比較的容易であることによるものと推測される[註2]。

武蔵野台地では段丘礫層や多摩川河原より入手が可能であるが、本県は一般に石なし県と称され、近隣に構成礫を求めることはできないものとされている。

礫群については金山の他、藤森、小田、保坂、直良らの見解がある[註3]が、当地方ではこれらと比較検討しうるほどのデータは揃っていない。

註

1　金山喜昭「礫群」『新橋遺跡』国際基督教大学考古学研究センター　昭和52年

2　本遺跡の石材は安山岩、輝石安山岩、花崗岩、流紋岩、チャート、砂岩などであるが、これらの礫の給源入手経路については不分明である。

3　a藤森　栄一『旧石器の狩人』昭和41年

b小田　静夫、金山　喜昭「前原遺跡IV中2層文化の礫群」『考古学研究』23—1　昭和51年

c保坂　康司「礫群および配石」『寺谷遺跡』昭和55年

d直良　信夫「三角山遺跡」『西郊文化』9　昭和29年

第4節　搬入石材について

権現後遺跡で出土した石器群の石材は黒曜石をはじめ、安山岩、玄武岩、閃緑岩、花崗岩、頁岩、珪質頁岩、チャート、砂岩、メノウ、粘板岩、玉髄、泥岩、細粒砂岩、凝灰岩、白色泥岩の計16種を数える。

内訳は火成岩5種、堆積岩11種であり、形状は黒曜石が角礫の他はすべて円礫である。これは産出状況をものがたっており、黒曜石は確実に鉱脈採集、他は転石採集であることが窺われる。大きさは拳大である。

各石材の出現頻度を時期別に追うと、I期（第6文化層）では石材は多岐にわたり、各石材には大きな違いがみられないが、II期（第5文化層）では珪質頁岩、III期（第4文化層）では良質で半透明の黒曜石が大きな比率を占める。IV期（第3文化層）になると、石材は再び多様化するが、夾雑物を大量に含んだ漆黒色の黒曜石と安山岩がその中でもとびぬけており、互いに数量的に拮抗している。V期、VI期（第1、第2文化層）は数量的に少なく、検討しがたい。表111の数量比を参照していただきたい。

埼玉大学の新井重三によれば本県は石器の用材がなく、わずかに安房で産出する砂岩、銚子の古銅輝石安山岩等が知られるのみである。そしてチャートは北関東、南関東の栃木、埼玉県方面に鉱脈があり、黒曜石は従来の分析結果によれば信州、箱根、神津島産が知られているという[註1]。また、杉原重夫によれば東京湾沿岸部には成田層上面に1mの前後の厚さで市川砂層があり[註2]、その中に粒径2～5cmの円礫チャート類が点在し、また、千葉段丘の基盤を構成する段丘砂礫層には直径4～7cmの円礫が含まれているという。今後はこれらの段丘砂礫層中より礫群の構成礫あるいは黒曜石以外の石材を採取した可能性を検討してみる必要があろう。特に持ち運びに不便な大形の礫を大量に必要とする礫群の場合段丘礫層より採集された可能性が高いものと考えられる。

表111　各文化層ごとの石材の変遷

文化期 / 石材	I 期		II 期		III 期		IV 期		V 期		VI 期	
		(%)		(%)		(%)		(%)		(%)		(%)
黒曜石	114	39.2	2	1.7	2044	97.8	683	43.6	—	—	—	—
安山岩	34	11.7	—	—	1	—	645	41.2	1	1.2	2	66.7
玄武岩	—	—	—	—	—	—	69	4.4	—	—	—	—
閃緑岩	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
花崗岩	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
頁岩	30	10.3	—	—	—	—	14	0.9	—	—	—	—
珪質頁岩	15	5.2	111	92.5	37	1.8	107	6.8	80	98.8	—	—
砂岩	9	3.1	—	—	6	0.3	6	0.4	—	—	—	—
細粒砂岩	—	—	—	—	—	—	23	1.5	—	—	—	—
チャート	16	5.5	2	1.7	3	0.1	15	1.0	—	—	1	33.3
メノウ	72	24.7	5	4.2	—	—	—	—	—	—	—	—
粘板岩	1	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
玉髄	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
泥岩	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
計	291	—	120	—	2091	—	1566	—	81	—	3	—
石材不明	9	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—

すでに静岡県寺谷遺跡では天竜川の河原あるいは段丘礫層の構成礫と集石遺構構成礫とが一致している[註3]。また東京都鈴木遺跡では多摩川の河原とその段丘礫層との同定がなされている[註4]。こうした状況から今後段丘礫層にも目をむける必要があろう。

段丘礫層の岩石組成、粒形、大きさについて礫群の岩石組成あるいは石器の用材の一部と共通性がみいだされるか興味深い問題である。

註

1　後藤和民「社会と集団」『千葉市史』1所収　昭和49年

2　杉原重夫「地形の発達」『市川市史』1所収　昭和49年

3　磐田市教育委員会『寺谷遺跡』昭和55年

4　鈴木遺跡調査団『鈴木遺跡』Ⅰ、Ⅱ　昭和53、55年

第II部　縄　文　時　代

第1章　層位と出土状況

第1節　層位と出土状況

本遺跡より出土した、縄文時代の遺物は、弥生時代後期から奈良、平安時代に至る遺構の覆土中や、グリッド中より出土したものである。

平面分布では、X－2地区周辺部と8ライン以南に偏り、これらの間には遺物をまったく出土しない空白地帯（3～7ライン）がある。したがって、分布の上では、弥生時代後期以降の住居跡群と重複して出土していることになる。その中で特に遺物が大量に出土した地域は8ライン以南の台地縁辺部であり、平坦部より傾斜部にかけて大量に出土した。

出土遺物は、土器2,908点、土製品3点、石器36点である。このうち、縄文土器は、縄文時代早期の撚糸文土器群から、縄文時代後期安行式に至るまで連綿と出土しており、土器の上から長期間にわたり台地が使用された痕跡がしのばれる。特に、縄文時代早期の撚糸文土器群と後期の堀之内、加曽利B式土器が多く出土している。一方、石器群では、石鏃が最も多く、石匙、スタンプ形石器、礫器、打製石斧、石棒、磨石、石皿の断片などが出土しているが36点と土器の量に比べ、少ない。

第2節　縄文包含層の調査

1．包含層（図98、図版27－1）

本遺跡の北端部に位置するQ－4地区より縄文の包含層を検出した。この地点は台地中央部よりやや北側にあたり北にむかってゆるく傾斜している。また、土層の堆積状態は第Ⅰ層が耕作土(暗褐色土)、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層が茶褐色のソフトローム漸移層となっており、下層にむかうにしたがって粘性が強くなってくる。

遺物の分布は北東側の集中部分と南西側の散漫なまとまりとに分かれ、出土層位はⅡ層よりⅢ層下に至る。

2．出土遺物（図99）

土器は計19点出土し、すべて縄文時代後期に属する。時期的には堀之内式4点、加曽利B式15点となっている。図示した1、8は堀之内期の深鉢片であり、1は接合資料である（接合資料②)。2～7、9は加曽利B式の粗製深鉢形土器であり、5、7、9は胎土、色調、器形より同一個体かと思われる。

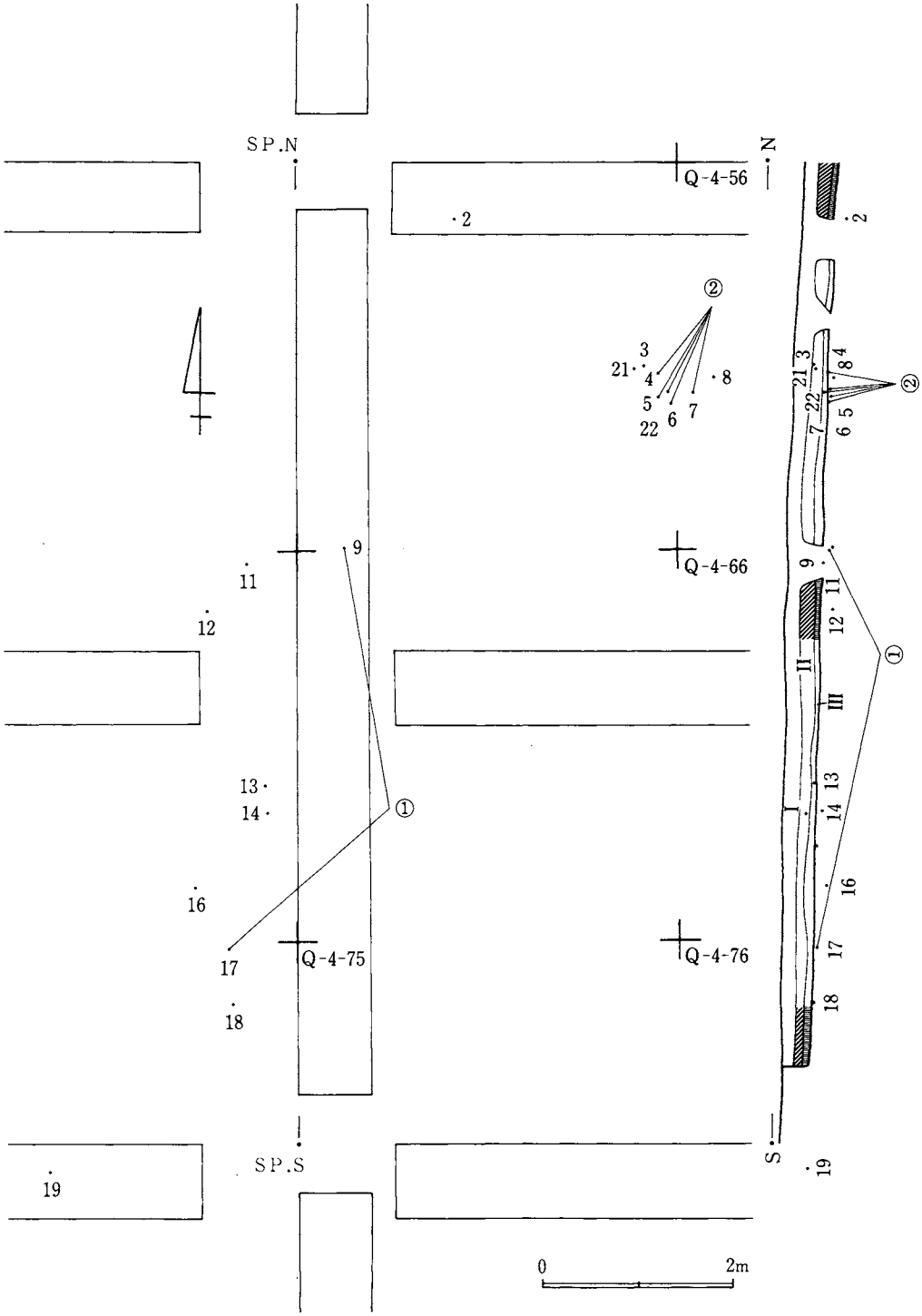


図98 縄文包含層遺物出土状況図

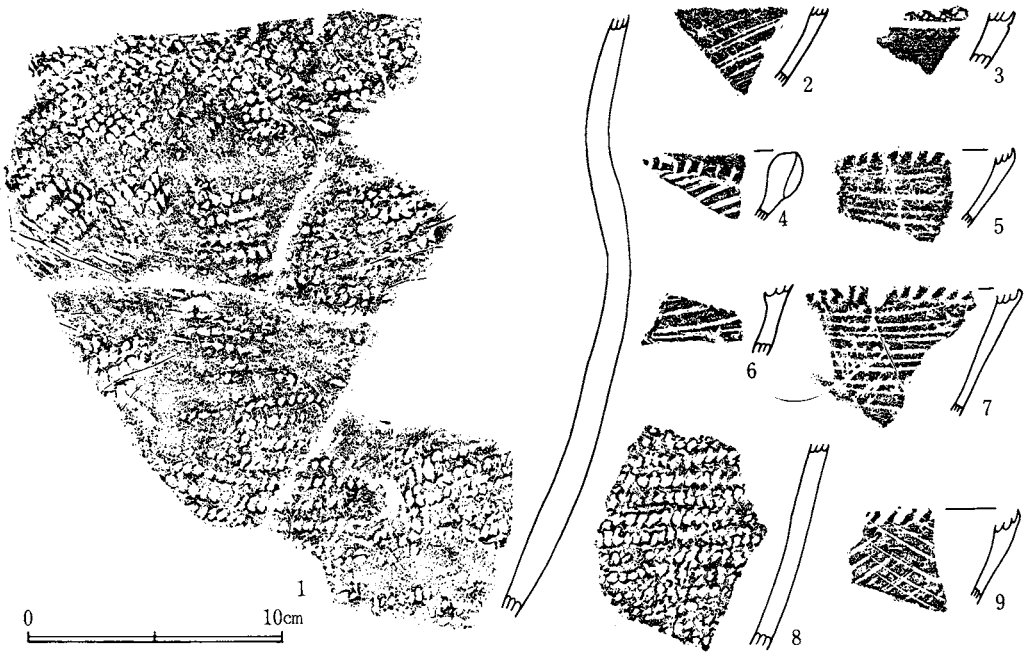


図99 縄文包含層縄文土器実測図

第2章　縄文時代の遺物

第1節　土　　器

出土した縄文土器は、早期から後期にわたり2,911点出土している。そのほとんどが弥生時代以降の遺構覆土中やグリッド中より出土したものであり、層位的な位置づけが可能な包含層からの出土はわずか9点である。これらの土器について従来の編年に従って5期に大別し各時期をさらに数時期に区分した。

1．縄文時代早期（図100～102、図版28、29）

早期の土器群は総計1,351点出土した。内訳は撚糸文土器群1,327点（井草式337点、夏島式174点、稲荷台式374点、無文土器23点、その他419点）、無文繊維土器14点、条痕文系土器10点となっている。

(1)　撚糸文土器群

①井草Ⅰ式土器

1は全体の約5分の1が遺存する深鉢土器である。器高約 32.5 cm、口径 30 cm、器厚約 1

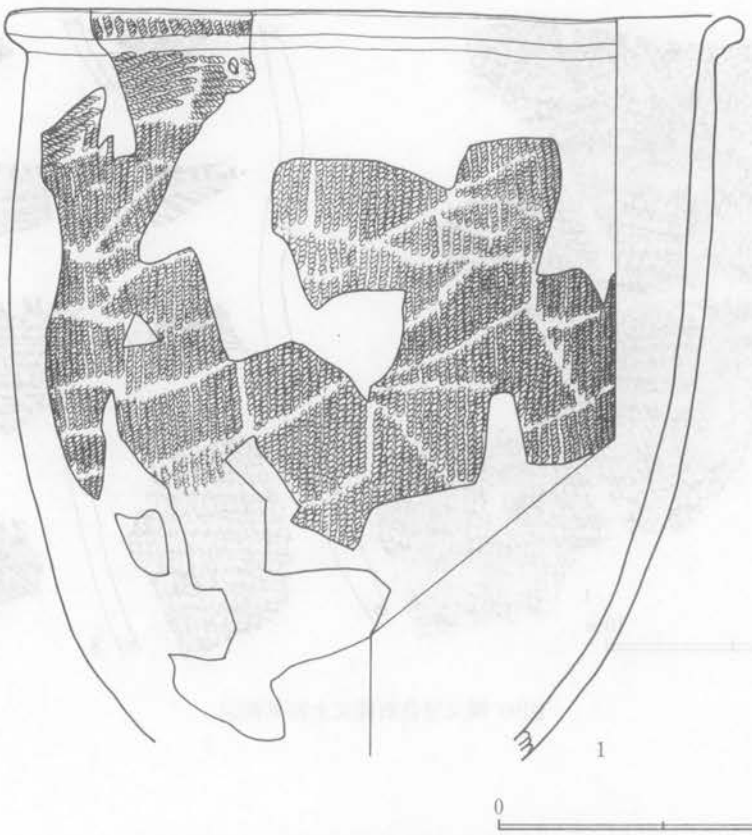


図100 縄文時代土器実測図(1)

cm 内外で、口唇部が肥厚し外反する。胴部上半部よりゆるやかに底部に至り、底部は丸底と推定できる。文様は口縁部帯がＲＬ斜縄文、胴部はＲＬ縄文となっているが、胴部下半は加熱のため表面が剝落しており不明である。また、口唇部上面は無文となっている。文様帯の幅は約5 cm 内外で、原体は同一かと思われる。なお、補修孔が口唇部直下に一孔あり、胎土中に砂粒を多く混入する。

3～9は口唇部に縄文が付され、口縁部に横位または斜位の縄文が、胴部以下は縦位の縄文が施されている。口縁部は大きく肥厚しており、丸底の深鉢形を呈するものと推定できる。なお、3～7はさらに口縁部直下に斜位の刺突文が連続的に施文されている。

②井草II式土器

井草Ⅰ式に比べ、口縁部付近の形状には大きな変化がみられないが、口縁部の文様帯が消滅し、かわって胴部以下が縦位の縄文で構成されている。2、10～15の内14以外は口唇部に縄文が施されている。

③夏島式土器

口縁部が肥厚せず口縁部以下が縦位の撚糸文や縄文が施文されている。撚糸文が施文されて

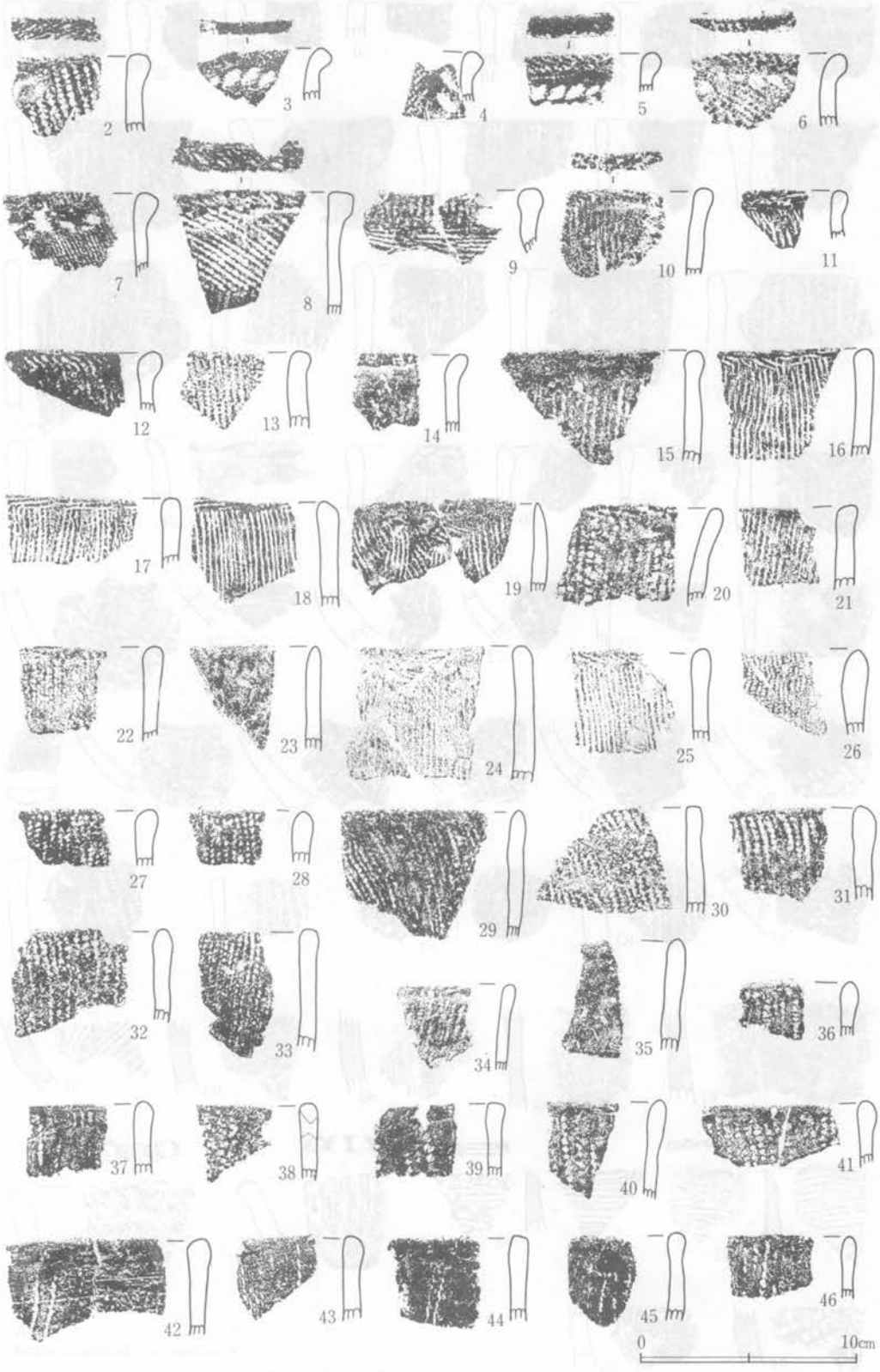


図101 縄文時代土器実測図(2)

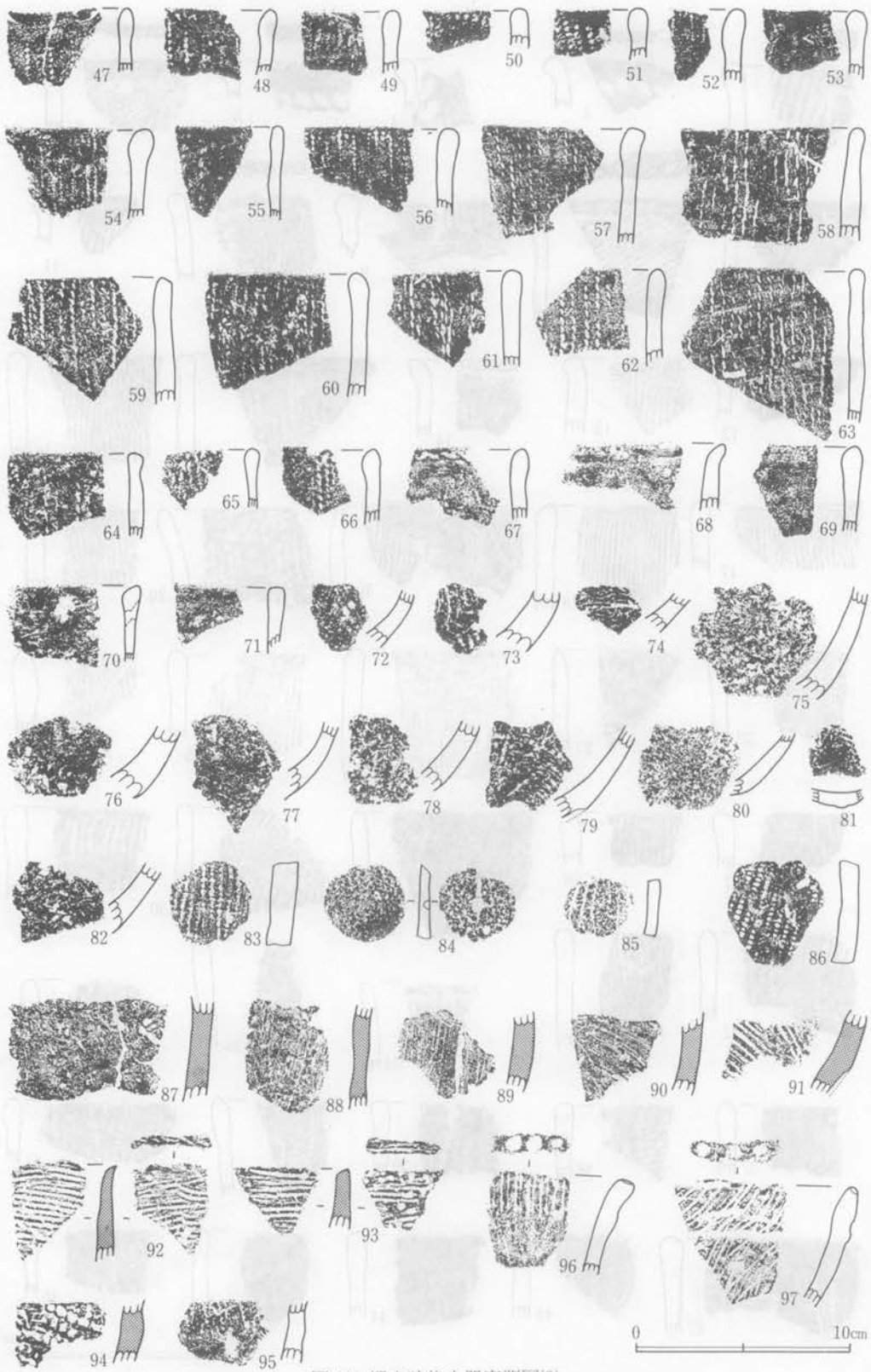


図102 縄文時代土器実測図(3)

いる例は、16～19、21、23～25で、縄文が施文されている例は20、22、26～36、38である。また、83は胴部破片を円盤形に調整したものである。

④稲荷台式土器

平滑な器面に条間のまばらな撚糸文が施文されており、概して器厚は薄手である37、39～67がある。また、器面の剝落があるため俄に稲荷台式土器と認められないが72～82の底部破片がある。その他に84～86のように胴部破片を円盤形に調整したものや、83のように土器片錘としたものがある。

⑤無文土器

68～71は口縁部の形状により撚糸文土器群に属するが無文のため明確な時期決定が困難である。器表は平滑で胎土は良好である。

(2) 無文繊維土器

87～90はいずれも胎土中に繊維を多量に含有する土器で、表面は平滑であるが部分的に植物繊維が器面にみられる。

(3) 条痕文系土器

茅山式土器に比定される資料であるが細片のため具体的な時期は不明である。91は底部付近の破片で丸底と推定できる。92、93は口縁部の表裏に横位の条痕文が施文されている。胎土中には繊維は含まれていない。

2．縄文時代前期（図102、図版29）

前期の土器群は総計4点出土した。内訳は黒浜式1点、浮島式3点となっている。

①黒浜式土器

94が黒浜式土器と推定できるもので、粗いＲＬ縄文が施文され裏面は平滑に調整され胎土中には繊維が多量に混入している。

②浮島式土器

浮島式土器は二枚貝のロッキングの痕跡がみられる浮島II式の95と、折り返し口縁に条線が施文された97がある。また、口唇部に指頭による圧痕が口縁部に縦位の細い沈線がみられる96もある。

3．縄文時代中期（図103、104、図版29）

総計96点出土した。内訳は五領ヶ台式1点、阿玉台式43点、加曽利Ｅ式47点、不明5点となっている。

①五領ヶ台式土器

98は口縁部破片である。細かな沈線と三角形の陰刻文によって構成されており、五領ヶ台Ⅰ

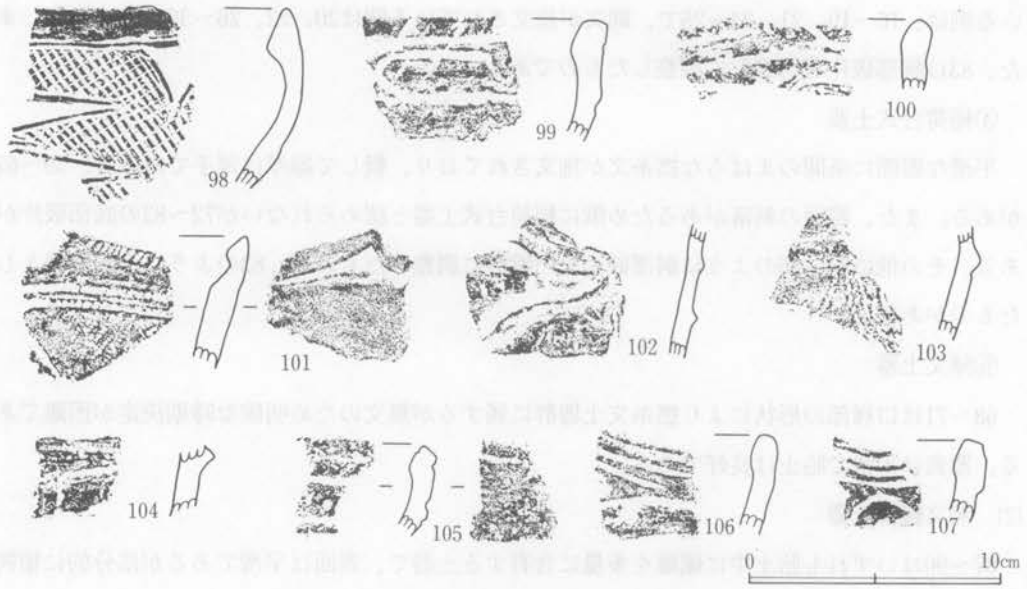


図103 縄文時代土器実測図(4)

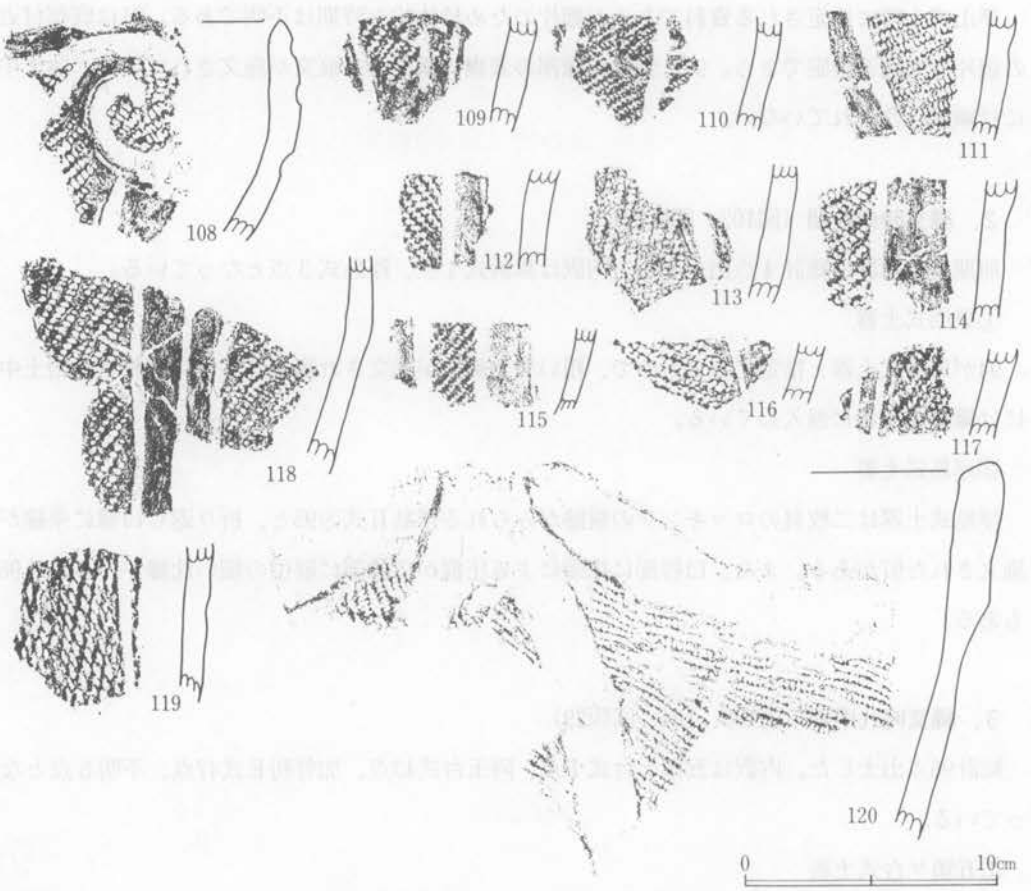


図104 縄文時代土器実測図(5)

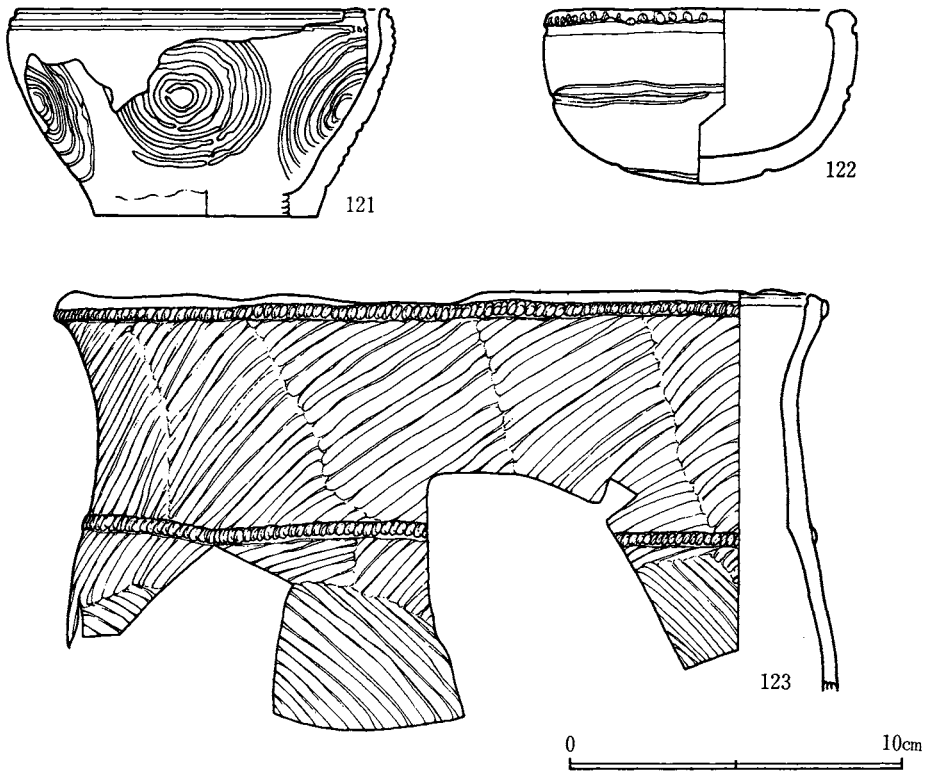


図105 縄文時代土器実測図(6)

式と思われる。

②阿玉台式土器

文様は楕円形に近い隆帯文を有する102の他は連続的な刺突文によって幾何学的な文様を構成している99～101、103～107がある。胎土中には大量の金雲母を含有している。

③加曽利E式

108～119は加曽利EII式である。ただし108については中でも古式と思われる。120は加曽利EIII式に比定できる。

4．縄文時代後期（図105～110、図版30～33）

総計1,257点出土した。内訳は称名寺式2点、堀之内式140点、加曽利B式337点、無文土器258点、縄文のある土器460点、型式不明60点となっている。

①称名寺式土器

わずか169、182の2点出土したにすぎない。曲線的な沈線によって区画された文様帯の内部に列点文が付されている。

②堀之内式土器

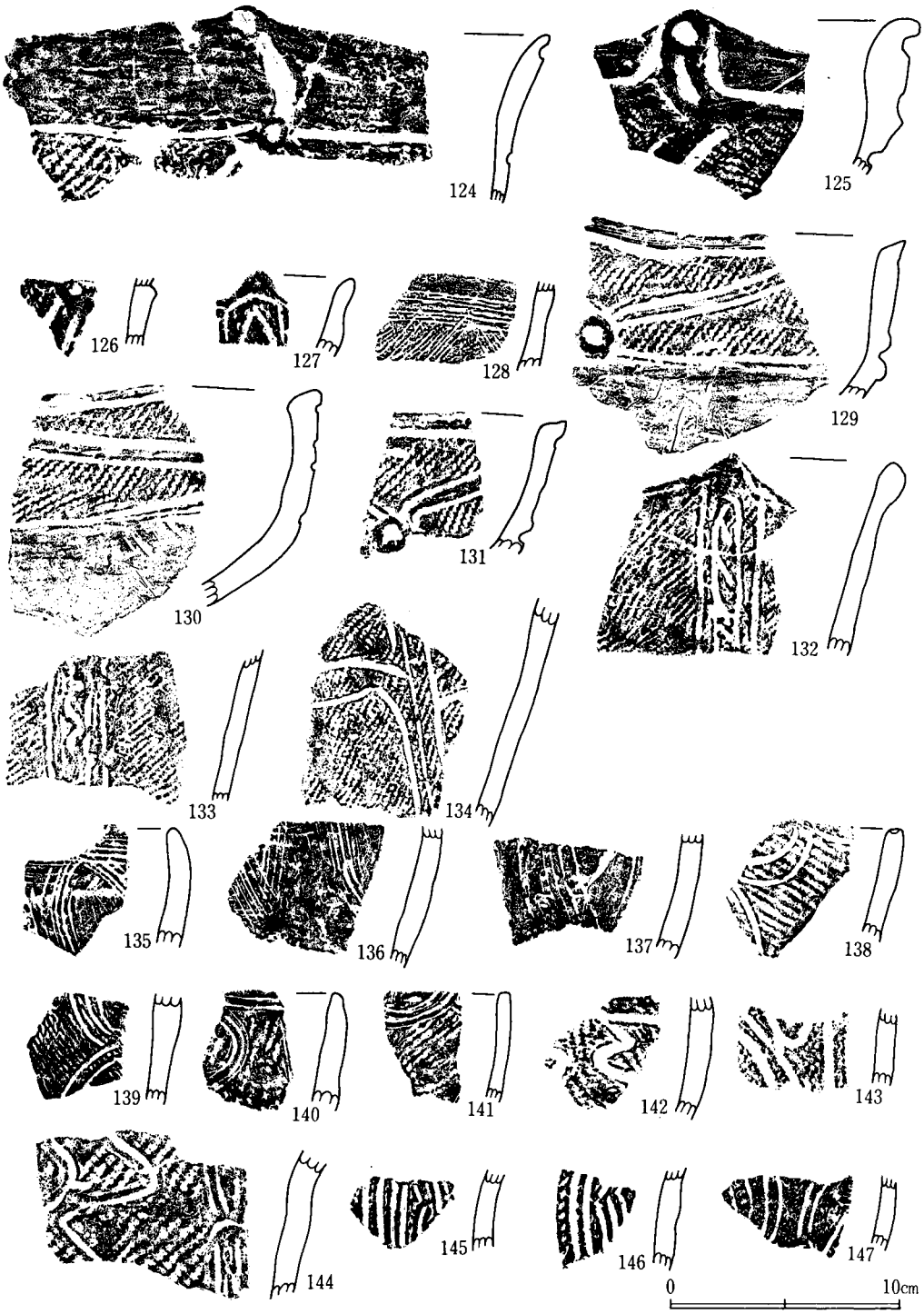


図106 縄文時代土器実測図(7)

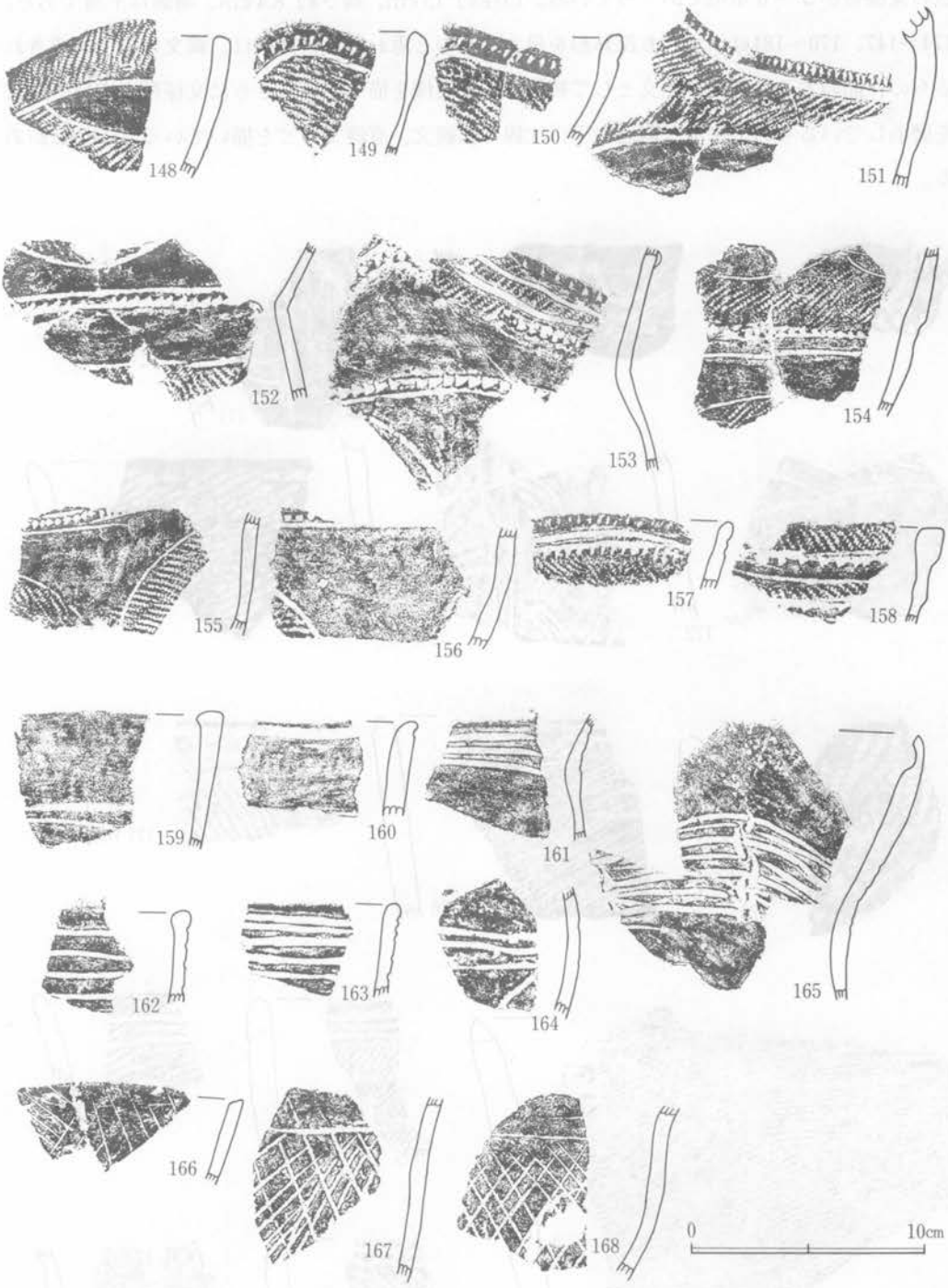


図107 縄文時代土器実測図(8)

121は、鉢形土器で、口縁部に二条の平行沈線がみられ、胴部は沈線によって描かれた同心円状の文様帯が5～6単位でめぐっている。口径約 15 cm、高さ約 8.4 cm、器面は平滑である。124～147、170～181はいずれも深鉢形を呈するものと思われる。文様は、縄文のみで構成されるもの、節の大きな縄文を地文として幾何学的な文様を描くもの、さらに文様帯の内部の縄文を磨消しているもの、平滑な器面に平行沈線で弧線文、直線文などを描いているものなどがある。

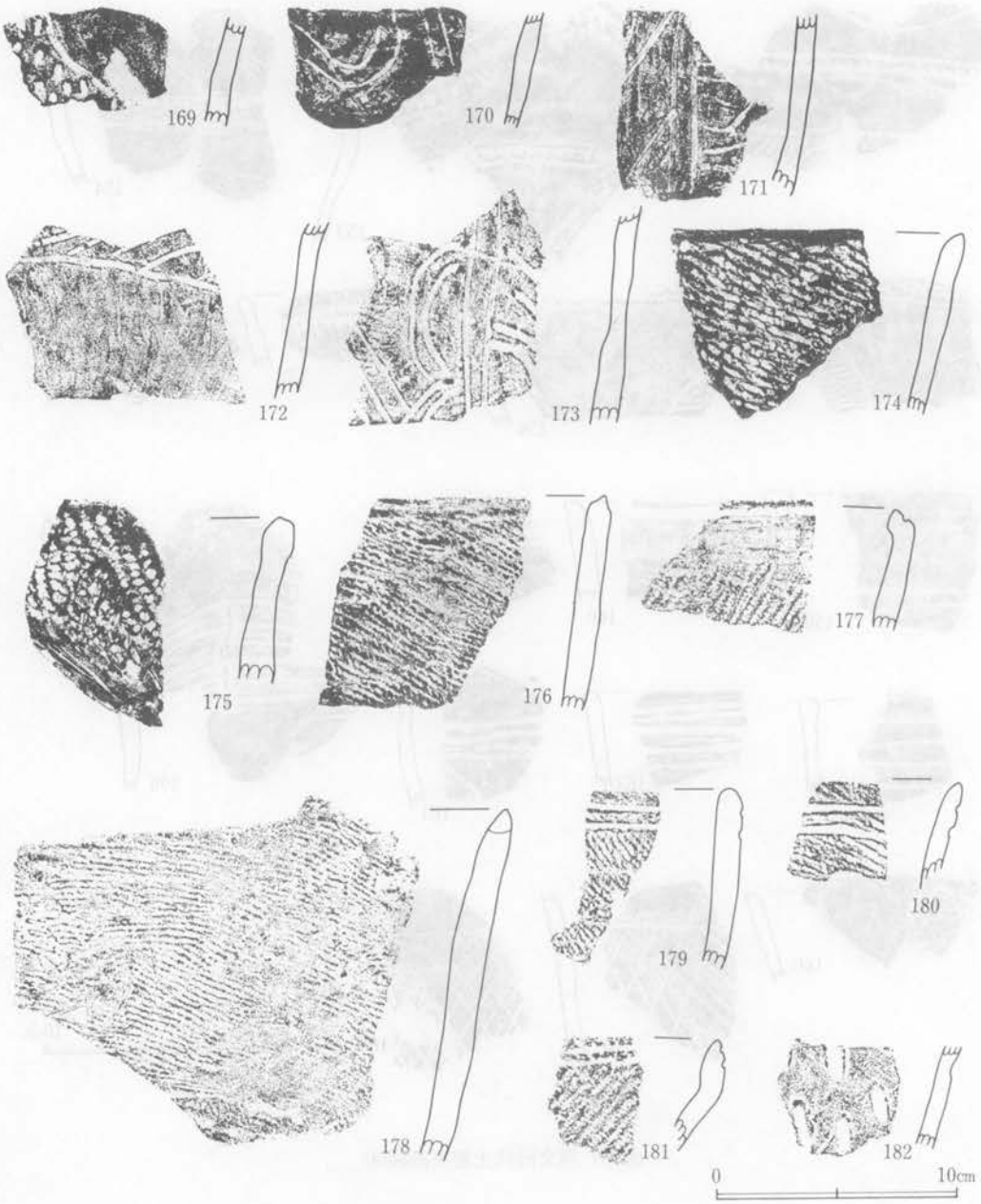


図108 縄文時代土器実測図(9)

③加曽利Ｂ式土器

122、123は加曽利ＢⅡ式土器の復元例である。122は、鉢形土器で、口縁部には刺突文が並列しており、その直下には一条の太い沈線がめぐっている。また、胴部、底部にはそれぞれ沈線が描かれている。器面は平滑で胎土も良好である。高さ約 70 cm、口径約 12.2 cm を計る。123

図109 縄文時代土器実測図(10)

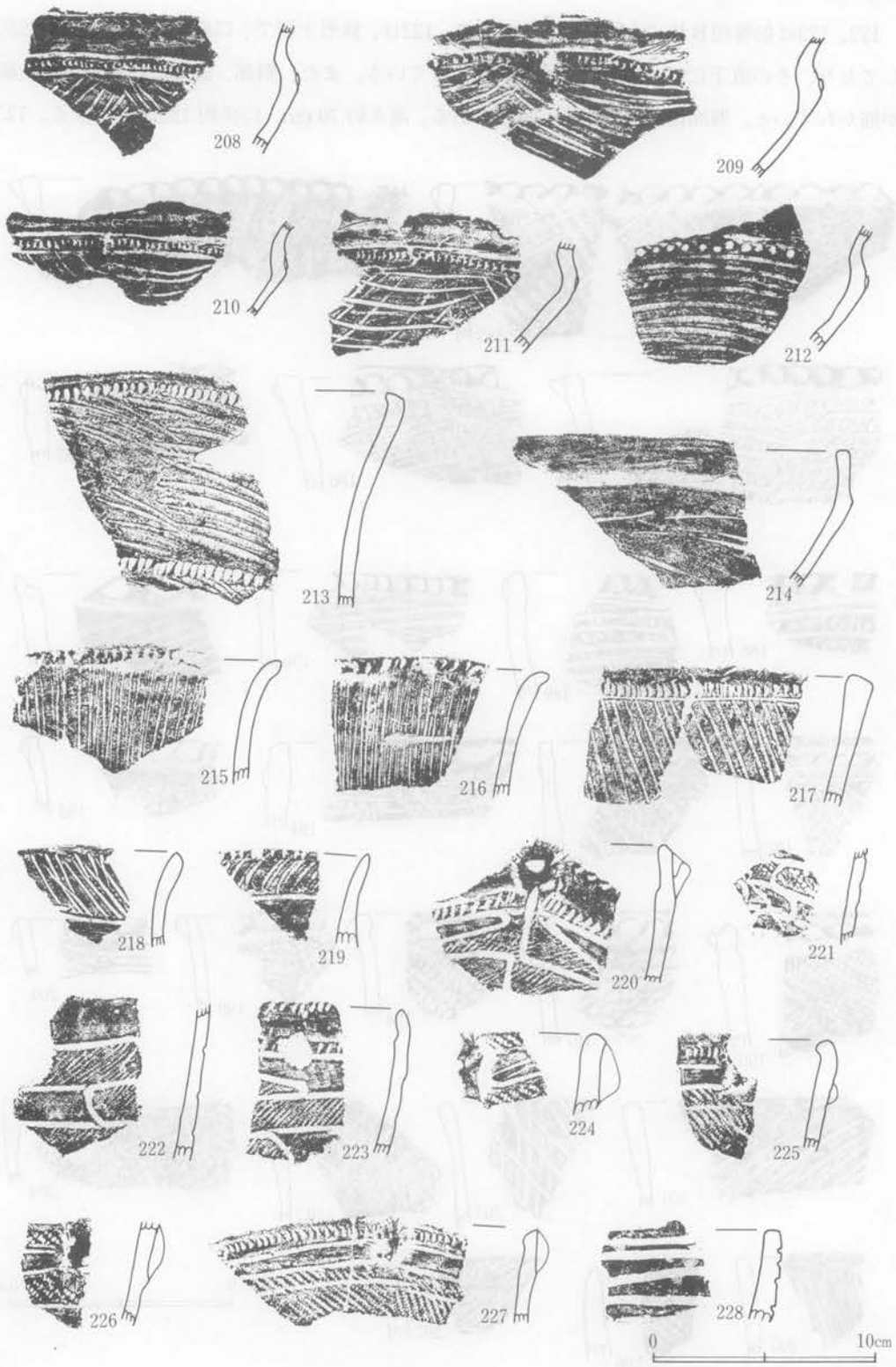


図110 縄文時代土器実測図(1)

は、胴部以下は欠損しているが、全体の形状は深鉢形土器であろう。紐帯文が口縁部および胴部をめぐる器面には斜行した条痕文がくまなく施文されている。内面の口縁部上端には沈線がめぐっており、内面はヘラミガキが顕著である。口径約 31.2 cm、器高（現存高）約 16 cm である。148～151は縄文を地文として沈線で区画し外部を磨消している。口縁部は刺突による波状口縁となっている。157、158は縄文を施文した上で鋸歯状の刺突と沈線とが組合わさっている。159～165は器面を平滑にみがきあげた上、平行沈線が数条施文されている。口縁部は波状口縁となっており器壁は非常に薄い。166～168は斜位の細沈線文が組合わされており格子状を呈する。183～207はいわゆる粗製土器である。粗製土器は浅鉢形を基本としている。183～200は縄文を地文として口縁部に隆帯をはりつけ、この上を押捺している。さらに、縄文の上に斜位の沈線をほどこしている例が多い。201～207は隆帯を貼りつけていない例である。208～213は胴部で大きく内彎し、再び口縁が浅鉢形を呈する例である。文様帯は胴部の刺突文帯で大きく二つに分けられている。上位は無文帯、下位は綾杉文によって構成されている。214は無文土器である。浅鉢形である。

④安行式土器

152～156、215～227は安行Ⅰ式に比定できる土器である。152～156は波状口縁であり口縁部には二条の沈線がみられ、それによって区画された文様帯は連続刺突、縄文、紐線文によって構成されている。頸部は刺突、以下について磨消し、無文部は平滑にみがかれている。215～217はいわゆる、粗製土器である。口縁部に一段の隆帯がはりつけられ、刻みがあり細かな沈線が縦位にはいる。218、219は口縁部に一条の沈線によって区画された文様帯があり中は斜位の沈線が施文されている。220～223は細かな縄文を地文として平行沈線あるいは縦位に、曲線的な沈線をほどこし、外部を磨消している。223には口唇部に刻目がみられる。224～227は口縁部に三条の平行沈線を引き楕円形もしくは、楕円形のはり瘤を貼付している。口縁は水平である。

⑤型式不明土器

228は 4 条の横位の太い沈線文が施されており、口唇部は平坦である。胎土、焼成とも良好である。色調は茶褐色を呈する。

第 2 節　石　　器

石器は、総計36点出土した。いずれも出土状態が明らかではない。住居跡覆土中、あるいは表面採集によるものである。

石器の種類は石鏃13点、石匙 1 点、打製石斧 7 点、スタンプ形石器 4 点、礫器 4 点、石棒 1 点、磨石 3 点、石皿（断片） 2 点となっている（表112、113)。

表112　縄文石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		花崗岩		閃緑岩		頁岩		硬砂岩		砂岩		礫岩		チャート		粘板岩		変成岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
石鏃	6	85.7	—	—	—	—	—	—	1	33.3	—	—	—	—	—	—	7	100	—	—	—	—	14	38.9
石匙	1	14.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.8
打製石斧	—	—	1	25.0	—	—	—	—	2	66.7	1	33.3	—	—	—	—	—	—	2	100	1	50.0	7	19.4
礫器	—	—	—	—	—	—	1	100	—	—	2	66.7	1	33.3	—	—	—	—	—	—	—	—	4	11.1
スタンプ形石器	—	—	—	—	2	66.7	—	—	—	—	—	—	1	33.3	1	100	—	—	—	—	—	—	4	11.1
石棒	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	50.0	1	2.8
磨石	—	—	1	25.0	1	33.3	—	—	—	—	—	—	1	33.3	—	—	—	—	—	—	—	—	3	8.3
石皿	—	—	2	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	5.6
計	7	19.4	4	11.1	3	8.3	1	2.8	3	8.3	3	8.3	3	8.3	1	2.8	7	19.4	2	5.6	2	5.6	36	100

1．石鏃（図111、図版34）

石鏃は、最も多く、出土している。形態的には、尖頭部、および基部の形状により、以下のように分類できる。

尖頭部は、Ⅰ直線、Ⅱ外彎、Ⅲ内彎の特徴が抽出でき、基部は、A平基、B凸基、C凹基、D円基の特徴がある。特徴の組合せによる形態は、Ⅰ－Aは1、2の2点、Ⅰ－Bは13の1点、Ⅰ－Cは3、5～9、11の7点、Ⅱ－Cは12の1点、不明3点に分類できる。石材は黒曜石6点、チャート7点、頁岩1点となっている。調整は、平坦な両面加工が通有であり、半面加工が一部にみられる。

2．石匙（図111、図版34）

黒曜石の横長剝片を素材としている。2次加工は、局部的にみられ、つまみ部に限定されている。

全体の形状は横形であり、断面形は下方にむかうにしたがって先細りとなり、下辺は鋭いエッジを呈している。機能部位に微細な刃こぼれが観察できる。

3．打製石斧（図112、図版35）

総計7点検出された。すべて分銅形石斧である。全般的に中央部のえぐりは緩やかである。

15は、剝片素材である。片面に大きく自然面を残す。上端部は本来欠損していたが再加工されている。刃線はゆるやかな曲線を描いており、粗雑な加工がほどこされている。上端部を除き全周にわたって、縁辺が磨耗している。

16は、扁平な礫を素材としている。表裏に自然面が観察でき周辺に平坦で深い剝離面が存在する。刃部は尖鋭で刃線は直接的であり、交互剝離がなされている。部分的であるため、不分明な点がある。磨耗痕は観察されない。

表113　縄文石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量 g	挿図番号	欠損の有無	石材
			長さ	幅	厚	(刃先角)				
1	D050—15	石鏃	1.7	1.3	0.2	(75°)	0.5	図111—1	有	黒曜石
2	D136—69	石鏃	2.3	1.8	0.3	(45°)	1.3	図111—2	有	チャート
3	表採	石鏃	2.4	1.6	0.4	(50°)	1.3	図111—3	無	黒曜石
4	D126—15(1)	石鏃	2.2	1.4	0.4	(45°)	1.0	図111—5	有	チャート
5	D135—1	石鏃	1.9	1.4	0.4	(60°)	0.7	図111—7	無	チャート
6	D107—57	石鏃	1.7	1.3	0.4	—	0.7	図111—4	有	黒曜石
7	R—9—63—63	石鏃	2.4	1.9	0.4	(60°)	1.2	図111—6	無	黒曜石
8	R—7—15	石鏃	2.9	1.8	0.5	(50°)	1.8	図111—9	有	黒曜石
9	U—8地区表採	石鏃	2.1	1.5	0.2	(55°)	0.7	図111—8	無	チャート
10	表採	石鏃	2.7	1.9	0.4	(45°)	1.4	図111—11	無	チャート
11	D107	石鏃	1.4	1.3	0.4	—	0.5	図111—10	有	黒曜石
12	D147—174	石鏃	2.7	1.8	0.4	(40°)	1.3	図111—12	無	チャート
13	D124—2	石鏃	2.8	1.4	0.3	(35°)	1.0	図111—13	無	頁岩
14	Q—4	石匙	3.4	2.8	1.2	45°	8.7	図111—14	無	黒曜石
15	D055—240	打製石斧	9.6	5.5	2.0	70°	122.9	図112—20	無	安山岩
16	表採	打製石斧	6.0	5.1	1.5	—	56.9	図112—18	有	頁岩
17	表採	打製石斧	9.6	5.7	1.9	75°/65°	147.5	図112—17	無	硬砂岩
18	R—5—1表土	打製石斧	9.2	6.1	1.7	65°/75°	127.2	図112—15	無	変成岩
19	16—40—1	打製石斧	5.2	5.2	1.5	100°	52.8	図112—16	有	粘板岩
20	P—10—69—4	打製石斧	5.2	6.5	1.6	—	76.1	図112—19	有	頁岩
21	M019—6	打製石斧	6.7	4.5	0.6	80°	23.9	図112—21	無	粘板岩
22	表採	礫器	6.0	4.2	1.9	50°	57.2	図114—28	無	硬砂岩
23	S—11地区表土	礫器	9.3	5.3	2.5	95°	175.7	図114—26	無	硬砂岩
24	表採	礫器	8.8	6.0	3.5	80°	270.0	図114—27	無	砂岩
25	表採	礫器	5.5	3.9	3.2	80°	102.2	図114—29	無	閃緑岩
26	V—9—65—1	スタンプ形石器	10.8	7.0	3.8	—	393.0	図113—23	無	花崗岩
27	U—9—68—1	スタンプ形石器	6.3	5.3	3.7	—	175.0	図113—24	有	花崗岩
28	D135—11	スタンプ形石器	11.3	5.6	4.7	—	451.0	図113—25	無	花崗岩
29	D177—39	スタンプ形石器	11.2	6.7	5.1	—	522.0	図113—22	無	砂岩
30	T—11地区	石棒	16.7	4.8	3.8	—	504.0	図115—30	無	変成岩
31	表採	磨石	12.1	5.8	3.6	—	420.0	図115—33	無	安山岩
32	T—11地区	磨石	7.7	9.2	5.4	—	473.0	図115—31	有	花崗岩
33	D132表採	磨石	5.5	5.4	2.0	—	99.3	図115—32	有	砂岩
34	D174—33	石皿	13.4	12.0	6.7	—	1343.0	図116—34	有	安山岩

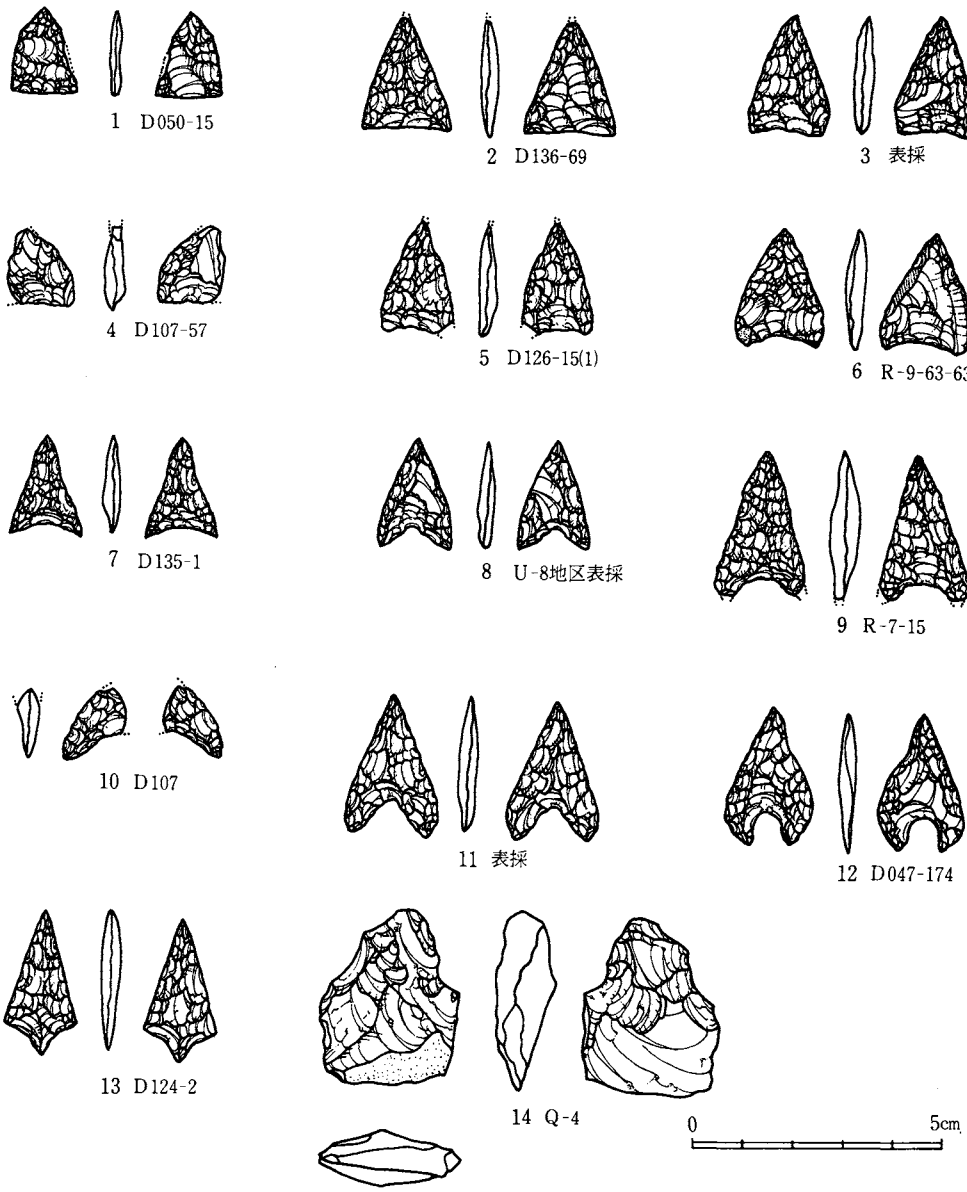


図111 縄文時代石器実測図(1)

17は、剥片素材である。裏面には大きく主要剥離面が残存している。上下両端および両側辺に部分的に磨耗痕が観察できる。特に両側辺のえぐりの部分が磨耗している。加工は浅く、急角度の階段状剥離が顕著である。

18は、剥片素材である。自然面と主要剥離面がそれぞれ大きく残存している。加工は表裏周辺加工がみられ、階段状剥離が顕著である。全周にわたって縁辺部が磨耗している。

19は、半欠品である。剥片素材、下端部と両側辺には顕著な磨耗痕が見られ、周辺加工であり階段状剥離が顕著である。刃部は交互剥離である。

20は、半欠品である。剝片素材、両面とも周辺加工である。加工は概して、階段状剝離であり、刃部は交互剝離である。全周にわたって磨耗痕が見られるが、特に刃部に顕著である。

21は、剝離素材である。薄手扁平である。両面に急角度な階段状剝離がみられる。全周にわたって磨耗痕がみられるが刃部に特に顕著である。

4．スタンプ形石器（図113、図版35）

いずれも円礫を素材としている。早期の撚糸文土器末期に伴出する石器である。総計4点検出しており、内完形品は3点である。

22は、裏面は、節理面にそっている。頂部より長軸方向の加撃で平坦な面が作り出されている。その後底面が形成されている。底面は概して平坦であるが側面調整はない。全体の形状は烏帽子形である。使用痕は観察できない。

23は、下半部が欠損している。側面調整は1側辺に限られ直線的である。

24は、全体の平面形は、細長い撥形を呈する。1側辺に側面調整がみられる。底面は数回の加撃により作り出され、裏面より表面にむかいゆるやかに傾斜している。裏面底辺、表面右側辺には磨耗痕が観察される。

25は、底面は斜めに傾斜しており、剝離面の境界線はシャープである。側面調整は全くみられない。頂部に敲打痕が観察できる。

5．礫器（図114、図版35）

4点検出し、いずれも撚糸文土器と共伴する石器であろう。素材はいずれも円礫である。調整は全周にわたる例27と、局部的な例28、30、がみられる。

26は、片面加工である、裏面は大きな剝離面で構成されておりかつ石質は緻密である。したがって礫器というよりむしろ、石核の可能性もあるが、刃部に細かな剝離面が観察でき、礫器として考えて良いであろう。

27は、全周にわたって、表裏に周辺加工がみられる。全体の形状は楕円形を呈する。上下両端には、磨耗痕が観察されず、むしろ両側辺に部分的に観察できる。

28は、楕円形の円礫の一端に粗雑な加工を施した片刃の礫器である。全体に赤化しており、受熱の公算が大きい。刃部は軟質砂岩のためか風化が激しく磨耗している。

29は、素材の形状に沿って鋭い縁辺部に刃部をつくりだしている。加工は粗雑で一部に礫面を残している。全体に小形、軽量である。

6．石棒（図115、図版34）

1点のみ出土している。

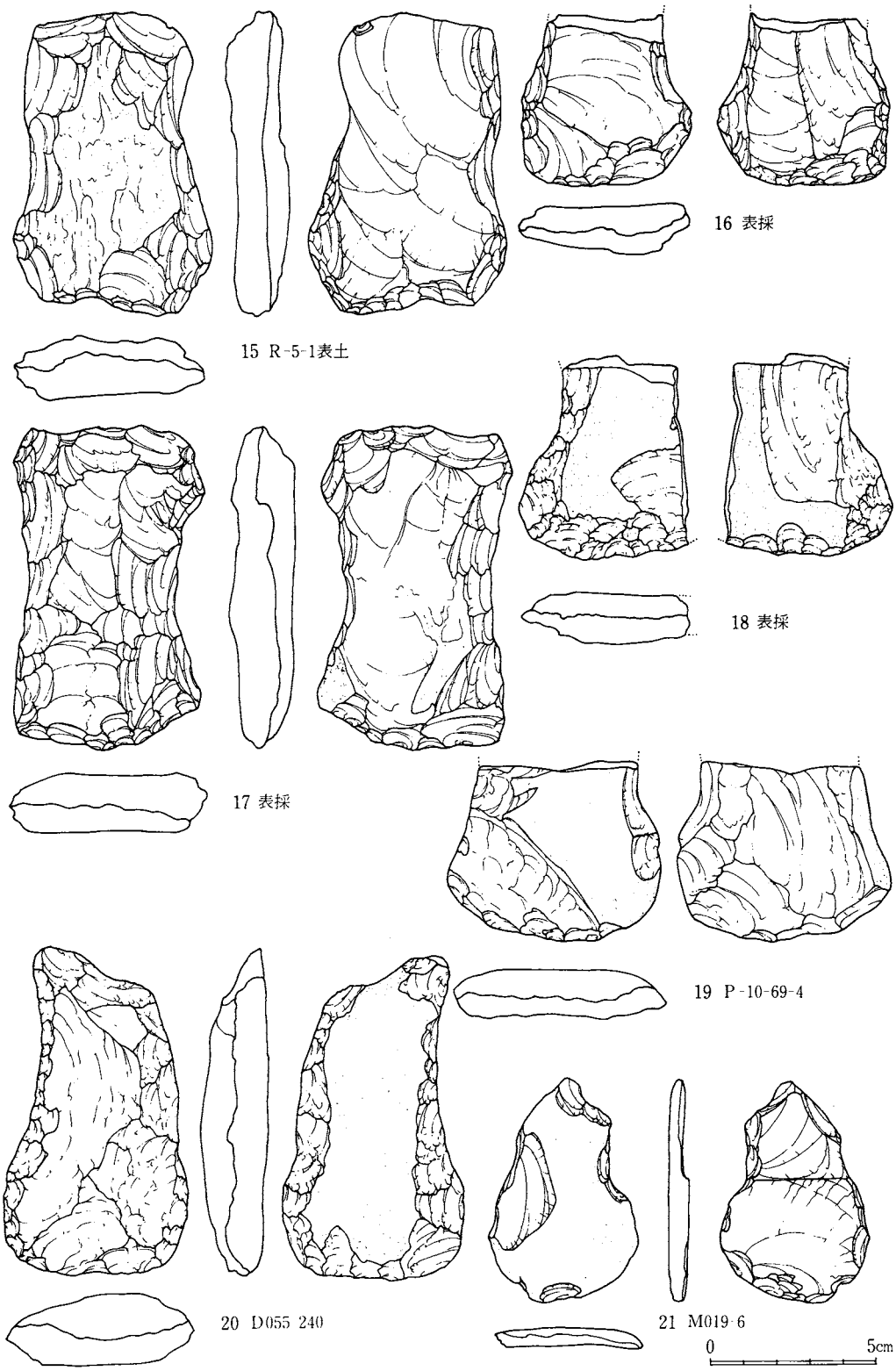


図112 縄文時代石器実測図(2)

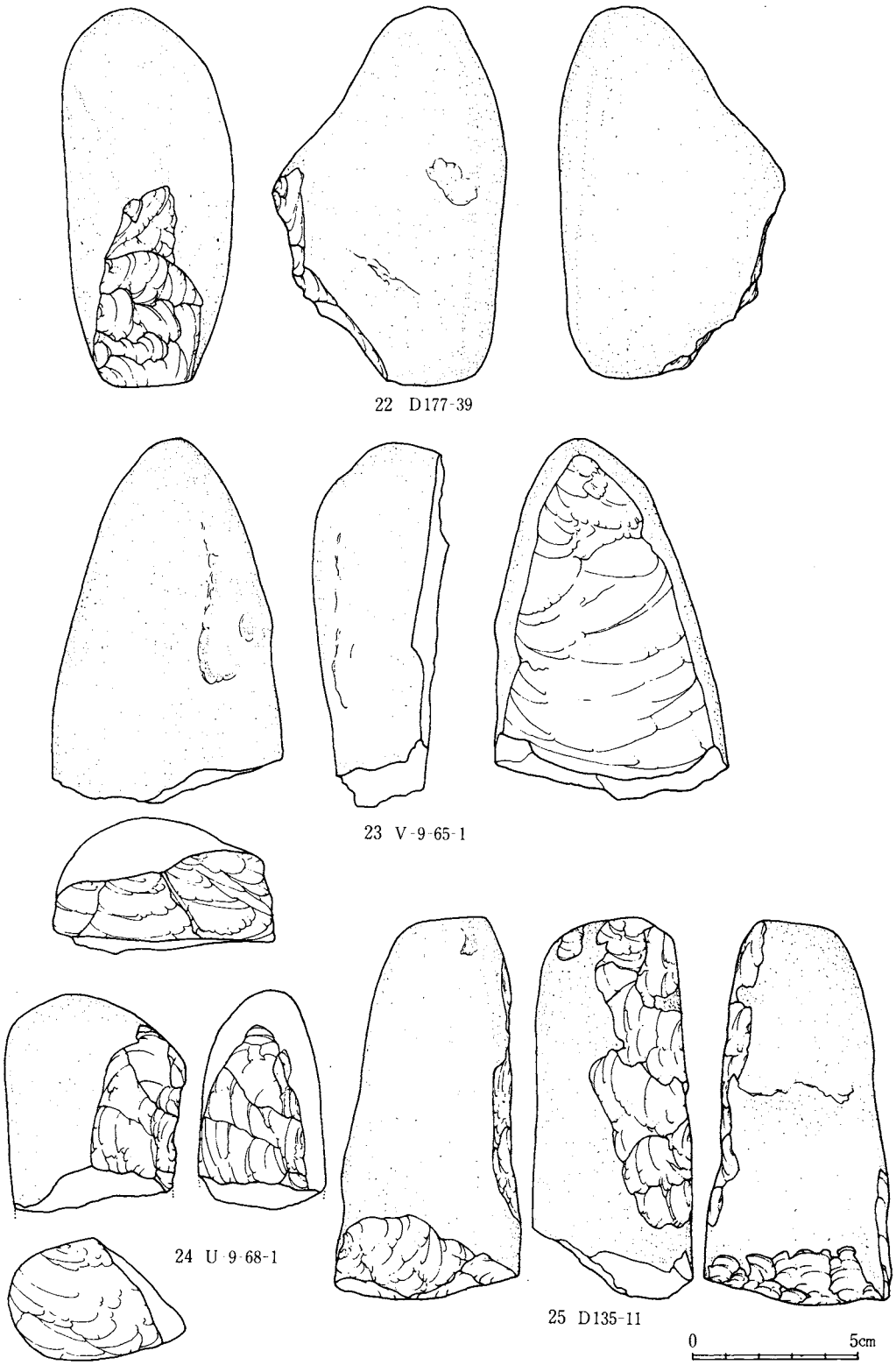
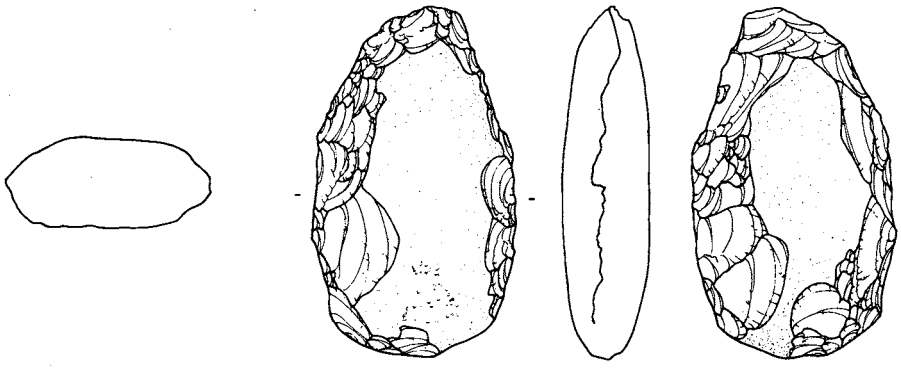
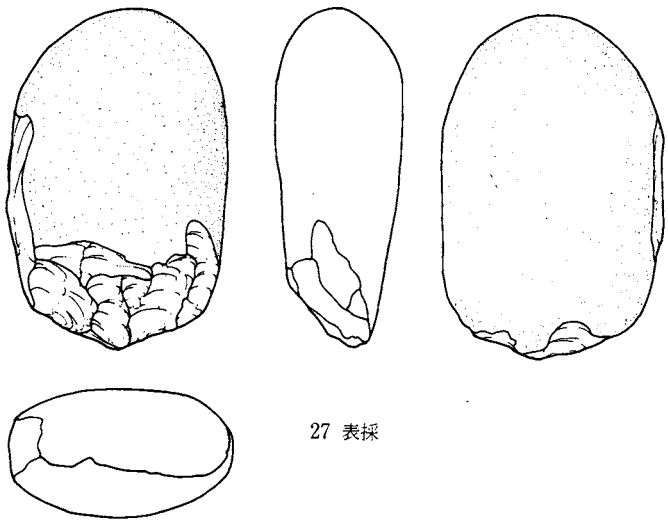


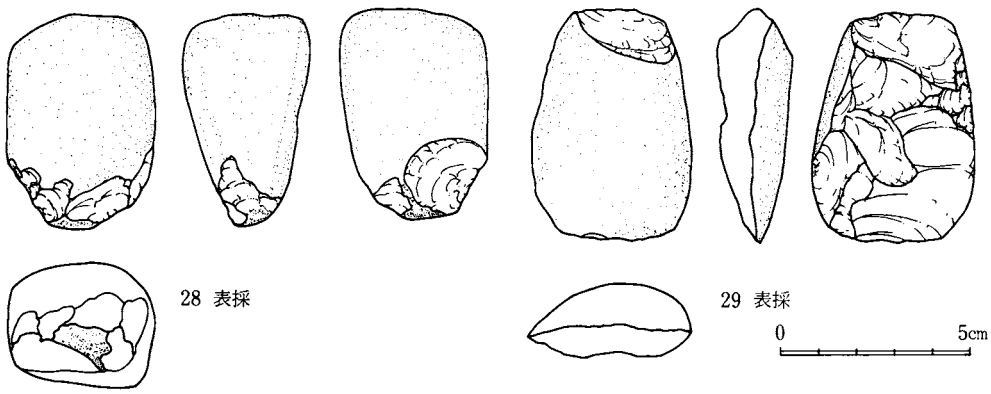
図113 縄文時代石器実測図(3)



26 S-11地区表土



27 表採



28 表採

29 表採

0 5cm

図114 縄文時代石器実測図(4)

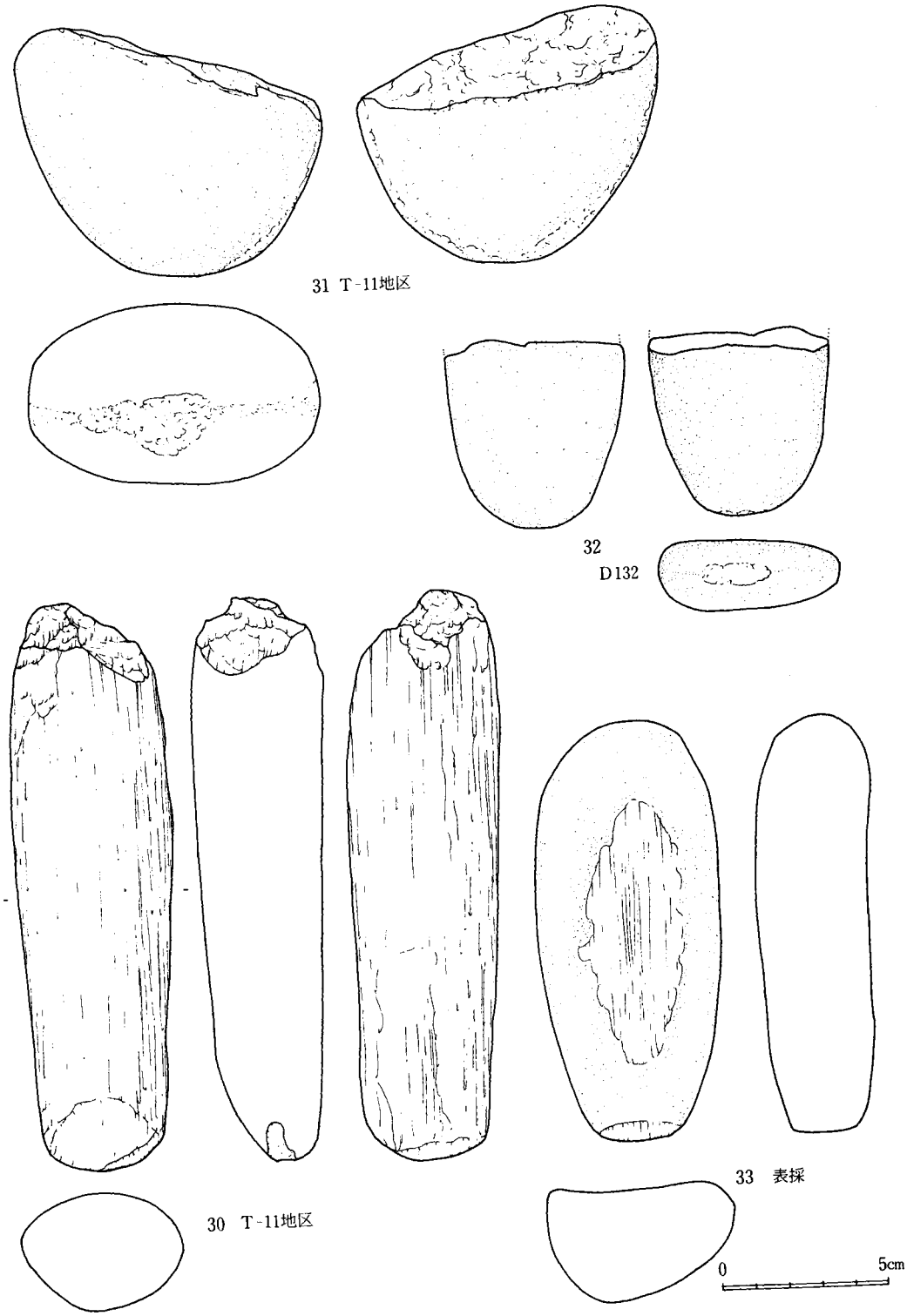


図115 縄文時代石器実測図(5)

30は、欠損品である。全面に磨きがかけられ、断面形は楕円形に近い。下端部は研磨痕が見られ、あたかも磨製石斧の刃部の様相を呈するが刃部はつぶれて平坦である。石材は変成岩と思われる。

7．磨石（図115、図版34）

総計3点検出できた。時期はいずれも不明である。

31は、全体に長楕円形を呈する。上端部に敲打痕、下端部に磨耗痕が存在する。またさらに裏面中央部にも長軸方向の顕著な磨耗痕が観察され、若干凹んでいる。全体的に研磨している。

32は、欠損品であるが、破損品は磨耗しており、転用例と考えられる。下端部に敲打痕が観察できる。側辺部には帯状に本来の礫面が残存している。

33は、欠損品である。全面的に研磨している、扁平、平端部に敲打痕があり、受熱の痕跡がみられる。

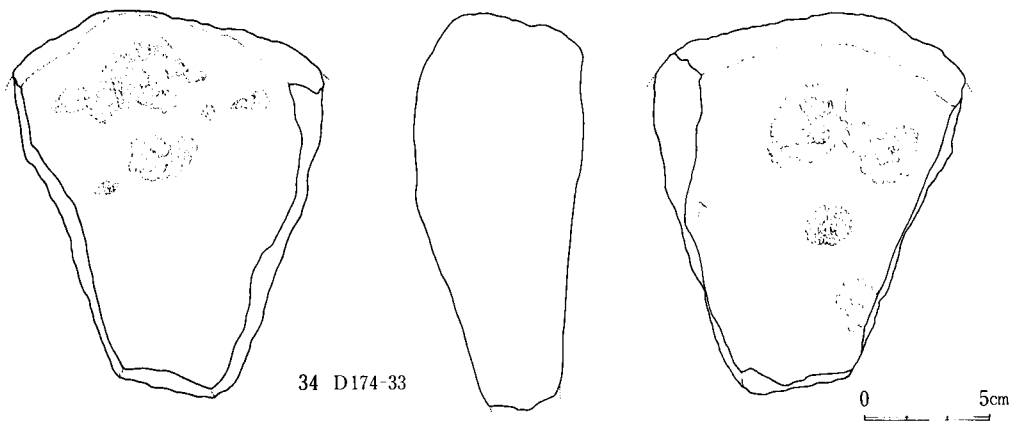


図116 縄文時代石器実測図(6)

8．石皿（図116、図版34）

断片が2点検出できた。共に多孔質の安山岩を石材としている。

34は、断片である。表裏とも研磨してあり、中央部にむかってなだらかに傾斜している、表面で5箇所凹部があり、裏面にも5箇所存在する。縁どりはなく平坦な側面部が形成されている。2は断片である。表面のみ研磨されている。縁辺部は丸く突出している。

第3章　ま　　と　　め

第1節　土　　器

本遺跡で出土した縄文土器は、縄文時代早期から始まるが、出土量より最も盛行した時期は、早期、後期の段階である。それに対し前期、中期は相対的に少なく特に前期は断片的な出土例と言える。

1．縄文時代早期の土器

撚糸文土器群および条痕文系土器群がみられる。したがって、両者には互いに時間的な差が存在する。撚糸文土器群には井草Ⅰ・Ⅱ式、夏島式、稲荷台式などが存在するが、最も大量に出土したのは稲荷台式土器である。復元できた土器は井草Ⅰ式土器にあたり、東京都昭島市上川原遺跡[註1]の例に良く類似している。

2．縄文時代前期の土器

前期の土器はわずかであり、前葉の黒浜式土器1点、後葉の浮島式土器3点が出土しているにすぎない。浮島式土器は口唇部を押捺し、波状口縁を呈し、二枚貝のロッキングによる変形爪形文、折り返し口縁に半截竹管による沈線文などの文様構成の土器片がみられる。

3．縄文時代中期の土器

中期前葉の五領ヶ台式土器より阿玉台式土器、加曽利Ｅ式土器に至るまで出土している。五領ヶ台式土器は条線文が充填され器形、文様等により五領ヶ台Ⅰ式に属するものと考えられる。阿玉台式土器は、新しい段階のものが大勢を占めており、Ⅱ式の段階が多い。加曽利Ｅ式土器はⅠ式がかけるもののⅡ・Ⅲ式に至るまで存続している。

4．縄文時代後期の土器

後期前葉の称名寺式土器より堀之内式、加曽利Ｂ式、安行式土器に至るまで出土したが、称名寺式土器は微量である。称名寺式土器は、区画帯内部に列点文が施されている。堀之内式土器はⅠ・Ⅱ式とも出土しているが、特にⅠ式が多い。文様構成としては縄文を地文として弧状、懸垂文を施文したものと平滑な器面に弧状の沈線を施文したものとが大勢を占める。なお、堀之内式期と思われる無文土器、縄文施文の土器が多量に出土している。加曽利Ｂ式土器はⅠ～Ⅲ式土器共に存在するが、全般的にいわゆる粗製土器が多く、精製土器が少ない。精製土器は地

文に縄文をあしらい、沈線文で区画し、区画外を磨消したもので平滑な器面に数条の平行沈線あるいは格子状の沈線をほどこしたものがみられる。粗製土器は縄文を地文として斜めまたは横位に沈線を施文したのち口縁部に帯状に粘土紐を貼りつけたものが多い。器形としては、深鉢形の他に浅鉢形の土器が2点みられる。

安行式土器は縄文を地文として、平行線で区画し区画外の縄文を磨消したのち楕円形の貼り瘤を貼付したものがみられる。粗製土器としては平坦な口縁部をとりかこみ爪形の列点を刻み以下を縦方向あるいはやや斜め方向に条痕文を施文したものがみられる。

註

1　昭島市教育委員会『昭島市上川原遺跡』第1次　第2次　昭和46年　昭和52年

第2節　石　　器

石器群は石鏃、石匙、打製石斧、スタンプ形石器、礫器、磨石、石皿、石棒などがみられ、計36点をかぞえたが土器の数に比べ非常に少ない。石器群の中で最も多く出土した器種は石鏃である。

時期的な示標となり得る石器はスタンプ形石器、分銅形打製石斧などである。スタンプ形石器は撚糸文土器群に伴出する器種である。

石斧は分銅形石斧によって占められ、短冊形、撥形はない。分銅形石斧は関東地方では縄文時代中期後半より出現し、縄文時代後期に盛行するという。

全般的に出土量が少なく、充分な考察がなし得なかった。

第III部　弥　生　時　代

第1章　弥生時代の概観

弥生時代の遺構は後期に比定できる竪穴住居跡、方形周溝墓などがある。後期では終末期として捉えることが可能な遺構であり、古墳時代前期に比定できる遺構群と密接な関係を有している。弥生時代終末期から古墳時代前期に移行するいわゆる過渡期の様相が台地南縁部を中心とした地域において看取することが可能であり、当地域における時代の推移についてかなり明瞭な状況を把握することが可能である。よって、本来弥生時代と古墳時代の遺構については分割して報告するところであるが、古墳時代前期に比定できる遺構群を弥生時代に包括して報告する。

弥生時代後期の遺構群は各所で群を形成して分布する状況が一瞥できる。同様に古墳時代前期の遺構群についても台地南西部に集中して分布している。このような纏りを群として捉えたのは遺構分布上の偏在性に基づいて区分したもので、同時性を意味する群ではない。弥生時代後期の遺構群をⅠ群からⅣ群Aとし、古墳時代前期の遺構群をⅣ群Bとした。

Ⅰ群からⅤ群の集落立地は、新川をのぞむ台地東側縁辺地域と、須久茂谷津をのぞむ南側縁辺地域を中心としている。この集落立地の違いは、台地を開析する小支谷に関係するものである。小支谷は3か所に認められヲサル山遺跡の台地を含め、台地は4分割されている。台地東側には飯綱神社北側に位置する小支谷、台地南側には、台地のほぼ中央部に位置する小支谷と、権現後遺跡とヲサル山遺跡を区分する比較的谷頭の深い小支谷があり、集落立地はこれら小支谷と密接な関係をもっている。

第Ⅰ群は飯綱神社北側の小支谷上の台地、第Ⅱ群は台地南側ほぼ中央部の小支谷上の台地、第Ⅲ～Ⅴ群は台地南側ほぼ中央部の小支谷と、ヲサル山遺跡とを区分する小支谷に挟まれた台地上にそれぞれ立地している。

第2章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

弥生時代後期に比定できる遺構は、竪穴住居跡73軒、方形周溝墓3基、ピット1基である。古墳時代前期に比定できる遺構は竪穴住居跡32軒である。

検出した合計109基の遺構群をもって集落全体がすべて検出できたわけではない。台地東側縁辺地域や飯綱神社の地域については調査対象地域外のため調査は実施していないものの遺構の所在は充分考えることができる地域である。東側地区界沿に南北に通る公道の東側地域には一

部土取され資材置場となっている部分があり、この露呈面に竪穴住居跡の断面を認めることができ、かなりの遺構が所在する可能性を有している。また台地南側は土砂崩れ等によって現況を呈しているが、旧時の地形は須久茂谷津に突出した台地であったと推定でき、この部分に遺構が所在した可能性も充分考えられる。

しかし、遺構群はかなり纏った状況を呈している。特に第IV群において古墳時代前期の遺構を含め69軒を検出した遺構群は、弥生時代から古墳時代の過渡期の様相を明瞭に捉えることができる群として注目できよう。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

弥生時代の第Ⅰ群は竪穴住居跡19軒とピット1基で構成される群である。X・Y－3・4・5の地域において検出した。

住居跡はかなり纏りのある分布状況を呈しているが、東側の地区界沿に接しているため20軒ですべてとは考えられない。公道を挟んで東側の地域に一部土取され資材置場となっている部分の露呈面に竪穴住居跡の断面を認めることができるため、Ⅰ群はかなり広範囲に遺構が分布するものと察せられる。

住居跡の形状や規模はかなり変化に富んでいる。中には焼失した住居跡もあり、床面上から多量の炭化物、焼土とともに土器等が原位置を保った状況で出土している。反面、焼失していない住居からの出土遺物は全体的に見て少ない状況を呈している。また、弥生時代に構築されたと考えられる住居内から歴史時代に比定できる遺物を出土した住居

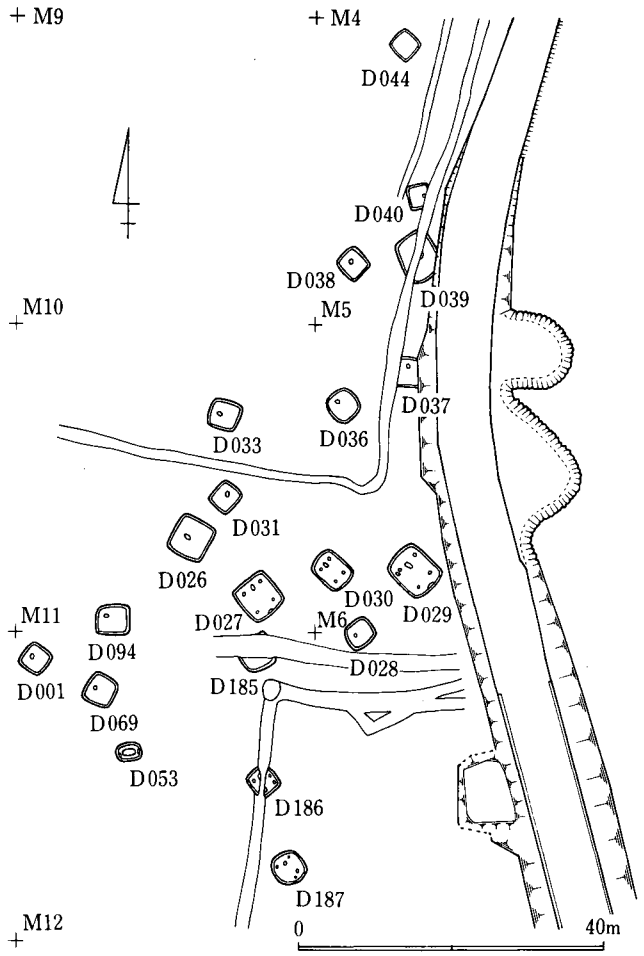


図117 弥生時代第Ⅰ群遺構分布状況図

跡も存在しており、Ⅰ群の特徴として捉えることができると考える（図117、図版36）。

1．D001号遺構（図118～120、図版40－1）

Ⅰ群の住居群内において最も南側の部分に位置し、D094、D069が近接している。遺構確認時に最も早く検出し、遺構の状況を把握するため拡張をして調査を実施した遺構である。

遺構　北壁3.23m、東壁3mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.2m掘り込んで床面に達している。床面は平坦であるが全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

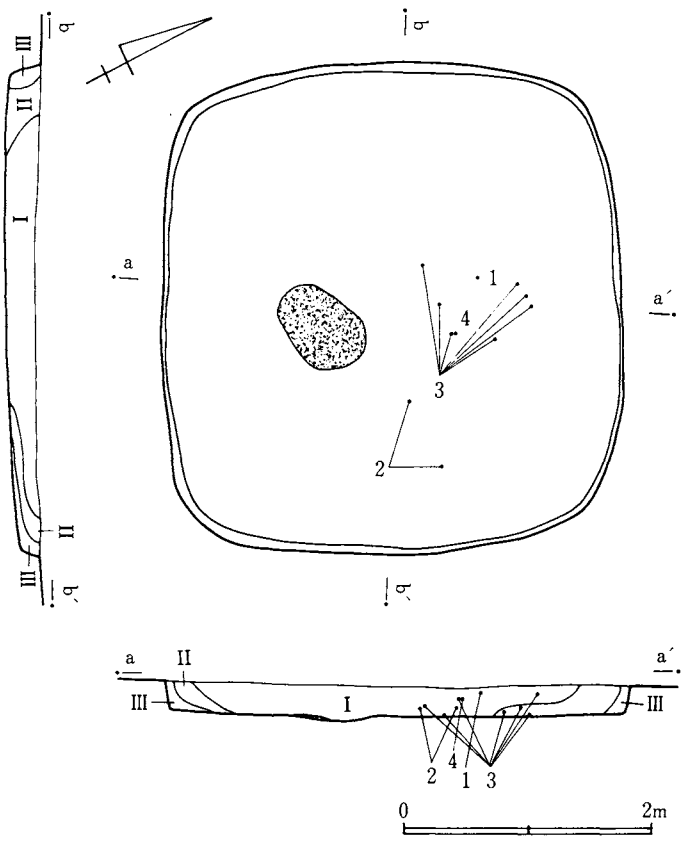


図118　D001号遺構実測図

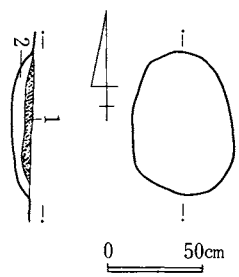


図119　D001号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　焼土ブロック混入褐色土層

炉　住居中央部より南壁に寄って検出した。長径0.72m、短径0.53m、深さ0.11mを計る楕円形を呈し、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層ロームブロック混入茶褐色土層が堆積しており、遺物はほとんどが細片で、中には古墳時代前期の破片もある。床面より若干上部の炉北側から出土している。

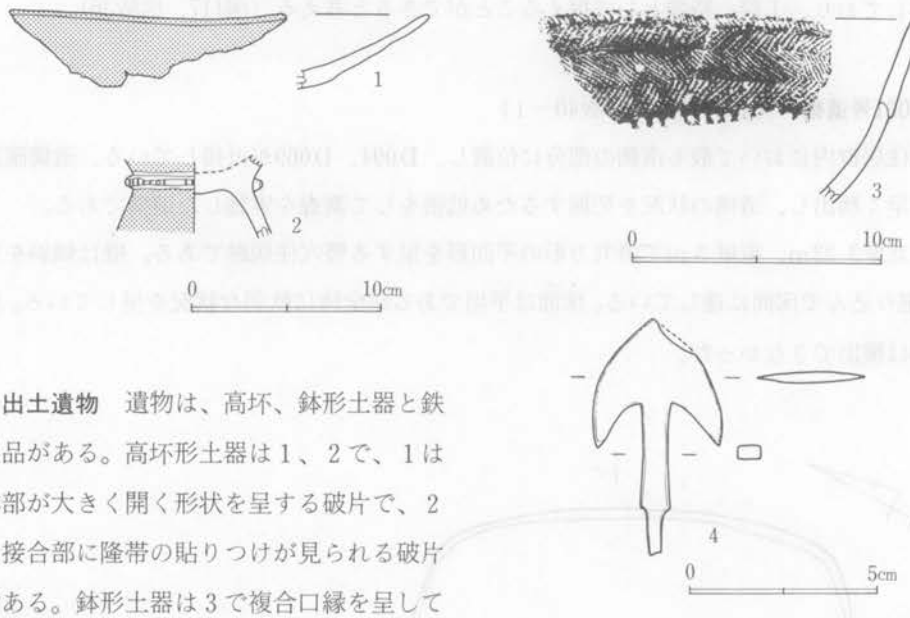


図120 D001号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、高坏、鉢形土器と鉄製品がある。高坏形土器は1、2で、1は体部が大きく開く形状を呈する破片で、2は接合部に隆帯の貼りつけが見られる破片である。鉢形土器は3で複合口縁を呈している。鉄製品は4の鏃である。

D001出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	—	—	口縁部破片	ヘラ磨き ヨコナデ	——	堅緻	赤褐色	赤彩
2	高坏	—	—	—	脚部破片	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
3	鉢	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文	砂粒	堅緻	黄灰色	

2．D026号遺構（図121～123、図版40－2）

I群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D031、D094が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を覆土の20%に相当する部分に受けており、東壁は検出することができなかった。したがって、出土する遺物は本来の一括資料とは判断できない。

遺構 北壁5.08m、南壁5mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.36mを掘り込んで床面に達する。床面は攪乱が東側部で著しいため全体を把握できないが、軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

炉 住居中央部より西壁に寄った部分に検出した。長径1m、短径0.7m、深さ0.15mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は各層に分散しているにすぎない。

出土遺物 遺物は稀少で図示できる土器は2点のみである。いずれも複合口縁を呈し赤彩さ

れる破片で、壺形土器と思われるが、2については鉢形土器の可能性もある。

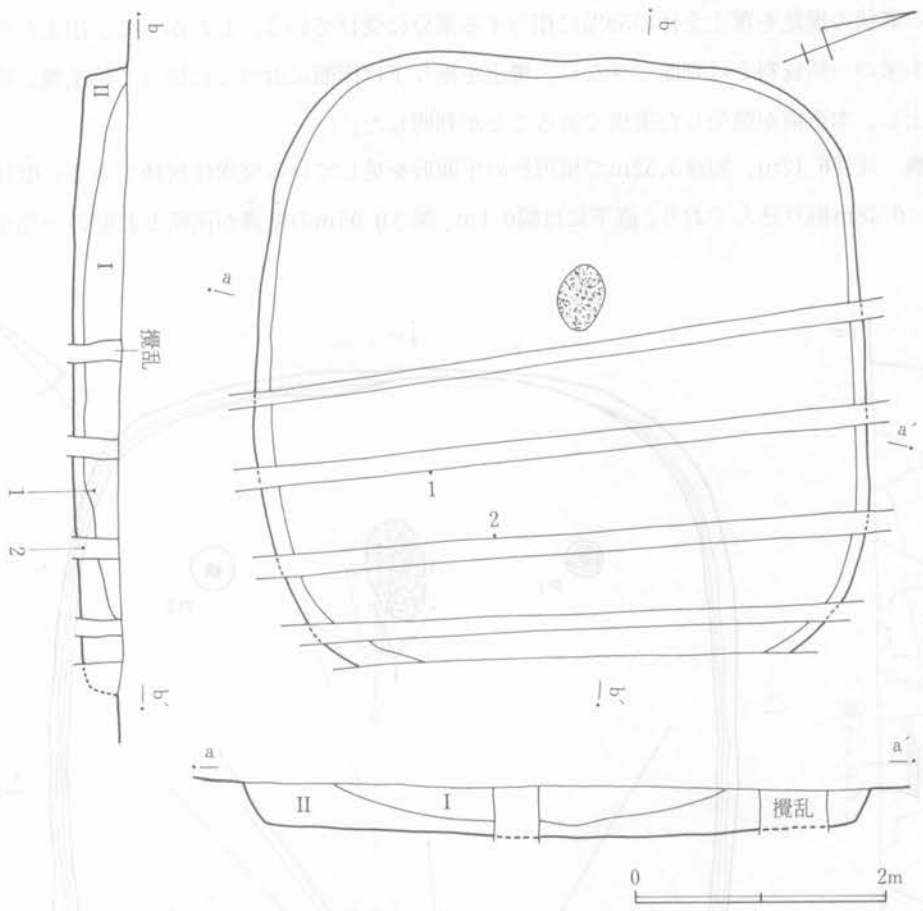


図121 D026号遺構実測図

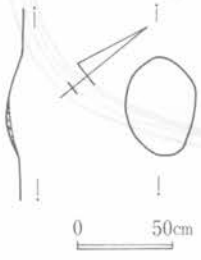


図122 D026号遺構炉跡実測図

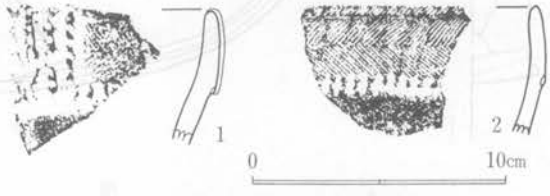


図123 D026号遺構出土遺物実測図

D026出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文 棒状浮文	小石	堅緻	明黄褐色	
2	壺	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文 縄文原体刻目	砂粒	堅緻	明褐色	

3．D027号遺構（図124～127、図版40－3、41－1、48、49）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D026、D031が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を覆土全体の59%に相当する部分に受けている。したがって、出土した遺物は、本来の一括資料とは判断できない。覆土を掘り下げ床面に近づくに従って焼土塊、炭化物が出土し、本遺構が焼失した遺構であることが判明した。

遺構　長径6.12m、短径5.52mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が南壁と北壁の一部を除い

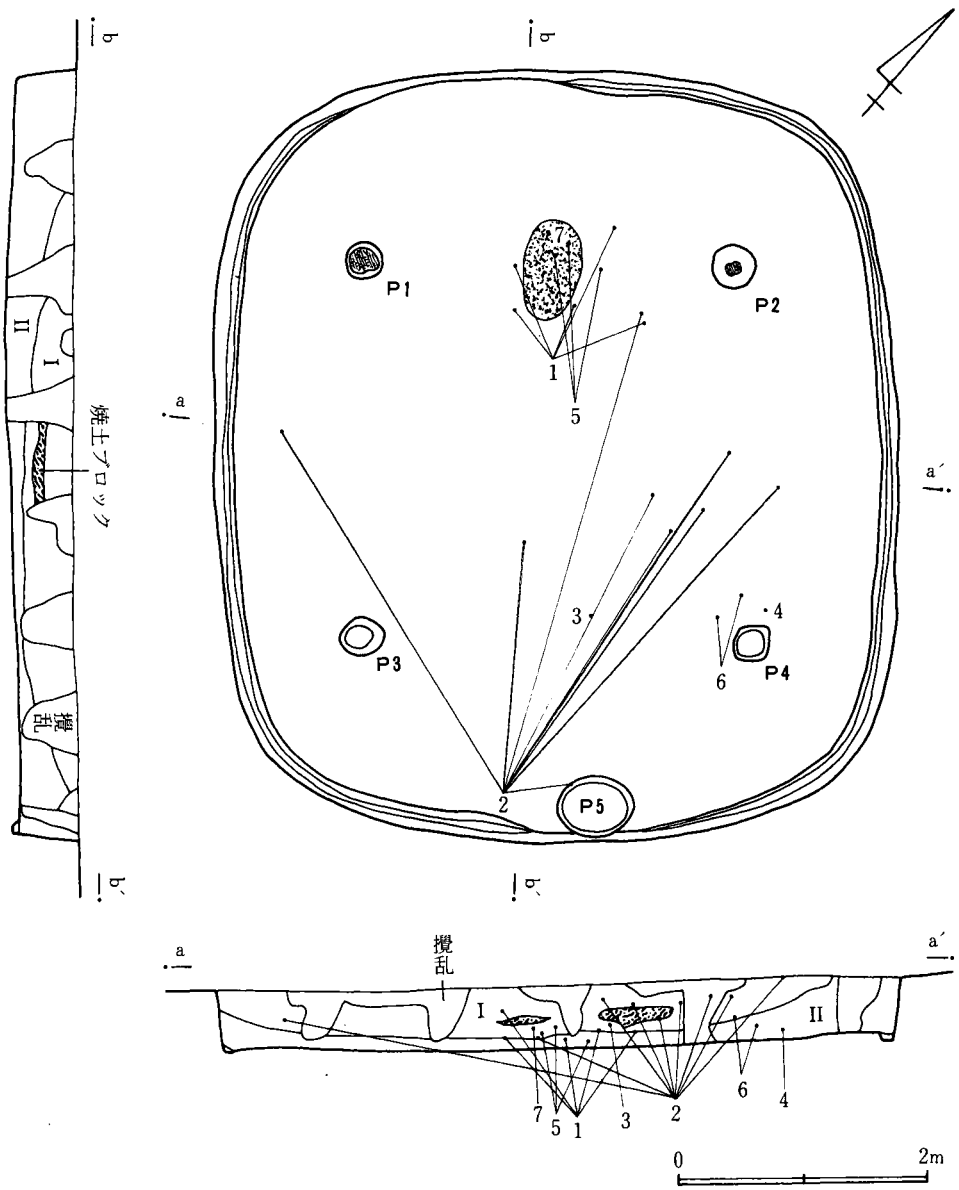


図124　D027号遺構実測図

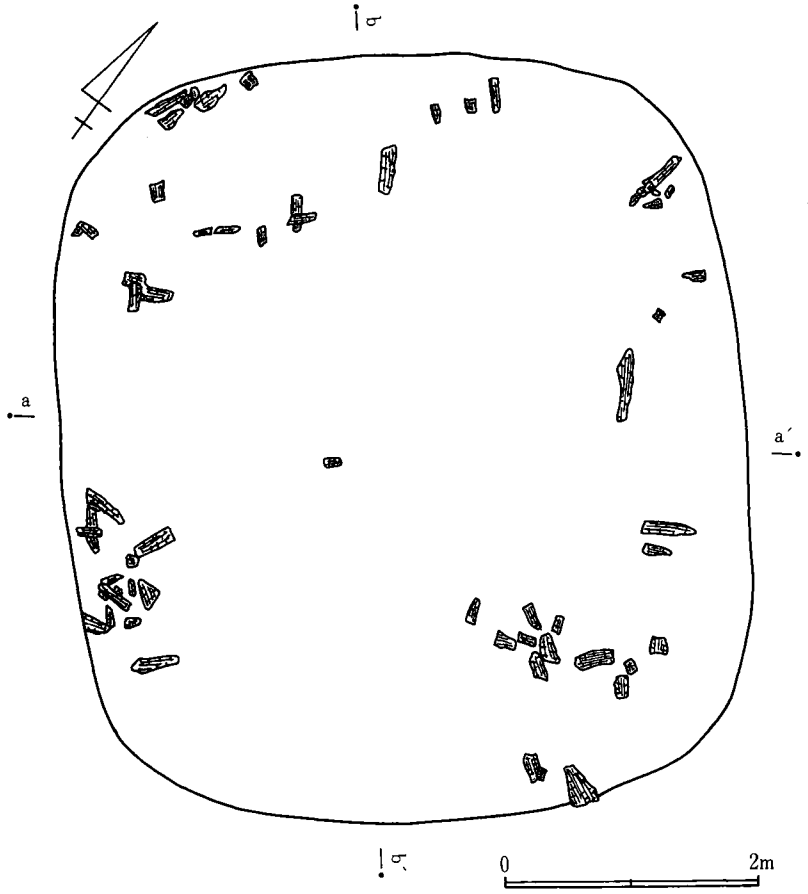


図125 D027号遺構炭化物出土状況図

て認められる。床面は平坦で、しかも堅緻な状況を呈しており、特に中央部では顕著である。床面の中央部を除いた壁際に炭化物、焼土塊を多量に検出した。柱穴はほぼ対角線上に配置されたP₁～P₄を検出した。径平均0.32m、深さ0.5mを計り、P₁、P₂には炭化した柱材が遺存している。また南壁に接して径0.6m、深さ0.13mを計るピットP₅を検出した。

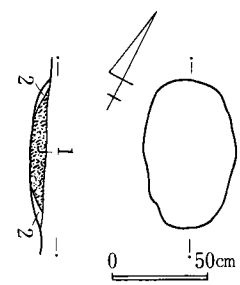


図126 D027号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

炉 北壁中央部に近く、P₁、P₂の間に位置して検出した。長径0.75m、短径0.5m、深さ0.08mを計る楕円形を呈するもので、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入茶褐色土層が堆積して、一部には焼土層も認められる。遺物は弥生後期から古墳前期にかけての遺物が、比較的遺存度が良く出土している。ほとんどがⅠ層下部からの出土である。

出土遺物　遺物は甕、高坏、鉢、壺形土器がある。甕形土器は1で口縁部が「く」字状に緩やかに外反する。高坏形土器は2でD001で出土した脚部と接合したものである。坏と脚部の接合部分に隆帯を有している。鉢形土器は3～6で波状口縁を呈する3、5がある。壺形土器は7の口縁部破片である。

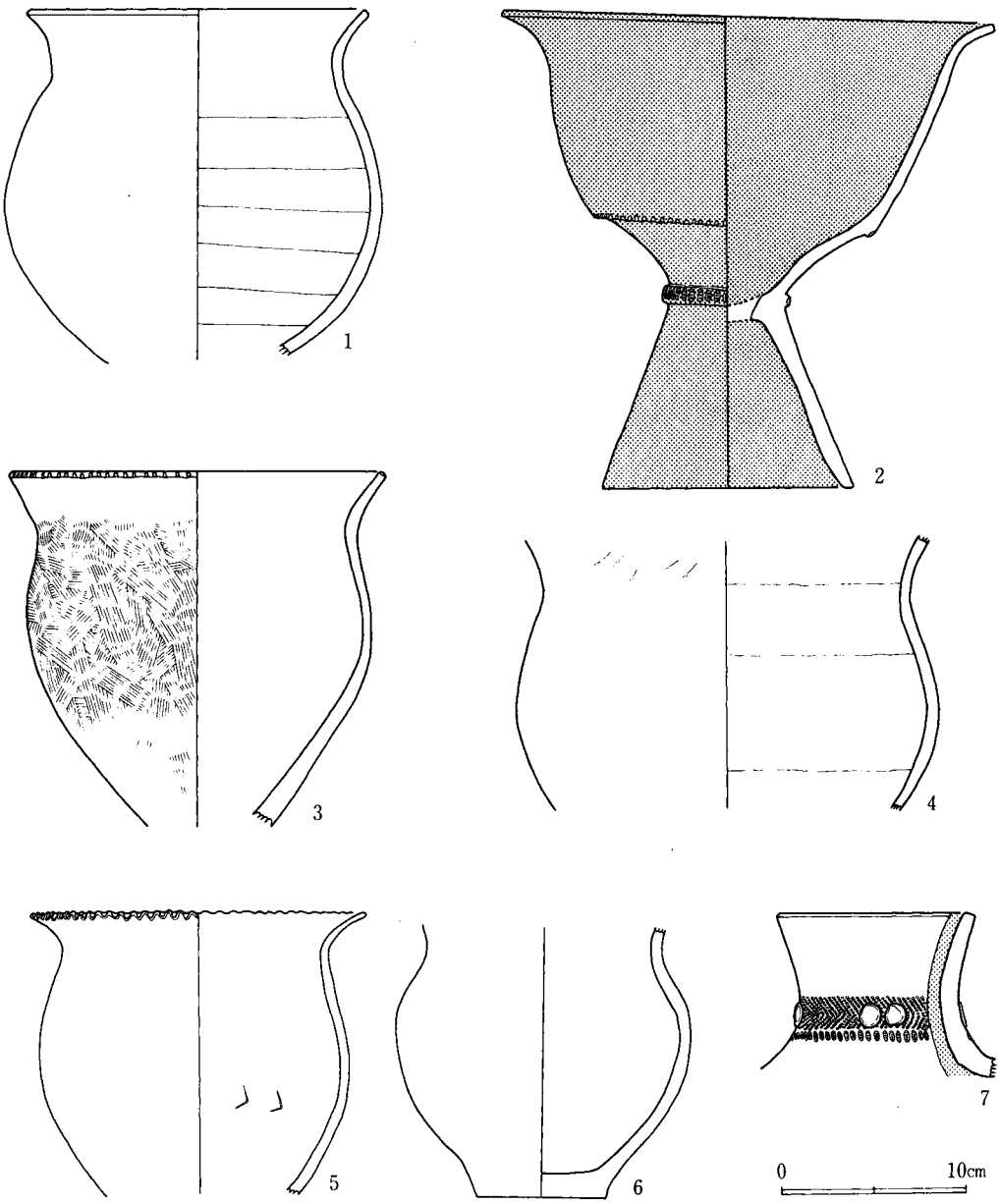


図127　D027号遺構出土遺物実測図

D027出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	13	17.8	—	底部欠損	外面ヘラナデ	小石	やや堅緻	明褐色	
2	高坏	25.3	26.4	14.0	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	暗赤色	内外面赤彩
3	鉢	13.0	18.9	—	底部欠損	外面 ハケ目 内面 ヘラナデ	——	やや堅緻	黄褐色	五領期
4	鉢	—	—	—	頸部と胴部	内外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	赤褐色	胴部下半二次的に火を受ける
5	鉢		18.0		底部欠損	内外面ヘラナデ	小石	やや堅緻	(内)黒褐色 (外)暗褐色	
6	鉢	—	—	,.0	口縁部欠損	内外面ヘラナデ	——	やや堅緻	暗赤褐色	
7	壺		10.6		口縁部と頸部	羽状縄文 円形浮文	砂粒	軟弱	褐色	内面赤彩

4．D028号遺構（図128～130、図版41－2）

I群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D030、D029が近接している。溝による攪乱を受けているため西側部分は破壊されている。

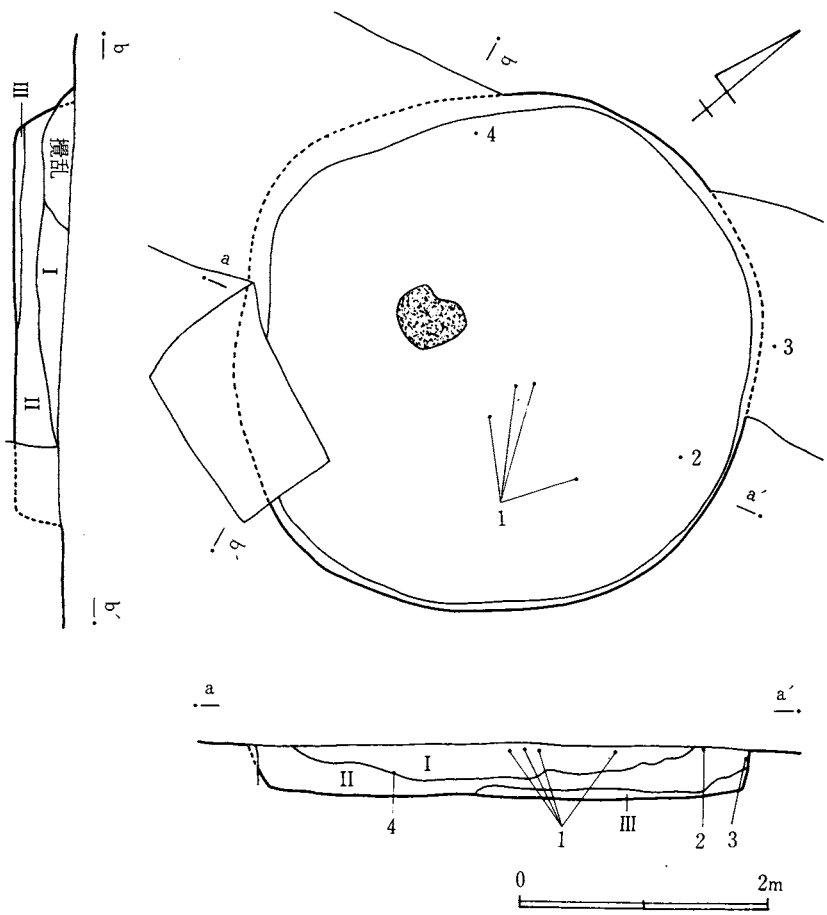


図128 D028号遺構実測図

遺構　長径4.32m、短径４ｍを計るほぼ円形に近い平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.4m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況を呈していない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

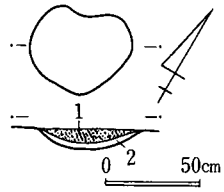


図129　D028号遺構炉跡実測図
1　焼土層
2　褐色土層

炉　住居中央部より西側に寄って位置している。長径0.55m、短径0.4m、深さ0.12mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入褐色土層が堆積している。住居跡に伴うと考えられるものは少なく、歴史時代の遺物が覆土上層より出土している。

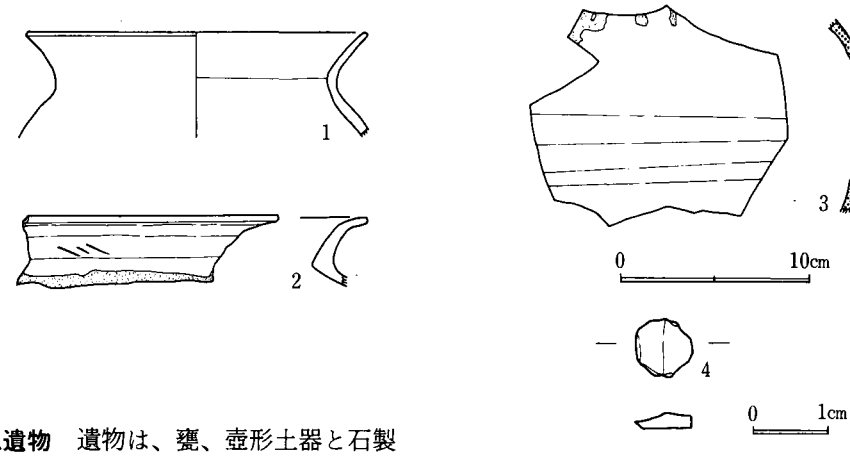


図130　D028号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器と石製品がある。甕形土器は１、２で、いずれも口縁部破片で、１は「く」字状に外反する口縁部を呈し、２は強く外反する口縁部の破片である。壺形土器は３で胴部の破片である。石製品は４で滑石製品の未成品である。弥生時代の遺物は１のみである。

D028出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	18.0	—	口縁部と頸部	ヨコナデ	小石	やや堅緻	暗褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	——	堅緻	褐色	
3	壺	—	—	—	胴部破片	ヘラ削り	——	堅緻	灰色	

５．D029号遺構（図131～135、図版41－３、42、49、50）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置しており、地区界に接している。D030、D028が

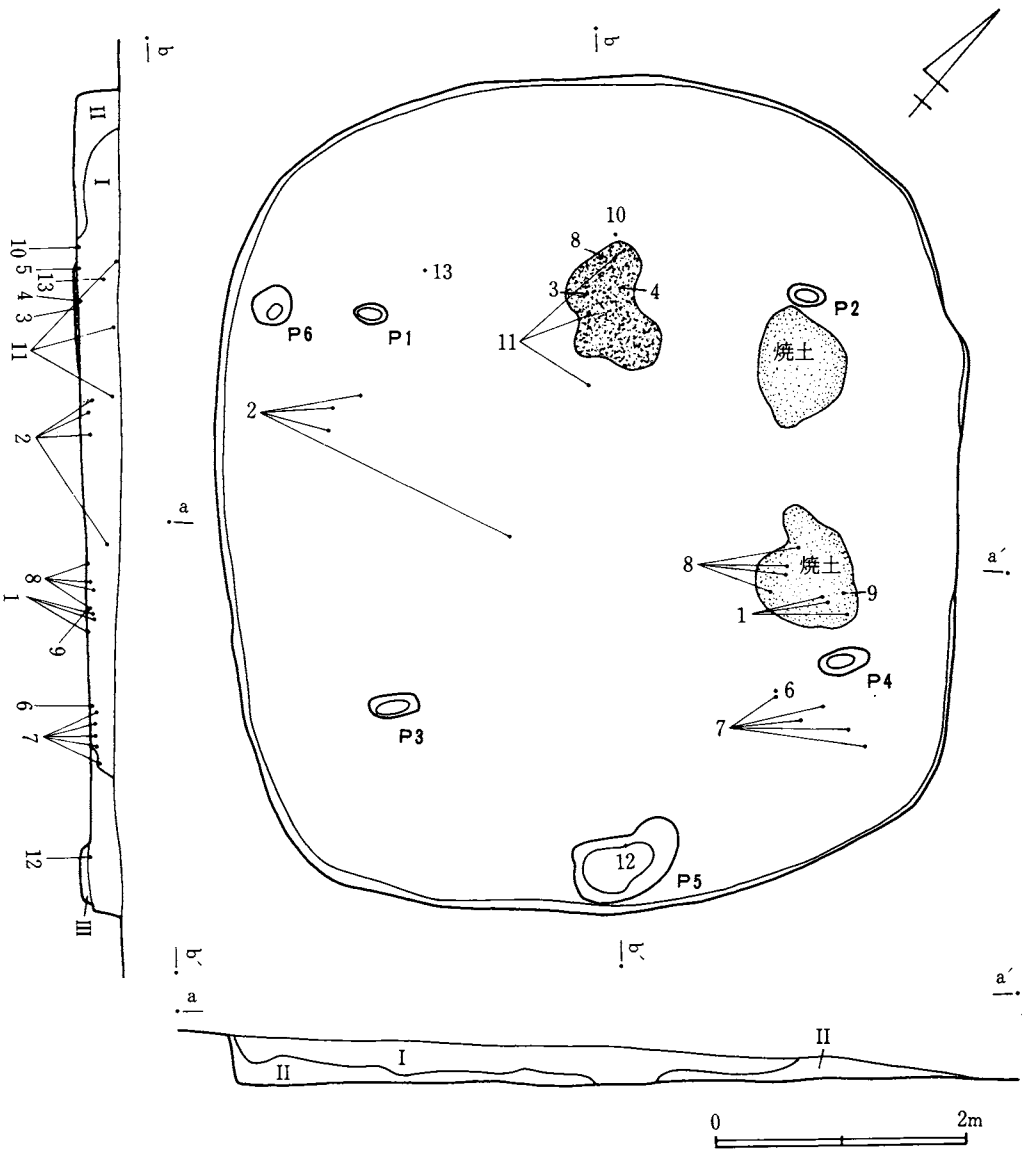


図131 D029号遺構実測図

近接している。東緩斜面上に構築される関係から東側の遺存状況はきわめて悪い。覆土を掘り下げ床面近くに至った段階で炭化物、焼土塊を多量に検出したため、本遺構が焼失した遺構であることが判明した。

遺構　長径6.6m、短径6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は遺存状況の良好な西側で、ほぼ垂直に0.2m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。壁際に近い床面上から炭化物を検出し、東側には床面が焼土化する部分を検出した。柱穴は対角線上より外側にずれて位置しており、P_1～P_4を検出した。柱穴は長径0.4m、短径0.18mを計る楕円形を呈し、深さ平均0.3mである。また南壁に接して長径0.85m、短径0.45m、深

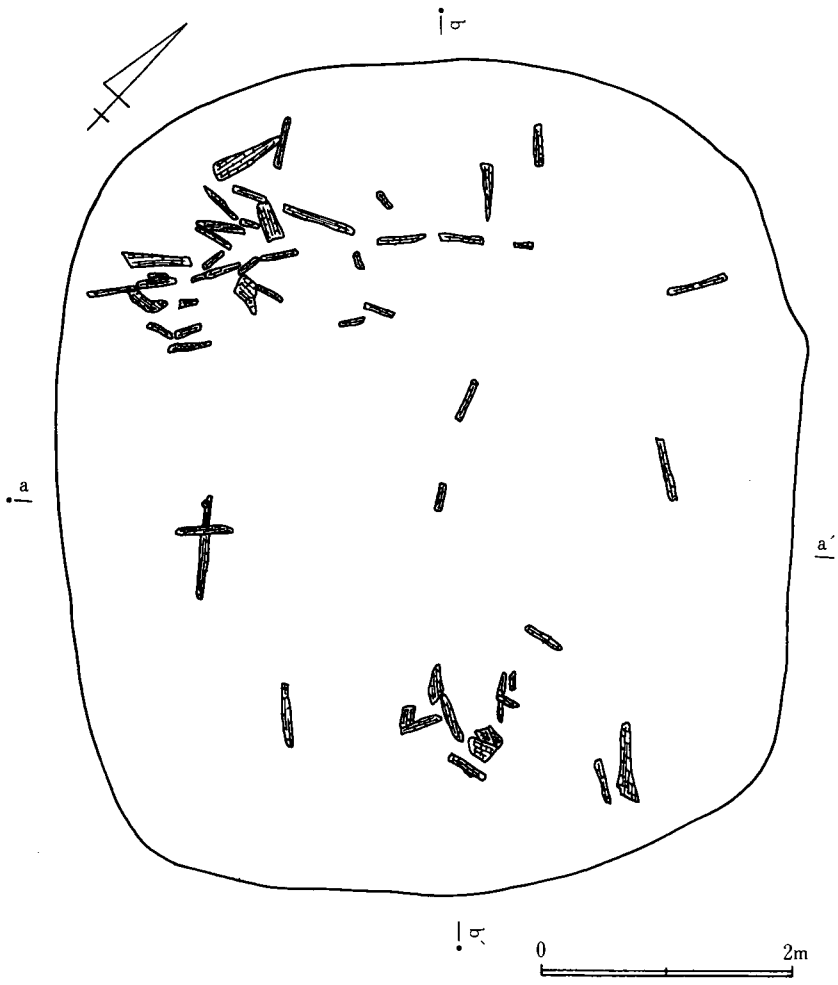


図132 D029号遺構炭化物出土状況図

さ0.1mを計る不整なピットを検出した。その他P_6を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉 北壁に近く、P_1、P_2の間に位置しており、長径1m、短径0.6m、深さ0.14mを計り、厚さ0.13mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入褐色土層が堆積しており、床面上から多くの遺物が出土した。特に炉周辺は多い。

出土遺物 Ⅰ群の住居群内において最も多くの遺物を出土した。遺物は、甕、台付甕、鉢、壺、高坏形土器、それに異形土器がある。甕形土器は1～6で、1は口縁部に縄

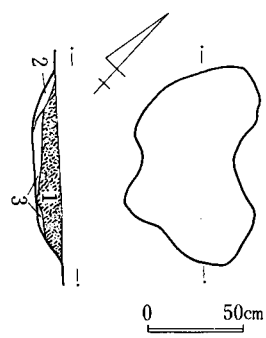


図133 D029号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層
3 赤褐色土層

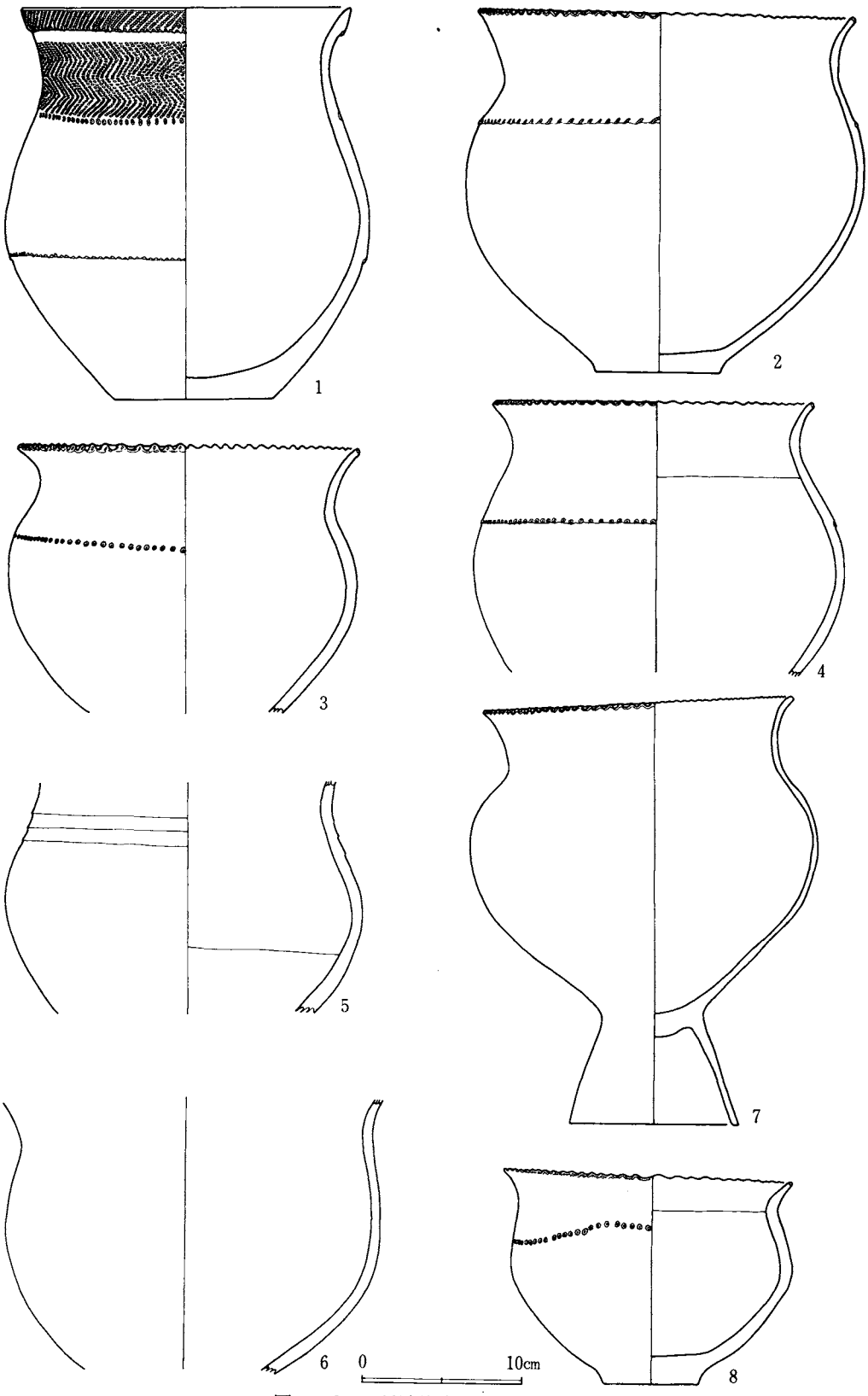


図134 D029号遺構出土遺物実測図(1)

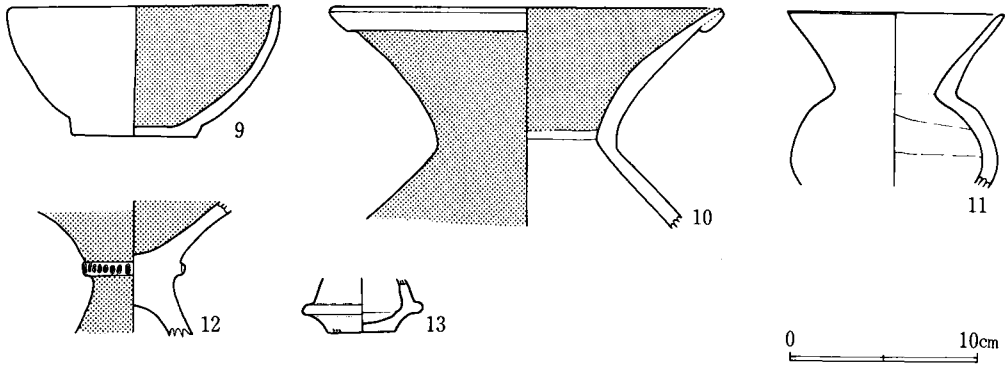


図135 D029号遺構出土遺物実測図(2)

文帯が認められる広口壺状の土器である。2～4は波状口縁を呈し輪積部分に刺突を加えている。5は輪積がそのまま残り装飾的なものとなっている。6には認められない。台付甕形土器は7で波状口縁を呈している。鉢形土器は8、9で、8は波状口縁を呈し、9は赤彩される。壺形土器は10、11で、10は複合口縁を呈し、11は坩に近い。高坏形土器は12で坏部と脚部の接合部の破片である。異形土器は13で手捏であるが丁寧な作りである。

D029出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	24.0	20.2	12.0	完形	羽状縄文 内外面ヘラナデ	――	堅緻	明褐色	
2	甕	22.4	22.8	8.0	略完形	縄文原体刻目 内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	胴部中位にスス付着
3	甕	16.2	21.0	―	2/3	竹管刺突文 内外面ヘラナデ	小石	堅緻	明褐色	胴部下半二次的に火を受ける
4	甕	―	20.0	―	2/3	竹管刺突文 内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗赤褐色	
5	甕	―	―	―	頸部と胴部	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
6	甕	―	―	―	頸部と胴部	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	(内)黒色 (外)暗褐色	
7	台付甕	26.0	19.4	10.6	2/3	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	五領期
8	鉢	13.0	12.4	6.0	2/3	竹管刺突文 内外面ヘラナデ	――	堅緻	(内)黄褐色 (外)赤褐色	胴部下半二次的に火を受ける
9	鉢	6.8	14.2	6.6	完形	内外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	明褐色	二次的に火を受けている、内面赤彩
10	壺	―	21.4	―	口縁部と頸部	外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	内外面赤彩
11	壺	9.4	11.4	―	1/3	内外面ヘラナデ	――	堅緻	明褐色	五領期
12	高坏	―	―	―	頸部破片	縄文原体刻目	――	堅緻	赤褐色	内外面赤彩
13	異形土器	―	―	3.4	略完形	手捏	――	やや堅緻	黒灰色	用途不明

6．D030号遺構（図136～140、図版43、50）

I群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D027、D029が近接している。覆土中に古墳時代中期第I群のピットが掘り込まれており、高坏形土器がこの部分より出土している。覆土

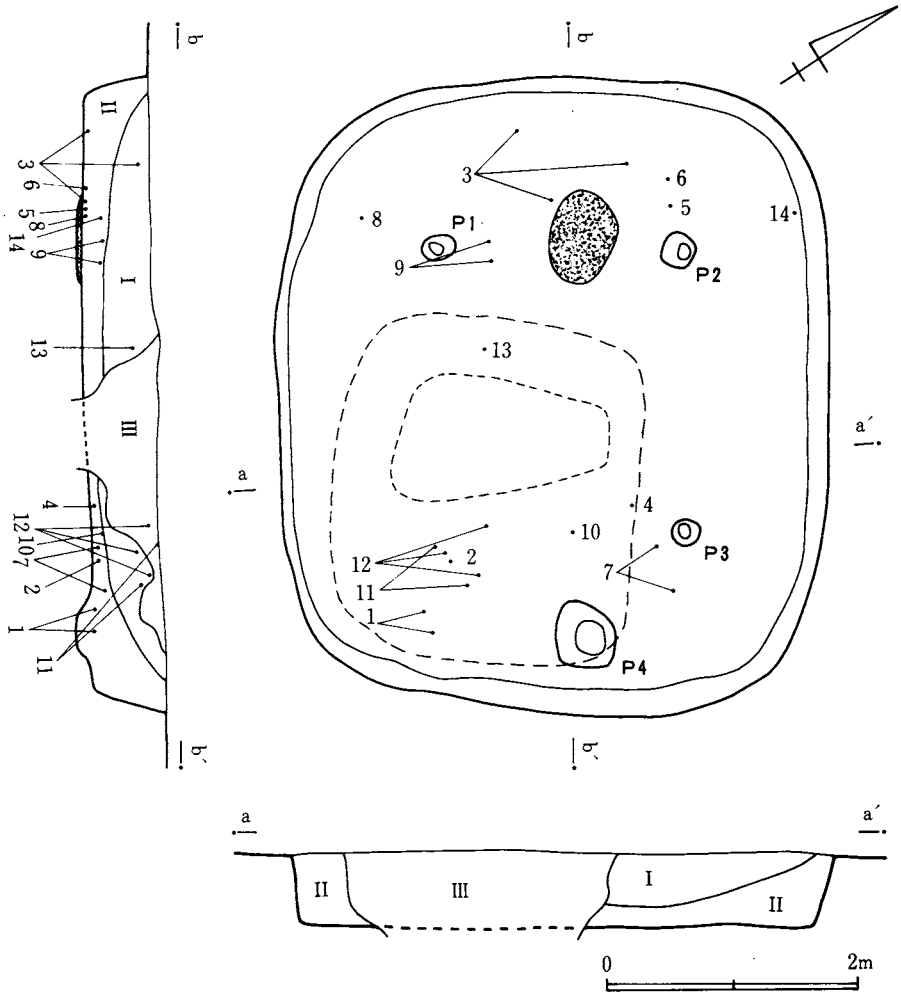


図136 D030号遺構実測図

を掘り下げ床面近くに達した段階で炭化物、焼土塊を検出した。よって本遺構が焼失した遺構であることが判明した。

遺構 長径5.08m、短径4.4mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈して0.6m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、特に中央部では顕著である。柱穴はほぼ対角線上に位置しており、P_1～P_3を検出した。南東部は古墳時代中期のピットにより破壊されており検出できなかった。柱穴は径平均0.28m、深さ平均0.6mを計るものである。また、南壁に接して径0.48m、深さ0.1mを計るピットP_4を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉 北壁中央部に近く、P_1、P_2の間に位置しており、長径0.73m、短径0.5m、深さ0.08mを計る楕円形を呈しており、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層茶褐色土層、III層ロームブロック混入茶褐色土層（古墳

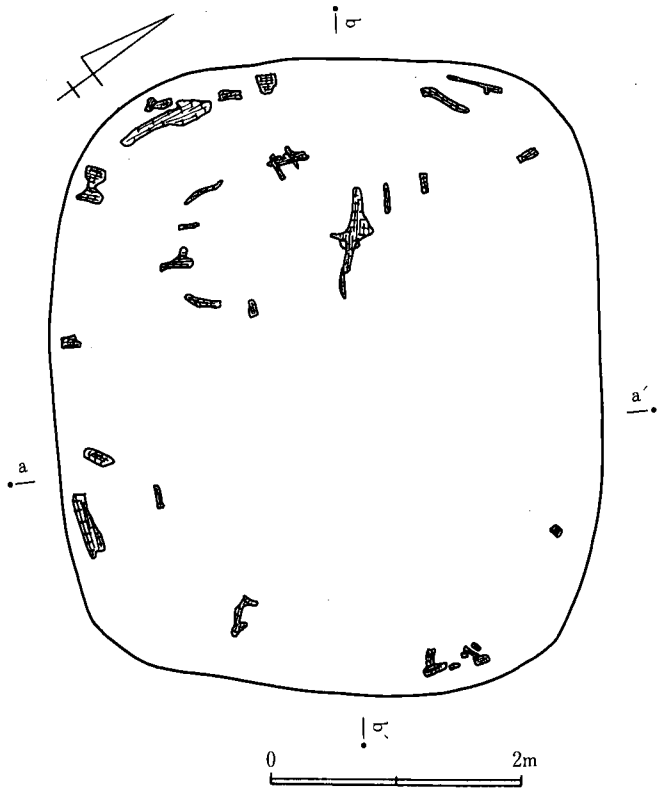


図137 D030号遺構炭化物出土状況図

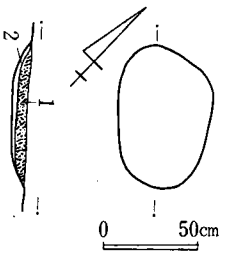


図138 D030号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

時代中期のピット覆土）が堆積しており、遺構は床面上を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺、鉢、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で1は口縁部に縄文帯があり広口壺に近い。2は口縁が緩やかに外反する。壺形土器は3～7で、4は口縁部を欠損するが完形に近い。3、5は口縁部、6、7は底部破片である。鉢形土器は8、9で体部が直線的に開くものである。坏形土器は10で小型なものである。高坏形土器は11、12で坏部の破片で、古墳時代中期のピットに伴うものである。石製品は13、14で、13は用途不明の軽石、14は砂岩製の砥石である。

D030出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	30.0	25.0	9.0	完形	羽状縄文 外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明灰褐色	胴部スス付着
2	甕	—	20.2	—	½	外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明褐色	
3	壺	—	14.6	—	口縁部と頸部	棒状浮文、円形浮文、S字結節文	砂粒	堅緻	暗褐色	
4	壺	—	—	7.2	口縁部を欠損	羽状縄文 内外面ヘラナデ	小石	やや軟弱	明褐色	内外面赤彩
5	壺	—	27.2	—	口縁部と頸部	羽状縄文、棒状浮文、S字結節文	小石	やや軟弱	赤褐色	内外面赤彩

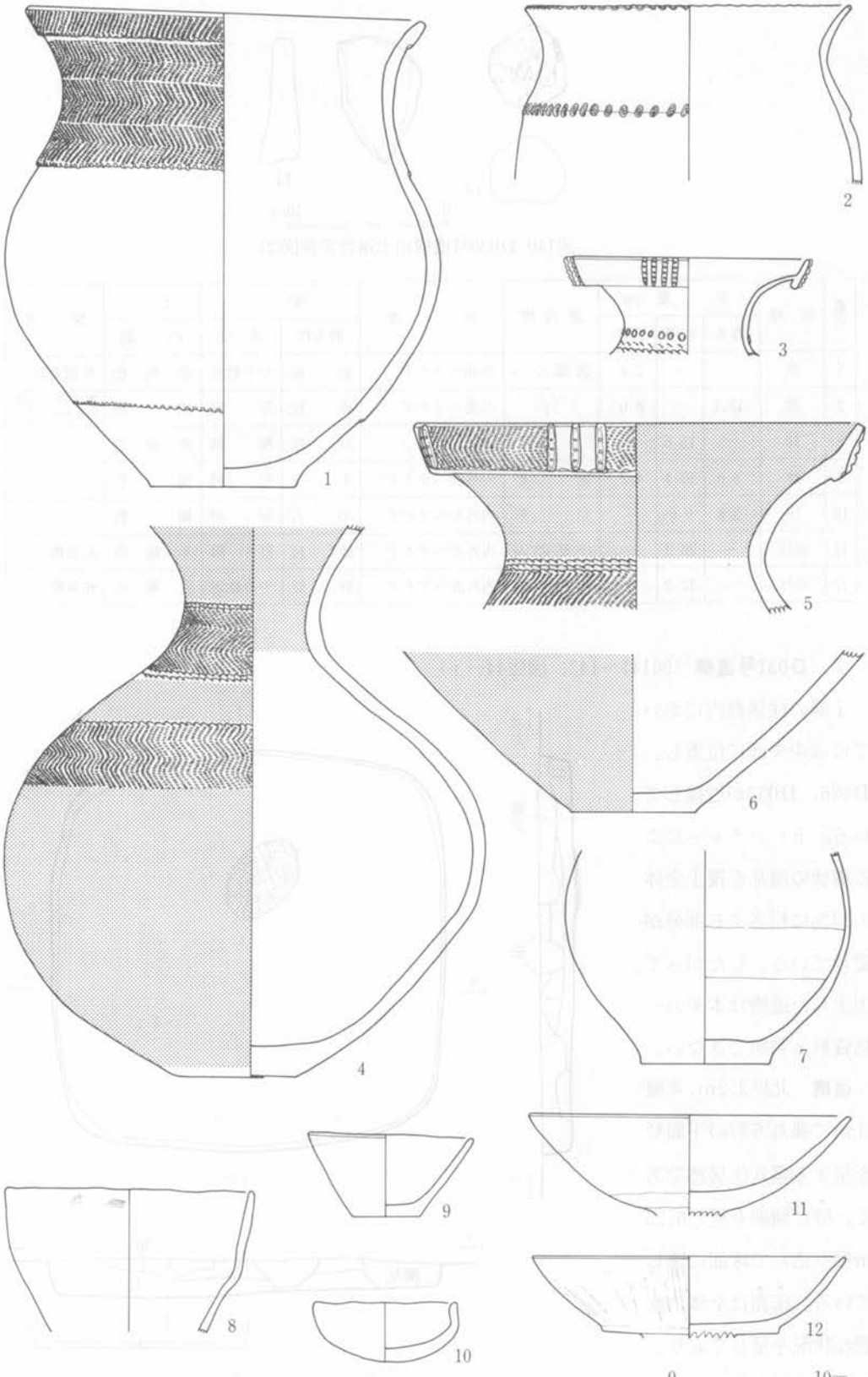


図139 D030号遺構出土遺物実測図(1)

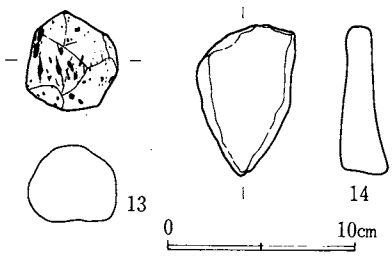


図140 D030号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	壺	—	—	7.8	底部のみ	外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	赤褐色	外面赤彩
7	壺	13.2	—	8.0	½	外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	胴部下半二次的に火を受ける
8	鉢	—	15.6	—	½	内面ハケ目 外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
9	鉢	3.0	10.1	4.2	完形	内外面ヘラナデ	小石	堅緻	褐色	
10	坏	3.8	9.0	—	完形	内外面ヘラナデ	小石	堅緻	褐色	
11	高坏	—	20.2	—	坏部のみ	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	和泉期
12	高坏	—	27.2	—	坏部のみ	内外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	乳褐色	和泉期

7．D031号遺構（図141～143、図版44－1）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D026、D033が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を覆土全体の34%に相当する部分が受けている。したがって、出土した遺物は本来の一括資料と判断できない。

遺構　北壁3.2m、東壁3mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.25m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈しており、踏み固められていない。

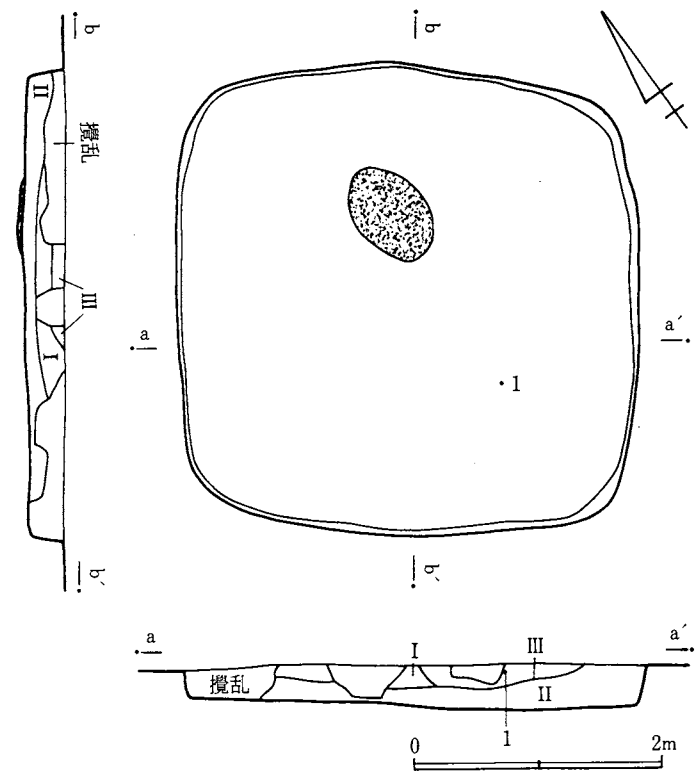


図141 D031号遺構実測図

柱穴、壁溝等は検出できなかった。

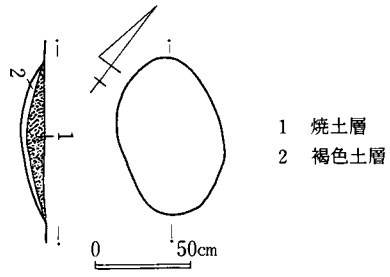


図142 D031号遺構炉跡実測図

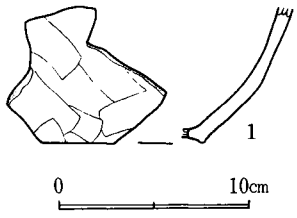


図143 D031号遺構出土遺物実測図

炉 北壁中央部に近く位置している。長径0.82m、短径0.55m、深さ0.13mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入褐色土層が堆積している。遺物は稀少であり、出土位置も覆土上層である。

出土遺物 遺物は稀少で図示できるものは1点のみである。甕形土器底部破片でヘラ削り調整が認められる。時期は不明である。

D031出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	底部破片	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	明褐色	

8．D033号遺構（図144～146、図版44－2）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D031、D036が近接している。一部芋穴の攪乱を受けている。

遺構 北壁3.3m、東壁3.2mで隅丸方形の平面形を呈している。壁はほぼ垂直に0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉 西壁中央部に近く位置している。長径0.65m、短径0.5m、深さ0.06mを計り、厚さ0.6mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層ロームブロック混入黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入褐色土層が堆積している。遺物の出土は稀少で、しかも出土位置は上層である。

出土遺物 遺物は稀少で図示できるものは1点のみである。壺形土器底部の破片で縄文帯が認められる。

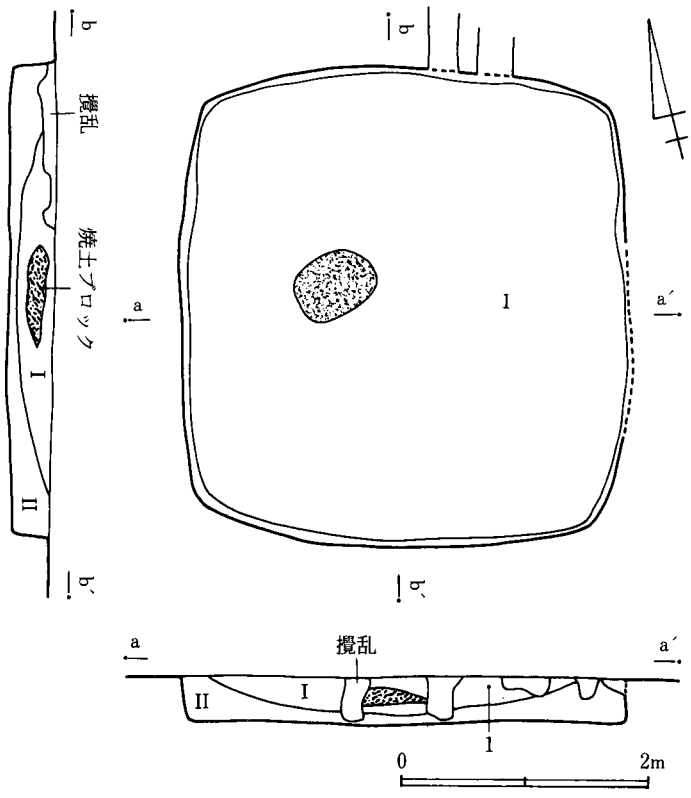


図144 D033号遺構実測図

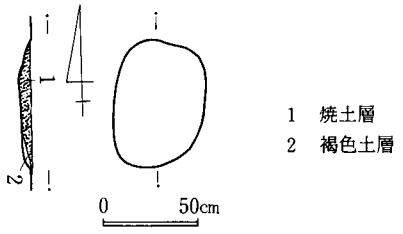


図145 D033号遺構炉跡実測図

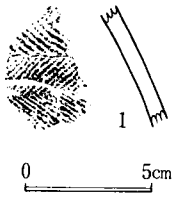


図146 D033号遺構出土遺物実測図

D033出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	頸部細片	羽状縄文	小石	軟弱	茶褐色	

9．D036号遺構（図147～149、図版44－3）

I群の住居群内においてほぼ中央部より北に寄って位置し、D033、D037が近接している。一部芋穴による攪乱を受けている。

遺構　長径4.6m、短径4.2mで楕円形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.44

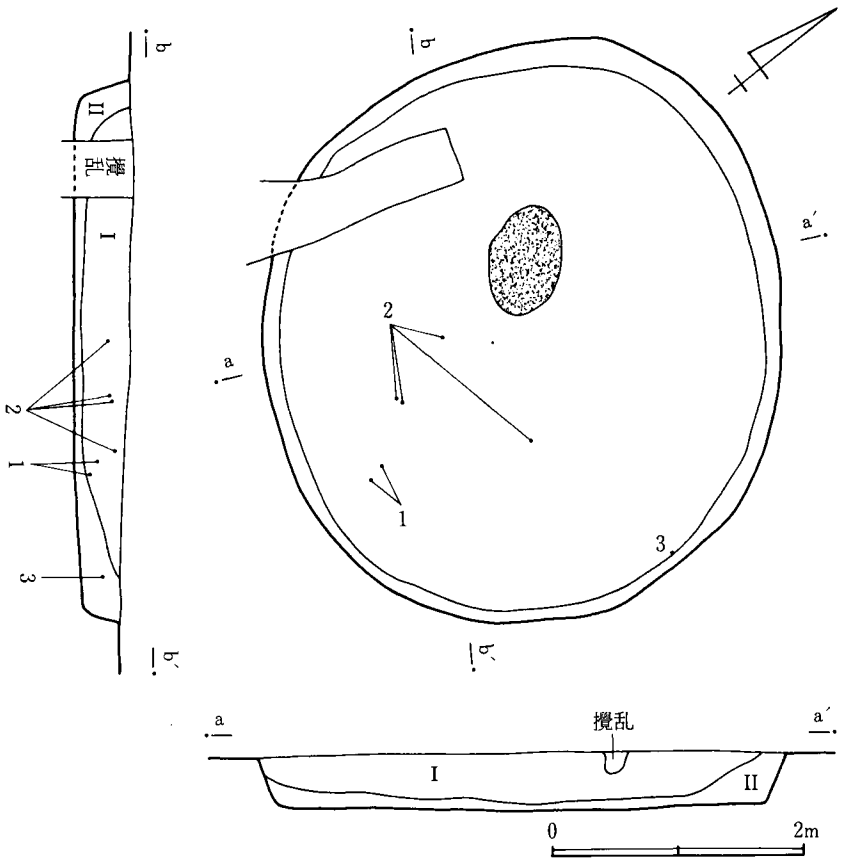


図147 D036号遺構実測図

m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況でない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北西側に寄って位置している。長径0.78m、短径0.58m、深さ0.1mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中層部より出土している。

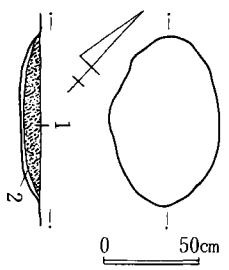


図148 D036号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

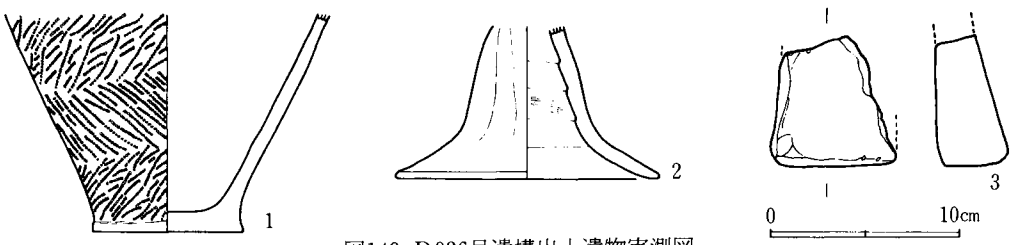


図149 D036号遺構出土遺物実測図

遺物は少ない。

出土遺物　遺物は、甕、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1で附加縄文が施されている底部である。高坏形土器は2で、脚部の破片である。石製品は3で砂岩製の砥石である。2は古墳時代中期の土器である。

D036出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	7.8	底部のみ	羽状附加条縄文	小石	堅緻	暗褐色	胴部にスス付着
2	高坏	—	—	13.6	脚部のみ	外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	明褐色	

10. D037号遺構（図150～152、図版45－1）

I群の住居群内においてほぼ中央より北側に寄って位置している。D036が近接する。遺構は東斜面上に構築されている関係で、遺構の東側部分は自然崩壊している。また西側は溝による攪乱を受けているためきわめて遺存状況の悪い遺構である。

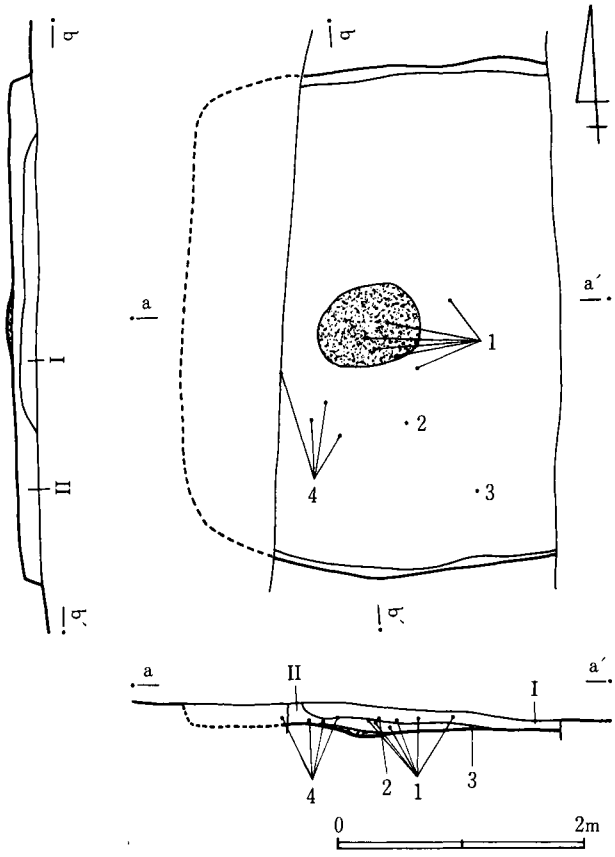


図150　D037号遺構実測図

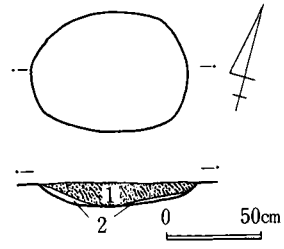


図151　D037号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層

遺構　攪乱等を受けている関係で規模は不明であるが、一辺４ｍを計る方形の平面形を呈する竪穴住居跡と推定できる。遺存する壁の掘り込みは傾斜をもっており、深さ0.16mを計る。床面は遺存する部分は堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より西側に寄って位置するものと思われる。長径0.82m、短径0.64m、深さ0.12mを計り、厚さ0.12mの焼土が堆積している。

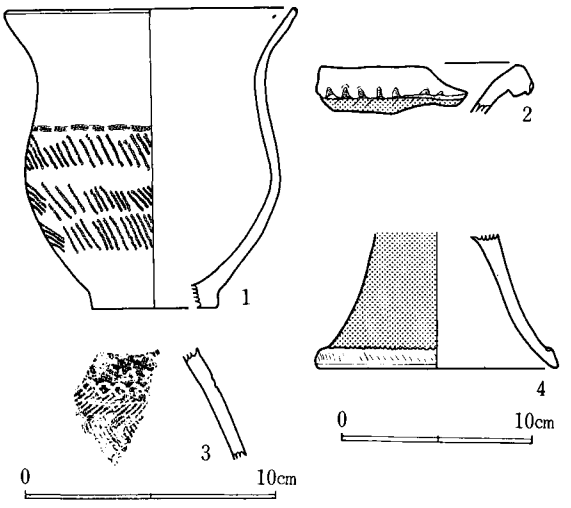


図152　D037号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しており、遺物は炉の周辺などから出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、高坏形土器がある。甕形土器は１で底部を欠損している。壺形土器は２、３でいずれも破片である。高坏形土器は４で脚部破片である。

D037出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	15.8	15.2	6.7	1/3	頸部ヘラナデ 胴部附加条縄文	小石	堅緻	(内)灰褐色 (外)黒褐色	
2	壺	—	—	—	口縁部破片	——	——	軟弱	茶褐色	赤彩
3	壺	—	—	—	胴部破片	S字状結節文 羽状縄文	——	堅緻	灰褐色	赤彩
4	高坏	—	—	12.2	脚台部のみ	ヘラ磨き	雲母	堅緻	灰褐色	赤彩

11. D038号遺構（図153～155、図版45－２）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部より北側に位置し、D037が近接している。一部芋穴による攪乱を受けている。

遺構　北壁3.8m、東壁3.5mで隅丸方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.18m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況は認められない。柱穴、壁溝は認められない。

炉　西壁中央部に近く位置している。長径0.55m、短径0.55m、深さ0.15mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　ローム粒混入褐色土層の単一層である。遺物の出土は稀少である。

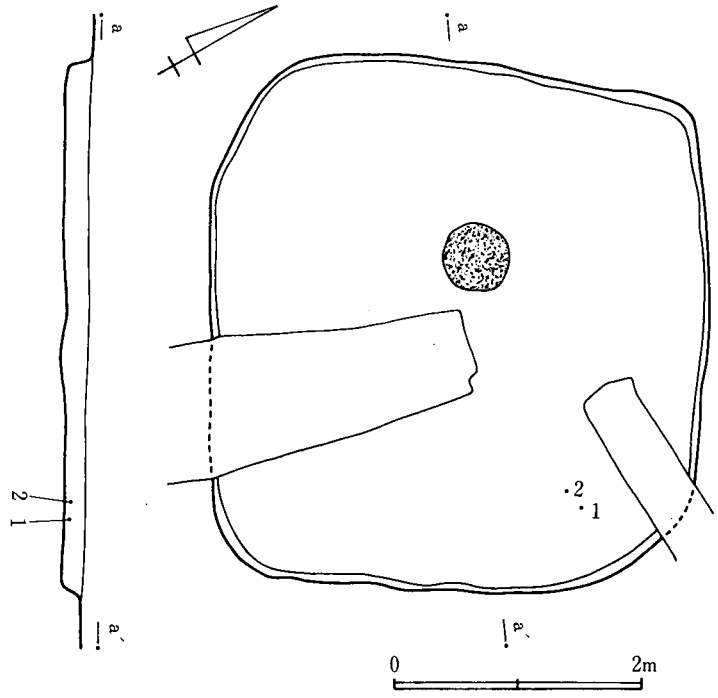
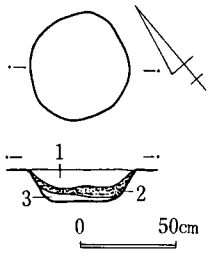


図153 D038号遺構実測図



1 焼土混入黒色土層
2 焼土層
3 赤褐色土層

図154 D038号遺構炉跡実測図

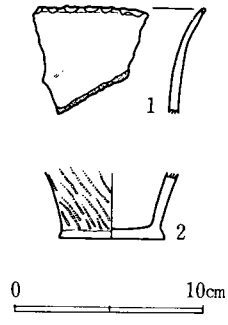


図155 D038号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、鉢、甕形土器がある。鉢形土器は1で波状口縁を呈している深鉢である。甕形土器は2の附加条縄文が施される底部の破片である。

D038出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	5.5	底部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕

12. D039号遺構（図156～159、図版45－3）

I群の住居群内において北側に位置し、D038、D040が近接している。遺構は地区界沿に通る公道によって破壊されている。また遺構の中央部は溝による攪乱を受けている。攪乱は覆土の17%に相当する。

遺構　長径4.72m、短径4.2mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.52m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上特に西側部分に炭化物を検出した。よって焼失した住居と考えられる。柱穴、壁溝は検出できなかった。

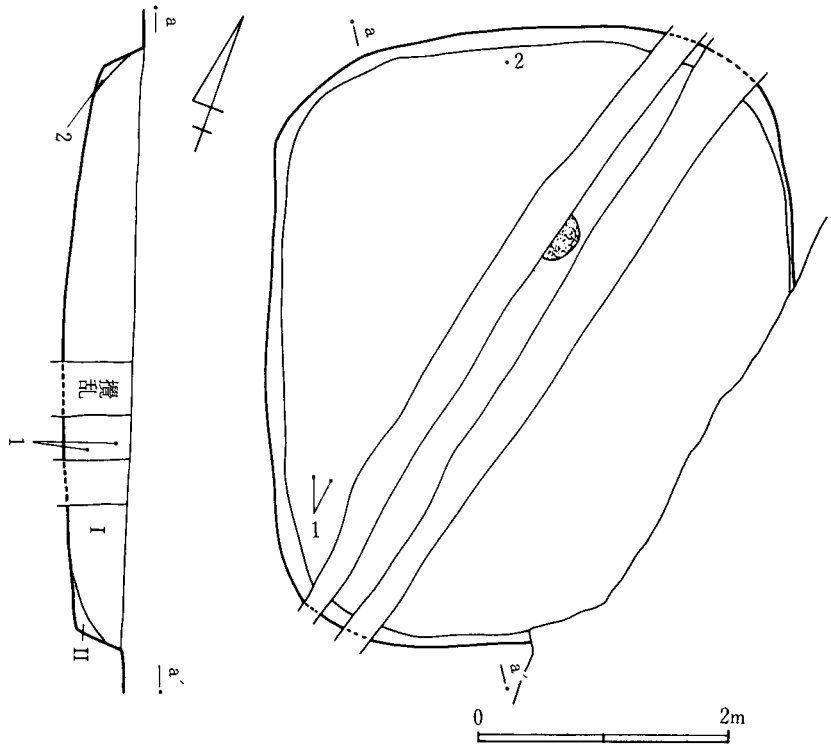


図156　D039号遺構実測図

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。溝による攪乱を受けているため遺存状況は悪く、全体については不分明である。

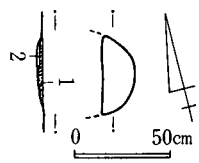


図157　D039号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層が堆積している。遺物の出土は他の焼失住居に比べ稀少であり、覆土中層から出土している。

出土遺物　遺物は、鉢形土器と土製品がある。鉢形土器

は1で体部は直線的である。土製品は2の紡錘具である。径 6.7 cm、厚さ 1.3 cm を計り、中央に 1 cm の軸孔があく。重さ53.8ｇである。胎土、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈す。

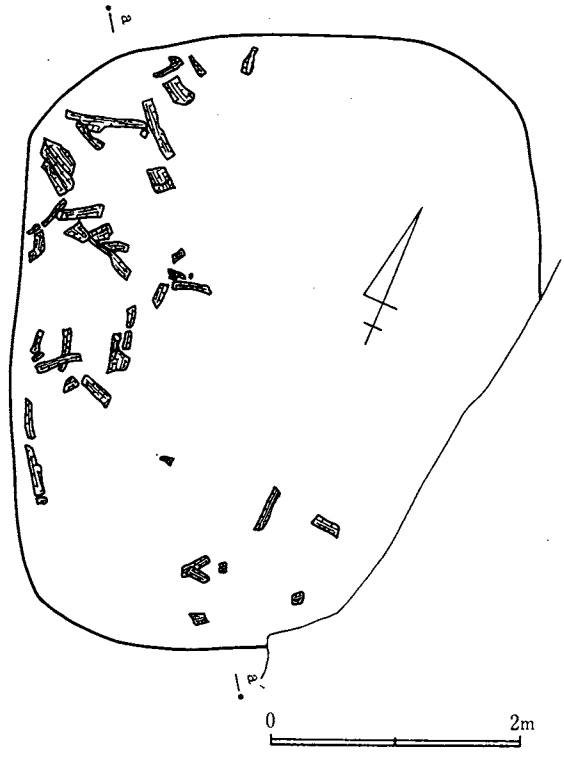


図158 D039号遺構炭化物出土状況図

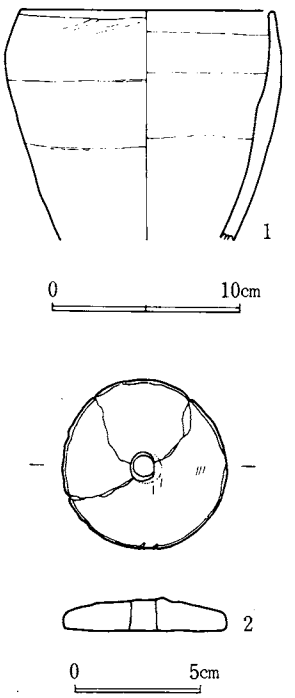


図159 D039号遺構出土遺物実測図

D039出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	—	13.4	—	2/3	軽いヘラナデ 輪積痕	小石	やや軟弱	(外)黒色 (内)灰褐色	

13. D040号遺構（図160、161、図版46—1）

Ⅰ群の住居群内において最も北側に位置している。D039、D038が近接する。遺構南東部分は溝による攪乱を受けている。

遺構 北壁2.6m、西壁2.7mで隅丸方形の平面形を呈している。壁は傾斜を呈し0.5m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉 北壁中央部に近く位置している。径0.28m、深さ0.06m、を計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

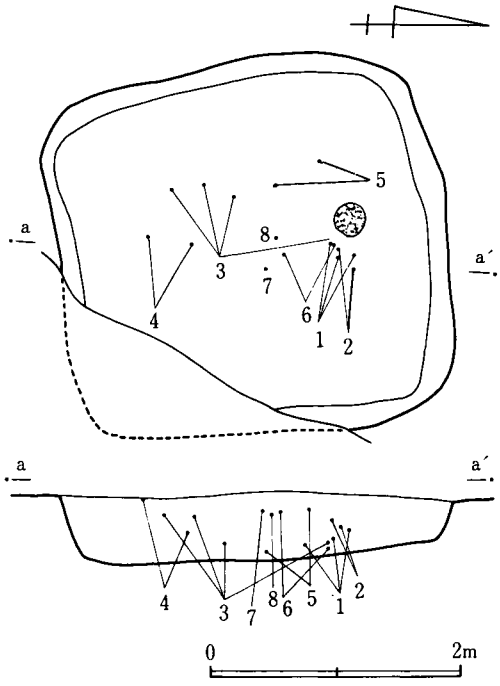


図160 D040号遺構実測図

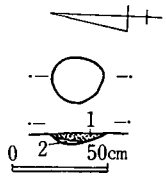


図161 D040号遺構炉跡実測図
1 焼土層
2 褐色土層

遺物出土状況 覆土は黒褐色土層の単一層で遺物はほとんど上層部の出土であり、歴史時代の遺物である。

出土遺物 歴史時代第IV群において記述する。

14. D044号遺構（図162、図版46—2）

I群の住居群内において最も北側に位置している。

遺構 北壁3m、東壁2.7mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝、それに炉は検出できなかった。はたして住居として機能した遺構であるか疑問がもたれる。

遺物出土状況 I層褐色土層。II層黒色土層、III層

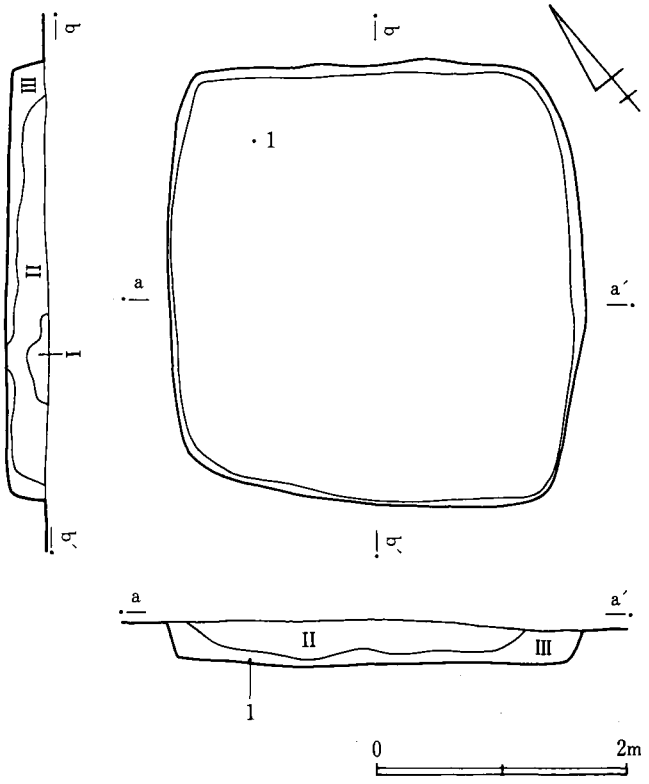


図162 D044号遺構実測図

黄褐色土層が堆積しており、遺物は床面に近く出土している。遺物は稀少で図示できるものは1点のみである。遺物は歴史時代のものである。

出土遺物　歴史時代第IV群において記述する。

15. D053号遺構（図163、164、図版46－3）

I群の住居群において南西部分に位置し、D069が近く近接している。「D」の呼称を用いて調査時に登録しているが住居跡ではない。

遺構　長径3.4m、短径2.7mで楕円形の平面形を呈する土壙である。3段に掘り込まれている。1段目は深さ0.6m、2段目は1m、3段目の底面までは1.1mを計る。3段目は溝状の掘

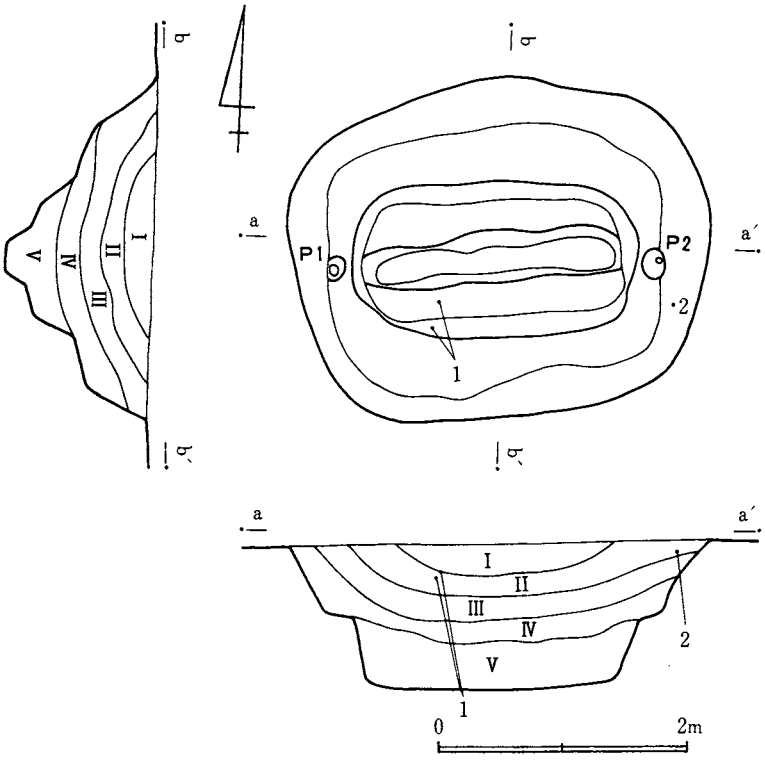


図163 D053号遺構実測図

り込みを呈している。2段目には径0.15m、深さ0.15mの小ピットP₁、P₂がある。墓壙としての性格を有する遺構と考えて差し支えないであろう。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗黄褐色土層、III層暗黒褐色土層、IV層暗茶褐

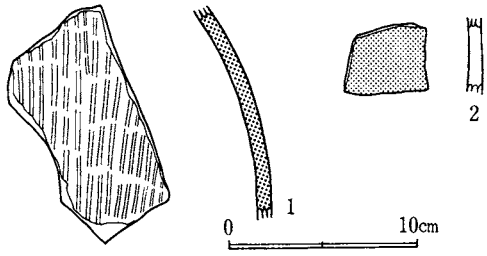


図164 D053号遺構出土遺物実測図

色土層、Ⅴ層黄褐色土層が堆積している。遺物は覆土上層より出土している。

出土遺物　遺物は稀少で図示できるのは2点のみである。1は叩き目がある甕形土器胴部破片である。2は細片である。1は歴史時代の遺物である。

D053出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	小石	堅緻	灰色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	ヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	

16. D069号遺構（図165、166、図版47－1）

Ⅰ群の住居群内において東側に位置し、D001、D094が近接している。十文字状の溝による攪乱を受けている。攪乱は覆土全体の24%におよんでいる。

遺構　北壁3.6m、東壁3.3mで歪を生じている隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡であ

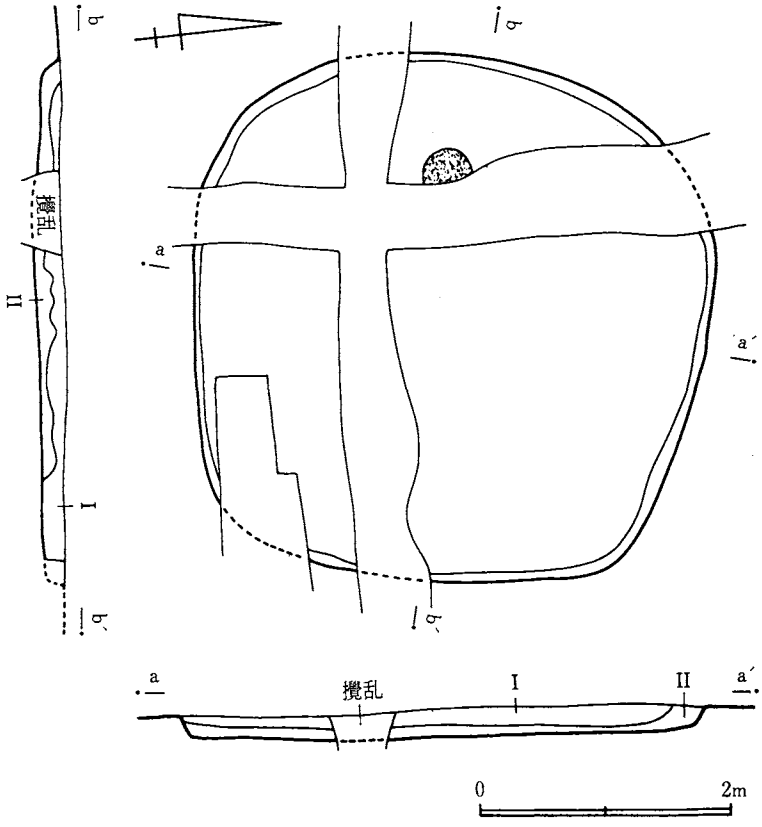


図165 D069号遺構実測図

る。壁は傾斜を呈し0.16m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より西側に寄って位置している。溝による攪乱を受けているため2分の1程度が破壊されており全体の規模は不明であるが、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

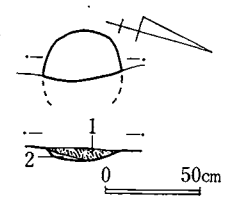


図166 D069号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層が堆積している。遺物は稀少で、図示できる遺物は皆無である。

17. D094号遺構（図167、168、図版47－2）

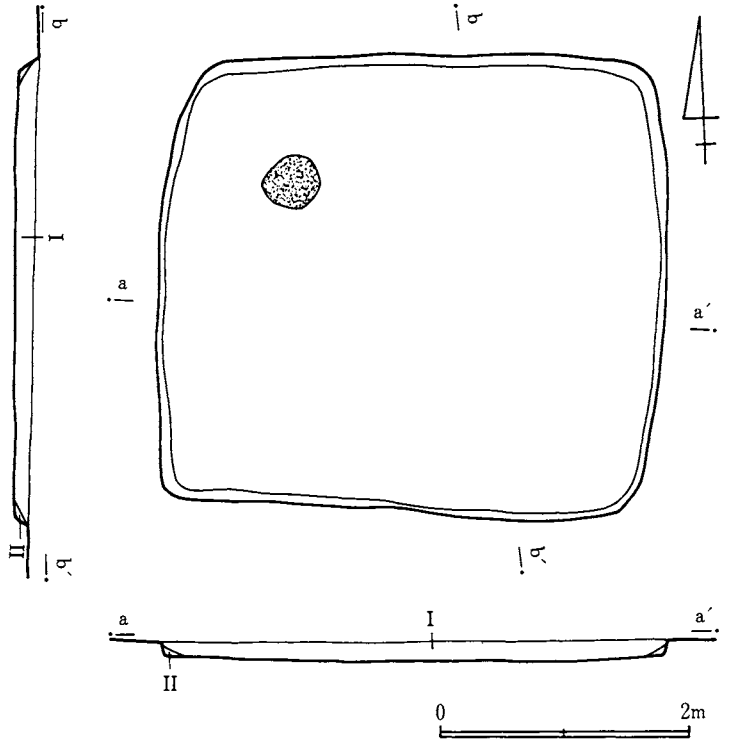
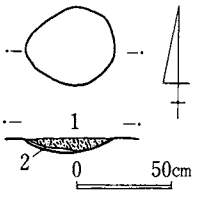


図167 D094号遺構実測図

I群の住居群内において東側に位置し、D001、D069が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱や、芋穴による攪乱を受けている。

遺構　北壁4.04m、北壁3.6mで方形の平



1　焼土層
2　褐色土層

図168 D094号遺構炉跡実測図

面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.2m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　北西壁コーナーに近く位置している。長径0.48m、短径0.4m、深さ0.08mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黄褐色土層が堆積している。遺物は稀少で図示できるものはない。

18. D185号遺構（図169、170、図版47－3）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D027、D028が近接している。東西に連なる溝によって北側部分が攪乱を受けている。攪乱は覆土全体の50%におよんでいる。

遺構　北壁推定3.5m、西壁推定3.1mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡であると推定できる。壁は傾斜を呈して0.21m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈

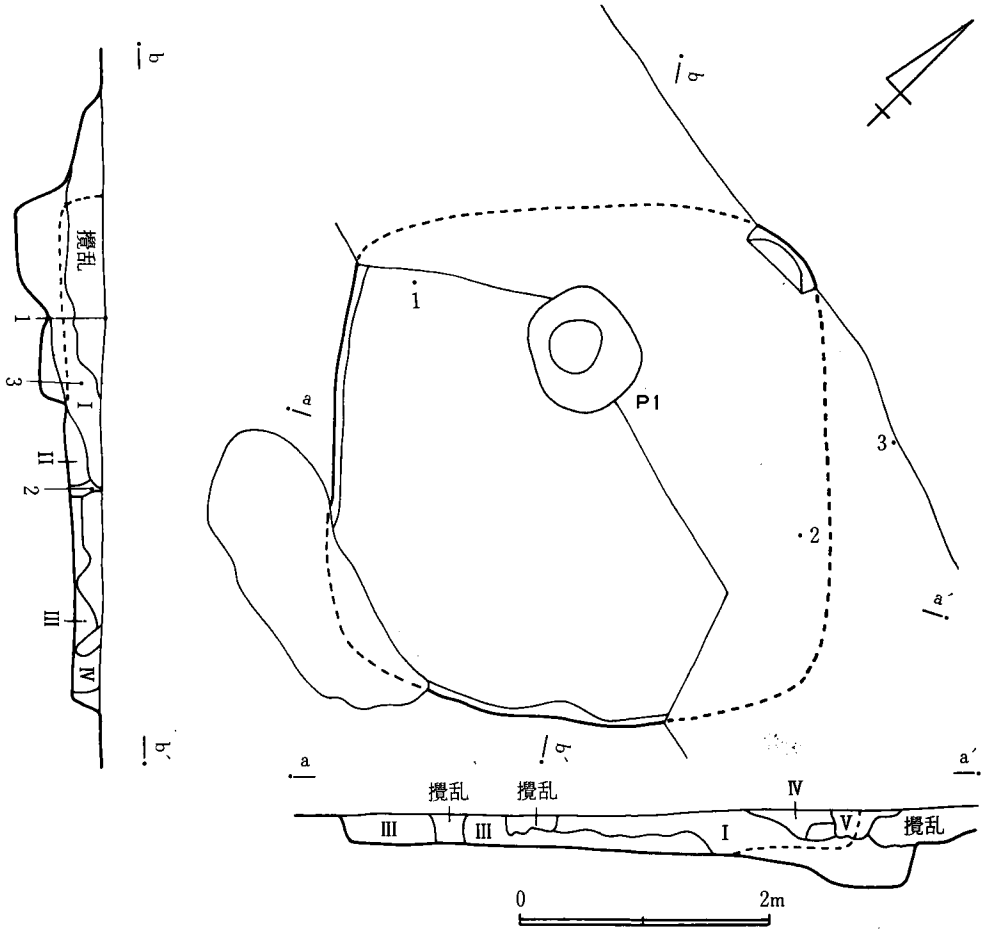


図169 D185号遺構実測図

しており踏み固められた痕跡はない。住居中央部より北側に寄って径0.88m、深さ0.3mを計るピットP₁を検出した。柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅳ黒色土層、Ⅴ層暗褐色土層が堆積している。住居の覆土はⅡ、Ⅲ層である。遺物の出土は稀少で住居に伴う遺物も少ない。

出土遺物　遺物は、壺形土器と石製品である。壺形土器は1、2で、いずれも胴部破片である。石製品は3で砂岩製の砥石である。

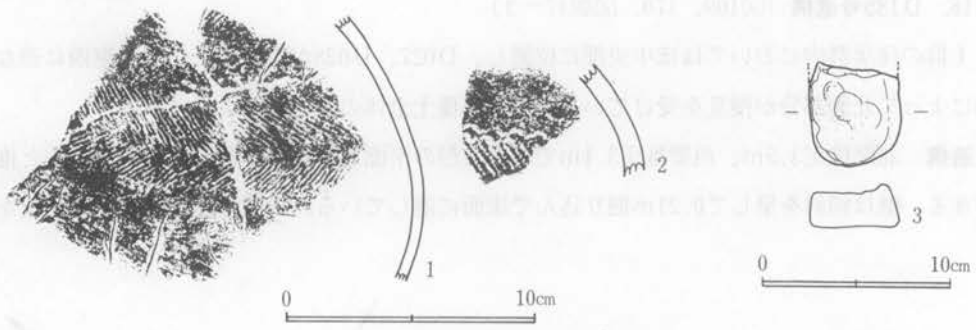


図170　D185号遺構出土遺物実測図

D185出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	胴部破片	羽状縄文 ヘラ磨き	——	やや堅緻	赤褐色	赤彩
2	壺	—	—	—	胴部破片	S字状結節文 附加条縄文	小石	やや堅緻	茶褐色	

19. D186号遺構（図171～173、図版48－1）

Ⅰ群の住居群内において南側に位置し、D185、D187が近接している。南北に連なる溝によって遺構のほぼ中央部が攪乱されている。

遺構　長径4.24m、短径3.8mで楕円形の平面形を呈す竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んで床面に達している。床面は全体にやや軟弱な状況であるが、中央部は若干堅緻である。柱穴はほぼ対角線上に配置しておりP₁～P₄を検出した。径平均0.4m、深さ平均0.62mを計る。また南壁に近くP₅、P₆を検出した。P₅は傾斜をもって掘り込んでおり、径0.35m、深さ0.25mを計る。P₆は長径0.55m、短径0.25m、深さ0.12mを計る。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く、P₁、P₂の間に検出した。長径0.48m、短径0.4m、深さ0.08mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積する。またP₃に近く径0.25m、焼土の厚さ0.03mを計る範囲を検出した。

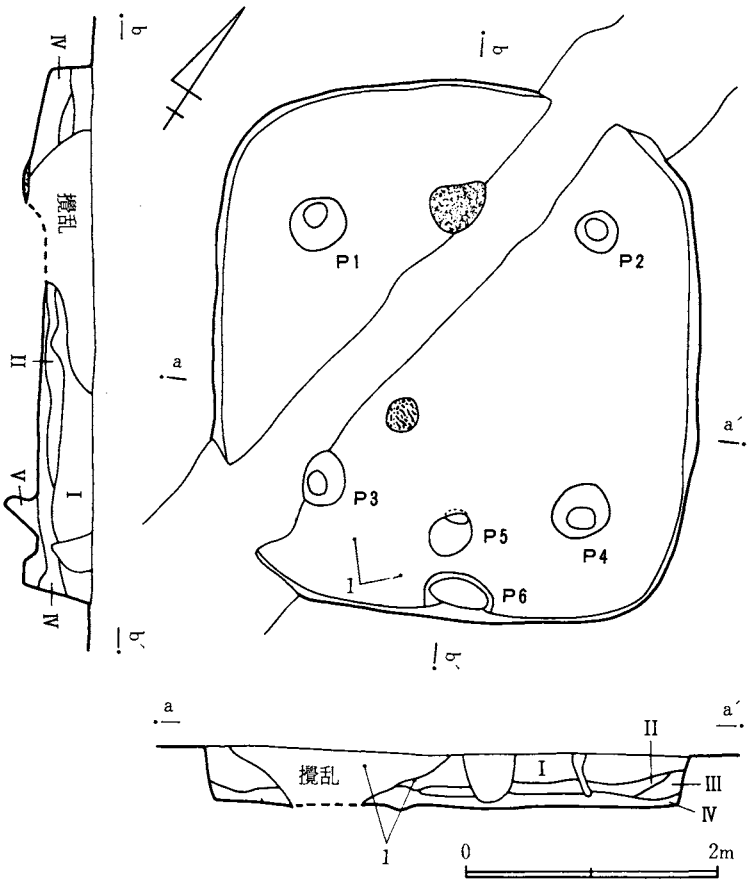


図171 D186号遺構実測図

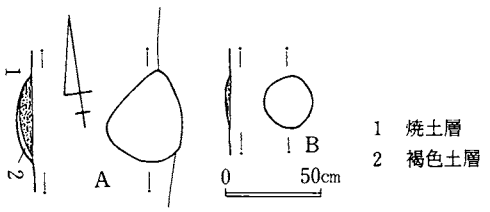


図172 D186号遺構炉跡実測図

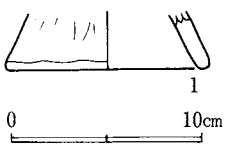


図173 D186号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層暗茶褐色土層、V層褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中層部分より出土している。

出土遺物　遺物は稀少で図示できる遺物は1点のみで、高坏もしくは器台形土器の脚部である。破片であるため特徴が捉えられない。

D186出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	—	10.4	脚部細片	ヘラナデ	小石	軟弱	黒褐色	

20. D187号遺構（図174～176、図版48－2）

Ⅰ群の住居群内において最も南に位置し、D187が近接している。芋穴による攪乱を受けている。

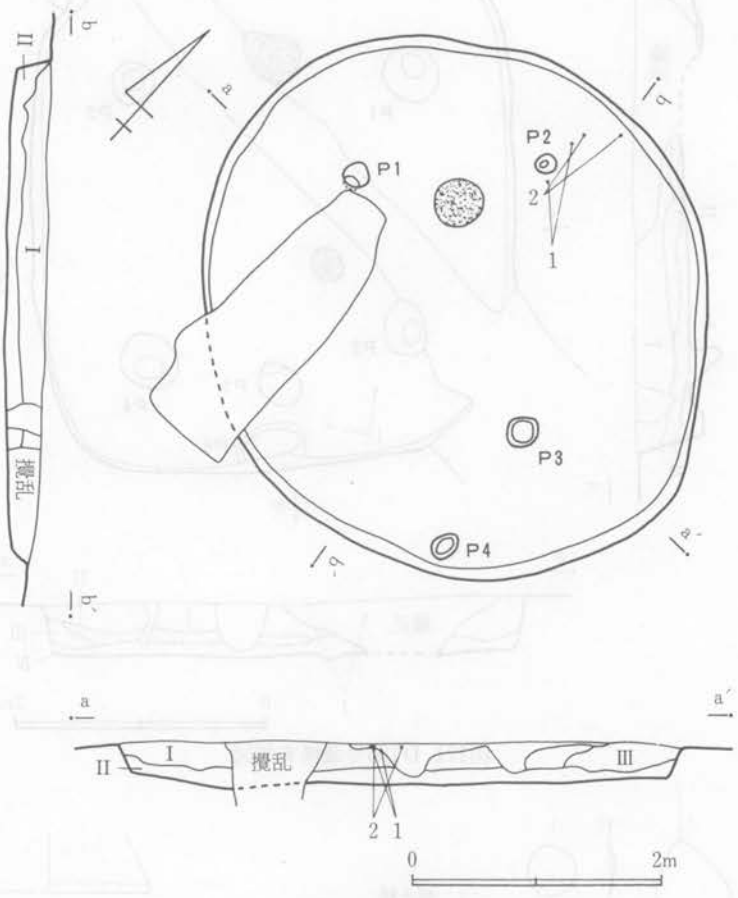


図174 D187号遺構実測図

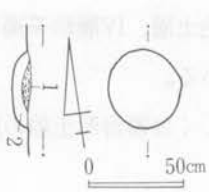
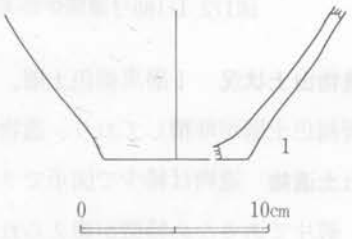


図175 D187号遺構炉跡実測図



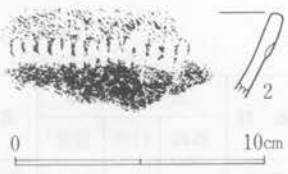


図176 D187号遺構出土遺物実測図

遺構　長径4.28m、短径4.08mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で

踏み固められた状況を呈していない。床面上にP_1～P_4のピットを検出したが柱穴として機能していたかどうか不明である。径平均0.2m、深さ平均0.12mを計る。

炉　北壁中央部に近く位置している。長径0.4m、短径0.38m、深さ0.1mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層中から出土しているが量は少ない。

出土遺物　遺物は少なく、また図示できるものは2点だけで、1は甕形土器底部破片である。2は鉢形土器体部破片である。

D187出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	7.8	底部細片	ヘラナデ	小石	堅緻	淡茶褐色	
2	鉢	—	—	—	口縁部細片	撚糸文 刻目	小石	堅緻	淡茶褐色	

第3節　第Ⅱ群の遺構と遺物

弥生時代の第Ⅱ群は竪穴住居跡14軒で構成される群である。U・V・W・X－8・9・10の地域において検出した。

この地域は台地南東部にあたり、東側は地区界外に飯綱神社が位置し、南側は一部土取りされている地域に接している。したがって、検出した遺構をもってすべての遺構を検出したわけではなく、未調査地域に群が広がる可能性を有している。

住居跡はⅠ群で見られるような纏りのある分布状況を呈しておらず、かなり散漫な分布状況を呈している。このことはⅠ群の19軒の住居群が約2700m²の範囲に分布しているのに対し、Ⅱ群は約4,000m²の範囲に14軒の住居群が分布していることから明らかであろう。換言すればⅠ群・Ⅱ群の分布密度は、Ⅰ群は約142m²に1軒の割合、Ⅱ群は約285m²に1軒の割合で分布していることになる。

住居跡の形状や規模、それに内部施設などは個々の住居跡によって違いを有している。また、焼失した住居跡や修改築が行われた住居跡も存在している（図177、図版37－1）。

1．D002号遺構（図178～182、図版51）

Ⅱ群の住居跡群において南側に位置し、D070が近接している。覆土を掘り下げて床面近くに達した段階で遺構全面に炭化物、焼土塊を検出し、本遺構が焼失したことが判明した。

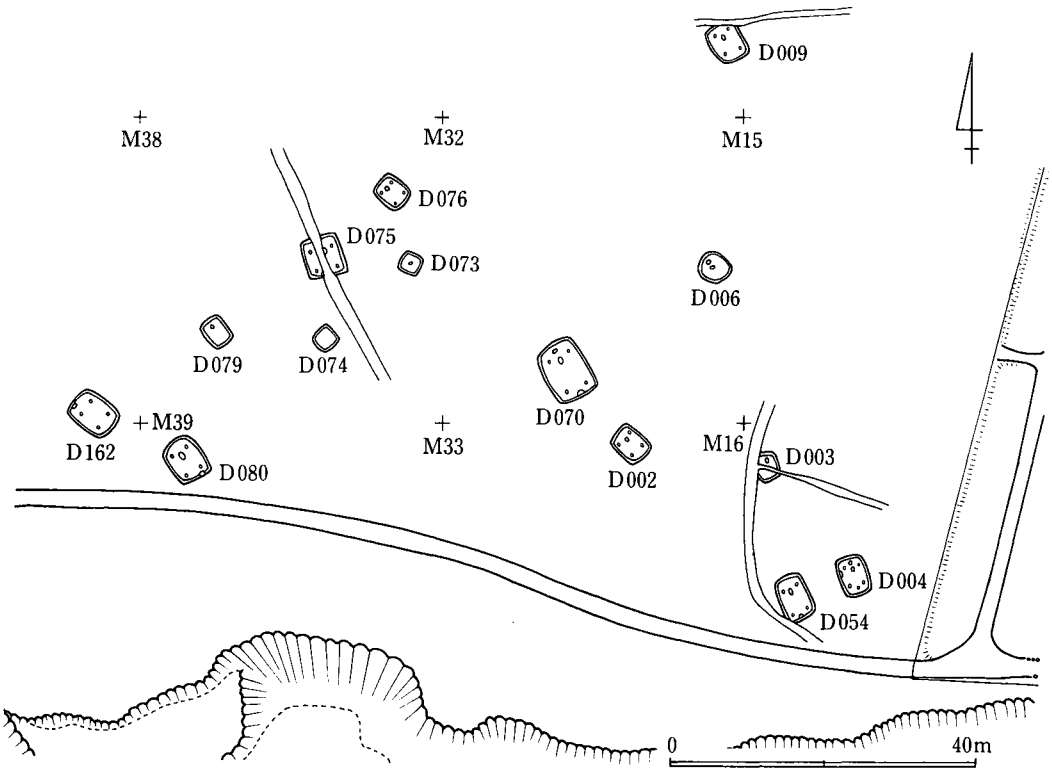


図177 弥生時代第II群遺構分布状況図

遺構　長径5.04m、短径3.92mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.32m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが炉の周辺は特に顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置しておりP_1～P_4を検出した。径平均0.15m、深さ平均0.64m以上を計るものである。P_3には炭化した柱材が検出できた。また南壁中央部に接して長径0.78m、短径0.25m、深さ0.08mのピットを検出した。床面全体に炭化物が散乱した状況で検出したが、西壁に近いものは壁に直角であり、その他の壁に近い部分は壁に対し並行して出土している。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央に近く、P_1、P_2の間に位置し、長径0.6m、短径0.55m、深さ0.1mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層褐色土層、III層茶褐色土層、IV層黄褐色土層、V層ロームブロック混入褐色土層が堆積しており、住居中央部のI層から出土している。

出土遺物　遺物は量的に少なく図示できたものは甕、鉢形土器がある。甕形土器は1、2で、1は口縁部破片で一部に附加条縄文帯がある。2は底部の破片で木葉痕がある。鉢形土器は3で体部の破片である。

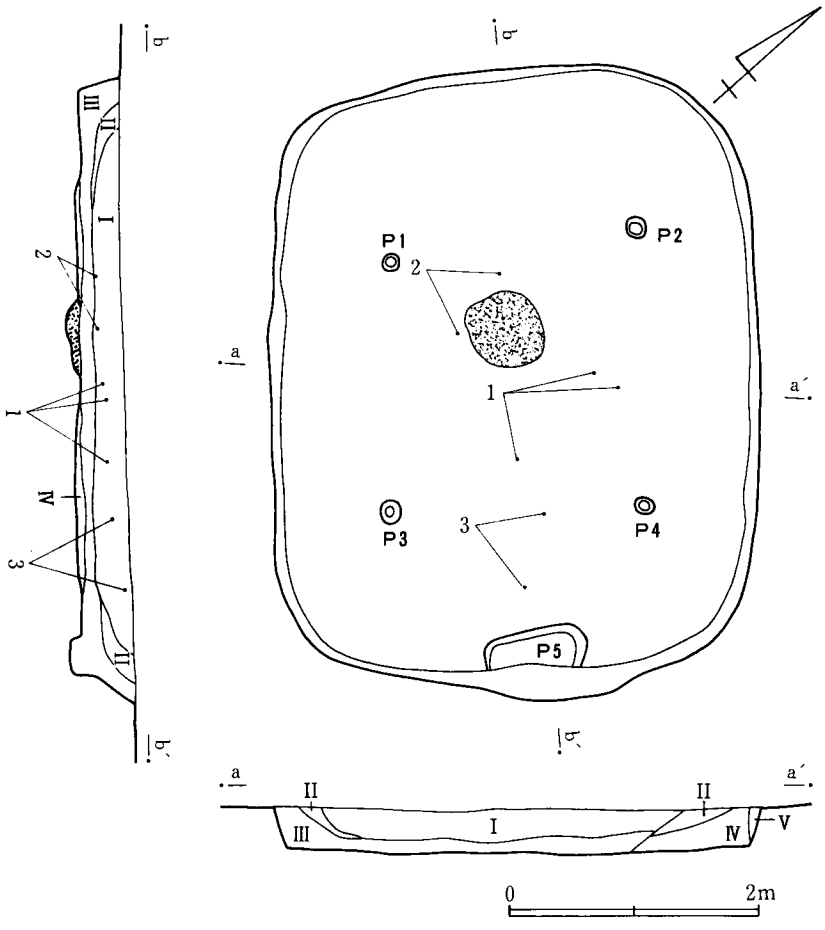


図178 D002号遺構実測図

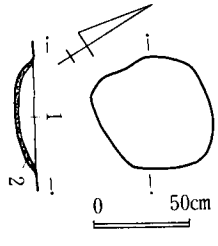
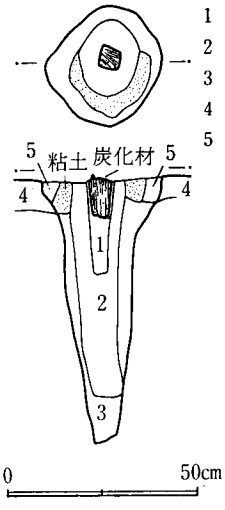


図179 D002号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入黒色土層
2 焼土層



1 炭化粒混入黒色土層
2 焼土粒子混入褐色土層
3 ロームブロック層
4 暗褐色土層
5 黄褐色土層

図180 D002号遺構P 3 平断面図

図181 D002号遺構炭化物出土状況図

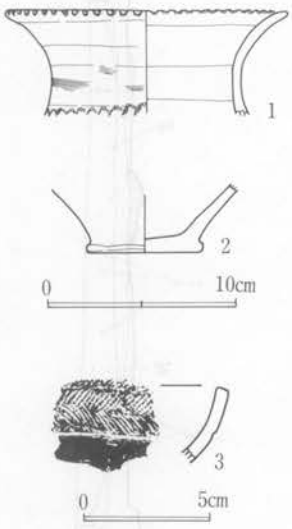


図182 D002号遺構出土遺物実測図

D002出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.6	—	1/3	輪積痕 ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	6.2	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	鉢	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文	——	堅緻	黒褐色	

2．D003号遺構（図183～185、図版52－1、57）

Ⅰ群の住居群内において南東に位置し、D004、D054が近接している。南北に連なる溝によって遺構西側が攪乱されており、覆土全体の30%におよんでいる。よって遺構の遺存状況は悪い。

遺構　長径4.2m、短径推定3.5mで楕円形を呈すると思われる竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈しているが、炉周辺はやや堅緻な状況を呈している。

炉　北壁中央部に近く位置しており、長径0.8m、短径0.55m、深さ0.15mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

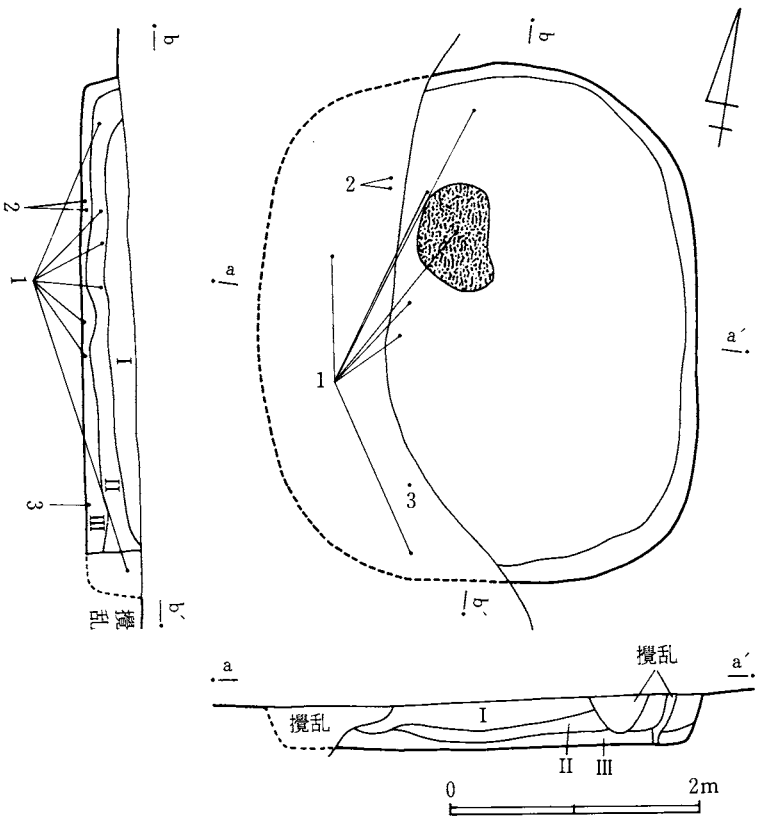


図183 D003号遺構実測図

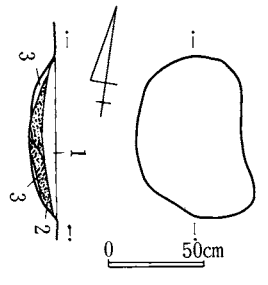


図184 D003号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入黒色土層
2 焼土層
3 褐色土層

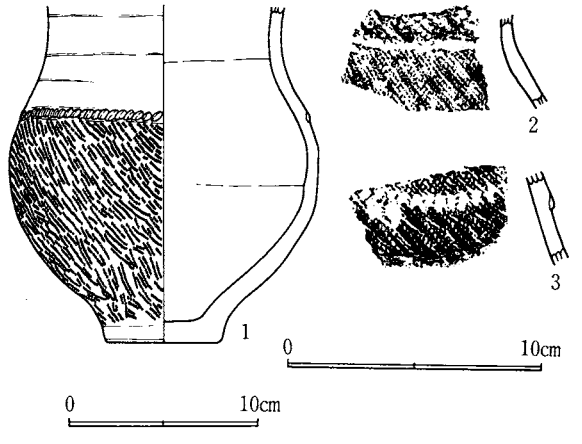


図185 D003号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況 I層暗褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層茶褐色土層が堆積している。遺物はII層を中心に出土している。

出土遺物 遺物は量的に少なく、また甕形土器のみである。1は口縁を欠損するもので頸部

に輪積痕が残る。2、3は肩部破片である。いずれも多条縄文が施されている。

D003出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.3	2/3	輪積痕 附加条縄文	小石	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	多条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	

3．D004A号遺構（図186～188、図版52－2、3、57）

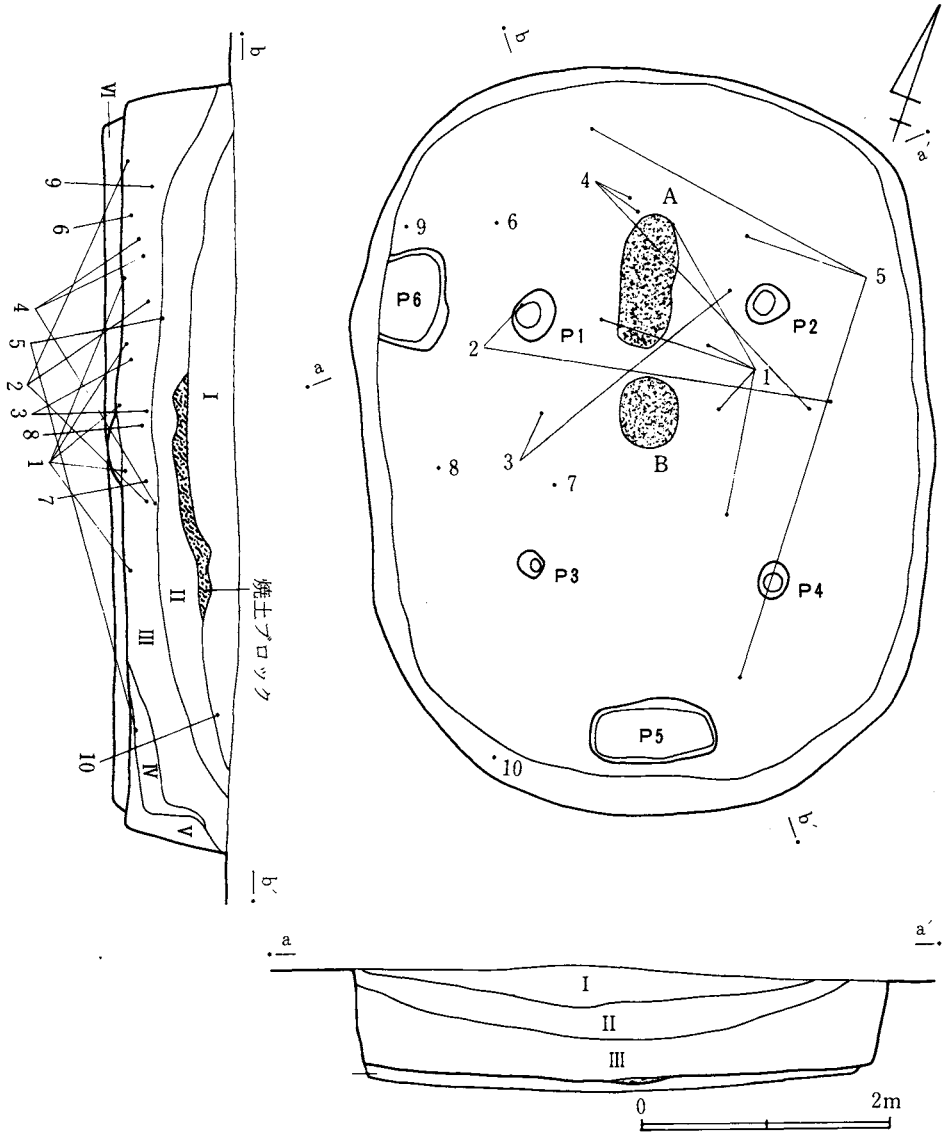


図186　D004A号遺構実測図

Ⅰ群の住居群において最も南東部分に位置し、D054が近接している。遺構は修改築が行われており新しい時期Aと古い時期Bの遺構からなっている。

遺構　長径5.88m、短径4.64mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し1m掘り込んで床面に達している。床面は貼り床であるが全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しておりP_1～P_4を検出した。径約0.25m、深さ平均0.52m以上を計る。また南壁と西壁部分に長方形に近いピットを2か所検出した。南壁に近く長径1m、短径0.47m、深さ0.15mを計るP_5を、西壁に

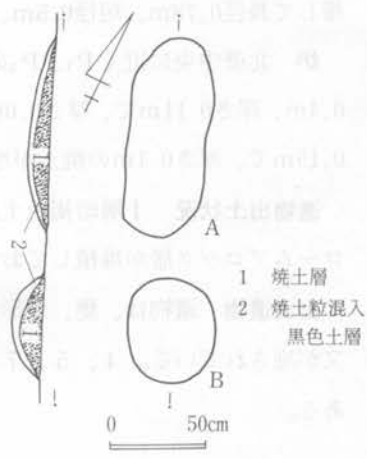


図187　D004A号遺構炉跡実測図

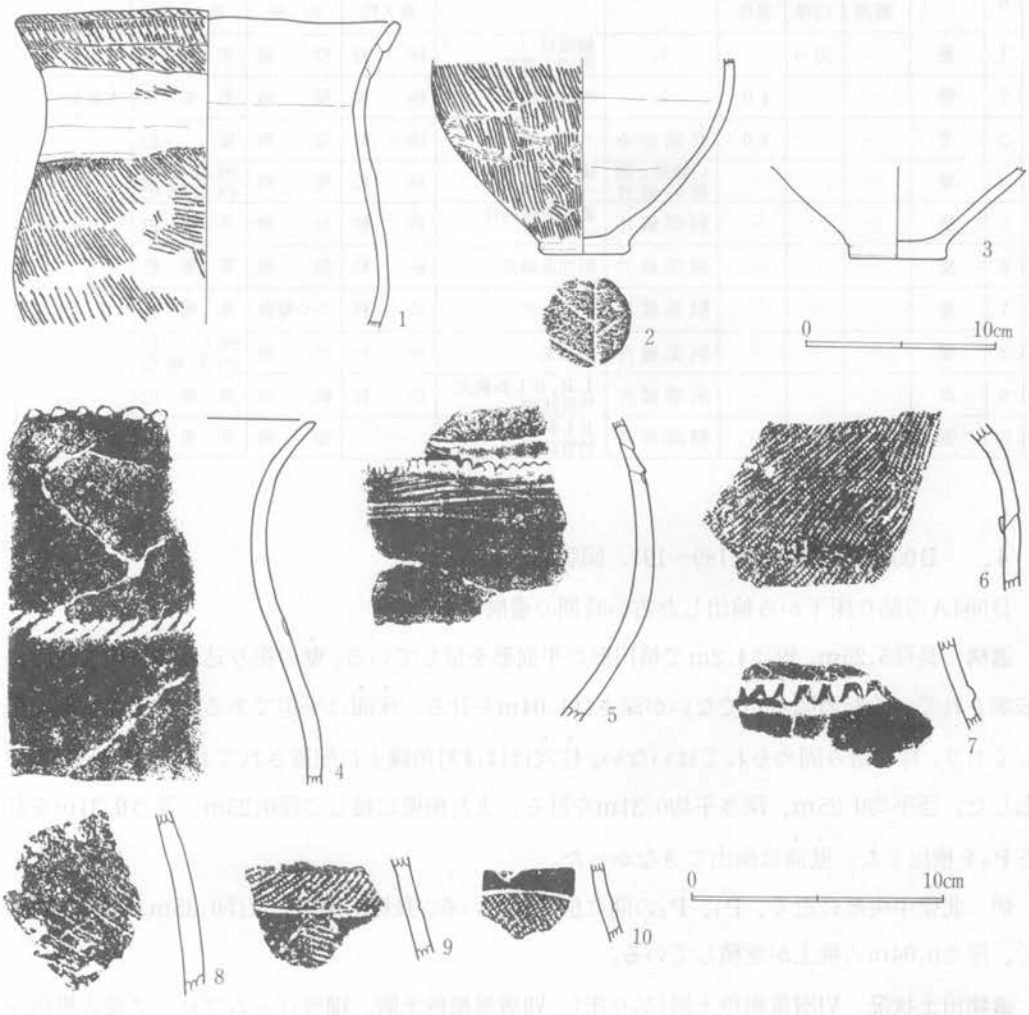


図188　D004A号遺構出土遺物実測図

接して長径0.78m、短径0.5m、深さ0.13mを計るP₆を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央に近くP₁、P₂の間に位置して、A、B2か所検出した。Aは長径1.02m、短径0.4m、深さ0.11mで、厚さ0.08mの焼土が堆積している。Bは長径0.53m、短径0.45m、深さ0.15mで、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層黒色土層、III層暗黄褐色土層、IV層黄褐色土層、V層ロームブロック層が堆積しており、遺物は炉を中心にした床面、III層中より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1～8で、1～3、6、8は附加条縄文が施されている。4、5、7は輪積痕に刻目を施している。壺形土器は9、10で胴部破片である。

D004A出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.0	—	2/3	輪積痕 附加条縄文	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	4.0	1/2	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
3	甕	—	—	5.0	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部と頸部の破片	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)茶褐色	
5	甕	—	—	—	胴部破片	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	—	—	胴部破片	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
8	甕	—	—	—	胴部破片	撚糸文	砂粒	堅緻	(外)橙色 (内)茶褐色	
9	壺	—	—	—	胴部破片	LR、RL斜縄文 竹管沈線	砂粒	軟弱	黒褐色	
10	壺	—	—	—	胴部破片	RL斜縄文 竹管沈線	——	堅緻	黒褐色	赤彩

4．　D004B号遺構（図189～191、図版53－1）

D004Aの貼り床下から検出した古い時期の遺構である。

遺構　長径5.25m、短径4.2mで楕円形の平面形を呈している。壁の掘り込みはAの拡張時に破壊されているため明らかでないが深さは1.04mを計る。床面は平担であるが軟弱な状況を呈しており、特に踏み固められてはいない。柱穴はほぼ対角線上に配置されており、P₁～P₄を検出した。径平均0.25m、深さ平均0.31mを計る。また南壁に接して径0.25m、深さ0.31mを計るP₅を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く、P₁、P₂の間に位置している。長径0.55m、短径0.35m、深さ0.15mで、厚さ0.04mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　VI層黄褐色土層(貼り床)、VII層黒褐色土層、VIII層ロームブロック混入黒色土層が堆積しており、遺物は炉の周辺の床面近くより出土している。

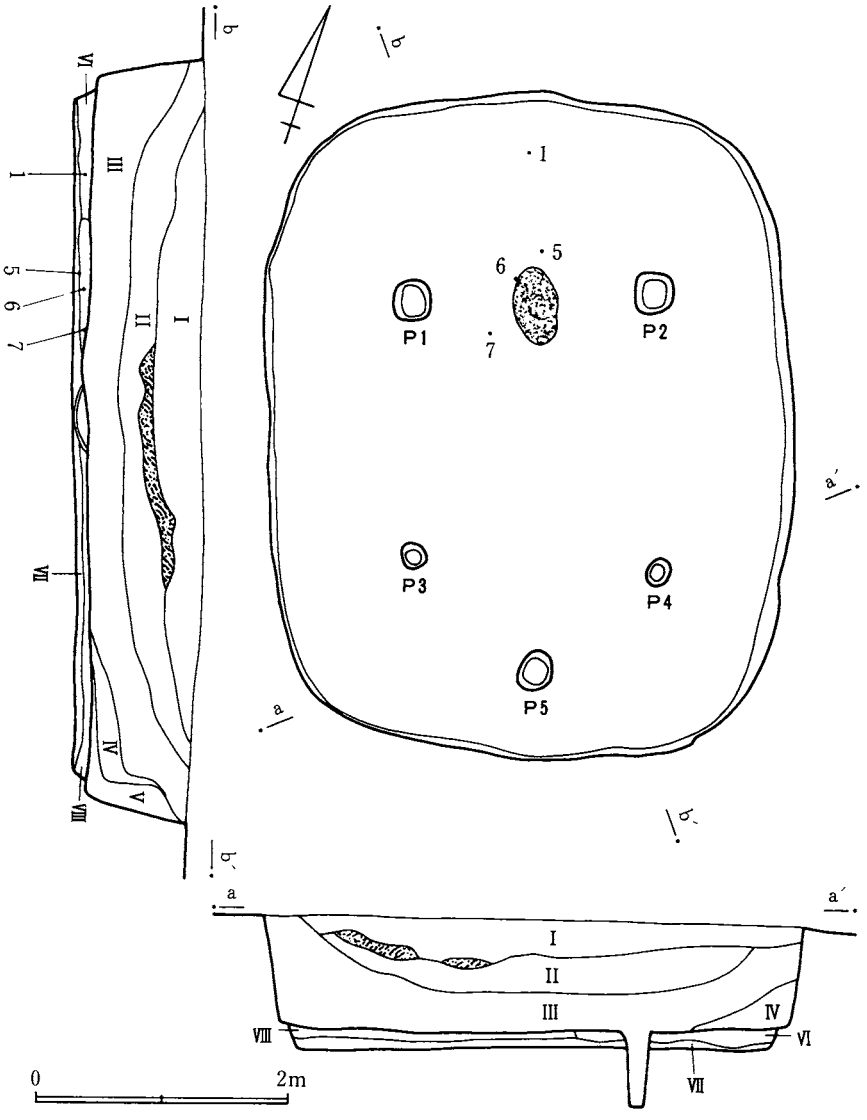


図189　D004B号遺構実測図

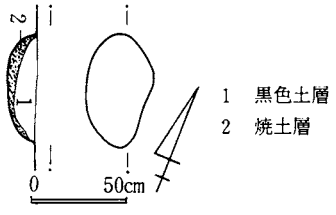


図190　D004B号遺構炉跡実測図

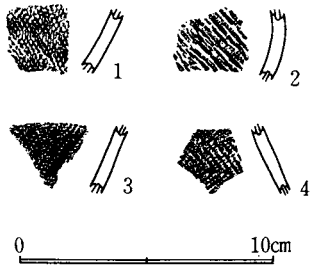


図191　D004B号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は少量で、しかも細片である。図示した1～4はいずれも甕形土器の胴部破片である。

D004B出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	羽状条縄文	砂粒	堅緻	黄褐色	

5．D006号遺構（図192～194、図版53－3）

Ⅰ群の住居群内において東側に位置している。遺構西側の一部が攪乱を受けている。

遺構　径4.32mを計るほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.32m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱であり、わずか炉周辺がやや堅緻な状況を呈

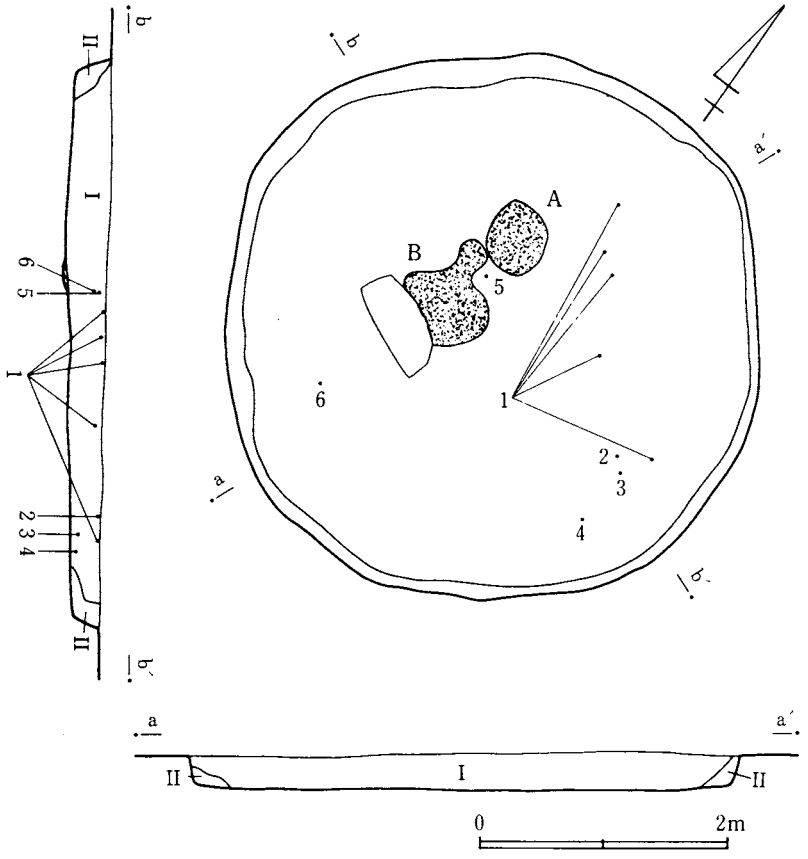
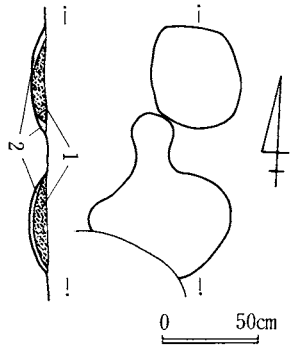


図192　D006号遺構実測図



1　焼土層
2　褐色土層

図193　D006号遺構炉跡実測図

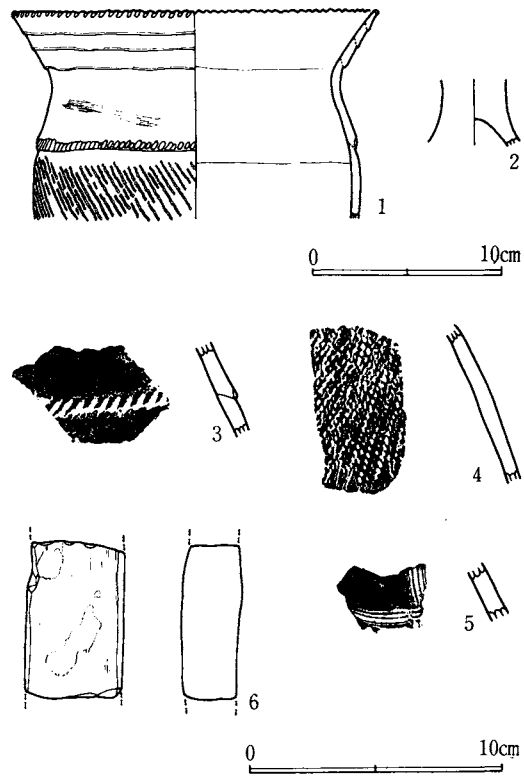


図194　D006号遺構出土遺物実測図

している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より若干北側に偏在して2か所検出した。Aは長径0.52m、短径0.47m、深さ0.07mで、厚さ0.07mの焼土が堆積している。Bは瓢箪状の平面形を呈し長径0.85m、深さ0.1mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黄褐色土層が堆積しており、遺物は覆土上層より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、3～5で、1、4は附加条縄文が施され、3は輪積痕に刻目が認められ、4は櫛描きが認められる。高坏形土器は2で坏と脚との接合部分の破片である。石製品は5で、砂岩製の砥石である。

D006出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.4	—	½	輪積痕 附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	高坏	—	—	—	脚部破片	ヘラナデ	——	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	褐色	
5	甕	—	—	—	胴部破片	櫛描文	——	堅緻	茶褐色	

6．D009号遺構（図195～197、図版54－1）

Ⅰ群の住居群において最も北に位置している。遺構の北東部分は溝によって攪乱を受けている。

遺構　長径6.04m、短径4.6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈し0.6m掘り込んで床面に達している。床面は全体に平坦で堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.35m以上を計る。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央に近く、P_1、P_2の間に位置している。長径0.85m、短径0.72m、深さ0.12m

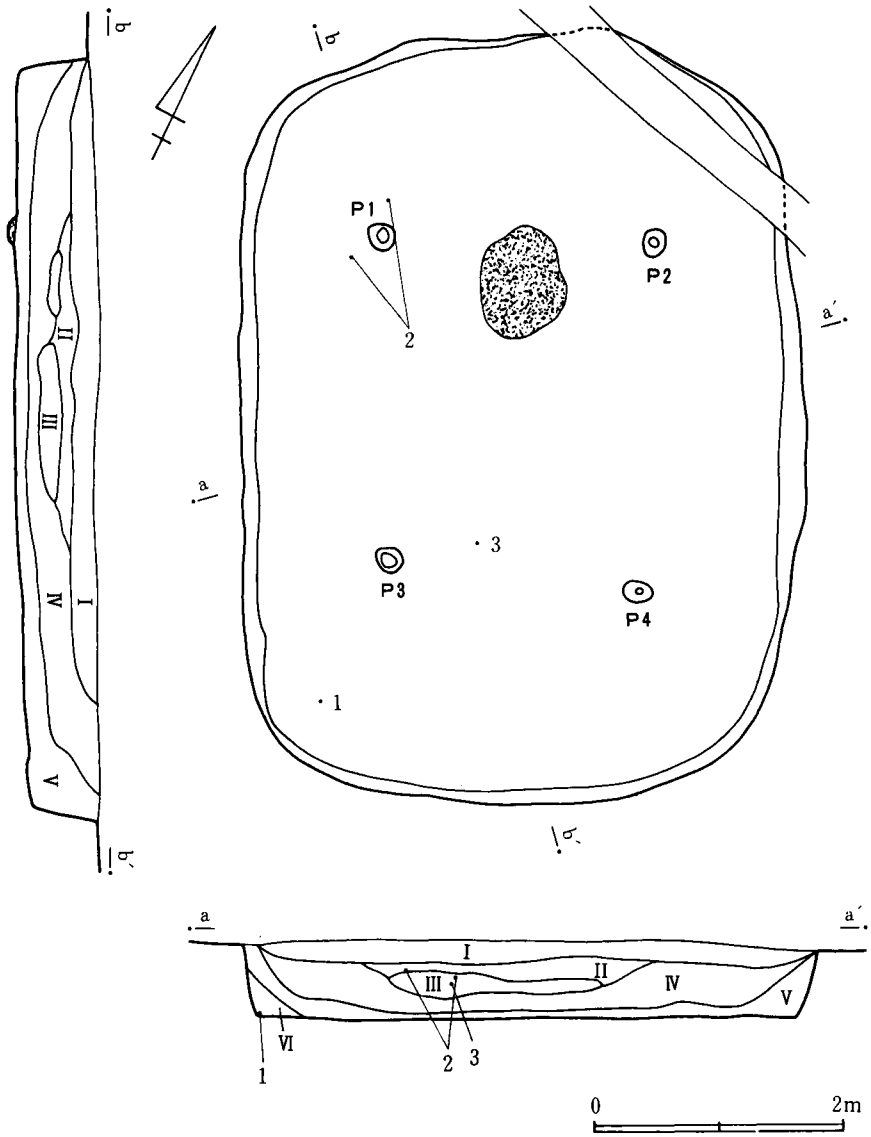


図195　D009号遺構実測図

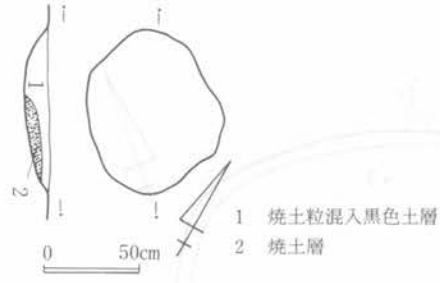


図196 D009号遺構炉跡実測図

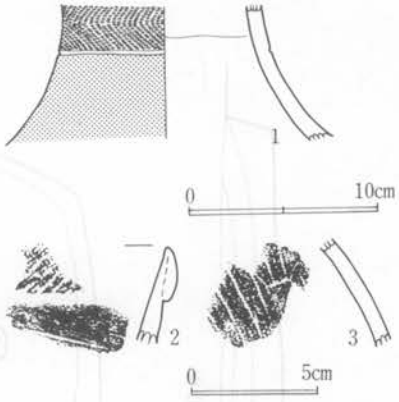


図197 D009号遺構出土遺物実測図

で、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層焼土層、Ⅳ層暗褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層、Ⅵ層黄褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中層部分より出土している。

出土遺物　遺物は、壺、甕形土器がある。壺形土器は1、2で、1は頸部、2は口縁部破片である。甕形土器は3で附加条縄文が施されている。

D009出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	胴部のみ破片	羽状縄文 ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
2	壺	—	—	—	口縁部破片	LR斜縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

7．D054号遺構（図198～200、図版54—2、3、58）

Ⅰ群の住居群内において南東部分に位置し、D004が近接している。

遺構　長径5.88m、短径4.24mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達している。床面は全体に竪緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より外側に寄って配置しておりP_1～P_4を検出した。径平均0.38m、深さ平均0.51m以上を計る。また南壁に接して長径0.6m、短径0.47m、深さ0.16mのピットP_6を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く、P_1、P_2の間に位置している。径1.12m、深さ0.14mで、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層褐色土層が堆積しており、遺物は各層から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1～3で、1、2は大きな広口甕で附

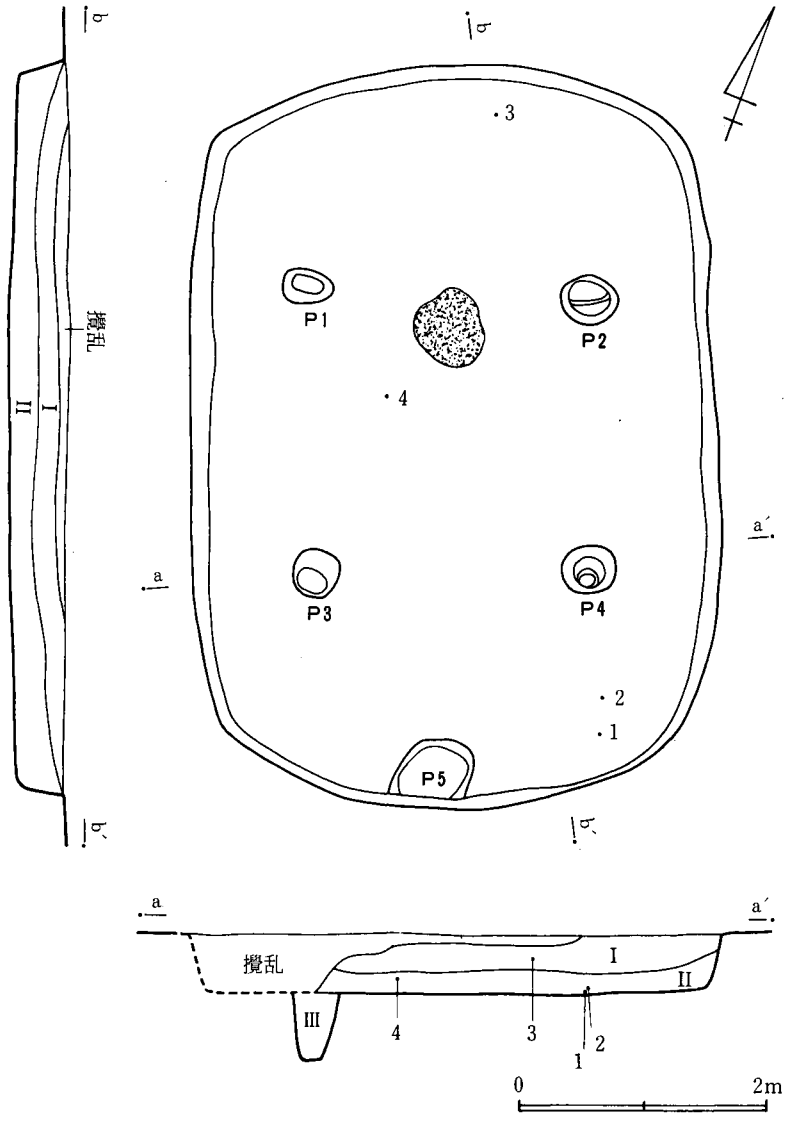


図198 D054号遺構実測図

D054出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	27.3	23.1	6.9	略完形	附加条縄文、S字状結節文、ヘラナデ	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)灰暗褐色	胴部スス付着
2	甕	—	—	6.4	½	附加条縄文 S字状結節文	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	輪積痕	砂粒	堅緻	(内)灰褐色 (外)黒褐色	
4	壺	—	—	—	口縁部破片	輪積痕	砂粒	堅緻	黒褐色	

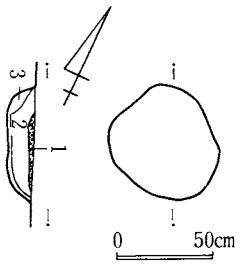


図199 D054号遺構
炉跡実測図

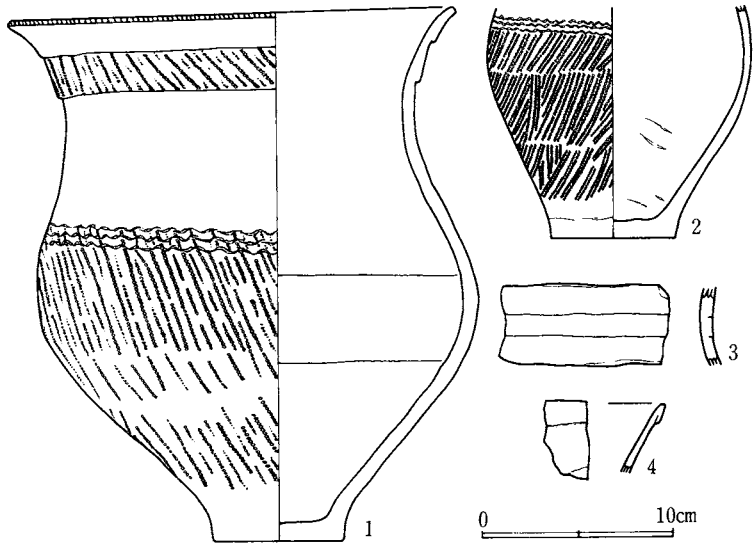


図200 D054号遺構出土遺物実測図

加縄文が施されている。3は輪積痕を残す口縁部破片である。壺形土器は4の口縁部破片である。

8．D070号遺構（図201～203、図版55－1）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D002が近接している。

遺構　長径8.64m、短径7mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.44m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻で、特に炉周辺は顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.35m、深さ平均0.53m以上である。北壁に近くP_5、南壁に接してP_6を検出した。P_5は一辺0.48mで深さ0.03mを計る。P_6は長辺1.3m、短辺0.38m、深さ0.1mを計る。壁溝は検出できなかった。

D070出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	17.4	—	1/3	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明茶褐色	
2	甕	—	—	7.4	1/3	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
3	高坏	—	—	—	頸部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	壺	—	—	—	底部破片	平行櫛描文	砂粒	堅緻	褐色	
5	壺	—	—	—	胴部破片	山形、平行櫛描文	砂粒	堅緻	褐色	

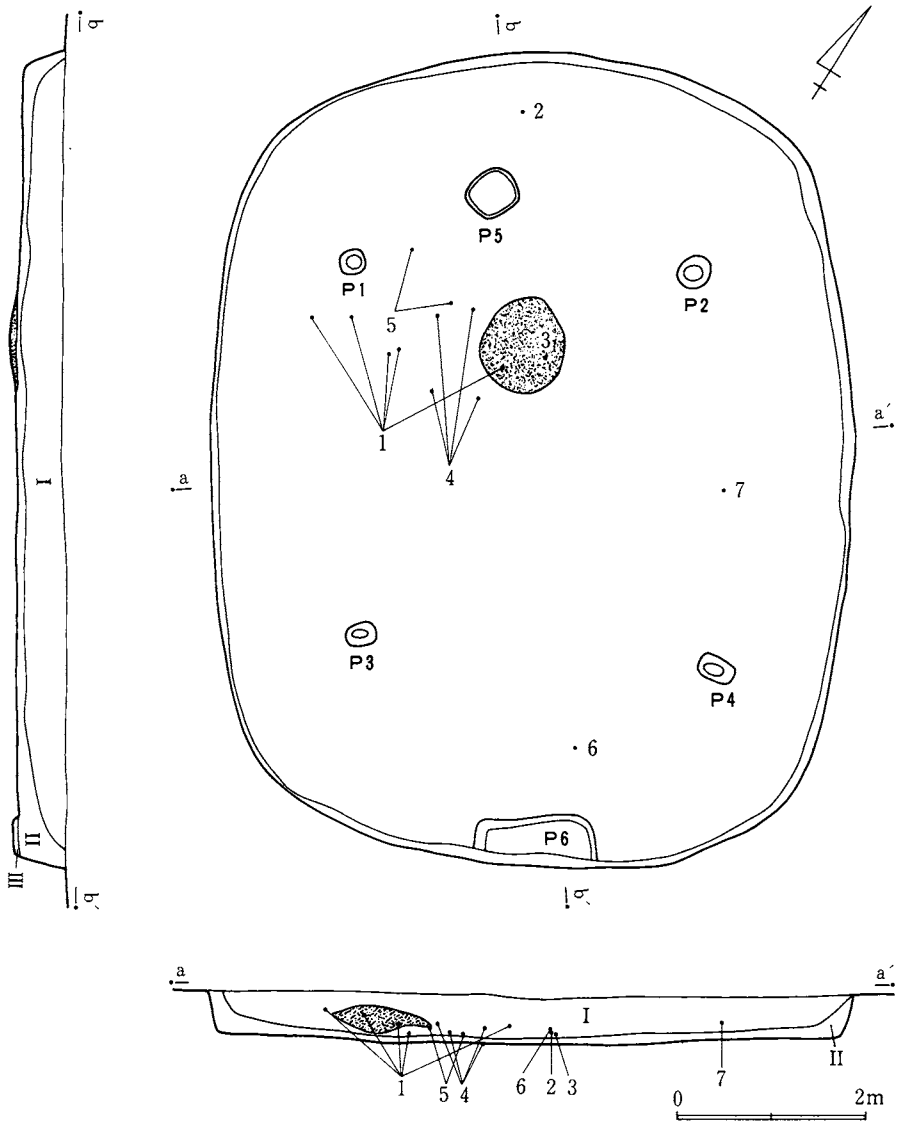


図201 D070号遺構実測図

炉　住居中央部より北壁に寄って位置している。長径0.98m、短径0.9m、深さ0.17mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗褐色土層が堆積しており、遺物は炉を中心とした部分のI層下部より出土している。

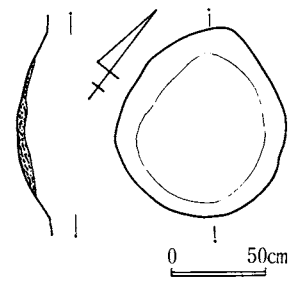


図202 D070号遺構炉跡実測図

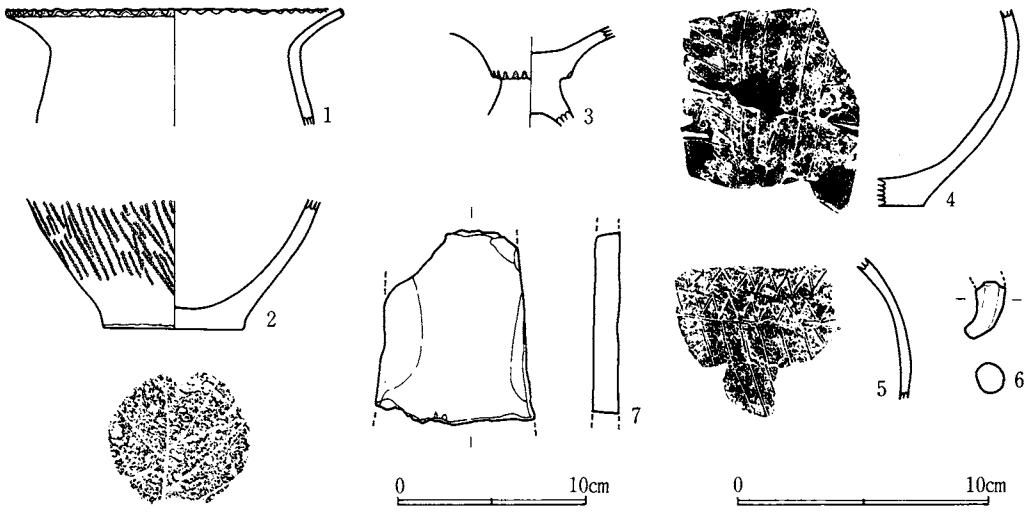


図203 D070号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、甕、高坏、壺形土器と石製品、土製品がある。甕形土器は1、2で、1は水平近く開く口縁部破片、2は木葉痕のある底部破片である。高坏形土器は3で坏と脚の接合部分の破片である。壺形土器は4、5でヘラ描文様が施されている。石製品は7で砂岩製の砥石である。土製品は6で勾玉の破片である。

9．D073号遺構（図204～206、図版55—2）

I群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D076が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けているため遺存状況の悪い遺構である。

遺構 東壁2.3m、南壁2.6mで北壁がかなり胴張りする方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は緩やかな傾斜を呈し0.2m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

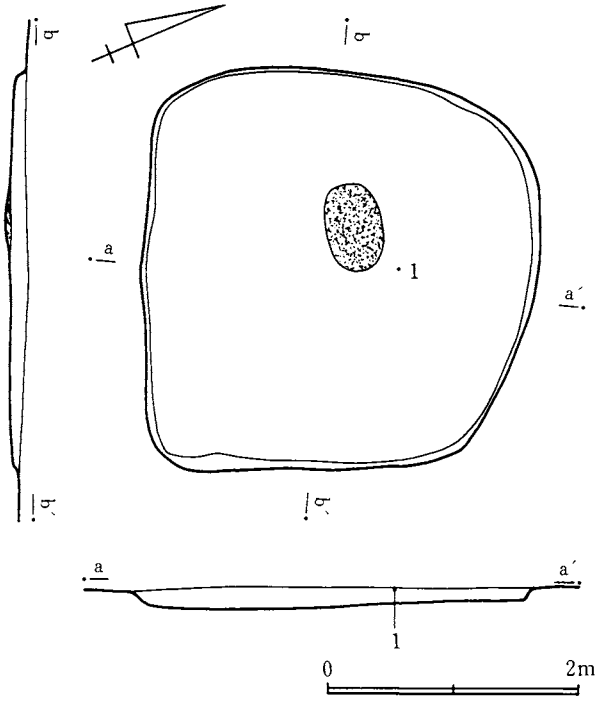


図204 D073号遺構実測図

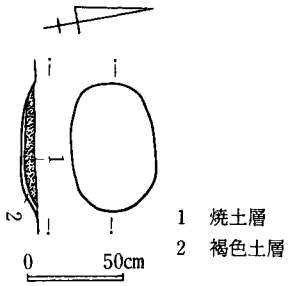


図205 D073号遺構炉跡実測図

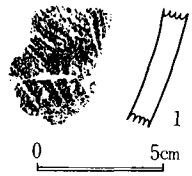


図206 D073号遺構出土遺物実測図

炉 住居中央部より西側に偏在している。長径0.55m、短径0.43m、深さ0.07mで、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 ローム粒混入黒褐色土層の単一層である。出土遺物は覆土中の出土である。

出土遺物 遺物は稀少で図示できるものは甕形土器細片1点のみである。胴部に附加条縄文が施される破片である。

D073出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

10. D074号遺構（図207、図版55—3）

I群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D075、D079が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱が著しく覆土の40%におよんでいる。遺存状況の悪い遺構である。

遺構 北壁2.2m、東壁2.03mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は緩やかな傾斜を呈し0.16m掘り込んで床面に達している。床面は溝状の攪乱が著しく全体に不明であるが、堅緻な状況は呈していない。柱穴、壁溝、炉は

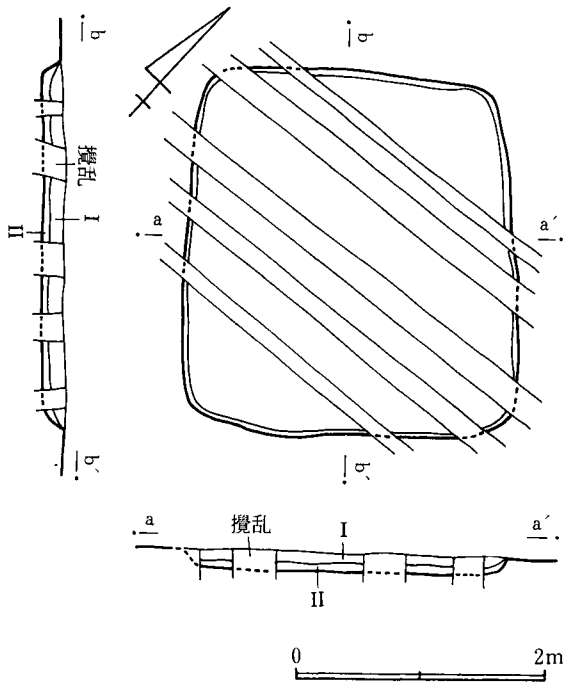


図207 D074号遺構実測図

検出できなかった。また遺物の出土も認められない。

11. D075号遺構（図208～210、図版56―1、58）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D074が近接している。南北に連なる溝によって遺構のほぼ中央部が攪乱を受けている。またトレンチャーの溝状の攪乱も著しい。攪乱は覆土全体の54%におよんでいる。したがって、出土した遺物は本来の一括資料として判断できない。

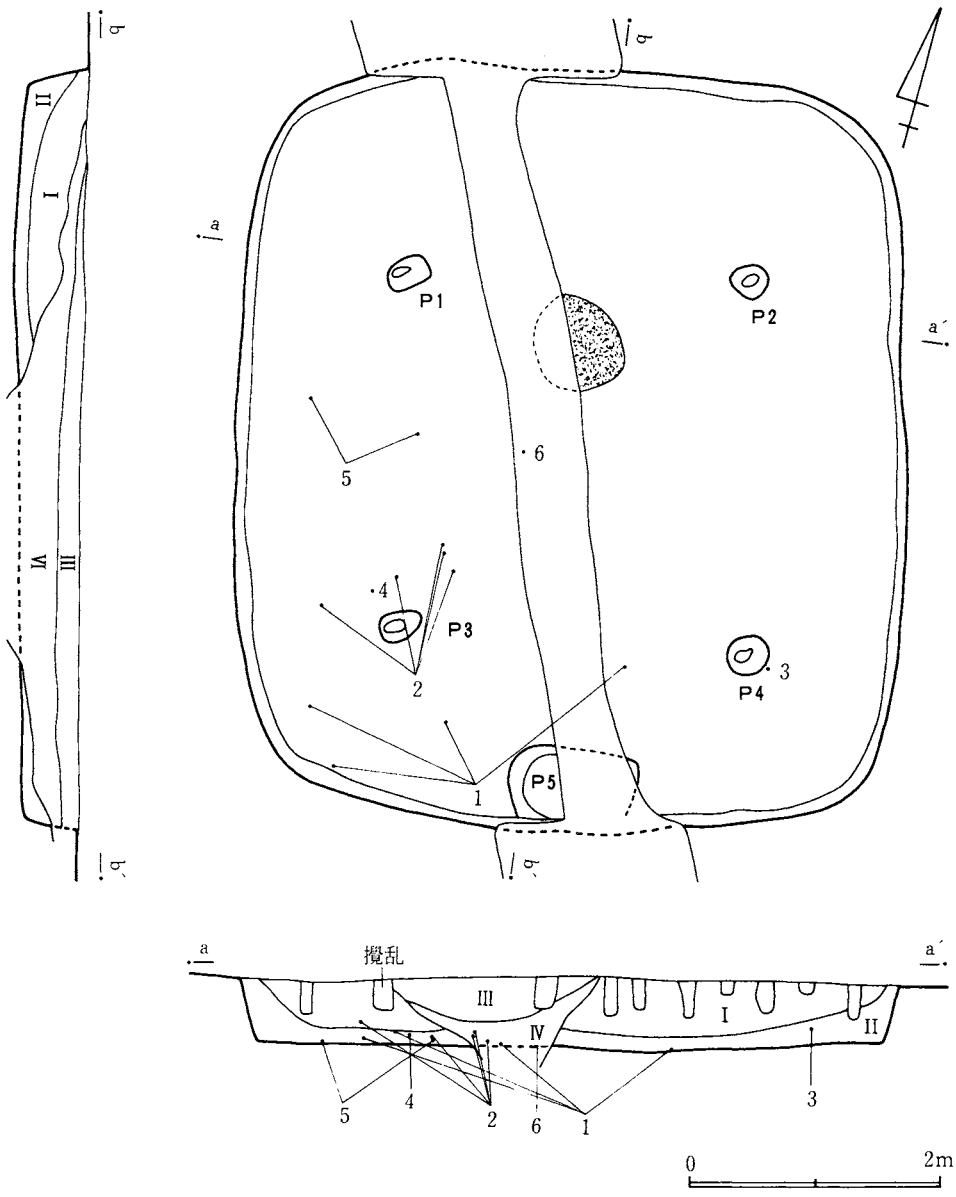


図208 D075号遺構実測図

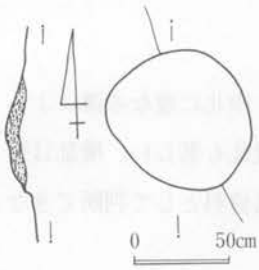


図209 D075号遺構
炉跡実測図

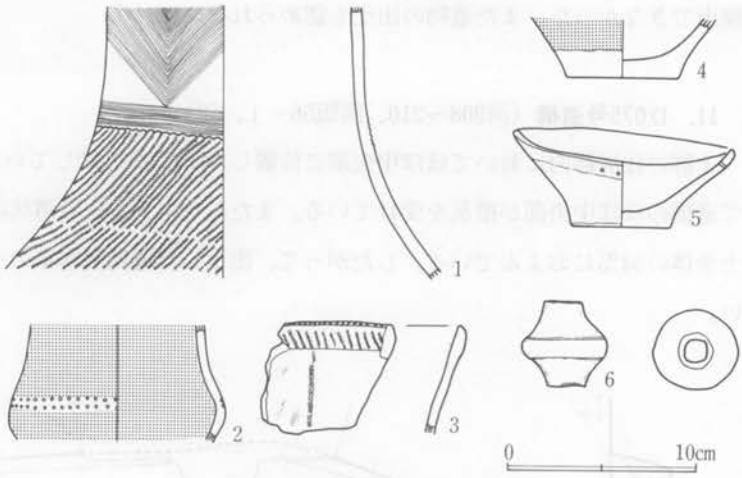


図210 D075号遺構出土遺物実測図

遺構 長径6m、短径0.54mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.52m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻であるが、特に中央部が顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置しておりP_1～P_4を検出した。径平均0.32m、深さ平均0.74m以上である。また南壁に接してP_5を検出したが溝に攪乱を受けているため規模等は不明である。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北壁に寄って位置している。約2分の1が溝によって破壊されている。深さ約0.15m、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入茶褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層黒褐色土層が堆積している。Ⅲ、Ⅳ層は溝の覆土である。遺物は住居の南西部分に多くⅡ層床面を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、壺、鉢形土器と土製品がある。壺形土器は1～4で、1は櫛描文と斜縄文が施されている。2は胴部に刺突文を施している。4は同一個体である可能性がある。3は複口縁の破片である。鉢形土器は5で口唇部直下に小孔が認められる。土製品は6で、土玉状のものであるが用途は不明である。径4.5cmで中心に1.1cmの孔があく。胎土、焼成良好、色調は褐色を呈す。

D075出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	頸部のみ	山形、平行櫛描文 LR斜縄文	砂粒	堅緻	明褐色	
2	壺	—	—	—	1/3	円形刺突文 ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡褐色	赤彩
3	壺	—	—	—	口縁部破片	RL縄文ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)暗褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
4	壺	—	—	6.0	底部のみ	ヘラナデ	砂粒 雲母	堅緻	淡褐色	赤彩
5	鉢	3.3	11.4	5.4	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗灰色	

12. **D076号遺構**（図211～213、図版56－2）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央より北側に位置し、D073が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱が著しく、覆土全体の16%におよんでいる。

遺構　長径4.4m、短径3.68mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.48m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況は認められない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北壁に寄って位置している。長径0.65m、短径0.52m、深さ0.13mを計り、厚さ0.09mの焼土が堆積している。

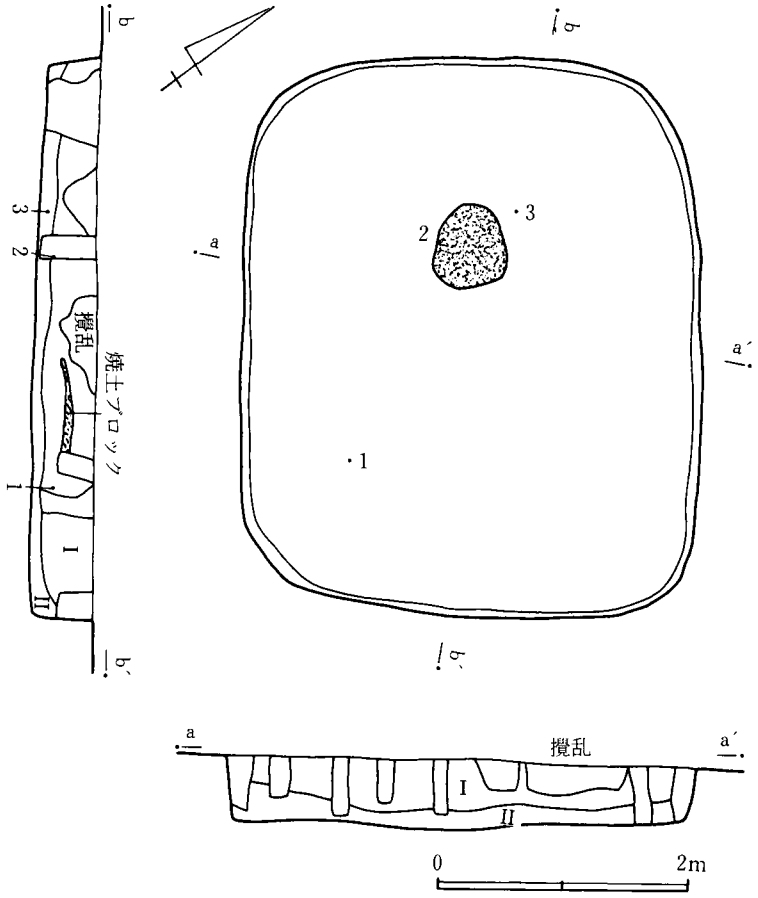


図211　D076号遺構実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗褐色土層が堆積しており、炉を中心とした部分のⅡ層から出土している。

出土遺物　遺物は少なく、図示できるものは3点である。いずれも甕形土器の破片で、1は木葉痕のある底部、2、3は胴部破片である。

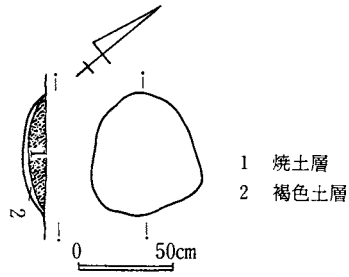


図212　D076号遺構炉跡実測図

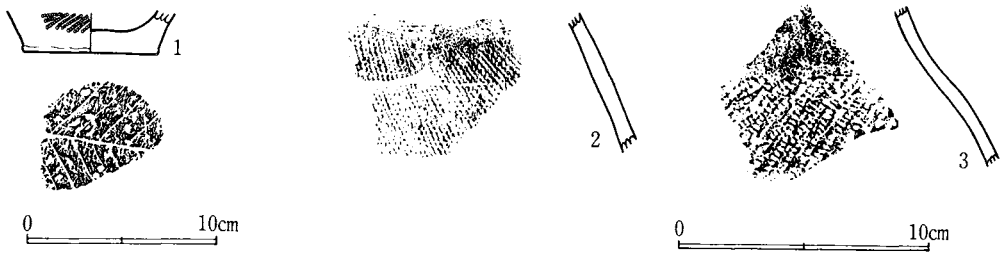


図213　D076号遺構出土遺物実測図

D076出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	7.0	底部のみ	附加条縄文？	小石	堅緻	(内)淡灰褐色 (外)赤褐色	木葉痕
2	甕	—	—	—	胴部破片	多条縄文	砂粒 雲母	堅緻	淡灰褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	多条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	

13. D079号遺構（図214、215、図版56—3）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央部から西側に偏在している。

遺構　長径3.88m、短径3.64mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.44m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北壁に偏在している。長径0.75m、短径0.53m、深さ0.12mで、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗褐色土層が堆積している。遺物は細片がほとんどで量的にも少なく、図示できる遺物はない。

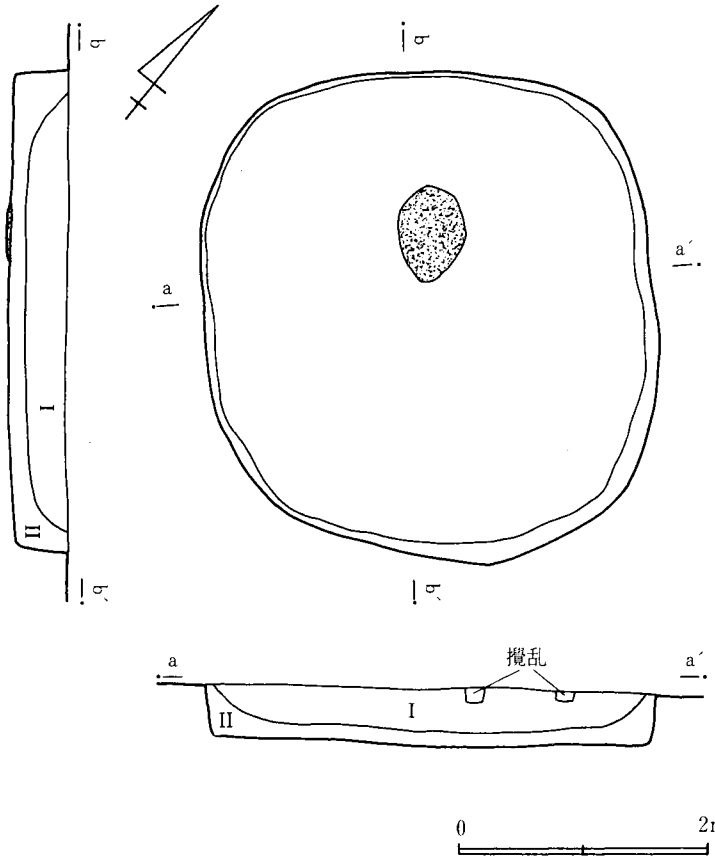


図214 D079号遺構実測図

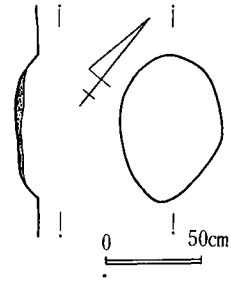


図215 D079号遺構
炉跡実測図

14. D080号遺構（図216～218、図版57－1、58）

I群の住居群内において西側部分に位置し、D162が近接している。トレンチャーによる溝状の撹乱を受けており、覆土全体の10%におよんでいる。

遺構 長径6.44m、短径5.32mで楕円形の平面形を呈す竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んで床面に達する。床面は全体にわたり堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.5m以上0.67m以下である。また南壁に接して長径0.7m、短径0.45m、深さ0.07mを計るピットP_5を検出した。

遺物出土状況 I層茶褐色土層、II層黒色土層、III層暗褐色土層、IV層褐色土層が堆積して

D080出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.3	—	3/4	竹管刺突文 ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)黒褐色	胴部スス付着
2	甕	—	18.3	—	3/4	輪積痕 ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)黒褐色	口縁部スス付着

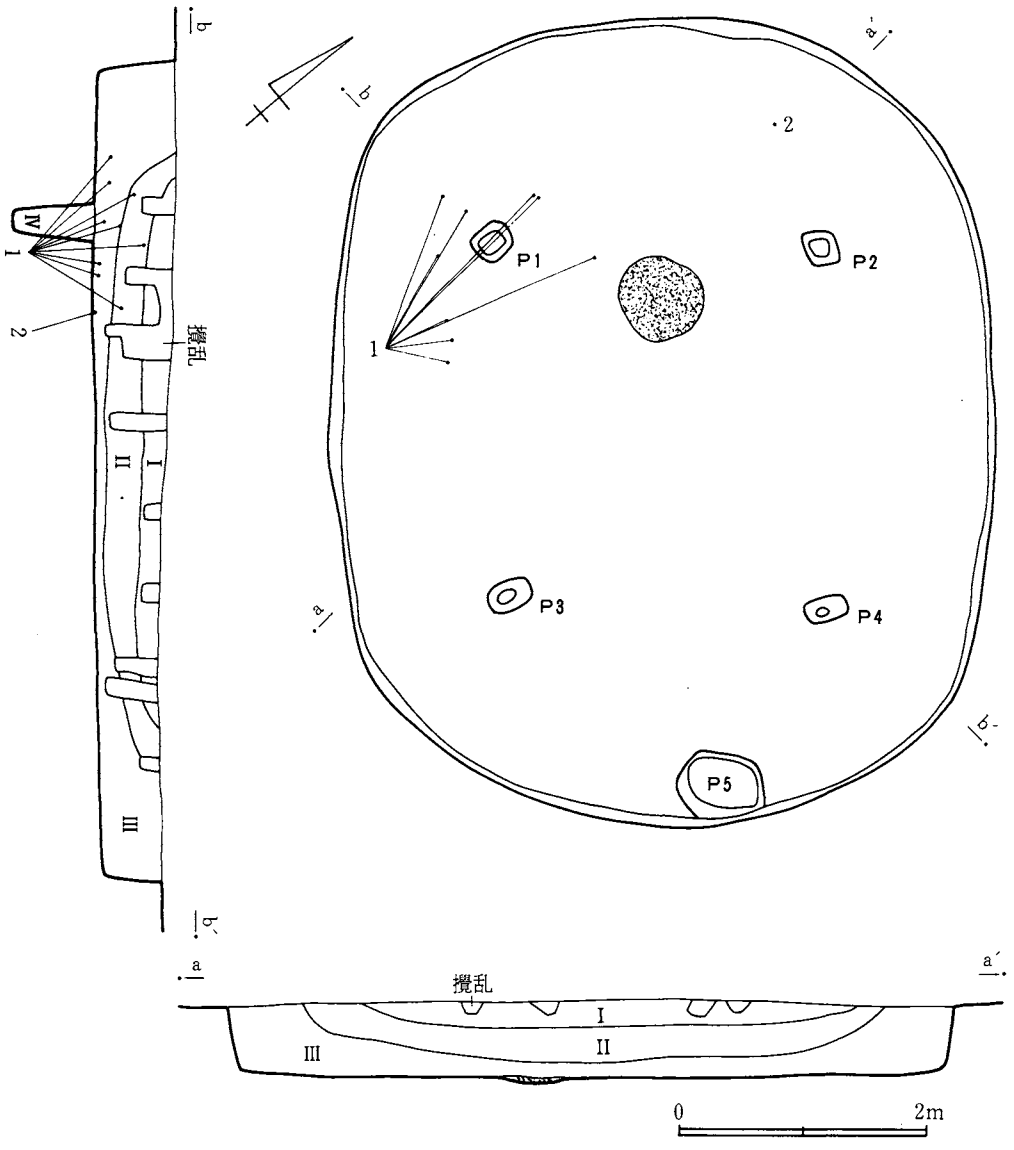


図216 D080号遺構実測図

おり、遺物は炉の西側床面上より出土している。また各層から少量であるが細片が出土している。

出土遺物 遺物は甕形土器のみである。1は頸部下端に刺突を施し、2は頸部に輪積痕を残す。

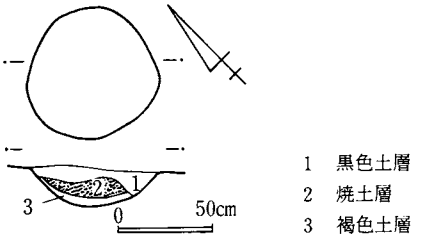


図217 D080号遺構炉跡実測図

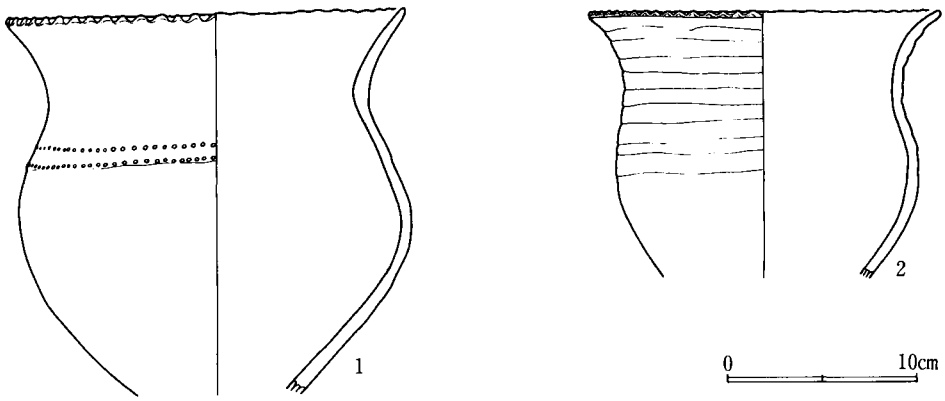


図218 D080号遺構出土遺物実測図

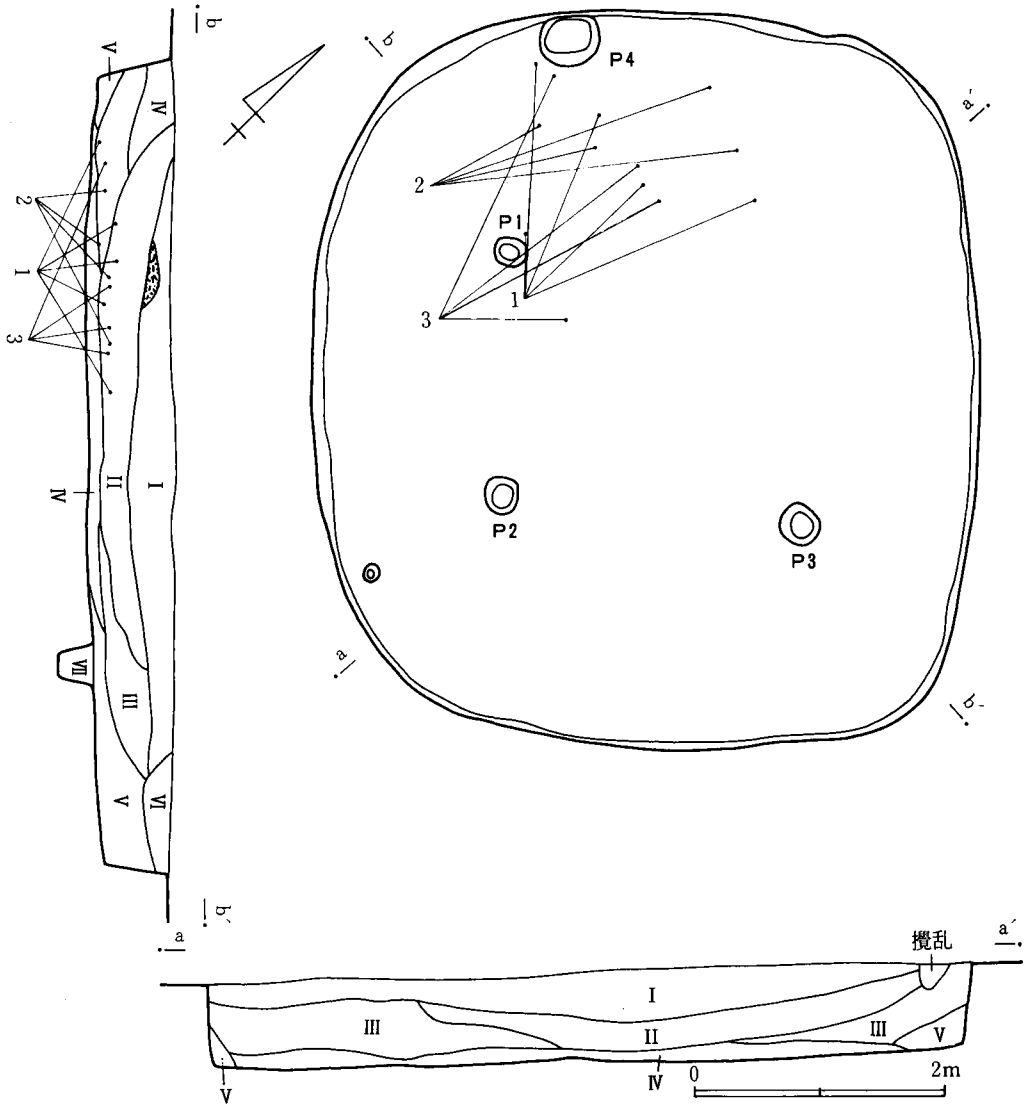


図219 D162号遺構実測図

15. D162号遺構（図219、220、図版57－2、58）

Ⅰ群の住居群において最も西側に位置し、D080が近接している。

遺構　長径5.7m、短径5.2mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.72m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上にP_1～P_3の柱穴と思われるピットを検出したが、北東部が検出できていないため柱穴としての機能を有していたか不明である。径平均0.28m、深さ平均0.32m以上0.42m以下を計る。また北壁に接し長径0.48m、短径0.4m、深さ0.09mのピットP_4を検出した。壁溝および炉は検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層、Ⅵ層明褐色土層、Ⅶ層暗茶褐色土層が堆積している。遺物は北壁に近いⅣ層上面を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1で頸部に刻目が認められる。壺形土器は2、3で、2は底部破片、3は頸部と口縁部に縄文帯が認められる土器である。

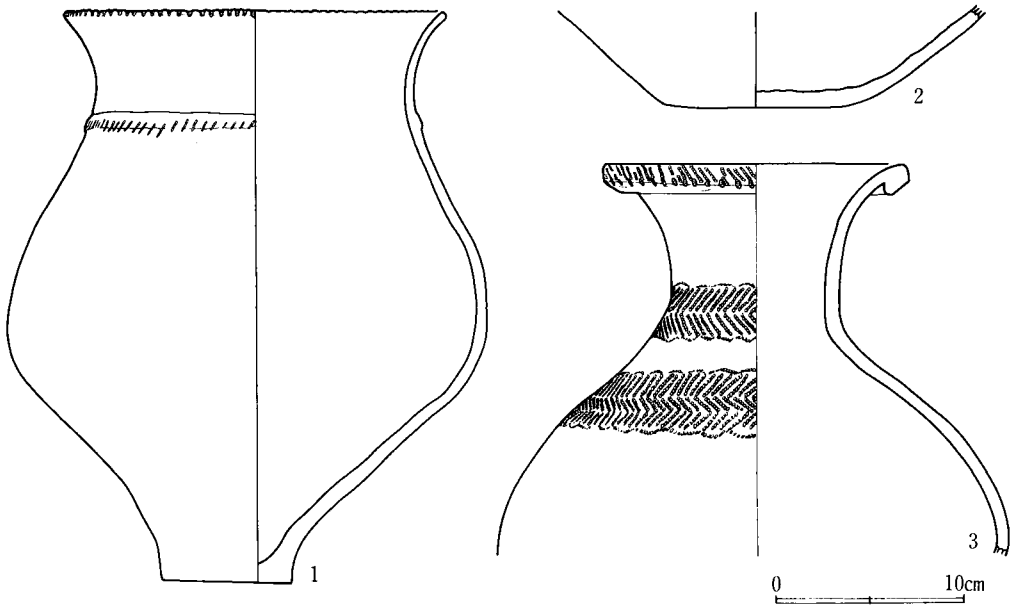


図220　D162号遺構出土遺物実測図

D162出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	29.6	20.0	6.8	略完形	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
2	壺	—	—	9.4	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	軟弱	淡茶褐色	
3	壺	—	15.3	—	½	羽状縄文 ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡灰褐色	

第4節　第III群の遺構と遺物

弥生時代の第III群は竪穴住居跡3軒、方形周溝墓1基で構成される群である。S・T－11の地域において検出した。

この地域は台地南端部が土砂崩れ等によって現況を呈しているが、旧時は須久茂谷津に突出した台地を形成していたと推定できる。したがって、この部分に遺構が広がっていた可能性が充分考えられるところである。

住居跡が3軒であるため群としての特徴を把握することはできないが、本来はII群で見られた特徴を呈していた傾向が窺える。

III群が占地する地域には古墳時代中期の第II群の工房跡群が近接して立地している関係で、D130の覆土中からは多量の剝片などと伴に未成品等が出土していたりして、その出土も特異な状況を呈していると言えよう。このことについては遺構の項で報告したい（図221、図版37－2、38－1、39－2）。

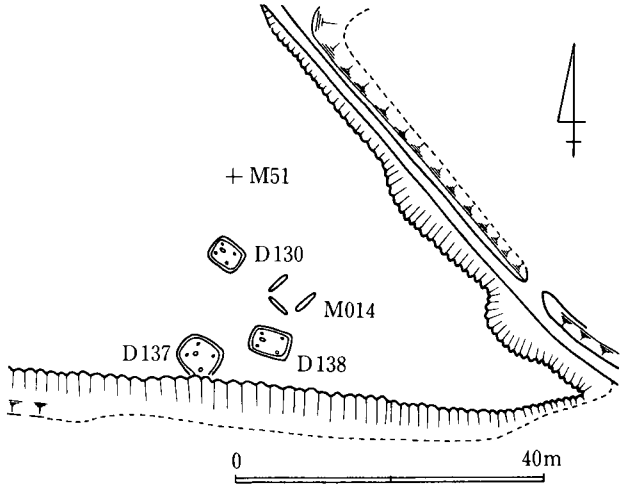


図221 弥生時代第III群遺構分布状況図

1．D130号遺構（図222～226、図版59－1、60）

III群の住居群内において北側に位置している、古墳時代中期第II群のD131が近接しているため覆土中から多量の滑石剝片等が出土している。

遺構　長径4.68m、短径3.52mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.48m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況である。柱穴は対角線より外側に存在してP_1～P_4を検出した。径平均0.25m、深さ平均0.26m以上0.43m以下を計る。また南壁に近く径0.13m、深さ0.08mの小ピットP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央より北壁に寄って位置しており、P_1、P_2の中間にある。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.05mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層褐色土層、V層ローム粒混入暗褐色土層、VI層黄褐色土層が堆積している。遺物の内、滑石剝片等は1,096点出土している。各層位ごとの出土数等は別表のとおりである。I層を除いた部分から

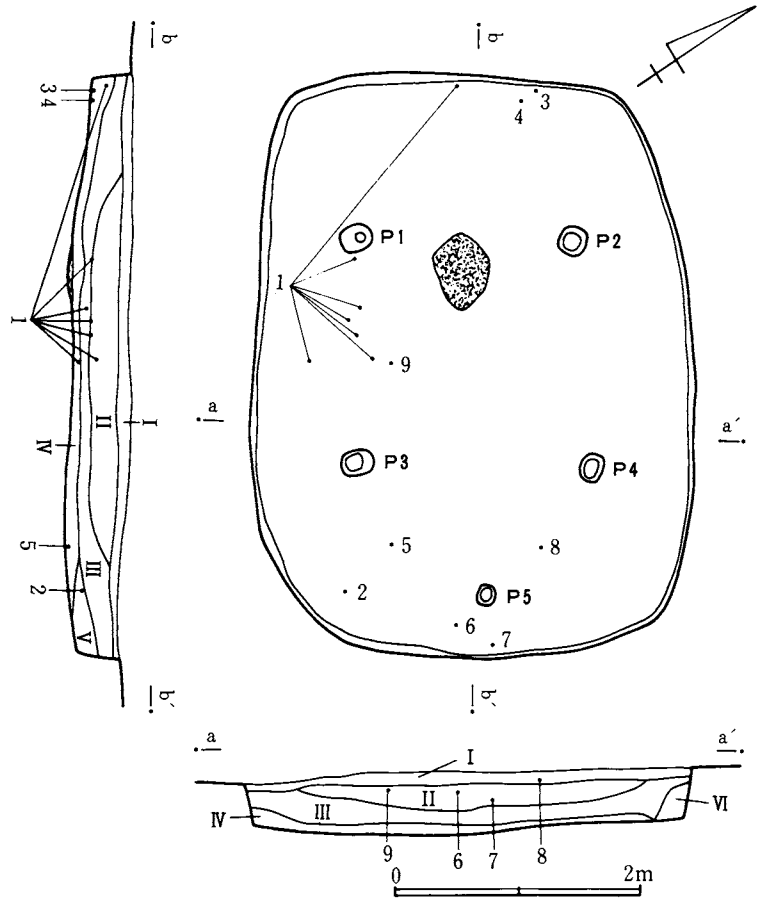


図222 D130号遺構実測図

の出土はII層が若干多いものの出土量の6.3%である。これに対してI層出土は全体の93.7%とほぼ100%に近い量を出土している。そこでI層の堆積状況を今一度瞥見すれば、他の層が擂鉢状の自然堆積として判断しても良い状況を呈しているのに対し、I層は約0.1mの厚さで住居全体を被覆しており、明らかに他層と識別できよう。かかる状況はII層が堆積した段階で整地等の作業が行われたための所産と考えて差し支えなく、剝片等の廃棄についてD131の特異な行動が把握できる。土器は住居跡西部分のIII層を中心に出土している。

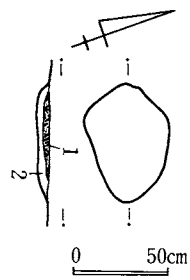


図223 D130号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

出土遺物 遺物は、甕、鉢形土器と石製品がある。甕形土器は1～3、5である。1は底部が欠損するが胴部に刻目が施される小形の甕、2は波状を呈す口縁部の破片、3、5は附加条

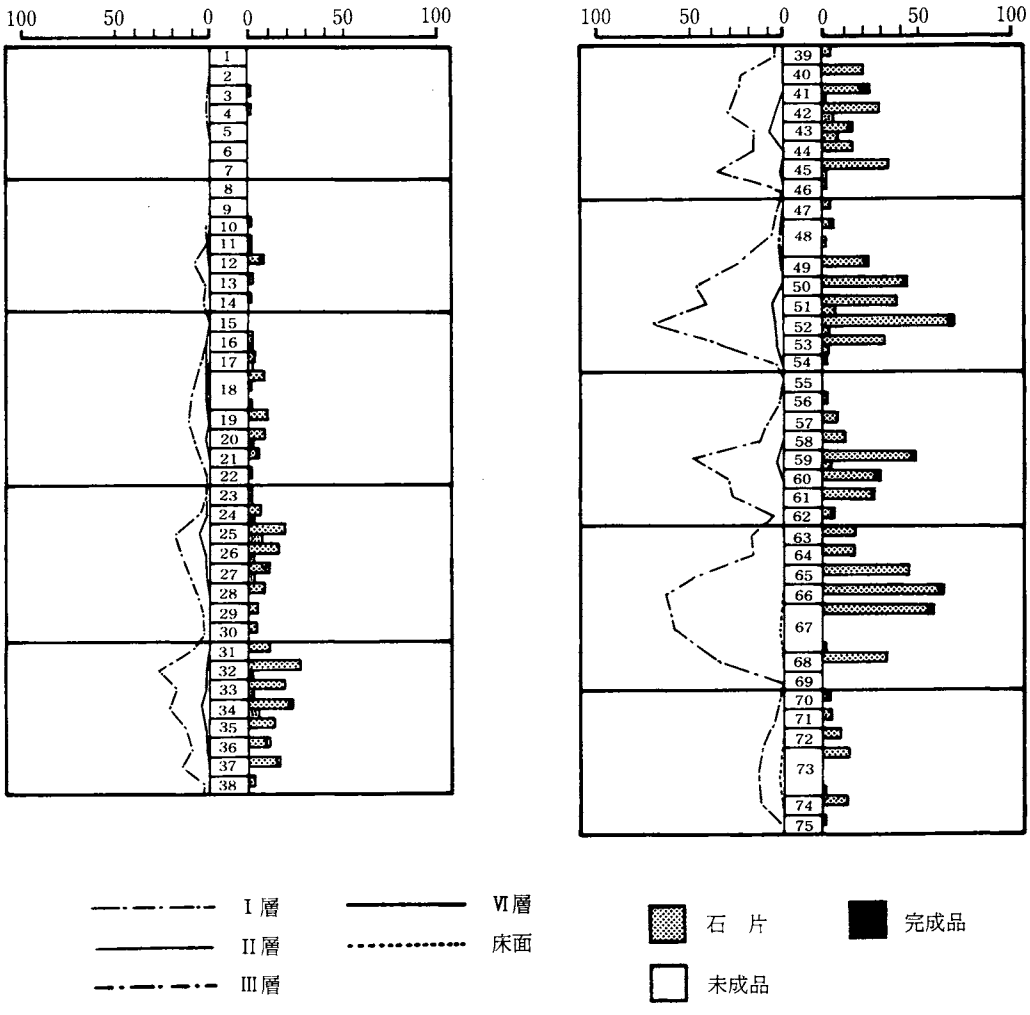


図224 D130号遺構石製遺物層位別分布図

縄文が施される胴部の破片である。鉢形土器は4で縄文が施されている。石製品は6～10である。6、7は臼玉未成品、8、9は臼玉、10は荒割された滑石である。

D130出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	13.6	10.7	5.4	略完形	ヘラナデ	小石	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	鉢	—	—	—	胴部破片	斜縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

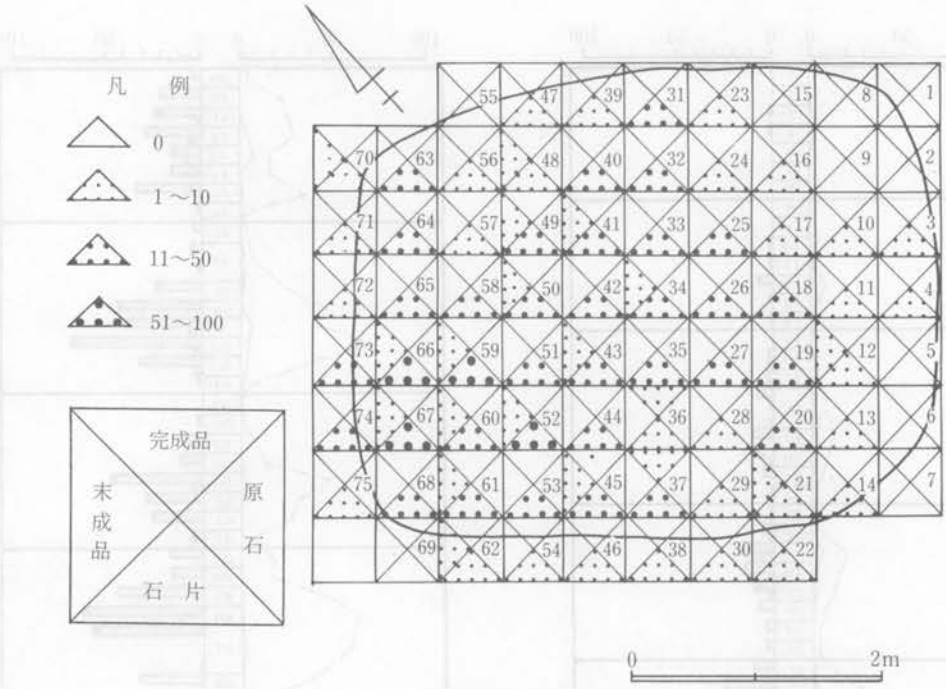


図225　D130号遺構石製遺物平面分布模式図

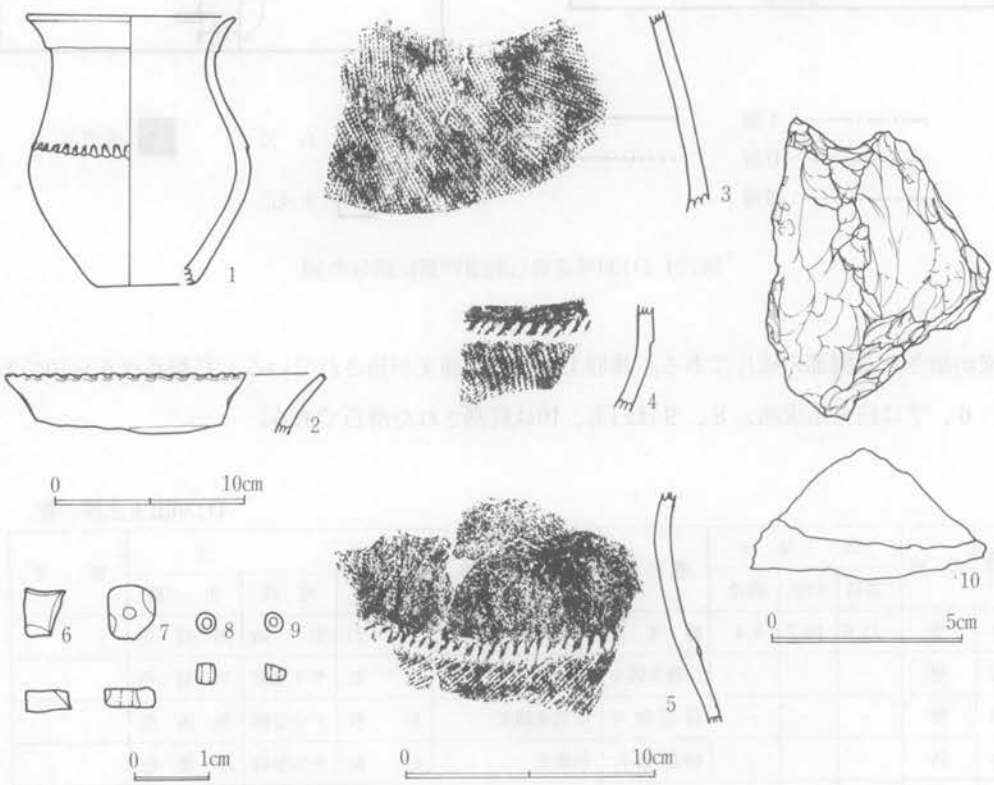


図226　D130号遺構出土遺物実測図

D130層位別石製遺物集計

層位	原石	石片	未成品 臼玉	未成品 その他	完成品 臼玉	完成品 剣形	完成品 勾玉	完成品 円板	合計
I	—	999	27	—	2	—	—	—	1.028
II	—	64	—	—	—	—	—	—	64
III	—	1	—	—	—	—	—	—	1
V	—	1	—	—	—	—	—	—	1
VI	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	2	—	—	—	—	—	—	2
合計	—	1.067	27	—	2	—	—	—	1.096

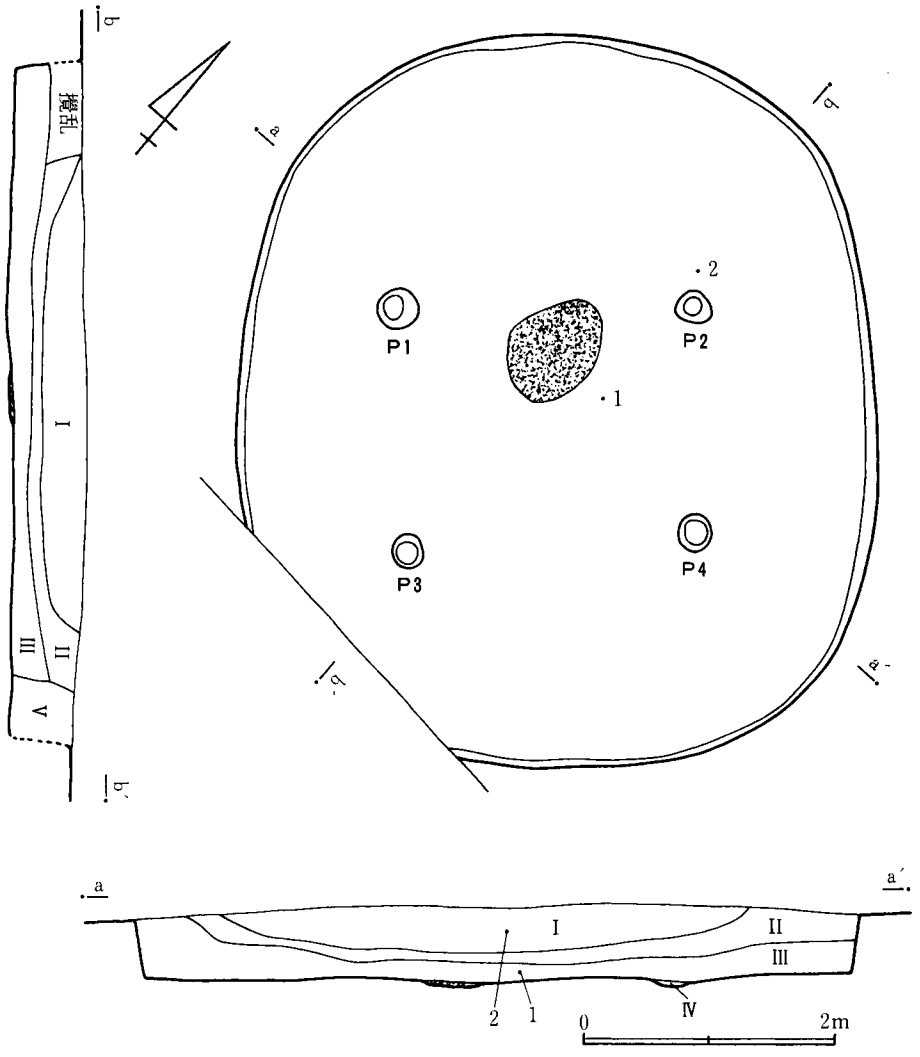


図227 D137号遺構実測図

2．D137号遺構（図227～230、図版59－2、3）

III群の住居群内において西側に位置している。遺構の南側は土砂崩等の際に破壊されている。覆土を掘り下げ床面に近くなった部分で多量の炭化物を検出した。

遺構　長径5.16m、短径5.12mで楕円形の平面形を呈す竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.56m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻で、特に中央部分が顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.28m、深さ平均0.6m以上0.8m以下を計るものである。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より若干北側に寄って位置している。長径0.86m、短径0.7m、深さ0.13mを計り、厚さ0.09mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗褐色土層、III層茶褐色土層、IV層明茶褐色砂質土層が堆積している。遺物は少なく、覆土中からの出土である。

出土遺物　図示できる遺物は2点のみである。1は甕形土器底部破片で木葉痕が認められる。2は滑石製の勾玉である。

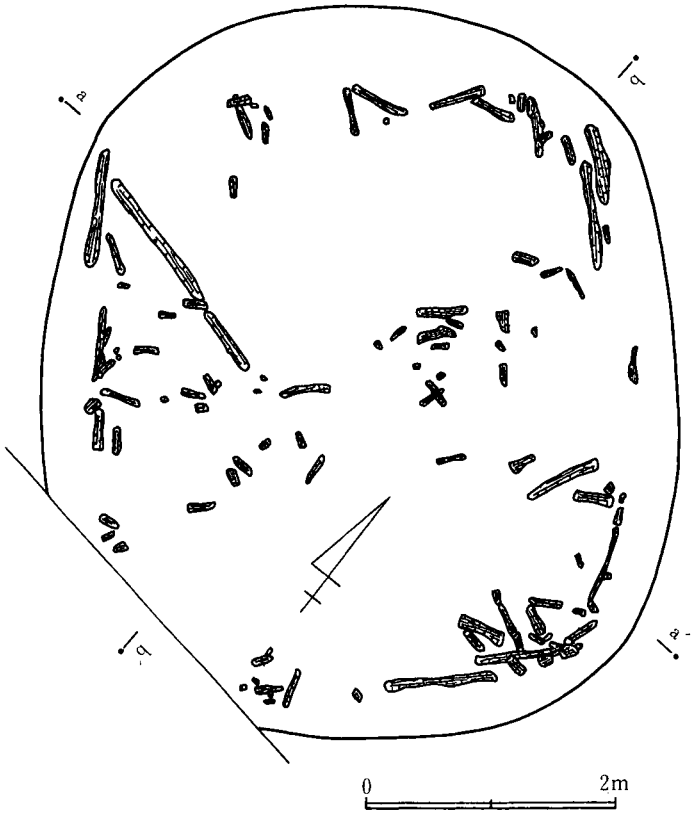


図228　D137号遺構炭化物出土状況図

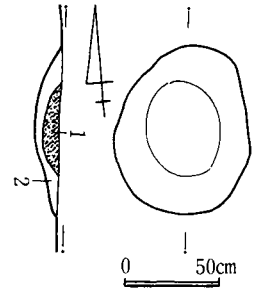


図229　D137号遺構炉跡実測図
1　焼土層
2　褐色土層

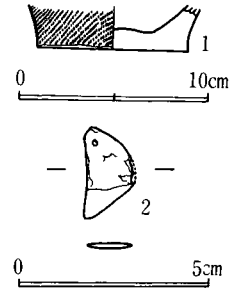


図230　D137号遺構出土遺物実測図

D137出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	8.0	底部のみ	多条縄文	小石	やや堅緻	黒褐色	木葉痕

3．D138号遺構（図231～233、図版59—4）

III群の住居群内において東側に位置している。遺構の西側に芋穴状の攪乱を受けている。床面近くまで覆土を掘り下げた段階で炭化物等を検出した。

遺構　長径5.6m、短径4.16mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し

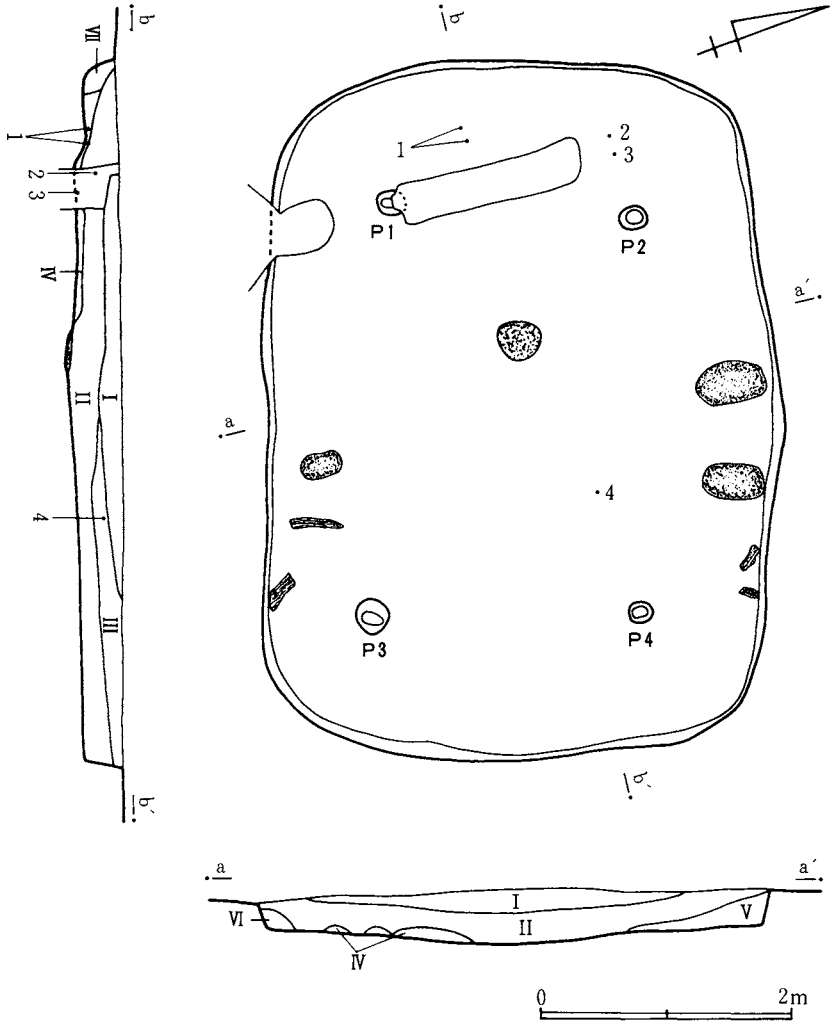


図231　D138号遺構実測図

0.44m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が堅緻な状況を呈している以外は軟弱である。柱穴はほぼ対角線上に位置しておりP1～P4を検出した。径平均0.21m、深さ平均0.48m以上0.50m以下を計る。床面の北側、南側部分に炭化物、焼土の範囲を検出した。焼失した住居であると判断できる。壁溝は検出できなかった。

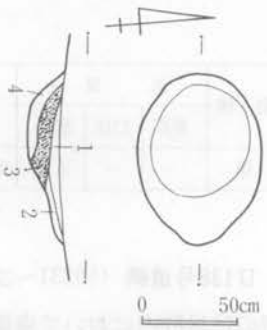


図232 D138号遺構炉跡実測図
1 黒褐色土層
2 焼土粒混入赤褐色土層
3 焼土層
4 褐色土層

炉 住居中央部より若干北側に寄って位置している。長径0.9m、短径0.65m、深さ0.19mを計り、厚さ0.09mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入褐色土層、Ⅵ層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は少なく各層より散発的に出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1で附加条縄文のある胴部破片である。壺形土器は2～4で、2、3は肩部破片、4は口縁部破片である。

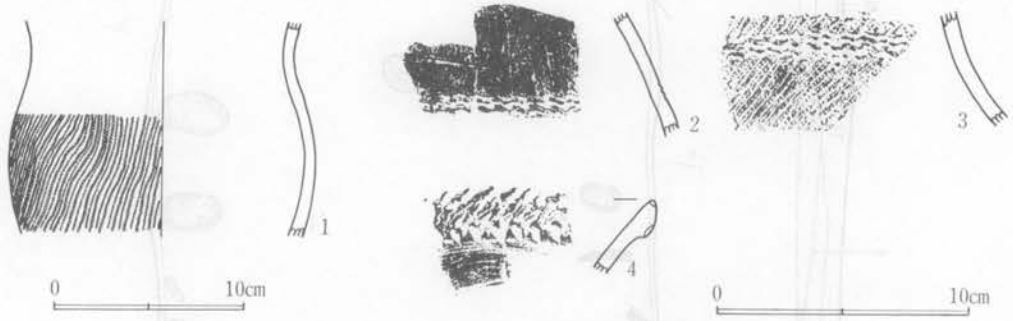


図233 D138号遺構出土遺物実測図

D138出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	1/4	ヘラナデ 附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	壺	—	—	—	胴部破片	ヘラナデ S字状結節文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	壺	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	壺	—	—	—	口縁部破片	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

4．M014号遺構（図234、235、図版60－1、2）

III群の遺構群内において東側に位置している。東斜面上に構築された関係で北東部分が検出できない。

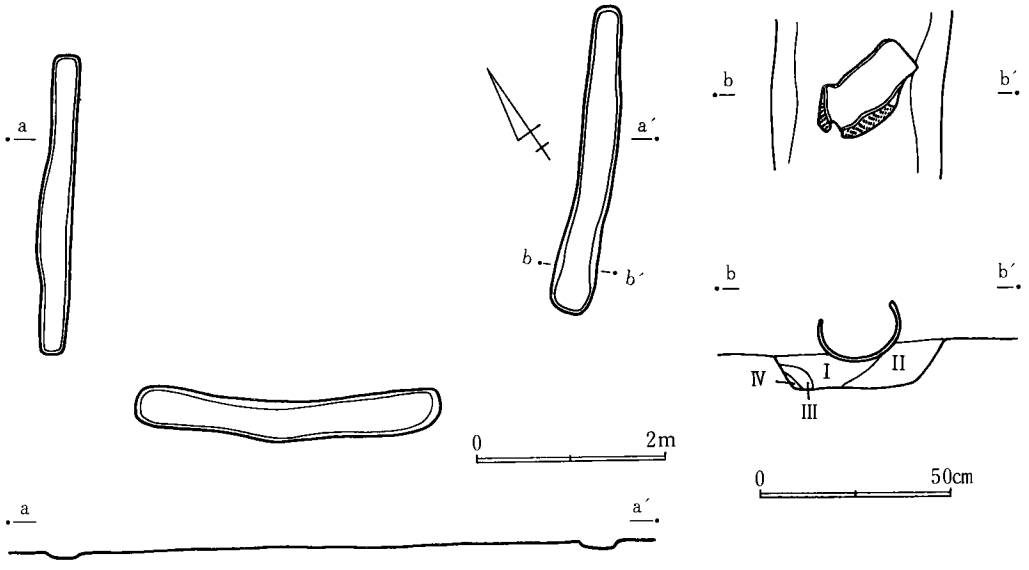


図234 M014号遺構実測図

遺構　幅0.4m、深さ0.06m、長さ3.18mの溝によって区画される方形周溝墓である。溝の掘り込みが浅いためか、全体に遺存状況は良好でない。特に北東部分は斜面の影響もあり、溝は検出できなかった。溝は接合することなく廻っているが、内部には土壙は検出できなかった。溝内部にも施設はない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が溝内に堆積しており、南辺の溝から甕形土器が1点出土している。

出土遺物　遺物は甕形土器1点のみである。広口を呈する口縁部で、胴部及び口唇部直下には附加条縄文が施されている。

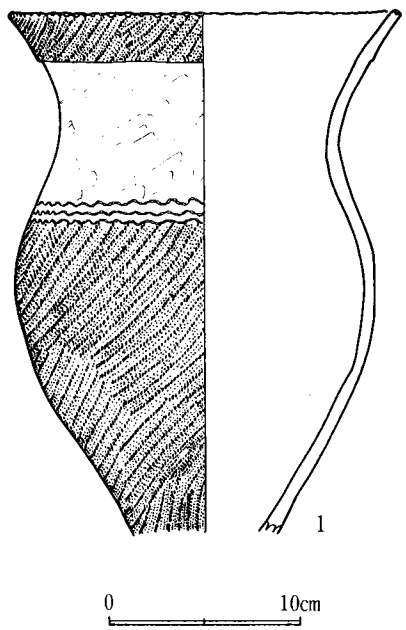


図235 M014号遺構出土遺物実測図

M014出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	24.0	—	3/4	附加条縄文 S字状結節文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

第5節　第IV群の遺構と遺物

弥生時代のIV群は竪穴住居跡69軒で構成される群である。69軒の内32軒は古墳時代前期の住居群であるが、弥生時代から古墳時代にかけて間断なく集落が推移していると判断できる関係で、両時代を一括して第IV群としたものである。ただし、便宜的な資料の取り扱いのために、弥生時代後期をIV群A、古墳時代前期をIV群Bとした。

IV群A、Bは、O・P・Q・R・S・T－7・8・9・10の地域において検出した。住居跡が多く所在し、しかもかなり纏りのある分布状況を呈している。さらに広がりをもっていることが、ヲサル山遺跡の発掘調査で明らかになっている。よって、検出した住居跡がすべてではなく、ヲサル山遺跡の関連において最終的に考える必要がある。

IV群AとBの位置的な関係は、IV群の中で明確に区分することが可能である。群の北側には弥生時代後期のAが、南側には古墳時代前期のBが位置しており、いずれも東西に広がりを呈して分布している。特に近接するA、Bの住居跡からは弥生時代後期と古墳時代前期に比定できる遺物を相互に出土する例も認めることができる。

住居の形状や規模はかなり変化に富んでおり、大形住居と小形住居の関係も窺えるような状況が認められる。また、床面が軟弱で、生活の場としての住居と考え難いような住居跡が有ることも一つの特徴とすることができよう（図236、図版37－2、38、39）。

1．D098号遺構（図237～239、図版61－1、75）

IV群Aの住居群内において南西部分に位置し、IV群Bに混入するような状況にある。D181が近接している。

遺構　長径4m、短径3.8mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.52m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が若干堅緻な状況が認められるが、他の部分は軟弱な状況である。柱穴は対角線上より若干南側に位置してP_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.48m以上0.63m以下を計る。壁溝は検出できなかった。

炉　北側中央部に近く、P_1、P_2の間に位置している。長径0.53m、短径0.36m、深さ0.08mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層褐色土層

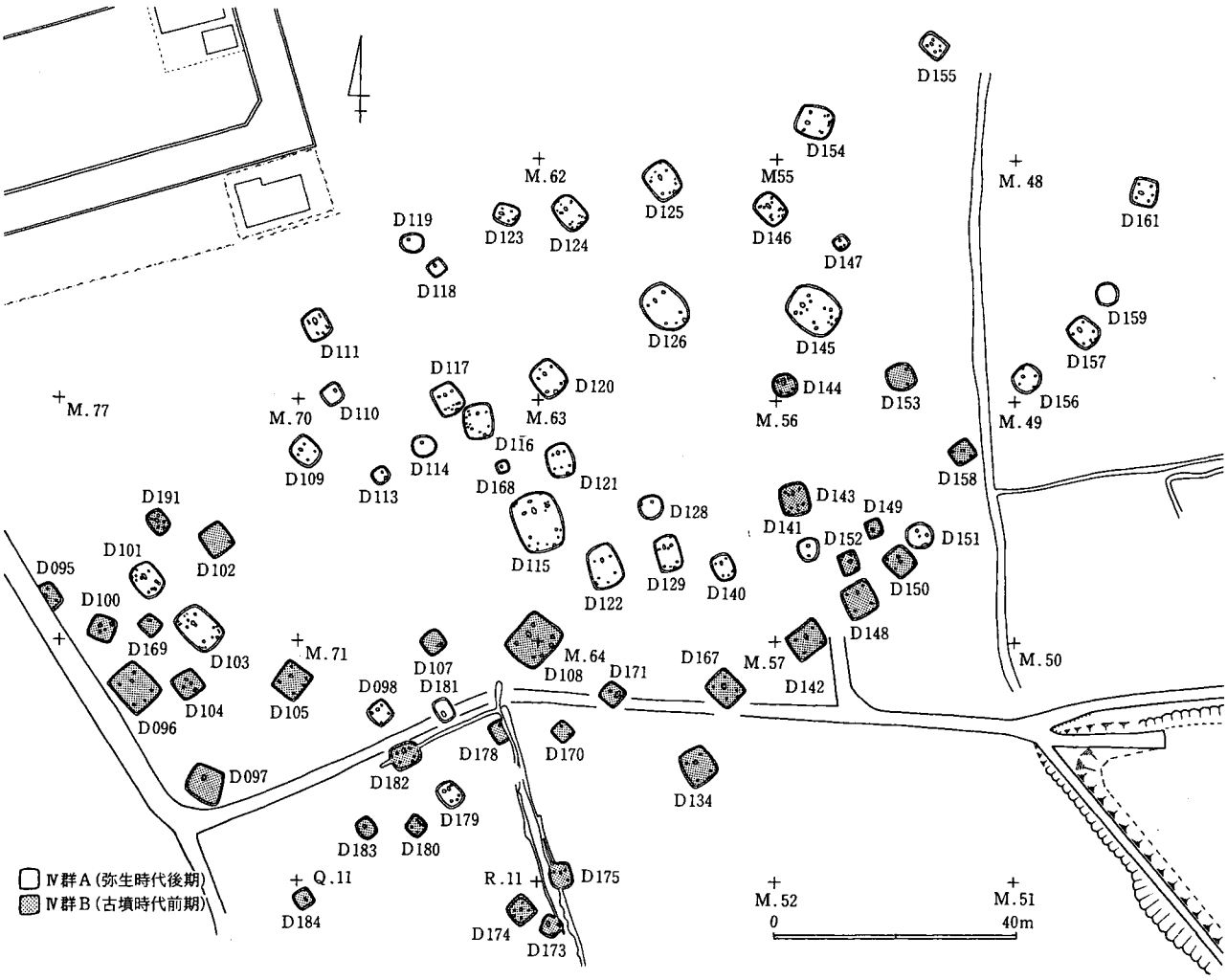


図236 弥生時代第Ⅳ群遺構分布状況図

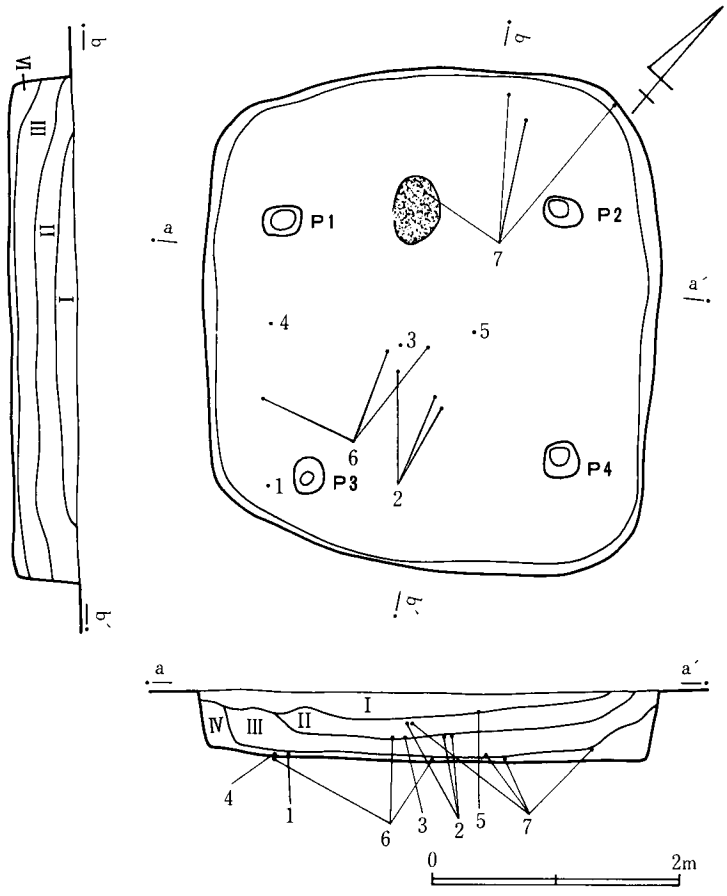


図237 D098号遺構実測図

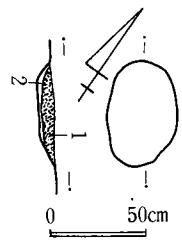


図238 D098号遺構
炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

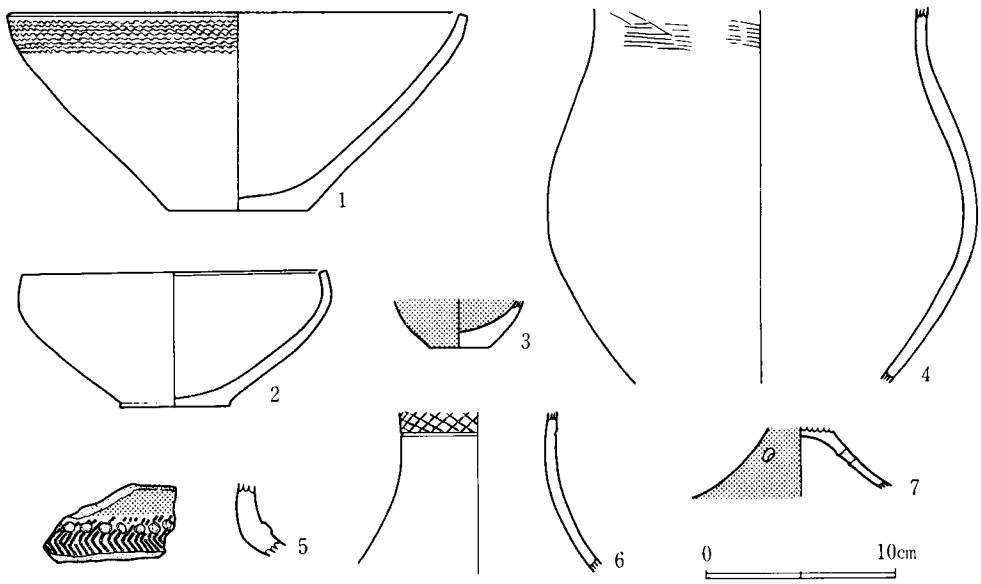


図239 D098号遺構出土遺物実測図

が堆積しており、床面上、あるいはII層から出土している。

出土遺物　遺物は、鉢、甕、壺、高坏形土器がある。鉢形土器は1～3で、1は「S」字状結節文を多用している。2、3は素文で3は赤彩される。甕形土器は4でハケ目が認められる。壺形土器は5、6で、いずれも頸部破片である。高坏形土器は7で脚に孔がある破片である。

D098出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	10.1	23.0	7.0	½	S字状結節文 ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	(内)明褐赤色 (外)暗灰色	
2	鉢	6.9	15.7	5.6	½	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
3	鉢	—	—	3.0	底部のみ	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩
4	甕	—	—	—	⅓	ハケ目の上に軽い ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
5	壺	—	—	—	頸部破片	円形浮文 羽状縄文	砂粒	やや堅緻	(外)茶褐色 (内)褐色	赤彩
6	壺	—	—	—	頸部のみ	網目状撚糸文 ヘラナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
7	高坏	—	—	—	脚部破片	外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩

2．D101号遺構（図240～242、図61－2、75）

IV群Aの住居群内において最も西側に位置し、D103が近接している。

遺構　長径5.96m、短径5.08mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.64m掘り込んでいる。直下には北側と南側の一部に幅0.15m、深さ0.05mを計り、長さ1mの壁溝がある。床面は全体に堅緻であるが、特に南東部分が顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置してあり、P_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.36m以上0.7m以下を計る。また、南壁に近くP_5、P_6、北壁に近くP_9、P_{10}、P_1とP_3の間にP_8、P_2とP_4の間にP_7を検出した。この内P_8が深さ0.5mを計るが、他は0.7m前後である。

炉　住居中央部より北壁に近く、P_1、P_2の間に検出した。長径1.4mを計るもので、3段に掘り込まれている。重複するものであるか判断し難い。焼土は約0.06mを堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層褐色土層、

D101出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	14.8	13.8	—	⅔	内外面粗いナデ	砂粒	軟弱	(外)黒褐色 (内)黒褐色	胴部下半二次的に火を受ける
2	鉢	9.0	5.5	4.4	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明乳褐色	
3	鉢	7.2	5.2	4.4	完形	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	堅緻	褐色	
4	壺	—	—	5.0	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)黒色	

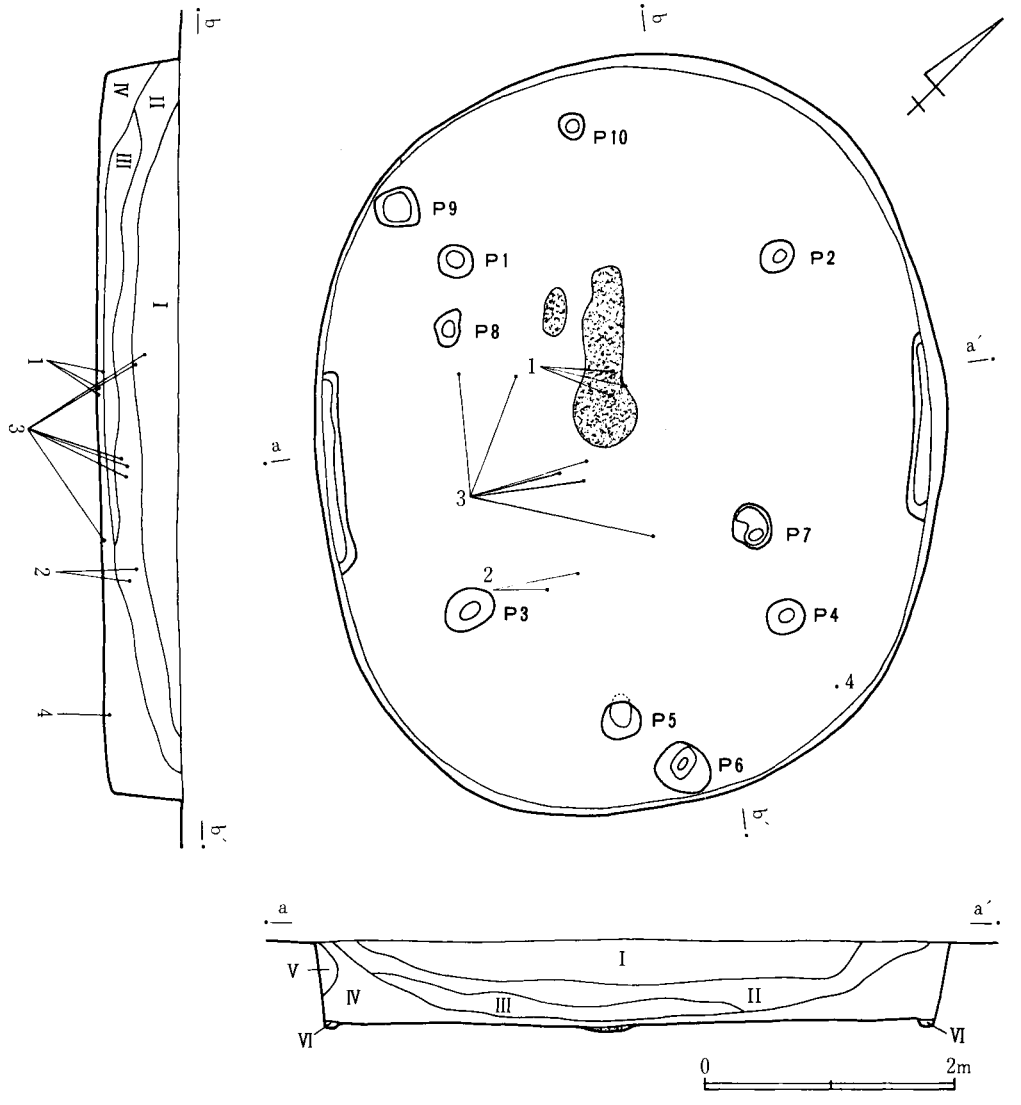


図240 D101号遺構実測図

V層ロームブロック層、VI層暗褐色土層が堆積しており、遺物は床面上とI層、II層から出土している。床面上のものは炉内である。

出土遺物 遺物は、台付甕、鉢、壺形土器がある。台付甕形土器は1で台部が欠損している。鉢形土器は、2、3で小形な甕のようで、3は口縁部に小孔があく。4は壺形土器の底部破片である。

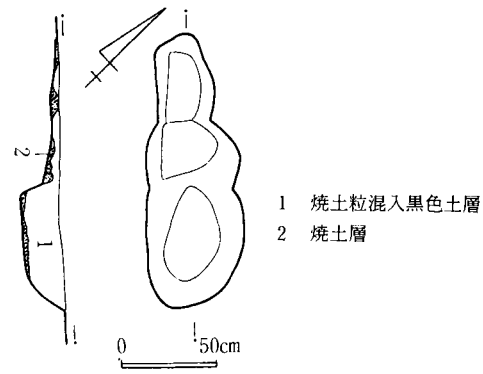


図241 D101号遺構炉跡実測図

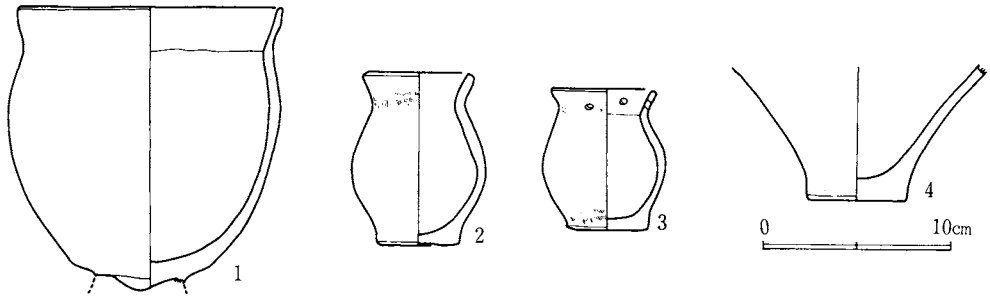


図242 D101号遺構出土遺物実測図

3．D103号遺構（図243～245、図版61－3）

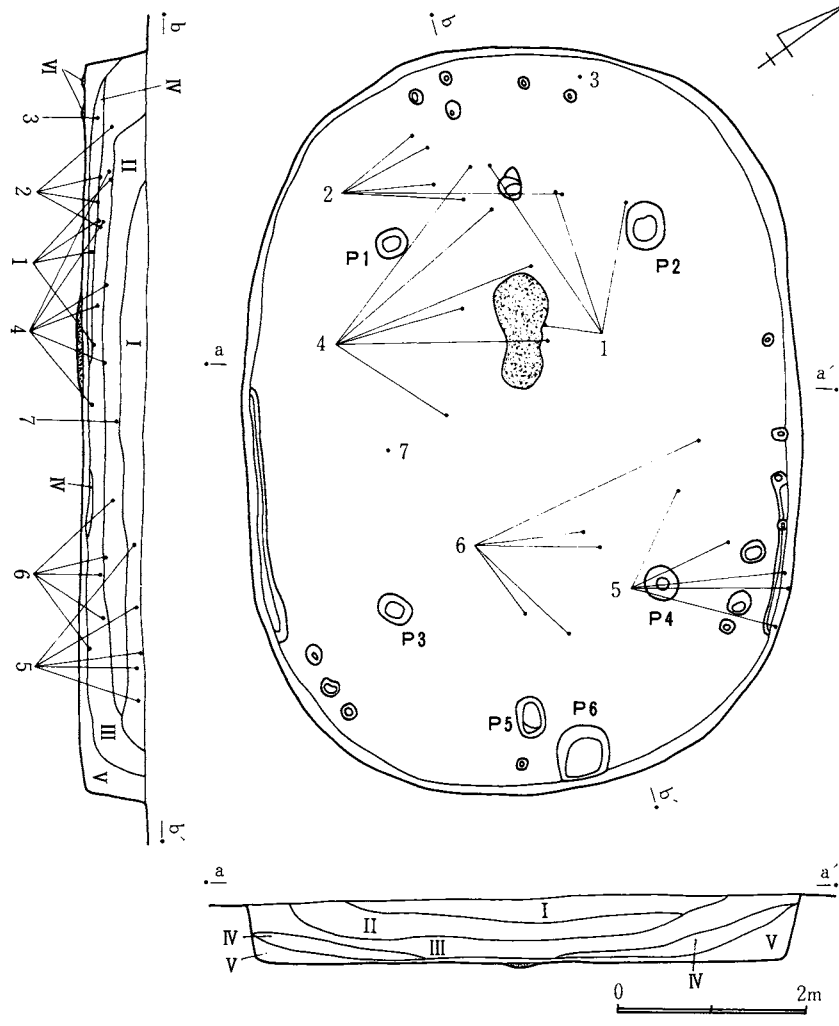


図243 D103号遺構実測図

IV群Aの住居群内において西側部分に位置し、D101が近接している。

遺構　長径4.92m、短径4.68mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈し0.4m掘り込んでいる。北側と南側の一部に幅0.1m、深さ0.05mを計る壁溝が2か所認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置してありP1～P4を検出した。径平均0.35m、深さ平均0.5m以上0.7m以下を計る。また南壁に接し径0.6m、深さ0.3mのピットP6を検出した。またP6に近接して径0.3m、深さ0.28mを計るP5を検出した。その他壁際に小ピットを多数検出したが壁全体にあるものでなく、部分的にしか検出できない。

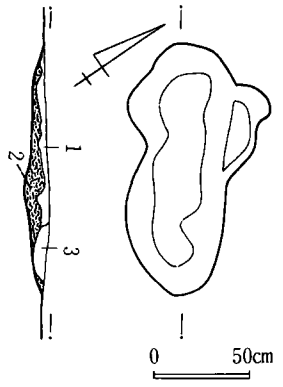


図244　D103号遺構炉跡実測図

1　焼土粒混入黒色土層
2　焼土層
3　黒褐色土層

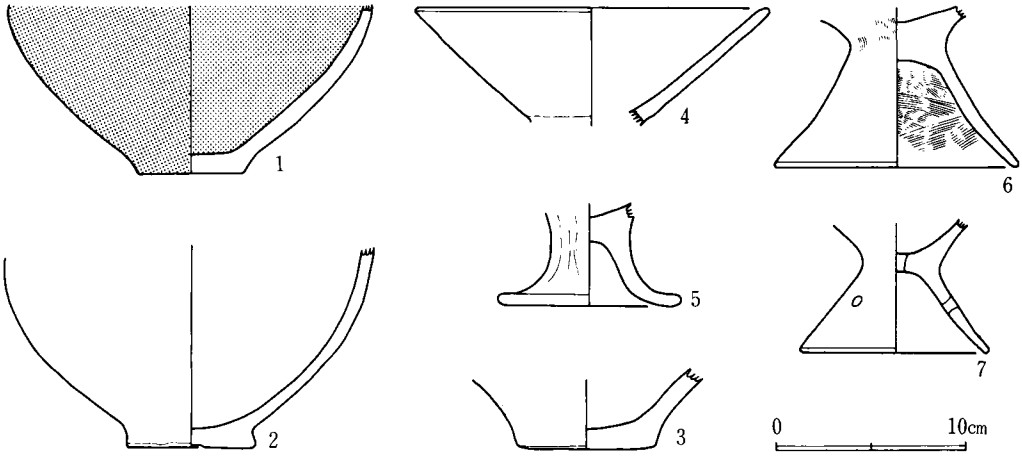


図245　D103号遺構出土遺物実測図

D103出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	—	—	5.4	胴下部と底部	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明茶褐色	赤彩
2	壺	—	—	6.4	胴下部と底部	内面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗褐色	底部二次的に火を受ける
3	壺	—	—	7.4	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	明茶褐色	
4	高坏	—	18.4	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
5	高坏	—	—	9.8	脚部のみ	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	高坏	—	—	12.8	脚部のみ	内面ハケ目 外面ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
7	器台	—	—	9.7	3/3	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡褐色	孔は3個

炉　住居中央部より北側に寄り、P_1、P_2の間に位置している。長径1.3m、短径0.5mでかなり不整な形を呈しており、約0.15m掘り込んでいる。焼土は厚さ0.08m堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒色土層、Ⅴ層ローム粒混入褐色土層、Ⅵ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中より出土しており床面上の出土はない。

出土遺物　遺物は、鉢、壺、高坏、器台形土器がある。鉢形土器は1で、赤彩される。壺形土器は2、3で、いずれも底部の破片である。高坏形土器は4～6である。4は坏部、5、6は脚部である。5は古墳時代後期の土器である。器台形土器は7で脚部に小孔がある。

4．D109号遺構（図246～249、図版62－1、2、75）

Ⅳ群Aの住居群内において北西部分に位置し、D110が近接している。覆土を掘り下げて床面

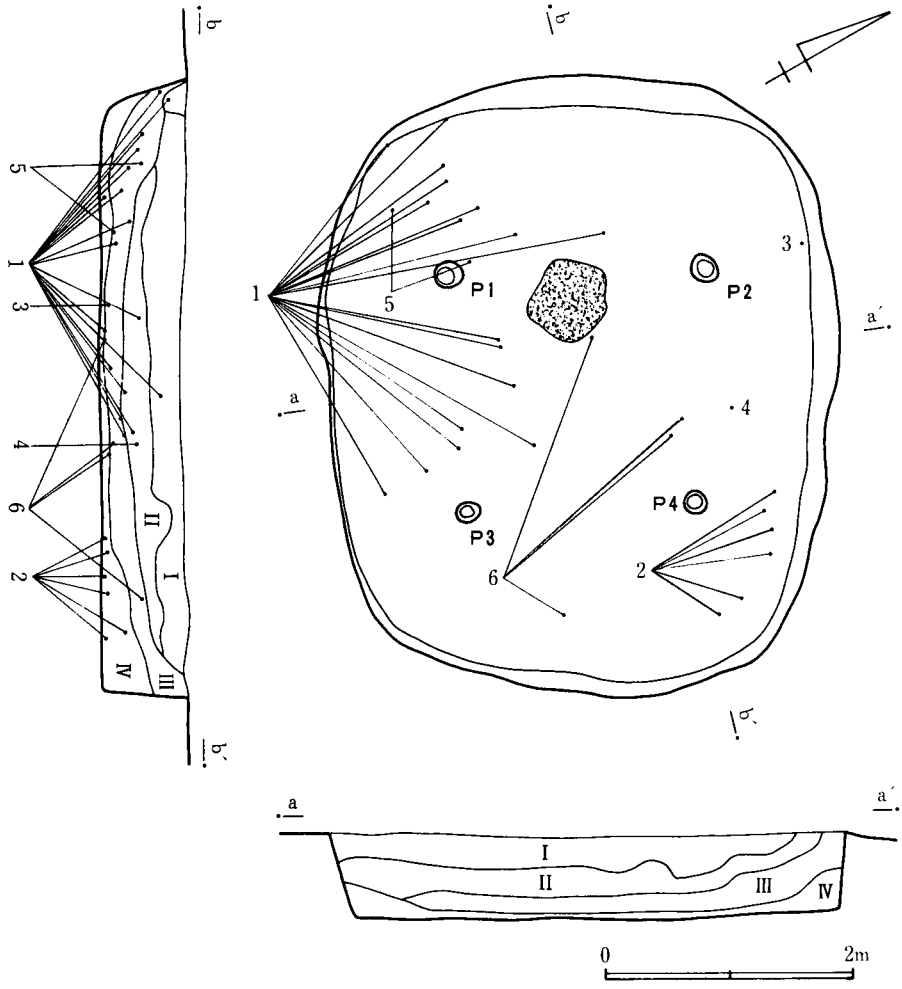


図246　D109号遺構実測図

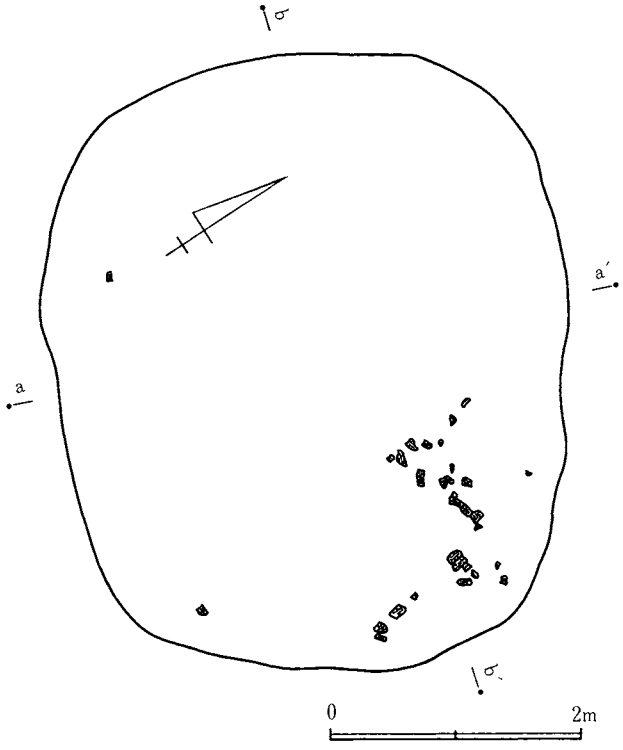


図247 D109号遺構炭化物出土状況図

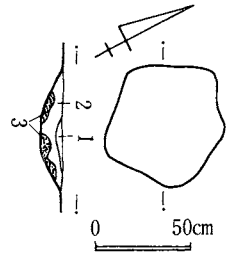


図248 D109号遺構炉跡実測図

1 褐色土層
2 黒色土層
3 焼土層

に近くになった段階で炭化物、焼土塊を検出した。よって、焼失した遺構であることが確認できた。

遺構 長径4.84m、短径3.84mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.64m掘り込んでいる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面の南東部分に炭化物、焼土塊が小規模で、しかも散乱した状況を呈して出土している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.18m、深さ平均0.42m以上0.55m以下を計る。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北側に寄って、P_1、P_2の間に検出した。長径0.62m、短径0.58mで不整な形状を呈している。深さ0.12m掘り込んでおり、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒色土層、Ⅳ層褐色土層が堆積しており、遺物は床面上の出土はなくⅢ、Ⅳ層を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1～5である。1は輪積痕を残すもの、2、3は口唇部に刻目が有る口縁部破片、4、5は底部破片である。壺形土器は6で頸部以下を欠損している。頸部と口唇部直下に縄文が施されている。

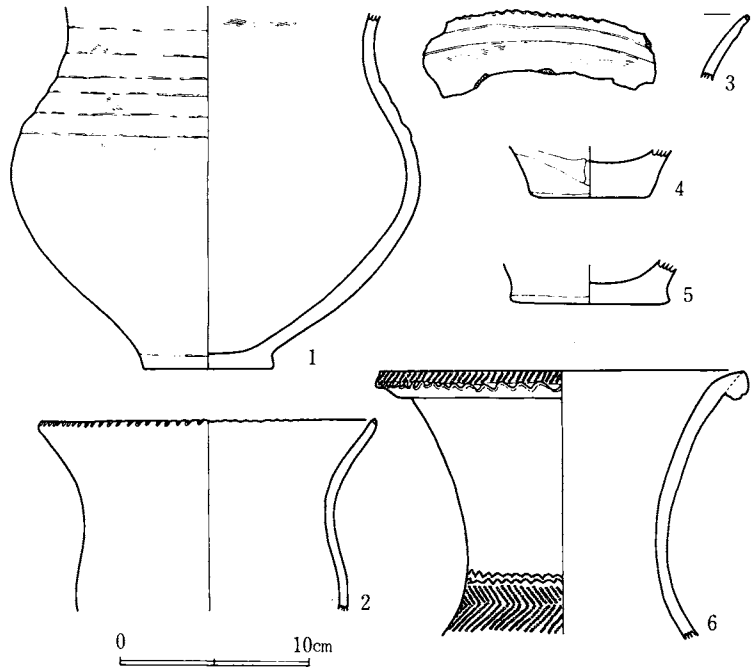


図249 D109号遺構出土遺物実測図

D109出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.8	⅔	輪積痕 ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)灰黒色	胴部中位にスス付着
2	甕	—	17.6	—	½	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	胴部スス付着
3	甕	—	—	—	口縁部破片	軽いハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	6.4	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明茶褐色	
5	甕	—	—	8.4	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
6	壺	—	19.4	—	口縁部と頸部	S字状結節文 羽状縄文	砂粒	堅緻	明灰褐色	

5．D110号遺構（図250～252、図版62－3、75）

Ⅳ群Aの住居群内において北西部分に位置し、D109、D111が近接している。遺構の東側と西側部分が円形の攪乱を受けている。

遺構　長径4m、短径3.76mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱であり、踏み固められた状況を呈していない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄った位置で検出した。長径0.3m、短径0.25m、深さ0.04mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

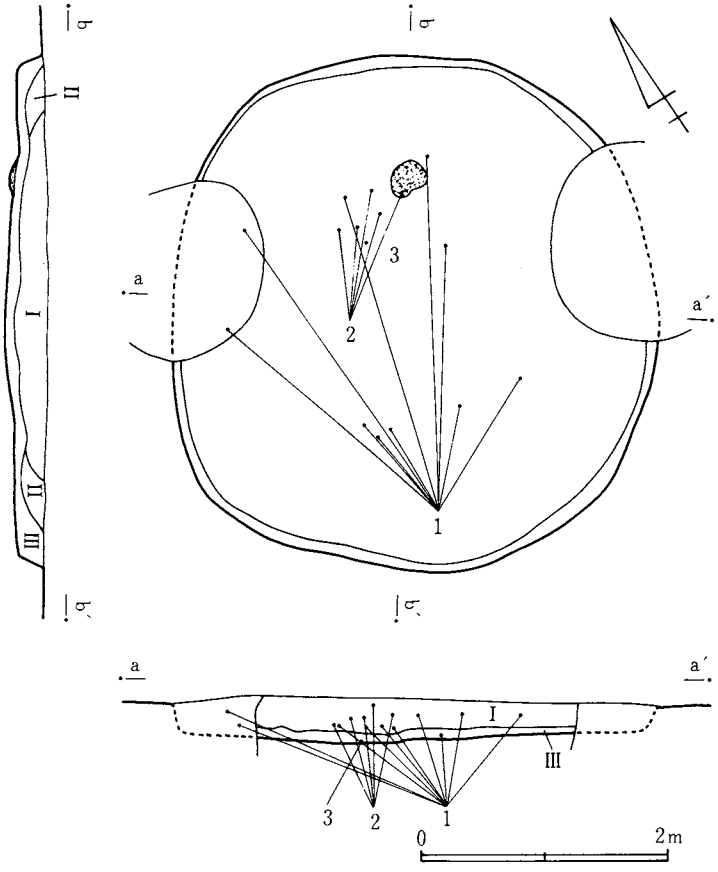


図250 D110号遺構実測図

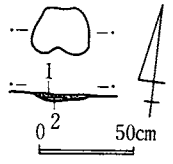


図251 D110号遺構
炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

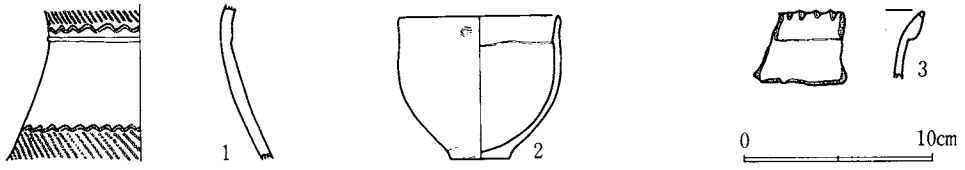


図252 D110号遺構出土遺物実測図

D110出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	胴部のみ	S字状結節文 RL斜縄文	小石	堅緻	茶褐色	
2	鉢	7.35	8.3	3.0	⅓	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	縄文原体刻目 ヘラナデ	砂粒	堅粒	黒褐色	

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、壺、鉢、甕形土器がある。壺形土器は1で、頸部の破片である。鉢形土器は2で小形なもので短かい口縁部には小孔があく。甕形土器は3で刻目のある口縁部破片である。

6．D111号遺構（図253～255、図版63－1）

Ⅳ群Aの住居群内において北西部分に位置し、D110が近接している。床面の精査段階で柱穴を8か所検出した。8か所の柱穴は2穴一対のごとき状況を呈しているが、細部にわたる検証の結果、修改築に伴う所産であることが判明した。したがって、修改築前の遺構の規模は柱穴によって推定できるだけである。

遺構　長径5m、短径4mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.64

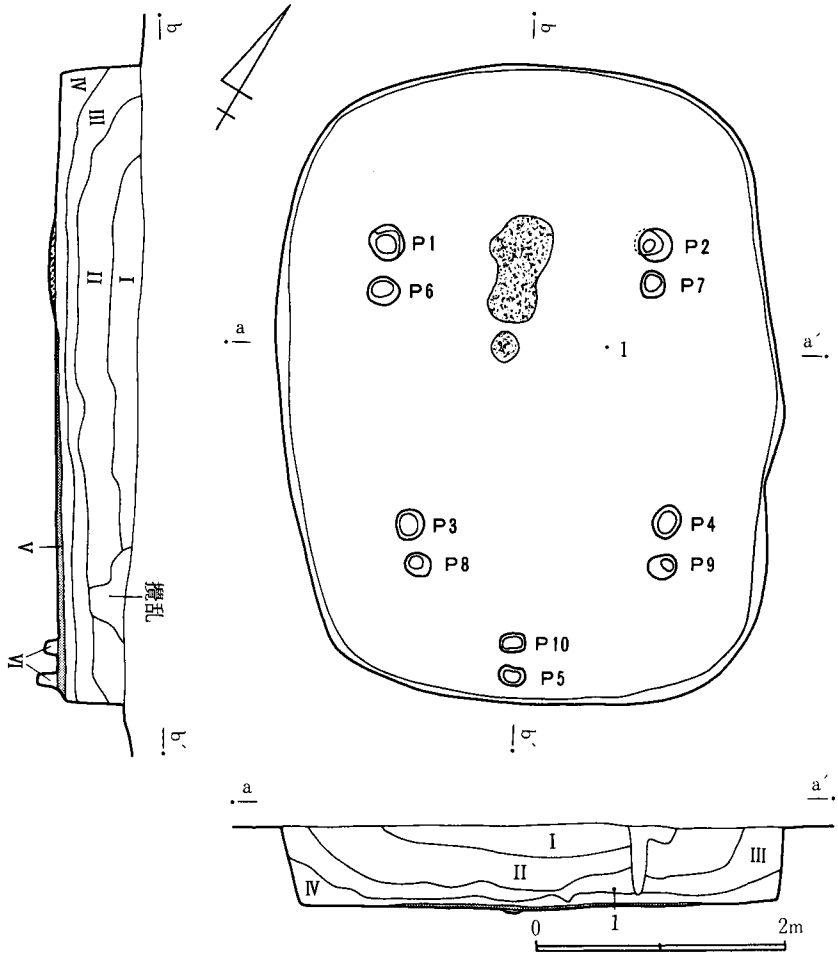


図253　D111号遺構実測図

m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置してあり、P_1～P_4を検出した。径平均0.28m、深さ平均0.59m以上0.75m以下を計る。また、南壁に近くP_5を検出した。径0.2m、深さ0.18mである。

修改築前の住居規模は柱穴P_6～P_9をもって推定すれば長径4m前後であったと考えられる。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径0.85mを計り、深さ0.12mを掘り込んで厚さ0.05mの焼土が堆積している。修改築前の炉は、この南方に位置する長径0.25m、深さ0.02mのものが相当すると思われる。また、場合によっては一部重複するものの炉の位置は新旧あまり変わりないかとも考えられる。

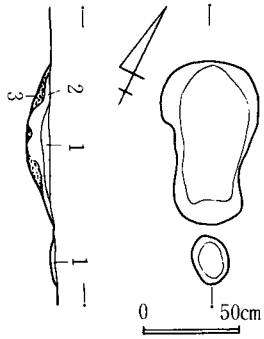


図254　D111号遺構炉跡実測図

1　焼土粒混入黒色土層
2　焼土粒・炭化粒混入褐色土層
3　焼土層

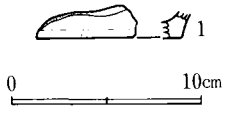


図255　D111号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層黒色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層、V層黄褐色土層、VI層茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中より若干出土した程度である。

出土遺物　図示可能な遺物は甕形土器底部の破片1点のみである。木葉痕が認められる。

D111出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	底部破片	——	砂粒	堅緻	褐色	

7．**D113号遺構**（図256、257、図版63－2）

IV群Aの住居群内において北西部分に位置し、D114が近接している。芋穴などによる攪乱を受けている。

遺構　径3.16mを計るほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し、0.15m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に位置している。長径0.25m、短径0.23m、深さ0.03mで、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層が堆積している。

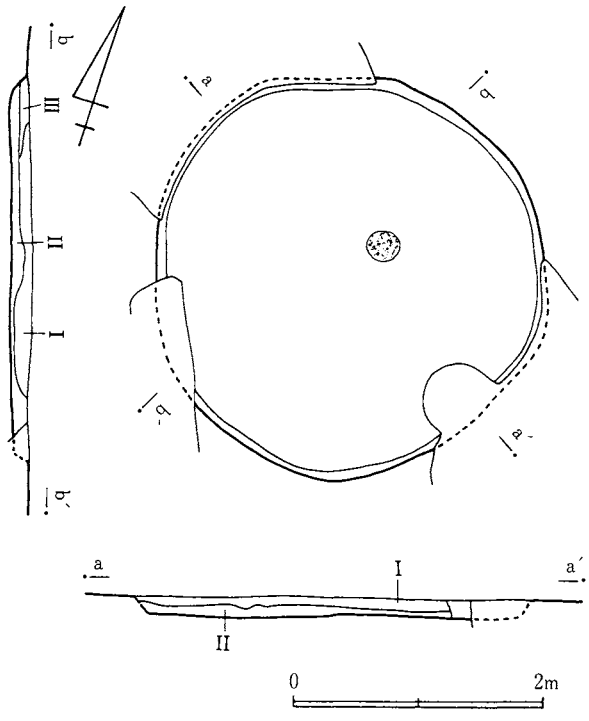


図256 D113号遺構実測図

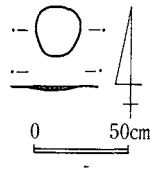


図257 D113号遺構炉跡実測図

遺物の出土はない。

8．D114号遺構（図258～260、図版63－3）

IV群Aの住居群内において北西部分に位置している。芋穴などによる攪乱を北西部と南東部に受けている。

遺構　径3.88mを計るほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し、0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.32m、短径0.3m、深さ0.06mで、厚さ0.04mの焼土が堆積している。

D114出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	細かいハケ目	砂粒	堅緻	明灰茶褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	暗赤褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	縄文原体刻目	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文？	砂粒	堅緻	茶褐色	

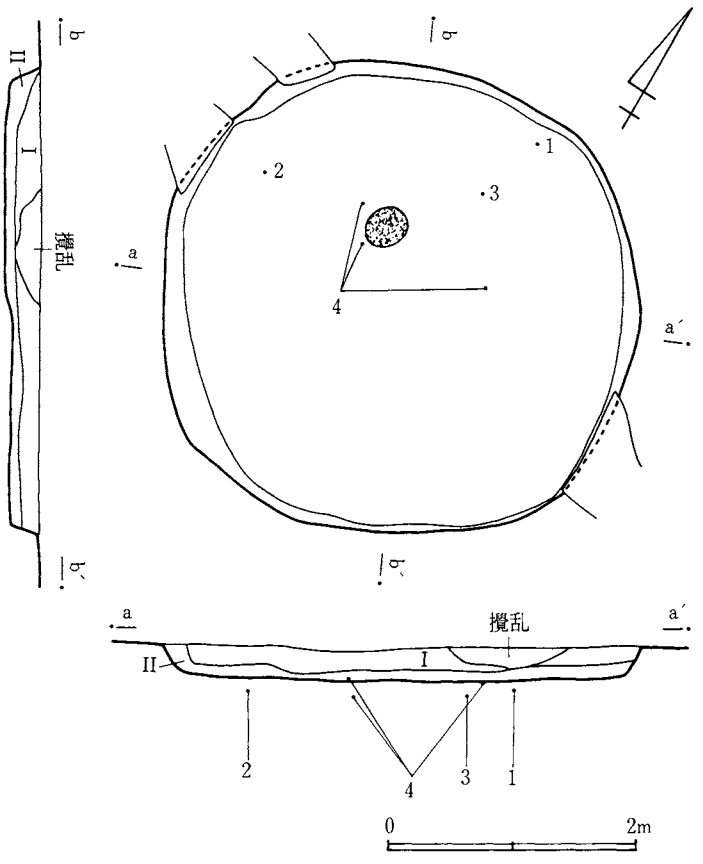


図258 D114号遺構実測図

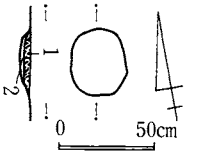


図259 D114号遺構
炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

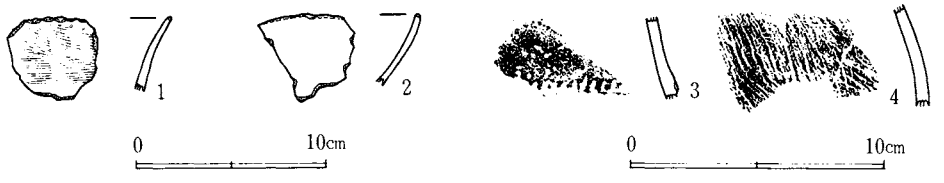


図260 D114号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層が堆積している。遺物は全体に稀少である。

出土遺物　遺物は甕形土器のみである。1、2は口縁部の破片、3、4は附加条縄文が施される胴部の破片である。

9．D115号遺構（図261～264、図版64－1、2、75、76）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D121、D122が近接している。

遺構　長径10.12m、短径8.12mで楕円形の平面形を呈している。壁はほぼ垂直に0.68m掘り込んで床面に達している。東側と西側の直下には幅0.1m、深さ0.05m、長さ4mの壁溝があ

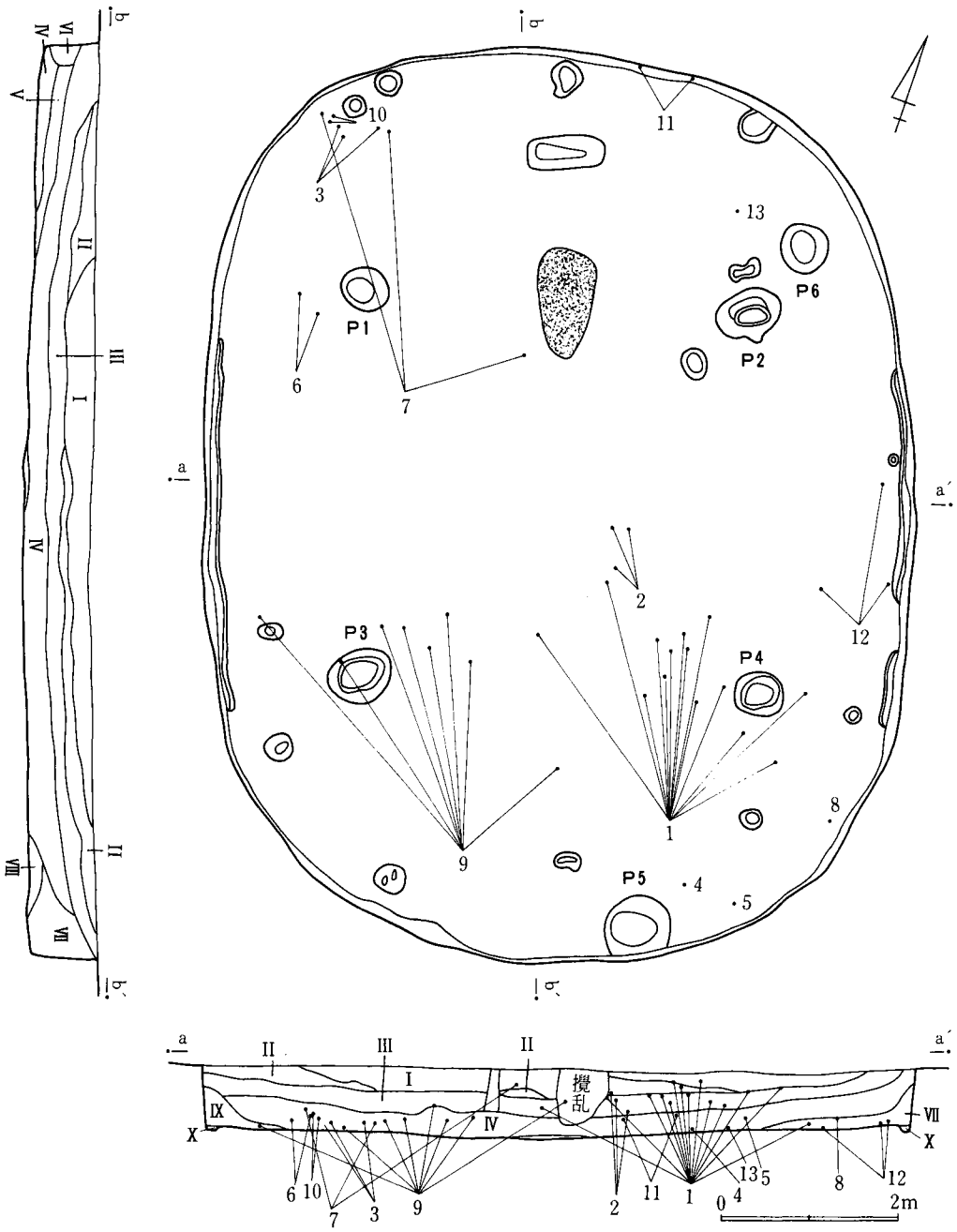


図261 D115号遺構実測図

る。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが特に中央部では顕著である。柱穴は対角線より外側に位置し、P_1～P_4を検出した。径平均0.05m、深さ平均0.84m以上、0.9m以下を計る。また、南壁に接し径0.75m、深さ0.23mのピットP_5を、P_2に近く径0.5m、深さ0.3mのピットP_6を、そして北壁に近く長径0.9m、短径0.38m、深さ0.2mの長方形のピットP_7を検出した。そ

の他壁直下に小ピット列を認めることができる。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径1.25m、短径0.84m、深さ0.16mで、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層ローム粒混入黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層黒褐色土層、IV層ローム粒混入暗褐色土層、V層ロームブロック混入黒褐色土層、VI層褐色土層、VII層茶褐色土層、VIII層暗茶褐色土層、IX層ロームブロック混入褐色土層、X層黄褐色土層が堆積しており、遺物は弥生時代後期の土器が床面近くから、古墳時代中期の土器は覆土上層より出土している。

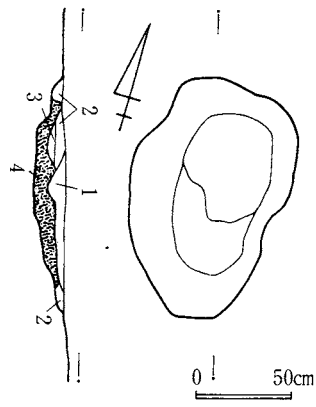


図262　D115号遺構炉跡実測図

1　黒褐色土層
2　暗褐色土層
3　小ロームブロック混入暗褐色土層
4　焼土層

出土遺物　遺物は、台付甕、甕、壺、鉢形土器と石製品がある。台付甕形土器は1、2である。甕形土器は3～9で、3～6は輪積痕、あるいは刺突があるものである。7～9は胴部に附加条縄文が施されている。壺形土器は10、11で、10は口縁部破片、11は底部破片である。鉢形土器は12の深鉢で、口縁部に縄文が施されている、石製品は13で、砂岩製の砥石である。

D115出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	32.9	16.8	10.6	略完形	ハケ目	砂粒	堅緻	(外)明灰黄褐色 (内)明褐色	胴部下半二次的に火を受ける
2	台付甕	26.9	13.3	8.3	完形	ヨコナデ ハケ目	砂粒	やや堅緻	明灰黄褐色	胴部に人為的な穿孔有
3	甕	—	18.4	—	2/3	輪積痕 縄文原体刻目	砂粒	堅緻	暗褐色	
4	甕	—	—	7.6	2/3	輪積痕 竹管刺突文	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)明灰褐色	胴部下半二次的に火を受ける
5	甕	—	—	6.4	2/3	ハケ目 ハケ状工具刻目	砂粒	堅緻	(外)黒灰褐色 (内)暗灰褐色	胴部スス付着
6	甕	—	—	5.4	2/3	輪積痕 ハケ目	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)暗褐色	胴部下半二次的に火を受ける
7	甕	—	—	5.4	2/3	多条縄文	砂粒	堅緻	明褐色	
8	甕	—	—	6.6	1/2	多条縄文	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)明灰褐色	胴部二次的に火を受けスス付着
9	甕	13.9	15.7	6.4	完形	附加条縄文	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)暗灰褐色	
10	壺	—	10.8	—	1/3	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明灰褐色	
11	壺	—	—	7.4	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
12	鉢	3.4	14.5	3.8	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	乳褐色	赤彩

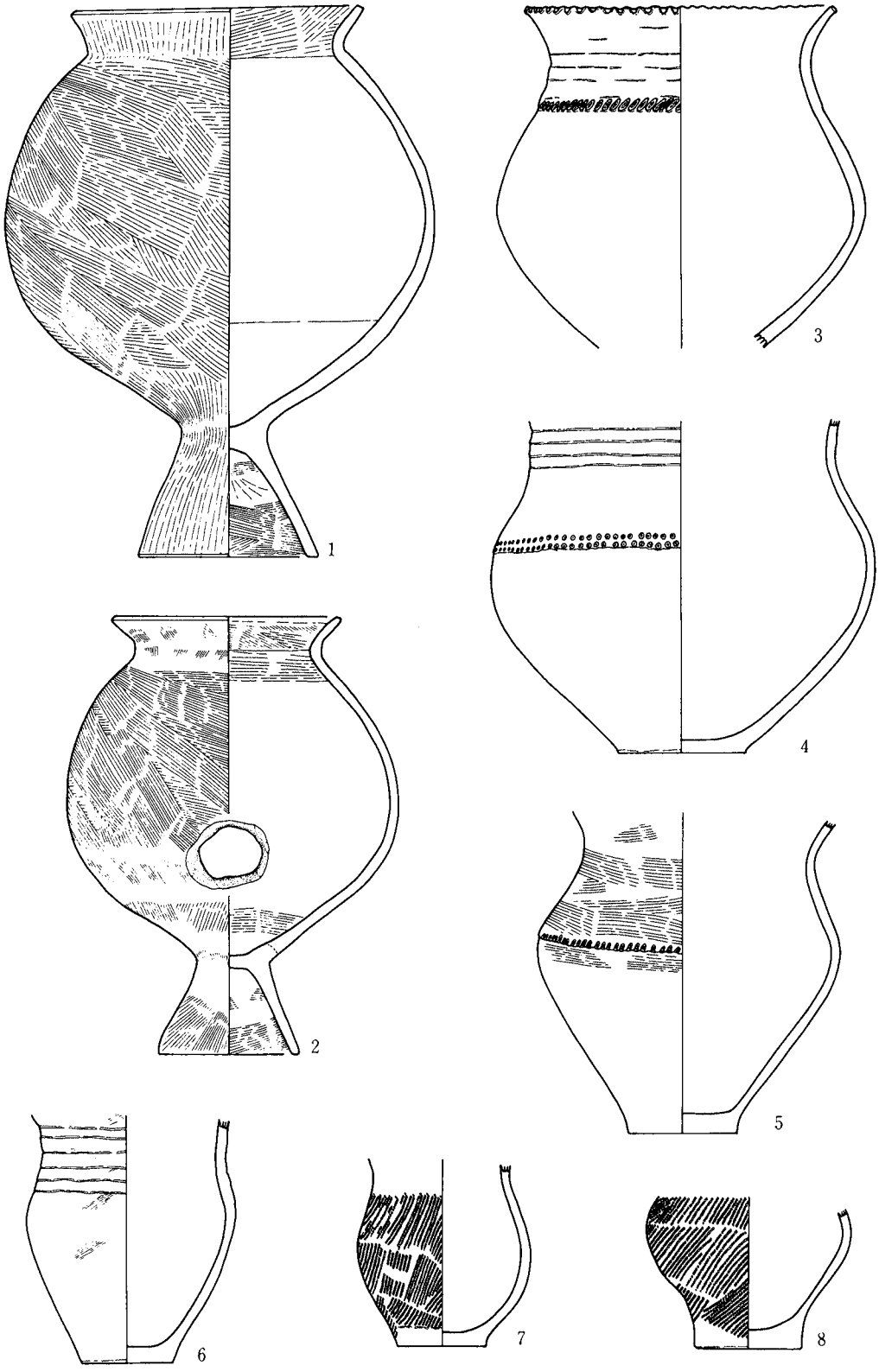


図263 D115号遺構出土遺物実測図(1)

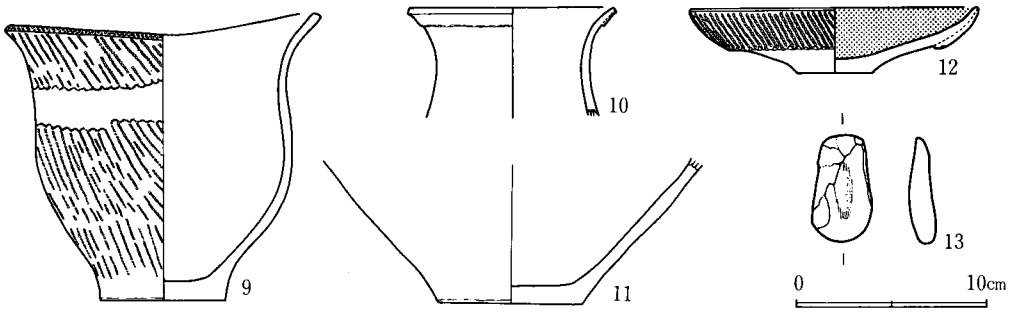


図264 D115号遺構出土遺物実測図(2)

10. D116号遺構（図265～267、図版64－3）

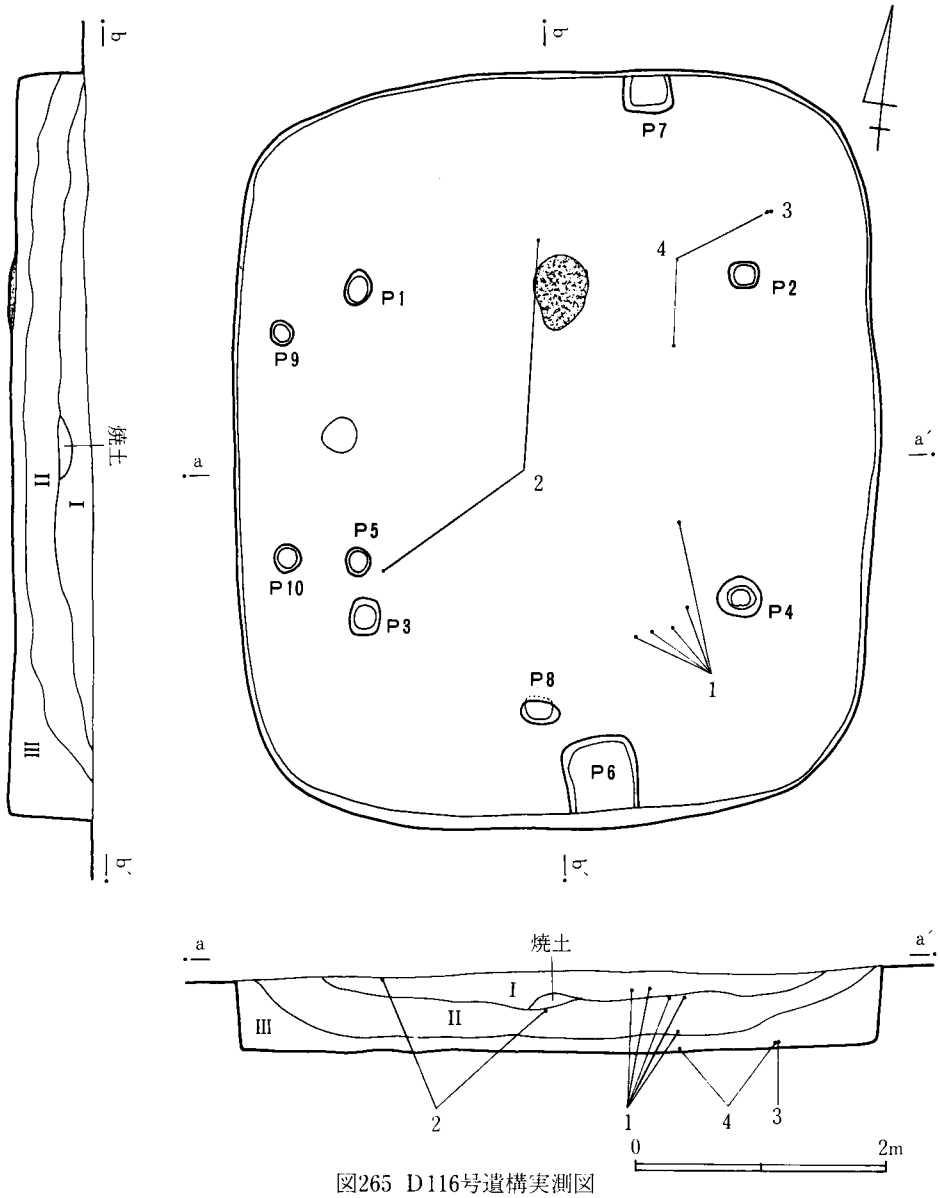


図265 D116号遺構実測図

IV群Aの住居群内においてほぼ中央に位置し、D168が近接している。

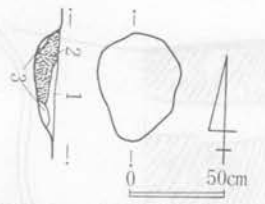


図266 D116号遺構炉跡実測図

1 黒褐色土層
2 焼土層
3 赤褐色土層

遺構 北壁5.24m、東壁5.92mで隅丸長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.64m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.35m、深さ平均0.62m以上0.75m以下を計る。また、南壁に接して一辺約0.6m、深さ0.15mを計るP_6を、北壁に接し一辺0.38m、深さ0.08mを計るP_7を検出した。その他P_5、P_9、P_{10}を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北側に寄って、P_1、P_2の間に位置している。長径0.56m、短径0.43m、深さ0.13mで、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中より出土している。

出土遺物 遺物は甕形土器のみである。1は底部破片、2は波状を呈する口縁部破片、3、4は附加条縄文が施される胴部破片である。

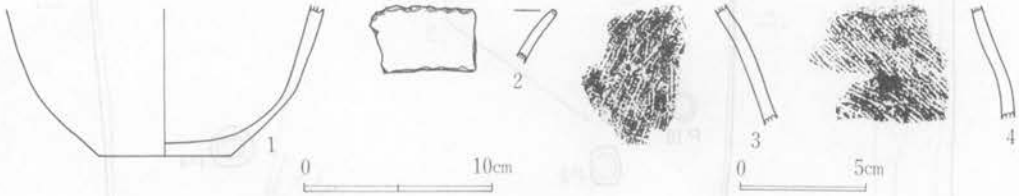


図267 D116号遺構出土遺物実測図

D116出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	6.8	胴下部と底部	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)灰褐色	スス付着
2	甕	—	—	—	口縁部細片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	(外)明灰褐色 (内)暗灰褐色	
3	甕	—	—	—	胴部細片	附加条縄文	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)暗褐色	
4	甕	—	—	—	胴部細片	附加条縄文	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)灰褐色	

11. D117号遺構（図268～271、図版65、76）

IV群Aの住居群内においてはほぼ中央部に位置し、D116が近接している。遺構のほぼ中央部

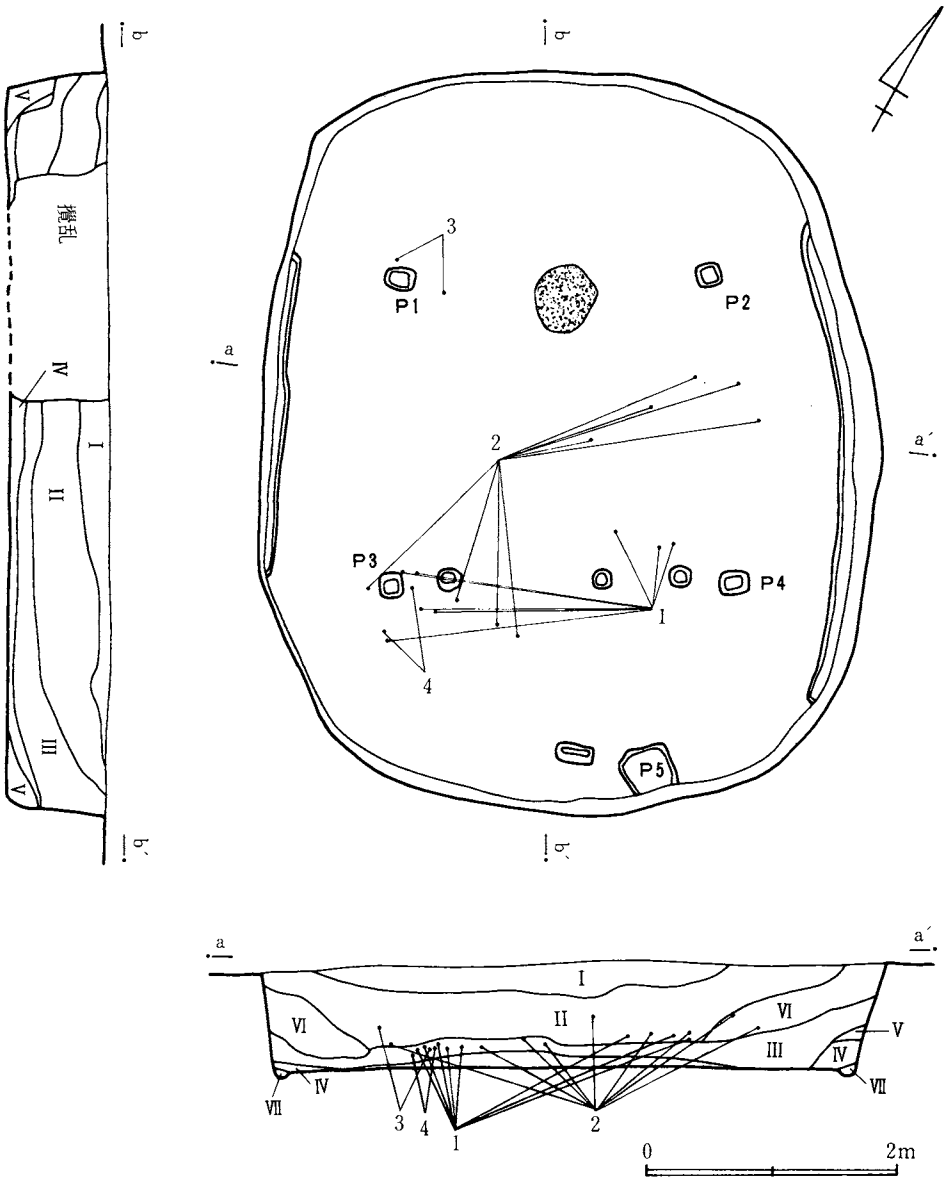


図268 D117号遺構実測図

に芋穴状の攪乱を受けている。覆土を掘り下げて床面近くになった段階で炭化物、焼土塊を検出したため、焼失した遺構であることが判明した。

遺構 長径5.9m、短径4.8mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.8m掘り込んでいる。東壁と西壁の一部には幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が2.5mから3.8mの長さで認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。一辺約0.2m角で、深さ平均0.68m以上0.7m以下を計る。また南壁に接して一辺0.4m角、深さ0.2mのピットP_5を検出した。その他、P_3とP_4の間に径0.15

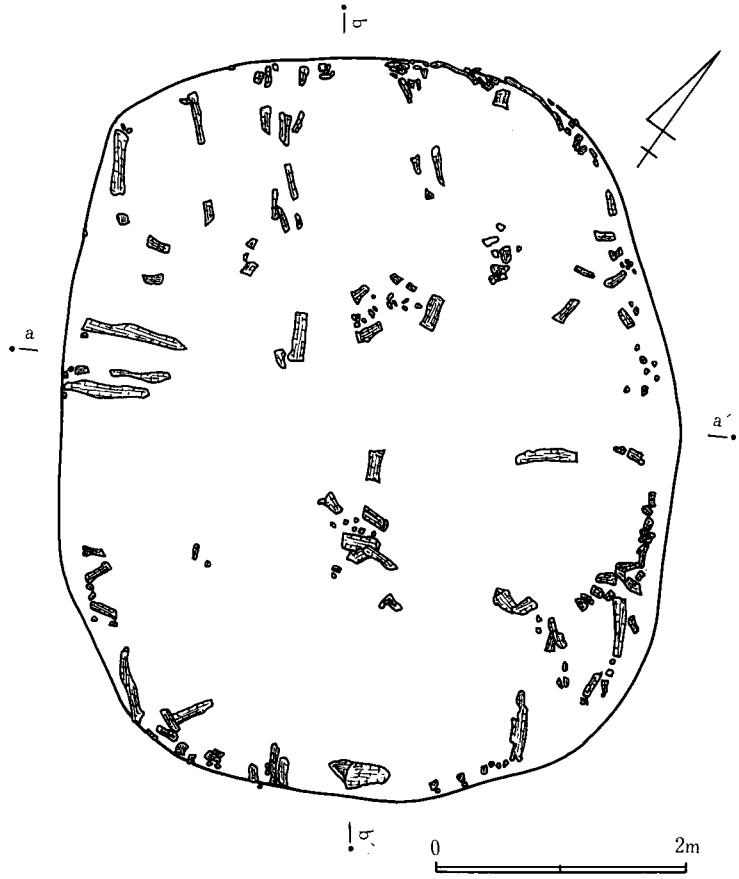


図269 D117号遺構炭化物出土状況図

mの小ピットを検出した。床面上には多量の炭化物等を検出しているが、その出土状況は壁中央部分は壁に対して直角に、その他コーナーおよびその附近では壁に対し並行に散在しているのが認められる。

炉 住居中央より北側に寄って位置している。長径0.53m、短径0.4m、深さ0.12mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆

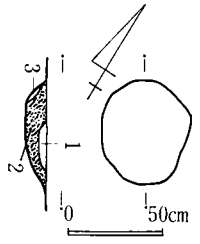


図270 D117号遺構炉跡実測図
1 焼土粒混入黒色土層
2 焼土層
3 赤褐色土層

D117出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	8.3	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明赤褐色 (内)暗褐色	胴部スス付着 下半二次的に火を受ける
2	甕	—	—	6.2	2/3	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)茶褐色	胴部スス付着 下半二次的に火を受ける
3	鉢	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文 ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗灰褐色	赤彩
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	暗灰褐色	

積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層焼土粒混入褐色土層、Ⅳ層焼土層、Ⅴ層炭化物混入褐色土層、Ⅵ層暗褐色土層、Ⅶ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は住居中央部のⅡ、Ⅲ層から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、鉢形土器がある。甕形土器は1、2、4で、1、2は胴部に刺突が施される。4は波状の口縁部破片である。鉢形土器は3で口唇部直下に縄文が施される体部の破片である。

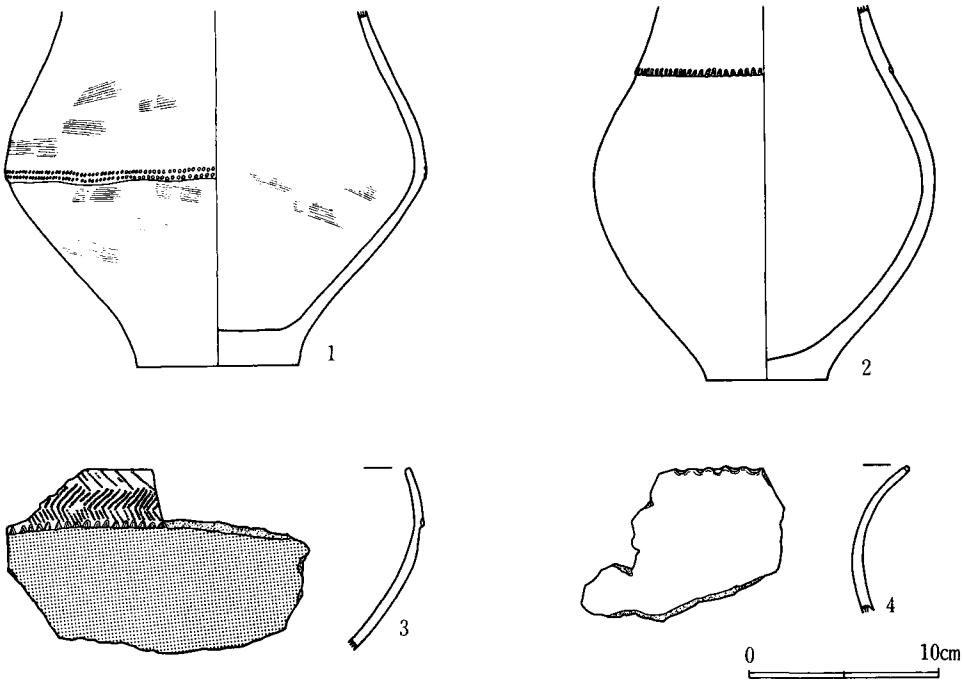


図271　D117号遺構出土遺物実測図

12. D118号遺構（図272～274、図版66－1）

Ⅳ群Aの住居群内において北側に位置し、D119が近接している。

遺構　北壁2.4m、東壁2.5mで胴張方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.12m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況を呈していない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く位置している。長径0.43m、短径0.38m、深さ0.07mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黄褐色土層が堆積しており、遺物は炉周辺の床面より出土している。

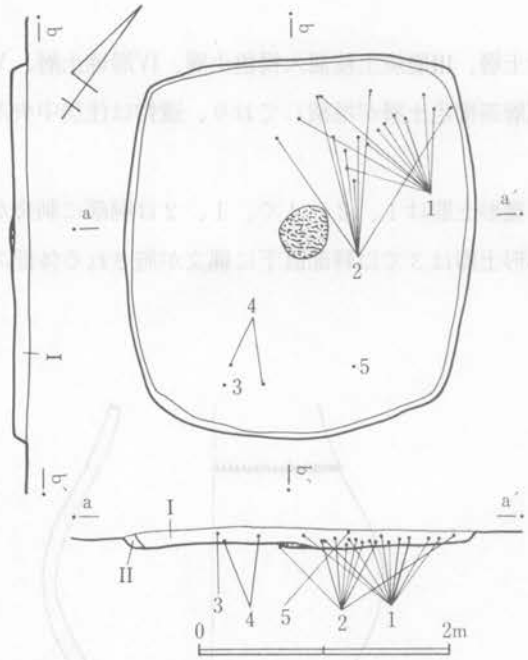


図272 D118号遺構実測図

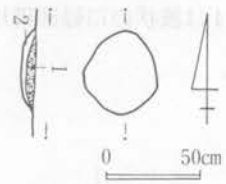


図273 D118号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

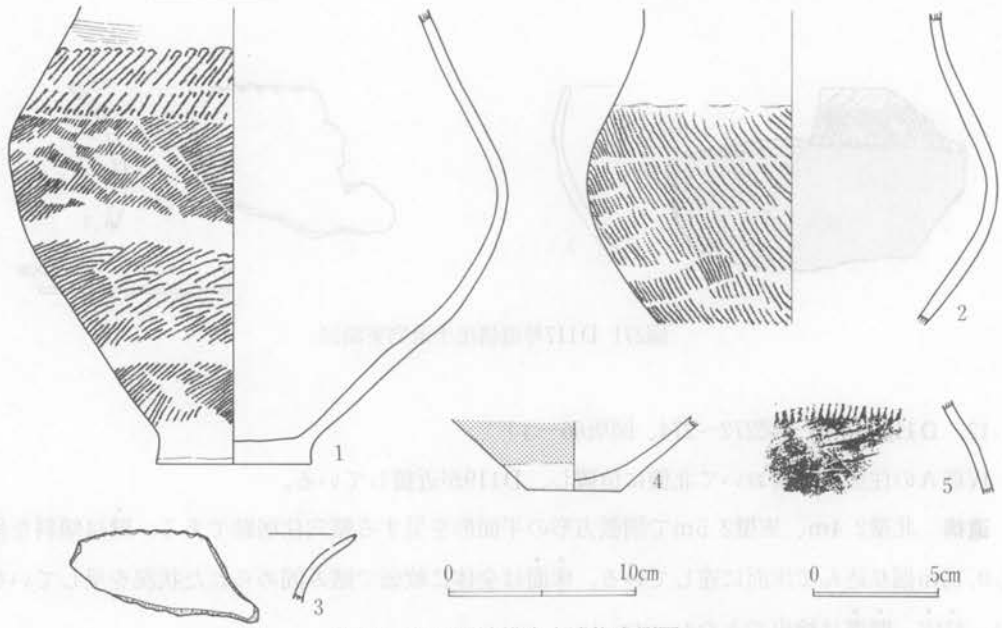


図274 D118号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器1～3、5で、1、2は附加条縄文が施されている。3は波状を呈する口縁部破片である。5は胴部は刻目がある破片である。壺形土器は4で、赤彩される底部破片である。

D118出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	8.0	⅔	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
2	甕	—	—	—	½	附加条縄文	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	淡褐色	
4	壺	—	—	4.8	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
5	甕	—	—	—	胴部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗灰褐色	

13. D119号遺構（図275～277、図版66－2）

IV群Aの住居群内において北側に位置し、D118が近接している。

遺構　径3.92mでほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し、0.8m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.03mで、厚

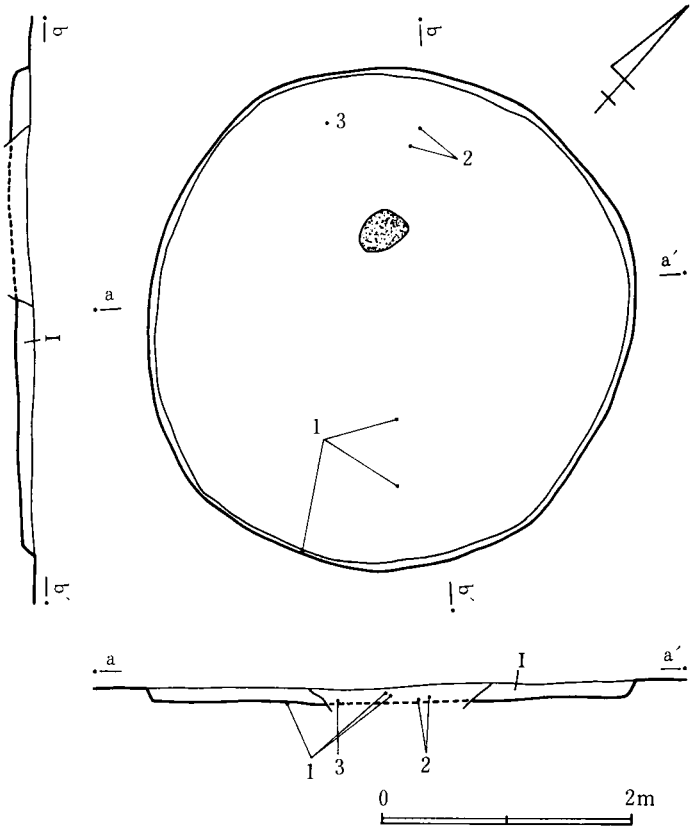


図275 D119号遺構実測図

さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　黒色土層が堆積しているのみである。遺物は床面上より出土している。

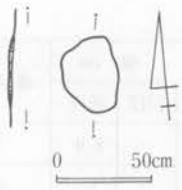


図276　D119号遺構炉跡実測図

出土遺物　遺物は甕形土器のみである。1は口唇部直下に縄文が施されている口縁部破片、2、3は附加条縄文が施されている胴部破片である。

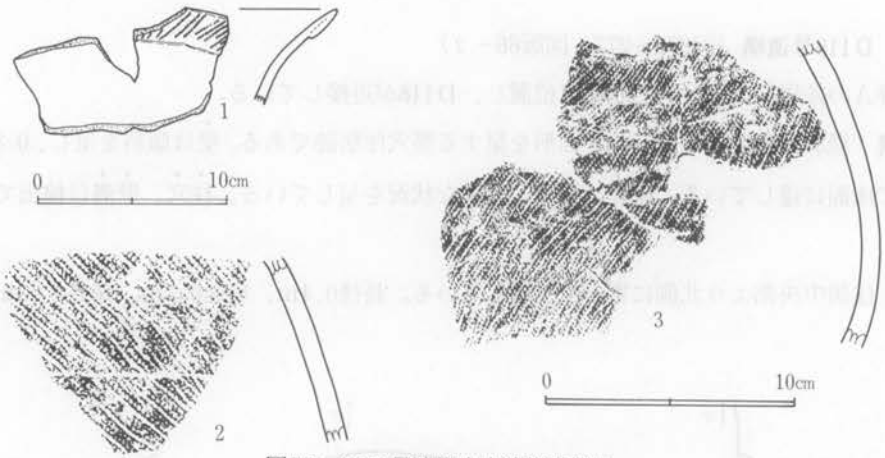


図277　D119号遺構出土遺物実測図

D119出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒色 (内)暗茶褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

14. D120号遺構（図278～280、図版66－3、76）

Ⅳ群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D121が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の14%におよんでいる。

遺構　長径6.44m、短径5.4mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.8m掘り込んでいる。東壁と西壁の一部には幅0.1m、深さ0.05m、長さ2.5mから4mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。楕円形の掘形を呈し、長径0.4m前後、深さ平均0.48m以上、0.74m以下を計る。また、南壁に接し長辺0.58m、短辺0.3m、深さ0.2mを計る長方形のピットP_5を検出した。その他、P_1、P_2の中間に小ピットを検出した。

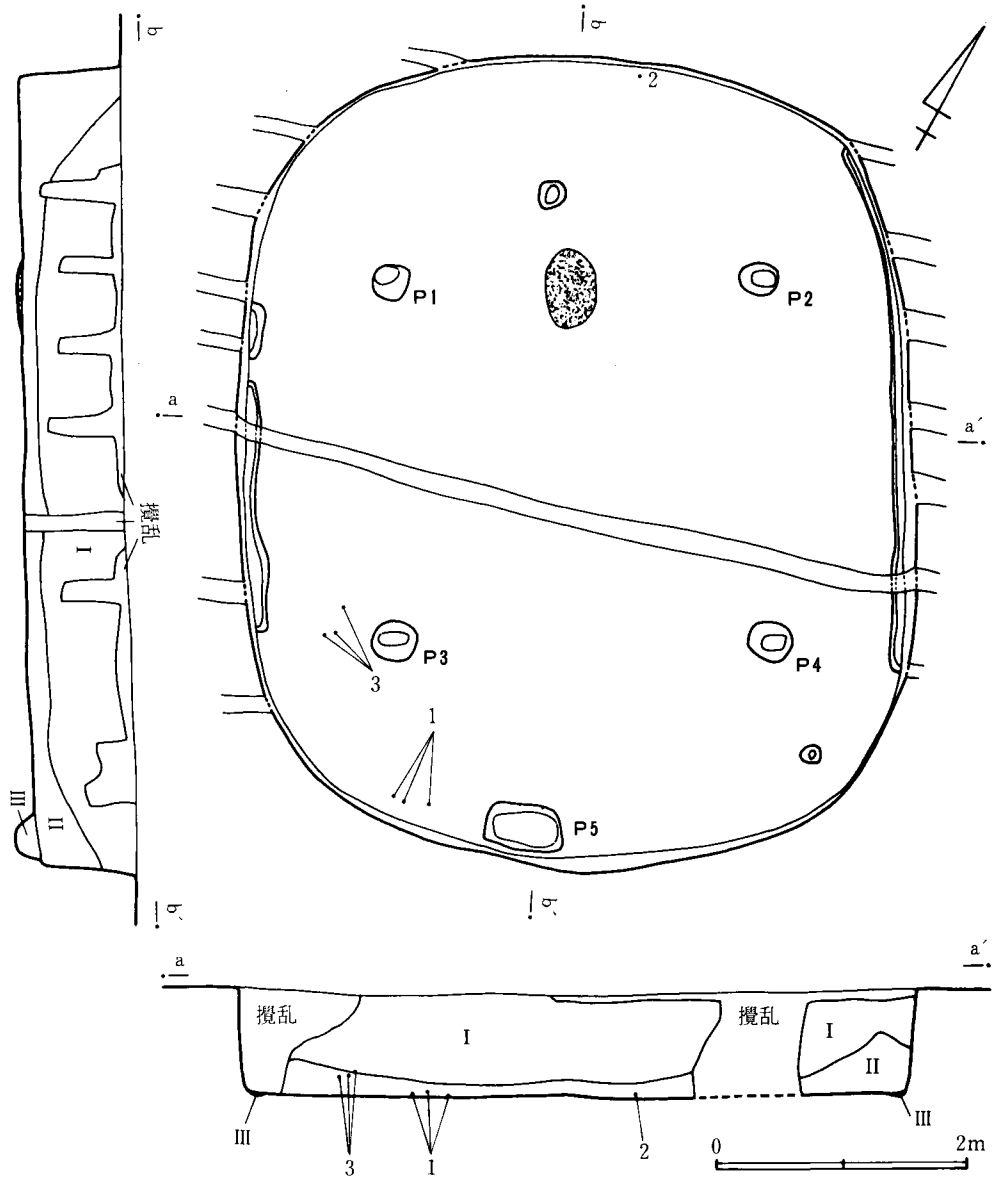


図278 D120号遺構実測図

炉 住居中央部より北に寄り、P_1、P_2の間に位置している。長径0.54m、短径0.5m、深さ0.15mで、厚さ0.09mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層褐色土層、III層茶褐色土層が堆積しており、遺物は住居南側のII層中より出土している。

出土遺物 遺物は、壺、甕、鉢形土器がある。壺形土器

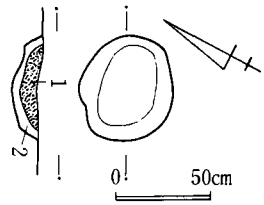


図279 D120号遺構炉跡実測図
1 焼土層
2 褐色土層

は1で、無頸壺である。内彎する胴部に小孔があく。甕形土器は2の胴部破片である。鉢形土器は3の体部破片である。

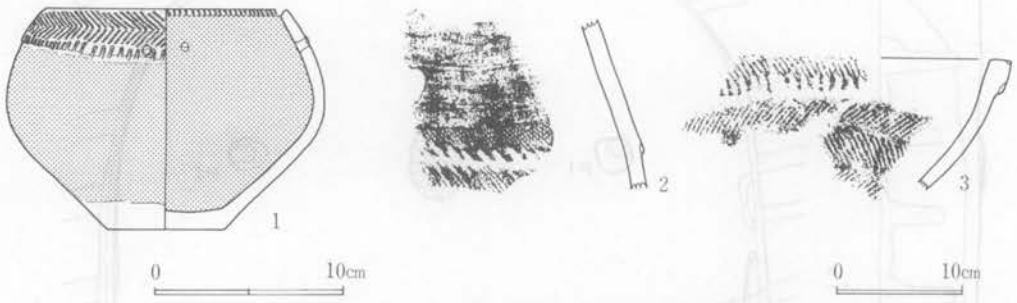


図280 D120号遺構出土遺物実測図

D120出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	無頸壺	11.4	12.5	6.0	3/4	羽状縄文 内外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	淡褐色	内外面赤彩 孔は4個
2	甕	—	—	—	胴部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒色 (内)茶褐色	
3	鉢	—	—	—	口縁部破片	羽状縄文	砂粒	やや堅緻	明赤褐色	

15. D121号遺構（図281～284、図版67－1、76）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D120が近接している。遺構は部分的に攪乱を受けている。覆土を掘り下げ床面近くになった段階で炭化物、焼土塊を検出したため、焼失した遺構であることが判明した。

遺構 長径5.32m、短径4.8mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.44m掘り込んでおり、直下には幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が南壁部分を除き認められる。床

D121出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	5.1	3/4	輪積痕 LR、RL斜縄文	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)褐色	胴部下半二次的に火を受ける
2	甕	—	—	6.4	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明灰褐色 (内)暗褐色	
3	壺	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 ヨコナデ	砂粒 雲母	やや堅緻	明黄褐色	赤彩
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
5	鉢	—	—	—	口縁部破片	S字状結節文	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩
6	甕	—	—	—	口縁部破片	縄文原体刻目	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)灰褐色	
7	甕	—	—	—	頸部破片	S字状結節文 RL斜縄文	砂粒	堅緻	灰褐色	

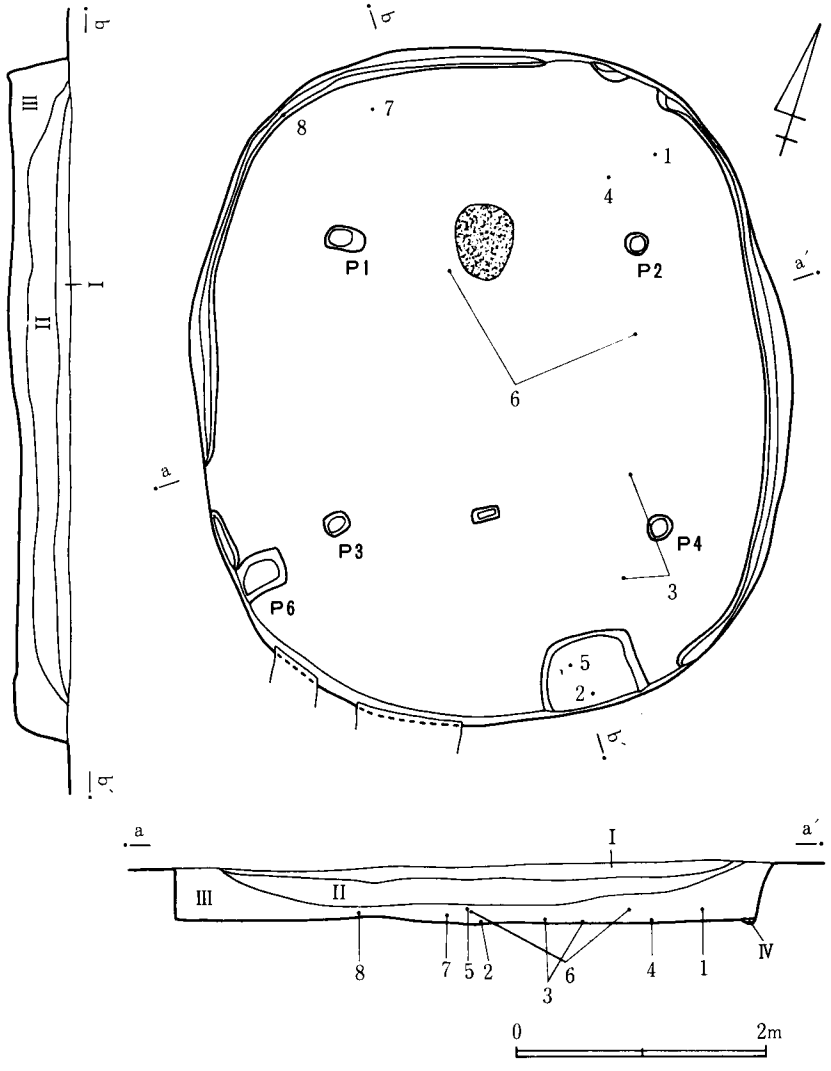


図281 D121号遺構実測図

面は住居中央部のみ堅緻な状況を呈しているが、他は軟弱な状況である。柱穴は対角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.6m以上0.65m以下を計る。また、南壁に接し一辺0.57m、深さ0.1mを計るP_5を検出した。その他P_6、P_3とP_4の中央に小ピットを検出した。床面上には炭化物が散乱した状況で検出できた。

炉 住居中央部より北側に寄って、P_1、P_2の間に位置している。長径0.7m、短径0.43m、深さ0.07mの焼土が

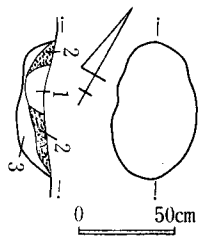


図282 D121号遺構炉跡実測図

1 黒色土層
2 焼土層
3 褐色土層

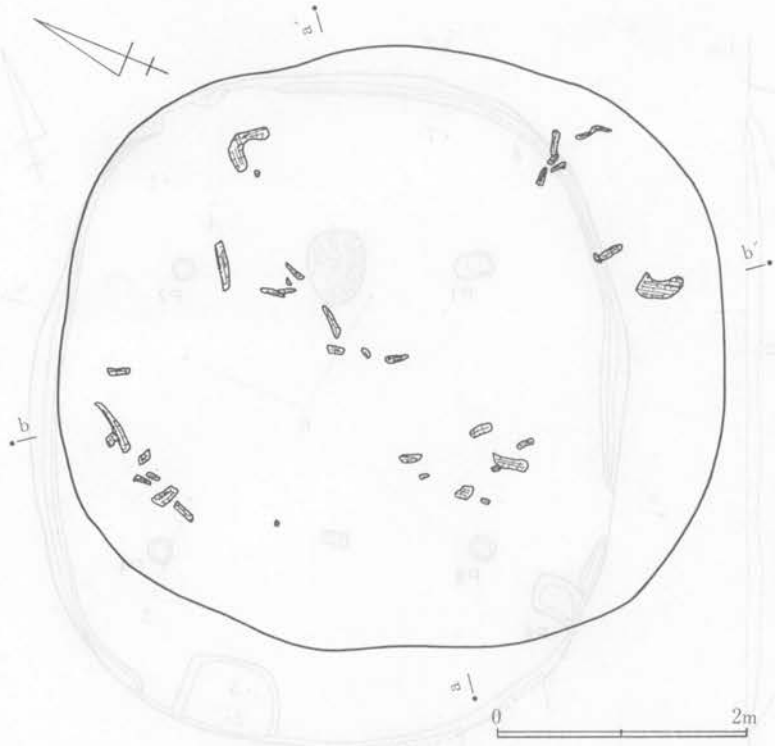
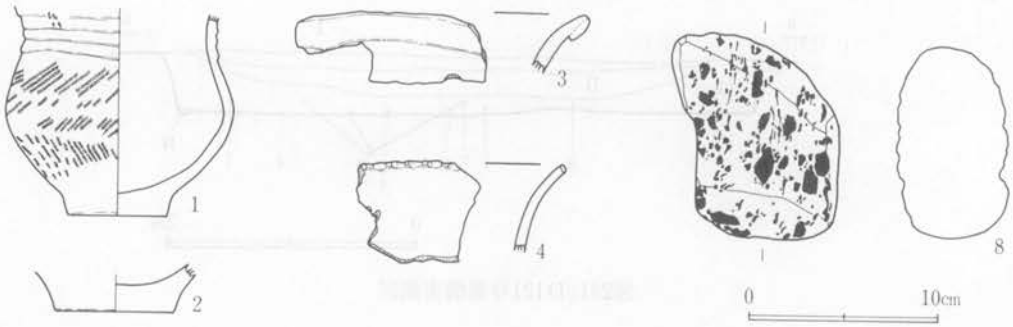


図283　D121号遺構炭化物出土状況図



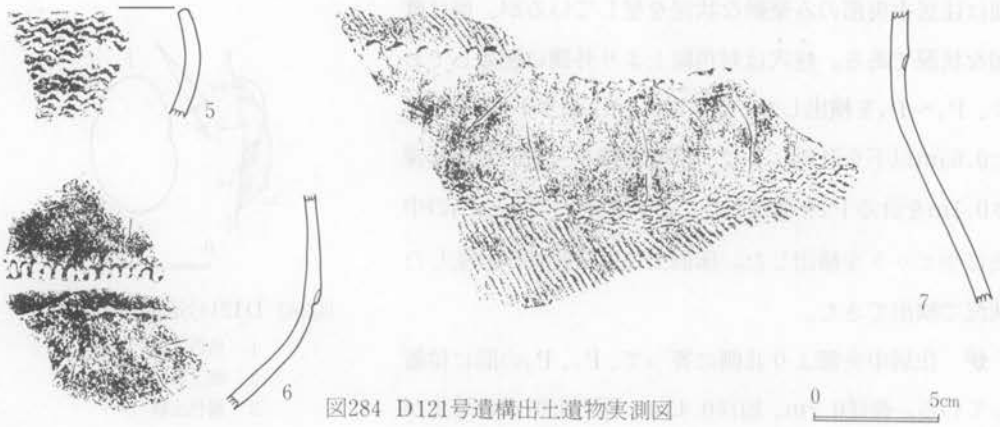


図284　D121号遺構出土遺物実測図

堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面ないしⅢ層中より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、鉢形土器と石製品がある。甕形土器は1、2、4、6、7である。1、7は胴部に斜縄文が施される。6は胴部に刻目を有する鉢に近い形状のものである。2は底部、4は口縁部破片である。壺形土器は3の口縁部破片である。鉢形土器は5の口縁部破片である。石製品は8の軽石で、部分的に摩滅が認められる。

16. D122号遺構（図285～287、図版67－2）

Ⅳ群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D115、D109が近接している。

遺構　長径7.24m、短径5.39mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.76m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.28m、深さ平均0.51m以上0.61m以下を計る。また、南壁中央部に近くP_5、北壁に接してP_6を検出した。その他、南東側部分で小ピットを2か所検出した。南壁と西壁の一部に幅0.05m、深さ0.05mで、長さ3.1mの壁溝が認められる。

炉　住居中央より北側に寄り、P_1、P_2の間に位置している。長径0.9m、短径0.5m、深さ0.2mを計り、厚さ0.09mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層明褐色土層、Ⅴ層暗褐色土層、Ⅵ層茶褐色土層が堆積しており、遺物はⅢ、Ⅳ層より出土している。

D122出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	21.8	—	口縁部と頸部	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)黒色 (内)灰褐色	
2	壺	—	15.2	—	1/3	縄文施文の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗灰褐色 (内)明灰褐色	
3	甕	—	—	7.2	底部のみ	附加条縄文	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)暗灰褐色	
4	ミニチュア土器	3.5	4.4	1.75	完形	手捏	砂粒	堅緻	灰褐色	
5	壺	—	—	9.6	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明褐色	
6	ミニチュア土器	—	—	4.6	脚部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
7	ミニチュア土器	—	—	—	脚部のみ	ヘラ削りの後粗いヘラナデ	——	堅緻	(外)明灰褐色 (内)灰褐色	
8	甕	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 ヨコナデ	——	やや堅緻	褐色	
9	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	(外)灰褐色 (内)明灰褐色	
10	鉢	—	—	—	口縁部破片	RL、LR斜縄文	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
11	壺	—	—	—	口縁部破片	縄文原体刻目	砂粒	堅緻	明褐色	

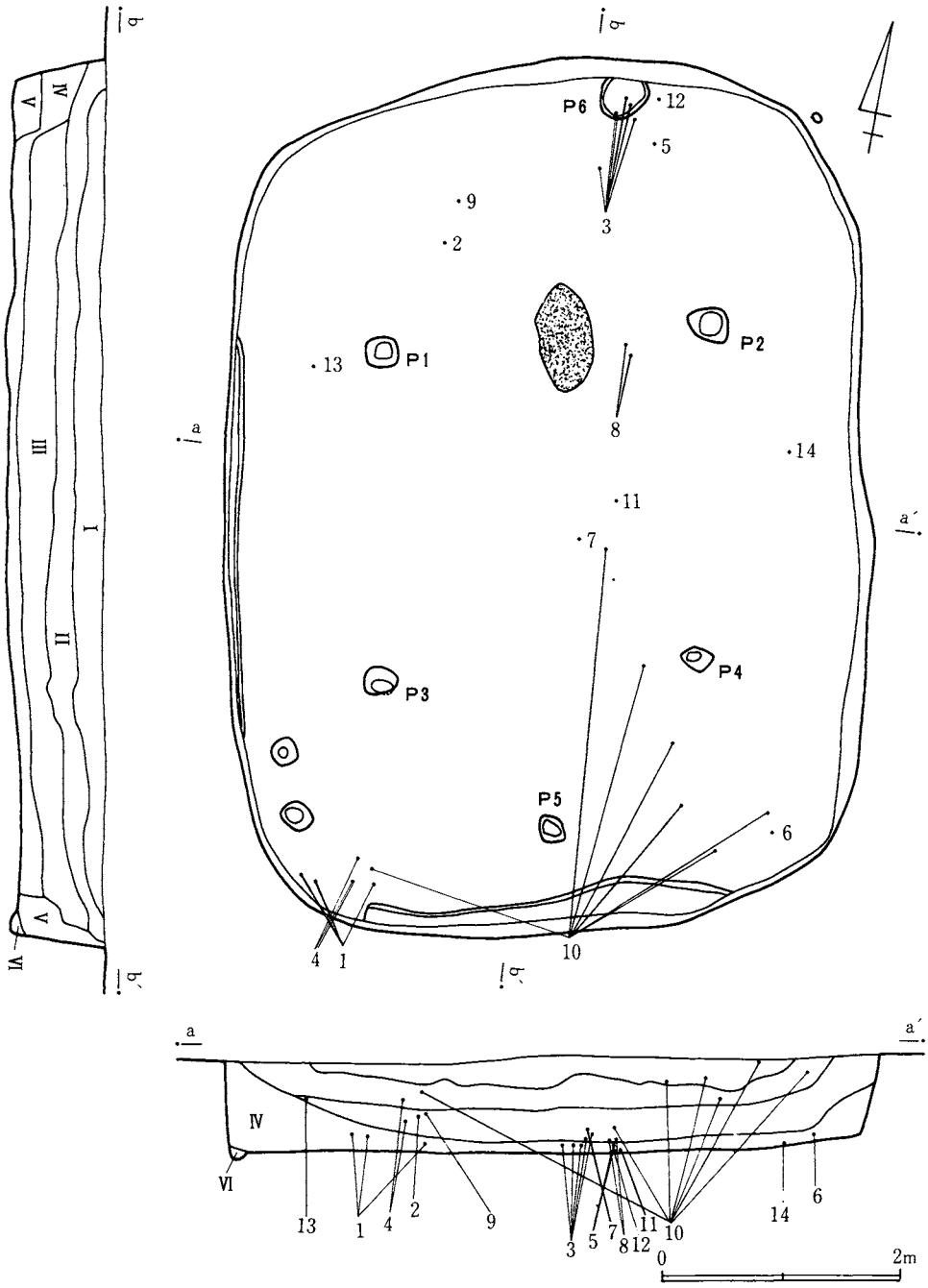


図285 D122号遺構実測図

出土遺物 遺物は、甕、壺、鉢、ミニチュア土器と石製品がある。甕形土器は1、3、8、9で、1、9、8は口縁部破片、3は附加条縄文が施される底部破片である。壺形土器は2、

5、11で、2は頭部に結節縄文が施されている。5は底部破片である。11は口唇部破片である。ミニチュア土器は4、6、7で、4は鉢、6、7は高坏である。鉢形土器は10の口縁部破片である。石製品は12～14で、12は砂岩製の磨製石斧である。13、14は砂岩製の砥石である。

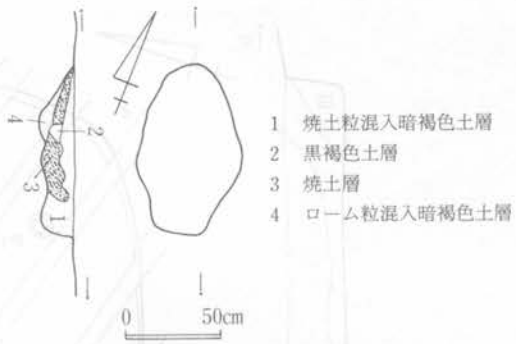


図286 D122号遺構炉跡実測図

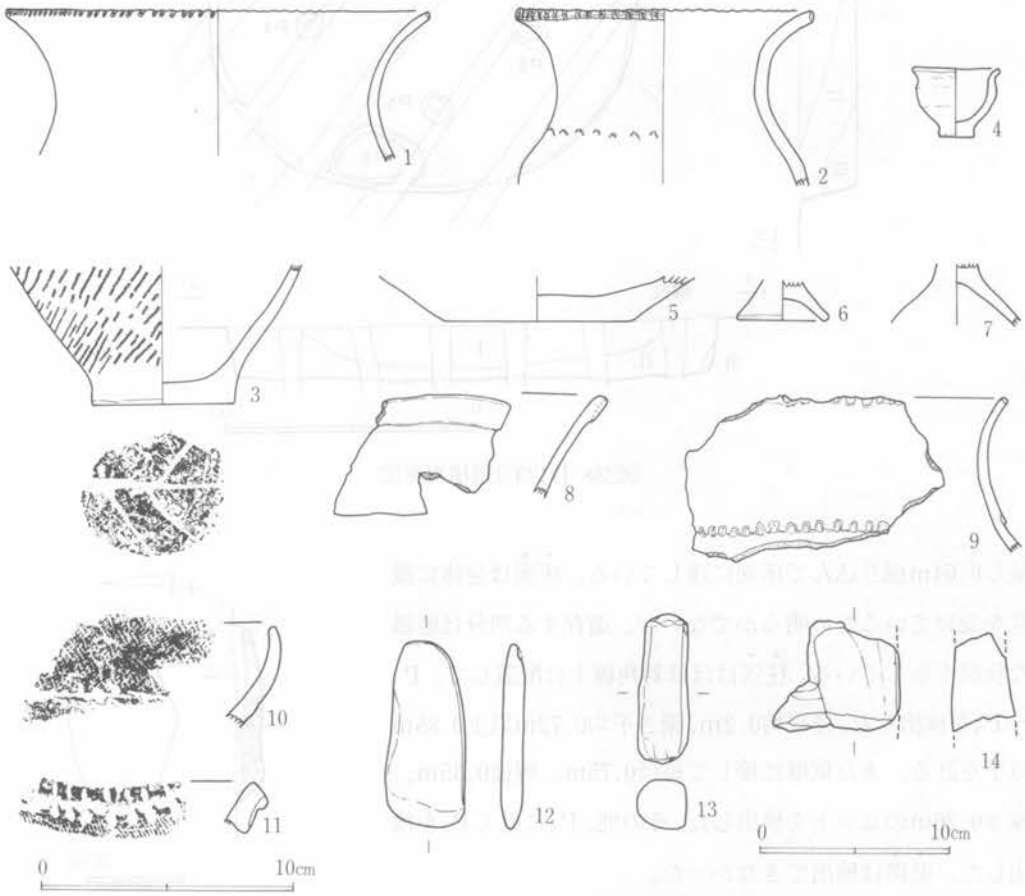


図287 D122号遺構出土遺物実測図

17. D123号遺構（図288、289、図版67－3）

IV群Aの住居群内において北側に位置し、D124、D119が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の30%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構 長径6.1m、短径4.6mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を

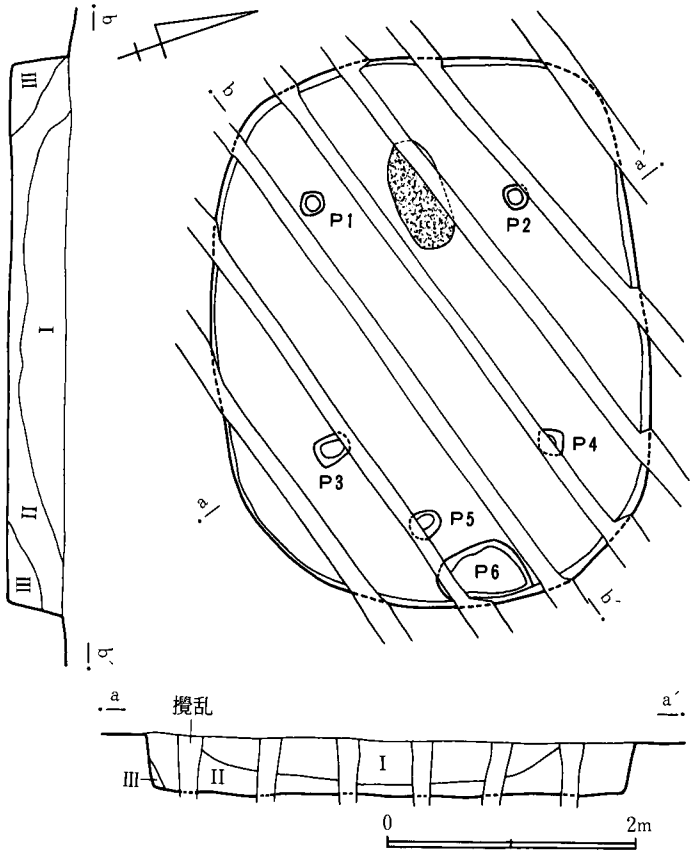


図288 D123号遺構実測図

呈し0.64m掘り込んで床面に達している。床面は全体に撹乱を受けているため明らかでないが、遺存する部分は竪緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置して、P_1～P_3を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.72m以上0.85m以下を計る。また東壁に接して長径0.75m、短径0.35m、深さ0.26mのピットを検出した。その他、P_6に近くP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より西側に寄り、P_1、P_2の間に位置している。撹乱を受けているため規模は正確でないが、長径0.9m、短径0.56m、深さ0.13mで、厚さ0.1mの焼土が堆積しているのが認められる。

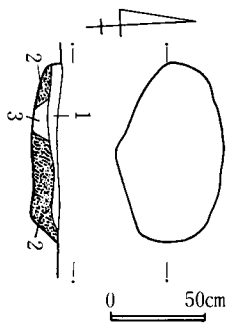


図289 D123号遺構
炉跡実測図

1　焼土粒炭化粒混入褐色土層
2　焼土層
3　暗褐色土層

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層が堆積している。遺物は稀少で図示できるものは皆無である。

18. D124号遺構（図290～292、図版68－1、77）

IV群Aの住居群内においてほぼ北側に位置し、D132が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の26%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構　長径6.1m、短径4.6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.64m掘り込んで床面に達している。東壁、西壁には幅0.15m、深さ0.05m、長さ2.8m～3.3mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は8か所検出した。8か所の柱穴は2穴一対のごとき状況を呈しているが、実は修改築に伴う所産であることが判明した。修改築後の柱穴はP_1～P_4である。径平均0.25m、深さ平均0.7m以上0.85m以下を計る。

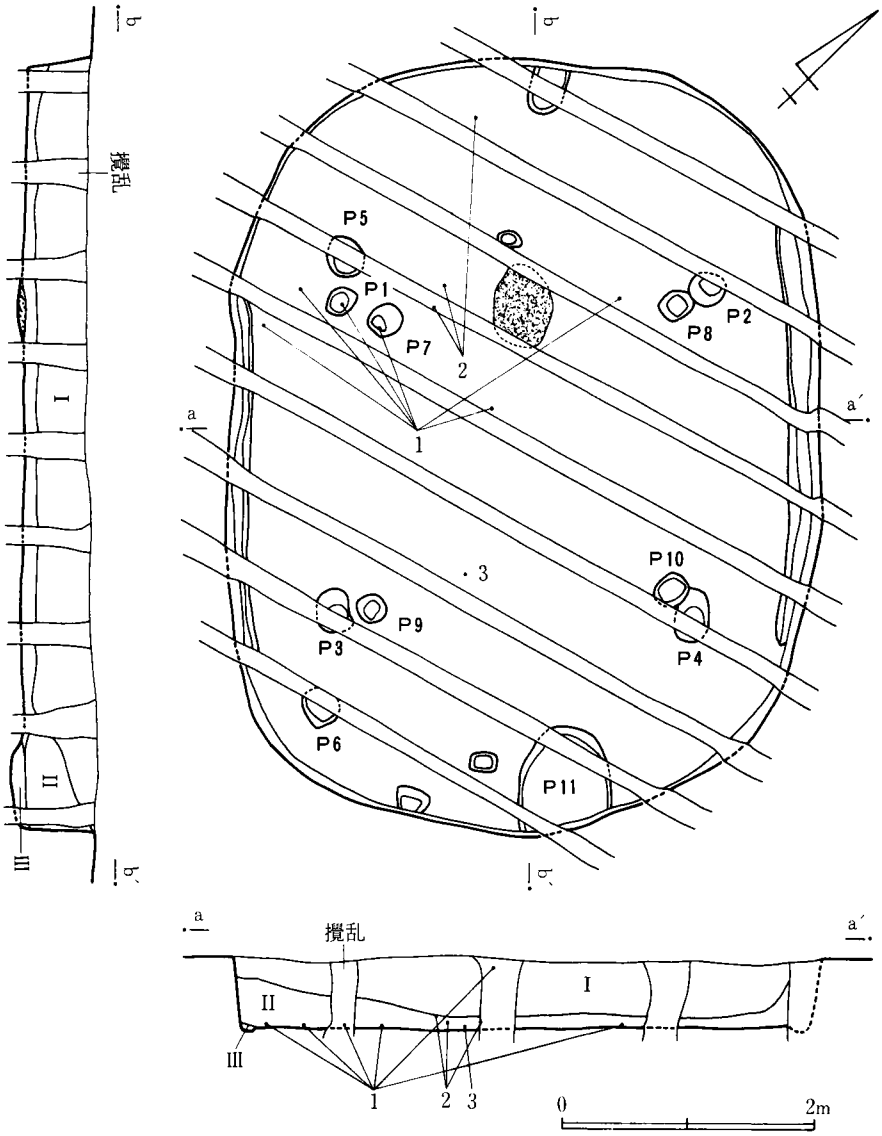


図290　D124号遺構実測図

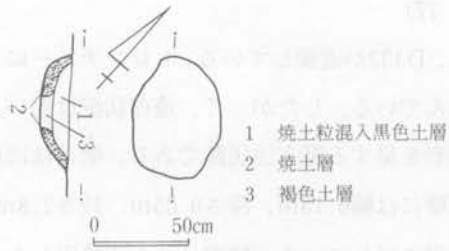
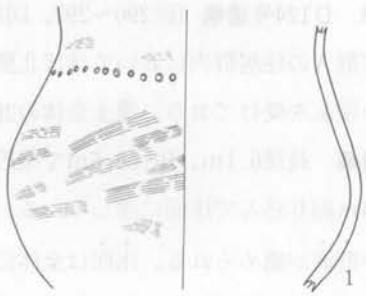
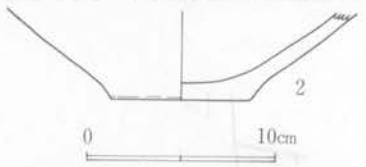


図291 D124号遺構炉跡実測図





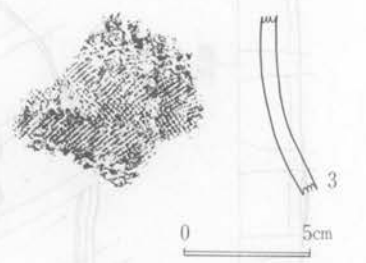


図292 D124号遺構出土遺物実測図

修改築前の柱穴はP_7～P_{10}で、径平均0.25m、深さ平均0.7m以上0.8m以下を計る。また南壁に接し長径0.7m、深さ0.16mのピットP_{11}を検出した。その他P_5、P_6をはじめ壁際に4か所検出した。

炉　住居中央部より北側に寄って位置し、P_1、P_2の間に検出した。長径0.64m、短径0.45m、深さ0.15mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層暗褐色土層が堆積しており、遺物は各層から分散した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1の胴部破片である。壺形土器は2、3で、2は底部破片、3は頸部破片である。

D124出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	1/3	竹管刺突文、ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	明茶褐色	
2	壺	—	—	7.2	底部のみ	ヘラナデ	砂粒 雲母	やや堅緻	乳褐色	
3	壺	—	—	—	胴部破片	羽状縄文	砂粒 雲母	やや堅緻	灰褐色	

19. D125号遺構（図293～295、図版68－2）

IV群Aの住居群内においてほぼ北側に位置し、D124が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の35%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構　長径6.52m、短径5.44mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.64m掘り込んで床面に達している。床面は全体に攪乱を受けているため明らか

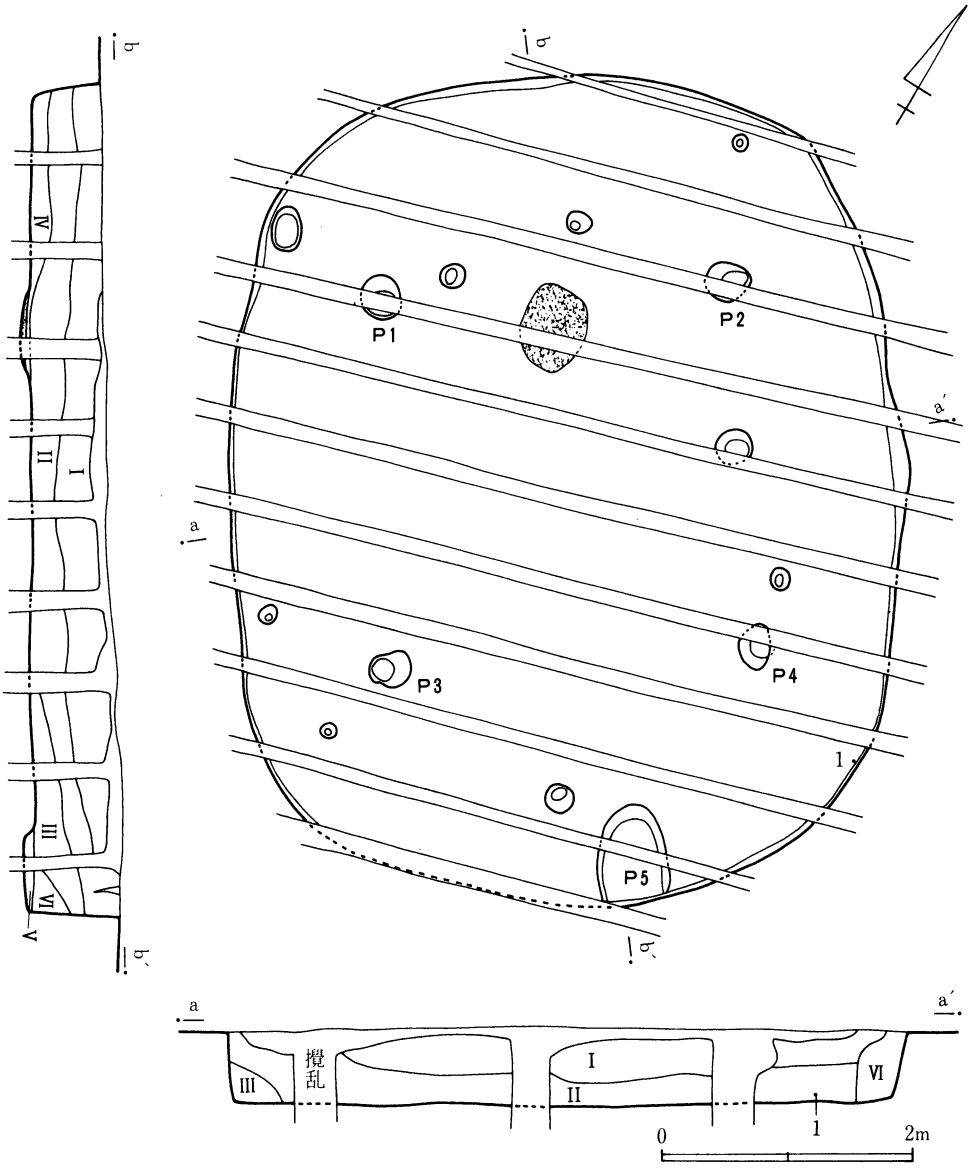


図293 D125号遺構実測図

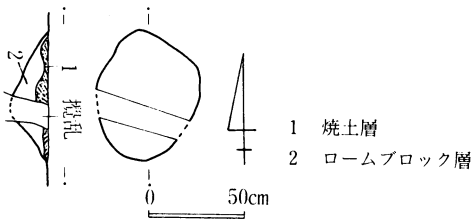


図294 D125号遺構炉跡実測図

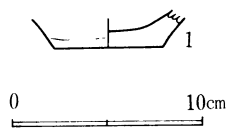


図295 D125号遺構出土遺物実測図

でないが、遺存する部分では堅緻な状況を呈している。柱穴は外角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.27m、深さ平均0.6m以上0.74m以下を計る。また、南壁に接し0.72m、深さ0.18mを計るピットP_5を検出した。その他小ピットを9か所に検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄って、P_1、P_2の間に位置している。長径0.68m、短径0.55m、深さ0.2mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層黄褐色土層が堆積しており、遺物は稀少である。

出土遺物　図示できる遺物は甕形土器底部破片のみである。木葉痕が認められる。

D125出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	5.8	底部破片	——	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕

20. D126号遺構（図296～298、図版68－3、77）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D124、D125が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の35%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構　長径8.28m、短径6.52mで楕円形の平面形を呈す竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.84m掘り込んで床面に達している。北壁と南壁の一部には幅0.07m、深さ0.05m、長さ1.3mから1.7mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.35m、深さ平均0.69m以上0.85m以下を計る。また東壁に接し一辺0.56m、深さ0.15mのピットP_5を検出した。

炉　住居中央部より西壁に寄り、P_1、P_2の間に位置している。長径1.1m、短径0.8m、深さ0.17mを計り、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

D126出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	16.4	—	2/3	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
2	甕	14.0	12.0	4.8	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	
3	壺	—	—	6.8	胴下部と底部	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
4	鉢	8.2	16.4	6.4	2/3	網目状撚糸文 外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	赤褐色	赤彩

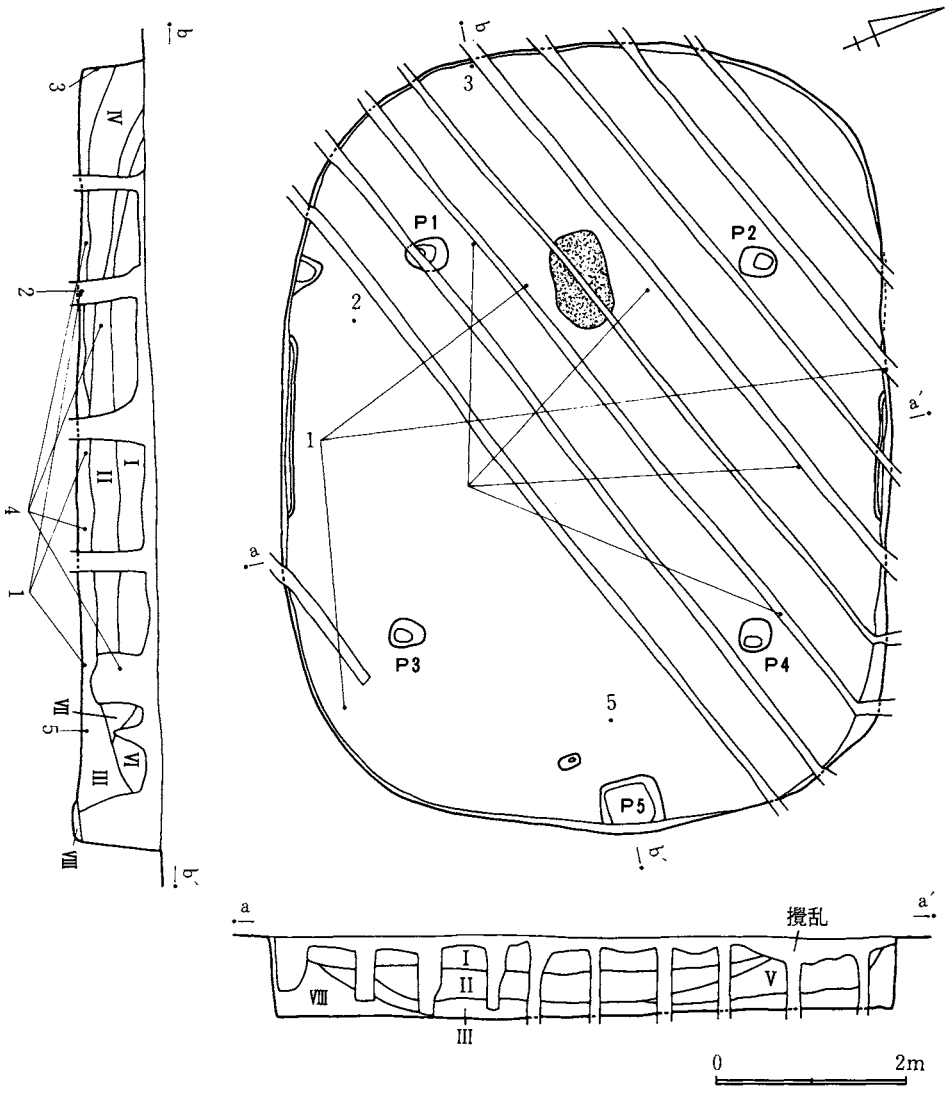


図296 D126号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層暗褐色土層、IV層ローム粒混入暗褐色土層、V層ローム粒混入褐色土層、VI層ロームブロック混入暗褐色土層、VII層ローム粒混入黒色土層、VIII層黄褐色土層が堆積しており、遺物はIII層から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、鉢形土器と石製品がある。甕形土器は1、2でい

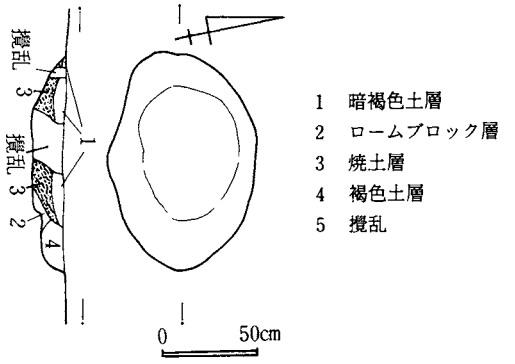


図297 D126号遺構炉跡実測図

ずれも無文である。壺形土器は3の底部破片である。鉢形土器は4で口縁部に細網目縄文が施されている。石製品は5の軽石で、中央部が著しく窪んでいる。

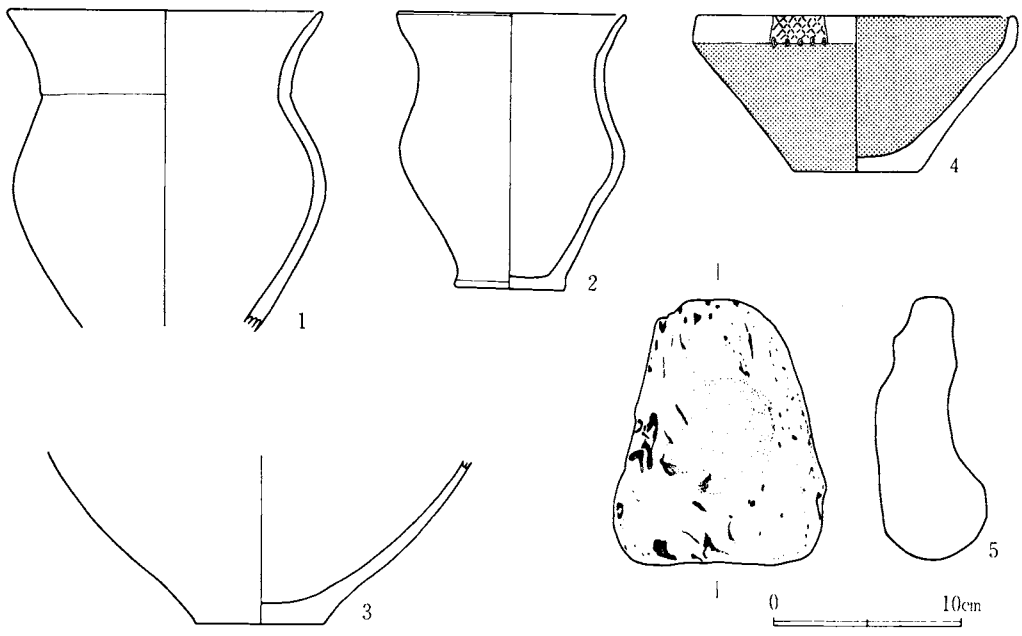


図298 D126号遺構出土遺物実測図

21. D128号遺構（図299～301、図版69—1）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D129が近接している。

遺構 長径4.04m、短径3.88mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.2m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかったが、北西部分にP_1を検出した。深さ0.17mを計る。

炉 住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.55m、短径0.41m、深さ0.15mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層が堆積している。遺物は覆土中に散在して出土している。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。甕形土器の底部破片で木葉痕がある。

D128出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.8	底部破片	——	砂粒	堅緻	赤褐色	木葉痕

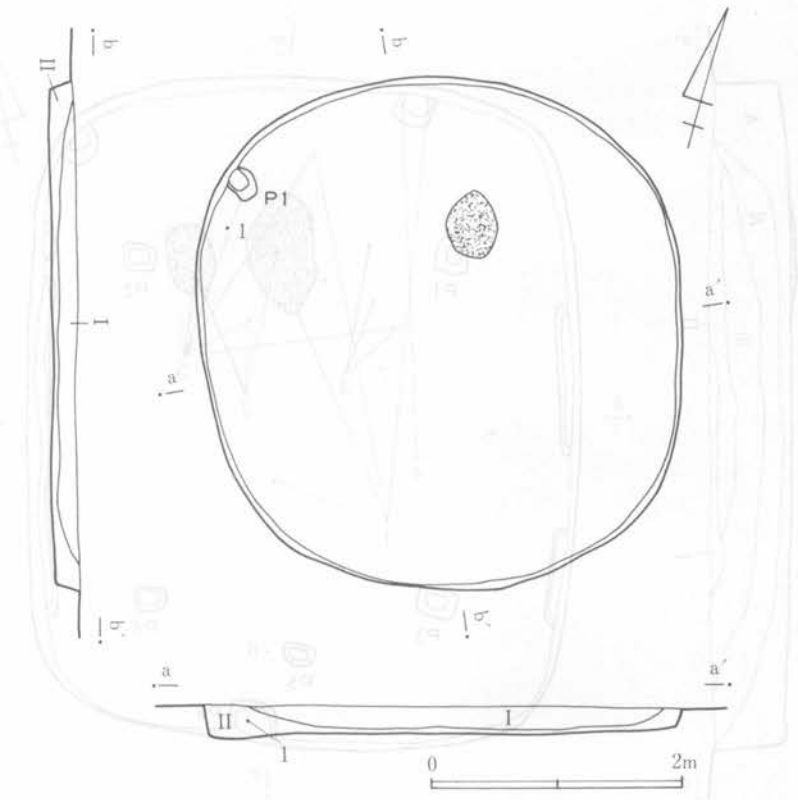


図299 D128号遺構実測図

図300 D128号遺構炉跡実測図　　図301 D128号遺構出土遺物実測図

22. D129号遺構（図302～304、図版69－2）

IV群Aの住居跡群において南側に位置し、D128、D140が近接している。

遺構　北壁5.24m、東壁4.48mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.68m掘り込んでいる。東、西壁の一部には幅0.1m、深さ0.05m、長さ0.7mから3mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置してあり、P_1～P_4を検出した。一辺0.28mを計る方形の掘形を呈し、深さ平均0.32m以上0.4m以下を計る。また、南壁に接し一辺0.35m、深さ0.2mを計るP_6、P_3、P_4の間に長径0.21m、深

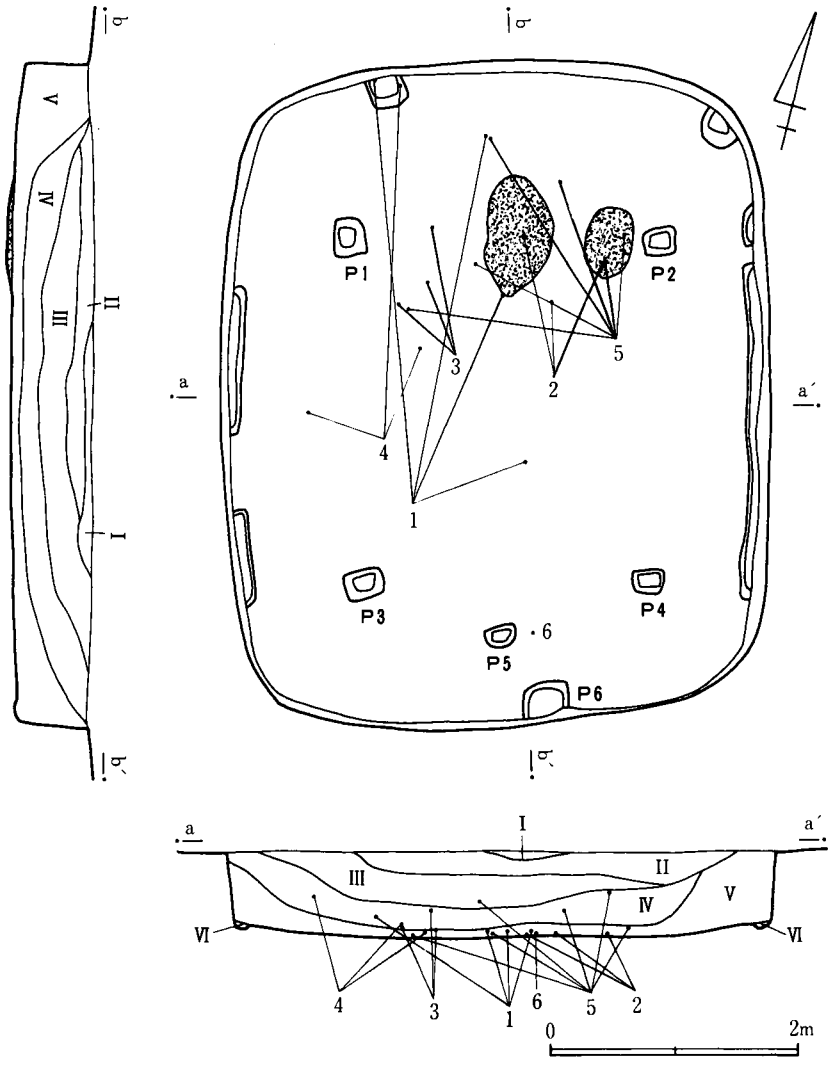


図302 D129号遺構実測図

さ0.12mのP₅を検出した。その他、北壁側に2か所の小ピットを検出した。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面およびIV、V層から出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3である。1は輪積痕が残る口縁部破片、2は刻目が見られる。3は附

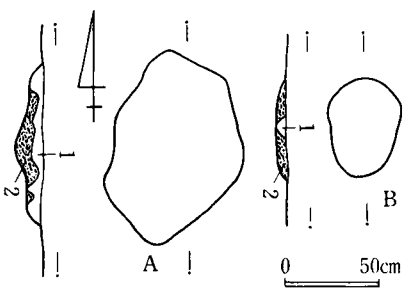


図303 D129号遺構炉跡実測図

1 黒褐色土層
2 焼土層

加条縄文が施文される底部破片である。高坏形土器は4で脚部の破片である。壺形土器は5の底部破片である。石製品は6の砂岩製砥石である。

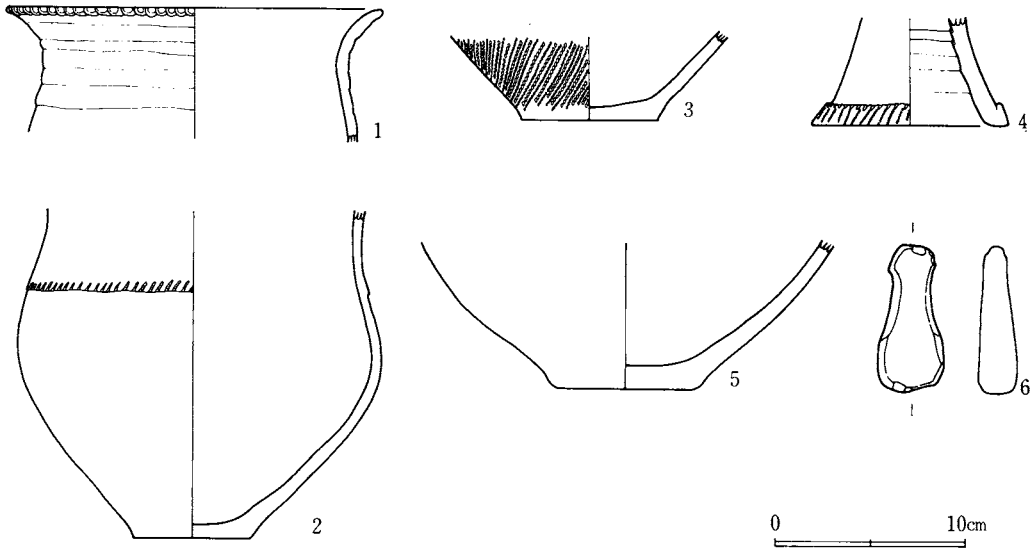


図304 D129号遺構出土遺物実測図

D129出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.4	—	口縁部と頸部	輪積痕	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
2	甕	—	—	6.0	3/3	縄文原体刻目ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡黒褐色	
3	甕	—	—	7.2	底部のみ	附加条縄文	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	L+{R/R+LR(附加)
4	高坏	—	—	10.2	脚部のみ	折り返し底部斜縄文	——	堅緻	淡茶褐色	
5	壺	—	—	7.2	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	

23. D140号遺構（図305～307、図版69－3、77）

IV群Aの住居群内においてほぼ南側に位置し、D129が近接している。

遺構 長径4.48m、短径3.6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に

D140出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.9	—	3/3	内外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	胴部下半二次的に火を受ける
2	甕	—	—	4.8	1/2	外面ヘラ削り	砂粒	軟弱	黒褐色	木葉痕

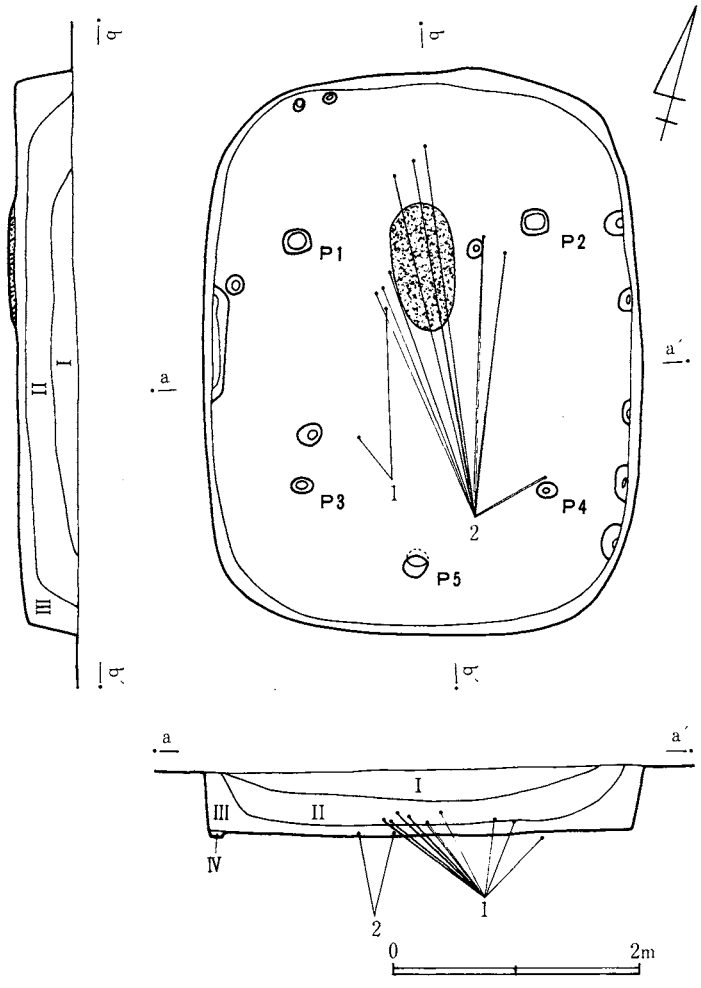


図305 D140号遺構実測図

0.52m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は外角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.41m以上、0.6m以下を計る。また、P_3、P_4の間に径0.15m、深さ0.44mを計り、斜めに掘り込んだピットP_5を検出した。その他、壁際に小ピットを8か所検出した。西壁中央部に幅0.1m、深さ0.05m、長さ1mの壁溝を検出した。

炉 住居中央部より北側に寄ってP_1、P_2の間に位置している。長径0.85m、短径0.43m、深さ0.13mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

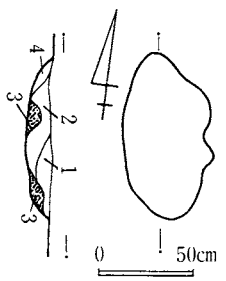


図306 D140号遺構炉跡実測図

1 茶褐色土層
2 焼土粒混入黒色土層
3 焼土層
4 褐色土層

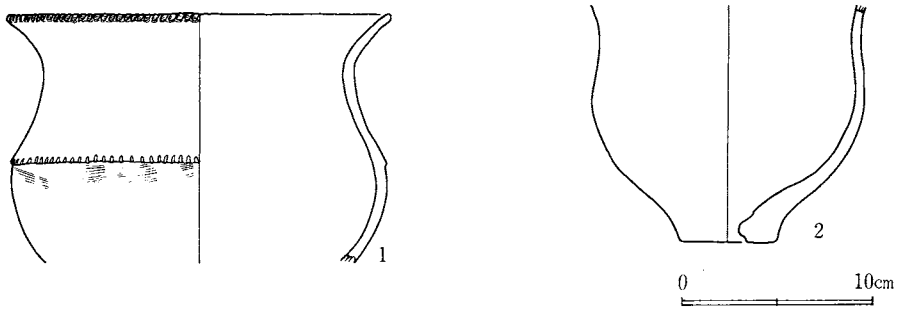


図307 D140号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積しており、炉を中心に出土している。

出土遺物　遺物は甕形土器のみである。1は胴部に刺突が見られる。2は口縁部を欠損している。

24. D141号遺構（図308～310、図版70－1）

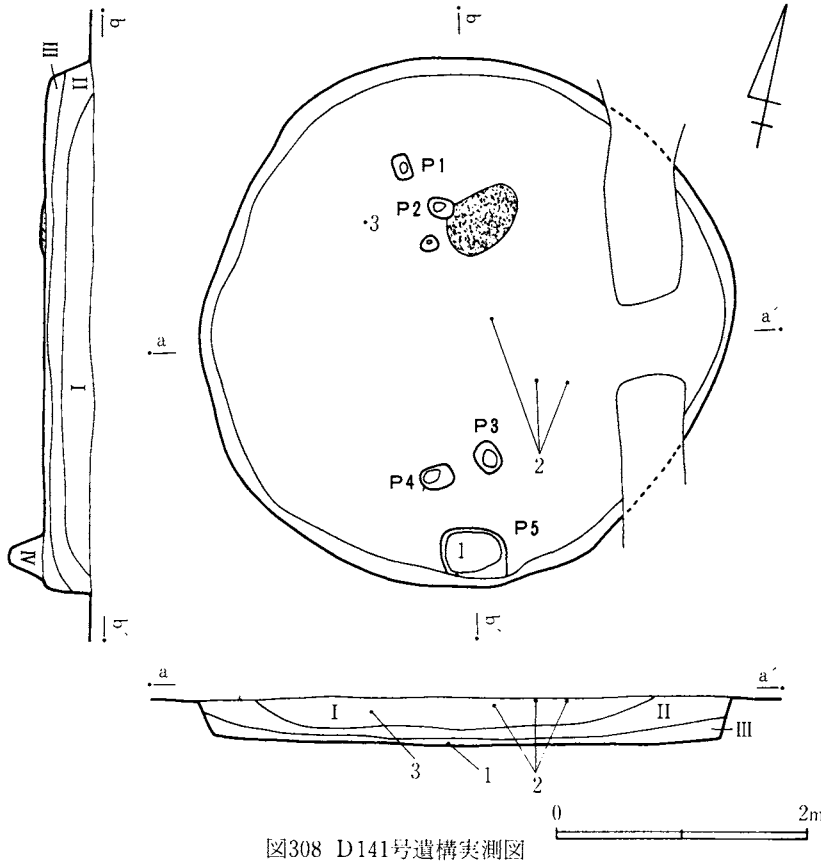


図308 D141号遺構実測図

IV群Aの住居群内において南側に位置し、D140が近接している。芋穴による攪乱を受けている。

遺構　径4.32mでほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。P_1～P_4を検出したが柱穴にはなり得ない。南側の壁に接し長径0.5m、短径0.38m、深さ0.1mのピットP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

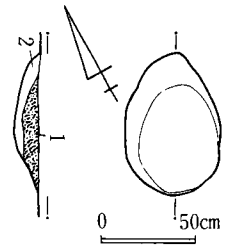


図309　D141号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径0.75m、短径0.5m、深さ0.12mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、遺物はI層を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕形土器と石製品がある。甕形土器は1の胴部破片である。台付甕形土器は2で、台部の破片である。石製品は3の砂岩製磨製石斧である。

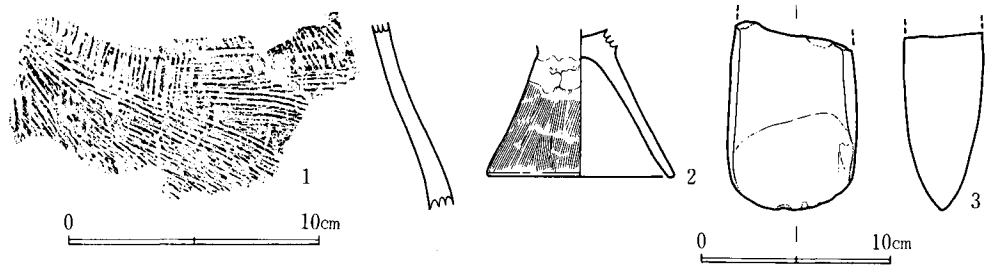


図310　D141号遺構出土遺物実測図

D141出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部のみ	ハケ目	砂粒	軟弱	黒褐色	
2	台付甕	—	—	9.8	脚部のみ	ハケ目	砂粒	軟弱	暗赤褐色	木葉痕

25. D145号遺構（図311～313、図版70－2、3、76）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D147が近接している。柱穴を検出するため床面を精査した段階において8か所に位置するのを確認できた。8か所の柱穴は修改築に伴う所産と判断できる。

遺構　長径8.84m、短径7.56mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ

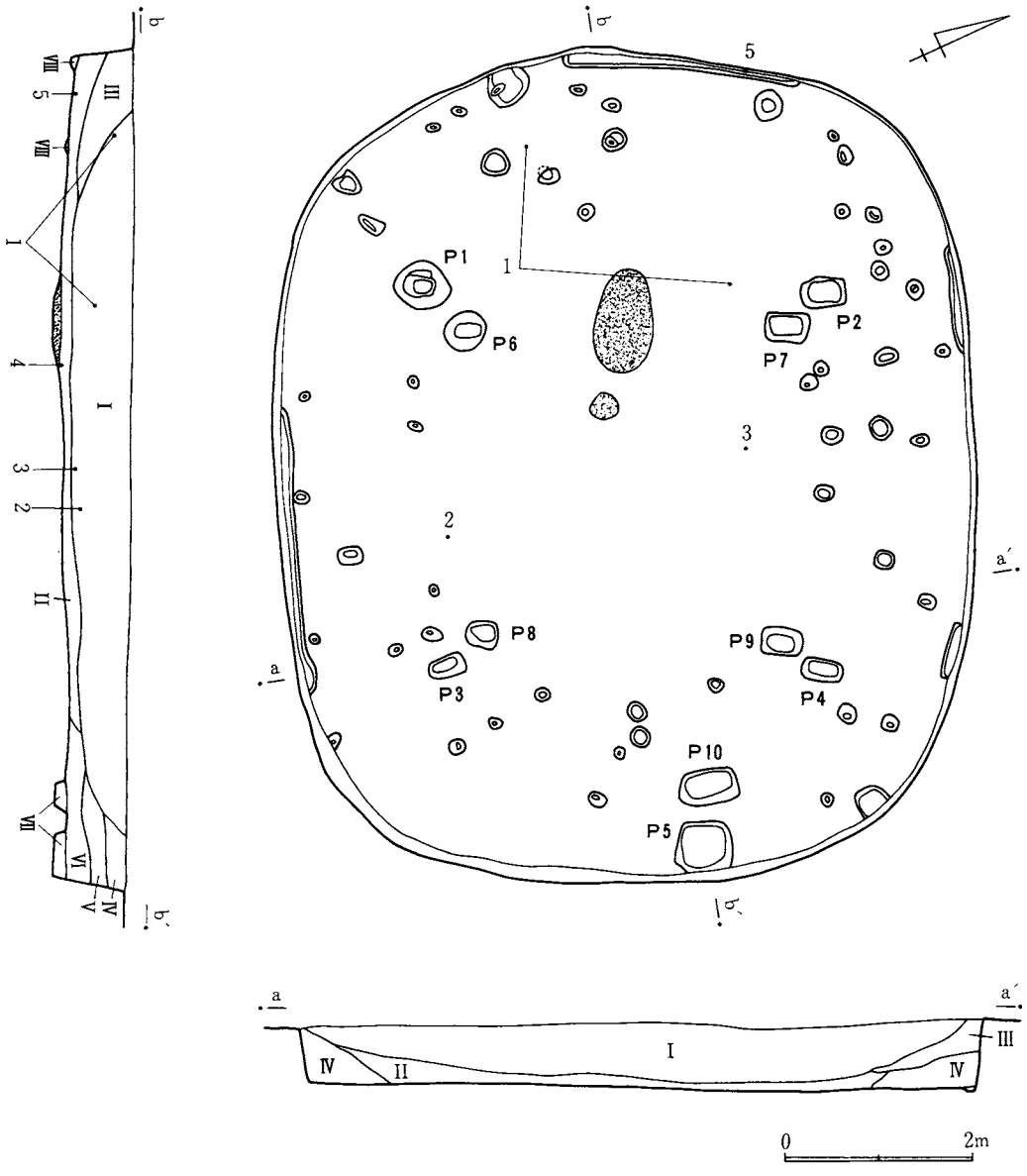
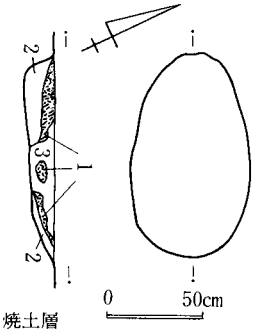


図311 D145号遺構実測図

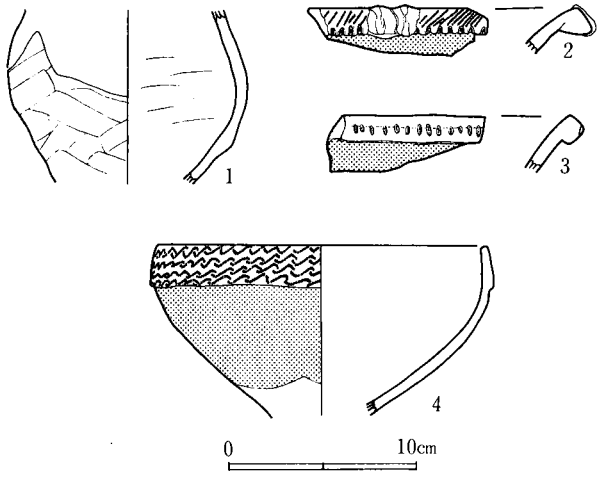
D145出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	壺	—	—	—	口縁部破片	棒状浮文 斜縄文	砂粒	やや軟弱	淡灰褐色	
3	壺	—	—	—	口縁部破片	縄文原体刻目	——	堅緻	赤褐色	赤彩
4	鉢	—	17.2	—	2/3	S字状結節文 ヘラナデ	——	やや堅緻	赤褐色	赤彩
5	甕	—	—	—	胴部破片	多条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	



1　焼土層
2　ロームブロック層
3　黒褐色土層

図312　D145号遺構炉跡実測図



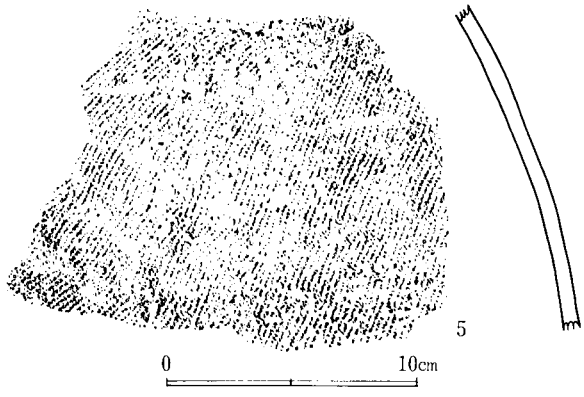


図313　D145号遺構出土遺物実測図

垂直に0.6m掘り込んで床面に達する。西、南、北側の壁には幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が長さ1mから3mの範囲で認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は8か所を検出した。この内P_1～P_4は修改築後のもので長辺0.48m、短辺0.32m、深さ0.77m以上0.9m以下を計る長方形の掘形を呈している。また、東壁に接して一辺0.5m、深さ0.17mのピットP_5を検出した。修改築前の柱穴はP_6～P_9で規模は修改築後と同様である。P_{10}はP_5と同様に本来壁に接して設置されていたピットと考えられるもので、長辺0.5m、短辺0.32m、深さ0.22mを計る。修改築前の住居の規模はP_{10}を基準に考えれば長径7.1m、短径6m前後と推定できる。北側の壁に近くピット列が認められるところであるが、修改築前には壁直下にあったものと推定でき、先の法量は根拠のあるところである。

炉　住居中央部より西側に寄って位置している。長径1.05m、短径0.62m、深さ0.12mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入褐色土層、Ⅵ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅶ層明黒褐色土層、Ⅷ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、鉢形土器がある。甕形土器は1、5で、1は胴部破片、5は多

条縄文が施される胴部破片である。壺形土器は2、3で、いずれも口縁部破片である。鉢形土器は4でS字状結節文が施されている体部破片である。

26. D146号遺跡（図314～316、図版71－1）

IV群Aの住居群内において北側に位置し、D154、D147が近接している。柱穴を検出するため床面を精査した段階において12か所に位置するのが確認できた。12か所の柱穴は修改築に伴う所産であることが判断できた。

遺構　長径5.32m、短径4.6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈し0.6m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は12か所を検出したが、最終段階の柱穴はP_1～P_4である。径平均0.25m、深さ平均0.7m以上0.8m以下

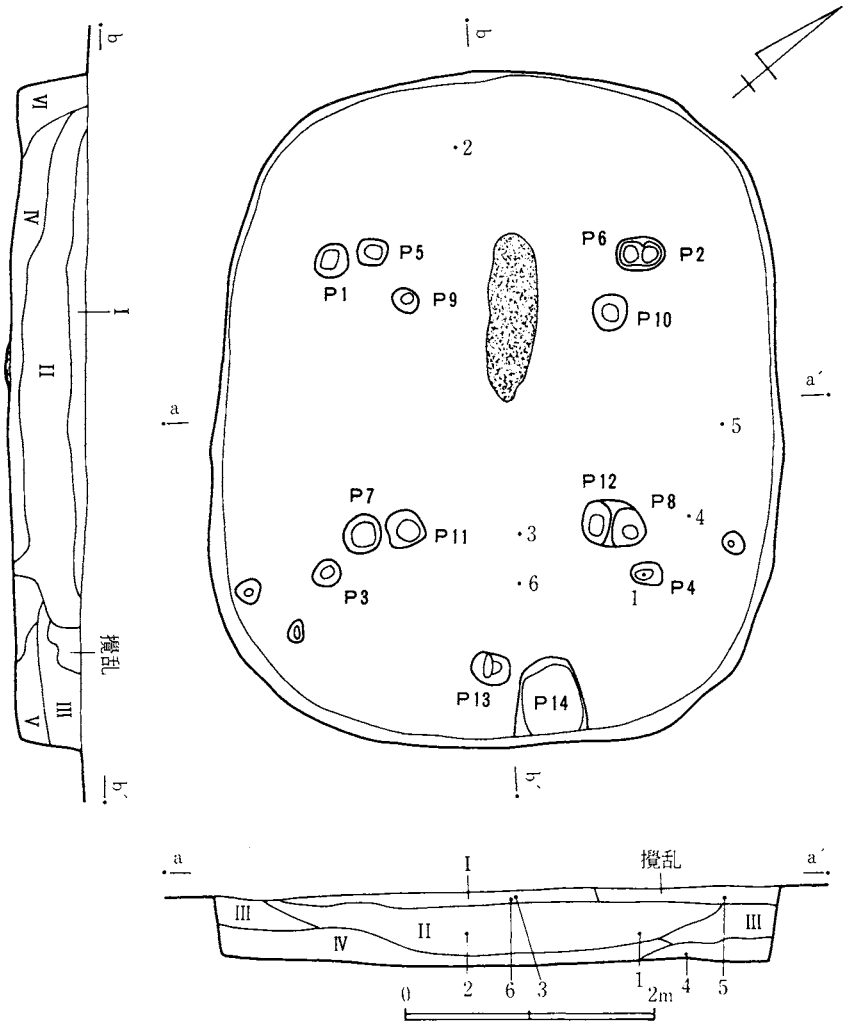


図314　D146号遺構実測図

を計る。また、南壁に接し長径0.55m、短径0.53m、深さ0.22mを計るピットP14を検出した。2回目の修改築時の柱穴はP5～P8である。規模は最終段階とほぼ同じである。P13は2回目に伴うピットと考えられ、径0.3m、深さ0.4mを計る。構築時の柱穴はP9～P12である。規模はほとんど変化ない。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径1.3m、短径0.38m、深さ0.12mを計り、厚さ0.09mの焼土が堆積している。断面から重複する状況が認められる。

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層褐色土層、III層ローム粒混入暗褐色土層、IV層ローム粒混入褐色土層、V層ロームブロック混入暗褐色土層、VI層黒褐色土層が堆積しており、遺物は覆土上層より出土している。

出土遺物　遺物は甕形土器のみである。1は附加条縄文が施文される底部破片である。2、3は輪積痕を残している口縁部破片である。4～6は縄文が施文される胴部破片である。

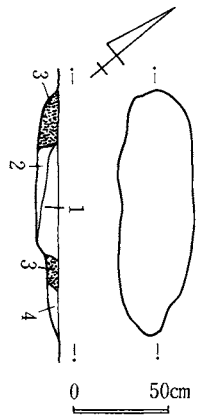


図315　D146号遺構炉跡実測図

1　焼土粒混入黒色土層
2　炭化粒混入焼土層
3　焼土層
4　赤褐色土層

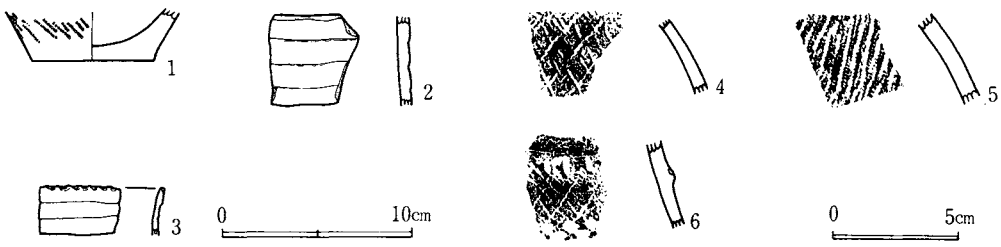


図316　D146号遺構出土遺物実測図

D146出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.4	底部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	輪積痕	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	輪積痕	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	網目状撚糸文	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	甕	—	—	—	胴部破片	網目状撚糸文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

27. **D147号遺構**（図317～319、図版71－2）

IV群Aの住居群内において北東部分に位置し、D145が近接する。

遺構　北壁2.84m、東壁2.8mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。径0.25m、深さ0.05mを計り、厚さ0.01mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層褐色土層が堆積しており、遺物はI、II層にかけて出土している。遺物は稀少である。

出土遺物　図示できる遺物は甕形土器1点のみである。ハケ目がわずかに見られる胴部破片である。

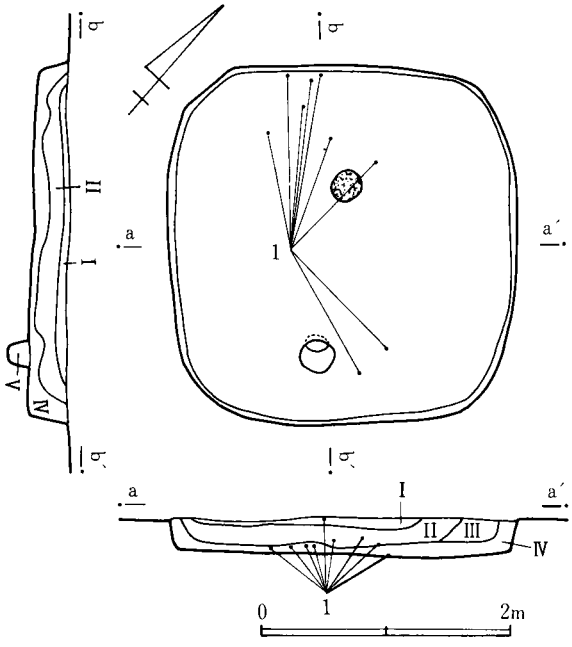


図317　D147号遺構実測図

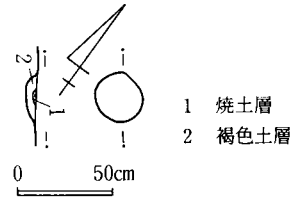


図318　D147号遺構炉跡実測図

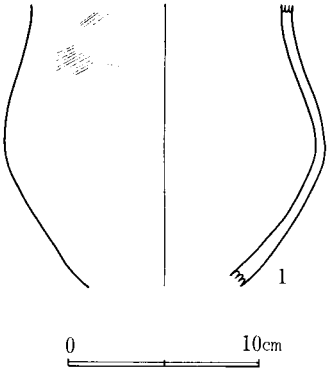


図319　D147号遺構出土遺物実測図

D147出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	暗赤褐色	

28. D151号遺構（図320～322、図版71－3、77）

IV群Aの住居群内において南東部分に位置し、IV群BのD150が近接している。

遺構　径4.48mで、ほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱であるが、P_4の周辺がやや堅緻な状況である。床面上にはP_1～P_3のピットを検出したが柱穴とは判断し難い。南側の壁に接して長さ1.3m、幅0.25m、深さ0.1mを計る溝状のピットP_4を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.7m、短径0.64m、深さ0.15mを計

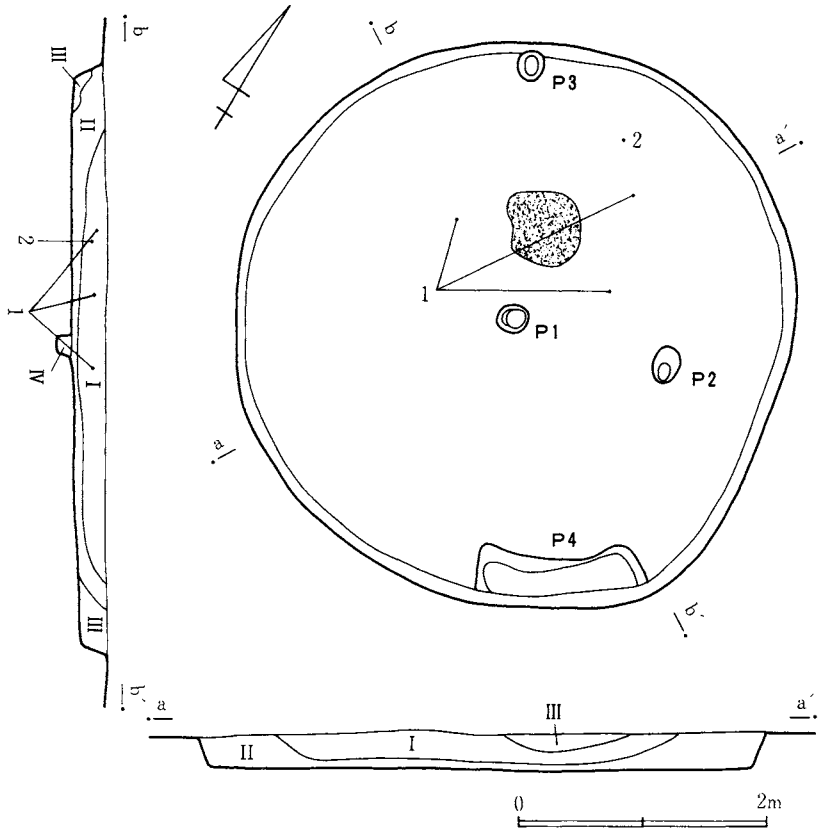


図320　D151号遺構実測図

D151出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	27.6	19.9	7.2	完形	附加条縄文 内面ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
2	甕	—	—	7.0	2/3	附加条縄文の上を 内外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡黒褐色	

り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層褐色土層、IV層暗褐色土層が堆積している。覆土から細片、床面上から2個体が出土している。

出土遺物　遺物はいずれも甕形土器である。1は完形で頸部を除き附加条縄文が施されている。2は肩部のみ附加条縄文が施文される。

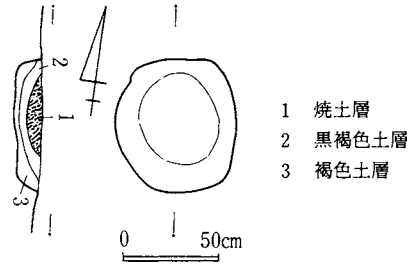


図321　D151号遺構炉跡実測図

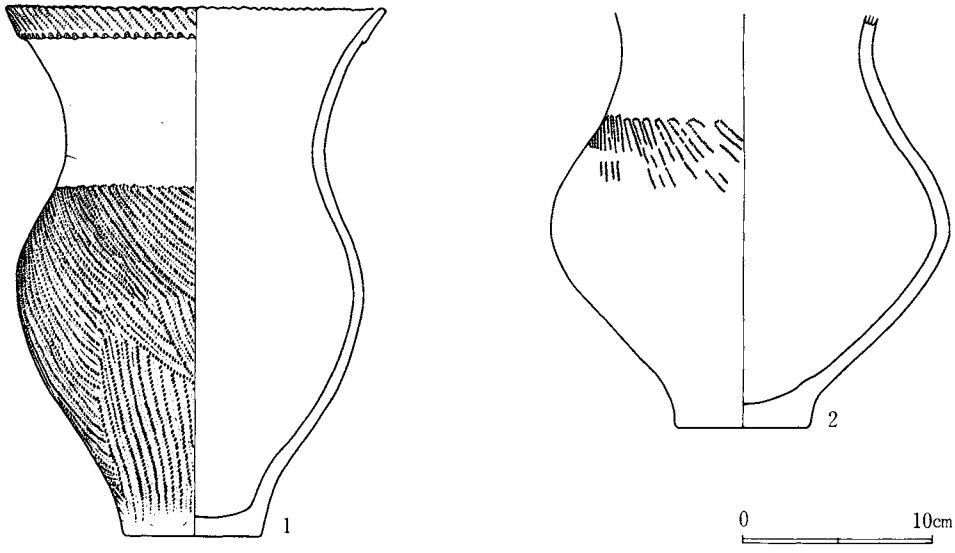


図322　D151号遺構出土遺物実測図

29. D154号遺構（図323～325、図版72－1）

IV群Aの住居群内において北側の部分に位置し、D146が近接している。

遺構　長径6.48m、短径5.4mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。北壁部分には幅0.05m、深さ0.03mの壁溝が部分的に認められる。柱穴は5か所で検出したが、修改築に伴う所産と考えられる。最終時の柱穴はP_1、P_2、P_4、P_5と考えられる。P_1、P_2は重複するため規模は明らかではないが、P_4、P_5は径0.23m、深さ0.7mを計る。また、東壁に接して一辺0.48m、深さ0.18mのピットP_9を検出した。構築時の柱穴はP_1～P_9であると思われる。P_3は深さ0.74mを計る。また、P_8を切断してP_7がある。径0.38m、深さ0.24mを計り斜めに掘り込んでいる。

炉　住居中央部から西側に寄って位置している。長径0.8m、短径0.45m、深さ0.08mを計

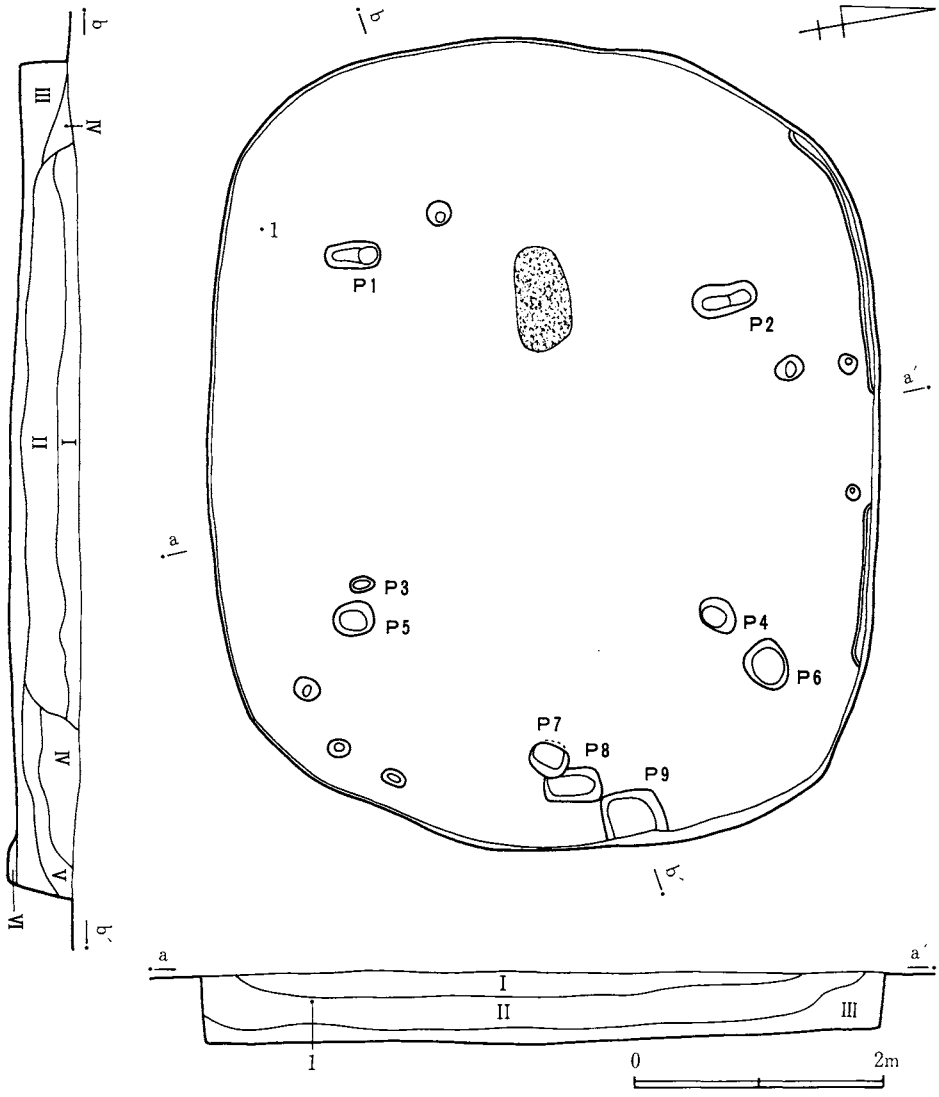


図323 D154号遺構実測図

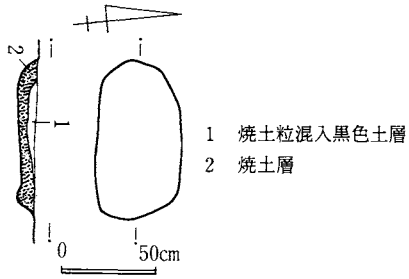


図324 D154号遺構炉跡実測図

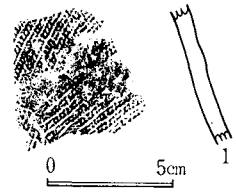


図325 D154号遺構出土遺物実測図

り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層茶褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒色土層、Ⅴ層小ロームブロック混入黒色土層、Ⅳ層暗褐色土層が堆積する。遺物は稀少である。

出土遺物　図示できる遺物は甕形土器胴部破片1点だけである。

D154出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	附加条縄文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

30. D155号遺構（図326～328、図版72－2、77）

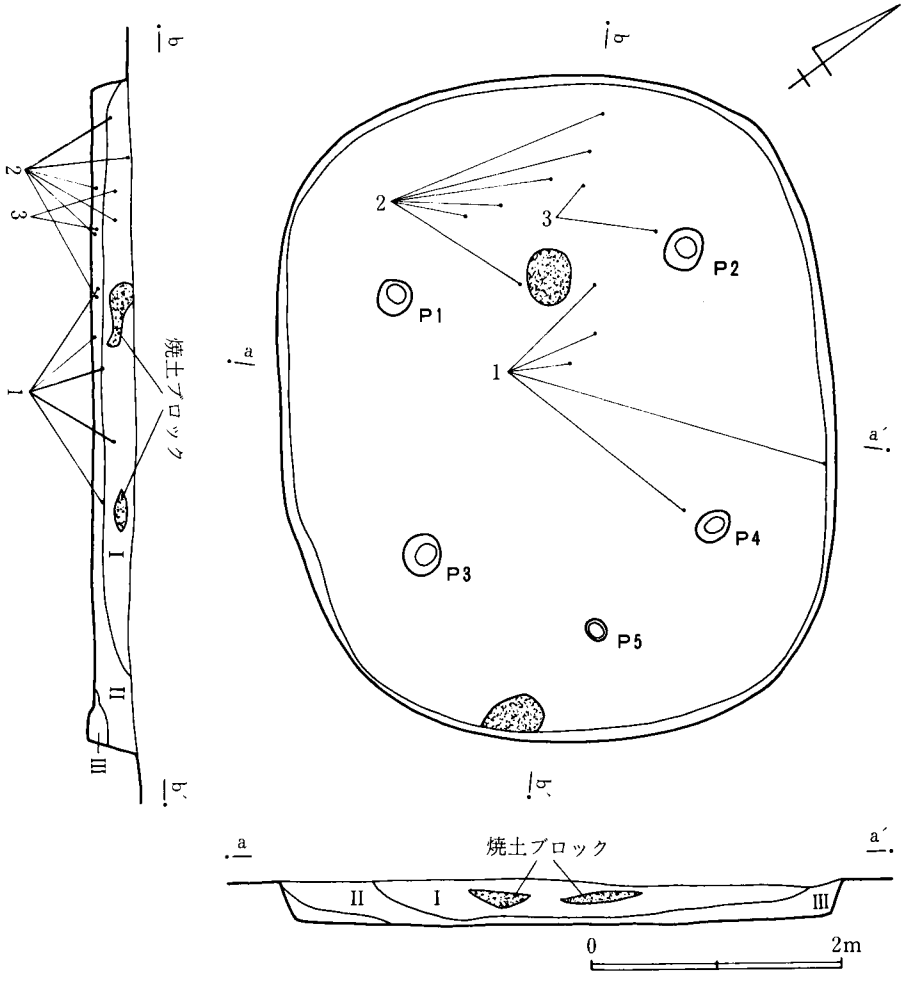


図326　D155号遺構実測図

IV群Aの住居跡群において北東部分に位置し、D154が近接している。

遺構　長径5.28m、短径4.44mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.32m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_9を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.37m以上0.6m以下を計る。また、P_3、P_4の間に径0.13m、深さ0.27mを計るピットP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

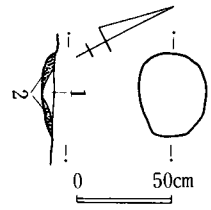


図327　D155号遺構炉跡実測図

1　焼土粒混入黒色土層
2　焼土層

炉　住居中央部から西側に寄って位置している。長径0.43m、短径0.35m、深さ0.07mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層が堆積している。遺物は床面上ないしI、II層から出土している。

出土遺物　遺物はいずれも甕形土器である。1はハケ目調整が見られ、2は輪積痕と細網目縄文が見られ、3は口唇部に刻目が施されている土器である。

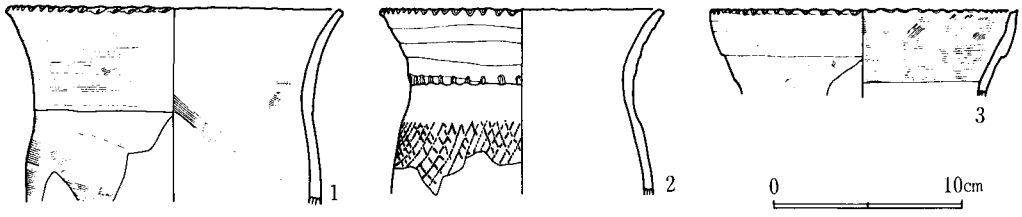


図328　D155号遺構出土遺物実測図

D155出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	17.4	—	½	ハケ目の上を内外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	15.0	—	½	輪積痕 網目状撚糸文	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
3	甕	—	16.2	—	口縁部のみ	ハケ目の上をヨコナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

31. D156号遺構（図329～331、図版72－3）

IV群Aの住居群内において東側部分に位置し、D157が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱が著しく、覆土全体の26%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構　径5.28mでほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.32m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。ピットはP_1～P_3を検出した

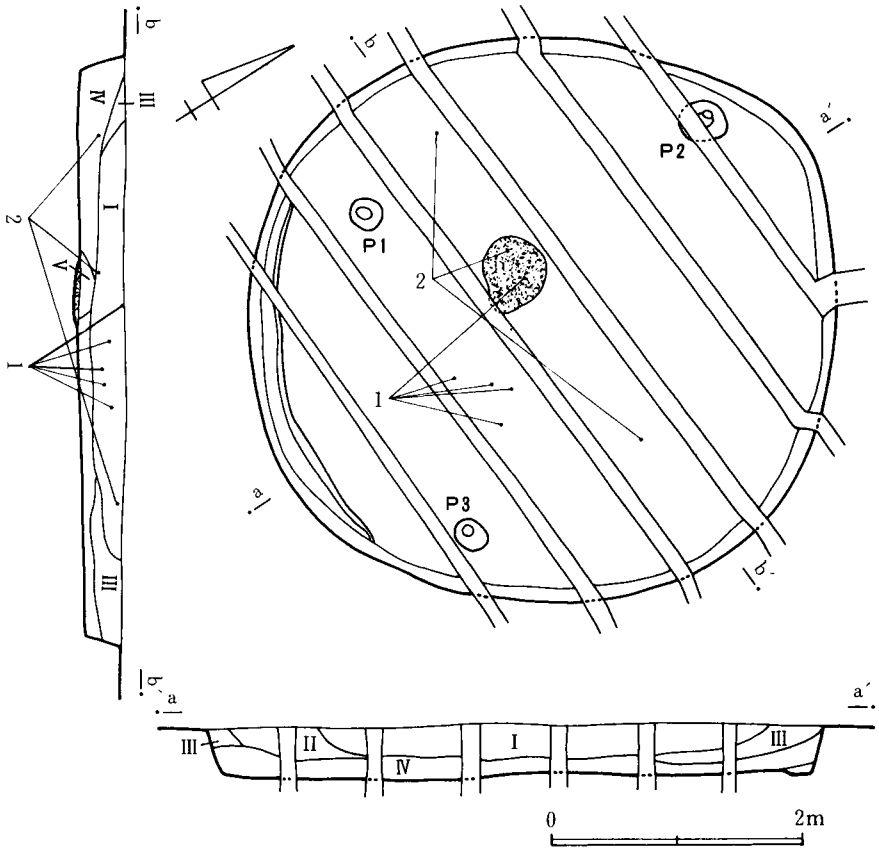


図329 D156号遺構実測図

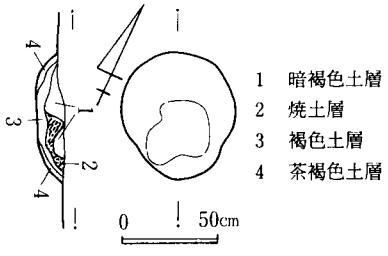


図330 D156号遺構炉跡実測図

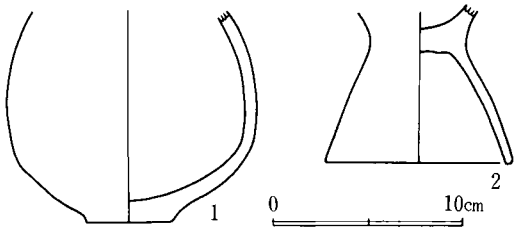


図331 D156号遺構出土遺物実測図

が、柱穴とは判断し難い。南側の壁に幅0.15m、深さ0.05m、深さ2.5mの壁溝が認められる。

炉 住居中央より西側に寄って位置している。長径0.64m、短径0.6m、深さ0.15mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層から出土している。

出土遺物 遺物は、坩、台付甕形土器がある。坩形土器は1で球形の胴部のみで口縁部は欠

損する。台付甕形土器は2で、台のみである。

D156出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坩	—	—	4.4	3/3	内、外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	
2	台付甕	—	—	9.8	脚部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡灰褐色	

32. D157号遺構（図332～334、図版73－1）

IV群Aの住居群内において南東部分に位置し、D156、D159が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の16%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪

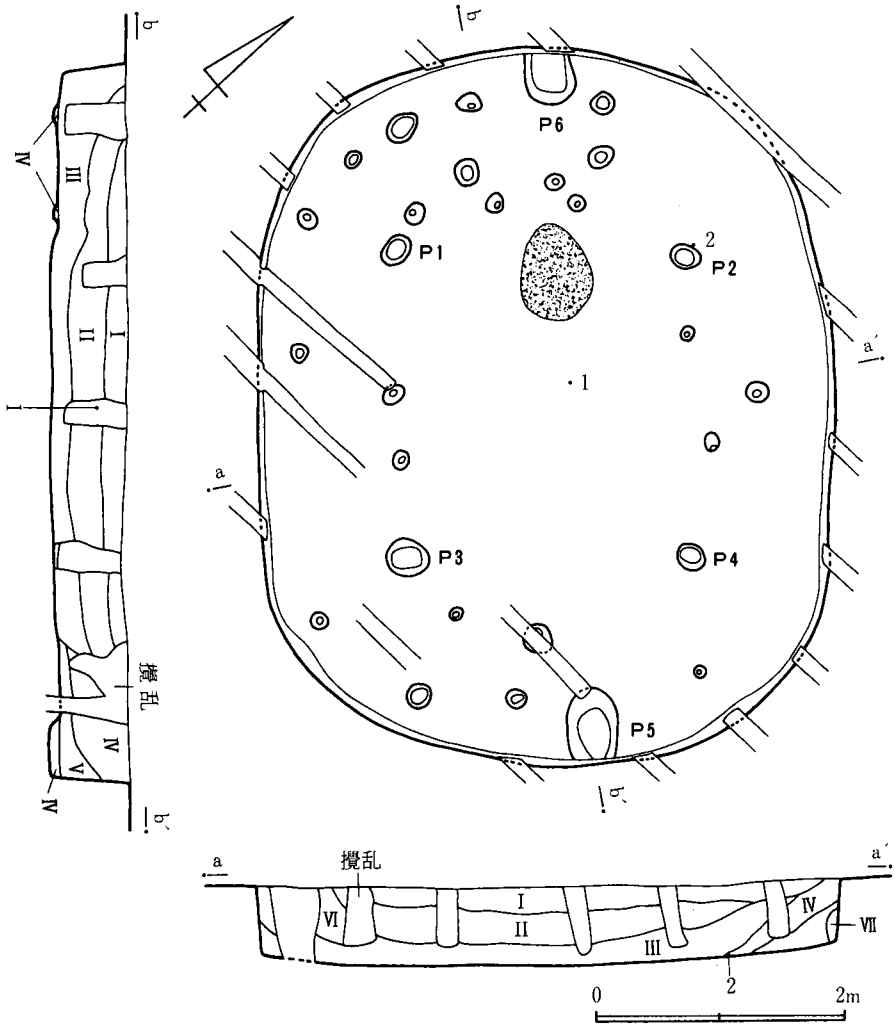


図332 D157号遺構実測図

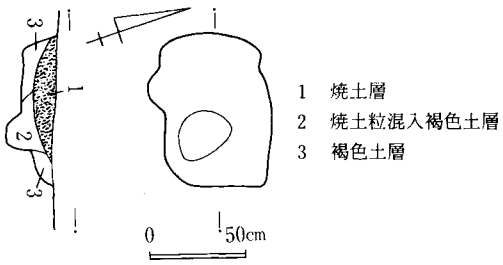


図333 D157号遺構炉跡実測図

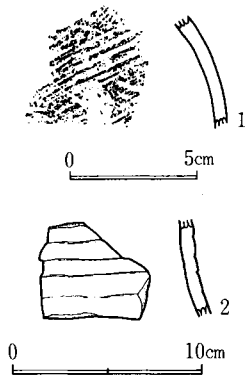


図334 D157号遺構出土遺物実測図

い。

遺構 長径5.68m、短径4.6mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.6m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より外側に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.25m、深さ平均0.6mを計る。また、南壁に接しP_5、北壁に接しP_6を検出した。いずれも深さ0.16mを計る。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.8m、深さ0.2mを計る不整な形をしており、厚さ0.12mの焼土が堆積する。

遺物出土状況 Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層暗黒褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入褐色土層、Ⅳ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅶ層褐色土層が堆積している。遺物は稀少で覆土中に散在して出土している。

出土遺物 いずれも甕形土器である。1はハケ目が認められ、2は輪積痕が見られる破片である。

D157出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	粗いハケ目	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	—	—	頸部破片	——	小石	軟弱	黒褐色	

33. D159号遺構（図335、図版73－2）

Ⅳ群Aの住居群内において南東部分に位置し、D157が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の34%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

遺構 径3.76mで、ほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。また炉も検出することができなかった。生活の場として機能した住居跡であるか判断し難い。

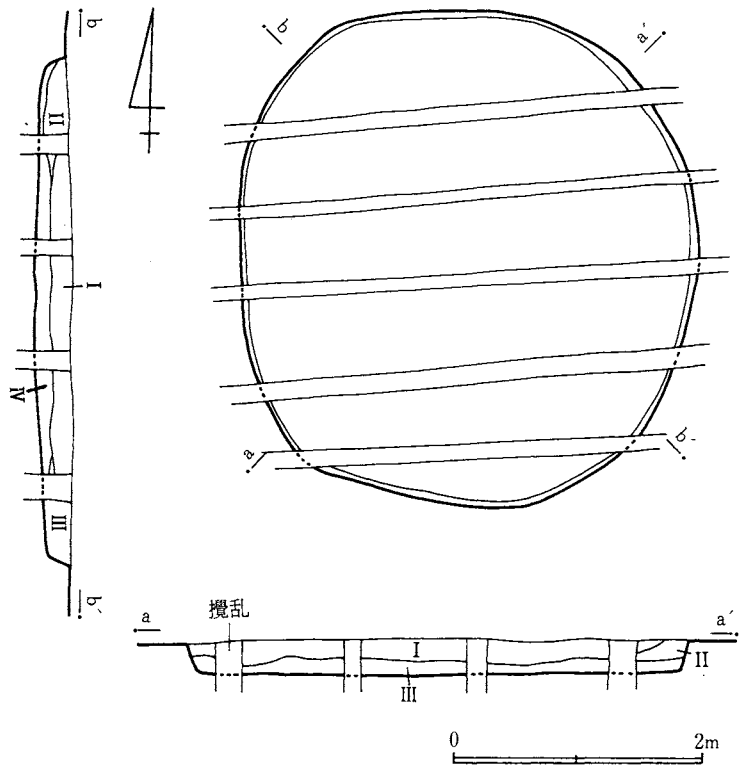


図335 D159号遺構実測図

覆土はⅠ層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層褐色土層、IV層ローム粒混入褐色土層が堆積しているが、遺物の出土はきわめて稀少で、しかも図示できる遺物は皆無である。

34. D161号遺構（図336～338、図版73－3）

IV群Aの住居群内において最も東に位置し、D159が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けており、覆土全体の23%におよんでいる。

遺構 東壁4.68m、北壁4.52mで隅丸方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.55m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はP_1～P_4を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.42m以上0.56m以下を計る。また、P_3、P_4の間にP_5を検出した。径0.2m、深さ0.43mを計る。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央より西側に寄って位置している。長径0.7m、短径0.67m、深さ0.15mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒灰色土層、II層黒色土層、III層黒褐色土層、IV層ロームブロック混入褐色土層が堆積している。遺物は稀少である。

出土遺物 図示できる遺物は甕形土器1点のみである。

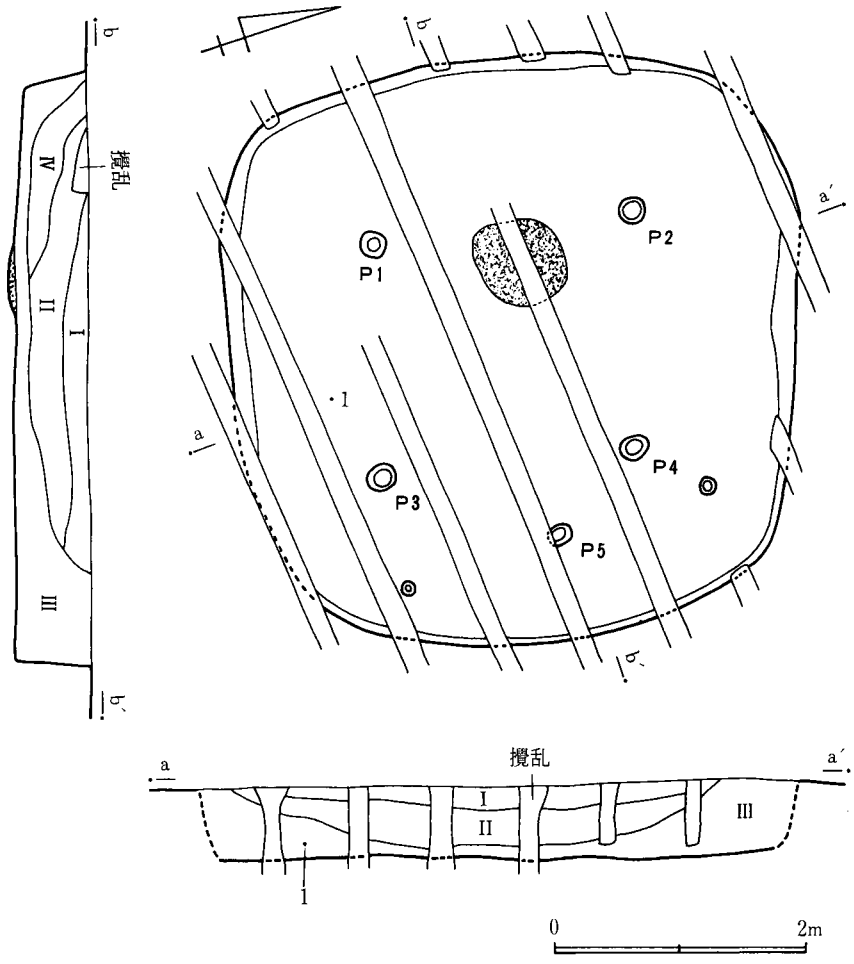


図336 D161号遺構実測図

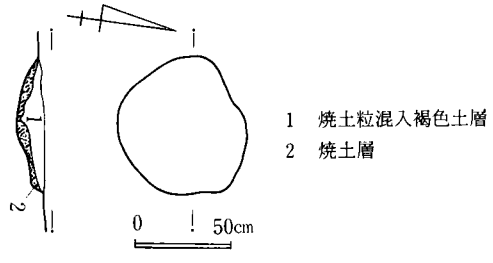


図337 D161号遺構炉跡実測図

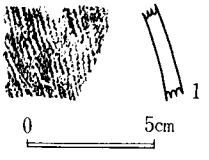


図338 D161号遺構出土遺物実測図

D161出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	褐色	

35. D168号遺構（図339～341，図版74－1，77）

IV群Aの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D121が近接している。一部円形の攪乱を受けている。

遺構　北壁2m、東壁1.9mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.16m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.35m、短径0.28m、深さ0.07mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層明黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層褐色土層が堆積している。遺物は床面上より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器がある。甕形土器は1で、小形な土器である。胴部と口唇部に刻目を施してある。壺形土器は2で底部破片である。

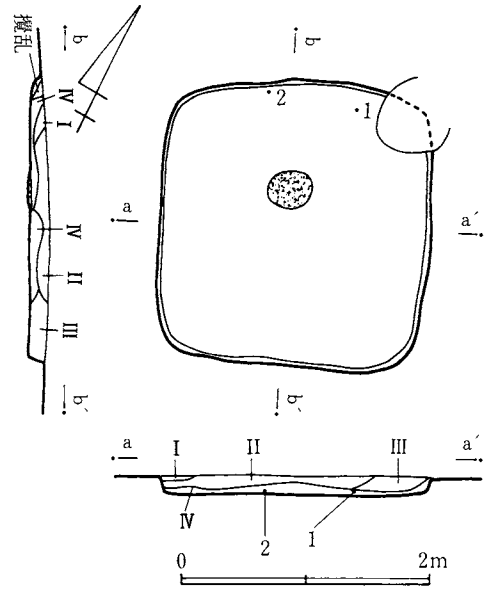


図339　D168号遺構実測図

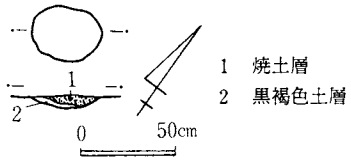


図340　D168号遺構炉跡実測図

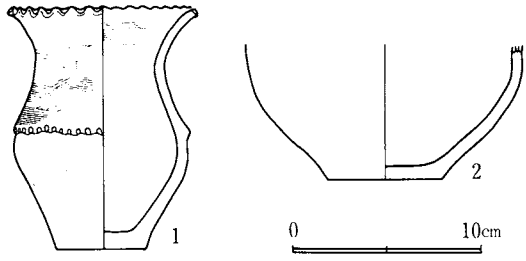


図341　D168号遺構出土遺物実測図

D168出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	12.8	12.2	4.8	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	胴部スス付着
2	壺	—	—	6.2	胴下部と底部	内面ヘラナデ 外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	

36. D179号遺構（図342～344、図版74－2）

IV群Aの住居群内において南西部分に位置し、D178が近接している。

遺構　長径4.7m、短径4mで楕円形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.6m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.38m、深さ平均0.48m以上0.82m以下を計る。また南壁近くに径0.2m、深さ0.28mのピットP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

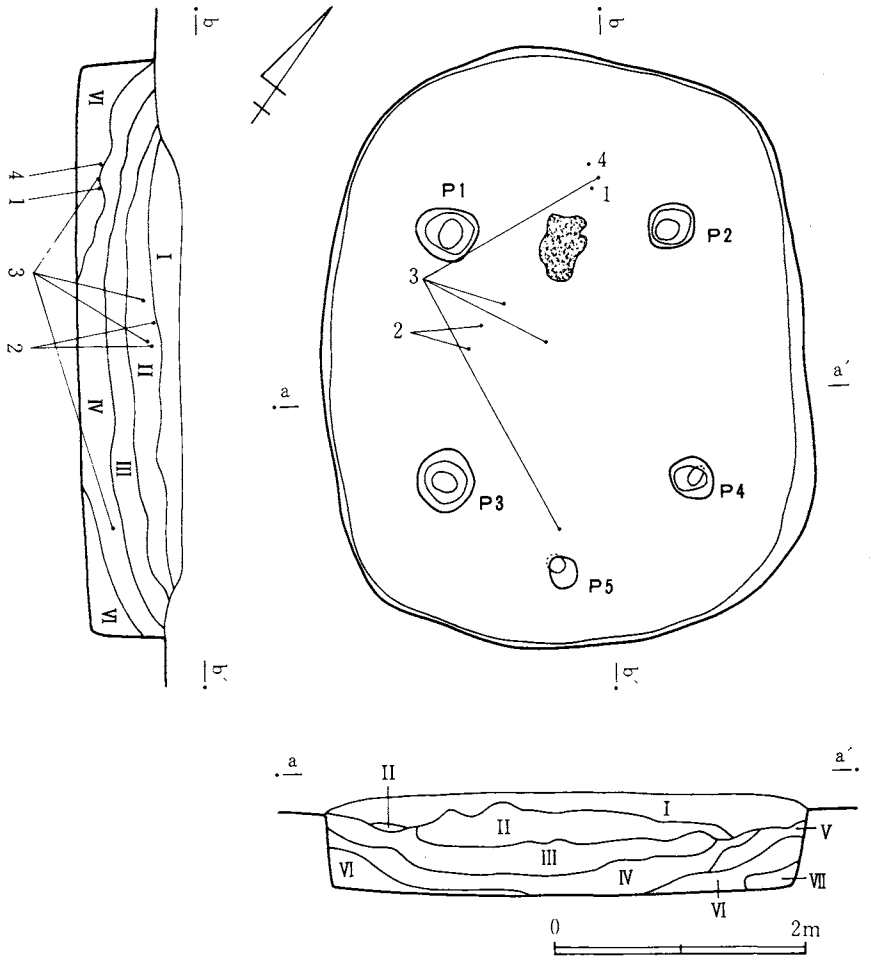


図342　D179号遺構実測図

炉　住居中央より北側に位置している。長径0.5m、短径0.35m、深さ0.07mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黄黒色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黄褐色土層、

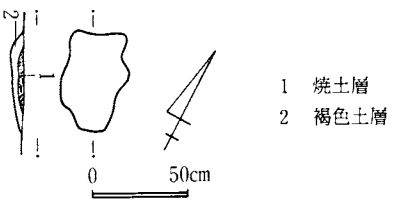


図343　D179号遺構炉跡実測図

IV層暗黄黒色土層、V層暗黄褐色土層、VI層ロームブロック混入黄褐色土層、VII層褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中に散在した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、壺、甕、高坏形土器がある。壺形土器は1の口縁部破片である。甕形土器は2の小形のものと、4の胴部破片がある。3は高坏形土器は、脚と坏の接合部の破片である。

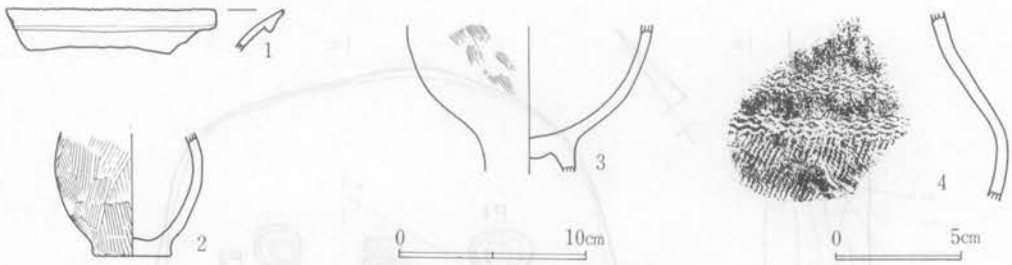


図344　D179号遺構出土遺物実測図

D179出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	口縁部破片	口唇部に縄文原体押圧	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	4.1	½	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	
3	高坏	—	—	—	胴部破片	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	S字状結節文 LR斜縄文	砂粒	堅緻	茶褐色	

37. D181号遺構（図345、346、図版74－3）

IV群Aの住居群内において南西部に位置している。

遺構　長径4.2m、短径3.3mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈して掘り込んでおり、深い部分で0.5m、浅い部分で0.25mを計る。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。住居の南西部分に、長径1.2m、短径0.7

D181出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ刻目 ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	輪積痕	小石	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ刻目 ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	(内)茶褐色 (外)黒色	
4	甕	—	—	—	頸部破片	RL斜縄文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

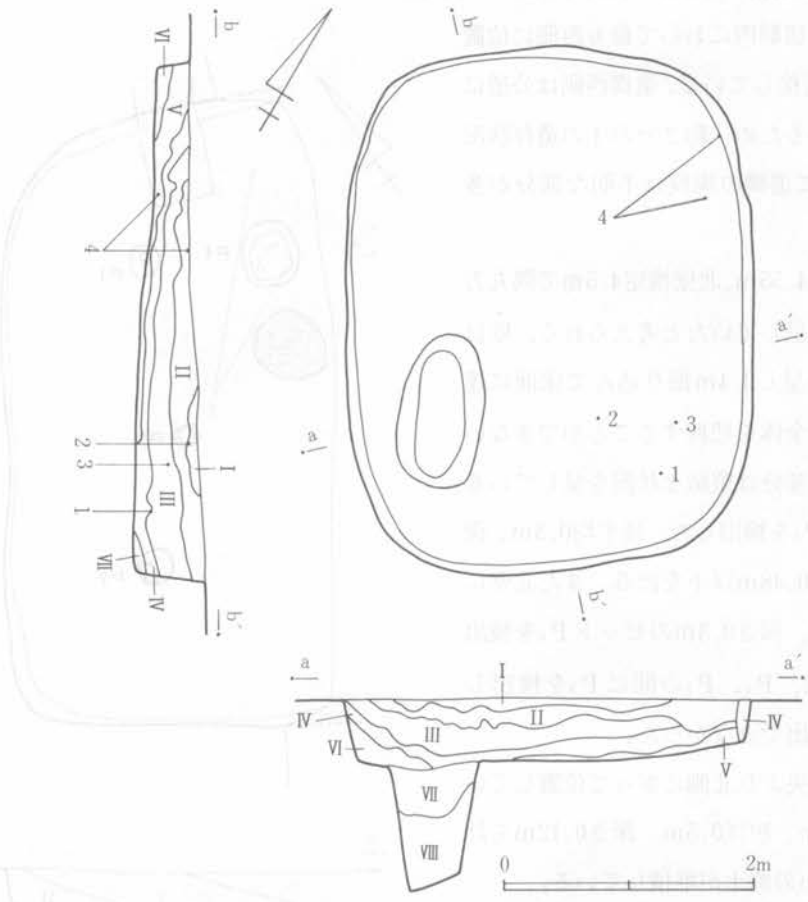


図345 D181号遺構実測図

m、深さ0.97mを計るピットを検出した。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗黒褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層暗黄褐色土層、Ⅴ層ロームブロック混入黄褐色土層、Ⅵ層褐色土層、Ⅶ層暗褐色土層、Ⅷ層黄褐色土層、Ⅸ層ロームブロック層が堆積している。遺物は覆土中の出土で、細片が多い。

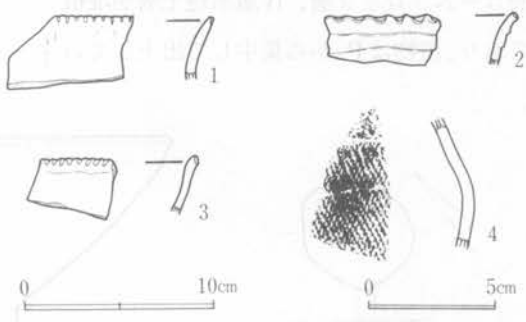


図346 D181号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は甕形土器のみである。1～3は口唇部に刻目がある口縁部の破片、4は縄文が施される胴部の破片である。

38. D095号遺構（図347～349、図版78－1、95）

IV群Bの住居群内において最も西側に位置し、D100が近接している。遺構西側は公道に攪乱されているため、約2分の1の遺存状況である。よって遺構の規模は不明な部分が多い。

遺構　東壁4.55m、北壁推定4.5mで隅丸方形の平面形を呈していたと考えられる。壁は若干の傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達する。床面は全体を把握することができないが、遺存する部分は堅緻な状況を呈している。柱穴はP_1、P_2を検出した。径平均0.3m、深さ0.27m以上0.48m以下を計る。また北壁に近く径0.45m、深さ0.3mのピットP_4を検出した。その他、P_1、P_2の間にP_3を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径0.6m、短径0.5m、深さ0.12mを計り、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層ロームブロック混入黒色土層、II層ロームブロック混入黒褐色土層、III層ロームブロック層、IV層黒色土層が堆積しており、遺物はP_4から集中して出土している。

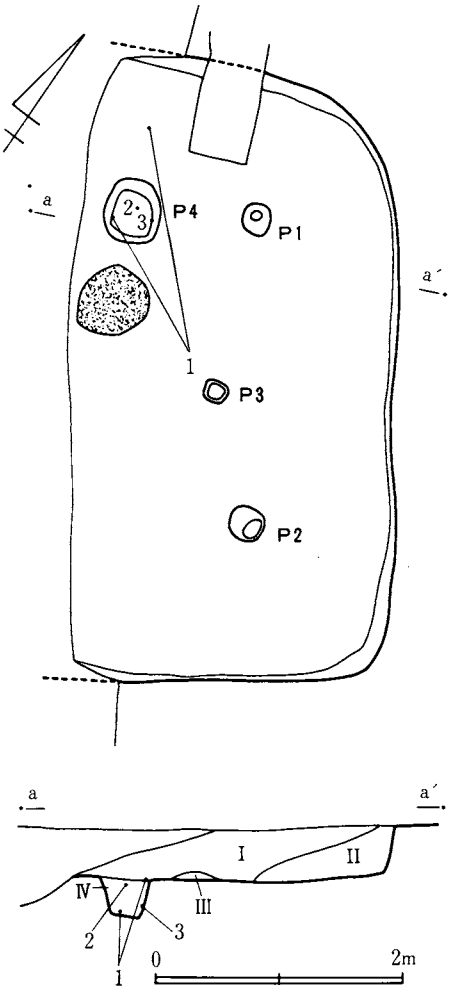


図347　D095号遺構実測図

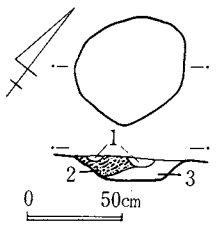


図348　D095号遺構炉跡実測図

1　黒色土層
2　焼土層
3　炭化粒混入焼土層

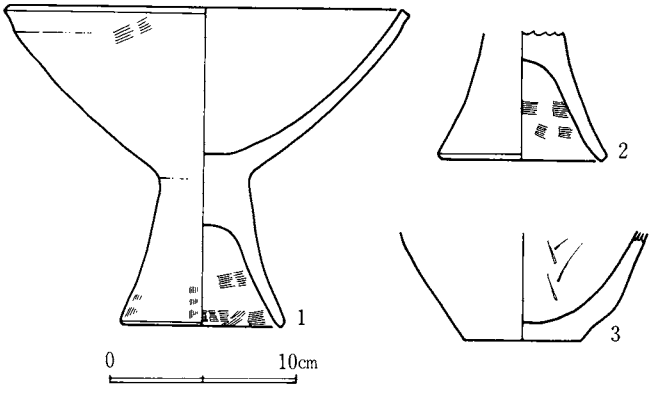


図349　D095号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、高坏、甕形土器がある。高坏形土器は1、2である。1は脚部が広がらず、坏部は直線的に大きく開く。2は脚部破片である。甕形土器は3で、底部の破片である。

D095出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	16.4	20.5	8.2	2/3	ハケ目の上を内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
2	高坏	—	—	8.3	脚部のみ	外面ヘラナデ 内面ハケ目	砂粒	堅緻	暗褐色	
3	甕	—	—	6.1	底部のみ	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	

39. D096号遺構（図350～353、図版78—2、3、79—1、2、95）

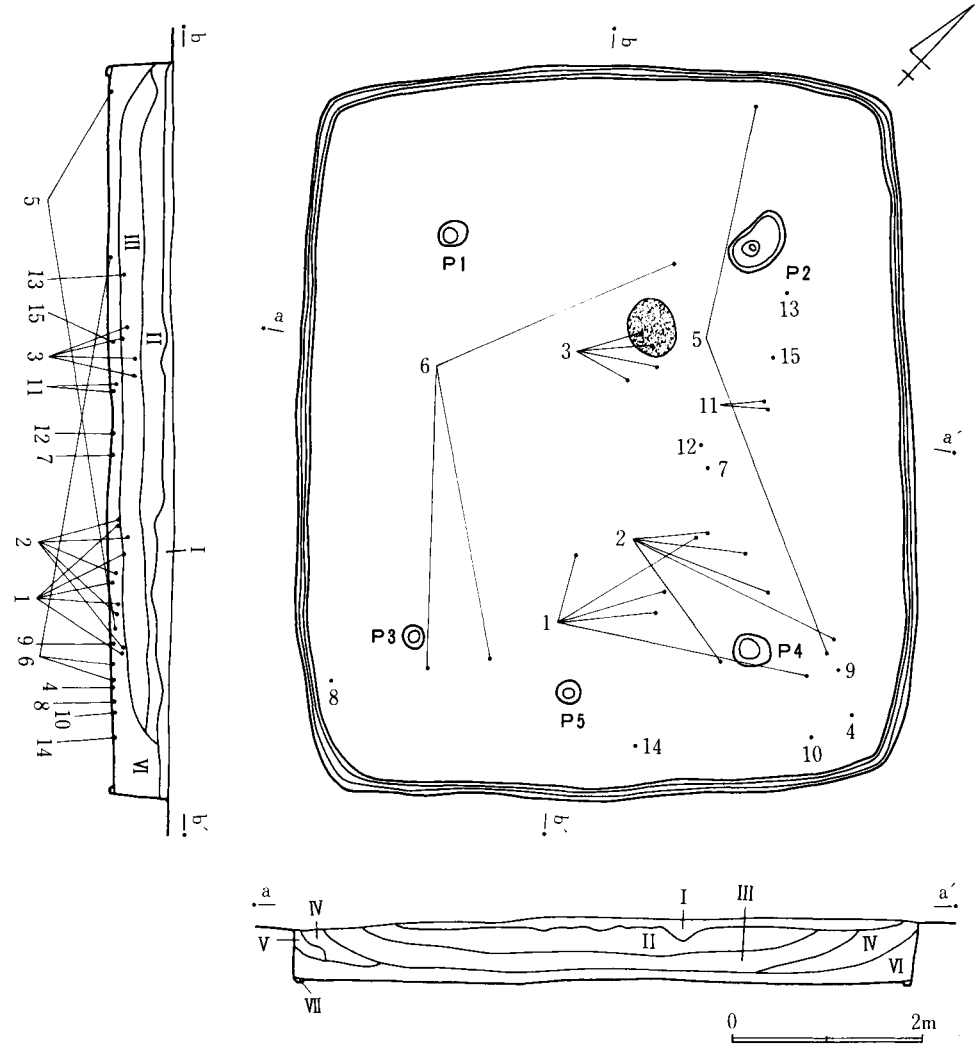


図350　D096号遺構実測図

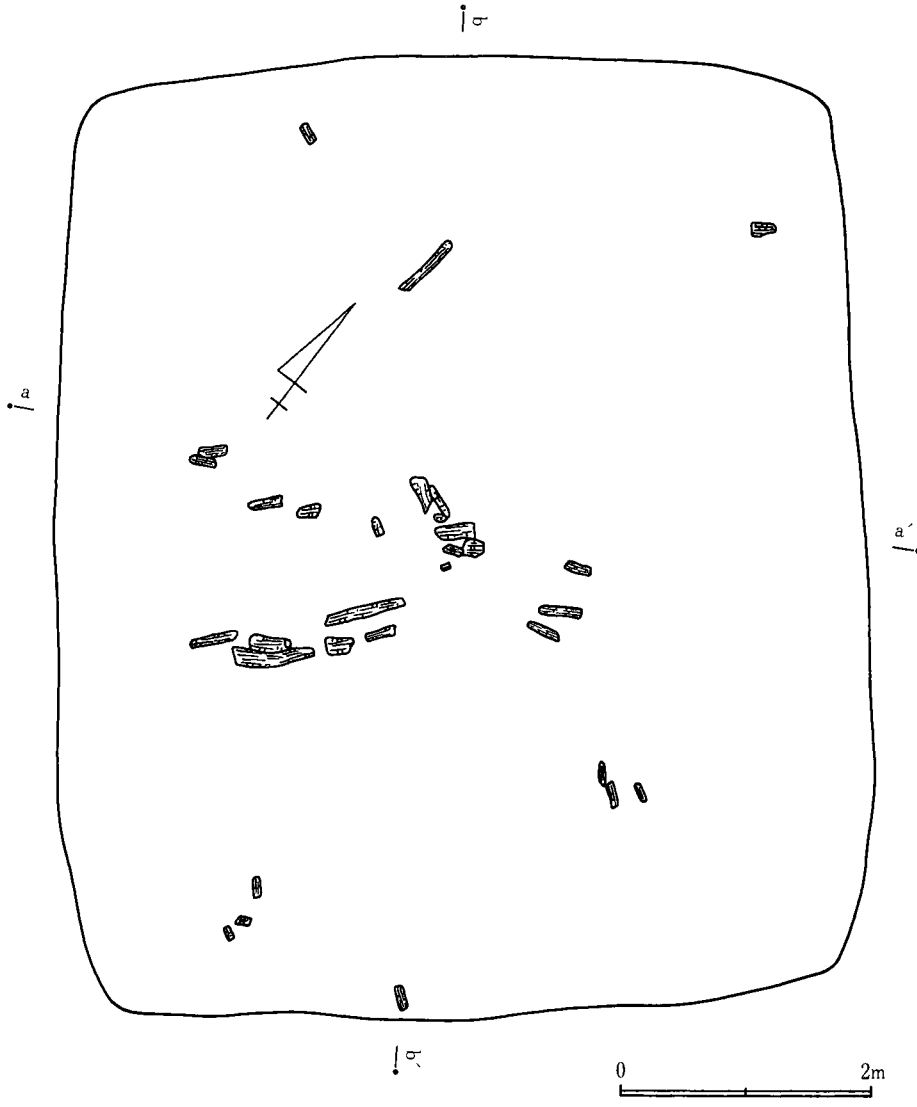


図351 D096号遺構炭化物出土状況図

IV群Bの住居群内において西側部分に位置し、D100、D104が近接している。小支谷の基部付近にあたるため、一部黒色土層を掘り込んで構築している。

遺構 北壁6.28m、東壁7.44mで長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.64m掘り込んでいる。直下には幅0.1m、深さ0.05mを計る壁溝が全周している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.35

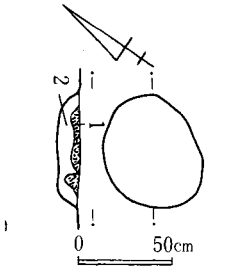


図352 D096号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

m、深さ平均0.4m以上0.6m以下を計る。ただしP_2は長径0.65mの規模を呈する。P_3、P_4の間に径0.25m、深さ0.15mのピットP_5を検出した。床面上には中央部を中心に炭化物、焼土塊を検出した。よって焼失した住居と判断できる。

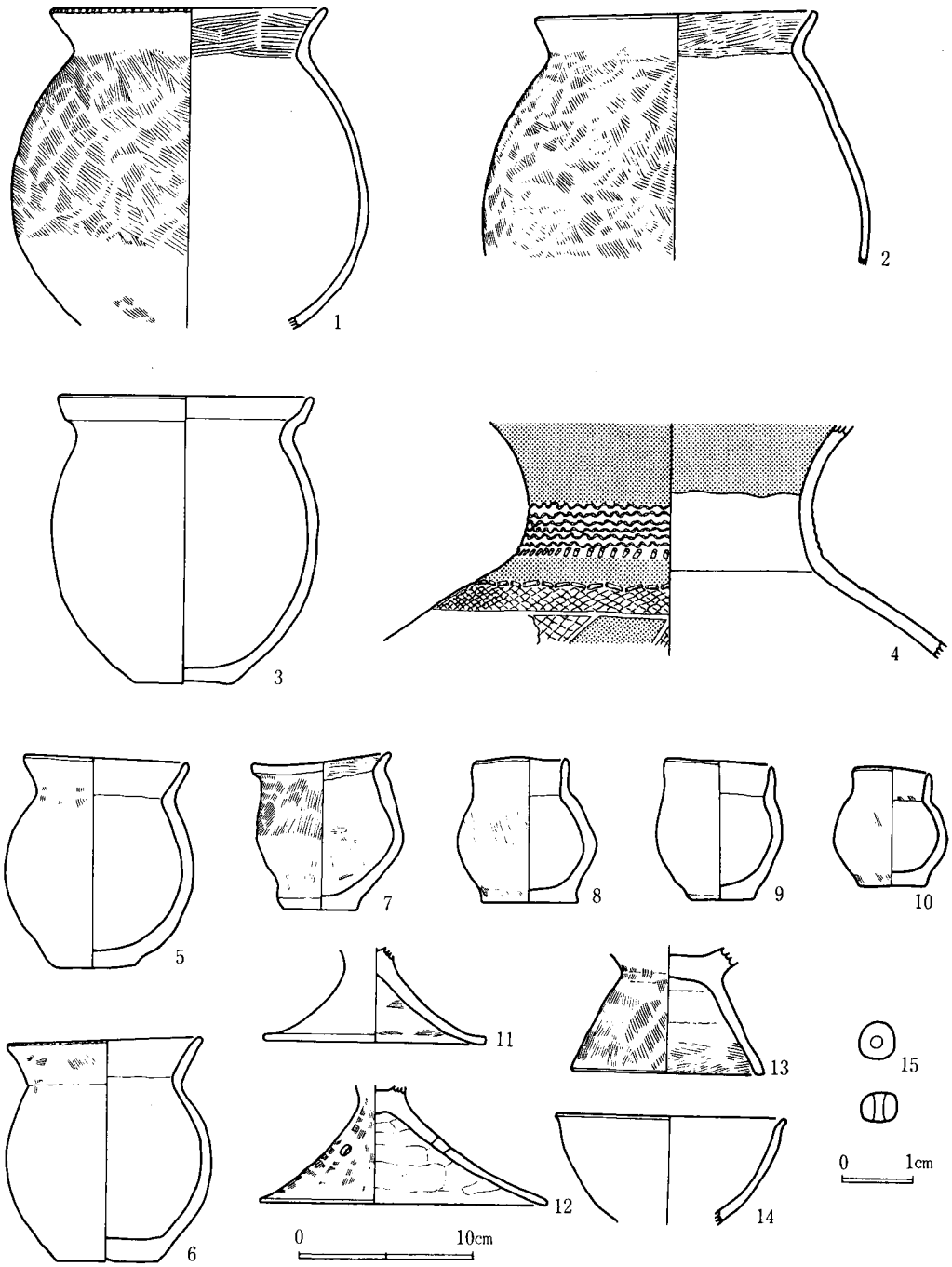


図353 D096号遺構出土遺物実測図

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.6m、短径0.48m、深さ0.12mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層黒色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒色土層、Ⅴ層ロームブロック層、Ⅵ層褐色土層、Ⅶ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上ないしⅥ層中から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、壺、鉢、器台形土器とガラス玉がある。甕形土器は1～3で、いずれも口縁部が「く」字状に外反する。台付甕形土器は13の台部破片である。壺形土器は4で結節、細網目縄文が施される頸部破片である。鉢形土器は5～10、14で、5～7は口縁が「く」字状に外反する小形の甕に近い。8～10は口縁が直立するものである。14は体部破片である。器台形土器は11、12で、いずれも脚部破片である。12は小孔が認められる。ガラス玉は15で青色を呈する小玉である。

D096出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.0	—	2/3	口縁部ヨコナデ 内外面ハケ目	砂粒	堅緻	明褐色	
2	甕	—	15.4	—	1/2	口縁部ヨコナデ 内外面ハケ目	砂粒	やや堅緻	明褐色	胴部にスス付着
3	甕	15.9	14.1	5.1	1/3	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	
4	壺	—	—	—	頸部のみ	S字状結節文,刺突文、網目状撚糸文	小石 砂粒	やや堅緻	暗褐色	赤彩
5	鉢	11.6	9.0	4.8	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明褐色	
6	鉢	12.3	10.7	5.6	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	鉢	8.1	7.8	4.2	完形	手捏 ハケ目	小砂粒	やや堅緻	明灰褐色	
8	鉢	8.0	5.0	5.6	完形	手捏 ハケ目	砂粒	堅緻	明褐色	
9	鉢	7.6	5.7	3.8	完形	手捏 ハケ目	砂粒	堅緻	明褐色	
10	鉢	6.5	4.2	3.9	完形	手捏 ハケ目	砂粒	堅緻	明褐	
11	器台	—	—	12.4	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)明灰褐色	
12	器台	—	—	16.1	脚部のみ	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)明赤褐色 (内)暗褐色	
13	台付甕	—	—	10.6	台部のみ	内外面刷目	砂粒	堅緻	(外)暗灰褐色 (内)淡赤褐色	
14	鉢	6.0	12.7	—	2/3	内外面ていねいなヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明灰褐色 (内)明褐色	

40. D097号遺構（図354～356、図版79－3、95）

Ⅳ群Bの住居群内において西側に位置しD104が近接している。部分的に攪乱を受けている。

遺構　北西壁6.5m、北東壁6mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.32m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

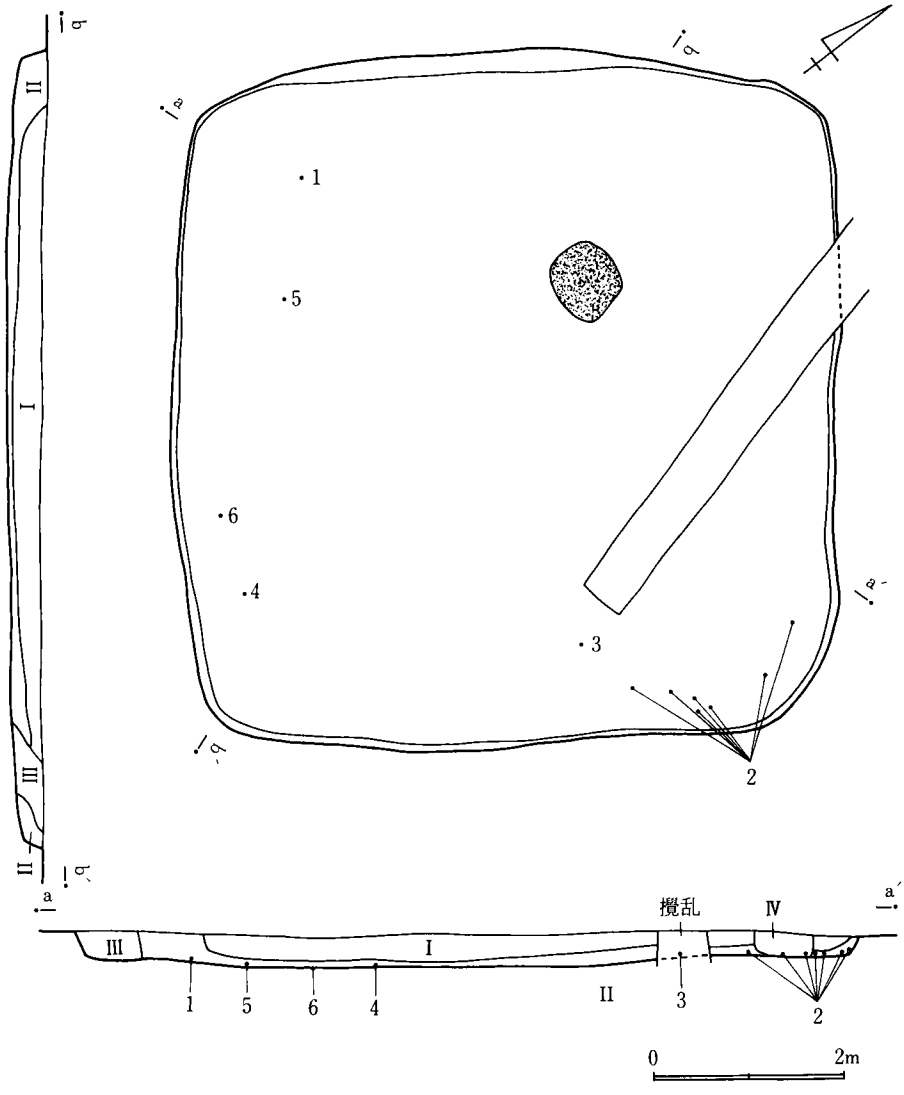


図354 D097号遺構実測図

炉 住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.8m、短径0.68m、深さ0.25mを計り、厚さ0.15mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層ロームブロック層が堆積しており、遺物は住居南壁際の床面に集中して出土している。

出土遺物 遺物は、壺、台付甕形土器と石製品がある。壺形土器は1で頸部上半を欠損している。胴部は球形に

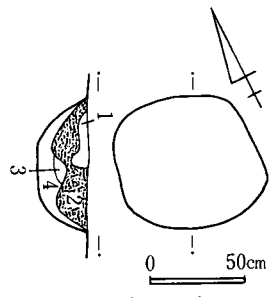


図355 D097号遺構炉跡実測図

1 淡赤褐色土層
2 焼土層
3 赤褐色土層
4 褐色土層

近い形状を呈している。台付甕形土器は2～5である。2は完形で、他は台部と甕部の接合部分の破片であり、いずれもハケ目調整されている。石製品は6の砂岩製の砥石である。

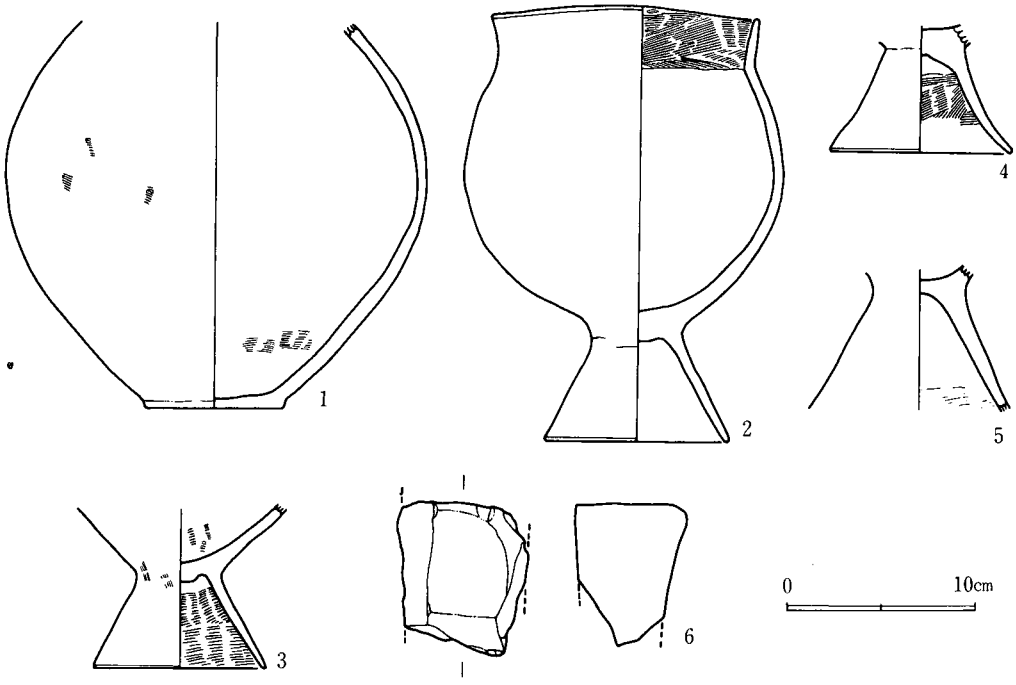


図356 D097号遺構出土遺物実測図

D097出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	7.0	3/3	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	明乳褐色	赤彩？
2	台付甕	22.4	13.6	9.4	略完形	細かいハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明褐色	
3	台付甕	—	—	8.8	台部のみ	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
4	台付甕	—	—	9.3	台部のみ	外面ヘラナデ	砂粒 雲母	やや堅緻	(外)明茶褐色 (内)明赤褐色	
5	台付甕	—	—	—	台部のみ	外面ヘラ磨き	砂粒 雲母	やや堅緻	(外)暗褐色 (内)赤褐色	

41. D100号遺構（図357～359、図版80－1、96）

IV群Bの住居群内において西側部に位置し、D095、D096が近接している。

遺構　西壁4m、北壁4.4mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.36m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が堅緻な以外、軟弱な状況を呈している。P_1～P_3のピットを検出したが柱穴とは判断し難い。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より西側に寄って位置している。径0.7m、深さ0.13mで、厚さ0.1mの焼土

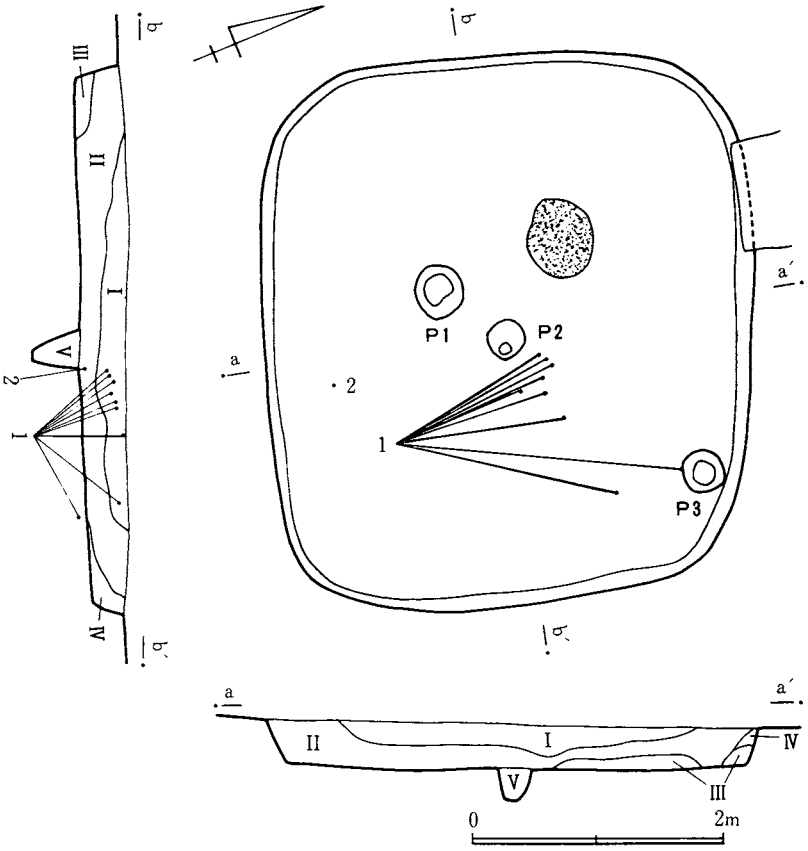


図357 D100号遺構実測図

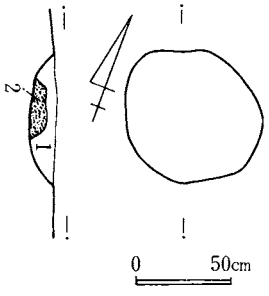


図358 D100号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入黒色土層

2 焼土層

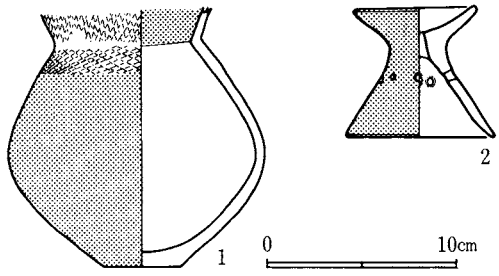


図359 D100号遺構出土遺物実測図

が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒色土層、Ⅳ層ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、壺、器台形土器がある。壺形土器は1で口縁部を欠損している。頸部に細網目縄文が施されている。器台形土器は2で脚に小孔があり、赤彩してある。

D100出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	4.0	2/3	網目状撚糸文 ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	赤彩
2	器台	4.9	6.5	7.9	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	明褐色	D103-8と接合、赤彩、孔は8個

42. D102号遺構（図360、361、図版80—2）

IV群Bの住居群内において北側に位置し、D191が近接している。

遺構　北壁4.92m、東壁4.68mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達している。床面は軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

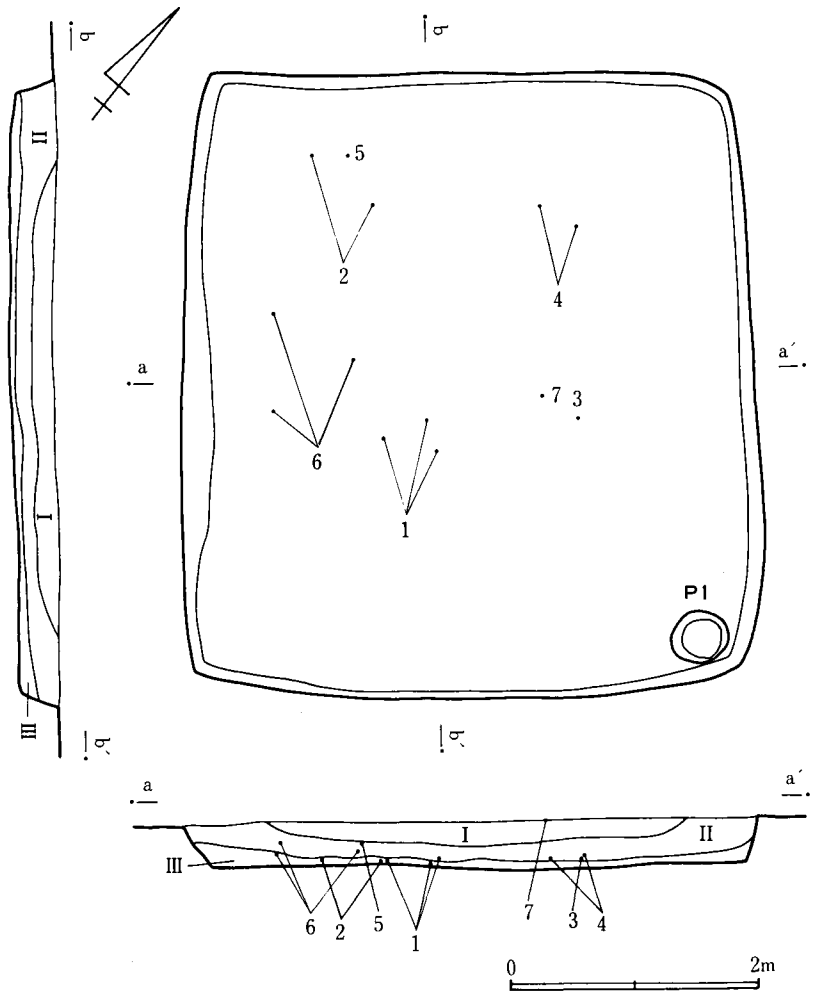


図360　D102号遺構実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しており、遺物はⅡ層下部より出土している。

出土遺物　遺物は、壺、鉢、甕形土器がある。壺形土器は1～3で、いずれも破片である。鉢形土器は4で小形な土器である。甕形土器は5～7で、いずれも底部破片である。

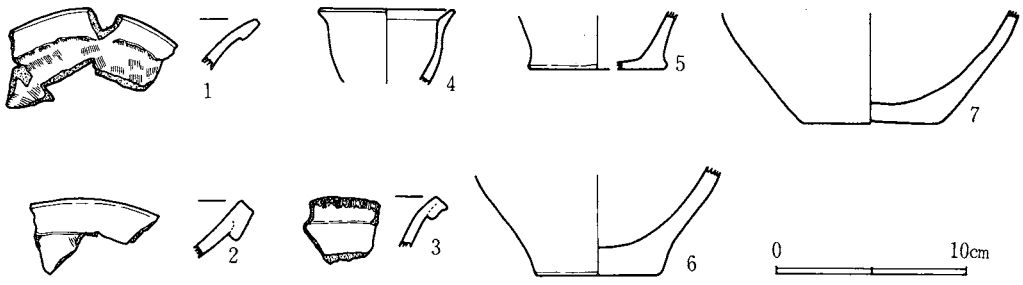


図361　D102号遺構出土遺物実測図

D102出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 ハケ目	砂粒	堅緻	淡褐色	
2	壺	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 ハケ目	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)暗灰褐色	
3	壺	—	—	—	口縁部破片	折り返し口縁 縄文原体刻目	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)茶褐色	
4	鉢	—	7.1	—	3/3	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	明褐色	
5	甕	—	—	7.0	底部破片	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)黒褐色	
6	甕	—	—	6.4	底部破片	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明赤褐色 (内)暗褐色	
7	甕	—	—	7.1	底部破片	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	暗褐色	

43. D104号遺構（図362～364、図版80－3、96）

Ⅳ群Bの住居群内において西側部に位置し、D096が近接している。

遺構　北壁4.56m、東壁4.56mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し

D104出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	—	10.8	胴下部と台部	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)灰茶褐色 (内)黒色	二次的に火を受ける
2	台付甕	—	—	8.6	台部のみ	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明茶褐色 (内)黒色	二次的に火を受ける
3	台付甕	—	—	10.4	台部のみ	内面ハケ目 外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	淡褐色	
4	台付甕	—	14.2	—	3/3	ヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	二次的に火を受ける

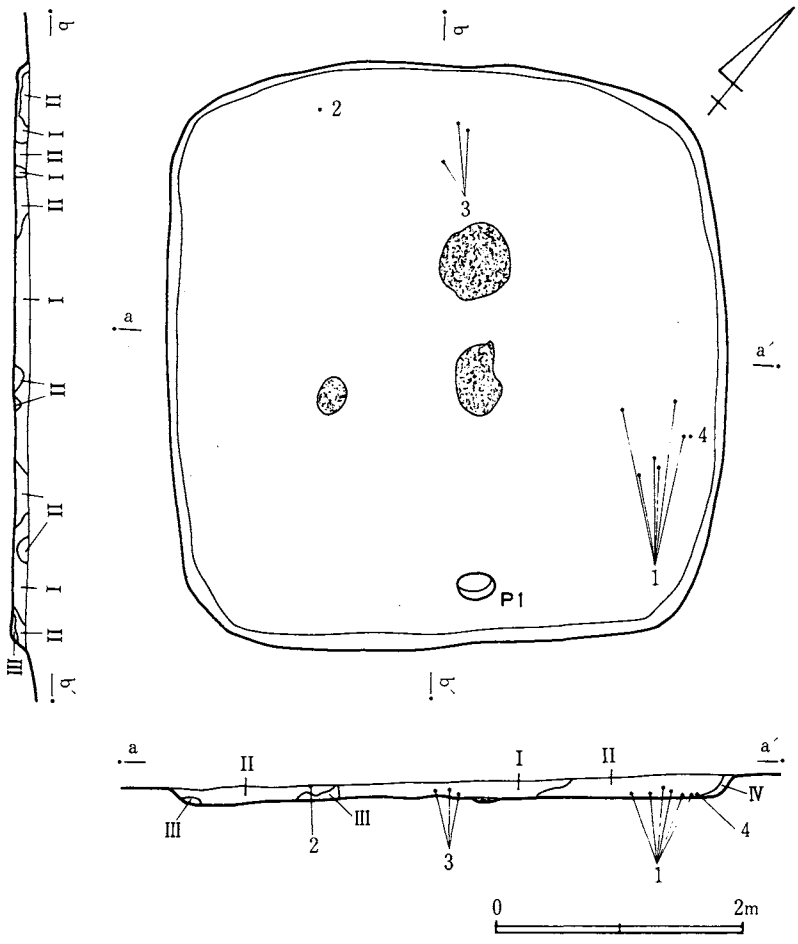


図362 D104号遺構実測図

0.16m掘り込んで床面に達する。床面は中央部のみ堅緻で、他は軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。南壁に近く径0.25m、深さ0.2mのピットP_1を検出した。

炉 住居中央部に1か所、北側に寄って1か所、西側に寄って1か所の計3か所検出したが、中央部と西側の部分は焼土化が進んでいない。北側部分は径0.55m、深さ0.15mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層が堆積している。遺物は床面を中心に覆土中から出土している。

出土遺物 遺物は台付甕形土器のみである。1、2は

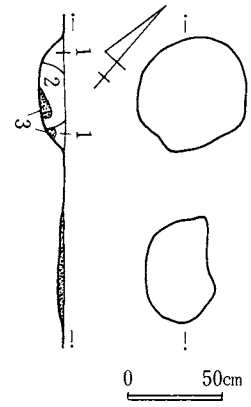


図363 D104号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入褐色土層
2 褐色土層
3 焼土層

甕部と台部の接合部分の破片、3は台部の破片である。4は台部を欠損し、甕部のみである。

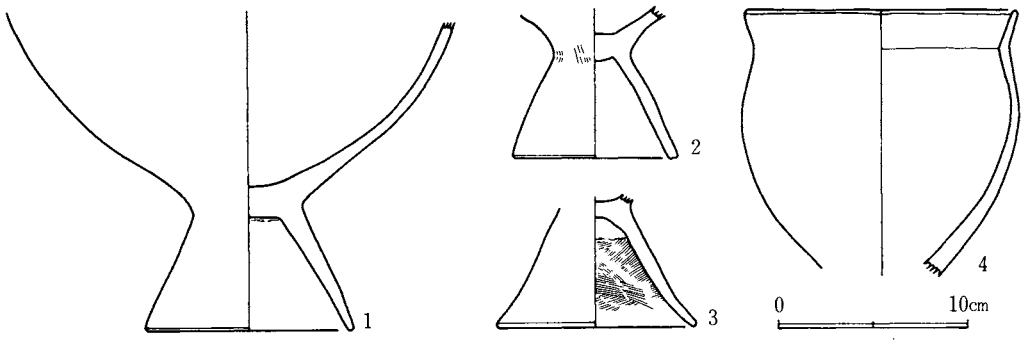


図364 D104号遺構出土遺物実測図

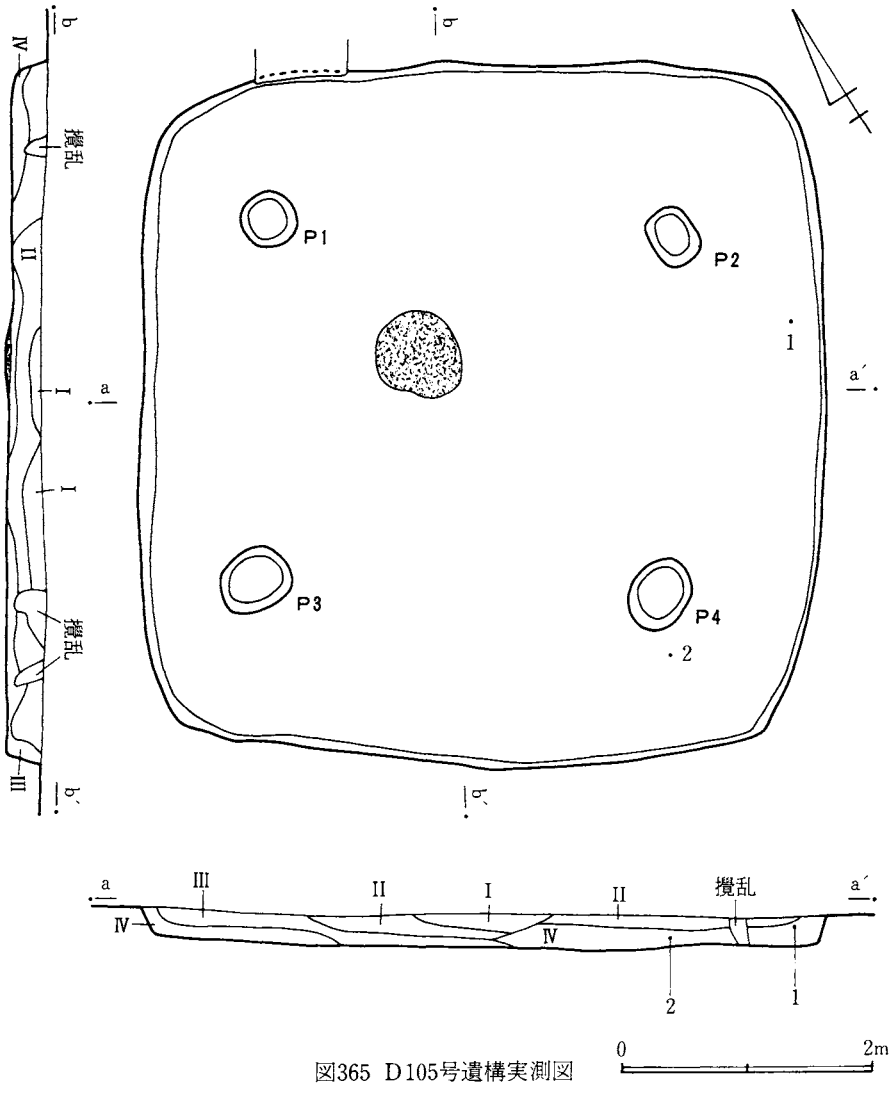


図365 D105号遺構実測図

44. D105号遺構（図365～367、図版81－1、96）

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D104が近接している。

遺構　北壁5.52m、東壁5.48mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達している。床面は中央部のみ堅緻な状況を呈するが、他は軟弱な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.5m、深さ平均0.25mを計る。壁溝は検出できなかった。

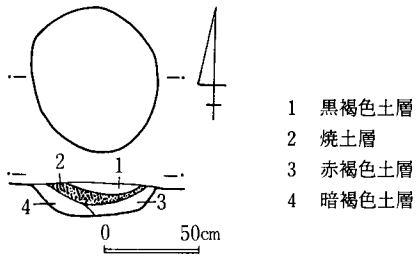


図366 D105号遺構炉跡実測図

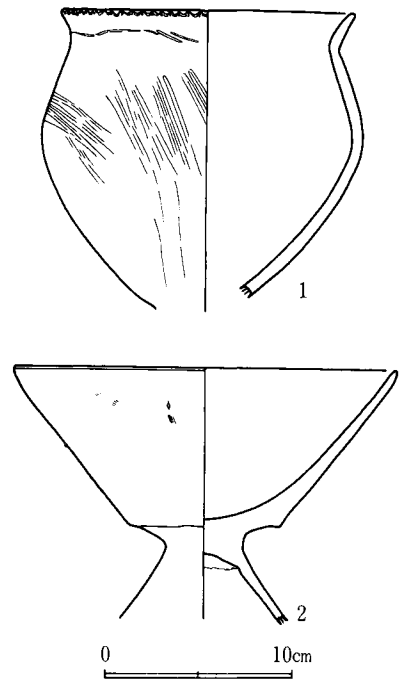


図367 D105号遺構出土遺物実測図

炉　住居中央部に位置している。長径0.75m、短径0.65m、深さ0.16mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層黒褐色土層、IV層暗褐色土層が堆積しており、遺物は床面近くより出土している。

出土遺物　遺物は、甕、高坏形土器がある。甕形土器は1で底部が欠損している。高坏形土器は2で脚部の一部が欠損している。坏部は直線的に大きく開く形状を呈している。

D105出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.4	—	3/3	粗いヘラナデ	小石	やや堅緻	(外)明茶灰色 (外)明褐色	
2	高坏	—	20.2	—	3/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗灰褐色	

45. D107号遺構（図368、369、図版81－2、3、96）

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D108が近接している。

遺構　長径4.06m、短径3.4mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡と思われる。壁はかなりの傾斜を呈し0.44m掘り込んでいる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。幅0.6m、深さ0.2

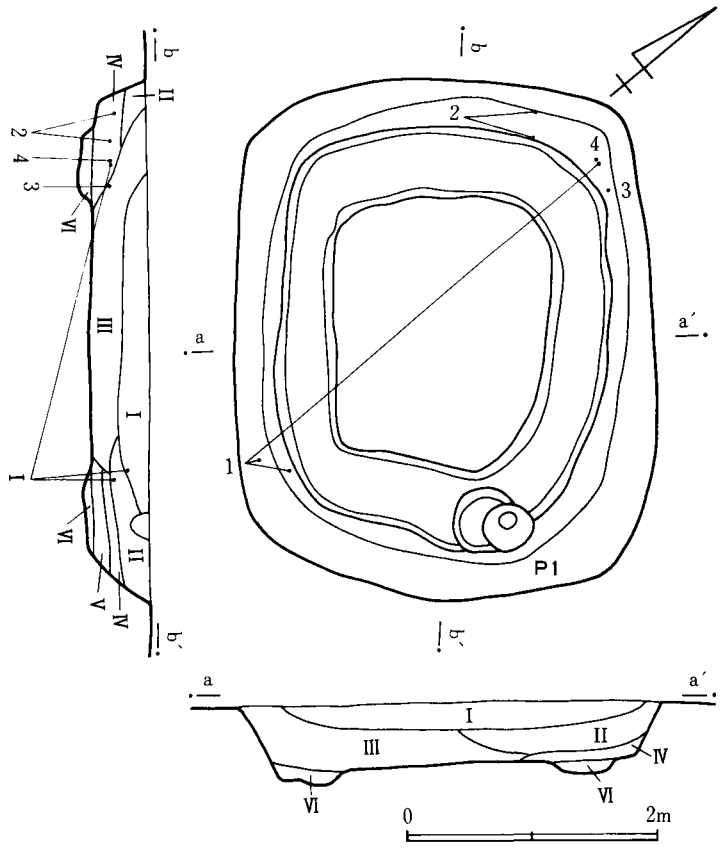


図368 D107号遺構実測図

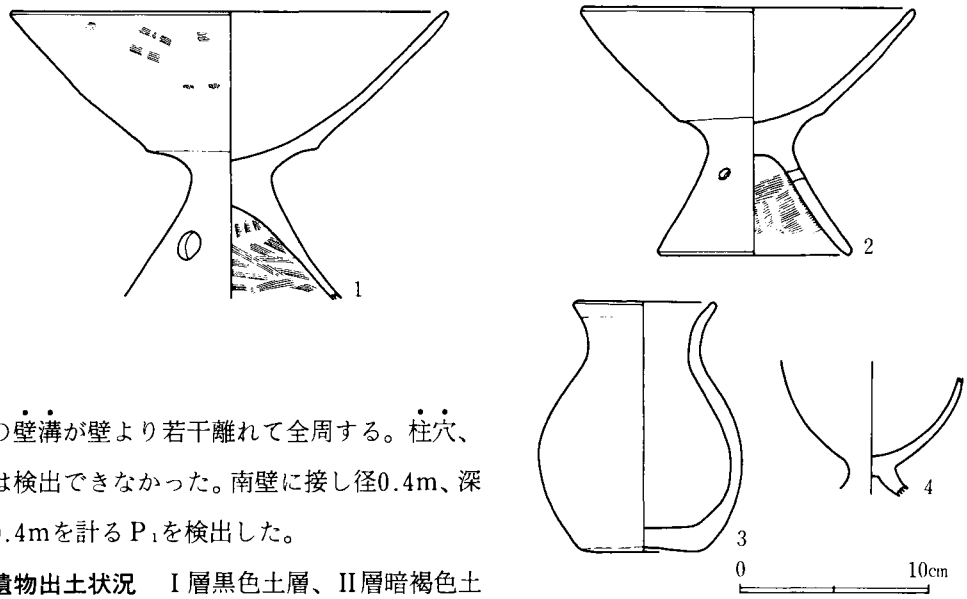


図369 D107号遺構出土遺物実測図

mの壁溝が壁より若干離れて全周する。柱穴、炉は検出できなかった。南壁に接し径0.4m、深さ0.4mを計るP₁を検出した。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗褐色土層、III層ローム粒混入暗褐色土層、IV層褐色土

層、Ⅴ層黒褐色土層が堆積している。遺物は覆土中に散在して出土している。

出土遺物　遺物は、高坏、壺、台付甕形土器がある。高坏形土器は1、2で脚部に小孔がある。坏体部は大きく直線的に開く形状を呈している。壺形土器は3で小形なものである。台付甕形土器は4で接合部分の破片である。

D107出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	23.0	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明褐色	孔は3個
2	高坏	12.7	17.2	9.9	略完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	孔は3個
3	壺	12.9	7.2	6.8	略完形	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)褐色	
4	台付甕	—	—	—	胴下部 台部	細いハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)明褐色 (内)灰茶色	

46. D108号遺構（図370～373、図版82－1、2、96、97）

Ⅳ群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D107が近接している。部分的に攪乱を受けている。

遺構　北壁8.28m、東壁6.6mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しておりP_1～P_4を検出した。径平均0.54m、深さ平均0.38m以上0.7m以下である。2段に掘り込んでおり、重複している可能性もある。ただしP_2は長径0.75mを計る。また、南壁に

D108出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	35.5	18.9	11.9	略完形	ヘラ削りの上をハケ目	砂粒	やや堅緻	赤褐色	胴部下半二次的火を受ける
2	台付甕	—	—	9.5	台部のみ	ハケ目	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	台付甕	—	—	8.4	台部のみ	外面ヘラナデ 内面ハケ目	砂粒	やや堅緻	(外)明黄褐色 (内)明赤褐色	
4	台付甕	—	10.8	—	2/3	外面ハケ目 内面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明赤褐色	
5	台付甕	—	18.8	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	高坏	6.7	20.4	9.5	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗褐色	孔は6個
7	器台	9.9	7.25	10.8	完形	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	堅緻	明茶褐色	孔は3個
8	器台	8.1	7.0	10.5	完形	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	堅緻	明灰褐色	孔は3個
9	壺	—	—	6.4	2/3	外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	明灰褐色	
10	壺	—	—	—	頸部のみ	外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	明灰褐色	
11	壺	—	—	—	2/3	ハケ目の上を軽いヘラナデ	砂粒	やや軟弱	(外)暗灰褐色 (内)茶褐色	
12	鉢	6.3	4.0	3.4	完形	ハケ目	砂粒	堅緻	(外)暗灰褐色 (内)暗灰褐色	

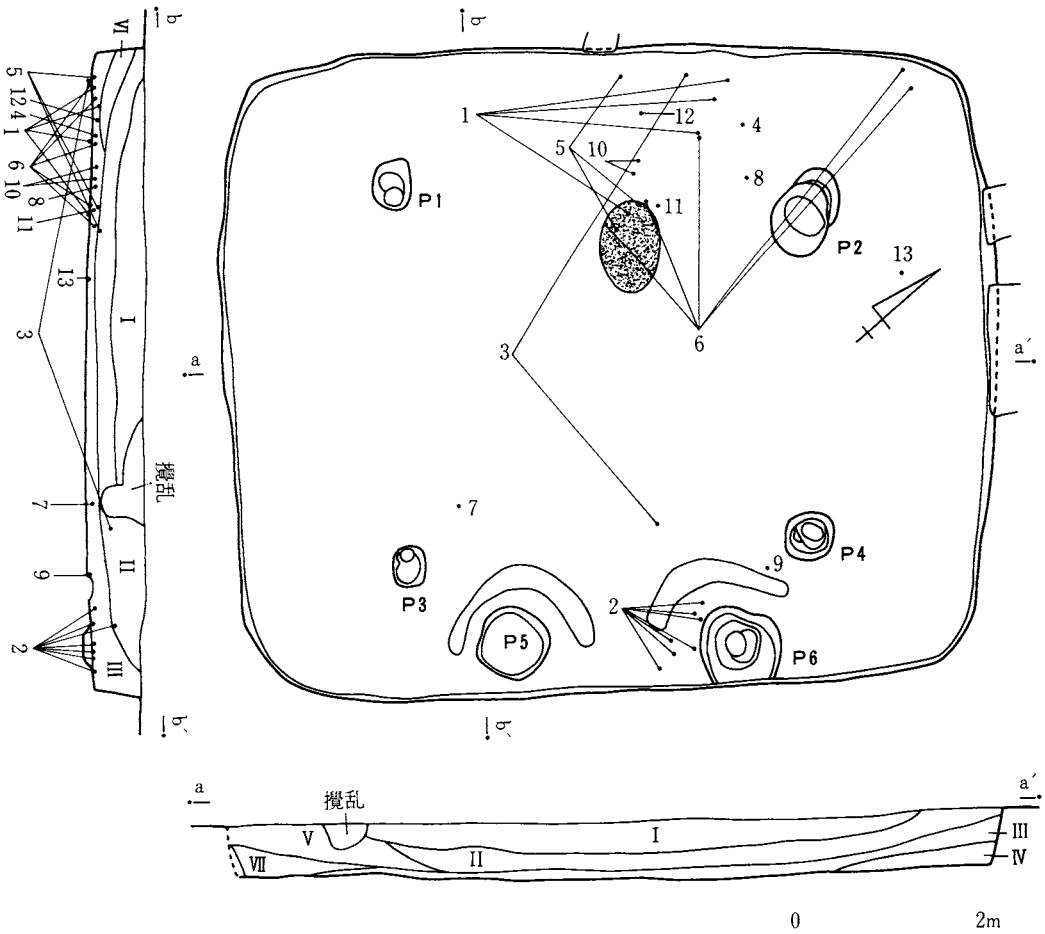


図370 D108号遺構実測図

接しP5、P6を検出した。径平均0.7m、深さ平均0.54m以上0.72m以下で、周辺に土手状の高まりが施してある貯蔵穴である。壁溝はない。

炉 住居中央部より北側に位置している。長径1.15m、短径0.57m、深さ0.12mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。2つの炉が重複している可能性も考えられる。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層褐色土層、IV層ローム粒混入褐色土層、V層暗褐色土層、VI層ローム粒混入暗褐色土層、VII層明黒褐色土層が堆積しており、遺物は床面を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、台付甕、高坏、器台、壺、鉢形土

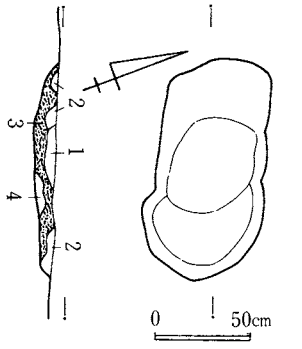


図371 D108号遺構炉跡実測図

1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 焼土層
4 褐色土層

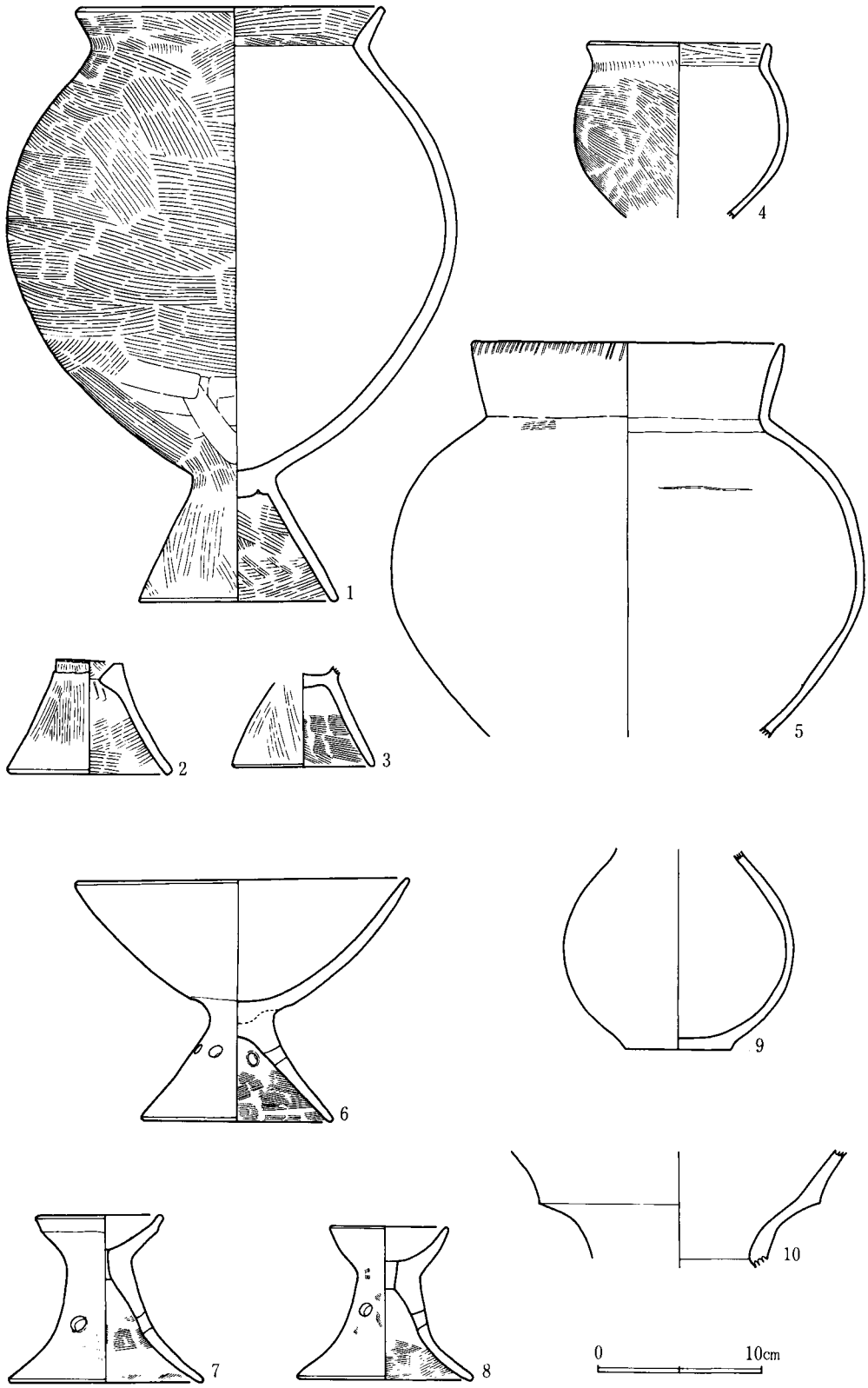


図372　D108号遺構出土遺物実測図(1)

器と石製品がある。台付甕形土器は1～5である。いずれも口縁は短かく「く」字状に外反する。2、3は台部破片、4は小形な胴部破片、5は台部を欠損している。高坏形土器は6で脚部に小孔がある。器台形土器は7、8で台部に小孔がある。壺形土器は9～11で、9、11は胴部、10は口縁部の破片である。鉢形土器は12で小形の甕に近い形状を呈している。石製品は13の軽石である。用途不明であるが部分的に摩滅痕が認められる。

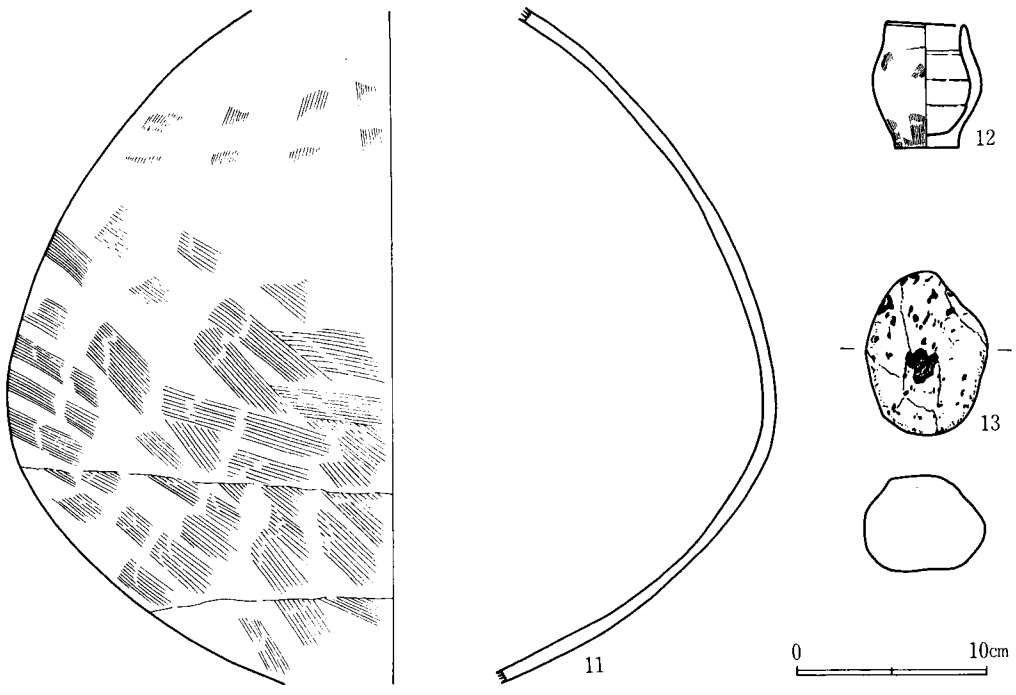


図373 D108号遺構出土遺物実測図(2)

47. D134号遺構（図374～376、図版82－3、83－1、97）

IV群Bの住居群内において南側に位置し、D167が近接している。

遺構 北壁6.6m、東壁8.28mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.56m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上

D134出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	21.8	13.8	7.6	略完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
2	壺	—	—	—	胴部のみ	ヘラ磨き	——	やや堅緻	淡茶褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	縄文原体刻目 附加条縄文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

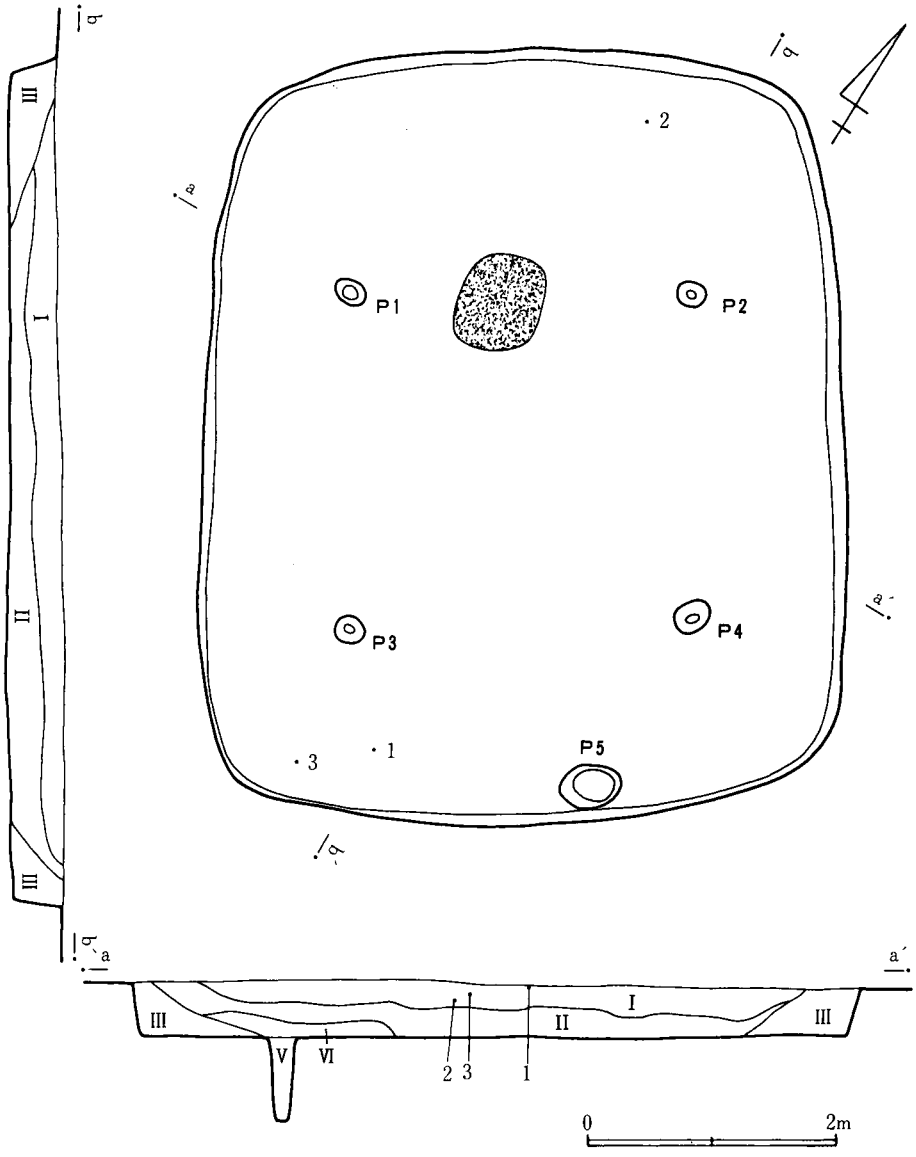


図374 D134号遺構実測図

に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.28m、深さ平均0.5m以上0.65m以下を計る。また、南壁に接し径0.45m、深さ0.1mを計るP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径0.78m、短径0.6m、深さ0.13m

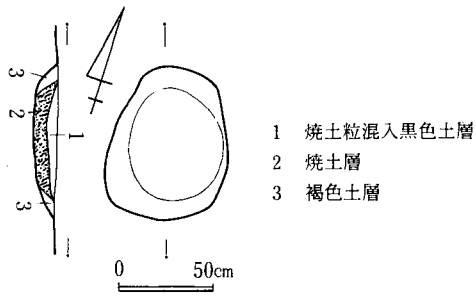


図375 D134号遺構炉跡実測図

を計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層明褐色土層、Ⅳ層黒褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層から出土している。

出土遺物　遺物は、台付甕、壺、甕形土器がある。台付甕形土器は1で、口縁部は短かく「く」字状に外反する。壺形土器は2の胴部破片である。甕形土器は3の胴部破片である。

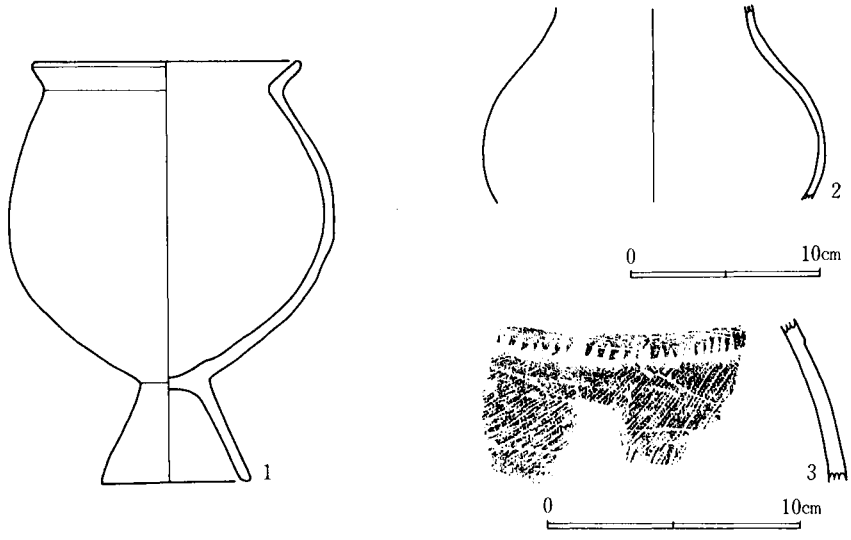


図376　D134号遺構出土遺物実測図

48. D142号遺構（図377～379、図版83－2、97）

Ⅳ群Bの住居群内において南東部に位置し、D148が近接している。

遺構　北壁6m、東壁4.9mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.23m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上

D142出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	21.6	—	坏部のみ	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	軟弱	黒色	
2	高坏	—	20.8	—	坏部のみ	ハケ目	砂粒	やや軟弱	赤褐色	
3	高坏	—	—	—	接合部のみ	ハケ目の上をヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	赤彩
4	高坏	—	—	9.4	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
5	壺	—	—	4.8	1/2	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
6	鉢	5.4	8.8	3.5	完形	ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
7	鉢	8.8	6.7	5.4	略完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
8	台付甕	—	10.7	—	2/3	ハケ目の上を外面ヘラナデ	砂粒	軟弱	淡茶褐色	

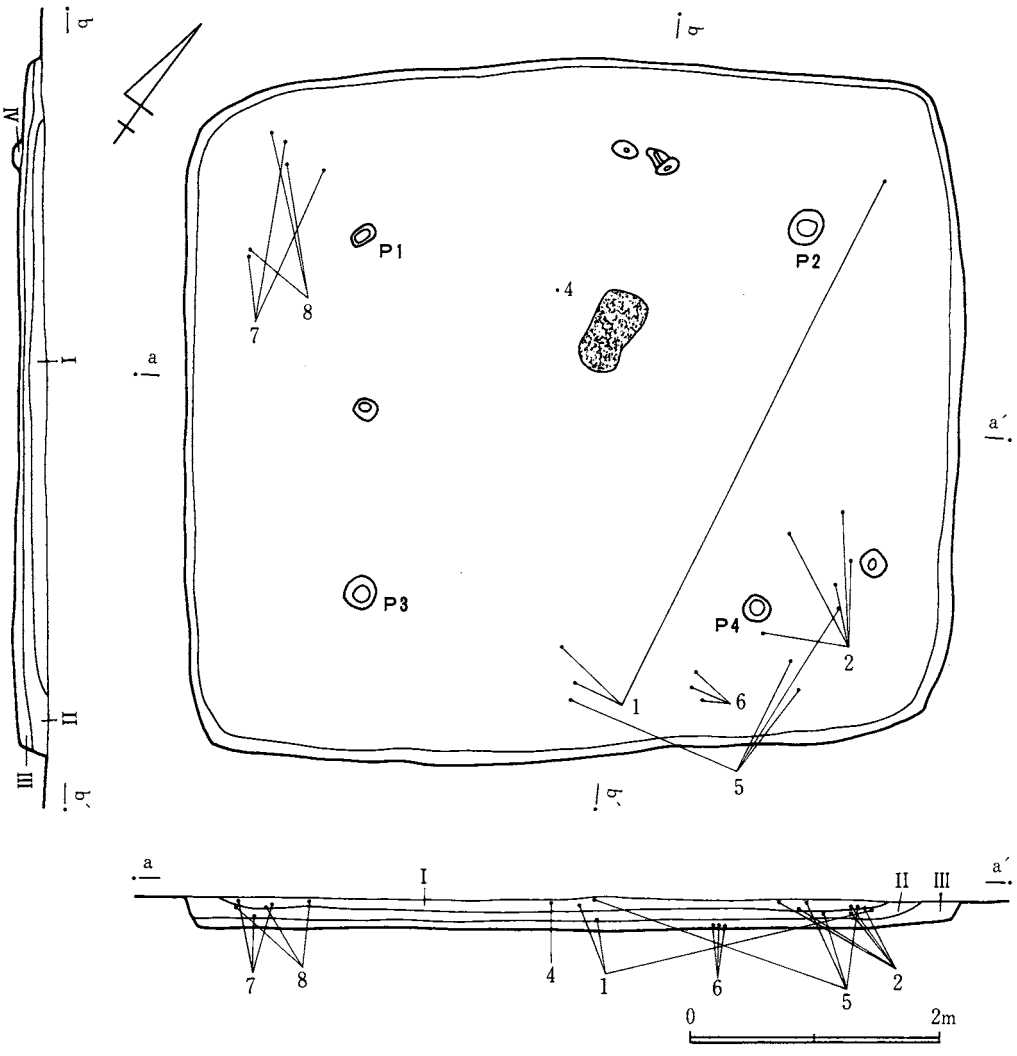


図377 D142号遺構実測図

に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.2m、深さ平均0.34m以上0.53m以下を計る。その他、3か所に小ピットを検出した。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.7m、短径0.45m、深さ0.15mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物は覆土上層部より出土している。

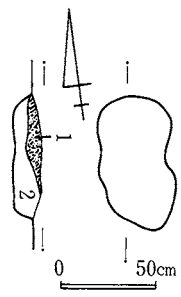


図378 D142号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 黒褐色土層

出土遺物　遺物は、高坏、壺、鉢、台付甕形土器がある。高坏形土器は1～4で、1、2は坏部、3、4は脚部の破片である。壺形土器は5の胴部がある。鉢形土器は6、7で、7は短頸の壺に近い形状を呈している。台付甕形土器は8で台部を欠損している。

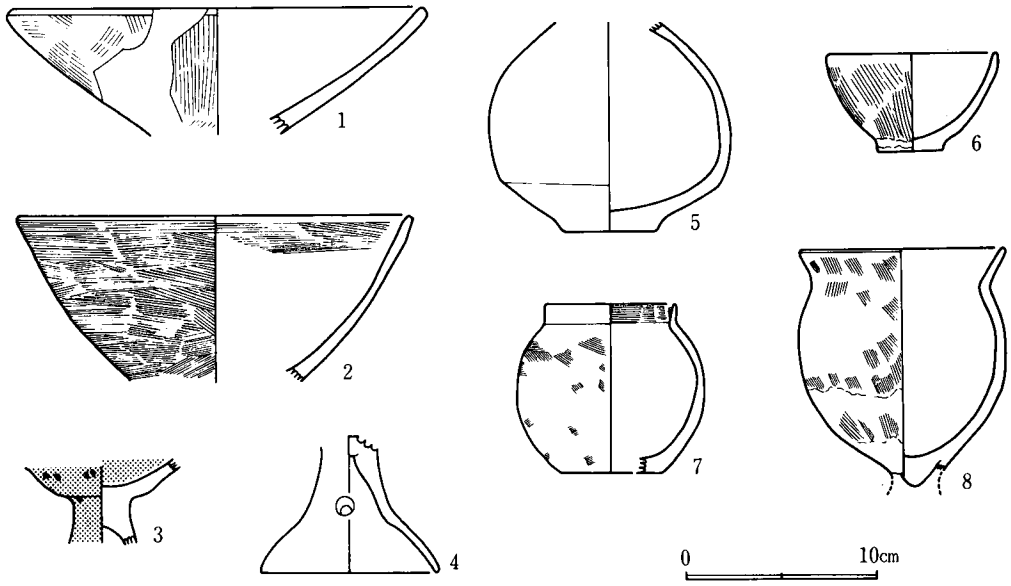


図379　D142号遺構出土遺物実測図

49. D143号遺構（図380～382、図版83－3、84－1、97）

Ⅳ群Bの住居群内において北東部に位置し、D149が近接している。部分的に攪乱を受けている。

遺構　長径5.48m、短径4.72mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.68m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。東壁直下には幅0.15m、深さ0.05mの壁溝が認められる。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出し

D143出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	22.7	16.5	6.2	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	軟弱	黒褐色	胴部二次的に火を受ける
2	台付甕	23.8	17.4	10.2	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒灰褐色	
3	台付甕	—	17.8	—	2/3	ハケ目の上を一部ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
5	甕	—	—	—	2/3	附加条縄文の上を一部ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
6	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

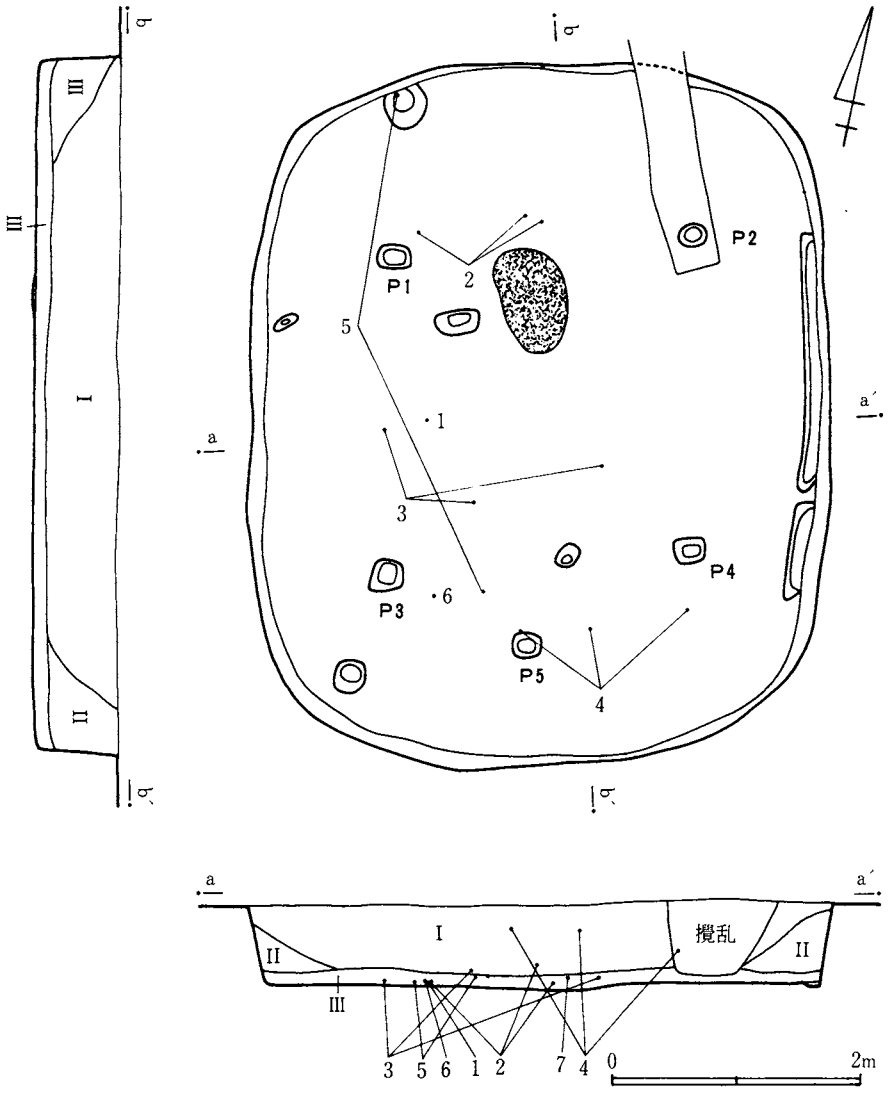


図380 D143号遺構実測図

た。一辺0.22m、深さ平均0.32m以上0.60m以下を計る。ただしP₂は円形の掘形である。また、南壁に近く径0.2m、深さ0.15mを計る小ピットP₅を検出した。その他、5か所に小ピットを検出した。

炉 住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.9m、短径0.63m、深さ0.15mを計り、厚さ0.11mの焼土が堆積する。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、III層中より出土している。

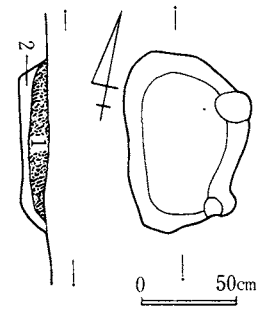


図381 D143号遺構炉跡実測図
1 焼土層
2 褐色土層

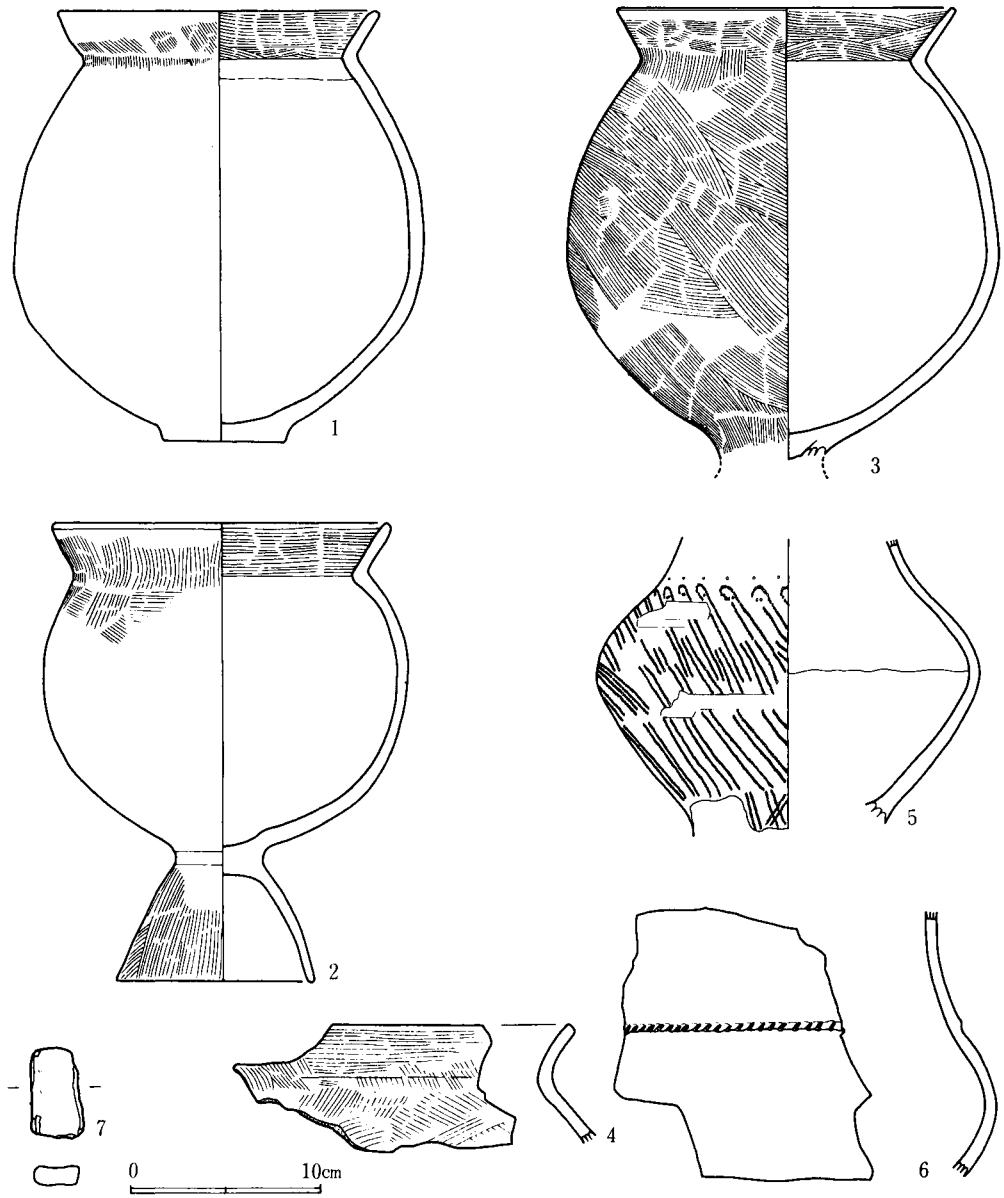


図382 D143号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、台付甕、甕形土器と石製品がある。台付甕形土器は2、3である。甕形土器は1、4～6である。1は「く」字状に外反する口縁部を呈している。5は附加条縄文が、6は刻目がある胴部破片、4は口縁部破片である。石製品は7の砂岩製砥石である。

50. D144号遺構（図383～385、図版84—2）

IV群Bの住居群内において北側部分に位置している。芋穴による攪乱を受けており、覆土全体の20%におよんでいる。したがって、遺存状況は悪い。

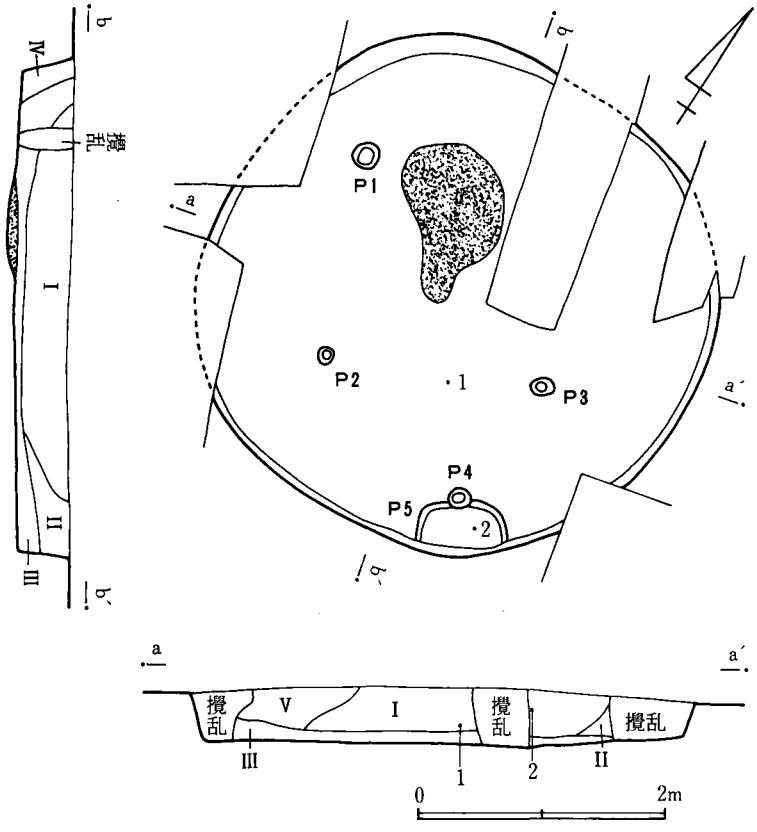


図383 D144号遺構実測図

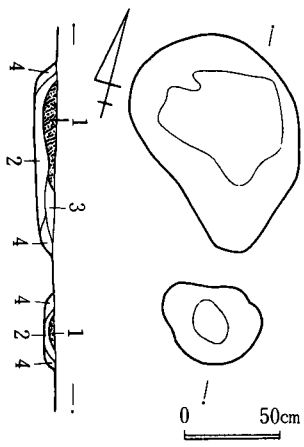


図384 D144号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層
3 ローム粒混入褐色土層
4 明褐色土層

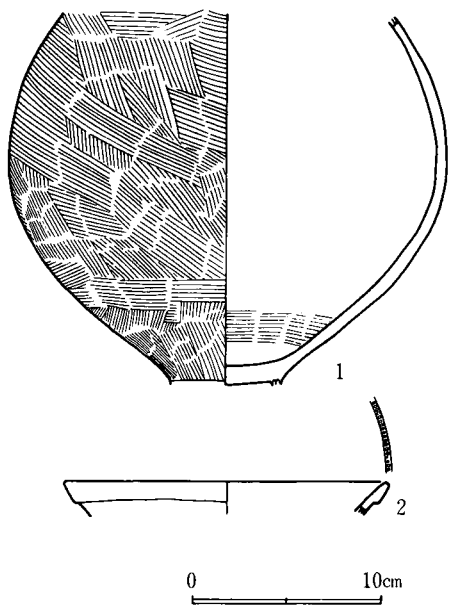


図385 D144号遺構出土遺物実測図

遺構　径4.08mでほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.44m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴はP_1～P_3を検出した。径平均0.12m、深さ平均0.45mを計る。また、南側の壁に長径0.7m、短径0.3m、深さ0.12mを計るピットP_5を検出した。その他、P_4を検出した。壁溝はない。

炉　住居中央より北側に寄って位置している。長径1.1m、短径0.85m、深さ0.13mで、厚さ0.07mの焼土が堆積する炉と、径0.47m、深さ0.07mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する炉を検出した。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗褐色土層、III層褐色土層、IV層ローム粒混入暗褐色土層、V層黒褐色土層が堆積しており、遺物は、覆土中から出土している。

出土遺物　遺物は、台付甕、壺形土器がある。台付甕形土器は1で球形に近い胴部を呈し、口縁部と台部は欠損している。壺形土器は2で口縁部破片である。

D144出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	—	—	½	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	壺	—	17.2	—	口縁部破片	折り返し口縁 ヨコナデ	——	堅緻	茶褐色	

51. D148号遺構（図386～388、図版84－3、98）

IV群Bの住居群内において南東部分に位置し、D150が近接している。

遺構　北壁5.2m、東壁5.88mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.4m、深さ0.45m以上0.65m以下を計る。また、P_5を検出した。その他、炉の周辺に2か所小ピットを検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.17mを計り、

D148出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.0	—	½	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
2	甕	—	20.6	—	½	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	⅓	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	台付甕	—	—	10.4	台部のみ	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
5	壺	—	—	3.5	⅔	ヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	赤彩

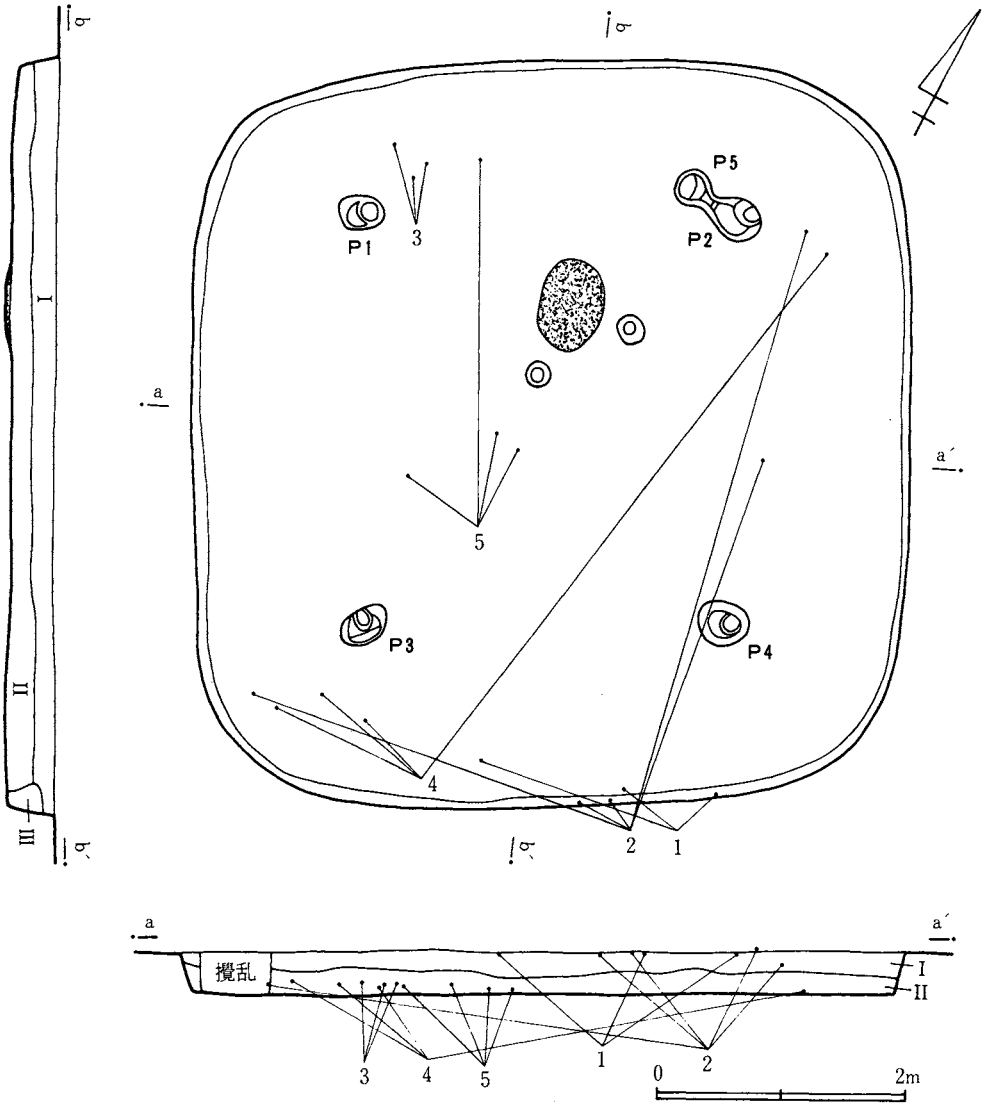


図386 D148号遺構実測図

厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層ロームブロック層が堆積しており、遺物は床面近くのII層より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、壺形土器がある。甕形土器は1～3である。4は台付甕形土器で台部の破片である。壺形土器は5で球形の胴部を呈し、赤彩してある。

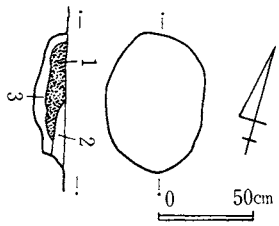


図387 D148号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層
3　焼土粒混入黒色土層

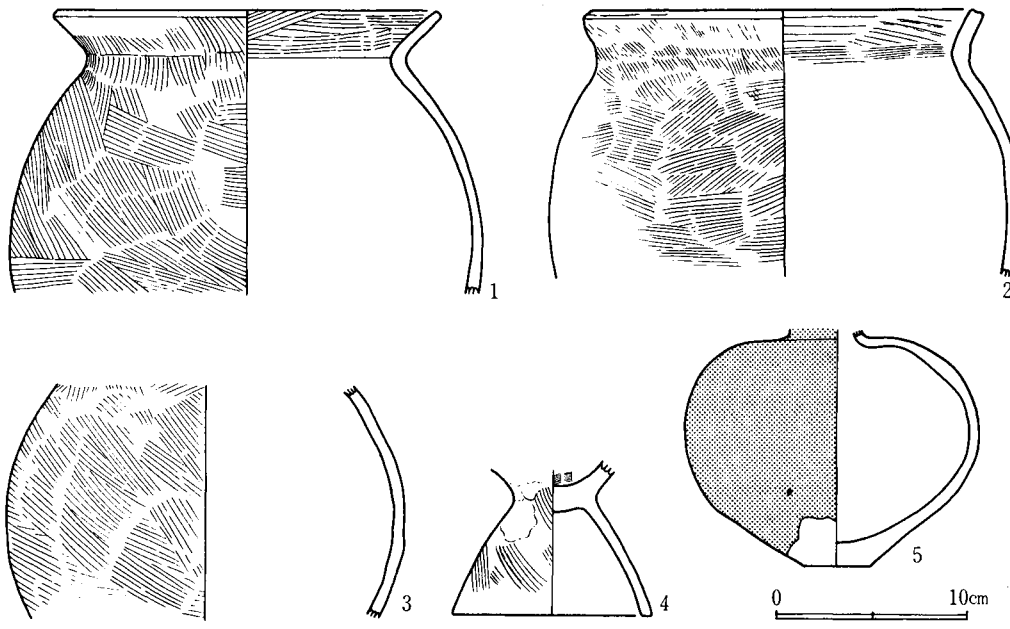


図388 D148号遺構出土遺物実測図

52. D149号遺構（図389、390、図版85－1）

IV群Bの住居群内において南東側に位置し、D148が近接している。

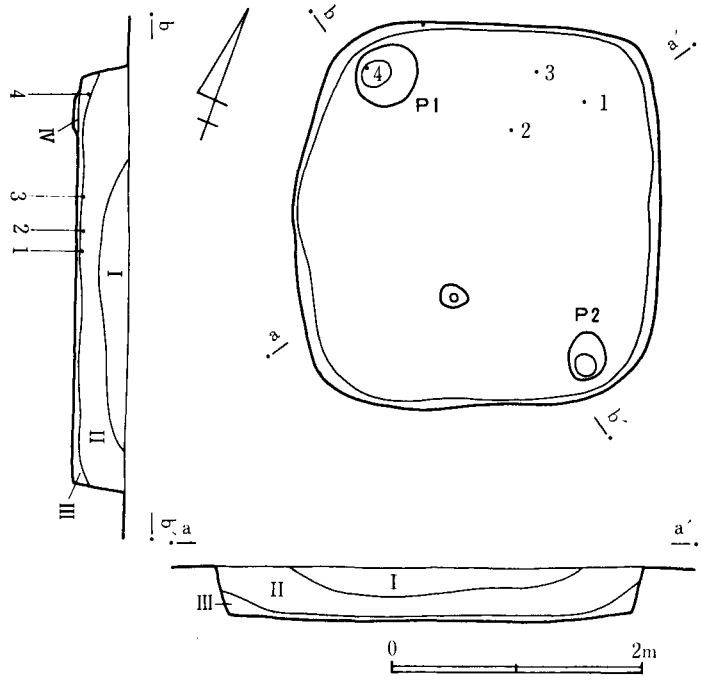


図389 D149号遺構実測図

遺構　北壁2.92m、東壁３mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.44m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。P_1、P_2を検出したが柱穴にはなり難い。P_1は径0.5m、深さ0.45mを計る貯蔵穴と考えられる。壁溝、炉は検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層が堆積しており、遺物は床面上からの出土である。

出土遺物　遺物は、台付甕、高坏、器台形土器がある。台付甕形土器は１、２で、１は「く」字状に外反する口縁部を呈している。２は台部の破片である。高坏形土器は３で坏部の破片である。器台形土器は４で台部の破片である。

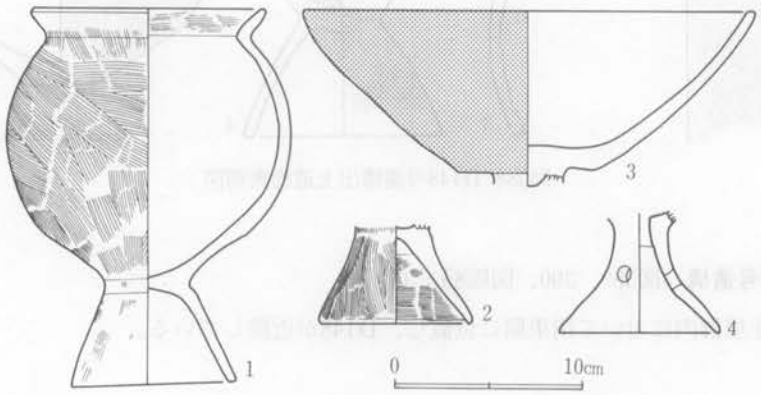


図390　D149号遺構出土遺物実測図

D149出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	19.6	12.1	8.5	略完形	ハケ目ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
2	台付甕	—	—	8.0	台部のみ	ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡灰褐色	
3	高坏	—	24.0	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	——	やや軟弱	淡褐色	赤彩
4	器台	—	—	8.4	台部のみ	ヘラ磨き	小石	やや堅緻	明茶褐色	

53. D150号遺構（図391～393、図版85－２、98）

Ⅳ群Ｂの住居群内において南東部分に位置し、D148、D149が近接している。

遺構　北壁3.8m、東壁４mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.12m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝はない。P_1、P_2をコーナー部で検出した。径0.2m、深さ0.3mを計る。

炉　住居中央部より北側に寄って２か所位置している。いずれも径0.5m、深さ0.12mを計

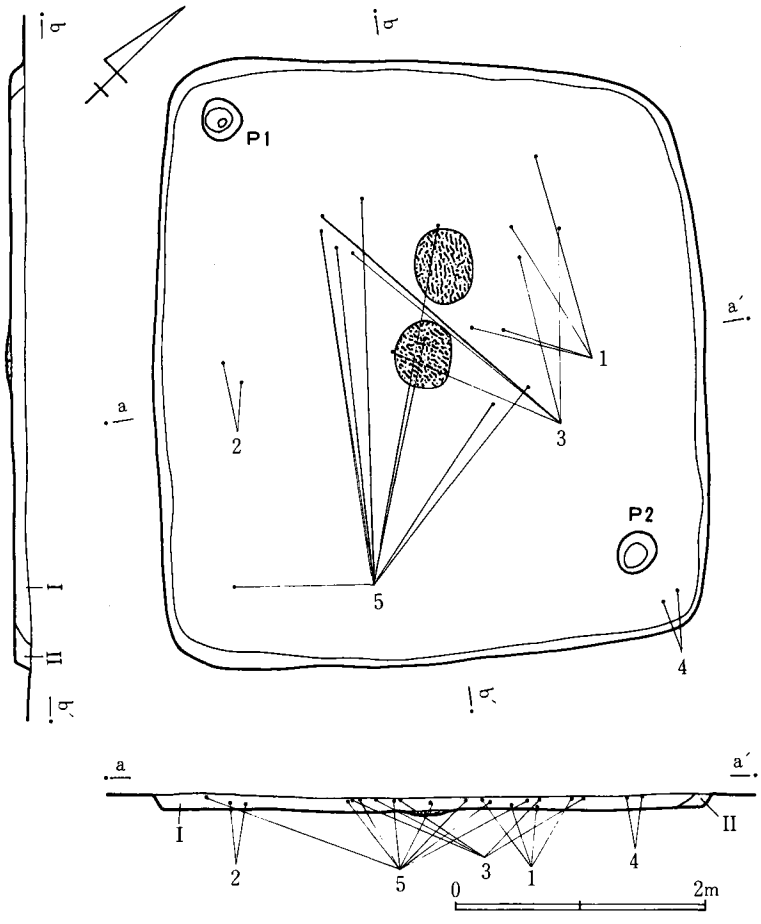


図391 D150号遺構実測図

り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中から散在した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、高坏形土器がある。甕形土器は1、2で、いずれも口縁部は「く」字状に外反する。台付甕形土器は5で台部と甕部の接合部分である。高坏形土器は3、4で、3は坏部、4は脚部の破片である。

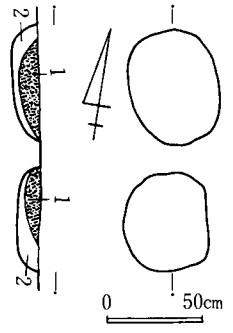


図392 D150号遺構炉跡実測図
1 焼土層
2 黒褐色土層

D150出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.3	—	½	外面ハケ目	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	甕	—	12.4	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	胴部下半二次的に火を受ける
3	高坏	—	16.4	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
4	高坏	—	—	14.8	脚部のみ	内面ヘラ削り 外面ハケ目	砂粒	軟弱	(外)淡茶褐色 (内)暗黄褐色	
5	台付甕	—	—	13.6	1/3	ハケ目の上を 内外面ヘラ削り	砂粒	軟弱	(外)淡赤褐色 (外)黒色	

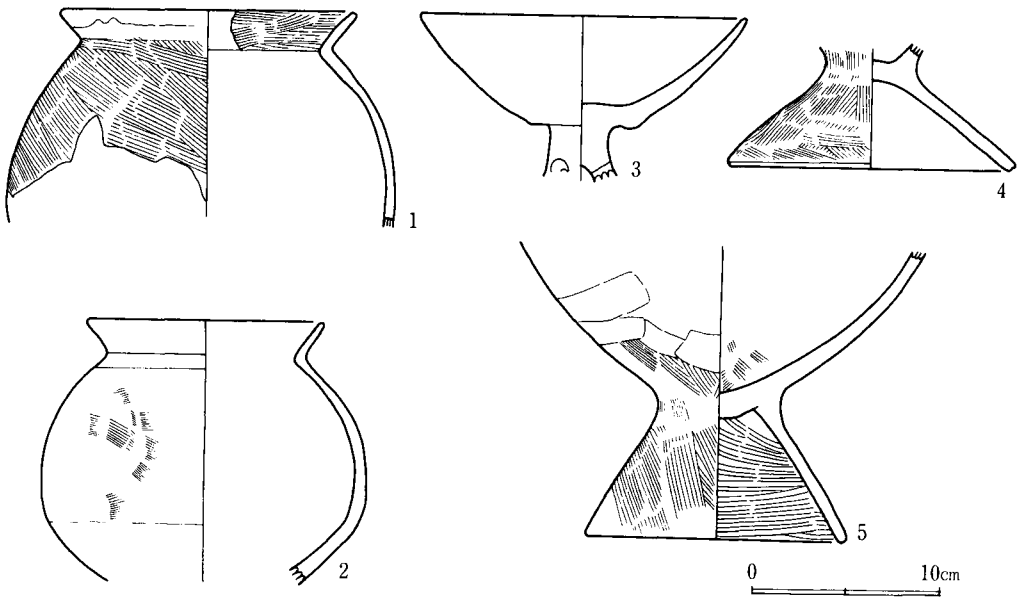


図393 D150号遺構出土遺物実測図

54. D152号遺構（図394～396、図版85—3、86—1、98）

IV群Bの住居群内において南東部分に位置し、D148、D149が近接している。

遺構 長径4.04m、短径3.72mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴は検出で

D152出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	17.2	18.2	6.4	完形	ハケ目の上を内外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡褐色	一部赤彩痕？
2	甕	—	14.1	—	2/3	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	胴部二次的に火を受ける
3	甕	—	12.4	—	1/2	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	堅緻	淡褐色	胴部黒斑
4	高坏	—	22.4	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	淡灰褐色	
5	坩	8.5	10.0	2.6	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡灰褐色	

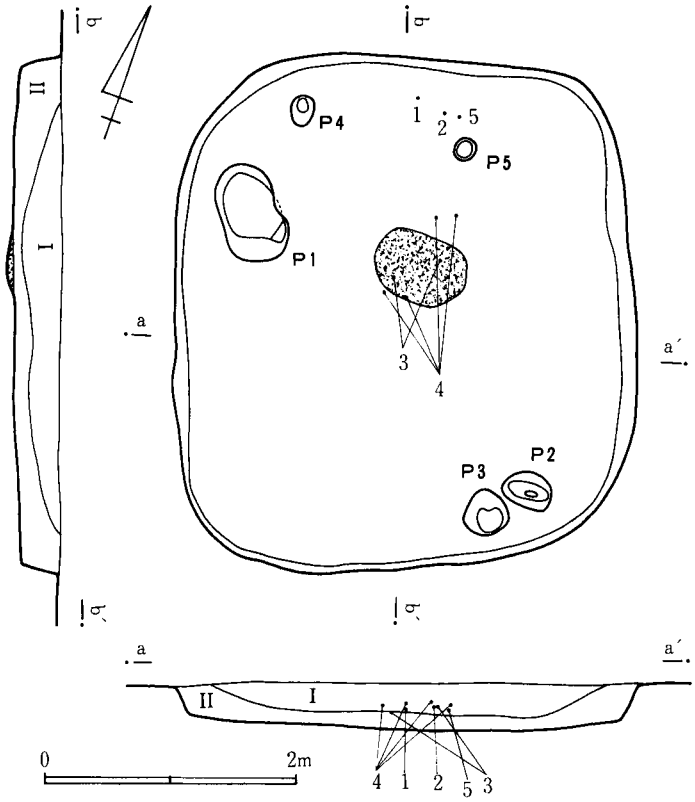


図394 D152号遺構実測図

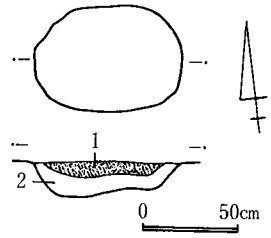


図395 D152号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

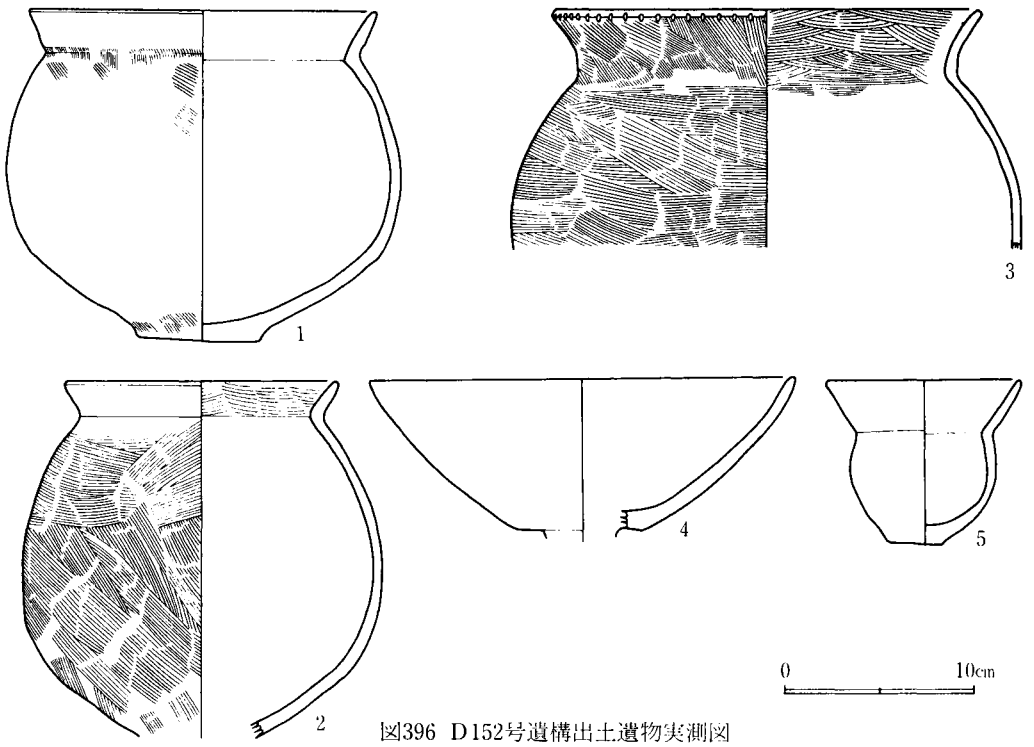


図396 D152号遺構出土遺物実測図

きなかったがP_1～P_5までのピットを検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より若干北に寄って位置している。長径0.78m、短径0.52m、深さ0.15mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層下部より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、高坏、坩形土器がある。甕形土器は1～3で、いずれも口縁部は「く」字状に外反する。高坏形土器は4で坏部の破片である。坩形土器は5で、平底を呈し口縁部は大きく開く。

55. D153号遺構（図397、398、図版86－2）

Ⅳ群Bの住居群内において最も東に位置している。

遺構　径4.7mでほぼ円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.24m掘り込

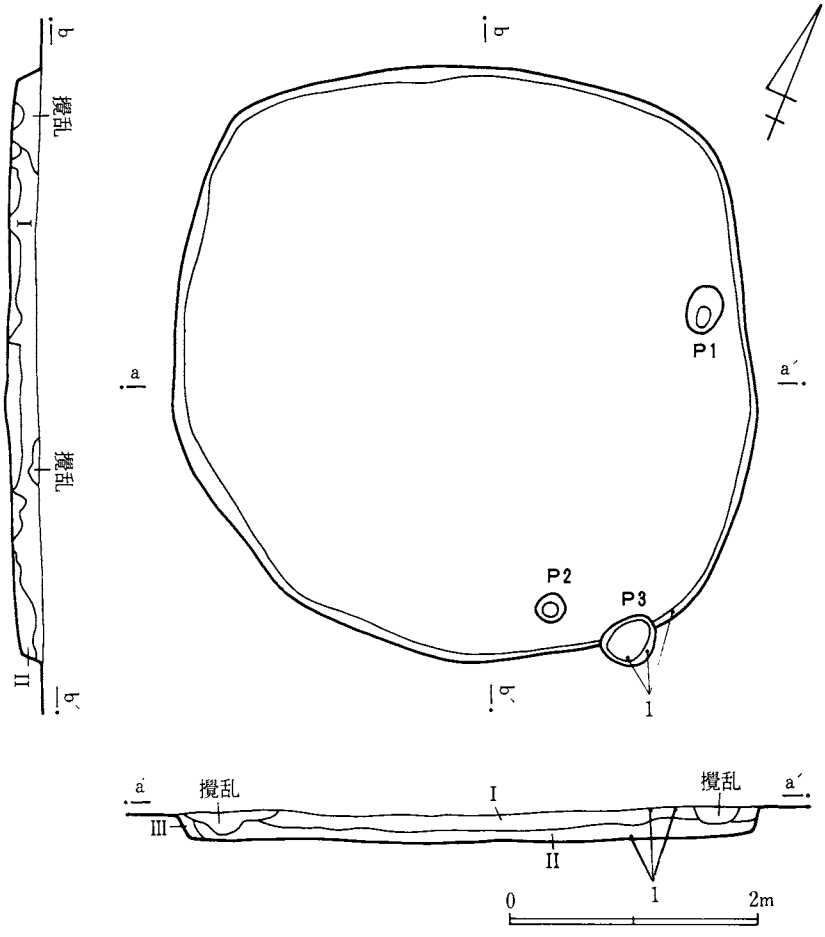


図397　D153号遺構実測図

んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。P_1～P_3のピットを検出したが柱穴にはならない。壁溝、炉は検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少である。

出土遺物　図示できる遺物は1点のみである。口縁部が「く」字状に外反する甕形土器である。

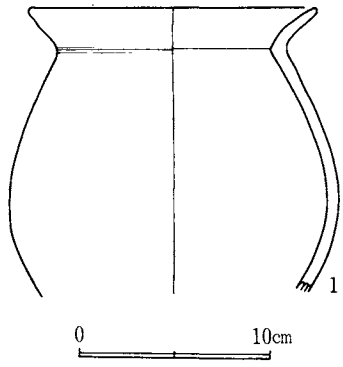


図398　D153号遺構出土遺物実測図

D153出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.0	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	軟弱	(外)黒褐色 (内)淡茶褐色	

56. D158号遺構（図399～401、図版86—3、98、99）

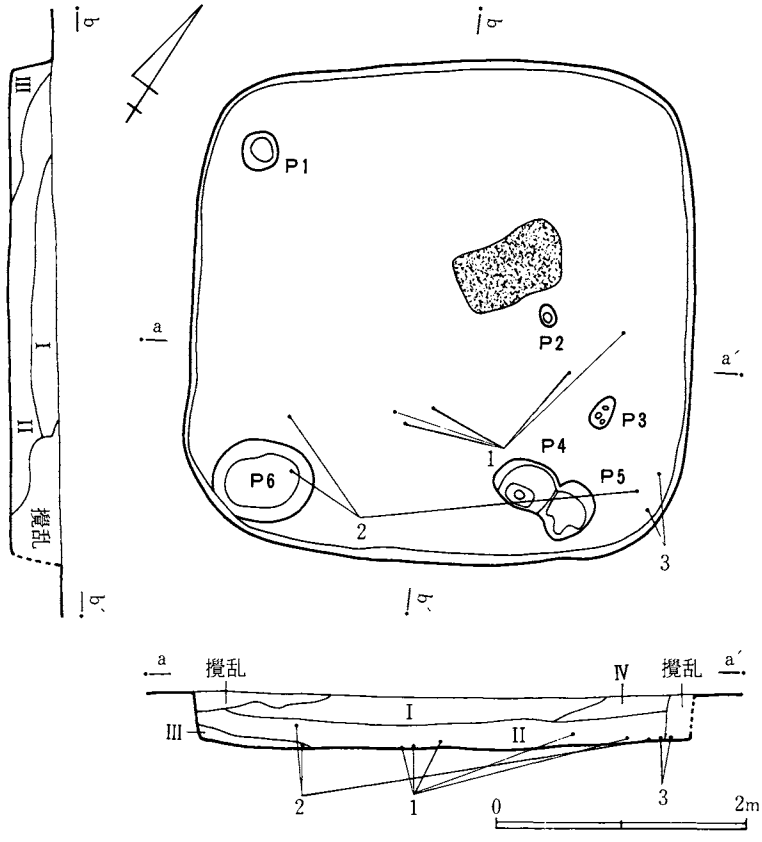


図399　D158号遺構実測図

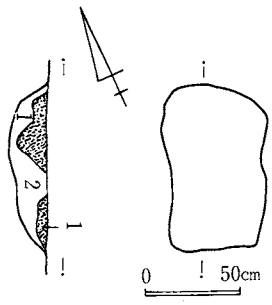


図400 D158号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

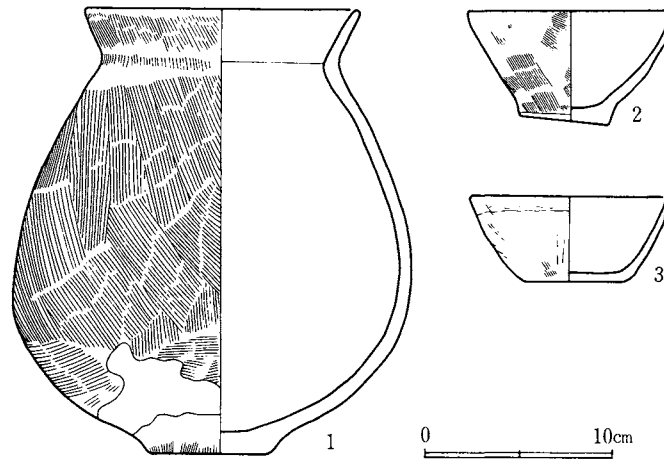


図401 D158号遺構出土遺物実測図

IV群Bの住居群内において最も東側に位置している。

遺構 北壁4.4m、東壁3.96mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している、P_1～P_6まで検出したが柱穴にはなり難い。P_6は長径0.8m、短径0.63m、深さ0.48mを計る貯蔵穴である。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北東に寄って位置している。長径0.85m、短径0.5m、深さ0.18mを計り、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層ローム粒混入褐色土層、IV層褐色土層が堆積しており、遺物は床面を中心に覆土中に散在して出土している。

出土遺物 遺物は、甕、鉢形土器である。甕形土器は1で長胴を呈し「く」字状に外反する口縁部を呈している。鉢形土器は2、3で体部は直線的に開く。

D158出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	23.4	14.2	6.6	完形	ハケ目	砂粒	やや堅緻	黒色	スス付着
2	鉢	5.6	10.8	4.6	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
3	鉢	4.6	10.6	5.3	完形	内外面ヘラナデ	砂粒	軟弱	淡茶褐色	

57. D167号遺構（図402～404、図版87－1、99）

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D134が近接している。

遺構 北壁4.75m、東壁5.2mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し

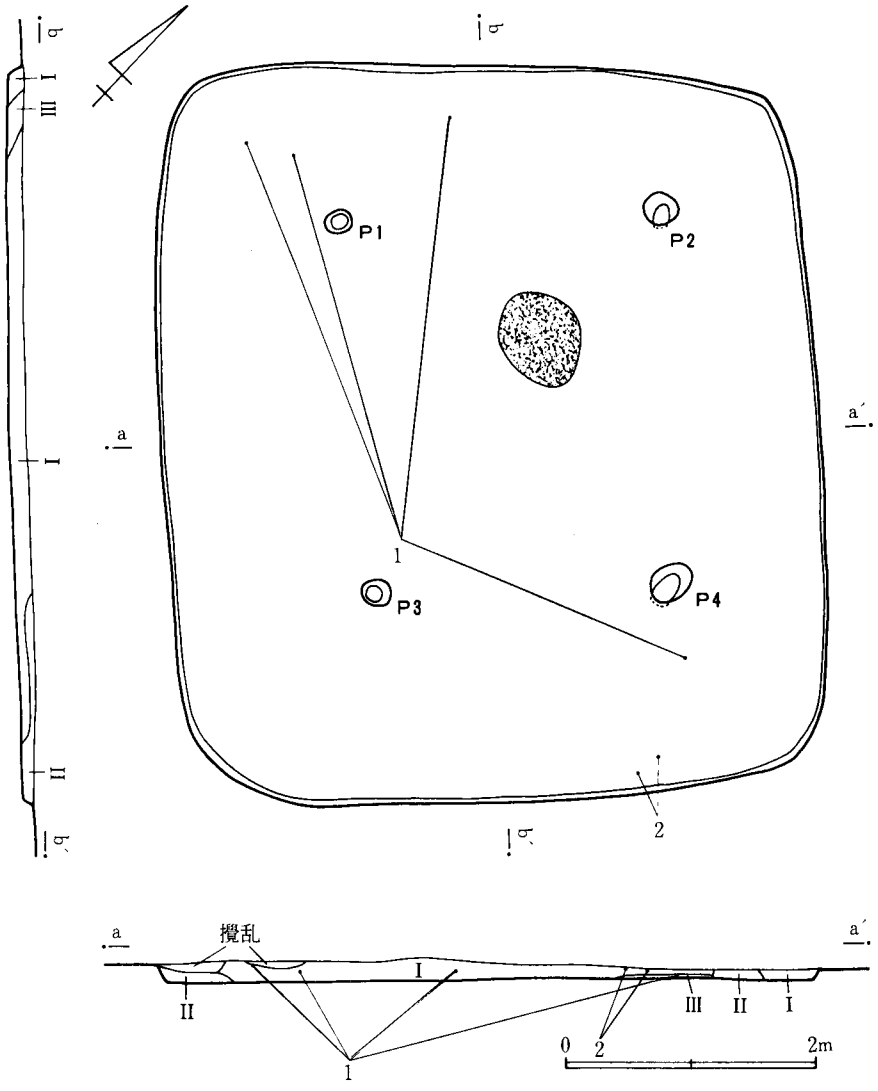


図402 D167号遺構実測図

0.12m掘り込んで床面に達する。床面は中央部が堅緻な状況を呈している以外は軟弱な状況である。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.62m以上0.67m以下を計る。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.75m、短径0.65m、深さ0.12mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層暗褐色土層、II層黒褐色土層、III

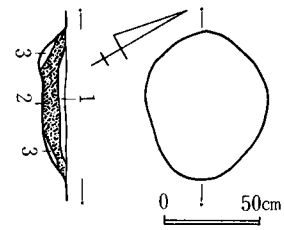


図403 D167号遺構炉跡実測図

1 暗褐色土層
2 焼土層
3 暗茶褐色土層

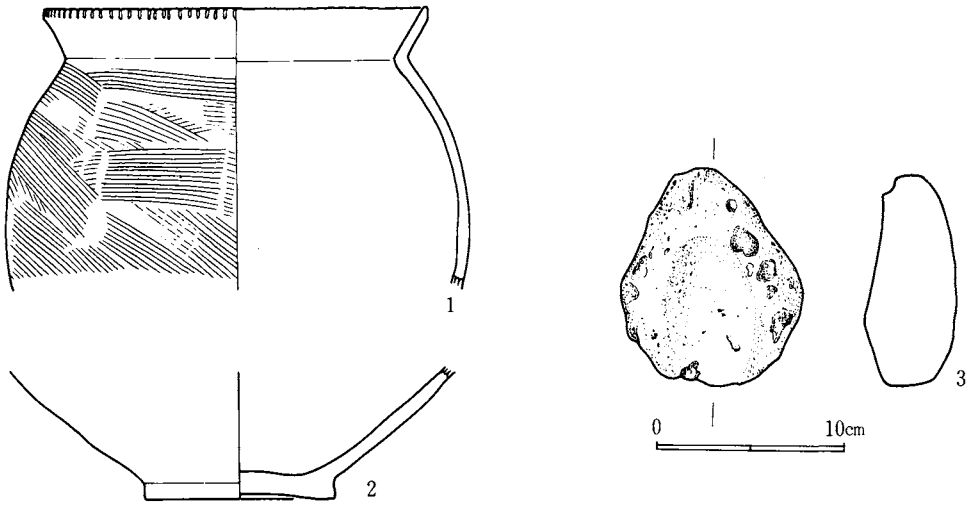


図404 D167号遺構出土遺物実測図

層茶褐色土層が堆積しており、遺物は分散した状況で出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺形土器と石製品がある。甕形土器は1で口縁部が「く」字状に外反する。壺形土器は2で底部破片である。石製品は3つの軽石で用途不明であるが、摩滅痕が認められる。

D167出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.1	—	½	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	やや軟弱	(外)黒褐色 (内)淡茶褐	
2	壺	—	—	10.0	底部のみ	外面ヘラ磨き	砂粒	軟弱	暗赤褐色	

58. D169号遺構（図405、406）

IV群Bの住居跡内において西側に位置しD096、D100が近接している。

遺構 北壁2.8m、東壁2.88mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.08m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴は対角線上より全体的に東側に寄って配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.22m、深さ平均0.12m以上0.15m以下を計る。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より東側に寄って位置している。長径0.35m、短径0.25m、深さ0.03mを計り、厚さ0.02mの焼土が堆積している。

覆土はローム粒混入暗褐色土層の単一層で、遺物はきわめて少なく図示できるものは皆無である。

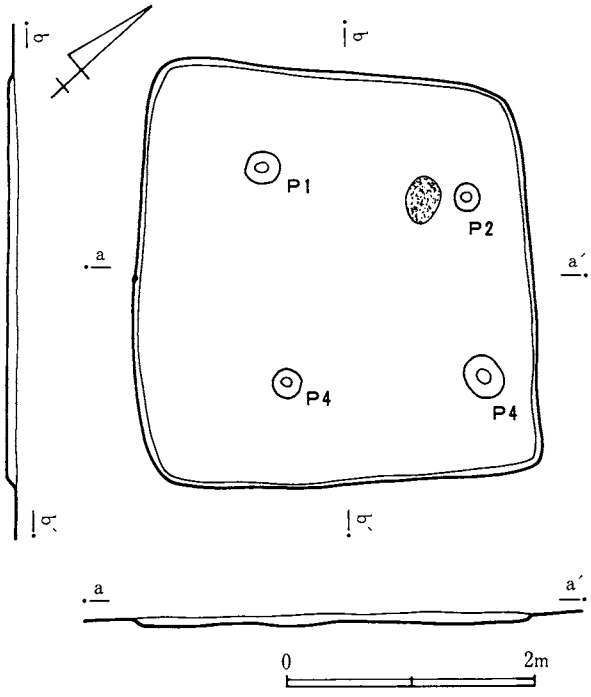


図405 D169号遺構実測図

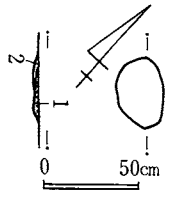


図406 D169号遺構炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

59. D170号遺構（図407～410、図版87－2、3、99）

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D108、D171が近接している。

遺構 北壁2.8m、東壁3mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈し0.28m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。床面上に散乱した状況の炭化物、焼土塊を検出した。よって、焼失住居と判断できる。柱穴は検出できなかった。南東壁コーナー部に近くP_1を検出した。径0.35m、深さ0.4mを計る貯蔵穴である。壁溝は検出できなかった。

D170出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	台付甕	22.3	11.6	7.8	完形	ハケ目の上を一部ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒灰褐色	胴部二次的に火を受ける
2	台付甕	—	13.4	—	2/3	ヘラナデ	砂粒	軟弱	黒褐色	
3	甕	—	12.4	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒灰色	胴部二次的に火を受ける
4	台付甕	—	—	7.6	台部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
5	壺	—	7.0	—	1/3	ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	暗灰褐色	
6	鉢	4.9	7.0	3.6	完形	内外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	明灰褐色	
7	器台	8.6	6.8	10.0	完形	ハケ目の上をヘラ磨き	砂粒	堅緻	明灰褐色	

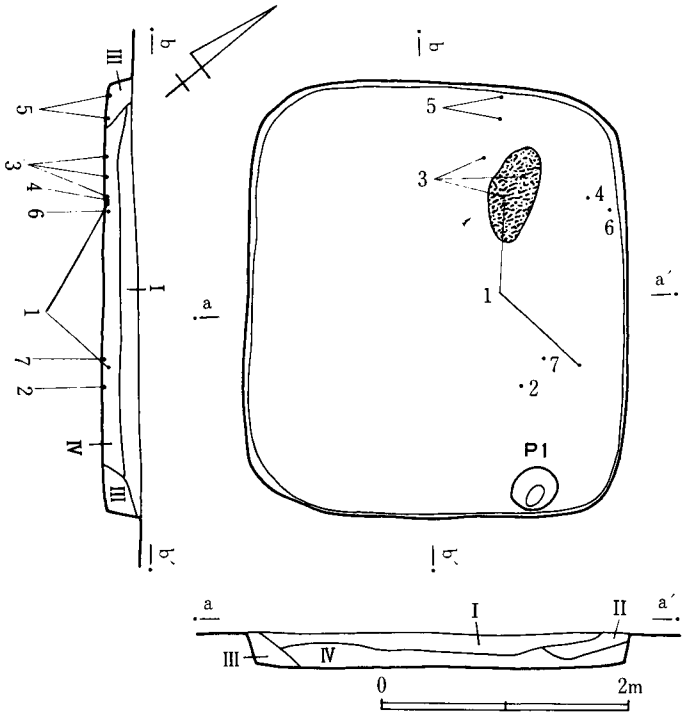


図407 D170号遺構実測図

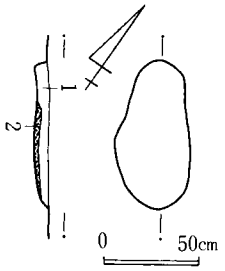


図408 D170号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入黒褐色土層
2 焼土層

炉 住居中央部より北側によって位置している。長径0.78m、短径0.4m、深さ0.07mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層明褐色土層、III層褐色土層、IV層暗褐土層が堆積しており、遺物は炉を中心とした床面上より出土している。

出土遺物 遺物は、台付甕、甕、壺、鉢、器台形土器がある。台付甕形土器は1、2、4である。2は台部を欠損する。4は台部の破片である。1は完形で口縁部が「く」字状に外反する。甕形土器は3で球形に近い胴部を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。壺形土器は5で胴部が球形を呈し、口縁部は短かく直立ぎみに開く。鉢形土器は6で小形な土器である。器台形土器は7で接合部に小孔が貫通する。

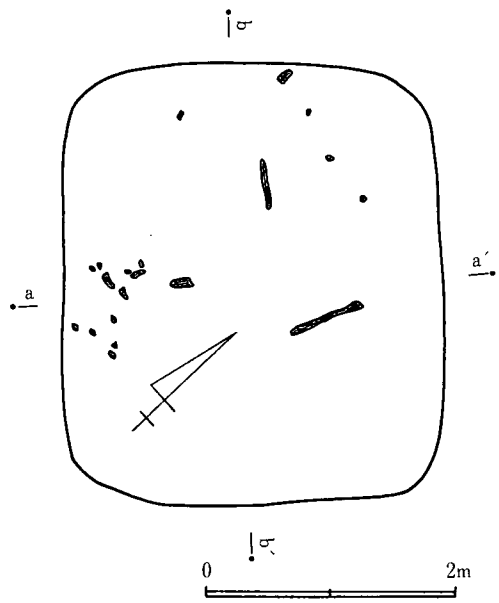


図409 D170号遺構炭化物出土状況図

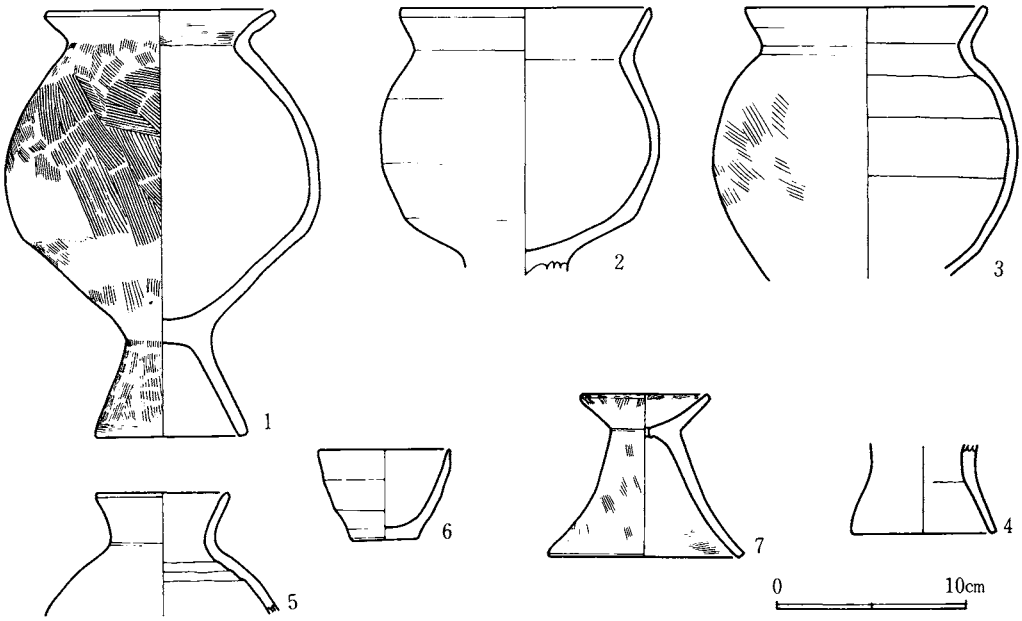


図410 D170号遺構出土遺物実測図

60. D171号遺構（図411～413、図版88－1、100）

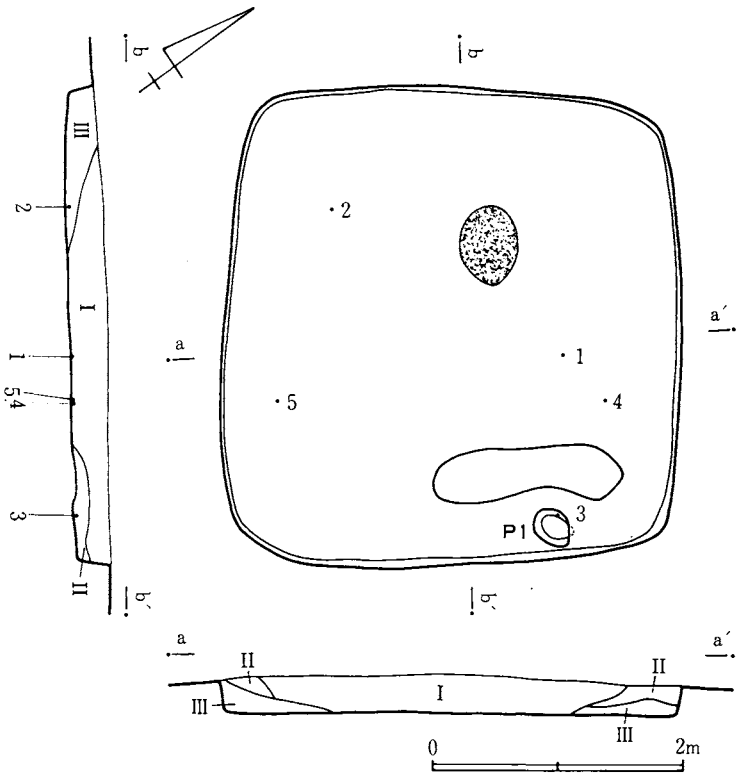


図411 D171号遺構実測図

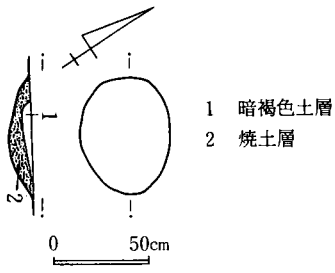


図412 D171号遺構炉跡実測図

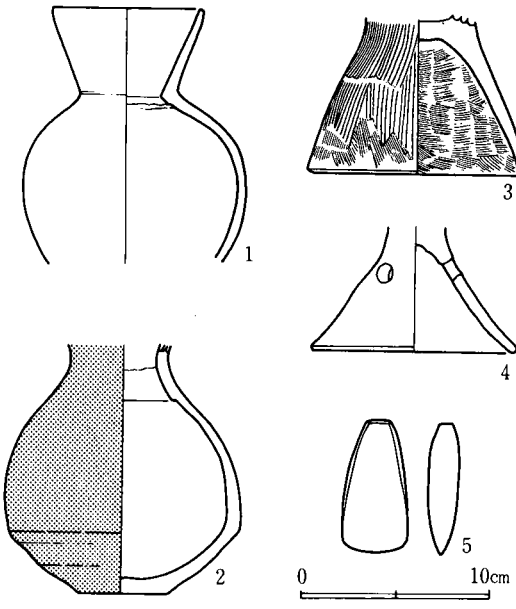


図413 D171号遺構出土遺物実測図

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D170が近接している。

遺構 北西壁3.2m、北東壁3.08mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.28m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、南東壁コーナーに近くP1を検出した。径0.28m、深さ0.4mを計り、周囲に土手状の高まりが廻っている。壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より北東に寄って位置している。長径0.6m、短径0.47m、深さ0.12mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層褐色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に覆土中に散在した状況で出土している。

出土遺物 遺物は、坩、壺、台付甕、高坏形土器と石製品がある。坩形土器は1で底部を欠損するが球形の胴部に直立ぎみに立ちあがる口縁部を呈している。壺形土器は2で、下脹の胴部を呈し赤彩してある。台付甕形土器は3でハケ目調整される台部破片である。高坏形土器は4で脚部の破片で小孔があく。石製品は頁岩製の磨製石斧である。全体に風化が著じるしい。

D171出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坩	—	8.0	—	3/3	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	淡茶褐色	
2	壺	—	—	4.6	3/3	外面ヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	赤彩
3	台付甕	—	—	11.2	台部のみ	外面ハケ目	砂粒	やや堅緻	暗茶褐色	
4	高坏	—	—	10.6	脚部のみ遺存	外面ヘラ磨き	——	堅緻	淡茶褐色	

61. **D173号遺構**（図414～416、図版88－2、3、89－1、100）

IV群Bの住居群内において最も南に位置し、D174、D175が近接している。ほぼ南北に連なる溝によって遺構の南東部分が切断されており、遺存状況は良好でない。

遺構　北東壁3.5m、南東壁2.8mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡であるが、全体にプランが歪を生じている。壁は傾斜を呈し0.24m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、南東壁に近く、P_1、P_2を検出した。径0.28mで、深さ0.3mを計る。壁溝は検出できなかった。

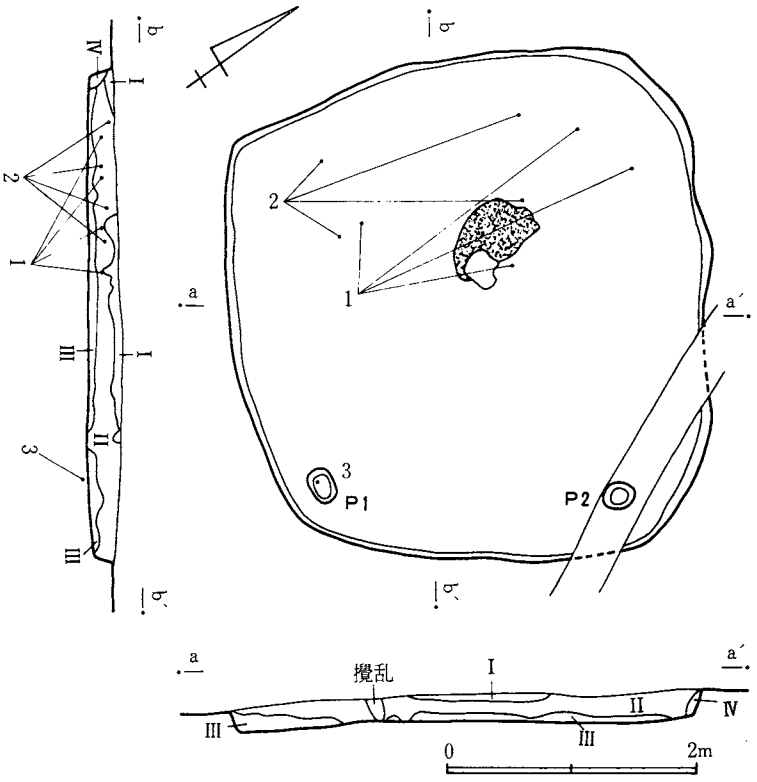


図414　D173号遺構実測図

炉　住居中央部より若干北東に寄って位置している。長径0.75m、短径0.45m、深さ0.1mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積している。全体に不整な形状を呈し、一部攪乱を受けている。

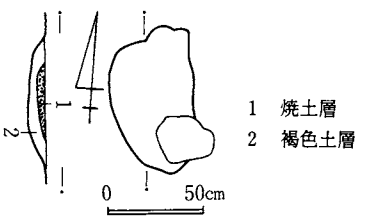


図415　D173号遺構炉跡実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層黄褐色土層が堆積しており、遺物はピット内から出土するものもあるが、覆土中に散在した状況で出土している。

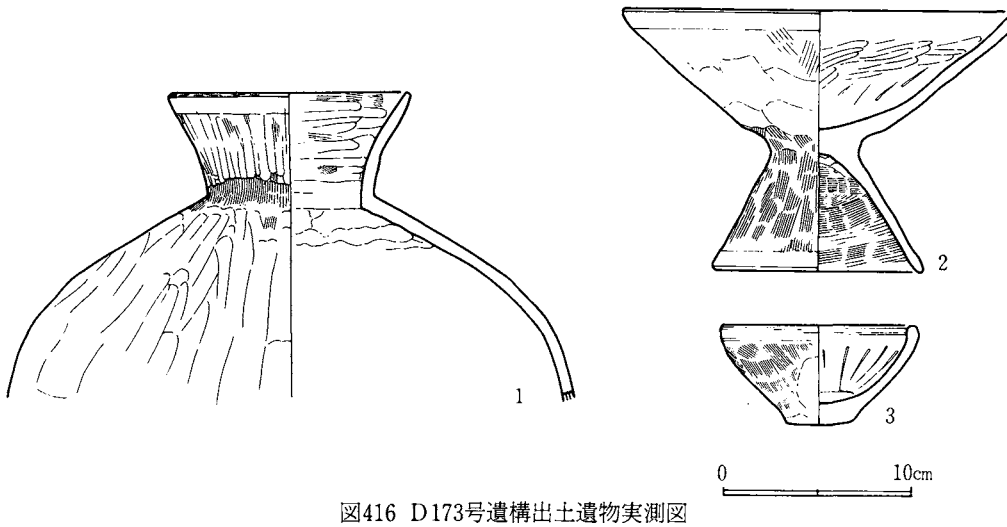


図416 D173号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、壺、高坏、鉢形土器がある。壺形土器は1で、脚部中位下半を欠損している。ハケ目調整され、上縁部は小さく開く。高坏形土器は2で脚、坏部ともに直線的な形状を呈している。鉢形土器は3で体部が内彎ぎみに開く。

D173出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	12.6	—	½	ハケ目の上を外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	高坏	13.8	20.8	10.8	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
3	鉢	5.2	10.0	3.4	完形	ハケ目の上を一部ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

62. D174号遺構（図417～420、図版89—2、3、100）

IV群Bの住居群内において南に位置し、D173、D175が近接している。

遺構 北西壁3.8m、北東壁3.9mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し0.48m掘り込んでいる。直下には幅0.15m、深さ0.05mの壁溝がほぼ全周してい

D174出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	14.8	—	½	内外面ヘラ削り	小石	やや軟弱	茶褐色	
2	壺	—	12.6	—	口縁部のみ	内面ヘラナデ 外面ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
3	鉢	5.1	9.6	4.6	⅔	ハケ目の上を内外面ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	二次的に火を受けている
4	鉢	8.6	9.8	3.7	⅔	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡褐色	

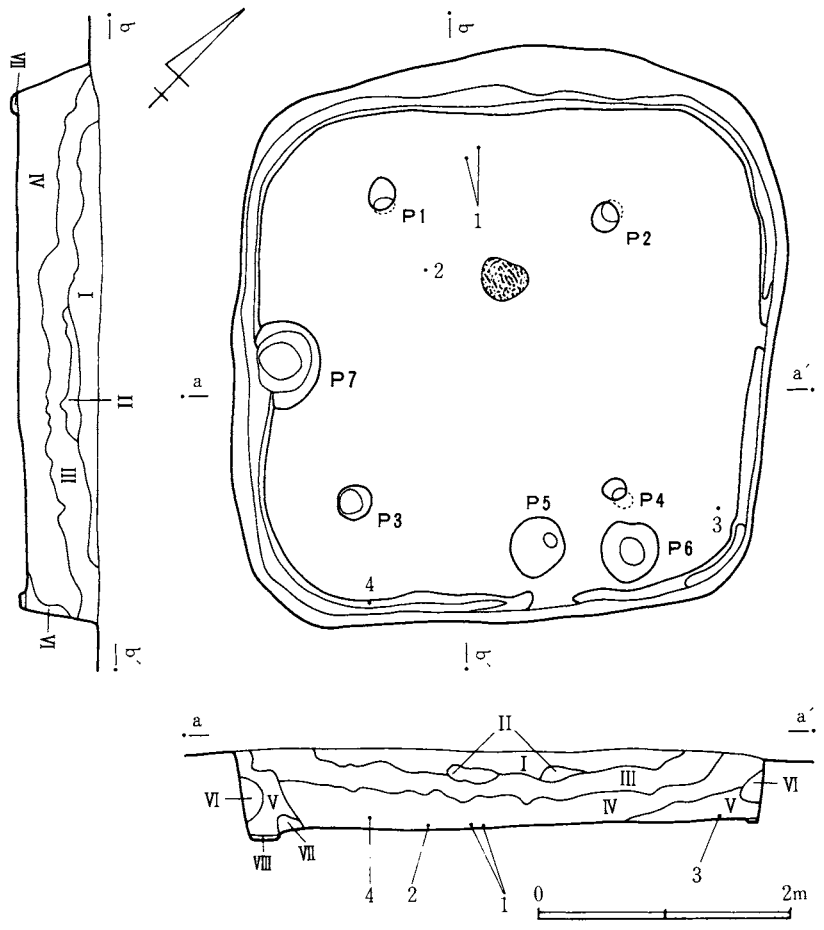


図417 D174号遺構実測図

る。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面の北西壁に近い部分に炭化物、焼土塊を検出した。よって、焼失した住居と判断できる。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.21m、深さ平均0.5m以上0.61m以下を計る。また、北東壁に近く、P_5、P_6を検出した。径平均0.48m、深さP_5は0.65m、P_6は0.26mを計る。南西壁に接してP_7を検出した。径0.6m、深さ0.4mを計る。

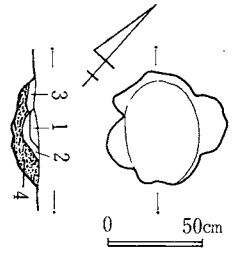


図418 D174号遺構炉跡実測図

1 暗褐色土層
2 赤褐色土層
3 灰褐色砂質粘土層
4 焼土層

炉 住居中央部より北西に寄って位置している。長径0.55m、深さ0.15mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積している。形状はかなり不整である。

遺物出土状況 I層暗黒褐色土層、II層暗赤褐色土層、III層黒色土層、IV層黄褐色土層、V

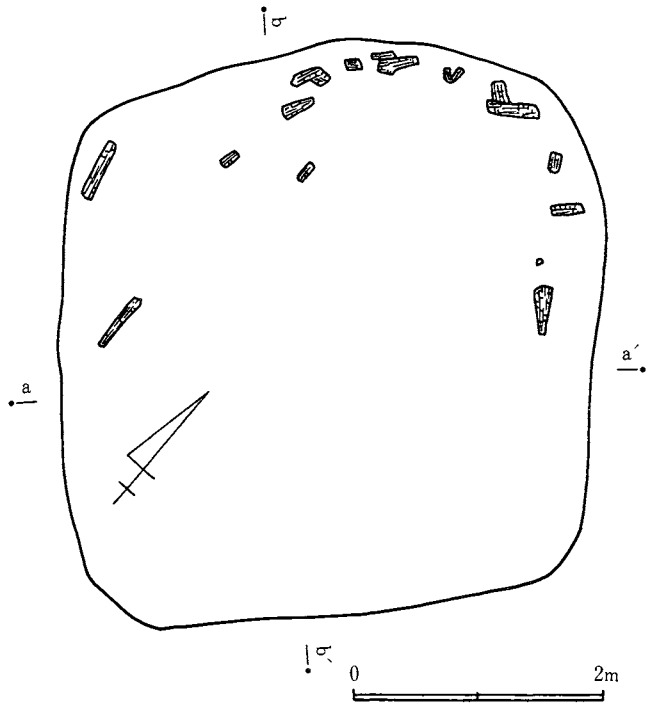


図419 D174号遺構炭化物出土状況図

層暗黄褐色土層、VI層黒褐色土層、VII層ロームブロック層、VIII層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に覆土中に散在した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、鉢形土器がある。甕形土器は1で、口縁部は「く」字状に外反する。壺形土器は2で、口縁部破片である。鉢形土器は3、4で、いずれも小形なものである。

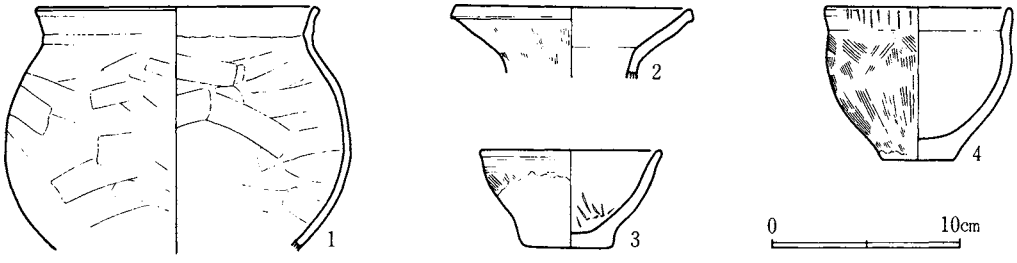


図420 D174号遺構出土遺物実測図

63. D175号遺構（図421～424、図版90―2、3）

IV群Bの住居群内において南に位置し、D173、D174が近接している。ほぼ南北に連なる溝によって遺構の西側部分が攪乱されている。覆土全体の13%におよぶ。

遺構　長径4.4m、短径4mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し

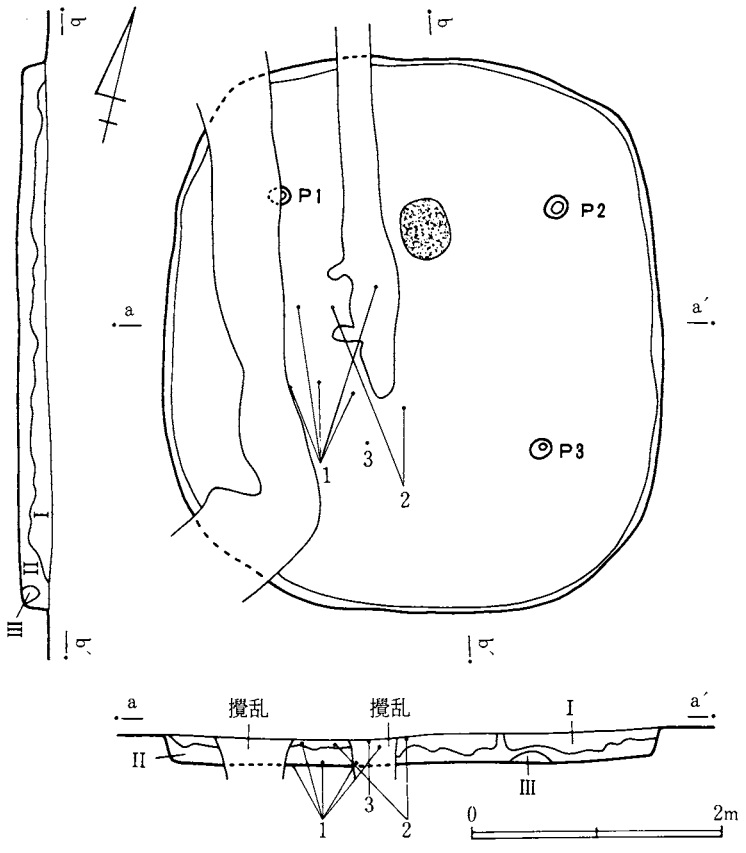


図421 D175号遺構実測図

0.25m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上には中央部を中心に炭化物等が散在しており、焼失した住居と判断できる。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_3を検出した。径平均0.18m、深さ平均0.58m以上0.64m以下を計る。ただし、南西部分の柱穴は溝により切断されているため検出できなかった。壁溝は検出できなかった。

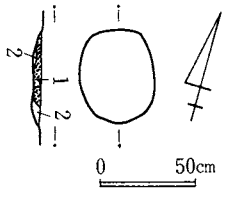


図422 D175号遺構炉跡実測図
1 焼土層
2 褐色土層

炉 住居中央部より北側に寄って位置している。長径0.47m、短径0.38m、深さ0.05mで、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

D175出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	8.6	2/3	縄文原体刻目、S字状結節文、ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	

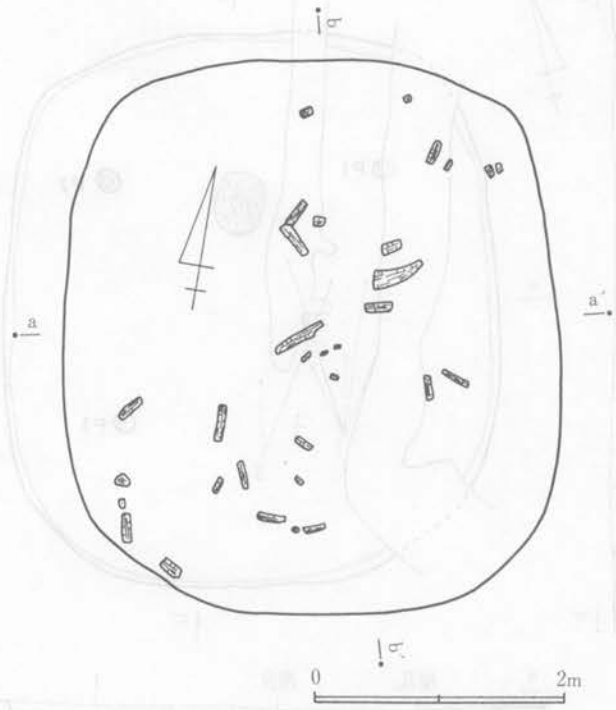


図423 D175号遺構炭化物出土状況図

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層、Ⅲ層赤褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中から散在した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、甕形土器と石製品がある。甕形土器1は頸部上半を欠損しており、肩部

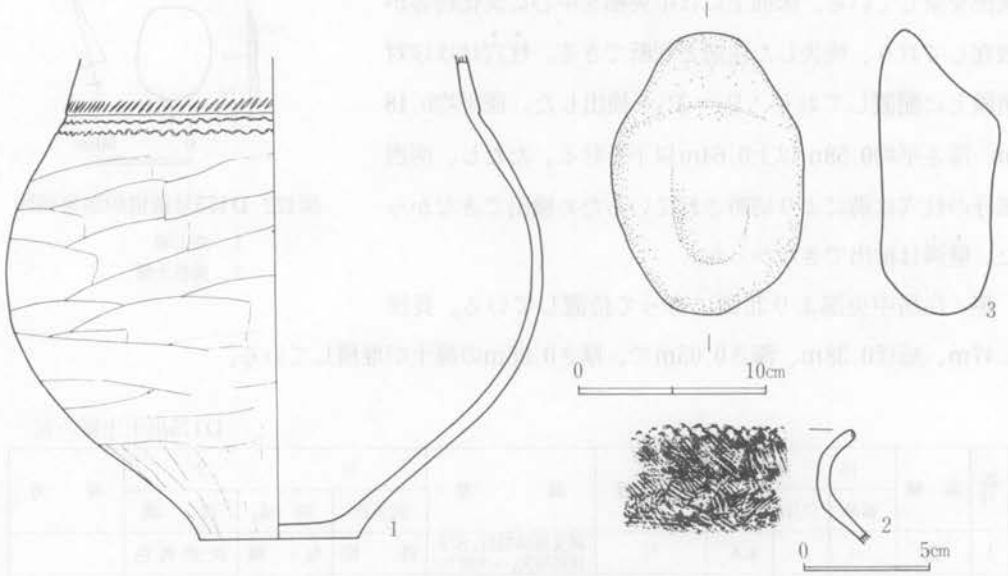


図424 D175号遺構出土遺物実測図

に結節文と刻目が見られる。2は口唇部に刻目がある口縁部破片である。石製品は3の磨石で、中央部が若干窪んでいる。

64. D178号遺構（図425、426、図版91、100）

IV群Bの住居群内においてほぼ中央部に位置し、D170が近接している。遺構の東側は2本の溝によって攪乱されているため遺存状況は良好でない。

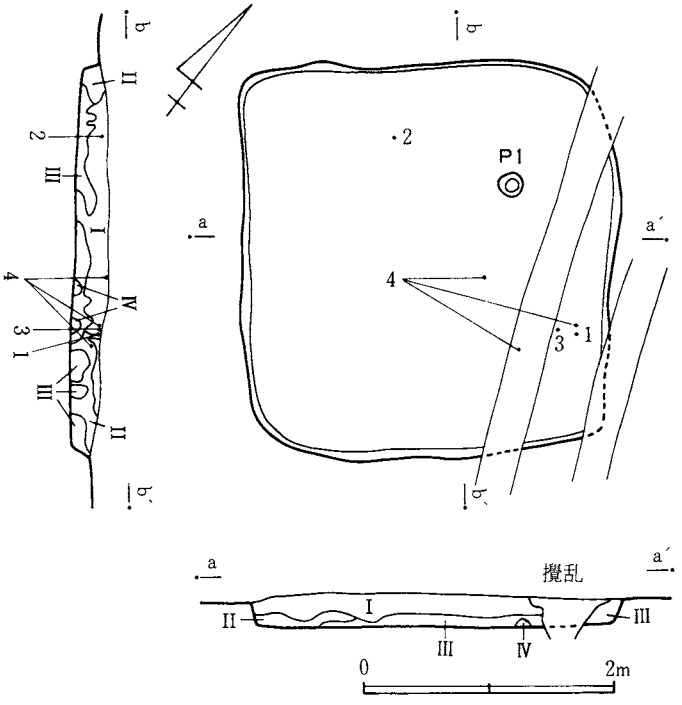


図425 D178号遺構実測図

遺構　北壁3m、東壁3.1mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.22m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴と思われるピットはない。P_1は径0.18m、深さ0.1mを計る小ピットである。壁溝、炉は認められない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層黄褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中に散在した状況で出土している。

出土遺物　遺物は、台付甕、鉢形土器がある。

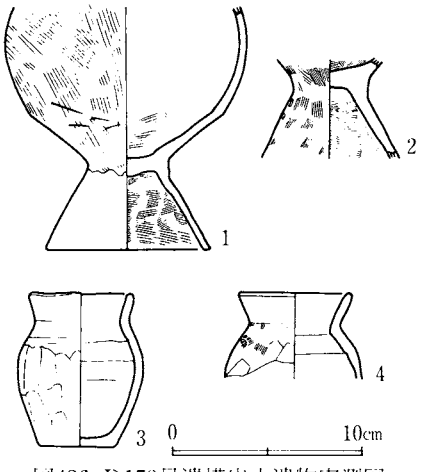


図426 D178号遺構出土遺物実測図

台付甕形土器は1、2で、いずれも小形な土器である。鉢形土器は3、4で口縁部が短かく直立ぎみに開く形状を呈している。

D178出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	—	8.4	⅔	ハケ目	砂粒	やや軟弱	黒色	胴部二次的に火を受ける
2	台付甕	—	—	—	台部破片	ハケ目の上を一部ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	
3	鉢	8.0	5.2	4.0	完形	外面ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
4	鉢	—	5.6	—	½	ハケ目の上をヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	

65. D180号遺構（図427～429、図版92－1、2）

IV群Bの住居群内において南西に位置し、D182、D183が近接している。

遺構　北壁3.3m、東壁3.3mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.25m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.18m、深さ平均0.1m以上0.4m以下を計り、中には柱穴としての機能を有していたか疑問なピットもある。壁溝は認められない。

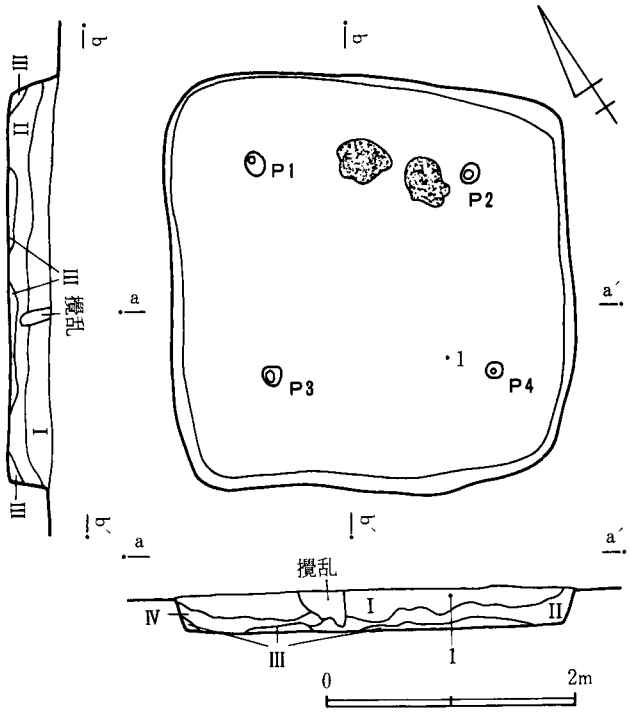


図427　D180号遺構実測図

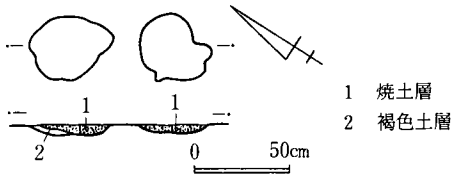


図428 D180号遺構炉跡実測図

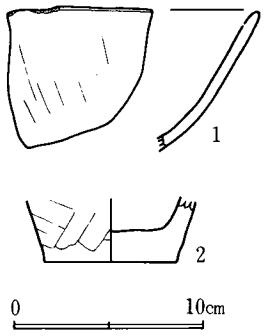


図429 D180号遺構出土遺物実測図

炉 住居中央部より北側に寄って位置して2か所検出した。いずれも径0.45mの不整な平面形を呈し、深さ0.05m、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層、Ⅳ層褐色土層が堆積している。遺物は覆土中に散在した状況を呈し出土しているが量的に稀少である。

出土遺物 図示できる遺物は2点のみである。1は高坏形土器の坏体部の破片である。2は鉢形土器底部の破片である。

D180出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	—	—	口縁部破片	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	鉢	—	—	7	底部破片	ヘラ削り	小石	堅緻	淡茶褐色	

66. D182号遺構（図430～432、図版92—3、93—1、100）

Ⅳ群Bの住居群内において南西部に位置し、D180、D183が近接している。

遺構 北壁4.2m、東壁3.3mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈して掘り込んでいる。直下には幅0.2m、深さ0.05mの壁溝が北壁と東壁の一部を除いて認められる。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。P_1、P_2は径平均0.3mで、深さ0.42m、P_3、P_4は径平均0.18mで深さ0.41mを計る。また、南壁に近く長辺0.3m、短辺0.2m、深さ0.18mを計るピットP_5を検出した。

D182出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	11.6	—	2/3	ハケ目	砂粒	やや軟弱	赤褐色	胴部二次的に火を受けススが付着
2	台付甕	—	—	10.6	台部のみ	ハケ目の上を一部のヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡褐色	
3	高坏	—	12.2	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	赤褐色	内外面赤彩

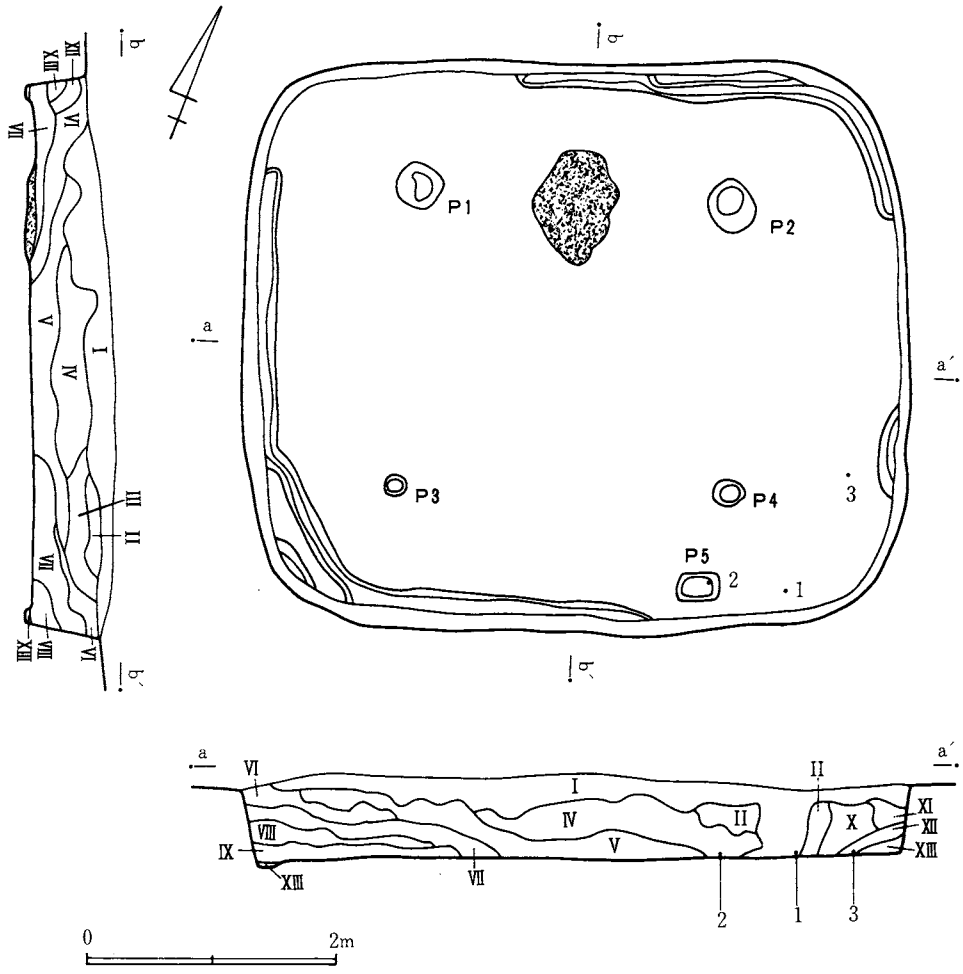


図430 D182号遺構実測図

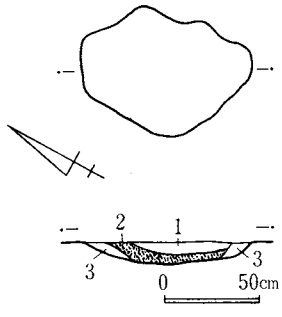


図431 D182号遺構炉跡実測図

1 褐色土層
2 焼土層
3 赤褐色土層

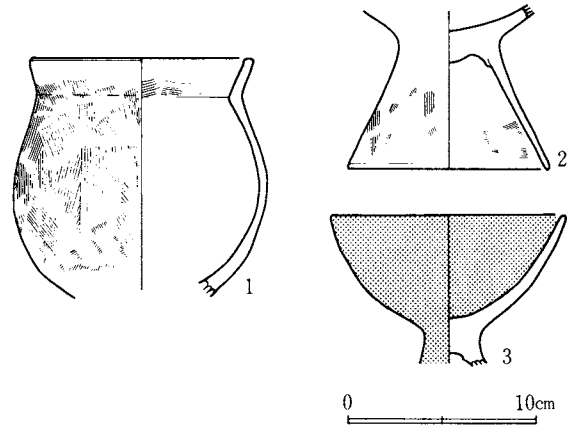


図432 D182号遺構出土遺物実測図

炉　住居中央部より北側に寄り、P_1、P_2の間に位置している。長径0.9m、短径0.65m、深さ0.12mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層攪乱土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層黒色土層、Ⅳ層黄褐色土層、Ⅴ層暗褐色土層、Ⅵ層暗黄褐色土層、Ⅶ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅷ層ローム粒混入黒色土層、Ⅸ層ロームブロック層、Ⅹ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅺ層ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅻ層褐色土層、XIII層茶褐色土層が堆積している。遺物は、床面上を中心に覆土中より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、高坏形土器がある。甕形土器は1で口縁部は緩やかに外反する。台付甕形土器は2の接合部破片である。高坏形土器は3の坏部のみで脚部は欠損している。

67. D183号遺構（図433～435、図版93－2、100）

Ⅳ群Bの住居群内において南西部に位置し、D180、D184が近接している。

遺構　長径3.5m、短径3.3mで楕円形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.3m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。柱穴、壁溝は検出できなかった。

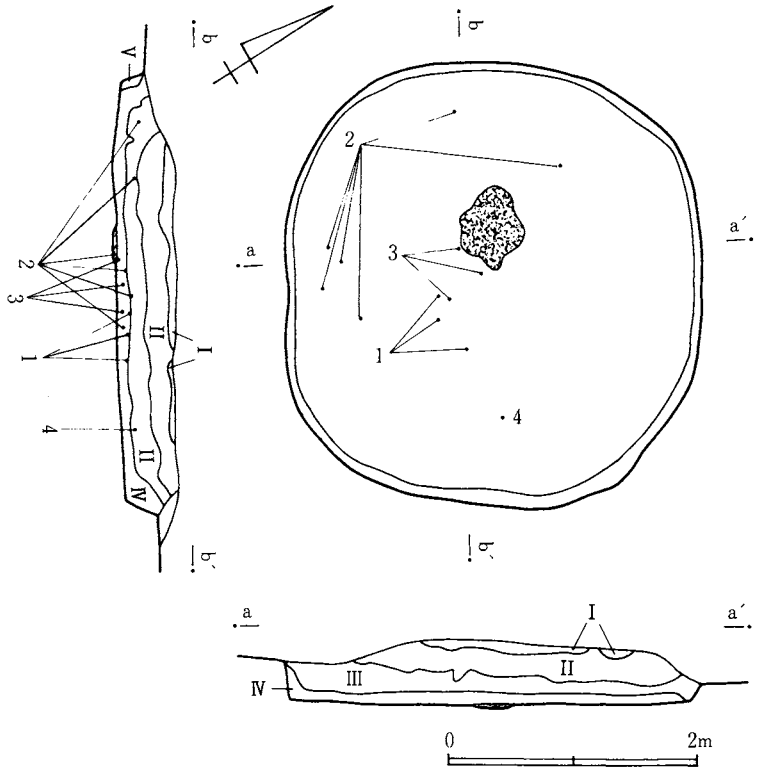


図433　D183号遺構実測図

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.62m、短径0.4m、深さ0.05mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層暗黒褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層、Ⅴ層褐色土層が堆積しており、遺物は住居西側の覆土中から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、鉢形土器がある。甕形土器は1、3で、1は球形に近い形状を呈している。3は口唇部直下と胴部に附加条縄文が施されている。台付甕形土器は2で接合部の破片である。鉢形土器は4で小形な土器の底部破片である。

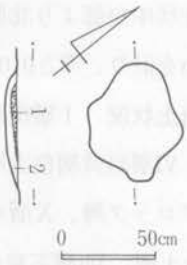


図434　D183号遺構炉跡実測図

1　焼土層
2　褐色土層

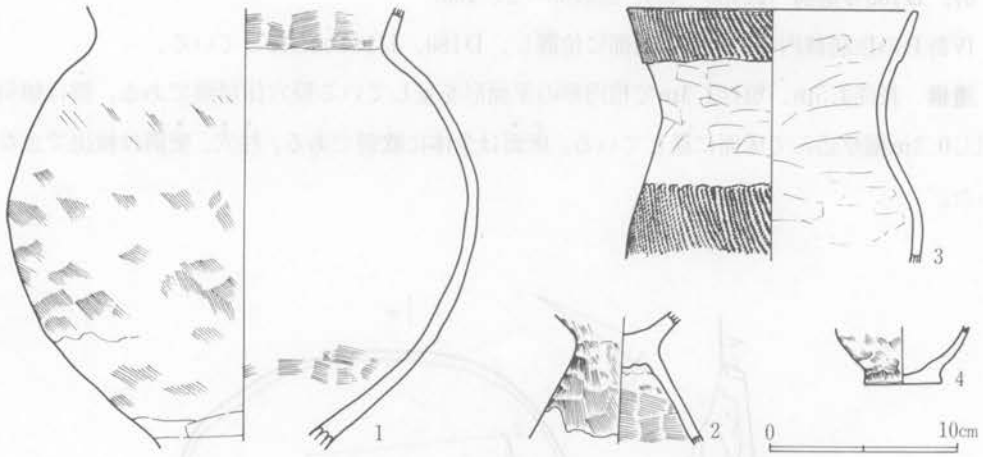


図435　D183号遺構出土遺物実測図

D183出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	3/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	軟弱	淡茶褐色	胴部二次的に火を受けススけ着
2	台付甕	—	—	—	台部破片	ハケ目	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
3	甕	—	15.1	—	1/2	附加条縄文ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
4	鉢	—	—	4.0	底部破片	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	

68. D184号遺構（図436～438、図版93－3、94－1、2、100）

Ⅳ群Bの住居群内において南西部に位置し、D183が近接している。

遺構　北壁2.6m、東壁2.7mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。西斜面に構築している関係で西側部分は東側に比較して遺存状況が若干悪い。壁は傾斜を呈して0.33m掘り

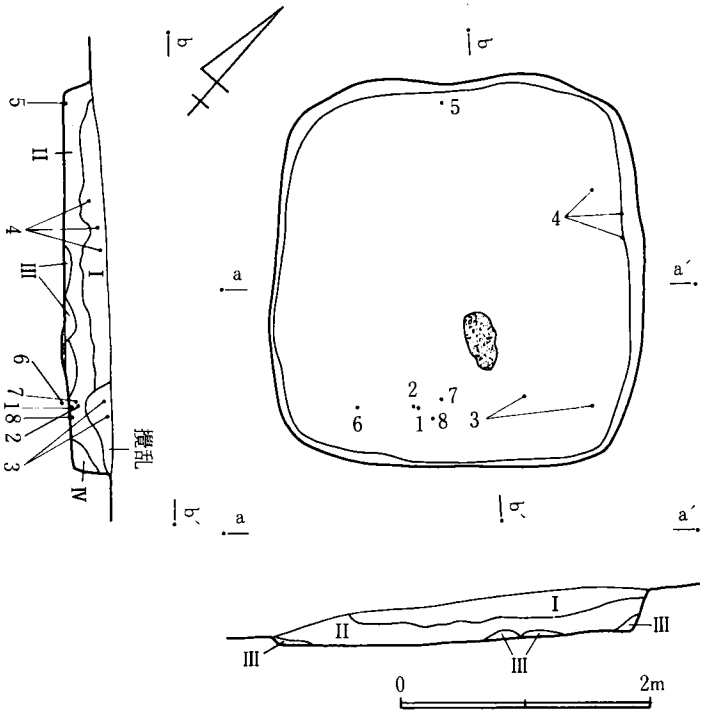


図436 D184号遺構実測図

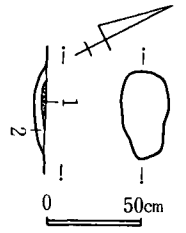


図437 D184号遺構
炉跡実測図

1 焼土層
2 褐色土層

込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉 住居中央部より南側に寄って位置している。長径0.41m、短径0.25m、深さ0.06mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積している。

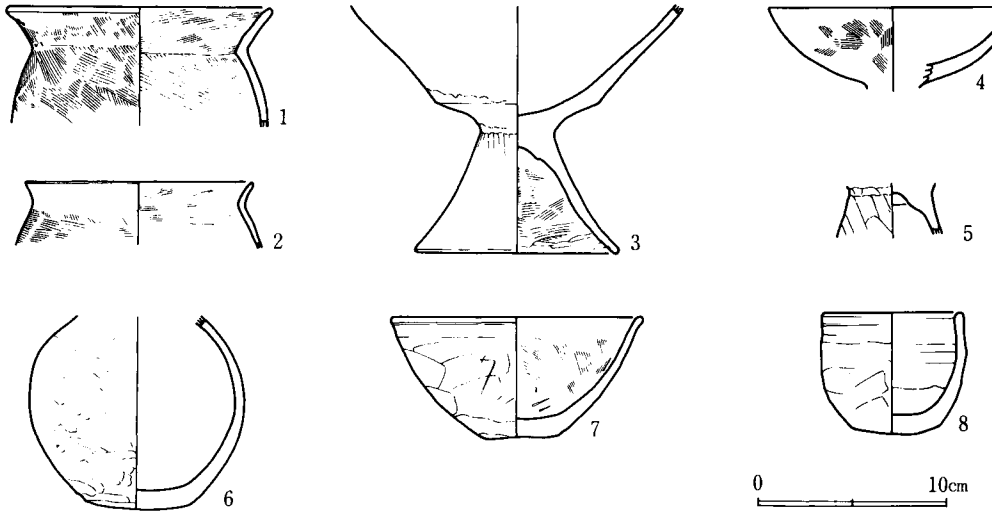


図438 D184号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層、Ⅳ層褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、高坏、壺、鉢形土器がある。甕形土器は1、2で、いずれも「く」字状に外反する口縁部を呈している。高坏形土器は3～5で、裾が開き、体部は大きく直線的に開く形状を呈している。4は坏部、5は脚部の破片である。壺形土器は6で球形に近い形状を呈する胴部で、口縁部は欠損している。鉢形土器は7、8で、7は体部が直線的に大きく開くが、8は内彎ぎみに開く体部を呈している。

D184出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	13.8	—	½	ハケ目	砂粒	軟弱	淡茶褐色	
2	甕	—	11.9	—	口縁部遺存	ハケ目の上をヨコナデ	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	
3	高坏	—	—	10.7	⅔	内外面ヘラ磨き	——	やや堅緻	淡茶褐色	
4	高坏	—	12.8	—	½	ハケ目の上をヘラナデ	——	やや堅緻	淡黒褐色	
5	高坏	—	—	—	脚部破片	ヘラナデ	——	堅緻	淡茶褐色	
6	壺	—	—	5.4	⅔	外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	
7	鉢	6.2	13.1	4.0	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	(内)灰黒色 (外)淡茶褐色	
8	鉢	6.2	7.2	3.3	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	

69. D191号遺構（図439～441、図版94－3）

Ⅳ群Bの住居群内において北西部に位置し、D102が近接している。

遺構　長径3.92m、短径3mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.48m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱であるが、中央部のみ堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ平均0.48m以上0.56m以下を計る。また南壁に近く径0.2m、深さ0.13mの小ピットP_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部から北側に寄って位置している。長径0.88m、短径0.55m、深さ0.15mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒色土層、Ⅳ層黄褐色

D191出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	6.0	底部のみ	ハケ目の上をヘラナデ	小石	やや堅緻	淡赤褐色	

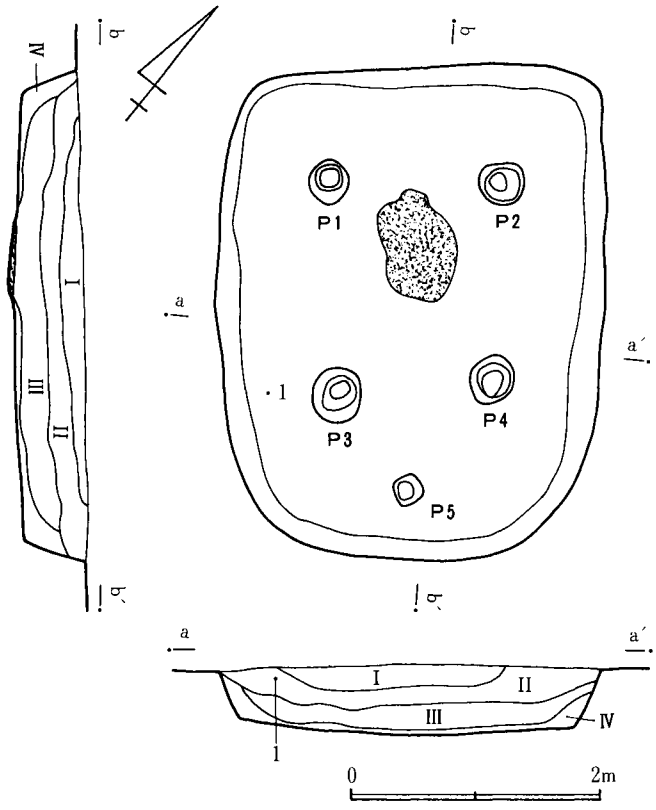


図439 D191号遺構実測図

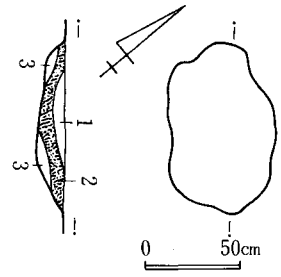


図440 D191号遺構炉跡実測図

1 焼土粒混入黒色土層
2 焼土層
3 褐色土層

土層が堆積している。遺物の出土は稀少で覆土中に散在した状況で出土している。

出土遺物 図示できる遺物は1の壺形土器1点である。ハケ目調整が施されている。

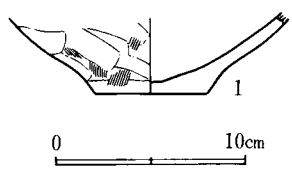


図441 D191号遺構出土遺物実測図

第6節 第V群の遺構と遺物

弥生時代の第V群は方形周溝墓2基で構成される群である。本来はIV群Bと関係を有する墓域である可能性が考えられる群である。IV群の北方約100mに位置しており、公道、未調査地域に接するため、この部分に多少広がりを持つ可能性が考えられる（図A）。

1．M010号遺構（図442～444、図版101）

調査区の北西端において検出した遺構で、住居群とは隔絶した地域に位置している。

遺構 幅員平均0.8m、深さ0.28m掘り込んだ周溝が四角に区画を成すもので、北西部分は接続

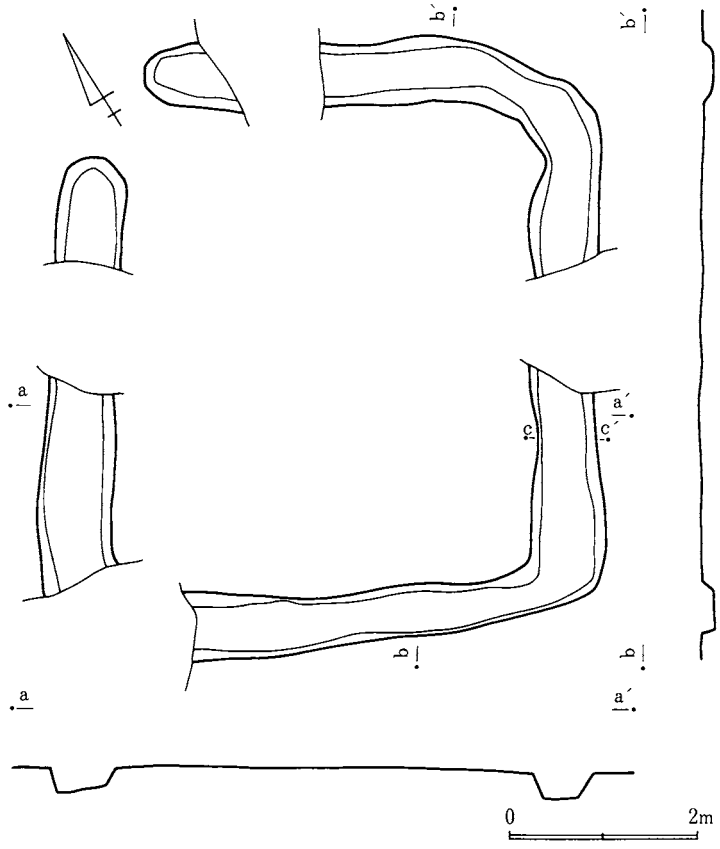


図442 M010号遺構実測図

していない。いわゆるブリッジを呈している。溝によって区画される内部には落ち込み等は検出できなかった。東側の溝において遺物が集中して出土した。I層黒色土層、II層黒褐色土層との間に4個体検出した。

出土遺物 遺物は、鉢、壺、高坏形土器がある。鉢形土器は1、2で、いずれも内彎ぎみに開く体部を呈している。壺形土器は3で、胴部に比して口縁部が大きい特異な形状を呈してい

M010出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	8.85	12.55	4.6	完形	ヘラナデ	——	やや堅緻	淡茶褐色	
2	鉢	5.8	10.6	4.8	完形	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	暗茶褐色	外面輪積痕
3	壺	11.4	8.3	5.2	完形	ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗茶褐色	
4	高坏	7.5	11.8	8.9	完形	ハケ毛目	砂粒	軟弱	暗茶褐色	
5	高坏	—	—	9.8	脚部のみ	ハケ毛目	砂粒	やや軟弱	暗茶褐色	

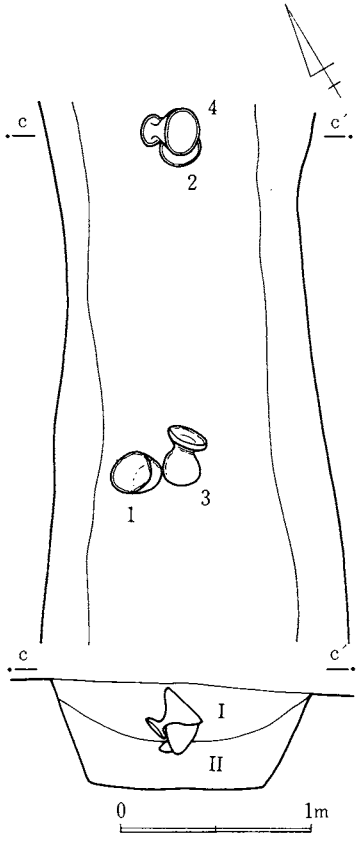


図443 M010号遺構遺物出土状況図

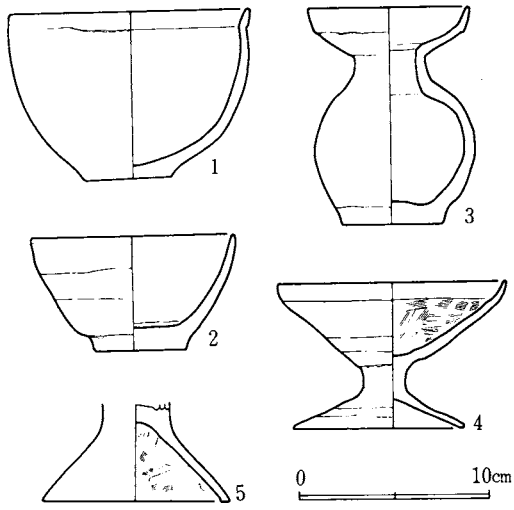


図444 M010号遺構出土遺物実測図

る。高坏形土器は4、5で、いずれもハケ目調整される。脚部の裾、坏部の体部は大きく開く。5は脚部の破片である。

2．M011号遺構（図445、図版101－3）

公道の下に遺構が広がるため、調査は約2分の1に終った。M010に近接し、ほぼ規模も同様である。

遺構　幅0.65m、深さ0.2mを計る周溝が四角に廻る遺構と思われる。M010が北西部分が接続していないのに対し、接続している状況が認められる。溝によって区画される内部には落ち込み等は検出できなかった。また遺物の出土もない。

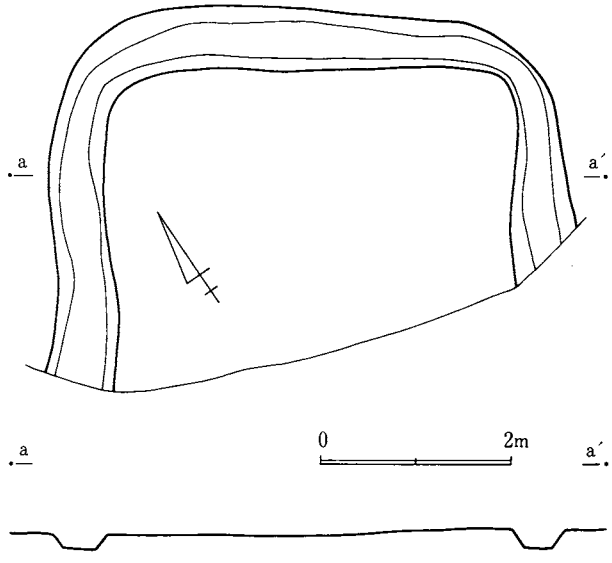


図445 M011号遺構実測図

第3章　ま　　と　　め

第1節　印手式をめぐる後期弥生式土器の様相

1．はじめに

印手式（印旛、手賀沼系式）土器については、千葉県文化財センター「研究紀要3」に所収されているところであるが[註1]、その問題点については以前に私見を述べたことがあり[註2]ここではくわしく触れることは差し控えたい。印手式研究において重要なことは、型式としての内容、すなわち器種、時期、分布の実態を究明することであることが現在の課題といえよう。最近さかんに論じられている、発生論[註3]とも合わせ、そうした印手式の時間的な位置づけが早急に検証されなければならない。権現後遺跡では、印手式と久が原、弥生町式および五領式が出土しており、互いの共伴関係からそれぞれ時期的な性格づけを示唆できる資料を得ている。さらに、土器の使用痕（煮沸痕）や出土位置、破損度、及び器種構成上のバランスから、機能的な性格についても予察し得る資料を得ている。

2．時期について

(1)　土器の分類（図446、447、表114）

分類の第一歩は器種の認定からはじまるといえる。ところが印手式については器種の区分が曖昧であった点が指摘できる。器種の認定は、本質的には機能に即したものでなければならず、そうした意味では機能的性格について記述した後に器種区分を行うべきであろう。しかし、今回は対象となる印手式が量的に少なく、データ的にも補足しなければならない点などがあるため従来のように、形状、製作技法に基づく類型区分にとどめざるを得ないが、それらの時期的な推移に関して記述していきたいと思う。

ところで、甕形土器（以下甕と略す）で問題となるのは、縄文が施文されない平底の甕（K－1、K－2）である（図446）。一般的には久が原式、ないしは弥生町式とされているが、久が原式の甕は本来、台付甕が主体である。しかし、房総地方では脚台部を構成することがないものが多く[註4]、権現後遺跡出土のものも、これに相当する。一方、北関東地方の後期弥生土器では平底が一般的であり、その系譜を持つ印手式の典型的な甕（附加条縄文を施すもの）も同様であり、特に底部が木葉痕のものはそうであろう。平底の甕が久が原、弥生町式土器文化の中での地域的現象であるので、あるいは北関東地方の系譜をもつ印手式の内的所産であるのか、今のところ明確ではないが、ここでは一応当地域で時期的に限定された一つの土器様式の現象として提示しておくにとどめたい。したがって、以下の分類では個々に具体的な型式名を冠さ

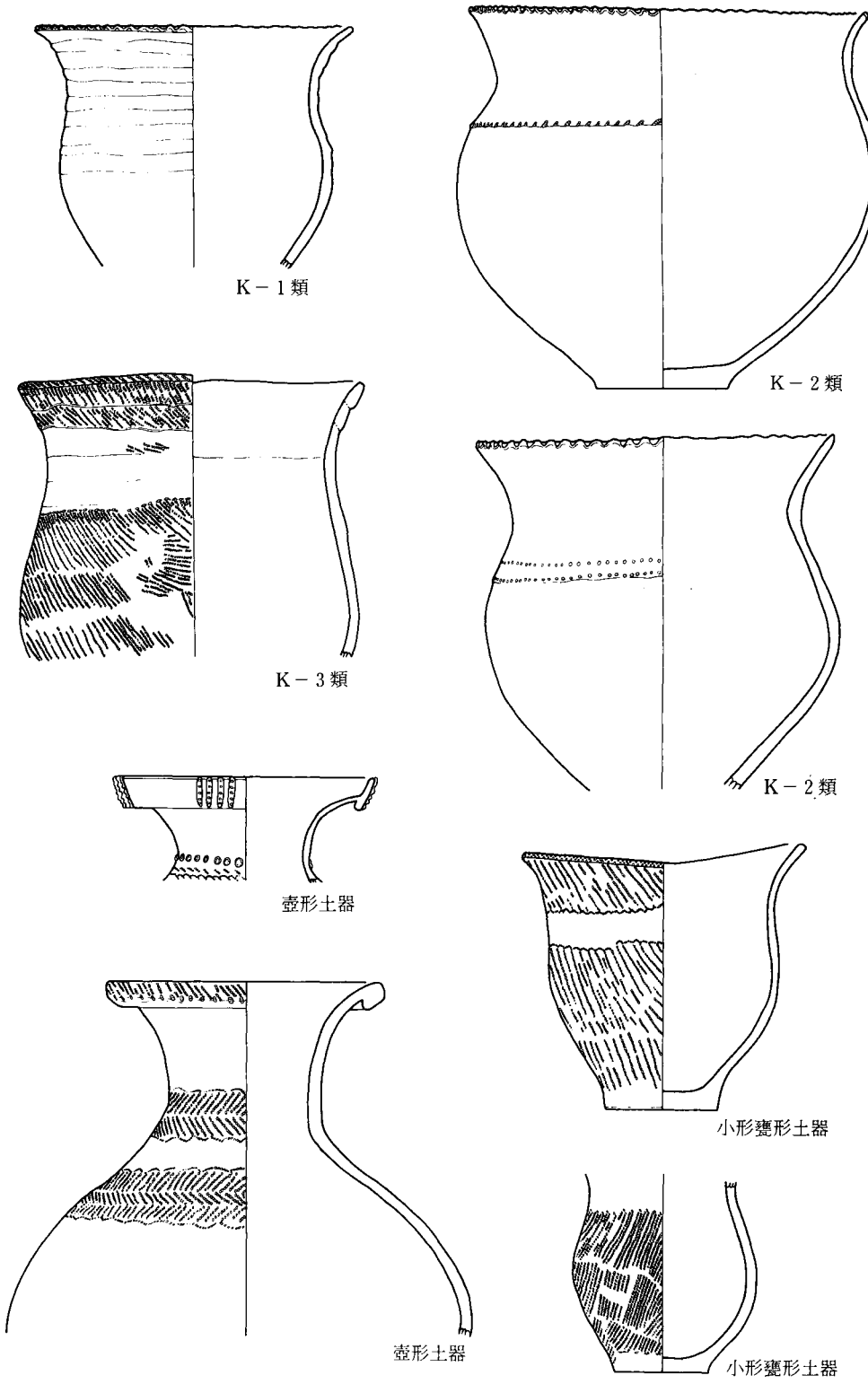
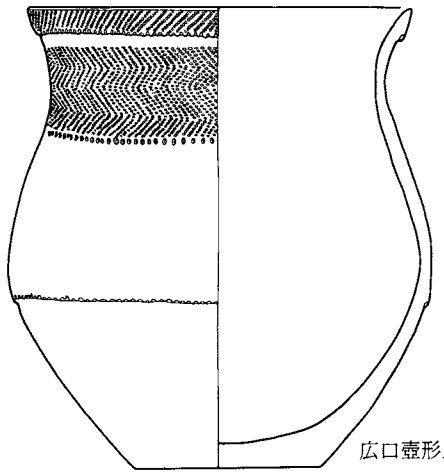


図446 後期弥生式土器の様相(1)



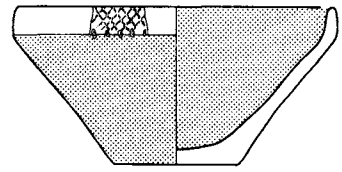


図447 後期弥生式土器の様相(2)

ず、系譜に基づいた製作技法によって、それぞれ甕形土器Ⅰ類（K－1）、II類（K－2）等と便宜的に呼称しておきたい。

① 甕形土器Ⅰ類（K－1）

頸部及び胴部に輪積痕を残す。口縁部は単口縁。また輪積部分に刻目、刺突文を有するものもある。平底木葉痕のものもある（D115－4）。系譜は久が原式。ただし平底木葉痕は北関東後期弥生土器に主体的で完形品は無い。

② 甕形土器II類（K－2）

形状、製作技法、系譜的には、K－1類と同一であるが輪積痕を消滅させたものをII類としておく。ただし、胴部の形状は球体に近いものと肩張りのものがある。

③ 甕形土器III類（K－3）

胴下半部に多条文、ないしは附加条縄文を施してあるもので一部をヘラで消すものもある。輪積痕は残るものと、残らないものがある。口縁部は複合口縁が多い。底部は木葉痕。系譜は久が原式と北関東後期弥生土器。いわゆる印手式である。

④ 小形甕形土器（H）

本遺跡ではD115で比較的遺存度が高い。口縁部、胴部に多条文ないし附加条縄文を施す。縄文の系譜は北関東地方の中、後期弥生土器で、形状は久が原式の系譜も考えられる。

⑤ 壺形土器（T）

複合口縁で斜縄文及び羽状縄文が口縁及び頸部に施文されている。棒状浮文や円形浮文を有するものもある。完形品は無い。頸部はくびれ球体（やや下ぶくれ）の胴部を呈する。赤彩品もある。編年的には久が原式となっている。

⑥ 広口壺形土器（HT）

表114　弥生土器の共伴関係

群	遺構番号	弥生土器								五領式	備考
		甕			小形甕	壺	広口壺	鉢	その他		
		K－1	K－2	K－3							
I群	D027		○						高坏(赤彩)	○	
	D029	○	○				○	○			五領混入
	D030		○			○	○	○			
	D036			○							和泉混入
	D037			○							
II・III群	D003			○							
	D004			○							A、B号
	D006			○							
	D009					○					
	D054			○							
	D070			○							
	D075					○		○			
	D080	○	○								
	D138			○							
	D162		○			○					
IV群A	D098		○			○		○			五領混入
	D109	○				○					K－1は混入
	D115	○	○		○			○			五領完形混入
	D117		○					○(破片)			
IV群B	D118			○		○(破片)					
	D120								無頸壺(赤彩)		
	D121				○	○(破片)		○(破片)			
	D122			○							
	D124		○			○(破片)					
	D126		○			○(破片)		○			
	D129	○	○	○		○(破片)			高坏(破片)		
	D140		○						甑？		
	D151			○(長岡式)							五領混入
	D155		○								
	D175		○								
	D183			○						○	

※遺存度の良い床面近くの土器のみ記入。出土量が少ない住居跡は省略。

権現後遺跡では完形品が2点出土している。複合口縁で胴部には羽状縄文が施され、胴下半部に輪積が一条残り、刻目が施される。器面はヘラナデされている。久が原式もしくは弥生町式と言われているものである。

⑦　鉢形土器

口縁部は複合口縁部及びそれの疑似化したもの。S字状結節文や羽状縄文を施す。赤彩品が多い。久が原式もしくは弥生町式の範疇である。

⑧　高坏形土器

唯一例だが完形品が出土している。大きく八の字に開く坏部と頸部に凸帯がめぐらされ刻目を有する赤彩品で久が原式と言われているものである。

ここで、上記の各類についての時期的な背景を追求する必要がある。そのためには一括遺物として、互いに共伴した頻度を調べればよい。その結果は表114のとおりである。

(2) 土器の共伴関係

表からは次の点が理解できる。

① K－1とK－2、K－2とK－3は伴うことはあるが、K－1とK－3は伴わない。

② 壺（T）は完形品がないため定かでないが、概してK－1、K－2に伴う。広口壺（HT）や鉢（H）も同様と思われる。

③ 五領式の共伴は2例であるが、K－2とK－3に伴っている。

④ 鉢（H）は、第IV群に多い。

甕については、大まかにK－1→K－2→K－3の変化が考えられ、印手式の典型とされている壺（T）や広口壺（HT）、鉢（H）に伴うと見られる。五領式との関係は、共伴例が少ないため定かでないが、K－2、K－3を五領期にかなり近づけて考えておかなければならないかも知れない。

鉢が弥生時代第IV群に集中しているのは、時期的な偏在性と言うものではなく、土器出土量及び器種構成が豊富な弥生時代第IV群の特性、すなわち、集落としての規模が弥生時代第I群～III群よりまさっていたからと考えておきたい。

3．久が原式・弥生町式の区分について

久が原式と弥生町式の区分については古くから杉原荘介、菊地義次[註5]の見解があり、現在でもそうした先学の分析による考え方が支配的である。最近では、柿沼修平が土宇遺跡出土弥生土器について、漸移的変化を認めつつ、甕形土器を中心にI～IV類の細分を行なっている[註6]。そして、I類をI期、II類をII期、III、IV類をIII期とし、I、II期を久が原式、III期を弥生町式としている。この柿沼の分類は、量的に豊富な甕形土器を製作技法に基づいて論じられており相互の共伴関係から土宇遺跡における弥生土器の変化を捉えている。その成果を援用して権現後遺跡出土の弥生土器について一瞥すれば、以下のとおりの併行関係を指摘できよう。

権現後遺跡		土宇遺跡（柿沼編年）
D080－2（甕－I）	→	I期（久が原式）
D115－3（甕－II）	→	II期（久が原式）
D029－2（甕－II）	→	III期（弥生町式）
D030－4（壺）	→	II～III期（久が原式～弥生町式）
D009－1（壺）	→	I～II期（久が原式）
D029－1（広口壺）	→	I～III期（久が原～弥生町式）
D098－1（鉢）	→	III期（弥生町式）

本遺跡においては、先に行った共伴関係の調査からK－1→K－2→K－3の変化が考えられ、壺、広口壺、鉢はそれぞれK－1、K－2に伴うと考えることができ、こうしてみると柿沼の編年もほぼ一致し、本遺跡のK－1については久が原式、K－2については弥生町式とすることが可能である。しかし、壺、広口壺、鉢については明確ではない。したがって、ここでは久が原、弥生町式と便宜的に呼んでおく。なお、柿沼も指摘しているように、久が原式と弥生町式の型式的な区分は従来から不明瞭であり、言い変えれば久が原式の系譜はそのまま弥生町式に継続的に連なっていることを示唆している。また、両者の分布、地域性もほぼ一致しており、最近では型式的な統一を計ろうとする向きもある[註7]。また、様式的な捉え方をするならば、久が原式、弥生町式は湾岸地域を中心として斉一的な製作法（輪積成形、羽状縄文、S字状結節文）が定着した一連の土器文化と言える。今後は型式的な細分とともに、それらの統合についても考えていくべきであろうと考えられる。

4．前野町式について

従来の編年観では、弥生町式は後期後半期に位置づけられ、その後、五領式との間に「前野町式」の存在が考えられているところである[註8]。しかしながら、前野町式については型式名として疑問視する向きも強く、弥生終末期の様相は不明瞭となっている。権現後遺跡では、久が原、弥生町式の流れは、そのまま系統的に五領期へ展開している。印手式もほぼ弥生町式に伴って五領期に至って消滅する。こうした点は、弥生時代第IV群A・Bにおける弥生土器と五領式の混在、及び共伴関係から検証できる。

結論を言えば、前野町式の型式的概念は五領式に包括されていると考えたい。細かな論究については後日稿を改めたいが、その理由の第1は、いわゆる小形精製土器群の確立が前野町式として報告されている多くの遺跡において見い出せる点である。第2には、久が原、弥生町式の系譜は前野町式に限らず五領式に至っても見い出すことができ、久が原、弥生町式の残映を1つの指標としている感がある。前野町式については、その「基準概念」がきわめて不明瞭である点がある。以上のことから、前野町式は五領式の範疇として、その型式内の細分の要素として捉えておくべきである。ただし、弥生時代から古墳時代への推移の中で、土器の型式区分を時代区分と一致されなければならないとすれば、問題は複雑となってくる。すなわち、前野町式を五領式の範疇として、その型式内の細分の要素として捉えるならば、前野町式は古墳時代の土器という意味づけがなされることになる。この点に関しては、いわゆる発生期古墳との関連において検討される必要があり、古墳の出現時期と土師器とは何かという概念の徹底を行わなければならないであろう。

5．機能について（表115）

印手式と久が原式、弥生町式を比べると、第1に器種構成の差が明確に把えられる。印手式がK－3の甕形土器に限定されるとすれば、それは型式としてきわめて稀有な例である。しかし、K－3はこの場合あくまで類型的区分であり、甕形土器である。人によってはそれを「広口壺形土器」とするかも知れないが、それは曖昧な区分である。したがって、本質的な機能に基づいて器種を認定しているわけではない。久が原式、弥生町式、また五領式についても同様である。ところが、これらの場合には形状からはもちろんのこと装飾的文様、製作技法等からも比較的容易に機能を推測することが出来る。久が原式、弥生町式の赤彩が施される壺形土器は煮沸用ではないことは明らかであり、煮沸機能を持つのは黒煤の付着した粗製の台付甕であろう。

ここでは土器の機能を推察すべく印手式、久が原式、弥生町式、五領式の遺存度の比較的良い土器について、表115のとおりの調査を試みた。破片数を調べることは、土器の破損具合が器種によってどのように相異しているか、また、廃棄の状況を推測することにある。しかし、破片数が多ければ多いほど粗製で廃棄の頻度が高かったというわけでは無い。土器がこわれていく状況などは、いかなる場合でも想定できるし、廃棄品であっても完形品はある。したがって、竪穴住居跡内という空間の中においてどのような位置から出土しているか、あるいは、接合状況等も重ね合わせて総合的に分析することが必要であろう。今回はとりあえず、炉内に主な破片が出土した土器を抽出してある。使用痕とは、「煮沸」（という言葉も曖昧であるが）の際の2次的に火を受けた痕跡のことで、五領式土器の台付甕の状況を基準としている。台付甕は今回提示したものは、いずれも胴下半部に黒煤が付着したり器面が赤色に変化したりしている。それが他の時期のどのような土器に認められるか調べてみた。

共伴器種を記入してあるのは土器の機能を器種構成上のバランスの中で考えようとするものである。すなわち五領式土器の台付甕が煮沸機能として認めうるのは、個体の形状や使用痕の他に、精製の高坏や器台、壺等が伴うことによって、より強調されるからである。

表から以下の点が推察される。

① K－1～K－3においては、破片数の格差がいちじるしく（完形品か分散品か）使用時のまま遺棄されたか、意図的に廃棄（投棄）されたものであったと考えたい。この状況は五領式の台付甕に一致している、すなわち、K－1～K－3も台付甕と同様な機能、即ち煮沸用であったと思われる。

② 炉内出土土器は破片数も少なく比較的遺存度が良好であり、後の時代の廃棄（投棄）品とは考えにくい。

③ 炉内出土品の中に広口壺（久が原、弥生町式）もあり、同型式のものは、使用痕も認められる。すなわち煮沸機能として推察できる。同時に精製の壺や鉢を伴い器種構成上のバランスを保っている（D029、030）。

表115　炉および炉周辺出土土器使用痕一覧

器種	遺構・遺物番号	復元破片数	出土位置	使用痕*	共伴器種**
K－1	D115－4	12	炉外	受熱	小形甕、鉢
K－2	D029－2	8	炉外	ス ス	広口壺、鉢、台付甕
	－3	完形	炉内	受熱	広口壺、鉢、台付甕
	D080－1	13	炉内	ス ス	K－1
K－3	D003－1	19	炉内	受熱	
	D054－1	完形	炉外	ス ス	K－3
	D118－1	32	炉外	ス ス	K－3
	D151－2	4	炉外	ス ス	K－3
	D183－12	16	炉外	受熱、ス ス	五領台付甕、甕
（長岡式）	D151－1	完形	炉外	ス ス	K－3
広口壺	D029－1	19	炉内	受熱	K－2、壺
	D030－1	3	炉外	ス ス	K－2、壺、鉢
壺	－4	完形	炉外	受熱	K－2、広口壺、鉢
五領平甕	D143－1	完形	炉外	受熱	台付甕
	D152－1	完形	炉外	受熱	坩、台付甕
五領台付甕	D115－1	47	炉外	受熱	弥生住居への混入品
	－2	3	炉外	受熱	弥生住居への混入品
	D143－2	7	炉外	ス ス	平甕
	－3	5	炉外	受熱	平甕
	D149－1	1	炉外	受熱	鉢、器台
	D170－1	2	炉内	受熱	器台、鉢

＊この場合煮沸時の受熱痕として，主に胴部下半に見られる黒煤と赤色変化
＊＊同一器種，細片は省略

④　K－1～K－3は、いずれも煮沸機能と考えるが、K－3（印手式）については単独出土が多いことが特徴的である。それが基本的なものであるならば、K－3は煮沸機能とともに他器種の機能を「併用」していたとも考えられる。

⑤　五領式の甕には赤彩を施したものがあり、台付甕を伴う。主に貯蔵用として使われたと考えたい。

註

1　深沢克友「房総地方弥生後期文化の一様相」『千葉県文化財センター研究紀要』3　昭和53年

2　加藤修司「印手式予察」『研究連絡誌』4　千葉県文化財センター　昭和58年

3　a鈴木正博「十王台式理解のために(3)」『常総台地』10　昭和54年

　b小林清隆「生成期の印手式」『研究連絡誌』2　千葉県文化財センター　昭和58年

4　柿沼修平「弥生時代の遺構遺物について」『土宇』昭和54年

5　a杉原荘介「武蔵弥生町出土の弥生式土器について」『考古学』11－7　昭和15年

　b菊池義次他『安房勝山田子台遺跡』昭和29年

6　註4の文献に同じ

7　小出輝雄「久が原、弥生町期について」『法政考古学』4　昭和55年

8　神沢勇一「弥生文化の発展と地域性－関東－」『日本の考古学』III　昭和41年

第2節　弥生時代集落の変遷

1．Ⅰ群について（表116）

第Ⅰ群の住居群内においてD027、D029、D030号遺構の共通性と特異性が認められる。D027・D029・D030号遺構については、構造、出土土器について共通性が強く、それは他の15軒と極立った対照を見せている。3軒はいずれも長軸が同一方向で、東西一列に並立し、主柱穴を有し、床面は硬い（壁溝はD027号遺構のみ存在する）。土器の出土状況を見ると、この3軒だけが特に多く（表114）、一括遺物と捉えられるセットも床面から出土している。D027号遺構の土器については、2の高坏は疑問であるが他は4の五領式土器も含め一括性が高い。D029号遺構の土器については、相互の類似性が強く、特に広口壺は先の編年観でいえば、久が原、弥生町式の完形品として本遺跡内でこの2軒だけに出土したものである。したがって、D029、D030号遺構については、特に時期的にも機能的にも密接した2軒であったと考えられる。さらに、注目すべきはD027、D029、D030号遺構に限って焼失住居と思われる点である。D030号遺構の11の鉢は明らかにその際に受けたと思われる2次的な火を受けており、火災時に廃棄されたものと考えられよう。焼失住居に多量の土器を見い出せる点は、住居機能の消失と、土器機能の消失が同時になされたことを予想させて興味深い。3軒はいずれも設営期間が近接し、

表116　弥生時代第Ⅰ群の土器出土状況　　●＝30点

遺構番号	柱　穴	炭化物	土器片出土量	備　　考
D001			●●	五領混入
D026			●	
D027	○	○	●●●●●●●●	五領混入
D028			●●●●	五領、国分混入
D029	○	○	●●●●●●●●●●	五領混入
D030	○	○	●●●●●●●●●●●	
D031			●●	五領混入
D033			●	
D036			●◖	和泉混入
D037			●	
D038			◖	
D039			●	
D040			●●●	国分混入
D053	○		◖	国分混入
D069			なし	
D094			●	
D185	○		●	
D186	○		●	
D187	○		●	

五領期の件出状況から判断すると弥生時代終末期ごろ同時に廃棄された可能性が強い。

さて、問題はこの3軒と16軒の住居跡との関連である。住居の形状、主軸等には相互に類似するものがあるが土器の内容についてみると大きな違いが見い出せる。それは、印手式の存在である。前記3軒については、久が原、弥生町式の系譜をもつ南関東的な土器が主体であったが、D036、D037、D185～D187号遺構には、量こそ少ないが内容的には印手式の割合が多い。特にD037号遺構には遺存度の良い印手式が出土している。印手式と久が原、弥生町式については、先の分類に基づけば印手式が相対的に新出的であるが、D027、D029、D030号遺構も五領期直前の所産であり、そうした意味では第Ⅰ群ではいずれの住居跡も弥生町期から終末期頃に比定され、相互の大きな時期差はなかったと考えたい。第Ⅰ群の19軒がすべて同時に営まれていたとは断定できないが、相互に近い時期であったのだろう。

問題は、土器の出土量のちがいや柱穴等の有無にみられる住居の構造的な差であり、集落内での階層的分化による現象、あるいは住居の機能分化の方向を示唆しているのかも知れない。なお、それに関連して久が原、弥生町式と印手式が使い分けられていたとすれば、土器の機能用途を考える上でも興味深いと言えよう。

2．Ⅰ群の廃棄活動について

Ⅰ群では、極端に時期の異なる土器が混在している住居跡がある。最も顕著なのは、D040号遺構である。覆土は自然堆積のようではあるが、黒褐色土層の単一覆土を呈しており、人為的な埋設土とも考えられる。そこから、かなりレベル差をもって、国分期の土器が出土しているが、いかなる状態でそれが混入したのか理解に苦しむ。弥生時代の住居跡が国分期に至るまで窪地であったとは想定しにくく、国分期の遺構が重複しているわけでも無い。

五領式土器の混入については、D027号遺構では、混入と言うより「共伴」しており、各住居に散在する五領期の破片についても、後の時代の人為的な廃棄とは考えにくい。ここでは、第Ⅰ群が全体として五領期に近い時期にあったという性格づけをしておくにとどめたい。

3．第Ⅱ群・Ⅲ群について（表117）

第Ⅱ群とⅢ群の間には、後世の時代の大規模な山砂採集跡等が見られ、本来的には両者は一つにまとまった分布を示していたものと思われる。第Ⅱ群、Ⅲ群は出土土器の内容から判断すると、第Ⅰ群とほぼ同時期に形成されていたと考えられるが、総体として印手式の出土量が多い。しかし、第Ⅰ群同様にD075、D080、D162号遺構といった比較的大型で柱穴を有する住居では、久が原、弥生町式が主体となっており、D075、D162号遺構では土器の出土量も多い。これに対し、D003、D006、D073号遺構といった小形で柱穴の無い住居跡からは、相変わらず印手式が出土している。ただし、第Ⅱ・Ⅲ群においては、D004、D054、D070号遺構といった

構造的にしっかりした住居にも印手式が主体的な場合が多く、その点では第Ⅰ群とは異なった様相を呈している。特にD004、D054号遺構は出土土器も豊富であり、印手式を中心とした生活様式が確立されていたと言って良い。

印手式は先の分類では、久が原、弥生町式と比べて新出的であり、D075、D080、D162号遺構等の後で、D004、D054号遺構等がつくられていたと考えられるが、第Ⅰ群で見られたように、久が原、弥生町式に対し劣勢、従属的とは言いきれない要素が多い。なお、第Ⅰ群内で検出された方形周溝墓からは、印手式が出土しており注目されるが伴うものかどうかは不明であり、墓とするには若干説得力に欠ける。五領期に至ると遺跡北西側に、集落から離れて方形周溝墓が出現しており、それに属するものと考えておきたい。なお、第Ⅱ・Ⅲ群で注目すべきことは、第Ⅰ群とは異なり五領式の混入が認められない点である。それを第Ⅰ群との時期的な差としては捉えづらいが、D162、D180号遺構にK－1、K－2が出土していることを考えると、年代的に若干上ると言えようか。

表117　弥生時代第Ⅱ・Ⅲ群の土器出土状況　　●＝30点

遺構番号	柱　穴	炭化物	土器片出土量	備　　考
D002	○	○	●	Ⅱ群
D003			●●●●	Ⅱ群
D004	○		●●●●●●●●●	A、B号　Ⅱ群
D006			●●●	Ⅱ群
D009	○		●●●◖	Ⅱ群
D054	○		●●●	Ⅱ群
D070	○		●	Ⅱ群
D073			◖	Ⅱ群
D074			◖	Ⅱ群
D075	○		●●●●◖	Ⅱ群
D076			●	Ⅱ群
D079			なし	Ⅱ群
D080	○		◖	Ⅱ群
D162	○		●●●●●●●◖	Ⅱ群
D130	○		◖	Ⅲ群
D137	○	○	●	Ⅲ群
D138	○		◖	Ⅲ群

4．第Ⅳ群AとBについて（表118）

第Ⅳ群Aは、五領期の集落第Ⅳ群Bと近接している。両者の間に、時期的な空白が認められないことは、住居跡覆土内での相互の土器の混在状況、及び一括関係（D183）が証明している。すなわち、当地で弥生時代から古墳時代にかけて継続的な集落の展開がなされたことが理

解される。第IV群については、全体的に出土土器は少なく、確実に一括遺物として捉えられるものも多くは無かった。このため各住居跡の時期、及び相互の時期差を明確に示すことはむずかしい。それでも土器の出土状況から考えて、ある程度の時期的な限定を行うと、図236のようになる。先述してきたように、弥生土器については、久が原、弥生町式と印手式が混在しており、第IV群においてもその状況が捉えられている。しかし、D098、D109、D115、D120、D126号遺構については、壺及び鉢といった久が原式、及びK－1、K－2を主体としており(D145号遺構も出土量は少ないが同様である)、印手式の影響は少ない。これに対してD118、D151号遺構をはじめ、D119、D121、D122号遺構については印手式（K－3）を主体としている。両者の住居跡の内容を見ると、興味深いことに、特に久が原式を主体とする住居跡は構造的に優位に立っており、印手式については柱穴をもたない小形の住居跡がいくつか見られている。このような現象は第Ⅰ群と共通している点に注目しておきたい。

久が原式（壺、鉢）と印手式の併行関係については、先述してきたとおり、印手式（K－3）と五領式の共伴例及びK－1～K－3への推移事実を考えると、印手式が新出的である。それから考えると、第IV群については、はじめにD120、D126、D145号遺構及びその西側にD098、D109、D115、D117号遺構がつくられ、その後、印手式を主体とした小形の住居、D118、D119、D121、D122、D151号遺構等がつくられたと想定できる。

第IV群Aは、やがて第IV群B（五領期）への変遷をたどっていく。ところで、五領期の住居跡は本遺跡西側地域にさらに分布していることは既に確認されている[註1]。注目すべきはそこに主体部及び副葬品を有する方形周溝墓が検出されていることであり、五領期においては共同体内の階層分化が顕在化し、初期古墳発生の内的要因が既に整っていたと思われる。そうした観点から五領期の集落及び出土土器を見ると、D096、D108号遺構に見られる住居の大形化、入口施設、方向の変化、及び小形手づくね土器のセットが注目されてくる。さらに、出土土器全体を調べても、弥生土器に見られた型式差（印手式と久が原式、弥生町式）は消滅し、きわめて斉一的な様相を呈している。時期的には、いわゆる小形精製土器群[註2]が確立して、それを中心として各土器の器種構成も安定してきた（台付甕、壺、高坏、鉢）段階と考えたい。小形器台は定型化（精製、穿孔、裾部の安定等）し、台付甕の法量もほぼ均一化している。ただし、小形器台とセットになるべき坩の出土は少なく[註3]、両者がセット化して生じたであろう初期古墳の祭祀性は、集落内には見い出せない。したがって、本遺跡の五領期住居跡群については、方形周溝墓の被葬者を中心として展開した古墳時代初期の所産と考えておきたい。

共同体内に明らかな階層的分化を引きおこした内的要因は第IV群に存在していると言って良い。もちろん第Ⅰ～Ⅲ群の状況も考えなければならないが、五領期の土器が第IV群A内の一部の住居跡に積極的に廃棄されている状況は、第IV群Aの住居跡が廃絶した段階で新たな集団が移住してきたと想定するよりも、第IV群Aから継続的に展開した五領期第IV群B集落の人々の

表118　弥生時代第IV群A、Bの土器出土状況

遺構番号	柱　穴	炭化物	土　器　出　土　量	備　考
D098	○			五領
D101	○		●	五領
D103	○		●●●●●●●	五領、鬼高
D109	○	○	●	
D110			●	
D111	○			
D113				
D114			●●	五領
D115	○		●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●	五領完形
D116	○		●	五領
D117	○	○	●	
D118			●	
D119			●●	
D120	○		●	
D121	○	○	●●●	
D122	○		●●●●●●	
D123	○		●	
D124	○		●●	
D125	○		●	
D126	○		●●●	
D128				
D129	○		●	
D140	○		●	
D141			●	五領
D145	○		●●●●●●●	
D146	○		●●	
D147			●●	
D151	○		●	五領
D154	○		●	
D155	○		●●●●	
D156	○		●	五領
D157	○		●	
D159				
D161	○			五領
D168			●	

遺構番号	柱　穴	炭化物	土　器　出　土　量	備　考
D179	○			五領
D181				五領
D095	○		●●●	IV－B
D096	○	○	●●●	IV－B
D097			●	IV－B
D100	○		●	IV－B
D102			●	貯蔵穴　IVB
D104			●●●	IV－B
D105	○		●	IV－B
D107				IV－B
D108	○		●	貯蔵穴　IV－B
D134	○		●●●	IV－B
D142	○		●	IV－B
D143	○			IV－B
D144	○		●	IV－B
D148	○		●●●●●	IV－B
D149			●	IV－B
D150			●	IV－B
D152				IV－B
D153			●	IV－B
D158			●	貯蔵穴　IV－B
D167	○		●●●	IV－B
D169	○		●	IV－B
D170		○	●	IV－B
D171			●	IV－B
D173			●	IV－B
D174	○	○	●	IV－B
D175	○	○		IV－B
D178				IV－B
D180	○			IV－B
D182	○			IV－B
D183				IV－B
D184				IV－B
D191	○			IV－B

日常的な活動と思われる。廃棄活動の状況が五領期集落に近く、大形の竪穴であるD115号遺構に集中しているのもそのためであろう。日常生活の継続のうちに五領期をむかえると、第IV群A内の集落内に生じていた階層的分化が古墳文化の伝達によって顕在し、主体部を有する方形周構墓を生じさせている。そうした過程における第IV群の内的要因、すなわち階層的分化が具体的にどのようなものであったのかが問題である。

五領期の住居群第IV群Bを見ると、興味深い点が見い出せる。それは、D108、D169号遺構のような大形住居跡と、D183、D184、D169号遺構のような柱穴のない小形住居跡の存在である。D183号遺構には五領式とともに、印手式が伴っている。住居規模の格差は実は第IV群Aにも通じていたがそこでは出土土器が、久が原、弥生町式と印手式と言う型式的偏在性が一部で伴っていた。印手式が出土するのは主に集落内において小規模な住居跡であり、かつ継続的に用いられ、久が原、弥生町式と明確なセット化を見せないまま五領期に至ったと思われる。第IV群BのD183号遺構のような小形の住居跡出土の印手式は、そうした状況を示したものであろう。したがって五領期における大形住居と小形の住居の存在は、基本的には、第IV群Aにおいて、久が原、弥生町式と、印手式の所有をめぐる集落内の格差がそのまま引きつがれていたと考えたい。

註

1　昭和56年度に調査を実施してある。

2　岩崎卓也「古式土師器考」『考古学雑誌』48—3　昭和38年

3　この現象は各地で知られており、私見を述べたこともある。加藤修司「小型器台、小型坩の出現をめぐる諸問題」『物資文化』29　昭和53年

第IV部　古　墳　時　代

第1章　古墳時代の概観

古墳時代の遺構は、前期、中期、後期に比定できる竪穴住居跡のみである。前期の住居群については弥生時代後期における住居群と密接な関係を有しているため、既に第III部において報告しているので、ここでは中期、後期に比定できる住居群について報告したい。

まず、中期に比定できる住居跡は5軒であるが、平面形等それぞれ個々に特徴を有している。5軒の内4軒が石製模造品の工房跡で、多量の剝片等を出土している。

中期の住居跡は第Ⅰ群と第II群からなっている。第Ⅰ群は2軒、第II群は3軒から構成され、集落立地に著しい違いを有して所在している。また、第II群の3軒はいずれも工房跡であるのに対し、第Ⅰ群は住居跡と工房跡からなっている。さらに第Ⅰ群内には弥生時代後期の住居跡を切断した土壙も所在しているなど、その内容の違いも生じている。

第Ⅰ群は新川をのぞむ台地東側縁辺地域に分布し、第II群は新川から入る須久茂谷津をのぞむ台地南縁辺地域に分布している。ただし現況は土砂崩れ等によるものであり、旧時は須久茂谷津まで突出した台地であったと考えられ、当然この部分に当該期の遺構が所在していた可能性があることを付け加えておかなければならない。

古墳時代後期に比定できる住居跡は10軒で、第Ⅰ群と第II群からなっている。第Ⅰ群は2軒、第II群は8軒から構成され、集落立地は中期の場合と同様に著しい違いを有して所在している。

第Ⅰ群は新川から入る須久茂谷津をのぞむ台北東南縁辺地域に分布している。第II群は同じ須久茂谷津をのぞむ台地縁辺地域に分布しているが、第Ⅰ群の西方約200m離れており、この間には須久茂谷津に開析される小支谷が入り込んでいる。第II群は場合によって、さらに2グループに細分できる可能性を有しているが、ここでは、一応一つの群として報告したい。

第2章　中期の遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

古墳時代中期に比定できる遺構は、第Ⅰ群2軒、第II群3軒で構成される。検出した合計5軒の住居跡をもって集落全体がすべて検出できたわけではない。と言うのは、第Ⅰ群については検出した地域が地区界に近く、南北に通る公道の東側にのびる台地に遺構群が所在する可能性を有しているからである。また、第II群についても台地が土砂崩れ等によって現況を呈しているが、旧時の地形は須久茂谷津に突出した台地であったと推定でき、この部分に当該期の遺構が所在した可能性が充分考えられる。

検出した２つの群は、いずれも石製模造品の工房跡が所在しており、一般の集落とは性格を異にしていると考えられる。特にII群においては３軒ともに工房跡であり、その有機的な関係が注目できる。と同時に、生産遺跡としての実態を考えるうえでも貴重な資料になり得ると思われる。

第２節　第Ｉ群の遺構と遺物

古墳時代中期の第Ｉ群は竪穴住居跡２軒、ピット１基で構成される群で、Ｘ・Ｙ－４の地域において検出した。

住居跡は隣接して位置しており、遺構の呈する長軸の指向方位もほぼ同じである。ピットは弥生時代後期のD029を切断した土壙である。D035は工房跡で原石をはじめ多量の剝片等を出土している。D034は竪穴住居跡である（図448）。

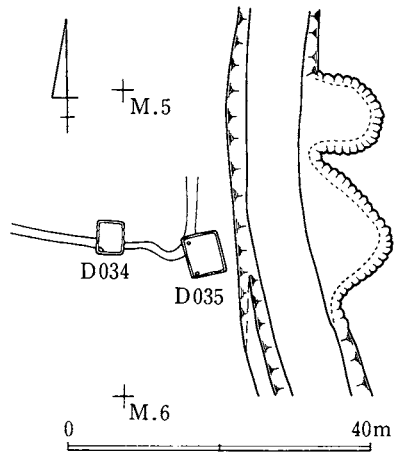


図448 古墳時代中期第Ｉ群遺構分布状況図

１．D034号遺構（図449～451、図版102－１、２、104）

地区界に近く位置し、D035と群を構成する遺構である。遺構の南側は溝によって攪乱を受けているものの、攪乱が浅いため、ほぼ規模等は把握できる。

遺構　北壁3.2m、東壁推定2.97mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は緩やかな傾斜を呈し0.3m掘り込んで床面に達する。床面は南側が攪乱を受けているため明らかでないが、他の部分は比較的堅緻な状況を呈している。住居北側には焼土塊、炭化物を検出できたため焼失したものと考えられる。また、住居東側部分には２か所に焼土化した部分を検出した。南西壁コーナー部分には径0.54m、深さ0.4mの擂鉢状の貯蔵穴を検出した。柱穴に壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近くの床面上にあり、長径0.55m、短径0.38mを計る楕円形を呈し、厚さ0.02mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ｉ層黒色土層、II層焼土層、III層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物はIII層床面上を中心に炉の脇や貯蔵穴内より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、高坏形土器と土製品がある。甕形土器は１～３で、いずれも「く」

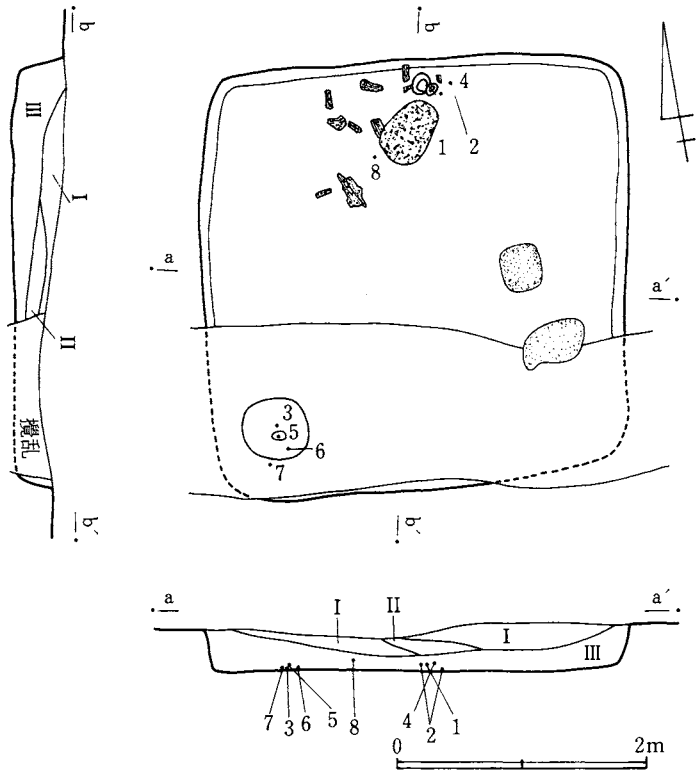


図449 D034号遺構実測図

字状に強く外反する口縁部を呈している。鉢形土器は4、5で短かい口縁が外反する土器である。高坏形土器は6、7でいずれも脚部を欠損し坏部のみである。直線的に大きく開く坏部の形状を呈している。土製品は8の紡錘具である。径5cm、厚さ1.5cmで、中央に径0.7cmの

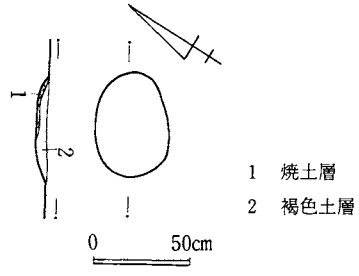


図450 D034号遺構炉跡実測図

D034出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	25.5	15.8	4.5	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	15.4	—	1/3	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)灰褐色	
3	甕	14.8	13.6	4.9	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(内)灰褐色 (外)明褐色	
4	鉢	7.0	13.6	3.5	略完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
5	鉢	6.4	12.6	4.8	略完形	ヘラナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)赤褐色 (外)黒褐色	
6	高坏	—	17.5	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗褐色	
7	高坏	—	15.6	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	黒褐色	

軸孔があく。重さ24.6gである。胎土、焼成は良好である。

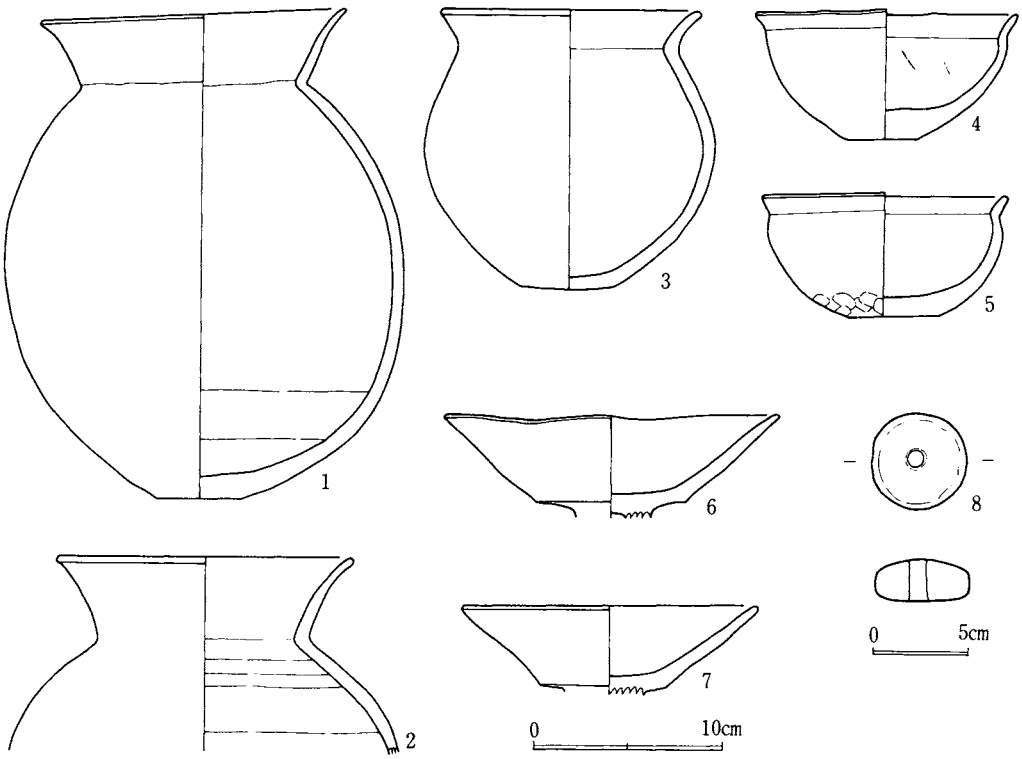


図451 D034号遺構出土遺物実測図

2．D035号遺構（図452～457、図版102－3、103、104）

D034と同様東の地区界に近く位置している遺構で、遺構の北西部分は溝による攪乱を受けている。また、芋穴等による攪乱を遺構東側に受けており、覆土の約23%が相当する。したがって、出土する遺物は本来の一括資料にはなり得ない。

遺構　北壁推定4.8m、東壁5.2mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡で、石製模造品の

D035出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	4.8	2/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	甕	—	12.4	—	2/3	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	高坏	—	17.3	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)暗赤褐色	
4	高坏	—	16.2	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	褐色	
5	高坏	14.7	19.0	14.0	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
6	高坏	14.5	19.6	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
7	高坏	—	—	9.8	脚部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	褐色	
8	高坏	—	22.4	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)黒褐色	
9	高坏	—	19.2	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
10	高坏	—	18.0	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	褐色	

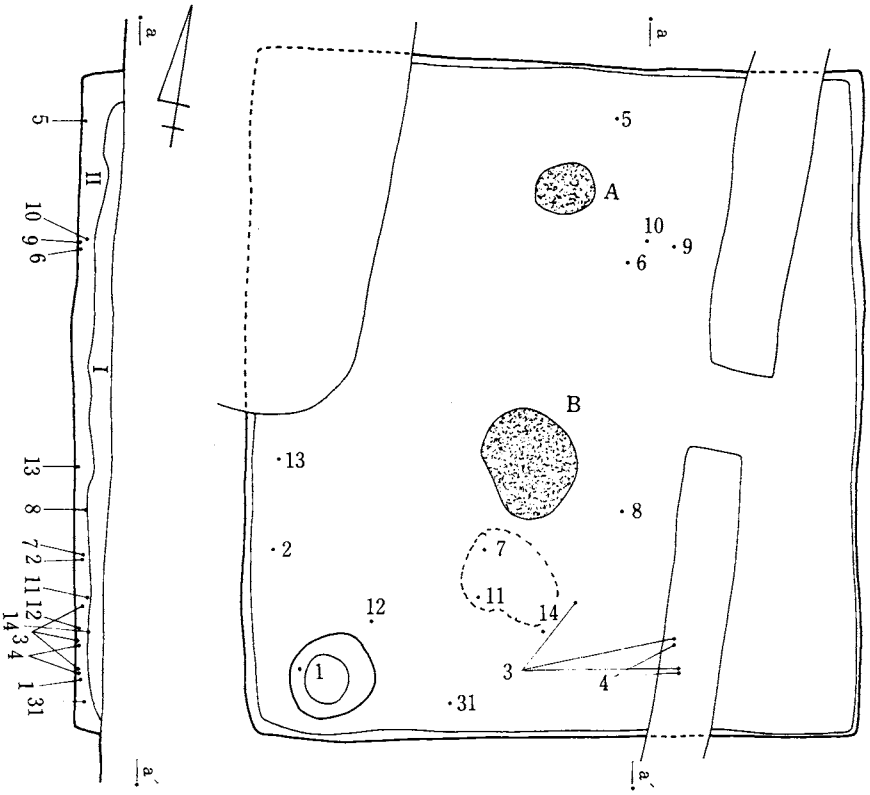


図452 D035号遺構実測図

工房跡でもある。壁は若干の傾斜を呈し0.24m掘り込んでいる。ただし住居は緩斜面に構築されている関係で、東壁側の掘り込みは低い。床面は攪乱を受けているものの堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部分には径0.72m、深さ0.36mの貯蔵穴を検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉 北壁中央部に近くと中央部分に2か所検出した。北壁中央部近くに検出した炉Aは、長

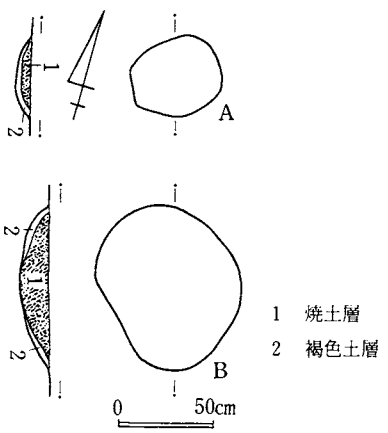


図453 D035号遺構炉跡実測図

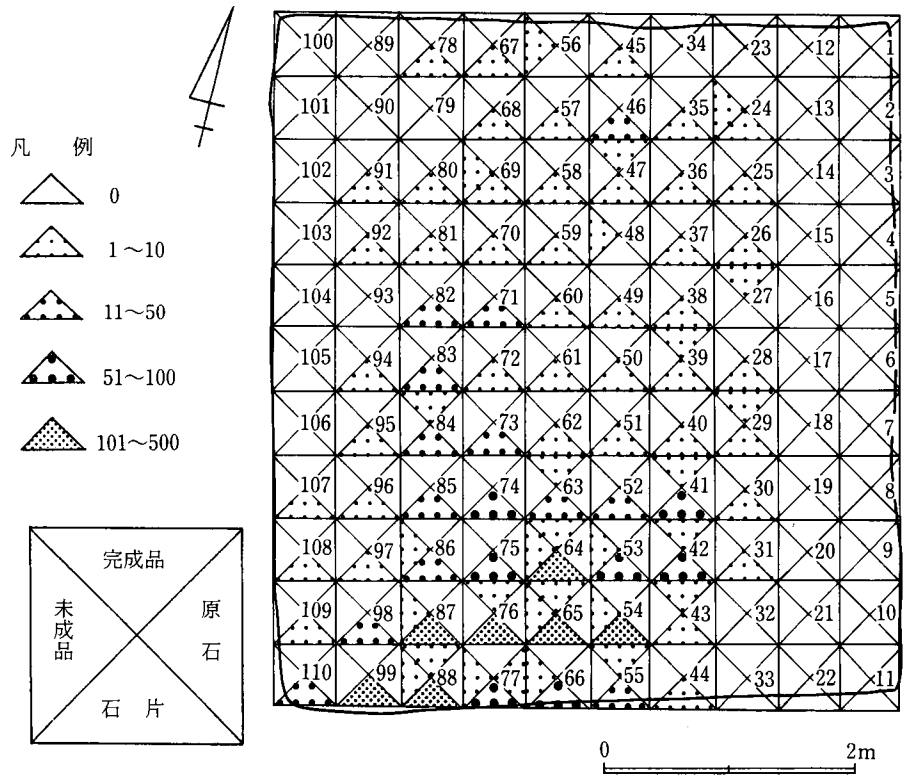


図454　D035号遺構石製遺物平面分布模式図

径0.48m、短径0.4m、深さ0.11mを計る楕円形を呈し、厚さ0.08mの焼土が堆積している。住居中央部分で検出した炉Bは、長径0.85m、短径0.74m、深さ0.16mを計る楕円形を呈し、厚さ0.16mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層が堆積しており、土器はII層床面上を中心に出土している。石製品等は最も多く出土した南西部分を中心に住居中央部に広がりを有して出土している。層位的にはII層が多い。

出土遺物　遺物は、甕、高坏形土器、それに銅製品、石製品などがあり、石製品は剝片を含

D035層位別石製遺物集計

層位	原石	石片	未成品		完成品				合計
			臼玉	その他	臼玉	剝形	勾玉	円板	
I	—	189	—	—	1	—	—	—	190
II	—	1.941	27	—	11	1	—	—	1.980
床	1	6	—	—	—	—	—	—	7
合計	1	2.136	27	—	12	1	—	—	2.177

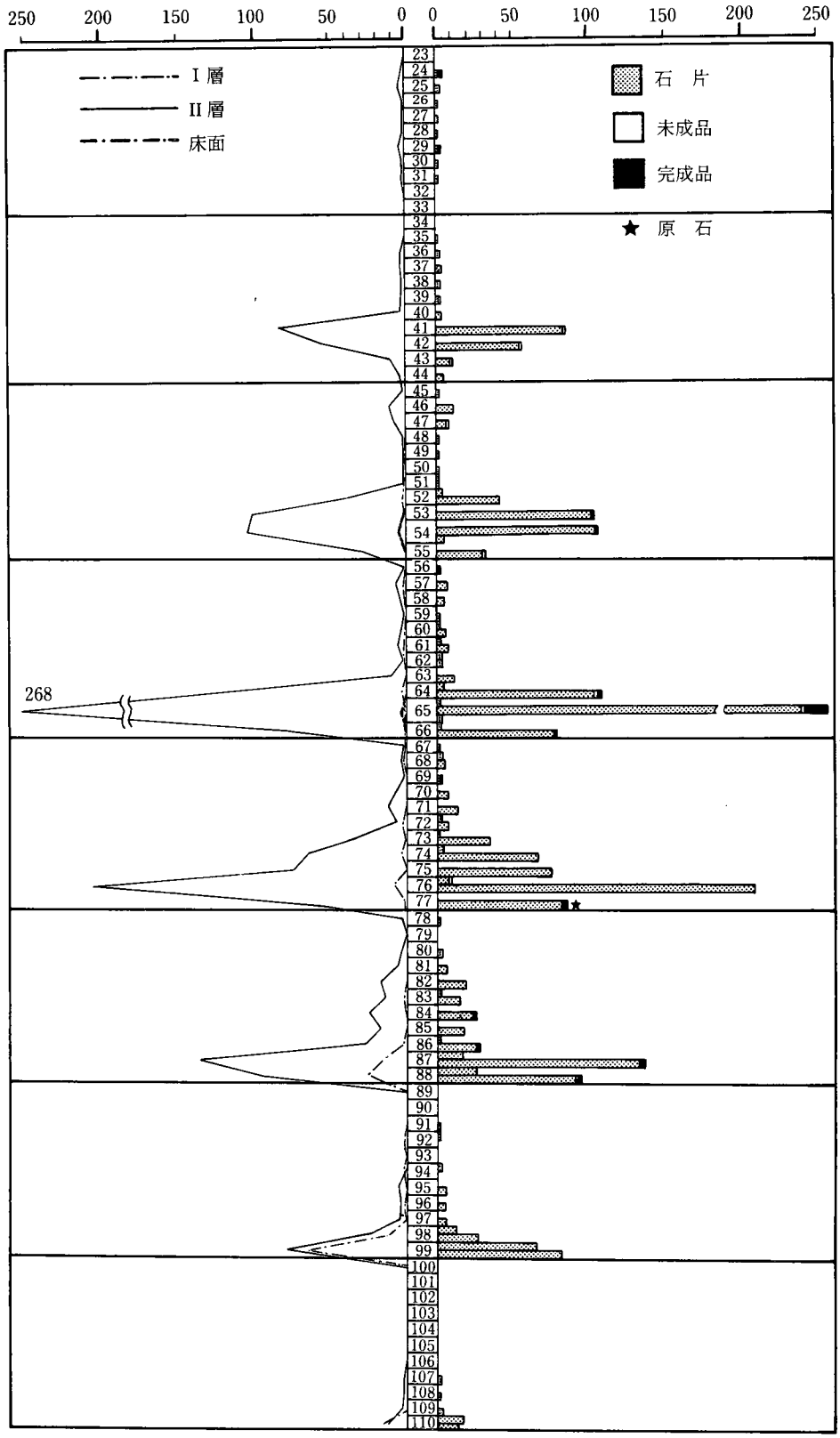


図455 D035号遺構石製遺物層位別分布図

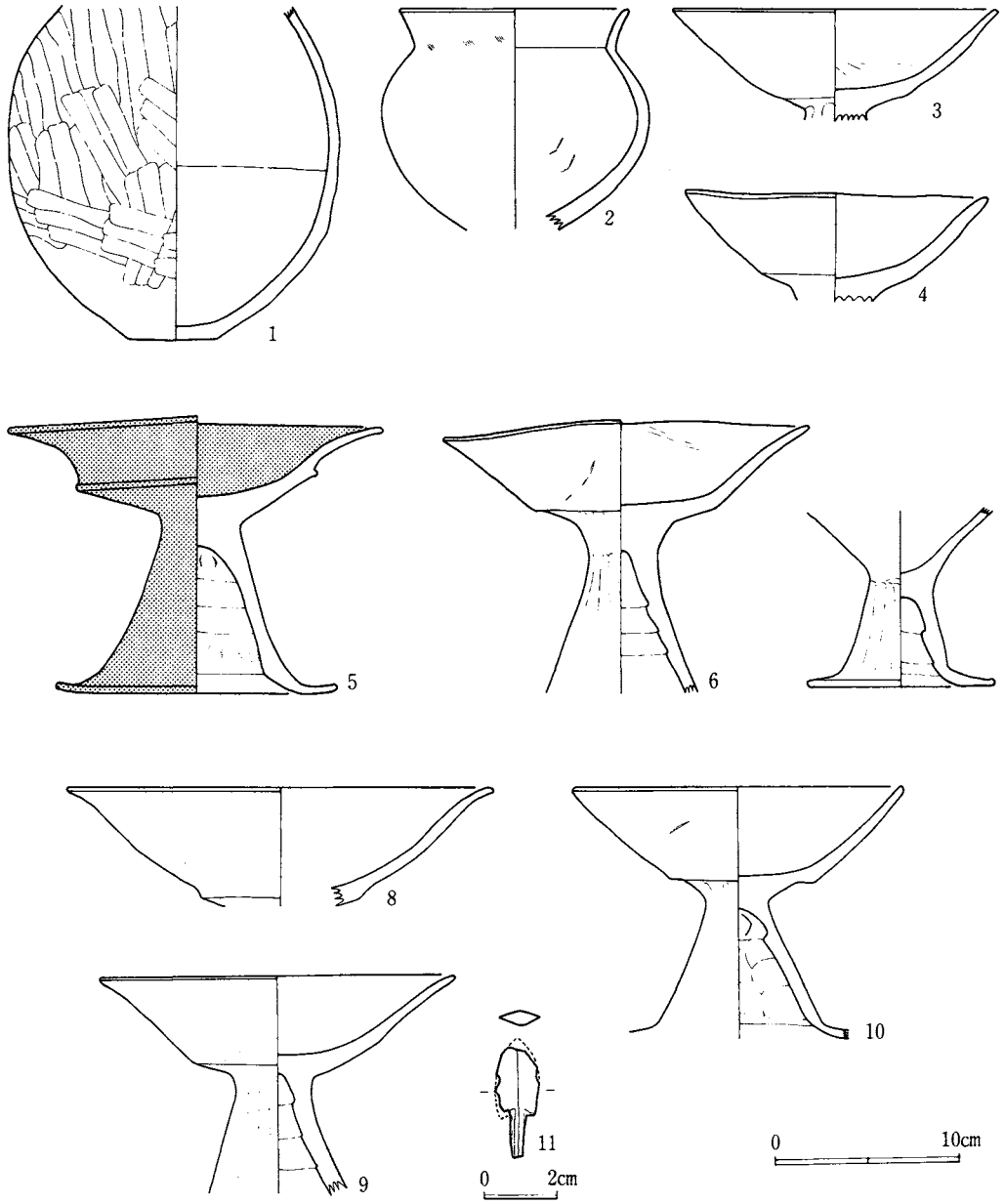


図456 D035号遺構出土遺物実測図(1)

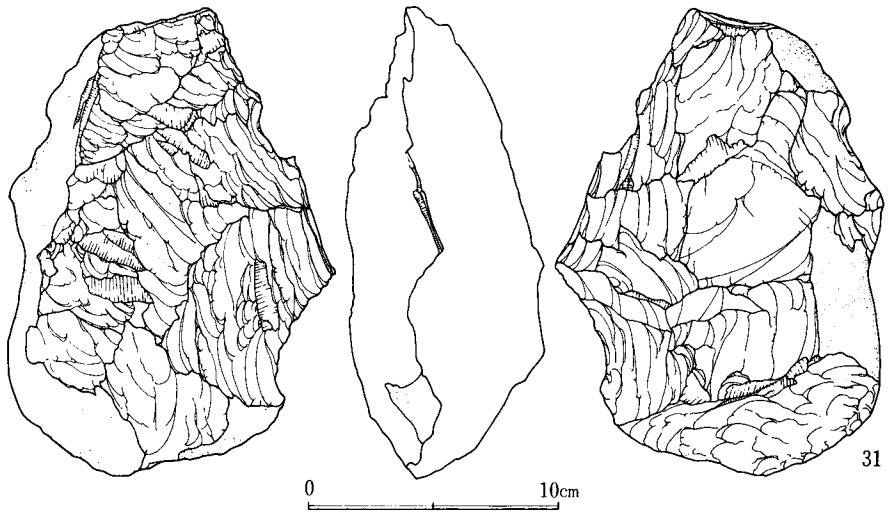


図457 D035号遺構出土遺物実測図(2)

め多量に出土している。甕形土器は1、2で1は口縁部を欠損している。2は口縁部が「く」字状に緩やかに外反している。高坏形土器は3～10で、5は坏部に稜を有し赤彩されている。他は体部が大きく開く坏部を呈している。銅製品は11で、鏃である。石製品は12～31である。12は剣形品、13は有孔円板の未成品、15～24は臼玉、14、25～30は臼玉未成品である。31は成品でなく原石であり、部分的に敲痕が認められる。

第3節　第II群の遺構と遺物

古墳時代中期の第II群は竪穴住居跡3軒で構成される群で、R・S－10・11の地域において検出した。

遺構確認時において滑石剝片を検出していたことから、この地域において石製模造品の工房跡が所在しているのではないかと考えられており、表土層の除去作業については人力によって慎重に実施した。特に表土層がきわめて薄い部分もあり、表土上から遺構の落ち込みが確認できる状況であった。実際の調査においても表土層中より調査を実施した遺構もある。D131では出土遺物が12.338点に達した。

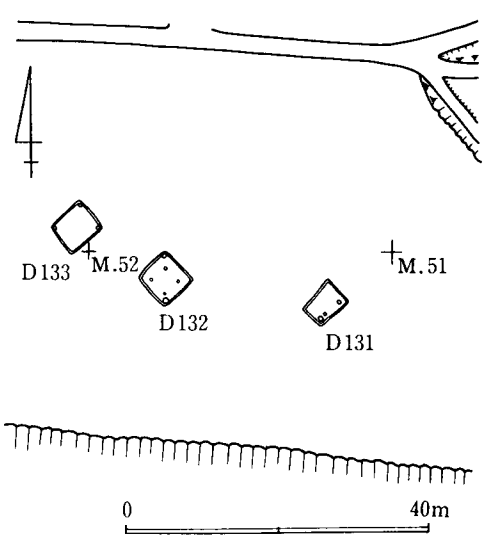


図458 古墳時代中期第II群遺構分布状況図

住居跡は、いずれも石製模造品の工房跡であり、３軒の住居跡はほぼ東西に直線的に配置する分布状況を呈している。平面形は各々特徴を有している。長軸の指向方位はＩ群における状況と同様、一定である（図458）。

１．D131号遺構（図459～465、図版105－１、２、109、110）

II群の住居群内において最も東側に位置している。一部芋穴による攪乱を受けているものの全体の状況は充分把握できる。

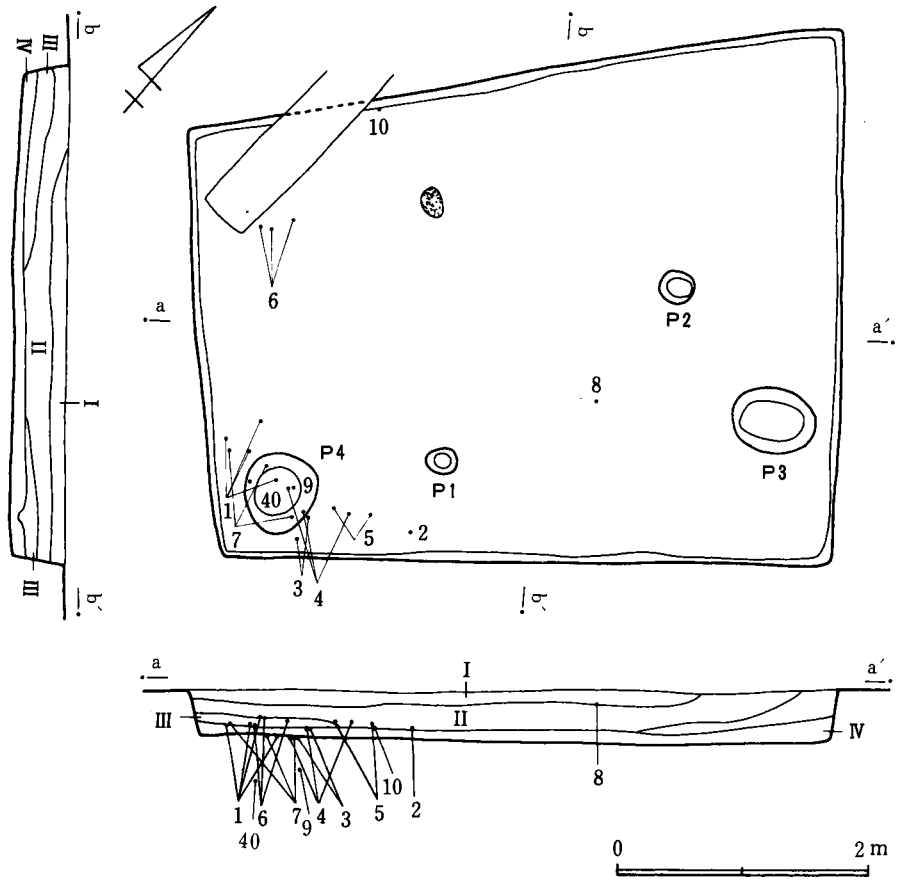


図459 D131号遺構実測図

遺構　北壁5.3m、東壁4.2mで歪を生じる方形の平面形を呈している竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干の傾斜を呈し0.4m掘り込んで床面に達する。床面は軟弱で踏み固められた状況でない。南西壁コーナー部で

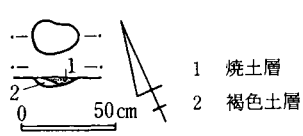


図460 D131号遺構炉跡実測図

径0.58m、深さ0.4mの貯蔵穴P_4を検出した。同規模のピットはP_3で東壁中央部に接して検出した。その他のピットは径0.21m、深さ0.2mの小ピットP_1、P_2を検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く検出したが、炉というにはあまりにも小規模なものである。長径0.25m、短径0.16m、深さ0.05mを計る歪のある楕円形を呈し、厚さ0.04mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層灰褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積

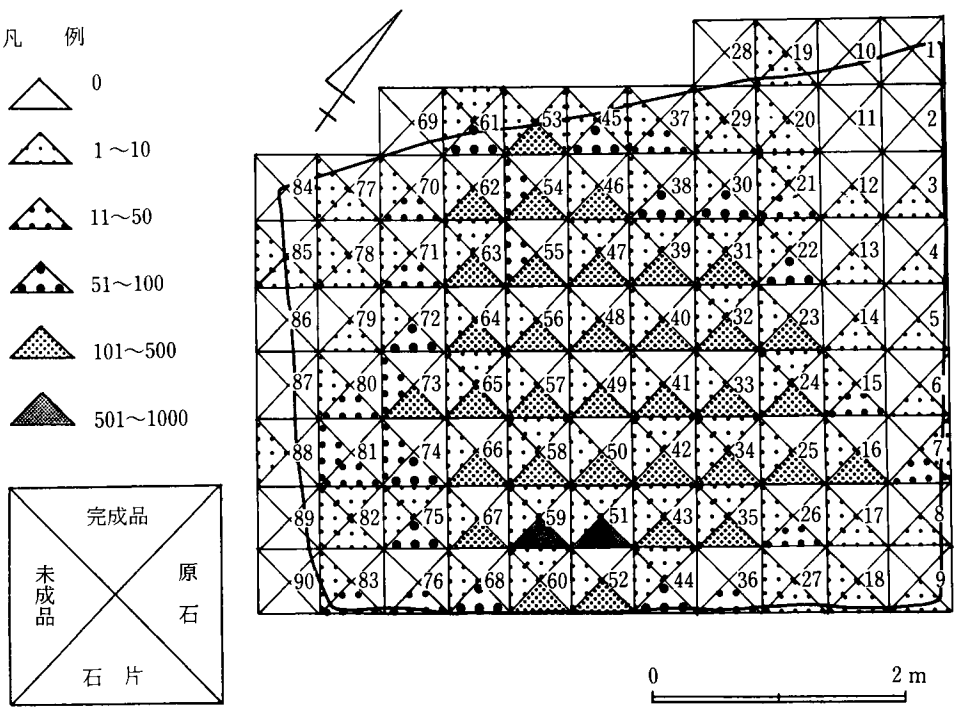


図461　D131号遺構石製遺物平面分布模式図

D131出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坩	15.2	11.8	—	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
2	鉢	8.0	9.6	3.2	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
3	高坏	15.2	16.8	13.2	完形	内外面ヘラ磨き	——	やや堅緻	黒褐色	
4	高坏	—	17.0	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	暗褐色	
5	高坏	—	19.6	—	坏部のみ	ハケ目の上をヘラ磨き	——	堅緻	暗褐色	
6	高坏	—	—	15.0	脚部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	
7	甑	9.2	20.8	2.4	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	

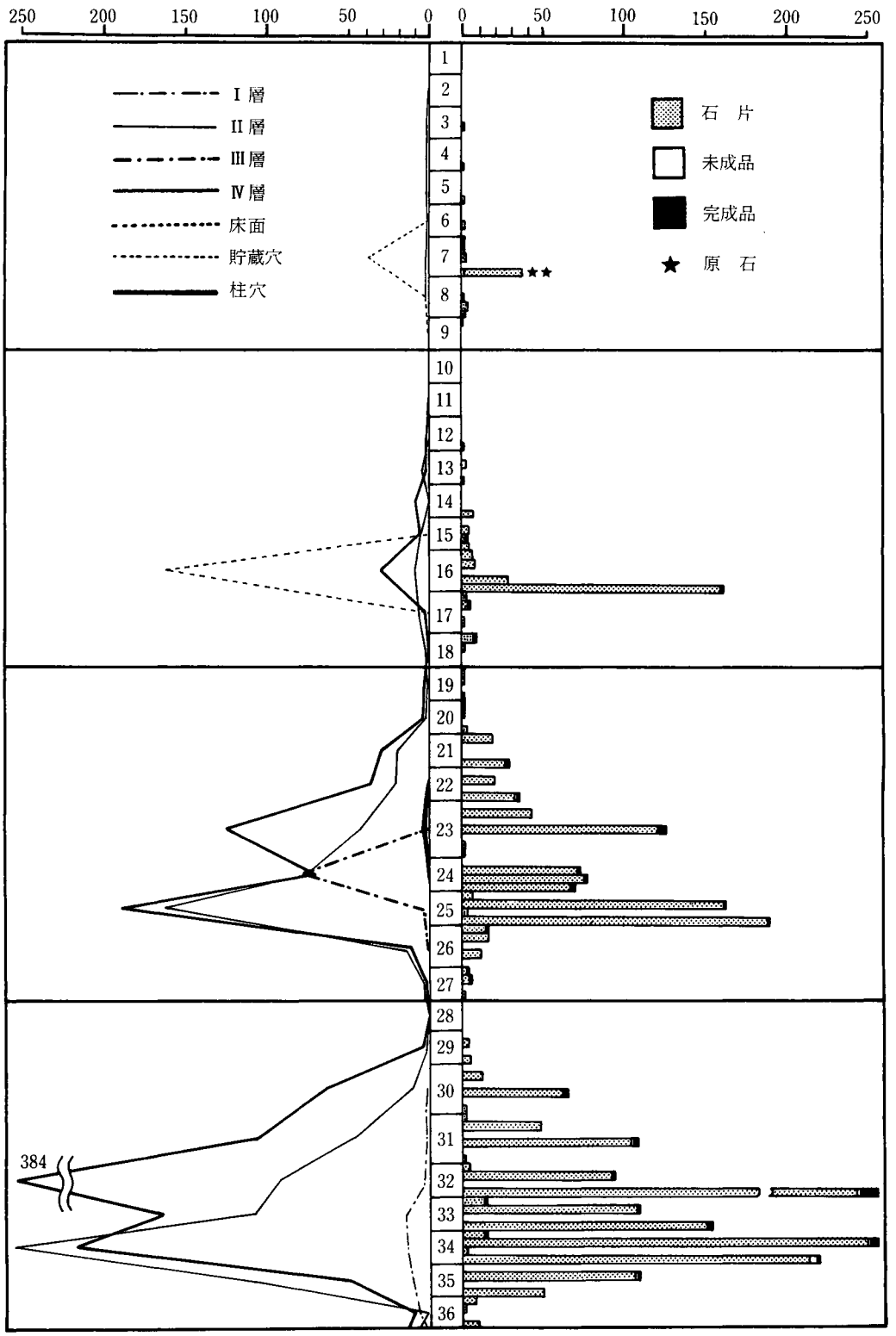


図462 D131号遺構石製遺物層位別分布図(1)

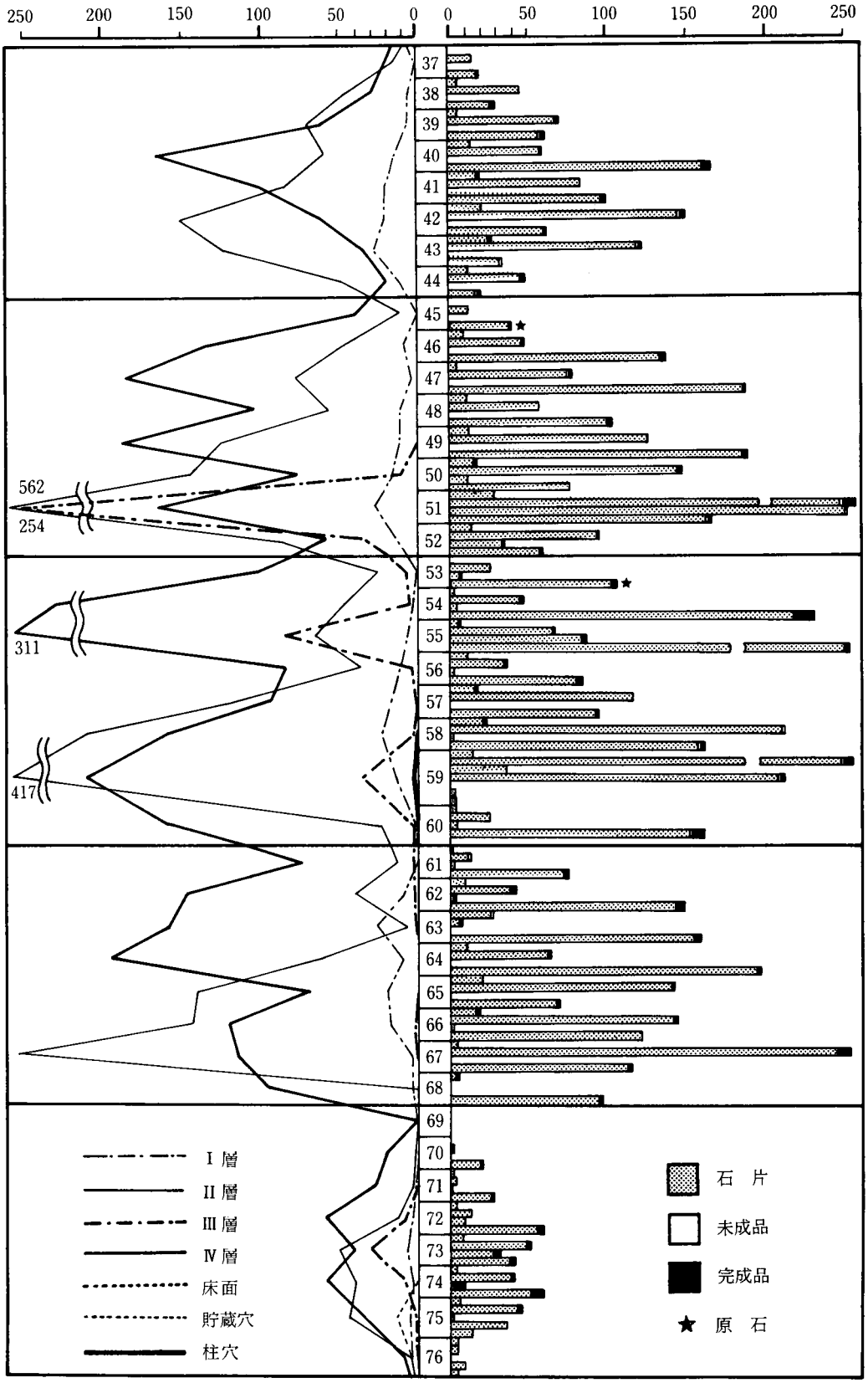


図463 D131号遺構石製遺物層位別分布図(2)

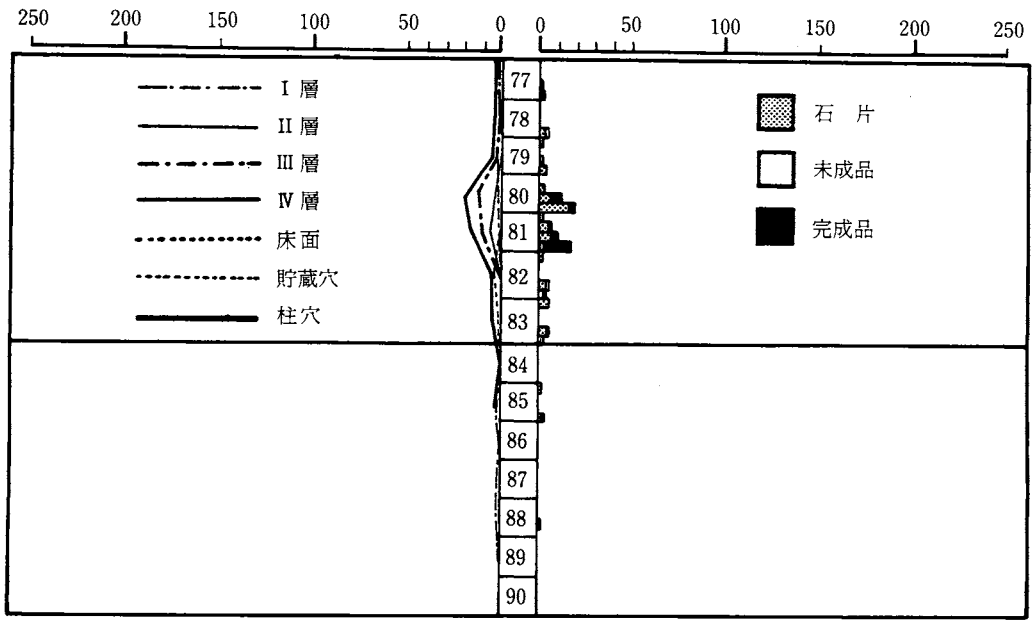


図464 D131号遺構石製遺物層位別分布図(3)

D131層位別石製遺物集計

層位	原石	石片	未成品		完成品				合計
			臼玉	その他	臼玉	剣形	勾玉	円板	
I	—	492	14	—	1	—	—	1	508
II	—	4.441	68	—	13	—	—	—	4.522
III	—	573	33	1	1	—	1	—	609
IV	2	5.483	156	—	18	—	—	—	5.659
貯蔵穴	2	225	3	—	—	1	—	—	231
床	—	7	—	—	—	—	—	—	7
柱穴	—	4	1	—	—	—	—	—	5
合計	4	11.225	275	1	33	1	1	1	11.541

している。土器はP_4の貯蔵穴を中心にIV層床面を中心に出土している。石製品等は南壁中央部を中心に住居中央部に広がりを有して出土している。層位的にはIV層が多い。

出土遺物 遺物は、坩、鉢、高坏、甑形土器と石製器などがある。坩形土器は1で球形の胴部を呈し、口縁部は直線的に大きく開く。鉢形土器は2で口縁が短かく外反する小形の鉢である。高坏形土器は3～6で、坏部は大きく開く形状を呈し、脚部は裾が水平近く開く形状を呈する。甑形土器は7で鉢形土器の底部を穿孔したかのような土器である。石製品は8～45であ

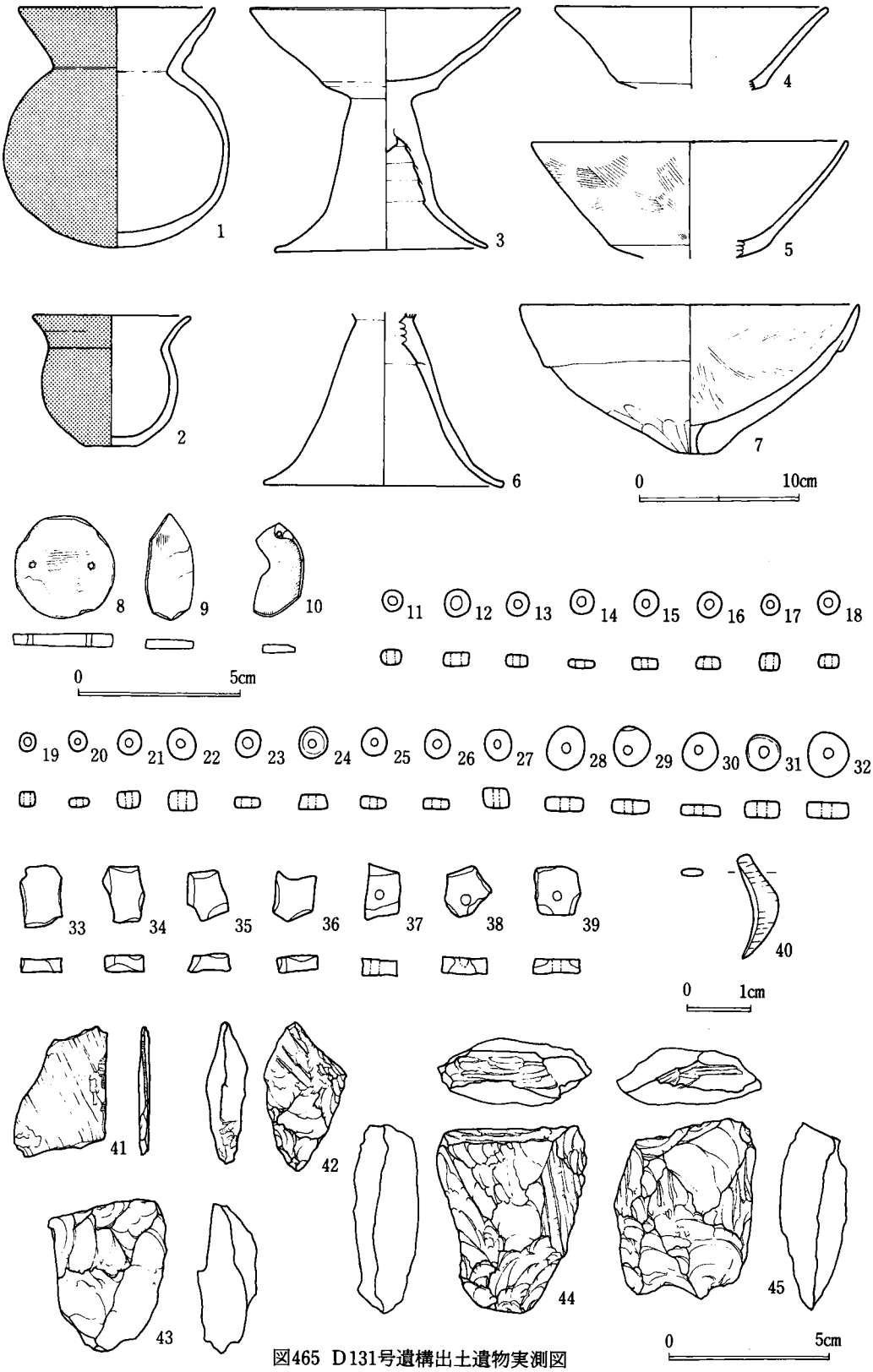


図465 D131号遺構出土遺物実測図

る。8は双孔円板、9は剣形品、10は勾玉、11～32は臼玉、33～39は臼玉未成品、40は勾玉未成、41～45は荒割された剝石で、いずれも滑石である。

2．D132号遺構（図466～480、図版105－3、106、107、110～113）

II群の住居群内において3軒の中央部に位置している。一部芋穴による攪乱を受けているものの全体は充分把握できる。

遺構　北壁5.3m、東壁5.4mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干の傾斜を呈し0.42m掘り込んで床面に達している。床面は全体にほぼ堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部で径0.84m、深さ0.3mを計り、土手状の高まりを周辺に

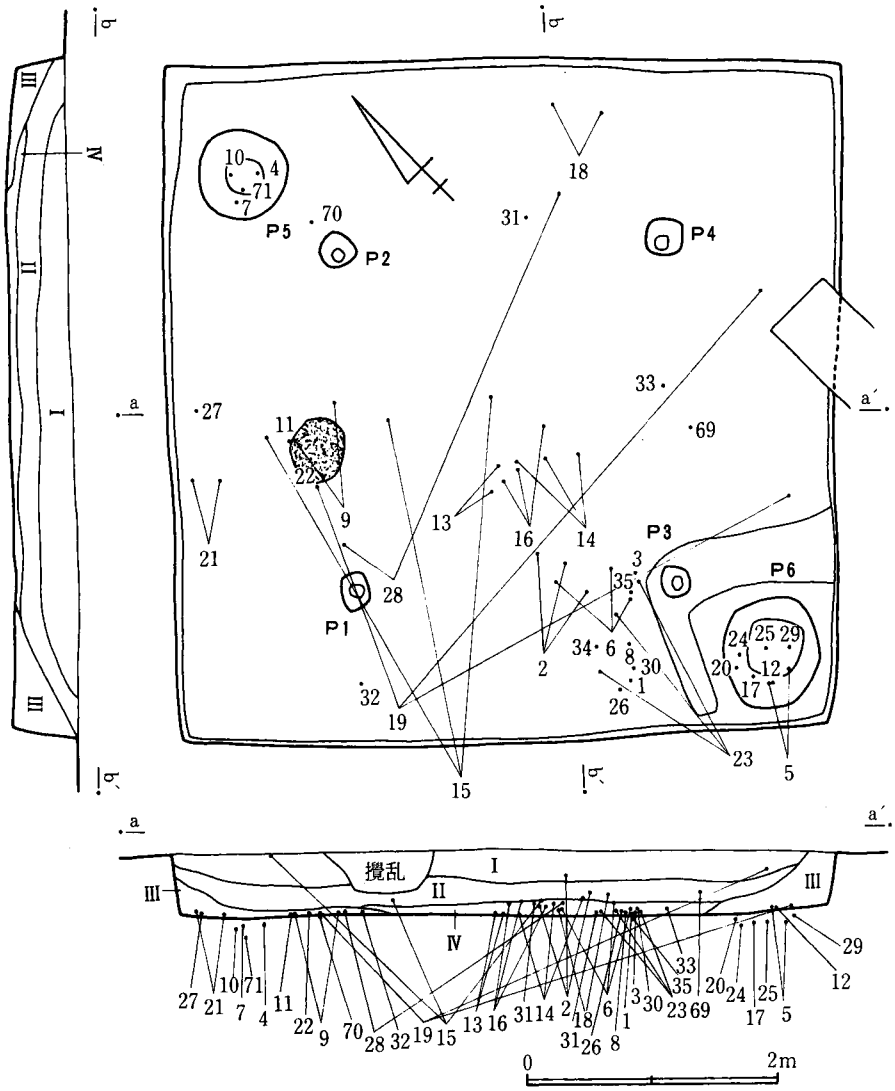


図466　D132号遺構実測図

有する貯蔵穴P_6を検出した。これとほぼ同規模のピットはP_5で北東壁コーナー部にあり、径0.7m、深さ0.4mを計る。柱穴はほぼ対角線上に配置されており、径平均0.3m、深さ0.55mを計るものである。壁溝は検出できなかった。

炉　北壁中央部に近く位置し、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.13mを計る楕円形を呈し、厚さ0.07mの焼土が堆積している。

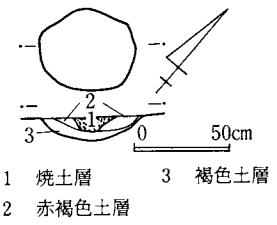


図467　D132号遺構炉跡実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム混入褐色土層、IV層ローム混入黄褐色土層が堆積している。土器は床面上を中心に住居西側に偏して出土している。またP_5、P_6より出土している。石製品等は住居中央部より若干南側に寄った部分を中心に住居東から中央部にかけて出土している。層位的には床面上を中心に出土している。

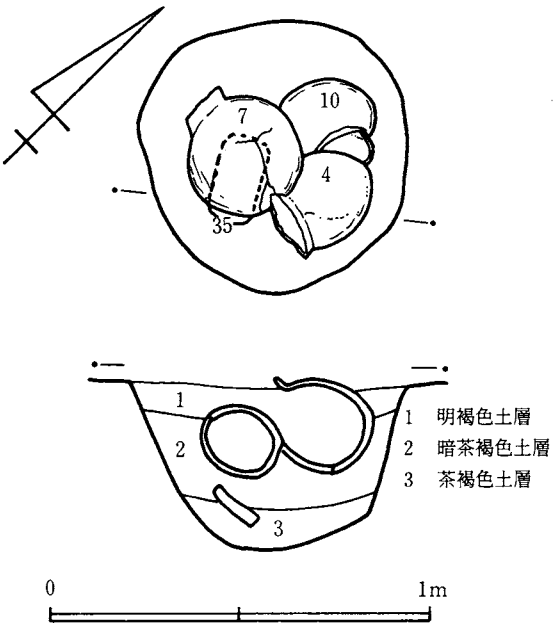


図468　D132号遺構P－5内遺物出土状況図

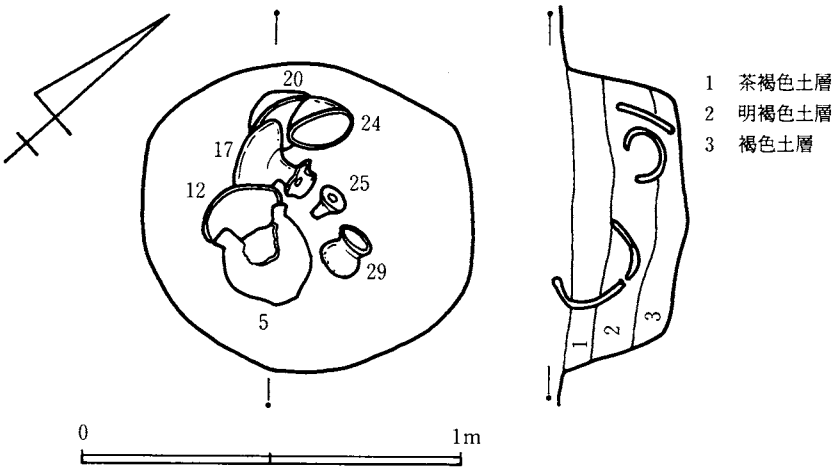


図469　D132号遺構P－6内遺物出土状況図

出土遺物　遺物は、甕、甑、高坏、坩、鉢形土器と石製品がある。土器は完形品の多いことに注目できる。甕形土器は1～11で、いずれも口縁部が「く」字状に外反し、胴部は球形に近

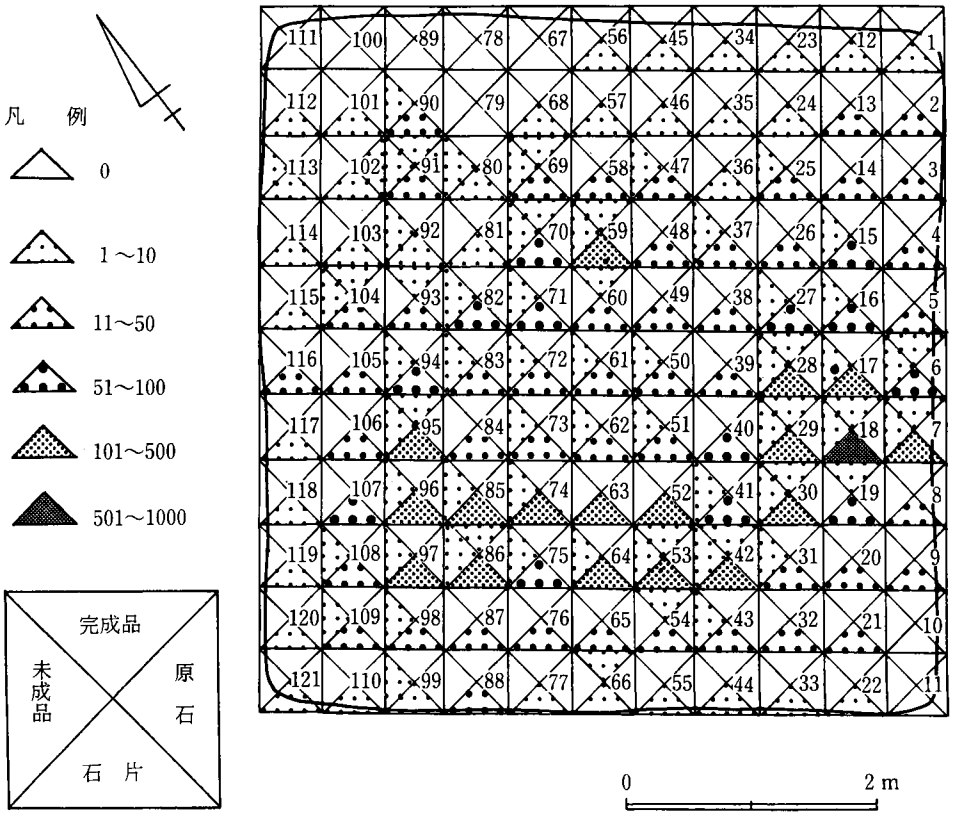


図470　D132号遺構石製遺物平面分布模式図

D132層位別石製遺物集計

層位	原石	石片	未成品		完成品				合計
			臼玉	その他	臼玉	剣形	勾玉	円板	
I	—	292	3	—	—	—	—	—	295
II	—	927	13	—	1	—	—	—	941
III	—	666	9	—	4	1	—	—	680
IV	—	978	15	—	9	—	—	—	1.002
床	—	3.036	56	—	13	—	1	—	3.106
炉	—	3	2	—	1	—	—	—	6
貯蔵穴	1	6	—	—	—	—	—	—	7
合計	1	5.908	98	—	28	1	1	—	6.037

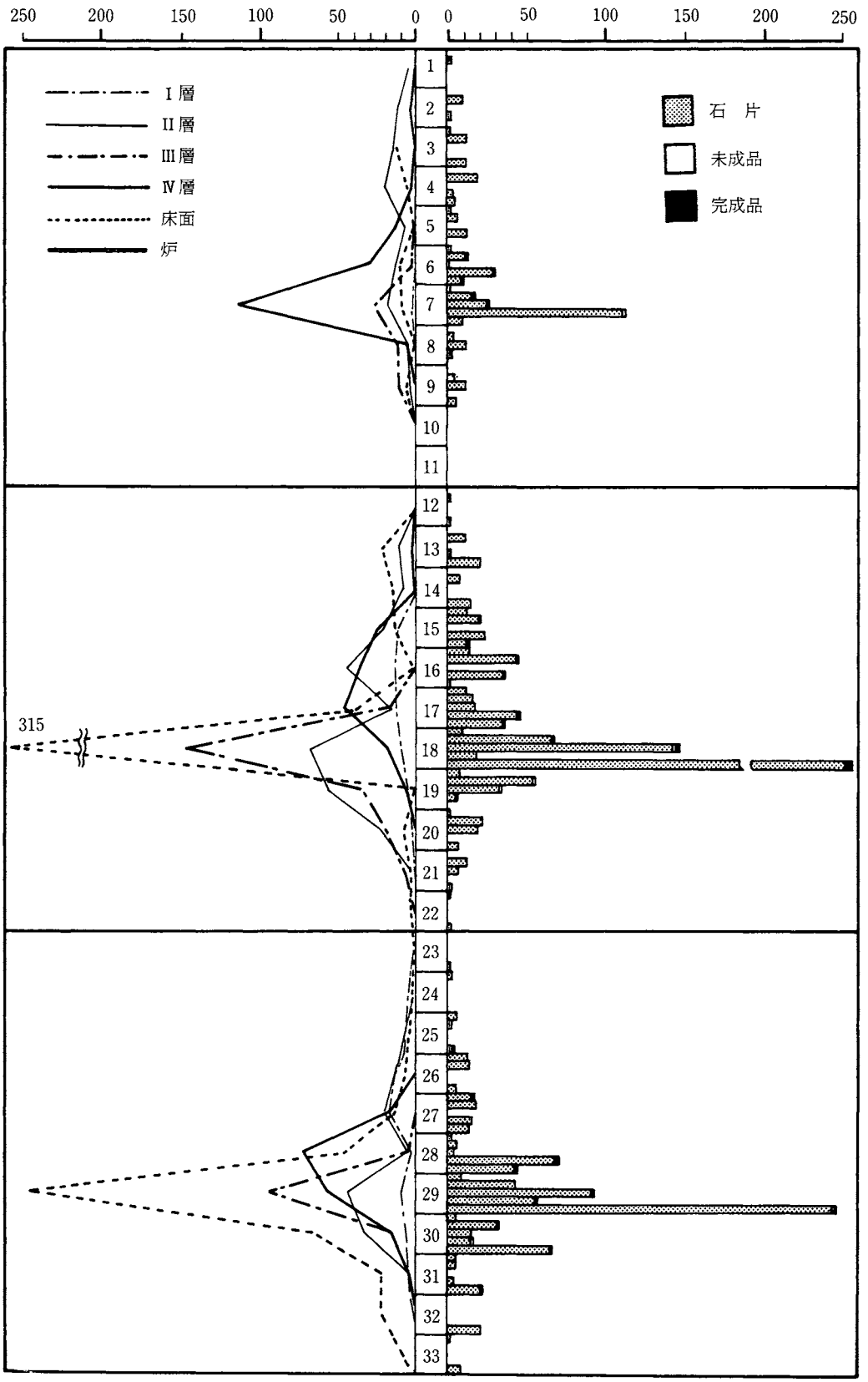


図471　D132号遺構石製遺物層位別分布図(1)

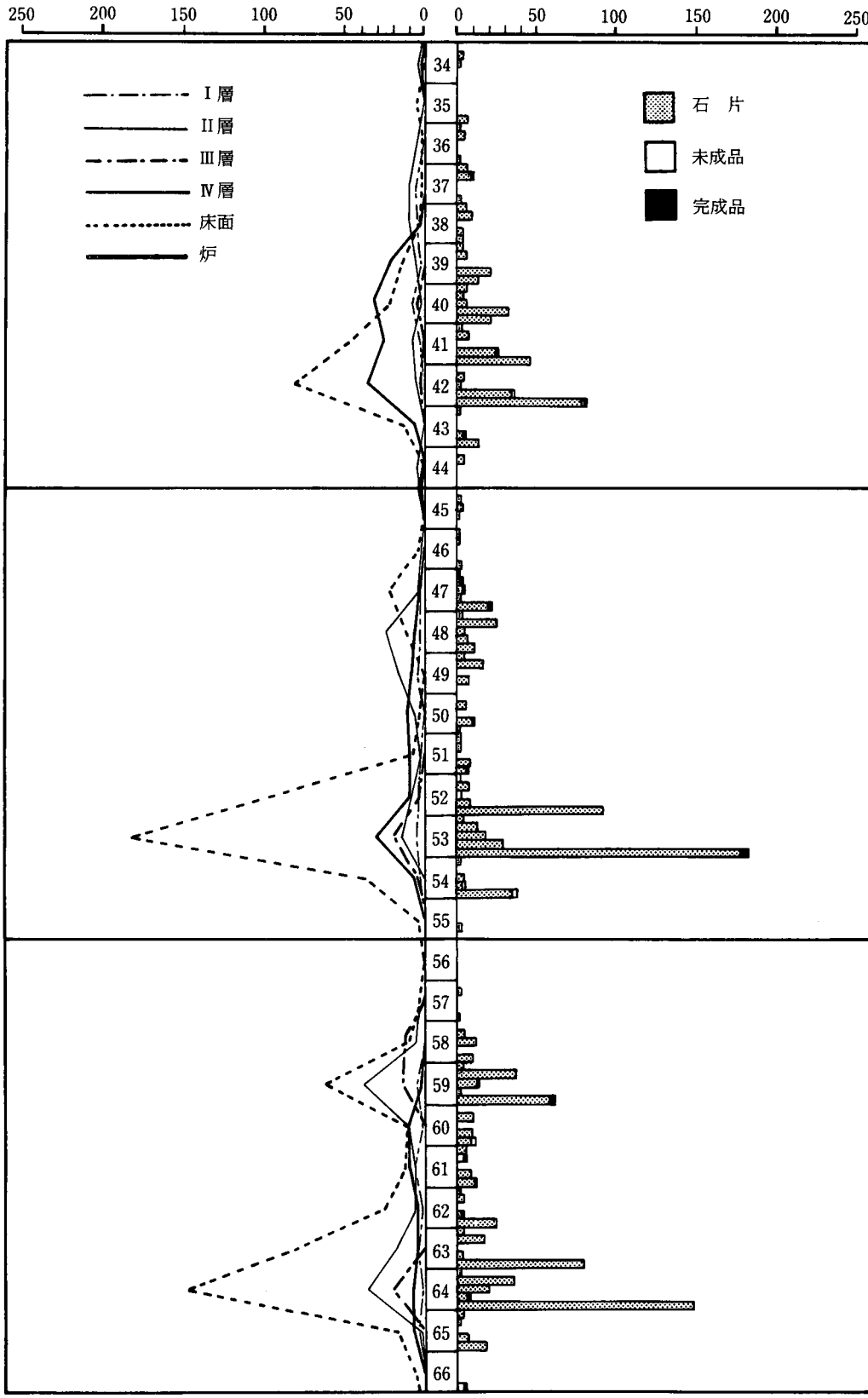


図472　D132号遺構石製遺物層位別分布図(2)

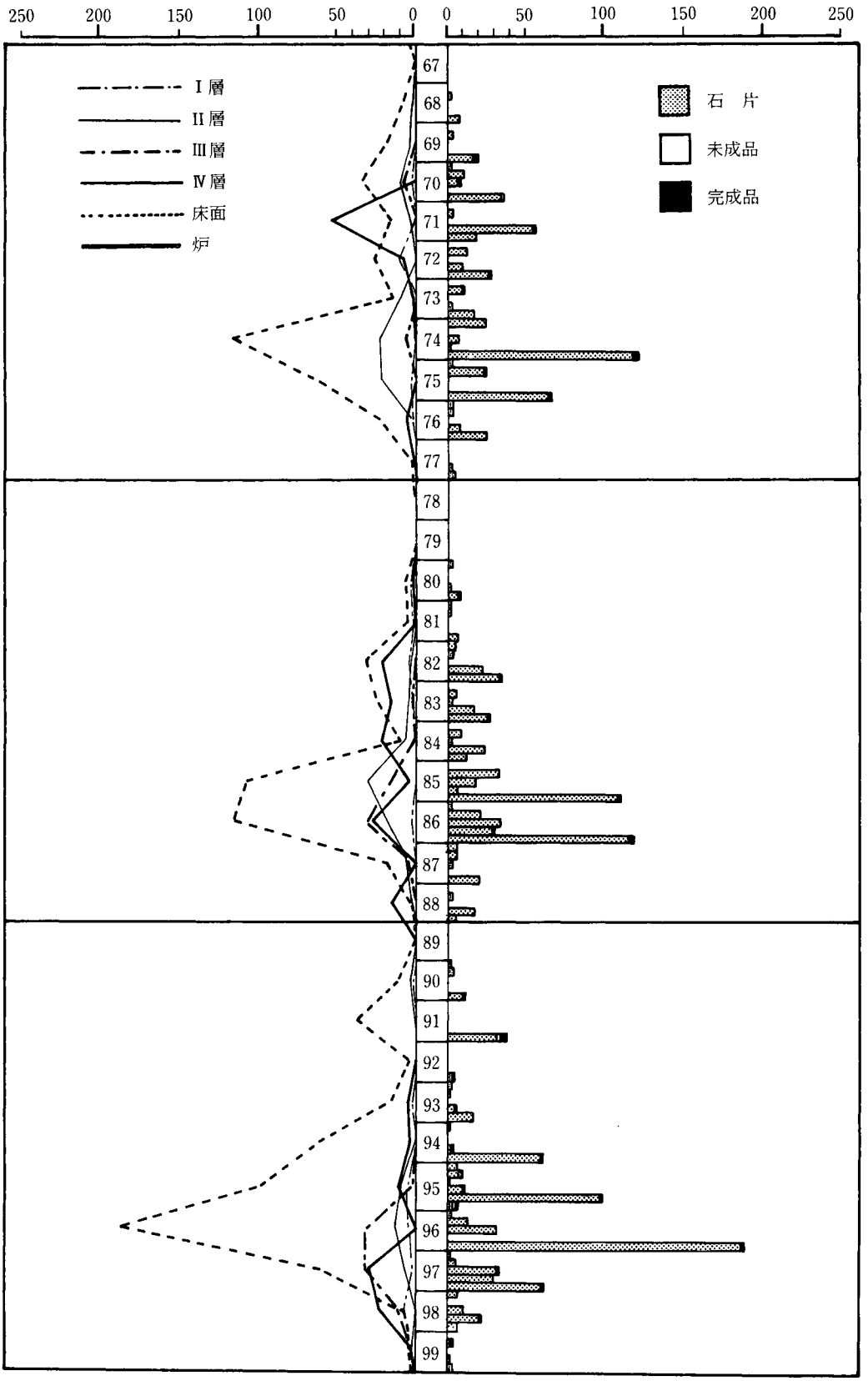


図473　D132号遺構石製遺物層位別分布図(3)

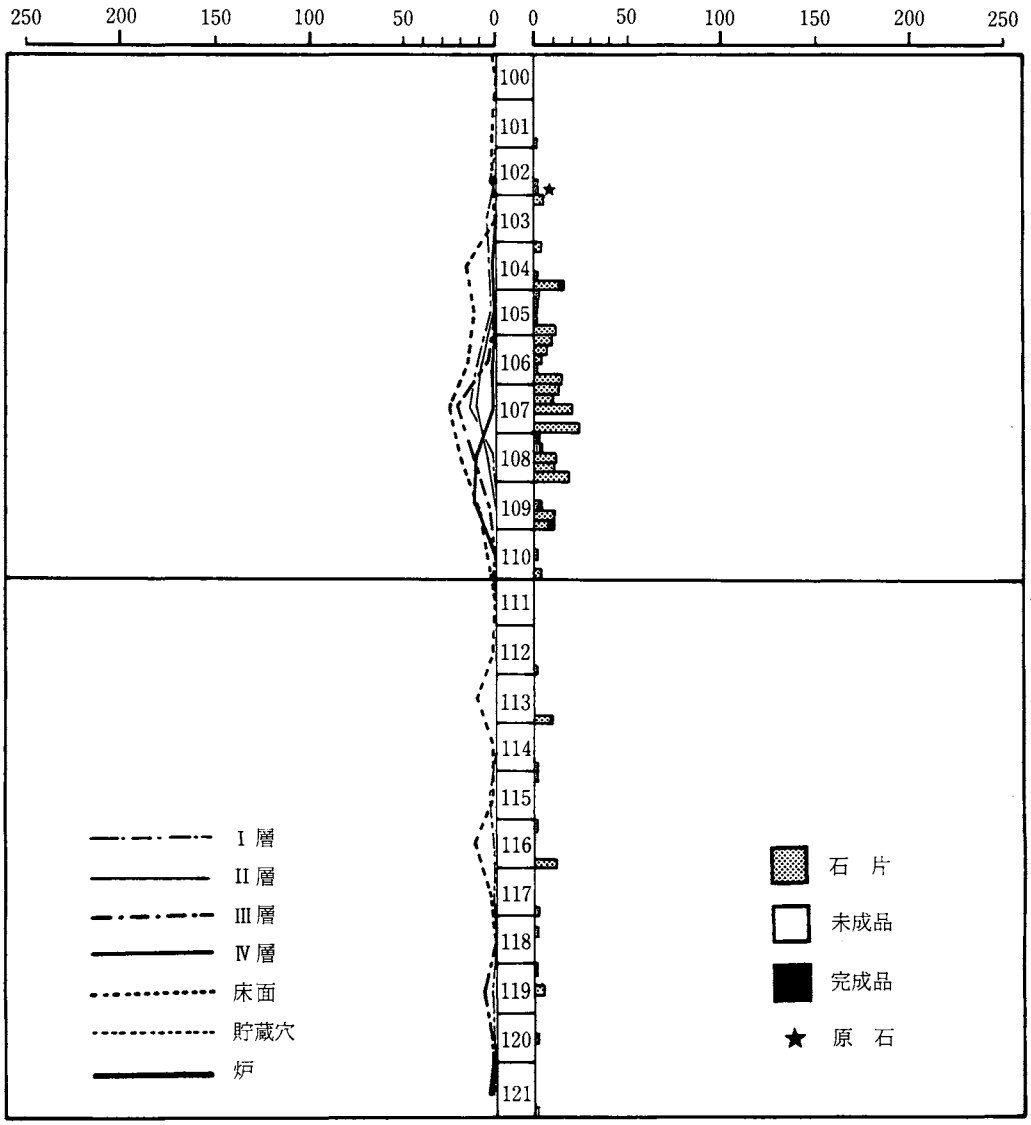


図474 D132号遺構石製遺物層位別分布図(4)

い形状を呈している。甑形土器は12で鉢形土器の形状を呈している単孔のものである。高坏形土器は13～25で、柱状の脚部と屈曲して開く裾部を呈している。17の内面には赤彩が施されている。坩形土器は26～30で、球形に近い胴部を呈し、口縁部は「く」字状にほぼ直線的に開く形状を呈している。鉢形土器は甕の形状に近い31と、坏に近い形状の32～34がある。石製品は35～71で、35、69は勾玉、36は表採資料であるが本住居に帰属するものと考えられるので参考として掲示した。長さ 7 cm の剣形品である。37～62は臼玉、63～68は臼玉未成品、70は砂岩製の砥石である。71は滑石の原石で、部分的に採掘時の工具痕跡が認められる。35～69はいずれも滑石製である。

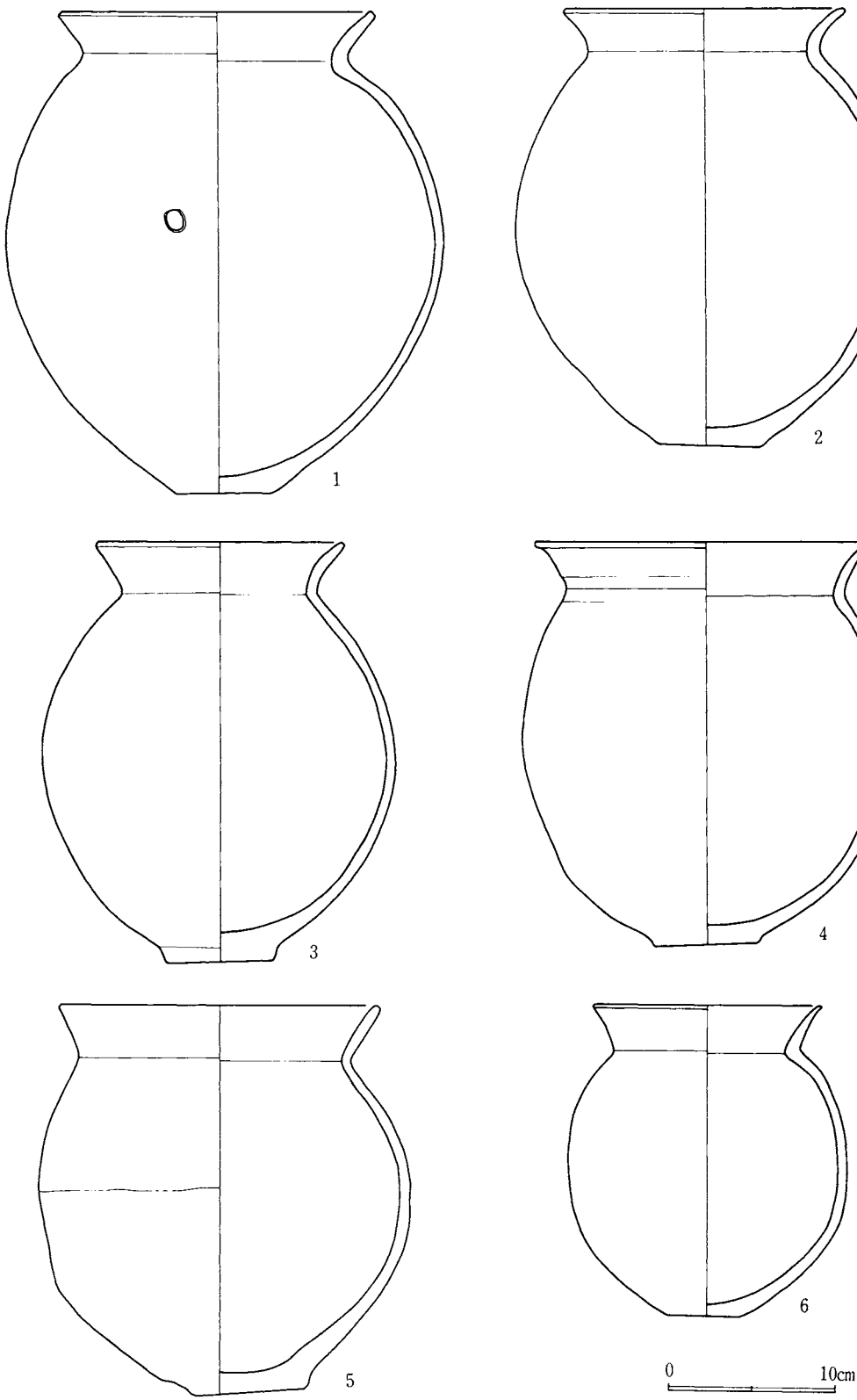


図475 D132号遺構出土遺物実測図(1)

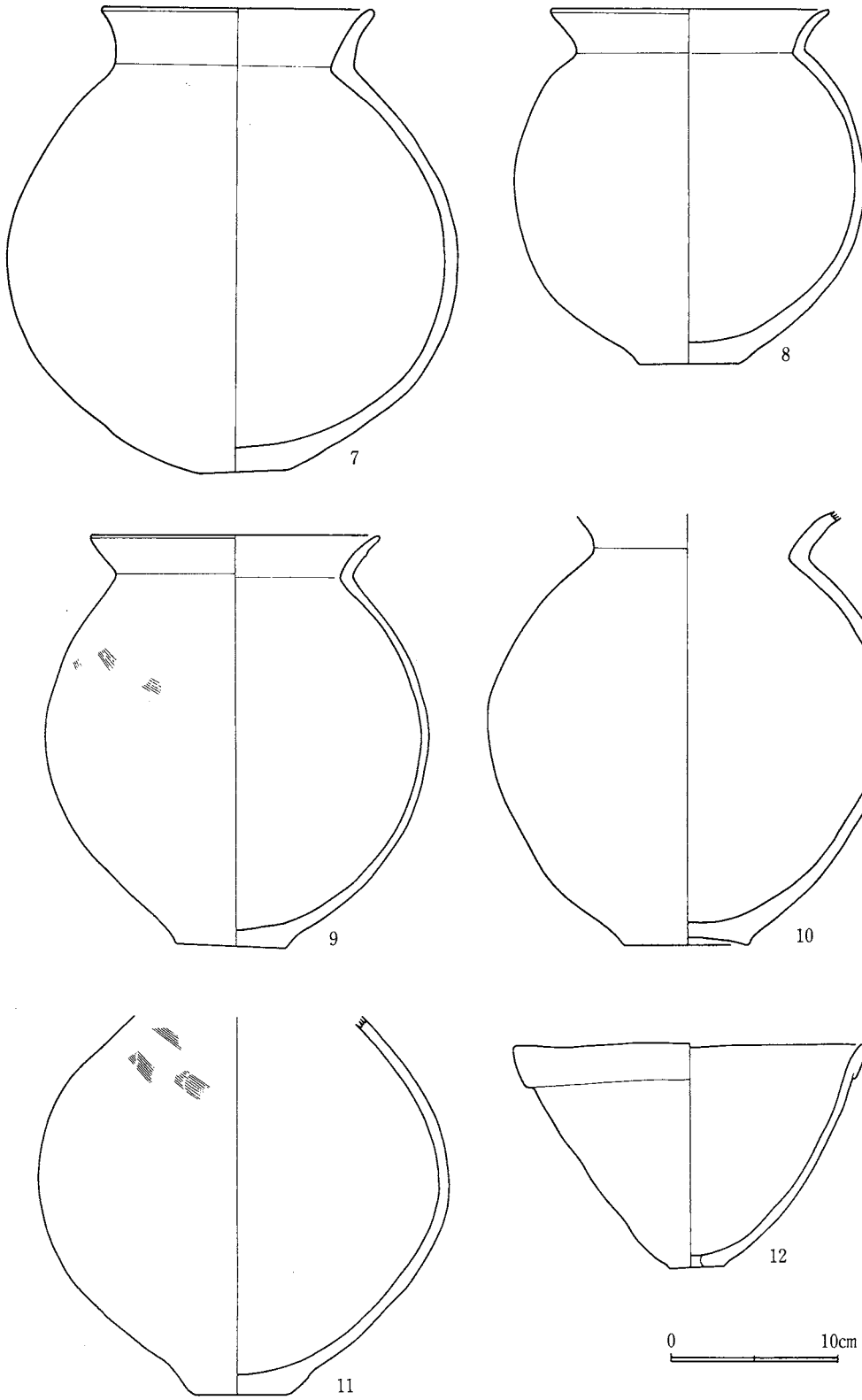


図476 D132号遺構出土遺物実測図(2)

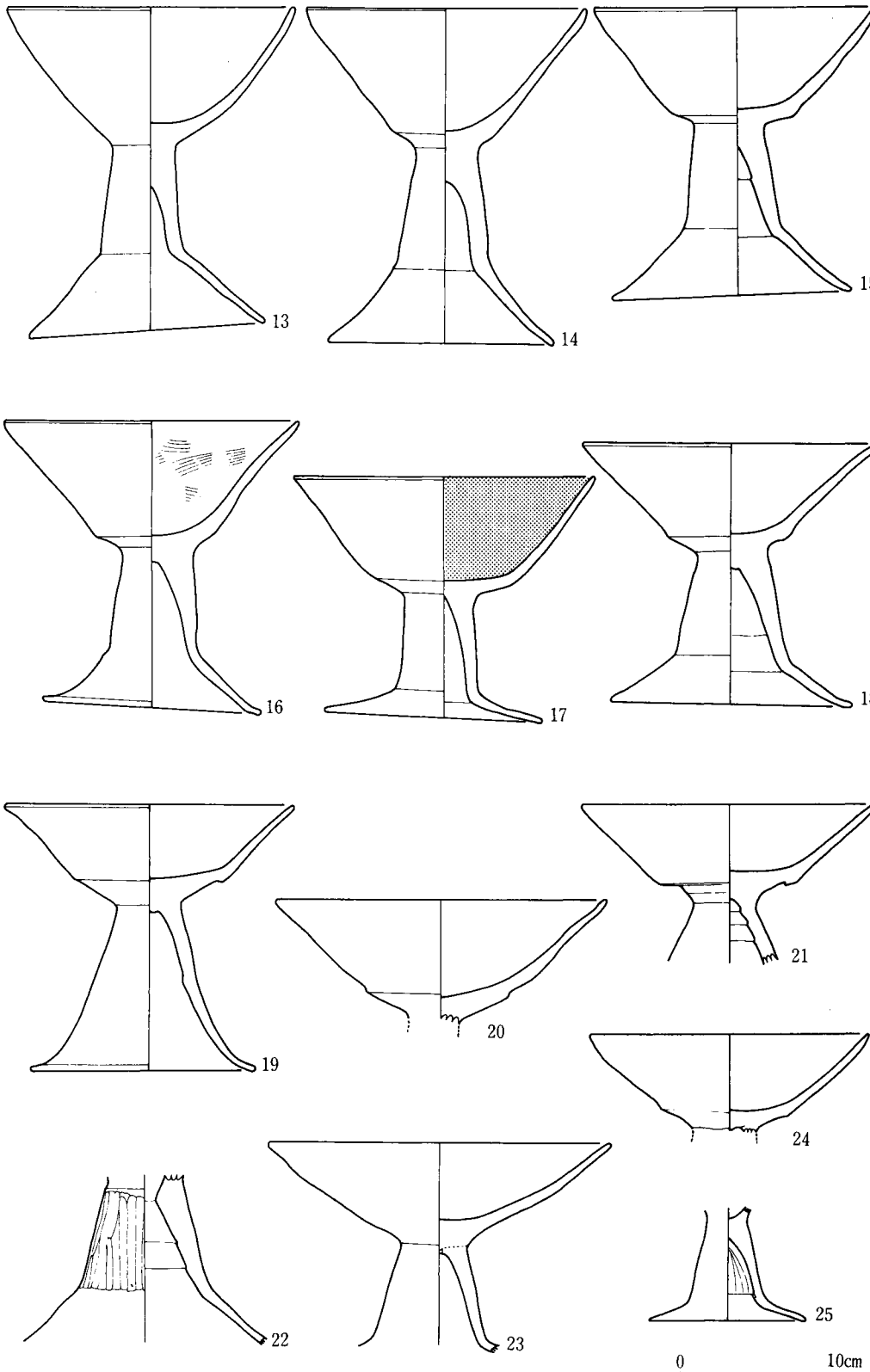


図477 D132号遺構出土遺物実測図(3)

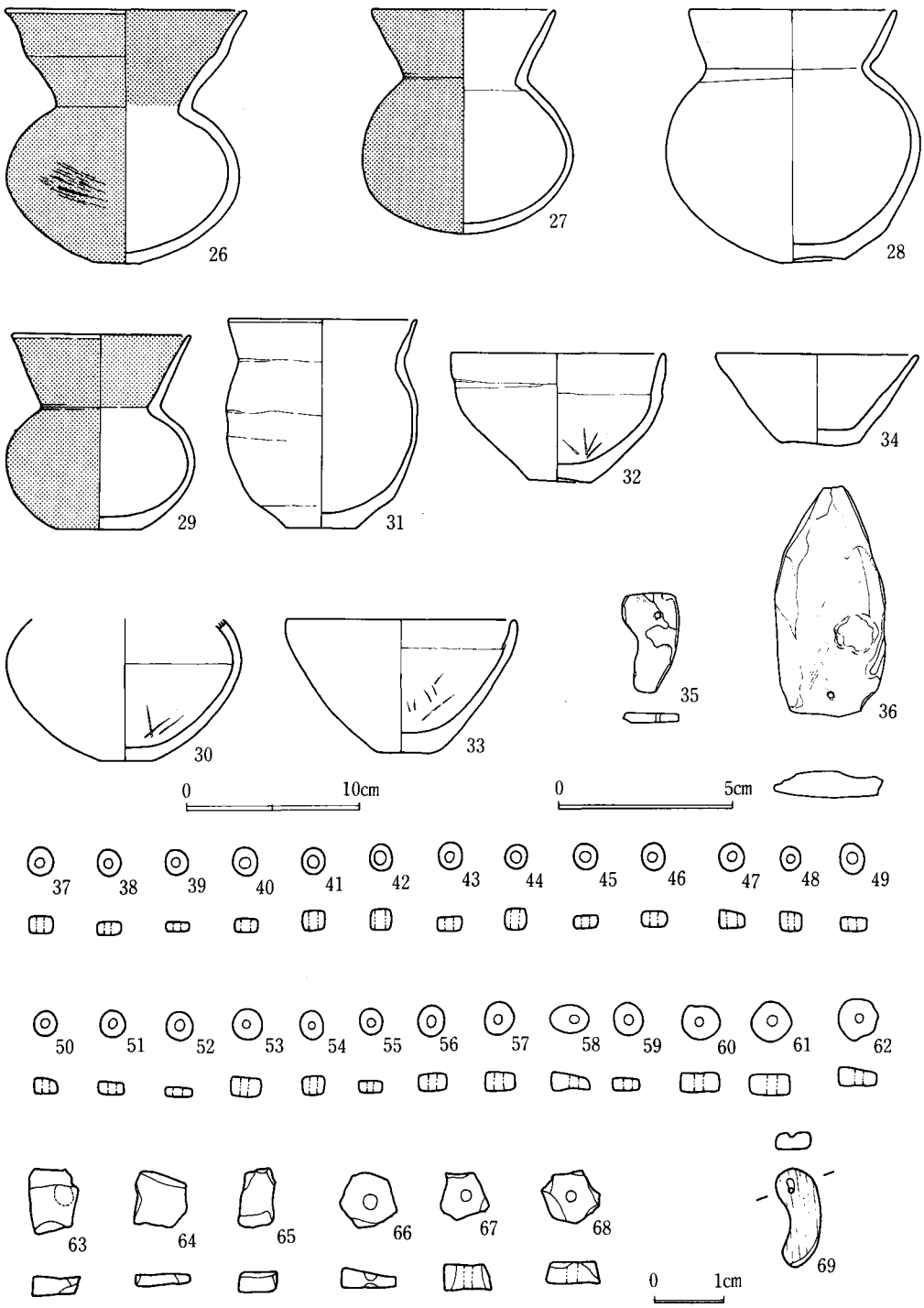


図478 D132号遺構出土遺物実測図(4)

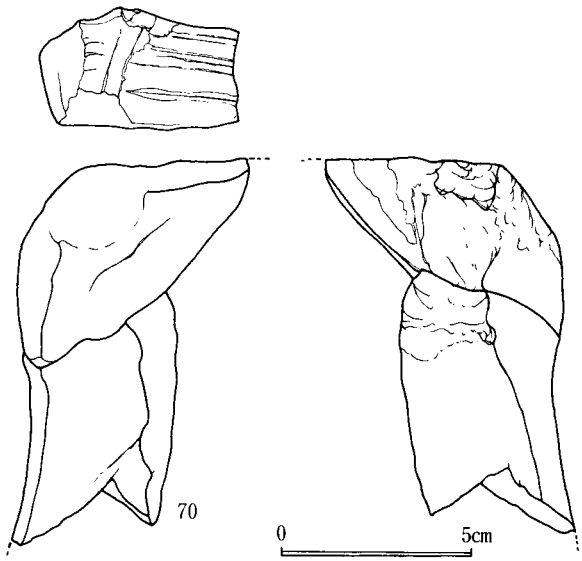


図479 D132号遺構出土遺物実測図(5)

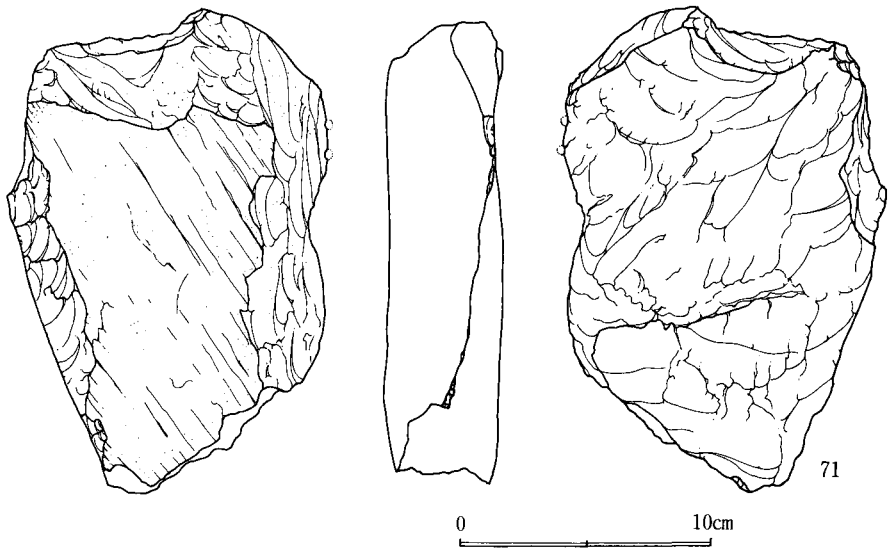


図480 D132号遺構出土遺物実測図(6)

D132出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	28.8	18.4	5.4	完形	ヘラナデ	——	堅緻	淡茶褐色 一部黒色	
2	甕	26.2	16.4	6.0	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
3	甕	24.8	14.4	6.2	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	淡茶褐色	
4	甕	23.6	20.0	6.0	完形	ヘラナデ	——	やや堅緻	淡黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	甕	23.0	18.8	6.4	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	
6	甕	18.4	13.2	4.4	完形	ヘラナデ	——	堅緻	黒褐色	
7	甕	27.4	16.0	5.2	完形	ヘラナデ	——	堅緻	淡黒褐色	
8	甕	22.4	16.4	6.0	完形	ヘラナデ	——	やや堅緻	黒褐色	
9	甕	24.0	16.8	6.6	完形	ヘラナデ 一部ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
10	甕	23.2	—	7.4	略完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
11	甕	22.0	—	5.6	2/3	ヘラナデ 一部ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
12	甑	13.2	20.6	—	完形	内外面ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
13	高坏	19.8	17.4	14.0	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
14	高坏	20.6	17.0	13.6	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
15	高坏	17.6	17.0	14.0	完形	内外面ヘラ磨き	——	やや軟弱	淡茶褐色	
16	高坏	17.3	18.0	13.0	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
17	高坏	14.5	18.4	12.8	完形	内外面ヘラ磨き	——	やや堅緻	赤褐色	内面赤彩
18	高坏	15.7	18.0	14.1	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡茶褐色	
19	高坏	16.1	17.3	13.4	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡茶褐色	坏・脚部の一部赤彩
20	高坏	7.0	20.0	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	
21	高坏	9.6	18.0	—	1/2	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)黒褐色	
22	高坏	10.2	—	—	脚部のみ	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	茶褐色	
23	高坏	12.2	21.0	—	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
24	高坏	5.6	16.8	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡褐色	一部赤彩残
25	高坏	6.8	—	9.2	脚部のみ	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗褐色	
26	坩	14.6	13.6	2.4	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	内外面赤彩
27	坩	13.0	10.4	—	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
28	坩	14.4	11.8	3.6	完形	内外面ヘラ磨き	——	やや堅緻	淡茶褐色	
29	坩	5.0	10.0	11.0	完形	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	内外面赤彩
30	坩	8.1	—	3.2	2/3	内外面ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡褐色	
31	鉢	11.8	10.6	4.2	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	褐色	
32	鉢	7.0	12.2	3.6	完形	ヘラナデ	——	堅緻	灰褐色	
33	鉢	7.6	13.0	3.1	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	褐色	
34	鉢	6.0	11.6	4.6	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	

3．D133号遺構（図481～490、図版108、109，113）

II群の住居群内において最も西側に位置している。一部確認時の掘り過ぎが認められるものの全体は充分に把握できる。

遺構　北壁5.14m、東壁4.38mで長方形の平面形で呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房

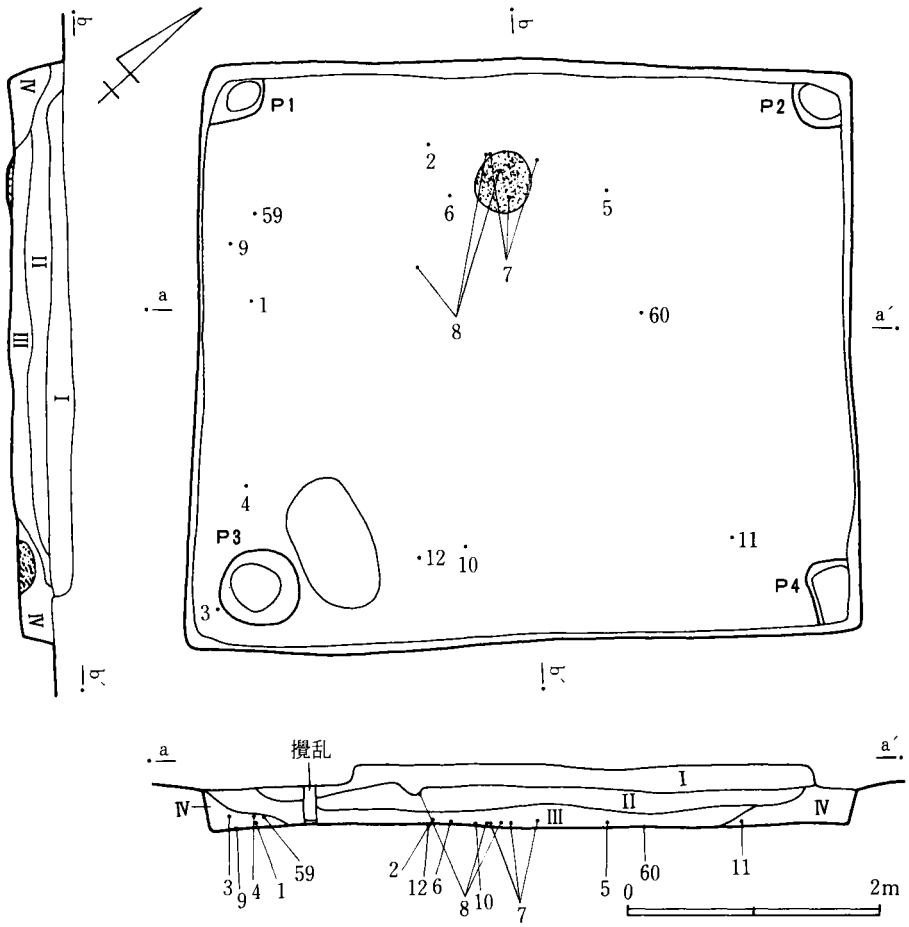


図481 D133号遺構実測図

跡でもある。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱である。床面南西部分および東側部分に焼土塊、炭化物が検出できたことにより焼失した住居であると考えられる。南西壁コーナー部に径0.62m、深さ0.2mを計り周辺の一部が土手状に高まりを有する貯蔵穴P_3を検出した。その他、壁コーナー部分にP_1、P_2、P_4を検出した。径平均0.3m、深さ0.1m程度のもので柱穴と考えて良いか明らかでない。壁溝は検出できなかった。

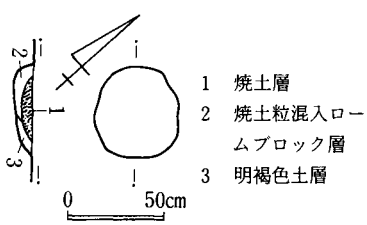


図482 D133号遺構炉跡実測図

炉 北壁中央部に近く位置し、長径0.48m、短径0.45m、深さ0.12mを計る楕円形を呈し、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層表土層、II層黒褐色土層、III層焼土混入褐色土層、IV層ローム粒焼土粒混入黄褐色土層が堆積している。土器は床面上を中心に出土している。石製品等は南壁中央部

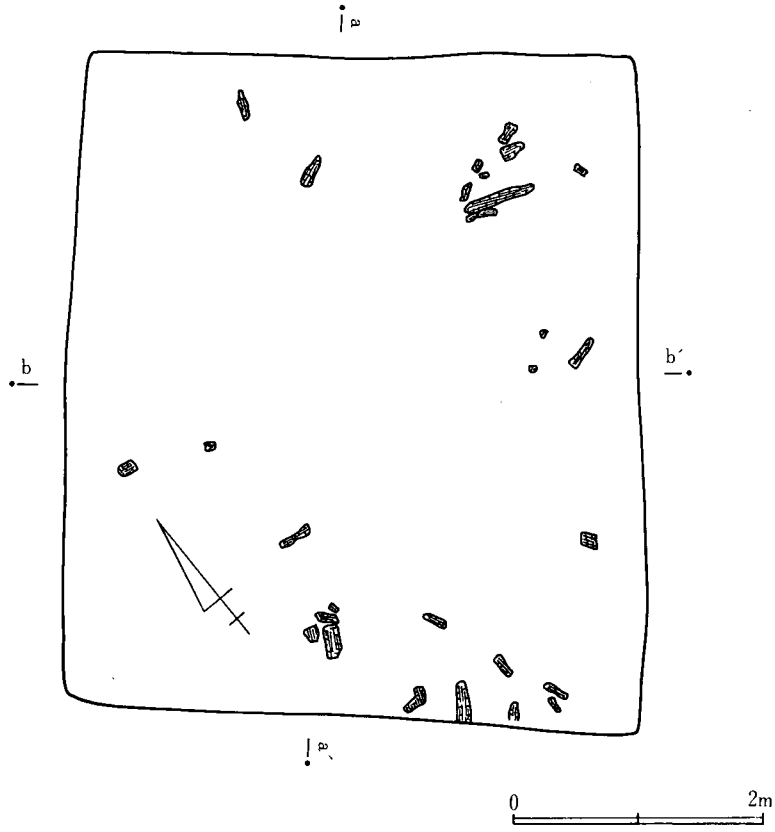


図483 D133号遺構炭化物出土状況図

に近く中心をもって住居全体に広がりを呈して出土している。層位的にはIII層を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、甕、高坏、坩、器台形土器と土製品と石製品がある。甕形土器は、1～3

D133出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	26.3	17.4	8.1	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	23.8	16.8	4.6	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	20.2	18.5	6.5	完形	ハケ目の上をヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	高坏	—	17.1	—	坏部のみ	内外面ヘラ磨き	——	堅緻	暗褐色	
5	坩	—	—	4.0	2/3	ヘラ磨き	——	堅緻	淡褐色	
6	坩	7.4	8.2	—	完形	ヘラ磨き	——	堅緻	明褐色	
7	坩	9.6	9.6	2.3	完形	ヘラ磨き	砂粒	軟弱	赤褐色	内外面赤彩
8	器台	8.2	5.8	9.0	完形	指頭痕	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	

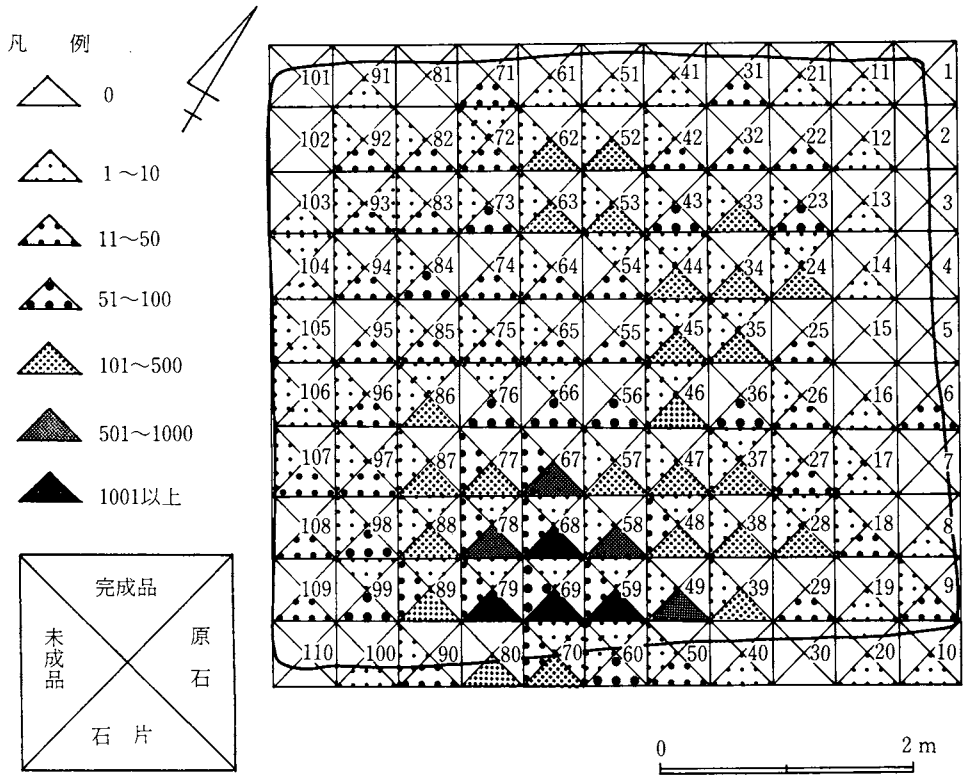


図484　D133号遺構石製遺物平面分布模式図

D133層位別石製遺物集計

層位	原石	石片	未成品		完成品				合計
			臼玉	その他	臼玉	剣形	勾玉	円板	
I	1	565	16	—	—	—	—	—	582
II	—	2.291	34	—	6	—	—	—	2.331
III	2	4.715	123	—	8	—	—	1	4.849
IV	—	4.410	151	—	18	—	1	—	4,580
床	1	2.600	116	1	14	—	—	—	2.732
炉	—	186	6	—	—	—	—	—	192
工作ピット	—	114	—	—	—	—	—	—	114
合計	4	14.881	446	1	46	—	1	1	15.380

（注）　I層より出土した原石(0002)については住居跡外であるため、グラフには、掲載していない。

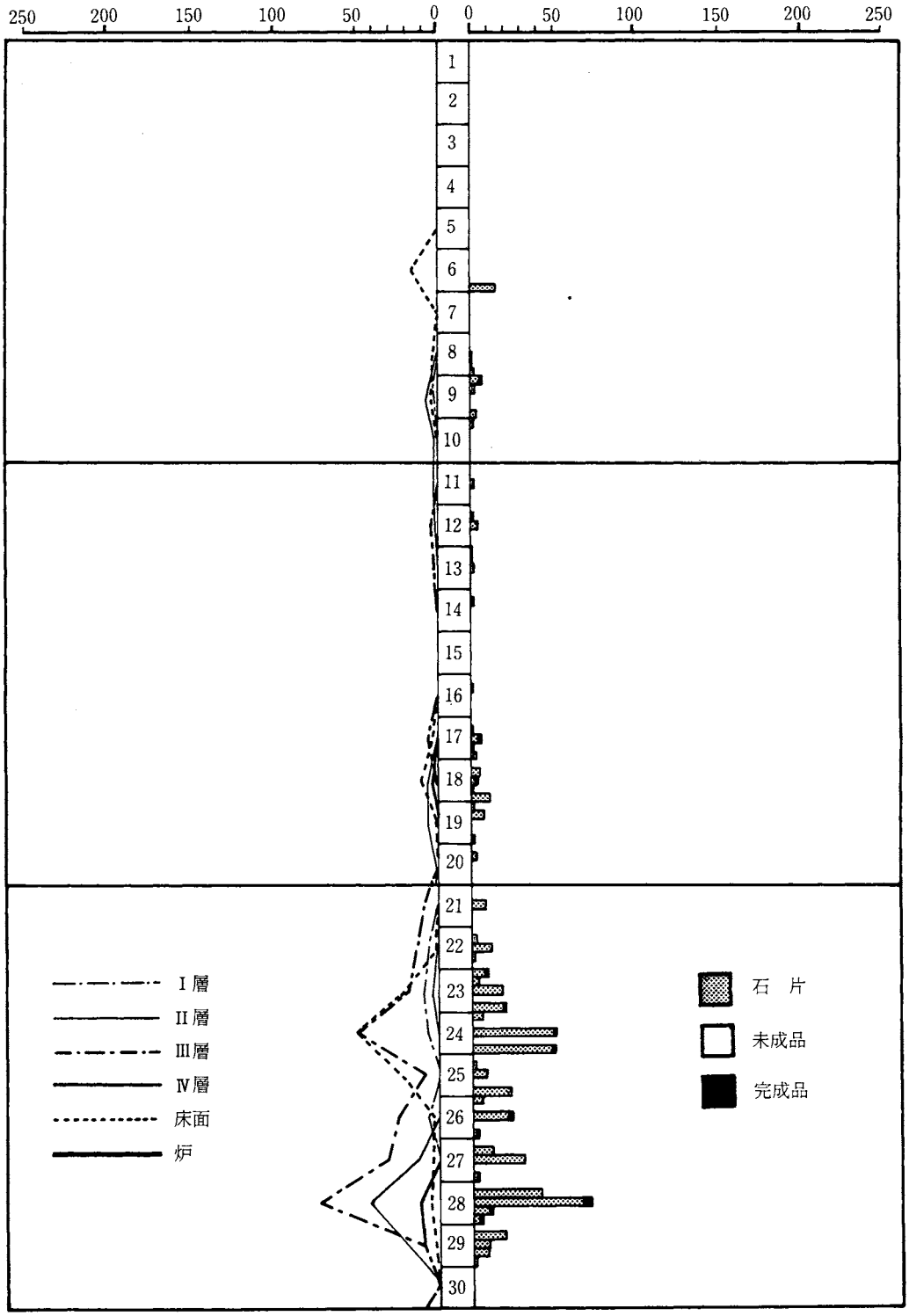


図485　D133号遺構石製遺物層位別分布図(1)

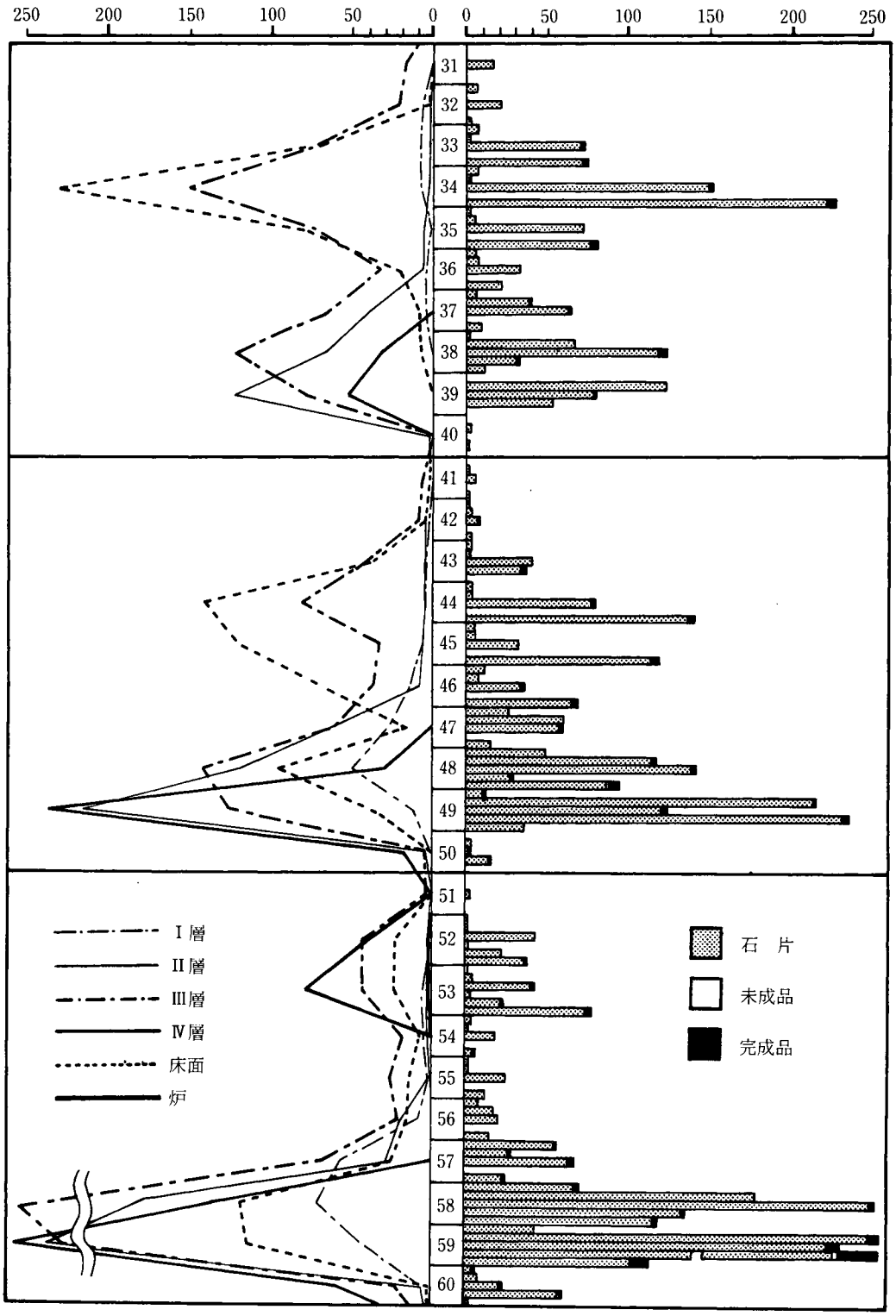


図486　D133号遺構石製遺物層位別分布図(2)

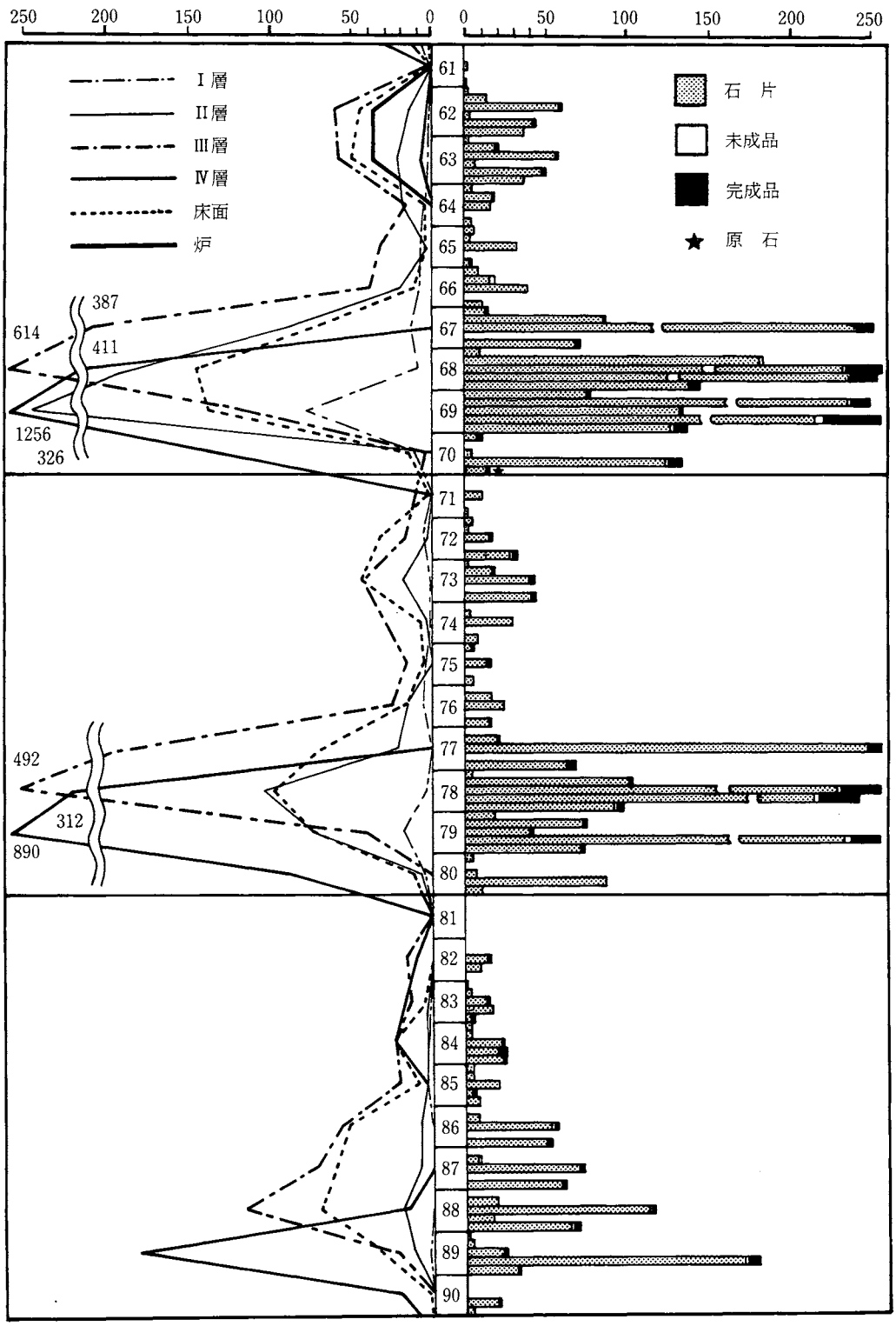


図487 D133号遺構石製遺物層位別分布図(3)

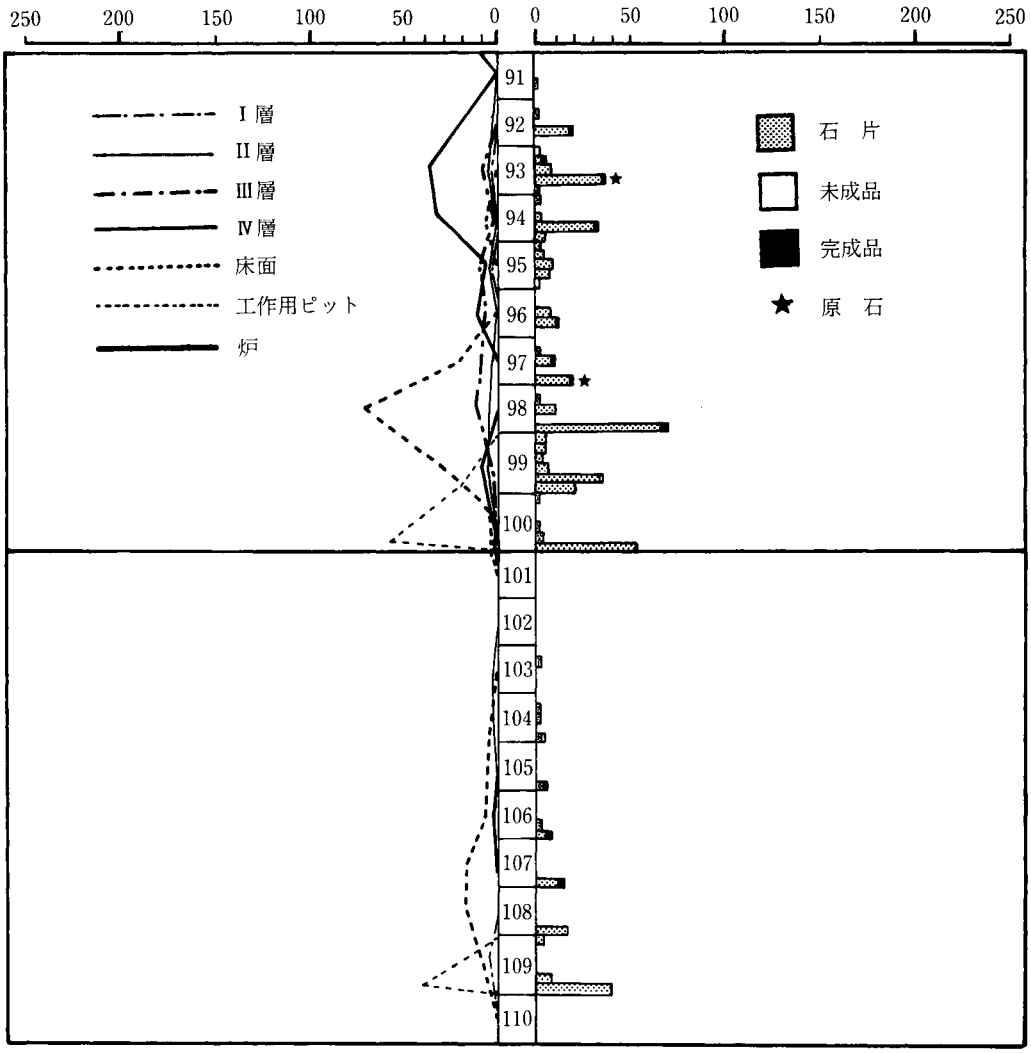


図488 D133号遺構石製遺物層位別分布図(4)

で、口縁部が「く」字状に強く外反する。高坏形土器は4で、坏部のみである。坩形土器は5～7で、6、7は比較的小形のもので丸底を呈する。5は口縁部の一部を欠損するが球形の胴部を呈している。器台形土器は8で粗雑な作りで輪積痕を部分的に残す小形なものである。土製品は10の土玉で、径2.4cmを計り、中央部には0.4cmの孔があく。胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈す。石製品は9、11～65である。9は紡錘具で、径5.2cm、厚さ0.8cmを計り、中央部に1cmの軸孔があく。滑石製で、重さ32.2gを計る。11は単孔円板、12は勾玉、13～46は臼玉で、13～28は径0.3cm大のものである。47～55は臼玉未成品、56～58は臼玉の荒割の剝片である。59は緑色を呈するガラス小玉で、径0.3cmを計る。60は剝形品の未成品である。61～64は荒割の大形剝片である。65は砂岩製の砥石である。

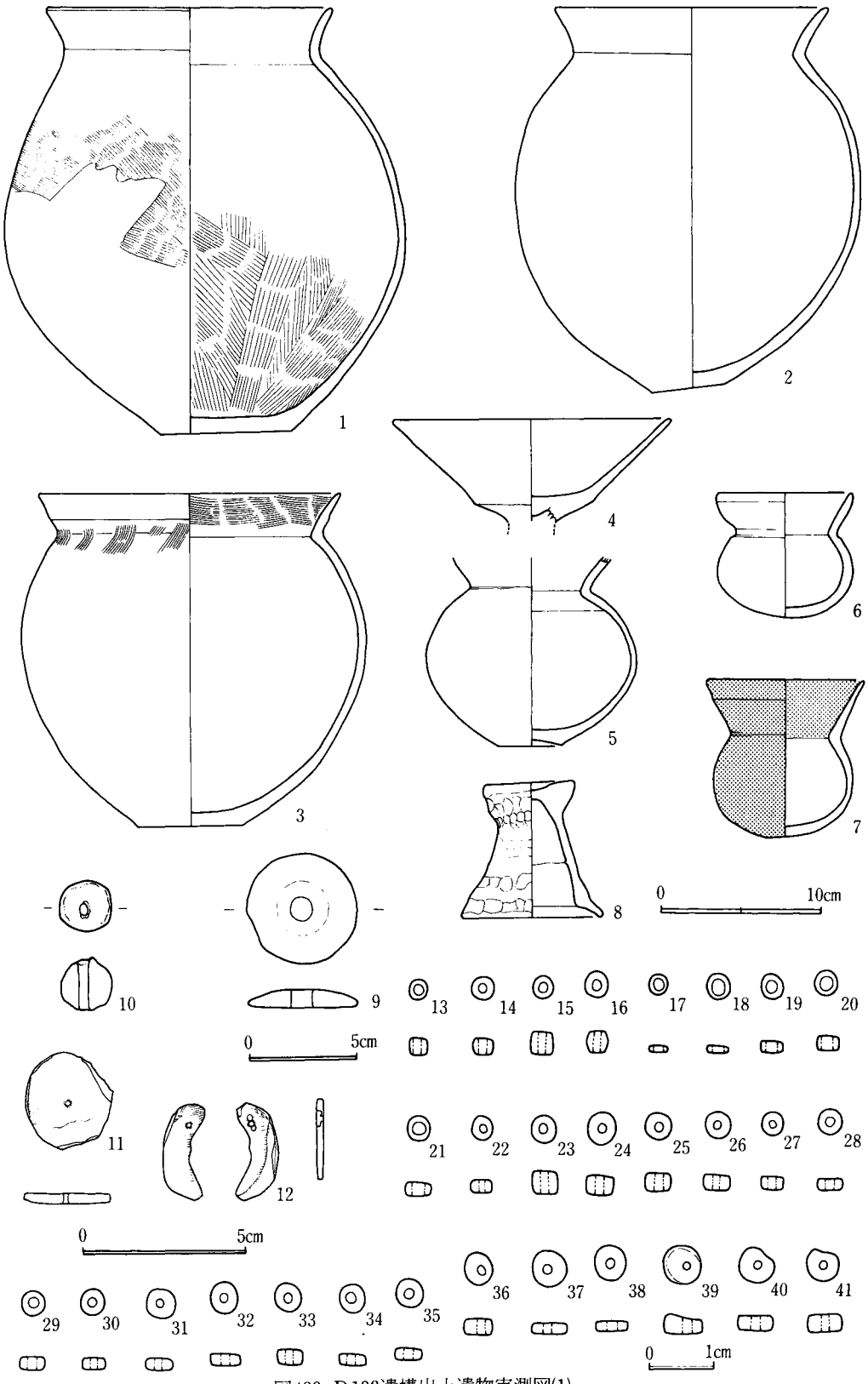


図489 D133遺構出土遺物実測図(1)

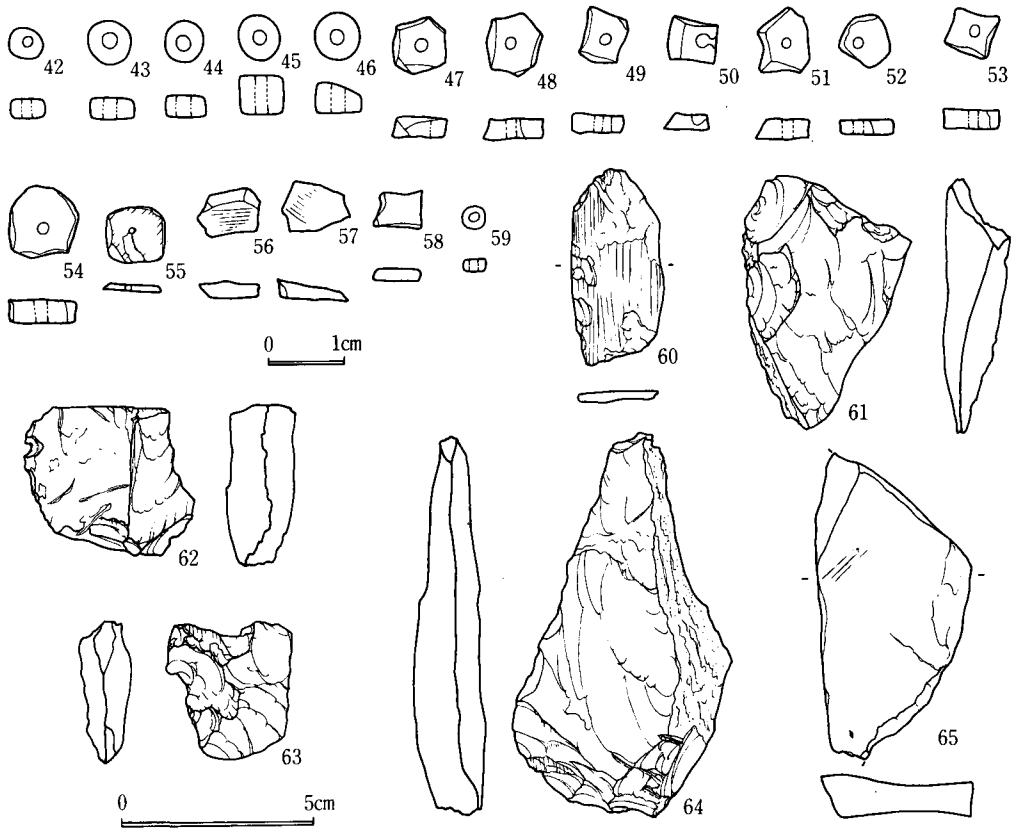


図490 D133号遺構出土遺物実測図(2)

第3章 後期の遺構と出土遺物

第1節 はじめに

古墳時代後期に比定できる遺構は、第Ⅰ群2軒、第Ⅱ群8軒である。検出した10軒の住居跡をもって当該期における集落全体がすべて検出できたわけではない。と言うのは、第Ⅰ群については検出した地域が地区界に近く、東側に位置する飯綱神社境内に遺構が所在する可能性を有しているからである。また第Ⅱ群についても台地が土砂崩れ等によって現況の地形を呈しているが、旧時は須久茂谷津に突出した台地であったと推定でき、この部分に当該期の遺構が所在した可能性が考えられるからである。

検出した2つの群は前代の古墳時代中期における集落立地と共通する点を見出すことができる。特に第Ⅱ群では中期の遺構と同じ立地を呈している。第Ⅱ群は場合によっては3つの小グループに細分できる可能性を有して住居が分布しているが、ここでは一応1つの群として報告したい。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

古墳時代後期の第Ⅰ群は竪穴住居跡2軒で構成される群で、W・X－9の地域において検出した。

住居跡は約25mの間隔を有して位置しており、遺構の呈する長軸の指向方位もほぼ同じである。D005は南北に連なる2本の溝による攪乱を受けており、D008は地区界外にのびるため完掘することはできなかった。第Ⅰ群において住居以外の遺構を検出することはできなかった（図491）。

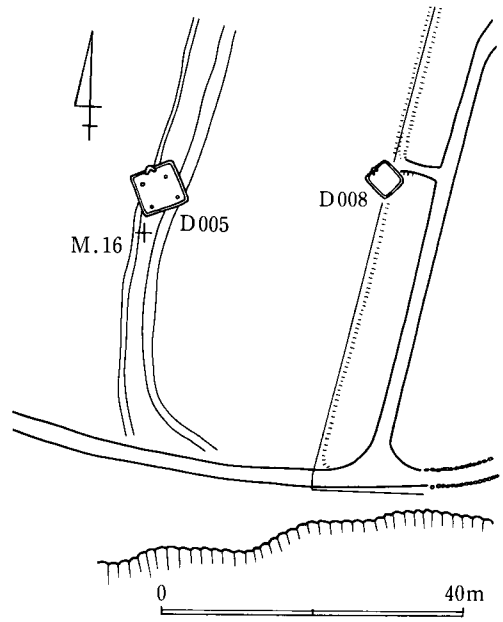


図491 古墳時代後期第Ⅰ群遺構分布状況図

1．D005号遺構（図492～494、図版114－1、115）

台地東南部分に位置している。2本の溝によって遺構中央部および南東部分が攪乱を受けている。覆土の12%に相当する部分が攪乱を受けている。

遺構　北壁5.9m、東壁6mを計る方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、特にカマド前方部分は顕著である。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.58m、深さ0.75mを計るもので、いずれも2段に掘り込まれている。

カマド　北壁中央部より若干左側に寄って位置している。壁を最長0.3m三角に掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。当期の掘り込みとしては良好である。粘土の貼り込みは袖部から煙道まで一体化を呈している。天井部は遺存していない。火床に相当する部分は壁溝と一体になっており、窪んだ状況は認められない。煙道の立ち上がり部分に貝ブロックを検出した。火袋に相当する部分は焼土化を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層ロームブロック混入茶褐色土層、Ⅲ層褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心にカマド左脇より出土しているが、量的に少量である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と土製品、石製品がある。甕形土器は1、2で、1は完形

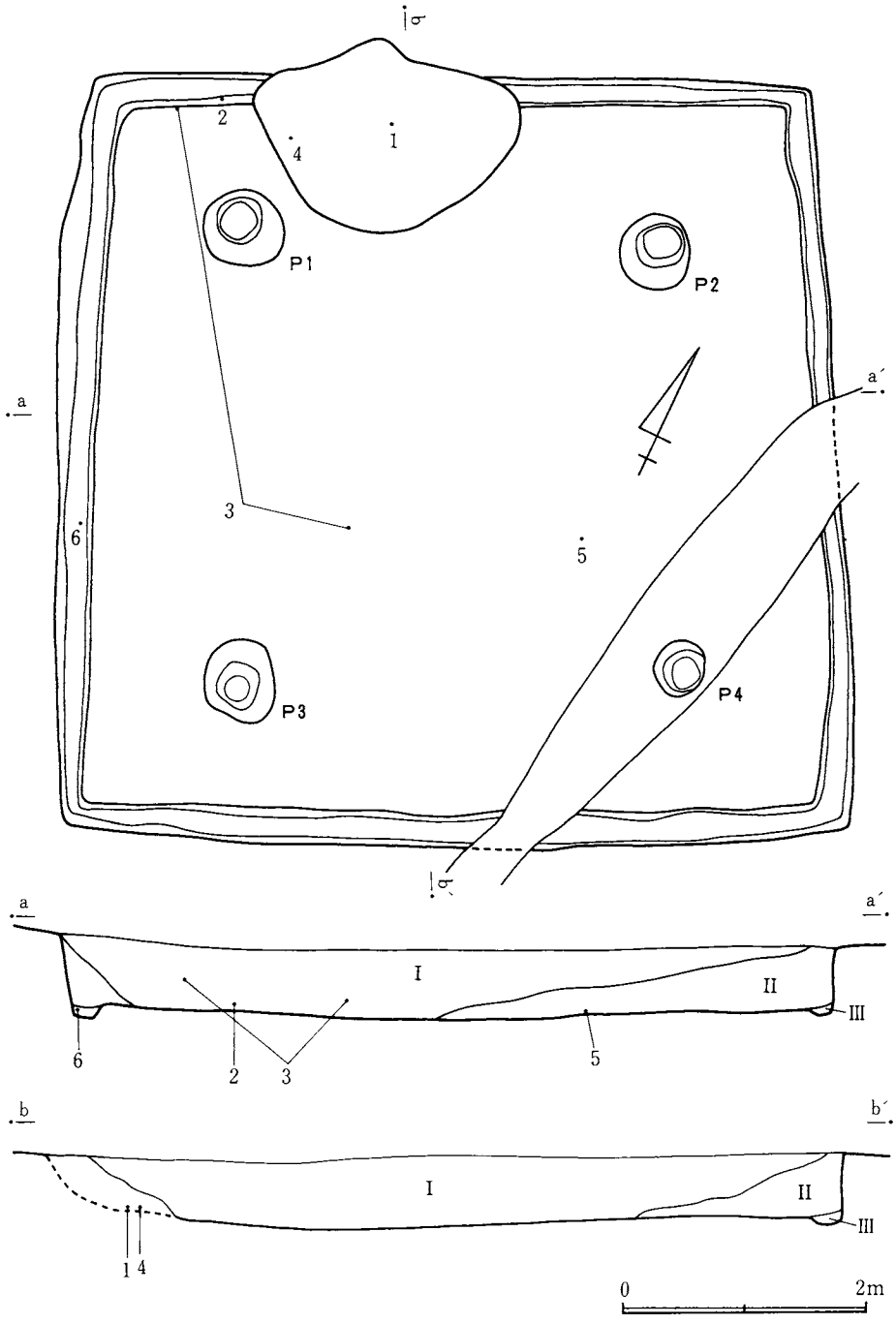


図492 D005号遺構実測図

の小形甕である。2は胴部中位上を欠損している。坏形土器は3で体部の破片である。土製品は4、6で、4は円柱状の支脚である。6は土玉で径 0.5 cm で、中央に小孔があく。石製品は5で砂岩製の砥石である。

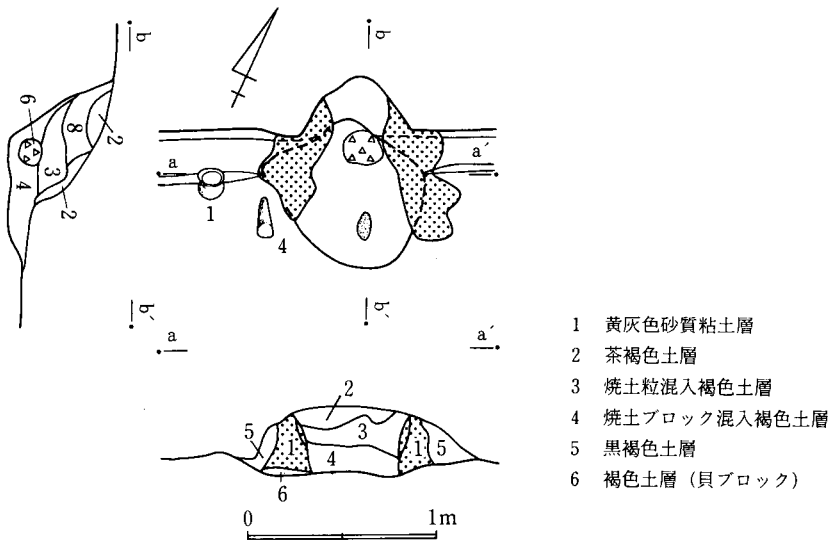


図493 D005号遺構カマド実測図

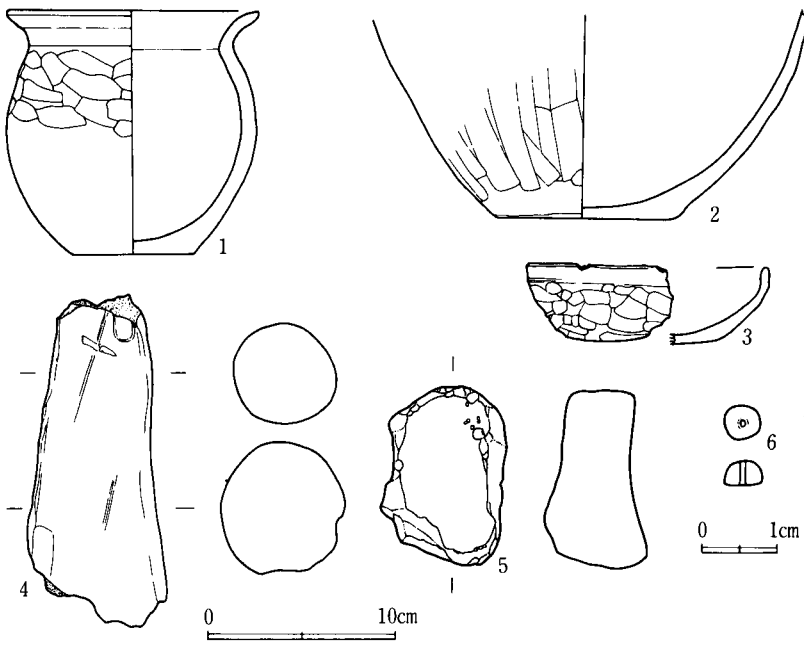


図494 D005号遺構出土遺物実測図

D005出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	12.5	13.3	6.8	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	
2	甕	—	—	9.4	1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	
3	坏	—	—	—	1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	

2．D008号遺構（図495～497、図版114－2、115）

Ⅰ群において東側に位置し、地区界に接しているため完掘はできなかった。また芋穴の攪乱

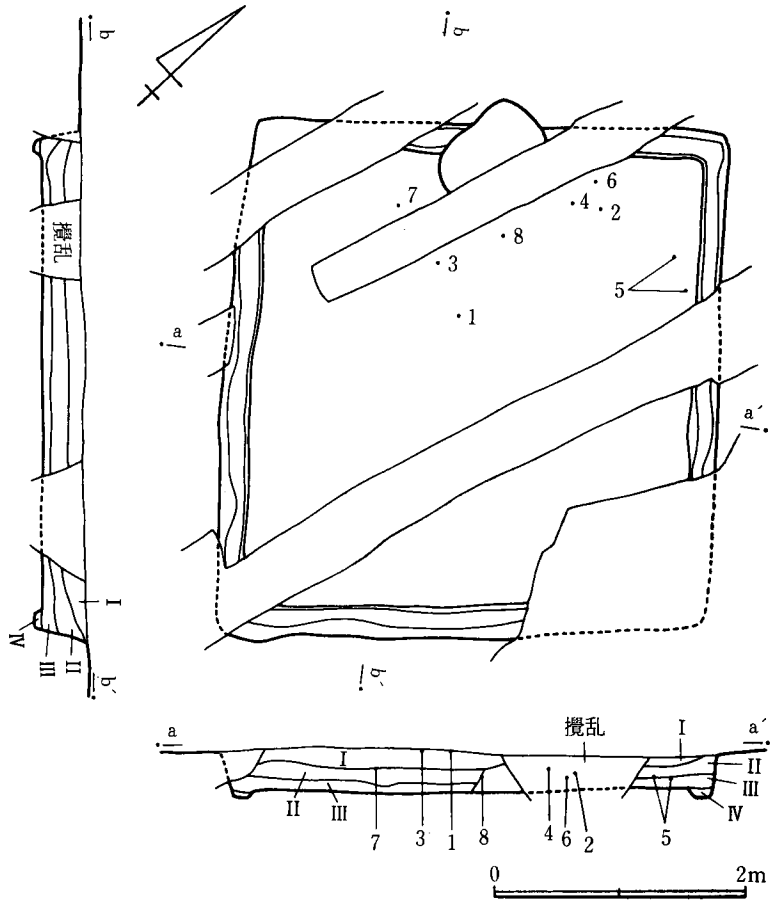


図495 D008号遺構実測図

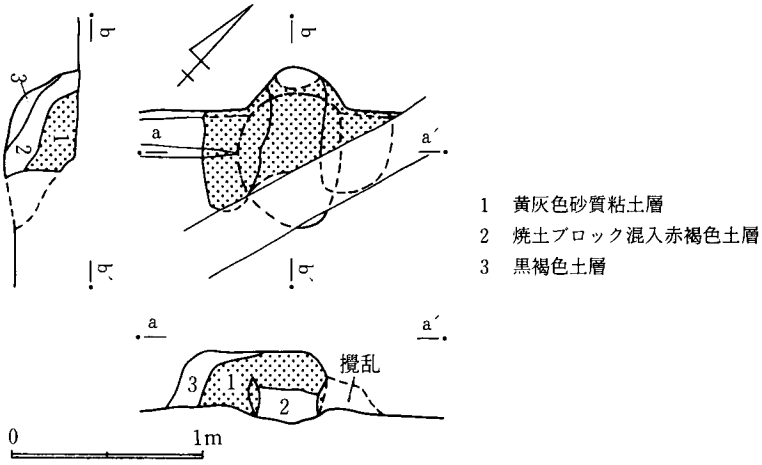


図496 D008号遺構カマド実測図

を遺構北側と中央部に受けており、約19%におよんでいる。したがって、出土遺物は本来の一括資料を示していない。

遺構　北壁3.75m、東壁推定3.85mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の

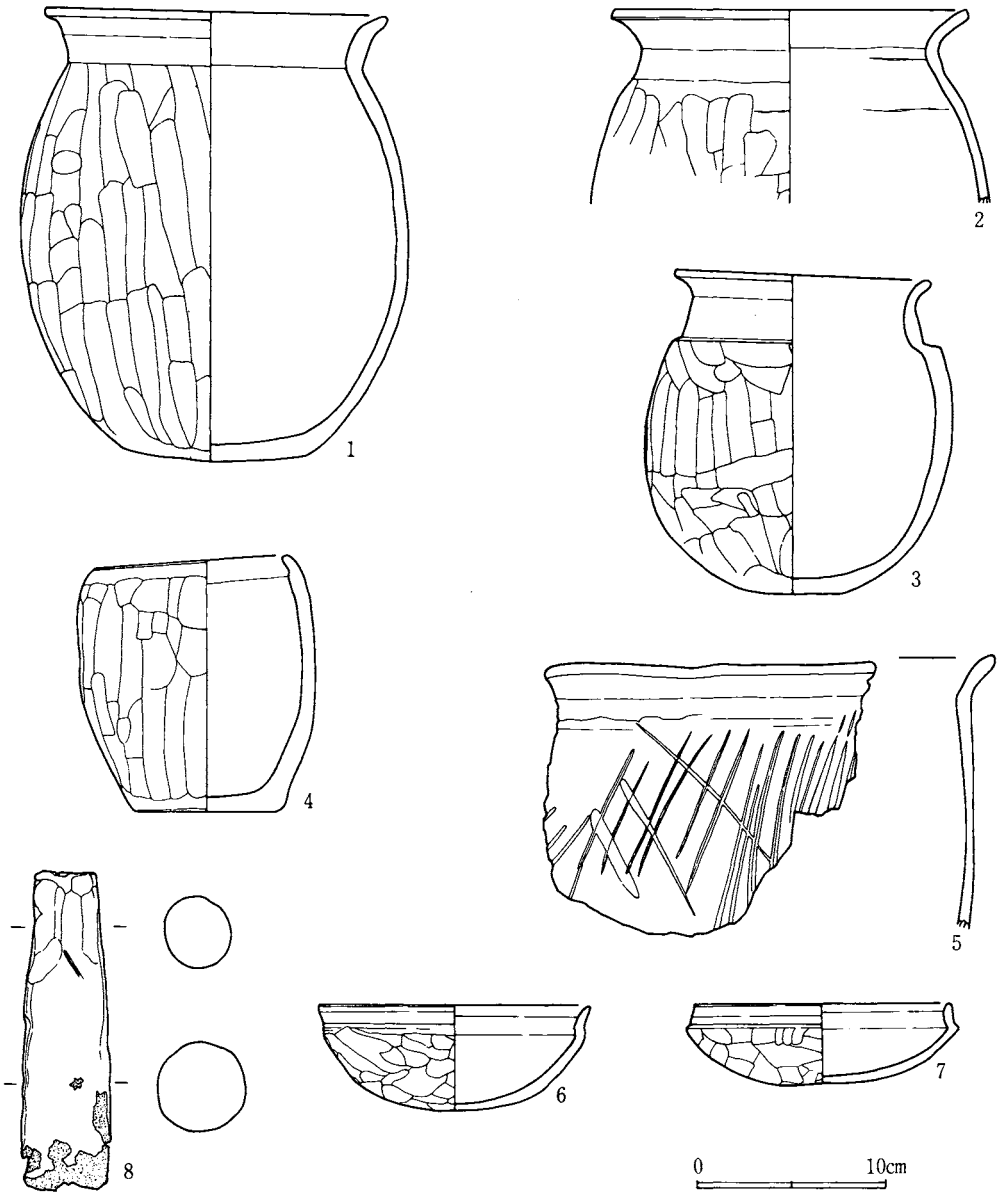


図497　D008号遺構出土遺物実測図

傾斜を呈し0.32m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除き認められる。床面は攪乱を受けている部分は明らかでないが他の部分は堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化を呈している。火袋に相当する部分は焼土化を呈しており、火床部は壁溝から同時に掘り出した状況を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒焼土粒混入黒褐色土層、III層ローム粒混入褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、遺物は各層より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、甑、坏形土器と土製品がある。甕形土器は1～3で、頸部から口縁部にかけて強くナデられている。口縁部は緩やかに外反を呈している。鉢形土器は4で胴部が内彎ぎみに立ち上がり口唇も兼た作りである。甑形土器は5の胴部破片で数条の刻目が認められる。坏形土器は6、7で、いずれも丸底を呈している。6は口縁部が外反するが、7は内屈を呈している。土製品は8の円柱状の支脚である。

D008出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	23.3	18.0	9.8	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	
2	甕	—	18.2	—	1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	16.6	13.6	5.4	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
4	鉢	12.9	10.0	7.4	完形	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
5	甑	—	—	—	口縁部のみ	ヘラ削り	小石	堅緻	黄褐色	砥石に使用
6	坏	5.4	14.3	—	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	4.1	13.5	—	完形	ヘラ削り	小石	堅緻	茶褐色	

第3節　第II群の遺構と遺物

古墳時代後期の第II群は竪穴住居跡10軒で構成される群で、Q・R・S－9・10・11の地域において検出した。

住居跡はD099、D135、D136、D139のグループと、D172、D176、D177のグループ、そして一軒単独で位置するD112のグループに分けて考えることができる。

住居跡の規模はかなりなばらつきがあり、内部施設の位置にも違いが認められる。第II群においては住居以外の遺構を検出することはできなかった（図498）。

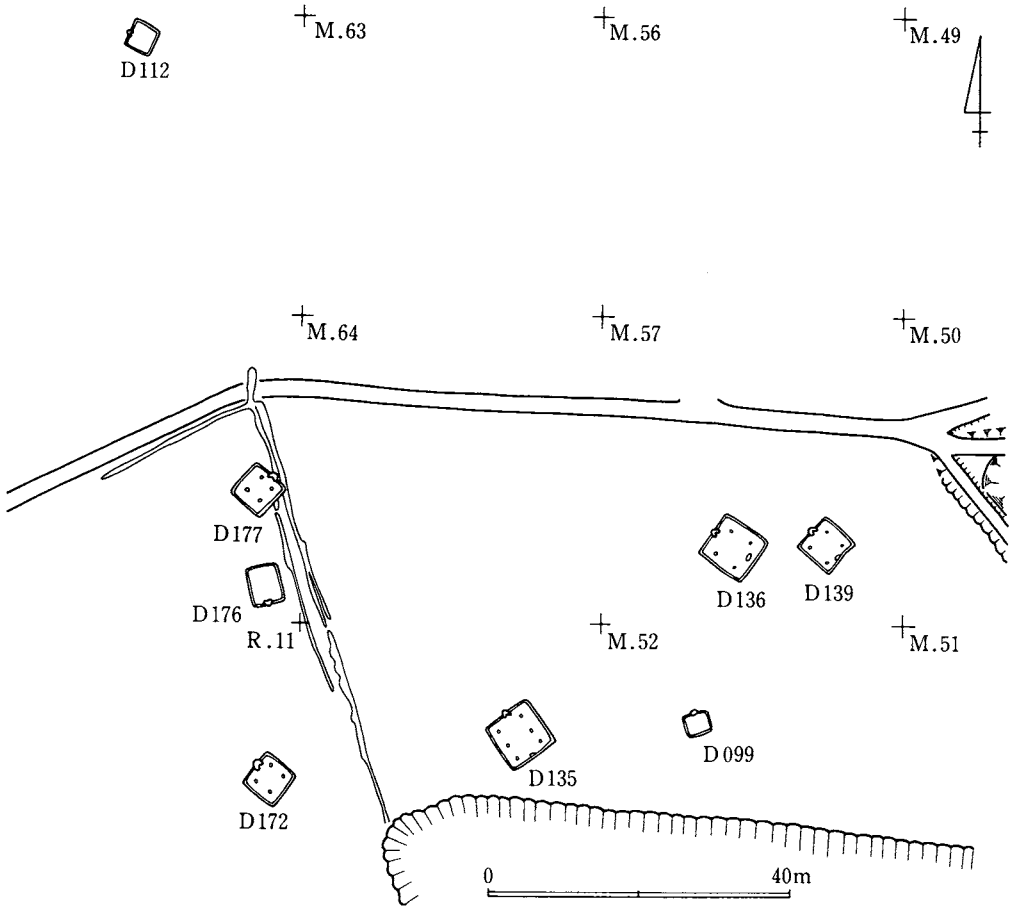


図498 古墳時代後期第II群遺構分布状況図

1．D099号遺構（図499～501、図版116－1、2、122、123）

II群の住居群内において南側に位置し、D135が近接している。

遺構　北壁2.85m、東壁2.85mを計り若干胴張方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.36m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。北壁中央部に粘土の構築部分を検出し、当初カマドとして考えていたが調査が進捗するに従って粘土と黒色土を互層に堆積させたものであり、カマドでないことが判明した。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層明茶褐色土層がほぼ水平に堆積しており、遺物はI層下部より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、鉢、高坏、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、1は口縁部がほぼ直立する。2は底部破片である。甑形土器は3、4で、3は口径がきわめて短いものでほぼ直立する。4は深鉢の形状を呈し単孔のものである。鉢形土器は5で大きく開く

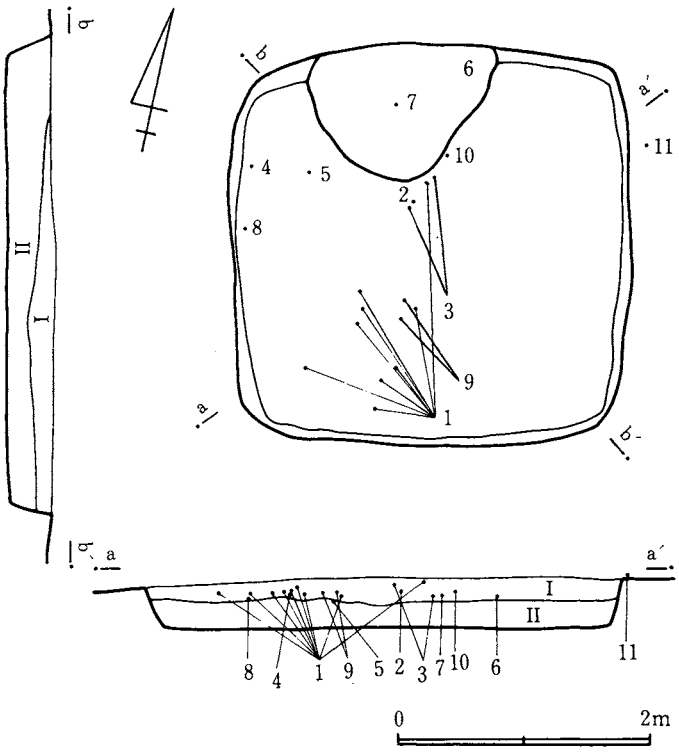


図499 D099号遺構実測図

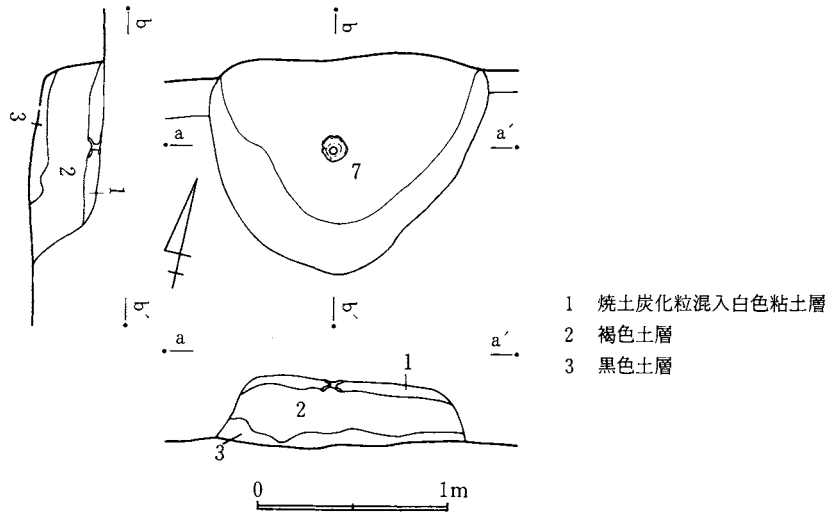


図500 D099号遺構粘土遺構実測図

体部を呈している。高坏形土器は7で坏部に赤彩が施されている。坏形土器は8～10でいずれも丸底を呈している。また6の手捏土器がある。石製品は11の滑石製模造品の剣形品である。

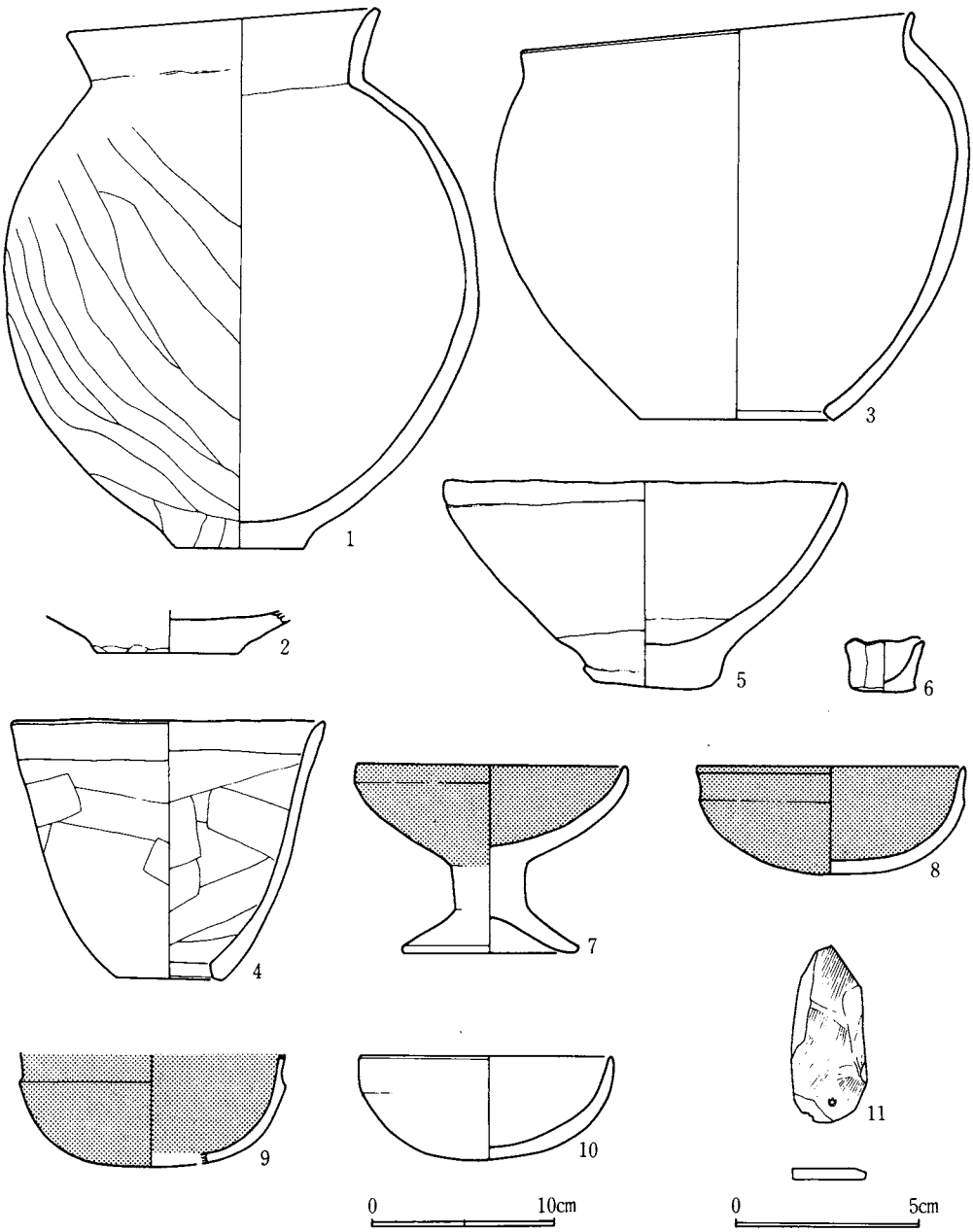


図501 D099号遺構出土遺物実測図

D099出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	28.4	16.5	6.8	完形	ヘラ削り	砂粒 小石	堅緻	(外)明赤褐色 (内)茶褐色	
2	甕	2.3	—	7.6	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甑	21.0	21.1	10.4	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	(外)明褐色 (内)褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
4	甑	13.6	16.8	5.6	完形	ヘラ削リ	砂粒 小石	堅緻	明褐色	
5	鉢	11.0	21.5	6.4	完形	不明	砂粒	やや堅緻	(外)暗茶褐色 (内)明灰褐色	
6	手捏土器	2.7	4.3	3.5	完形	手捏	砂粒	堅緻	明褐色	
7	高坏	10.0	14.3	9.2	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩
8	坏	5.8	14.4	—	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩
9	坏	5.9	—	—	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	明褐色	赤彩
10	坏	5.5	13.5	—	完形	ヘラナデ	砂粒 雲母	堅緻	褐色	

2．D112号遺構（図502～504、図版116—3、123）

II群において最も北側に位置し、一軒単独で所存している。最も近い遺構D177とは55mの距離を有している。

遺構　北壁3.4m、西壁3.6mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.48m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は

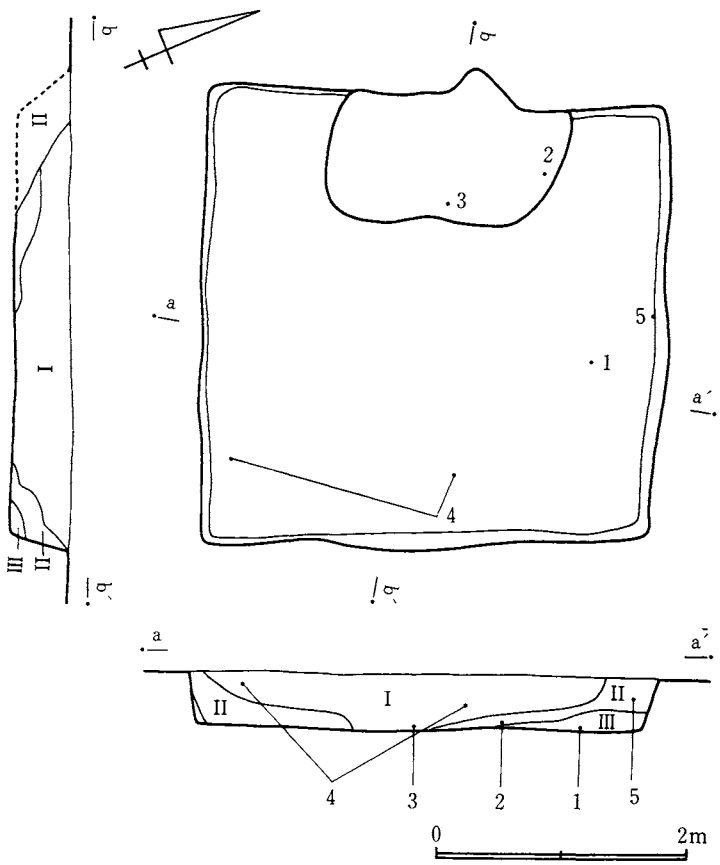


図502　D112号遺構実測図

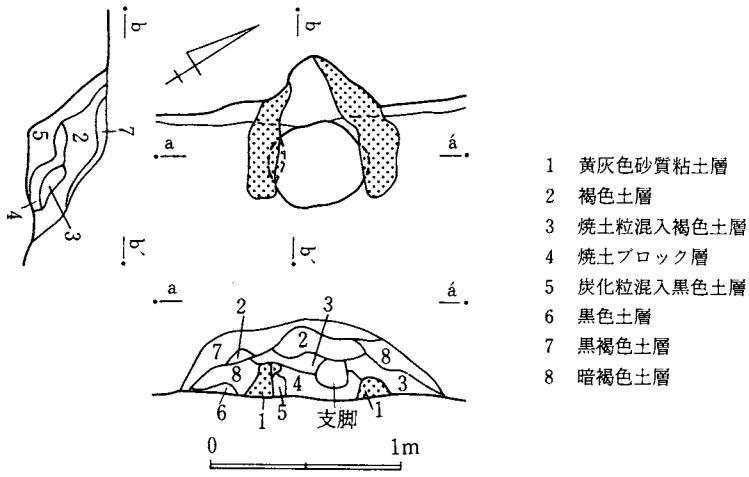


図503 D112号遺構カマド実測図

検出できなかった。

カマド 西壁中央部を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込

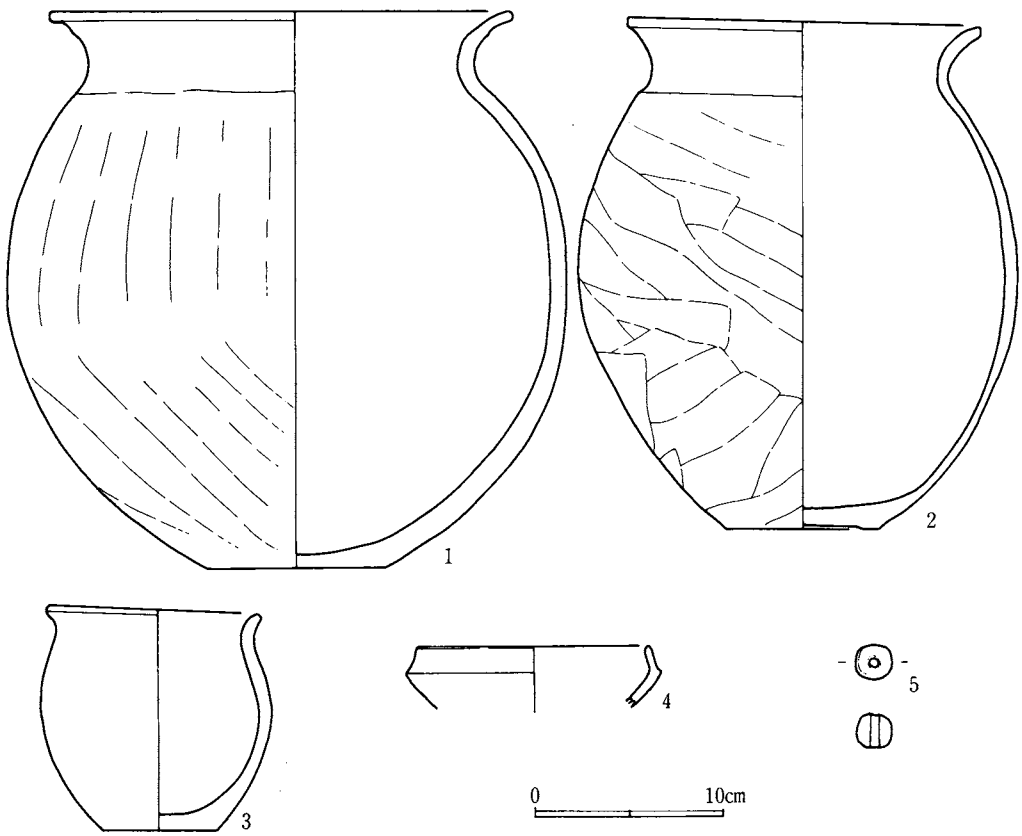


図504 D112号遺構出土遺物実測図

みは袖部から煙道まで一体化を呈している。天井部は遺存していない。火床は径0.5m、深さ0.05mを計る楕円形の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層ロームブロック層が堆積しており、遺物は床面上を中心に出土している。

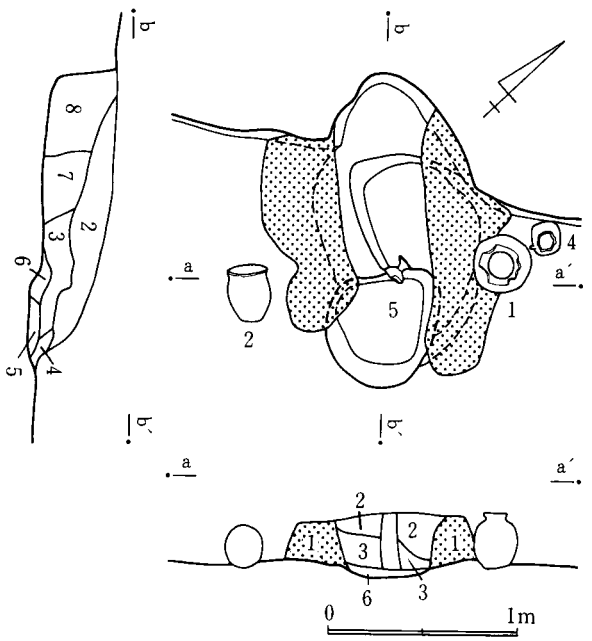
出土遺物　遺物は、甕、坏形土器、それに土製品がある。甕形土器は1～3で、1、2は大、小の差はあるが形状は酷似している。3は小形の甕で、口縁部は短かく緩やかに外反している。坏形土器は4で体部の破片である。土製品は5の土玉で、径1.4 cmを計り、中央に0.4 cmの孔があく。胎土、焼成良好で、色調は茶褐色を呈す。

D112出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	28.55	23.9	9.0	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	明茶褐色	
2	甕	26.1	18.4	8.0	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)明褐色	
3	甕	11.4	11.0	6.0	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	(外)暗灰褐色 (内)茶褐色	二次的に火を受けている。
4	坏	—	12.2	—	2/3	ヘラナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	

3．D135号遺構（図505～507、図版117－1、2、124）

II群の住居群内において南側に位置し、D099が近接している。



1　黄褐色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　焼土粒混入暗褐色土層
4　炭化粒、焼土粒混入暗褐色土層
5　黒褐色土層
6　褐色土層
7　灰混入暗褐色土層
8　ローム粒混入褐色土層

図505　D135号遺構カマド実測図

図506 D135号遺構実測図

遺構　北壁6.88m、東壁6.5mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は東壁、西壁に平行するような状況で6か所にわたりP_1～P_6まで検出した。径平均0.32m、深さ平均0.6mを計る。また、南壁中央部に接し、周辺に土手状の高まりを有する貯蔵穴P_7を検出した。長径0.8m、短径0.68m、深さ0.6mの規模である。壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.45m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは、掘り込みよりかなり住居内部から行われ、掘り込み部分の粘土は若干認められる程度である。天井部の遺存は認められない。

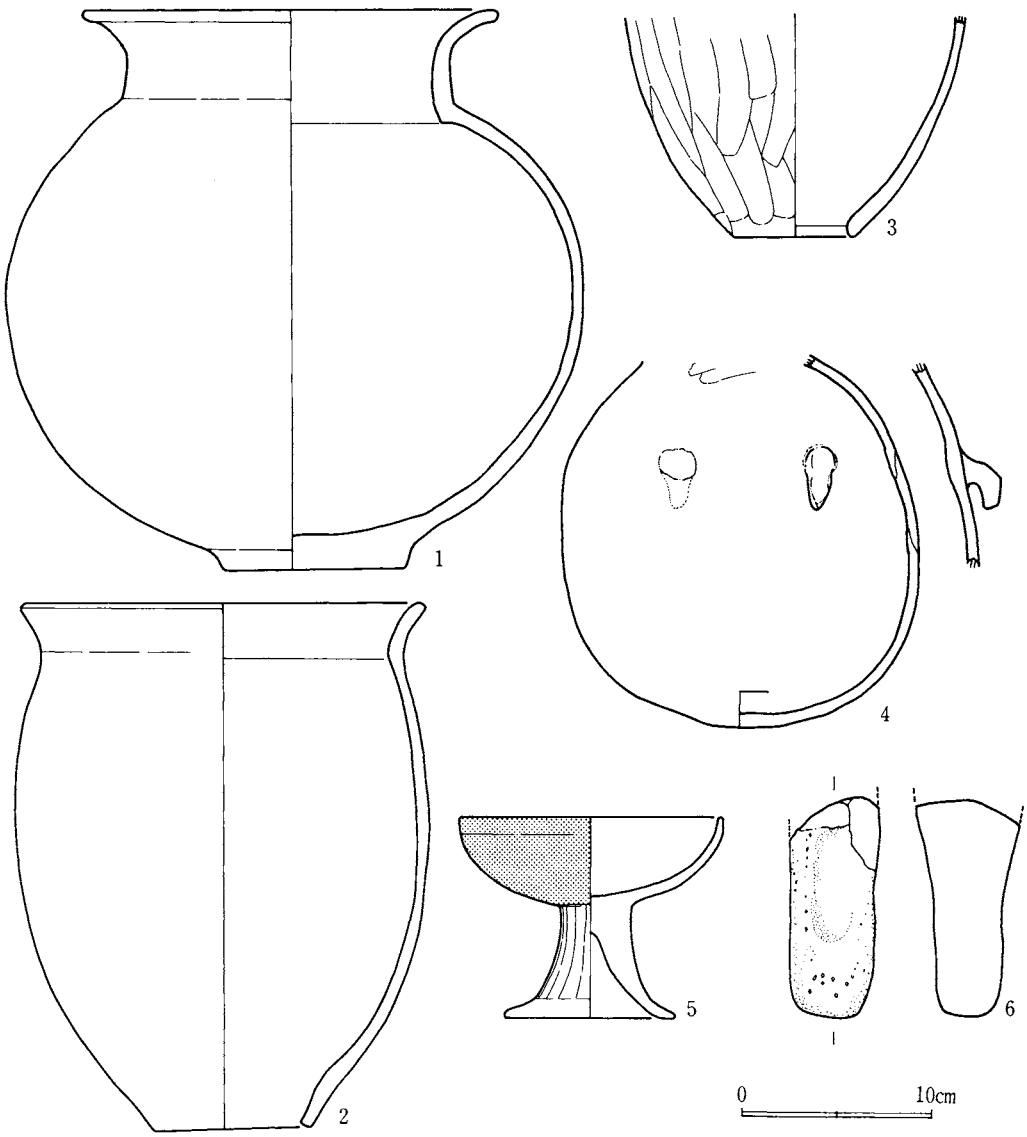


図507　D135号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心にカマド内などから出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、提瓶、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1で胴部が球形を呈し、口縁部は大きく外反している。甑形土器は2、3で長胴を呈するもので、いずれも単孔である。提瓶形土器は4で小把手を付けたもので類例は少ない。高坏形土器は5で坏部に赤彩が施されている。石製品は6で砂岩製の砥石である。

D135出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	29.1	21.7	9.5	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
2	甑	27.3	20.6	8.2	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
3	甑	—	11.4	—	1/3	ヘラ削り	小石	軟弱	暗褐色	
4	提瓶	19.0	—	—	2/3	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
5	高坏	10.4	13.8	8.8	完形	ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	赤彩

4．D136号遺構（図508～512、図版117－1、118、119、120－1、124、125、126）

Ⅱ群の住居群内において南側に位置し、D139が近接している。

遺構　北壁7m、東壁6.98mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.35m、深さ平均0.38mを計るものである。南壁に近く長径1m、短径0.8m、深さ0.7mを計る貯蔵穴P_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは床面上に行われ袖から煙道まで一体化している。天井部は遺存していない。火床部は長径0.54m、短径0.45m、深さ0.15mを計る楕円形の掘り込みを呈しており、焼土を堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入灰褐色土層、Ⅱ層ローム粒炭化粒混入黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層明褐色土層、Ⅴ層ロームブロック焼土粒混入褐色土層が堆積しており、遺物は床面ないしⅢ層下部より完形もしくは完形に近い土器が出土している。またカマド周辺に集中して出土する傾向も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、甑、鉢、坏、高坏、瑞形土器と石製品、土製品がある。甕形土器は1～7で、いずれも球形に近い胴部を呈し、口縁部は緩やかに外反している。6は口縁部、7は底部の破片である。甑形土器は8～10で、9は長胴を呈している。8は鉢形の形状を呈している。10は長胴で短い口縁部が外反する。いずれも単孔である。鉢形土器は11～13で、11、12

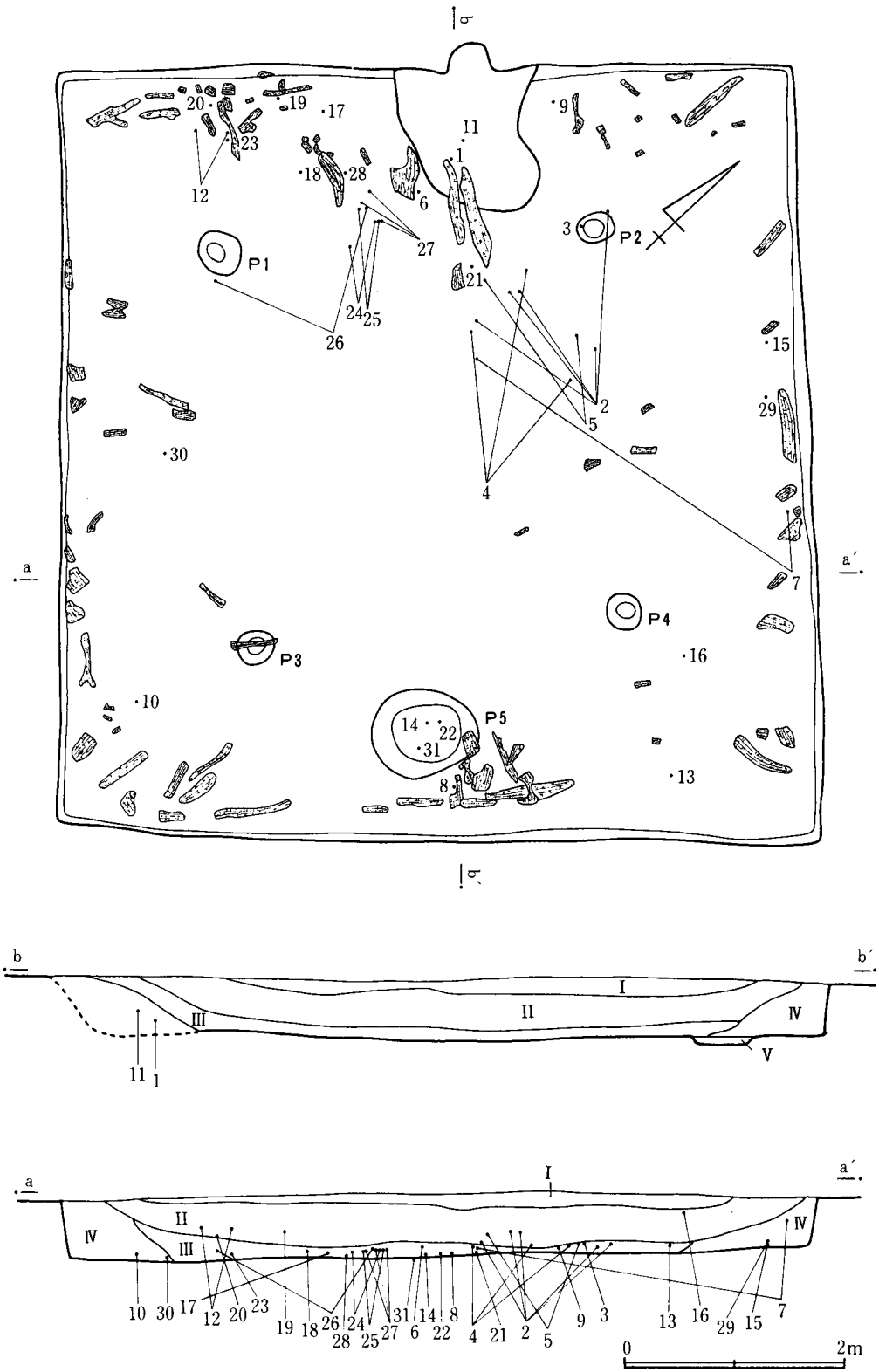
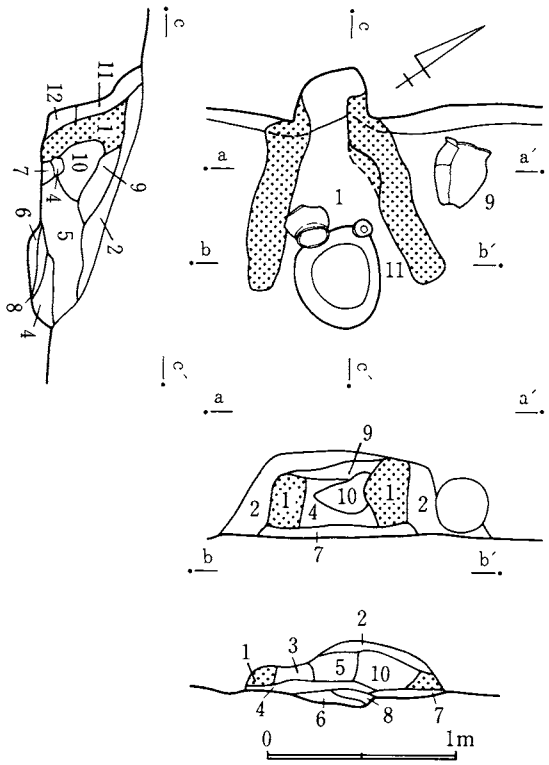


図508 D136号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 Ⅰ層混入黒褐色土層
3 焼土ブロック混入灰白色砂質土
4 炭化物混入褐色土層
5 褐色土層
6 焼土ブロック混入暗褐色土層
7 暗褐色土層
8 焼土層
9 焼土粒混入明褐色土層
10 焼土粒混入暗褐色土層
11 茶褐色土層
12 黒褐色土層

図509 D136号遺構カマド実測図

は平底、13は丸底を呈し、いずれも口縁部は短かく外反している。坏形土器は14～22で、14、15は手捏の小形なものである。16は平底で体部が内彎ぎみに開く。17～22は丸底を呈しており、19内面には暗文が、21には赤彩が施されている。高坏形土器は23～27で、いずれも同じ形状を呈し、内外面に赤彩が施されている。竈は28で、丸底を呈し胴部、口縁部に櫛による波状文が見られ、胴部に小孔を有している。須恵器である。石製器は29で、滑石製の紡錘具である。径3.7 cm、厚さ 1.1 cm で、中央に 0.7 cm の軸孔があく。重さ21.4 g である。土製品は30、31で、30は径 5.7 cm 、厚さ 2.7 cm で、中央に 0.9 cm の軸孔があく紡錘具である。胎土、焼成良好で、色調は褐色を呈し、重さ93.8 g を計る。31は土玉で、径 3.5 cm で中央に 0.7 cm の孔があく。胎土、焼成良好で、色調は黒褐色を呈す。

D136出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	20.0	15.6	7.3	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡黒褐色	二次的に火を受けている。
2	甕	33.6	18.2	6.9	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	

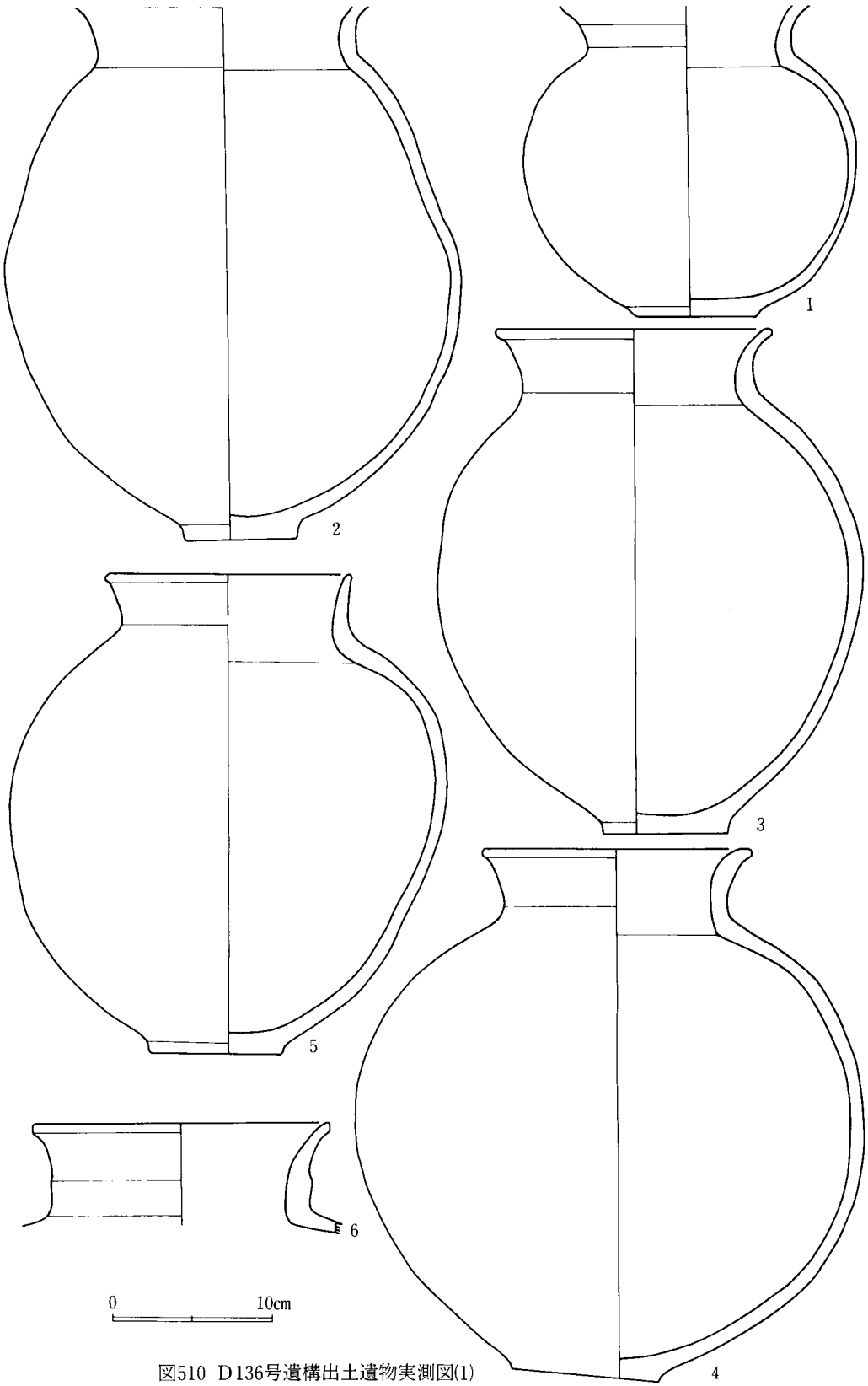


図510 D136号遺構出土遺物実測図(1)

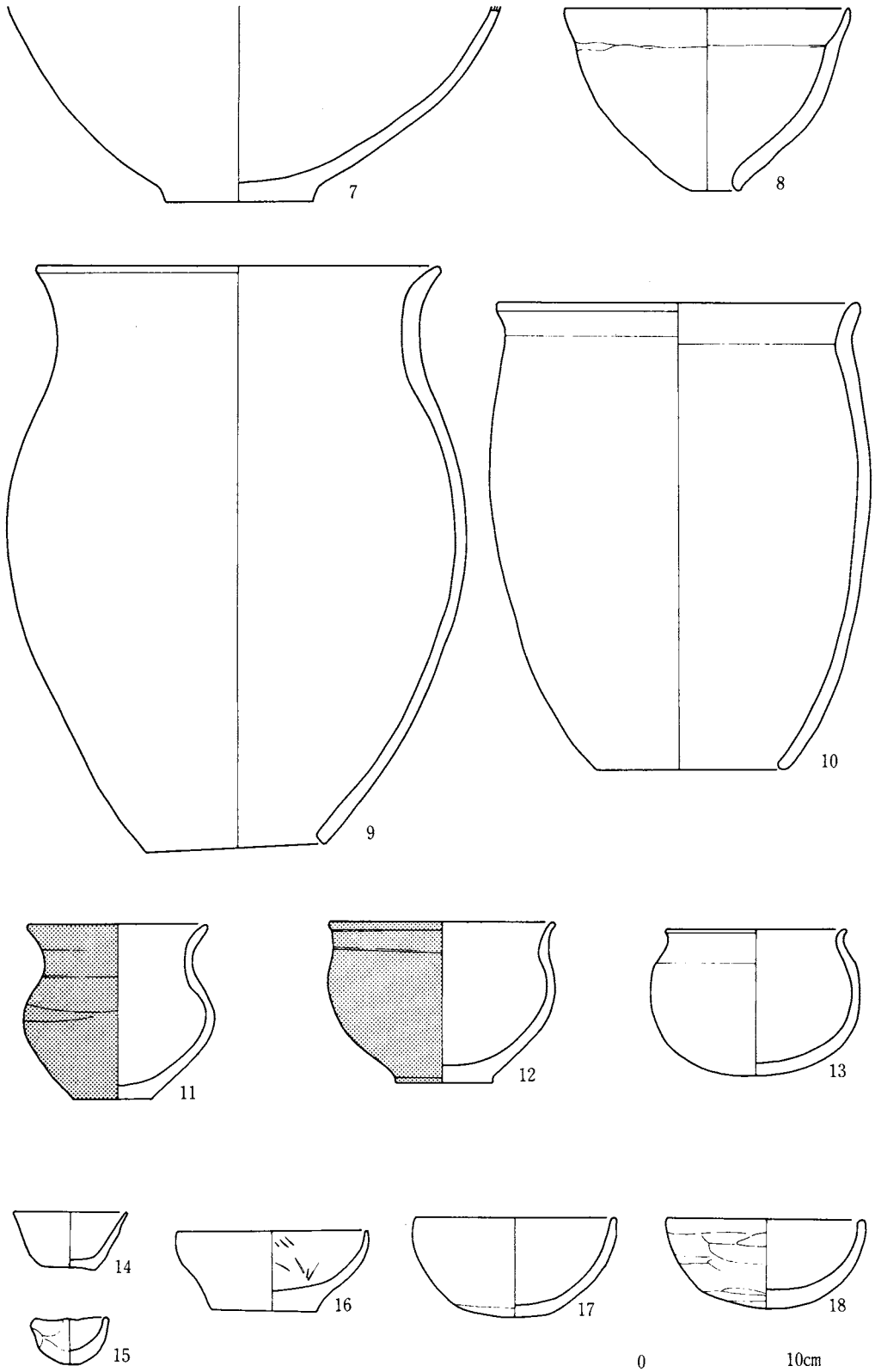


図511 D136号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	30.1	17.0	7.6	完形	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	甕	32.4	16.5	9.2	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
5	甕	29.6	15.0	8.1	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
6	甕	—	18.1	—	1/3	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	(外)淡赤褐色 (内)黒褐色	
7	甕	—	—	9.0	1/3	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	
8	甑	11.3	17.4	3.0	完形	内外面ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗黒褐色	二次的に火を受けている。
9	甑	35.2	24.4	11.0	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	淡茶褐色	
10	甑	28.3	22.0	11.6	完形	ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	二次的に火を受けている。
11	鉢	10.6	10.8	4.8	完形	へり削り	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	赤彩

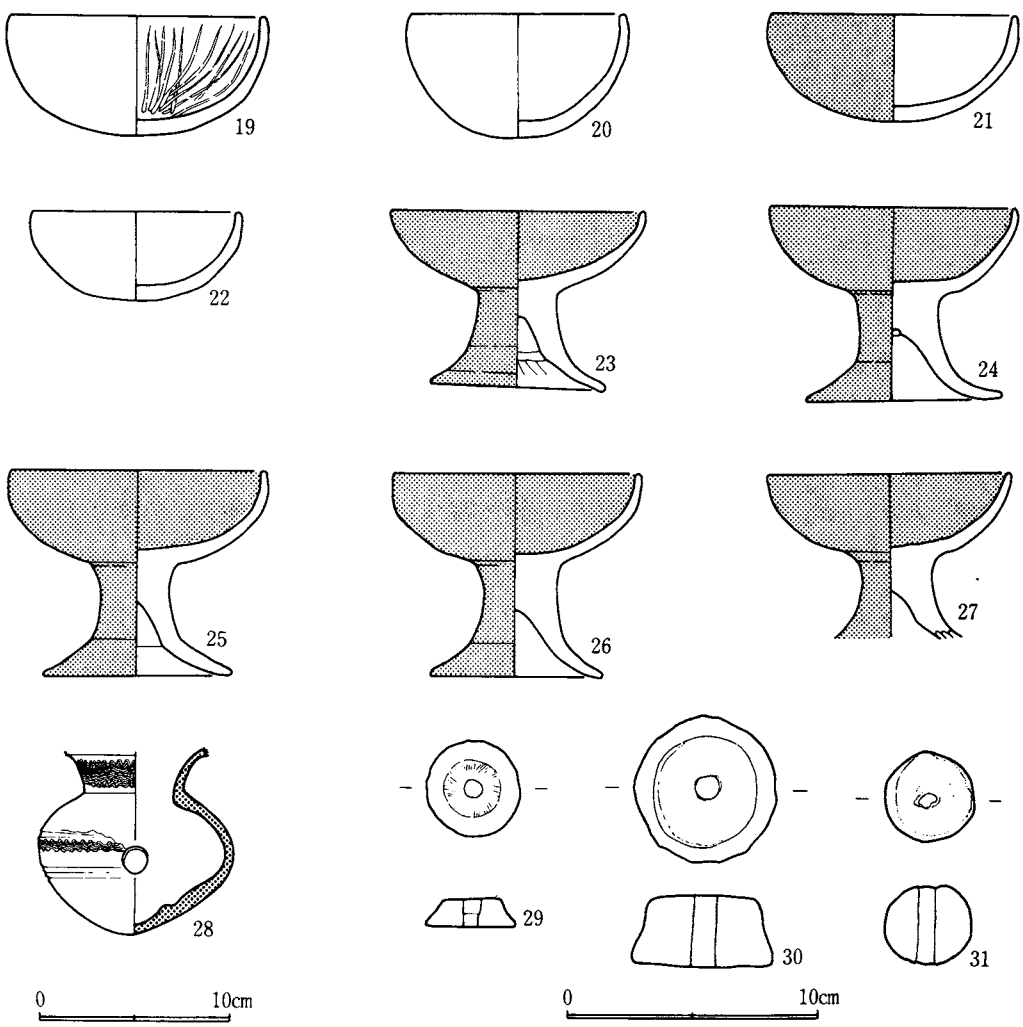


図512 D136号遺構出土遺物実測図(3)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
12	鉢	9.7	13.6	6.0	完形	ヘラ削り	——	堅緻	淡赤褐色	赤彩
13	鉢	8.8	10.9	—	完形	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	(外)淡赤褐色 (内)灰褐色	
14	手捏土器	3.4	6.8	3.1	完形	手捏	砂粒	やや軟弱	淡褐色	
15	手捏土器	2.7	4.2	—	完形	手捏	砂粒	やや軟弱	暗褐色	
16	坏	4.6	11.6	6.4	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
17	坏	6.0	12.2	—	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
18	坏	5.5	11.8	—	完形	ヘラ削り	——	やや軟弱	暗褐色	
19	坏	6.2	13.2	—	完形	ヘラ削り	——	堅緻	暗赤褐色	
20	坏	6.5	11.0	—	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
21	坏	12.8	5.6	—	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
22	坏	4.6	10.4	—	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
23	高坏	9.2	13.3	9.0	完形	ヘラ磨き	——	堅緻	赤褐色	内外面赤彩
24	高坏	10.1	12.7	10.0	完形	ヘラ磨き	——	堅緻	淡赤褐色	内外面赤彩
25	高坏	10.8	13.0	9.9	完形	ヘラ磨き	——	堅緻	淡赤褐色	内外面赤彩
26	高坏	10.6	13.0	9.0	完形	ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	内外面赤彩
27	高坏	—	12.6	—	2/3	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	暗赤褐色	内外面赤彩
28	瑞	(9.8)	—	—	2/3	波状櫛描文	砂粒	堅緻	黄白色	須恵器

5．D139号遺構（図513～515、図版120—1、126）

II群の住居群において南側に位置し、D136が近接している。遺構の規模は異なるものの内部施設等D136と酷似している。

遺構　北壁5.64m、東壁5.43mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ0.48m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.3m、深さ0.84mを計るものである。南壁に近く長径0.8m、短径0.7m、深さ0.44mを計る貯蔵穴P_5を検出した。壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.15m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。カマド本体は掘り込み部分になく、床面上に貼り込まれ、袖部から煙道部まで一体化している。天井部は遺存していない。火床部は長径0.65m、短径0.5m、深さ0.1mを計る楕円形の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗色土層、III層茶褐色土層、IV層褐色土層、V層黄褐色土層が堆積しており、遺物は床面上、あるいはカマド、貯蔵穴内から出土しており、完形ないし完形に近いものが多い。

出土遺物　遺物は、甑、高坏、坏形土器とガラス小玉がある。甑形土器は1で、胴部は球形

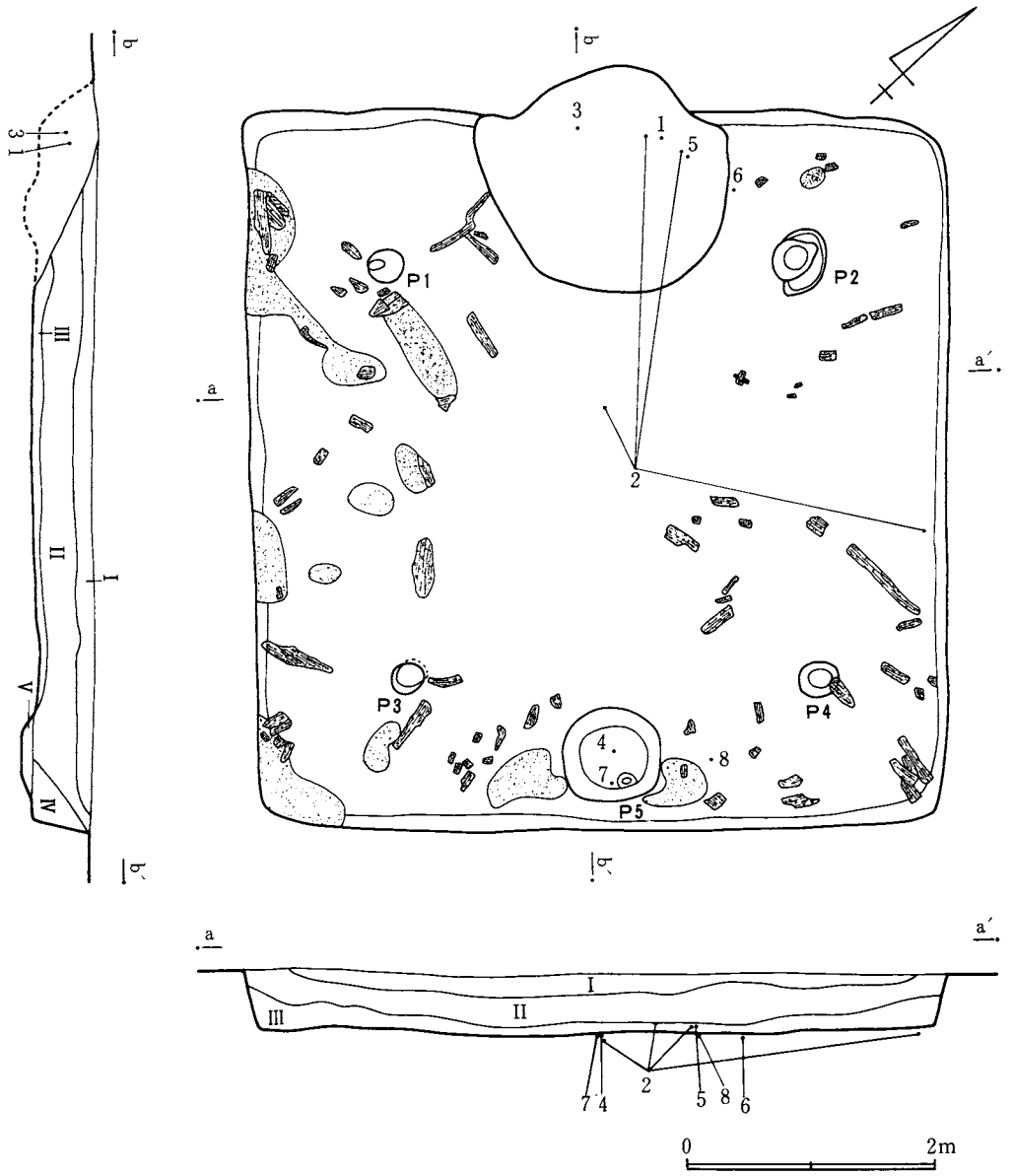
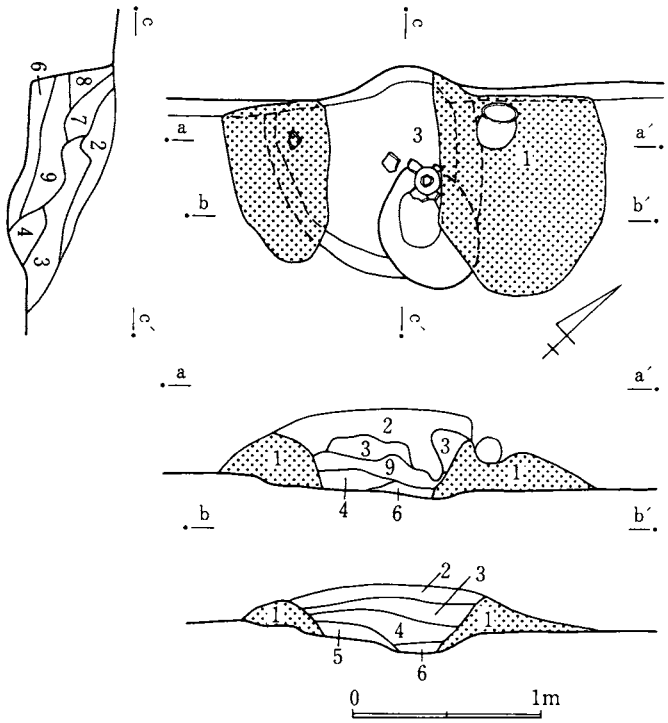


図513 D139号遺構実測図

に近い形状を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。高坏形土器は2～4で、2の坏部には稜が認められる。3、4は同じ形状を呈し、赤彩される。坏形土器は5～7で、いずれも丸底を呈し、5、6は内彎ぎみに開く体部を呈し、7は直立する体部を呈している。ガラス小玉は8で径 0.5 cm で緑色を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　黒褐色土層
4　焼土粒混入褐色土層
5　灰混入暗褐色土層
6　ロームブロック層
7　焼土粒混入暗褐色土層
8　Ⅰ層混入暗褐色土層
9　焼土灰混入暗褐色土層

図514　D139号遺構カマド実測図

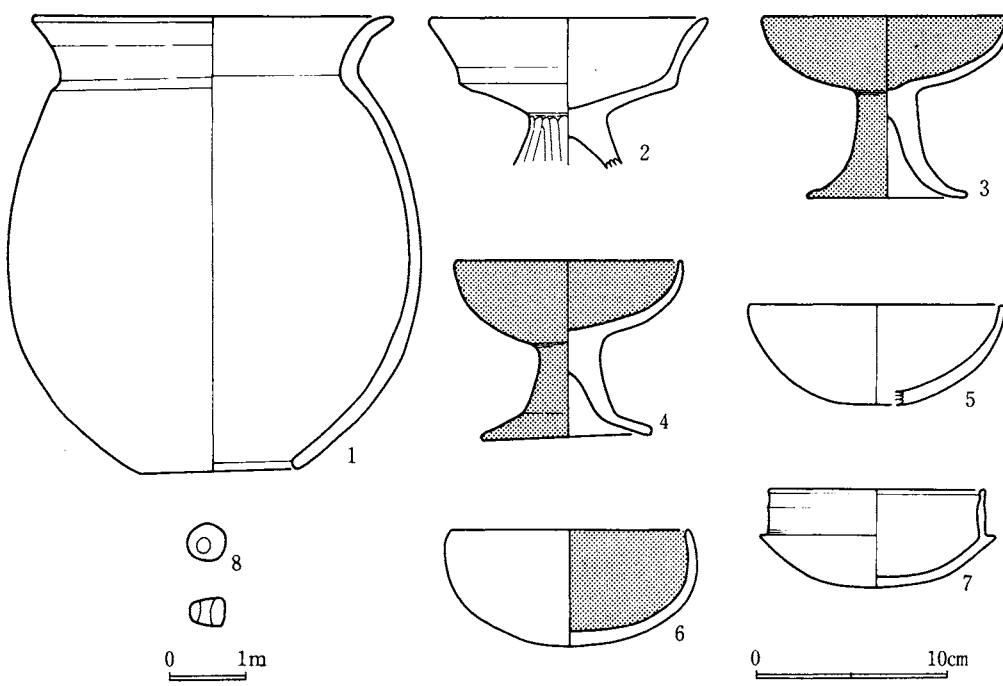


図515　D139号遺構出土遺物実測図

D139出土土器一覧

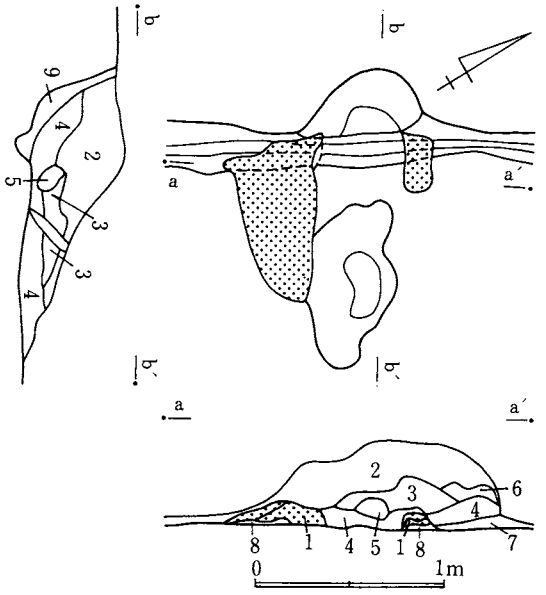
番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甑	23.6	18.6	8.2	完形	ヘラナデ	砂粒	堅緻	淡茶褐色	甕の再利用?
2	高坏	7.6	14.6	—	2/3	ヘラナデ 脚部ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
3	高坏	9.5	13.0	8.2	完形	ヘラ磨き	砂粒	やや軟弱	淡褐色	赤彩
4	高坏	9.2	11.0	9.0	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	淡赤褐色	赤彩
5	坏	5.2	13.3	—	2/3	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
6	坏	6.0	12.4	—	完形	ヘラ磨き	砂粒	軟弱	淡赤褐色	赤彩
7	坏	5.1	11.0	—	完形	ヨコナデ ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	暗褐色	

6．D172号遺構（図516～518、図版120－2、3、121－1、126）

II群の住居群内において西側部分に位置し、D176が近接している。覆土上層部に攪乱を受けているものの、全体は充分把握できる。

遺構　北壁4.8m、西壁4.7mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.03mの壁溝が四壁に認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置されており、P_1～P_4を検出した。径平均0.22m、深さ平均0.4mを計るものである。南東壁コーナー部分には長径0.76m、短径0.45m、深さ0.5mを計り楕円形を呈する貯蔵穴P_5を検出した。

カマド　西壁中央部を0.35m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築しているが、本体は床



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗黄褐色土層
3　明黄灰色土層
4　明赤灰褐色土層
5　黄褐色土層
6　焼土粒混入黒色土層
7　ローム粒混入暗褐色土層
8　ローム粒混入暗黄褐色土層
9　茶褐色土層

図516　D172号遺構カマド実測図

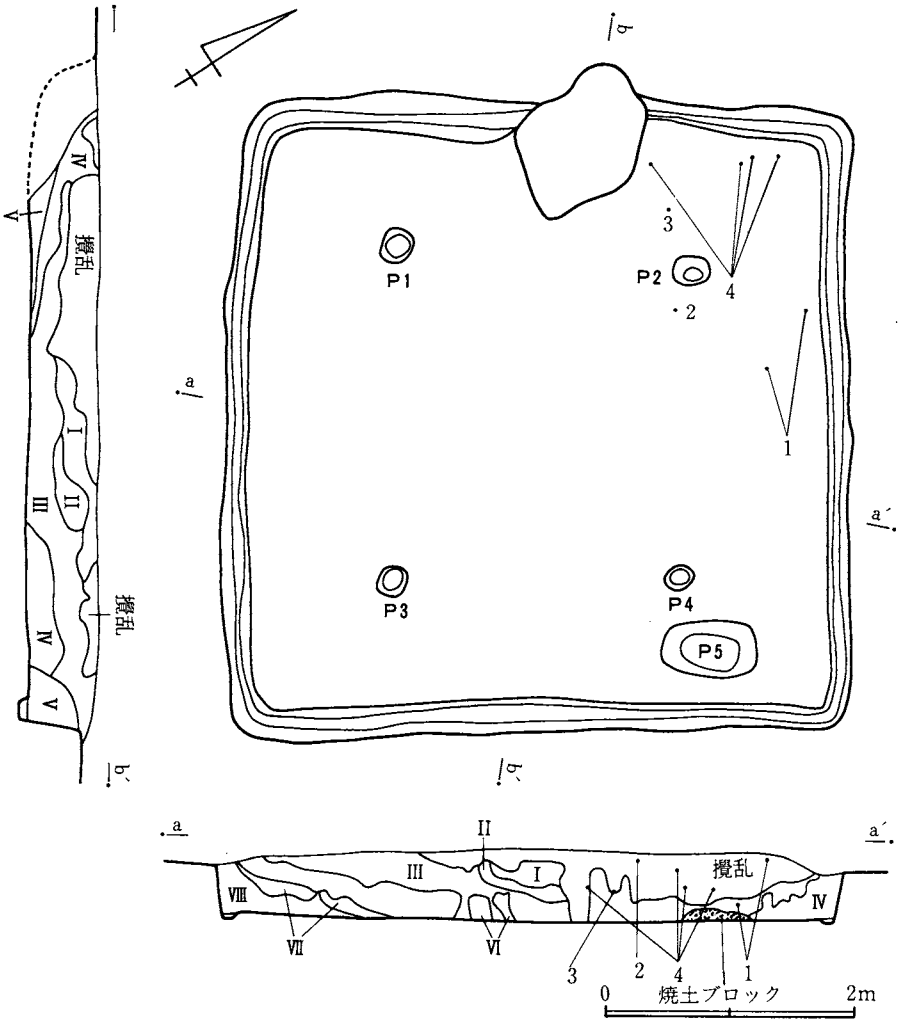


図517 D172号遺構実測図

面上に位置している。粘土の貼り込みは左右が著しく異なっており左袖は煙道まで一体化しているのに対し、右袖は煙道の一部を遺存するのみである。天井部は遺存していない。火床は長径0.85m、深さ0.06mの掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層暗黒褐色土層、II層暗黄褐色土層、III層暗褐色土層、IV層黄褐色土層、V層黄灰色土層、VI層黒色土層、VII層黒褐色土層、VIII層ロームブロック層が堆積しており、遺物は覆土上層に集中して出土している。土層断面の状況から人為的な埋設が行われた可能性が考えられる。

出土遺物　遺物は、甑、甕、壺、台付甕形土器がある。甑形土器は1で底部を欠損しているが、全体の形状から甑と考えられる。甕形土器は2で口縁部が直立する形状を呈している。3、4は古墳時代前期の土器であり、住居との関係はない土器である。3は壺形土器の複合口縁部

で、4は台付甕形土器で頸部上半を欠損しているが胴部は球形を呈する土器である。

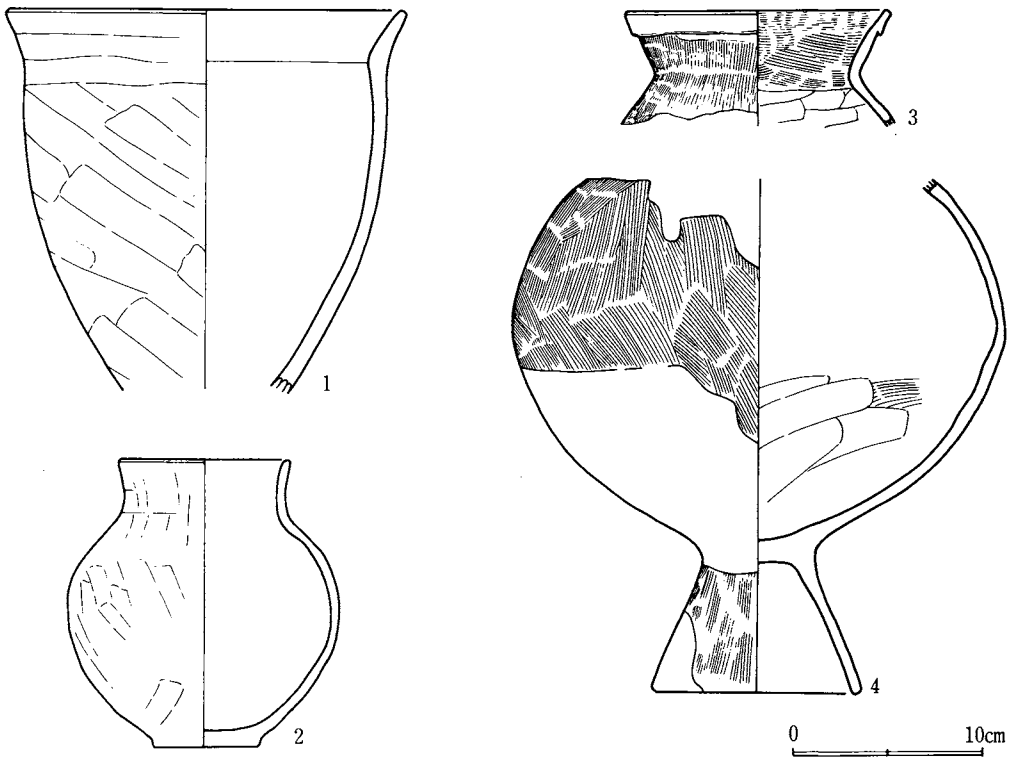


図518 D172号遺構出土遺物実測図

D172出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甑	—	20.7	—	2/3	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡黒褐色	
2	甕	14.8	8.8	5.6	完形	かるいヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡茶褐色	
3	壺	—	13.7	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
4	台付甕	—	—	10.4	2/3	ハケ目	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	

7．D176号遺構（図519、520、図版121－2、3）

II群の住居群内において西側部分にほぼ南北に分布する住居の中央に位置し、北にD177、南にD172が近接している。

遺構　南壁3m、東壁4.2mで隅丸長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し0.12m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況でない。柱穴、壁溝は検出できなかった。

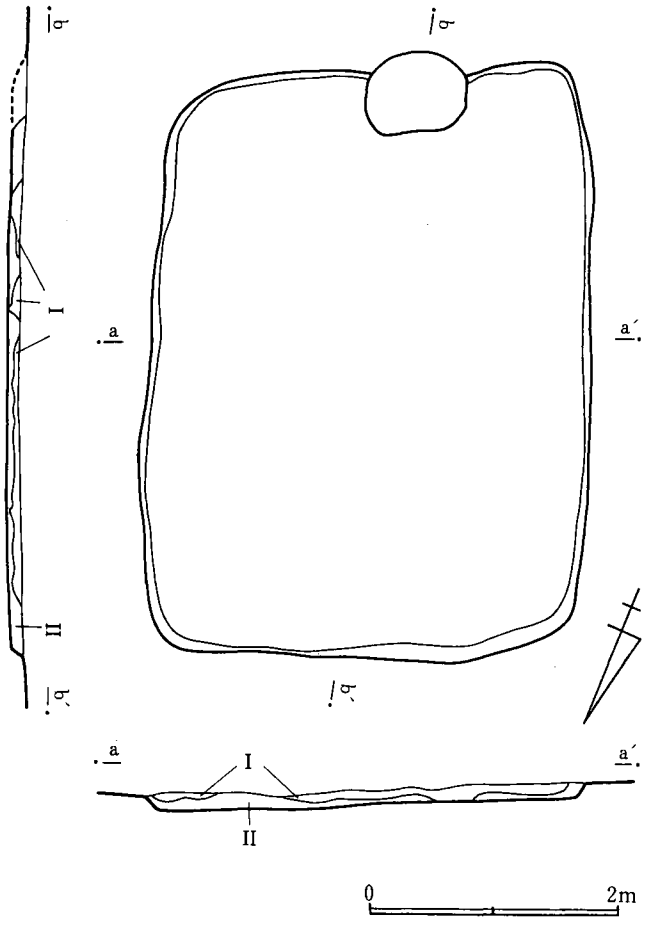


図519 D176号遺構実測図

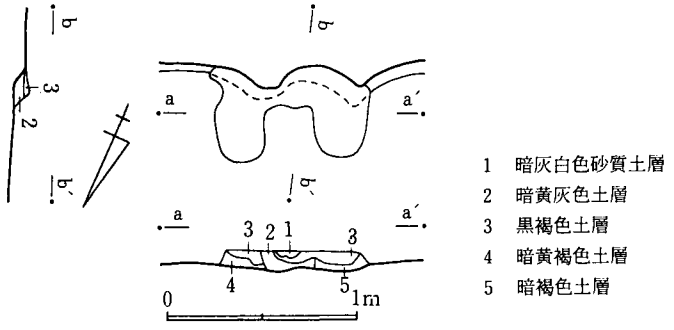


図520 D176号遺構カマド実測図

カマド　住居自体の掘り込みが浅いためか遺存状況は悪い。南壁中央部に構築されているが、壁の掘り込みはなく、また粘土の貼り込みも検出できない。ただ袖芯の一部を構成していたと考えられる褐色土がほぼ馬蹄形の広がりを残すだけであり、構造は不明である。

覆土はⅠ層黒褐色土層、Ⅱ層暗黄褐色土層が認められるが、図示できる遺物の出土は皆無である。

8．D177号遺構（図521～523、図版122－1、2、126）

Ⅱ群の住居群内において西側部分に位置し、ほぼ南北に分布する住居の最も北側にあたる。遺構の北東部分は溝によって攪乱されているが、幸に攪乱が浅いため全体を把握することは可能である。

遺構　北壁5m、東壁5.17mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.6m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.05mの壁溝が四壁に認められる。床面は全

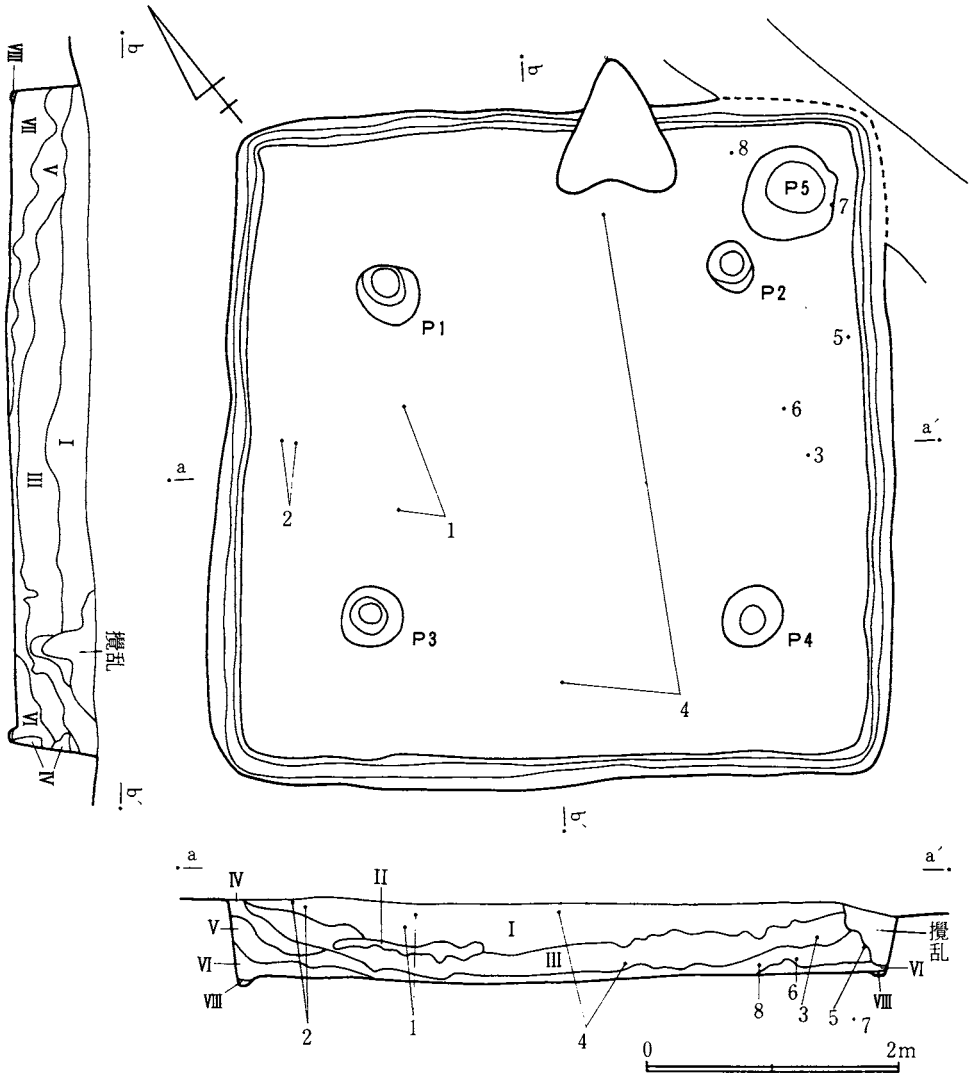


図521　D177号遺構実測図

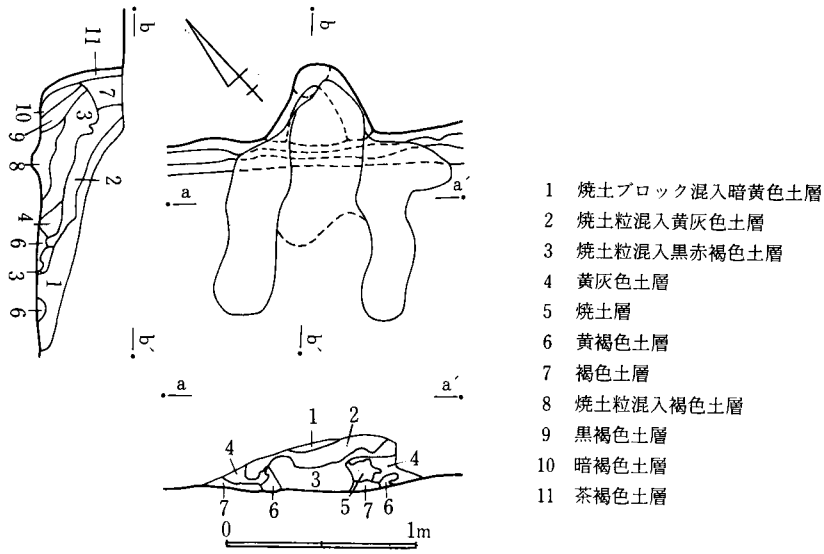


図522 D177号遺構カマド実測図

体に軟弱な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、P_1～P_4を検出した。径平均0.48m、深さ平均0.5mを計るもので、P_4を除いて2段に掘り込まれている。溝によって攪乱を受けている下部より、径0.7m、深さ0.4mを計る貯蔵穴P_5を検出した。

カマド　北壁中央部を0.4m掘り込んで構築しているが明瞭な粘土の貼り込みは確認できない。袖部等として考えられるのは4層黄灰色土層、6層黄褐色土層、7層褐色土層の堆積している部分である。この3つの層は壁の掘り込みに向って広がりを呈している。壁溝はカマド下部にも認められる。

遺物出土状況　I層暗灰色土層、II層黒赤色土層、III層黒色土層、IV層黒褐色土層、V層暗

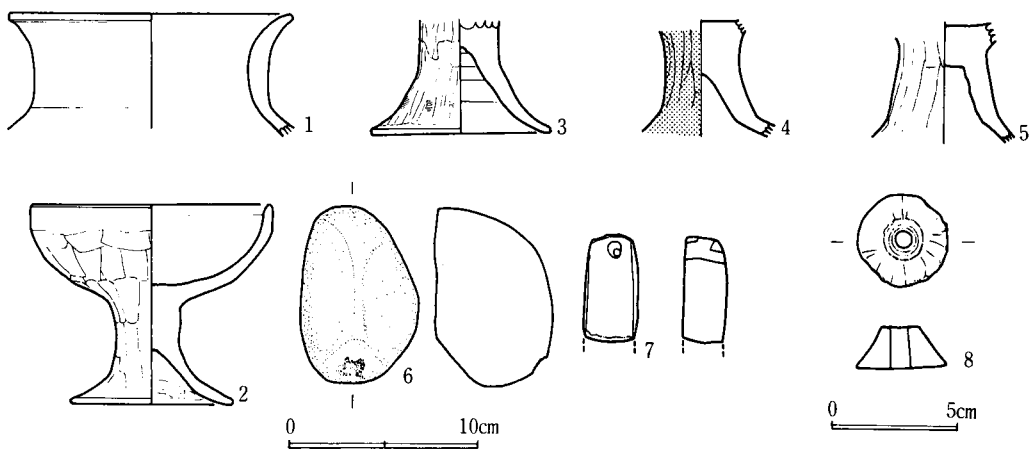


図523 D177号遺構出土遺物実測図

黄褐色土層、VI層暗褐色土層、VII層黄褐色土層が堆積しており、遺物は覆土上層より出土しており、遺構に共伴するものとは考えられない。

出土遺物　遺物は、甕、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1の口縁部破片である。高坏形土器は2～5で、2は完形であるが他は脚部の破片である。石製品は6～8で、6は自然石を用いた敲石である。7は凝灰岩製の砥石で端部に孔を有している。8は滑石製の紡錘具で、径 3.7 cm、厚さ 1.6 cm で中央部に0.6cmの軸孔があく。

D177出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	14.9	—	口縁部のみ	内、外面ヘラナデ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	高坏	12.4	14.6	8.5	完形	外面ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡褐色	
3	高坏	—	—	9.6	脚部のみ	外面ヘラ磨き	——	やや堅緻	淡茶褐色	赤彩
4	高坏	—	—	—	脚部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	赤彩
5	高坏	—	—	—	脚部破片	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	

第4章　ま　と　め

第1節　古墳時代中期の様相

1．石製模造品の工房跡について

古墳時代中期の集落跡については、事実記載において述べたように2群から構成されている。各群で検出した遺構数は、第I群で2軒、第II群で3軒であるが、群の位置する周辺の状況を見れば、第I群においては東側の地区界外の地域、第II群においては南側の急崖部分に遺構の存在、あいは存在した可能性があり、群としての遺構をすべて検出したとは言い難い点がある。しかしながら、今回の調査において検出した中期の遺構は5軒の内4軒までが竪穴住居跡の遺構を呈しながら、住居内からはおびただしい量の石製模造品の成品や未成品が出土した工房跡でもあり、中期の集落は工房跡群として特徴づけることができよう。

遺構は、古墳時代中期に一般的に認められる構造を呈しており、工房に付設されるいわゆる工作用ピットは、貯蔵穴と重る面があり判然としない。その中で、D133号遺構において、底面に粘土の貼り込みを施したP_3を検出したが[註1]、貯蔵穴を転用した可能性が調査時の所見としてあり、遺構構築時から工作用ピットが設備された例は皆無であると言えよう。

遺構の平面形は方形を基調としながらも多少の変化が認められる。第I群では規模において大、小の差を生じているものの内部施設においては、貯蔵穴が南西壁コーナー部分に位置する

など共通する状況を呈している。第II群ではD131号遺構が不整な長方形を呈している以外は整然とした形状を呈している。円部施設の内、炉跡はほぼ同位置に認められる。貯蔵穴はいずれも南東壁コーナーに設置されているが、D132号遺構のようにピットの周辺が土手状の高まりを有するものもあり、D133号遺構についてもD132号遺構とは様相を異にするがピット周辺の床面の高まりが認められる。柱穴が明瞭に検出できたのはD132号遺構のみであり、他の遺構と異なっており、他の内部施設との比較においてもこのD132号遺構の特異性が指摘できよう。

出土遺物の内石製模造品に関する遺物は、遺構ごとに集計したとおりであるが、第II群のD133号遺構が最も多量に出土しており、合計15,380点に達している。最も少ないのは第I群D035号遺構で、2,177点である。出土点数の内最も多いのは石片で、次いで臼玉未成品、臼玉となっており、剣形品、勾玉、双孔円板等はきわめて少量である傾向が窺える。石片の出土率は平均97%を占めており、模造品製作工程を充分に反映している資料であるとは言えず、成品については遺構外に搬出されている可能性を考慮しなければならない。また、多量に出土した石片等の出土層位は遺構ごとに相違しており一括した記述は不可能である。

第I群のD035号遺構は、II層出土が多く次いでI層であり、床面上、あるいは貯蔵穴内より出土する傾向はきわめて少量である。この状況からすれば工房跡であるか疑問が生じるところであるが、炉跡Bの南側の床面において研磨工程において生じる砥糞の付着が認められており、明らかな生産活動の存在したことを裏ずけている。また、鑿痕を有する原石の出土からも傍証できよう。

第II群のD131号遺構は、II層、IV層出土が多く、次いでIII層、I層であり、床面上、あるいは貯蔵穴内より出土する傾向は少ない。床面上層より鑿痕を有する原石の出土や、P_4の内部で白色泥状物が若干確認されている以外は工房跡の証左はないが、成品、未成品の出土数を見れば工房跡として差し支えないであろう。

第II群のD132号遺構は、石片等の出土量が少ないが、その反面、出土層位は床面上の出土が多く、総出土点数の約51%を占めており、他の遺構と比較してきわだった状況を示している。また、平面的な分布状況においては、4か所に床面出土地点が纏りを呈している。1か所は18、29ブロック部分、1か所は42、53ブロック部分、1か所は86ブロック部分、残る1か所は59ブロック部分である。特に土手状の高まりを有するP_6を中心とした地点に顕著であり、大形の原石、砥石の出土と相俟って、生産活動の一端が窺えよう。

第II群のD133号遺構は炭化材の出土によって焼失した遺構である点が注目できる。遺物は、II～IV層に多く、次いで床面上から出土しているが、ブロックによっては床面出土が他を上回っている傾向も認められる。総出土点数は4軒の内最も多い関係かもしれないが、他の遺構では臼玉未成品が3～32%の率で出土しているのに対し、約52%に達している。反面、臼玉の完成品は38%となっており、他の遺構中最も多いが出土率の差はあまりない。このことは、完成

品が遺構外に搬出されている可能性を示唆するものであろう。

2．臼玉の製作技術について

緑泥片岩系の石は、関東山地に分布する岩石で、南関東の荒川上流、秩父長瀞付近より産出することが知られている[註2]。緑泥片岩は軟質で石脈に沿って容易に剝離したり、研磨することが可能なため他用されている。

検出した原石について、D035号遺構出土例により復元すれば最大長 21 cm、最大重量4,500 g であると考えることが可能で、露天採掘によって破砕運搬されてきた原石であることがD132号遺構出土の原石は物語っている。玉類についての基本的製作過程は、採石—荒割—形割—側面打裂—研磨—穿孔—仕上げの工程を経るものと考えられており[註3]、本遺跡における製作工程についても、この範囲の中で考えられることが可能であろう。

搬入された原石は、打撃が加えられて掌中に納まる程度の大きさに分割、剝離される荒割の工程が施される。荒割によって剝離された剝片は、さらに素材に応じた厚さに剝離される。原石より鏨状の工具を用い、刻目をつけ適当な剝片を生産しており、刻目は、工具のすべり止めと剝離の際の加撃面を設定することに意味あるもので、変成作用の進んだ石質の場合には、刻目をつけず、刀子などによって直接石脈に沿って剝ぎとることが可能である。剝片は、打面部がはじけとび、全体の形状は不定形を呈しており、同一規格の剝片となっていない。これはむろん母岩の形状によるものと推定される。なお、剝離の際の工具は鏨と言われているが、鏨と断定できる資料は出土していない。ただし、工具の先端の形状については、原石の表面に残る痕跡より、刃先が幅 2.5 cm の角ばったものであることが推定できる。

成品として遺構内に遺存した遺物は、臼玉が多く、しかも未成品の存在もあり、製作工程が比較的容易に把握できるため、臼玉に関して記述したい。

臼玉は、剝離された 0.2～0.4 cm 程度の厚さの剝片に研磨を施し、面調整をしている。その後 0.3～1 cm 大の多角形に切截した形割の工程を経て、穿孔される。穿孔については、充分に実態が把握できないが、棒錐状の穿孔具を使用している可能性があり、しかも孔痕を観察すれば1種類でないことが理解できる。1種は先端が尖がるもの[註4]、1種は先端が平ノミ状に扁平となっているものが考えられる。貫通した孔痕を観察すると螺線状の痕跡があり、終孔部直前で割れて貫通した状況を呈している。また、D133号遺構出土の未成品中には明らかに平ノミ状の扁平な錐によって穿孔された例があり、後者が穿孔作業において多用されていたと考えられる[註5]。前者は、穿孔開始に先だって行なわれる当たり付けの際に使用したものと考えて良いであろう。しかし、具体的な錐の資料が出土していないのが危惧される。

仕上げの工程については具体的に指摘できる遺物がないのが残念であるが、完成品より推察すれば砥石による研磨が施されている。研磨される部分は側面に限定されており、肉薄なもの

はしばしば中央に稜が認められる。擦痕の状況は材質上からみて砂岩製の中砥であろう。未成品の孔痕に認められる螺線状の痕跡は、完成品には明瞭に認めることができず、仕上げ作業を考える上で注目できようが、その理由については明確にすることはできない。

3．終りに

古墳時代中期の様相について、石製模造品の工房跡について、遺構と遺物より記述を進めてきたところであるが、遺物の内土器については遺構によって多少の変化が認められるものの、型式的にはほぼ同時と考えて良いであろう。ただし、細部に検討すれば石製品が床面上から出土す遺構もある一方、覆土中から出土する遺構もあり、生産活動の面においては実際には多少の差を認めなければならないであろう。この点については土器を中心に、石製品について調査したところ、攻玉技術の面からの相違は認めることができず、工房が同一技術下において行われていたことを物語っていると言って良いであろう。

この専業的生産集団がどのような背景下において位置するかは、祭祀遺跡や古墳との関係において考えなければならないところであるが、管見に触れる資料が充分でないため、この問題については今後の課題としたい。ただし、D035号遺構からは、銅鏃が床面上より出土している点に注目したい。銅鏃は千葉県内において56例が出土しているのが知られており、その中心は古墳に求めることができよう。住居跡出土例はその内の13例で少なく特異なあり方として見ることができる[註6]。古墳出土の銅鏃は族長権の象徴として意味づけされているところであり、副葬される多くの古墳は前期に比定できる。一方住居跡出土の銅鏃は五領期の土師器と共伴する傾向を示しており、やはり前期に多いと考えて良いであろう。住居出土の銅鏃のあり方は、古墳に副葬される段階以前の所産であるとの指摘があり[註7]、今これに付け加えるものはないが、和泉期に比定できる石製模造品工房跡から銅鏃が出土した事実は、歴史的な意味があると思われる。族長権の断絶行為が銅鏃を副葬することに意味あるとすれば石製模造品の専業的生産集団は在地族長層との密接な関係をもつものと理解でき、族長層は傘下に専業的生産集団を包括し祭祀権を思いのままに誇示していたと考えられる。近傍に径12m、墳丘高1.5mの円墳、菅地台古墳[註8]が位置しているが、未調査であるため時期等について明かでないので言究することはできないが、北海道遺跡においても石製模造品工房跡が検出されていること[註9]も考慮すれば、当該地域においてかなりの勢力を有する族長層の存在が考えられる。

註

1　工作用ピットに認められるいわゆる白色泥状物とは相違するものである。

2　千葉県文化財センター　『京葉』II　昭和52年

3　寺村光晴　「石工」　『考古学講座』　9　昭和46年

4　先端が尖がると言ってもV字状でなく、U字形の錐を想定できる。

5　註3の文献によれば、平ノミ状の扁平な錐はタタキ法による穿孔に用いられたとされ、弥生、古墳時代の玉類には検出されていないとされている。

6　杉山普作「古墳時代銅鏃の二、三について」『古代探叢』　昭和55年

7　註6の文献に同じ

8　八千代市史編さん委員会　『八千代市の歴史』　昭和53年

9　千葉県文化財センター　『千葉県文化財センター年報』5　昭和56年

第2節　古墳時代後期の様相

1．遺構について

古墳時代後期の集落跡については、事実記載において述べたように2群から構成されている。各群で検出した遺構は、I群で2軒、II群で8軒の合計10軒である。この10軒をもって後期の集落跡がすべて検出できたわけではなく、I群にあっては飯綱神社境内に、II群にあっては須久茂谷津に面する急崖部分に遺構の存在、あるいは存在していた可能性がある。特に飯綱神社境内には、スポット状に貝殻が堆積する部分を認めることができ、遺構の存在が想定できる。

後期における集落跡のあり方は、中期の集落跡と類似する状況を呈していることが一瞥できる。台地は新川、須久茂谷津側より入り込む小支谷によって数か所が蚕食されており、集落占地においては古墳時代のみならず、各時代にわたり大きな影響を与えているところである。台地南面には、ヲサル山遺跡との境に入り込む支谷と、台地の中央部に入り込む支谷とがあり、この内中央部の支谷が集落立地に大きな役割を果たしていたと考えられる。II群の地域は中期の集落立地とまったく重複しており、少なくとも権現後遺跡が位置する台地においては古墳時代中期と後期において、自然環境の面では相違がなかったのではないかと考えられる。

遺構は、方形の平面形が主流であるが、規模や内部施設において、かなりの相違が認められる。I群においてはD005が方約6mに対し、D008は方約3.7mであり、著しい差を生じている。内部施設の点においては、柱穴がD008には認められない。カマドは北壁中央部近くに構築され、指向方向もほぼ同一である。出土遺物から見れば規模の相違にかかわる優位性は認めることがでず、時期は、ほぼ同時期として考えて良いであろう。一方、II群においては遺構数がI群に比較して多いためかもしれないが、規模、内部施設等における相違点が認められる。まず、規模の点からすれば、方約3m前後（D099、D112、D176）、方約5m前後（D139、D172、D177）、方約7m前後（D135、D136）に分かれている。小形の住居は、方形を呈するものの壁コーナー部分が若干丸味を帯びたり、壁が直線構成されないなど、全体的に雑な構築であると指摘できよう。また、柱穴、壁溝も認められない。カマドは北壁側に構築される例が多

い中で、D176は南壁に構築されている。中形の住居は、主柱穴を備え、カマドの脇、あるいはカマドに対面する壁に近く貯蔵穴が設置されている。貯蔵穴は円形もしくは楕円形を呈しており、方形のものに対して雑な造りと言えよう。[註1] D139には壁溝が認められない。カマドは、壁を若干堀り込んで構築される例が多い中で、D177は最長0.7mの掘り込みを呈している。また、D172、D177のカマドの下には壁溝が認められる。大形の住居は、掘り込みが深く整然とした状況を呈し、いずれも主柱穴を配している。D135は、柱穴が6か所に認められる唯一の例である。貯蔵穴は、カマドに対面する壁に近く設置されており、楕円形の平面形を呈している。D136の貯蔵穴周辺は土手状の高まりを有している。遺物は、カマド周辺部から出土する例が多い。

II群における住居跡の分布状況は、かなり散漫な状況を呈しており、カマドの指向方向も統一的でない。そのような状況にあってD136、D139は規模の点において相違が認められるが、内部施設の内容がきわめて酷似しており、貯蔵穴の状況は特に注目できる。[註2] また、出土遺物を見ても接近しており、同時期と見て問題ないであろう。さらにこの2軒とは距離を有して位置しているが、D135も内部施設の上からは貯蔵穴、柱穴の状態が相違するものの、同一時期と考えて良いであろう。この3軒はいずれも焼失した住居であることも共通している。その他の5軒については前記3軒のような分析はできないものの、ほぼ同時期と考えて良いであろう。

2．遺物について

出土遺物の内、土器は鬼高期の範疇において捉えられ、さらに鬼高期においても古い段階[註3]に位置ずけられるものが多いようである。

土器の器種構成は、甕、甑、鉢、坏、高坏形土器の組成が一般的で、その他に数種の器種が加わる場合が認められる。

甕形土器は、口縁部の形状の相違によって3通りに区分できる。

(1) 「く」字状に外反するもの。

(2) 緩やかに外反するもの。

(3) 一度直立し外反するもの。

(1)、(2)は胴部がヘラ削り調整されるのに対し、(3)はナデ調整が施されている。胴部形状は、若干長胴を呈すがほぼ球形に近いと言って良い。

甑形土器は、形状の相違によって3通りに区分できる。

(1) 球形の形状を呈するもの。

(2) 鉢形の形状を呈するもの。

(3) 長甕形の形状を呈するもの。

器面調整は、(1)はナデ、(2)はナデとヘラ削りがあり、(3)はヘラ削りがあるものの、ナデによ

って調整される例が多い。

鉢形土器は、3通りに区分できるが、区分した中には厳密に言えば、本来小形甕、埦として取り扱うべき器種も含めていることをあらかじめ断っておきたい。

(1) 体部が直線的になるもの。

(2) 小形甕の形状のもの。

(3) 埦形の形状のもの。

器面調整は、いずれもナデが施され、(2)の一部には赤彩される例も認められる。

坏形土器は、丸底を呈すものが多くあるが、体部の形状の相違によって3通りに区分できる。

(1) 体部が曲線的になるもの。

(2) 体部外面に稜を有すもの。

(3) 体部外面に稜を有し、内屈するもの。

(1)、(2)は、ナデによる器面調整が施され、赤彩されるものもある。(3)は身が浅く体部はヘラ削り調整が施されている。(2)の中には須恵器の模倣と考えられるものがある。

高坏形土器は、形状の相違によって2通りに区分できる。

(1) 坏部が稜を境に直立ぎみに開くもの。

(2) 坏部が曲線的に開くもの。

(1)は、数量的に少ないため充分な分析ができない。(2)は坏部がナデ調整になるもの、ヘラ削調整になるもの、そして磨きが施されるものなど多様である。ナデ、磨きの調整が施される例は赤彩される例が多い。ただし、ヘラ削り調整されるものにあっては、削り部分を除いて赤彩される。ヘラ削り調整のみの場合には赤彩は認められない。赤彩は坏部のみの場合と脚部も施される場合が認められるが、内面は例外なく施されている。

遺構ごとの器種構成を示すと以下のようになる。

第Ⅰ群

D005　甕(1)＋坏(2)

D008　甕(1)、(3)＋坏(2)、(3)

第Ⅱ群

D099　甕(1)＋甑(1)、(2)＋鉢(1)＋坏(2)＋手捏土器

D112　甕(2)＋鉢(3)＋坏(3)

D135　甕(3)＋甑(3)＋高坏(2)＋堤瓶（模倣）

D136　甕(3)＋甑(3)＋鉢(2)、(3)＋坏(1)＋高坏(2)＋手捏土器＋𤭯（須恵器）

D139　甑(3)＋坏(1)、(2)＋高坏(1)、(2)

D172　甑(2)＋小形壺

D177　甕(3)＋高坏(2)

器種構成における煮沸、供膳形態の土器群が明確に捉えられる遺構は、第Ⅰ群中には存在しない。第Ⅱ群ではD099、D136の2軒であり、D099では手捏土器が加わっておりD136では手捏土器の他に須恵器の碗が伴っているなど、他の遺構と比較してかなり器種に富んでいることが指摘できよう。また、手捏土器を出土する点に共通性を有している。他の遺構にあっては、煮沸形態の一部、あるいは供膳形態の一部が欠落しており器種構成上の違いが認められる。その中でD135は供膳形態の坏が欠落するものの、須恵器の提瓶を模倣した土器を保有していることを考えれば、D099、D136に接近した器種構成を呈していると言って良いであろう。

器種構成上の優位性を見ればD099、D136、それにD135を加えた3軒となる。この3軒の内、D099を除けば焼失住居であることが注目できる。D099は器種構成上は優位性が認められるものの、遺物出土状況は覆土上層であるⅠ層より出土しており、床面直上等、本来住居に伴うものは皆無である点を考えれば、二次的な投棄によるものであると判断して差し支えなく検討に加えられない。残るD135、D136は、先に述べたように焼失住居であり、遺物が住居空間内に当時使用されていた状態そのままに密閉されたものと考えて良く、器種構成を分析する上で格好な資料と言える。D136に対しD135は遺物量も少なく、器種構成の違いも生じている。また、同じ焼失住居であるD139においても煮沸形態の一部を欠落している。

焼失住居間におけるこのような器種構成の違いは、換言すれば端的な遺物保有状況を示していると考えて良く、D136の集落内における優位性が認められるところである。焼失住居以外の住居にあっては、遺物が覆土中から出土するという状況があり、充分に検討することはできない。

3．集落の変遷について

遺物出土状況が覆土中に求められる住居が多いため、充分な検討を加えることはできないが、幸に焼失した3軒の住居跡を核として第Ⅱ群の様相を概観してみたい。

焼失した3軒の住居跡は、先にも述べたように、規模、内部施設、それに器種構成に相違が認められるところであるが、出土遺物の型式的な面においては同一の範疇で捉えることが可能であり、同時存在していたと判断して良いであろう。特にD136、D139は内部施設も酷似しており、しかも近接する状況は単位集団を構成していると考えられる。また、D135も同時存在していた可能性があるが、単位集団は別に求めなければならないであろう。残る5軒は遺物が覆土中の出土であるが、仮に同一範疇の土器と考えて良いならば、これらの内D099はカマドが構築された痕跡が認められず、出土遺物がD135、D136、D139と同一とすれば、時期的にこれらの住居跡より古い段階であると考えられる。D172、D177は、壁溝、貯蔵穴等の内部施設の面から見てD135、D136、D139より新しい段階の住居と考えられる。

即ち、第Ⅱ群において最も古い第1段階の住居はD099、第2段階はD135、D136、D137、

第３段階はD112、D172、D177の変遷が捉えられよう。なおD176については明確にできない。

第Ⅰ群の変遷は２軒のみであり、しかも遺物量が少ないため検討に堪えるものではないが、ほぼ第Ⅱ群における第３段階、あるいはそれ以降に相当すると考えられる。

註

1　東京都中田遺跡に見られ当該期の竪穴住居跡と比較した場合に認められる。『八王子市中田遺跡』Ⅰ～Ⅲ　昭和41年、42年、43年

2　いわゆる貯蔵穴は床面よりかなり深く掘り込んでいるのが一般的であるが、D136、D139はいずれも0.1m程度の掘り込みである。

3　日本考古学研究所『日本考古学研究所集報』Ⅲ、Ⅳ　昭和56年、57年

第V部　歴　史　時　代

第1章　歴史時代の概観

歴史時代に比定できる遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝遺構、それにピット、溝などがある。これらは、奈良、平安時代に構築されたものであるが、溝は地形図上の地境と整合するものもあるため、ごく最近の所産と考えられる遺構である。また江戸期に構築されたと考えられる土壙も認められる。

さて、奈良、平安時代の遺構群は、塊村のごとく群集した状況で集落を構成しているのが一瞥できる。個々の群は遺構の所在しない空間部分をもって大きく四つの群からなっている。今、これをⅠ群からⅣ群とし、各群ごとに報告したい。

Ⅰ群からⅣ群の集落立地を見れば、新川をのぞむ台地東側縁辺地域を中心としている。新川とその沖積地を挟んだ対岸には当該期の集落遺跡として著名な村上込の内遺跡や名主山遺跡が位置していることも権現後遺跡における歴史時代の集落立地に影響を与えているであろうし、沖積地における水田経営のうえからも察せられる状況を呈していると言えるであろう。

ここに言う群とは、言うまでもなく、群として捉えることができる数軒からなる住居の集合であり、群を構成する住居跡が同時性を有するものではなく、長い時間の経過の中で群として形成したものである。しかしながら、広範囲な面の調査を実施した結果からは、明瞭に遺構の所在する地域とそうでない地域が区分できた点を考えれば、各群は時間の経過を超越した集落構造体系が存在していたと考えても良いのではないであろうか。かかる観点に立って群の一構成要素となっている住居跡を遺構の構造と出土遺物を絡めて報告することによって群内での集落展開、そして歴史時代全体を通した集落展開の一端でも把握することができれば報告者としての責も果すことができるのではないかと考える。

第2章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

歴史時代のうち、奈良、平安時代に比定できる遺構が最も多く検出できた。遺構は竪穴住居跡68軒、掘立柱建物跡17棟、方形周溝遺構2基、ピット11基、それに溝などがある。検出した遺構をもって集落全体がすべて検出できたとは考えられない。と言うのは、台地東側縁辺地域や飯綱神社の社域については対象地域外のため調査は実施していないものの遺構の存在は充分に考えることができる地域であり、また対象地域内にあっても住宅建設に伴って台地が削平されている部分があり、遺構が存在していたであろうことが考えられる地域もあるためである。

では、まったく集落構造が明らかにできないかと言うとそうではなく、面的に広範囲に調査を実施した結果からは集落を構成する要素と考えられる住居跡群が空間地域を有してかなり纏りのある分布状況を呈しているのが認められており、これらの群の復元によって全体像を想定することは可能と考えられる。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

歴史時代の第Ⅰ群は竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡7棟、方形周溝遺構1基、ピット4基で

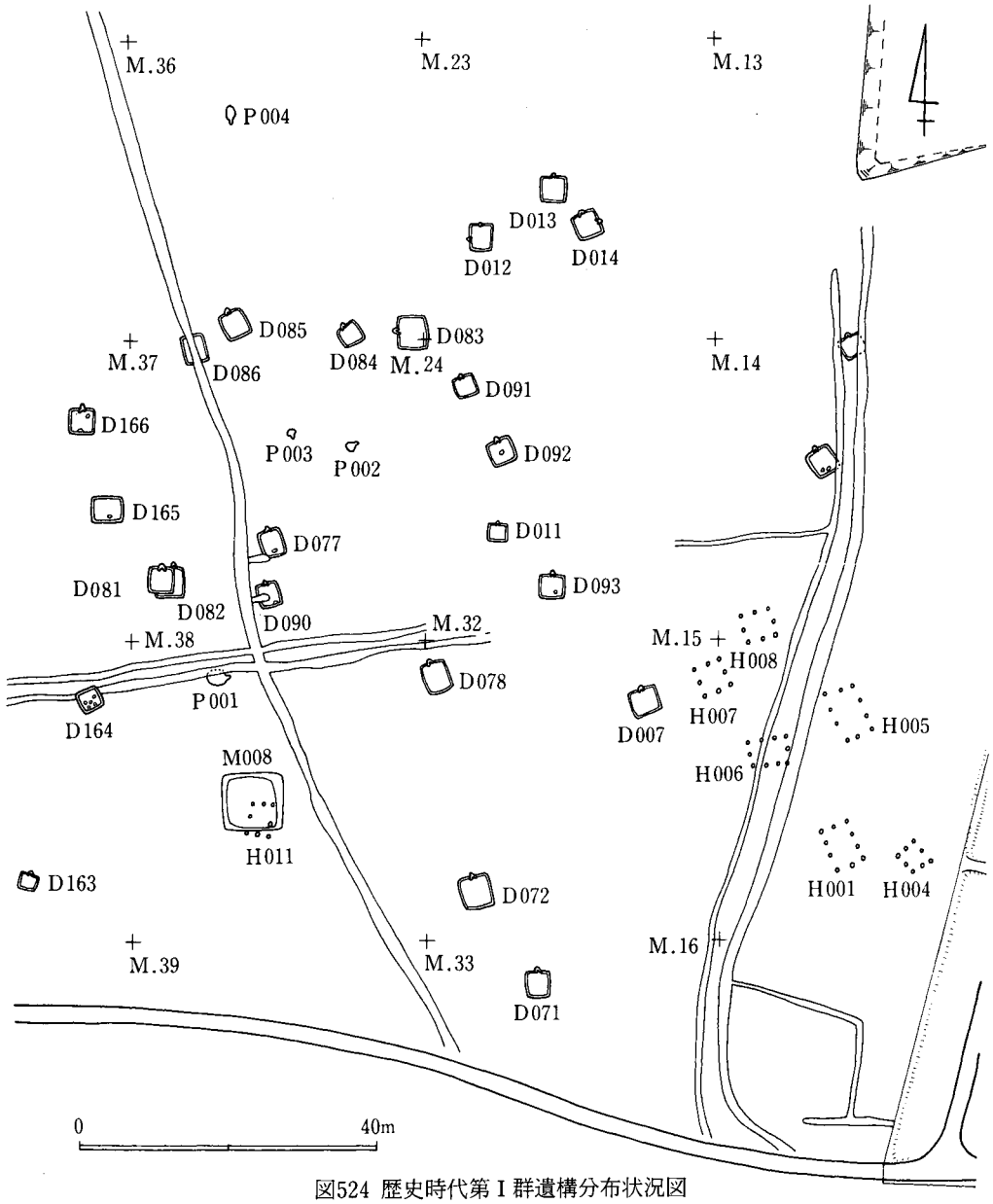


図524 歴史時代第Ⅰ群遺構分布状況図

構成される群である。U・V・W・X－7・8・9・10の地域において検出した。

住居跡は、空間地域を中心に環状形に分布するD011、D077、D078、D081～D086、D090～D093、D165、D166の住居群と、これらの群に近接して位置するD007、D012～D014、D071、D072、D163、D164の8軒の住居がある。環状形に分布する状況は権現後においてI群に認められるだけであり他群には認められない。換言すればI群が他群と集落構成上の違いが認められ、注目できる状況と言えるであろう。

掘立柱建物跡は住居群の東側に近接してH001、H005～H008が位置しており、明らかに竪穴住居とは別の意識をもって構築されていると考えられる。またH011の構築位置は住居跡に近接する状況が認められない独立した位置を占めている（図524、図版127）。

1．D007号遺構（図525～535、図版130、131、144～146、149、150）

I群の中で最も東に位置し、環状形に分布する住居群と掘立柱建物群の中間にある。本遺構は床面上で検出した多量の焼土、炭化物の存在から焼失した遺構と考えられる。

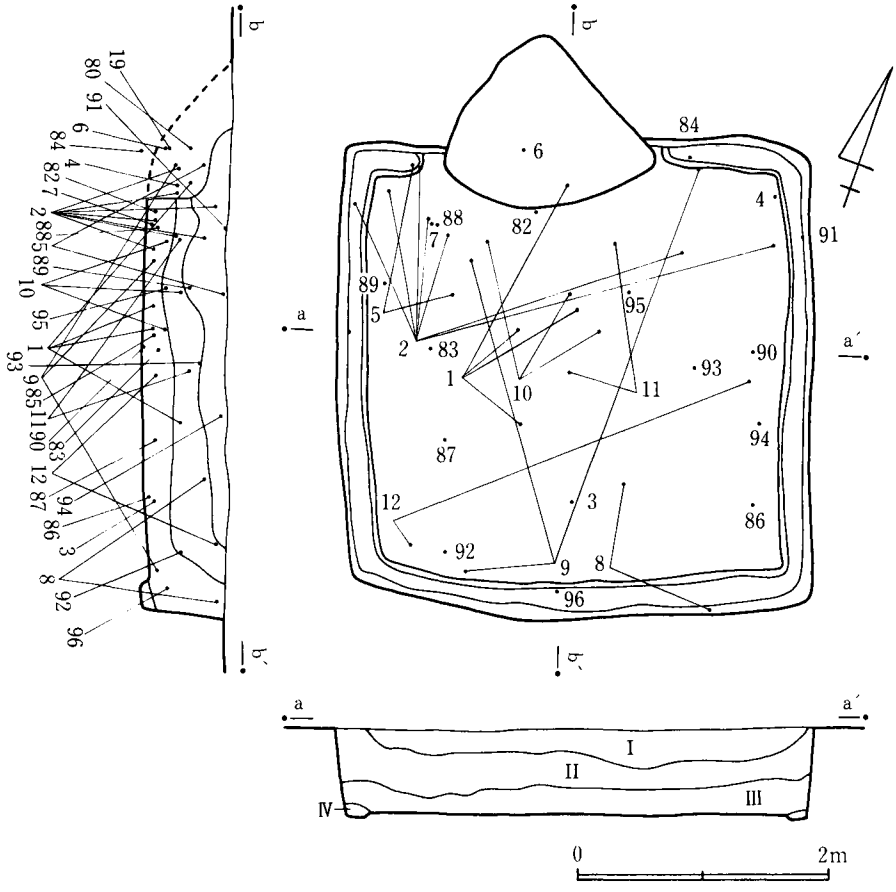


図525 D007号遺構実測図

遺構　北壁3.8m、東壁3.84mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.64m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.13mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面はとても堅緻であるが柱穴、その他のピットは検出できない。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.9m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。袖は人為的に取り毀した痕跡が土層断面より看取できる。袖の基部に相当する部分には径0.15m、深さ0.1mの袖芯を入れたと考えられるピットが認められる。火袋に相当する袖、天井部は焼土化が著しく、また火床部分にも認められる。

遺物出土状況　覆土内出土とカマド内出土がある。覆土はⅠ層からⅣ層まで識別でき、Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層暗褐色土層である。覆土中の遺物は住居が焼失しているために床面直上やⅢ層出土が多く認められる。また平面的にはカマド周辺、南側

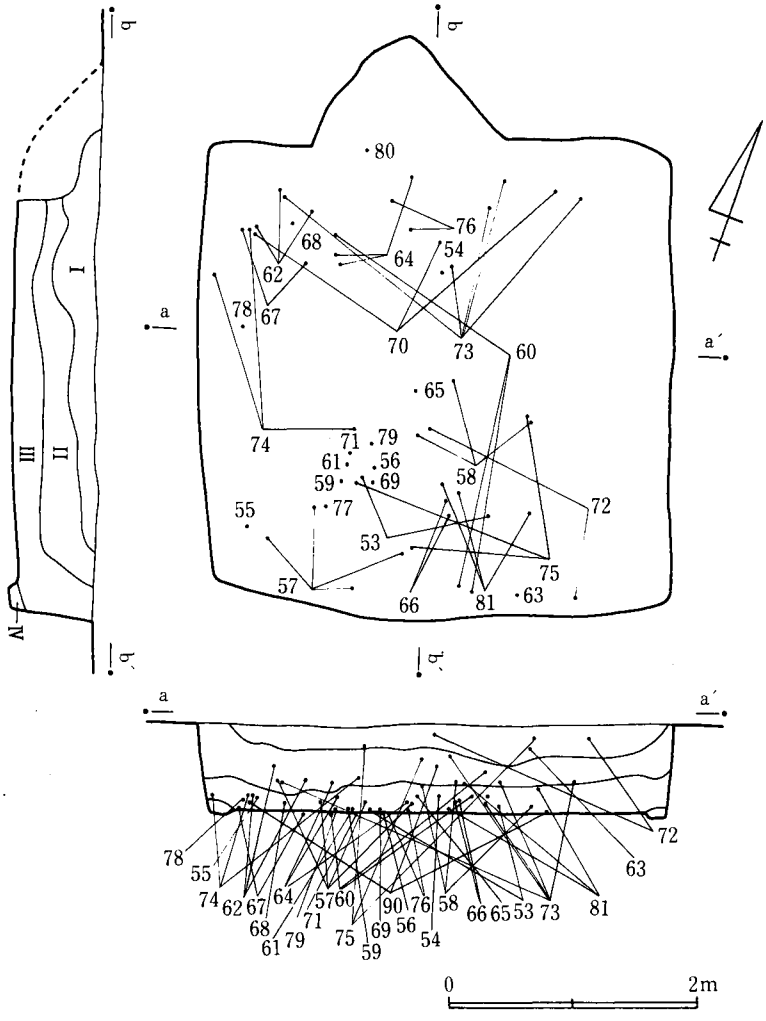


図526　D007遺構遺物出土状況図(1)

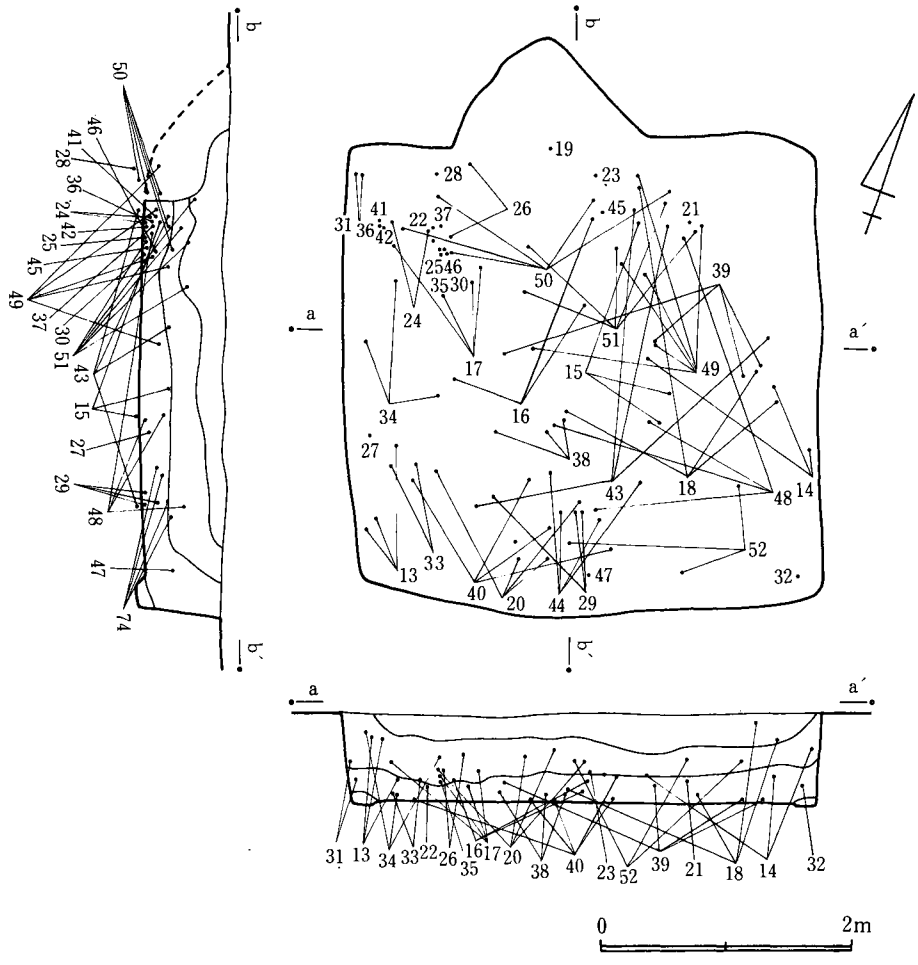


図527 D007号遺構遺物出土状況図(2)

に多く、中央部分は若干少ない状況が認められる。カマド内出土遺物は19、54、80の遺物で火袋部分を中心に出土している。

出土遺物 遺物は甕、盌、甑、坏、鉢、皿形土器と、刀子、鎌、紡錘具、斧などの鉄製品、青銅製の銙帯、それに砥石がある。甕形土器は1～5の小形の甕と、10～12のように叩き目がある広口甕がある。盌形土器は6で口唇部が短かく若干外反する。甑形土器は7～9で叩き目があり、7は完形に近いものである。坏形土器は13～43で、口径12cm前後の13～29と、口径15cm前後の30～43がある。中には黒色処理した土器や墨書した土器もある。44～47は灰釉陶器の坏で、大・小がある。鉢形土器は48～52で、口径20cm以上のものである。48、49は2次的に火を受けているため著しい歪を生じている。皿形土器は高台のないもの53～62と、高台のあるもの63～79がある。80、81は灰釉陶器で81は段皿である。鉄製品は遺存状況が良好で器種に富んでいる。82～85は刀子、86、87は鎌、88は鉄斧、89は紡錘具、90、91は角棒状の用途不

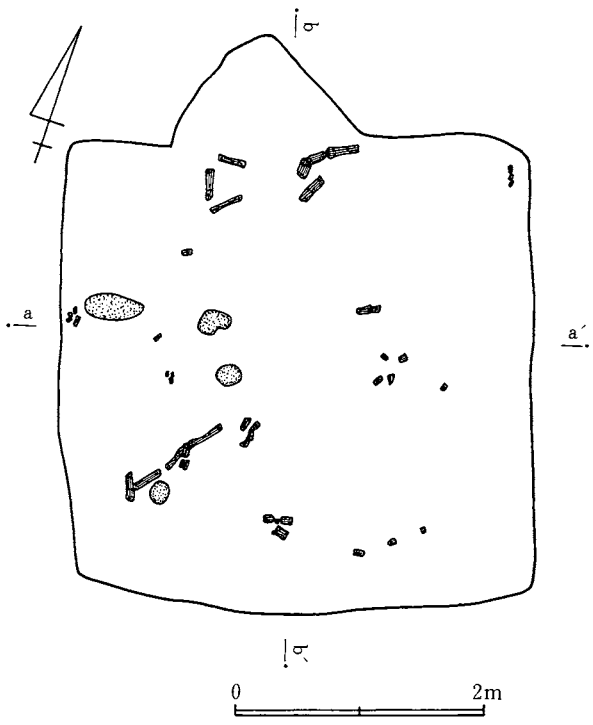
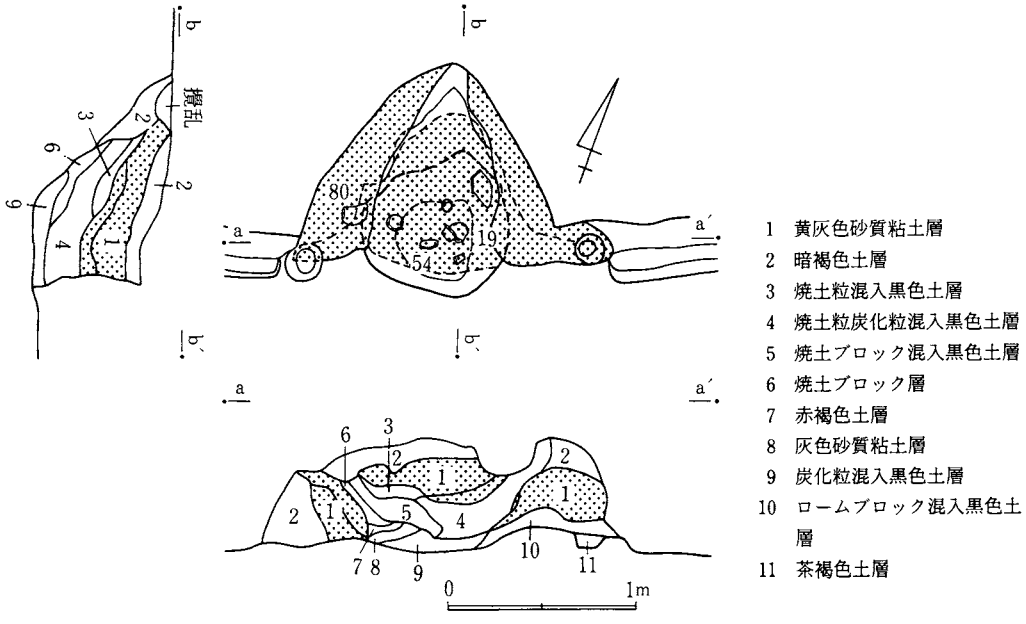


図528 D007号遺構炭化物出土状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 焼土粒混入黒色土層
4 焼土粒炭化粒混入黒色土層
5 焼土ブロック混入黒色土層
6 焼土ブロック層
7 赤褐色土層
8 灰色砂質粘土層
9 炭化粒混入黒色土層
10 ロームブロック混入黒色土層
11 茶褐色土層

図529 D007号遺構カマド実測図

明の鉄製品である。青銅製品はいずれも銙帯の裏金で94は巡方、95、96は鉈尾のものと思われる。石製品は92の凝灰岩製の砥石と、93の滑石製有孔円板がある。

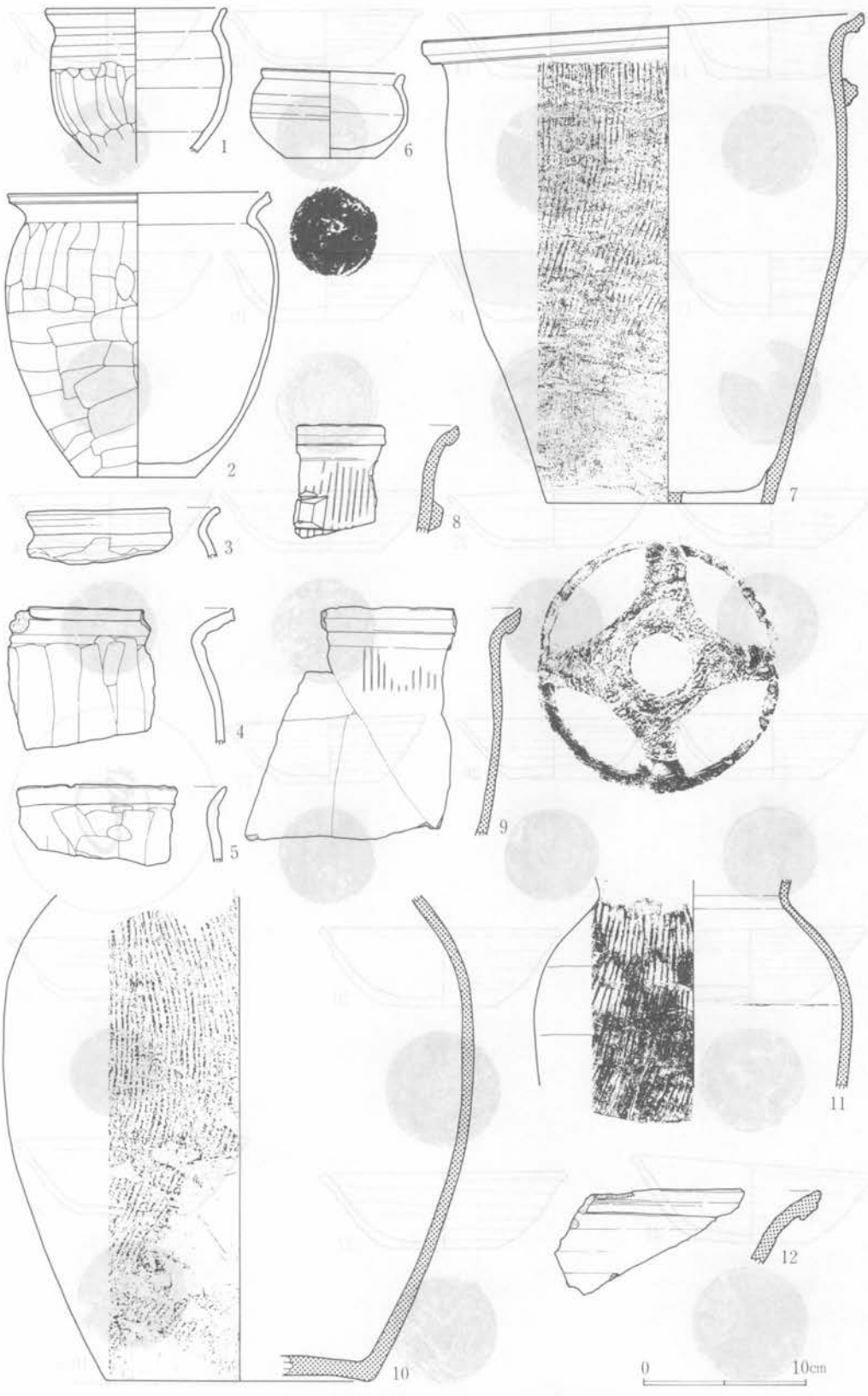


図530 D007号遺構出土遺物実測図(1)

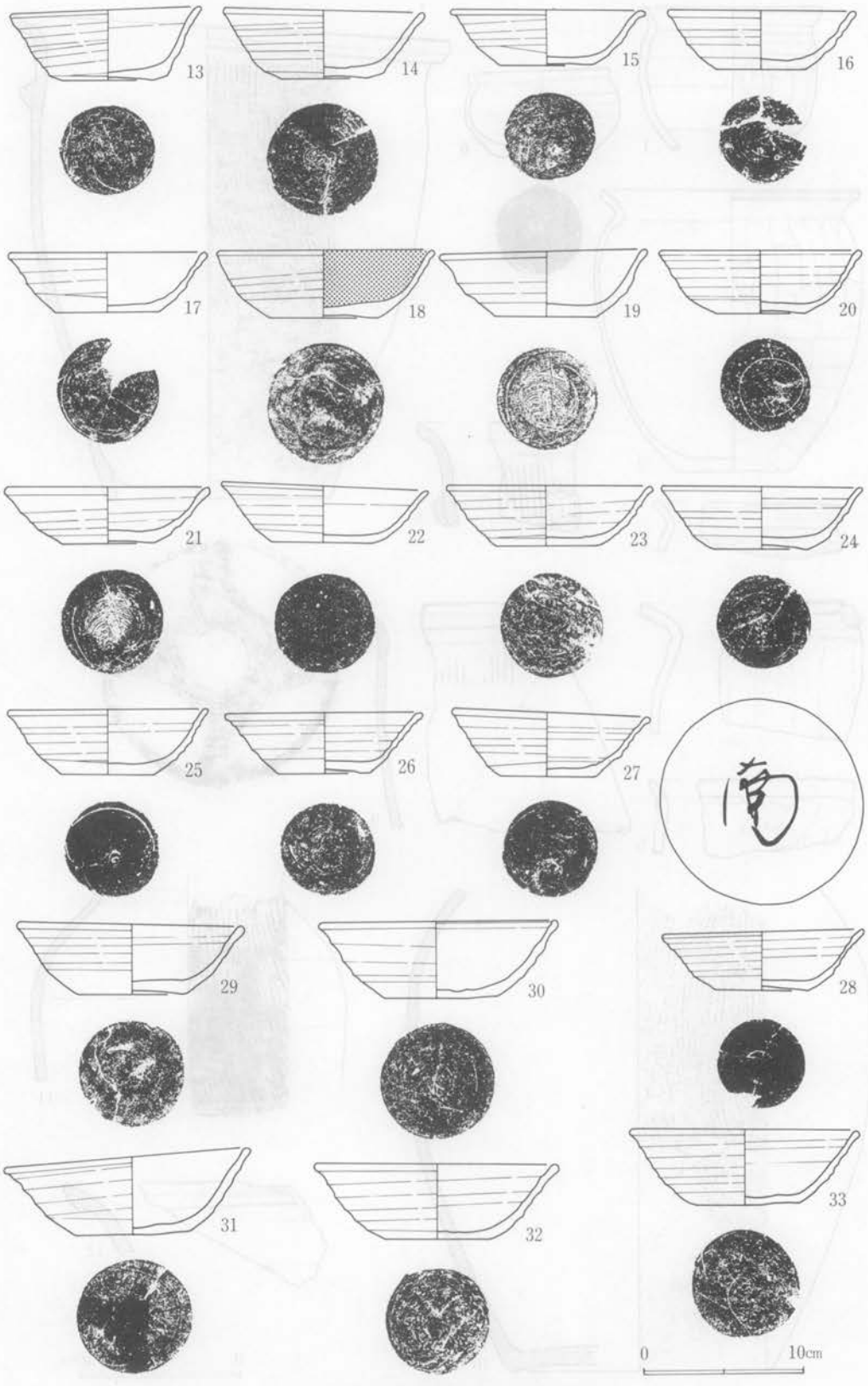


図531　D007号遺構出土遺物実測図(2)

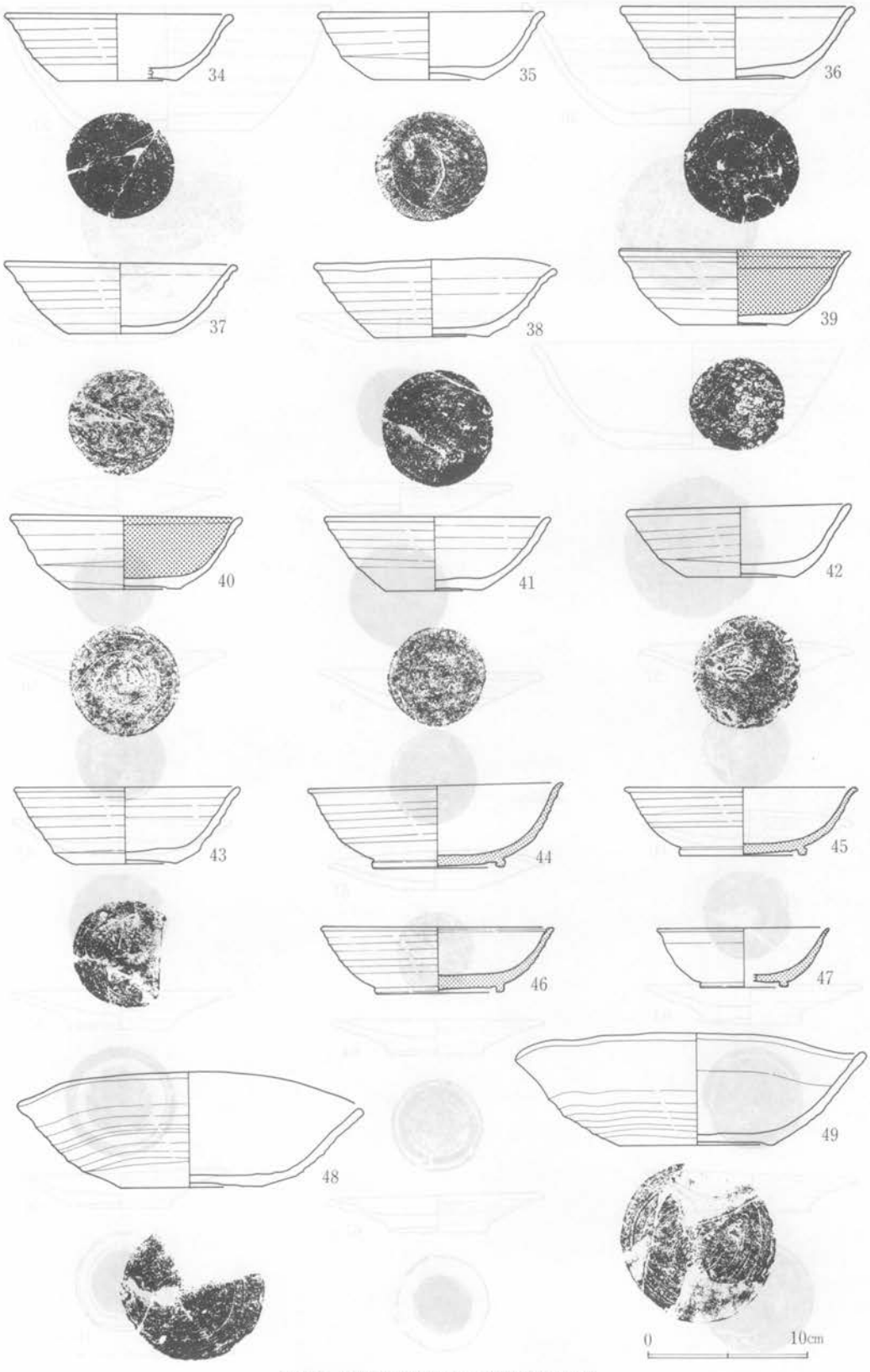


図532　D007号遺構出土遺物実測図(3)

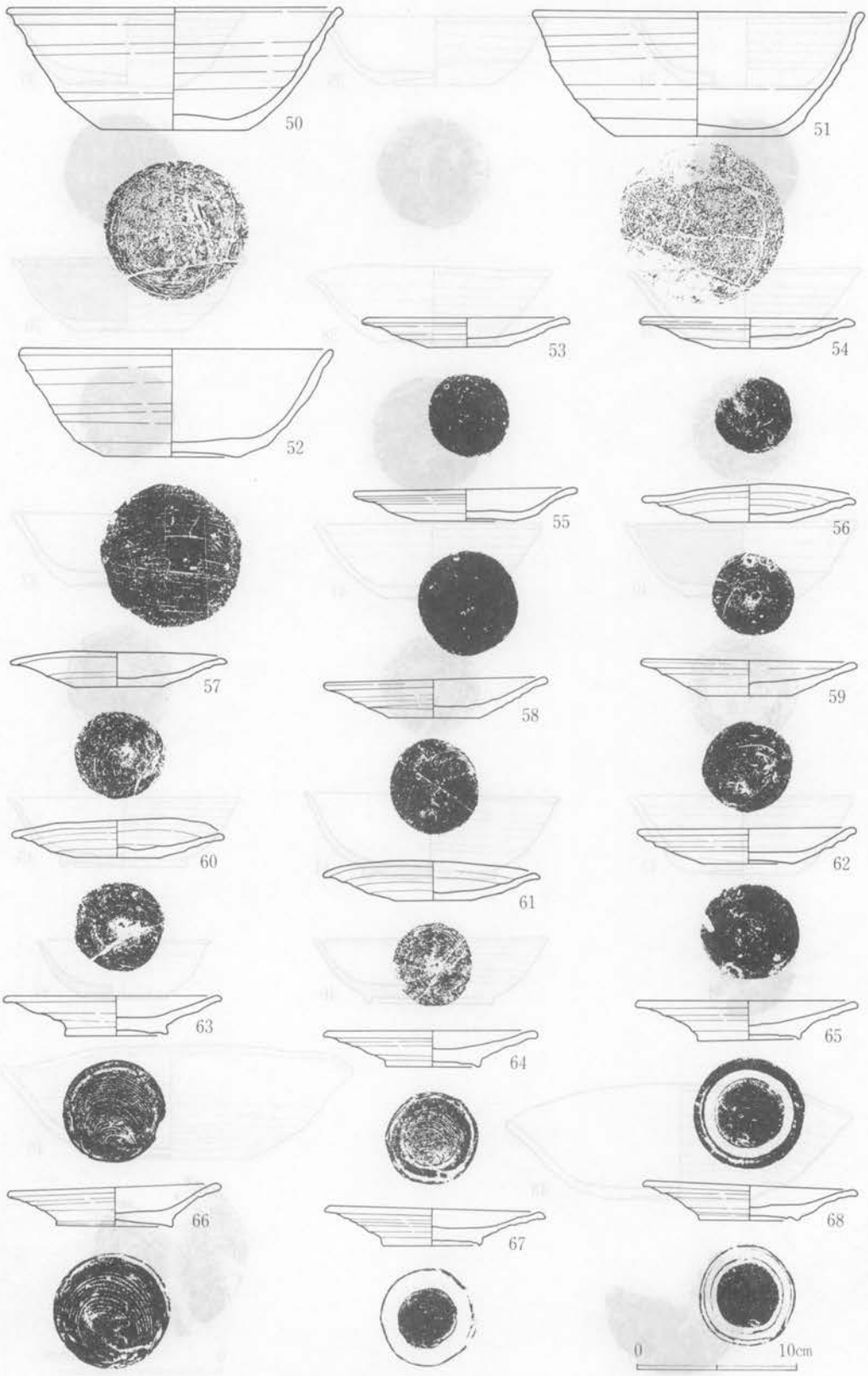


図533 D007号遺構出土遺物実測図(4)

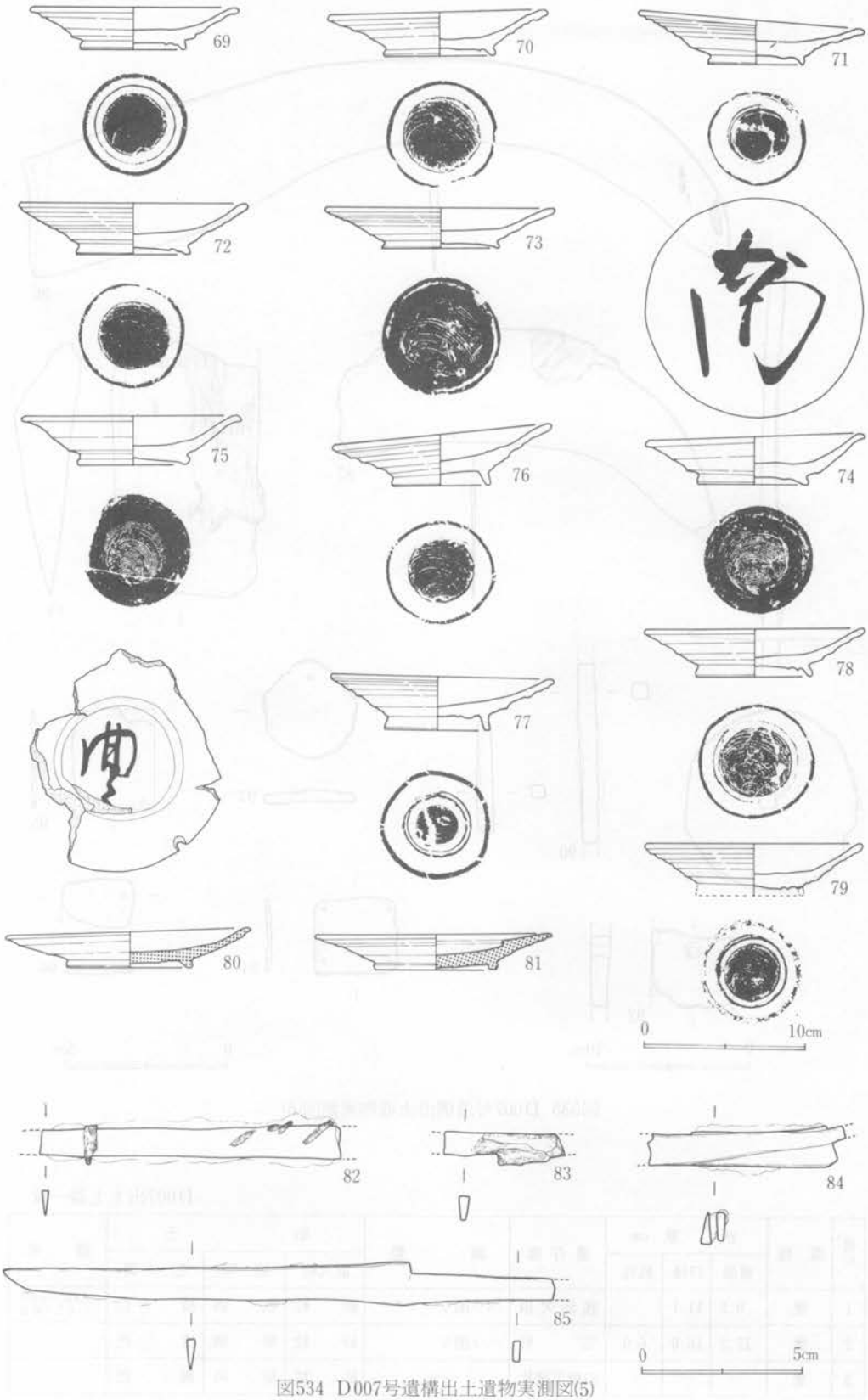


図534　D007号遺構出土遺物実測図(5)

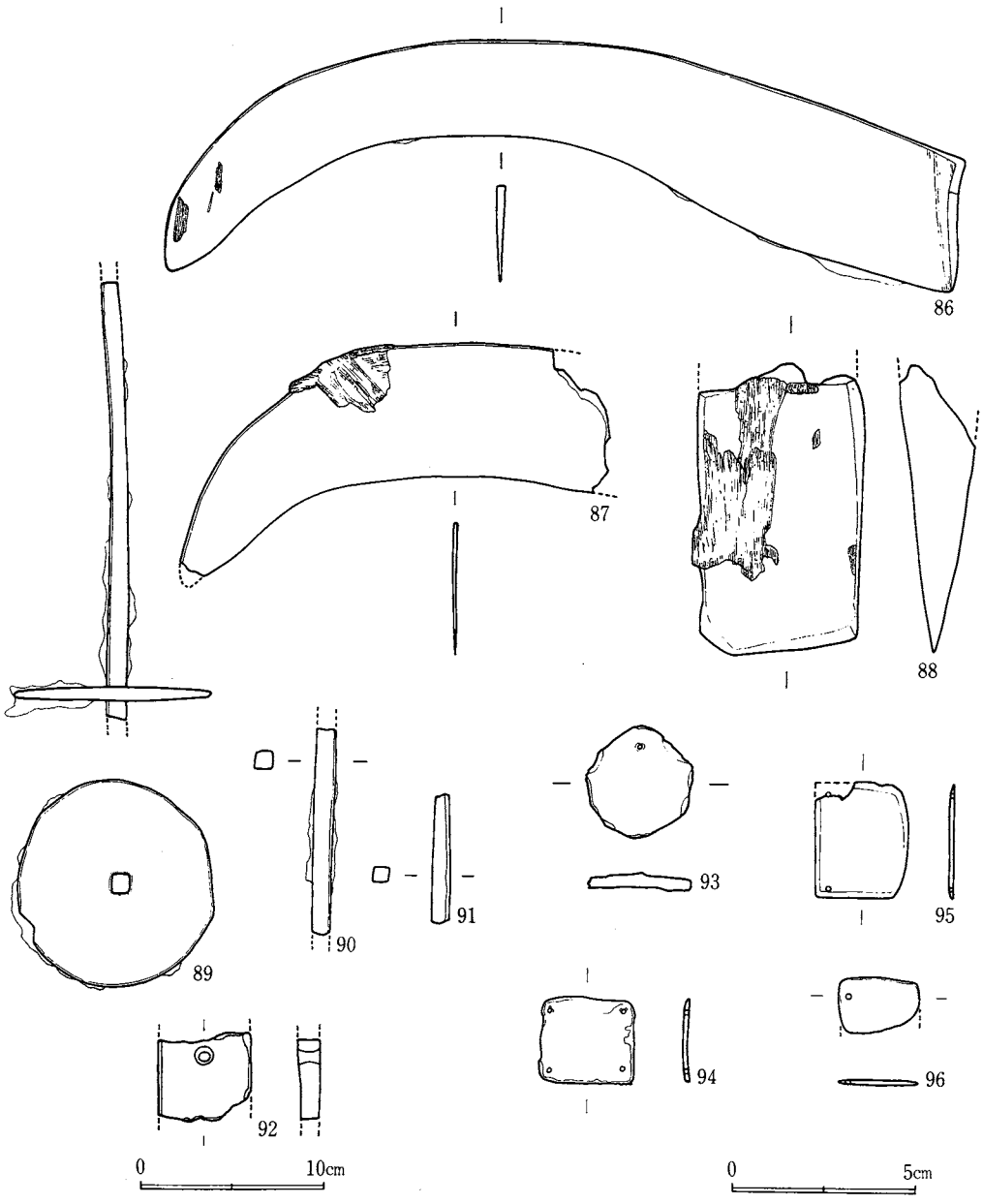


図535 D007号遺構出土遺物実測図(6)

D007出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	9.5	11.1		底部欠損	ヘラ削り	砂粒	軟弱	橙色	二次的に火を受けているため軟弱
2	甕	17.2	16.0	6.9	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	——	砂粒	堅緻	褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	—	堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
6	盌	5.4	8.8	5.5	完形	ロクロ	——	堅緻	黒褐色	
7	甑	29.0	27.1	13.8	体部 1/2	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	灰褐色	
8	甑	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ	——	やや堅緻	灰褐色	
9	甑	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ ナデ	砂粒	やや堅緻	(内)橙色 (外)灰褐色	
10	広口甕	(29.4)		(16.9)	2/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
11	広口甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	——	堅緻	黒褐色	
12	広口甕	—	—	—	口縁部破片	——	砂粒	堅緻	黒褐色	
13	坏	4.35	11.8	5.5	体部 2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
14	坏	4.2	12.5	5.5	体部 2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
15	坏	3.4	12.15	5.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙色	
16	坏	3.65	11.75	5.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
17	坏	3.7	12.3	6.4	体部 1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	
18	坏	4.2	13.6	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内黒
19	坏	4.0	13.0	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	糸切り
20	坏	3.9	12.6	5.5	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	二次的に火を受けている部分有り
21	坏	3.4	12.8	5.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	糸切り
22	坏	3.4	12.8	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
23	坏	3.6	12.9	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	灰褐色	二次的に火を受けているため軟弱
24	坏	3.7	12.4	5.9	体部 1/5	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄橙色	二次的に火を受ける部分あり
25	坏	3.9	12.4	5.8	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	
26	坏	3.6	12.4	5.7	体部 1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	黒褐色	高温度焼成
27	坏	3.5	12.4	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	
28	坏	3.5	12.6	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	墨書「南」
29	坏	4.3	14.1	6.7	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
30	坏	4.7	15.0	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	
31	坏	4.6	15.2	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	
32	坏	4.5	15.2	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	
33	坏	4.7	14.2	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	黒斑
34	坏	4.2	14.2	7.6	1/2	——	——	堅緻	黄灰色	内面磨き
35	坏	4.2	14.3	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
36	坏	4.5	14.5	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	黒褐色	内面磨
37	坏	4.3	14.5	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	
38	坏	4.7	15.2	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	(内)灰色 (外)灰褐色	二次的に火を受けている
39	坏	4.6	14.5	6.8	体部 1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内黒

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
40	坏	4.5	14.5	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	内面磨き
41	坏	6.1	14.3	4.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
42	坏	4.3	14.1	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
43	坏	4.7	14.1	6.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	茶褐色	内面磨き
44	高台付坏	5.1	16.1	18.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
45	高台付坏	4.2	14.0	7.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
46	高台付坏	4.1	14.6	8.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
47	高台付坏	3.6	10.7	5.4	1/2	——	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
48	鉢	7.1	21.8	7.8	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	黒灰色	二次的に火を受けているため軟弱、糸切り、黒斑
49	鉢	6.9	22.0	9.4	体部 2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	褐色	二次的に火を受けているため軟弱、糸切り、黒斑
50	鉢	7.7	20.8	9.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	灰橙色	二次的に火を受けているため軟弱、磨き、糸切り
51	鉢	7.8	20.7	10.4	1/2	——	——	堅緻	黄褐色	内面磨き
52	鉢	6.6	19.5	8.6	体部1/2弱	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
53	皿	1.75	13.1	5.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	黒斑
54	皿	1.8	13.4	4.7	体部 2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	黒斑
55	皿	1.9	14.0	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
56	皿	1.5	12.3	5.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	灰褐色	二次的に火を受けているため軟弱
57	皿	2.1	13.4	5.4	1/1	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	黒斑
58	皿	2.35	14.1	5.6	体部 2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒色	
59	皿	2.1	13.5	5.5	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
60	皿	1.5～2.2	13.2	5.5	体部2/3強	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	
61	皿	2.3	13.5	5.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	
62	皿	2.1	13.7	5.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
63	高台付皿	2.4	13.6	6.4	体部 3/4	——	——	堅緻	黄灰色	内面磨き 糸切り
64	高台付皿	2.2	13.5	5.9	3/4	底部ナデ	——	堅緻	茶褐色	糸切り
65	高台付皿	2.35	13.5	6.4	体部 2/3	底部ナデ	——	堅緻	褐色	糸切り
66	高台付皿	2.35	13.2	7.2	体部 3/4	——	——	堅緻	暗褐色	内面磨き 糸切り
67	高台付皿	2.25	13.8	6.1	完形	底部ナデ	——	堅緻	暗褐色	糸切り
68	高台付皿	2.15	13.4	6.2	完形	底部ナデ	——	堅緻	褐色	糸切り
69	高台付皿	2.6	12.8	6.4	完形	——	——	堅緻	黄灰色	内面磨き 糸切り
70	高台付皿	2.7	13.2	6.9	3/4	底部ナデ	——	堅緻	褐色	糸切り
71	高台付皿	2.75	14.0	5.8	3/4	底部ナデ	——	軟弱	灰褐色	内面磨き、二次的に火を受けている、糸切り
72	高台付皿	3.2	14.0	7.0	1/2	底部ナデ	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り
73	高台付皿	2.5	14.3	7.3	3/4	——	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り
74	高台付皿	3.9	13.5	6.8	体部2/3強	底部ナデ	——	堅緻	黄灰色	墨書「南」 糸切り
75	高台付皿	3.0	13.0	6.2	体部 1/3	——	——	堅緻	黄灰色	墨書「豊」 内面磨き、糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
76	高台付皿	3.1	13.7	6.1	3/4	——	——	堅緻	黒褐色	内面磨き 糸切り
77	高台付皿	3.25	13.9	6.5	完形	底部ナデ	——	堅緻	橙色	糸切り
78	高台付皿	2.95	13.6	7.1	体部2/3強	——	——	堅緻	暗褐色	内面磨き 糸切り
79	高台付皿	2.7	13.5	6.6	高台を欠損	——	——	堅緻	灰色	二次的に火を受けている。内面磨き、糸切り
80	高台付皿	2.2	15.1	7.6	1/2	——	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
81	高台付皿	2.1	14.8	7.5	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	灰色	灰釉陶器

2. D011号遺構（図536～538、図版132－1、146、150）

環状形に分布する住居群内に位置する。D092、D093の中間に位置する。牛蒡収穫時のトレンチャーによって著しい溝状の攪乱を生じている。覆土体積は約5.95m³と推定できるが、その55%に相当する3.3m²は攪乱土である。したがって、出土する遺物については本来の一括資料として判断することはできない。

遺構　トレンチャーによる攪乱が著しいために東壁、西壁は削平されているためまったく状

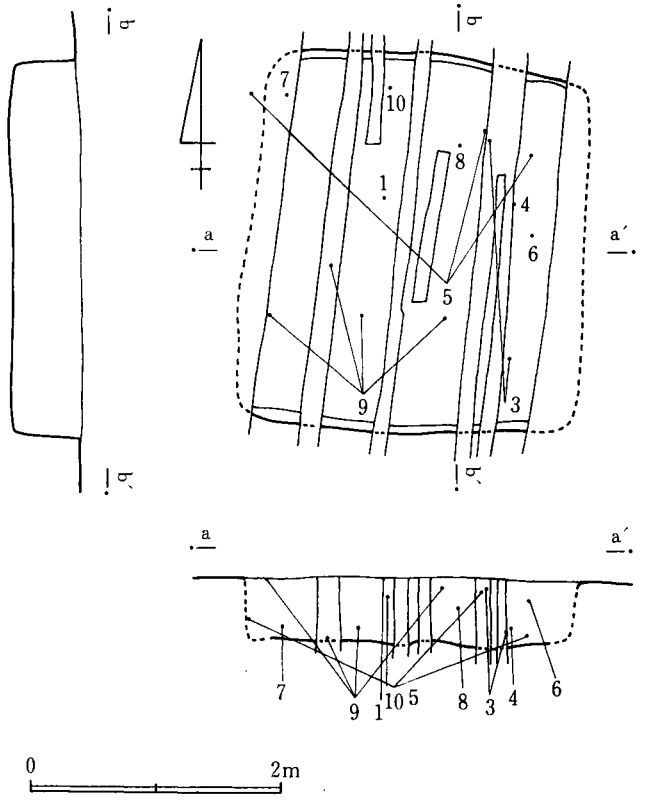


図536　D011号遺構実測図

況が把握できない。したがって、北壁の東・西側コーナー部分の状況も不明である。推定できる北壁長は2.68m、東壁長は3.0mで、方形の平面形を呈すると考えられる竪穴住居である。壁は北壁の一部遺存する部分の所見ではほぼ垂直に0.52m掘り込んでいる。床面は南壁に近い部分が比較的良好な状況で遺存しているが、他の部分は明確に把握できない。柱穴、壁溝等の施設は検出することができなかった。炭化物と焼土を床面上で検出しており、焼失した住居と考えられる。

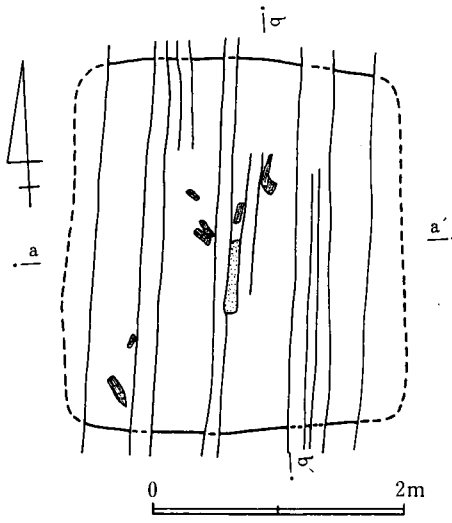


図537 D011号遺構炭化物出土状況図

カマド　北壁と南壁が部分的に遺存しているが、この部分に構築された痕跡は確認できなかった。東壁が西壁のいずれかに構築していたと考えられる。

遺物出土状況　攪乱が著しいため明らかでないが床面近くの出土と、覆土上層部の出土が認められる。

出土遺物　遺物量は攪乱のため少なく、また破片の状態で出土するものも少なくない。遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1、2のヘラ削りがあり、比較的小形のものと、3の叩き目がある大形の広口甕がある。坏形土器は4～7で口径12cm前後の4と口径15cm前後の5がある。皿形土器は8～10で、8、9は高台がなく、10は高台が欠損している。

D011出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	——	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
3	広口甕	28.0	—	15.3	½	叩きじめ	砂粒	堅緻	黒灰色	
4	坏	4.0	12.8	(6.5)	底部の破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
5	坏	4.4	15.3	(7.5)	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
6	坏	—	—	(6.4)	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	黄灰色	糸切り
7	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書判読不明
8	皿	2.2	14.4	7.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
9	皿	2.0	14.2	6.1	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	内面磨き
10	高台付皿	—	14.0	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	

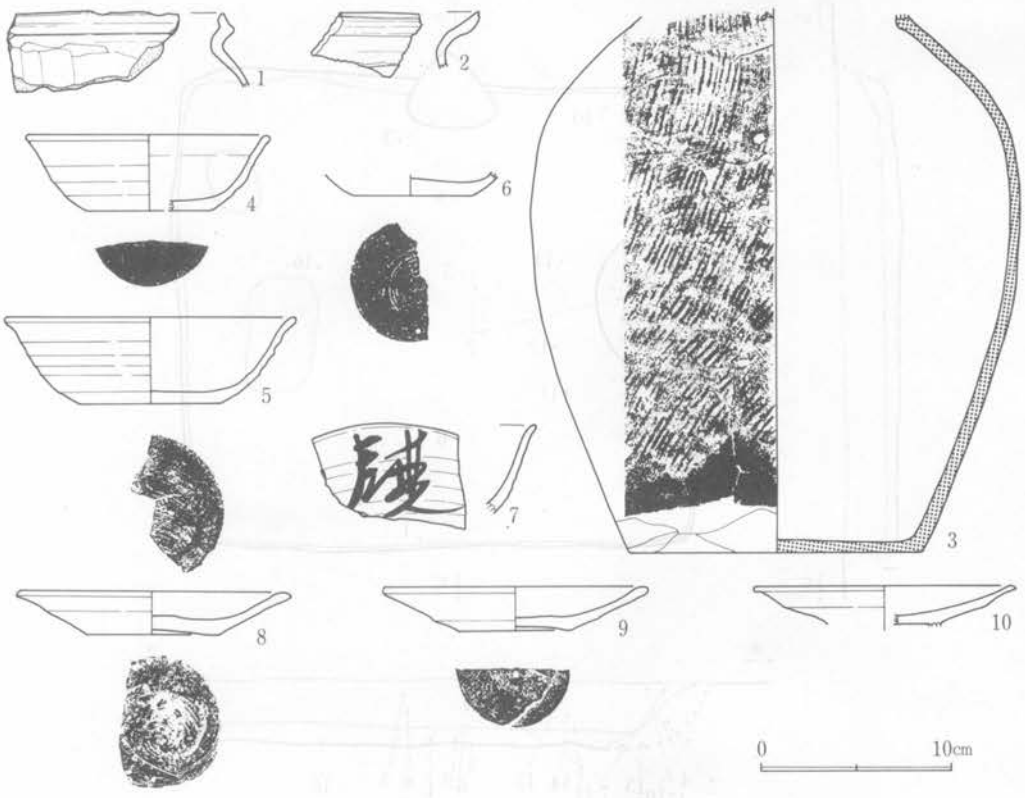


図538 D011号遺構出土遺物実測図

3．D012号遺構（図539～542、図版132－2、146、150）

環状形に分布する住居群内の北東部に接して位置し、D013、D014との纏りが考えられる遺構である。遺構全体の写真撮影を実施した後に床面下の調査をすべくトレンチを入れ調査したところ、約20cm掘り進んで堅緻な床面を検出した。そこで全面にわたり精査したところ堅緻な面は全体に広がりを見せ、さらに2か所にカマドを検出することができた。よって、今までの調査を補足することになった。

遺構　トレンチャーによる攪乱を受けているが幸に床面まで達していないため全体を把握することができる。北壁3.72m、東壁4.0mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.52m掘り込んでいる。床面は全体に堅緻で東壁近くに焼土塊を2か所に検出した。柱穴、壁溝等の施設は検出することができなかった。焼土塊の検出だけをもって判断することはむずかしいが焼失した住居と考えて差支えないであろう。

カマド　北壁と西壁において検出した。旧時のカマドBは北壁に構築されたもので壁を三角形に最長0.3mを掘り込んだ部分と、火床に相当する部分を検出したのみである。実際の掘り込みは今より長かったと思われるが住居の修改築時に現状のものとなったのであろう。住居廃絶

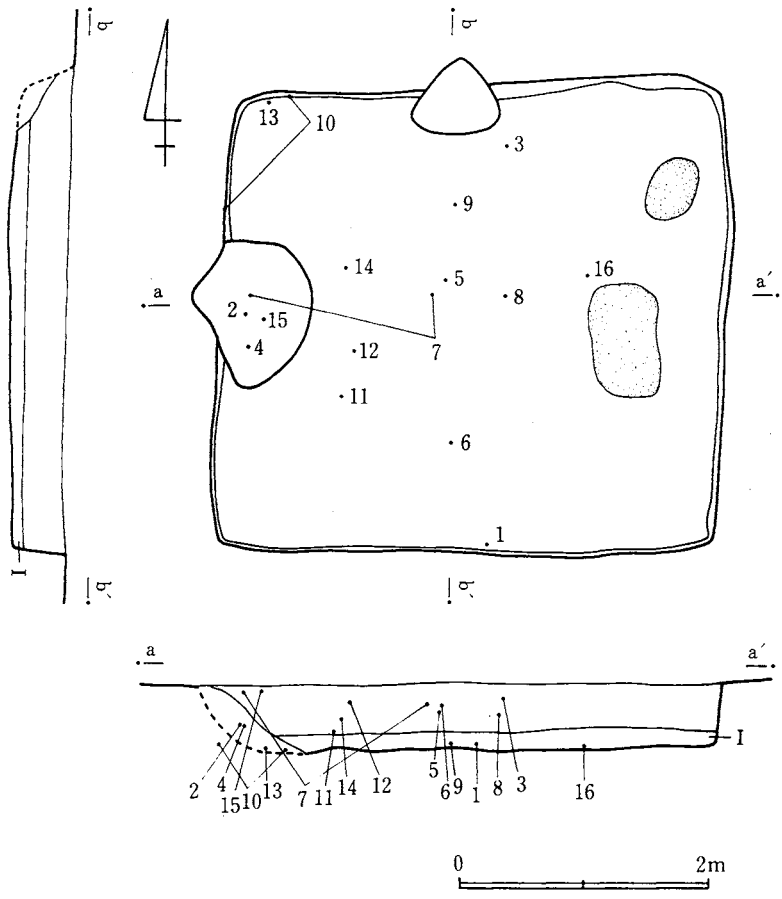
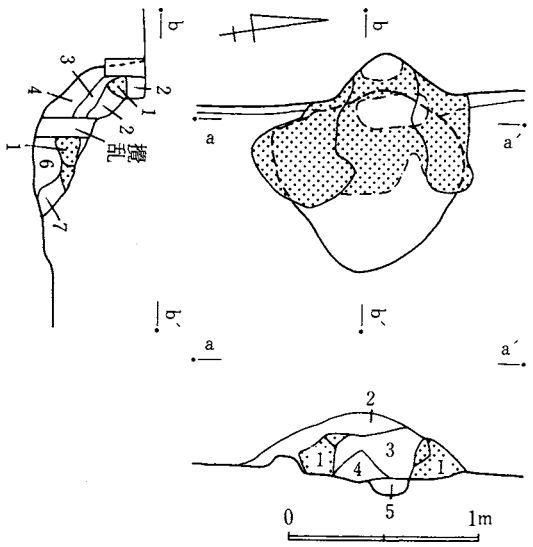


図539 D012号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 茶褐色土層
3 焼土粒炭化粒混入赤褐色土層
4 焼土粒混入赤褐色土層
5 ローム粒混入黄褐色土層
6 灰焼土粒混入黄橙色土層
7 焼土粒炭化粒混入暗褐色土層

図540 D012号遺構Aカマド実測図

時までのカマドAは西壁中央部を三角形に最長0.3m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。袖、天井部は良好に遺存し、煙道部まで構築している。火床部分は擂鉢状を呈している。火袋部分の袖、天井部は焼土化が著しい。構築材は黄灰色砂質粘土であるが、焼土ブロック、炭化粒等を混入しており、Bカマド構築材をそのまま使用した状況が想定できる。

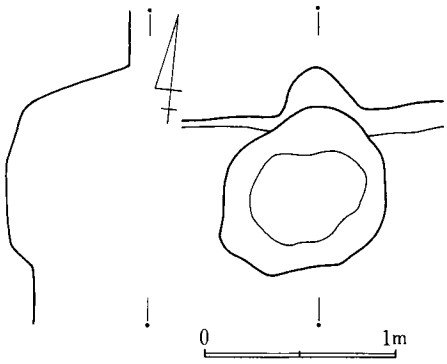


図541 D012号遺構Bカマド実測図

遺物出土状況 覆土の31%が攪乱を受けているためか量は少ない。床面近くの出土と覆土上層部分の出土、それにカマド内に認められる。

出土遺物 遺物は、甕、壺、坏形土器と、鎌、刀子などの鉄製品がある。甕形土器は1～6でいずれも小形な甕の口縁部破片である。壺形土器は7で肩の張る胴部破片である。坏形土器は口径 12 cm 前後の8～13と、口径 15 cm 前後の14があり、14は内面を黒色処理している。鉄製品は15、16で15は鎌の刃先で棟が明瞭でない。16は刀子で刃先が欠損するものの柄に木質の付着が認められる。

D012出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	11.0	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	——	堅緻	黄灰色	
5	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
6	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
7	長頸瓶	—	—	—	胴部破片	胴下端回転ヘラ削り	——	堅緻	灰色	自然釉付着
8	坏	3.8	11.3	6.2	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	
9	坏	4.0	12.5	6.6	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
10	坏	3.7	11.7	6.3	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
11	坏	3.6	12.1	5.7	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
12	坏	3.8	11.9	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
13	坏	3.4	12.2	(7.0)	底部～体部 口縁部	下端静止ヘラ削り 底部一方向の削り	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
14	坏	4.7	15.7	7.4	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄褐色	内黒

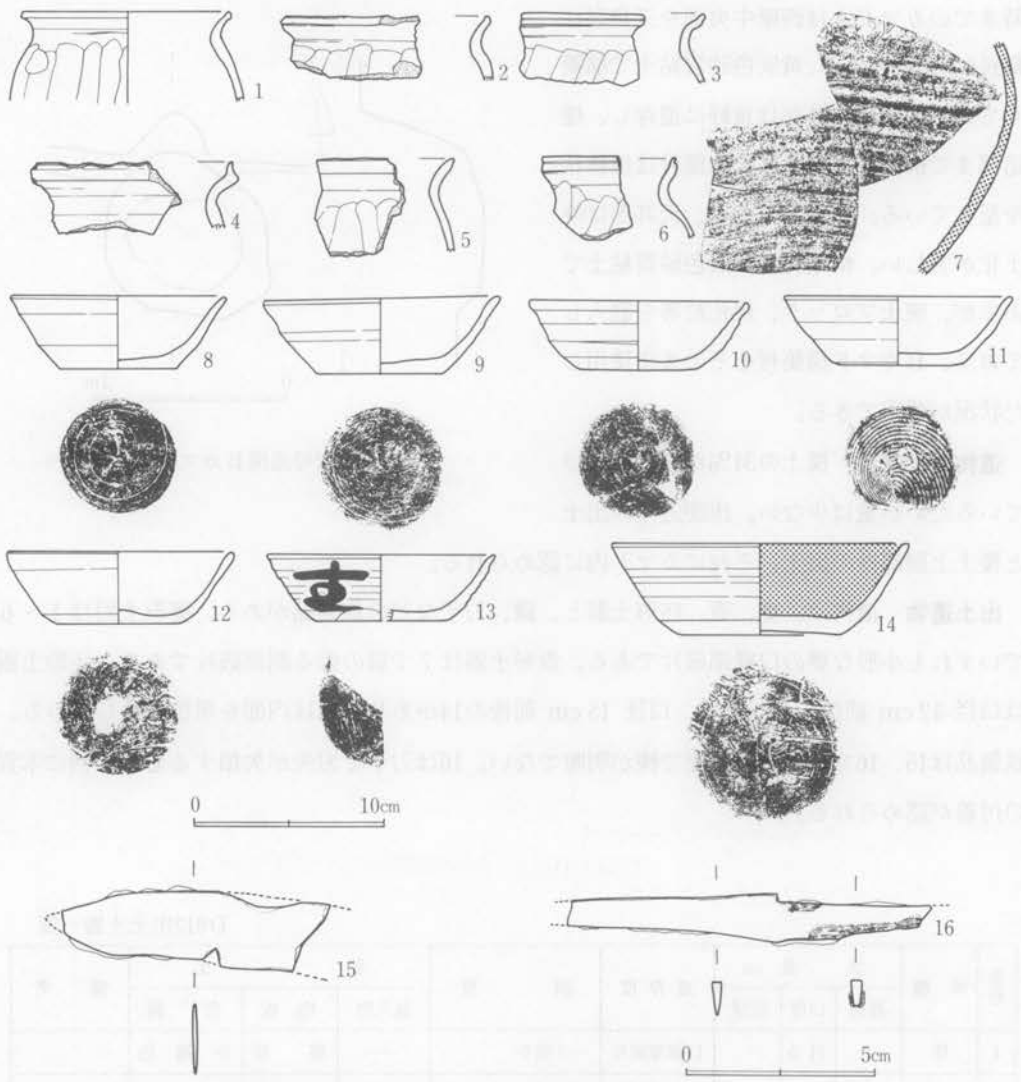


図542　D012号遺構出土遺物実測図

4．D013号遺構（図543～545、図版132－3、146、150）

環状形に分布する住居群内の北東部に接して位置し、D012、D014の中間に位置する遺構である。トレンチャーの攪乱が著しく、覆土体積の約6.12m³の31%に相当する1.93m³は攪乱を受けている。したがって、出土遺物については本来の一括資料として判断することはできない。

遺構　北壁3.52m、東壁3.56mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.40m掘り込んでいる。床面は全体にトレンチャーによる攪乱を受けているため明らかでないが堅緻な状況を遺存する部分は検出できなかった。南壁に近く径0.4m、深さ0.2mのピットを検出したが柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長0.6m掘り込んで黄灰色砂質粘土で構築している。袖は左部分がか

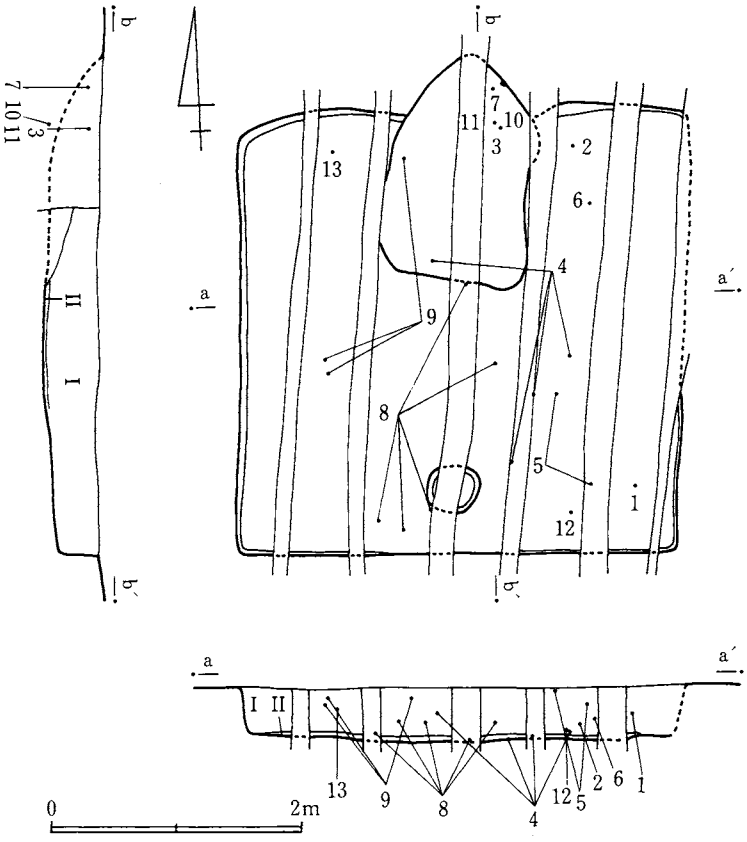


図543 D013号遺構実測図

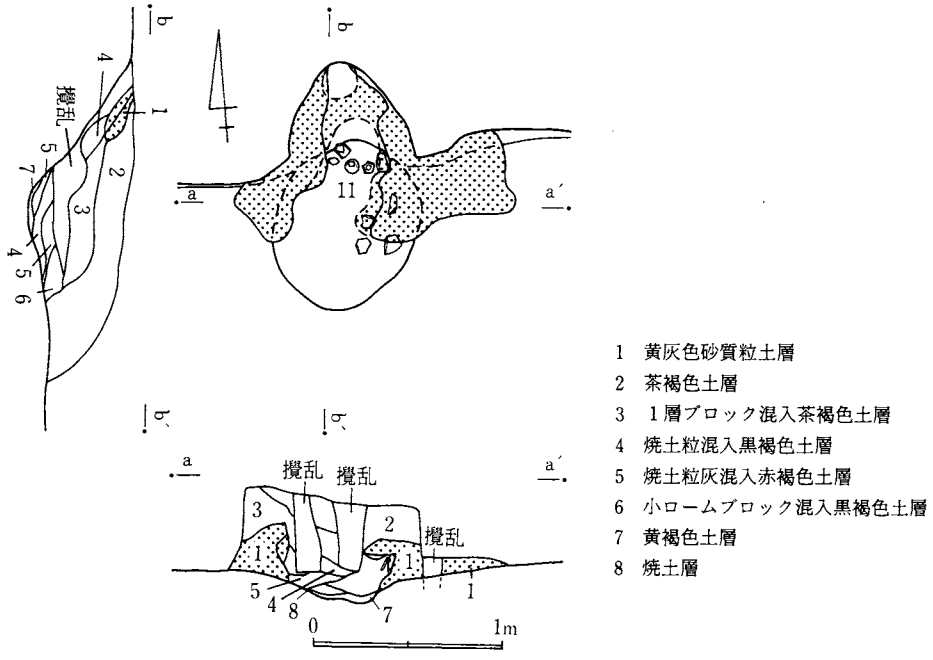


図544 D013号遺構カマド実測図

なり幅をもって構築している。天井部は煙出し部分に一部遺存するだけで崩壊している。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。また煙道部に続く部分に土製支脚が位置していた。火床には厚い焼土ブロックを認めることができる。

遺物出土状況　覆土の31%が攪乱を受けているため本来の出土状況を把握することはできないが、II層暗褐色土層の出土を中心にI層褐色土層の出土がある。また、カマド内からの出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、坏、皿形土器と、土製品、石製品、それに鉄製品がある。甕形土器は1、2、4で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部破片で、3は台付甕の底部、4は叩き目がある胴部破片である。坏形土器は5～8で、口径12cm前後の5と、口径15cm前後の6～8があり、8は内面を黒色処理している。皿形土器は9で造り出しの高台が付けてある。土製品は10、11である。10は円錐状の支脚で2次的な火を著しく受けている。11は羽口で

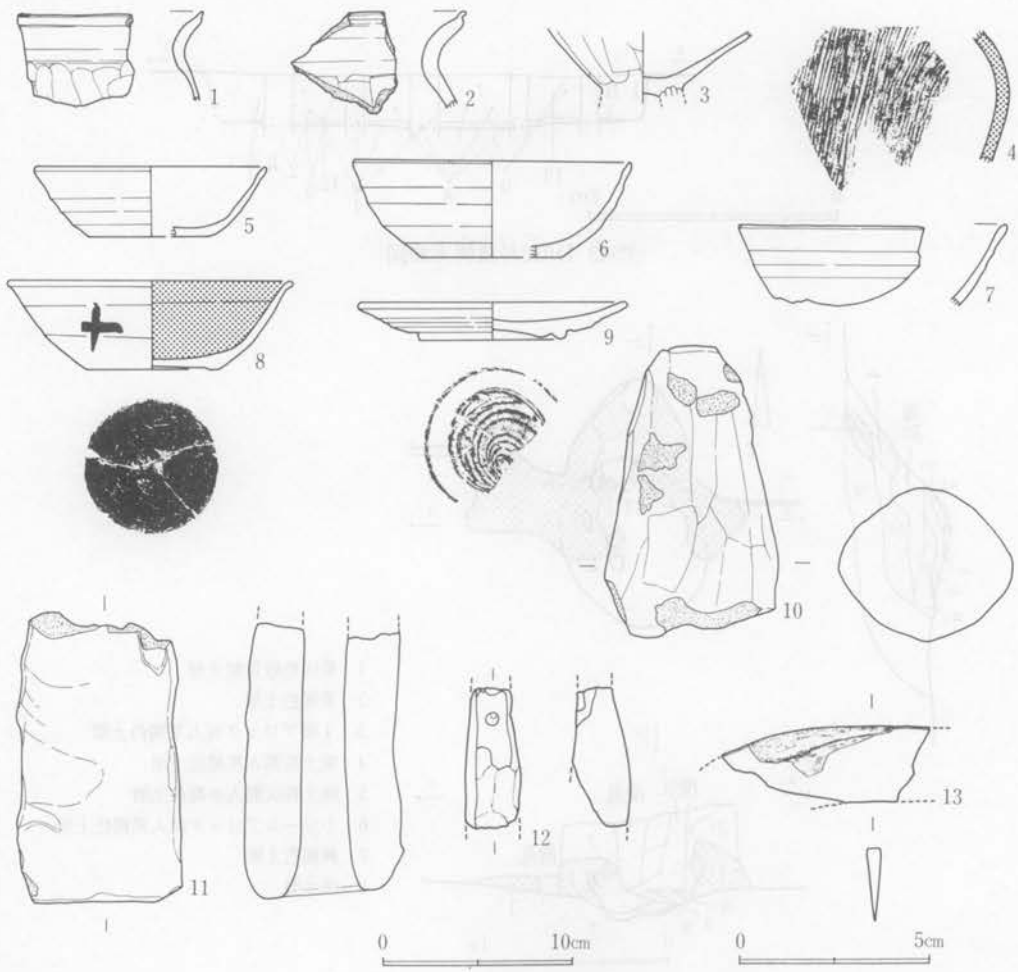


図545　D013号遺構出土遺物実測図

あるがあまり高温で使用した痕跡がない。石製品は12の凝灰岩製の砥石で小孔があいている。鉄製品は13で鎌の刃先の破片であるが若干の木質が付着している。

D013出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	
3	台付甕	—	—	—	破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	甕	—	—	—	肩部の破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.6	12.2	(6.3)	体部～底部の破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
6	坏	4.9	14.8	(7.4)	体部¼破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	内面磨き
7	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	内黒
8	坏	4.6	1.5	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	墨書「十」
9	高台付皿	2.0	14.3	7.8	⅓	——	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り

5．D014号遺構（図546～549、図版133－1、146、150）

環状形に分布する住居群内の北東部に接して位置し、D013に接して位置している。トレンチャーの攪乱が著しく覆土体積4.98m²の55%に相当する2.77m²が攪乱を受けている。したがって、出土遺物については本来の一括資料として判断することはできない。

遺構　攪乱を受けているため北西コーナー、南東コーナー部分については推定線である。北壁3.6m、東壁3.4mで方形の平面形を呈していて竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.23m掘り込んでいる。攪乱が床面まで達しているため全体を把握することはできないが、遺存している部分の状況から察すれば良好と思われる。西壁中央部に近くハマグリを主体とする貝ブロックを検出した。柱穴、壁溝については検出できなかった。

カマド　東壁と西壁において検出した。旧時のカマドBは東壁中央部に構築されたもので、住居修改築に伴い取り毀しており、煙道部が遺存するだけである。壁の掘り込みは現在長0.4mを計り擂鉢状の火床部が認められる。住居廃絶時までのカマドAは北壁中央部に構築しており、壁を三角形に最長0.2mを掘り込んで黄灰色砂質粘土によって袖、天井部を形成している。一部攪乱を受けるが袖、天井部とも遺存状況は良好であるが、煙出し部が不明であることと、火袋部における焼土化が著しくない点から、長期に使用されなかったと考えられる。

遺物出土状況　遺物の出土量は攪乱を受けているためか少量であるが、床面上に近い位置から出土している。平面的にはかなり散漫な状況を呈している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～4で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片で、2は条痕状の磨がある胴部下半の破片である。3は甕というよりも甑に近い

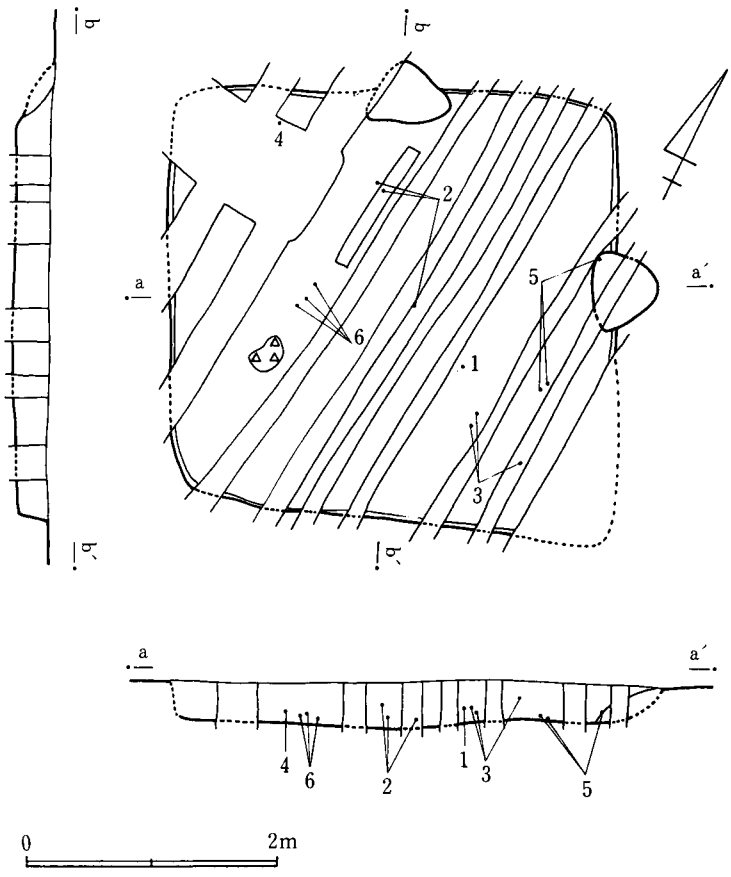
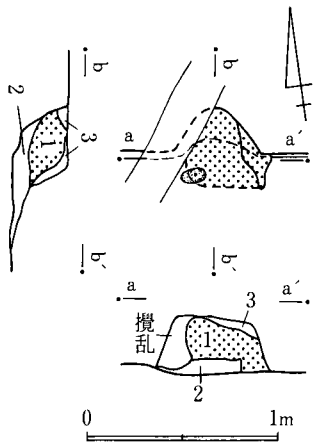
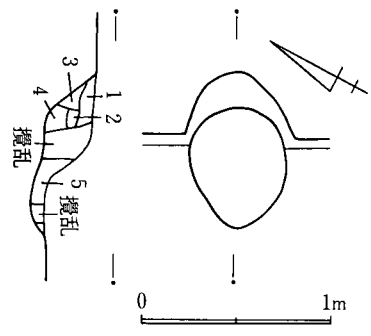


図546 D014号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 焼土粒混入茶褐色土層
3 1層混入黒褐色土層

図547 D014号遺構Aカマド実測図



1 茶褐色土層
2 暗茶褐色土層
3 黒褐色土層
4 焼土粒混入褐色土層
5 焼土粒混入黒褐色土層

図548 D014号遺構Bカマド実測図

形状を呈している。4は櫛描きがある広口甕の口縁部破片である。坏形土器は5で器壁が若干厚く体部は内彎ぎみに開く形状を呈する。皿形土器は6で高台がなく、内面を黒色処理している。

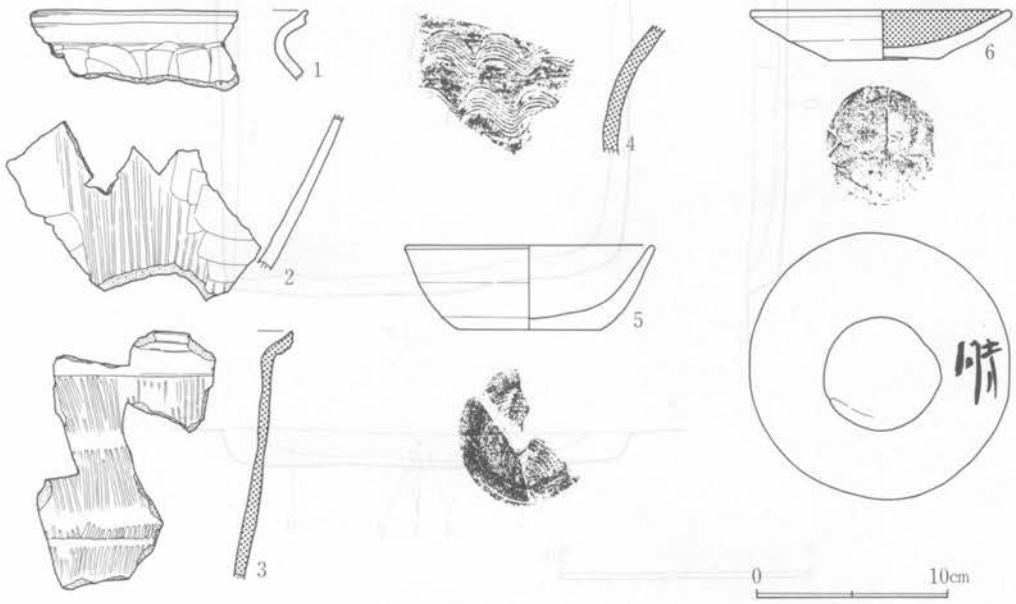


図549 D014号遺構出土遺物実測図

D014出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	ヘラ削り 磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	——	やや軟弱	黄灰色	
4	広口甕	—	—	—	頸部破片	——	——	堅緻	青灰色	
5	坏	4.3	13.1	7.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
6	皿	2.6	13.9	6.0	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	墨書「時」 内面磨き

6．D071号遺構（図550～552、図版133－2、146）

環状形に分布する住居群内の南側に接して位置しD072が近接している。トレンチャーによって覆土体積の19%が攪乱を受けている。したがって、出土遺物は本来の一括資料として判断することはできない。

遺構　北壁3.28m、東壁3.32mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は若干の

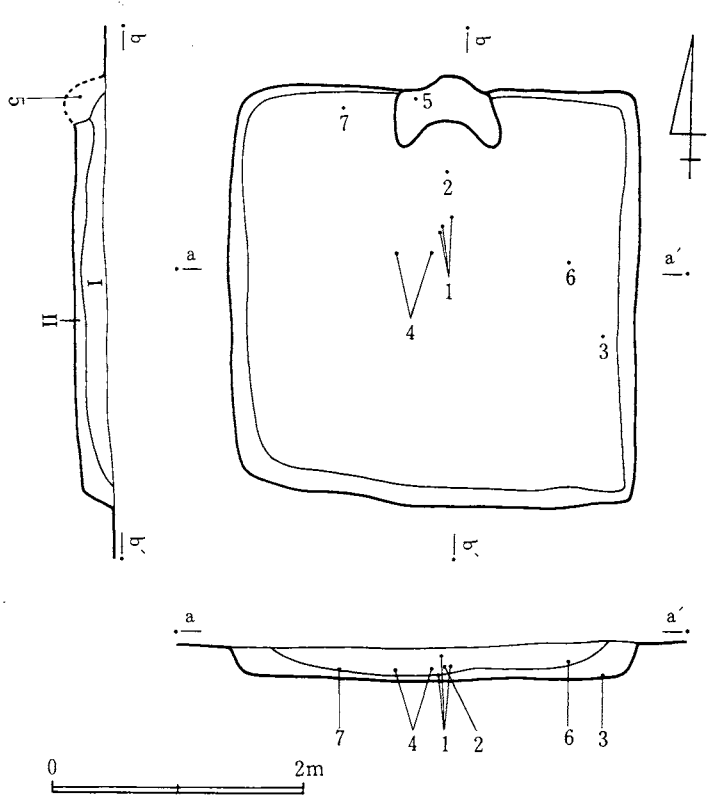


図550 D071号遺構実測図

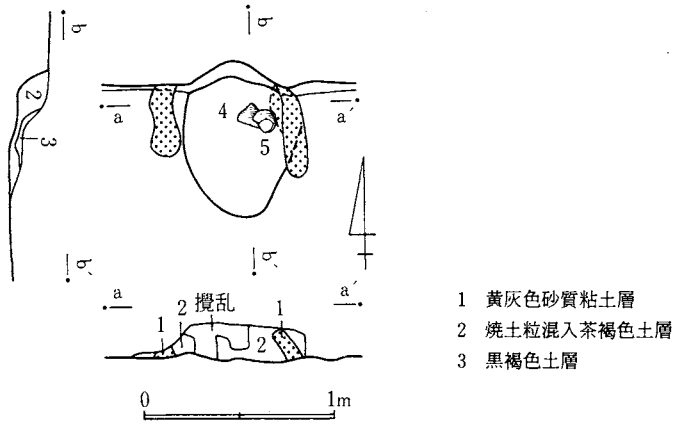


図551 D071号遺構カマド実測図

傾斜をもって0.25m掘り込んでいる。床面は攪乱を受けているものの良好な状況が把握できる。柱穴、壁溝等の施設は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長0.15m掘り込んで黄灰色砂質粘土で構築している。袖部から煙道部にかけては粘土の貼り込みが認められず、また天井部も遺存していない。袖、天井部等焼土

化が著しくなく長期にわたり使用された状況ではない。全体として住居の掘り込み自身が浅いせいもあるのか簡単に構築されている。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗褐色土層で多くはカマド前方部のⅡ層上面より出土している。その他カマド内からの出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と、石製品がある。甕形土器は1～4で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片である。2、4は胴部に叩き目がある破片であるが形状を窺うことはできない。坏形土器は5、6で、5は体部が内彎ぎみに開く形状のものである。6は体部に墨書がある破片である。石製品は7の凝灰岩製の砥石で、著しい研ぎべりを生じている。

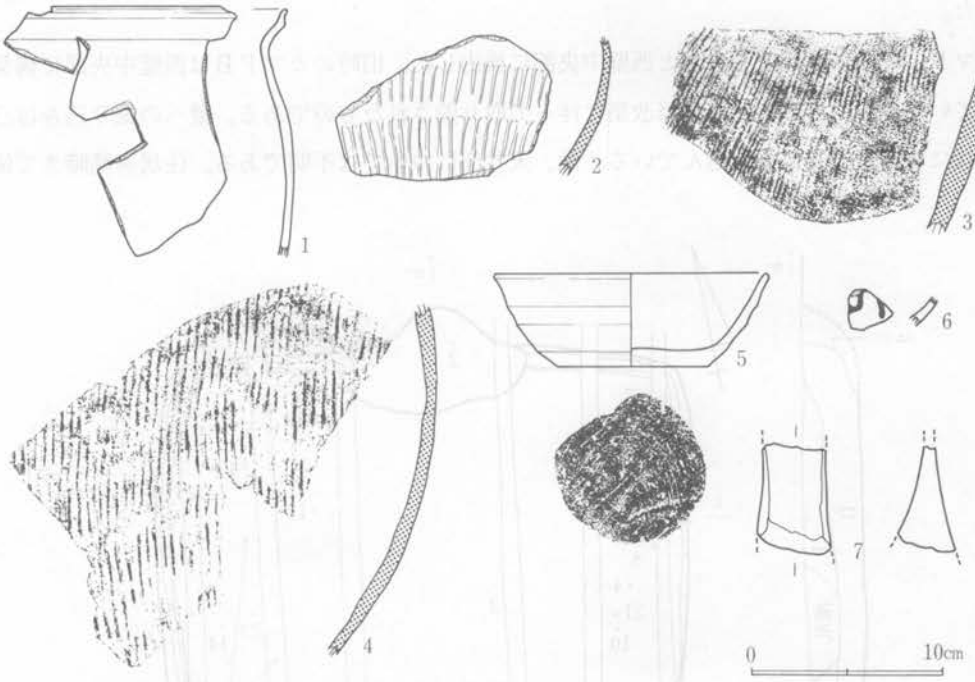


図552　D071号遺構出土遺物実測図

D071出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	灰色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	(内)灰色 (外)淡赤褐色	
5	坏	4.8	(14.2)	8	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)灰褐色 (外)明赤褐色	
6	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明

7．D072号遺構（図553～557、図版133－2、150）

環状形に分布する住居群内の南側に接して位置し、D071が近接している。トレンチャーによって溝状の攪乱を受けている。覆土体積は約6.49m³と推定できるが、その14%に相当する0.92m³は攪乱土である。したがって出土遺物は一括資料になり得ないが住居廃絶時の状態に近い状態を捉えることが可能であろう。

遺構　北壁4.26m、東壁3.76mで、若干隅の丸い方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.44m掘り込んでおり、直下には幅0.19m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。住居中央より東側の床面に炭化物、焼土塊を多量に検出した。よって焼失した遺構と考えられる。柱穴等は検出できなかった。

カマド　カマドは北壁中央部と西壁中央部に検出した。旧時のカマドBは西壁中央部に構築されていたものであるが、住居修改築に伴って取り毀されたものである。壁への掘り込みは三角形状に現存長0.55m掘り込んでいる。袖、天井部については不明である。住居廃絶時まで使

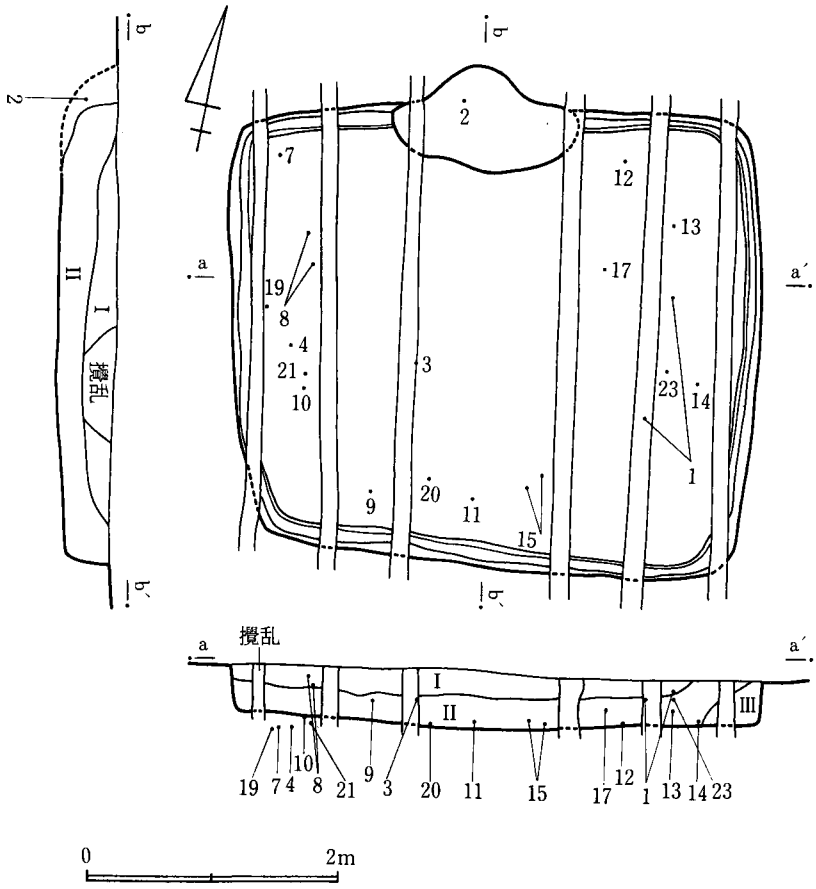


図553　D072号遺構実測図

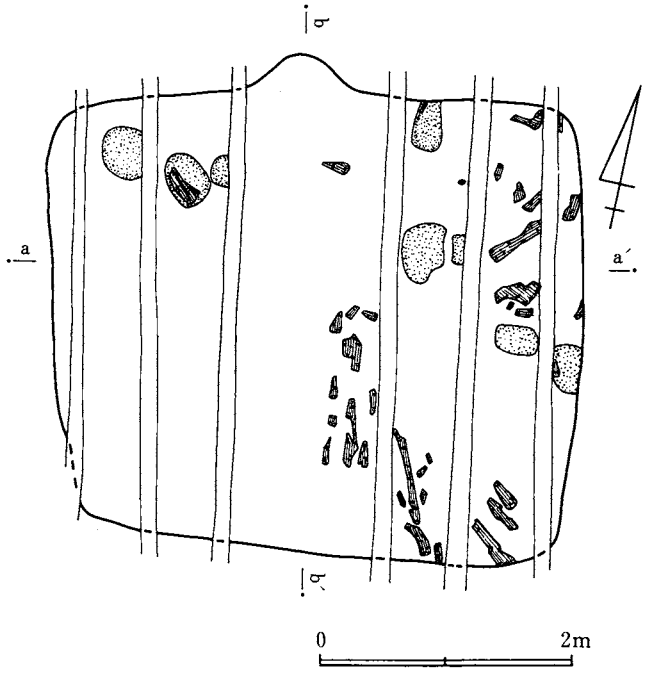
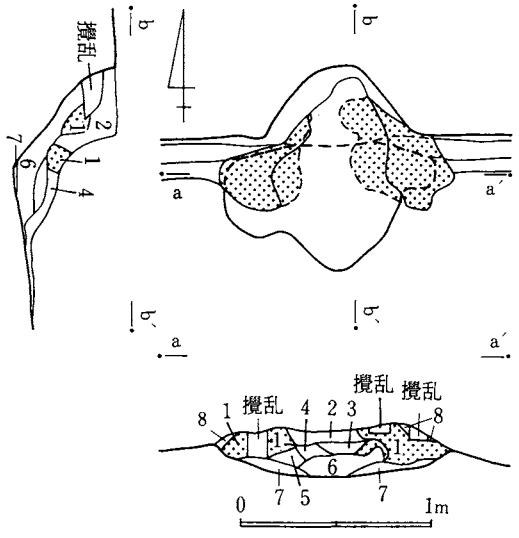
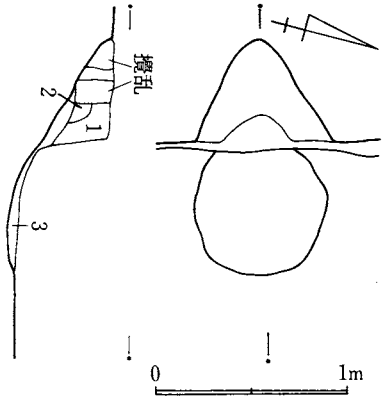


図554 D072号遺構炭化物出土状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 焼土粒混入黒色土層
3 焼土粒炭化物混入黒褐色土層
4 焼土粒混入暗赤褐色土層
5 焼土粒灰混入茶褐色土層
6 焼土粒混入黄褐色土層
7 暗褐色土層
8 褐色土層

図555 D072号遺構Aカマド実測図



1 黒色土層
2 黄灰色砂質粘土層
3 焼土粒混入暗赤褐色土層

図556 D072号遺構Bカマド実測図

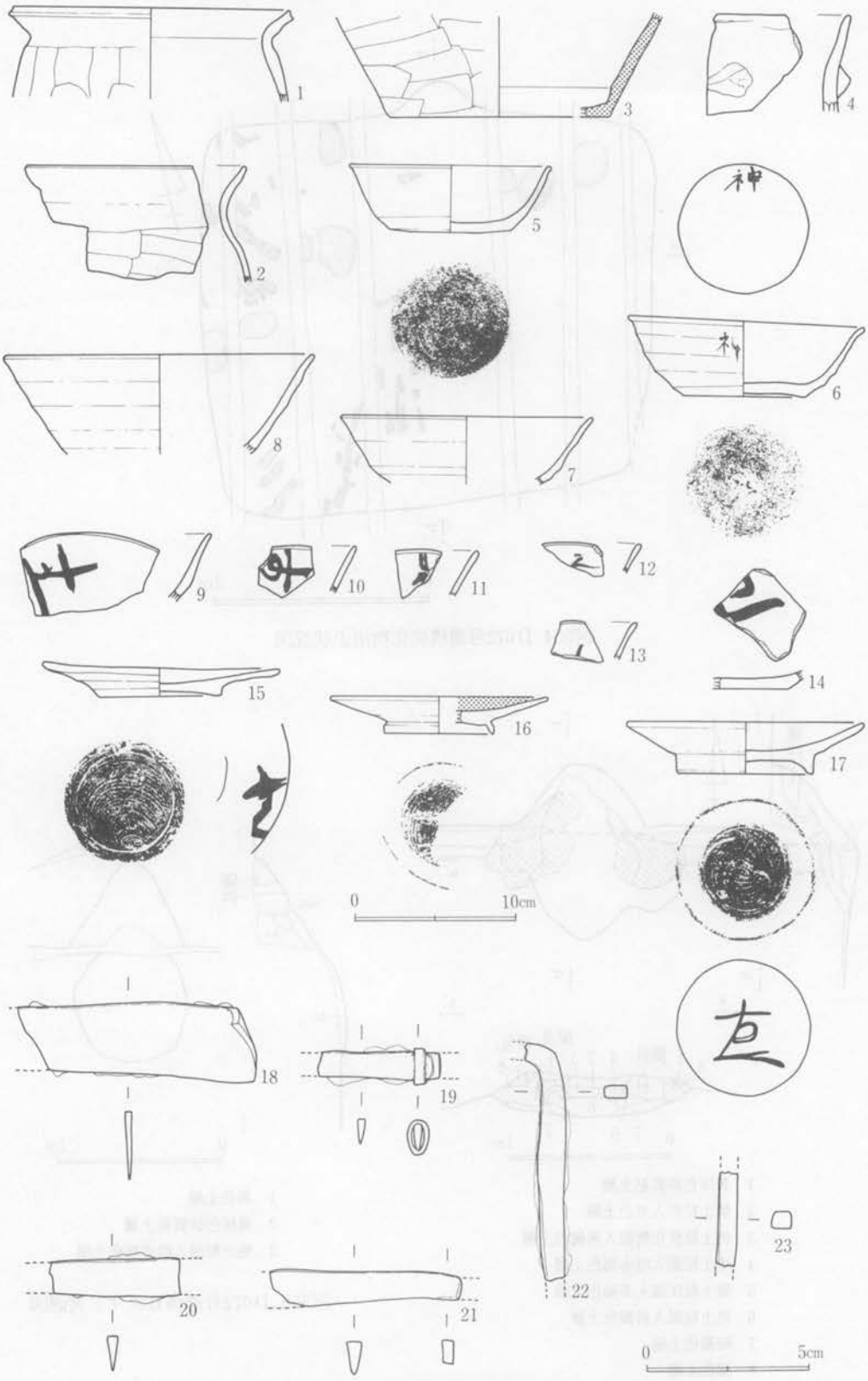


図557　D072号遺構出土遺物実測図

用されていたカマドAは北壁中央部を最長0.4m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。袖は焚口部より煙道部にかけて検出できたが天井部は崩壊しているため明らかでない。火袋部の袖は著しく焼土化している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層暗褐色土層、III層焼土炭化物混入褐色土層がほぼ擂鉢状に堆積している。焼失した住居であるためIII層を中心に床面上から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片、2は緩やかに外反する口縁部の破片、3はヘラ削り調整が施される底部破片である。甑形土器は4で小把手がある胴部の破片である。坏形土器は口径12cm前後の5と、口径15cm前後の6、7がある。9～14は体部に墨書がある破片である。鉢形土器は8で体部の破片である。皿形土器は15～17で高台のない15と高台のある16、17がある。16は内面が黒色処理してある。鉄製品は18～23で、18は鎌、19～21は刀子、22、23は角棒状の用途不明の鉄製品である。

D072出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	5.6	(17.0)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)淡褐色 (外)暗褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
3	甕	(6.3)	—	(13.6)	底部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)淡褐色 (外)褐色	
4	甑	—	—	—	胴部破片	——	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)明褐色	
5	坏	4.2	12.3	7.6	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	灰褐色	
6	坏	4.6	14.5	7.5	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	墨書「神」 内面磨き
7	坏	4.1	(15.6)	—	1/2	——	——	堅緻	明褐色	
8	鉢	6.1	(19.0)	—	1/3	——	雲母	堅緻	暗褐色	
9	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「主」
10	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨「主」
11	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	(内)淡褐色 (外)明赤褐色	墨書判読不明
12	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
13	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡灰褐色	墨書判読不明
14	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	(内)淡褐色 (外)乳褐色	墨書判読不明
15	高台付皿	1.6	14.4	7.6	完形	——	雲母	堅緻	淡褐色	糸切り
16	高台付皿	2.2	(13.4)	6.8	1/3	——	——	堅緻	灰褐色	内黒 糸切り
17	高台付皿	3.2	(14.6)	8.2	1/3	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	墨書「主」

8．D077号遺構（図558～560、図版134－1、146、150）

環状形に分布する住居群内に位置するが若干中央の空間部分に突出した状況が認められる。

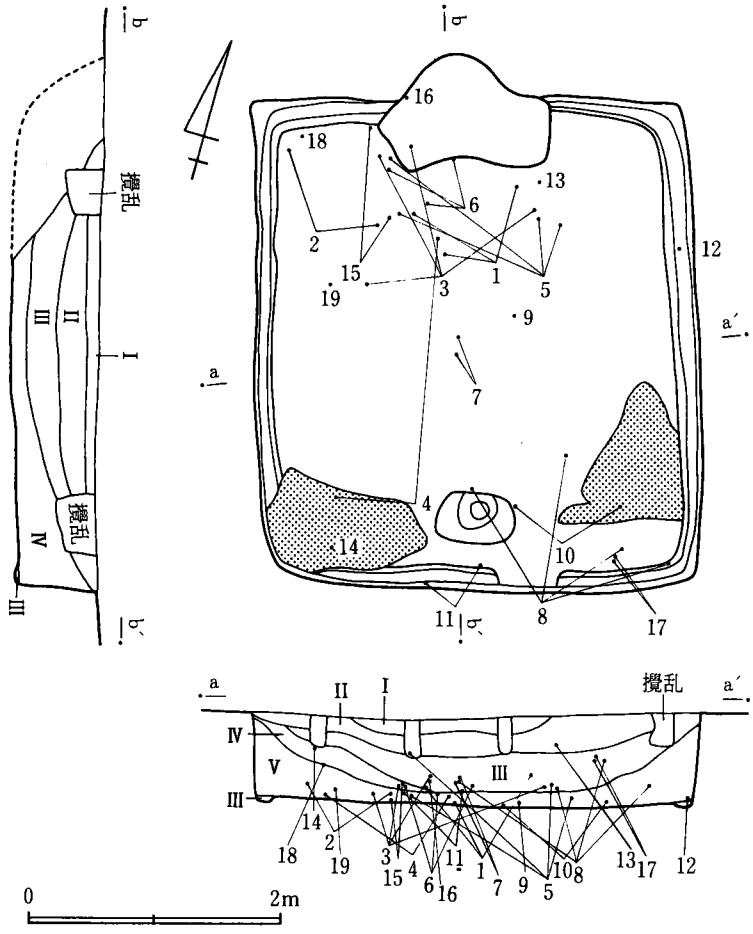
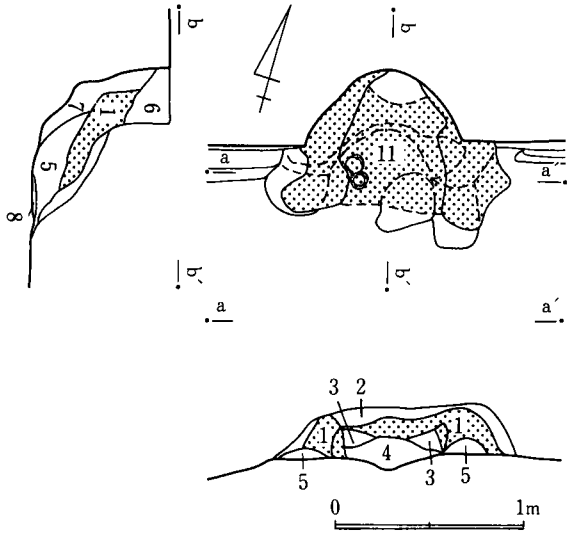


図558 D077号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 1層混入茶褐色土層
3 焼土粒混入茶褐色土層
4 焼土粒混入褐色土層
5 ロームブロック層
6 黒色土層
7 焼土粒ロームブロック混入褐色土層

図559 D077号遺構カマド実測図

南側にD090が位置している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けているものの覆土の上層部分と壁の一部分であるため、極端に遺存状態が悪い遺構でない。攪乱の度合は8％である。

遺構　北壁3.56m、東壁4.0mで長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.64m掘り込んでおり、直下には0.22m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除き認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、特にカマド前方部分が顕著である。南壁に近く、長径0.65m、深さ0.2mを計るピットを検出した。また、南東コーナーと南西コーナー部分に水簸した粘土塊を検出した。粘土塊は厚さ10cm程度のものであるが、南東コーナー部分は床面が他より低くなっているためか厚さが15cmである。さらに溝らしい落ち込みがあるためこの部分は粘土溜として利用していた可能性が考えられる。

カマド　北壁中央部を最長0.4m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖部はロームブロックを芯に構築しているが、粘土の範囲が右側にずれているのが認められる。袖、天井部ともに遺存状況は良好である。火袋部に相当する部分の袖、天井部は著しい焼土化を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黄褐色土層、Ⅱ層焼土粒混入暗褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層暗褐色土層、Ⅴ層褐色土層が擂鉢状に堆積している。遺物はⅤ層中が最も多く、床面上のものもある。

D077出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	14.7	14.4	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	(内)褐色 (外)赤褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデヘラ削り	砂粒	やや軟弱	暗褐色	
3	甕	8.0	—	9.3	底部のみ	ヘラ削り	——	堅緻	(内)褐色 (外)赤褐色	
4	甕	5.0	—	9.6	底部のみ1/2	ヘラ削り	砂粒	軟弱	(内)赤褐色 (外)褐色	
5	甕	5.6	24.0	—	1/6	——	砂粒	堅緻	灰色	
6	甑	10.5	—	14.6	1/2	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	(内)黒褐色 (外)褐色	
7	坏	3.4	13.0	8.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
8	坏	3.8	12.5	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)赤褐色 (外)褐色	
9	坏	3.9	13.2	6.1	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	墨書「主」
10	坏	3.7	14.0	7.9	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	糸切り
11	鉢	6.3	18.6	6.8	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
12	鉢	4.7	18.6	—	1/4	——	——	堅緻	褐色	
13	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
14	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
15	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「匡」
16	高台付皿	2.2	13.3	6.1	1/2	——	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)赤褐色	糸切り
17	高台付皿	1.6	—	7.5	底部のみ	——	——	堅緻	赤褐色	糸切り

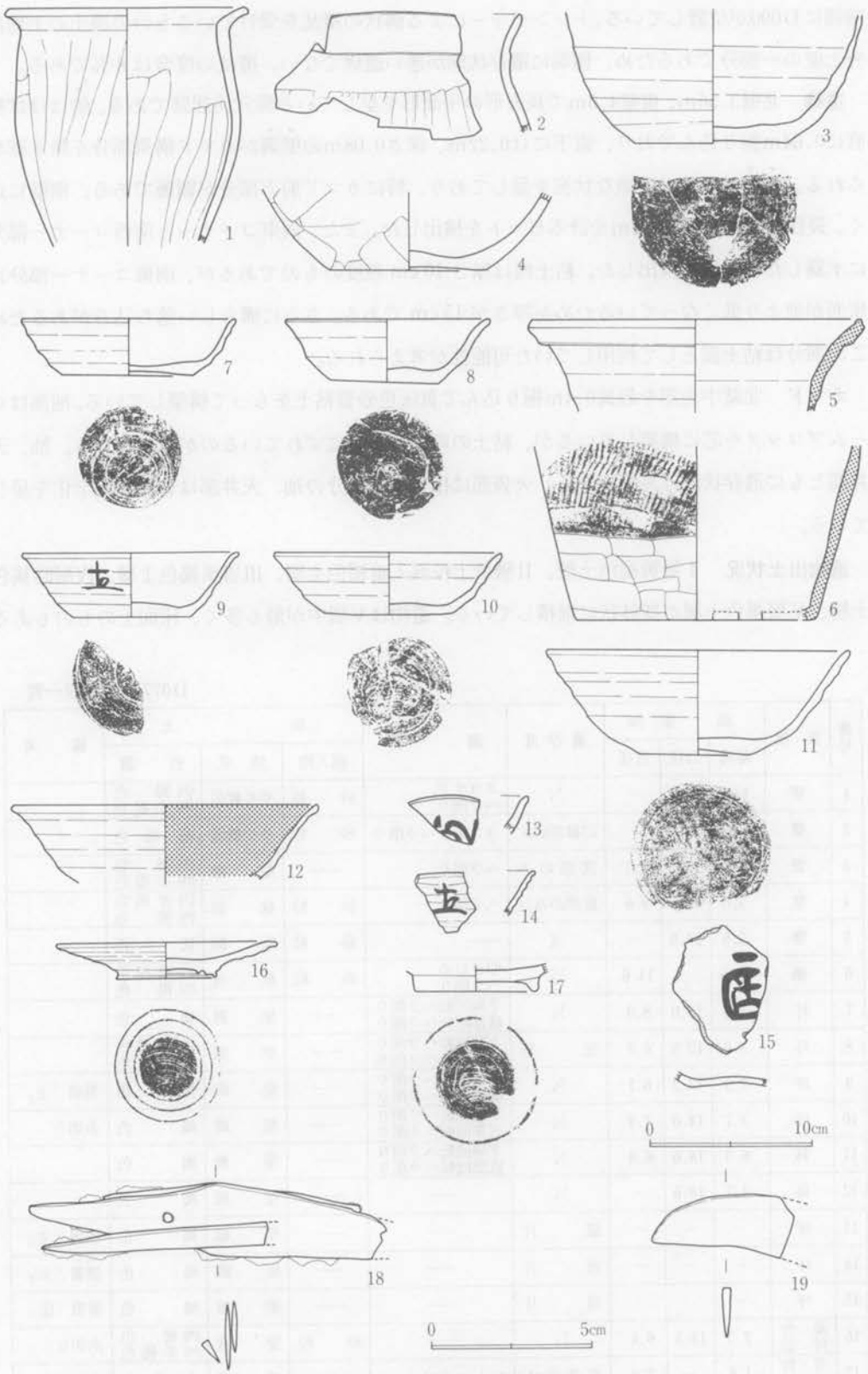


図560 D077号遺構出土遺物実測図

平面的にはカマド前方部分に集中しているのが認められる。またカマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で1は小形の甕である。2は緩やかに外反する口縁部の破片、3、4は底部の破片、5は広口甕の口縁部破片である。甑形土器は6で胴部に叩き目がある。坏形土器は7～10で比較的器高の低いものである。13～15は墨書のある破片である。鉢形土器は11、12で12は内面を黒色処理してある。皿形土器は造り出し高台のある16と造り付け高台のある17がある。鉄製品は18、19で18は刀子とヘラ状鉄器が錆のため癒着している。19は鎌の刃先である。

9．D078号遺構（図561～564、図版134－2、146、147、149、150）

環状形に分布する住居群内の最も南側に位置している。M－6の基準杭に近く位置している。

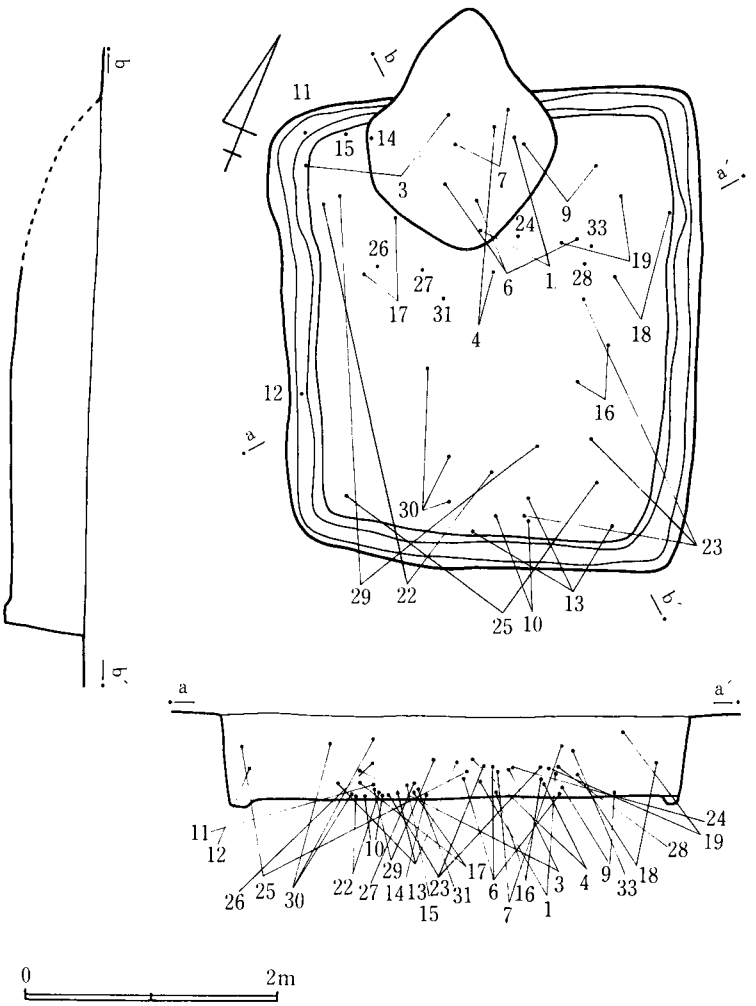


図561　D078号遺構実測図

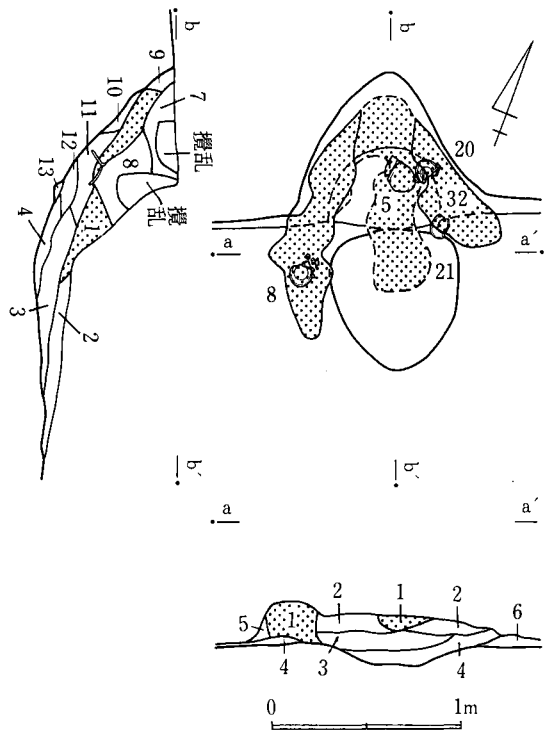
確認面で把握していた平面形が掘り始めた段階の平面形と異なったため、一部壁の掘り過ぎ等が生じた。遺存状況はⅠ群の中で攪乱を受けていない住居の一つである。

遺構　北壁3.3m、東壁3.8mで長方形を呈する平面形を呈している竪穴住居跡である。先のD077に類似する平面形である。壁はほぼ垂直に0.68m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長0.7m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。右袖を左袖と対比すると極端に短かいことが認められる。粘土は袖から煙出し部にわたり検出でき、遺存状況が良好である。天井部は一部遺存するものの原位置から大きくずれを生じている。煙道部が特に焼けているのが認められる。

・遺物出土状況　カマド前方部分と、南壁に近い部分に集中して出土している。床面上の出土もあるが、覆土中層からの出土が多い。また、カマド内からの出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と石製品がある。甕形土器は1～7で、1、2は大形の甕で形状も同じである。3は小形の甕であるが形状的に1、2に酷似する。4は器壁が薄く口縁が緩やかに外反する。5は下膨する小形の甕でヘラ削り調整される。6、7は叩き目がある甕で6は広口甕である。坏形土器は口径が 12 cm 前後の8～19と、口径が 15 cm 前後の



1　黄灰色砂質粘土層
2　1層混入暗褐色土層
3　焼土粒混入黒褐色土層
4　焼土粒ローム粒混入褐色土層
5　茶褐色土層
6　黄褐色土層
7　黒色土層
8　褐色土層
9　焼土化する褐色土層
10　暗黄褐色土層
11　焼土粒混入暗赤褐色土層
12　焼土粒混入暗赤褐色土層
13　焼土層

図562　D078号遺構カマド実測図

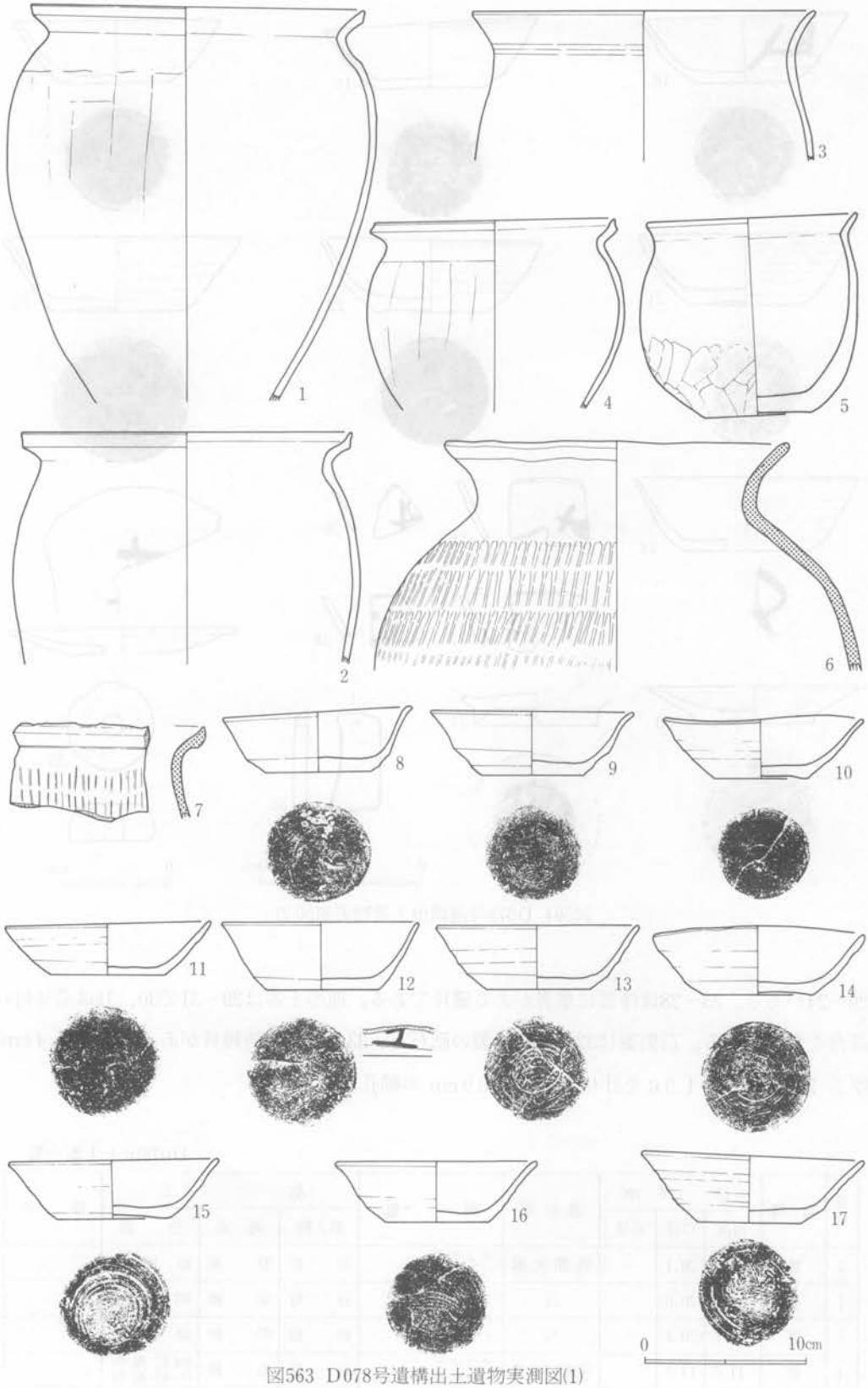


図563 D078号遺構出土遺物実測図(1)

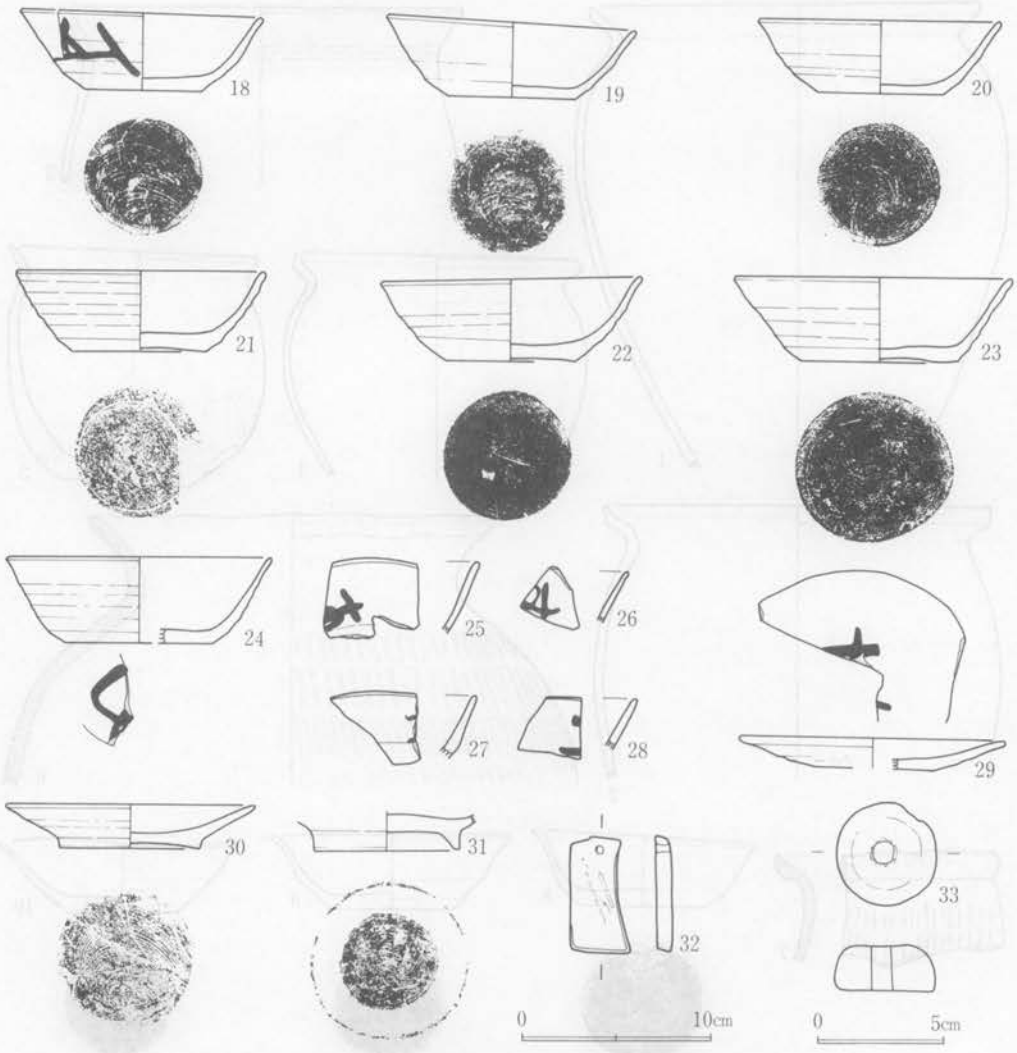


図564 D078号遺構出土遺物実測図(2)

20～24がある。25～28は体部に墨書がある破片である。皿形土器は29～31で30、31は造り付け高台を有している。石製器は32の凝灰岩製の砥石と、33の滑石製紡錘具がある。33は径 4 cm、厚さ 1.7 cm、重さ1.9 g を計り、中央に 0.9 cm の軸孔があく。

D078出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	24.1	20.1	—	底部欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	
2	甕	14.0	(20.0)	—	¼	ナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
3	甕	9.15	(20.8)	—	⅛	ナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
4	甕	11.5	14.5		底部のみ欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)暗褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	甕	12.0	13.0	6.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	糸切り
6	甕	13.8	(20.8)	—	½	叩きじめ	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)暗褐色	
7	甕	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ	砂粒	やや軟弱	灰色	
8	坏	3.6	11.5	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)暗赤褐色 (外)淡褐色	
9	坏	3.85	12.4	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	
10	坏	3.5	12.2	5.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	
11	坏	3.1	12.5	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	暗灰褐色	
12	坏	4.2	(12.1)	7.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
13	坏	3.9	12.3	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
14	坏	4.7	12.8	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	
15	坏	3.6	12.8	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)淡褐色 (外)明褐色	糸切り
16	坏	3.75	(12.5)	6.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	糸切り
17	坏	4.1	13.5	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	糸切り
18	坏	4.1	12.5	6.1	⅜	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「山」 糸切り
19	坏	4.0	13.0	6.6	⅜	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗灰褐色	糸切り
20	坏	3.9	12.5	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	糸切り
21	坏	4.2	18.8	6.8	¾	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	赤褐色	
22	坏	4.3	13.6	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	暗褐色	内面磨き
23	坏	4.4	14.5	8.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	内面磨き
24	坏	4.4	(13.7)	(7.6)	⅓	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明 内面磨き
25	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	暗褐色	墨書「主」
26	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
27	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明 内面磨き
28	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明
29	Ⅲ	1.55	(13.8)	(6.1)	⅓	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	墨書「主」
30	高台付Ⅲ	2.3	(12.9)	7.3	完形	——	——	堅緻	明褐色	内面磨き 糸切り
31	高台付Ⅲ	1.8	—	7.4	底部のみ	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	

10. D081号遺構（図565～568、図版134－3、147、149）

環状形に分布する住居群内の南西部に位置し、D090、D165が近接している。D082と重複関係にあるが、不規則な状態の関係ではない。D082を切断してD081は構築している。住居はD081はD082より規模が小さい。トレンチャーの攪乱を受けているが0.8%と少なく資料的に問題はない。

遺構　D081はD082の住居中央部分より西側について切断し、D081の東壁はD082の覆土中に位置している。北壁3.04m、東壁2.9mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は

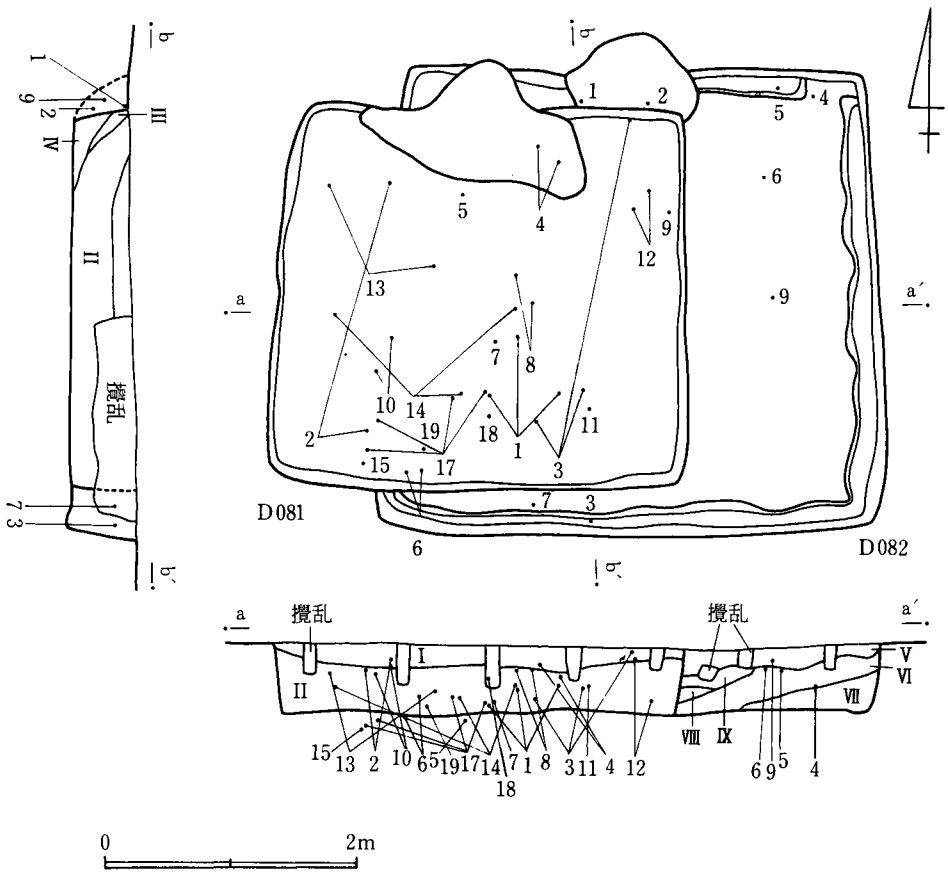


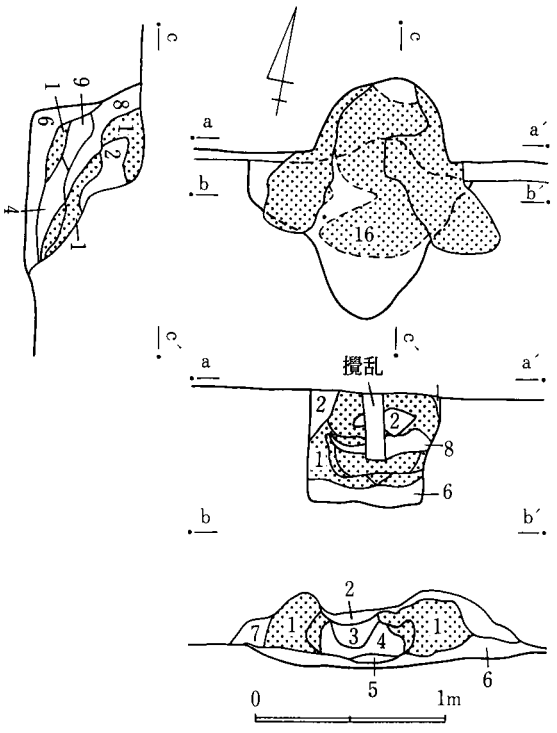
図565 D081・D082号遺構実測図

ほぼ垂直に0.52m掘り込んでいる。床面は全体に堅緻であるが南壁近くとカマド左側が軟弱である。D082の床面レベルとほぼ同じである。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド 北壁中央部、一部D082の覆土にかかる部分を最長0.55m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖はローム粒混入褐色土層の土に構築しており煙出しに続く。天井部の遺存は特に煙道部に良好に認めることができる。また煙道部の立ち上り部分には粘土を貼り込んだ所が認められる。火袋部分の袖、天井部は著しい焼土化を呈しており、煙道部に至っても一部認められる。

遺物出土状況 Ⅰ層褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層が厚さの差はあるが、ほぼ水平に堆積している。遺物はⅡ層中出土が多く床面に近い所で出土している。

出土遺物 遺物は、甕、甑、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1、2は「く」字状に外反する口縁部破片、3は水平に開く口縁部の破片、4は叩き目がある広口甕の肩部の破片である。甑形土器は5の単孔の底部破片で、器壁が薄く造られている。坏形土器は口径 12 cm 前後の 6～10と、口径 15 cm 前後の11～14がある。14は内面を黒色処理してある。



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色土層
3 焼土粒混入黄灰色土層
4 焼土粒混入黄灰色土層
5 焼土層
6 ローム粒混入褐色土層
7 暗黄褐色土層
8 焼土粒混入茶褐色土層
9 焼土層

図566 D081号遺構カマド実測図

皿形土器は15～18で、15は高台がないが、他は造り付け高台がある。鉄製品は19の刀子で遺存状況が良く柄に木質が認められる。

D081出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(10.2)	17.05	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	褐色	
2	甕	(6.0)	20.0	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	褐色	
3	甕	(8.4)	12.8	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	赤褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	——	軟弱	黒褐色	
5	甑	8.4	—	11.2	⅓	ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
6	坏	3.0	12.6	6.6	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	(内)褐色 (外)黒褐色	糸切り
7	坏	4.15	11.3	5.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒褐色 (外)褐色	糸切り
8	坏	3.4	12.1	6.9	¾	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	
9	坏	3.6	11.6	5.7	¾	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
10	坏	3.85	12.2	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)明褐色 (外)褐色	
11	坏	4.2	13.4	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き

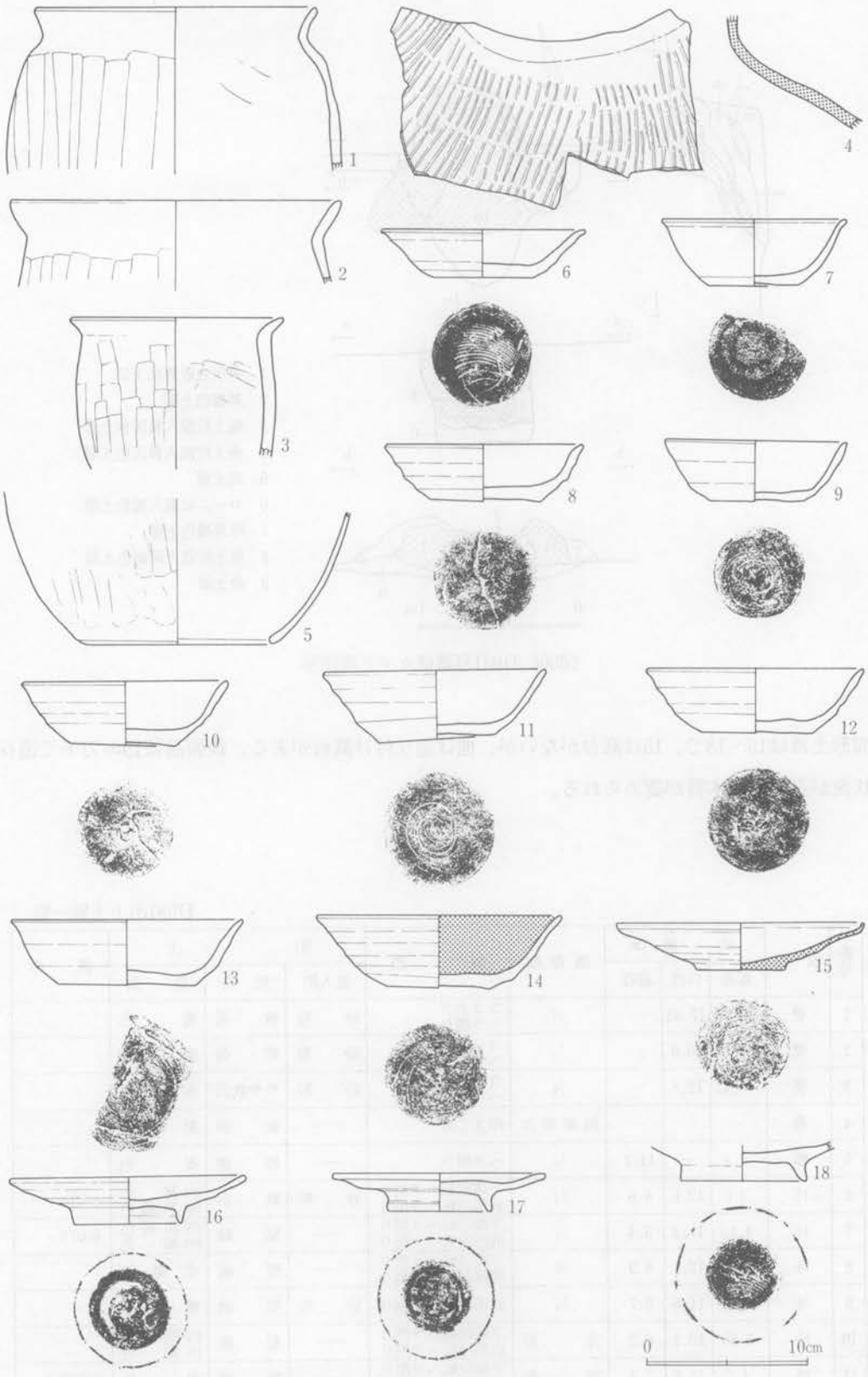


図567　D081号遺構出土遺物実測図(1)

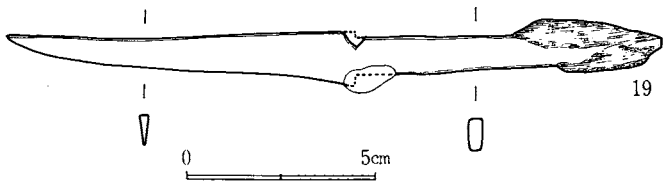


図568 D081号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
12	坏	3.9	13.5	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	内面磨き
13	坏	4.0	14.0	8.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	糸切り
14	坏	4.4	14.9	6.25	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	褐色	内黒
15	皿	2.9	15.0	5.4	1/2	——	砂粒	堅緻	青褐色	糸切り
16	高台付皿	2.9	14.1	6.6	1/2	——	砂粒	軟弱	褐色	内面磨き
17	高台付皿	2.3	13.0	6.2	2/3	——	——	堅緻	褐色	内面磨き
18	高台付皿	2.3	—	7.6	底部のみ	——	——	堅緻	暗褐色	糸切り

11. D082号遺構（図565、569、570、図版135—1、147、150）

環状形に分布する住居群内の南西部に位置し、D081に住居西側部分を切断されている遺構である。よって、遺存状況は良好でない。特に西壁から北壁にかけてはその傾向が著しい。

遺構 北壁3.68m、東壁4.0mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.52m掘り込んでいる。直下には幅0.25m、深さ0.08mの壁溝が認められるが北壁のカマド左側部分には認められない。D081と重複する西壁部分は不明であるが、最終的な床下調査において小ピット列を検出できたので、西壁直下にも壁溝の存在していたことが考えられる。柱穴等は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を最長0.4m掘り込んで、黄灰色砂質粘土によって構築している。粘土の貼り込みは袖から煙道部まで一体化している。天井部は煙道部分の遺存状況が良好で焼土化も認められる。袖部の火袋部に相当する部分も焼土化が認められるが、天井部の落下した部分と重複しているため一見して修改築が施されたような状況を呈している。火床部は若干擂鉢状を呈している。

遺物出土状況 覆土の約2分の1がD081によって切断されているため一括資料にはならない。またD081を構築する際に覆土の一部を人為的に補強した部分も認められる。V層暗褐色土層、VI層ローム粒混入褐色土層、VII層ローム粒混入暗褐色土層、VIII層ローム粒混入黒褐色土層、IX層ロームブロック混入褐色土層で、遺物はVI層を中心に出土している。またカマド内の出土もある。

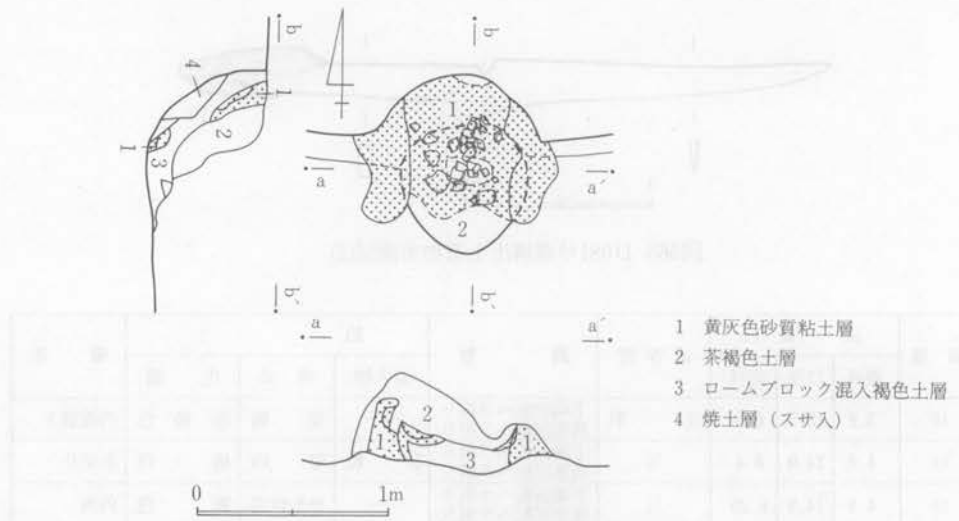


図569 D082号遺構カマド実測図

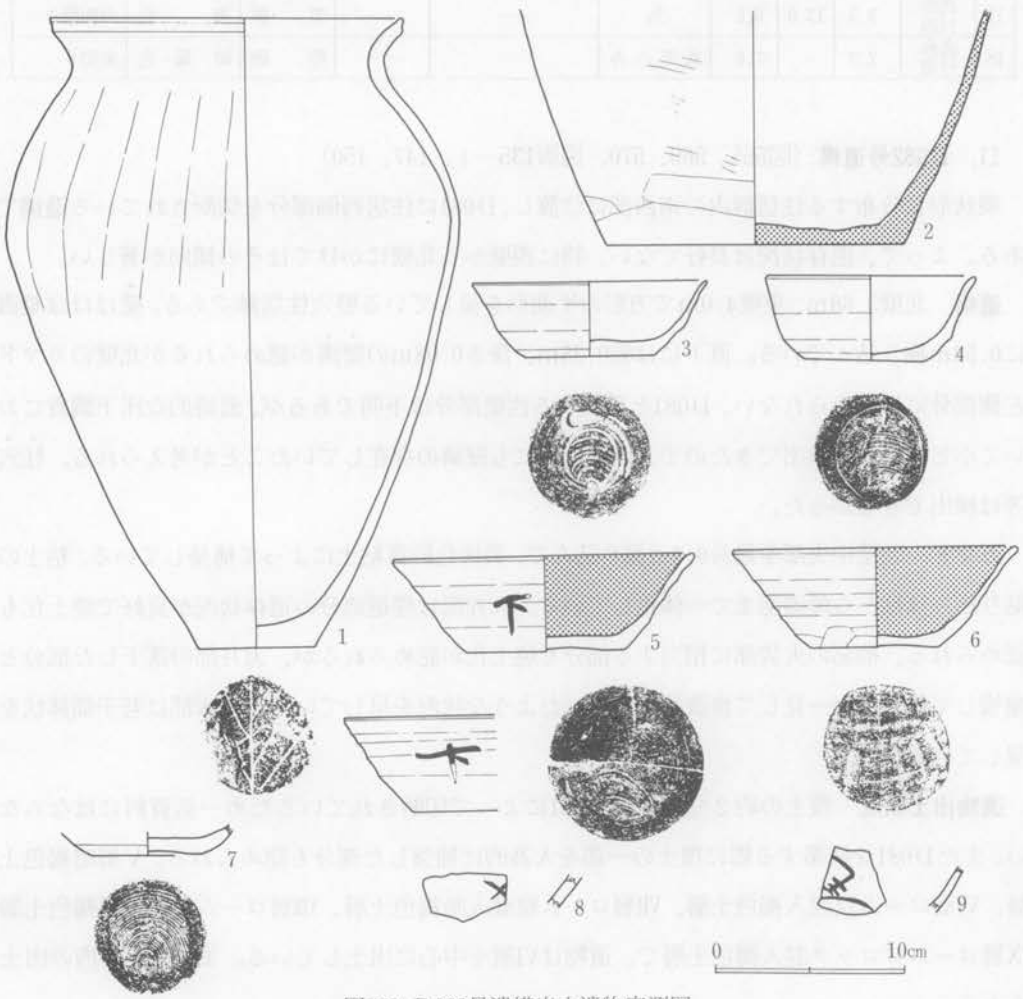


図570 D082号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1、2で、1は肩部が張る形状を呈しヘラ削り調整してある。2は叩き目がある広口甕の底部である。坏形土器は口径12cm前後の3、4と、口径15cm前後の5、6があり、いずれも内面を黒色処理してある。また7は底部の破片である。8、9は体部に墨書がある破片である。

D082出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	32.2	18.0	6.0	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)明褐色	
2	甕	(12.0)	—	15.4	½	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	褐色	
3	坏	3.8	12.1	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	糸切り
4	坏	4.3	10.8	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	糸切り
5	坏	4.9	15.2	8.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	(内)黒色 (外)褐色	墨書「下」 内黒
6	坏	5.1	14.4	6.5	⅔	下端静止ヘラ削り 底部二方向の削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)褐色	内黒
7	坏	1.5	—	8.6	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	褐色	糸切り
8	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	軟弱	(内)黒色 (外)褐色	墨書判読不明
9	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	軟弱	(内)灰色 (外)暗褐色	墨書「圍」

12. D083号遺構（図571～574、図版135－2、147、149～151）

環状形に分布する住居群内の北東部分に位置し、D012、D013、D014が近接している。トレンチャーによる攪乱が覆土全体の15%におよんでいる。M－5の基準杭が遺構落ち込み部分に位置するため、調査に先だって杭の移設作業を実施した。

遺構　北壁3.6m、東壁3.2mで長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.1mの壁溝がカマドAの部分を除いて認められる。床面は軟弱ではないものの堅緻な状況でもないが、カマド前方部が若干他の部分より堅緻な状況である。柱穴等は検出できなかった。

カマド　カマドは北壁中央部と西壁中央部に検出した。旧時のカマドBは北壁中央部に構築されていたものであるが、住居修改築に伴って取り毀されたものである。壁への掘り込みは三角形に現存長0.65m掘り込んでいる。袖、天井部の状況は不明であるが縦横断面の観察からは火袋部から煙道部にかけて粘土の貼り込みが認められる。これは本来袖から続くものと思われるが検出できる例は多くなく貴重な例である。火床に相当する部分は若干擂鉢状を呈している。なお、修改築後に壁溝が構築されている。住居廃絶時まで使用されていたカマドAは、西壁中央部を最長1.2m掘り込み、黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖はD007で認められたように取り毀されている状況が認められるが、本来破線で示した範囲に構築されていたと考えら

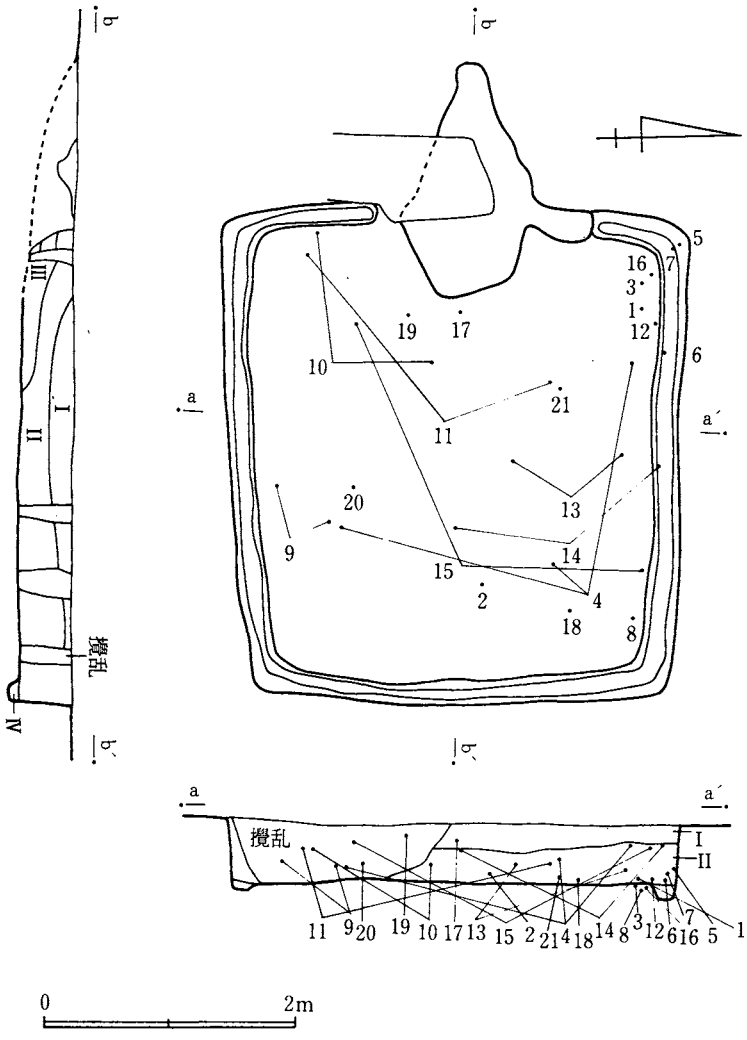
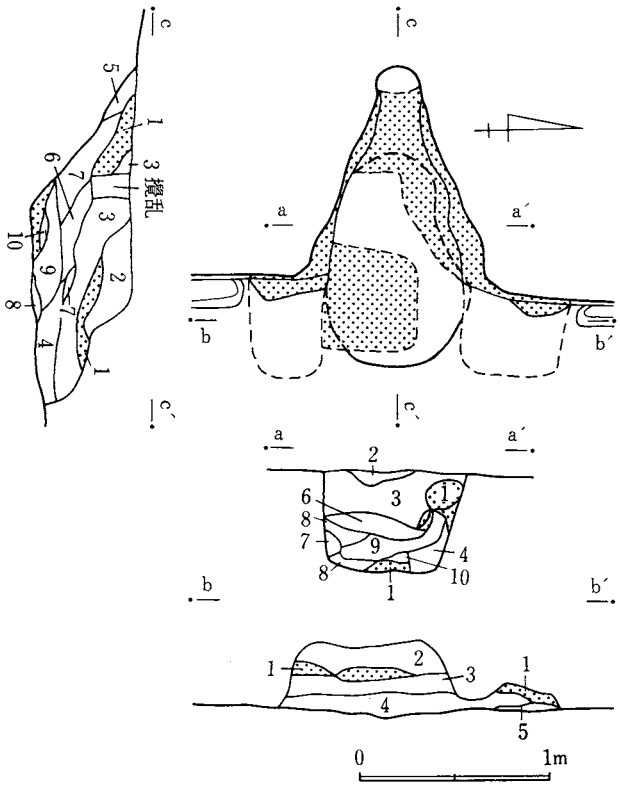


図571 D083号遺構実測図

れる。粘土の貼り込みは火袋から煙道部にかけて一体をなして構築されており、煙道部の立ち上がり部分にカマドBと同様の粘土の貼り込みが認められる。壁溝はカマド本体を通過することなく両袖部分で切れている。

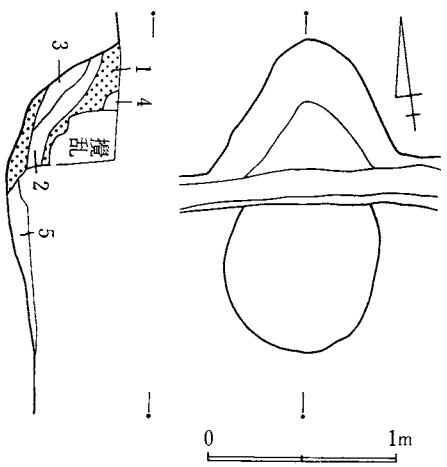
遺物出土状況　I層褐色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層暗褐色土層が擂鉢状に堆積し、主としてII層および床面近くから出土している。平面的に偏在する傾向は認められない。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器1～3で、1は胴部下半の小形甕、2は口縁部が水平に開く甕、3は広口甕の底部である。鉢形土器は4でロクロ整形され、体部下半はヘラ削り調整してある。坏形土器は口径12cm前後の5～7、12、14、15



1 黄灰色砂質粘土層
2 1層混入褐色土層
3 茶褐色土層
4 焼土粒ローム粒混入黒色土層
5 黄褐色土層
6 焼土粒混入褐色土層
7 焼土ブロック混入黒褐色土層
8 褐色土層
9 焼土粒灰混入黄灰色土層
10 焼土化した黄褐色土層

図572 D083号遺構Aカマド実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 1層炭化物混入暗褐色土層
3 炭化粒混入黄褐色土層
4 褐色土層
5 焼土ブロックロームブロック混入
褐色土層

図573 D083号遺構Bカマド実測図

と、口径15cm前後の8～11、13がある。8、13ば黒色処理してある。17～19は体部に墨書がある破片である。皿形土器は16で高台は造り付けである。鉄製品は20、21で、20は鎌で研ぎべりが著しく、部分的に木質が付着している。21は刀子の柄と思われる。

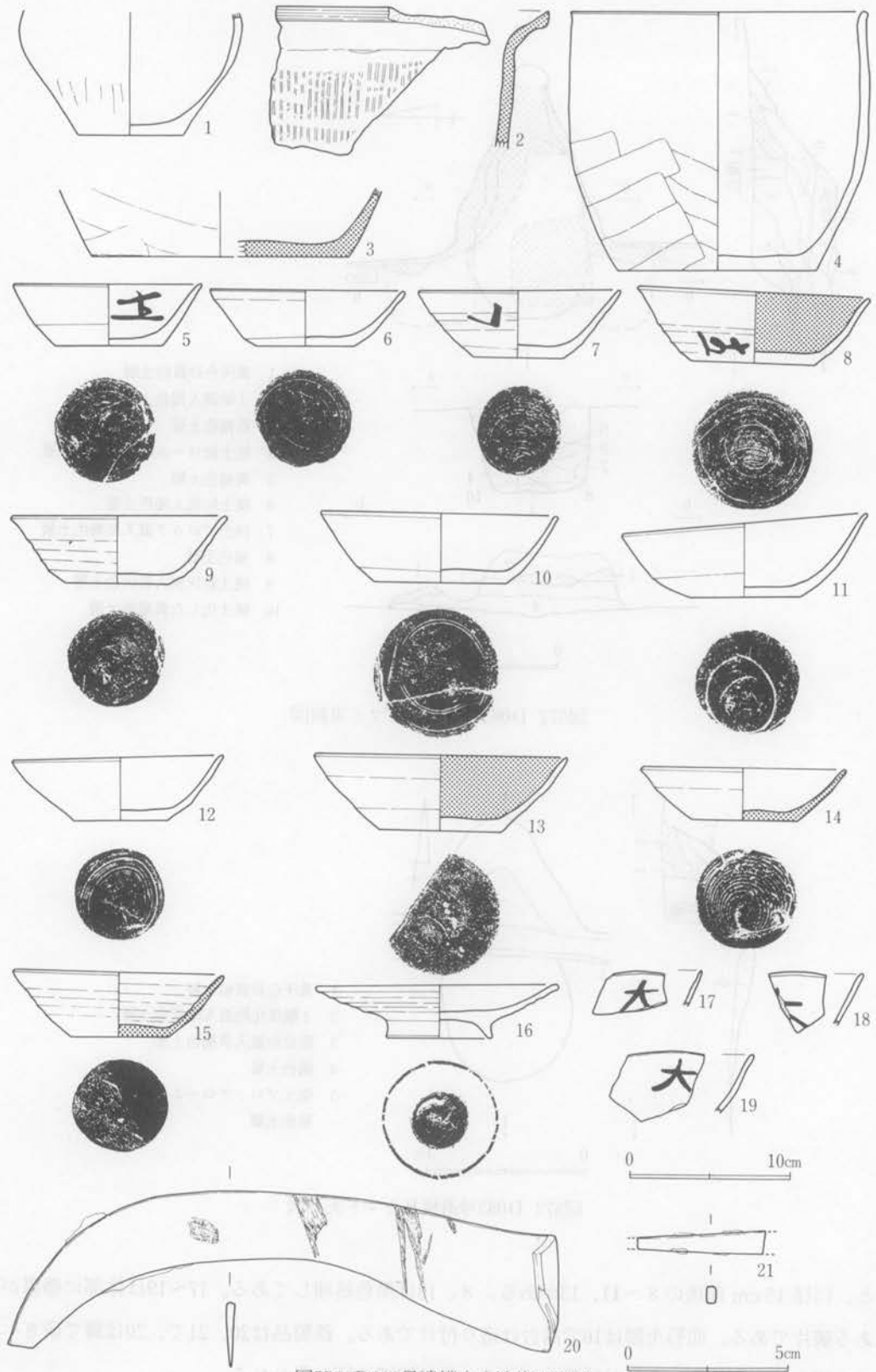


図574　D083号遺構出土遺物実測図

D083出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	7.6	—	6.4	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)黒色	
3	甕	4.0	—	(15.8)	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)淡褐色 (外)明褐色	
4	鉢	15.9	(17.9)	12.0	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)明赤褐色	
5	坏	3.8	11.4	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	墨書「主」
6	坏	3.4	11.7	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	褐色	糸切り
7	坏	4.1	12.2	5.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	暗灰褐色	墨書判読不明、糸切り
8	坏	4.3	14.0	7.5	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「主」
9	坏	4.1	12.9	6.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り
10	坏	4.2	14.4	8.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	内面磨き
11	坏	4.5	14.9	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	内面磨き
12	坏	3.8	12.6	5.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	
13	坏	4.6	(15.5)	7.6	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	明褐色	内黒 糸切り
14	坏	3.2	(12.3)	6.4	1/2	——	砂粒	堅緻	明灰色	糸切り
15	坏	3.9	12.6	5.9	1/2	下端回転ヘラ削り 底部一方向の削り	砂粒	堅緻	灰色	
16	高台付皿	3.2	14.8	6.4	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	
17	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書「大」
18	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「大」
19	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書「大」

13. D084号遺構（図575～578、図版135－3、147、151）

環状形に分布する住居群内の北側に位置し、D083、D085が近接している。トレンチャーによる攪乱を覆土全体の13%に相当する部分が受けている。最終的な床下調査を実施したところ、遺構床面より一回り小さい方形の掘りかたを検出できた。掘りかたには粘土塊や焼土ブロック等を検出したが、これらについてどのような性格を有するものか不明である。

遺構　北壁2.88m、東壁3mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んでいる。床面はやや堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長0.85m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。両袖ともに良好に構築され火袋、煙道まで一体化している。天井部の遺存状況も良好で煙出しまで認められる。袖、天井部の火袋に相当する部分は著しく焼土化しており、火床部は褐色土を充塡するものの著じるしい窪みを呈している。

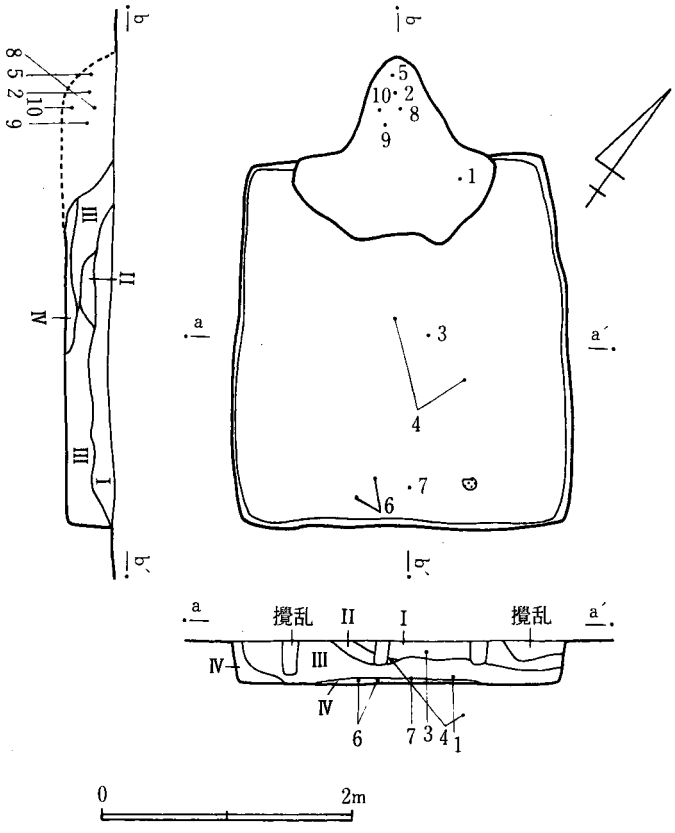
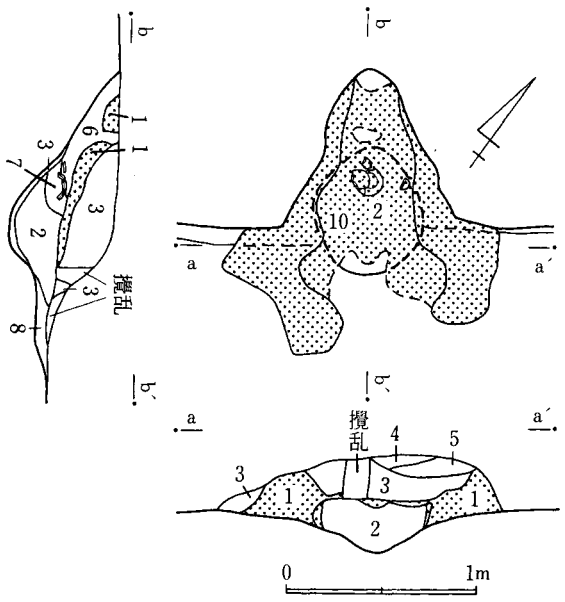


図575 D084号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 焼土粒炭化粒混入暗赤紫色土層
3 褐色土層
4 茶褐色土層
5 焼土ブロック混入黄灰色土層
6 焼土粒混入赤紫色土層
7 焼土粒混入黒褐色土層
8 炭化粒混入黒色土層

図576 D084号遺構カマド実測図

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入褐色土層、Ⅱ層焼土層、Ⅲ層ローム粒、小ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入茶褐色土層が堆積している。遺物はほとんどが床面上に堆積するⅣ層から出土している。またカマド内出土もあるが、出土量は総体的に少ない。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1で、口唇部に特徴のある形状を呈している口縁部破片である。坏形土器は口径12cm前後の2～5と、口径15cm前後の6がある。また8の高台付で黒色処理した小形のものもある。7は体部に墨書がある破片である。皿形土器は9の高台のないものと、10の造り付け高台のあるものがある。

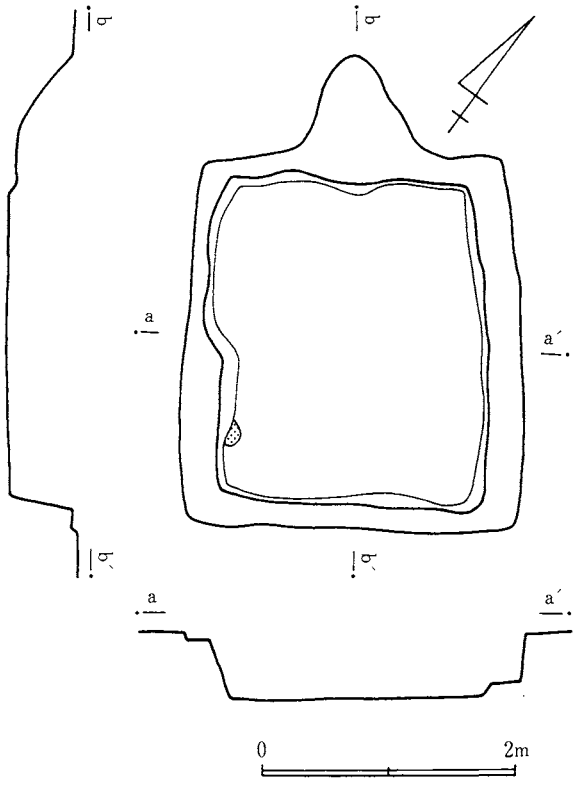


図577　D084号遺構床下状況図

D084出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	5.4	21.2	—	口縁の約1/6	ナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	坏	4.0	12.6	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	糸切り
3	坏	3.5	12.2	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	坏	4.05	12.4	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	暗褐色	
5	坏	4.4	12.8	6.4	完形	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	——	堅緻	褐色	糸切り
6	坏	4.3	15.4	8.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	褐色	糸切り
7	坏	—	—	—	破片	——	——	軟弱	褐色	墨書「主」
8	高台付坏	4.8	12.4	7.0	1/2	——	——	軟弱	(内)黒色 (外)褐色	墨書「継」 内黒
9	皿	2.0	13.4	6.2	1/2	下端静止ヘラ削り	——	軟弱	暗褐色	糸切り
10	高台付皿	2.8	14.4	6.4	2/3	底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	

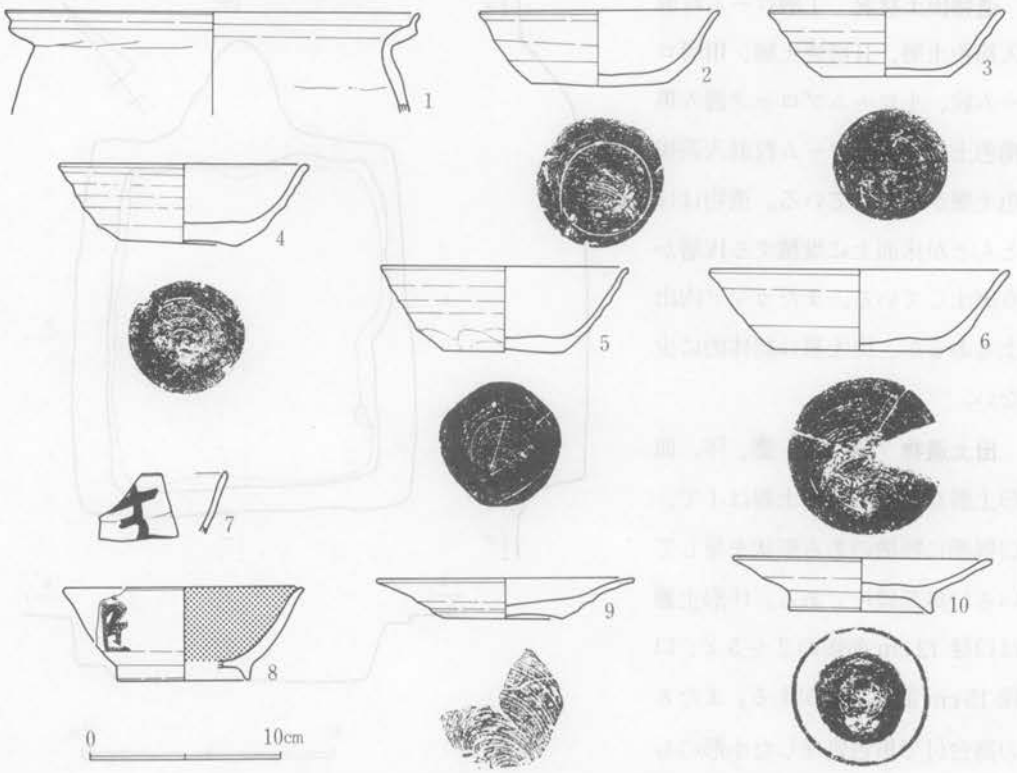


図578 D084号遺構出土遺物実測図

14. D085号遺構（図579～581、図版136－1、148）

環状形に分布する住居群内の北側に位置し、D084とD086号が近接している。トレンチャーによる攪乱が覆土全体の14%と少ないものの、東壁と住居中央部にかけて、また、カマド部分に受けているため遺存状況は良好とはいえない。

遺構　北壁3.2m、東壁3.4mで多少歪の生じている方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.44m掘り込んでいる。直下には幅0.15m、深さ0.1mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を一段テラス状に大きく掘り込み、煙道部はさらに一段深く最長0.44m掘り込んでいる。黄灰色砂質粘土をもって構築しており、テラス状の部分にも粘土が充塡されるのを認めることができる。天井部はこのテラス部分より造られている。袖はローム造り出部に粘土を貼り込んでおり、粘土の貼り込みは火袋から煙道部まで一体化している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層ローム粒混入茶褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層が堆積している。床面に堆積するⅢ層を中心に、カマド内からも出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～6で、1は口唇部に特徴

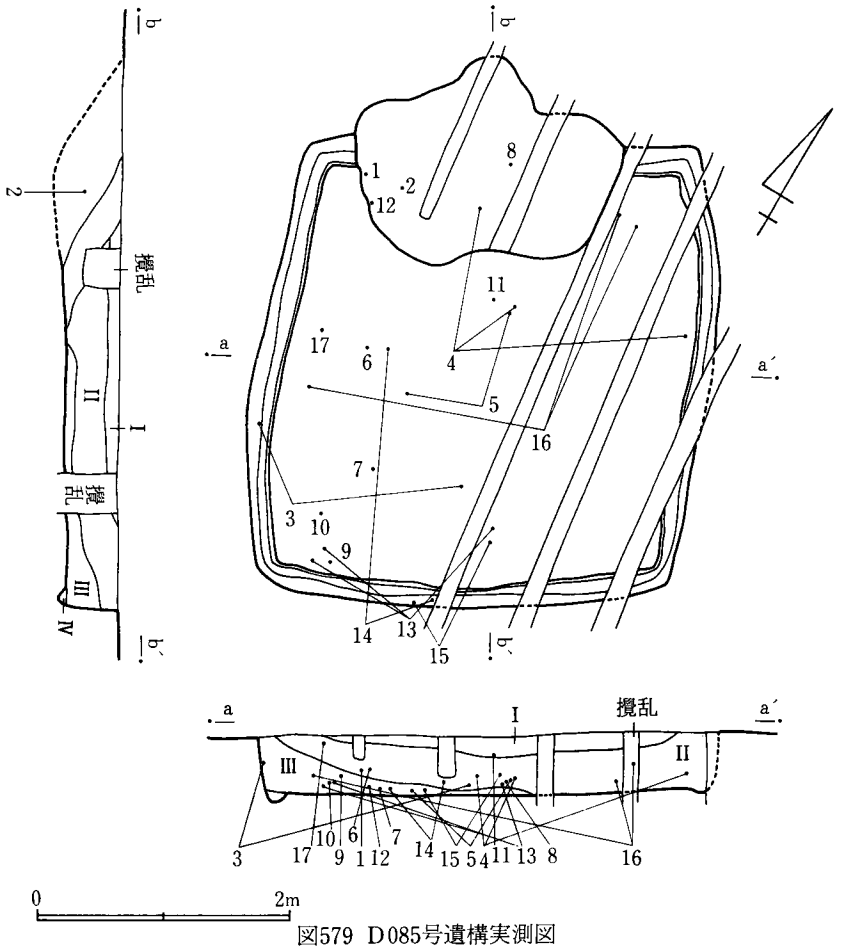
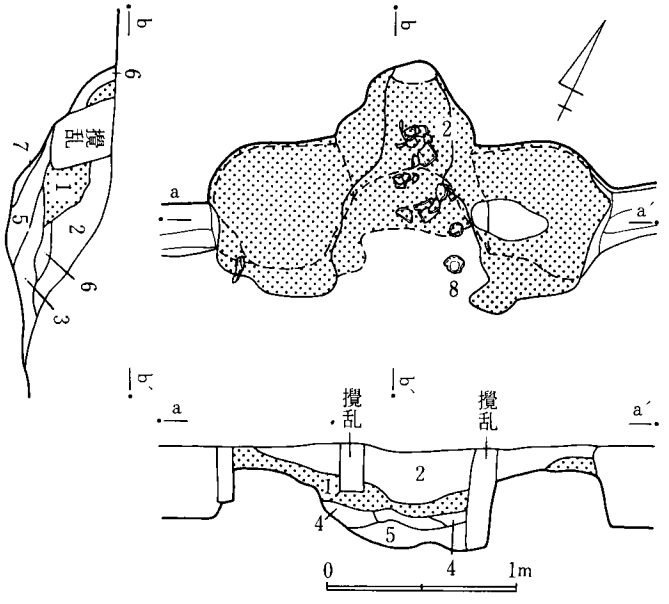


図579 D085号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 茶褐色土層
3 焼土粒炭化粒混入褐色土層
4 焼土粒炭化粒混入暗赤褐色土層
5 焼土粒混入茶褐色土層
6 焼土ブロック混入褐色土層
7 黒褐色土層

図580 D085号遺構カマド実測図

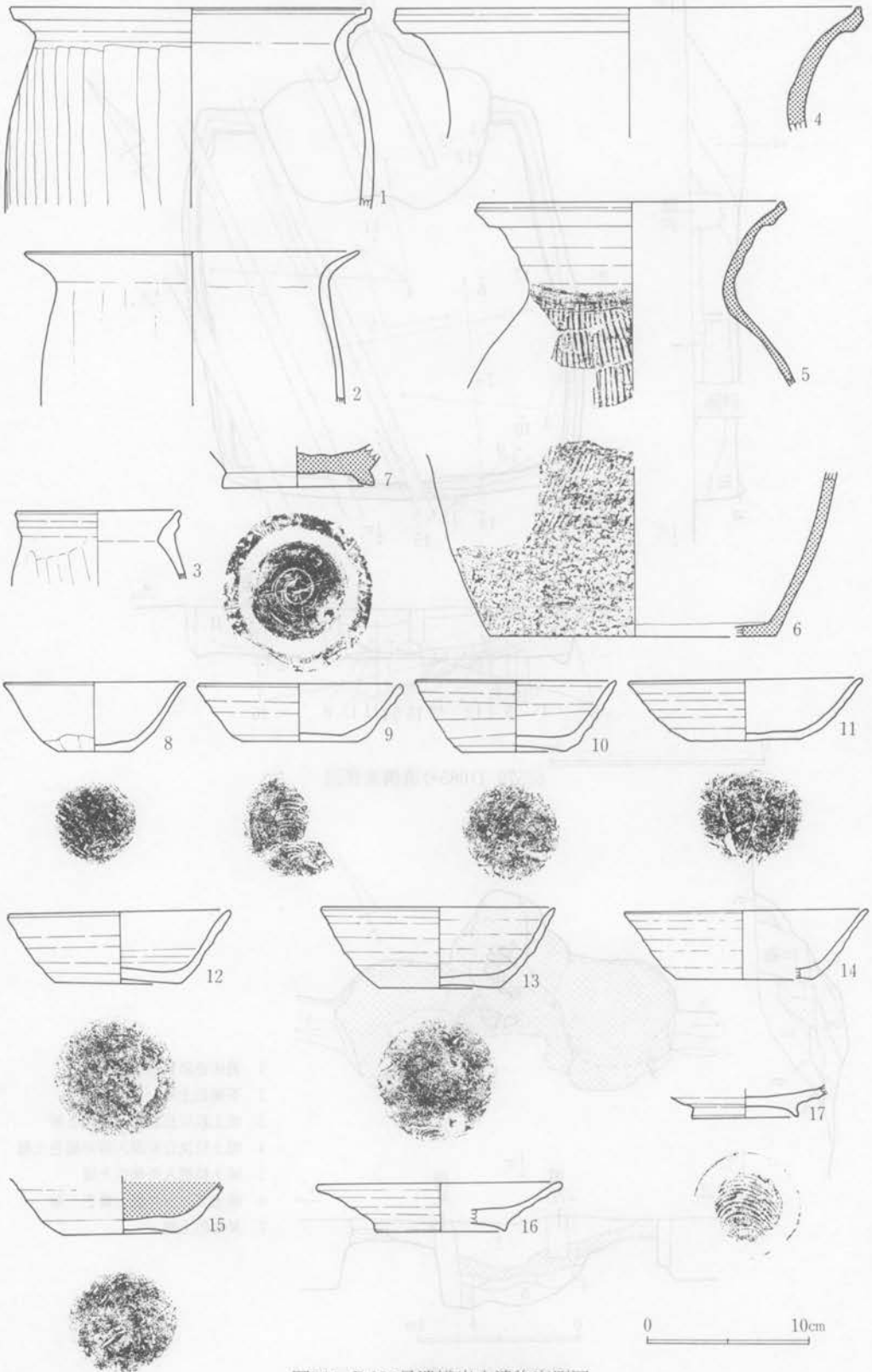


図581　D085号遺構出土遺物実測図

のある口縁部破片で、2は水平近く開く口縁部破片である。4、5は広口甕の口縁部破片で叩き目がある。3は小形甕の口縁部破片である。壺形土器は7で高台付底部の破片である。坏形土器は口径12cm前後の8～10と、口径15cm前後の11～15があり、15は黒色処理してある。皿形土器は16、17で体部、底部の破片である。

D085出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(12.3)	21.8	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	褐色	
2	甕	(9.4)	22.0	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗褐色	
3	甕	(4.5)	9.8	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	(内)黒褐色 (外)暗褐色	
4	広口甕	(8.0)	28.4	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	軟弱	黒褐色	
5	広口甕	(11.4)	18.6	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	黒灰色	
6	広口甕	(10.4)	—	(17.4)	底部破片	叩きじめ ヨコナデ	砂粒	軟弱	暗褐色	
7	長頸瓶	2.5	—	9.4	底部のみ	——	——	やや軟弱	灰色	
8	坏	4.1	11.0	4.2	1/3	下端静止ヘラ削り 底部一方向の削り	——	軟弱	(内)褐色 (外)黄褐色	
9	坏	3.4	12.3	(7.0)	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	糸切り
10	坏	4.2	12.1	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	暗褐色	
11	坏	3.7	14.2	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	黒褐色	
12	坏	4.2	13.3	7.7	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	(内)褐色 (外)暗褐色	
13	坏	4.8	14.2	7.4	2/3	下端回転ヘラ削り 底部一方向の削り	——	堅緻	赤褐色	
14	坏	4.0	15.2	(8.3)	1/2	——	砂粒	軟弱	(内)褐色 (外)黒褐色	
15	坏	3.2	—	6.3	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部一方向の削り	——	軟弱	(内)黒色 (外)褐色	
16	高台付皿	2.5	14.8	(7.8)	1/3	——	——	やや軟弱	赤褐色	内面磨き
17	高台付皿	(1.6)	—	6.4	底部のみ	——	——	やや軟弱	(内)褐色 (外)褐色	糸切り

15. D086号遺構（図582～584、図版136－2、149、151）

環状形に分布する住居群内の北側に位置し、D085、D166が近接している。住居のほぼ中央部分を南北にのびる溝によって切断され覆土の3％が攪乱を受けている。特にカマドへの影響が著しく煙出し部と右袖の一部が破壊されている。

遺構　北壁3.2m、東壁3.5mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んでいる。直下には幅0.25m、深さ0.08mを計る壁溝があり、カマドが構築される北壁の一部を除き認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部に構築しているが攪乱によって煙出し部と右袖の一部が破壊されており全体を把握することはできないものの、黄灰色砂質粘土をもって構築されている。壁を三角形

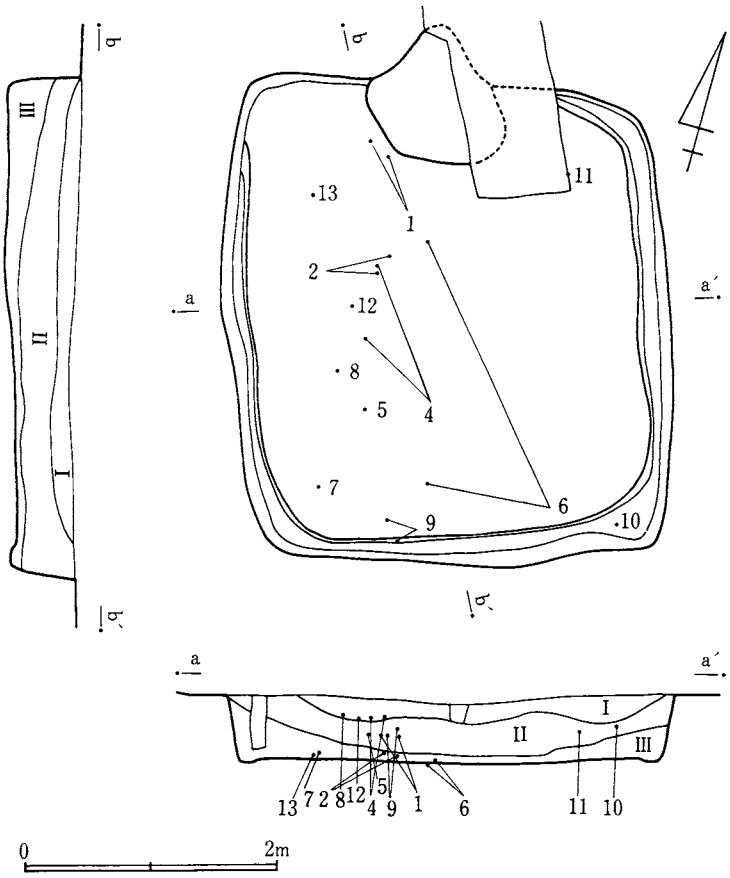
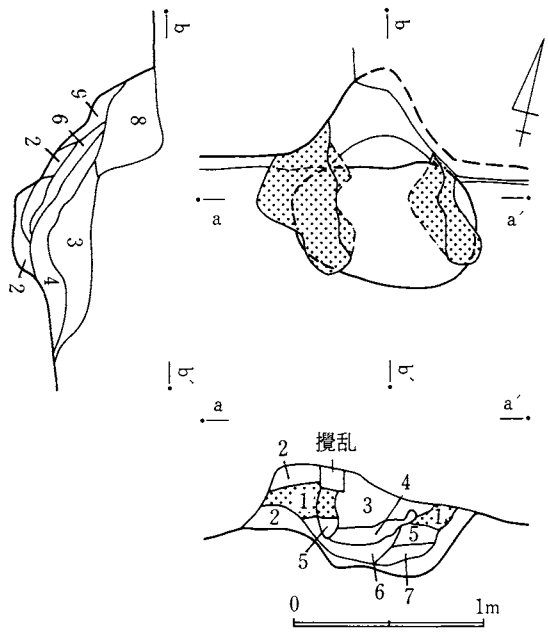


図582 D086号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 茶褐色土層
3 ローム粒混入黒褐色土層
4 焼土粒混入黄灰色土層
5 焼土粒混入黄褐色土層
6 焼土粒ロームブロック混入赤褐色土層
7 焼土層（スサ入）
8 黒褐色土層
9 ロームブロック焼土粒混入黄褐色土層

図583 D086号遺構カマド実測図

に最長0.5m掘り込んでいる。茶褐色土を火床の窪みにかけて貼り込んでおり、その上に粘土によって袖が設けられている。袖は火袋から煙道部の一部まで続く。天井部は把握できない。

遺物出土状況　Ⅰ層茶褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積している。遺物の出土は少ないが、各層から出土しているのを認めることができる。床面上の出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏、壺、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で口唇部には特徴がある口縁部破片で、4は「く」字状に外反する口縁部破片である。5、6は胴部に叩き目がある広口甕の底部である。坏形土器は口径 12 cm 前後の7、8と、口径 15 cm 前後の9がある。また10は体部に墨書がある破片である。壺形土器は11の底部破片で形状は窺えないものの、内面が著しい摩滅を生じており硯として使用している。皿形土器は12で底部の破片である。鉄製品は13の鏃で柄の一部が欠損している。

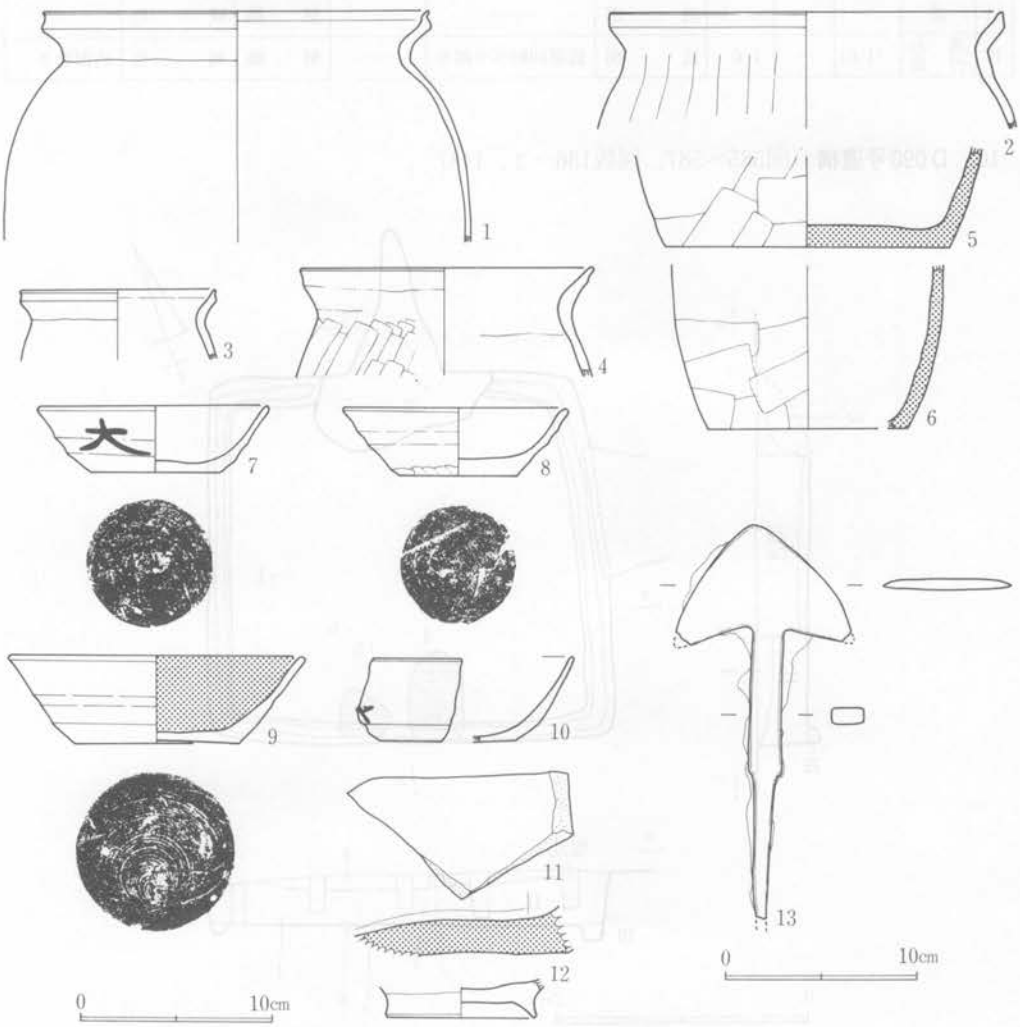


図584　D086号遺構出土遺物実測図

D086出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	11.8	(18.9)	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	6.0	(20.2)	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	3.6	(10.0)	—	1/3	ナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	甕	5.5	14.8	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明灰褐色 (外)暗褐色	
5	甕	4.7	—	14.6	底部	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	明灰色	
6	甕	(8.4)	—	(10.4)	底部	ヘラ削り	砂粒	堅緻	明赤褐色	
7	坏	3.4	11.6	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「大」
8	坏	3.5	11.4	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
9	坏	4.5	14.9	8.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り
10	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	(内)明褐色 (外)淡褐色	墨書判読不明
11	甕	—	—	—	底部	——	——	堅緻	灰色	
12	高台付皿	(1.6)	—	7.6	底部	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き

16. D090号遺構（図585～587、図版136－3、148）

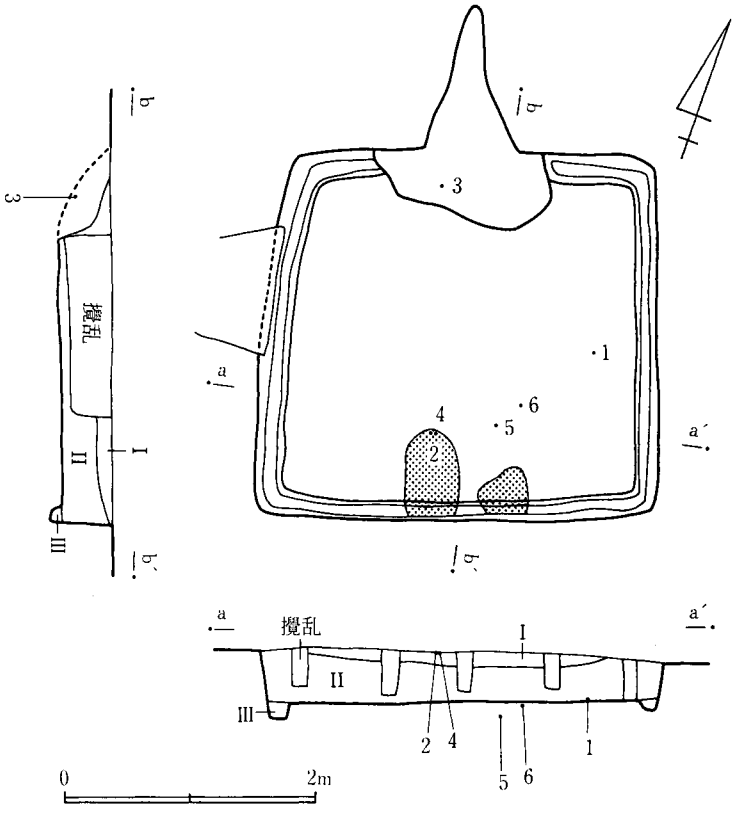
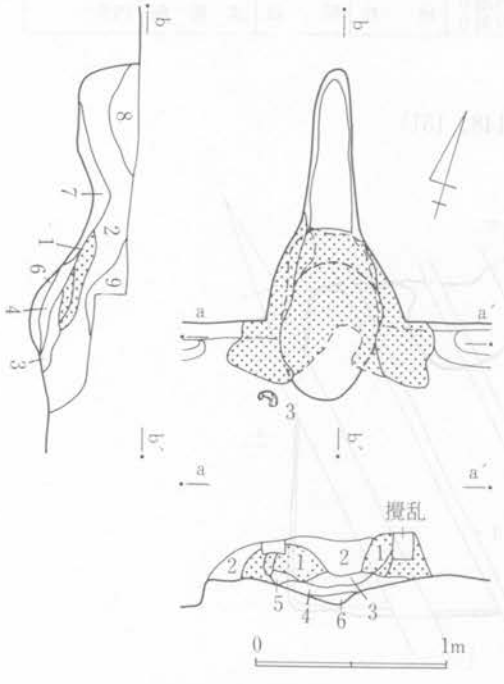


図585 D090号遺構実測図

環状形に分布する住居群内の南西部に位置し、D075、D081、D082が近接している。トレンチャーによる攪乱を覆土全体の10.5%受けているものの、床面まで達していないため、攪乱の影響は少ない。

遺構　北壁2.9m、東壁2.7mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈するものの0.36m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除き認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが若干四隅は軟弱である。南壁中央部に接して2か所に水簸した粘土塊を検出した。

カマド　北壁中央部を最長1.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は火袋から煙道にかけて一体化している。天井部は落下するものの、火袋から煙道にかけての広がりを認めることができる。煙道部は著しく長い形状を呈しているがほぼ中央部が高くなっており、実質的にはこの部分まで煙道といえる。よって、煙出しに相当する部分もかなり細長い形状を呈していると言える。



1　黄灰色砂質粘土層
2　茶褐色土層
3　焼土粒炭化粒混入黒褐色土層
4　焼土粒混入黄褐色土層
5　焼土層
6　小ロームブロック層
7　焼土粒混入赤褐色土層
8　黄褐色土層
9　黒褐色土層

図586　D090号遺構カマド実測図

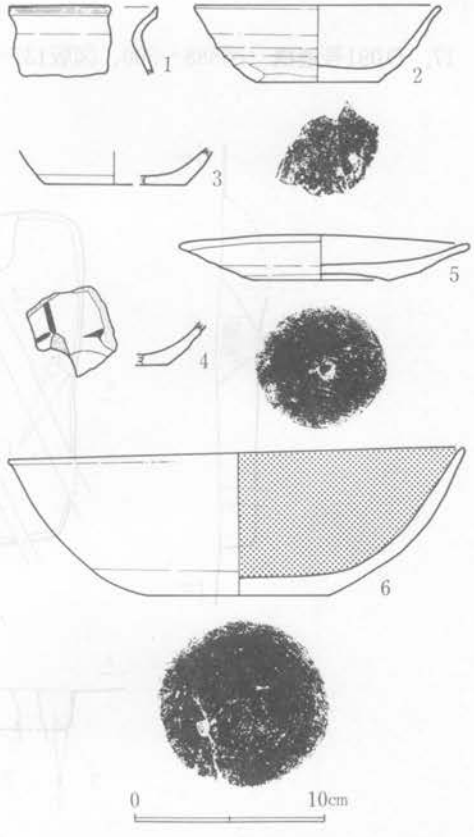


図587　D090号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層がほぼ水平に堆積している。遺物の出土は総体的に少ないが、床面上と覆土上層部に認めることができる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿、鉢形土器があるが量的に少ない。甕形土器は1で口唇部に特徴がある口縁部の破片である。坏形土器は2～4で、3、4は底部の破片である。皿形土器は5で高台がない。鉢形土器は6で内面が黒色処理してある。

D090出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	(内)赤褐色 (外)黒褐色	
2	坏	4.0	(12.6)	(6.1)	½	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り
3	坏	(1.7)	—	(7.2)	底部 ½	——	砂粒	堅緻	(内)暗淡褐色 (外)明褐色	
4	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
5	皿	2.3	14.7	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	
6	鉢	7.3	23.3	9.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	内黒

17. D091号遺構（図588～590、図版137－1、148、151）

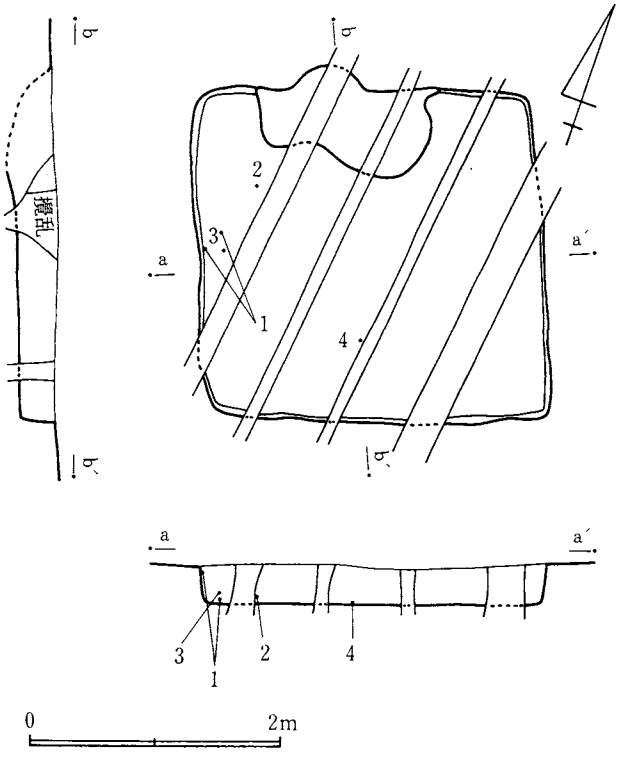
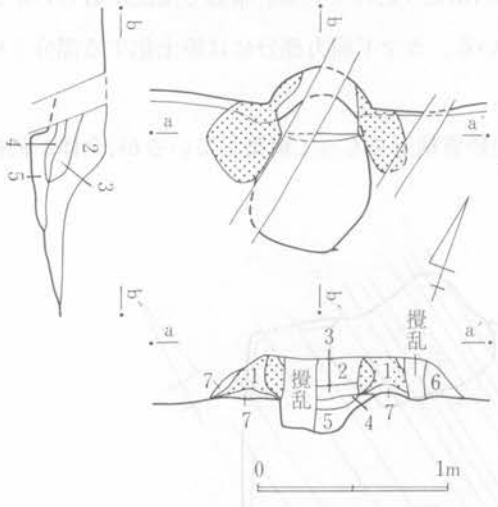


図588 D091号遺構実測図

環状形に分布する住居群内の北東部に位置し、D092、D083が近接する。トレンチャーによる溝状の攪乱が覆土全体の22%に相当する部分におよんでいる。特にカマドは攪乱が著じるしい。

遺構　北壁2.7m、東壁2.5mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.28m掘り込んでいる。床面はトレンチャーによる溝状の攪乱が著じるしいため全体にわたり把握できないが、遺存する部分から推察すれば竪緻な状況を呈していると言えるであろう。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　中央部をトレンチャーによる溝状の攪乱が通過するため遺存状況は良好ではない。北壁中央部より若干南に偏在している。壁を0.25m三角形に掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は黒褐色土層の上に構築され煙道部まで一体化している。火袋について明確に区分できない小形のカマドである。



1　黄褐色土層　　6　褐色土層
2　黒褐色土層　　7　暗褐色土層
3　1層混入茶褐色土層
4　焼土ブロック混入茶褐色土層
5　焼土粒ロームブロック混入褐色土層

図589　D091号遺構カマド実測図

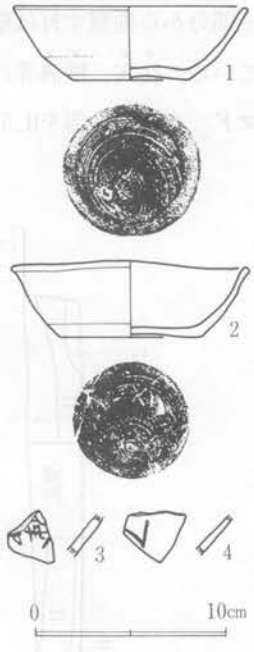


図590　D091号遺構出土遺物実測図

D091出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	坏	3.7	11.8	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	糸切り
2	坏	3.8	11.9	7.2	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)淡褐色	糸切り
3	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「□匪部」
4	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明

遺物出土状況　出土量は少ないが、ほとんどが床面上からの出土である。覆土はローム粒、焼土等混入の暗褐色土である。人為的な埋設が考えられる。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみで量的にきわめて少ない。1、2は口径12cm前後で同じ形状を呈する。2は若干の歪を生じている。3、4は体部に墨書がある破片である。

18. D092号遺構（図591～593、図版137－2）

環状形を呈して分布する住居群内の南西部に位置し、D011、D091が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱が覆土全体の40%におよんでいる。したがって出土遺物は一括資料を示していない。攪乱は壁、床面、カマドに達しており、遺構自体の遺存も良好とは言えない状況である。

遺構　北壁2.6m、東壁3.2mで長方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は遺存状況は良好である。西壁の一部では、ほぼ垂直に0.4m掘り込んでいる。床面も攪乱が著しいが遺存する部分から推察すれば堅緻な状況を呈している。カマド前方部分には焼土化する部分を検出している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.5m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築しているが、全体が把握

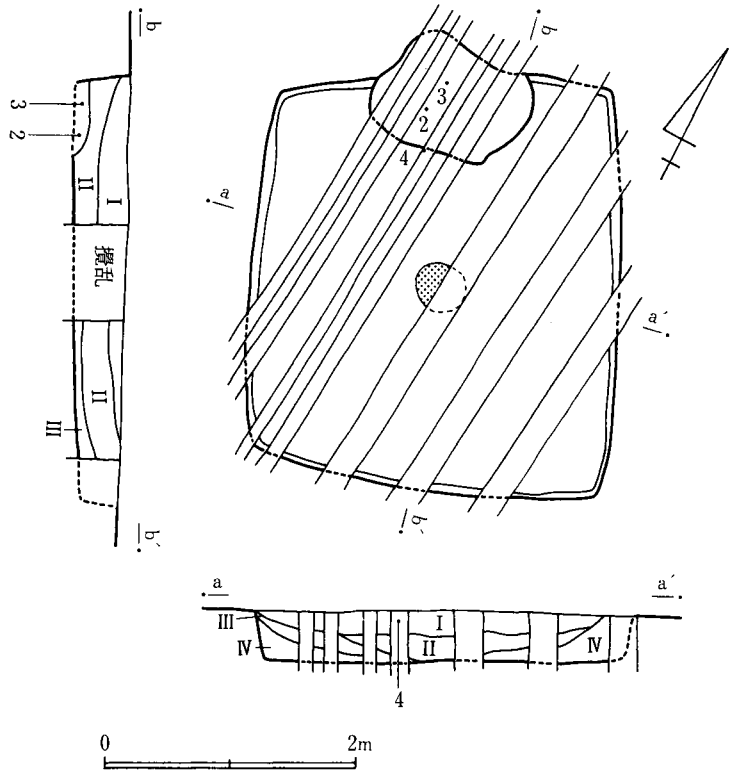


図591　D092号遺構実測図

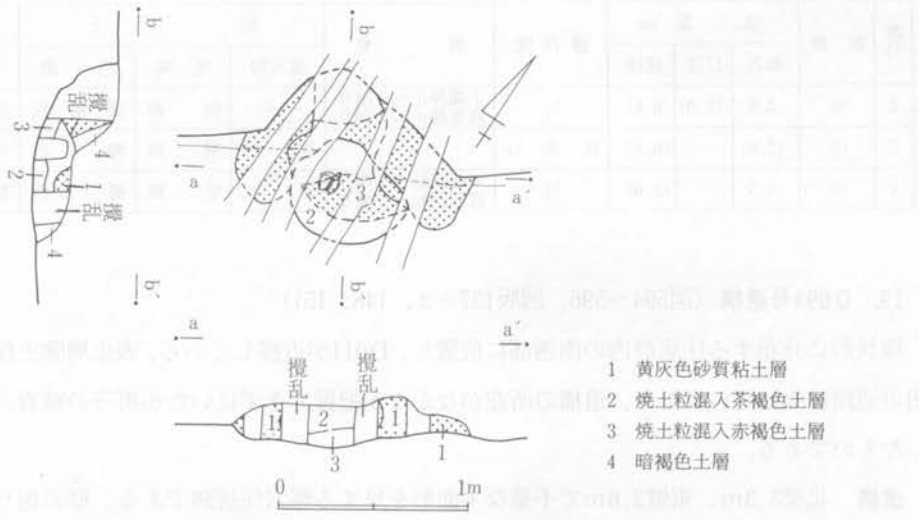


図592 D092号遺構カマド実測図

できないほどの攪乱を受けている。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黄灰色砂質粘土混入褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が擂鉢状に堆積している。出土遺物は少なく覆土中のものは1点のみである。カマド内より3点出土している。

出土遺物　遺物は、坏形土器と鉄製品で、量的に少ない。坏形土器は1～4で、1～3は口径12cm前後のもので、4は体部に墨書がある破片である。鉄製品は5で、0.4cm 角の棒状を呈するもので、用途は不明である。

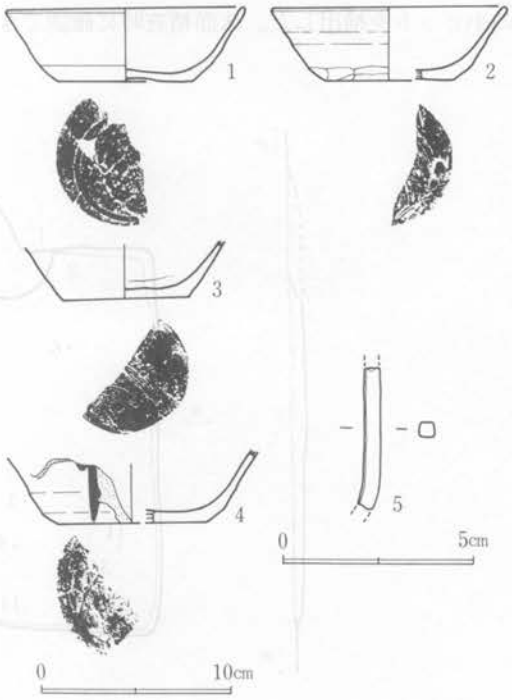


図593 D092号遺構出土遺物実測図

D092出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.6	(12.1)	(7.0)	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	坏	3.8	(12.0)	(6.6)	1/3	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り
3	坏	(2.8)	—	(6.6)	底部 1/2	——	雲母	堅緻	褐色	糸切り
4	坏	3.5	—	(7.6)	1/5	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	墨書判読不明

19. D093号遺構（図594～596、図版137－3、148、151）

環状形に分布する住居群内の南西部に位置し、D011が近接している。表土層除去作業時搬出用の道路になっていたため、遺構の所在がなかなか把握できずにいたが再三の精査の結果検出したものである。

遺構　北壁3.3m、東壁2.6mで不整な平面形を呈する竪穴住居跡である。壁の掘り込みは遺構確認時等の作業によって0.1mを計るのみである。床面は全体にわたり堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できないが、床面下の調査時に南壁に近い部分より径0.22m、深さ0.1mの小ピットを検出した。床面精査時に確認できなかったピットである。

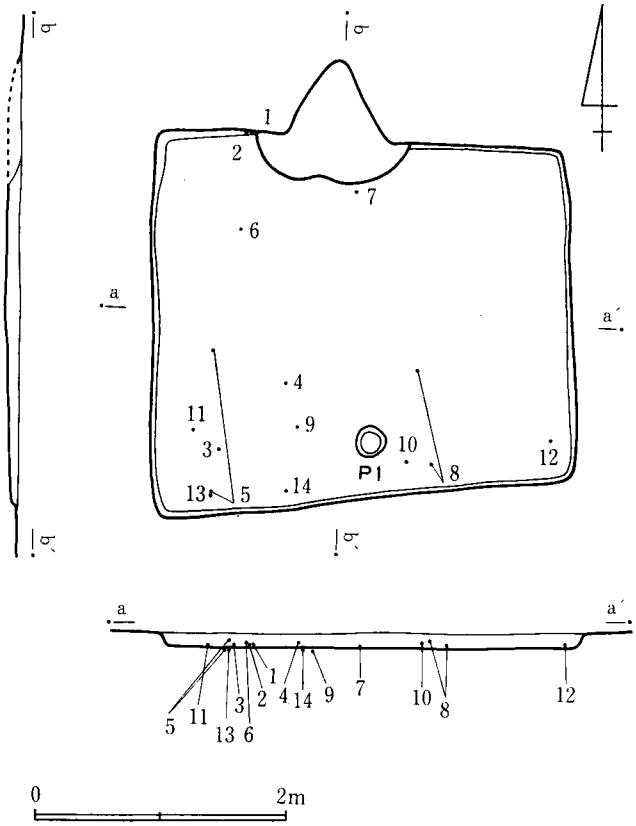
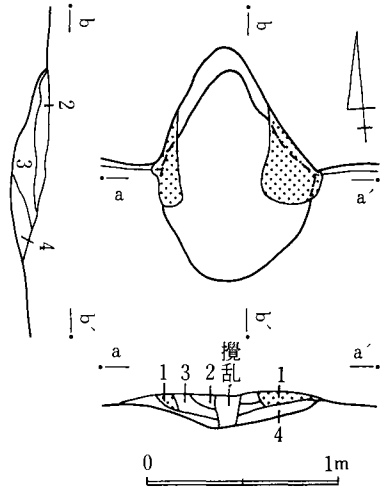


図594　D093号遺構実測図

カマド　削平等が進んでいるため遺存状況は悪い。北壁中央部を最長0.65m三角形に掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は火床部まで貼り込んでいる黒褐色土上に構築され煙道部まで一体化している。天井部等については不明である。

遺物出土状況　いずれも床面直上、あるいは黒褐色土層中である。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢、皿形土器がある。甕形土器は1～4で、1、2は同じ形状を呈するものである。3は1、2のような形状の底部と思われる。4は広口甕の口縁部破片である。甑形土器は5で胴部に叩き目が認められる。坏形土器は6～11で、口径12cm前後のものである。12は底部内面に墨書がある破片である。鉢形土器は13で口径29cm、多少の歪を生じている。体下部はヘラ削り調整してある。皿形土器は14で造り付け高台がある底部破片である。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　焼土粒混入赤褐色土層
4　暗黒褐色土層

図595　D093号遺構カマド実測図

D093出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	5.4	(15.4)	—	1/5	ヨコナデ ナデ	——	堅緻	(内)暗赤褐色 (外)明赤褐色	二次的に火を受ける
2	甕	6.3	(13.8)	—	1/4	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)赤褐色	二次的に火を受ける
3	甕	3.0	—	7.6	底部	ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗灰褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	——	——	堅緻	明灰色	
5	甑	9.4	—	(14.0)	底部 1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗灰褐色	
6	坏	4.1	12.2	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)褐色	
7	坏	3.9	12.1	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
8	坏	4.2	11.9	6.4	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)淡褐色	
9	坏	4.1	12.1	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)淡褐色 (外)褐色	
10	坏	3.9	12.4	6.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
11	坏	2.2	—	6.8	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
12	坏	—	—	—	底部のみ	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明 糸切り
13	鉢	10.9	28.4	13.7	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向の削り	雲母	堅緻	明褐色	墨書「継」
14	高台付皿	(1.1)	—	7.4	底部のみ	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	内面磨き

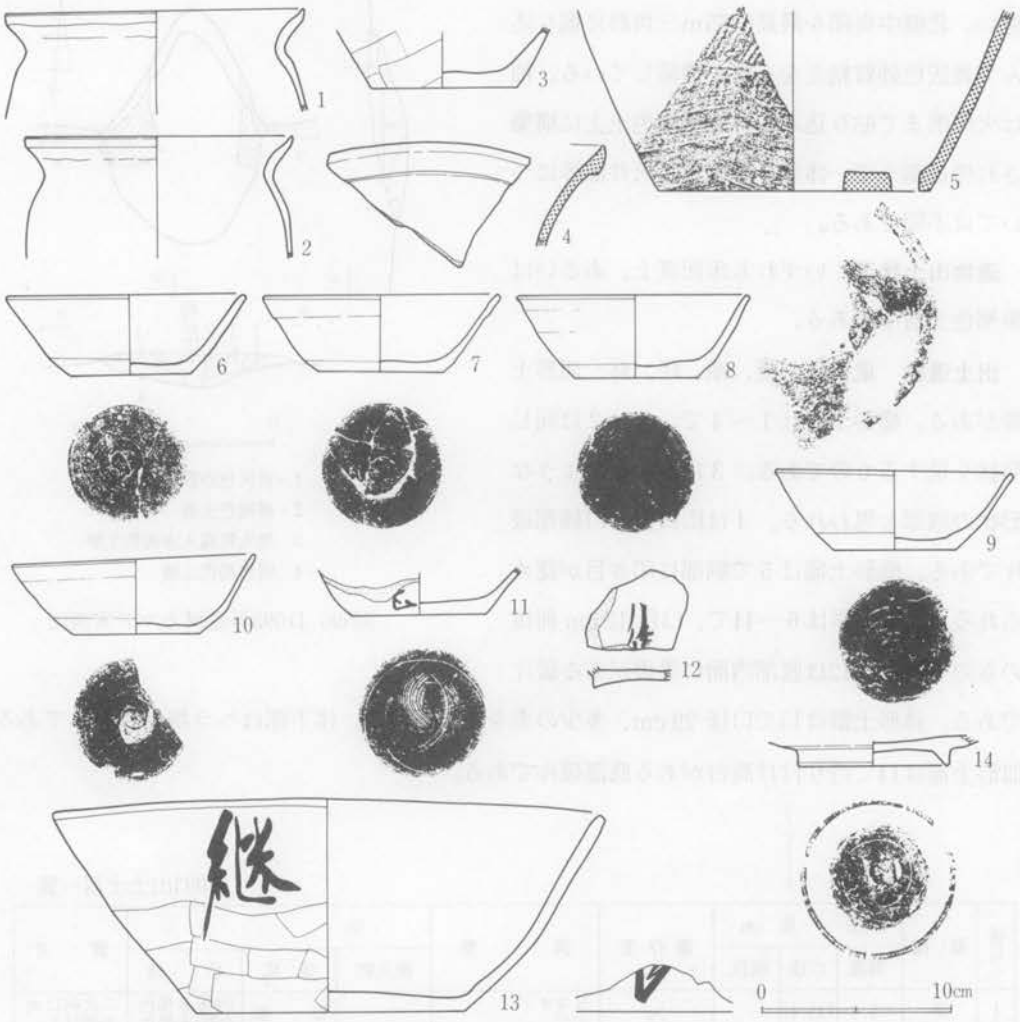


図596 D093号遺構出土遺物実測図

20. D163号遺構（図597～599、図版138－1、2、148、149）

環状形に分布する住居群内の南西部分に約40m離れて位置している。D164号が最も近接して位置しているが約12mの距離を有している。

遺構 北壁2.4m、東壁2.4mで、若干四隅が丸味を帯びる方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈しているが、0.6m掘り込んでいる。直下には幅0.2m、深さ0.08mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面はやや堅緻な状況を呈している。中央部より東側に寄った位置に径0.18m、深さ0.1mの小ピットを検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を三角形に最長1m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。

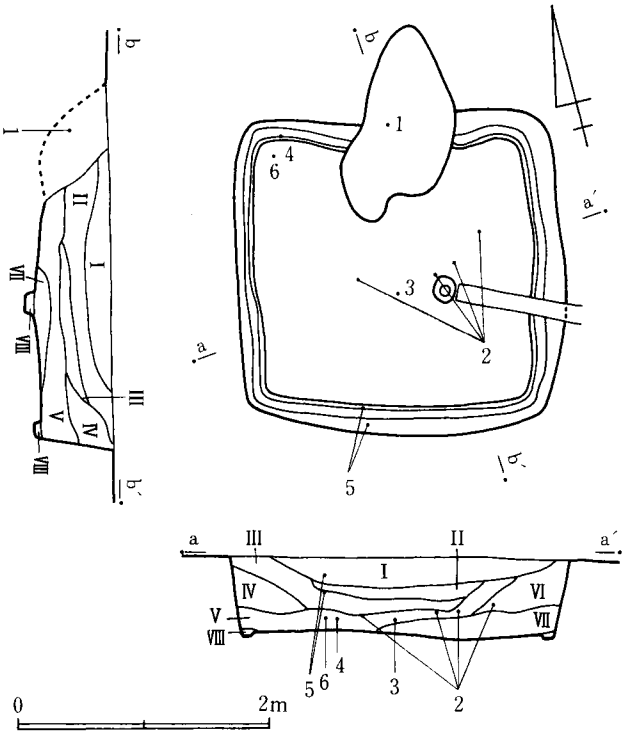
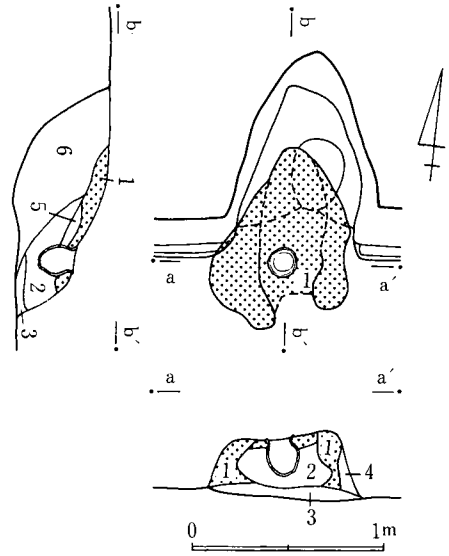


図597　D163号遺構実測図

掘り込みに対応する粘土の貼り込みが確実に基部まで達していないため、かなり内側に貼り込まれるような状況を呈している。袖は煙道部まで一体化しているが煙出し部まではかなりの間隔を有している。火床部には焚口部より若干煙出し部に位置する構造を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅵ層茶褐色土層、Ⅶ層黒褐色土層、Ⅷ層褐色土層が堆積している。遺物はⅤ層出土が多く、内にはⅠ層出土のものもある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢形土器で量は少ないが完形もしくは完形に近いものが多い。甕形土器は1、2で、1は肩部が張



1　黄灰色砂質粘土層
2　焼土粒炭化粒混入褐色土層
3　黒褐色土層
4　暗褐色土層
5　焼土粒混入褐色土層
6　ローム粒混入黒褐色土層

図598　D163号遺構カマド実測図

るものの形状的には2と類似する。甕形土器は3で甕形土器と形状的に類似するものである。坏形土器は4、5で、4は丸底を呈し、一部赤彩が残る。5は須恵器で口径と底径の差があまりない形状を呈している。鉢形土器は6で輪積成形で底部に木葉痕が認められる。

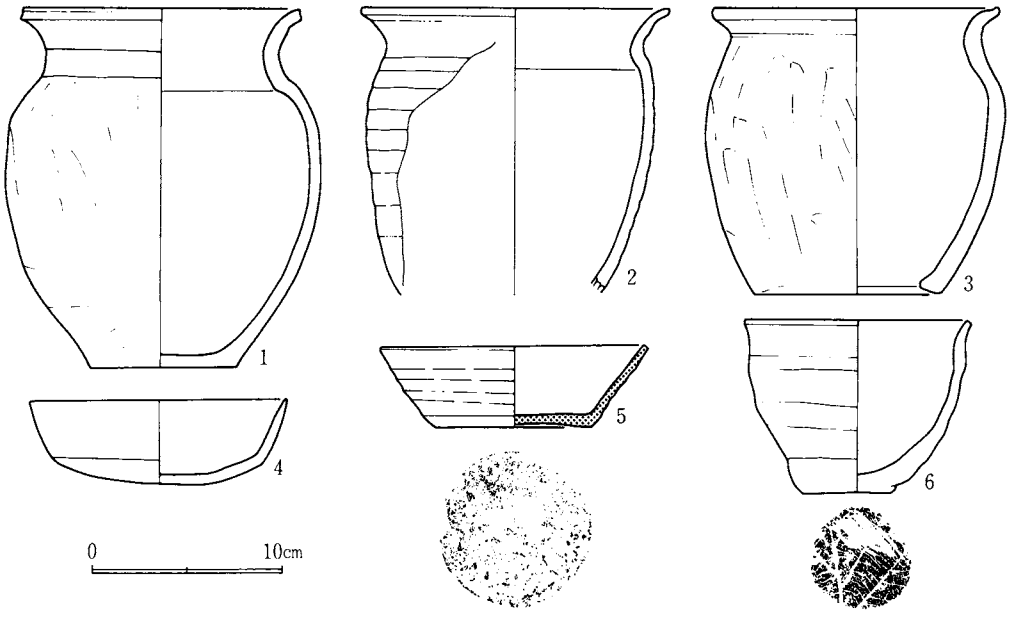


図599 D163号遺構出土遺物実測図

D163出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	18.8	14.4	7.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	二次的に火を受ける
2	甕	15.0	16.2	—	底部のみ欠損	ヨコナデ	砂粒	軟弱	淡赤褐色	輪積痕が残る
3	甕	15.0	15.0	9.8	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡赤褐色	二次的に火を受ける
4	坏	4.4	13.4	—	完形	底部ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	赤彩
5	坏	4.2	14.0	8.3	完形	底部一方向◐削り	——	堅緻	灰色	
6	鉢	9.0	11.8	4.6	完形	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	底部木葉痕 輪積痕が残る

21. D164号遺構（図600～602、図版138－1、148）

環状形に分布する住居群内の南西部から約5m離れて位置し、D081、D082が近接する。覆土を掘り下げていく過程で、床面に近い部分から焼土塊、炭化物が検出でき、本跡が焼失した遺構であることが判明した。歴史時代の遺物が出土するものの、通常遺構内に認められるカマドは検出できなかった。このような遺構の類例がない訳ではないが、集落内において特異な位

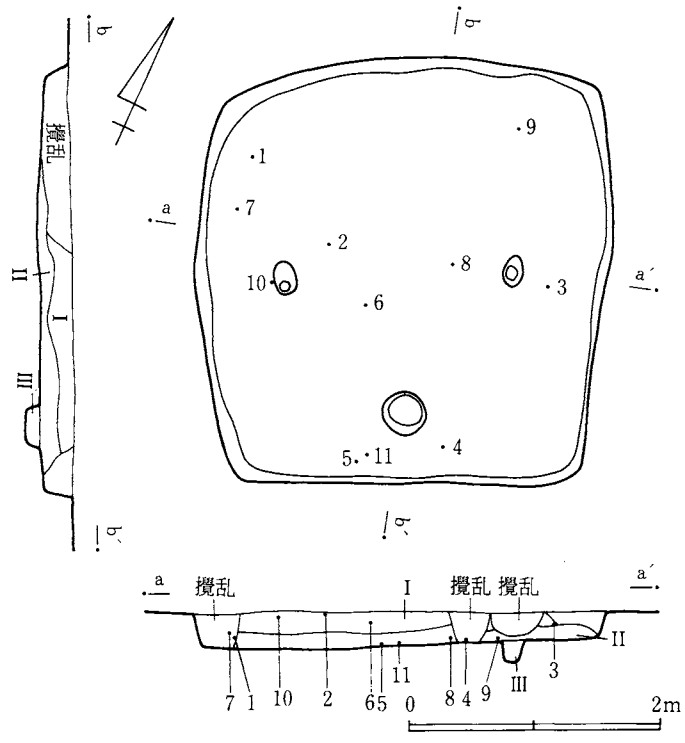


図600 D164号遺構実測図

置を占めていたと思われる。

遺構 北壁３m、東壁3.1mで、かなり歪が生じている平面形であるが方形に近い形状の竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈するもののかなりしっかりと掘り込んでおり、床面まで0.26mを計る。床面は全体にやや堅緻な状況を呈している。３か所にわたり径0.３m、深さ0.15mを計る小ピットを検出した。床面のほぼ中央部に焼土塊、炭化物を検出した。柱穴、壁溝、それにカマドは検出できなかった。カマドに変る施設も検出することができなかった。

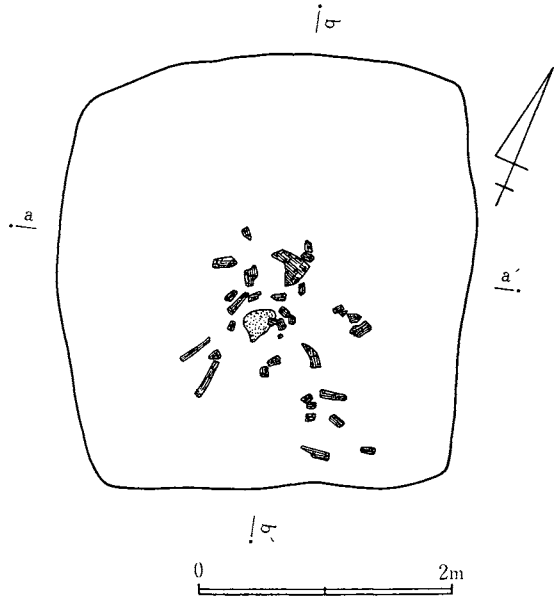


図601 D164号遺構炭化物出土状況図

遺物出土状況 I層暗褐色土層、II層炭化粒混入褐色土層、III層褐色土層が堆積し、遺物は

床面上とIII層を中心に上層のI層から出土している。ほぼ完形に近い遺物の出土である。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と、紡錘具がある。甕形土器は1～3で口唇部に特徴を有する口縁部破片で、3は叩き目が認められる。坏形土器は口径12cm前後の4～8と、口径15cm前後の9がある。皿形土器は10で大きく開く造り付け高台を有している。11は土製紡錘具で径4cmで中央に0.8cm大の孔があいている。胎土、焼成は良好である。

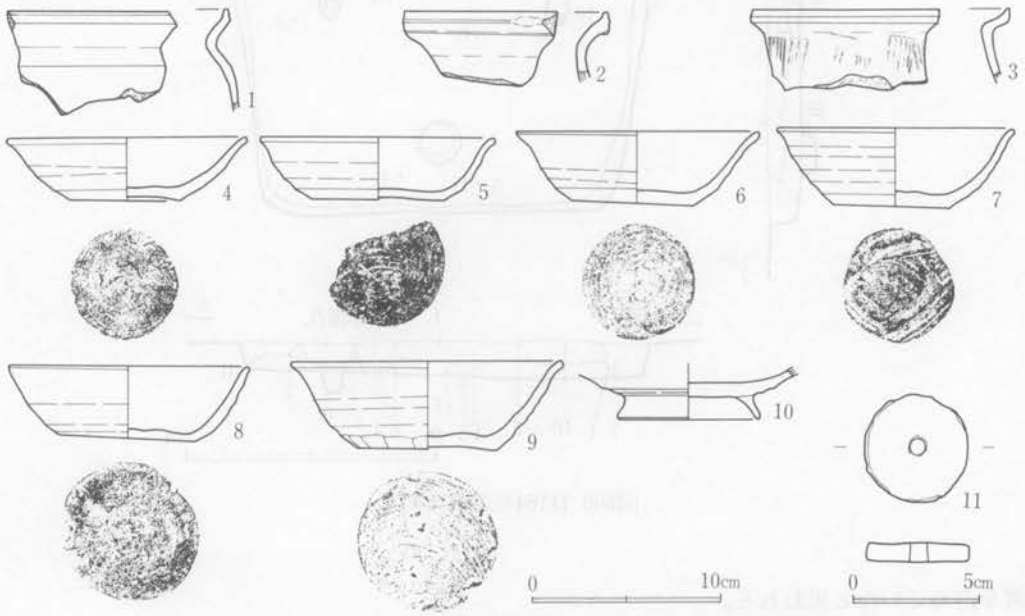


図602　D164号遺構出土遺物実測図

D164出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ	——	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.2	12.7	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	糸切り
5	坏	3.0	12.4	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	淡茶褐色	糸切り
6	坏	3.7	12.9	6.3	完形	下端回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	糸切り
7	坏	4.0	12.6	6.15	完形	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	——	やや堅緻	淡黒灰色	糸切り
8	坏	3.7	12.6	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	糸切り
9	坏	4.5	14.4	7.4	完形	下端静止ヘラ削り	——	堅緻	内淡茶褐色 外暗茶褐色	糸切り
10	高台付皿	—	—	7.4	底部のみ	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡赤色	

22. D165号遺構（図603、604、図版139－1）

環状形に分布する住居群内の西側部に位置し、D166、D081が近接している。トレンチャー

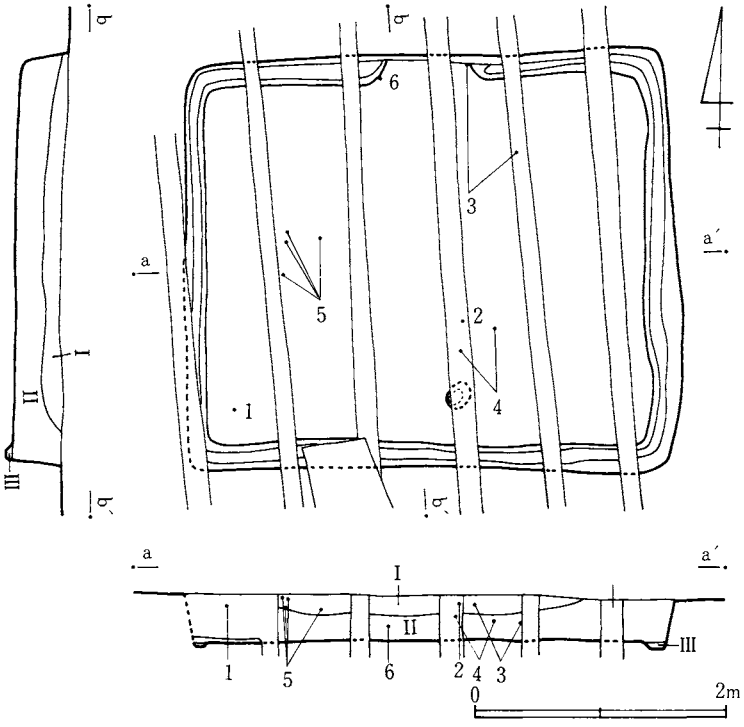


図603 D165号遺構実測図

による溝状の攪乱が覆土全体の25%に相当する部分におよんでいる。特に西壁は著しい状況を呈している。カマドについては再三にわたる精査にもかかわらず検出できず、また、構築されていた痕跡も確認できなかった。強いて言えば、壁溝が北壁中央部分で止ってる部分に構築されていたのかもしれないが明らかでない。

遺構 北壁3.7m、東壁3.3mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.36m掘り込んで、直下には口幅0.25m、深さ0.08mの壁溝が北壁中央部分、約0.6mの範囲に認められないが、他壁に認めることができる。床面は中央部が堅緻な状況を呈しているものの、四隅は軟弱な状況を呈している。南壁に近く、径推定0.15mの小ピットを検出した。柱穴は検

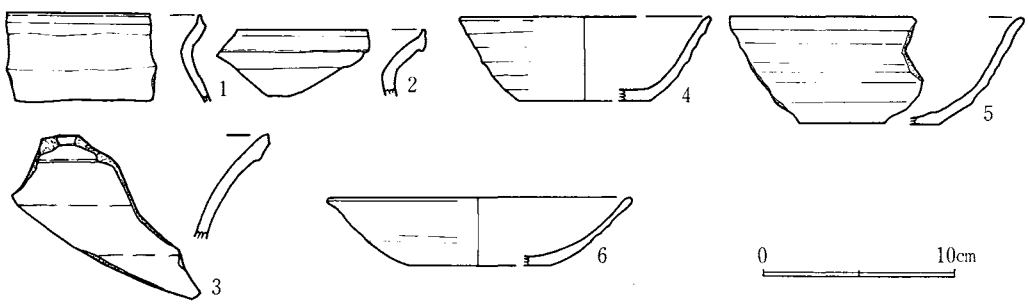


図604 D165号遺構出土遺物実測図

出できなかった。また、カマドについても検出できず、それに変る炉等の施設についても検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積している。遺物はⅠ層下部からⅡ層上部にかけて出土しており、床面上の出土は認められない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器であるが出土量は少ない。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部破片である。3は広口甕の口縁部破片である。坏形土器は4～6で、4は口径12cm前後のものであるが、5、6は15cm以上を計るものと推定できる。

D165出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	——	——	堅緻	黒色	
4	坏	4.3	(13.2)	(7.0)	体部破片	下端静止ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
5	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	褐色	内黒
6	坏	3.4	(16.0)	(7.6)	体部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡褐色	

23. D166号遺構（図605～607、図版139－2、3、149、151）

環状形に分布する住居群内の北西部に位置し、D086、D165が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱が覆土全体の10%に相当する部分におよんでいる。特にカマド、床面はその傾向が著しい。したがって、出土する遺物については本来の一括資料として判断することはできない。

遺構　北壁3.2m、東壁3.4mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.44m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.05mの壁溝が北壁から東壁の一部を除いて認めることができる。壁溝は南壁中央部に接して位置するピットに向って若干傾斜している状況が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上南壁に接して長径0.6m、深さ0.2mのピットを検出した。また、北壁、東壁コーナー部分に近く長径0.2mの小ピットを検出した。

カマド　北壁中央部を最長0.8m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖はかなりの厚さを有して火袋、煙道を一体化している。天井部は煙出し部で認められるだけである。全体に焼土化は著しくない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層炭化粒混入黒褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積している。遺物はⅡ層を中心に床面上やⅠ層下部より出土しており、住居の中央部に集中している傾

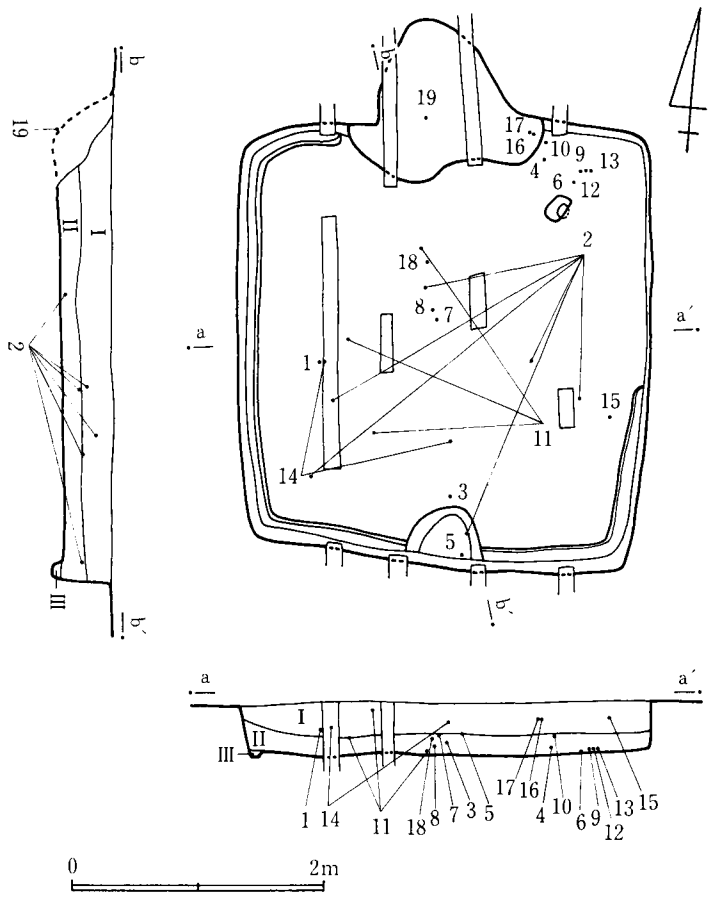


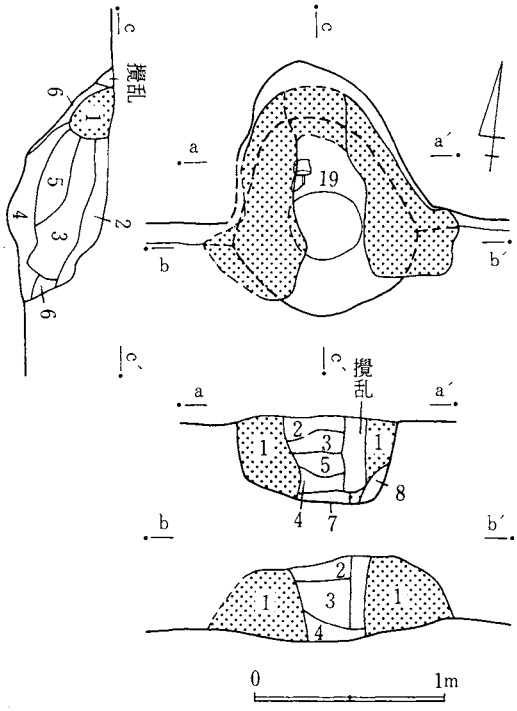
図605 D166号遺構実測図

向が窺える。また、カマド右脇部分より坏形土器が重ねられた状態で多く出土している。

出土遺物 遺物は、甕、坏、鉢、皿形土器、それに土製支脚がある。甕形土器は1、2で1は口縁部破片、2は叩き目がある胴部である。坏形土器は口径12cm前後の3～11と、口径15cm前後の12～16がある。13、16は内面を黒色処理している。鉢形土器は17で大形の坏のような形状であるが、体部が若干内彎ぎみに開く。皿形土器は18で造り出し高台を有する土器である。19は土製支脚で円錐形状に造られているが下端は欠損している。

D166出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤茶褐色	
2	甕	—	—	—	½	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	4.2	12.0	7.0	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	薄茶褐色	ヘラ切り
4	坏	4.0	11.6	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡赤褐色	



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒褐色土層
3 1層混入暗褐色土層
4 1層混入褐色土層
5 暗褐色土層
6 褐色土層
7 焼土粒混入褐色土層
8 黄褐色土層

図606 D166号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	坏	4.0	11.6	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	薄茶褐色	ヘラ切り
6	坏	4.4	11.8	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡褐色	糸切り
7	坏	4.2	12.3	6.4	完形	下端回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り
8	坏	4.2	12.0	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り
9	坏	4.2	12.1	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「主」
10	坏	3.6	12.8	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明茶褐色	糸切り
11	坏	4.7	12.2	5.8	完形	下端回転ヘラ削り	——	堅緻	明茶褐色	糸切り
12	坏	4.6	14.2	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	薄茶褐色	糸切り 内面磨き
13	坏	4.4	14.2	7.5	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	内黒
14	坏	5.2	14.2	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒
15	坏	5.1	14.4	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡褐色	糸切り 内黒
16	坏	5.2	16.2	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡黒褐色	内黒 糸切り
17	鉢	7.0	19.0	10.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	内面磨き
18	高台付皿	2.5	15.0	8.0	完形	——	——	堅緻	淡赤褐色	糸切り

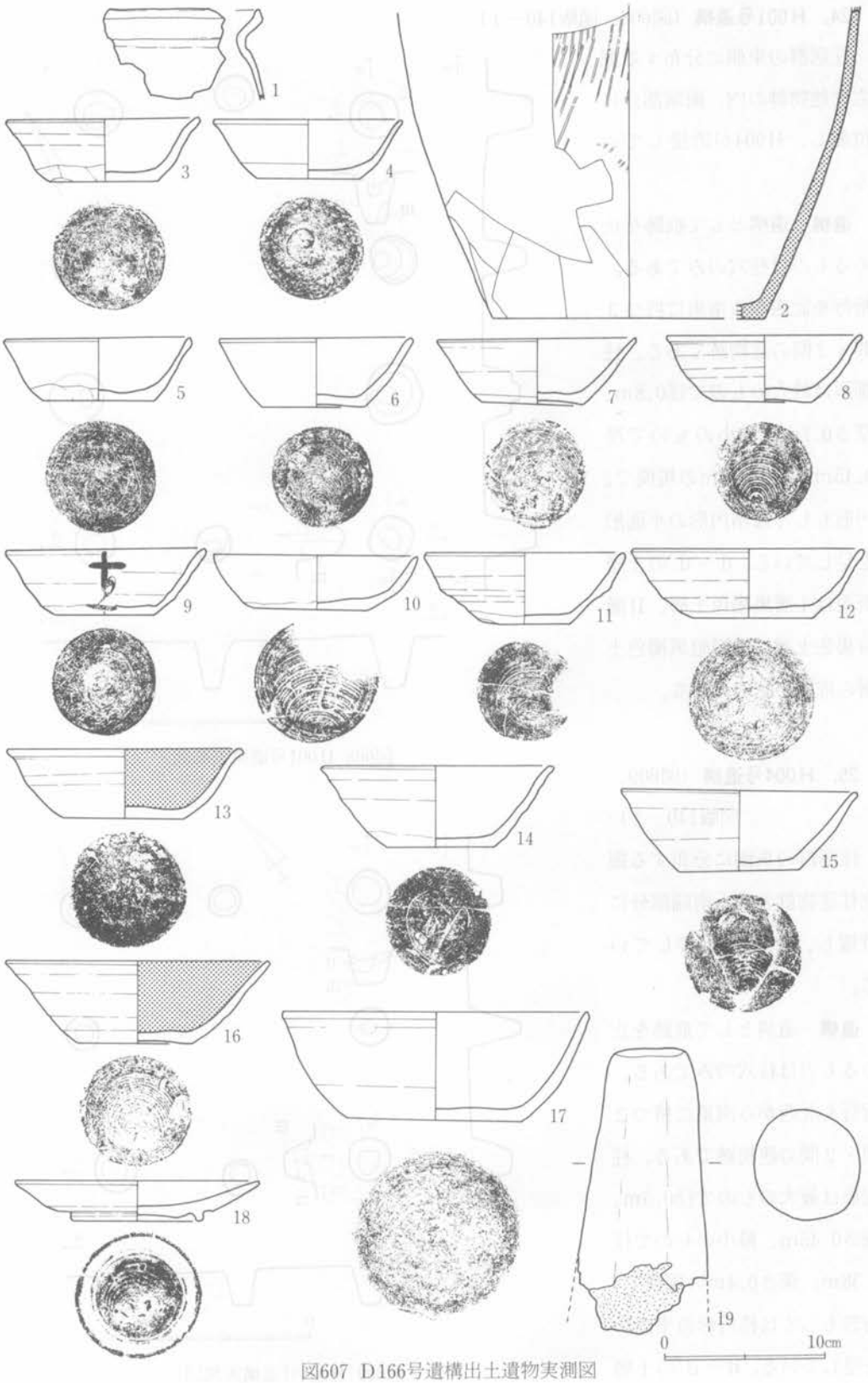


図607 D166号遺構出土遺物実測図

24. H001号遺構（図608、図版140－1）

住居群の東側に分布する掘立柱建物群の内、南端部分に位置し、H004が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ3間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.8m、深さ0.7m、最小のもので径0.45m、深さ0.6mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。d－d′の土層断面はI層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層暗黒褐色土層の堆積が認められる。

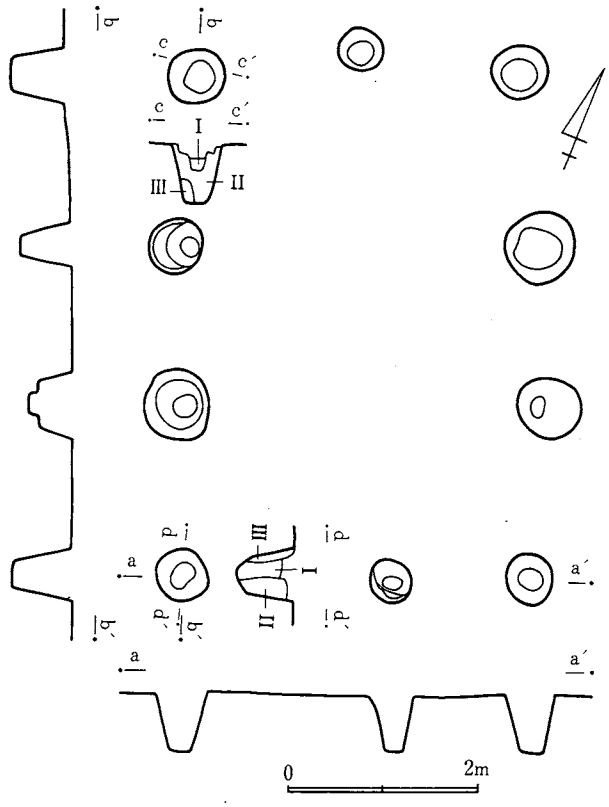


図608 H001号遺構実測図

25. H004号遺構（図609、図版140－2）

住居群の東側に分布する掘立柱建物群の内、南端部分に位置し、H001が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.5m、深さ0.45m、最小のもので径0.38m、深さ0.4mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。d－d′の土層

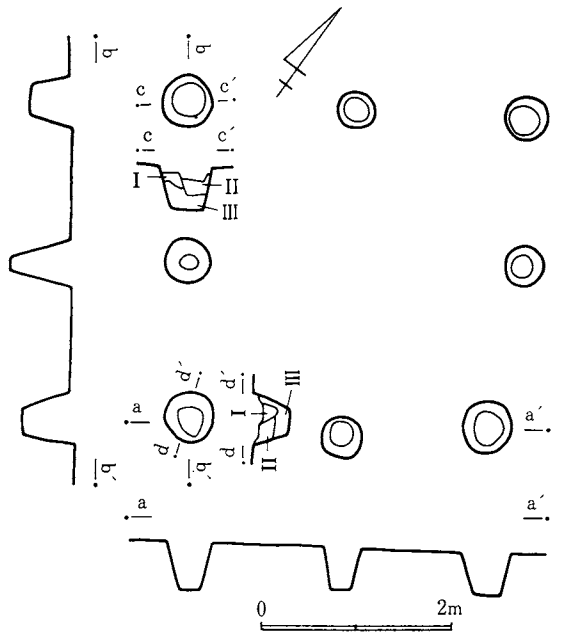


図609 H004号遺構実測図

断面はⅠ層黒褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層の堆積が認められる。

26. H005号遺構（図610、図版140－3）

住居群の東側に分布する掘立柱建物群の内、東側部分に位置し、H004が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ3間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.6m、深さ0.3m、最小のもので径0.42m、深さ0.25mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。北側に束柱として考えて良いか不明であるが、小ピットを認めることができる。柱穴の掘り込みは全体的に浅い。

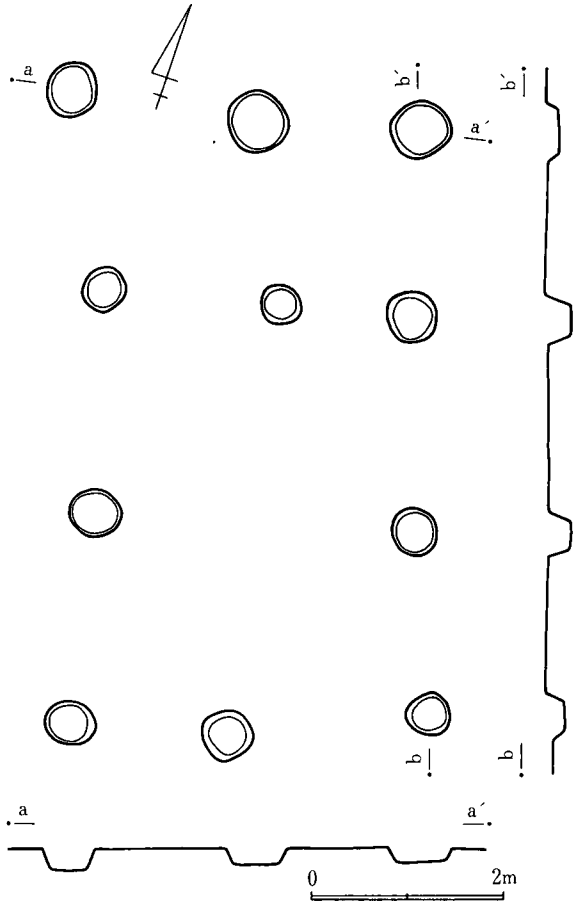


図610 H005号遺構実測図

27. H006号遺構（図611、図版141－1）

住居群の東側に分布する掘立柱建物群の内、西側部分に位置し、H001が近接している。一部溝状遺構によって切断されるものの、柱穴部分が溝内で確認できたため、これをもって補足することができる。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。3間×2間の東西棟建物である。柱掘形は最大のもので径0.8m、深さ0.7m、最小のもので径0.5m、深さ0.5mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。

28. H007号遺構（図612、613、図版141－2）

住居群の東側と分布する掘立柱建物群の内、北西部分に位置し、D007、H008が近接してい

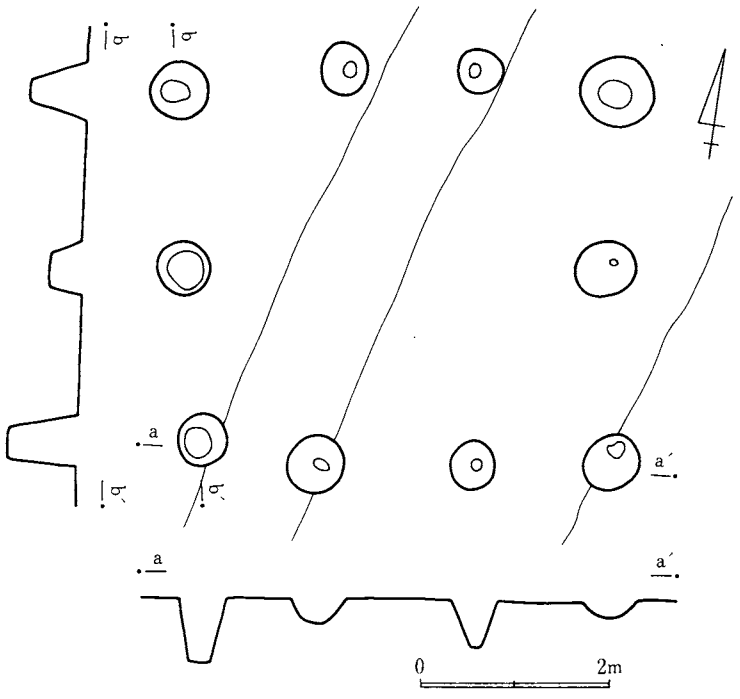


図611 H006号遺構実測図

る。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.73m、深さ0.4m、最小のもので径0.68m、深さ0.35mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。掘形に対して掘り込みが浅い。c－c′の土層断面はI層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層黄茶褐色土層の堆積が認められる。

出土遺物　本来の遺構構築面は現確認面より上部である

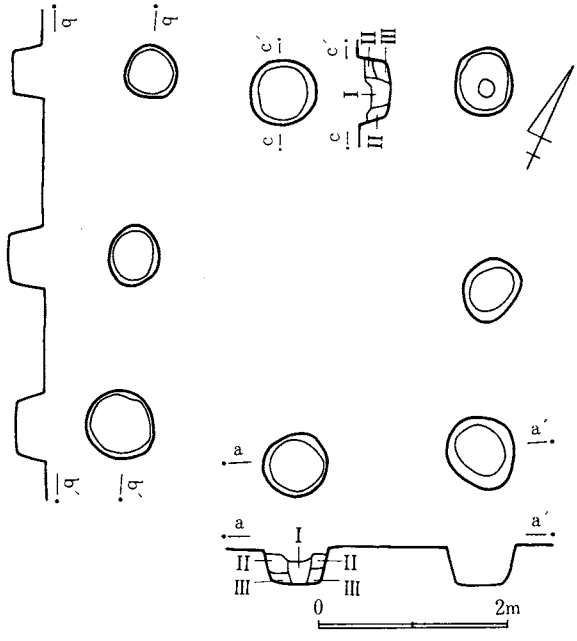


図612 H007号遺構実測図

と考えられる。よって出土した遺物は本来の一括資料として判断することはできない。遺物は、甕、甑、坏形土器がある。甕形土器は1、2、4で、1は口唇部に特徴を有す口縁部破片である。2、4は底部破片である。甑形土器は3の底部破片である。坏形土器は5の体部破片である。

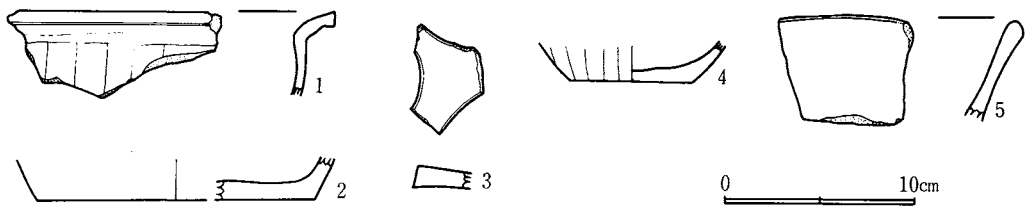


図613 H007号遺構出土遺物実測図

H007出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	明赤褐色	
2	甕	2.1	—	(14.6)	底部 1/4	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
3	甑	—	—	—	底部破片	——	砂粒	堅緻	暗褐色	
4	甕	1.9	—	6.4	底部 1/2	ヘラ削り	——	堅緻	(内)明褐色 (外)黒色	
5	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	

29. H008号遺構（図614、615、図版141—3、151）

住居群の東側に分布する掘立柱建物群の内、北東部分に位置し、H007が近接している。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので0.6m、深さ0.2m、最小のもので0.5m、深さ0.15mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈し

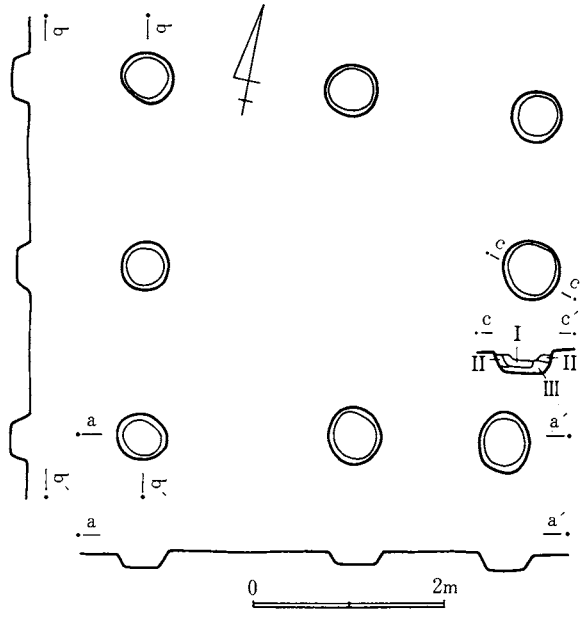


図614 H008号遺構実測図

H008出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	—	—	口縁部破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「冨」
2	坏	—	—	—	口縁部破片	——	——	堅緻	暗褐色	墨書判読不明
3	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	——	堅緻	黒褐色	

ている。柱穴の掘り込みは全体に浅い。この傾向はH005と同様である。c－c′の土層断面はI層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層黄茶褐色土層の堆積が認められる。

出土遺物　本来の遺構構築面は現確認面より上部であると考えられる。よって出土した遺物は本来の一括資料として判断することはできない。遺物は、坏、甕形土器である。坏形土器は1、2でいずれも体部破片である。1には「冨」の墨書が認められる。甕形土器は3で叩き目が認められる胴部破片である。

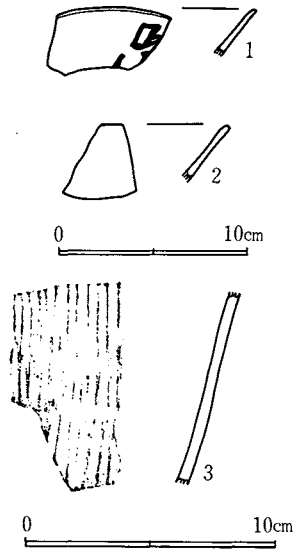


図615 H008号遺構出土遺物実測図

30. H011号遺構（図616、図版142－1）

環状形に分布する住居群の南方約12m離れて単独で位置する。最も近接するのはD164で約11mの間隔を有している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ2間×2間の建物跡である。東側柱中央がM008に切断されているため痕跡を止めないが、他の柱穴掘り込みがM008の掘り込みより深いためM008内で確認できて良いところであるが、再三にわたり精査を試みたが検出することはできなかった。この部分の柱穴掘り込みがM008と同じであっ

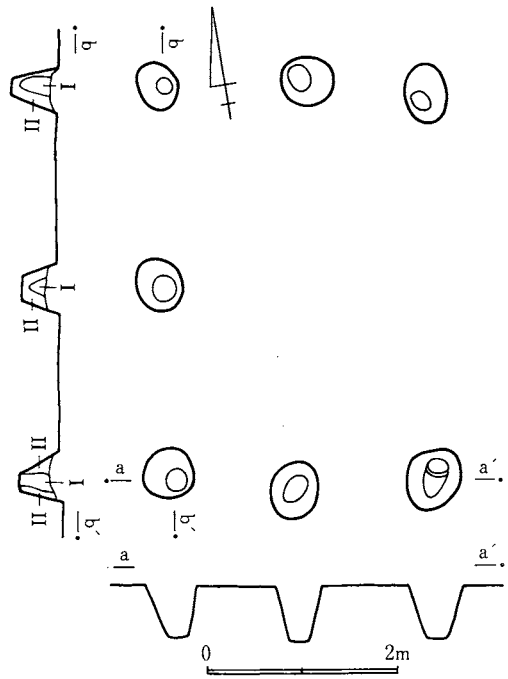


図616 H011号遺構実測図

たか、あるいは本来なかったものかは検証できない。柱掘形は最大のもので径0.7m、深さ0.6m、最小のもので径0.5m、深さ0.5mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。b－b′の土層断面はI層暗褐色土層、II層褐色土層が堆積している。

31. P001号遺構（図617、618、図版142－2）

環状形に分布する住居群の南方に接して位置する。溝状遺構によって北側の一部が攪乱を受けているが、ほぼ形状は把握できる。

遺構　径約2.1mの円形の平面形に階段状の張り出しを有する遺構で、土器の焼成窯として考えて差し支えないであろう。掘り込みは傾斜を有して0.8m掘り込んで底面に達する。底面は階段状の張り出し下端部が平坦を成しているが全体に擂鉢状の窪を呈している。そして著しく焼土化を呈している。この焼土化は一部壁まで達しておりかなりの火勢であったことが推察できる。階段状の張り出しは中段に一段を有しており、出入口を兼ねた通風口となっていたと考えられる。

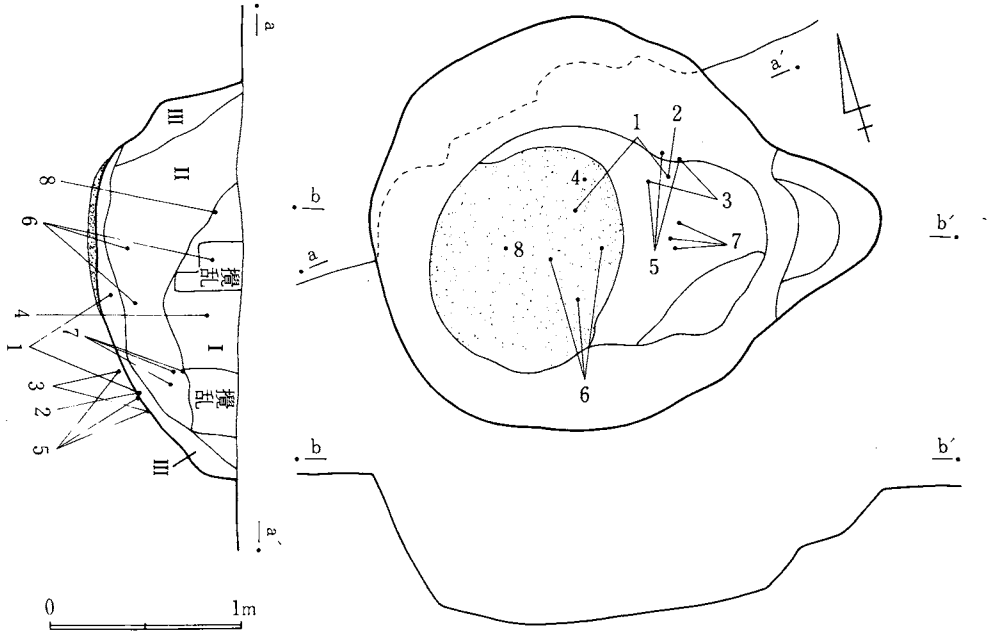


図617　P001号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層灰、焼土粒混入褐色土層が擂鉢状に堆積しており、各層および底面より出土している。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみである。口径 12 cm 前後の 1、2、口径 15 cm 前後の 3

～7がある。8は底部の破片である。いずれも体下部がヘラ削り調整されており、体部の立ちあがりが鋭くないが、大きく開く形状を呈している。

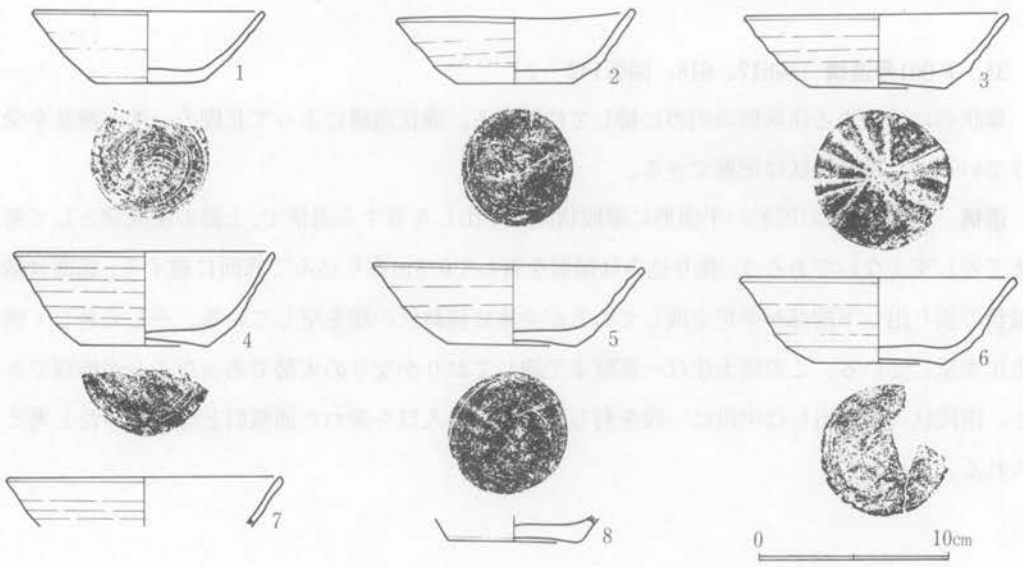


図618 P001号遺構出土遺物実測図

P001出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.8	(11.9)	6.3	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明赤褐色	二次的に火を受ける
2	坏	3.4	12.4	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明赤褐色	
3	坏	3.9	13.7	7.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	淡褐色	内黒
4	坏	4.85	(13.6)	(6.6)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	明褐色	内面磨き
5	坏	4.1	14.2	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	内黒
6	坏	4.4	(14.5)	6.8	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り
7	坏	2.55	(14.4)	―	⅓	――	――	堅緻	(内)淡褐色 (外)明赤褐色	内面磨き
8	坏	1.3	―	6.9	底部のみ	――	雲母	堅緻	明褐色	糸切り

32. P002号遺構（図619、620、図版142－3、151）

環状形に分布する住居群の中央空間部分に位置している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けているものの全体は把握できる。

遺構 長径1.9m、短径1.7mの楕円形の平面に階段状の張り出しを有する遺構で、土器の焼成窯として考えて差し支えないであろう。掘り込みは傾斜を有して約0.75m掘り込んで底面に達する。底面は階段状の張り出し下端部が、若干平坦をなしているが、全体に擂鉢状の窪を呈

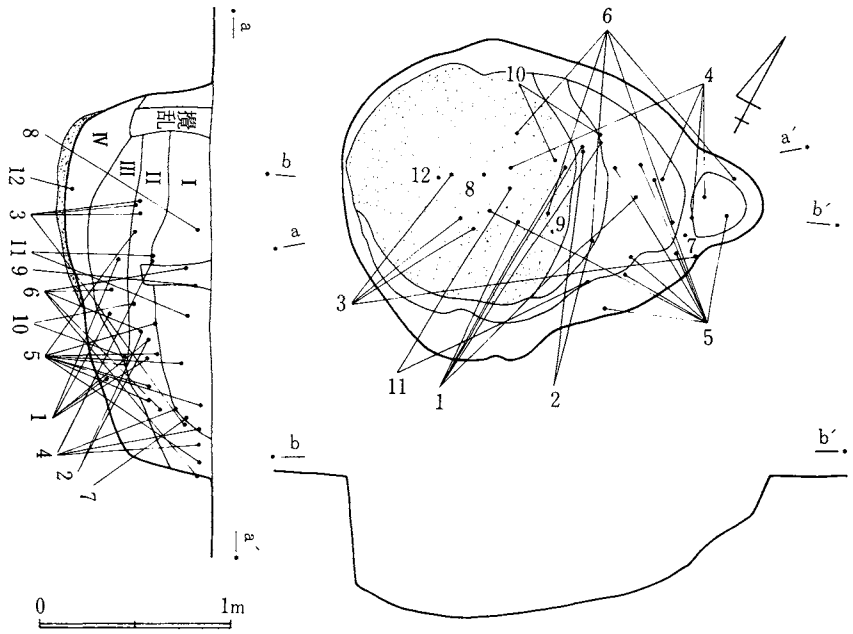


図619 P002号遺構実測図

している。そして著しく焼土化を呈しており、壁の一部まで達している。階段状の張り出しは中段に一段を有しており、出入口を兼た通風口をなしていたと考えられる。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層焼土粒混入黒褐色土層、III層ロームブロック褐色土ブロック混入暗褐色土層、IV層若干の粘土粒炭化粒混入黒褐色土層がほぼ擂鉢状に堆積しており、

P002出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.2	(12.7)	6.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明茶褐色	糸切り
2	坏	3.6	12.1	5.7	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	
3	坏	3.75	(12.1)	5.2	⅕	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明茶褐色	
4	坏	3.4	(11.8)	5.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	
5	坏	4.0	12.7	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	
6	坏	3.2	11.8	5.7	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	
7	坏	6.8	12.9	4.4	⅕	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡灰褐色	墨書判読不明 糸切り
8	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「主」
9	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
10	皿	1.8	(13.4)	—	⅖	——	——	堅緻	明褐色	内面磨き
11	皿	1.0	—	6.8	½	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	
12	高台付皿	—	—	—	底部破片	——	——	堅緻	(内)褐色 (外)明赤褐色	墨書「南」

II層を中心に各層から出土している。

出土遺物　遺物は、坏、皿形土器がある。坏形土器はいずれも口径 12 cm 前後のものである。8、9は体部に墨書がある破片である。皿形土器は10～12で体部、底部の破片で12は内面に墨書がある。

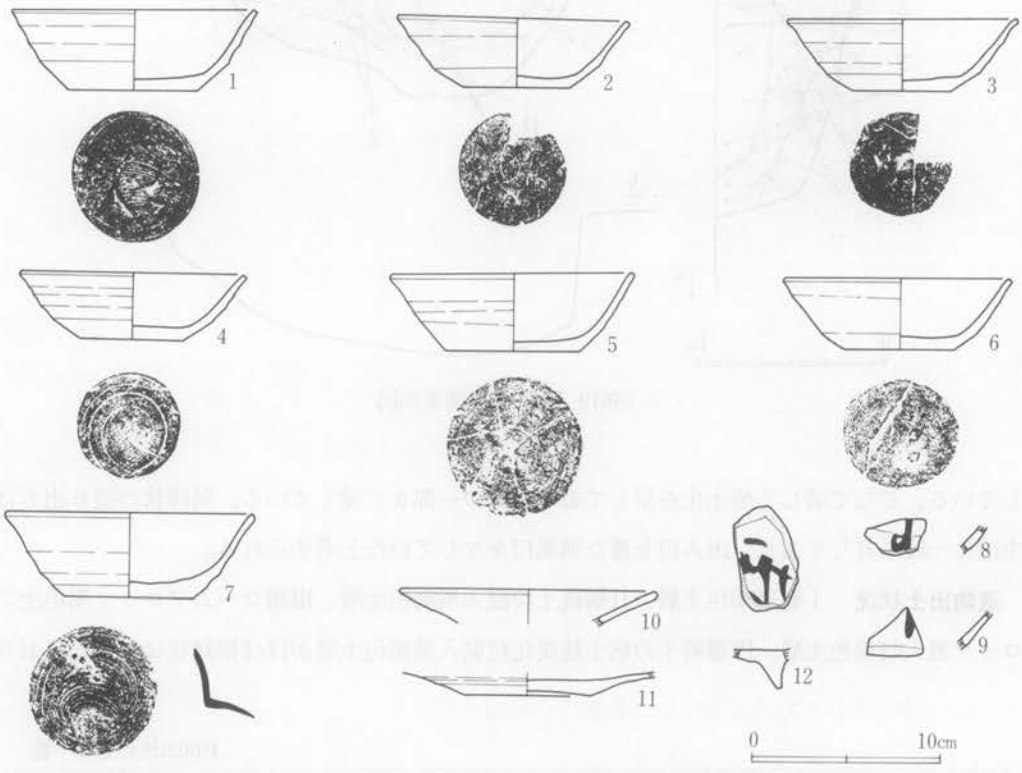


図620　P002号遺構出土遺物実測図

33. P003号遺構（図621、622、図版143－1）

環状形に分布する住居群の中央空間部分に位置している。トレンチャーによる溝状の攪乱を受けているものの全体は充分把握できる。

遺構　径約1.1mの円形の平面形に階段状の張り出しを有する遺構で、土器の焼成窯として考えて差し支えないであろう。掘り込みは傾斜を有して0.45m掘り込んで底面に達する。底面は

P003出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.4	(14.9)	(7.3)	½	下端回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	内面磨き

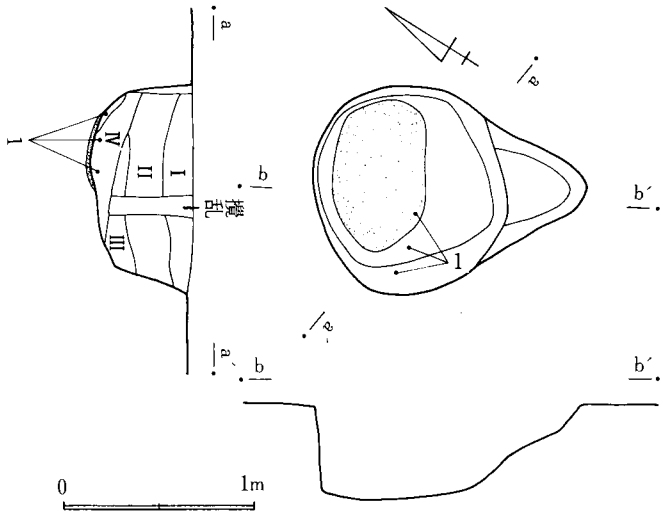


図621 P003号遺構実測図

ほぼ平坦な状況を呈して、焼土化が著しく、一部、壁まで達しているのが認められる。階段状の張り出しは中段に一段を有しており、出入口を兼ねた通風口となっていたと考えられる。

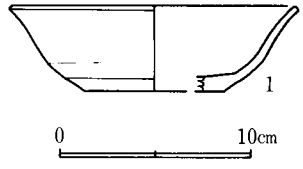


図622 P003号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況 Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層焼土若干混入黒褐色土層が堆積している。遺物量はきわめて少ないが底面からの出土である。

出土遺物 遺物は稀少で図示できたのは坏形土器1点である。口径15cm、底径7.5cm、器高4.4cmで体部が外反ぎみに開く形状を呈している。焼成は堅緻で色調は褐色を呈す。

34. P004号遺構（図623、624、図版143—2、151）

環状形に分布する住居群の北方、第Ⅲ群との中間に位置しているがⅠ群に近接していることと、類似遺構が所在することからⅠ群に含めた。

遺構 長径1.5m、短径1.4mの楕円形の平面に階段状の張り出しを有する遺構で、土器の焼成窯として考えて差し支えないであろう。掘り込みは0.85m掘り込んで底面に達している。断面からは袋状の形状を呈しているかのように一瞥できる。底面はほぼ平坦をなし、著しく焼土化している。一部、壁まで焼土化している。階段状の張り出しは類似遺構中最も長く0.9mを計り中段に二段を有している。この部分は出入口を兼ねた通風口となっていたと考えられる。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黄褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層、Ⅴ層焼土粒灰混入褐色土層、Ⅳ層褐色土層が擂鉢状に堆積している。遺物はⅠ、Ⅱ層を

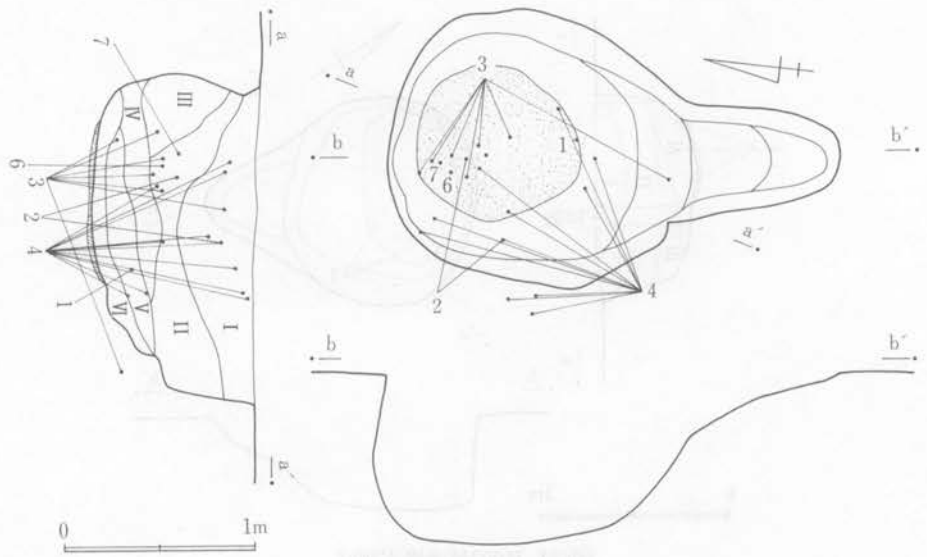


図623　P004号遺構実測図

中心に出土している。

出土遺物　遺物は、坏、皿、鉢形土器がある。坏形土器は口径12cm前後の1、2と、口径14cm前後の3、4がある。5は底部に墨書がある破片である。皿形土器は7、8で造り出し高台がある。鉢形土器は6の底部破片である。

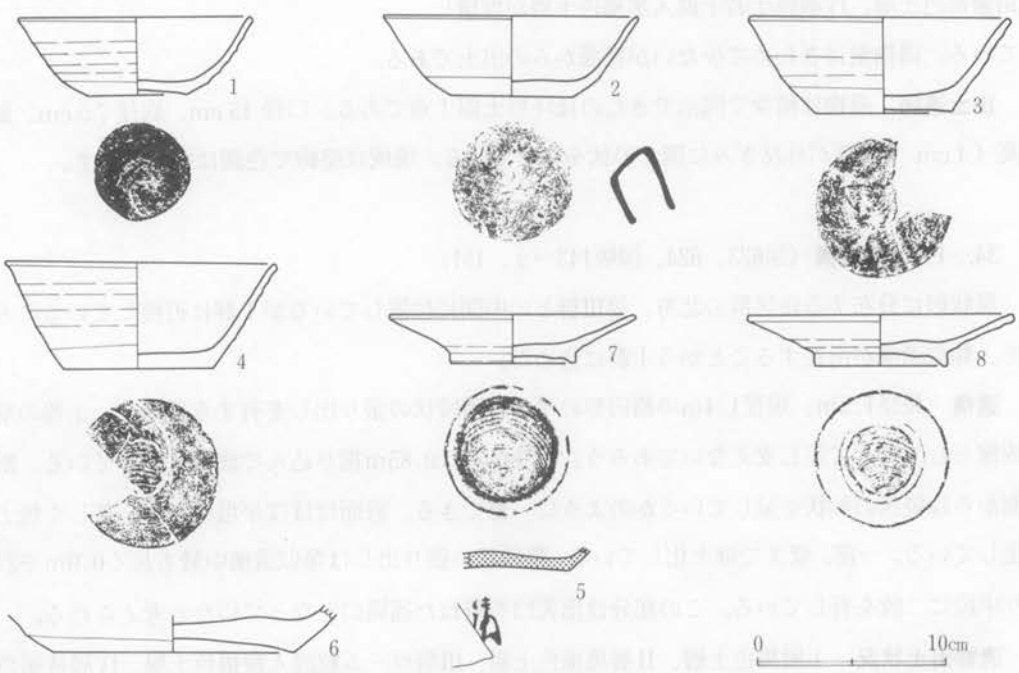


図624　P004号遺構出土遺物実測図

P004出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.9	12.1	5.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	
2	坏	4.1	(13.4)	6.4	2/5	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	墨書判読不明 内面磨き
3	坏	4.9	13.5	7.2	3/5	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
4	坏	5.45	14.0	7.8	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
5	坏	—	—	—	底部のみ	——	——	堅緻	明灰色	墨書「清」 糸切り
6	鉢	1.9	—	13.7	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	
7	高台付皿	2.5	(12.9)	6.5	1/5	——	砂粒	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
8	高台付皿	2.65	(13.9)	7.6	1/5	——	砂粒	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り

35. M008号遺構（図625）

環状形に分布する住居群の南方約12m離れて単独で位置する。最も近接するD164で約11mの

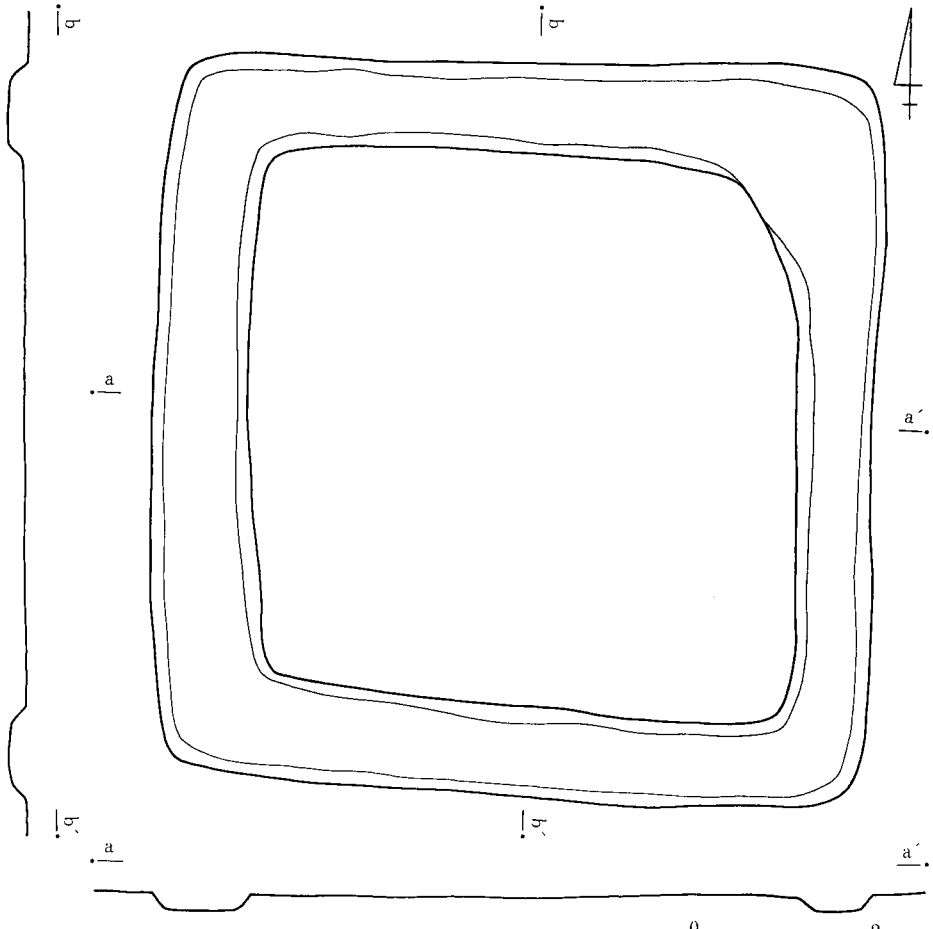


図625 M008号遺構実測図

間隔を有する。H011を切断している。

遺構　北辺3.6m、東辺3.7mの方形周溝状遺構である。溝の幅員はほぼ同規模に構築されているところであるが、北東コーナー部分が若干幅広となっている。幅約0.6m、深さ0.1mを計る。掘り込みは傾斜をなしており全体に軟弱な状況を呈している。底面はほぼ平坦である。溝に区画される内側には何ら落ち込みは検出できない。遺物の出土は皆無である。

第3節　第II群の遺構と遺物

歴史時代の第II群は竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟、方形周溝遺構1基、ピット3基で構成される群である。X・Y－5・6・7・8の地域において検出した。6から7にかけて約1900㎡が住宅建設に伴って地山を削平されている部分が位置するため、本来はこの部分にもかなりの遺構が所在していたと考えられる。

住居跡は2～3軒を小グループとして散漫な状況を呈して分布している。D017、D018、D188～D190、D010、D068が小グループとして考えて良い。またD016、D055は既に削平された部分に存在していたと考えられる住居と小グループを構成していたであろう。D015につ

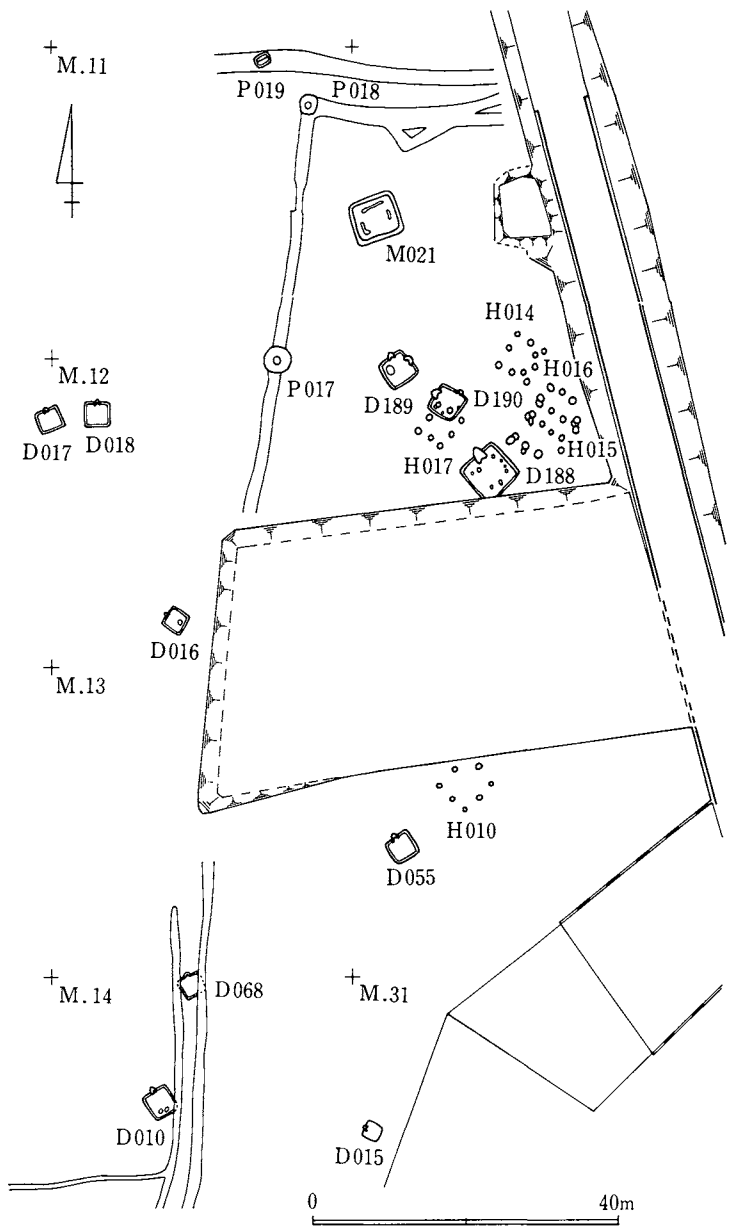


図626 歴史時代第II群遺構分布状況図

いても地区界外にその小グループを構成する住居の存在が考えられる。

掘立柱建物跡はD188～D190の東側に近接してH014、H015、H016が位置しており、H017はD188と重複関係を呈している。またH009がD055に近接して位置している。その他、方形周溝遺構、ピット等はII群の北側部分に位置している（図626、図版127－2、128－1）。

1．D010号遺構（図627～630、図版152－1、2、161）

II群の中で南西に位置し、最もI群に近接している。南東壁コーナー部分が溝によって攪乱を受けているものの、全体は充分に把握することが可能である。

遺構　北壁3.5m、東壁3.2mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んでいる。床面は部分的に攪乱を受けているが全体に堅緻な状況である。床下の調査時にP_1、P_2を検出した。床面上では検出できなかったピットである。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.7m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築してい

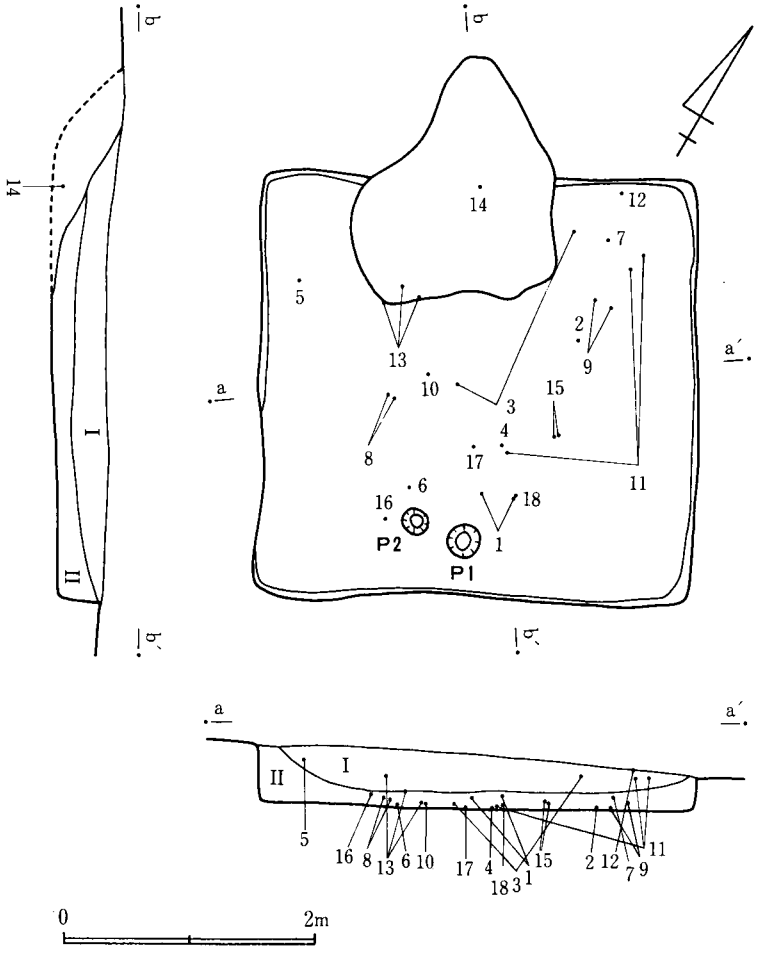
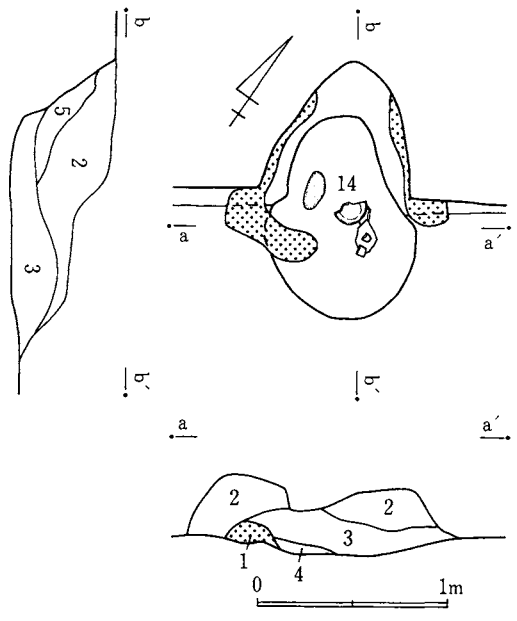


図627　D010号遺構実測図

る。袖等の粘土貼り込みは貧弱であるが火袋から煙道まで一体化している。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積しており、II層床面上を中心に住居中央部から出土している。また、カマド内からの出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢形土器がある。甕形土器は1～6で、1、2、4は広口甕である。3、6は口縁が短かく外反する甕である。甑形土器は7の底部破片のみである。坏形土器は口径 12 cm 前後の8～13と、口径 15 cm 前後の14、15とある。16、17は底部破片である。鉢形土器は18で体部上半を欠損している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　茶褐色土層
3　1層混入褐色土層
4　焼土層
5　褐色土層

図628　D010号遺構カマド実測図

D010出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	広口甕	48.0	36.0	—	底部のみ欠損	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	褐色	
2	広口甕	—	—	—	底部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	褐色	1と同一個体
3	甕	—	28.0	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	(外)黒褐色 (内)黒色	
4	広口甕	—	—	—	破片	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
5	甕	—	—	—	口縁部破片	——	——	堅緻	黄橙色	
6	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甑	—	—	—	破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
8	坏	3.4	12.4	(7.1)	体部 1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	黄褐色	
9	坏	3.4	12.2	(5.8)	底部～体部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	
10	坏	4.2	18.3	6.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	
11	坏	4.1	12.5	7.2	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	糸切り
12	坏	4.0	12.7	(6.0)	底部～体部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	
13	坏	6.4	3.5	12.9	略完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙色	

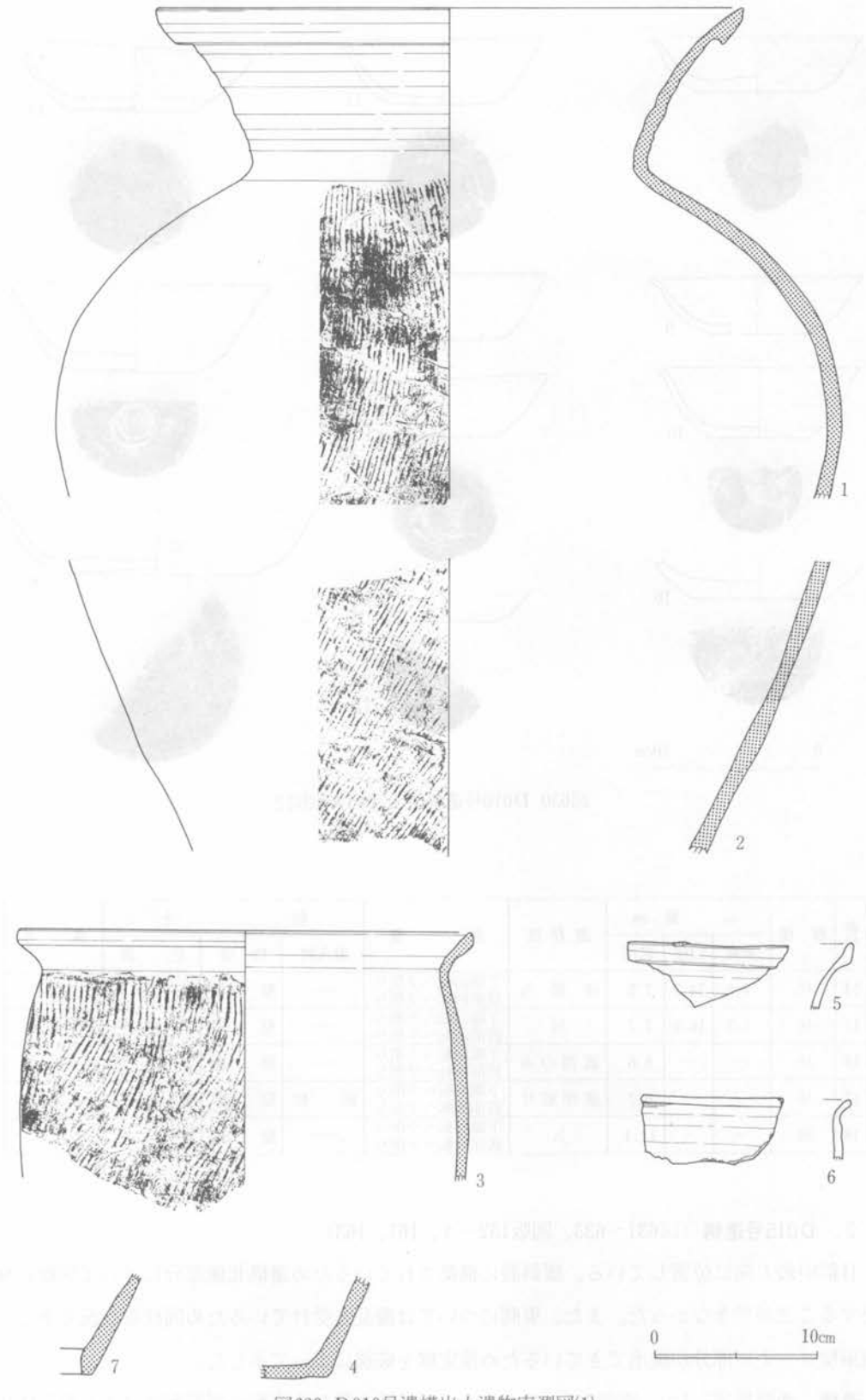


図629　D010号遺構出土遺物実測図(1)

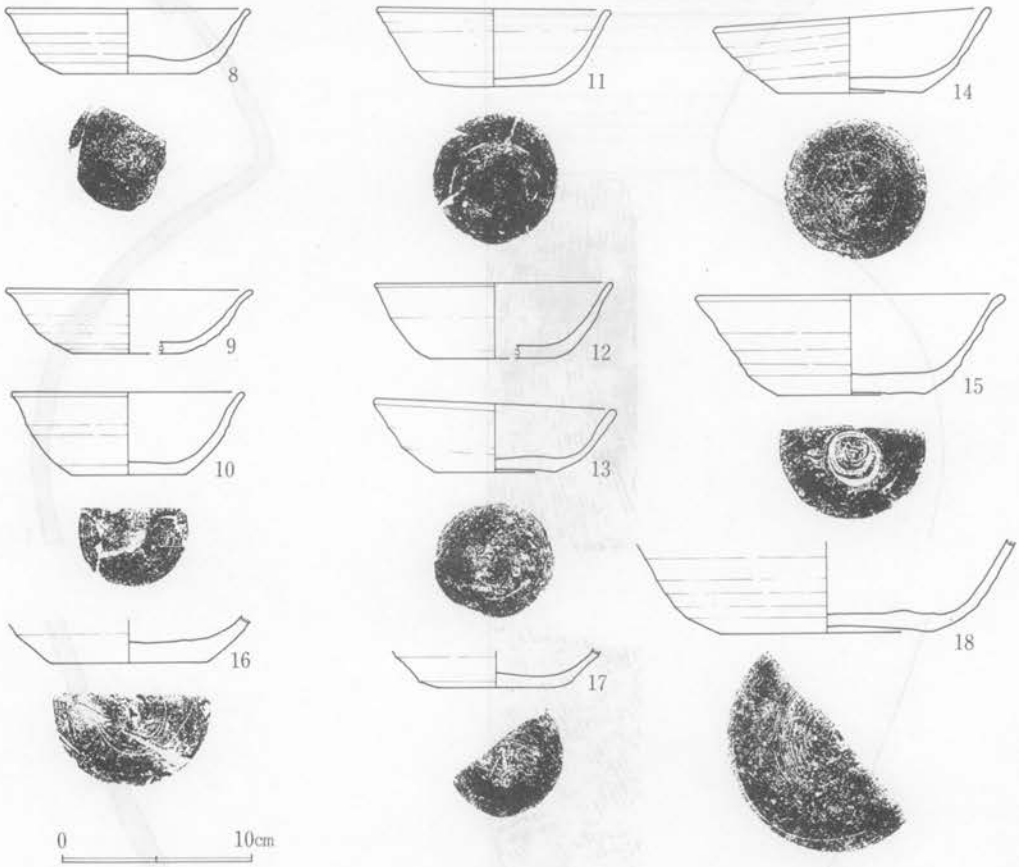


図630 D010号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
14	坏	4.0	14.7	7.5	体部 3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	茶褐色	内面磨き
15	坏	5.2	16.4	7.7	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	茶褐色	内面磨き
16	坏	―	―	8.6	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	黄褐色	糸切り
17	坏	―	―	6.2	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄灰色	
18	鉢	―	―	11.4	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	――	堅緻	橙色	糸切り

2．D015号遺構（図631～633、図版152－3、161、163）

II群中最も南に位置している。緩斜面に構築されているため遺構北側部分について明瞭に検出することができなかった。また、東側については攪乱を受けているため同様な状況である。南東壁コーナー部分が検出できているため推定線を破線によって示した。

遺構　西壁推定7.1m、南壁2.5mでコーナーが丸味を帯びる方形の平面形を呈する竪穴住居

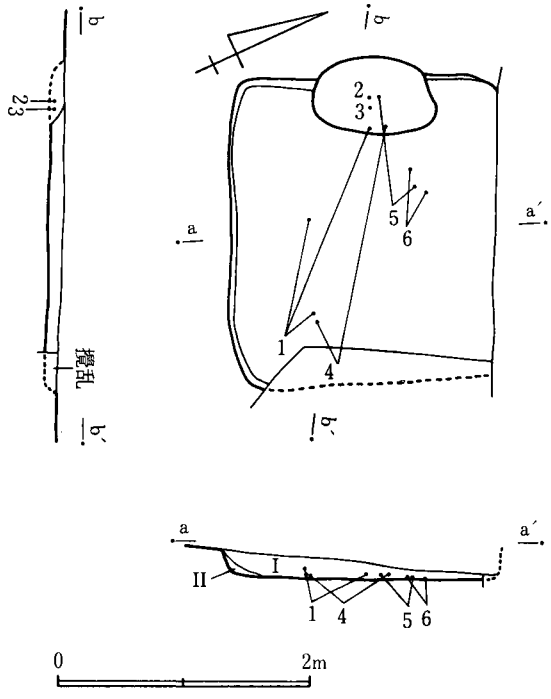


図631 D015号遺構実測図

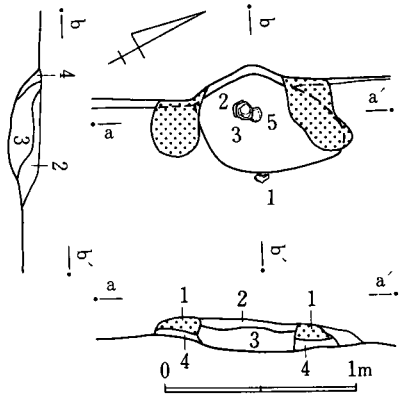


図632 D015号遺構カマド実測図

跡である。壁は緩傾斜を呈しており遺存状況の良好な部分で0.2m掘り込んでいる。床面は全体に軟弱な状況を呈しているが、カマド前方部は他より若干固い状況を呈している。北東壁部分には黄褐色粘土による貼り床が施され、床面を水平に保っている。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　西壁中央部を0.1mほど掘り込んで暗褐色土の上に黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部のみ認めることができ、天井部等については不明である。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黄褐色土層が堆積しており、I層床面上を中心にカマド

D015出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.5	11.7	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
2	坏	4.3	13.4	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	線刻「主」 糸切り
3	坏	—	—	7.2	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	墨書「㊋」 糸切り
4	坏	—	—	7.0	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	暗文 糸切り
5	坏	4.4	15.6	8.4	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向の削り	——	堅緻	黄灰色	内黒
6	坏	4.8	14.9	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡茶褐色	内面磨き

内から出土している。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみで煮沸用土器はない。口径12cm前後の小形な1～4と口径15cm前後で大形な5、6がある。2は体部に焼成前のヘラ書、3は墨書、4は暗文風の記号がある。5は内面を黒色処理している。

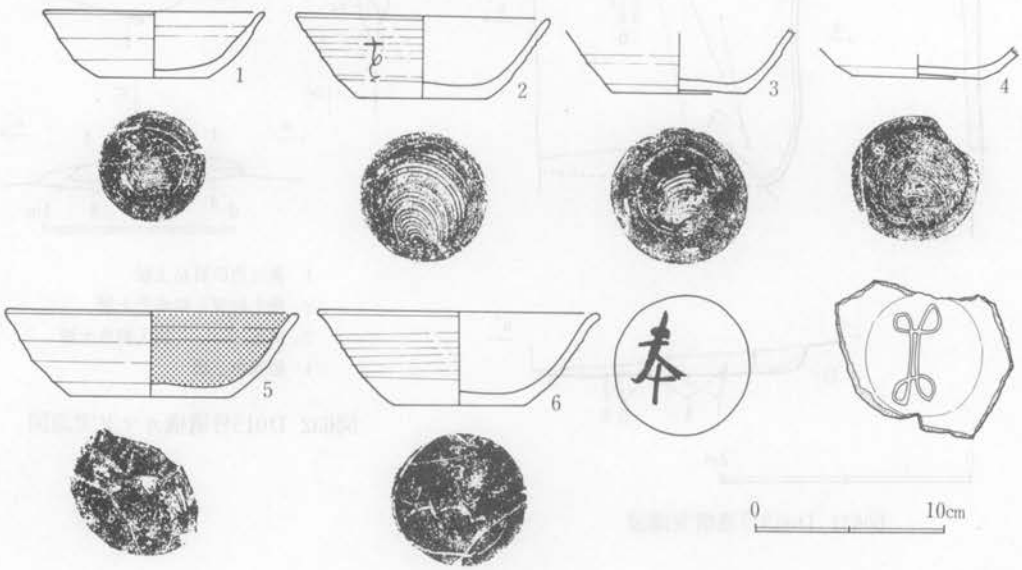


図633　D015号遺構出土遺物実測図

3．D016号遺構（図634～638、図版153－1、2、161、163）

II群の中においてほぼ中央部に位置している。およそ住宅部分に所在していたと推定でき小グループの一軒として理解できる。

遺構　西壁2.7m、北壁2.9mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.08mの壁溝がカマドが構築されている部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているがカマド左脇部分が若干軟弱な状況である。カマド左脇部分の床面軟弱部分から床下調査時に径0.6m、深さ0.06mのピットを検出した。また東壁に近い部分で重複する小ピットを検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　西壁中央部を0.3m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖はロームブロックの上に貼り込まれ、火袋、煙道を一体化している。火袋部に相当する袖は著しく焼土化している。また火床にも厚く焼土が堆積しているのを認めることができる。天井部は確認できなかった。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積しており、遺物はI層下部からII層上部を中心に壁際から出土している。また、カマド内からの出土もある。

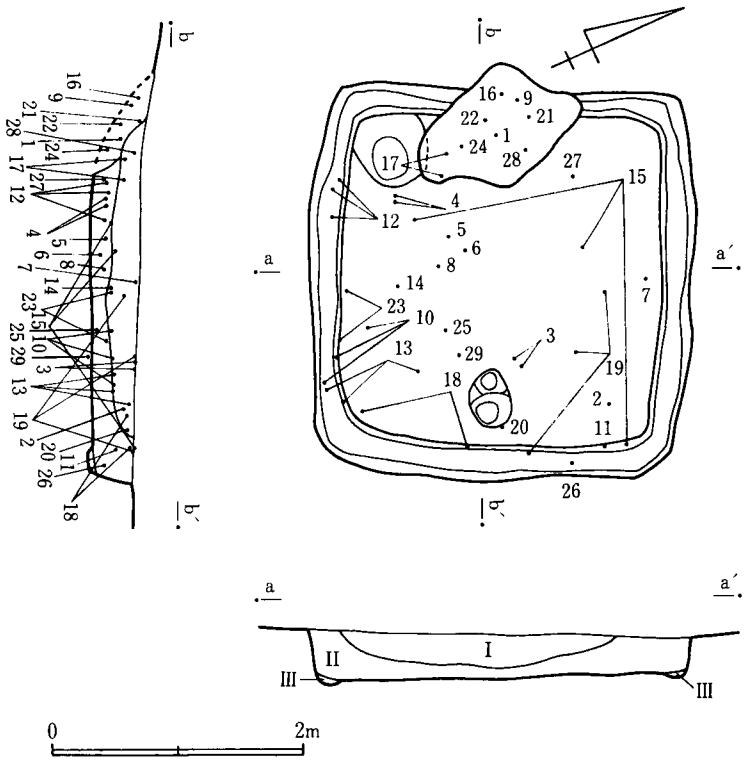


図634 D016号遺構実測図

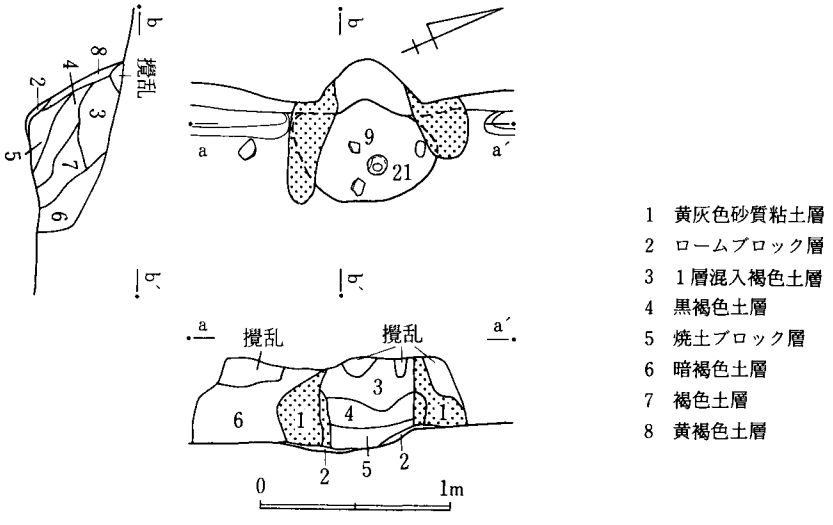


図635 D016号遺構カマド実測図

出土遺物 遺物は、甕、壺、堝、坏、皿形土器と、土製品、石製品、それに鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1、2、4は短かい口縁が外反するものと、3の口唇部に特徴のある口縁部破片と、5、6のように胴部に叩き目がある広口甕がある。壺形土器は7で高台付の底部

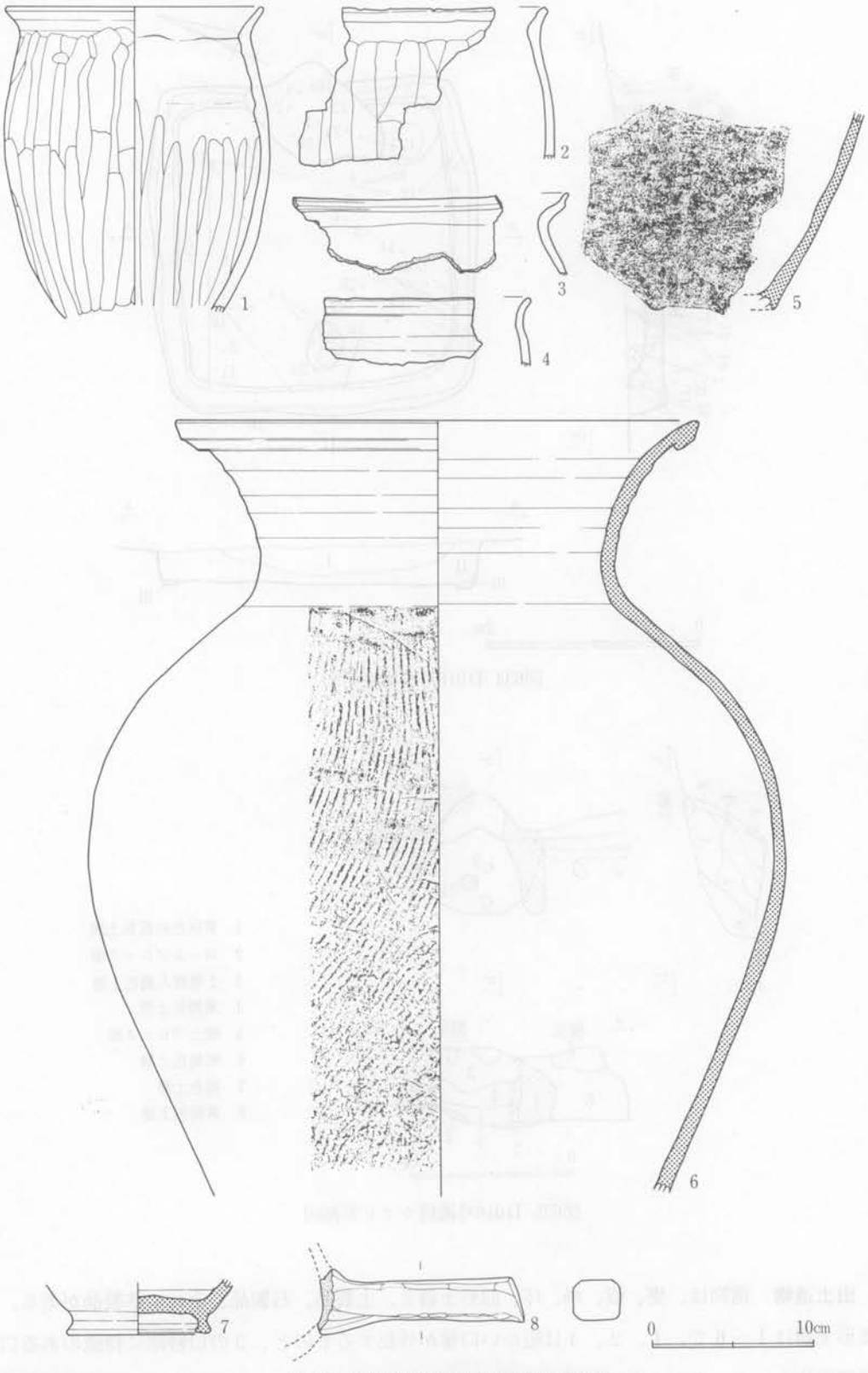


図636 D016号遺構出土遺物実測図(1)

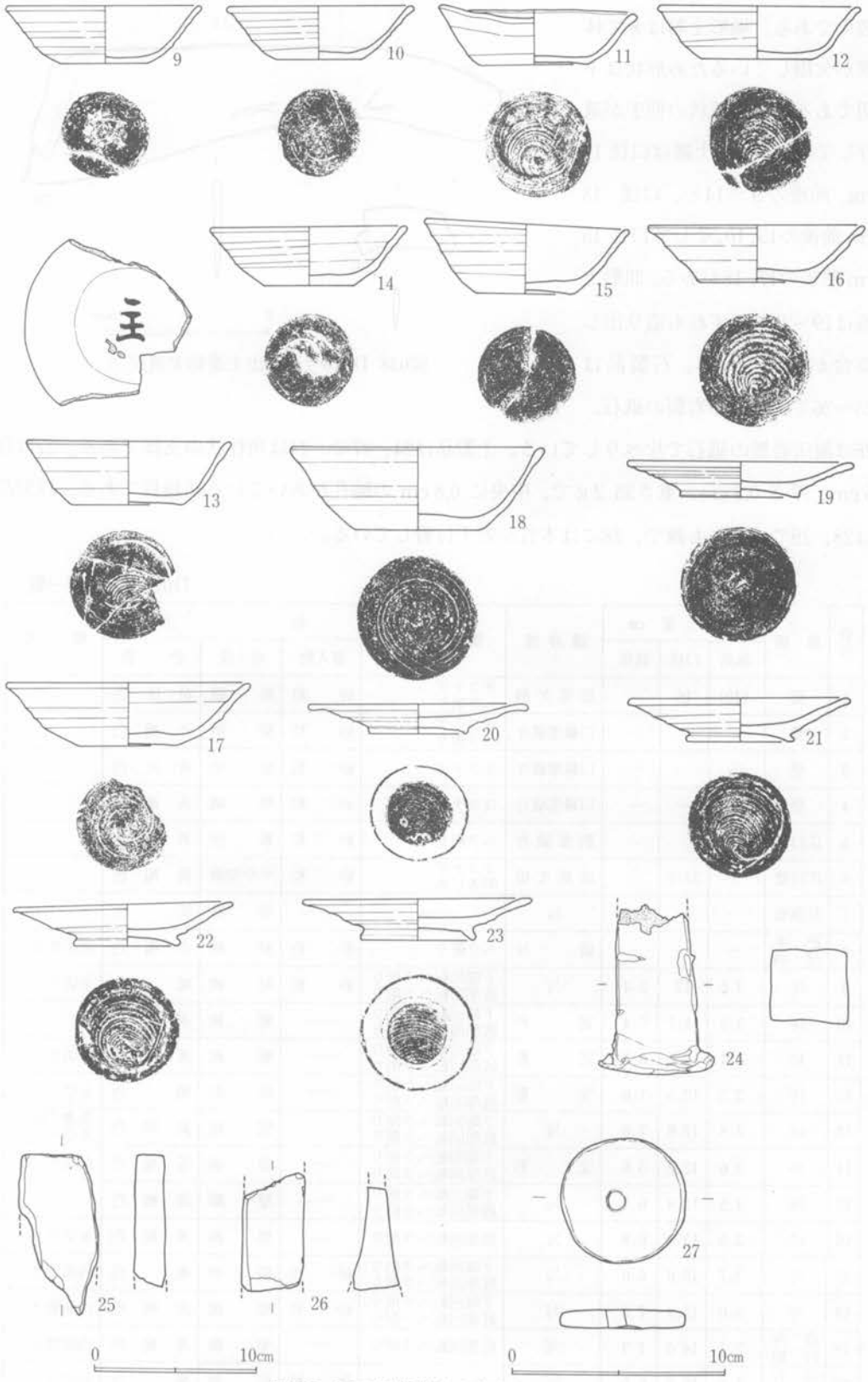


図637 D016号遺構出土遺物実測図(2)

破片である。堝形土器は8で体部が欠損しているため形状は不明であるが、角棒状の把手が遺存している。坏形土器は口径12cm 前後の9～14と、口径 13cm 前後の15、16、そして口径15cm 前後の17、18がある。皿形土器は19～23でいずれも造り出し高台が付いている。石製品は25～26で、25は砂岩製の砥石、26は凝灰岩製の砥石で片べりしている。土製品は24、27で、24は角柱状の支脚である。27は径6cm、厚さ 0.8cm、重さ55.2gで、中央に 0.8cm の軸孔があいている紡錘具である。鉄製品は28、29でいずれも鎌で、28には木質が若干付着している。

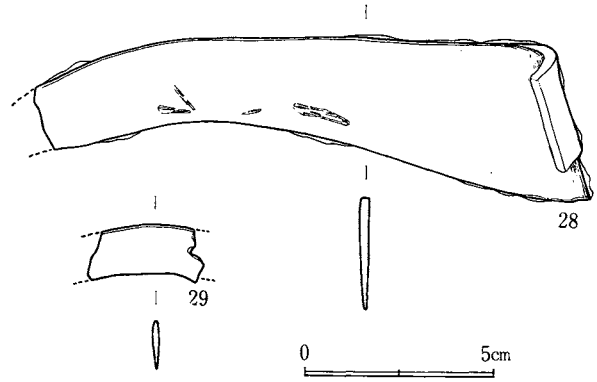


図638 D016号遺構出土遺物実測図(3)

D016出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	(19)	16	—	底部欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄灰色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黄灰色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	広口甕	—	—	—	胴部破片	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
6	広口甕	—	32.2	—	底部欠損	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黄褐色	
7	長頸瓶	—	—	8.8	½	——	——	堅緻	灰色	
8	把手付堝	—	—	—	破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	把手部分
9	坏	3.6	12	5.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	糸切り
10	坏	3.3	11.7	5.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	
11	坏	3.4	12.3	6.1	完形	下端回転ヘザ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	糸切り
12	坏	3.3	12.5	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	糸切り
13	坏	3.8	12.6	7.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	墨書「匡」 糸切り
14	坏	3.6	12.2	5.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	糸切り
15	坏	4.5	12.8	6.1	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	
16	坏	3.5	13.4	6.8	⅓	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	糸切り
17	坏	3.7	15.0	6.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	内面磨き
18	坏	5.0	15.8	7.8	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	内面磨き
19	高台付皿	2.1	14.0	7.3	⅓	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	内面磨き
20	高台付皿	1.8	13.6	6.0	⅓	——	砂粒	堅緻	褐色	糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
21	高台付皿	2.6	13.7	6.7	完形	——	雲母	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
22	高台付皿	2.5	13.6	6.6	完形	——	——	堅緻	黄灰色	内面磨き 糸切り
23	高台付皿	2.5	14.2	7.0	½	——	——	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り

4．D017号遺構（図639～642、図版153－3、161～163）

II群の住居群内において北西端に位置し、D018が近接している。覆土の掘り下げを開始してまもなく遺構全体にわたり多量の遺物が出土し、最終的に619点に達した。

遺構　北壁3.2m、東壁3.1mでコーナーが若干丸味を帯びる方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.52m掘り込んでおり、直下には幅0.21m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈し、中央部はさらに顕著である。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.6m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。

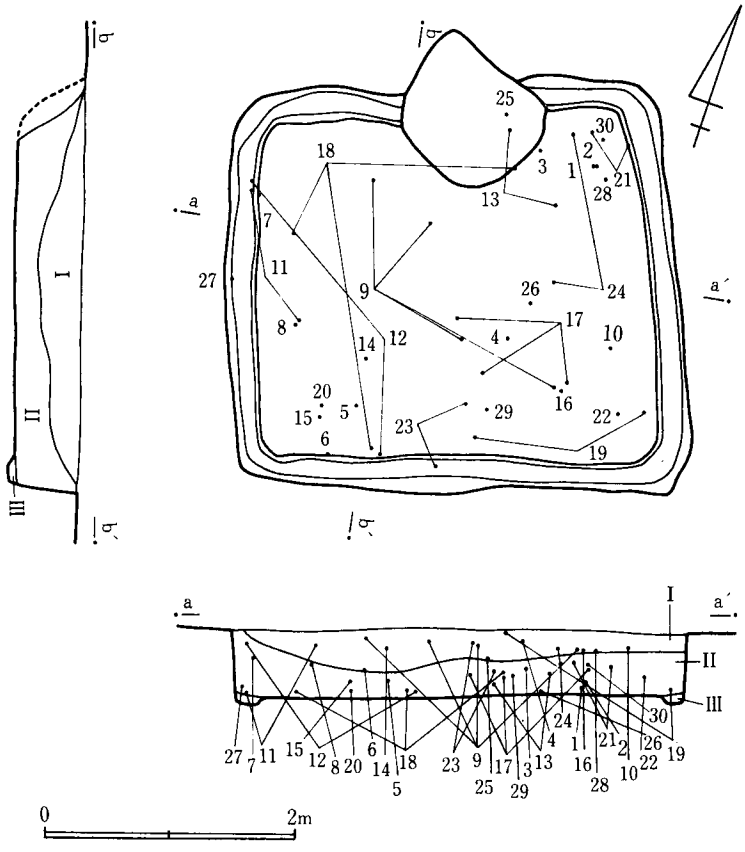
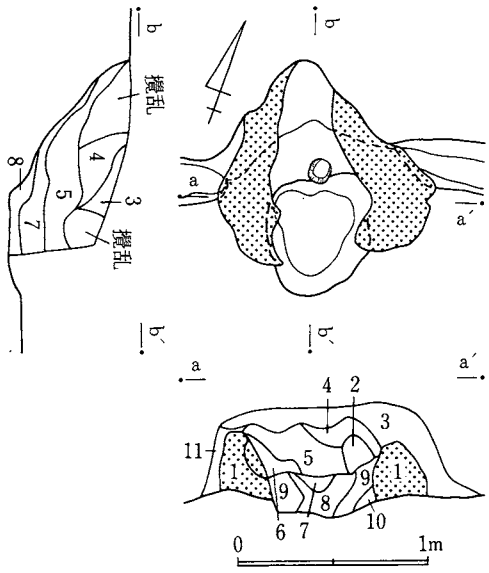


図639 D017号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色砂質土層
3 黒褐色土層
4 焼土粒混入黒褐色土層
5 焼土ブロック混入黒褐色土層
6 焼土ブロック層
7 焼土ブロック混入赤褐色土層
8 焼土ブロック混入黒色土層
9 焼土粒混入黒色土層
10 焼土粒混入褐色土層
11 ロームブロック混入黒褐色土層

図640 D017号遺構カマド実測図

粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火袋部に相当する部分の袖は焼土化が著しい。天井部は遺存していない。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積しており、遺物は各層から出土している。平面的にも集中することなく、住居全体から均く出土している。

出土遺物 遺物は、甕、壺、鉢、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～6で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部破片で、3は逆「コ」の字状を呈する口縁部破片、4、5は叩き目のある広口甕の口縁部破片、6は叩き目のある広口甕胴部破片である。壺形土器は8で胴部が著しく張る。鉢形土器は7である。坏形土器は口径 12 cm 前後の9～16と、口径 14 cm 前後

D017出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黄灰色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	軟弱	橙色	
5	広口甕	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黄灰色	
6	広口甕	—	—	14	底部～胴部破片	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	黒色	
7	鉢	—	—	7.4	底部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
8	壺	—	—	3.0	体部破片	——	砂粒	やや堅緻	黄灰色	

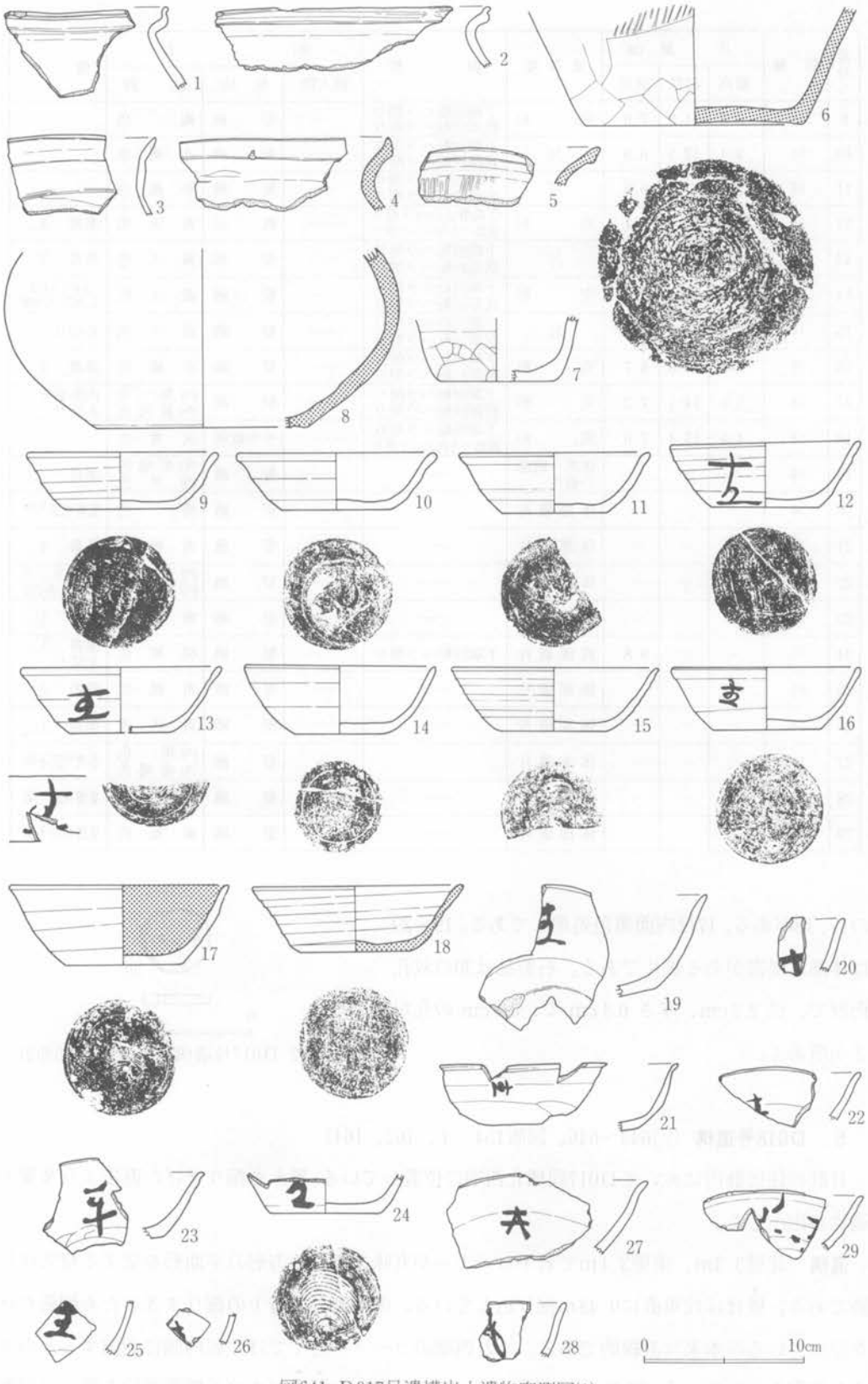


図641 D017号遺構出土遺物実測図(1)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	坏	3.5	11.9	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
10	坏	3.4	12.5	6.9	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	
11	坏	3.6	17.5	6.6	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	
12	坏	3.9	11.8	6.7	完形	下端静止のヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	——	軟弱	黄灰色	墨書「主」
13	坏	4.0	17.7	6.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
14	坏	4.2	12.0	5.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	二次的に火を受ける、体部にスス付着
15	坏	3.9	12.9	6.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
16	坏	3.8	11.8	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	墨書「主」
17	坏	5.0	14.1	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	内面磨き 糸切り
18	坏	4.0	13.4	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	——	やや軟弱	灰青色	
19	坏	—	—	—	体部～底部の破片	——	——	堅緻	(外)茶褐色 (内)黒色	墨書「主」
20	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	橙色	墨書判読不明
21	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
22	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	(内)黄灰色 (内)褐色	墨書「主」、内面磨き、糸切り
23	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
24	坏	—	—	6.8	底部破片	下端回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	墨書「主」 糸切り
25	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
26	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
27	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄褐色	墨書判読不明
28	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	橙色	墨書判読不明
29	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書判読不明

の17、18がある。17は内面黒色処理してある。19～29は体部に墨書がある破片である。石製品は30の双孔円板で、径 2.2 cm、厚さ 0.3 cm で、0.1 cm の孔が2か所あく。

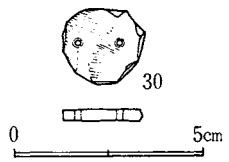


図642 D017号遺構出土遺物実測図(2)

5．D018号遺構（図643～646、図版154－1、162、164）

II群の住居群内においてD017同様北西端に位置している。覆土を掘り下げた直後より多量の遺物が出土した。

遺構 北壁3.3m、東壁3.1mで若干コーナーが丸味を帯びる方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んでいる。南壁部分は若干の掘りすぎのため胴張り状を呈しているが本来は直線的である。また西壁のコーナー近くでは住居内側に突出するかのような状況を呈している。壁直下には幅0.2m、深さ0.12mの壁溝がカマド構築部分を除いて四壁

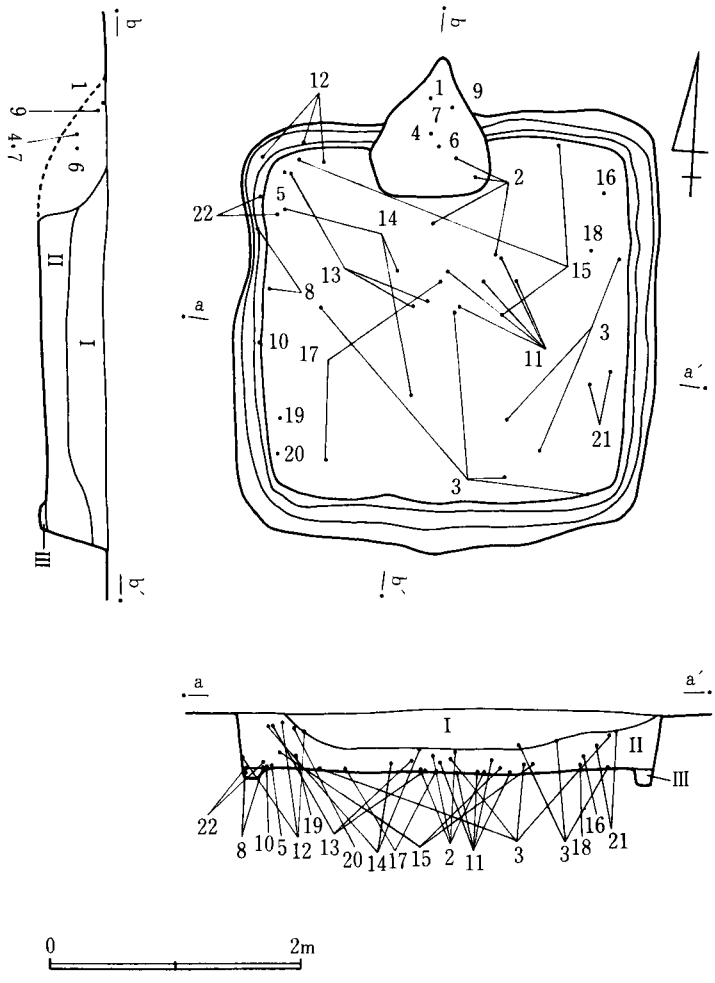


図643 D018号遺構実測図

下に認められる。床面は全体に堅緻で、特に中央部が顕著である。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.5m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は黒色土層の上に貼り込まれ、煙道部まで一体化している。火袋部に相当する部分は著しい焼土化を呈している。天井部は煙出し部に若干認められる程度である。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黄褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心にII層中から住居全体にわたり出土している。また、カマド内からも出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿、蓋形土器がある。甕形土器は1、2で、1は胴部をヘラ削り調整した口縁部破片、2は胴部に叩き目があるものである。甑形土器は3で胴部に叩き目がある。坏形土器は口径12cm前後の4～10、12と、口径15cm前後の11、13～15がある。14、15は内面を黒色処理してある。16～18は体部に墨書がある破片である。皿形土器は21で平底である。蓋形土器は22で擬宝珠状のつまみがある。

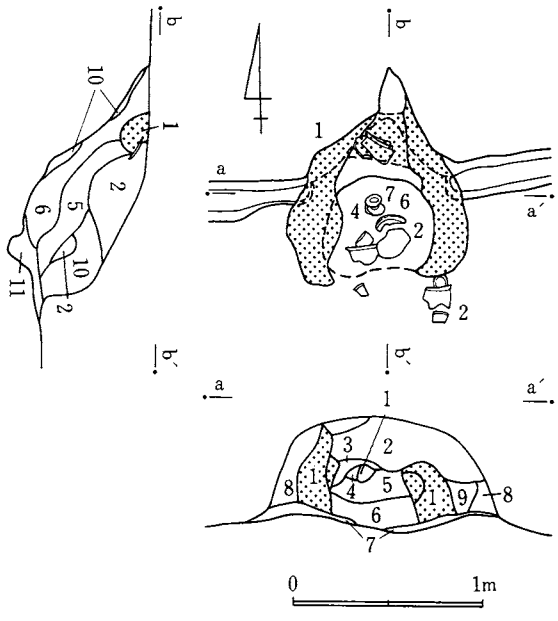


図644 D018号遺構カマド実測図

D018出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	口縁～胴部破片	ヨコナデ ヘラ削	砂粒	軟弱	茶褐色	
2	甕	15	21.1	11.2	完形	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	橙色	
3	甑	27.4	26.0	11.4	一部破損	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶灰色	
4	坏	3.7	12.3	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	橙色	糸切り
5	坏	4.0	11.8	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	褐色	糸切り
6	坏	36.	12.1	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	橙色	糸切り
7	坏	4.1	12.3	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	赤褐色	糸切り
8	坏	4.4	13.1	7.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	黄灰色	
9	坏	4.2	12.7	(7.0)	1/2	——	——	堅緻	橙色	
10	坏	4.2	12.9	6.6	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
11	坏	5.0	15.1	7.8	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り
12	坏	4.4	15.0	7.9	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	墨書「主」 糸切り
13	坏	5.0	16.1	7.8	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り
14	坏	4.5	14.6	(7.8)	1/3	——	——	堅緻	茶褐色	内黒
15	坏	5.0	15.4	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(外)黄褐色 (内)黒色	墨書「大」 糸切り
16	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
17	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
18	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」

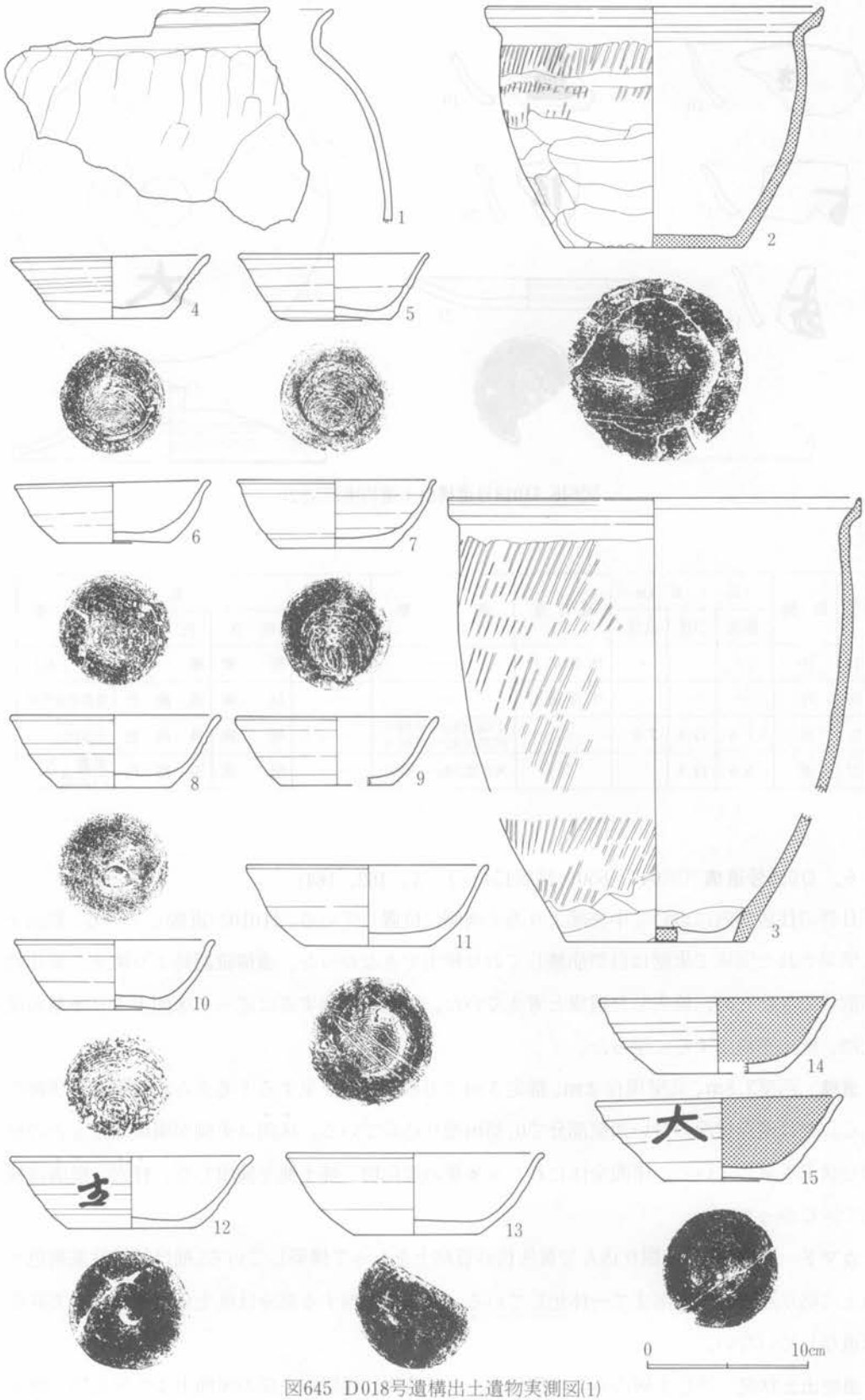


図645 D018号遺構出土遺物実測図(1)

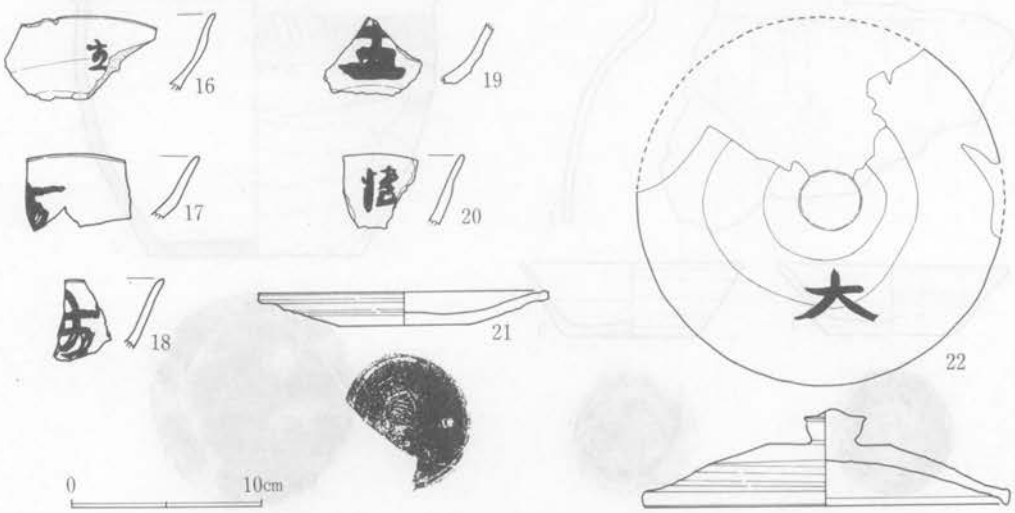


図646 D018号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
19	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
20	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書判読不明
21	皿	1.8	15.4	7.0	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	糸切り
22	蓋	5.0	19.4		3/4	天井部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	墨書「大」 内面磨き

6．D055号遺構（図647～650、図版154－2、3、162、164）

II群の住居群内において中央部より若干南側に位置している。H010が近接している。斜面上に構築された関係で東壁は自然崩壊しており検出できなかった。遺構確認時より焼土、炭化物が散見できたため、焼失した遺構と考えていた。調査が進捗するに従って床面上より多量の炭化物、焼土を検出するに至った。

遺構　西壁2.8m、北壁現存2m、推定3mで方形の平面を呈すると考えられる竪穴住居跡である。壁は遺存状況の良い西壁部分で0.35m掘り込んでいる。床面は東側が崩壊するものの堅緻な状況を呈している。床面全体にわたり多量の炭化物、焼土塊を検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は粘質性茶褐色土の上に貼り込まれ煙道部まで一体化している。火袋に相当する部分は焼土化が著しい。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　黒色土層のみの堆積であるが、遺物は住居中央部の床面上より炭化物、焼土

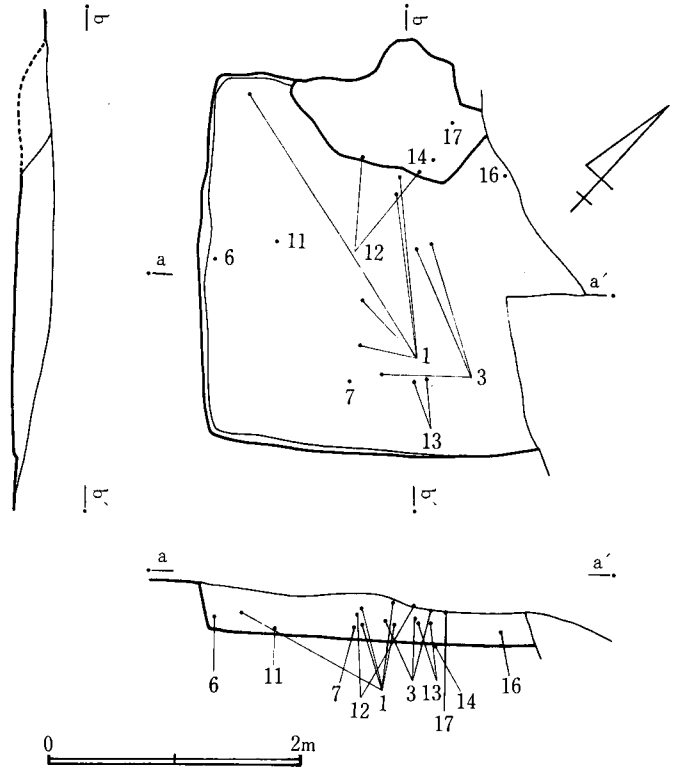


図647 D055号遺構実測図

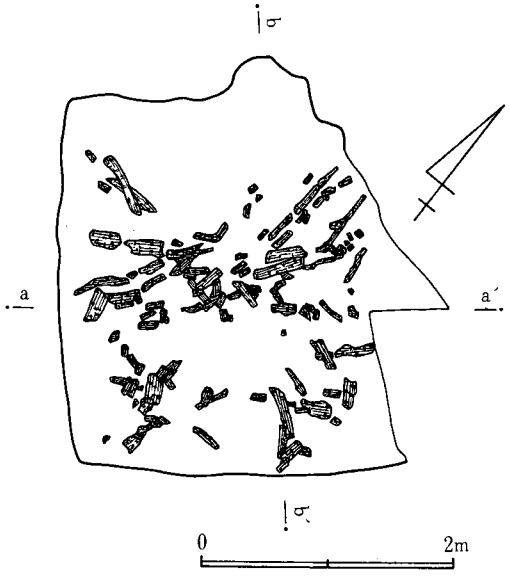
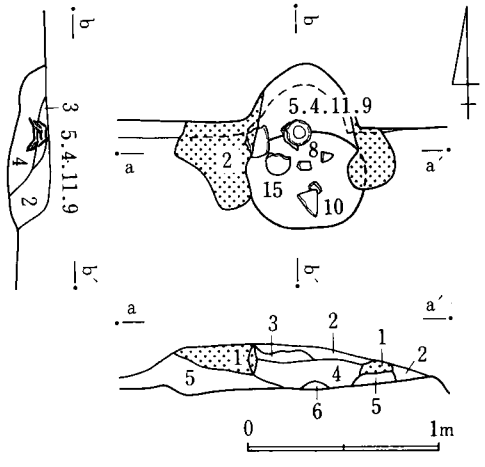


図648 D055号遺構炭化物出土状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒色土層
3 焼土粒混入赤褐色土層
4 焼土粒混入褐色土層
5 茶褐色土層
6 ロームブロック層

図649 D055号遺構カマド実測図

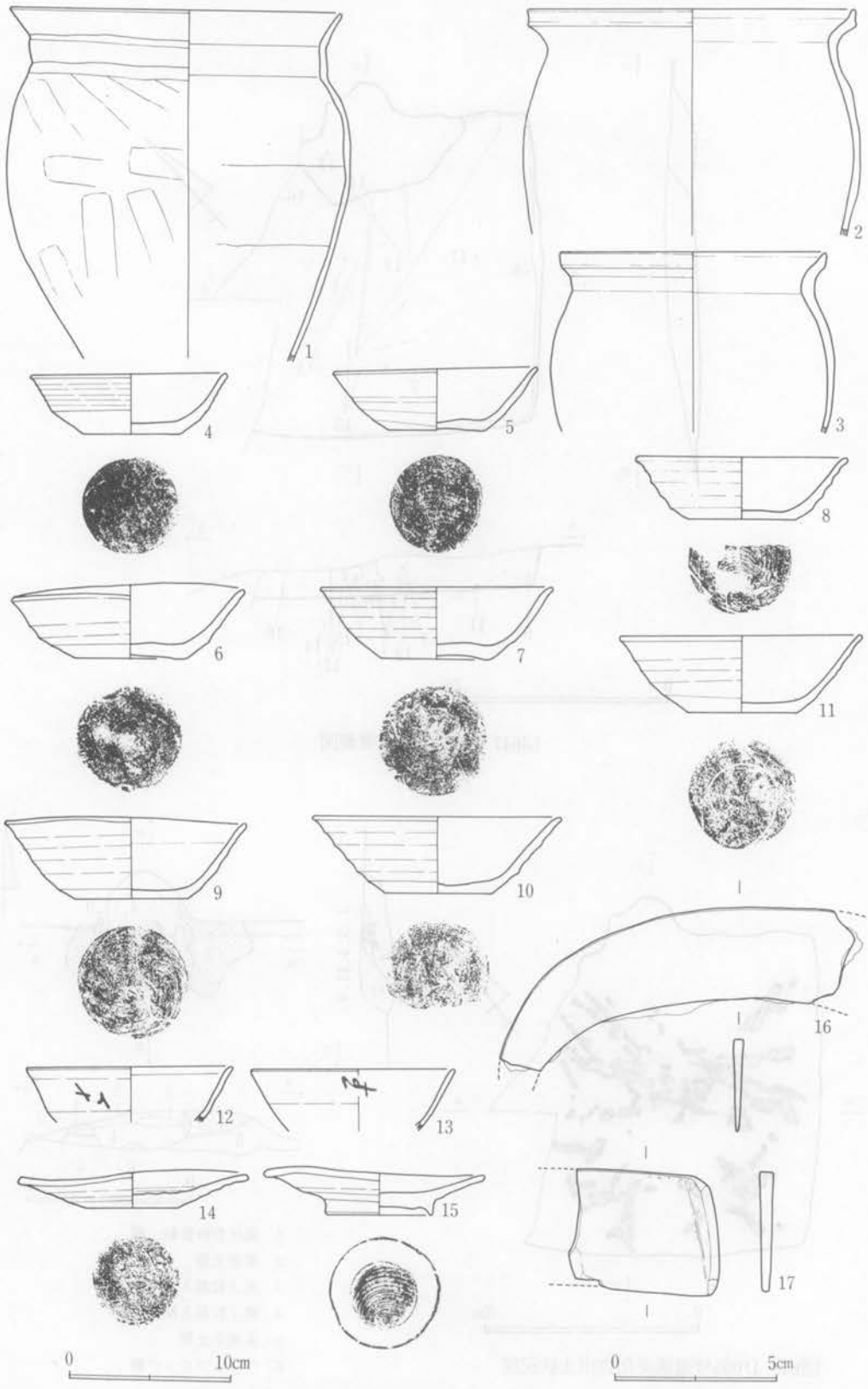


図650 D055号遺構出土遺物実測図

とともに出土している。また、カマド内からも多量の遺物を出土している。特に支脚の代用として坏が幾枚も重ねられた状況で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は逆「コ」の字状に外反する口縁部、2、3は口唇部に特徴のある短い口縁である。坏形土器は口径12cm前後の4、5と口径15cm前後の6～11がある。12、13は体部に墨書がある破片である。皿形土器は高台のない14と造り出し高台付の15がある。鉄製品は16、17で、いずれも鎌である。16は基部を、17は身の部分が欠損している。

D055出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	21.3	19.8	—	底部欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	(13.9)	(20.0)	—	1/3	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	11.0	(16.5)	—	1/2	ヨコナデ ナデ	砂粒	やや堅緻	(外)暗茶褐色 (内)黒茶褐色	
4	坏	3.6	11.6	5.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	赤褐色	
5	坏	3.6	12.3	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや軟弱	淡褐色	糸切り
6	坏	3.7	14.0	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
7	坏	4.3	(14.1)	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	暗褐色	
8	坏	3.8	(12.5)	6.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	暗茶褐色	
9	坏	4.8	14.4	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	暗褐色	
10	坏	4.6	(15.1)	6.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	赤褐色	
11	坏	4.6	14.6	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	暗褐色	
12	坏	3.2	(12.5)	—	1/3	——	雲母	堅緻	明褐色	墨書「主」
13	坏	3.5	(12.7)	—	1/2	——	砂粒	堅緻	橙褐色	墨書「主」
14	皿	2.2	13.6	5.4	完形	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	(内)赤褐色 (外)暗褐色	
15	高台付皿	2.5	13.2	6.5	完形	——	雲母	やや堅緻	暗褐色	糸切り

7．D068号遺構（図651～653、図版155－1、164）

II群の住居群内において南側部分に位置している。溝によって遺構東側および西側が攪乱を受けている。また、緩斜面に構築されている関係で特に東側の遺存状況が悪い。

遺構　北壁推定3.2m、西壁3.2mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁の掘り込みは遺存状況が比較的良い西壁部分で約0.28mを計り、若干の傾斜を呈している。床面は溝の攪乱があるため全体にわたり把握できないが住居中央部はきわめて堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　北壁を0.4m掘り込んで構築しているが、本体の構造については粘土を検出することができなかったため不明である。住居が斜面上に構築しているためかなりの部分が流出、ある

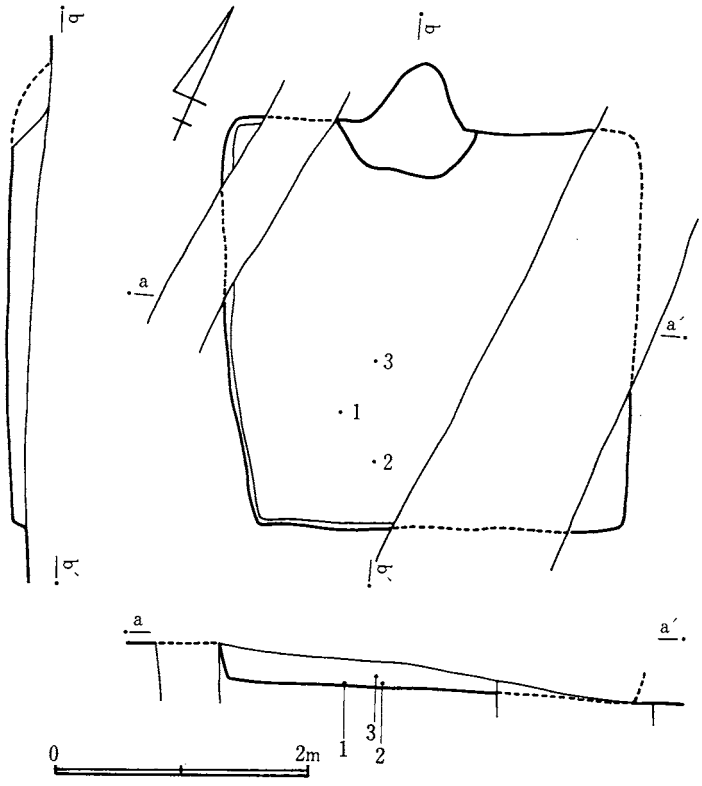
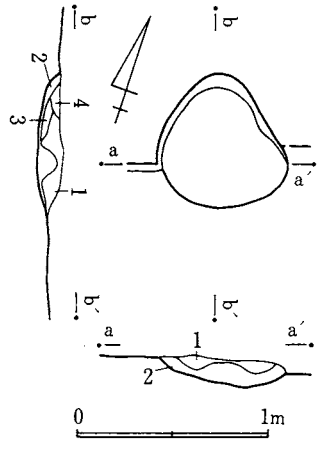


図651 D068号遺構実測図



1 焼土粒混入赤褐色土層
2 ローム粒焼土粒混入褐色土層
3 焼土粒混入褐色土層
4 黒褐色土層

図652 D068号遺構カマド実測図

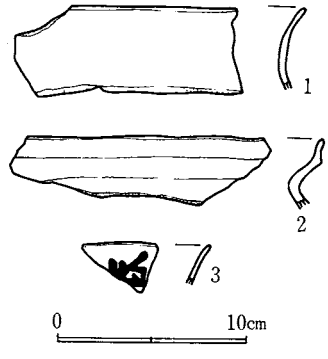


図653 D068号遺構出土遺物実測図

いは削平されているようである。

遺物出土状況 覆土は壁高が浅いため黒褐色土層の堆積のみである。遺物は住居中央部より南側に寄った床面上より出土した。

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器であるが量的にきわめて少ない。甕形土器は1、2で、1は緩やかに外反す

る口縁部の破片、2は口唇部が直立する口縁部の破片である。坏形土器は3で判読不明の墨書がある体部の破片である。

D068出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	明赤褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	灰褐色	
3	坏	—	—	—	破片	——	雲母	堅緻	淡褐色	墨書判読不明

8．D188号遺構（図654～657、図版155—2、3、156—1、2、163～165）

II群の住居群内において北東部分に分布する小グループの一軒である。住宅建設に伴って地山が削平された部分に接しているため遺構の南西部分が削平されている。また、トレンチャーによる溝状の攪乱を受けているため遺存状況は良好でない。

遺構　北壁6.1m、東壁5.6mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、当該期の住居としては大形に属するものである。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.08mを計る壁溝が南壁の一部分とカマド構築部分を除いて確められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。カマド前方部分の床面上で炭化物を検出した。検出量は少なく、住居全体にわたるものでわないが焼失に係わる所産と考えて良いであろう。柱穴と考えられるピットはカマド近くに2か所検出したが対面する南壁部分には検出できず、南壁中央部に接するように長径0.62mのピットを検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長1.5m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖は地山を芯に掘り抜いており、本来この内側から上部にかけて粘土を貼り込んでいたと思われるがその痕跡は認められない。天井部は煙道部分に一部遺存する程度である。

遺物出土状況　I層ローム粒混入暗褐色土層、II層ローム粒混入暗黄褐色土層、III層炭化粒混入暗褐色土層、IV層黄褐色土層、V層暗褐色土層、VI層褐色土層、VII層暗黄褐色土層が堆積しており、遺物はIII層床面上を中心にカマド前方部に集中して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、坏、盤形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1～3は口唇部に特徴のあるもので形状や調整は同じものである。4～5は広口甕で胴部に叩き目があり、6は内面に青海波文がある。壺形土器は7、8で、7は口縁部、8は高台付の底部破片である。坏形土器は口径12cm前後の9～17と、口径15cm前後の18がある。19～34は体部に墨書がある破片である。盤形土器は35で造り付け高台がある。石製品は37の滑石製の双孔円板であるが孔の1つは未貫通である。鉄製品は36の鎌で、柄の着装部分に幅0.5cm、長さ4cmで帯状に刃部と並行して柄の止金具状のものが認められる。

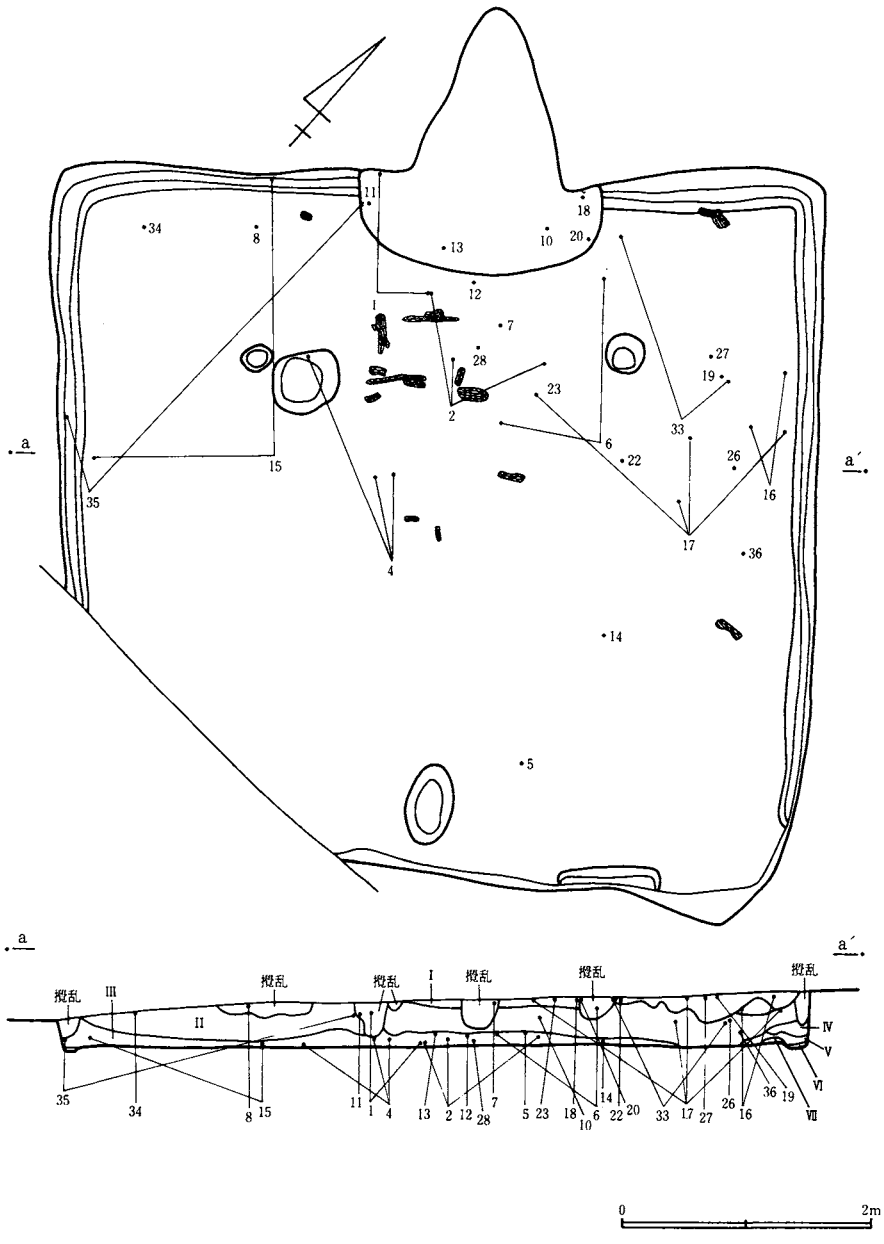


図654 D188号遺構実測図

D188出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	24.6	19.5	—	底部のみ欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	(外)黒色 (内)赤褐色	二次的に火を受けている。
2	甕	—	—	—	底部のみ欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	淡赤褐色	二次的に火を受けている。
3	甕	(4.6)	11.7	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	(外)黒色 (内)赤褐色	二次的に火を受けている。
4	甕	34.4	20.2	(10.6)	3/3	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

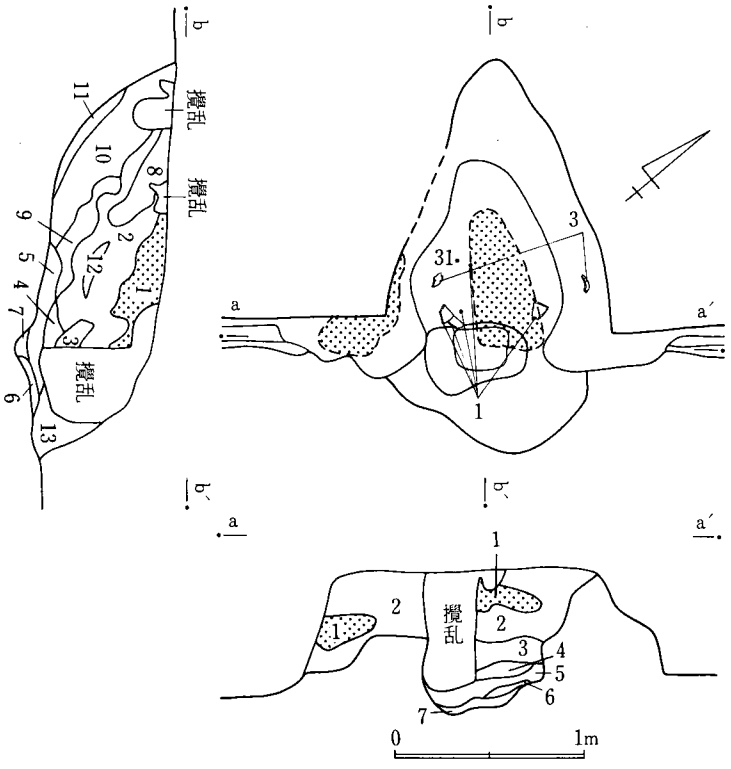


図655 D188号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	甕	20.0	—	13.4	口縁部欠損	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
6	甕	(14.0)	—	—	½	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	淡灰褐色	
7	長頸瓶	(7.7)	10.2	—	口縁部破片	——	——	堅緻	緑灰褐色	自然釉付着
8	長頸瓶	(5.2)	—	9.3	底部のみ	——	——	堅緻	灰色	
9	坏	4.0	11.8	7.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	ヘラ切り
10	坏	4.1	11.6	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	ヘラ切り
11	坏	3.9	11.8	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	ヘラ切り
12	坏	4.0	12.0	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	墨書「主」
13	坏	4.0	12.8	7.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	暗茶褐色	
14	坏	4.1	12.0	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	
15	坏	3.8	11.7	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
16	坏	3.8	11.2	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	暗茶褐色	墨書「主」 糸切り
17	坏	4.2	11.8	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡赤褐色	墨書「主」
18	坏	4.9	14.0	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	(内)黒褐色 (外)淡茶褐色	墨書「主」 内面磨き
19	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	墨書「主」

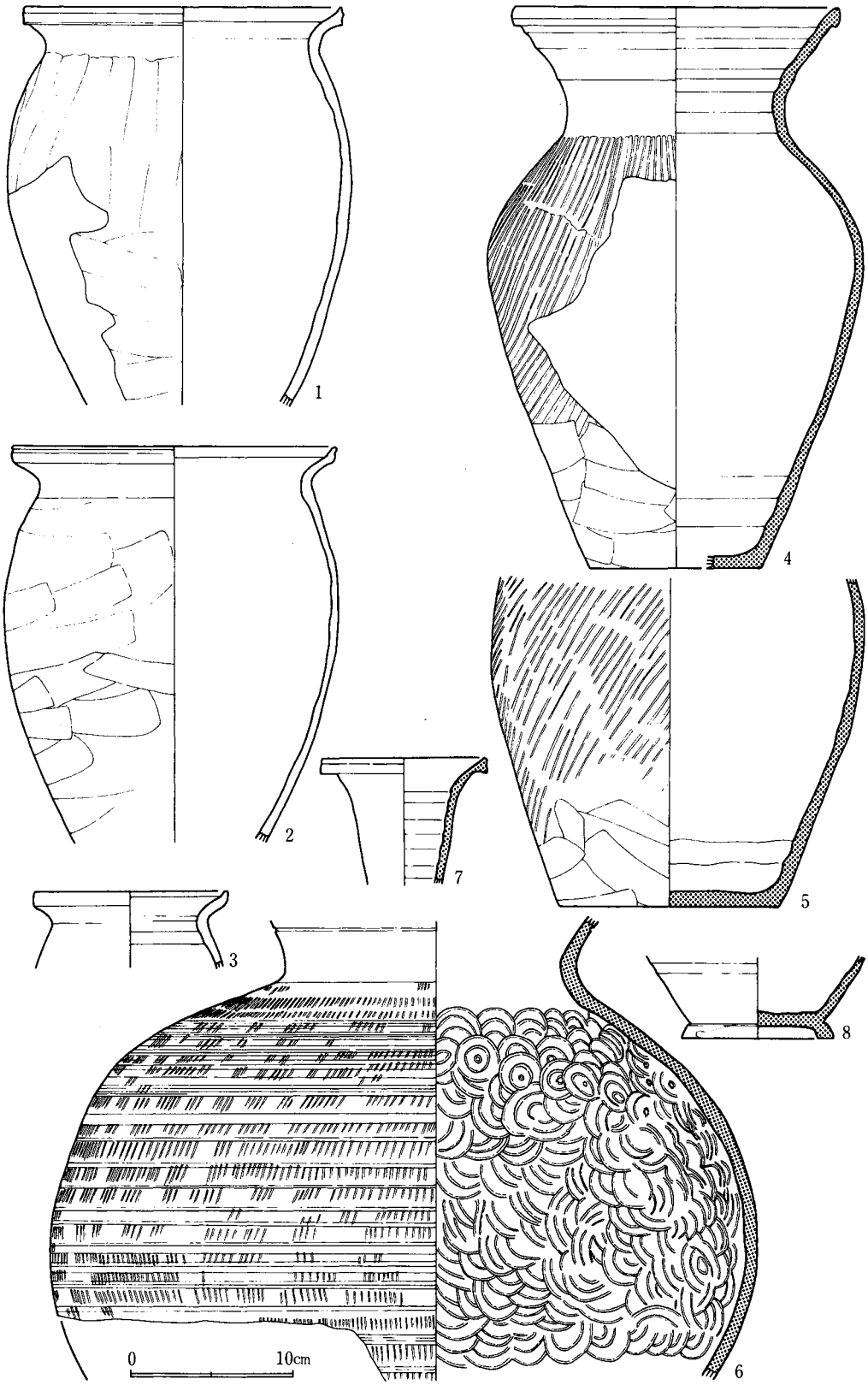


図656 D188号遺構出土遺物実測図(1)

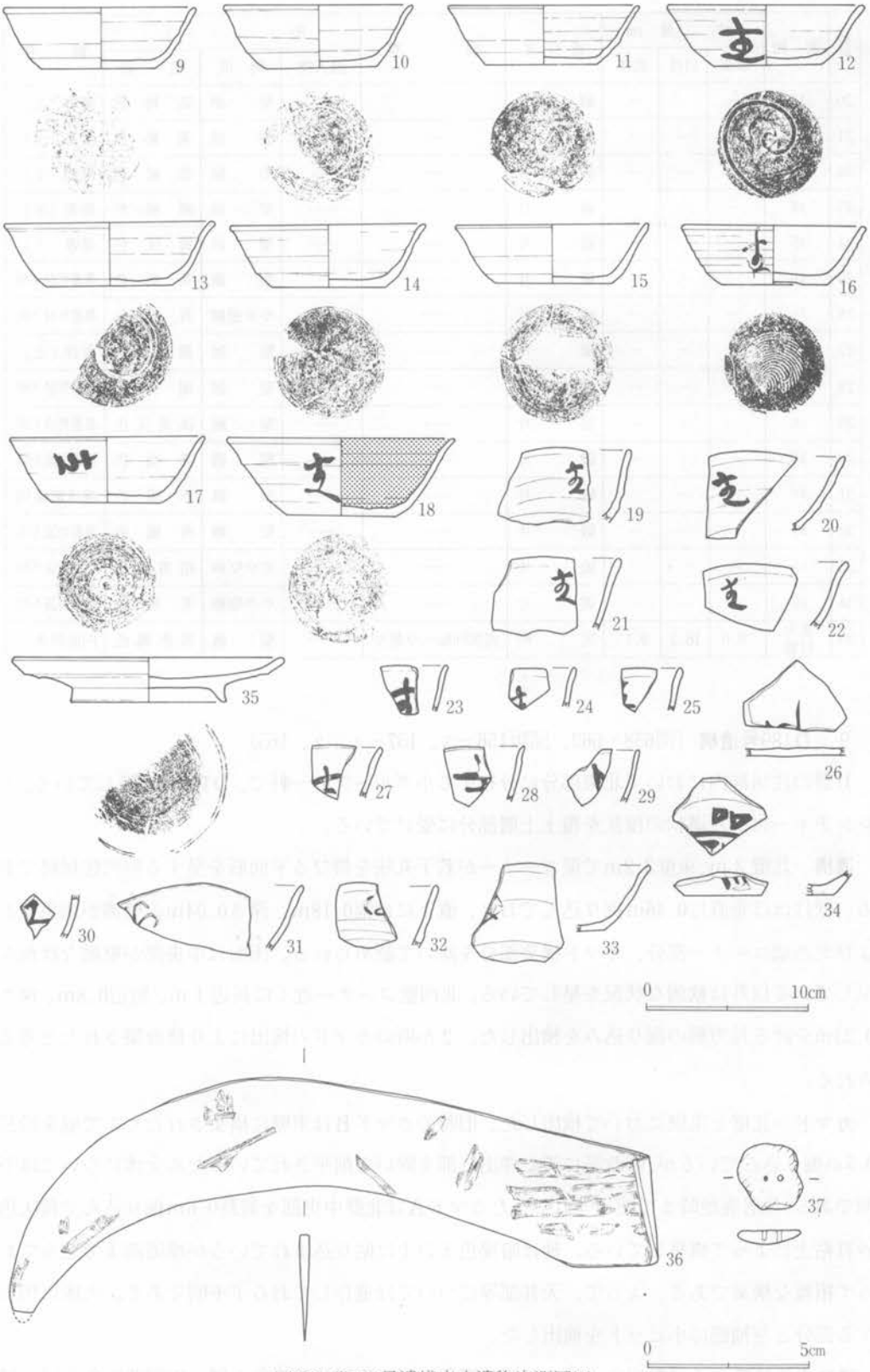


図657　D188号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
20	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	墨書「主」
21	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	墨書「主」
22	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
23	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	暗褐色	墨書「主」
24	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
25	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
26	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	黄灰色	墨書判読不明
27	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
28	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
29	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡黄灰色	墨書判読不明
30	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	赤褐色	墨書判読不明
31	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	赤褐色	焼成前線刻
32	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書判読不明
33	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	暗黄灰色	墨書判読不明
34	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	茶褐色	墨書判読不明
35	高台付盤	3.0	16.3	9.7	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡赤褐色	内面磨き

9．D189号遺構（図658～662、図版156—3、157—1、2、165）

II群の住居群内において北東部分に分布する小グループの一軒で、D190が近接している。トレンチャーによる溝状の攪乱を覆土上層部分に受けている。

遺構　北壁3m、東壁3.2mで壁コーナーが若干丸味を帯びる平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.46m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.04mの壁溝が南東壁および北西壁コーナー部分、カマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部が堅緻な状況を呈している以外は軟弱な状況を呈している。北西壁コーナー近くに長辺1m、短辺0.8m、深さ0.23mを計る長方形の掘り込みを検出した。2か所のカマドの検出により修改築されたと考えられる。

カマド　北壁と東壁において検出した。旧時のカマドBは東壁に構築されたもので壁を最長0.7m掘り込んでいるが、修改築に際し煙出し部を除いて削平されているため全体については不明である。住居廃絶時まで使用されていたカマドAは北壁中央部を最長0.6m掘り込んで黄灰色砂質粘土によって構築している。袖は暗褐色土の上に貼り込まれているが煙道部まで至っておらず粗雑な構築である。よって、天井部等については遺存しておらず不明である。火床に相当する部分と左袖部に小ピットを検出した。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層暗黄褐色土層、IV層黄灰色土層、V

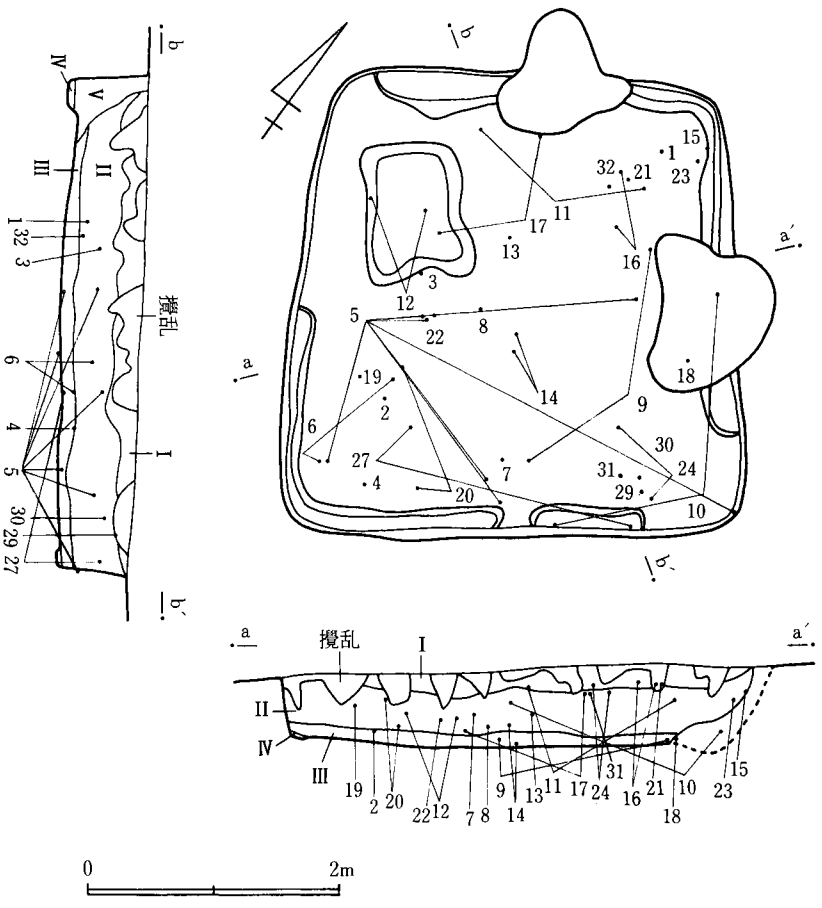


図658 D189号遺構実測図

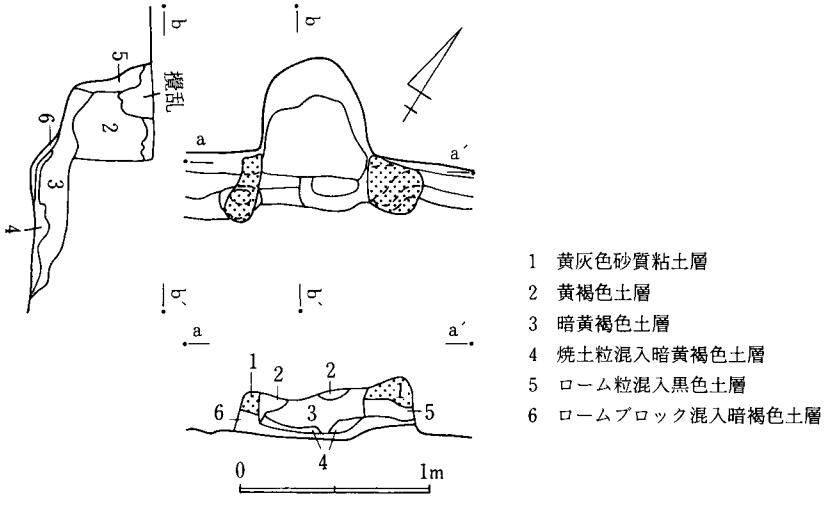
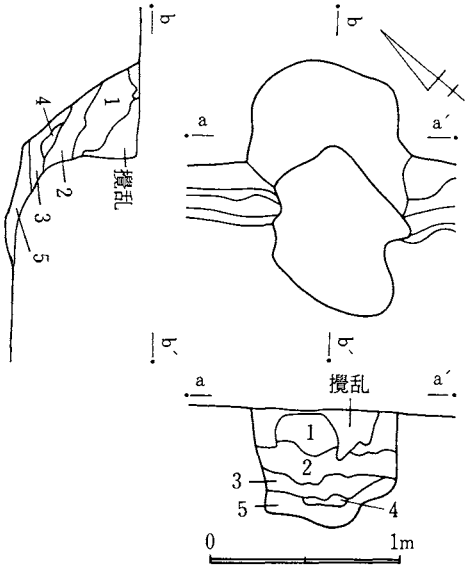


図659 D189号遺構Aカマド実測図

層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しており、遺物はIII層床面上、II層下部を中心に住居全体にわたり出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1～6で、1は逆「コ」の字状に外反する口縁部破片、2は口唇部に特徴のある口縁部破片である。3、4は広口甕の口縁部破片である。4は広口甕胴部で叩き目が認められる。坏形土器は口径12cm前後の7～20と、口径15cm前後の21～23がある。23の体部には人面と「村神郷丈部国依甘魚」の墨書がある。24～26は墨書がある体部破片である。鉄製品は27～30で、27は刀子、28は鎌の刃先、29は紡錘具、30は角棒状の製品である。石製品は31、32でいずれも滑石製の剣形品である。



1　ローム粒混入暗褐色土層
2　焼土粒炭化粒混入暗黄褐色土層
3　ローム粒焼土粒混入黒褐色土層
4　暗褐色土層
5　ローム粒炭化粒混入暗褐色土層

図660　D189号遺構Bカマド実測図

D0189出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	23.0	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	12.0	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	(内)黒灰色 (外)赤褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	灰白色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒灰色	
5	甕	—	—	—	1/3	叩きじめ	砂粒	堅緻	(内)明灰色 (外)黒灰色	
6	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	灰白色	
7	坏	3.9	11.7	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	淡茶褐色	墨書「生」
8	坏	4.2	12.0	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡茶褐色	
9	坏	4.2	12.3	6.3	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡赤褐色	糸切り
10	坏	4.3	12.2	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡赤褐色	糸切り
11	坏	3.8	12.2	7.5	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	暗褐色	糸切り
12	坏	4.0	12.5	8.9	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	
13	坏	3.6	13.1	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡赤褐色	糸切り
14	坏	3.8	12.7	6.9	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	

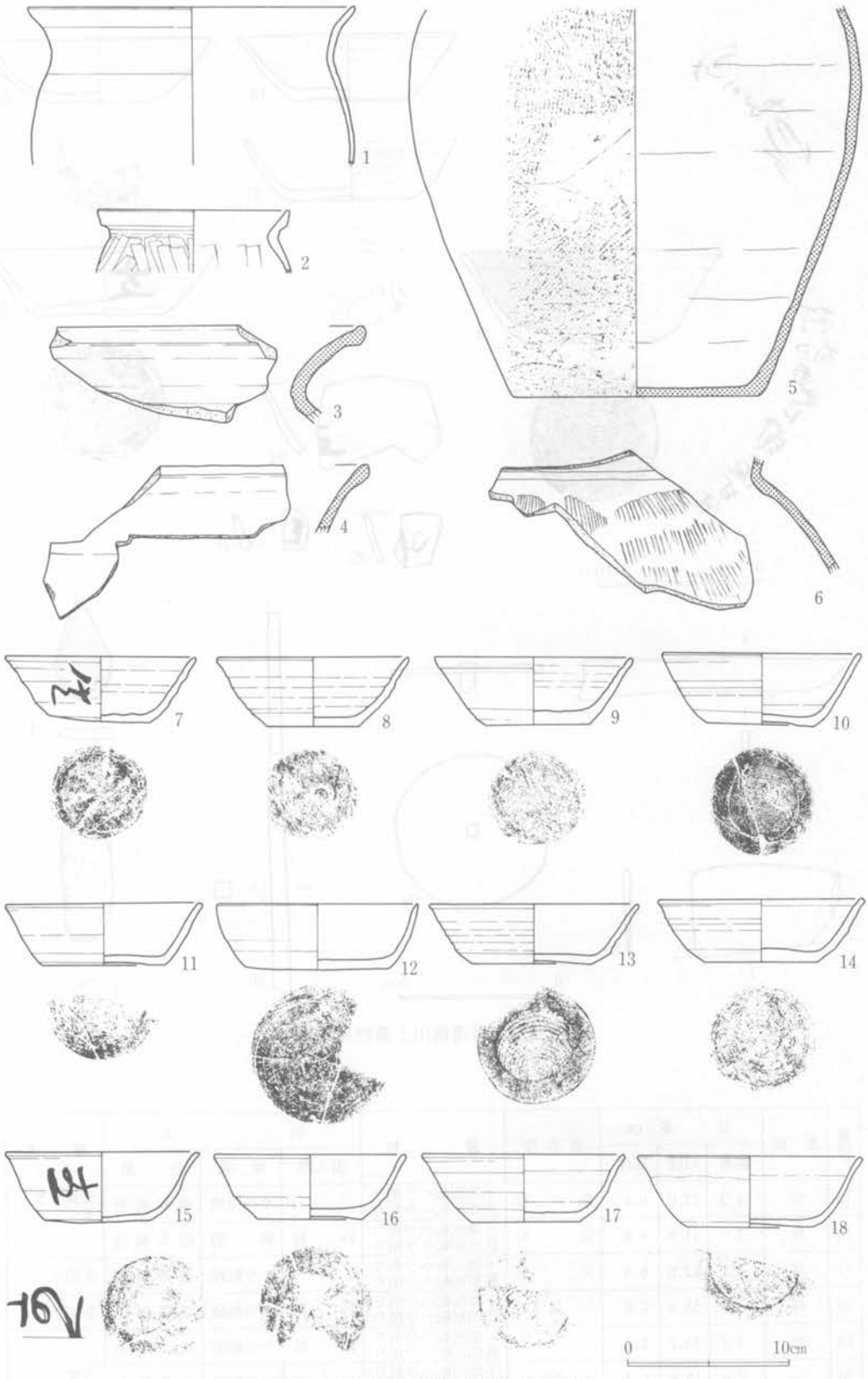


図661　D189号遺構出土遺物実測図(1)

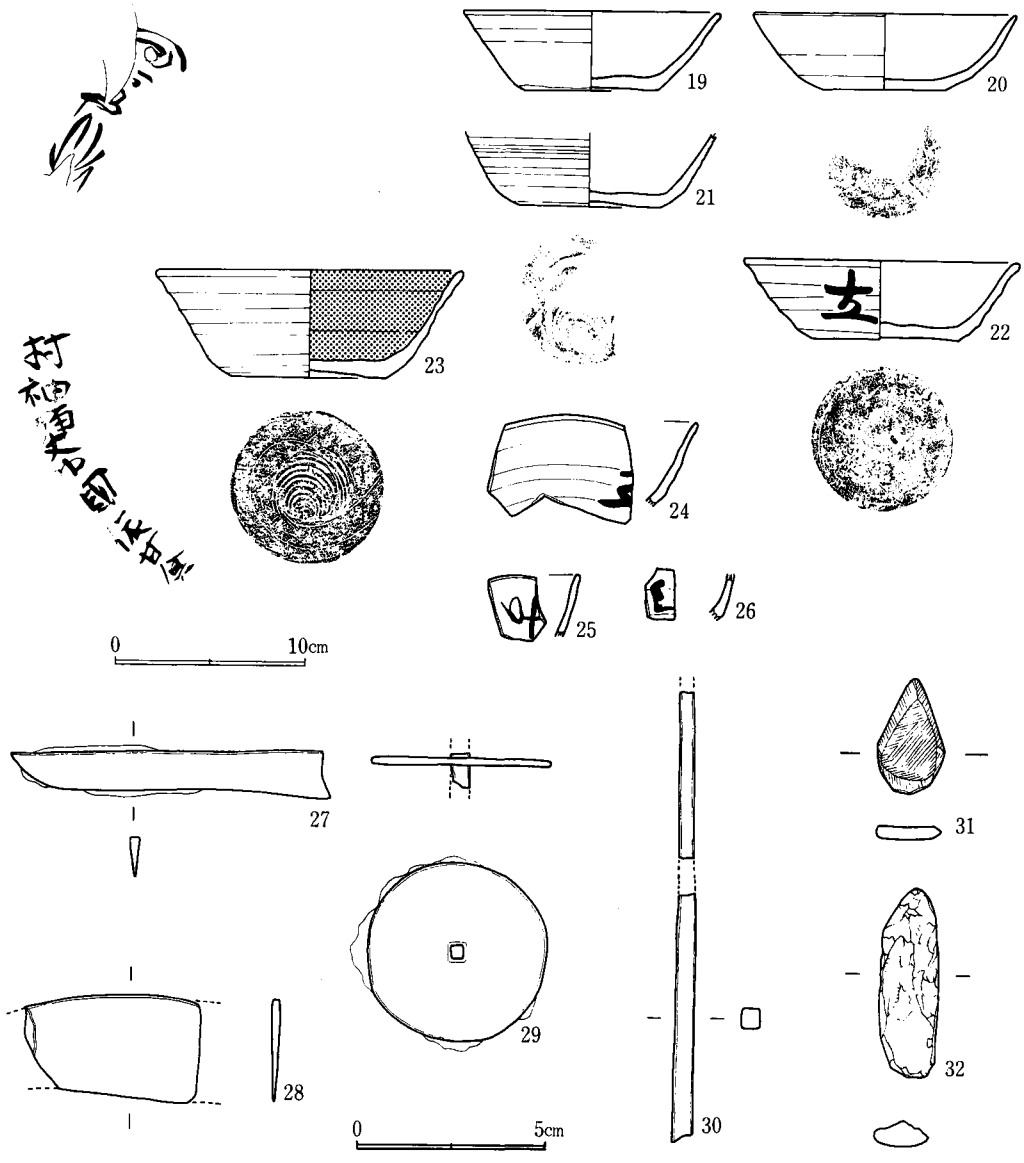


図662 D189号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
15	坏	4.3	12.0	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	小石	やや堅緻	淡赤褐色	墨書「主」 糸切り
16	坏	3.9	11.8	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗茶褐色	
17	坏	4.1	12.6	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡茶褐色	糸切り
18	坏	4.3	13.9	7.9	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡黒褐色	糸切り
19	坏	4.2	13.7	7.1	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡褐色	
20	坏	4.0	13.9	6.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡茶褐色	内黒 糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
21	坏	—	—	7.4	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	黒褐色	内面磨き 糸切り
22	坏	4.2	14.5	7.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	墨書「主」
23	坏	5.7	15.7	8.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黒褐色	墨書「人面」「村 神郷丈部国依 甘魚」、糸切り
24	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
25	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	朱書「国」
26	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明

10. D190号遺構（図663～667、図版157－3、158－1、2、162、163、165）

II群の住居群内において北東部分に分布する小グループの一軒で、D189、D188が近接して位置している。覆土上層は攪乱を受けている。H017に切断されている。

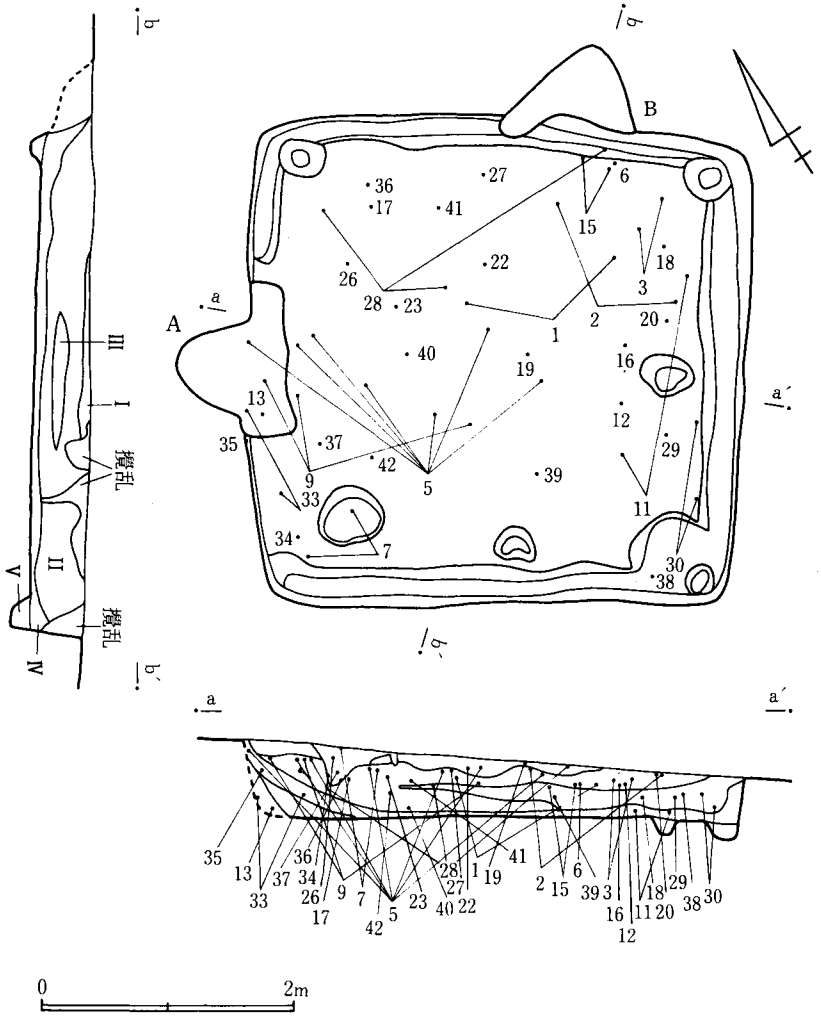


図663 D190号遺構実測図

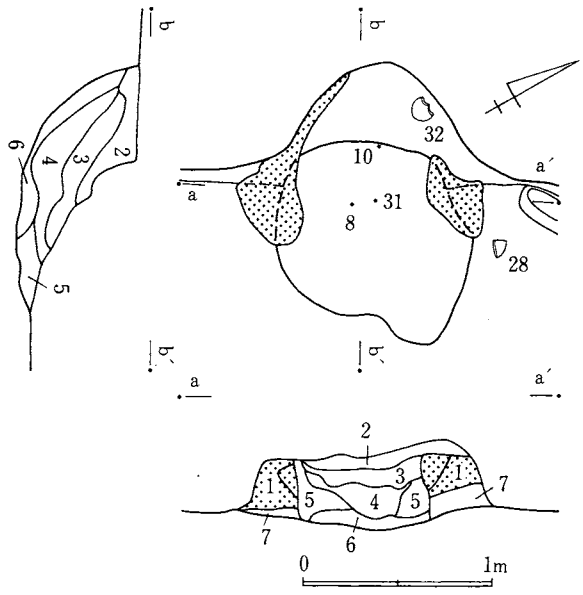
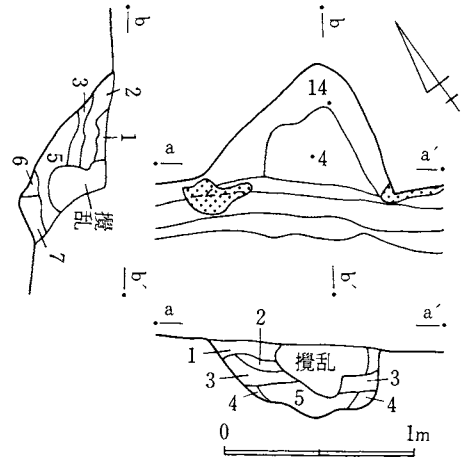


図664 D190号遺構Aカマド実測図

遺構 北壁3.9m、東壁3.5mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.43m掘り込んでおり、直下には幅0.31m、深さ0.12mを計る壁溝が西壁の一部を除いて認められる。床面は全体に堅緻であるが、四隅が若干軟弱な状況を呈している。柱穴と考えられるピットが壁のコーナー部分に認められ、内2か所は壁溝中に構築しているものである。規模は概ね長径0.35m、深さ平均0.2mである。その他、東壁中央部に接する部分と、南壁中央部に接する部分に径0.35m、深さ0.2mを計る小ピットを検出した。



1 ローム粒混入暗褐色土層
2 焼土粒混入暗褐色土層
3 焼土粒ソフトローム粒混入暗黒褐色土層
4 暗黒褐色土層
5 焼土層
6 黄褐色土層

図665 D190号遺構Bカマド実測図

カマド 北壁と東壁において検出した。旧時のカマドBは東壁に構築されたもので壁を0.7m掘り込んでいるが、修改築に際し煙出し部を除いて削平されているため全体については不明であるが、袖の一部が壁に遺存している。カマドAは北壁中央部を最長0.6m掘り込んで黄灰色砂質粘土によって構築している。遺存状況は良好でなく、左袖部が煙出しまで一体化して貼り込まれている。天井部は遺存していない。

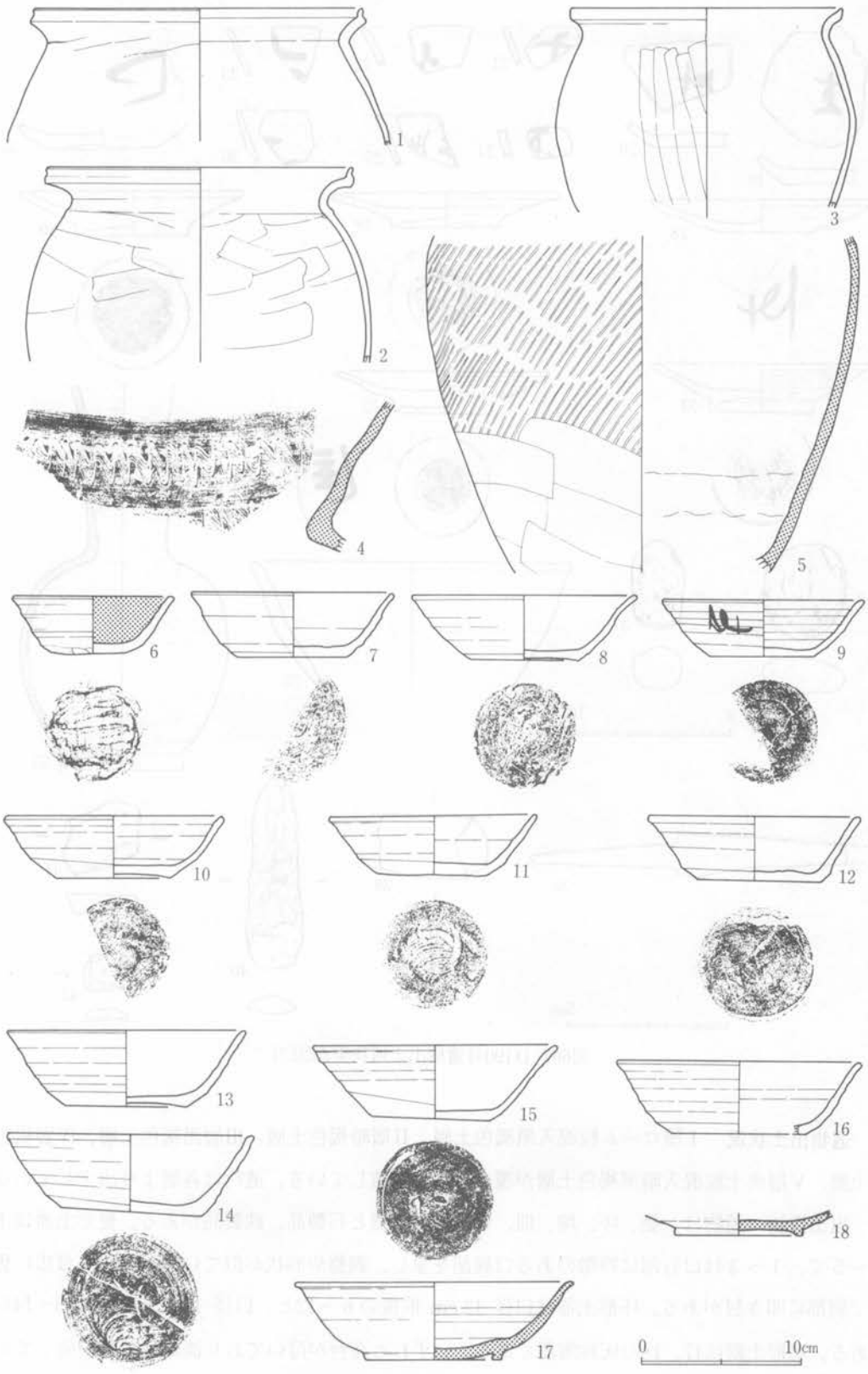


図666 D190号遺構出土遺物実測図(1)

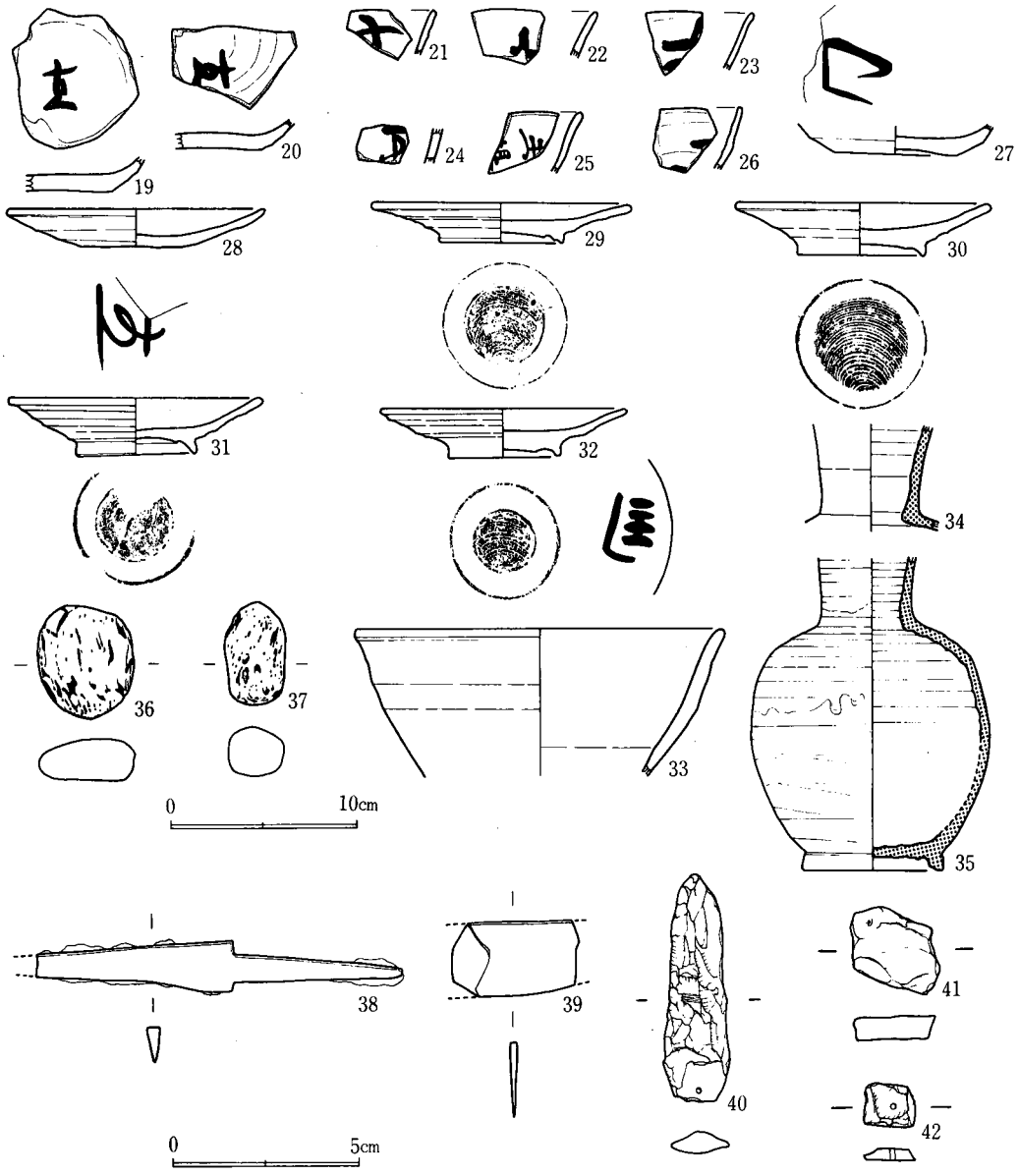


図667 D190号遺構出土遺物実測図(2)

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層焼土粒混入暗黒褐色土層が覆土として堆積している。遺物は各層より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、埦、皿、壺、鉢形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～5で、1～3は口唇部に特徴のある口縁部を呈し、調整や形状が似ている。4、5は広口甕で胴部に叩き目がある。坏形土器は口径 12 cm 前後の6～12と、口径 15 cm 前後の13～14がある。埦形土器は17、18の灰釉陶器である。いずれも高台が付いており淡緑色の釉が施してある。19～27は体部に墨書がある破片である。皿形土器は高台のない28と造り出し高台のある

D190出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(8.5)	20.5	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
2	甕	—	18.9	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	淡茶褐色	
3	甕	—	16.85	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
4	甕	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	灰色	
5	甕	—	—	—	胴部	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	
6	坏	3.5	9.8	4.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	黒褐色	体部にススが付着
7	坏	4.0	12.6	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒色	
8	坏	4.0	9.0	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	淡黒褐色	
9	坏	3.5	12.6	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	淡黒褐色	墨書「主」
10	坏	3.8	13.4	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	暗褐色	糸切り
11	坏	3.6	12.95	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	茶褐色	糸切り
12	坏	4.0	13.2	7.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡茶褐色	
13	坏	4.7	14.9	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	内面磨き
14	坏	4.8	15.2	8.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡茶褐色	糸切り
15	坏	4.5	15.4	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗褐色	内面磨き
16	坏	4.5	15.2	(8.3)	底部欠損	下端回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
17	高台付坏	4.8	17.4	8.6	完形	——	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
18	高台付坏	—	—	7.9	底部のみ	——	——	堅緻	灰色	灰釉陶器
19	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
20	坏	—	—	—	破片	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」
21	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	赤褐色	墨書判読不明
22	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	黄灰色	墨書判読不明
23	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	茶褐色	墨書「主」
24	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
25	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主堰」
26	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
27	坏	—	—	6.6	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗赤褐色	墨書判読不明
28	皿	2.0	13.7	5.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	黄褐色	墨書「主」
29	高台付皿	2.15	14.0	6.7	完形	——	——	堅緻	暗褐色	内面磨き 糸切り
30	高台付皿	3.0	13.5	6.9	完形	——	——	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
31	高台付皿	3.0	13.7	6.4	完形	底部回転ヘラ削り		やや軟弱	淡赤褐色	内面磨き
32	高台付皿	2.65	13.2	6.1	完形	——	——	堅緻	暗褐色	墨書「匡」 内面磨き糸切り
33	鉢	—	20.0	—	⅔	——	砂粒	やや軟弱	赤褐色	内面磨き
34	長頸瓶	—	—	—	頸部	——	砂粒	堅緻	灰色	
35	長頸瓶	—	—	7.7	⅔	下端ヘラ削り	——	堅緻	灰色	自然釉付着

29～32がある。鉢形土器は33で体部の破片である。壺形土器は34、35で、34は頸部破片、35は口縁部が欠損している高台付の壺である。石製品は36、37、40～42である。36、37は用途不明の軽石である。40～42は滑石製品で、40は剣形品の未成品、42は臼玉の未成品、41は剝片である。鉄製品は38～39で、38は刀子、39は用途不明であるが刃部が認められる。

11. H010号遺構（図668）

住居群の分布する中央部より若干南側に位置し、D055が近接している。遺構は緩斜面上に構築されている。また、一部住宅部分にかかるため規模については不明である。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行2間以上、梁間2間の北西から南東に桁を持つ建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.86m、深さ0.8m、最小のもので径0.5m、深さ0.5mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。柱穴底面のレベルは地山が緩傾斜を呈しているが、ほぼ均一に掘り込まれている。

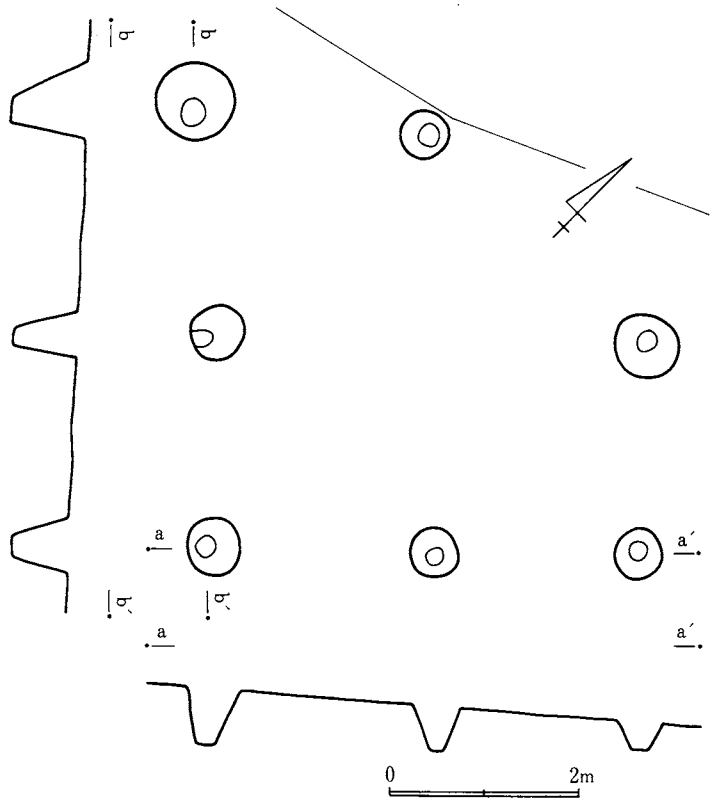


図668　H010号遺構実測図

12. H014号遺構（図669、670、図版158－3）

北東部分に分布する3軒の住居跡に近接して位置している。トレンチャーによる溝状の攪乱が見られるが、その影響は認められない。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ2間×2間の建物跡である。南東側柱には束柱と考えられる柱穴が付随している。柱掘形は最大のもので径0.8m、深さ0.53m、最小のもので径0.65m、深さ0.5mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内にはⅠ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層暗黄褐色土層、Ⅳ層褐色土層、

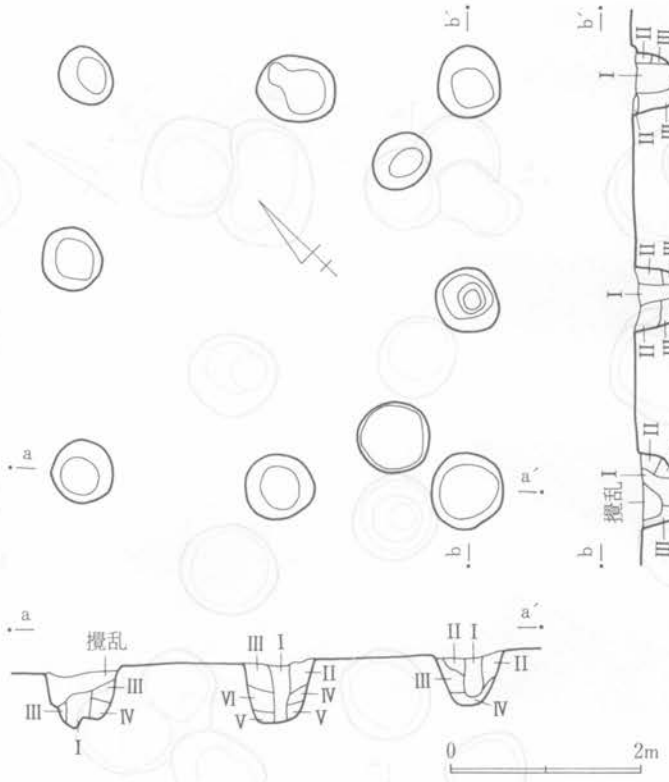


図669 H014号遺構実測図

V層ロームブロック混入黒褐色土層が堆積している。

出土遺物 本来の遺構構築面は現確認面より上部であると考えられる。よって、出土した遺物は本来の一括資料として判断することはできない。遺物は坏形土器底部破片である。底部はヘラ切り後回転ヘラ削調整が施された痕跡を見ることができる。1点のみの出土である。

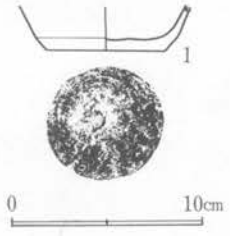


図670 H014号遺構出土遺物実測図

H014出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	—	6.2	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	淡茶褐色	

13. H015号遺構（図671、図版159—1）

II群の住居群の内、北東部分に分布する3軒の住居跡に近接して位置している。トレンチャーによる溝状の攪乱が見られるが、その影響は認められない。H016と重複関係を呈し、さらに

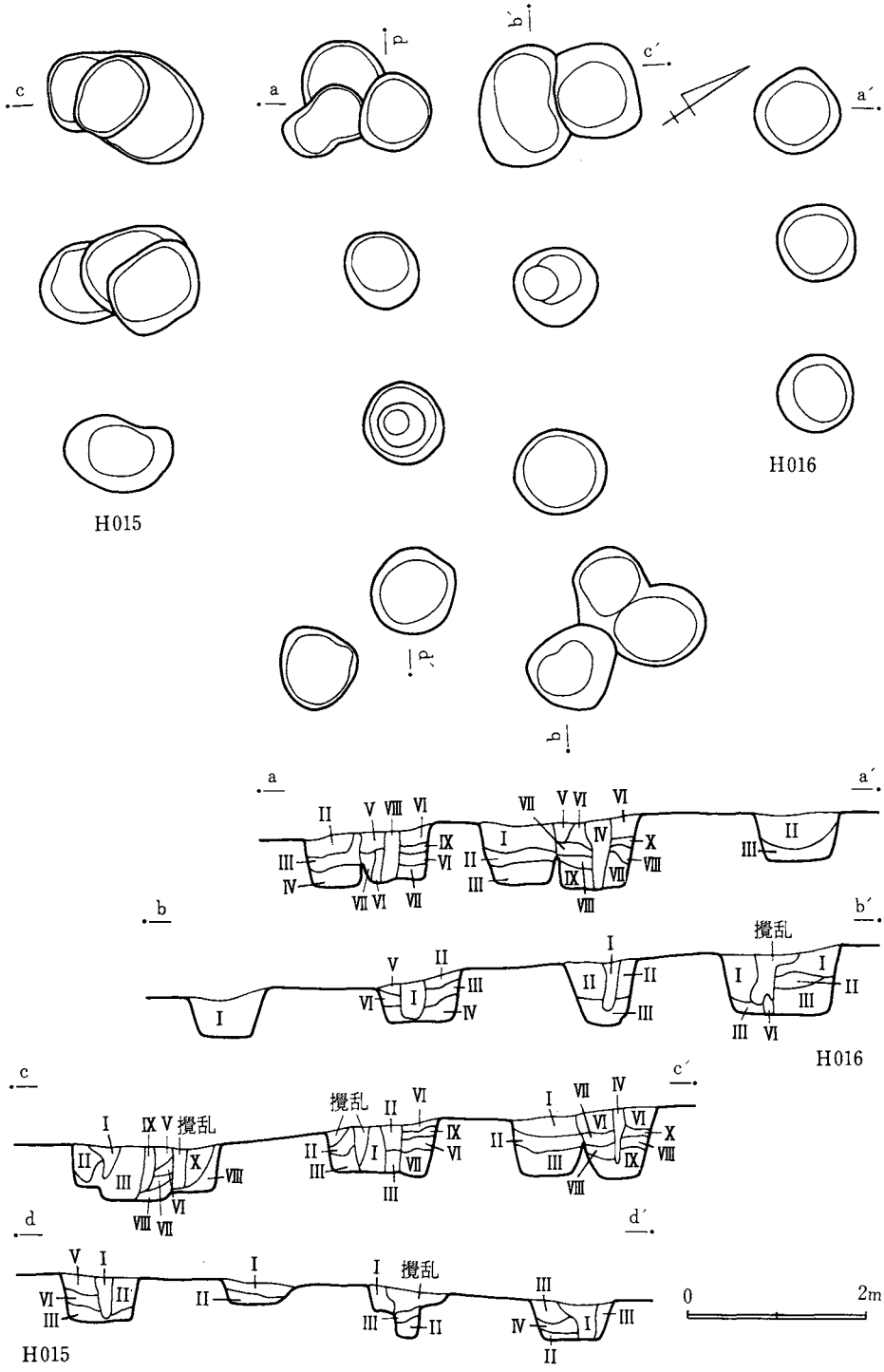


図671 H015・H016号遺構実測図

修改築が行われているため柱穴の配置が複雑である。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に持つ3間×2間の建物跡である。重複する柱穴の状況から少なくとも2回以上の修改築があったと考えられる。南隅には柱穴を検出することはできなかった。場合によってはH016と同一の建物になる可能性もある。柱掘形は最大のもので径0.95m、深さ0.85m、最小のもので径0.8m、深さ0.5mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内にはⅠ層暗褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅲ層ロームブロック混入暗黄褐色土層、Ⅳ層ロームブロック黒色土ブロック混入暗褐色土層、Ⅴ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅵ層黒褐色土層、Ⅶ層ローム粒混入暗黄褐色土層、Ⅷ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅸ層暗黄褐色土層、Ⅹ層ロームブロック層が堆積している。

14. H016号遺構（図671、図版159—1）

H015と重複関係を呈している遺構である。場合によってはH015と同一の建物になる可能性もある。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北東から南西に持つ2間×2間の建物跡である。東隅には柱穴を検出することができなかった。柱掘形は最大のもので径0.9m、深さ0.85m、最小のもので径0.8m、深さ0.5mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内の堆積土壌はH015と同じである。

15. H017号遺構（図672、図版159—2）

Ⅱ群の住居群の内、北東部分に分布する3軒の住居跡の内D190を切断して構築している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を北西から南東に

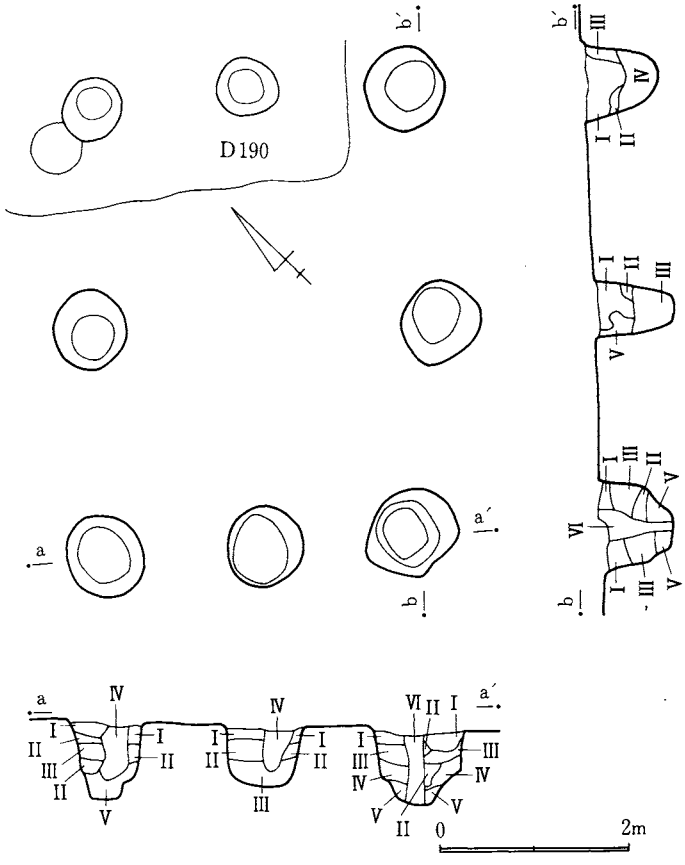


図672　H017号遺構実測図

持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので0.95m、深さ0.8m、最小のもので径0.8m、深さ0.78mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内にはⅠ層茶褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層ロームブロック混入暗褐色土層、Ⅴ層褐色土層、Ⅵ層ロームブロック混入暗褐色土層が堆積している。

16. P017号遺構（図673、674、図版159－3）

Ⅱ群の住居群の内、北東部分に分布する西側に接して位置している。南北に連なる溝と重複を呈している。

遺構　径3.83m、深さ2.89mを計る円錐形状の遺構である。掘り込みは傾斜を呈して底面に達している。底面は径0.45mである。雨水井戸としての性格を具備するものと考えられる。遺構内の充満土はⅠ層ロームブロック混入暗褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅳ層暗黄褐色土層、Ⅴ層黄褐色土層、Ⅵ層ローム粒混入黄褐色土層。Ⅶ

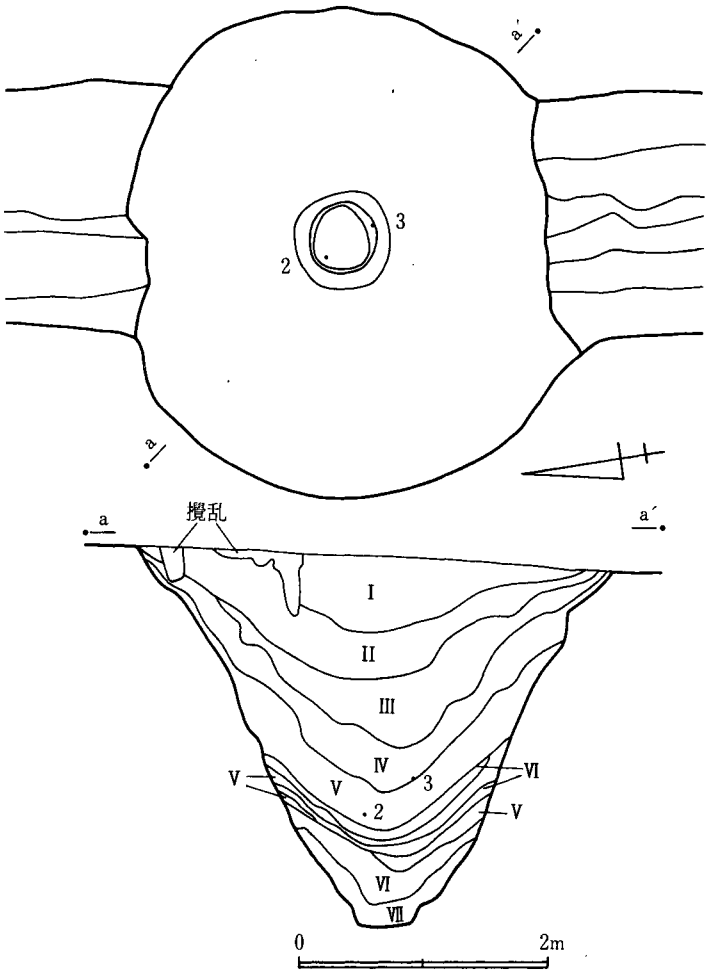


図673　P017号遺構実測図

層ロームブロック混入黒褐色土層が堆積している。V層およびIV層より遺物が出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器、それに鉄製品がある。甕形土器は1で「く」字状に外反する口縁部の破片である。坏形土器は2、3で口径が12cm前後の小形のもので、この体部には墨書がある。鉄製品は4で用途不明であるが両側一部に折り返しを有している。

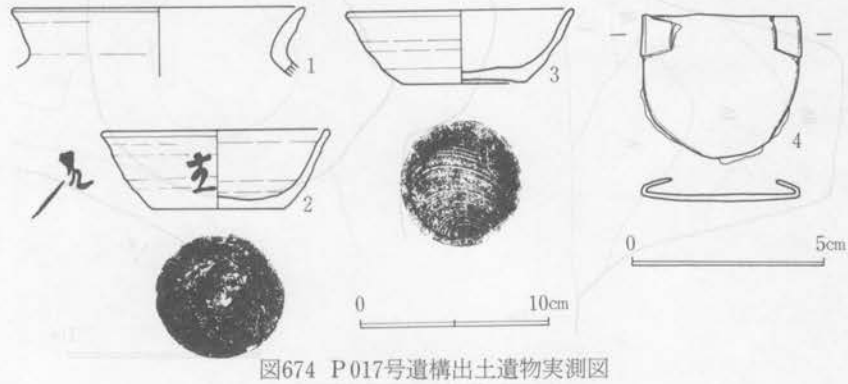


図674　P017号遺構出土遺物実測図

P017出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.35	—	口縁部のみ	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	
2	坏	4.0	11.9	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡茶褐色	墨書「主」
3	坏	3.9	12.1	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡茶褐色	糸切り

17. P018号遺構（図675、図版160－1）

II群の遺構群の中において最も北に位置している。P017と重複する溝が東に方向を変えるその角に位置している。

遺構　溝と重複するため旧時の状況は不分明であるが、長径1.7m、短径0.85m、深さ1.35mを計る楕円形の平面形を呈する土壙である。掘り込みは緩傾斜を呈し底面に達している。底面は長径0.8m、短径0.75mを計り、平坦である。土壙内にはV層ローム粒混入暗褐色土層、VI層黒褐色土層、VII層ローム粒混入褐色土層が堆積しており、上部には溝の覆土、I層ローム粒混入暗黄褐色土層、II層ロームブロック混入黄褐色土層、III層暗褐色土層、IV層ロームブロック層が堆積しているのを見ることができる。遺物の出土は皆無である。

18. P019号遺構（図676、図版160－2）

II群の遺構群の中において最も北に位置している。東西に連なる溝と重複関係を呈している。

遺構　溝と重複するため旧時の状況は不明であるが、長辺4.9m、短辺3.5mを計る方形の平面形を呈する土壙である。土壙は0.3mの落差を生じて2段に掘り込まれており、いずれも底面

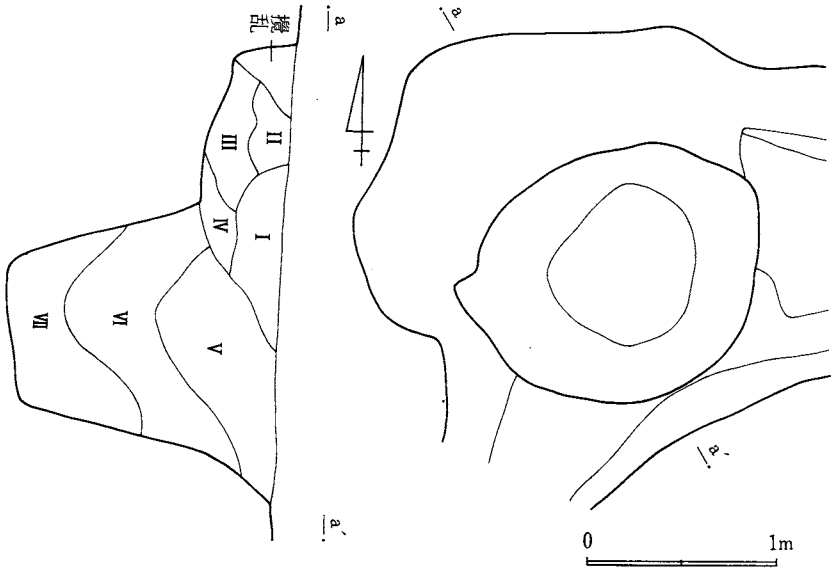


図675 P018号遺構実測図

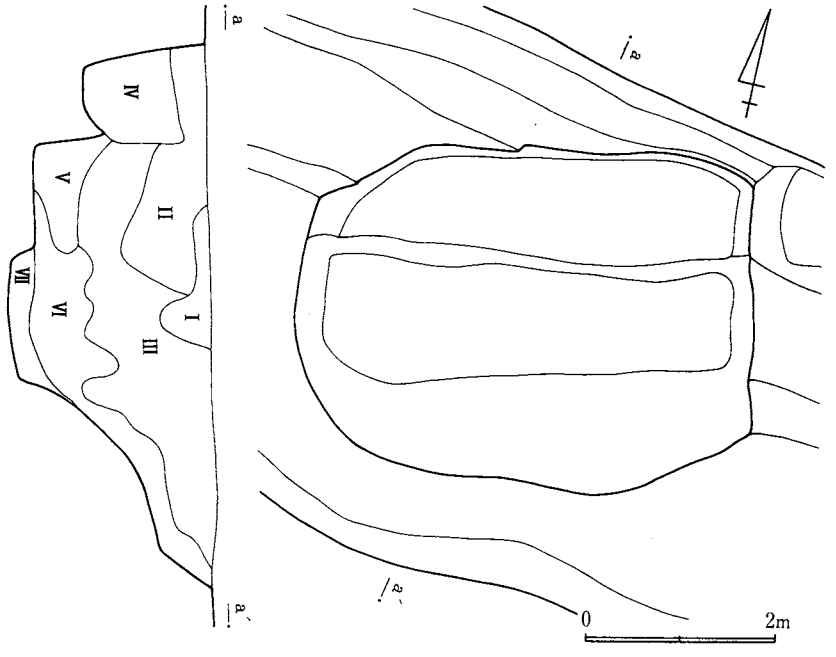


図676 P019号遺構実測図

は平坦である。土壙内にはV層黄褐色土層、VI層ロームブロック混入褐色土層、VII層ロームブロック混入茶褐色土層が堆積しており、その上部に溝の覆土、I層ロームブロック混入暗褐色土層、II層ロームブロック混入暗黄褐色土層、III層ローム粒混入褐色土層、IV層ロームブロック混入黄褐色土層が堆積している。遺物の出土は皆無である。

19. M021号遺跡（図677、図版160—3）

II群の遺構群において北側に位置する3軒の住居跡に近接して位置している。

遺構　北辺5.5m、東辺5.87mの方形周溝状遺構である。溝は2重に廻るようであるが内側のものは完周していない。外周溝の幅員は0.6m、深さ0.19mを平均に廻っており、東側の一部で段差を有しているものの、ほぼ底面は平坦である。内周溝は完周はしていないが幅員0.29m、深さ0.15mを計る溝である。溝によって区画される内側においては何ら落ち込みは検出できなかった。遺物の出土は皆無である。

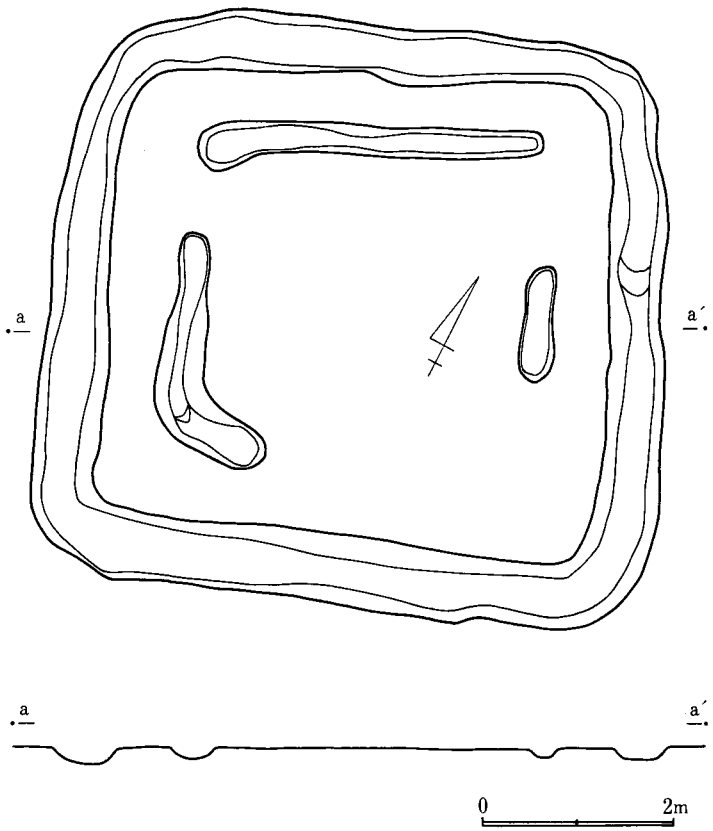


図677 M021号遺構実測図

第4節　第III群の遺構と遺物

歴史時代の第III群は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、ピット2基で構成される群である。U・V—3・4・5の地域において検出した。約4500m²の範囲に纏って遺構群が所在しており、他群との間には遺構がまったく認められない空間部分があり、完全に独立した一群として捉えることが可能である。III群は他群と占地する状況を比較しても明らかなようにほぼ台地中央部に占地し、合計16遺構をもって収束している。集落構造を考えるうえで貴重な資料となり得る

であろう。

住居跡は2軒から3軒を小グループとして南北に長く分布している。カマドの指向方位は北方をとる住居が多く、規模も大差を生じていないのが特徴となろう。

掘立柱建物跡はD024の南側にH003、D023の北側にH002、D160の南側にH013の3棟が住居跡に近接して位置している。棟の指向方位は統一的でないが住居跡との位置的な関係もⅠ群で見られたような偏在する傾向は認められない（図678、図版128－2）。

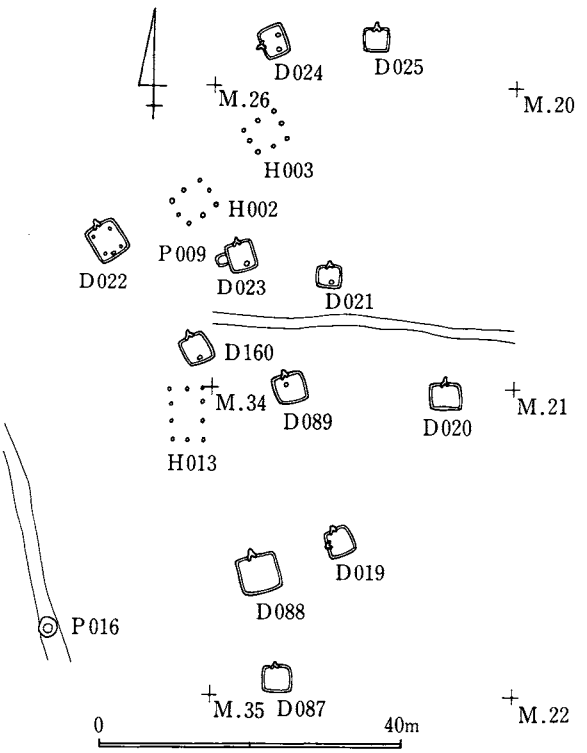


図678 歴史時代第Ⅲ群遺構分布状況図

1．D019号遺構（図679～683、図版166、167－1、174、176）

Ⅲ群の住居群内において、南側に位置し、D087、D088が近接している。

遺構　北壁2.9m、東壁3.3mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.36m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面はやや堅緻な状況を呈し西壁に向って若干上っている。南東壁コーナー近くに水簸した白色粘土塊を検出した。柱穴は検出できなかった。写真撮影終了後床下の調査を実施したところ、住居中央部から長径1.3m、短径1.2m、深さ0.25mを計るピットを検出した。底面には焼土塊、炭化物、それに土器が出土しており、Ⅰ群で見られた土器の焼成窯と同様の遺構ではないかと考えられる。また、北壁近くに不整な掘り込みを併せて検出したが、ここからは遺物の出土は皆無であった。

カマド　北壁と西壁の2か所に検出した。旧時のカマドBは北壁中央部を最長1.1m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。修改築に伴って廃棄されたカマドであるが遺存状況は良好である。粘土の貼り込みは袖から煙道部まで一体化しており火袋部に相当する部分は焼土化している。天井部の遺存も良好で多少落下するものの、煙出し部まで認められる。住居廃

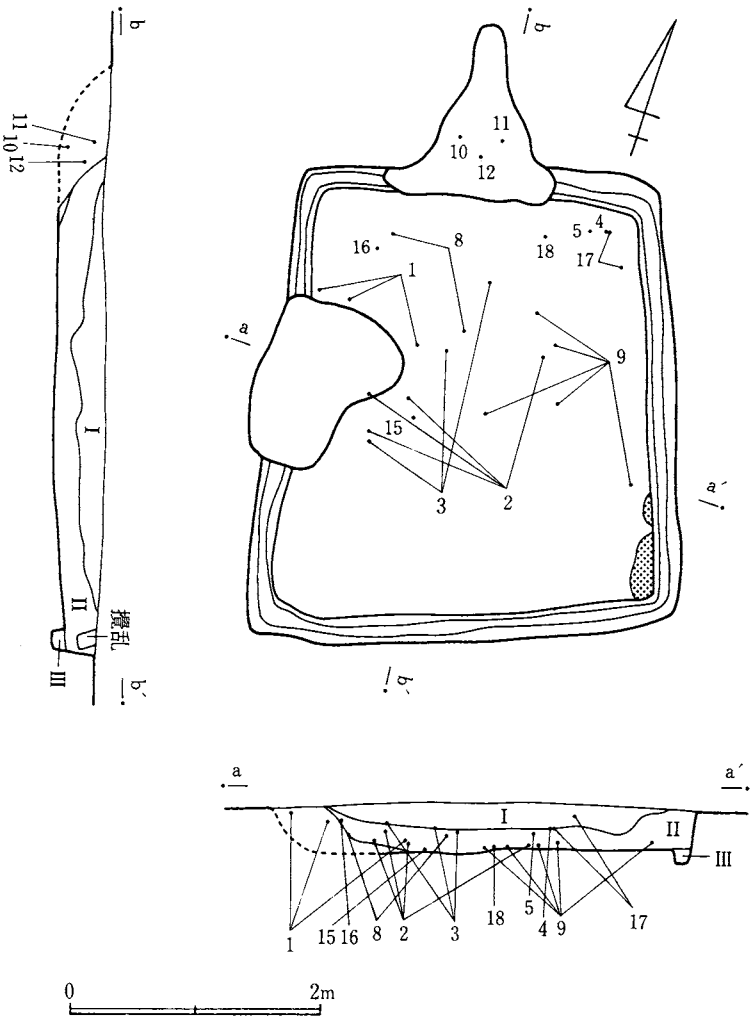


図679 D019号遺構実測図

絶時まで使用されていたカマドAは西壁中央部を約0.2m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部も焚口部より煙出しまで良好な遺存状況を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層茶褐色土層、III層暗褐色土層が堆積しており、II層床面を中心に住居中央部に集中して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿、盤形土器と石製品がある。甕形土器は1～5で、1、2、4は口唇部に特徴がある口縁部破片、3は小形の甕、5は広口甕の口縁部破片である。坏形土器は口径 12 cm 前後の6～8と、口径 15 cm の9～11がある。10、11は内面を黒色処理している。皿形土器は12、16、17で造り付けの高台が付いている。盤形土器は13～15で高台が付いている。石製品は緑泥片岩製の石斧状のもので、先端部分に摩滅痕が認められる。

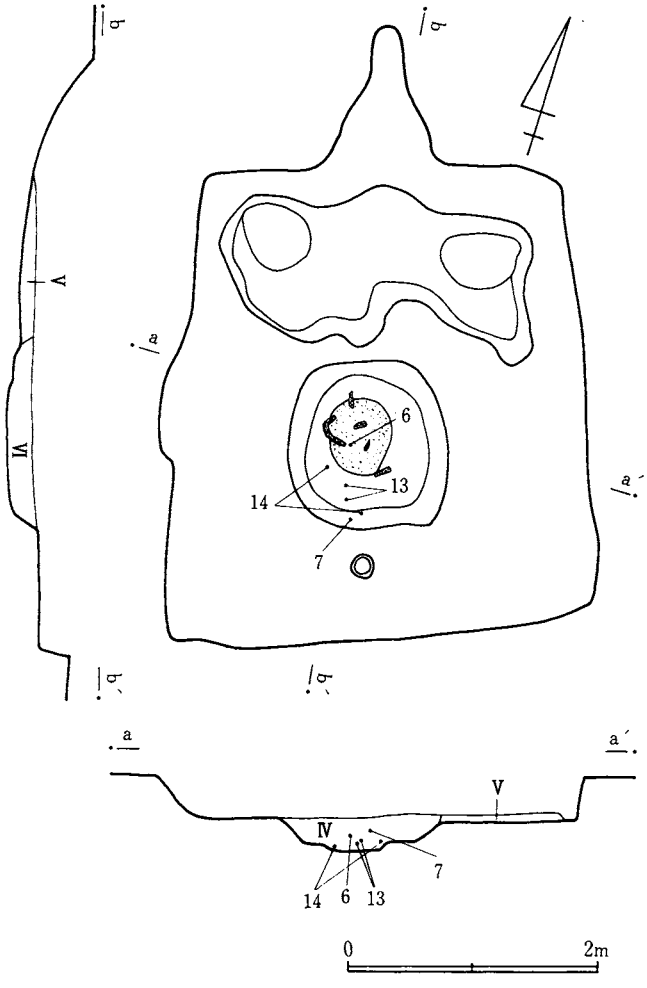
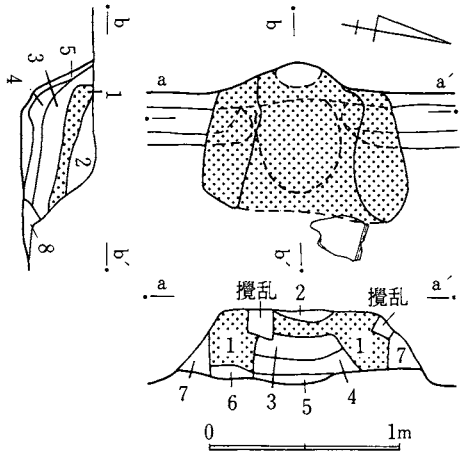
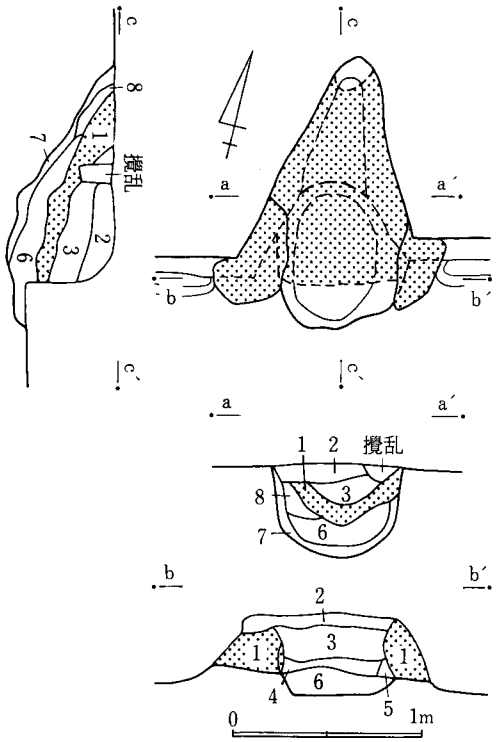


図680 D019号遺構床下状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒褐色土層
3 Ⅰ層混入褐色土層
4 焼土層
5 暗褐色土層
6 ローム粒混入暗褐色土層
7 ローム粒混入褐色土層
8 黄褐色土層

図681 D019号遺構Aカマド実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　1層混入暗褐色土層
4　焼土粒混入黄灰色砂質粘土層
5　黒褐色土層
6　焼土ロームブロック混入褐色土層
7　黄褐色土層
8　ローム粒混入黒褐色土層

図682　D019号遺構Bカマド実測図

D019出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	31.0	19.6	—	底部欠損	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	21.4	—	底部欠損	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	黄灰色	
3	甕	—	11.2	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	橙色	
5	広口甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	坏	3.8	12.0	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	橙色	
7	坏	3.5	12.5	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	
8	坏	4.0	13.0	6.5	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
9	坏	5.3	14.8	7.6	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	内面磨き 糸切り
10	坏	4.5	15.1	7.9	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	内黒
11	坏	5.2	17.0	8.3	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内黒 糸切り
12	高台付皿	2.0	13.8	1.9	完形	——	——	堅緻	橙色	内面磨き

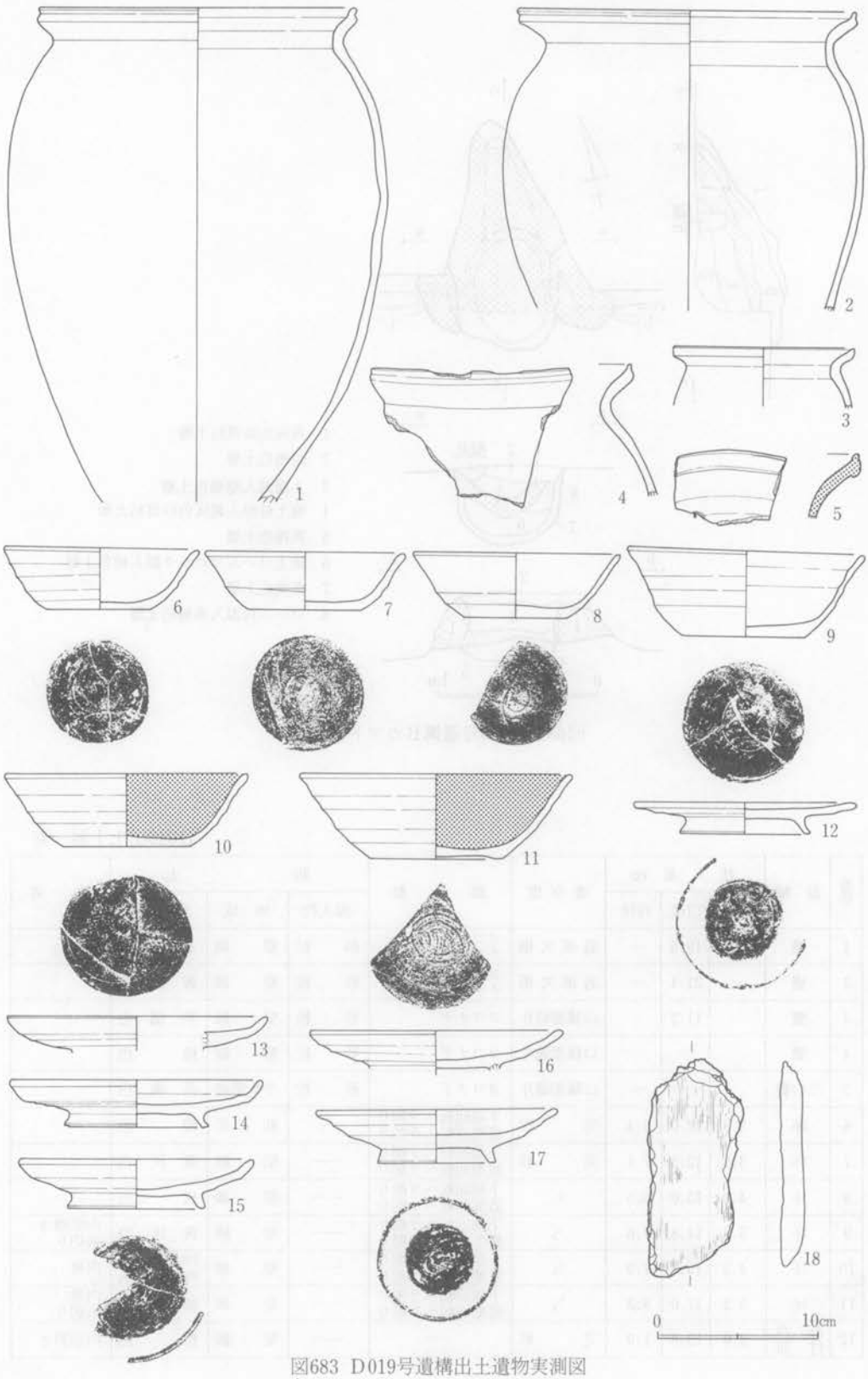


図683 D019号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
13	高台付盤	—	16.0	—	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
14	高台付盤	2.8	15.7	8.9	1/2	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き
15	高台付盤	3.0	14.5	8.5	完形	——	——	堅緻	黄褐色	内面磨き
16	高台付皿	2.4	15.8	8.2	3/4	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	内面磨き
17	高台付皿	3.2	15.1	7.4	1/3	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	内面磨き

2．D020号遺構（図684～687、図版167－2、174、176、177）

III群の住居群内において、東側に位置し、D089が近接している。遺構のほぼ中央に芋穴の攪

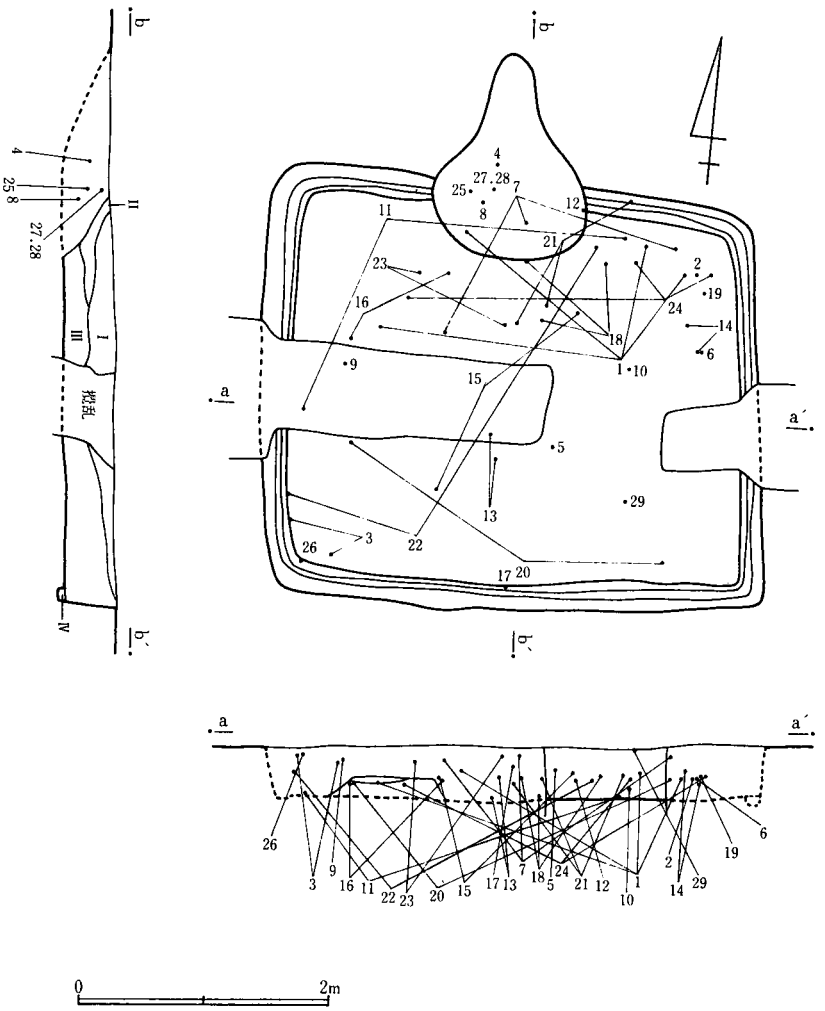


図684 D020号遺構実測図

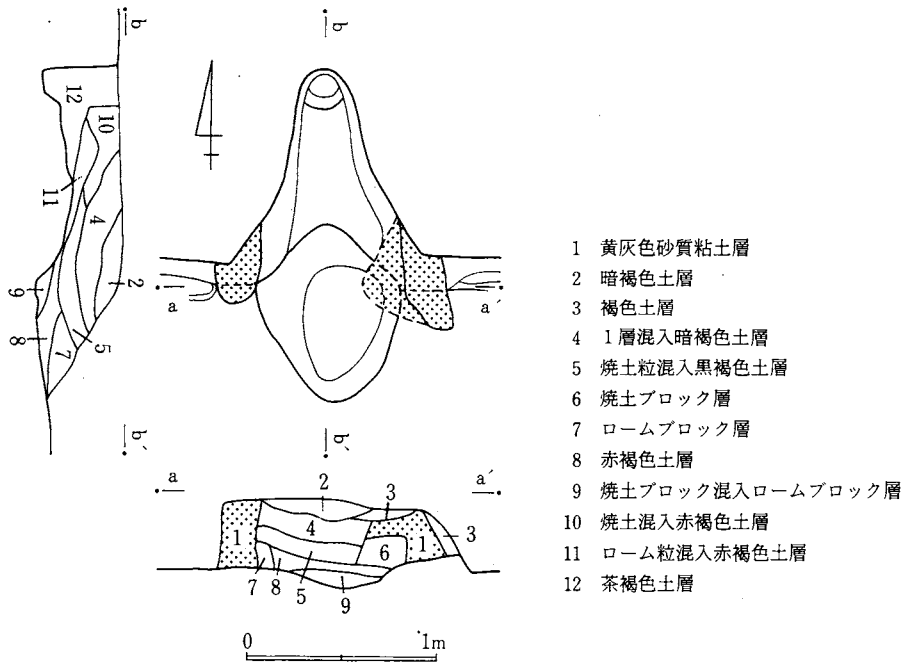


図685 D020号遺構カマド実測図

乱を受けている。これは覆土全体の約20%に相当するものである。したがって、出土する遺物については本来の一括資料として判断することはできない。

遺構 北壁3.7m、東壁3mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.4m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.07mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は攪乱を受けているものの全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を三角形に最長1.15m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部に認められるだけであり、しかも小規模である。掘り込みの状況はI群D090に酷似する。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層焼土混入黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層褐色土層が堆積しており、遺物はII層を中心にカマド前方部分に集中して出土している。

出土遺物 遺物は、甕、甑、壺、坏、鉢形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1、2、4は口唇部に特徴のある口縁である。3は短かく外反す口縁部破片、5、6は叩き目があり、6は口縁部が欠損した部分を調整し再利用している。甑形土器は7～9で、7は胴部に叩き目があり、小把手がある。8、9は底部の破片である。壺形土器は10で高台付の底部破片である。坏形土器は口径 12cm 前後の11～17と、口径 15cm 前後の18～22がある。鉢形土器は23で体部破片である。皿形土器は24、25で、25は造り出し高台がある。石製品は蛇紋

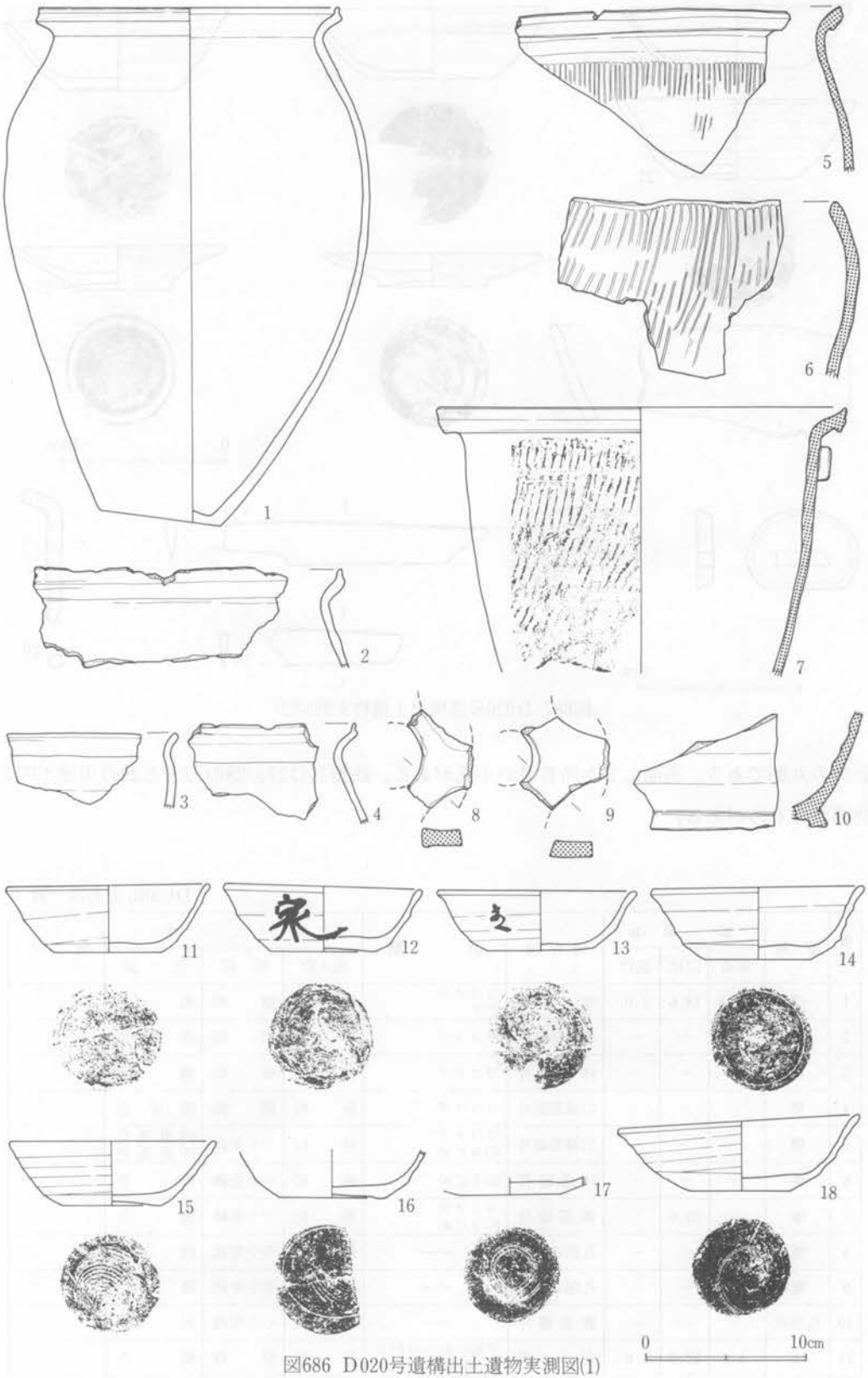


図686 D020号遺構出土遺物実測図(1)

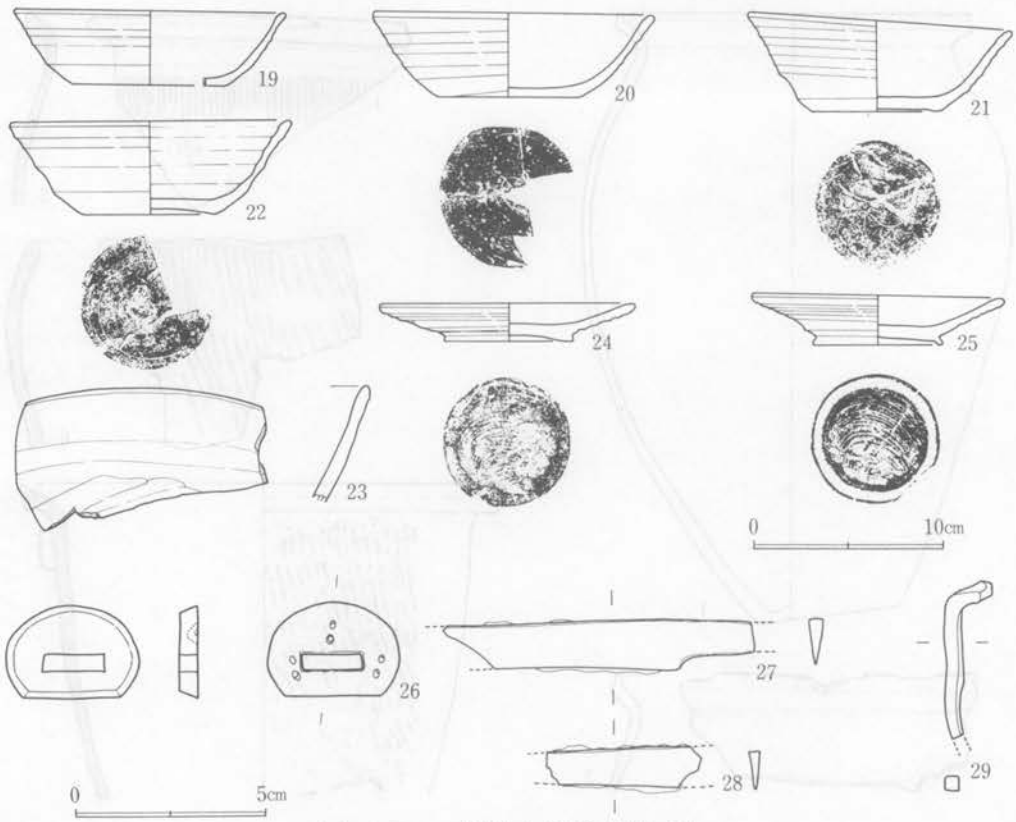


図687 D020号遺構出土遺物実測図(2)

岩製の丸鞆である。裏面に3か所着装の小孔がある。鉄製品は27、28の刀子と29の用途不明の角棒状のものがある。

D020出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	31.8	18.6	7.0	完形	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	—	—	体部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黄灰色	
5	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	(内)黒褐色 (外)赤褐色	
6	甕	—	—	—	体部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	橙色	
7	甑	—	25.6	—	体部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	橙色	
8	甑	—	—	—	孔部の破片	——	砂粒	やや堅緻	橙色	
9	甑	—	—	—	孔部の破片	——	砂粒	やや堅緻	橙色	
10	長頸壺	—	—	—	底部破片	——	——	やや堅緻	灰色	
11	坏	4.0	12.7	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
12	坏	4.0	12.4	6.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	黄灰色	墨書「家」 糸切り
13	坏	3.6	12.5	3.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	墨書「主」
14	坏	4.4	13.2	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内面磨き
15	坏	3.9	12.7	6.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	糸切り
16	坏	—	—	6.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	糸切り
17	坏	—	—	—	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	内面磨き
18	坏	4.2	15.0	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	内面磨き
19	坏	3.9	14.3	(7.9)	⅓	——	——	堅緻	茶褐色	
20	坏	4.4	14.9	7.4	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内面磨き
21	坏	4.8	14.0	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
22	坏	5.0	14.8	7.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内面磨き 糸切り
23	鉢	—	—	—	体部破片	下端回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
24	高台付皿	2.0	13.6	6.8	完形	——	——	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
25	高台付皿	2.6	13.3	6.8	完形	——	——	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り

3．D021号遺構（図688～691、図版167－3、168－1、174、176、177）

III群の住居群内においてほぼ中央部に位置しD023、D160が近接している。

遺構　北壁3m、東壁2.5mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.44m掘り込んでいる。床面は四隅が若干軟弱なものの中央部は堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝等は検出できなかった。写真撮影終了後床下の調査を実施したところ、北壁部分を除いて幅0.15m、深さ0.08mを計る壁溝を検出した。壁溝は北壁側に位置する径0.65m、深さ0.1mを計るピットに接続している。また南壁中央部に近く径0.35m、深さ0.18mの小ピットを検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.45m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土は袖部から火袋に相当する部分まで貼り込まれている。天井部は不明である。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層焼土粒炭化粒混入褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物は各層より住居全体にわたり出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、坏、皿、甑形土器を石製品、鉄製品、土製品がある。甕形土器は1～6で、1、2は小形の甕、3～5は胴部に叩き目があり口縁が短かい。6は広口甕の口縁部破片である。壺形土器は7の胴部破片と、肩部に付く把手14がある。坏形土器は口径12cm前後の8と、口径14cm前後の9、10がある。皿形土器は11、12で、12は造り出しの高台が付いている。甑形土器は形状が窺えるものはないが、13の底部破片がある。石製品は凝灰岩製の砥石15で、孔があいている部分が研ぎべりをしている。鉄製品は16、17の刀子、18の手斧があ

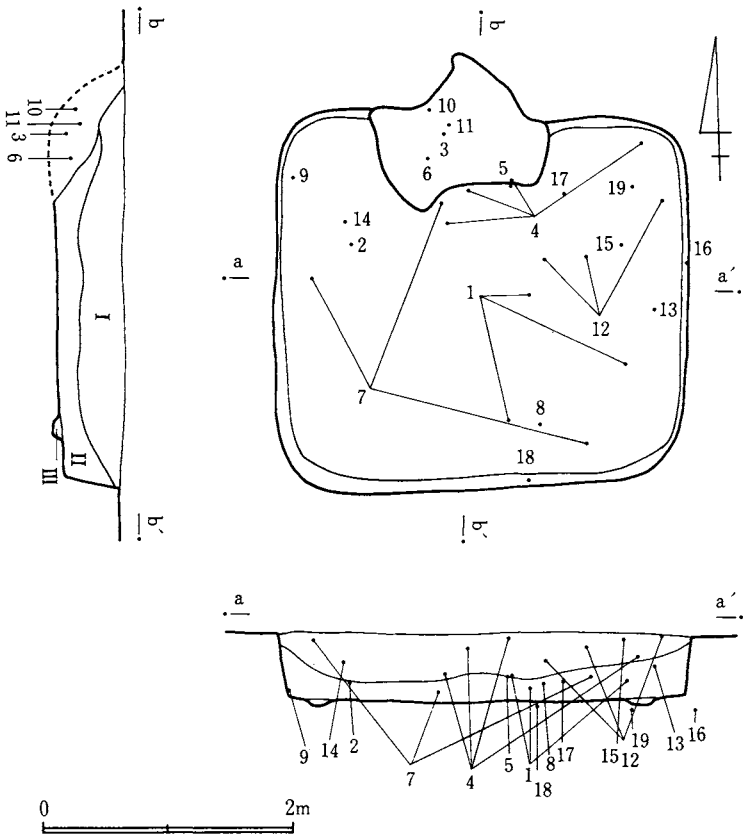


図688 D021号遺構実測図

り、18は錆が湧出するが形状は整っている。土製品は19の紡錘具で、径 5.8 cm、厚さ 2.1 cm、重さ65.7 g を計る。使用頻度が高かったためか著しい摩滅が軸孔を中心に認められる。色調は橙色を呈す。

D021出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	10.2	12.2	6.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	明赤褐色	
4	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	明赤褐色	
5	甕	16.5	(27.7)	—	1/3	叩きじめ	砂粒	堅緻	赤褐色	
6	広口甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	橙色	
7	壺	—	—	—	胴部破片	下端回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	乳灰色	
8	坏	3.4	12.5	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄褐色	体部にススが付着 内面磨き
9	杯	3.8	12.3	5.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	茶褐色	

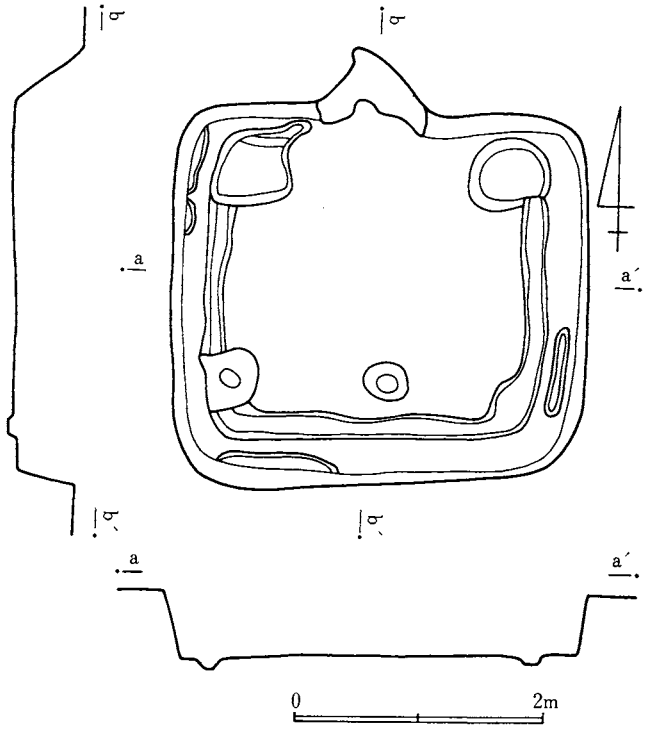


図689 D021号遺構床下状況図

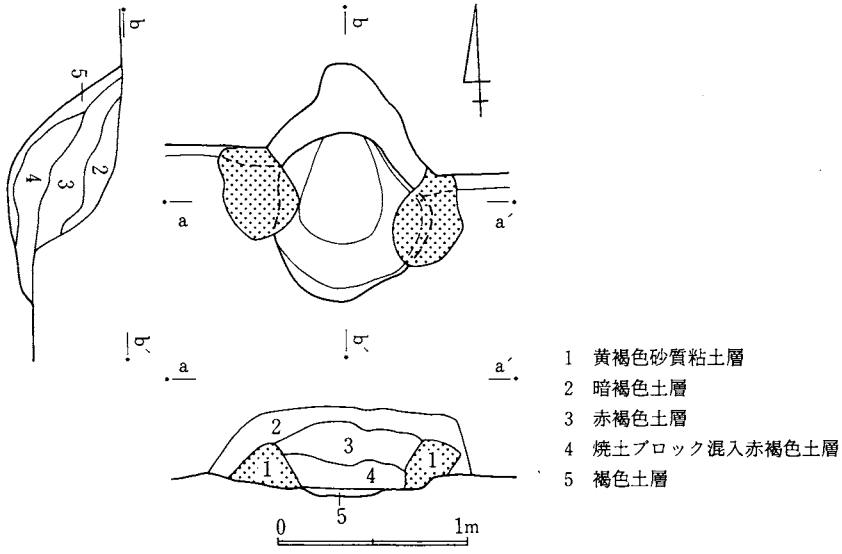


図690 D021号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
10	坏	4.4	14.5	6.4	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	橙色	内面磨き

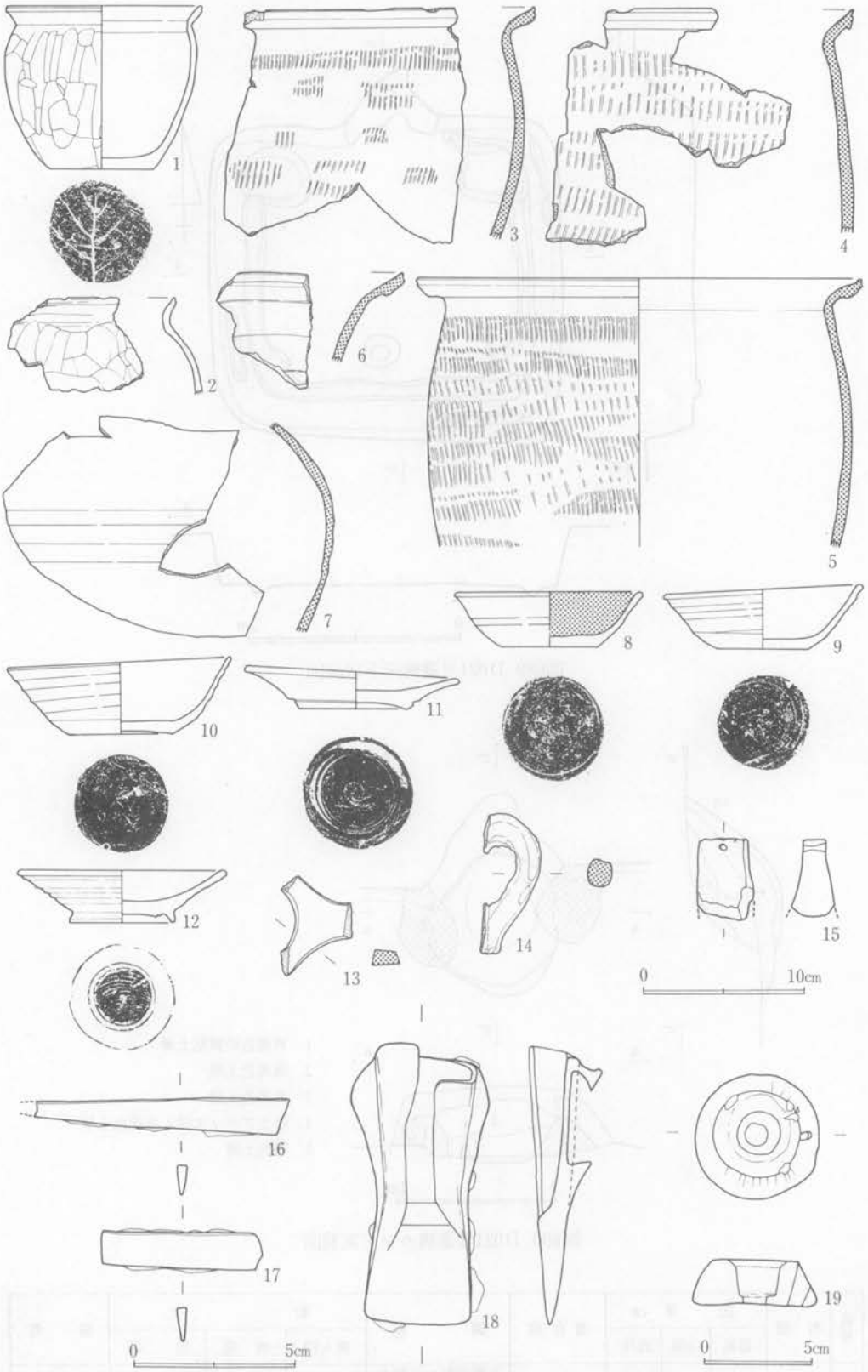


図691　D021号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
11	高台付皿	2.2	13.5	6.8	完形	——	——	軟弱	黄褐色	内面磨き
12	高台付皿	3.2	13.2	6.6	⅓	——	——	堅緻	橙色	内面磨き 糸切り
13	甑	—	—	—	孔部破片	——	砂粒	やや堅緻	褐色	
14	不明	—	—	—	破片	——	——	堅緻	灰色	把手

4．D022号遺構（図692～695、図版168－2、3、174、175～177）

III群の住居群内において最も西側に位置し、H002が近接している。覆土掘り下げ直後から多量の遺物が出土し、最終的に603点に達した。

遺構　北壁4.03m、東壁4.5mの長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.5m掘り込まれており、真下には幅0.2m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は径0.3m、深さ0.4mを計り、ほぼ対角線上にP_1～P_4が配置される。写真撮影後床下調査を実施したところ南壁に近い部分より径0.28m、深さ0.1mの小ピットP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を最長1.35m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土は袖部から煙道部まで一体化し、火袋に相当する部分は焼土化が著しい。天井部の遺存も良好でほぼ旧時の状態を保っているといえよう。掘り込みはI群D090、III群D020と酷似している。

D022出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	30.8	21.8	—	胴部の一部と底部を欠損	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部～胴部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黄褐色	
3	甕	30.4	12.8	4.0	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙色	
4	甕	—	—	—	底部近くの破片	磨き上げ	砂粒	堅緻	黄褐色	
5	広口甕	—	22.0	—	胴部中位下半欠損	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
6	広口甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
7	甕	—	—	—	口縁部破片	——	砂粒	やや堅緻	橙色	
8	広口甕	—	—	—	底部近くの破片	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
9	坏	3.8	12.1	6.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	墨書「主」
10	坏	3.5	(12.0)	(7.5)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	
11	坏	4.0	12.0	6.1	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄橙色	糸切り
12	坏	4.3	(12.7)	(7.0)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	橙色	
13	坏	4.0	12.2	—	½	——	——	堅緻	橙色	

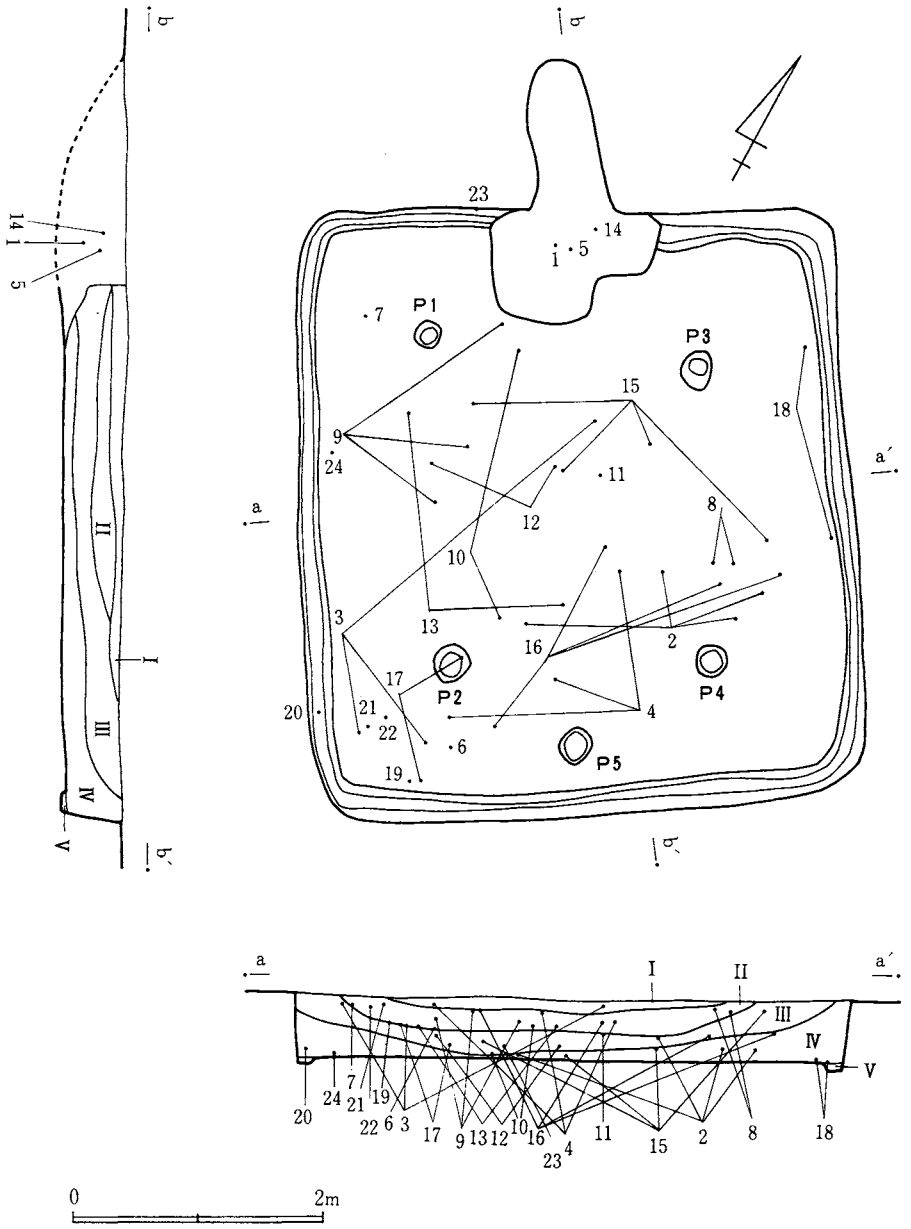


図692 D022号遺構実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
14	坏	5.3	15.6	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黄灰色 (外)黄褐色	内面磨き
15	坏	5.5	15.4	7.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	内黒 糸切り
16	坏	4.5	15.3	7.7	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色	内黒
17	坏	5.4	(14.6)	(8.0)	½	下端静止ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	内黒

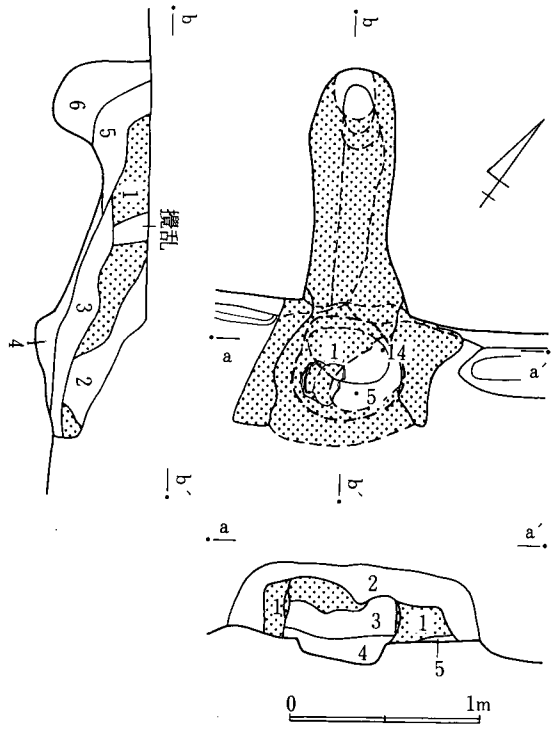


図693 D022号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
18	坏	4.6	(15.6)	(7.6)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)黒色 (外)黄灰色	墨書「主」 内面磨き
19	坏	4.0	12.4	6.8	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	糸切り
20	高台付坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	墨書「ゐ」 内面磨き

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層明褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積しており、各層より住居全体にわたり出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品、青銅製品、土製品がある。甕形土器は1～8で、1、2は形状が同じである。3は口縁が逆「コ」の字状を呈している。5～8は叩き目がある広口甕の口縁部と底部の破片である。坏形土器は口径 12 cm 前後の9～13と、口径 15 cm 前後の14～19がある。14～16、18は内面を黒色処理している。20は高台付で内面を黒色処理している。鉄製品は21、22の鎌で、21は刃先が欠損する。青銅製品は23の丸鞆で一部欠損するが、内面に裏金をとめるピンが残る。土製品は24の紡錘具で、径 4.6 cm、厚さ 1.3 cm、重さ33.1 g で中央に径 0.7 cm の軸孔があく。色調は灰褐色を呈する。

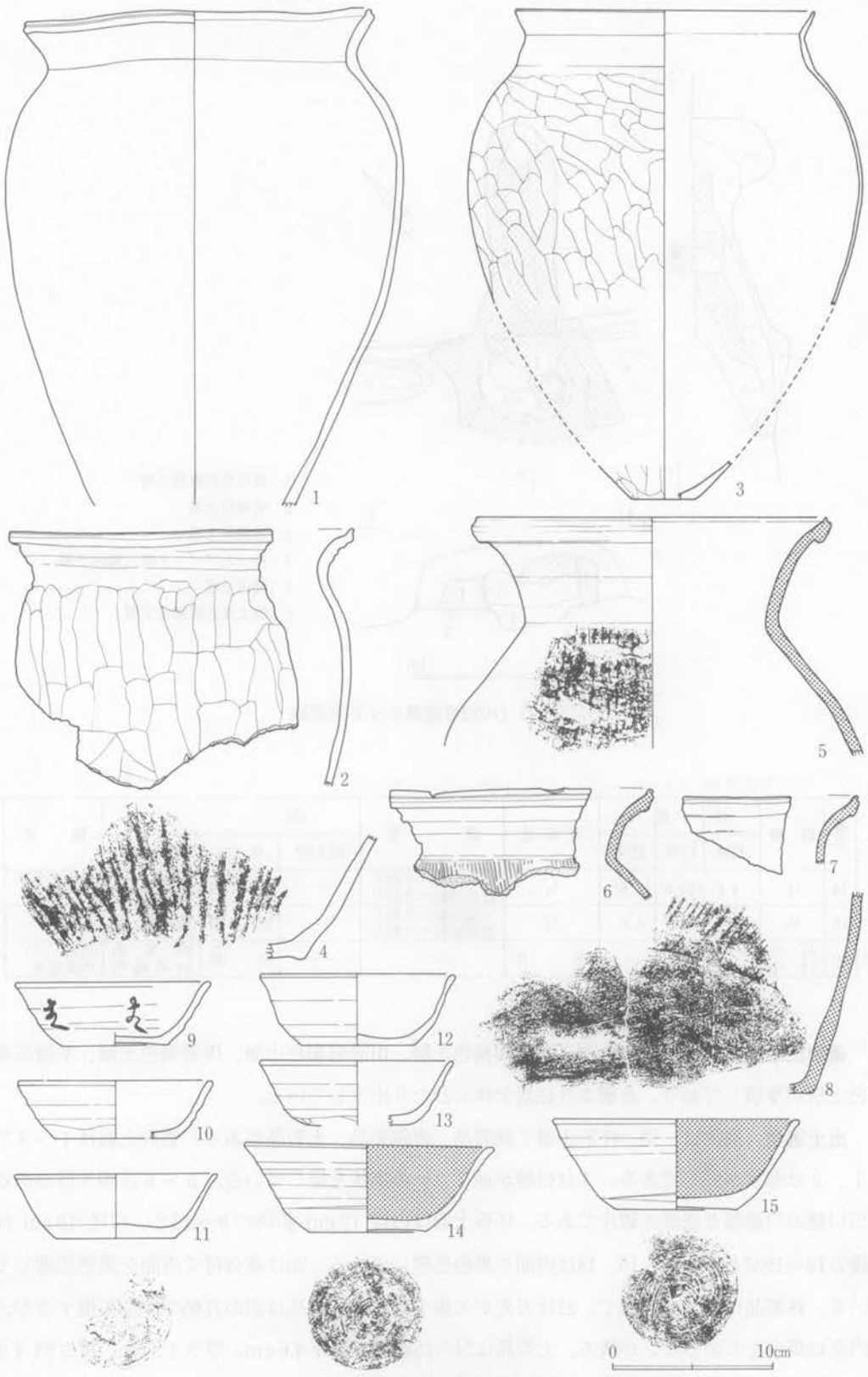


図694　D022号遺構出土遺物実測図(1)

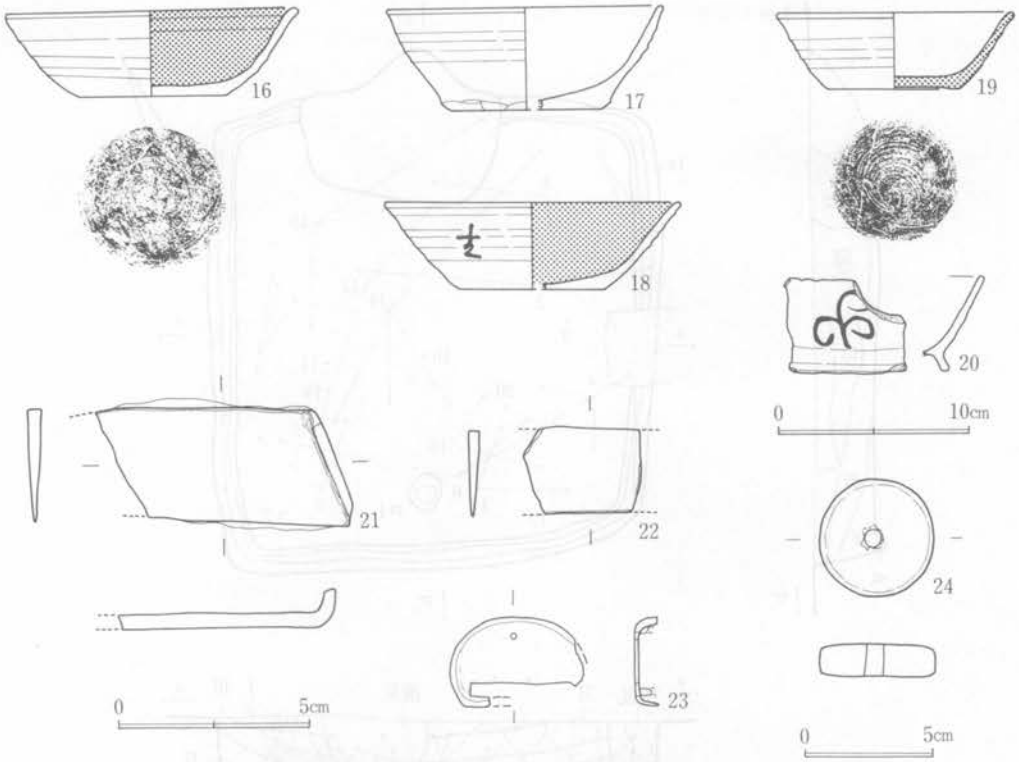


図695 D022号遺構出土遺物実測図(2)

5．D023号遺構（図696～698、図版169－1、175、177）

III群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D021、H002が近接している。

遺構 北壁3.5m、東壁3.5mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.48m掘り込んでおり、真下には0.18m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除き認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床下の調査において南壁中央部に近く径0.25m、深さ0.1mの小ピットP_1を検出した。

カマド 北壁中央部を最長0.4mを掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土は袖から煙道部まで一体化している。天井部は遺存しない。

遺物出土状況 Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層焼土粒炭化粒混入明褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層明褐色土層、Ⅴ層褐色土層が堆積しており、遺物は各層から住居全体にわたり出土している。床面上出土のものは中央部に多い。

出土遺物 遺物は、甕、甑、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で小形なもので、ロクロ整形している。甑形土器は4で胴部に叩き目があり小把手がある。坏形土器は口径12cm前後の5～10と、口径15cm前後の11～15があり、12～15は内面を黒色処理してある。16は高台付の大形なものである。皿形土器は17の体部破片である。鉄製品は18、19で、いずれ

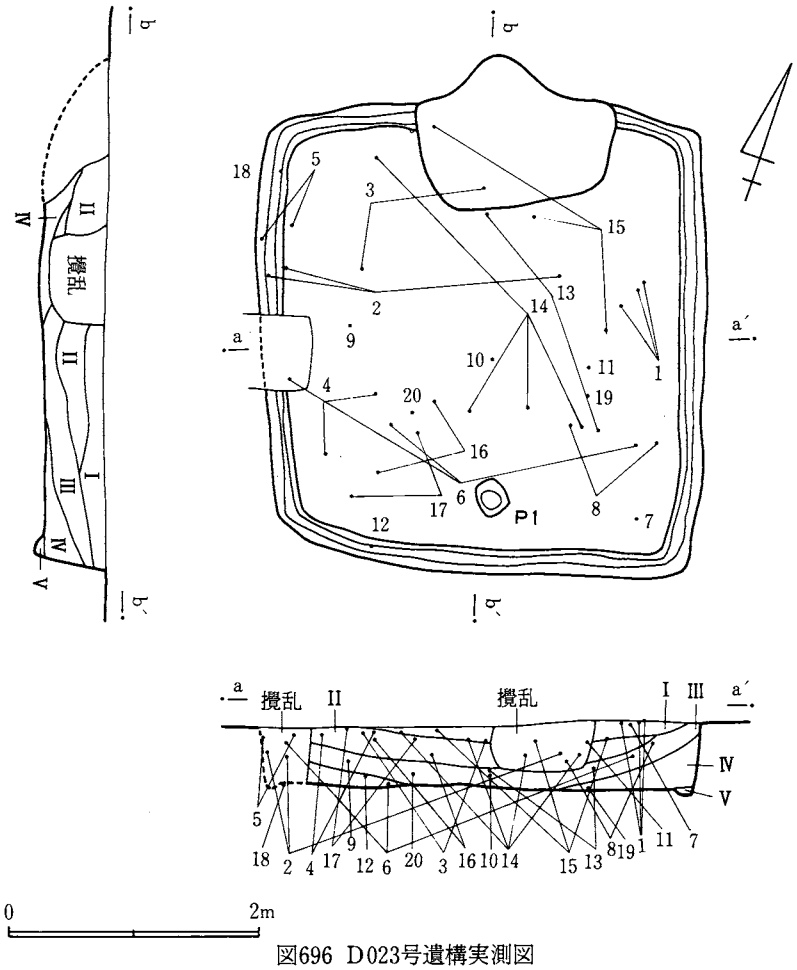


図696 D023号遺構実測図

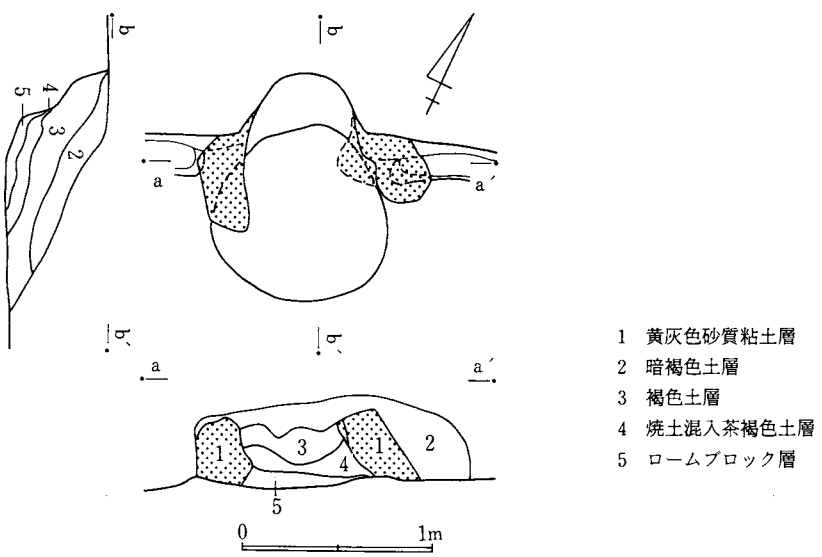


図697 D023号遺構カマド実測図

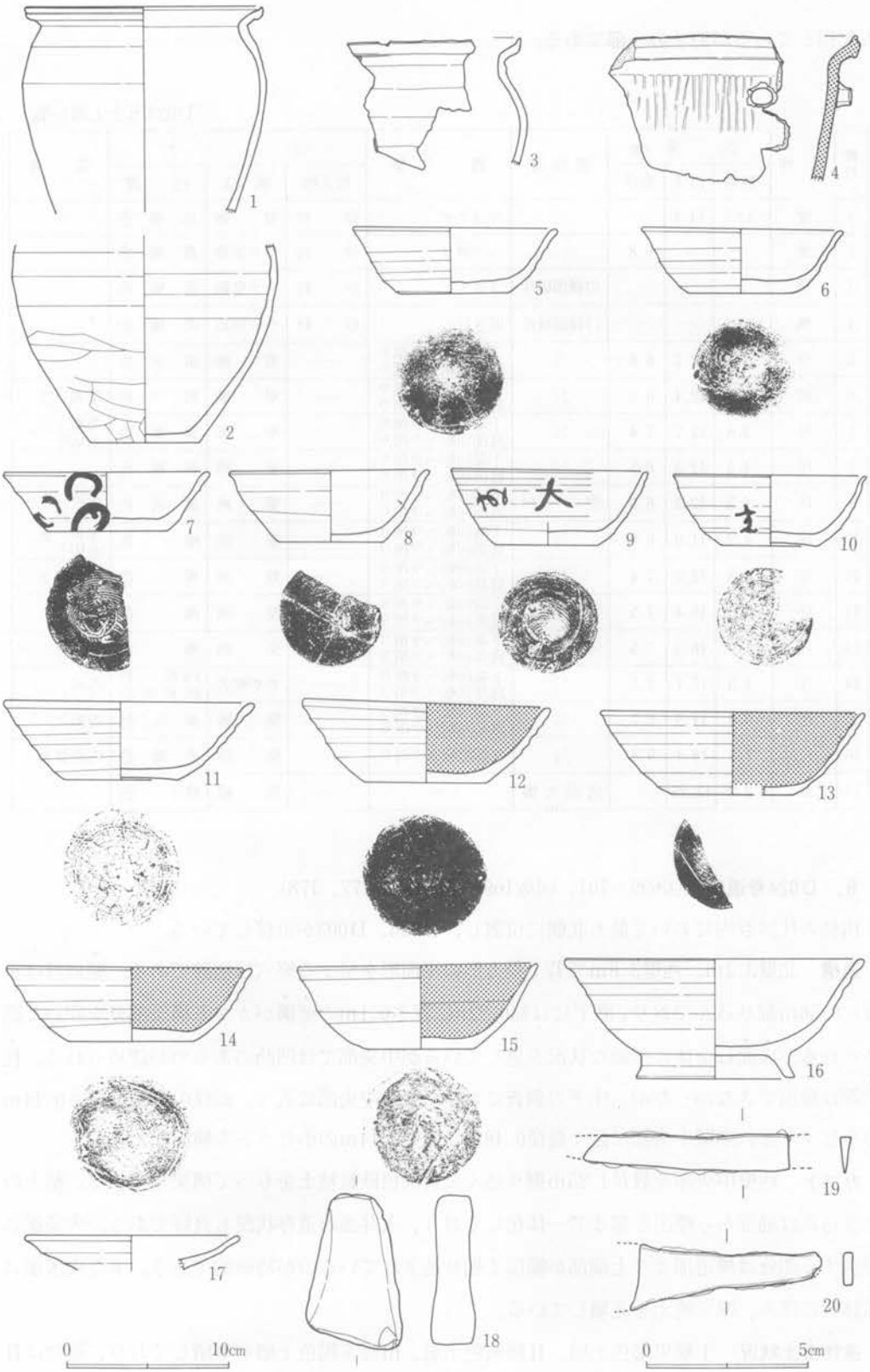


図698　D023号遺構出土遺物実測図

も欠損しているが刀子の一部である。

D023出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	12.7	14.7	—	1/2	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	6.8	1/3	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黄褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	黄褐色	
4	甑	—	—	—	口縁部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
5	坏	4.1	12.7	6.8	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	
6	坏	4.0	12.4	6.3	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	墨書「主」
7	坏	3.6	12.7	7.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	墨書「ゐ」 糸切り
8	坏	4.3	12.3	6.5	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	
9	坏	4.5	12.2	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」、 「大」
10	坏	4.2	11.9	6.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	墨書「主」 糸切り
11	坏	4.8	12.5	7.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	軟弱	褐色	内面磨き
12	坏	4.8	15.4	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内黒
13	坏	5.0	16.3	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内黒 糸切り
14	坏	4.5	15.1	7.7	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	(内)黒色 (外)黄灰色	内黒
15	坏	5.0	14.9	6.7	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	内黒
16	高台付坏	7.2	18.4	9.8	1/3	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	内面磨き
17	皿	2.2	13.25	—	底部欠損	——	——	堅緻	橙色	

6．D024号遺構（図699～701、図版169－2、175、177、178）

III群の住居群内において最も北側に位置し、D025、D003が近接している。

遺構　北壁3.2m、西壁3.8mで若干長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが中央部では凹凸のあるのが認められる。柱穴等は検出できなかったが、床下の調査において東壁中央部に近く、長径0.43m、深さ0.14mの小ピットと、南壁中央部に近く長径0.48m、深さ0.14mの小ピットを検出した。

カマド　西壁中央部を最長1.25m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部の遺存状況も良好である。火袋部に相当する部分は煙道部より上端部が幅広く掘り込まれているのが特徴的である。また火床部は擂鉢状に窪み、厚く焼土を充填している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層褐色土層、III層茶褐色土層が堆積しており、遺物はII層床面上を中心に住居中央部より西側に偏在して出土している。

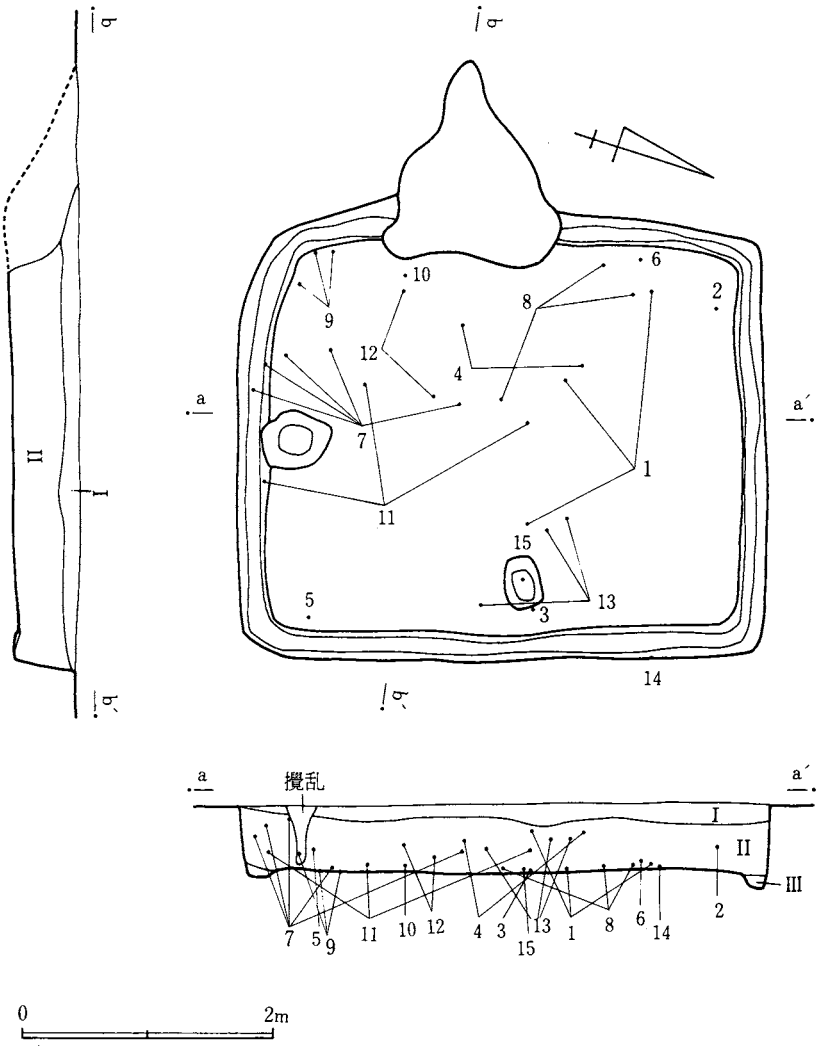
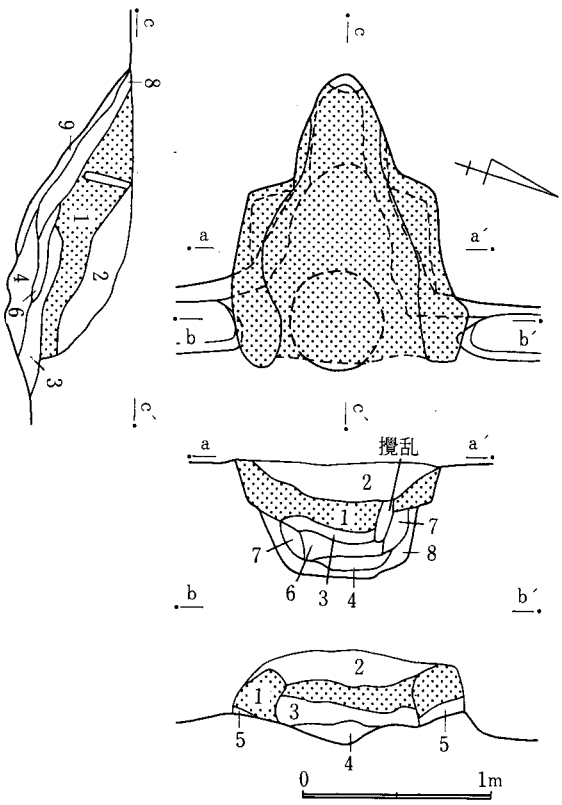


図699 D024号遺構実測図

D024出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黄褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	台付甕	—	—	—	胴部中位破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	坏	4.2	13.0	6.2	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	糸切り
5	坏	4.0	12.2	6.0	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙褐色	
6	坏	3.8	11.8	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄灰色	墨書「主」 糸切り
7	坏	3.7	12.3	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明橙色	糸切り
8	坏	—	—	6.5	底部	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	朱書「ゐ」 糸切り



1 黄灰色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 黒褐色土層
4 焼土層
5 ロームブロック層
6 褐色土層
7 焼土粒混入赤褐色土層
8 黄褐色土層
9 茶褐色土層

図700 D024号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	坏	4.0	(11.1)	6.0	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	茶褐色	墨書「主」と判読不明
10	坏	4.6	14.6	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
11	坏	5.2	16.4	8.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内黒 糸切り
12	坏	5.3	16.0	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黄褐色	内黒
13	高台付皿	2.3	14.0	7.4	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙色	内面磨き

出土遺物 遺物は、甕、台付甕、坏、皿形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片、2は逆「コ」の字状に外反する口縁部破片である。台付甕形土器は3で底部の破片である。坏形土器は口径約 12 cm 前後の4～9と、口径 15 cm 前後の10～12がある。11、12は内面を黒色処理してある。皿形土器は13で造り付けの高台を有する。石製品は14、15がある。14は凝灰岩製の砥石の残片である。15は滑石製の双孔円板である。

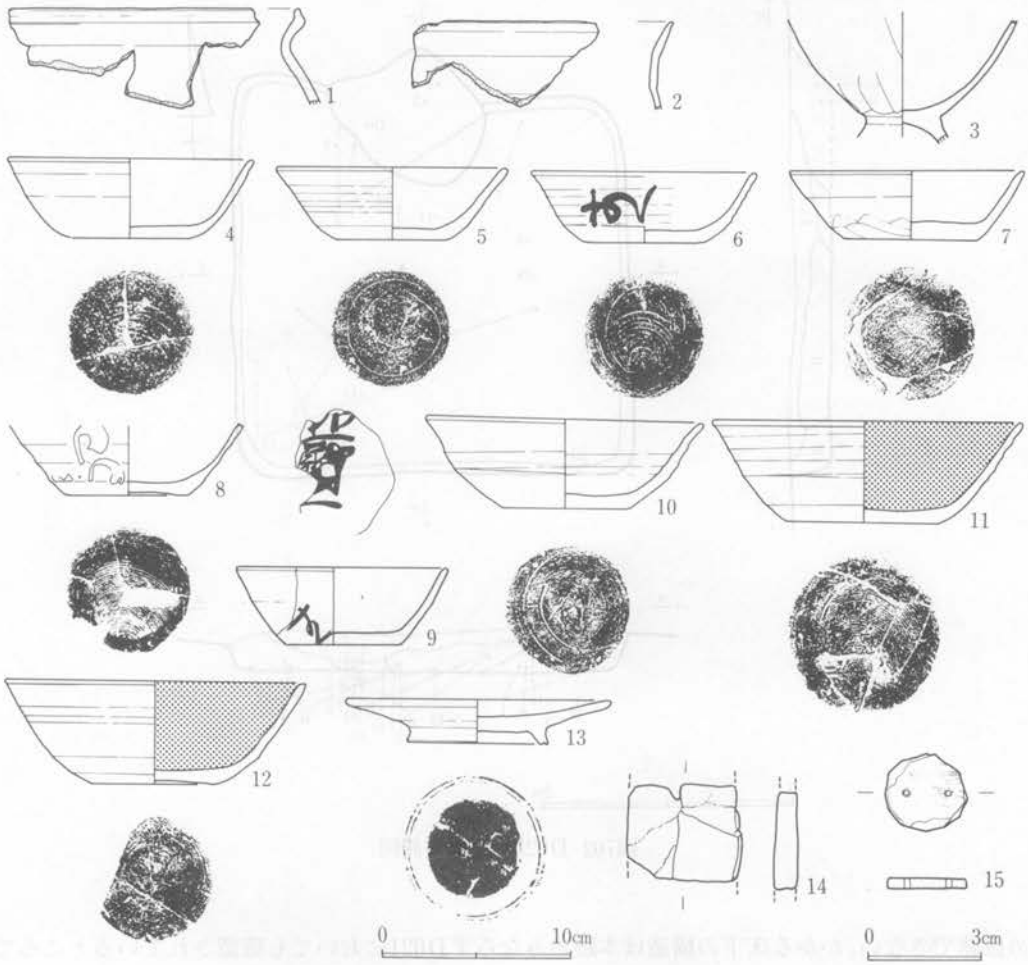


図701 D024号遺構出土遺物実測図

7．D025号遺構（図702～706、図版169－3、170－1、2、175、178）

III群の住居群内においてD024と並んで最も北側に位置している。遺構確認時に貝殻を覆土中に堆積しているものとして注目していたものである。そのため調査に際しては貝殻をすべてサンプリングするようA～Iまで1m角グリットを設定し、実際には10cm角グリッド1～100までの小グリッドでサンプリングをした。

遺構　北壁で2.98m、東壁3.1mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈しているが約0.28m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、特に中央部にあってはその傾向が顕著である。柱穴、壁溝等は検出できなかったが、床下の調査を実施したところ、北壁部分を除いて幅0.7m、深さ0.1mを計る溝を検出した。溝は北壁側に位置する径約0.8m、深さ0.15mを計る擂鉢状のピットに接続している。また南東壁コーナー部にも同様のピットが溝と接続して検出できたが、南西壁コーナーでは土壙と重複するた

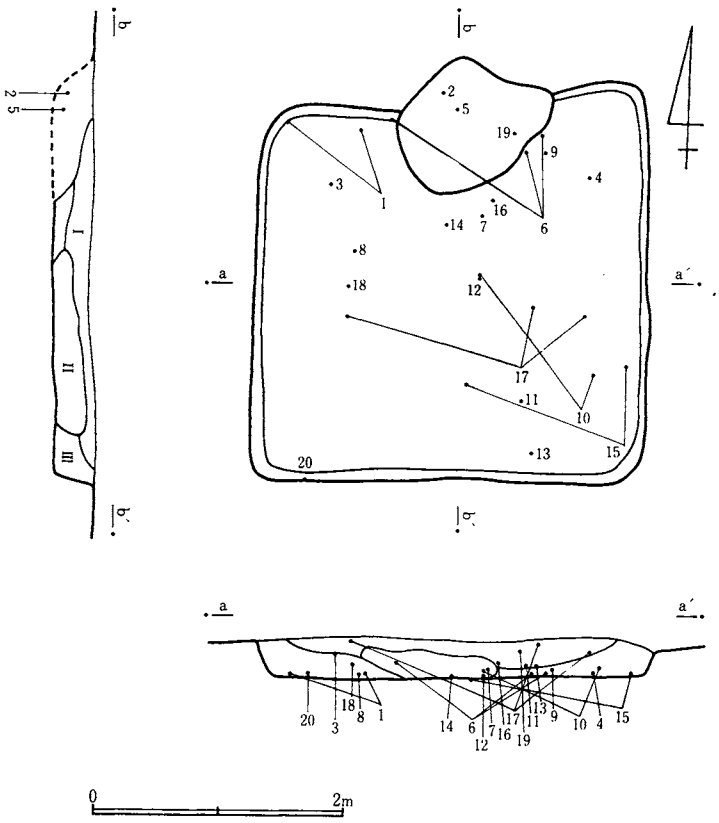


図702 D025号遺構実測図

め確認できない。かかる床下の構造は本跡のみならずD021においても確認されているところであり、住居構築時における特殊な施設と考えられるが性格は不明である。

カマド　北壁中央部を0.4m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており右袖部分には天井部が遺存している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ハマグリ、シオフキを主体とする純貝層、IIIローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に出土している。II層の貝層はサンプリング前に実測した図を一瞥すると南西壁コーナー部分より廃棄された状況を窺知できる。ほぼIII層の堆積が終点する直前の所産と考えられる。なお貝層より採取できた貝殻については別表に示す通りである。

D025出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	27.6	21.0	4.0	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	橙褐色	

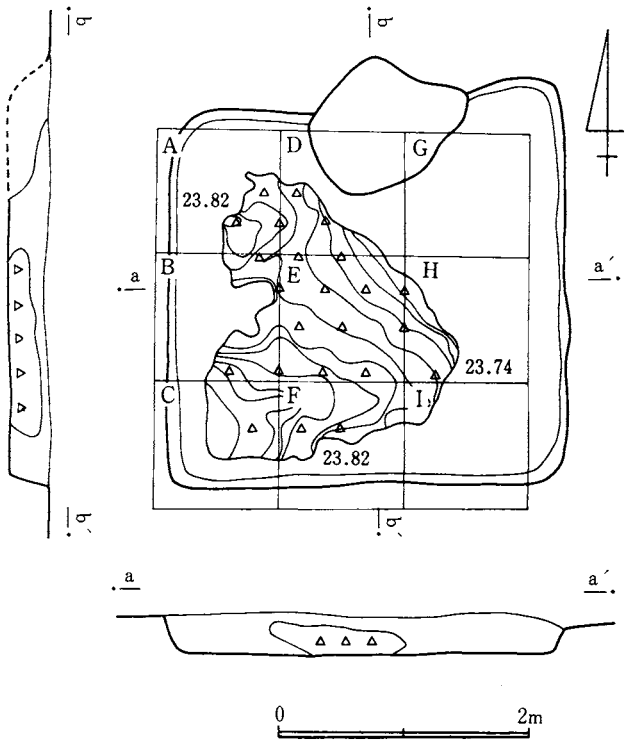


図703 D025号遺構貝殻出土状況図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	橙褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	橙褐色	体部にススが付着
5	台付甕	8.6	—	8.8	½	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	二次的に火を受ける
6	鉢	(9.2)	2.2	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	橙褐色	
7	坏	4.0	12.0	6.4	¾	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	橙褐色	糸切り
8	坏	4.0	11.8	6.8	口縁部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	糸切り
9	坏	4.0	11.6	6.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
10	坏	3.9	11.3	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや堅緻	灰褐色	糸切り
11	坏	4.0	11.8	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
12	坏	4.2	12.0	5.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
13	坏	3.8	12.8	6	⅕	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
14	坏	4.0	13.0	6.4	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
15	坏	4.2	13.4	7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	橙褐色	糸切り
16	坏	3.6	12.8	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明灰褐色	墨書「主」 糸切り
17	坏	3.4	12.0	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	橙褐色	糸切り

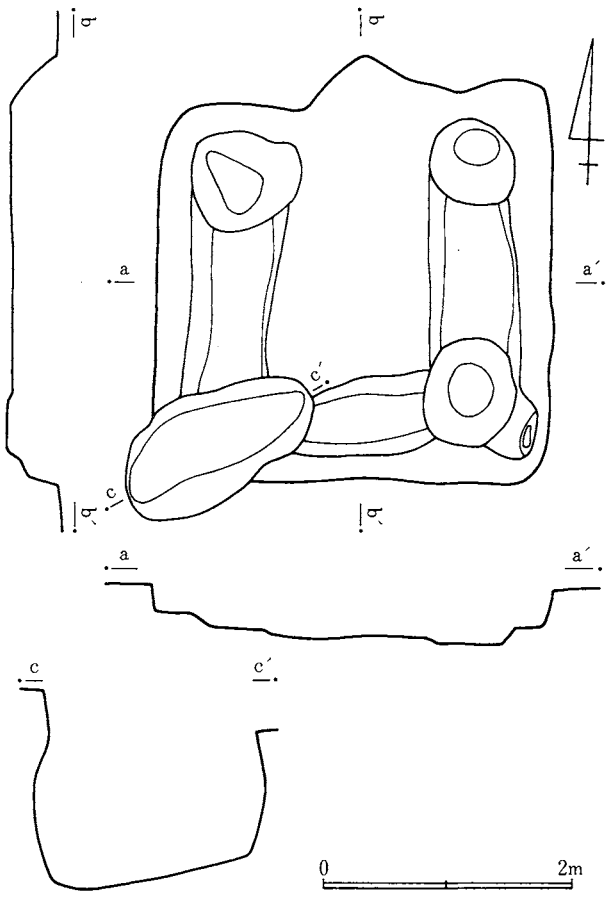
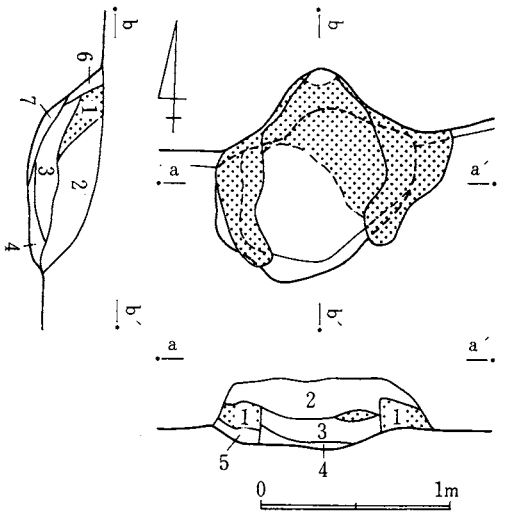


図704 D025号遺構床下状況図



1 黄褐色砂質粘土層
2 褐色土層
3 焼土層
4 黒褐色土層
5 褐色土層
6 ローム粒混入褐色土層
7 ローム粒混入黒褐色土層

図705 D025号遺構カマド実測図

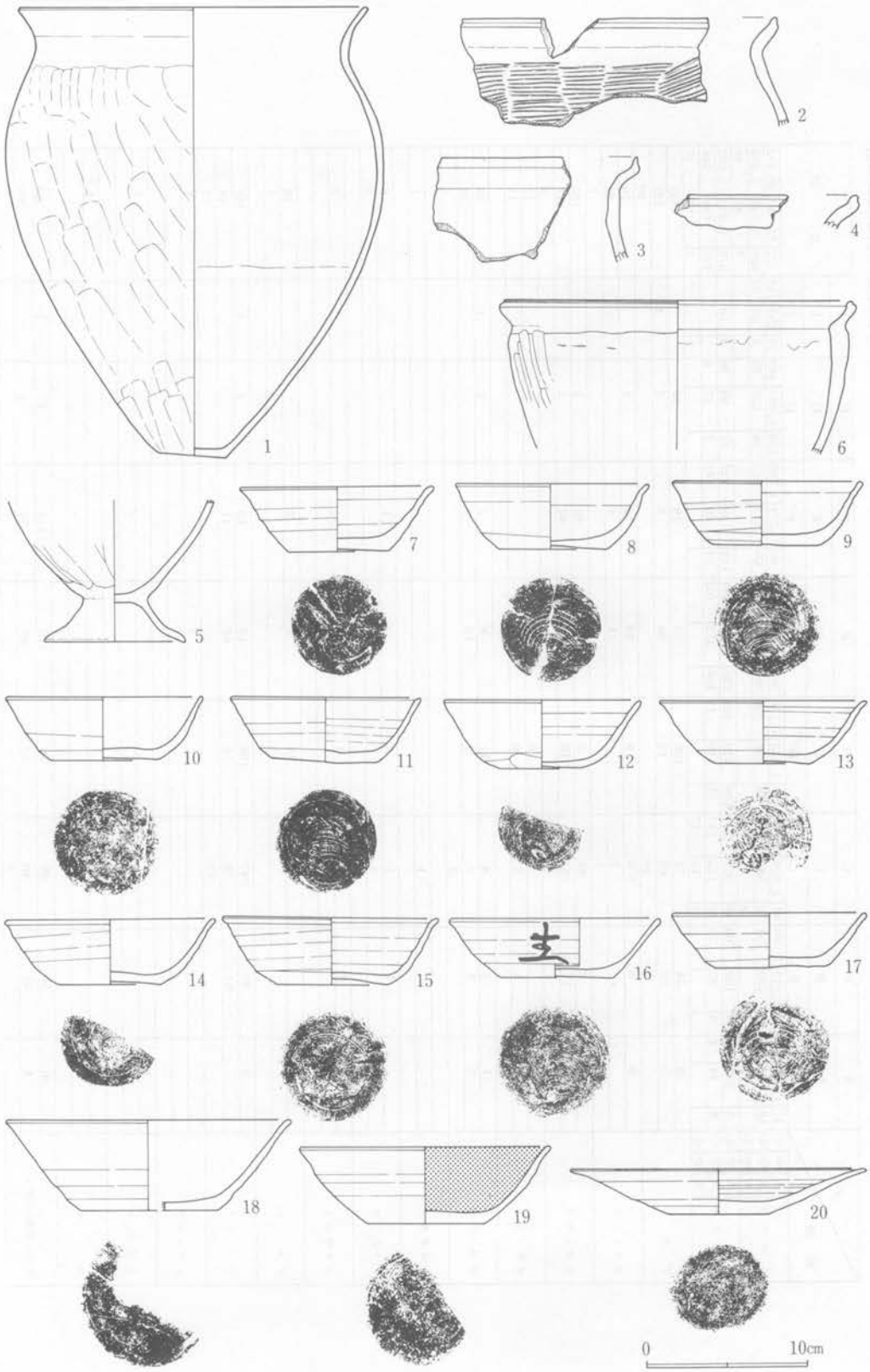


図706 D025号遺構出土遺物実測図

D025出土貝類遺骸集計

種類＼ブロック				A			B			C			D			E			F			H			I			合計		
				A′			B′			C′			D′			E′			F′			H′			I′					
				A″			B″			C″			D″			E″			F″			H″			I″					
ハマグリ	大	中	小	47	1,096	867	58	1,315	1,004	61	1,504	1,578	91	1,833	1,750	289	4,238	2,894	86	1,279	1,580	103	1,082	409	37	293	115	772	12,640	10,192
	大	中	小	18	338	248	58	730	731	37	589	1,482	49	858	350	366	2,710	2,458	69	513	576	26	150	82	6	58	32	629	5,946	5,959
	大	中	小							8	81	80																8	81	80
シオフキ	大	中	小	8	201	19	30	192	65	48	353	331	109	410	404	230	524	594	113	139	252	31	94	38	4	19		573	1,932	1,703
	大	中	小	8	44	8	6	83	75	27	115	242	27	110	12	108	373	162	19	46	41	2	27	6				197	798	546
	大	中	小							1	10	17																1	10	17
アサリ					19			24			74			106			55			19			10						307	
					5			10			69			15			26			3			2			3			133	
											10																		10	
オキシジミ					6			6			6			8			28			16			6						76	
											7						11			4									22	
											7																		7	
カガミガイ					2			2			93			2			42			40			1						182	
					12			77			193			16			168			42			3						511	
											4																		4	
オオノガイ														5			7												12	
								1			1			6			3												11	
サルボウ					1			2			8			11			8			2			2			1			35	
					2			3			7			7			15			3									37	
											2																		2	
ツメタガイ																														
											1																		1	
アラムシロ								1			1			3						1									6	
											3																		3	
トクサガイ								2						1															3	
アカニシ														14			2			2									18	
														1															1	
ウミニナ					3			38			247			159			13			19			1			1			481	
								51			78			16			62			41									248	
											12																		12	
イボキサゴ																	1												1	
イボニシ					1																								1	
カキ					1？																								1？	
巻貝(名称不明)					16			56			69			56			170			174			17			5			563	
					1			31			40			12			87			30			5						206	
											3																		3	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
18	坏	5.5	(17.3)	(8.4)	1/3	——	砂粒	やや軟弱	褐色	内黒
19	坏	4.7	(15.4)	7.4	1/3	——	砂粒	やや軟弱	灰茶褐色	内黒 ヘラ切り
20	皿	2.7	(18.0)	6.2	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	糸切り

出土遺物　遺物は、甕、台付甕、鉢、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～4で、1は器壁の薄い土器である。2～3は口唇部に特徴のある口縁部破片である。台付甕形土器は5で、胴部上半を欠損する。鉢形土器は6で口縁部破片で口唇部に特徴がある。坏形土器は口径12cm前後の7～17、口径15cm前後の18、19がある。19は内面を黒色処理している。皿形土器は20で比較的大形で体部が外反しながら大きく開く形状を呈している。

8．D087号遺構（図707～710、図版170－3、175、176、178）

III群の住居群内において最も南側に位置し、D019、D088が近接している。カマド右側部分から壁にかけて円形の攪乱を受けている。

遺構　北壁3.25m、東壁3.2mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南東壁コーナー部分と南西壁コーナー部分に水簸した白色粘土を検出した。柱穴、壁溝等については検出できなかったが、床下調査を実施したところ住居中央部より若干東に寄って長径1.34m、短径1.07m、深さ0.15mの楕円形のピットを検出した。内部から土器の出土があった。また南壁中央部に近く径0.45m、深さ0.13mを計る小ピットを検出した。さらに南東壁コーナー部において粘土塊を検出した直下で幅0.15mの渦巻状の溝を検出した。

D087出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	23.9	(20.2)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	3.8	(9.8)	—	1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
3	甕	5.1	(18.3)	—	1/4	ヨコナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
4	甕	10.9	—	6.2	3/5	ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	
5	坏	3.8	12.3	7.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「主」
6	坏	3.9	11.6	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
7	坏	3.9	11.7	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	
8	坏	4.0	12.1	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	

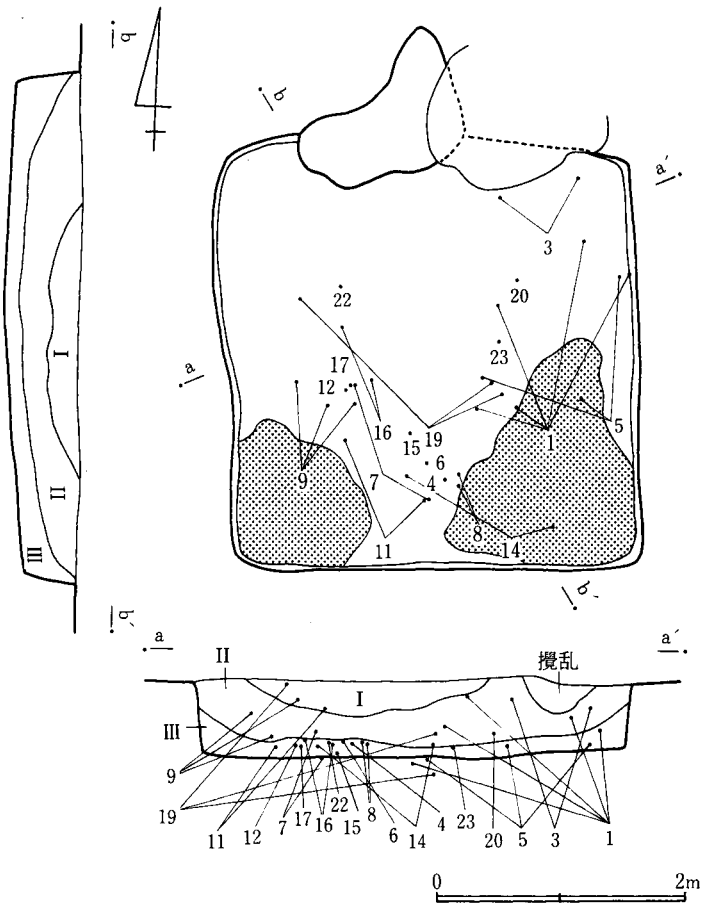


図707 D087号遺構実測図

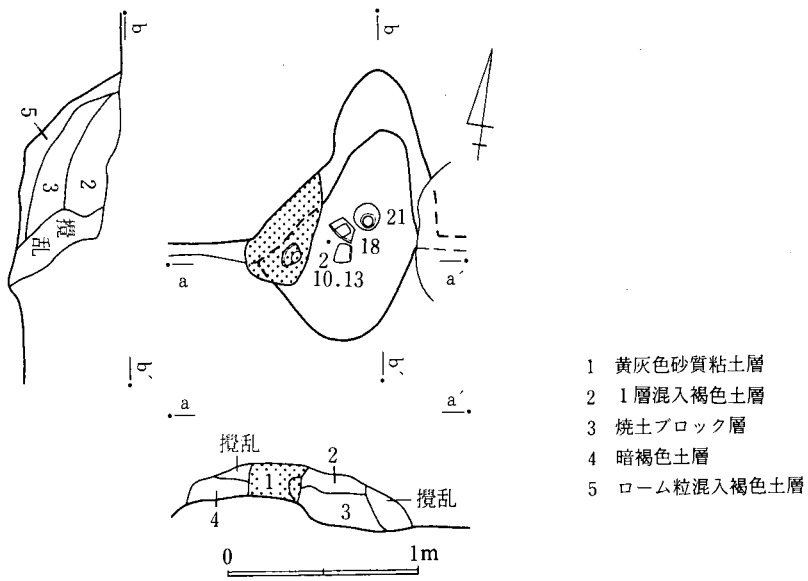


図708 D087号遺構カマド実測図

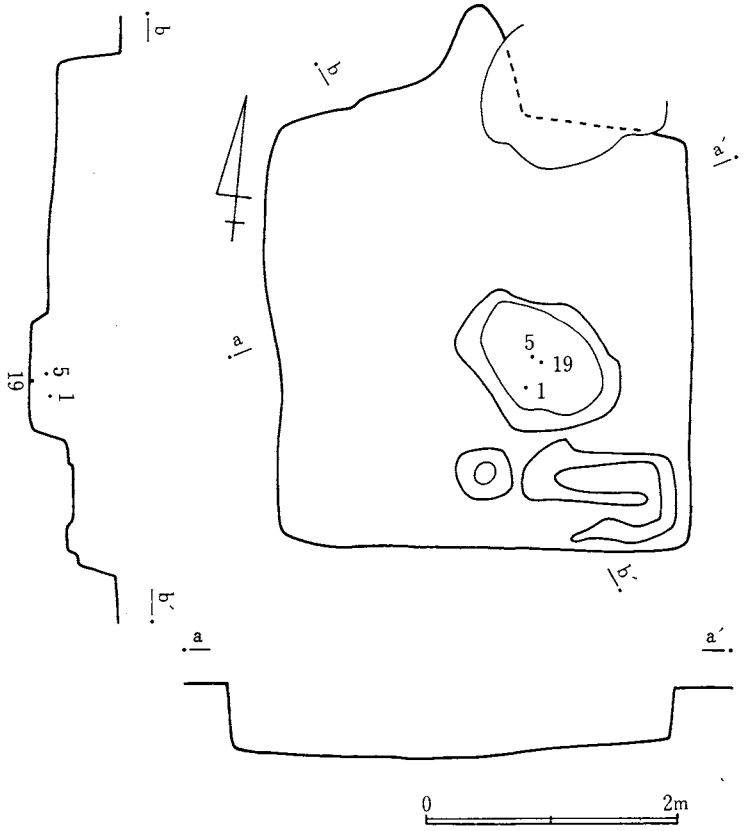


図709 D087号遺構床下状況図

カマド　北壁中央部を最長0.8m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。カマド右袖部は円形の攪乱によって遺存していないが、左袖部は煙道部まで一体化した粘土の貼り込みが認められる。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	坏	3.7	12.4	(6.8)	1/3	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
10	坏	3.7	12.4	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)明褐色	
11	坏	4.1	12.0	5.8	完形	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
12	坏	3.7	12.0	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「主」
13	坏	3.85	11.8	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)明褐色 (外)明褐色	
14	坏	3.8	12.6	7.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	糸切り
15	坏	4.2	11.9	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
16	坏	3.8	11.9	6.6	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	
17	坏	4.7	13.4	7.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)灰褐色 (外)明赤褐色	

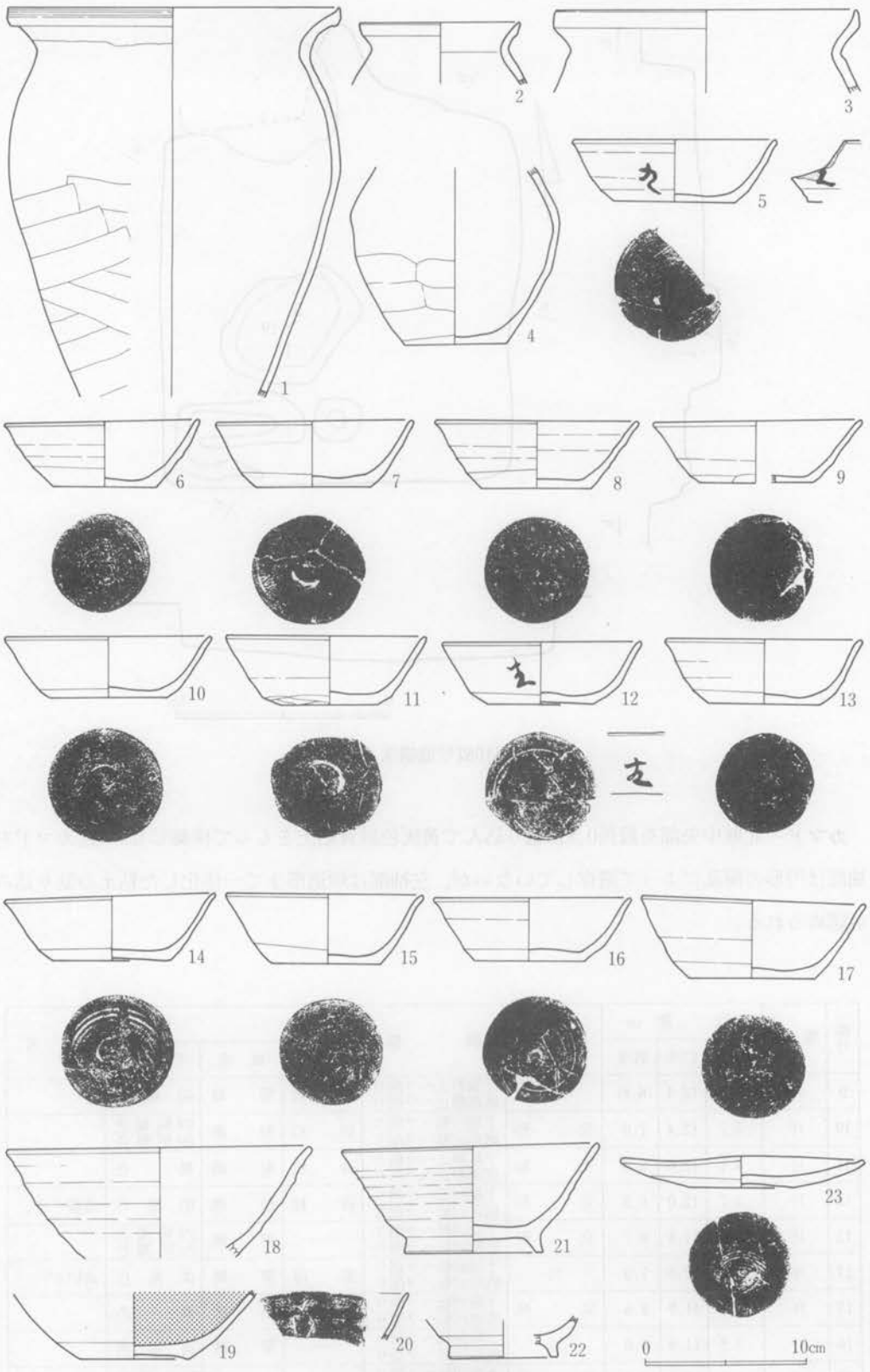


図710 D087号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
18	坏	6.6	(18.2)	—	1/3	——	砂粒	堅緻	明褐色	内面磨き
19	坏	4.0	—	6.5	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	内黒
20	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	褐色	焼成前線刻「8」
21	高台付坏	6.4	15.6	7.8	完形	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	
22	高台付坏	2.4	—	(6.5)	底部のみ	——	砂粒	堅緻	明褐色	
23	皿	1.8	14.8	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	糸切り

遺物出土状況　I層黒色土層、II層焼土粒混入黒色土層、III層褐色土層が堆積しており、III層床面上を中心に中央部より南側に偏在して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～4で、1～3は大、小の差はあるが形状的に同じ特徴を有する口縁部破片である。4は小形甕の胴部である。坏形土器は口径12cm前後の5～16と、口径15cm前後の17がある。また鉢に近い18、19や高台が付いている21、22がある。20は焼成前のヘラ書がある体部の破片である。皿形土器は23で高台はない。

9．D088号遺構（図711～713、図版171－1、2、176、178）

III群の住居群内において南側に位置し、D087が南方、D019が東方に近接している。芋穴による攪乱が北壁の一部、遺構中央部、東壁の一部に認められる。

遺構　北壁4.9m、西壁4.4mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.52m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除き認められる。床面は四隅が若干軟弱であるが中央部は堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかったが、床下の調査において北壁に接して2か所、南壁に近く2か所、それに南西壁コーナー、南東壁コーナー部分でそれぞれ小ピットを検出した。コーナーに検出したピット以外は深さ0.2m～0.3mを計るものであり、床面上で検出できなかった柱穴の可能性もある。

カマド　北壁中央部を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部では黒褐色土層上に行われ、煙道部まで続いている。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層黒色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層粘土混入暗褐色土層が擂鉢状の堆積を呈しており、遺物はIV層床面を中心に出土している。

出土遺物　遺物は甕、坏、鉢、皿形土器と石製品がある。甕形土器は1～3でいずれも器高13cm前後の小形なもので口縁部が短かく外反する。坏形土器は4～6で口径12cm前後のものである。鉢形土器は7で推定口径23.5cmの体部破片である。皿形土器は8～10である。10は高台風の造り出しが見られる。石製品は11、12でいずれも滑石製の紡錘具である。11は径3.

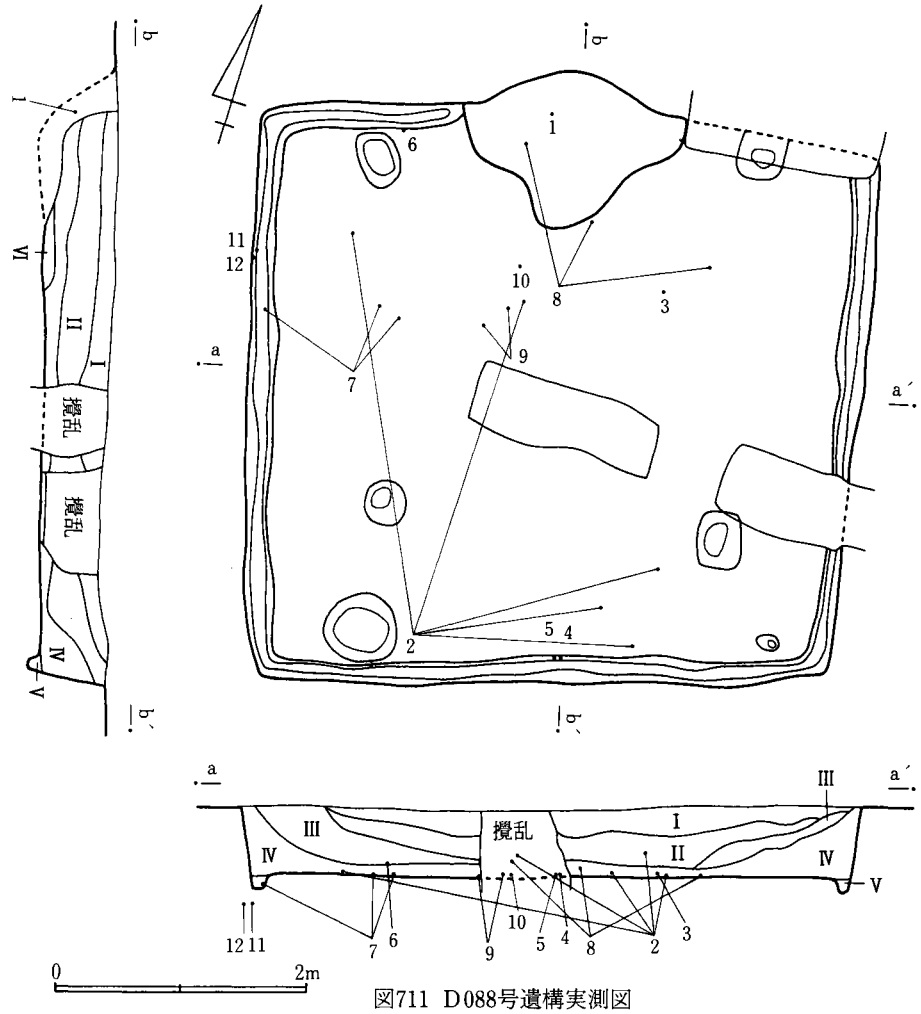
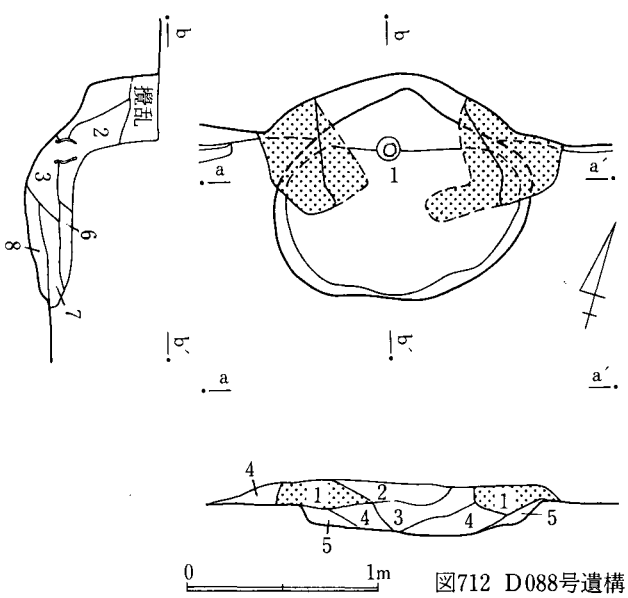


図711 D088号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 褐色土層
3 焼土層
4 暗褐色土層
5 ロームブロック混入黒褐色土層
6 1層混入暗褐色土層
7 黒褐色土層
8 ロームブロック混入褐色土橋

図712 D088号遺構カマド実測図

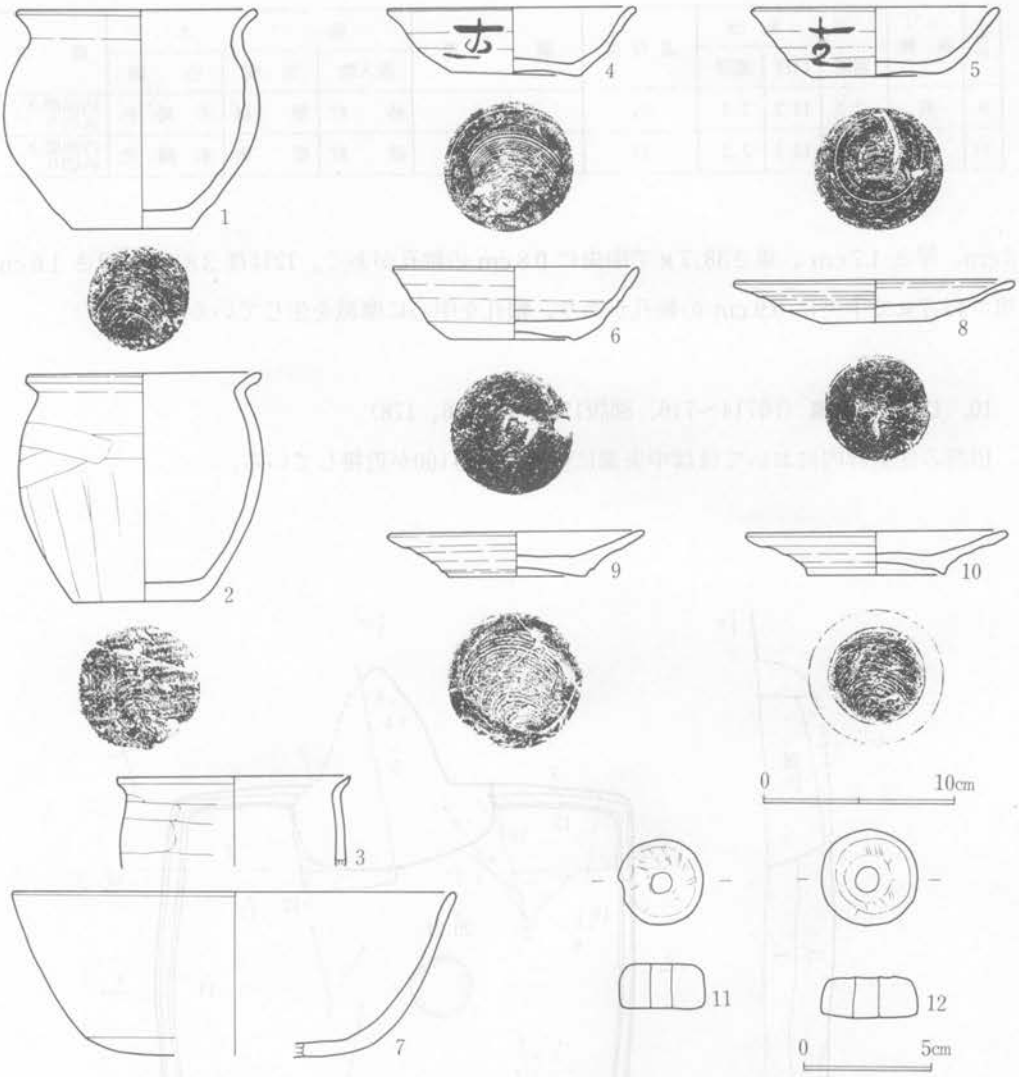


図713 D088号遺構出土遺物実測図

D088出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	11.5	12.2	6.1	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	甕	11.6	12.0	6.5	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)赤褐色	
3	甕	(4.6)	12.0	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	(内)橙色 (外)赤褐色	
4	坏	3.5	12.6	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	墨書「主」
5	坏	3.6	12.4	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	褐色	墨書「主」
6	坏	3.7	18.6	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	糸切り
7	鉢	(8.4)	22.6	(11.8)	½	下端回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	(内)褐色 (外)褐色	内面磨き
8	皿	2.1	14.3	5.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	Ⅲ	2.3	13.2	7.2	⅔	——	砂粒	堅緻	赤褐色	内面磨き 糸切り
10	Ⅲ	2.2	13.4	7.2	½	——	砂粒	堅緻	赤褐色	内面磨き 糸切り

3 cm、厚さ 1.7 cm 、重さ38.7 g で中央に 0.8 cm の軸孔があく。12は径 3.8 cm、厚さ 1.6 cm、重さ44.7 g で中央に 0.9 cm の軸孔があり、軸孔を中心に摩滅を生じている。

10. D089号遺構（図714～716、図版171－3、176、178）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D160が近接している。

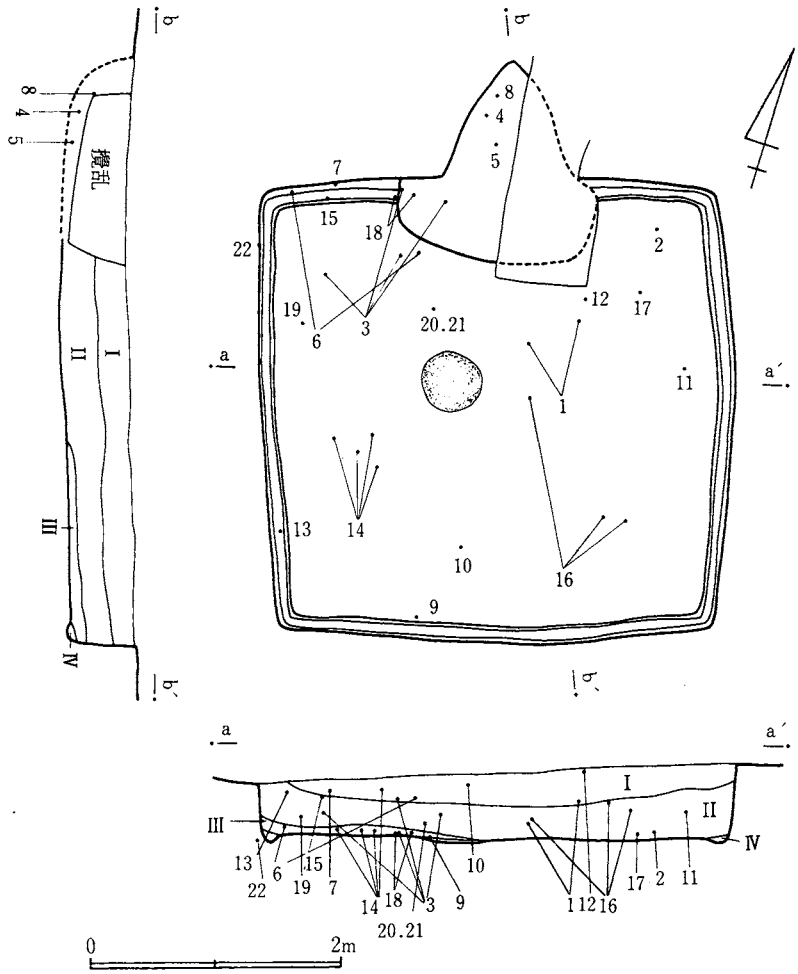


図714 D089号遺構実測図

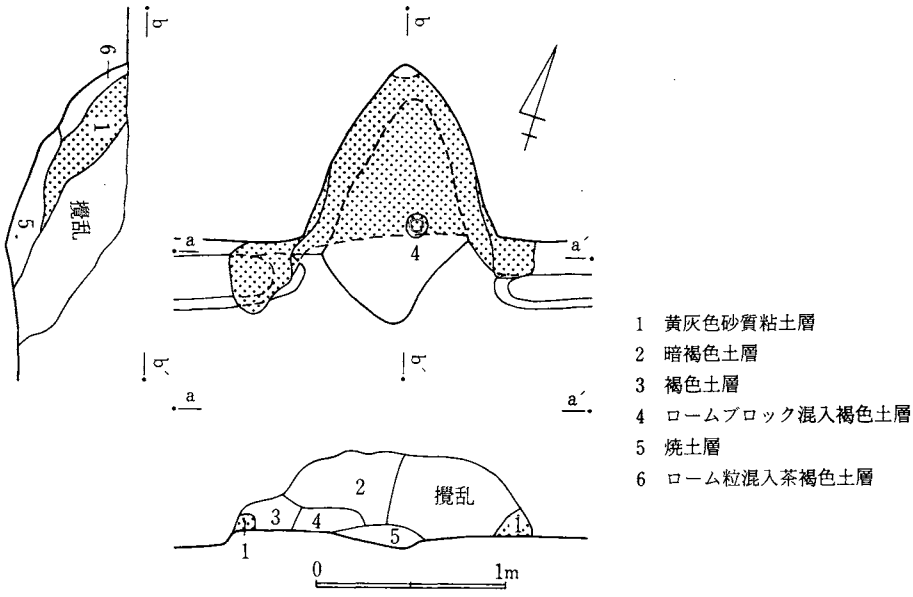


図715 D089号遺構カマド実測図

遺構 北壁3.18m、東壁3.43mで方形の平面形を呈している。壁は垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。カマド前方部に一部0.4mの範囲で焼土化している部分を検出した。柱穴等は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を三角形に最長0.9m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しているが貧弱な造りである。天井部は火袋に相当する部分から煙出しまで遺存している。火床には厚い焼土が認められる。

遺物出土状況 I層褐色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入茶褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、坏、皿形土器と石製品、鉄製品、青銅製品がある。坏形土器は口径 12 cm

D089出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.1	12.0	6.6	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	糸切り
2	坏	3.6	11.5	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	糸切り
3	坏	3.5	(12.0)	6.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
4	坏	3.9	12.1	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	褐色	
5	坏	3.8	(11.8)	6.7	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)暗褐色 (外)褐色	

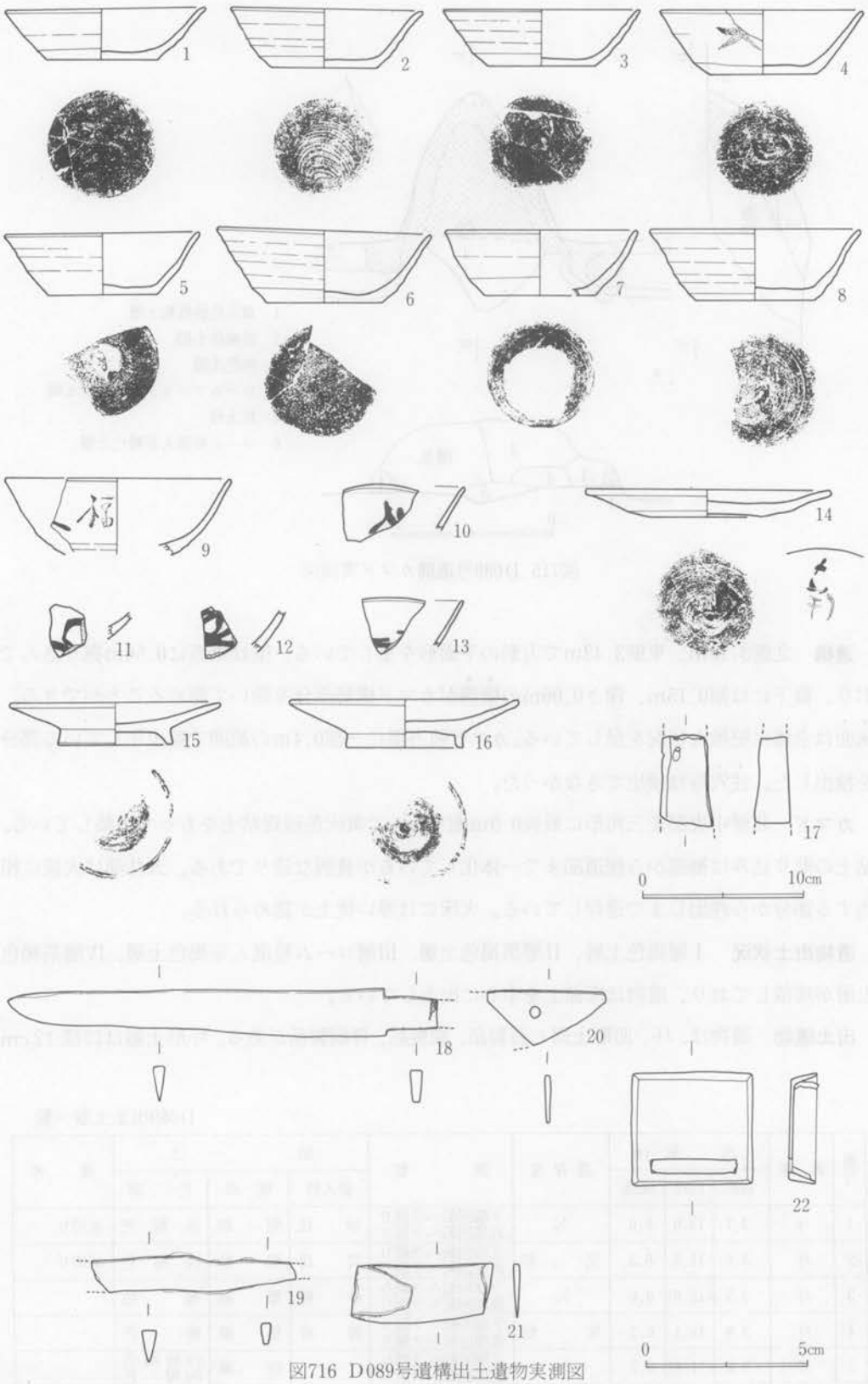


図716 D089号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	坏	4.4	(12.9)	7.0	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	糸切り.
7	坏	4.0	11.6	(6.8)	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	(内)褐色 (外)暗褐色	
8	坏	4.4	(12.7)	7.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒色	
9	坏	4.6	(13.6)	(6.4)	⅓	——	雲母	堅緻	明褐色	墨書「圖」
10	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
11	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
12	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
13	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明
14	皿	1.6	14.7	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	
15	高台付皿	2.4	(12.7)	6.8	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書「圖」
16	高台付皿	2.9	(13.9)	7.0	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	

前後の1～5と、13cm前後の6～9がある。10～13は体部に墨書がある破片である。皿形土器は高台のない14と、15、16のように造り付け高台が付くものがある。石製品は17の凝灰岩製の砥石で、一端に孔がある。鉄製品は18、19の刀子、20、21は用途不明であるが21は刃部が認められる。青銅製品は22の巡方である。縦 3.2cm、横 3.8cm で内面に裏金をとめるピンが四隅にある。

11. D160号遺構（図717～719、図版172－1、178）

III群の住居群内においてD089と同様ほぼ中央部に位置し、南方にはH013が近接している。芋穴の攪乱を遺構北側部分に受けている。

遺構　北壁3.5m、東壁3.45mで一部コーナーが丸味を帯びる方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかったが、床下の調査において南壁に近く径0.4m、深さ0.2mの小ピットを検出した。

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築しているが攪乱を受けているため全体が把握できない。左袖は幸い攪乱を受けていないが粘土の貼り込みは部分的で、袖と煙道部の一部のみが認められるだけである。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層明褐色土層、III層黒褐色土層、IV層暗褐色土層がほぼ擂鉢状に堆積しており、遺物はIV層を中心に住居南側に偏在して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、壺、坏、皿形土器がある。甕形土器は形状を窺えるものはないが、1の口縁部破片と、2の底部がある。壺形土器は3の口縁部破片である。坏形土器は口径 12cm

前後の 4 ～ 9 と、口径 16 cm 前後の10がある。皿形土器は11で造り出しの高台を有する。

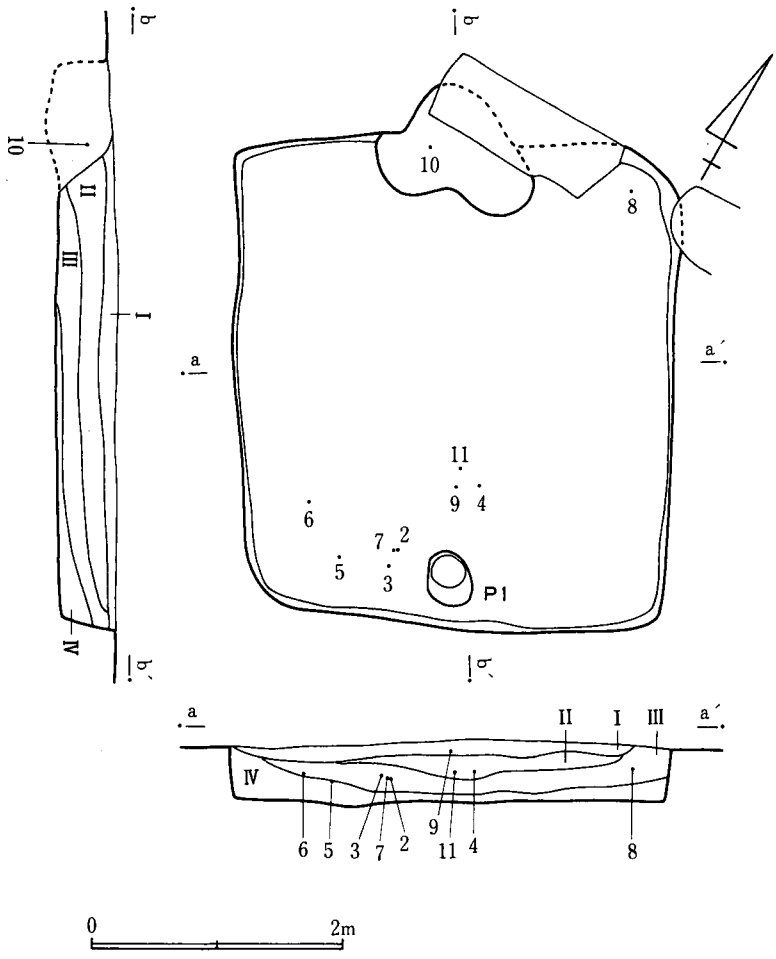
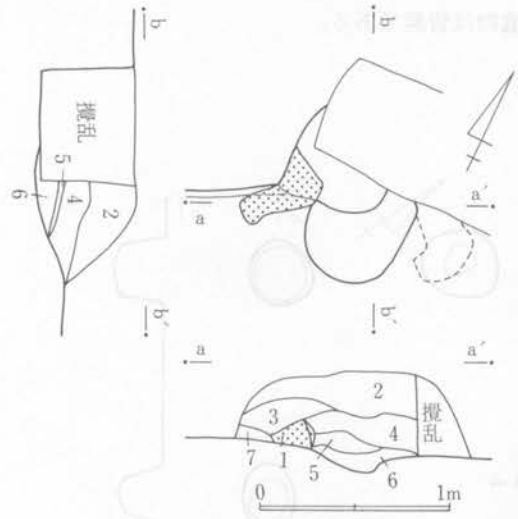


図717 D160号遺構実測図

D160出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	——	堅緻	淡茶褐色	
2	甕	(8.1)	—	8.0	底部	ナデ	——	堅緻	淡茶褐色	
3	壺	(5.2)	12.0	—	口縁部破片	——	——	堅緻	暗縁灰色	
4	坏	4.0	12.4	7.3	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや軟弱	淡黄褐色	
5	坏	4.2	12.1	7.0	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	やや軟弱	淡赤褐色	ヘラ切り
6	坏	4.4	12.0	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	赤褐色	
7	坏	4.4	12.3	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡赤褐色	糸切り
8	坏	4.2	12.6	(8.2)	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	坏	4.1	13.8	6.8	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡茶褐色	墨書「主」 糸切り
10	坏	5.3	16.4	8.2	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡赤褐色	内面磨き 糸切り
11	高台付皿	3.1	13.4	6.1	3/4	底部回転糸切り	——	堅緻	淡黄褐色	内面磨き 糸切り



1 黄灰色砂質粘土層
2 褐色土層
3 茶褐色土層
4 焼土粒混入黒褐色土層
5 小ロームブロック混入赤褐色土層
6 焼土層
7 暗褐色土層

図718 D160号遺構カマド実測図

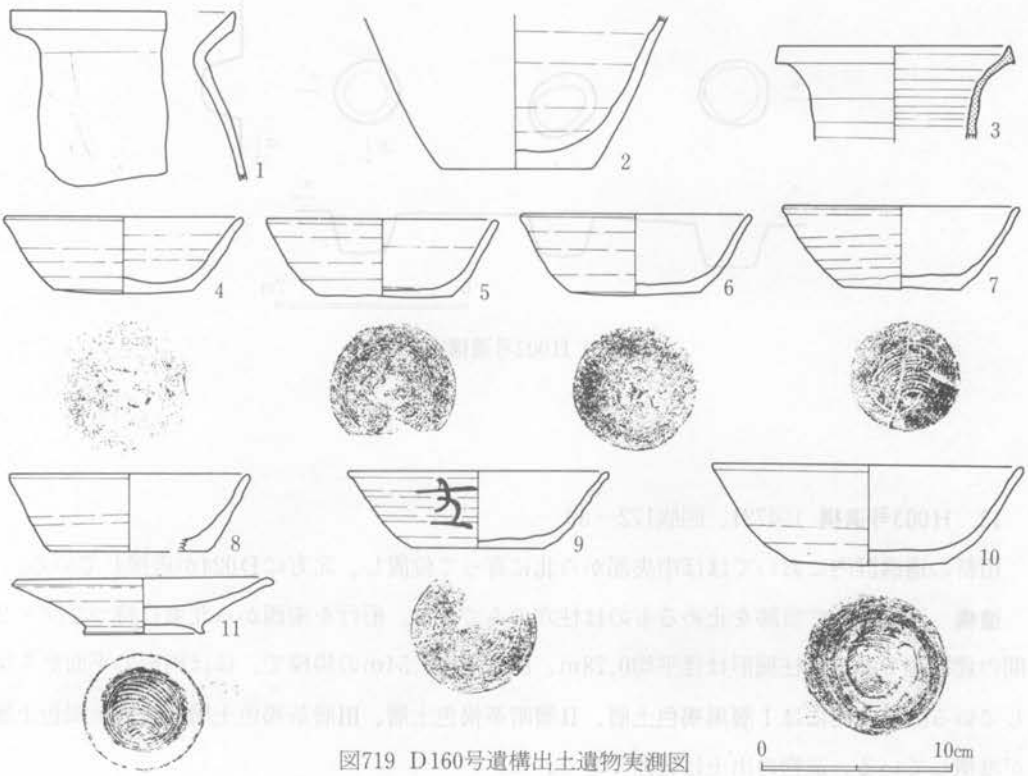


図719 D160号遺構出土遺物実測図

12. H002号遺構（図720、図版172－2）

III群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、D023が南方に近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を南西から北東に持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は最大のもので径0.77m、深さ0.42m、最小のもので径0.55m、深さ0.4mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。柱穴内にはI層黒褐色土層、II層暗茶褐色土層が堆積している。出土遺物は皆無である。

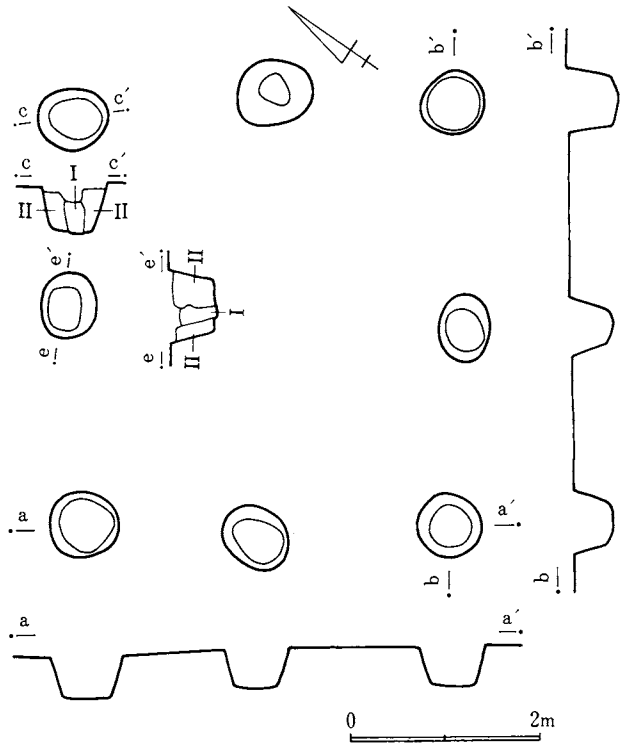


図720 H002号遺構実測図

13. H003号遺構（図721、図版172－3）

III群の遺構群内においてほぼ中央部から北に寄って位置し、北方にD024が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。桁行を南西から北東に持つ2間×2間の建物跡である。柱掘形は径平均0.78m、深さ平均0.54mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内にはI層黒褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層茶褐色土層、IV層黄褐色土層が堆積している。遺物の出土は皆無である。

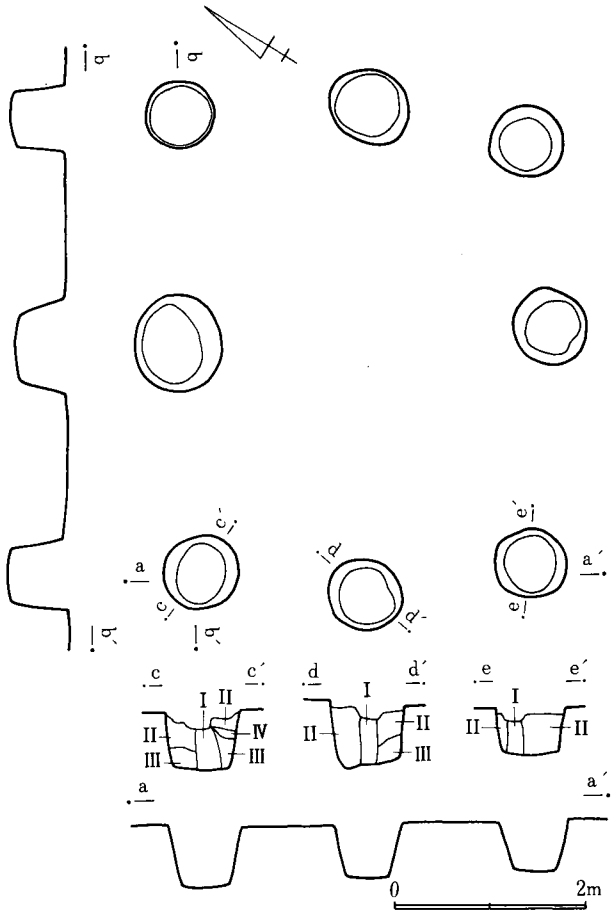


図721 H003号遺構実測図

14. H013号遺構（図722、図版173－1）

III群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、D160が南方に近接している。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。3間×2間の南北棟建物である。柱掘形は径平均0.76m、深さ0.52mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。据かたを検出できた柱穴もある。柱穴内にはI層茶褐色土層、II層褐色土層、III層ローム粒混入褐色土層、IV層ロームブロック層が堆積している。遺物の出土は皆無である。

15. P009号遺構（図723、724、図版173－2）

III群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、D023と重複関係を呈しているため全体については明らかでない。

遺構 現存する最長1.05m、短径0.98mを計る楕円形の平面形を呈する遺構と思われる。東側部分はD023に切断されているため不明であるが、I群中に見られるP001～P004の遺構と同

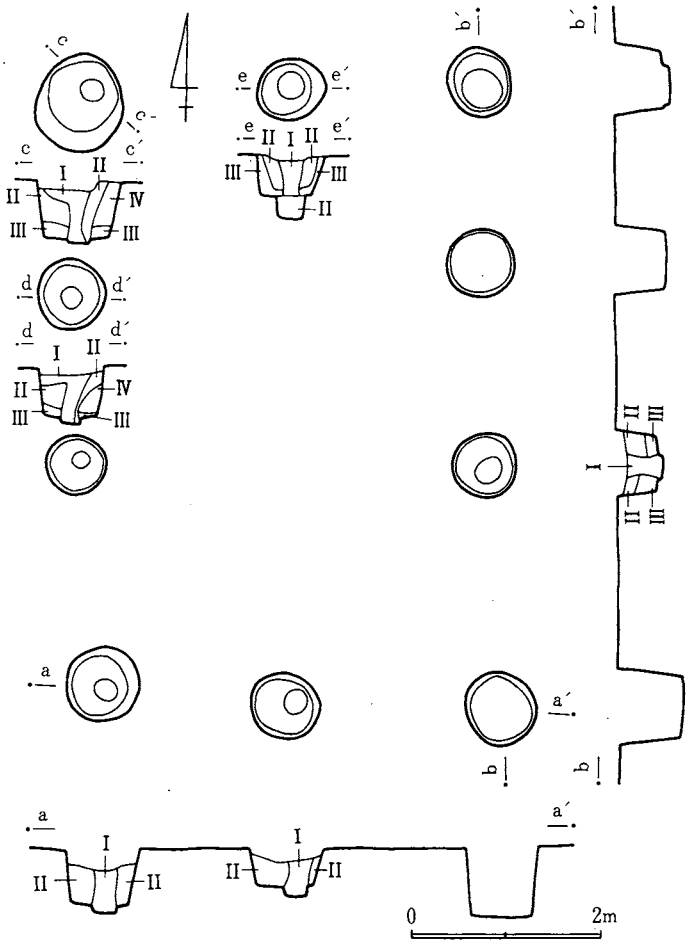


図722 H013号遺構実測図

様な形状を呈していた可能性がある。壁は傾斜を呈して0.5m掘り込んで底面に達する。底面はほぼ平坦で西側に寄って焼土化する部分を検出した。土器の焼成窯と考えて良いであろう。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層焼土粒混入褐色土層、Ⅳ層焼土層が堆積しており遺物はⅠ、Ⅱ層の上部より出土している。

出土遺物　遺物は甕形土器のみである。いずれも口縁部破片で、1、2は口唇部の特徴が同じであるが、3は口唇部側面

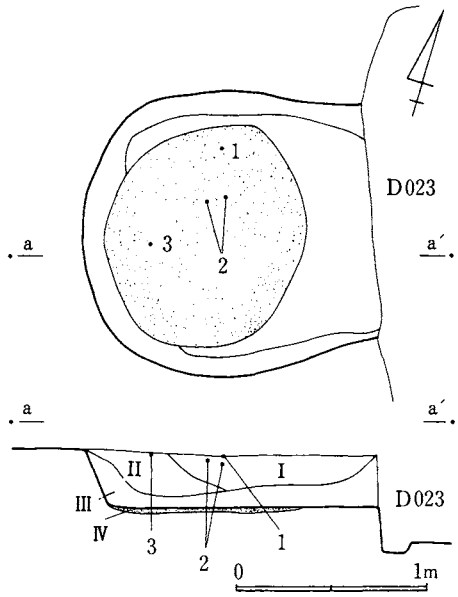


図723 P009号遺構実測図

が面を成し横線が廻っているもので頸部が細い形状を呈している。

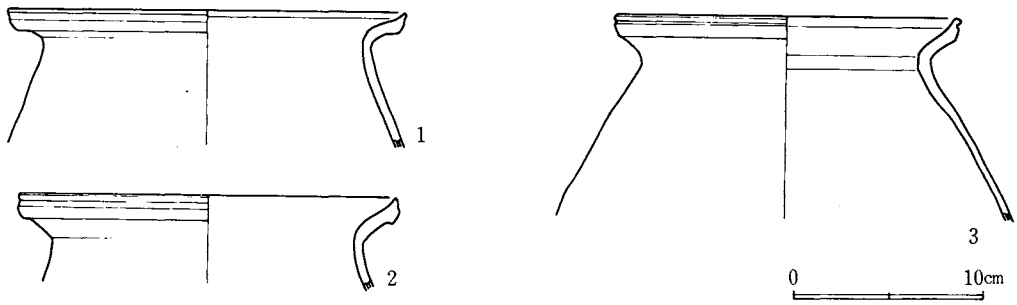


図724 P009号遺構出土遺物実測図

P009出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	7.1	(20.6)	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
2	甕	4.5	(19.6)	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
3	甕	10.6	(17.6)	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	明褐色	

16. P016号遺構（図725、726）

III群の遺構群内において最も西に寄って位置し、D087が東方25mを離れて位置している。南北に連なる溝と重複しているため遺構全体については明らかでない。

遺構　現存する長径1.7m、現存する短径0.8mを計る楕円形の平面形を呈する遺構と思われる。遺構は底面部分が遺存するのみで上部は溝によって切断されており明かにできないが、P009やI群中に見られるP001～P004の遺構と同様な形状を呈していた可能性がある。壁の現存高は0.45mである。底面はほぼ平坦で、そのほとんどが焼土化している。土器の焼成窯と考えて良いであろう。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黄褐色土層、III層焼土粒炭化物混入黒色土層、

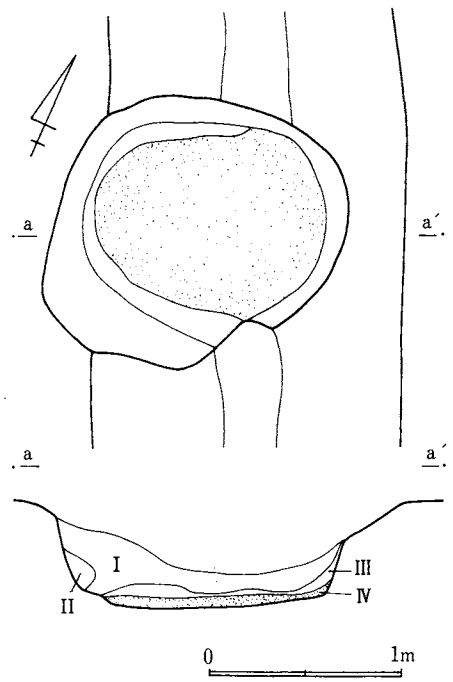


図725 P016号遺構実測図

IV層焼土層が堆積しており、遺物はⅠ層中の出土である。覆土は溝に攪乱されて現状のものとなっているが、本来は0.5m前後にわたる堆積があったと思われる。

出土遺物　遺物は細片のみである。1は甕形土器底部破片、2、3は坏形土器体部の破片である。

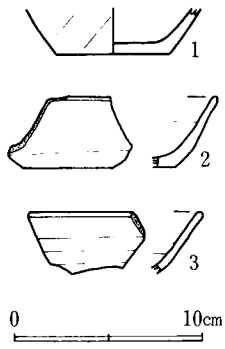


図726　P016号遺構出土遺物実測図

P016出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.0	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	茶褐色	
3	坏	—	—	—	体部破片	——	——	堅緻	茶褐色	

第5節　第IV群の遺構と遺物

歴史時代の第IV群は竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡2棟、ピット1基で構成される群である。W・X・Y－1・2・3の地域において検出した。遺跡の北東部地区界に接している関係で調査範囲が限定されているため公道の北側、および東側について遺構群が広がる可能性を有している。また、既存の宅住部分に遺構が所在する可能性も充分あるためIV群として捉えた遺構数はIII群のように理解するわけにはいかない。よって、資料的には今後補足される調査がなければ完全に群として把握することができないであろう。その反面、個々の遺構における覆土の状況や遺物出土の状況が他群には認められない特異なあり方を示しており、遺跡全体における遺構を理解するうえで参考になる点も指摘できる。

住居跡は2～3軒を小グループとして散漫な状況を呈して分布している。カマドの指向方位も北方を中心としながらも東、西を指向する住居も見られ、他群に認められない傾向を呈している。

掘立柱建物跡は2棟のみの検出であるが、近くに既存住宅がありこの約525㎡部分に所在する可能性がある。住居跡2軒と重複関係を呈しているのも特徴といえよう（図727、図版129）。

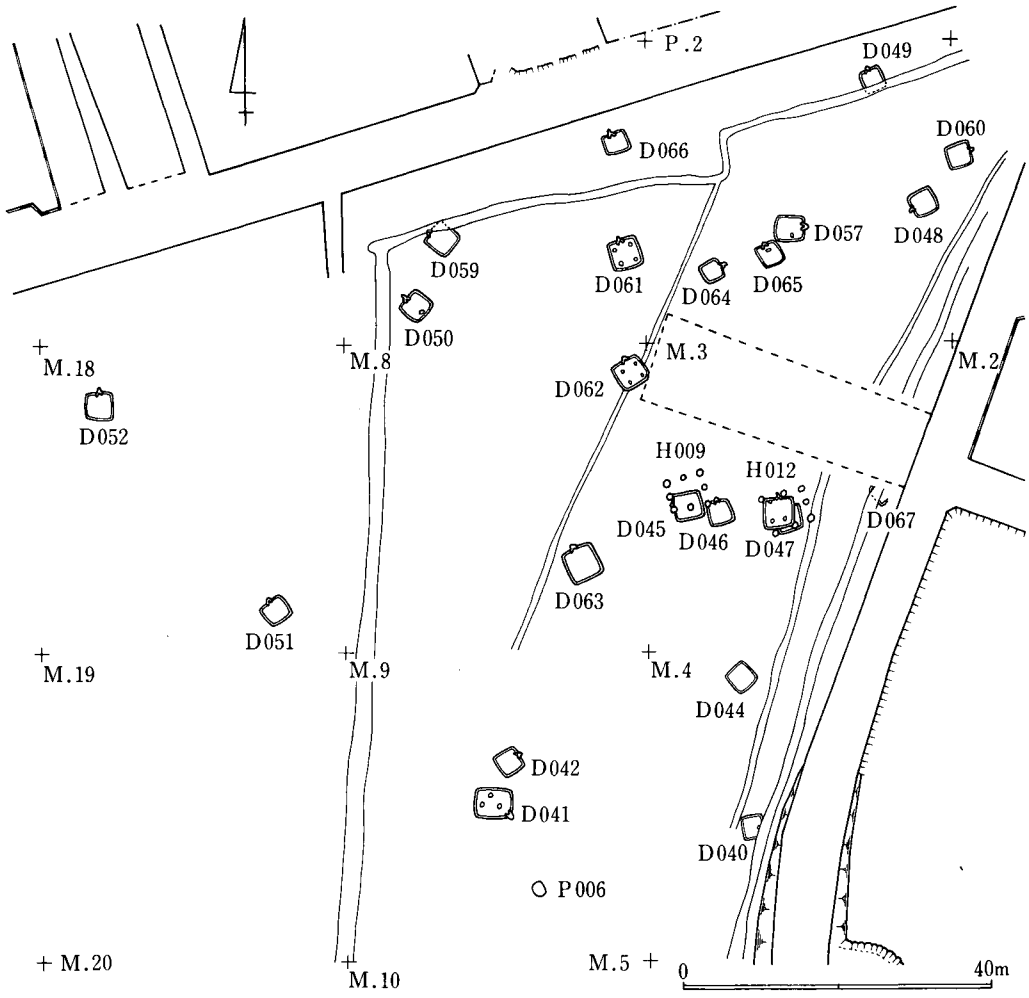


図727 歴史時代第Ⅳ群遺構分布状況図

1．D040号遺構（図728、図版46－1）

本遺構は内部施設等の状況から弥生時代後期に構築されたものと判断したが、出土した遺物は歴史時代に比定できるものであり、遺物については本項において報告する。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1、2で、1は緩やかに外反する口縁を呈し、2は口唇部に特徴がある口縁で「く」字状に外反している。坏形土器は3～7で、3～6は口径12cm前後のものである。7は体部に墨書のある破片である。8は手捏による小形な坏の底部である。

D040出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	10.5	(20.7)	—	口縁部	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	甕	—	—	—	口縁～胴下部破片	ヨコナデ 磨き	砂粒	堅緻	明灰褐色	
3	坏	3.4	11.4	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
4	坏	3.9	11.9	6.6	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
5	坏	4.2	(11.4)	5.8	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明
6	坏	4.4	(12.2)	6.5	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
7	坏	—	—	—	体部破片	——	砂粒	堅緻	褐色	墨書「主」
8	坏	1.8	—	4.4	底部	——	砂粒	堅緻	明褐色	手捏 木葉痕

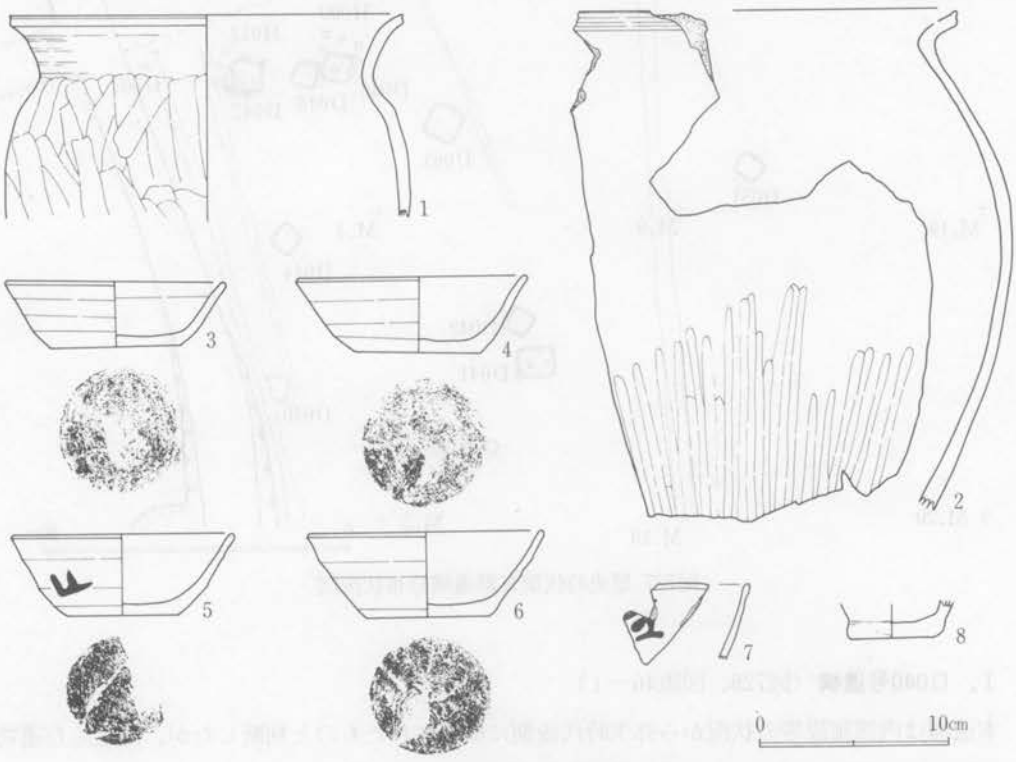


図728 D040号遺構出土遺物実測図

2．D041号遺構（図729～731、図版179－1、2、189、191）

Ⅳ群の住居群内において最も南側に位置し、D042が北側に、P006が南側に近接している。部分的に攪乱を受けているが全体を把握するには充分である。

遺構 北壁4.5m、東壁2.9mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、かなり特異な状況を呈している住居跡である。壁はほぼ垂直に0.36m掘り込んでおり、直下には幅0.23m、深さ0.08mの壁溝が四壁に認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上には3か所にわたり径0.3m、深さ0.4mの小ピットを検出したが、その配置から柱穴とは考えられない。

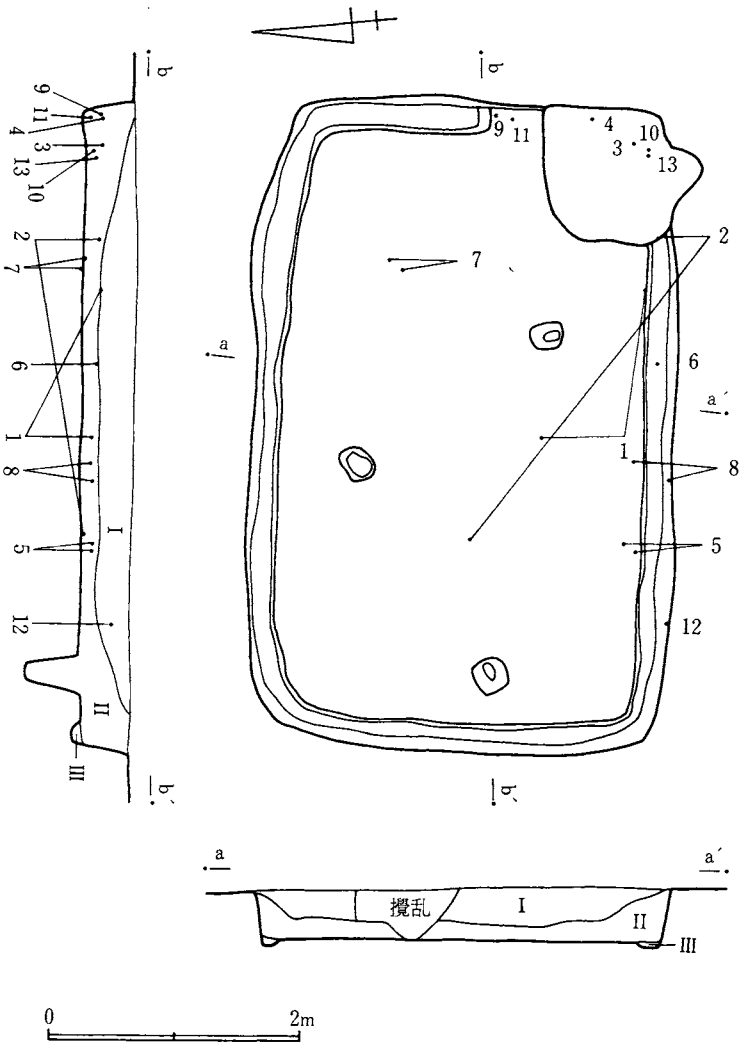


図729 D041号遺構実測図

カマド　東壁と南壁コーナー部を0.6m三角形に掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出しまで一体化している。天井部は煙道部分にのみ遺存している。火床に相当する部分は壁溝をコーナー部分で拡幅して形成している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黄褐色土層、III層暗褐色土層が堆積しており、遺物はII層床面を中心に住居南側に偏在して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、高坏形土器がある。甕形土器は1、2で叩き目がある広口甕の口縁部である。坏形土器は3～9で口径 12cm 前後である。10は体部に墨書がある破片である。11は造り付け高台の底部破片である。高坏形土器は13で脚部のみである。12は壺形土器の底部破片であるが硯として使用している。

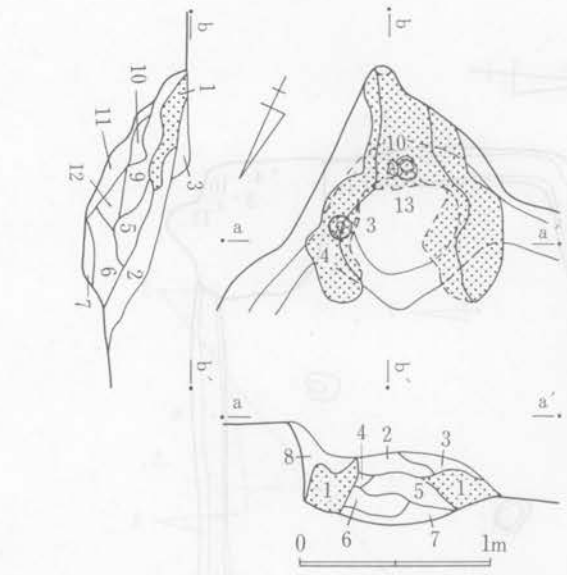


図730 D041号遺構カマド実測図

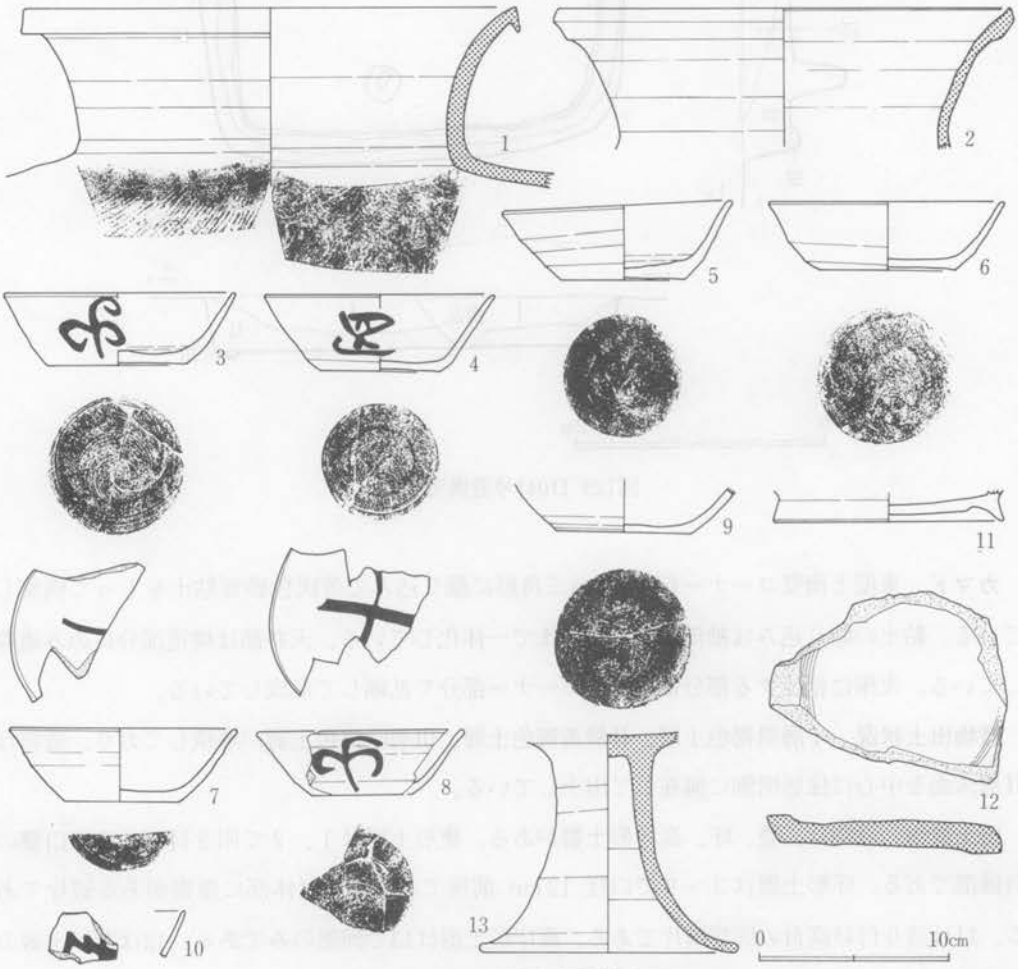


図731 D041号遺構出土遺物実測図

D041出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	広口甕	—	26.0	—	1/3	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰白色	
2	広口甕	(7.7)	(24.0)	—	1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	暗茶褐色	
3	坏	3.7	12.0	7.2	完形	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	灰褐色	墨書「ゐ」 糸切り
4	坏	3.9	12.0	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	墨書「岡」 糸切り
5	坏	3.8	12.0	6.6	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	
6	坏	3.5	12.2	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り
7	坏	3.8	(11.8)	—	破片	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
8	坏	3.4	(10.7)	5.2	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	墨書「十」、 「ゐ」
9	坏	—	—	7.2	破片	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	暗褐色	内面磨
10	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書「主」
11	高台付坏	—	—	12.0	底部破片	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	褐色	
12	壺	—	—	—	底部	——	——	やや軟弱	暗灰色	硯として使用
13	高坏	11.4	—	13.2	脚部	——	砂粒	堅緻	明褐色	

3．D042号遺構（図732～735、図版179－3）

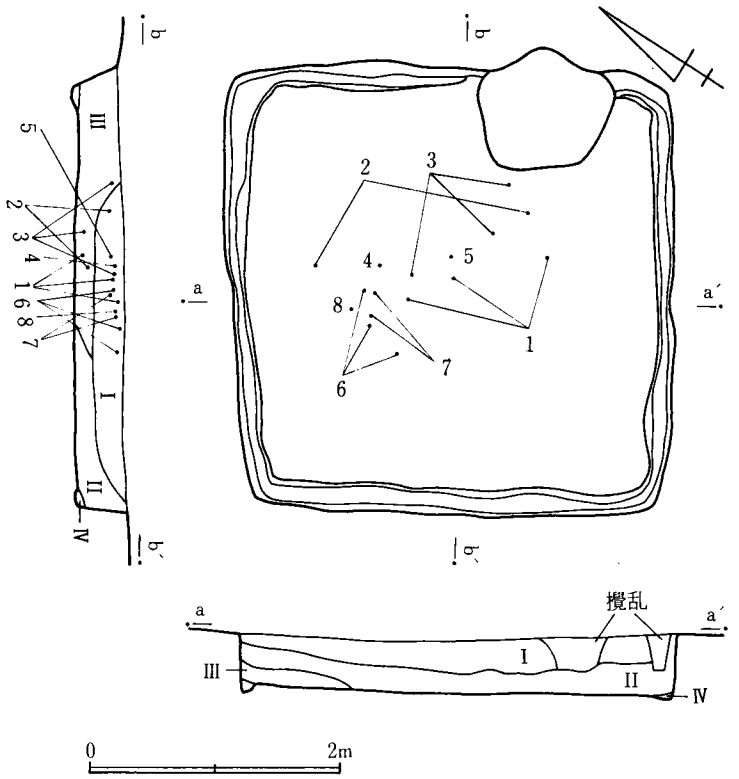


図732 D042号遺構実測図

IV群の住居群内において南側に位置し、D041が南方に近接している。トレンチャーによる攪乱を受けているが全体は充分把握することができる。

遺構　北壁3.4m、東壁3.48mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.38m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.07mの壁溝が四壁に認められる。床面は四隅が若干軟弱なものの中央部は堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかったが、床下調

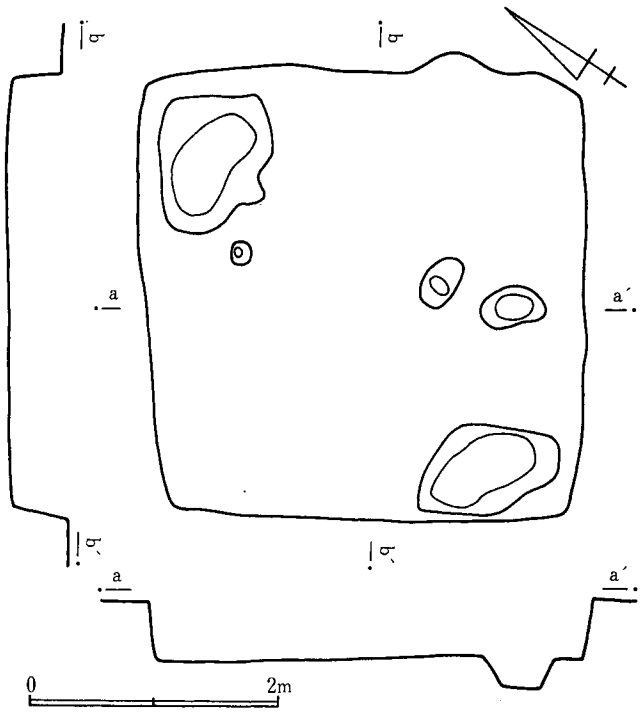
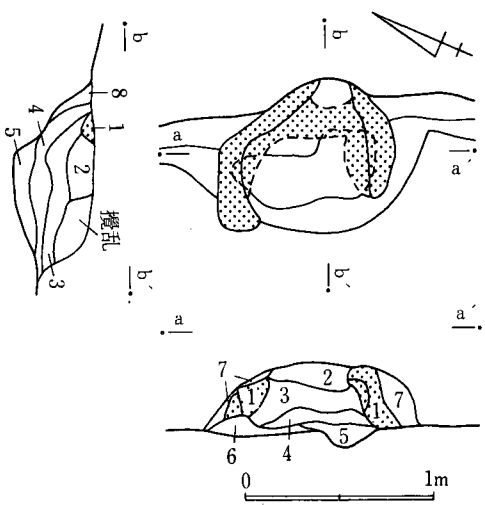


図733　D042号遺構床下状況図



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒色土層
3　1層混入黒色土層
4　焼土ブロック層
5　焼土ブロック混入黒色土層
6　ロームブロック層
7　茶褐色土層
8　黒褐色土層

図734　D042号遺構カマド実測図

査において北東壁コーナー部と南西壁コーナー部で長径1.12m、深さ0.1mの楕円形の落ち込みを検出した。また、径0.45m前後、深さ0.12mの小ピットを3か所にわたって検出した。

カマド　東壁中央部より右に寄って約0.2m掘り込んで黄灰色砂質粘土によって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火袋部に相当する部分は焼土化を呈している。天井部は煙出し部にわずか遺存する。火床は壁溝を拡幅して形成している。

遺物出土状況　Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層黄茶褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ層を中心に住居中央部に集中して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～6で、1～4は小形の甕、5、6は叩き目がある広口甕である。坏形土器は7、8で口径と底径の差があまりない形状を呈している。8は須恵器である。

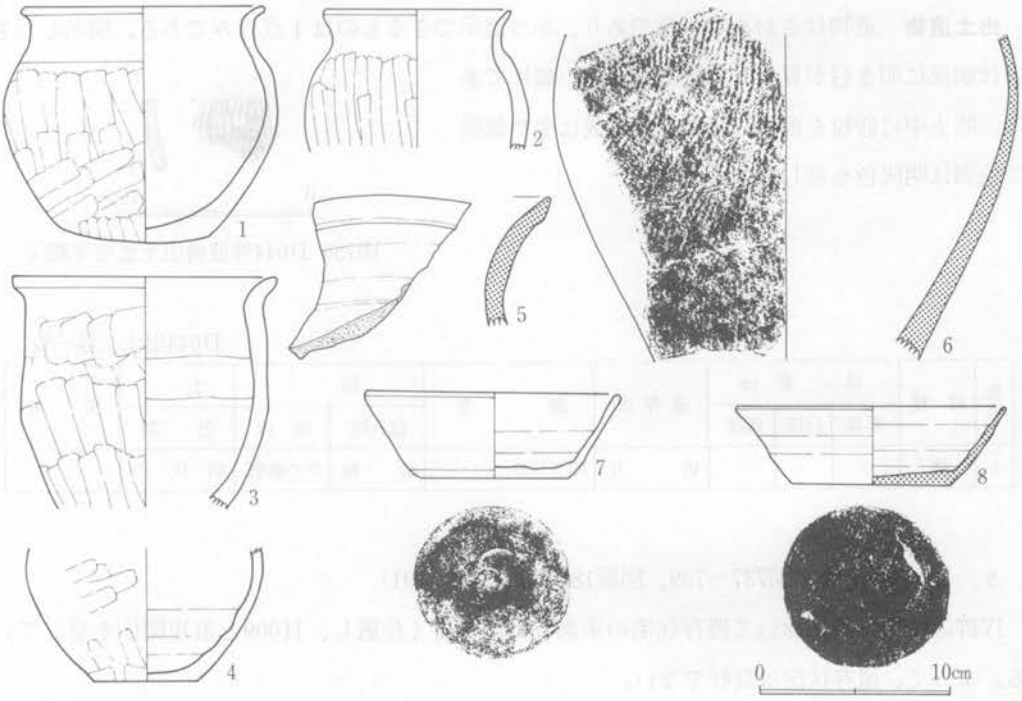


図735　D042号遺構出土遺物実測図

D042出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	12.3	12.6	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	7.3	(9.6)	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	
3	甕	12.0	(13.5)	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	5.2	½	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	甕	—	—	—	破片	——	——	堅緻	暗灰色	
6	甕	(17.0)	—	—	1/3	叩きじめ	砂粒	やや軟弱	灰色	
7	坏	4.4	13.6	7.9	2/3	下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)赤褐色 (外)黒色	ヘラ切り
8	坏	4.0	(13.9)	8.4	2/3	底部回転ヘラ削り 一方向のヘラ削り	砂粒	やや軟弱	暗灰色	

4．D044号遺構（図736、図版46－2）

本遺構は内部施設等の状況から弥生時代後期に構築されたものと判断したが、出土した遺物はきわめて少ないが、いずれも歴史時代に比定できるものであり、遺物については本項において報告する。

出土遺物　遺物はきわめて少量であり、かつ図示できるものは1点のみである。図示したものは胴部に叩き目が見られる甕形土器。小破片である。胎土中に砂粒を混入しており、焼成はやや軟弱で色調は明灰色を呈している。

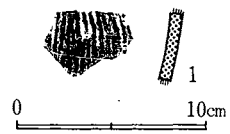


図736　D044号遺構出土遺物実測図

D044出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	叩きじめ	砂粒	やや軟弱	明灰色	

5．D045号遺構（図737～739、図版180－1、189、191）

IV群の住居群内において既存住宅の未調査地区に近く位置し、H009と重複関係を呈している。よって、遺存状況は良好でない。

遺構　東壁3.28m、南壁3.32mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。住居中央部、西壁、それに西壁と北壁のコーナーはH009によって切断されている。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除いて認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。

カマド　西壁中央部より右に寄って壁を0.2m掘り込んで構築している。粘土の貼り込みは認められず、袖芯はローム地山を削り出して形成し、火床部分は大きく擂鉢状に窪んでいる。火袋部に相当する部分の袖芯が焼土化しているところを見ると粘土の貼り込みは天井部のみであったようである。しかし、天井部は遺存していないため明らかにできない。

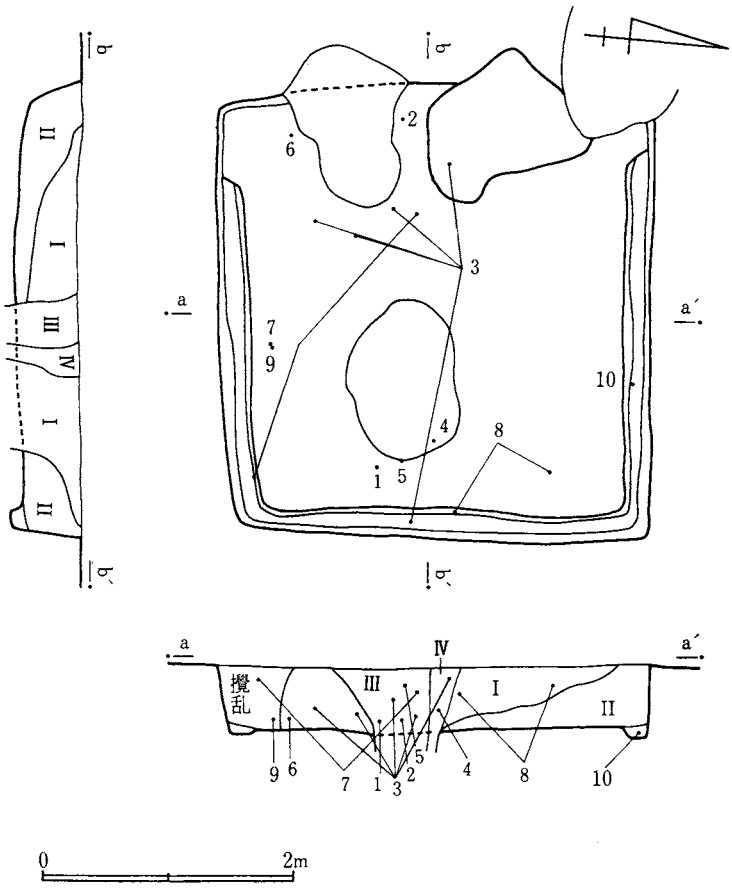
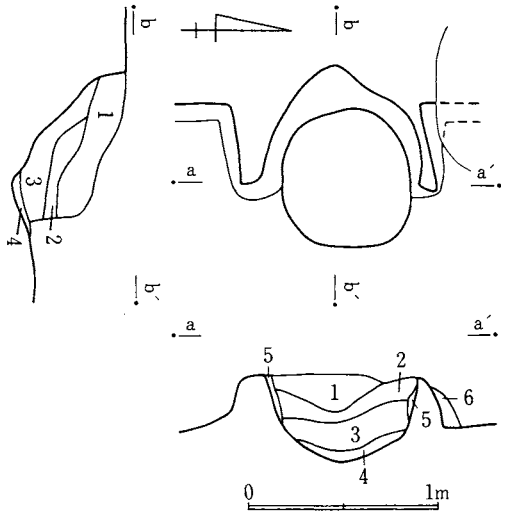


図737 D045号遺構実測図



1 暗褐色土層
2 黒褐色土層
3 焼土粒混入赤褐色土層
4 ロームブロック層
5 焼土層
6 暗茶褐色土層

図738 D045号遺構カマド実測図

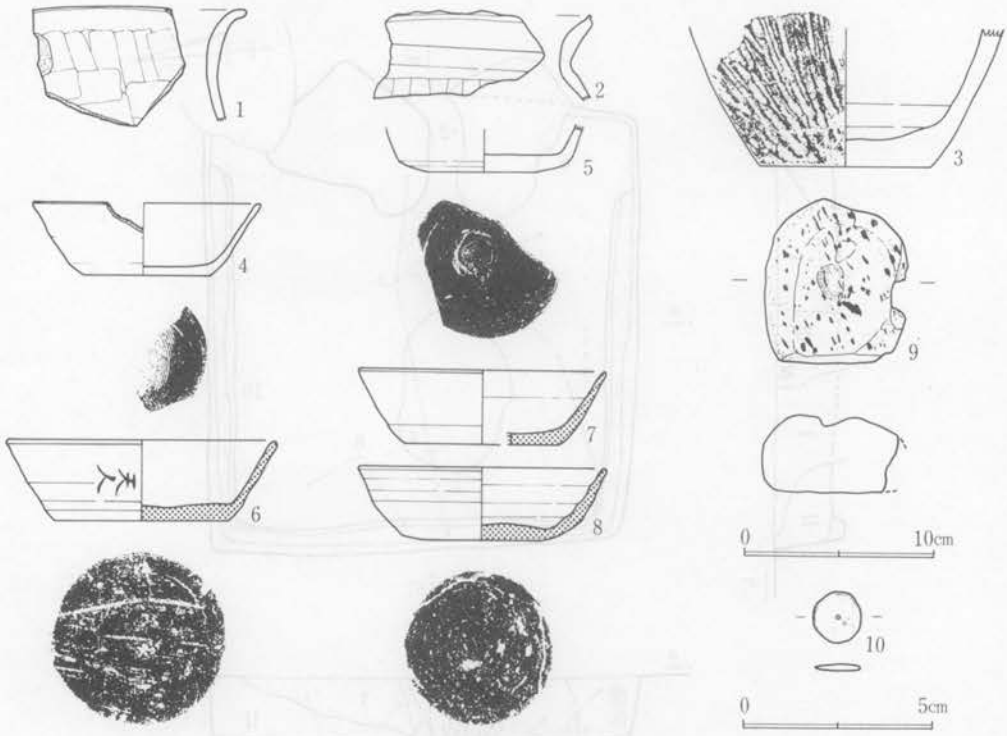


図739 D045号遺構出土遺物実測図

D045出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	7.3	—	9.0	底部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	(内)灰褐色 (外)黒褐色	
4	坏	3.8	(11.7)	(6.6)	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り
5	坏	2.3	—	5.6	底部破片	底部回転ヘラ削り	——	堅緻	明褐色	糸切り
6	坏	4.2	(14.0)	9.2	3/4	底部一方向のヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	墨書「天人」
7	坏	3.7	(12.8)	(8.2)	1/4	底部一方向のヘラ削り	——	やや軟弱	灰色	
8	坏	3.8	12.8	6.0	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	やや暗灰色	

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層ロームブロック層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土の中層部分より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で、1は緩やかに外反する口縁部の破片、2は「く」字状に外反する口縁部の破片で、3は条痕状に磨かれた底部の破片である。坏形土器は4～8でいずれも体部が直線的に開き、口径と底径の差があまりない

形状を呈している。6～8は須恵器である。石製品は9の軽石で用途不明であるが摩滅痕が認められる。10は滑石製の単孔円板で、径1.3cm、厚さ0.2cmを計り、中央部に0.1cmの小孔があく。

6．D046号遺構（図740～743、図版180－2、189、191）

IV群の住居群内において既存住宅の未調査地区に近く位置し、D045と同様H009と重複関係を呈している。覆土を掘り下げ床面近くに達して炭化物、焼土塊を検出するに至り、本遺構が焼失したものと判断できた。

遺構　北壁2.98m、東壁2.98mで若干胴張が認められる方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。北壁の一部、カマドにかかりH009の攪乱を受けている。壁は垂直に0.46m掘り込んでおり、直下には幅0.29m、深さ0.07mの壁溝が北壁を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。住居中央部より南西部分において大きい炭化物、焼土塊を検出した。柱穴は検出できなかった。

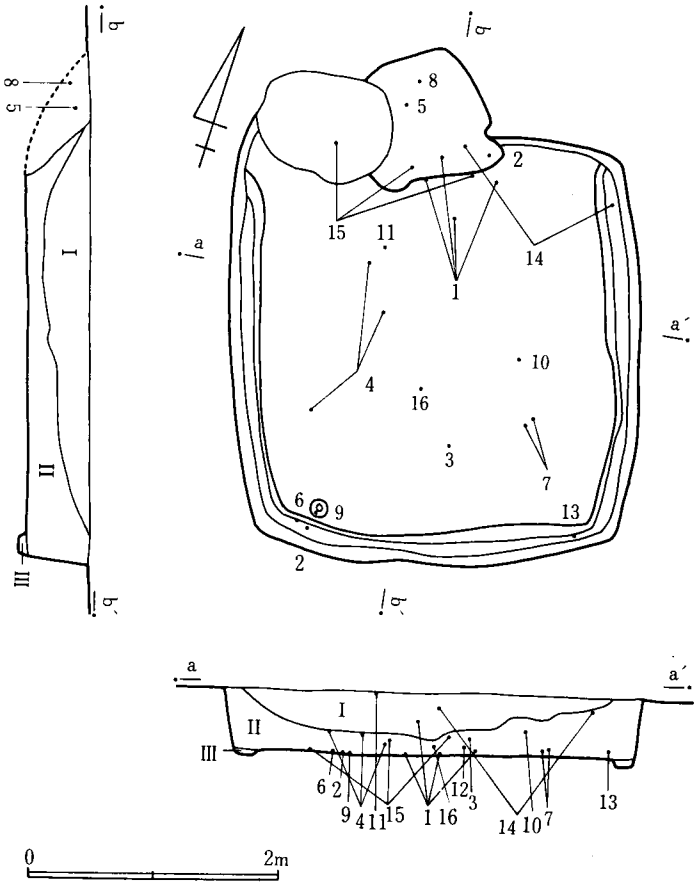


図740　D046号遺構実測図

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築しているがH009の柱穴によって左袖部が攪乱を受けており遺存状況は良好でない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物はII層床面を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、蓋、坏、皿、鉢形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1は小形の甕、2は口唇部に特徴のある口縁部の破片、3、4は胴部に叩き目がある口縁部破片である。蓋形土器は5で扁平な

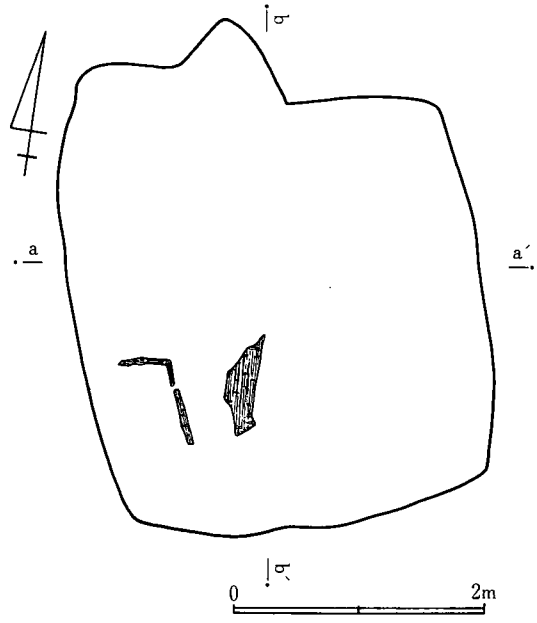
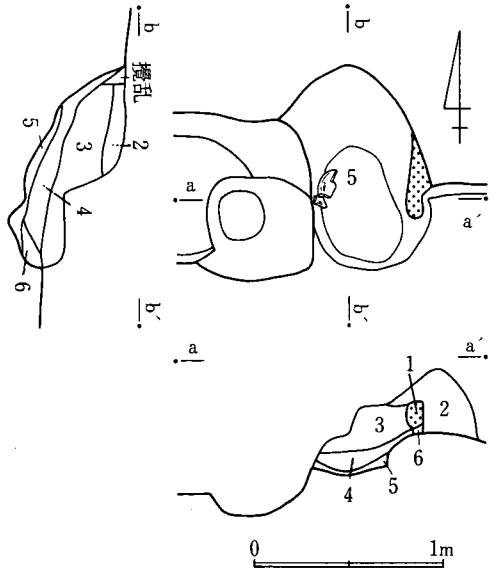


図741　D046号遺構炭化物出土状況図



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　1層混入暗褐色土層
4　焼土粒混入暗褐色土層
5　ロームブロック層
6　黄褐色土層

図742　D046号遺構カマド実測図

D046出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	11.1	12.4	6.2	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ナデ	砂粒	やや軟弱	暗灰褐色	

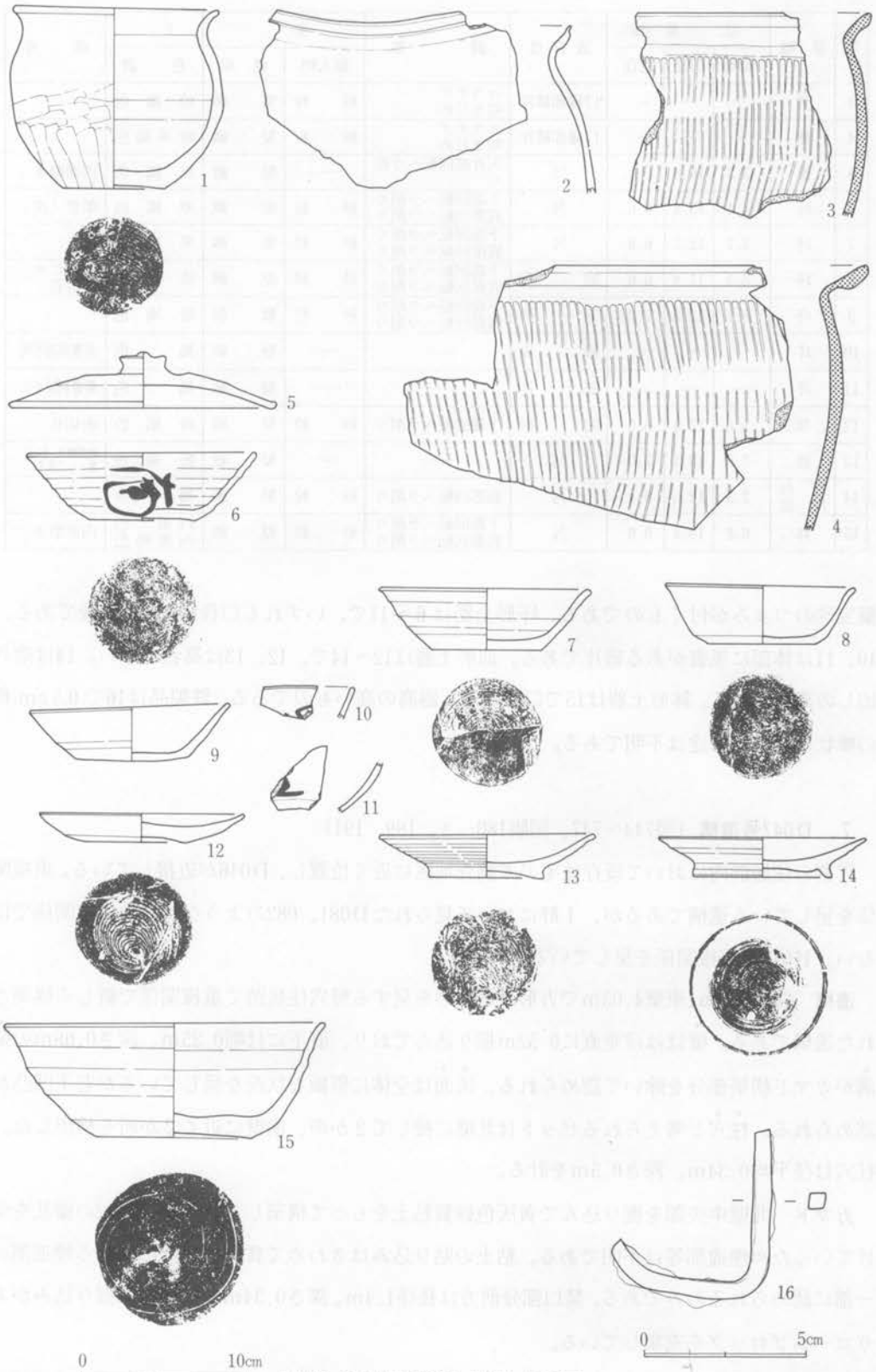


図743 D046号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	暗褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	暗茶褐色	
5	蓋	3.3	16.0	—	½	天井部回転ヘラ削り	——	堅緻	黒褐色	内面磨き
6	坏	4.1	13.8	6.6	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	墨書「南」
7	坏	3.7	12.7	6.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
8	坏	3.5	11.4	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	体部にタール付着
9	坏	3.7	12.5	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	暗褐色	
10	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
11	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
12	皿	1.6	12.4	6.0	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	糸切り
13	皿	2.5	13.1	7.0	½	——	——	堅緻	赤褐色	内面磨き、糸切り、硯として使用
14	高台付皿	2.3	12.6	8.4	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
15	鉢	6.8	19.4	9.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)褐色 (外)黒褐色	内面磨き

擬宝珠のつまみが付くものである。坏形土器は6～11で、いずれも口径 12cm 前後である。10、11は体部に墨書がある破片である。皿形土器は12～14で、12、13は高台がない。14は造り出しの高台がある。鉢形土器は15で口径に対し器高の高いものである。鉄製品は16で 0.5cm 角の棒状のもので用途は不明である。

7．D047号遺構（図744～747、図版180－3、189、191）

IV群の住居群内において既存住宅の未調査地区に近く位置し、D046が近接している。重複関係を呈している遺構であるが、I群において見られたD081、082のような状態の重複関係ではない。H012と重複関係を呈している。

遺構　北壁3.9m、東壁4.03mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で重複関係で新しく構築された遺構である。壁はほぼ垂直に0.52m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが若干凹凸が認められる。柱穴と考えられるピットは北壁に接して2か所、南壁に近く2か所を検出した。柱穴は径平均0.34m、深さ0.5mを計る。

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築しているが、H012の攪乱を受けているため煙道部等は不明である。粘土の貼り込みはきわめて貧弱な状況で袖から煙道部の一部に認められるのみである。焚口部分前方は長径1.4m、深さ0.34mの擂鉢状の掘り込みがありロームブロックを充填している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ロームブロック混入暗褐色土層、V層褐色土層が堆積し

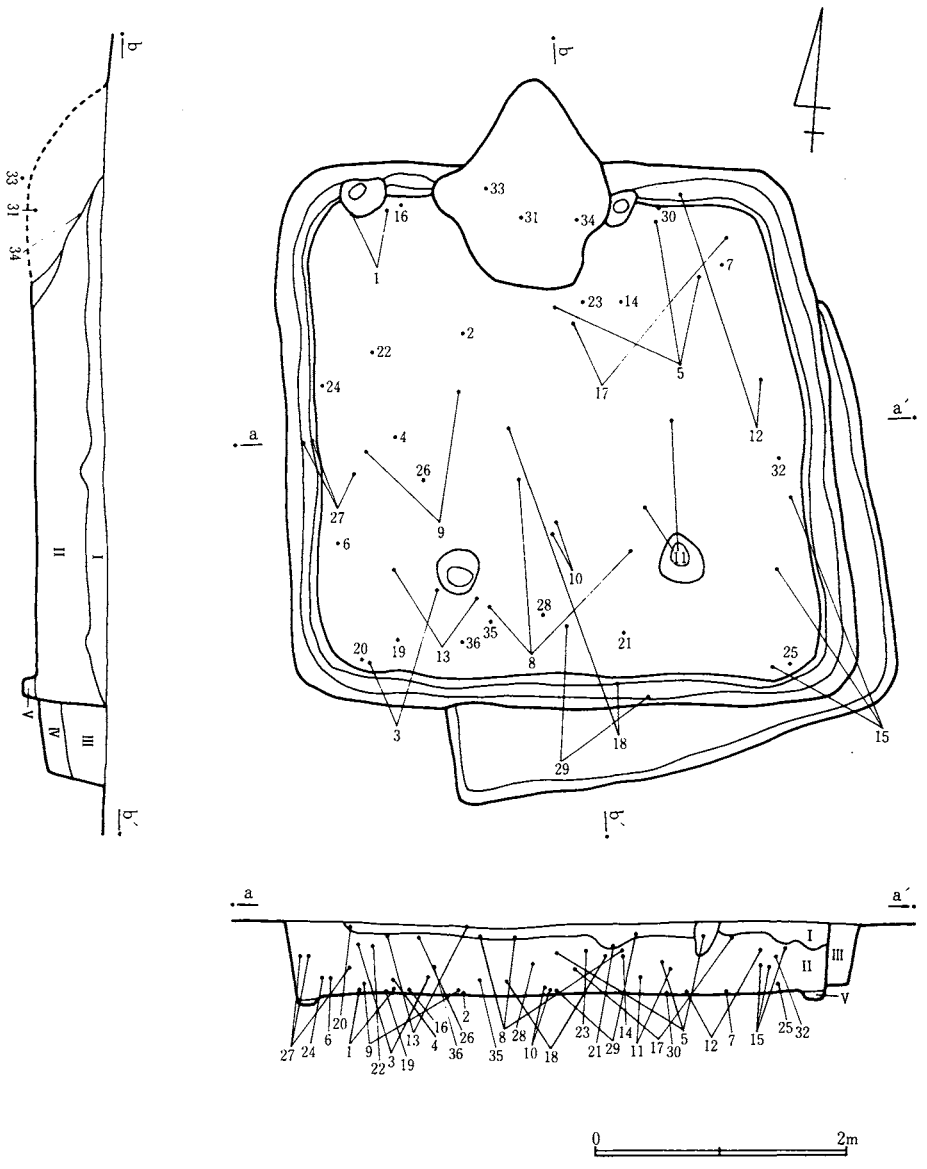


図744 D047号遺構実測図

ており、床面上を中心にII層中より住居全体にわたり出土している。

出土遺物 遺物は、甕、甑、壺、坏、皿形土器と、石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1は小形の甕、3、4は胴部に叩き目がある。甑形土器は5～7でいずれも叩き目があり、5、7には小把手が付いている。壺形土器は8の胴部破片で、部分的に自然釉が認められる。坏形土器は9～26で、口径が12cm前後の9～14と、口径15cm前後の15～19がある。20～26は体部に墨書がある破片である。皿形土器は27～29で、27は造り出し、28、29は造り付け高台が付く。石製品は凝灰岩製の砥石で研ぎべりが著しい。鉄製品は31～32の刀子、34の鎌の破片、

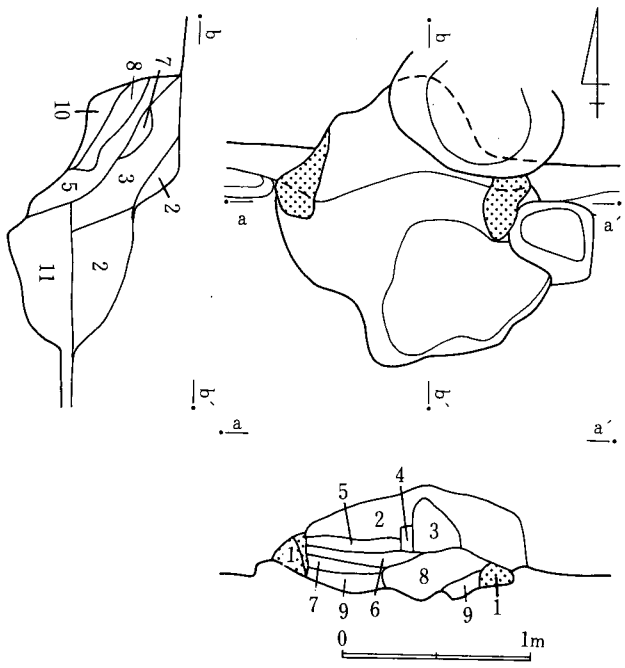


図745 D047号遺構カマド実測図

35の角棒が輪状になったものがある。36は鏃で木質が柄に付着しているのが認められる。

D047の下部に位置する遺構は、そのほとんどがD047構築時に破壊されており、東壁と、南壁部分を残すのみである。D047の床下調査時において下部遺構の柱穴、壁溝、それにカマドの火床部分等が検出できるものと考え調査を実施したが何ら検出することはできなかった。ただし、住居跡であることは間違いないようである。推定東壁3m、南壁3.5mの規模で、壁溝は認められない。

D047出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎 混入物	焼成	土 色調	備考
1	甕	(5.5)	(10.8)	—	3/4	ヨコナデ ヘラ削	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)暗褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	灰褐色	
4	甕	9.9	—	14.8	底部	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(外)茶褐色 (内)黒褐色	
5	甑	(12.1)	(37.2)	—	1/5	叩きじめ	砂粒	堅緻	赤褐色	
6	甑	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	(外)茶褐色 (内)黒褐色	
7	甑	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)赤褐色	
8	壺	—	—	—	口縁部破片	———	——	やや軟弱	(外)灰色 (内)暗赤色	
9	坏	3.4	12.4	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	

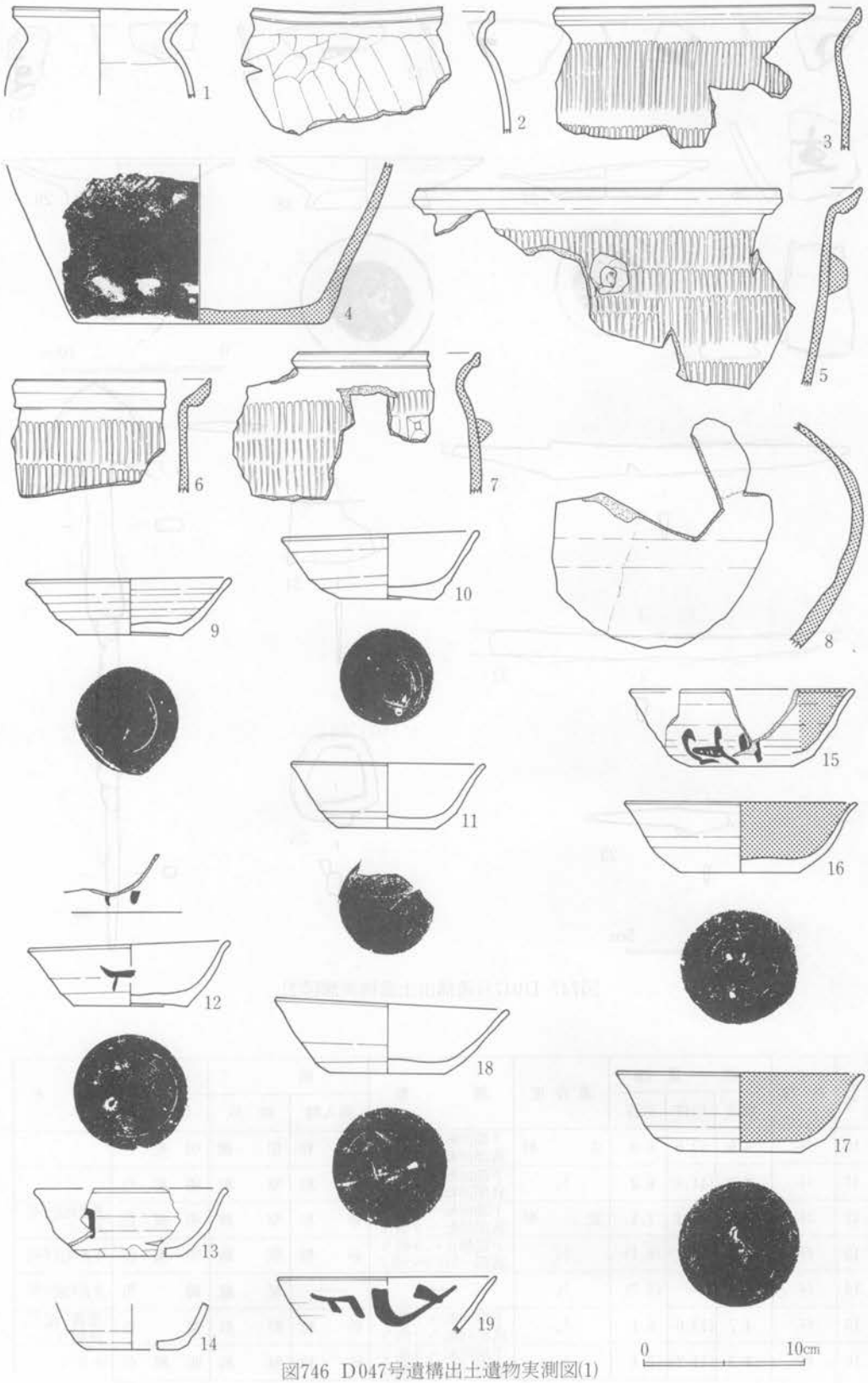


図746 D047号遺構出土遺物実測図(1)

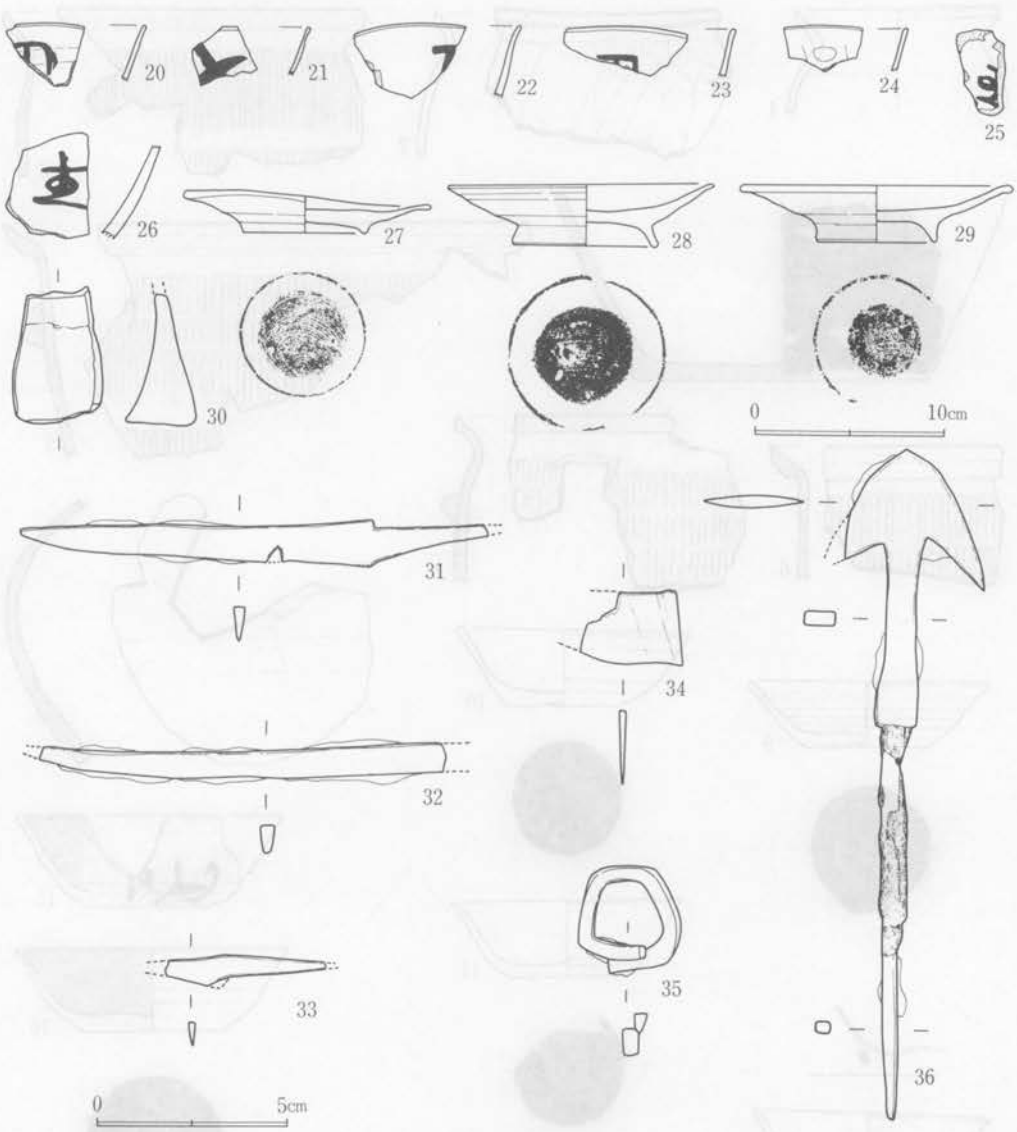


図747 D047号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
10	坏	4.0	12.0	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
11	坏	4.0	(11.8)	6.2	3/5	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
12	坏	3.8	12.2	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明 糸切り
13	坏	4.2	(11.7)	(6.1)	1/6	下端静止ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明
14	坏	2.8	—	(5.7)	1/4	——	——	堅緻	褐色	墨書判読不明
15	坏	4.7	(13.6)	6.4	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	墨書「宜二」 糸切り
16	坏	4.3	(14.2)	7.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
17	坏	4.8	(15.2)	7.6	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	内黒
18	坏	4.2	14.4	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
19	坏	(3.3)	12.9	—	⅓	——	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明
20	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明
21	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明
22	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	(内)茶褐色 (外)褐色	墨書判読不明
23	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明
24	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	暗褐色	焼成後線刻
25	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	明褐色	墨書「主」
26	坏	—	—	—	破片	——	——	やや堅緻	明褐色	墨書「主」
27	高台付皿	1.9	12.7	6.5	完形	——	砂粒	やや軟弱	明褐色	糸切り
28	高台付皿	3.2	13.9	7.6	完形	——	——	堅緻	明褐色	内面磨き 糸切り
29	高台付皿	3.0	(13.8)	6.2	完形	——	砂粒	堅緻	明褐色	

8．D048号遺構（図748、749、図版181—1、189）

IV群の住居群内において東側の地区界に近く位置し、D060が近接している。覆土がロームブ

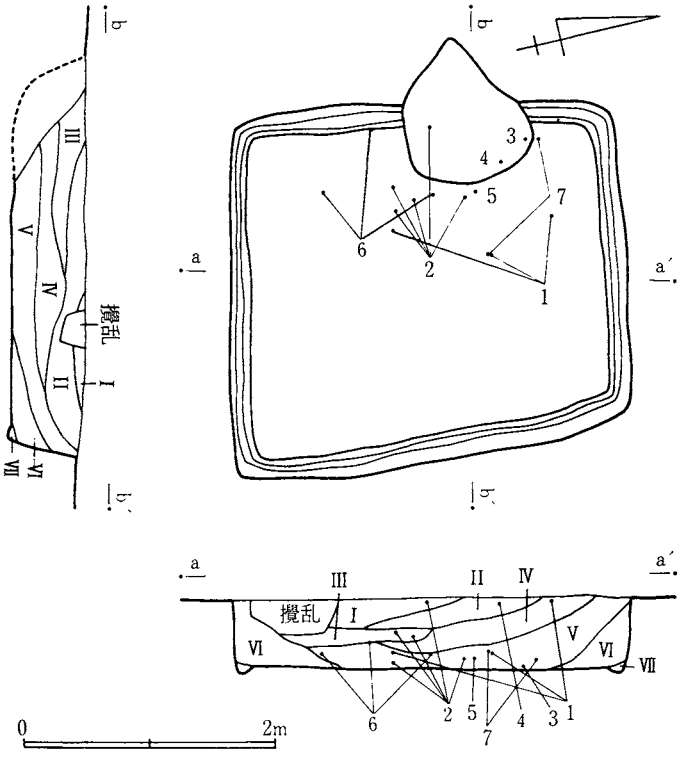


図748 D048号遺構実測図

ロックを主体に構成されるものであるため人為的な埋設を受けた遺構の可能性を有している。

遺構　北壁2.34m、西壁３mで多少歪を生じるが方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認めることができる。床面は全体に軟弱な状況を呈しているが、部分的に堅緻な部分も認められる。柱穴は検出できなかった。

カマド　西壁中央部より若干右に寄って構築されている。カマド調査中に破壊されてしまったため実測未完になってしまった。よって実測図を掲載することはできない。調査中の所見では黄灰色砂質粘土が袖から煙出し部まで一体化して貼り込まれ、部分的に天井部も認められている。

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入褐色土層、Ⅱ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅲ層黒褐色

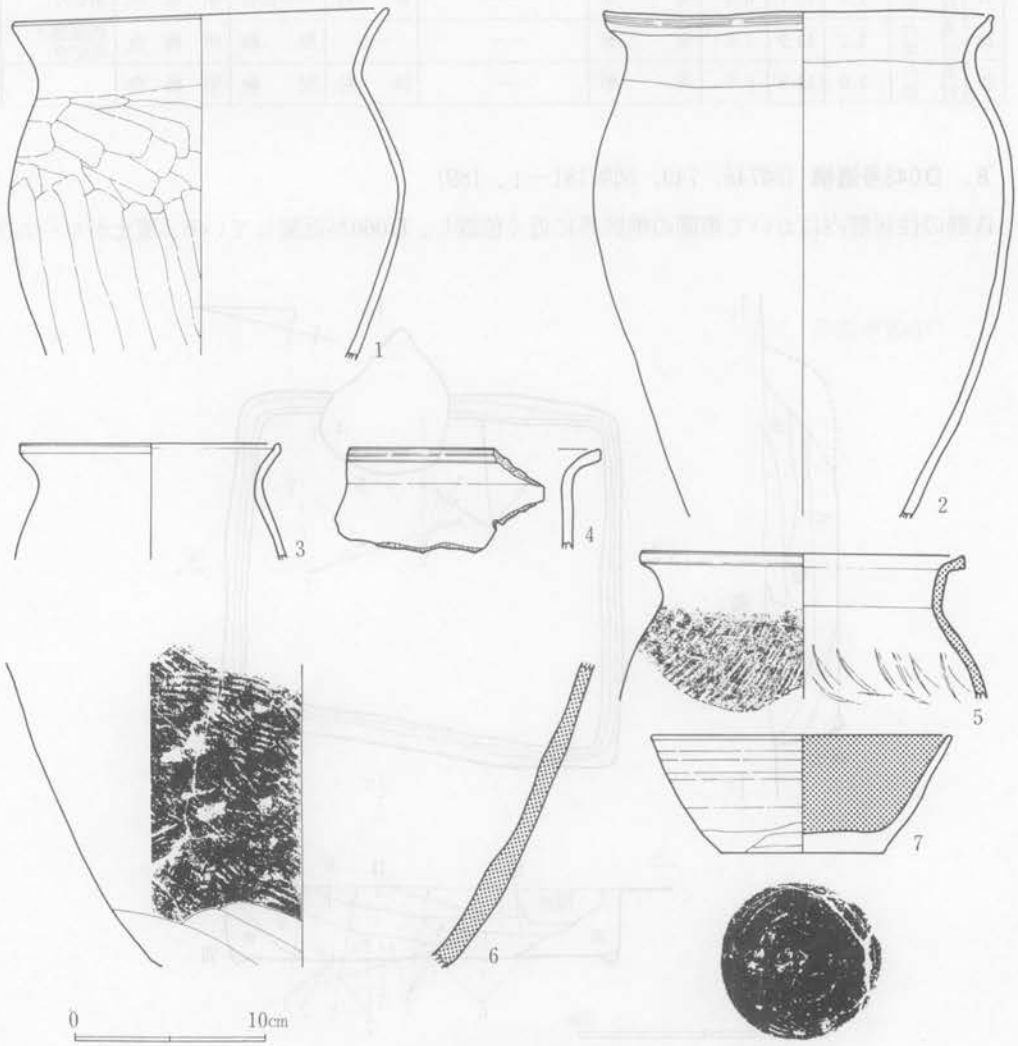


図749　D048号遺構出土遺物実測図

土層、IV層ロームブロック混入暗褐色土層、V層ロームブロック混入黒褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層褐色土層が堆積している。覆土は自然堆積を開始してVI層が堆積した後に人為的に埋設された可能性が考えられる。遺物はV層を中心にカマド前方部分に集中して出土した。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～6で、1は口縁が「く」字状に外反するもので器壁が薄い。2は口唇部に特徴がある。3は小形の甕、4は口縁部が水平に開く。5、6は叩き目がある広口甕である。坏形土器は7で体部が直線的に開き、器高が高く内面は黒色処理している。

D048出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	17.6	19.6	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)褐色	
2	甕	26.1	20.1	—	⅔	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)明褐色	
3	甕	(6.0)	13.3	—	口縁部½	叩きじめ ヘラ削	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	暗褐色	
5	甕	(7.5)	17.0	—	½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
6	甕	—	—	—	胴部下半	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	軟弱	灰色	
7	坏	6.0	(15.7)	8.6	⅓	下端静止ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	暗褐色	内黒 糸切り

9．D049号遺構（図750～752）

IV群の住居群内において北側の地区界に近く位置し、D048、D060が近接してくる。遺構南側を溝によって攪乱されているため、遺存状況は良好でない。

遺構　北壁2.5m、東壁推定2.7mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.14m掘り込んでおり、直下には幅0.12m、深さ0.04mの壁溝が南壁は不明であるが、カマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴は検出できな

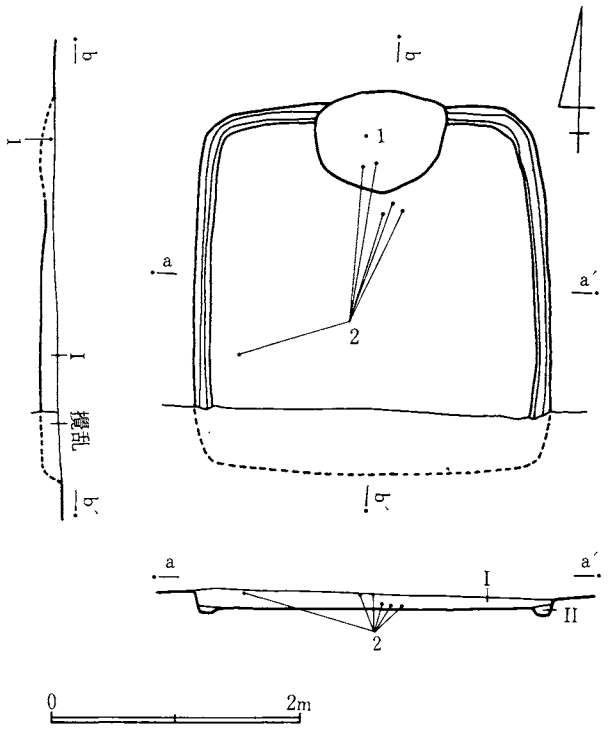
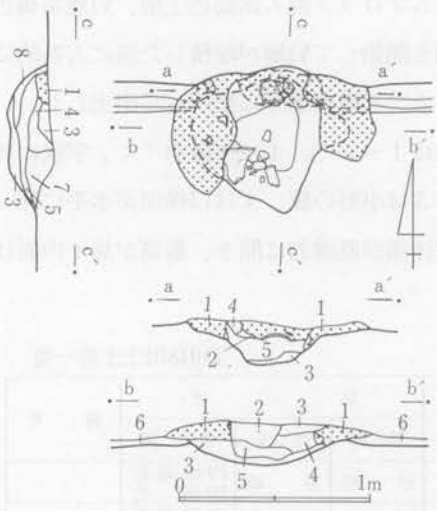


図750　D049号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 焼土ブロック混入黒色土層
3 黒褐色土層
4 焼土粒混入黒褐色土層
5 炭化物混入焼土ブロック層
6 茶褐色土層
7 焼土粒混入褐色土層
8 暗褐色土層

図751 D049号遺構カマド実測図

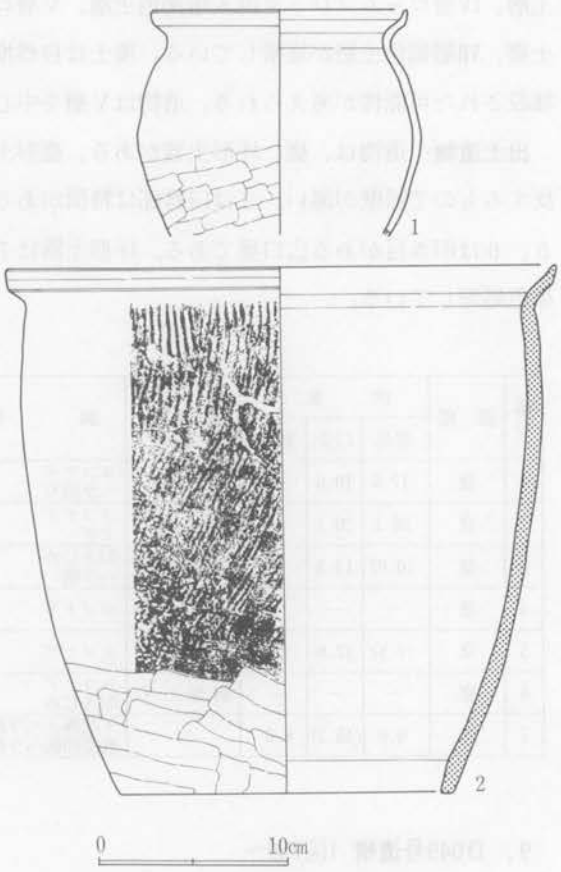


図752 D049号遺構出土遺物実測図

かった。

カマド 北壁中央部をわずか0.15m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出しまで一体化しており、火袋部に相当する部分は焼土化を呈している。天井部は煙出し部に一部認められるだけである。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層褐色土層が堆積しているが、覆土の主体はⅠ層で、遺物はカマド前方部分に集中して出土している。

出土遺物 遺物は、甕、甑形土器がある。甕形土器は1で、口唇部が直立する特徴のある小形な甕である。甑形土器は2で甑としては器高が低く胴部に叩き目がある。

D049出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	11.9	(13.4)	—	1/5	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甑	27.4	(29.0)	(17.6)	1/3	ヨコナデ、叩きじめ、ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)暗褐色 (外)明褐色	

10. D050号遺構（図753～755、図版181－2）

IV群の住居群内において北側の地区界に近く位置し、北方にD058が近接している。覆土がロ

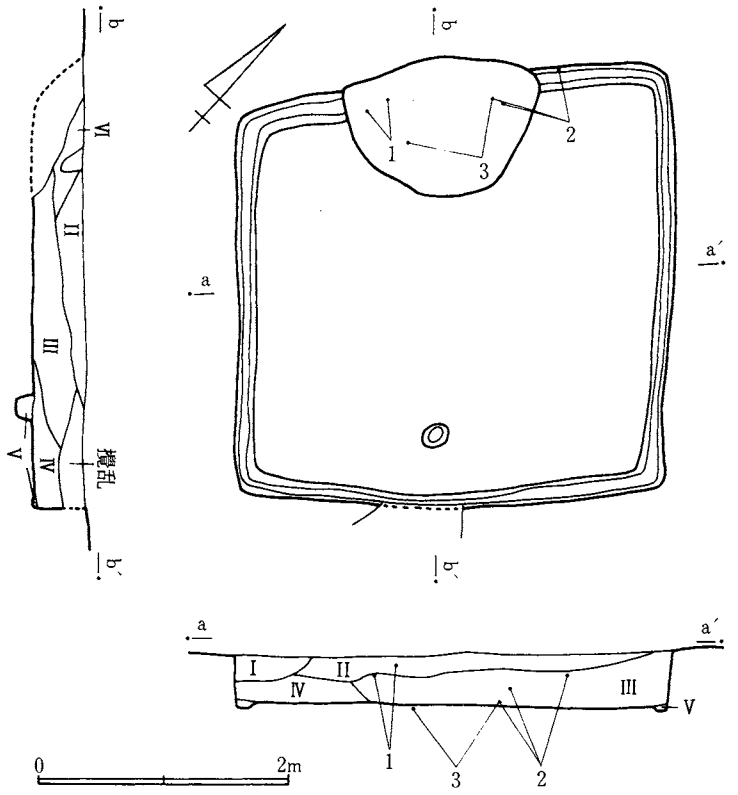


図753 D050号遺構実測図

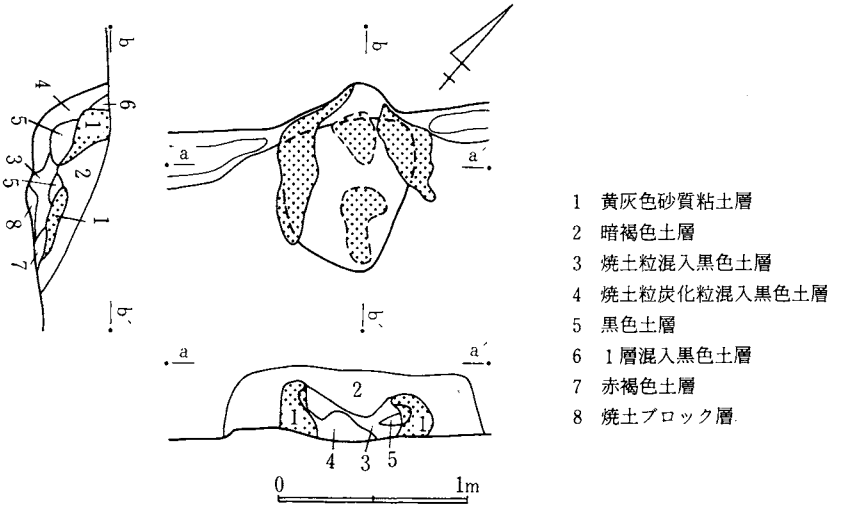


図754 D050号遺構カマド実測図

ームブロックを主体に構成されるものであるため人為的な埋設を受けた遺構の可能性を有している。

遺構　北壁3.45m、東壁3.28mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には0.12m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に踏み固められた状況はない。柱穴は検出できなかったが床下調査において南壁に近く径0.2m、深さ0.12mの小ピットを検出した。

カマド　西壁中央部を0.35m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出しまで一体化しており、火袋部に相当する部分は焼土化を呈している。天井部は部分的に遺存する程度である。

遺物出土状況　I層黄褐色土層、II層黒褐色土層、III層ロームブロック混入暗褐色土層、IV層ロームブロック混入褐色土層、V層褐色土層が堆積しており、遺物はカマド上部に堆積する部分より出土した。

出土遺物　遺物は、甕形土器のみである。1は胴部下半を欠損しているが底部からの条痕状の磨きが認められる。2は口縁部が「く」字状に外反する。3は2のような形状の甕形土器底部破片である。

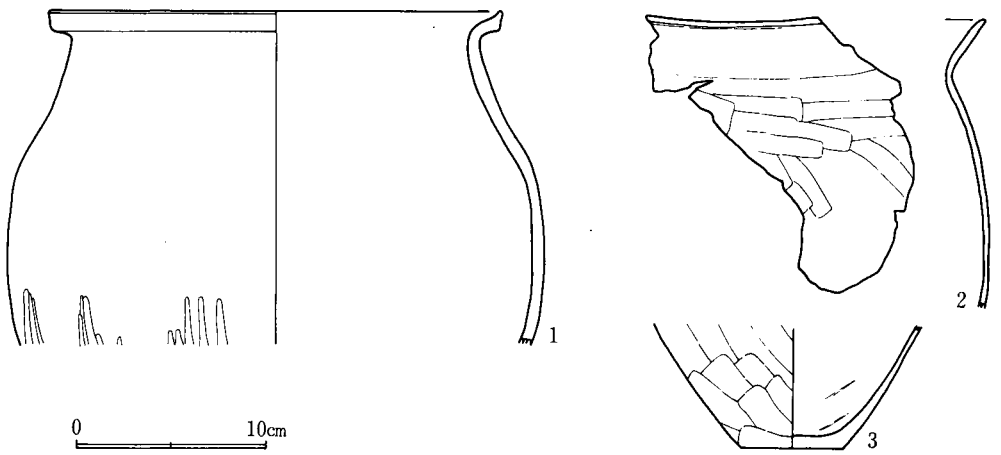


図755　D050号遺構出土遺物実測図

D050出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	17.1	(23.6)	—	1/3	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)黒褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)明褐色	
3	甕	6.4	—	5.4	2/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	

11. D051号遺構（図756～759、図版181－3、190、192）

IV群の住居群内において1軒単独で位置し最も近く位置するD052から30m離れている。

遺構　北壁2.95m、東壁2.68mで隅丸方形の平面プランを呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して約0.48m掘り込んで床面に達する。床面は部分的に堅緻な状況が認められるものの、全体に軟弱な状況を呈している。住居南壁に接し小粘土塊を検出した。柱穴、壁溝等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.45m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火袋に相当する部分は焼土化を呈している。焚口部より火床部にかけて長径0.87m、短径0.68m、深さ0.12mの掘り込みが認められる。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物はII層床面を中心に出土している。またカマド左脇部分より小形の坏が集中して出土した。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、甑、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴がある。2、3は叩き目がある広口甕の底部である。鉢形土器4、5は口縁が短

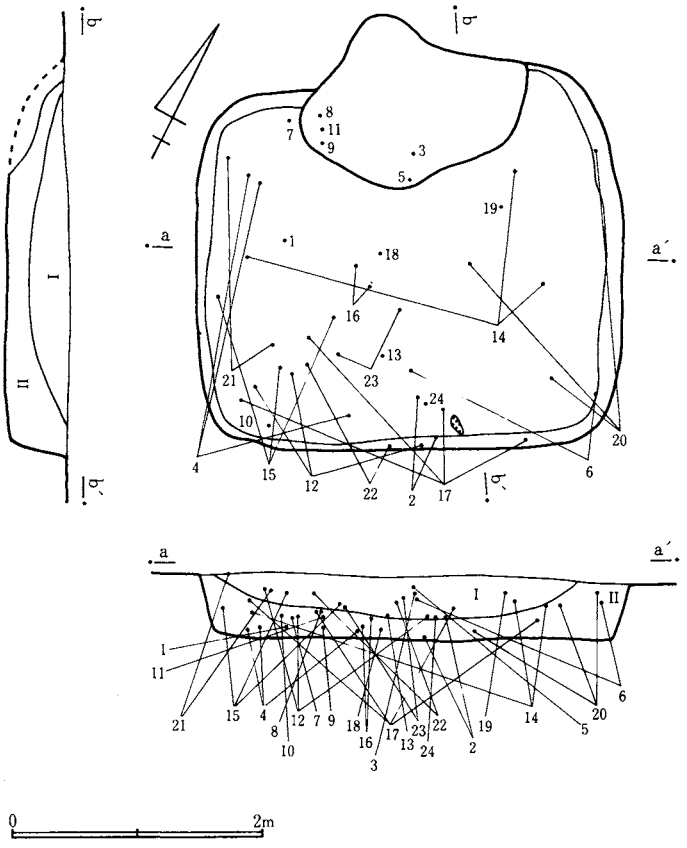


図756　D051号遺構実測図

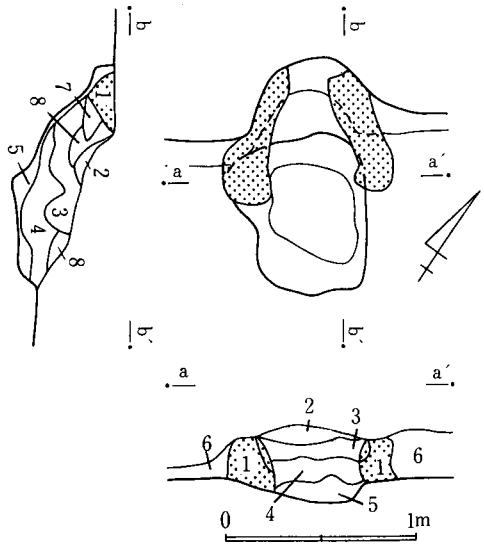


図757 D051号遺構カマド実測図

かく大きく開く形状を呈し、20は体部が大きく開く坏状のものである。甑形土器は6で小把手が付いており、胴部はヘラ削り調整している。坏形土器は口径 8cm 前後で内面および外面にタール状のススが付着した7～11、口径 12cm 前後の12、口径 15cm 前後の13～18がある。19は体部に墨書がある破片である。皿形土器は21、22の高台のないものと、23、24の造り出し高台のものがある。鉄製品は板状を呈しているものであるが、刃部等は認められず用途不明である。部分的に木質が付着している。

D051出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
2	甕	—	—	(17.0)	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	(外)黒色 (内)暗褐色	
3	甕	(13.5)	—	—	1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	明灰色	
4	鉢	12.8	(22.9)	11.2	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	明赤褐色	
5	鉢	(9.9)	(23.2)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
6	甑	—	—	—	破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
7	坏	3.0	7.9	5.4	完形	底部部分的に一方向のヘラ削り	——	堅緻	明褐色	体部にタール付着、糸切り
8	坏	2.9	7.3	5.0	完形	——	——	堅緻	明褐色	体部にタール付着、糸切り
9	坏	2.6	7.3	5.1	完形	底部部分的に一方向のヘラ削り	——	堅緻	明褐色	体部にタール付着、糸切り
10	坏	2.8	8.3	5.2	完形	底部部分的に一方向のヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	体部にタール付着、糸切り
11	坏	3.9	8.1	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	体部にタール付着
12	坏	3.2	11.7	5.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	褐色	

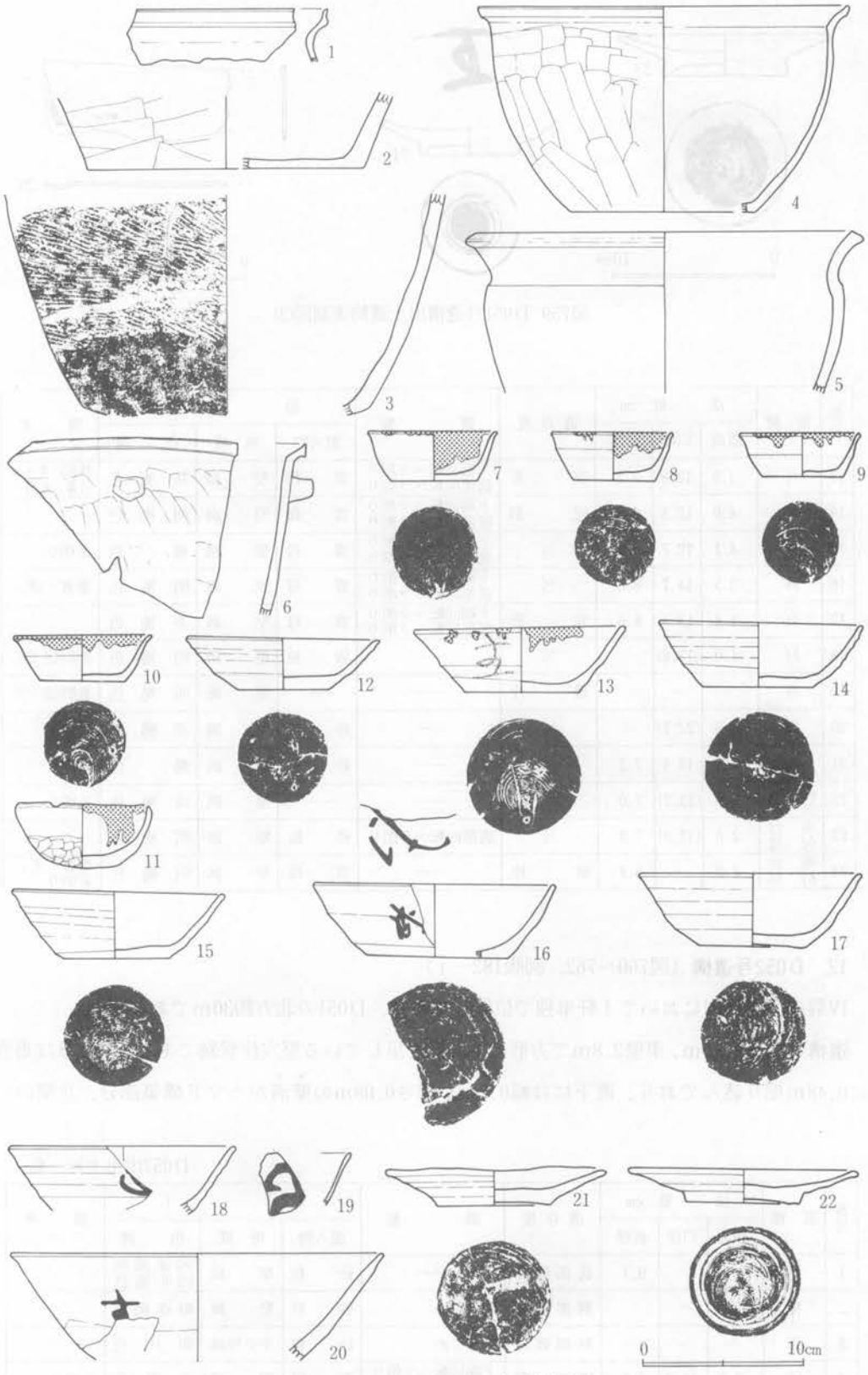


図758　D051号遺構出土遺物実測図(1)

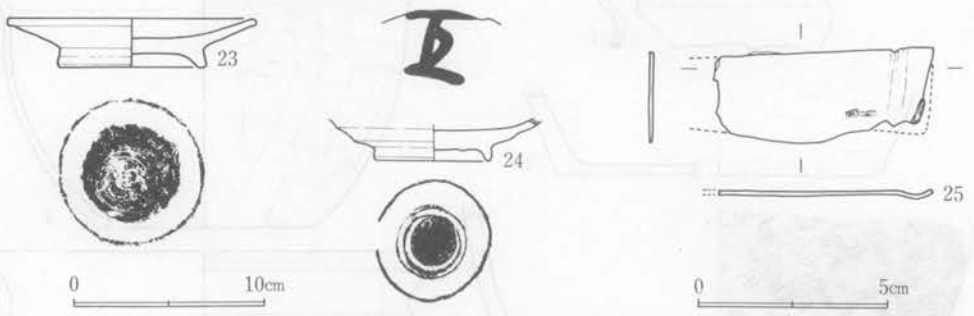


図759 D051号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
13	坏	3.9	12.8	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	体部にタール付着、糸切り
14	坏	4.0	12.3	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	
15	坏	4.1	12.7	6.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	褐色	糸切り
16	坏	3.5	14.7	8.8	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	墨書「成」
17	坏	4.4	13.5	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
18	坏	4.0	(13.8)	—	1/3	—	砂粒	堅緻	明褐色	墨書判読不明
19	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	明褐色	墨書判読不明
20	鉢	6.5	(22.7)	—	1/3	—	砂粒	堅緻	淡褐色	墨書「主」内黒
21	皿	2.1	13.4	7.2	3/5	—	砂粒	堅緻	褐色	糸切り
22	高台付皿	2.0	(13.7)	7.0	1/2	—	—	堅緻	淡褐色	糸切り
23	高台付皿	2.6	(12.8)	7.2	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
24	高台付皿	2.2	—	5.8	破片	—	雲母	堅緻	明褐色	墨書「主」糸切り

12. D052号遺構（図760～762、図版182－1）

IV群の住居群内において1軒単独で位置しており、D051の北方約30mである。

遺構 北壁2.85m、東壁2.8mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分、北壁の一

D052出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕			9.1	底部破片	—	砂粒	堅緻	(外)赤褐色 (内)明褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	暗赤褐色	
3	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	明灰色	
4	坏	3.7	12.2	7.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	灰褐色	糸切り

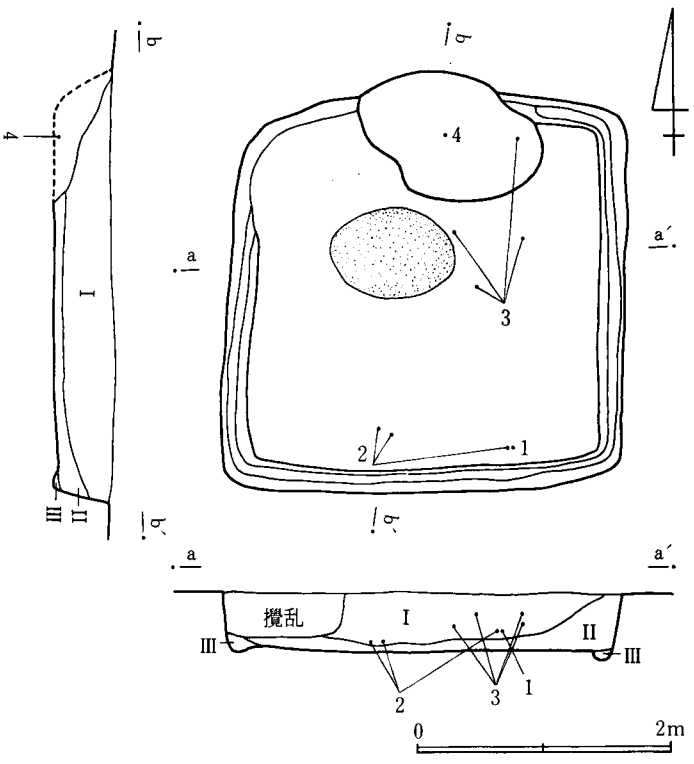


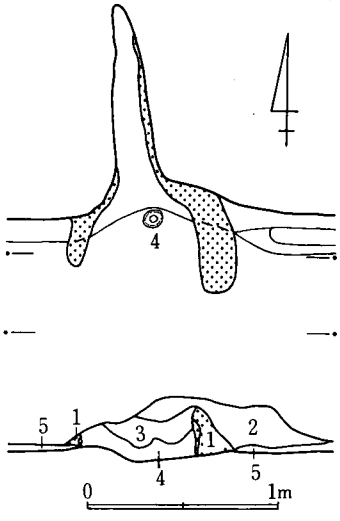
図760 D052号遺構実測図

部、西壁の一部を除いて認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、住居中央部からカマドに寄った部分で約1mの範囲の焼土化した部分を検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長1.2m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しているが左側は煙道の途中で終っている。火袋部に相当する部分は焼土化を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物はI層下部から出土しているが量的に少ない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器で量的に少ない。甕形土器は1～3で、いずれも底部あるいは胴部の破片である。2、3は胴部に叩き目がある。坏形土器は



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　焼土粒混入暗褐色土層
4　焼土粒炭化粒混入暗褐色土層
5　褐色土層

図761 D052号遺構カマド実測図

4で体部が直線的に開く形状を呈している。

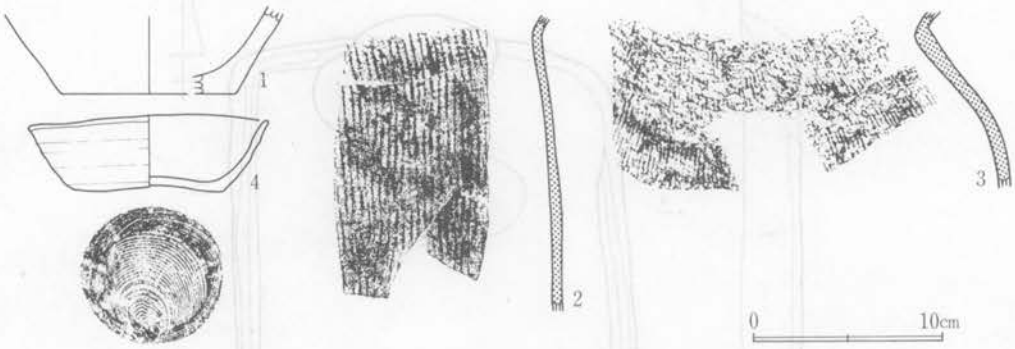


図762 D052号遺構出土遺物実測図

13. D057号遺構（図763～765、図版182—2、3）

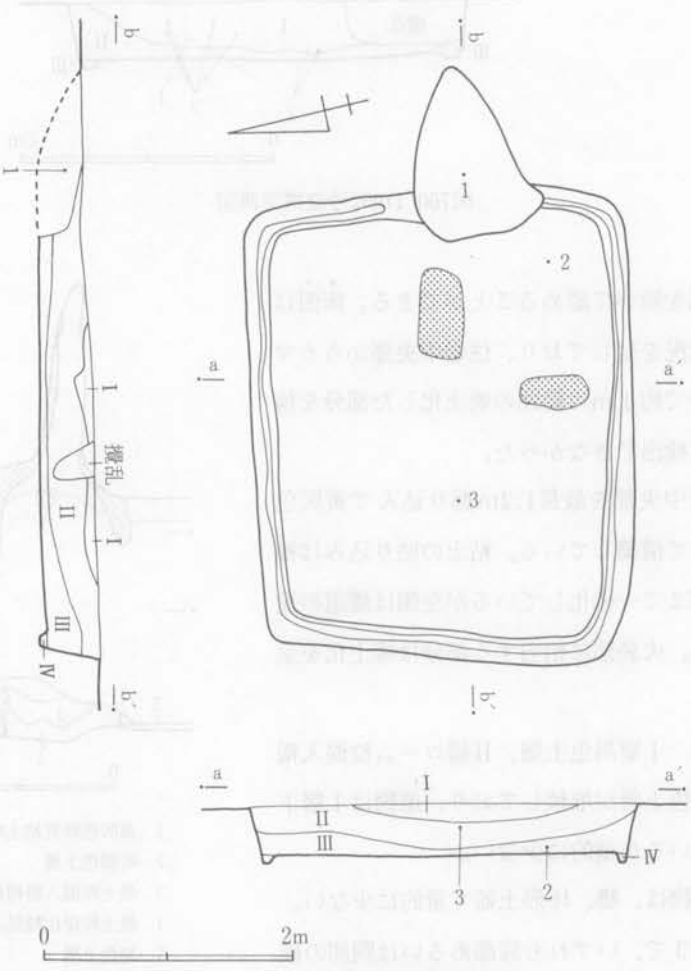


図763 D057号遺構実測図

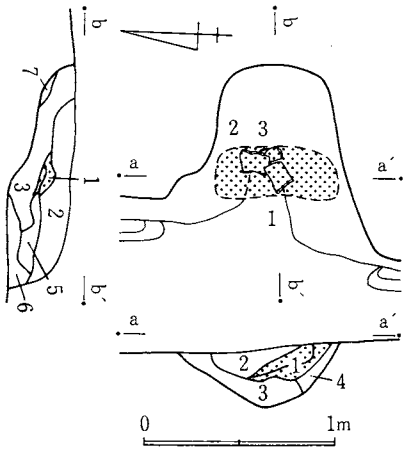


図764 D057号遺構カマド実測図

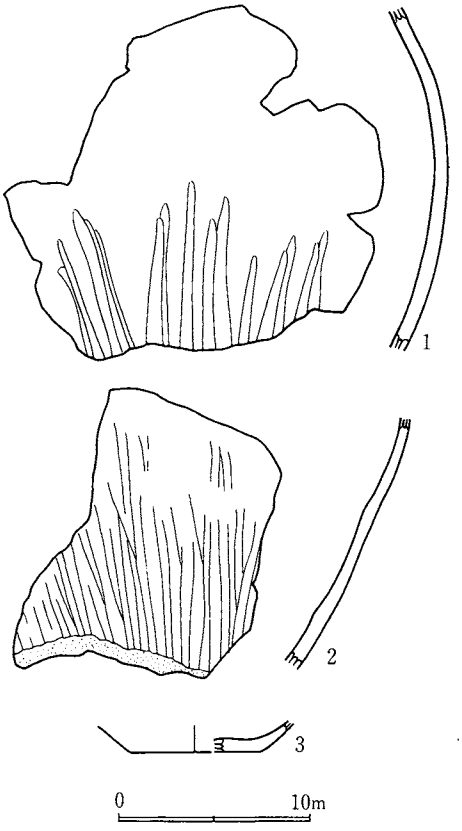


図765 D057号遺構出土遺物実測図

IV群の住居群内において北東部分に集中する住居群の1軒で、D065が近接して位置している。

遺構 北壁3.3m、東壁3mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には0.23m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、住居中央部よりカマド側に寄って粘土塊を2か所で検出した。柱穴等は検出することができなかった。

カマド 東壁中央部を最長1m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。しかし、粘土の袖、煙道部等への貼り込み状況については不明である。天井部は一部で確認できたものの全体が把握できるに至ってない。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層ロームブロック混入茶褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層褐色土層が堆積しているが、D048等と同様人為的な埋設の可能性が考えられる。遺物も稀少で数点出土したにすぎない。

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器で量的にきわめて少ない。甕形土器は1、2で条痕の磨きがある胴部破片である。坏形土器は3で底部の破片である。

D057出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	底部付近破片	磨き	砂粒	堅緻	暗茶褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	磨き	砂粒	堅緻	暗灰褐色	
3	坏	(1.4)	—	(7.0)	底部破片	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	

14. D059号遺構（図766～768、図版183－1）

IV群の住居群内において北側の地区界に近く位置し、D050が近接している。遺構北東部分は溝により攪乱を受けている。

遺構　北壁推定3.28m、西壁3.4mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.2m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。煙出し部は溝によって攪乱を受けている。粘土の貼り込みは袖部において炭化粒混入黒色土層上に形成され煙道

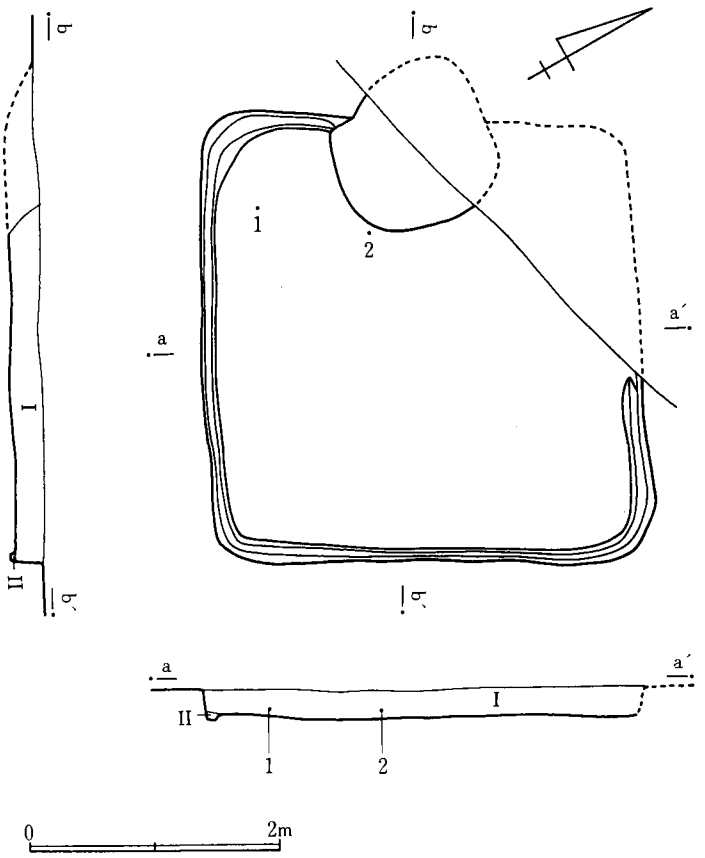
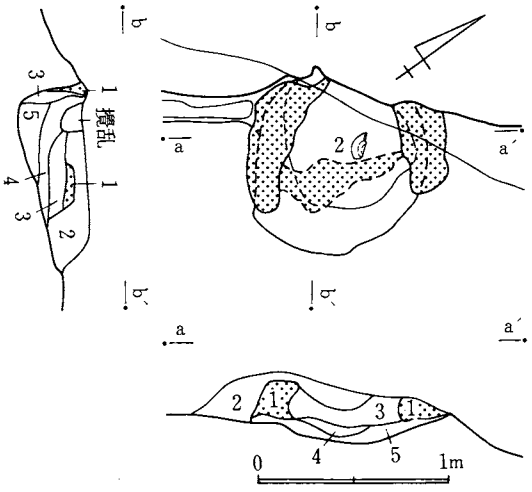


図766　D059号遺構実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　暗褐色土層
3　焼土層
4　焼土粒混入黒色土層
5　炭化物混入黒色土層

図767　D059号遺構カマド実測図

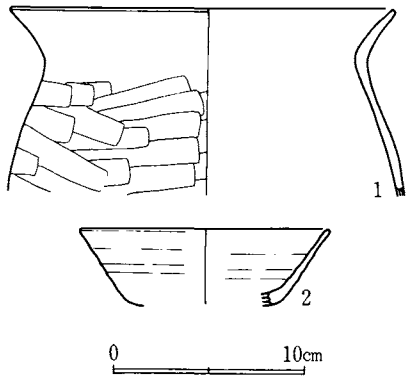


図768　D059号遺構出土遺物実測図

部まで一体化している。天井部は、焚口の上部に遺存しているが良好な状況ではない。

遺物出土状況　I層褐色土層、II層茶褐色土層が堆積しているが、I層の単一層である。出土遺物は稀少で数点出土したにすぎない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器で量的にきわめて少ない出土である。甕形土器は1で口縁部が「く」字状に外反し器壁がヘラ削りによってかなり薄くなっている。坏形土器は、2の体部破片である。

D059出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	9.8	20.3	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗赤褐色	
2	坏	3.9	12.8	—	⅓	——	雲母	やや堅緻	暗灰褐色	

15. D060号遺構（図769～771、図版183－2）

IV群の住居群内において最も北東部分に位置し、地区界に接する。近くにD048が位置している。

遺構　北壁3.15m、東壁2.9mで若干四隅が丸味を帯びる方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んでおり、直下には幅0.19m、深さ0.04mの壁溝がカマド

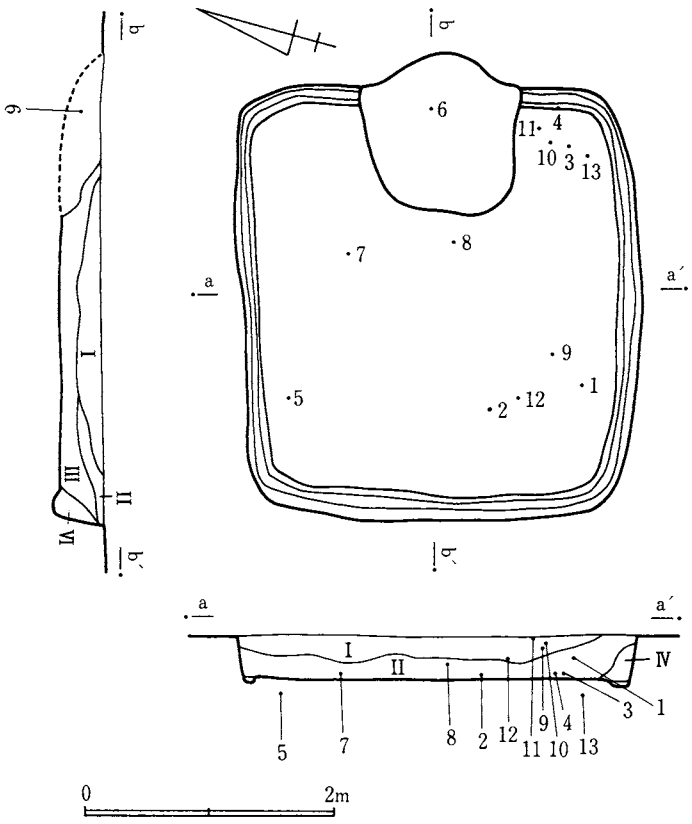
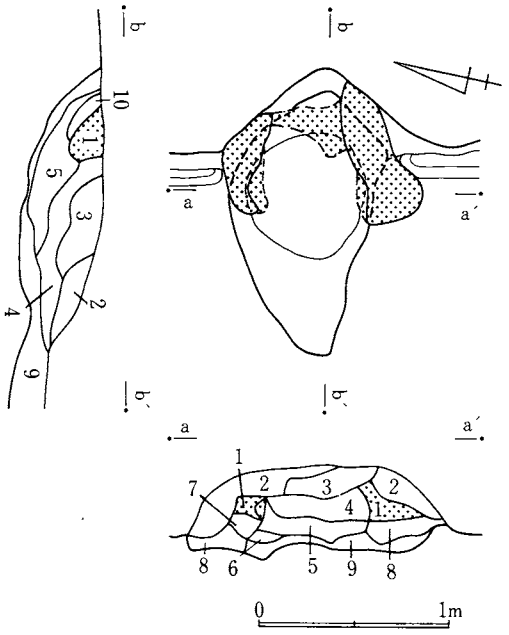


図769 D060号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 黒色土層
4 炭化物焼土粒混入黒色土層
5 炭化粒混入焼土層
6 黒褐色土層
7 1層混入黒色土層
8 ロームブロック層
9 ロームブロック混入黒色土層
10 炭化粒混入黒色土層

図770 D060号遺構カマド実測図

構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　東壁中央部を最長0.45m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。袖部における粘土の貼り込みは、ロームブロックの上に行われており、煙出し部まで一体化している。天井部は煙出し部に一部遺存する程度である。

遺物出土状況　Ⅰ層茶褐色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ロームブロック混入暗褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層が堆積しており、遺物はⅡ層を中心に出土している。カマド右脇部には鉄製品が

D060出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	——	やや堅緻	暗灰色	
3	坏	3.4	(11.8)	(8.2)	¼	——	——	堅緻	明褐色	
4	坏	4.1	(12.0)	(7.3)	⅓	——	——	堅緻	明褐色	
5	坏	4.7	(13.8)	—	¼	——	砂粒	やや堅緻	明灰色	
6	坏	(12.2)	3.9	(6.0)	⅓	——	——	堅緻	灰色	
7	坏	1.0	—	7.0	底部½	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰白色	
8	高台付坏	1.2	—	7.4	底部のみ	——	——	堅緻	明黒色	

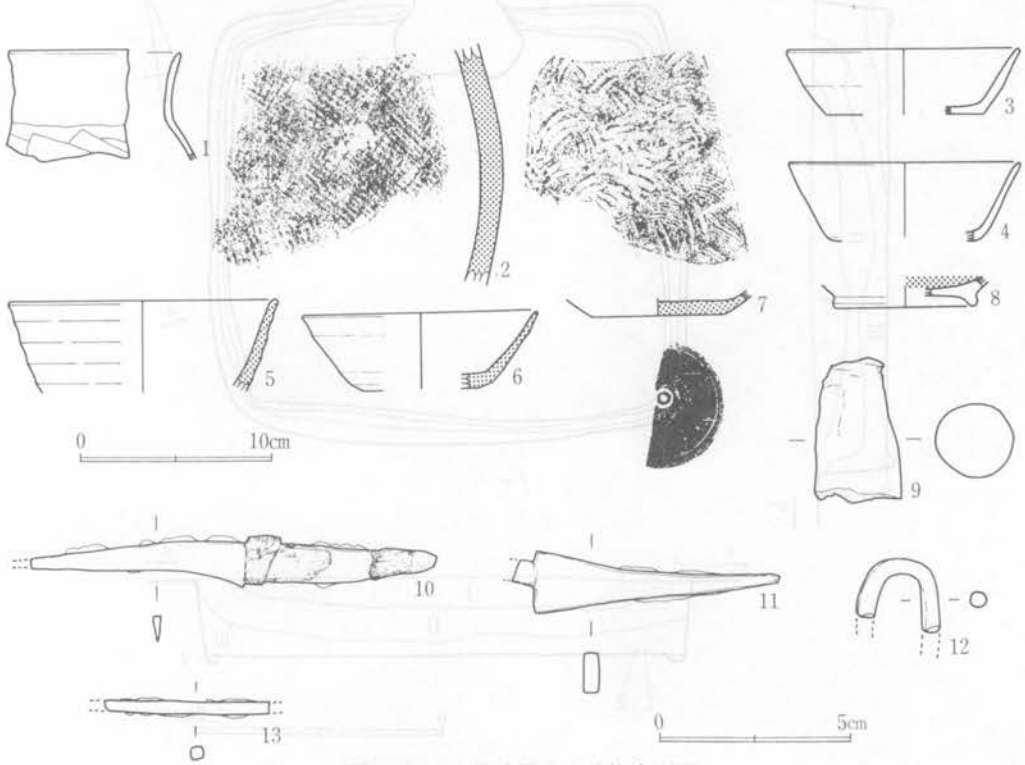


図771　D060号遺構出土遺物実測図

集中して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と土製品、鉄製品がある。甕形土器は1、2で、1は「く」字状に外反する口縁部破片、2は叩き目がある胴部の破片である。坏形土器は3～8で、3～6が体部の破片、7、8が底部の破片である。土製品は9の円柱状の支脚である。鉄製品は10～13で、10は刀子で研ぎべりが著しく柄に木質が残る。11は柄に相当する部分と思われるが器種は不明である。12、13は用途不明の棒状の製品である。

16. D061号遺構（図772～775、図183－3、184－1）

IV群の住居群内において北側の地区界に近く位置し、D066が近接している。

遺構　北壁3.48m、東壁2.98mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.60m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.07mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。床下の調査において一辺約2.8m、深さ0.18mを計る方形状の落ち込みを検出した。さらに落ち込み内には径約0.3m、深さ0.2mの小ピット3か所、また、長辺0.9m、短辺0.4m、深さ0.4mを計る長方

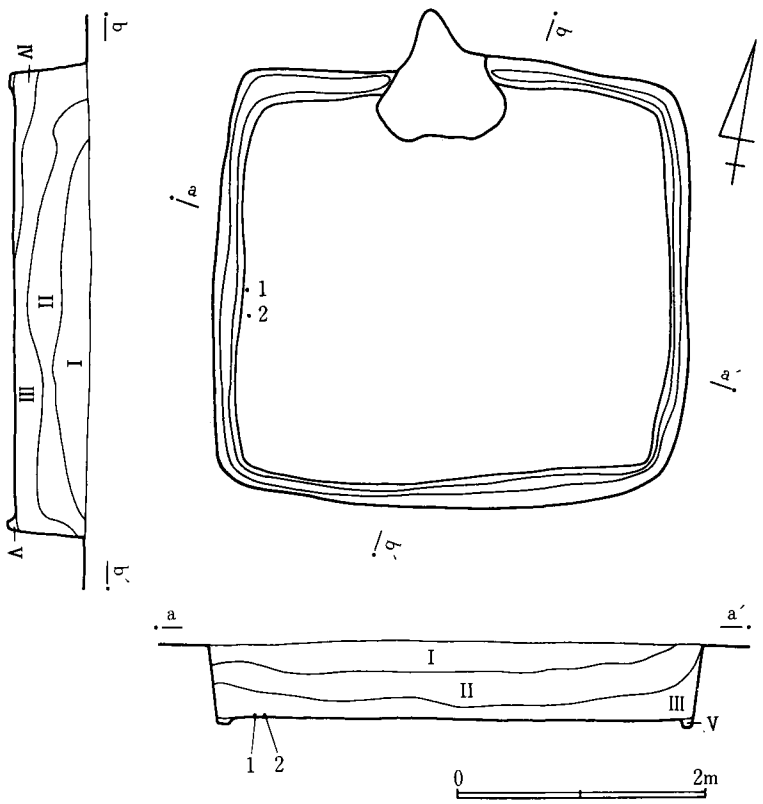


図772　D061号遺構実測図

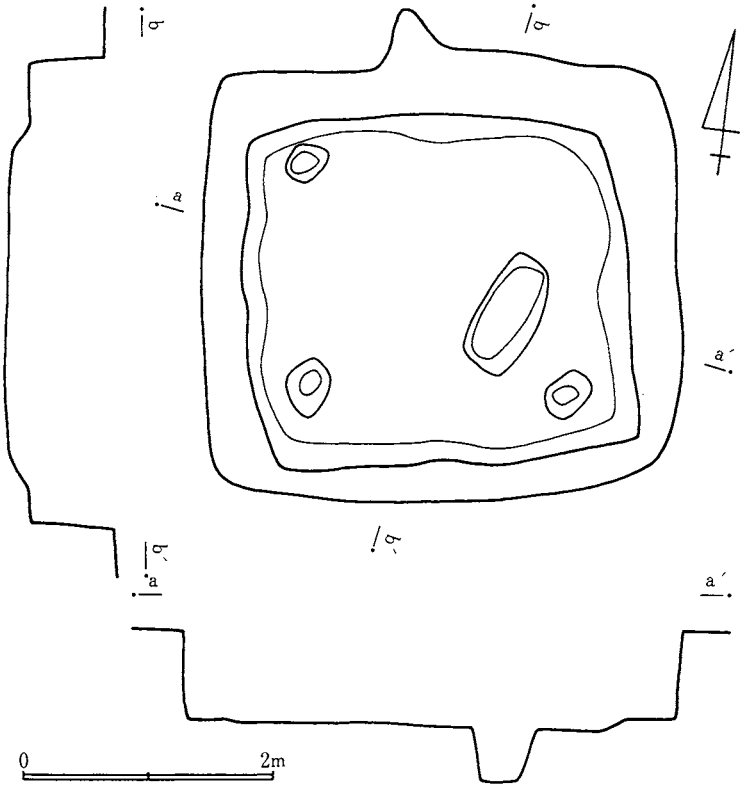
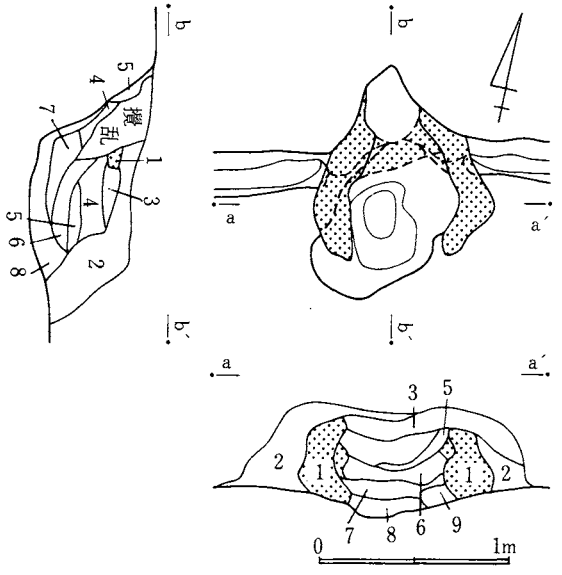


図773 D061号遺構床下状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 褐色土層
4 ロームブロック混入黒褐色土層
5 焼土粒混入黒色土層
6 焼土粒混入褐色土層
7 焼土粒炭化粒混入黒色土層
8 焼土ブロック層
9 焼土層

図774 D061号遺構カマド実測図

形のピットを検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.5m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。火袋に相当する部分は焼土化を呈している。火床部は長径0.84m、短径0.55m、深さ0.1mを計る楕円形の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層炭化物混入黒色土層、V層茶褐色土層が堆積しており、遺物はきわめて少量であるがIII層床面上より出土している。

出土遺物　遺物は、甕形土器のみであり、量的にも数点出土したにすぎない。1、2ともに叩き目がある胴部破片で、1は内面に青海波文がある。

図775　D061号遺構出土遺物実測図

D061出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	灰色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	叩きじめ	砂粒	やや堅緻	明灰色	

17. D062号遺構（776～779、図版184－2、3、190）

IV群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、既存住宅に遺構の一部がかかっている。よって全体が調査できた遺構ではない。

遺構　北壁3.68m、西壁3.85mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。南壁、東壁コーナー部分が既存住宅部分にかかっているため検出することはできなかった。壁は垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.06mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ壁コーナーの対角線上に配置しており径平均0.28m、深さ平均0.4mを計るものである。床下の調査において大・小8か所のピットを検出したが、この内4か所は柱穴である。深さは平均0.1mである。

カマド　北壁中央部を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。天井部は煙道部上に遺存している。火床部は長径

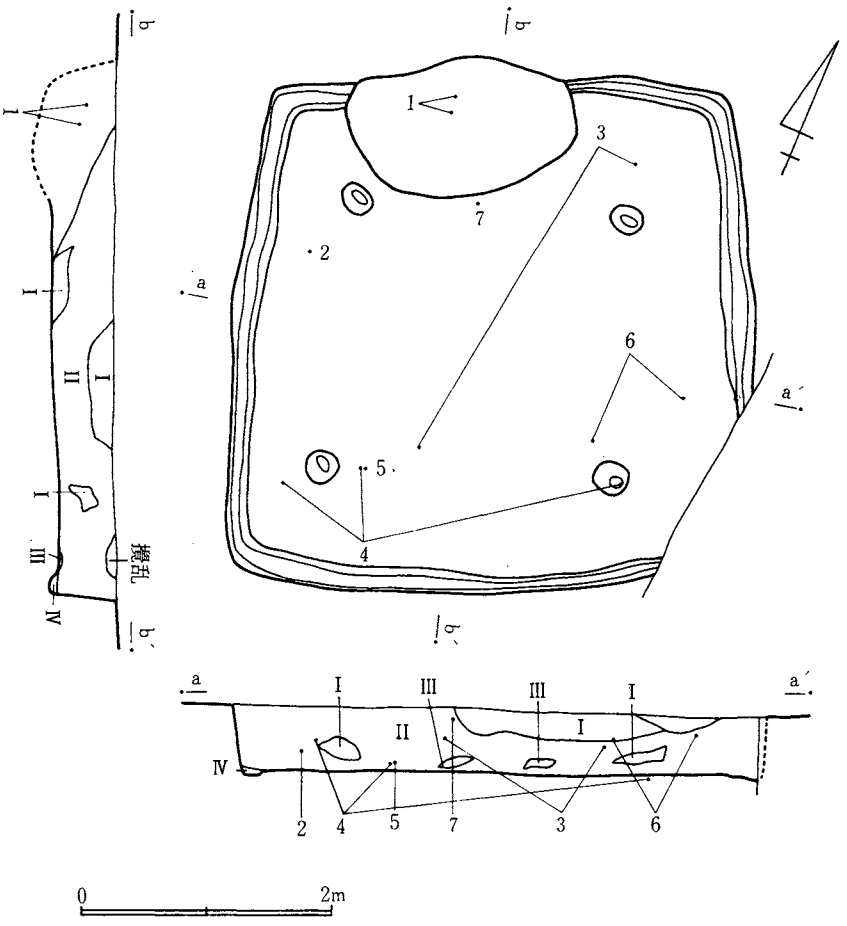


図776 D062号遺構実測図

0.7m、深さ0.2mの窪みを形成している。全体に遺存状況は良好である。

遺物出土状況　I層ロームブロックを多量に混入する黒褐色土層、II層ロームブロック層、III層黒色土層、IV層黒褐色土層が堆積しているが、その状況は人為的に埋設された可能性を有

D062出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	24.7	20.7	—	底部のみ欠損	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(外)褐色 (内)明褐色	
2	甕	9.1	(21.6)	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	14.7	—	7.6	口縁部のみ欠損	ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗赤褐色	
4	坏	4.9	(12.8)	—	1/3	体部ヘラ削り 底部ナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
5	坏	1.5	—	7.4	底部	——	——	やや軟弱	暗褐色	ヘラ切リ
6	坏	4.0	(13.5)	(7.2)	1/4	——	砂粒	堅緻	暗灰色	

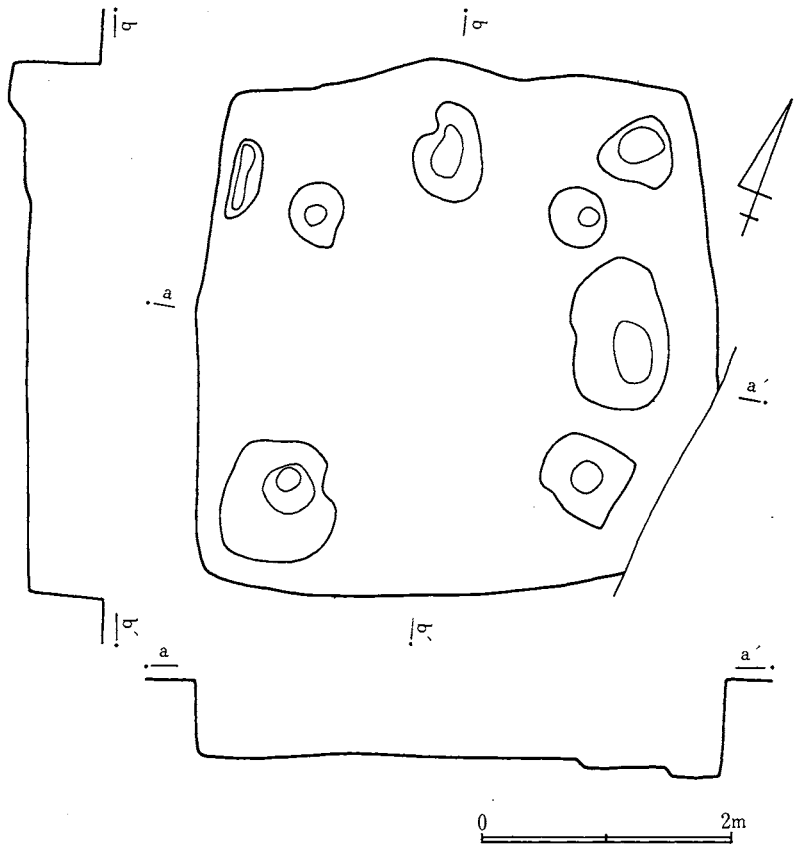
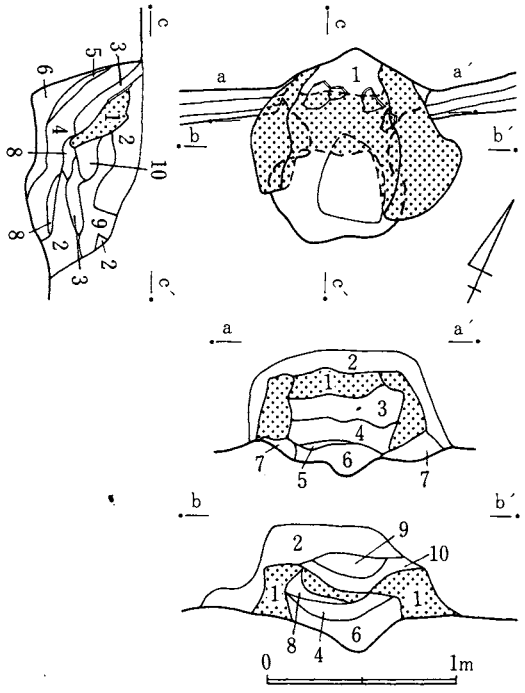


図777 D062号遺構床下状況図



1 黄褐色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 1層混入黒褐色土層
4 炭化粒混入焼土層
5 焼土ブロック層
6 焼土粒混入黒色土層
7 ロームブロック層
8 黒色土層
9 褐色土層
10 茶褐色土層

図778 D062号遺構カマド実測図

している。遺物はII層から出土しているが量的にも少なく、また、レベル差をかなりもって出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で胴部をヘラ削り調整し器壁が薄い。坏形土器は4～6で、4は体部が内彎ぎみに開く。6は口径と底径の差があまりない形状を呈している。5は底部破片である。石製品は7で凝灰岩製の砥石である。

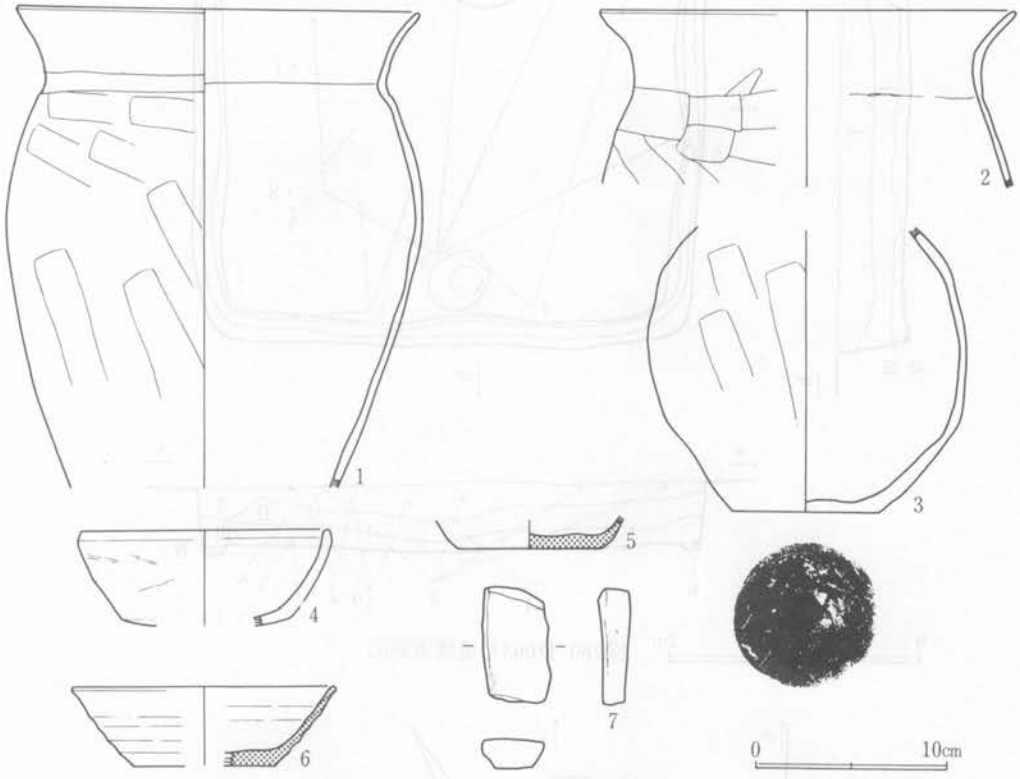


図779　D062号遺構出土遺物実測図

18. D063号遺構（図780～783、図版185）

IV群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D045が近接している。

遺構　北壁3.9m、東壁3.3mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.48m掘り込んでおり、直下には幅0.21m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。柱穴は検出できなかったが、床下調査において南壁に接して径0.48m、深さ0.17mの小ピットを検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.6m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出しまで一体化している。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層暗褐色土層が堆積しており、遺物は各層から出土している。

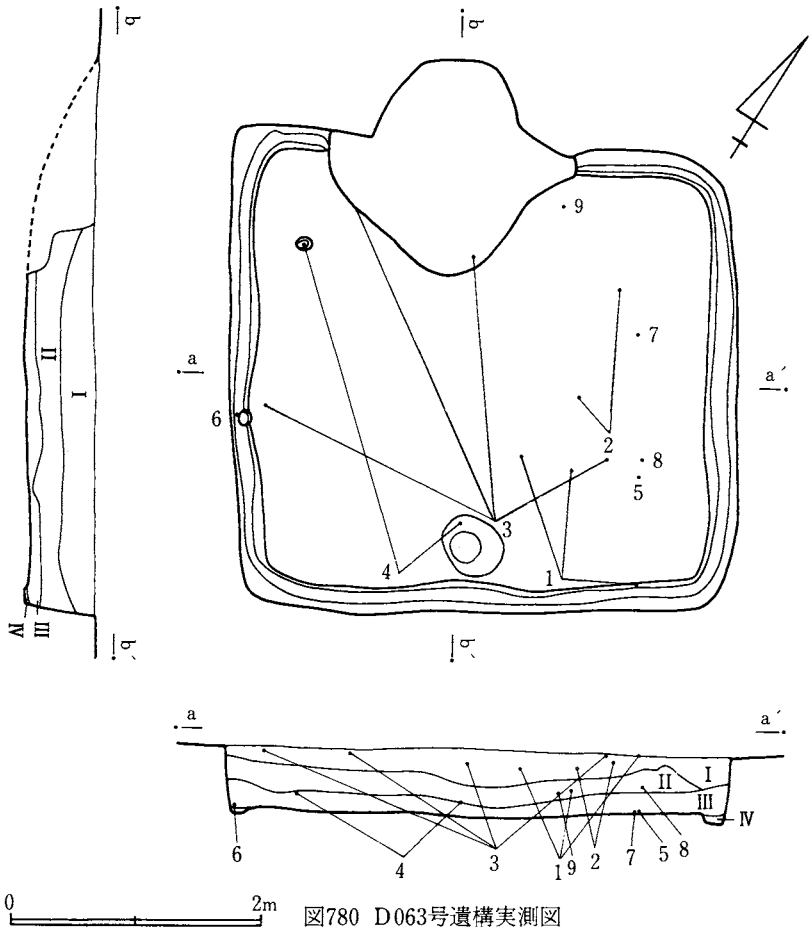


図780 D063号遺構実測図

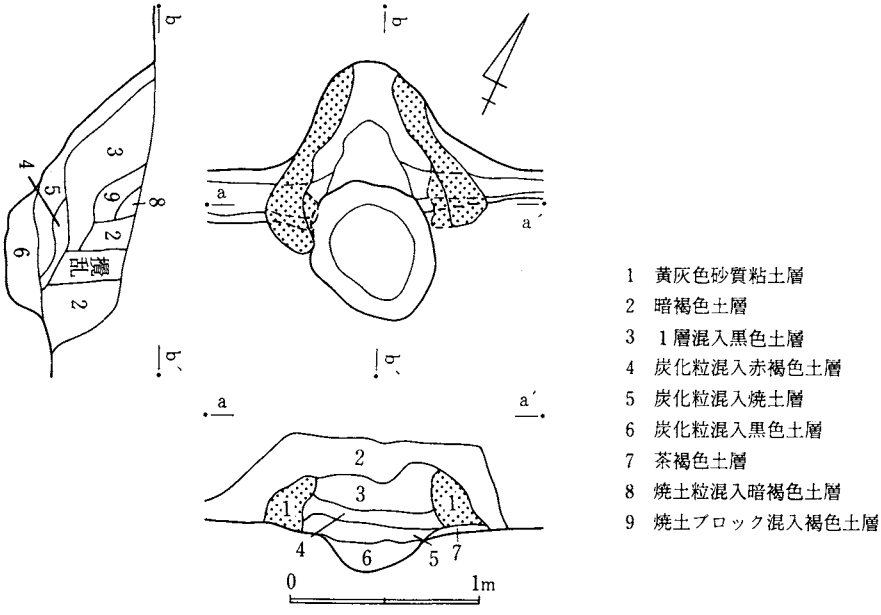


図781 D063号遺構カマド実測図

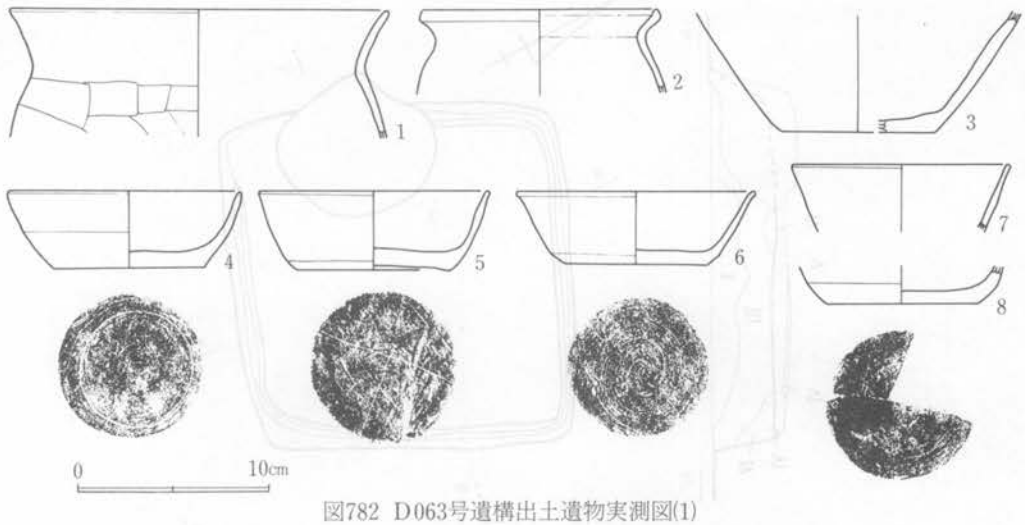


図782 D063号遺構出土遺物実測図(1)

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器と青銅製品がある。甕形土器は1～3で、1は「く」字状に外反する口縁の破片、2は口唇部が若干肥厚する口縁の破片、3は底部の破片である。坏形土器は4～8で、口径と底径の差があまりない形状を呈している。青銅製品は9の鉈尾の裏金で3か所に孔がある大形のものである。

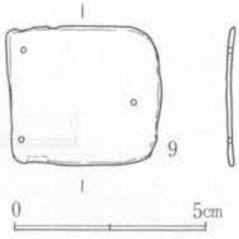


図783 D063号遺構出土遺物実測図(2)

D063出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	6.8	(19.6)	—	口縁 ¼	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	甕	4.5	(12.2)	—	¼	ヨコナデ	砂粒	堅緻	明褐色	
3	甕	7.2	—	8.0	底部のみ	ナデ	砂粒	堅緻	暗灰褐色	
4	坏	4.1	11.9	7.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	——	堅緻	淡褐色	
5	坏	4.1	(11.8)	8.0	¼	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	暗淡褐色	
6	坏	3.8	12.2	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	
7	坏	3.5	(11.2)	—	½	——	——	堅緻	赤褐色	
8	坏	2.0	—	7.8	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡褐色	

19. D064号遺構（図784～787、図版186－1）

IV群の住居群内において北側の地区界近くに位置し、D065が近接している。

遺構 北壁2.5m、東壁2.68mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈

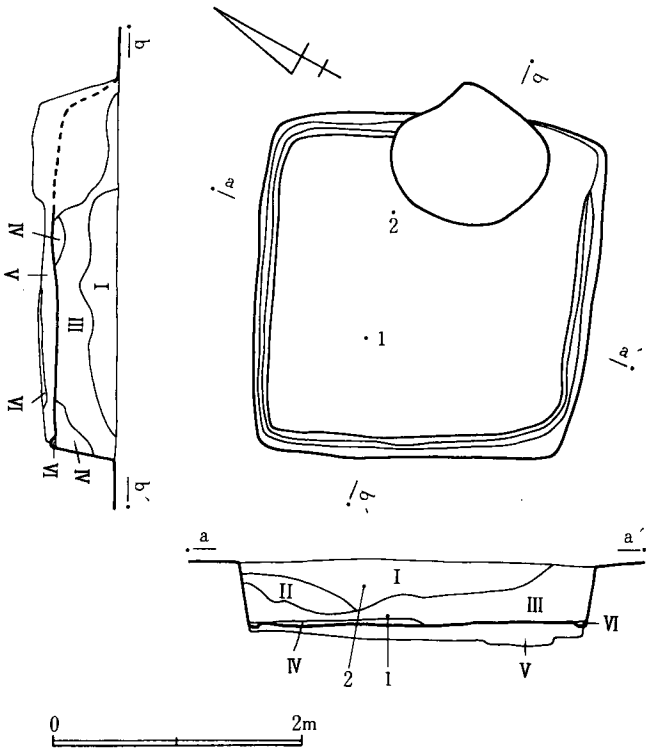


図784 D064号遺構実測図

して0.48m掘り込んでおり、直下に幅0.18m、深さ0.04mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出することができなかった。床下調査時に円形ピットを検出した。

カマド　東壁中央部を0.36m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは、袖部から煙道部まで一体化している。火袋に相当する部分は焼土化を呈し、火床部は長径0.67mや楕円形の擂鉢状の掘り込みを呈している。

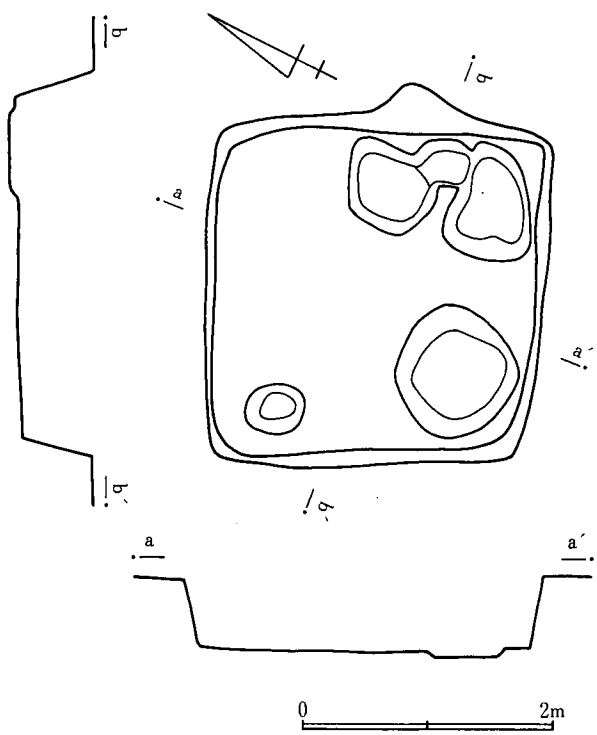
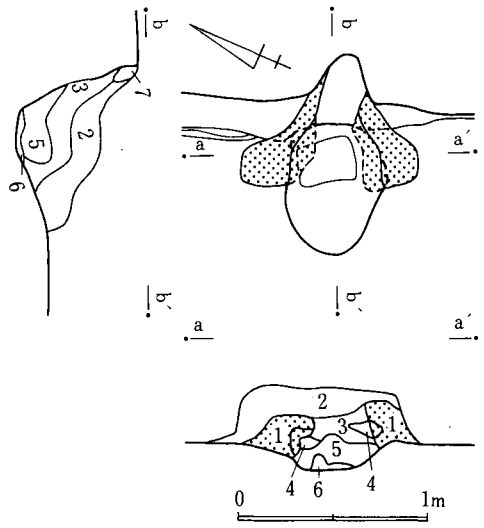


図785 D064号遺構床下状況図



1 黄灰色砂質粘土層
2 暗褐色土層
3 1層混入暗褐色土層
4 焼土ブロック層
5 焼土層
6 焼土粒炭化粒混入黒色土層
7 茶褐色土層

図786 D064号遺構カマド実測図

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層ローム粒混入褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層炭化物混入褐色土層、V層ロームブロック混入褐色土層、VI層黒色土層が堆積しており、V、VI層は貼り床である。IV層が自然堆積した後に人為的に埋設された覆土である可能性を有している。

出土遺物 遺物は稀少で図示できる遺物は2点のみである。1は坏形土器体部の破片で、2は須恵器で坏の体部破片である。

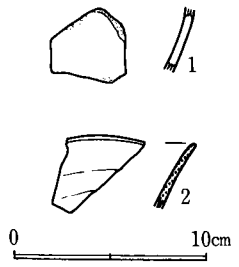


図787 D064号遺構出土遺物実測図

D064出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	——	砂粒	堅緻	暗褐色	
2	坏	—	—	—	口縁部破片	——	砂粒	堅緻	晴灰色	

20. D065号遺構（図788～790、図版186—2、3、190、191）

IV群の住居群内において北側の地区界に近く位置し、D064が近接している。

遺構 北壁3.1m、東壁2.6mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.52m掘り込んでおり、直下には幅0.2m、深さ0.09mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。カマド前方部分に0.4mの範囲で粘土塊と0.25mの

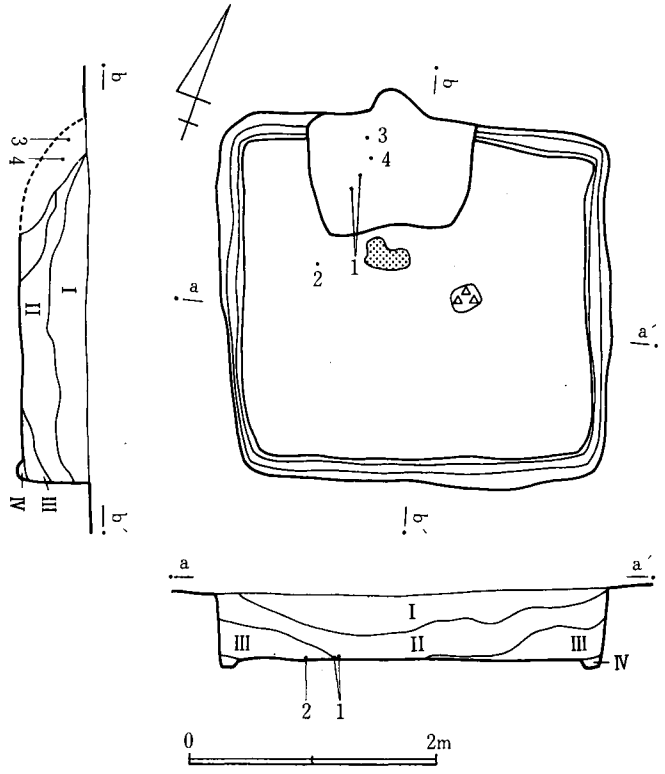


図788 D065号遺構実測図

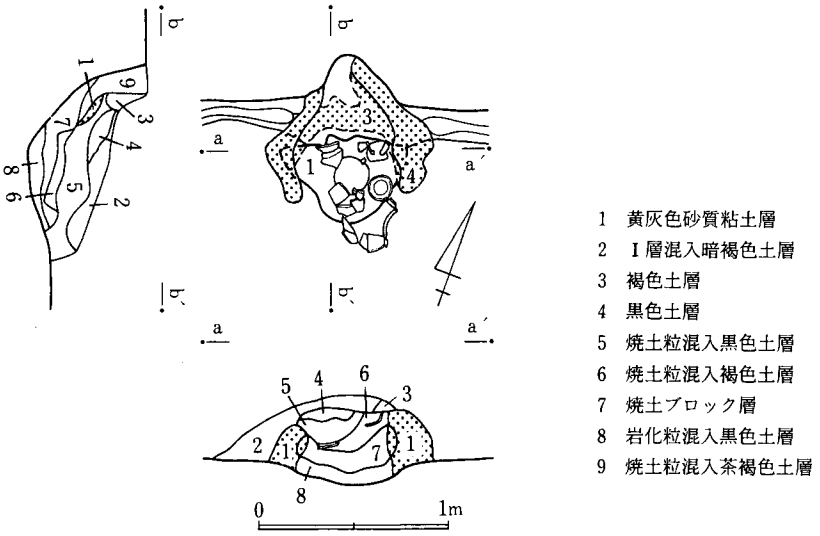


図789 D065号遺構カマド実測図

範囲で貝ブロックを検出した。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.3m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化を呈しており、天井部は煙出し部分に遺存している。火袋部

に相当する部分は焼土化が著しい。内部から多量の土器を出土した。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積しているが覆土中出土の遺物は稀少である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～3で、1は歪を生じているが、大形で、胴部下半に条痕状の磨がある。2は口縁部破片、3は小形の甕である。坏形土器は4で口径と底径の差があまりない形状を呈している。

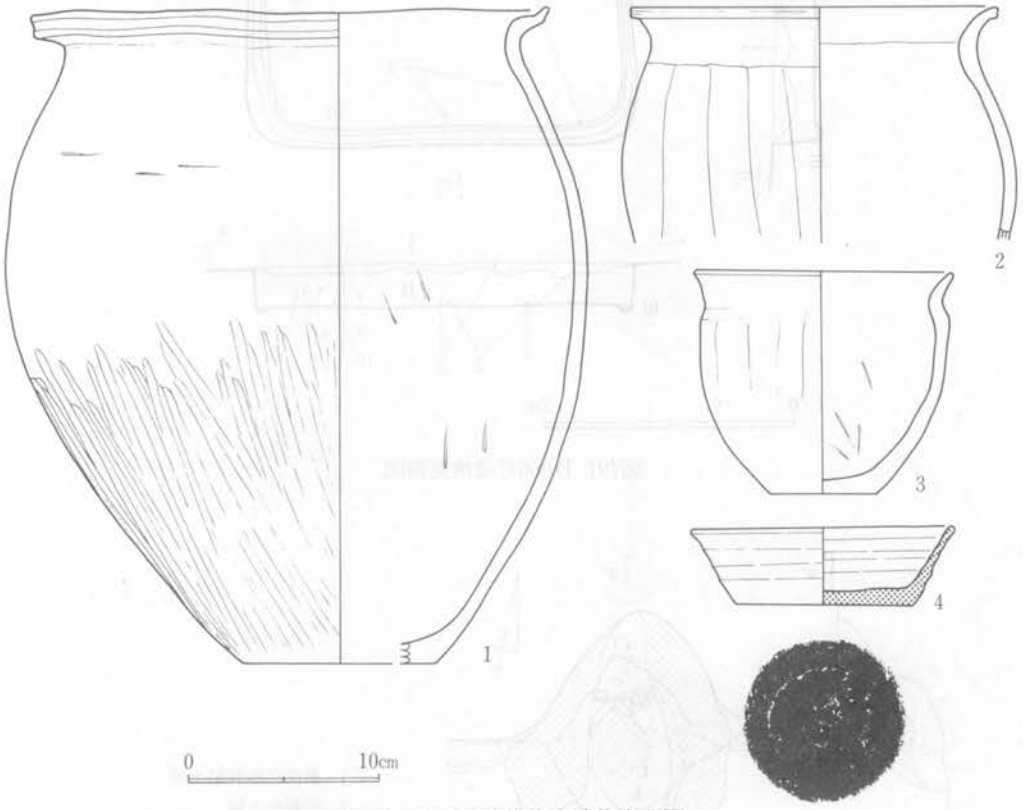


図790　D065号遺構出土遺物実測図

D065出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	33.4	26.8	(9.9)	⅓	ヨコナデ 磨き	砂粒	堅緻	明灰褐色	
2	甕	12.1	18.7	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	11.5	13.2	5.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(外)黒色 (内)淡褐色	
4	坏	3.9	13.3	9.0	完形	——	雲母 砂粒	やや堅緻	明灰色	ヘラ切り

21. D066号遺構（図791～793、図版187－1、192）

Ⅳ群の住居群内において最も北側の地区界に接して位置している。D061が近接している。

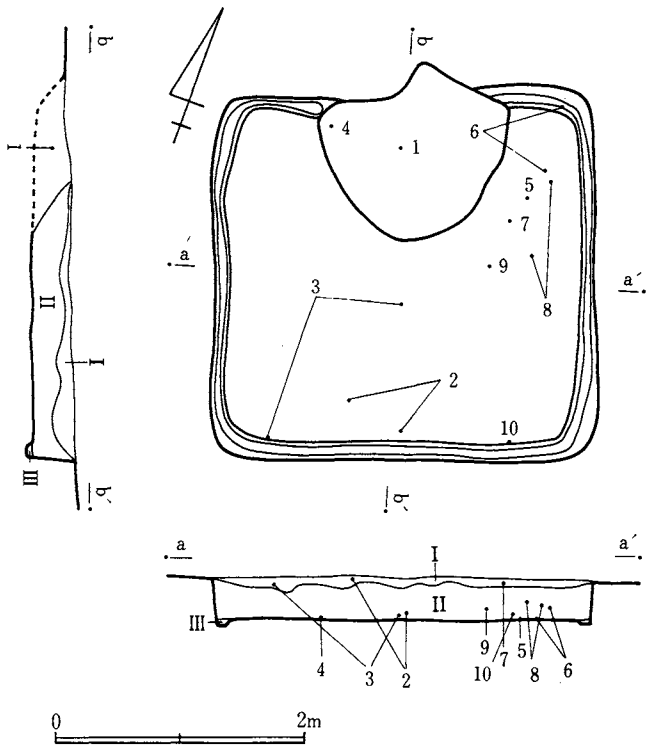


図791 D066号遺構実測図

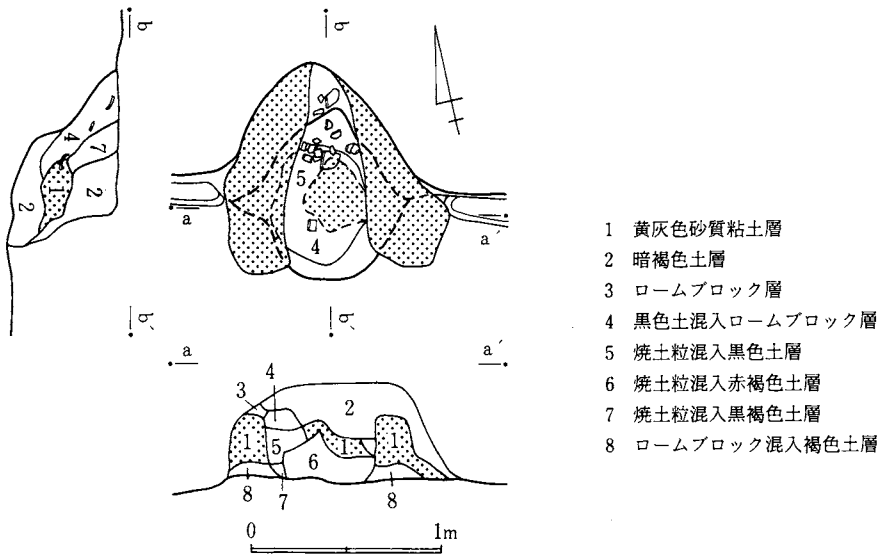


図792 D066号遺構カマド実測図

遺構 北壁2.9m、東壁2.9mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んでおり、直下には0.15m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認め

られる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴等は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.65m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化を呈し、天井部は火袋上部に一部遺存している。火床は径0.85m、深さ0.05mの擂鉢状に窪む状況を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層が堆積しており、遺物はⅡ層を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、盤形土器と鉄製品がある。甕形土器は1で胴部に叩き目がある破片である。坏形土器は口径 12 cm 前後の2～6と、口径 15 cm 前後の7、8がある。盤形土器は9で造り付け高台を有している。鉄製品は10の刀子の破片で、身側面に木質が付着している。

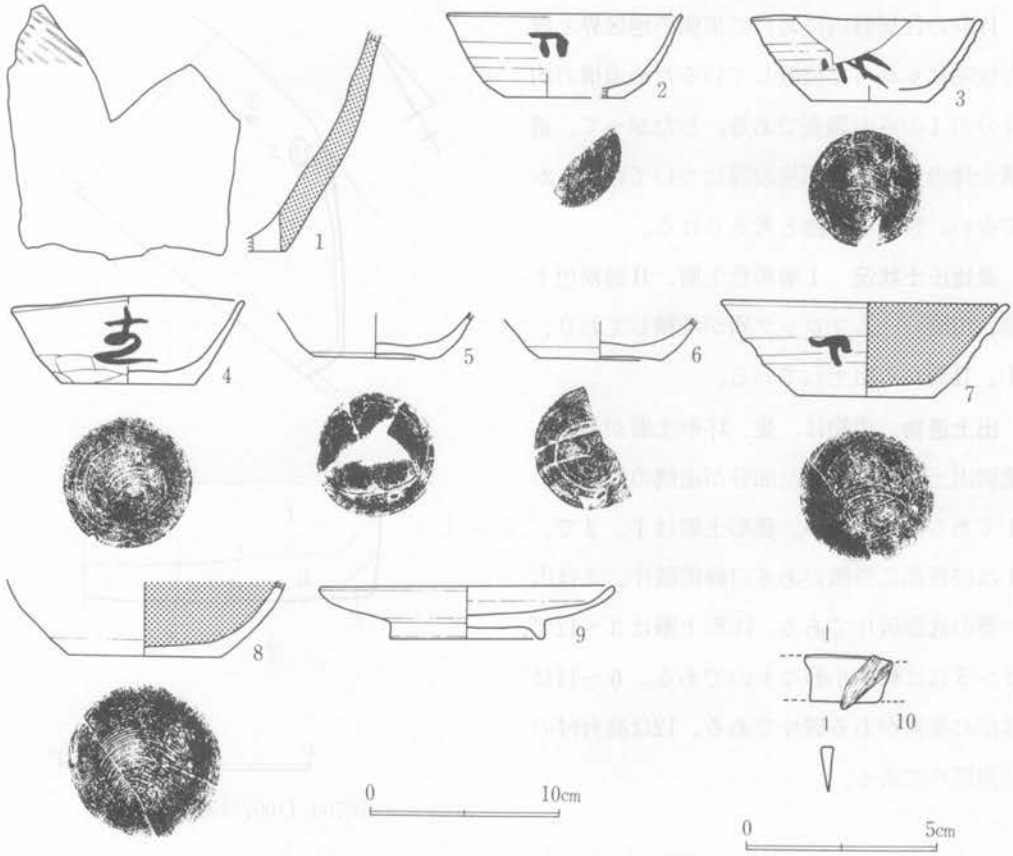


図793　D066号遺構出土遺物実測図

D066出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	底部破片	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	明灰色	
2	坏	4.4	(12.2)	(6.2)	½	下端回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	墨書判読不明

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	坏	4.3	11.8	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	墨書「方」 糸切り
4	坏	4.5	11.9	7.0	完形	下端静止ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明灰褐色	墨書「主」
5	坏	2.3	—	6.4	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	明褐色	糸切り
6	坏	2.0	—	6.4	底部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	暗褐色	
7	坏	4.9	14.7	7.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	灰褐色	内黒、墨書判読不明、糸切り
8	坏	3.9	—	8.0	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	糸切り
9	高台付盤	2.7	15.5	8.0	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	

22. D067号遺構（図794、795、図版187—2、191、192）

IV群の住居群内において東側の地区界と既存住宅にかかって位置しているため遺構の約4分の1のみの調査である。したがって、遺構全体の規模、内部施設等については明らかでない。竪穴住居跡と考えられる。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層ロームブロック層が堆積しており、I、II層から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。遺物出土量は調査した部分が遺構の約4分の1であるため少ない。甕形土器は1、2で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片、2は広口甕の底部破片である。坏形土器は3～12で、3～5は比較的小形なものである。6～11は体部に墨書がある破片である。12は高台付の底部破片である。

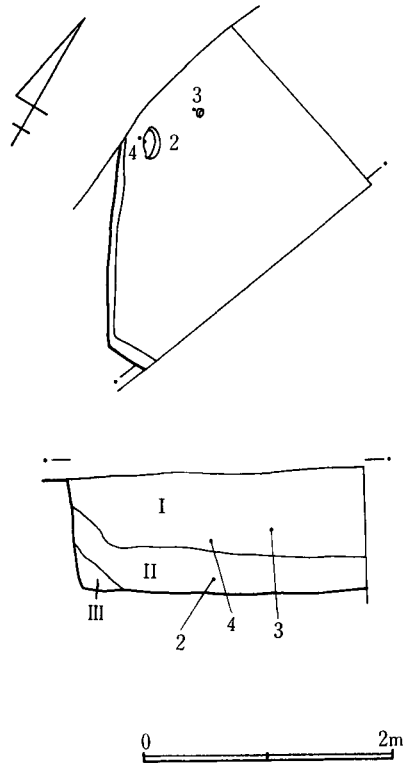


図794　D067号遺構実測図

D067出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削	砂粒	堅緻	暗褐色	
2	甕	—	—	—	胴部破片	——	砂粒	堅緻	明茶褐色	
3	坏	3.5	10.3	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
4	坏	3.8	(11.7)	(7.2)	½	下端静止ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	雲母	堅緻	淡褐色	墨書判読不明 糸切り
5	坏	3.7	(10.8)	(6.8)	⅓	下端静止ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	糸切り
6	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「岡」
7	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書「岡」
8	坏	—	—	—	破片	——	砂粒	堅緻	明褐色	朱書判読不明
9	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
10	坏	—	—	—	破片	——	雲母	堅緻	淡褐色	墨書判読不明
11	坏	—	—	—	破片	——	——	堅緻	明褐色	墨書判読不明
12	高台付坏	2.1	—	(5.6)	½	——	砂粒	堅緻	(内)明褐色 (外)褐色	

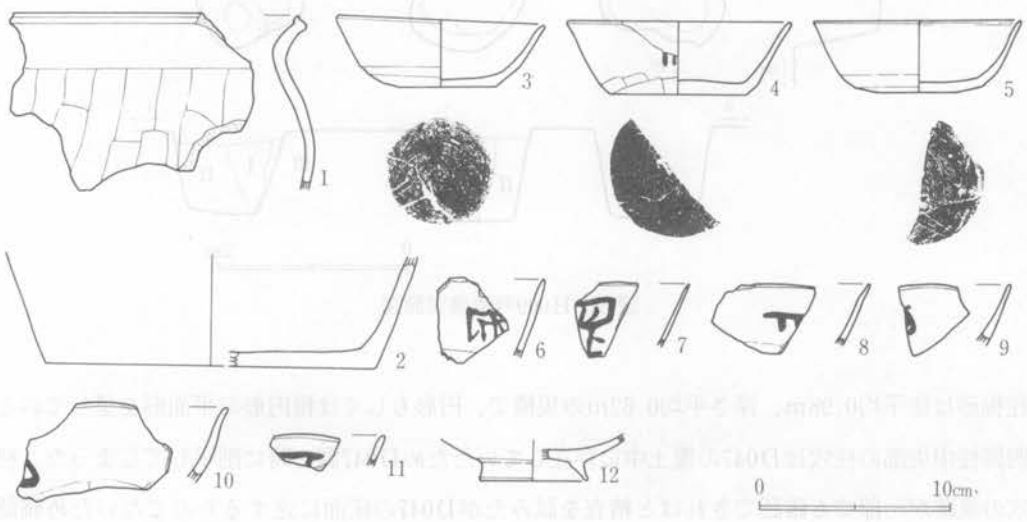


図795 D067号遺構出土遺物実測図

23. H009遺構（図796、図版187－3）

Ⅳ群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、D047を切断している。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の東西棟建物跡である。柱掘形は径平均1.15m、深さ0.95mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。柱穴内にはⅠ層ロームブロック混入暗褐色土層、Ⅱ層ロームブロック層が堆積している。遺物の出土は皆無である。

24. H012号遺構（図797、798、図版188－1）

Ⅳ群の遺構群内においてH009と同様ほぼ中央部に位置し、D045、D046を切断している。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の東西棟建物跡である。

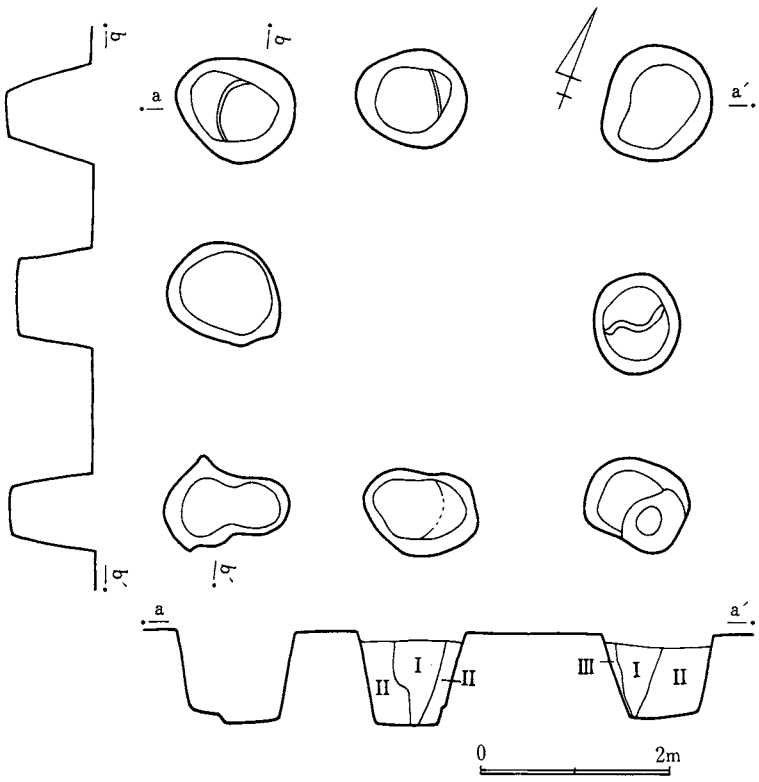


図796 H009号遺構実測図

柱掘形は径平均0.98m、深さ平均0.62mの規模で、円形もしくは楕円形の平面形を呈している。西側柱中央部の柱穴はD047の覆土中に存在していたためD047調査時に削平してしまった。柱穴の痕跡が一部でも確認できればと精査を試みたがD047の床面に達するものでないため確認することはできなかった。

出土遺物　遺物は、図示する坏形土器1点である。口径 12.5 cm、器高 3.9 cm、底径 7.2 cm を計り、底部はヘラ切り後、回転ヘラ削リ調整されている。胎土、焼成良好で、色調は明褐色を呈している。

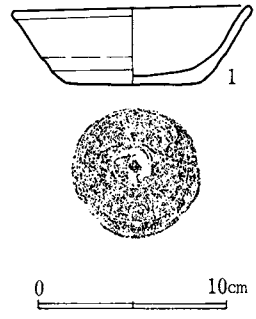


図797 H012号遺構出土遺物実測図

H012出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.9	12.7	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	明褐色	

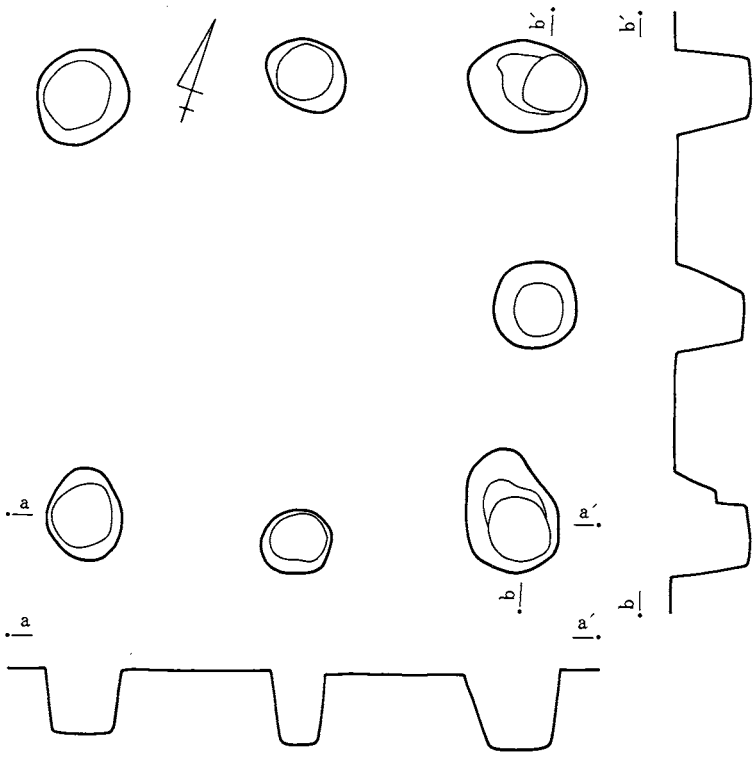


図798 H012号遺構実測図

25. P006号遺構. （図799、800、図版188—2、3）

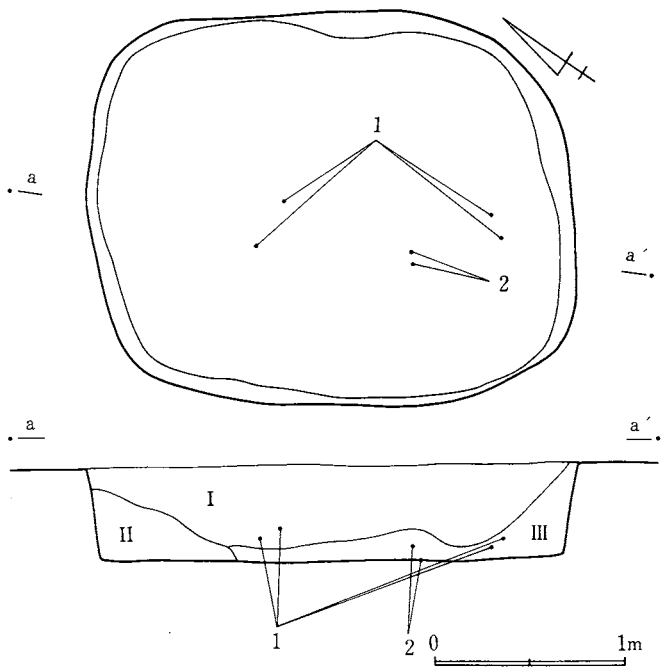


図799 P006号遺構実測図

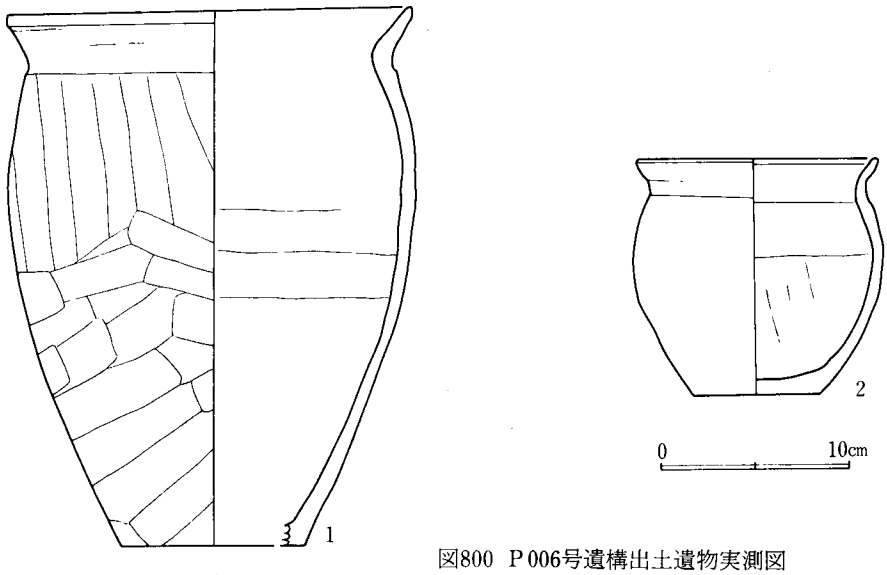


図800　P006号遺構出土遺物実測図

IV群の遺構群内において最も南側に位置し、D041が近接している。

遺構　長径2.57m、短径2mでほぼ楕円形の平面形を呈する遺構である。壁はほぼ垂直に0.5m掘り込んで底面に達している。底面は多少の凹凸を生じているもののほぼ平坦であるが踏み固められた状況は呈していない。底面中にはピット等の施設はない。遺構の性格については明らかでない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層褐色土層が堆積しており、遺物はIII層底面上を中心に中央部より出土している。

出土遺物　遺物は稀少であるが甕形土器2個体が出土している。1は口縁部が「く」字状に外反する長胴のもので、2は口縁が緩やかに外反する小形の甕である。

P006出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎		土	備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	27.9	21.1	(9.6)	完形	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	(内) 暗褐色 (外) 淡褐色	
2	甕	6.6	12.5	12.4	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(外) 淡褐色 (内) 暗褐色	

第6節　その他の遺構と遺物

歴史時代のその他の遺構として、ここでは古代の集落以外を取り扱うこととしたい。権現後遺跡において古代以降の時期に構築されたと考えられる遺構は江戸時代に構築された土壙の1基と時期不明の溝である（図A）。

1．P015号遺構（図801、802、図版193）

台地のほぼ中央部に位置し、須久茂谷津から入り込む小支谷の基部に接続する溝に切断されている。よって旧時における完全な形状は止めていない。

遺構　長径1.35m、短径0.93mで楕円形の平面形を呈している墓壙である。壁は規則的な掘り込みを呈しておらず、かなり自由な状況を呈している。深さ0.75m掘り込んで底面に達する。底面はさらに小ピットによって2段階に掘り込んでいる。底面の長径は約1mを計る。

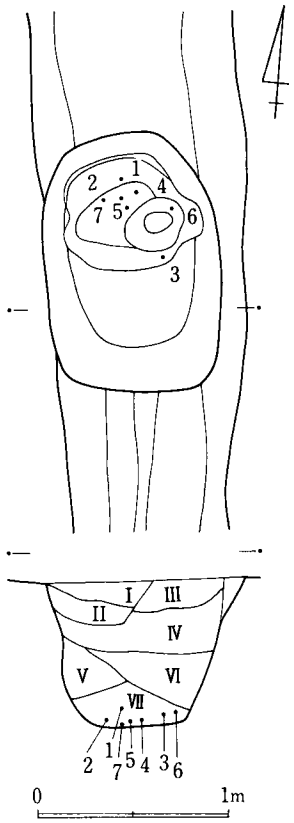


図801　P015号遺構実測図

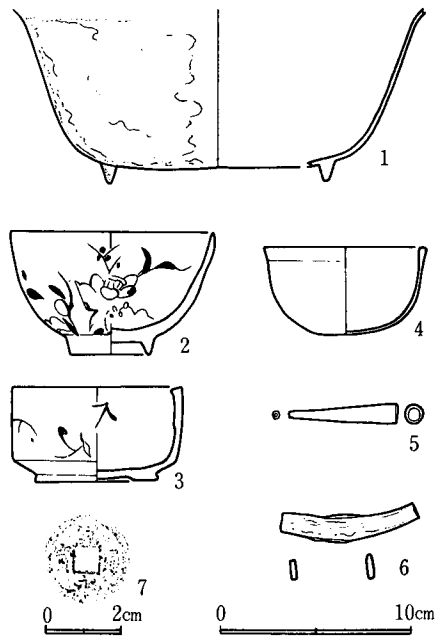


図802　P015号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層ローム粒混入黒褐色土層、II層ロームブロック混入黒色土層、III層ロームブロック混入暗褐色土層、IV層暗褐色土層、V層ロームブロック混入褐色土層、VI層ロームブロック混入明褐色土層、VII層褐色土層が堆積している。鉄鍋はおそらく頭部を被覆してあったものと考えられる。他の遺物もこの周辺より出土している。

出土遺物　遺物は墳墓の性格を良く反映している。1は鉄鍋で口の部分が欠損している。2、3は磁器でいずれも花文様の染付が見られる茶椀である。3は青銅の椀である。5は銅製のキセル吸口である。6は鉄製品であるが用途不明である。7は寛永通宝である。

2．M001号遺構（図A、803）

X・Y・Z－1・2・3・4の地域において検出した溝である。

遺構　幅は一定せず、広い部分で2.5m、狭い部分で1.2mを計る。深さも一定しておらず、深い部分で1.2m、浅い部分で0.3mを計る。およそ矩形に廻る溝で、一部M001と並行している。地境と整合する部分も認められる。

出土遺物　遺物は溝に伴うものは皆無で、奈良、平安時代の集落と関係するものが多いようである。1は甕形土器の口縁部破片、2は皿形土器体部破片、3、4は坏形土器体部破片で墨痕が認められる。5は高坏形土器脚部破片、6～9は鉄製品である。いずれも用途不明であるが、6、8は刃部が認められる。

3．M002号遺構（図A）

Y・Z－1・2・3の地域において検出した溝である。

遺構　M001の東側部分の溝と並行しており北側は地区界外に、南はY－3地域で消滅している。幅員は約1m、深さ0.4mを計る。遺物の出土は皆無である。

4．M003号遺構（図A）

X－7・8・9・10の地域において検出した溝で、住居跡を切断する部分もある。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員は1.85m、深さ0.6mを計る。南側部分では数本の溝と接続している。出土遺物はない。M004が並行して位置している。

5．M004号遺構（図A）

X－7・8・9・10の地域において検出した溝で、ほぼM003と並行して位置している。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員は0.7m、深さ0.5mを計る。途中で直角方向、即ち、西側に支線を有している。出土遺物はない。

6．M005号遺構（図A）

U・V・W－4・5・6・7・8・9・10の地域において検出した溝で、住居跡を切断する部分もある。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員は一定せず、広い部分で4.7m、狭い部分で1.2mである。深さは北側が若干浅いものの、平均0.6mを計る。途中M006、M007と交差している。遺物の出土はない。

7．M006号遺構（図A、803）

T・U・V・W－9の地域において検出した溝で、住居跡を切断する部分もある。

遺構　ほぼ東西に連なる溝で、幅員は0.8m、深さ0.8mを計る。途中M012、M005と交差している。ほとんど地境と整合する溝である。

出土遺物　6の鉄製品1点のみである。幅 6 cm ほどの板状のものであるが用途は不明である。

8．M007号遺構（図A）

S・T・U・V－9の地域において検出した溝で、M013に接続している。

遺構　ほぼ東西に連なる溝で、M006と並行して位置している。幅員は0.7m、深さ0.5mを計る。M006と同様にほとんど地境と整合している。遺物は出土していない。

9．M009号遺構（図A）

V－4の地域において検出した。連続して他の溝と接続することなく完結する溝である。

遺構　ほぼ東西に連なる溝で、幅員0.1m、深さ0.2mを計る。全体的に掘り込み方は浅い。遺物は出土していない。

10．M012号遺構（図A）

T・U－5・6・7・8・9・10の地域において検出した溝である。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員1.7m、深さ0.5mを計る。南側において数本の溝と接続している。溝は途中M006、M007と交差している。遺物の出土はない。

11．M013号遺構（図A）

S・T－5・6・7・8・9・10の地域において検出した溝である。途中M007が接続している。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員1.5m、深さ0.4mを計る。途中P015を切断している。M012とほぼ並行するような状況を呈している。ほぼ地境と整合する溝である。

12．M015号遺構（図A）

Q・R－10の地域において検出した溝である。

遺構　合計5本の溝が重複している溝で、途中西方に直交する溝が接続している。幅員0.5m、深さ0.3mを計る。途中芋穴による攪乱を数か所にわたり認められる。遺物の出土はない。ほぼ地境と整合する。

13. M016号遺構（図A）

Q・R－10・11の地域において検出した溝である。一部M015、M017と並行している。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員0.5m、深さ0.3mを計る。遺物の出土はない。ほぼ地境と整合する溝である。

14. M017号遺構（図A）

R－11の地域において検出した溝である。M015に近接する溝であり、本来は同一の溝として掘り込まれた感がある。

遺構　ほぼ南北に連なる溝で、幅員0.6m、深さ0.3mを計る。遺物の出土はない。

15. M018号遺構（図A）

Q－11の地域において検出した溝で、連続して他の溝と接続することなく完結する溝である。

遺構　ほぼ東西に連なる溝で、幅員0.5m、深さ0.3mを計る。遺物の出土はない。

16. M019号遺構（図A、803）

X・Y－5の地域において検出した溝である。M020と一部並行し、M022と交差している。

遺構　ほぼ東西に連なる溝で、住居跡を切断する部分もある。幅員1m、深さ0.4mを計り、重複して掘り込んでいる部分も認められる。

出土遺物　遺物は、11、12が陶器の破片、13は弥生時代後期の高坏形土器の破片である。

17. M020号遺構（図A）

X・Y－5・6の地域において検出した溝である。

遺構　検出した地域は地区界や、住宅建設に伴って地山が削平された地域に接するため全体の様子が把握できないが、歴史時代第II群の住居群の一部を区画する溝である可能性がある。南北に連なる部分においてP017によって切断される点を考えれば、M020の構築年代がほぼ歴史時代等II群の住居群と同様であると考えて良いであろう。幅員2m、深さ0.5mを計る。遺物の出土はない。

18. M022号遺構（図A、803）

Y－4・5の地域において検出した溝である。M019、M020と一部交差している。

遺構　幅員1.5m、深さ0.4mを計り、20m四方に廻ると考えられる溝であるが、東地域が地区界外であるため明らかにできない。

出土遺物　遺物は溝に伴うものは皆無で、奈良、平安時代等古代に関係するものが多いよう

である。14は甕形土器の口縁部破片、15は坏形土器の底部破片、16は高坏形土器の脚部破片である。17は凝灰岩製の砥石である。

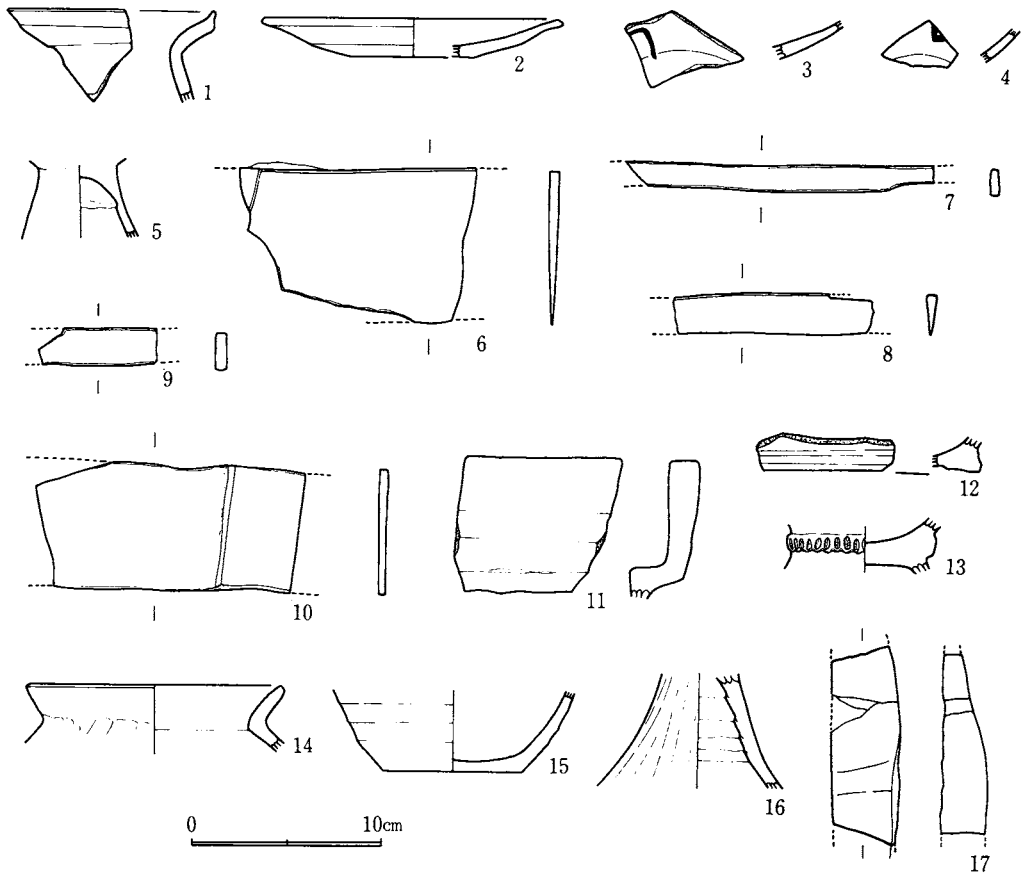


図803 溝出土遺物実測図(M001　1～9,M006　10,M019　11～13,M022　14～17)

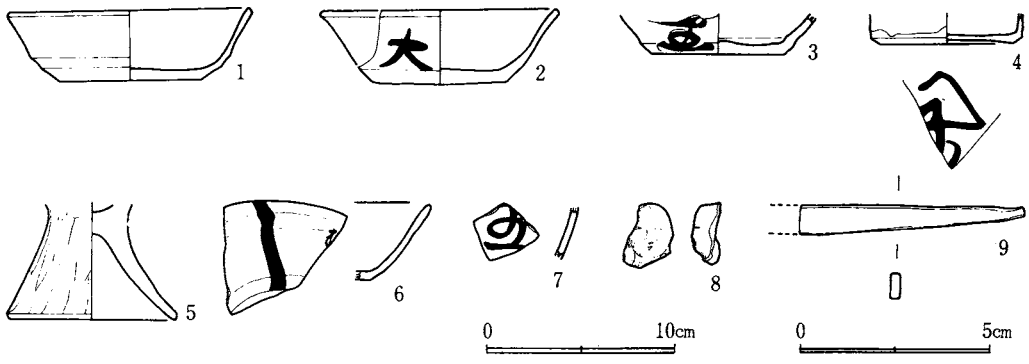


図804 遺跡表採品

第3章　ま　と　め

第1節　遺構について

1．竪穴住居跡

歴史時代の竪穴住居跡は、第Ⅰ群23軒、第Ⅱ群10軒、第Ⅲ群11軒、第Ⅳ群23軒の計67軒である。第Ⅳ群の23軒の中には、歴史時代の遺物を出土するが弥生時代に構築された2軒の住居跡を含んでおり、厳密に言うならば21軒の合計65軒となる。

既に述べたように、この65軒をもって歴史時代の集落全体を検出したわけではなく、未調査地区、調査対象外地域（地区界外）に各群と有機的な関係を有する遺構の所在が充分考えられる。さらに、萱田地区内における歴史時代の集落跡との関係も配慮しなければならないところである。[註1]

群として捉えた遺構は、必ずしも同時期に存在した遺構群を意味するものではない。面的な発掘調査の結果からは随所に遺構を検出したわけではなく、遺構が存在しない空白部分を取り込んで集落を形成している。このような平面的な観察を通して把握できた遺構の纏りを群としたのである。

群を構成する主体は言うまでもなく竪穴住居跡である。竪穴住居跡の平面形は、方形を基調としながら、若干壁コーナー部分が丸味を帯びる形状を呈していたり、若干胴張りの形状を呈しているが、形状的に大差は認められないと言って良いであろう。ただし、規模の点から見ればその差は顕現し、さらに、遺構確認面（ソフトローム上面）から床面までの壁の掘り込みは極端な差を生じている。

さて、内部施設の面ではどうであろうか。当該期における住居にはカマド、壁溝、柱穴、小ピットが設備されるのを平均的な相様として認められるが、個別に観察すれば必ずしもこの限りでなく、個体差が認められる。その相違はA～Fまでの6の形状に識別できる。

A　カマド、壁構だけが設備される住居。

B　カマド、壁構、それに小ピットが設備される住居。

C　カマド、壁溝、柱穴が設備される住居。

D　カマド、壁溝、柱穴それに小ピットが設備される住居。

E　カマドのみの住居。

F　カマド、それに小ピットが設備される住居。

A～Fまでの形状は、カマド、壁溝、柱穴、小ピットが内部設備される平均的な様相を様式と捉えるならば、様式の範囲内で捉えることのできる形に相当しよう。ただし、一口に形と言

っても、この場合、実際に住居を構築する上で重要な意味を有する土木技術、建築技術等の習熟度が大きく影響するものであり、かつ、資材の調達、運搬等についても各個における経済状況の違いからも大きく左右される点を考慮しなければならないであろう。各群におけるA～Fの形状別採用状況を見てみたい。

第Ⅰ群

A　D007、D072、D078、D082、D083、D085、D086、D090、D163の合計9軒で、内D072は修改築が認められる。

B　D077、D166の合計2軒である。

C　この形状は皆無である。

D　この形状は皆無である。

E　D012、D014、D071、D081、D084、D091、D092の合計7軒で、内D012、D014は修改築が認められる。

F　D013、D093の合計2軒である。

第Ⅰ群においてはA～Fに該当しない形状の住居D011、D164、D165の3軒がある。いずれもカマドが設備されず、D011には壁溝、柱穴、小ピットが認められない。カマドが設備されていればEとなる。D164は、壁溝、柱穴が認められない。カマドが設備されていればFとなる。D165は柱穴が認められない。カマドが設備されていればBとなる。形状別ではAが最も多く、次いでEとなっており、B、Fは少ない。また、C、Dは認めることができない。そしてA～F以外に3軒のカマドの設備を持たない住居がある。形状の違いによる住居の分布状況に著しい偏在の傾向は認められないものの、同一形状の住居同志は良く近接して位置していることが指摘できよう。

23軒の内、D012、D014、D072の3軒は修改築に伴ってカマドの構築位置を変えている。D012は北壁から西壁に、D014は東壁から北壁に、D072は西壁から北壁にそれぞれ変更している。変更時の位置決定には近接する住居が大きな影響を与えていることが窺える。D012はD083、D014はD013、D072はD071との関係が求められるであろう。

群内での住居1軒が占有する土地面積について、最も距離を有して位置するD013とD163の2軒を結ぶ線分を直径として円を描いた場合、まず、第Ⅰ群の占める全体面積は約11,876㎡となり、角として捉えるならば1辺108m四方となる。これは方一町に相当する面積である。さらに住居1軒当りの占有面積は、単純計算すれば516㎡となる。この占有面積については言うまでもないが、同時性を有する住居の分布については考慮していないため、群全体として見た場合の住居分布の疎密の傾向が窺えるものの、集落における土地所有の実態が把握できる指数にはなり得ない。

住居の規模はD163が最少で2.4m×2.4m、最大がD072の4.26m×3.76mであり、各住居は

当然この間の範囲内にあるが、北壁辺は2.7mおよび3.7mを中心とする2つの偏りが認められる。一方東壁辺では2.3mおよび3.4mを中心とする2つの偏りが認められる。北壁辺と東壁辺の数値が整合しないのは、平面形が正方形を呈していないことを示しており、群全体として考えれば住居の規格については顕著に把握できない。ただし、住居構成員は北壁辺長で言えば2.7m級で2～3人、3.7m級で3～4人と推定でき、平均化している傾向は窺うことができる。

第II群

A　D017、D018、D189の3軒で、内D189は修改築が認められる。

B　D016、D188の2軒で、内D188は焼失住居である。

C　この形状は皆無である。

D　D190の1軒で、修改築が認められる。

E　D015、D055、D068の3軒で、内D055は焼失住居である。

F　D010の1軒である。

第II群の立地する地域のほぼ中央に、住宅が建設されているため、群としての纏りに不備な点があることを否めない。形状別ではCのみが認められないだけであり、形状差が著しい。第I群で認められた同一形状の住居同志が近接しているという傾向は、D017、D018に認められるだけであり、他は明確に捉えることはできない。

10軒の内、D018、D190の2軒は修改築に伴ってカマドの構築位置を変えている。D189は東壁から北壁に、D190も東壁から北壁に変更している。修改築に伴う変更位置決定については第I群でのような状況は明確に認められないが、D188が関係していたかもしれない。修改築の他に焼失したD055、D188の2軒があり、出土遺物が豊富である。

群の占める全体面積は、D010とD189を結ぶ線分を直径とした場合8,490㎡となり、住居1軒当りの占有面積は849㎡となる。したがって住居1軒当りの占有面積については第I群より広いことになる。このことは換言すれば遺構の分布状況が散漫であることにほかならない。その原因は、既存住宅が介在しているためと考えられる。

住居の規模はD015が最少で7.5m×2.1m、最大がD188の6.1m×5.6mであり、各住居はこの間の範囲にある。一辺の中心は北壁で3.4m、東壁で3mであり、北壁、東壁ともに0.5m前後の範囲内におさまる。この数値は、第I群において認められた2.7mおよび3.7mの偏りの間に相当するものである。D188は突出した規模を有しており、第I群では認められなかった特異な状況を示していると言えるであろう。

第III群

A　D019、D020、D089の合計3軒で、内D019は修改築が認められる。

B　D023、D024の合計2軒である。

C　D088の1軒である。

D　D022の１軒である。

E　D022、D025、D087の合計３軒である。

F　D160の１軒である。

第III群は、他群との間に遺構の存在しない空白地域をもって位置し、合計11軒の住居をもって完結しており、権現後遺跡において種々の面で注目できる群である。形状別ではA、Eが最も多く３軒あり、次にBの２軒、C、D、Fはそれぞれ１軒あり、傾向としては第II群同様形状的に豊富である。この点は第Ⅰ群における23軒の４形状に対し、明らかな相違を呈していると言って良いであろう。また同一形状同志が近接する関係はA形状の３軒以外は捉えにくい。

11軒の内、D019が修改築に伴ってカマドの構築位置を北壁から西壁に変更している。変更時の位置決定については明確でない。

群の占める全体面積は、D025、D087を結ぶ線分を直線とした場合6,358㎡となり、住居１軒当りの占有面積は578㎡となる。この１軒当りの平方米数は、第Ⅰ群より若干広いものの、近似する数値であると判断できる。

住居の規模はD021が最少で３m×2.5m、最大がD088の4.9m×4.4mであり、各住居はこの間の範囲内にある。一辺の中心は北壁で3.2m×東壁で3.4mであり、北壁、東壁ともに0.5m前後の範囲内におさまる。この数値は第II群において認められたものと近似している。また、第II群のD188ほどではないが、D022、D088が他より突出していると言えよう。

第IV群

A　D042、D045、D046、D048、D049、D052、D057、D059、D060、D061、D064、D065、D066の合計13軒で、内D046は焼失住居である。

B　D050、D063の合計２軒である。

C　D047、D062の合計２軒である。

D　この形状は皆無である。

E　D051の１軒である。

F　この形状は皆無である。

第IV群の立地する地域は調査地域の北東部分であり、遺構群の広がりは北、東にさらに展開するものと想定できる。また、既存住宅が位置しており、未調査となっているが、この部分に遺構の存在することは多分に考えられるところである。形状別では圧倒的にAが多く、遺構数の６割がこれに相当する。しかも住居の分布状況を見れば、群中の北東側半分の地域にほぼ集中していることが窺える。次いでB、Cの２軒、Eの１軒、D、Fは認められない。A～Fの形状以外にD041、D067があるが、D067は部分調査のため、明らかでない。D041は壁コーナー部分にカマドが構築され、住居の平面形も長方形を呈し、他の住居との相違が著しい。焼失住居は１軒認められるが、修改築が行われた痕跡のある住居は皆無である。

群の占める全体面積は、D052、D060を結ぶ線分を直径とした場合12,462㎡となり、角として捉えるならば111m四方となる。これは方一町より若干広いものの近似する数値である。住居1軒当りの占有面積は593㎡となり、第II群に近い数値を示していると言えるであろう。この数値は、既存住宅下の未調査部分を考慮すれば、実質的には第I群や第II群のそれとさらに近くなる数値を示すものと思われる。

住居の規模はD048が最少で2.34m×3m、最大がD047の3.9m×4.03mであり、D041が北、南壁辺表が4.5mであることを除けば、一辺の中心は北壁で3.3m、東壁で3mであり、北壁、東壁ともに0.5m前後の範囲内におさまる。この数値は第II群、第III群に近いものである。

2．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と比較すると遺構自体の性格が違うことはさることながら構築方法に著しい相違点がある。竪穴住居跡の場合、遺構の主体が土中深く位置しており、当然住居空間もその中にあるので遺物が良好な状況で包含されており、併せて遺構自体の遺存状況も良好であるため、生活構造を知る上での手懸かりが多いと言える。これに対し掘立柱建物跡は、遺構として痕跡を止めるのは柱穴のみであり、上部の構造はまったく遺存しないため、柱穴が唯一の遺構となっている。このことは調査上の問題は別としても、表土層の堆積が0.3m～0.4m程度である所は、耕作による攪乱が著しく、ソフトローム層面での確認が力のおよぶ限界である。ごく稀に地表面近くに掘り込みの痕跡が認められたり、焼土が検出される側があるが[註2]、これをもって全容が勿論把握できるわけではない。いずれにしても遺構の性格上、柱穴が諸作業の対象になっていることに変わりはない。

掘立柱建物跡は第I群で7棟、第II群で5棟、第III群で3棟、第IV群で2棟の合計17棟である。17棟の建物は、規模、棟方向に違いが認められる。

規模は、2間×2間を最少とし、3間×2間が最大である。2間×2間の遺物跡は、H002、H003、H004、H007、H008、H009、H011、H012、H014、H017の10棟である。3間×2間は、H001、H005、H006、H013、H015、H016の6棟である。H010については住宅建設に伴って削平されているため桁行の規模については把握できない。

桁行の1間は柱穴の芯々間で約2.2m、梁間は2mが平均的であるが、中には桁行で約1.6m、梁間が1.4m程度のものまであり、規格的に遺構が構築されたのでわないことが窺える。このことについては、柱間だけに指摘できることではなく、柱の通りが良好でないため、歪を生じている遺構も存在する点からも言えることである。

柱の掘形についても規格的な掘り込みを呈しておらず、円形ないし楕円形を呈している。しかも1棟において円形と楕円形が混在している状況も認められ、いずれか一方を採用すると言う傾向は認められない。

構造的な面においては側柱の一部が欠落する建物が、17棟の内4棟存在する。また、束柱としての性格を具備しているか否か定かでないが、この種の柱穴を有する建物が2棟存在する。さらに、H015、H016のように掘立柱建物間で重複を呈している。重複関係も竪穴住居跡との間にも認めることができ、H009、H012、H017は、竪穴住居跡を切断して構築している。

掘立柱建物跡が群内で占める位置は様々であり、竪穴住居跡との特定な関係が考えられる状況は認められない。その中で第Ⅰ群においては掘立柱建物群が住居群中に散在することなく、独立したかのような分布状況を示しているが、住居群と切り離して考えるわけにはいかない。掘立柱建物跡は群として単独で存在することなく、住居群を構成する一要素として存在するものであると言って良いであろう。

3．その他の遺構

その他の遺構としては方形周溝遺構、土器焼成窯、井戸、土壙がある。

方形周溝遺構は2基を検出している。周溝の幅員は約0.6mで、0.1m～0.19mの深さを呈している。いずれも墳墓として性格を有する遺構と考えられるが、埋葬施設については検出できないため明言はできない。2基のうち1基については内周溝を有しており、若干様相が異なる。遺構の帰属年代については遺物の出土がないため明らかにできない。

土器焼成窯とした遺構は7基ある。7基の内3基は他の遺構と重複するため遺構の一部が欠損しており、旧時の形状については明らかにできない。残る4基は規模の面で大、小の差は認められるが形状的にはほぼ同一である。一様に階段状の出入口が設けられており、これは通風口も兼ていたと考えられる。

窯業跡を考える場合、窯跡と灰原は不可分の関係を有するところであるが、検出した7基については具体的に灰原と認定できるような施設やその痕跡は確認できなかった[註3]。しかしながら、第Ⅰ群中における竪穴住居跡D077、D090と、第Ⅱ群におけるD019、D087の床面上に水簸した粘土塊を検出できた点を考慮すれば、この4軒が何らかの形で土器生産に関係していたことが窺える。ただし、この種の遺構は県下においてもあまり類例がなく[註4]、充分に言究できる状況でないため、出土遺物を絡めて別項において記述したい。

井戸とした遺構はD017だけである。円錐形状の掘り込みを呈するもので雨水を一時的に貯水しておく役割を有していたと考えられるが、構築後あまり時間を経ない内に機能を失ったことが土層断面より看取できる。特にⅣ層の自然堆積後は人為的に埋設された可能性を有している。生活用水は湧水等、他に求めることが容易な本地域にあっては生活用水の確保以外の目的をもって構築されたかもしれないが、この点については明らかにできるだけの資料はない。

土壙とした遺構は、P018、P019である。いずれも溝によって遺構の上部が切断されているため資料的な不備があるが、P019は地下式土壙の趣がある。しかしながら出土遺物は皆無の状

況であるため遺構の構築された時期は明らかにできないが、集落跡と同時期と考えて良いであろう。

註

1　萱田地区においては北海道、井戸向、白幡前の各遺跡で歴史時代の集落跡を検出している。

2　山田遺跡調査会　『山田水呑遺跡』　昭和52年

3　埼玉県水深遺跡では窯跡と灰原が検出されており、明確な土器生産の実態が把握できる。埼玉県遺跡調査会　『水深』　昭和47年

4　駒形遺跡発掘調査団　『駒形遺跡』　昭和53年

第2節　遺物について

1．搬入土器と生産土器について

歴史時代の土器について、編年的研究が開花しているところであるが、土器の生産体制にまで及んで解られていないのが現状である。この問題に対して権現後遺跡における膨大な資料は解決の糸口になる視点を提示していると言って良いであろう。

須恵器は、登り窯を用いて大量生産されているため、生産された土器は製作技法上共通する要素を有し、さらに形状的にも均一化するという特徴をもつものであるという点に着目して集落内において大量生産された土器の状況を把握[註1]し、併せて土師器についても言究したい。

須恵器は、還元焔焼成されることによって焼きあがりの色調が青灰色を呈するという独特なあり方を示すが、千葉県内の北総地域においては色調だけで判断することは困難な面があ[註2]るため、色調や製作技法上の特徴を抽出することによって須恵器の搬入状況が明らかになると思われるので、各器種ごとに製作技法上の特徴を中心に見てみたい。

(1)　須恵器

①　甕形土器

甕形土器は大きく3つに分類できる。

A　口径が36cm前後の大形な甕で、口縁部が直線的に大きく開き、肩部が著しく張る形状のもの（D010－1・2、D016－6）。

B　形状がAに近いが小形で、肩部の張り具合も小さく、さらに大形（D007－10）と小形（D007－11）がある。

C　肩部の張りがほとんどなく、長胴を呈し、口縁部が極端に短かく外反するもの（D010－3）。

A～Cは、いずれも叩きじめの技法をもって成形され、口縁部はヨコナデ、胴部下半はヘラ削り調整が施されるのが通有の条件である。叩きじめ痕は縦位または、斜位となっており、

内面には当木痕は明瞭に認められない場合が多い。叩きじめ痕が横位、格子状のものは、A～Cの類形とは別に考えたい。この種の資料については量的な問題もあり、確実に捉えることができない側面がある。ただし、D051－3を除いた例は内面に青海波文を認めることができるため、明らかにA～Cの甕形土器とは様相を異にしていることがわかる。

② 甑形土器

甑形土器は、甕形土器に比較して形状の窺える例が少ないが、実際には底部破片がかなり出土していることを考えれば、本来の集落内における個体数は多いものであったと考えられる。また、形態的には甕形土器Cに近いため、破片では区別できない点もあることを考慮しておかなければならないであろう。

甑形土器の形状は、口縁部は極端に短かく、水平近くまで外反し、口縁部近くの胴部に小把手が付く。胴部はほぼ直線的であり、最大幅は口縁部にある。底部はヘラによって5孔穿たれている。中央部孔は円形を呈し、周辺孔は楕円形を呈しているのが通有の状況である。また、底部には何らかの敷物上で製作した痕跡を止めており、この痕跡や胴部の叩きじめの状況、さらに胴部下半のヘラ削り調整が甕形土器と類似しており、同一手法によって生産されていたことが確認できる。D007－7はその好例として良いであろう。

③ 鉢形土器

鉢形土器は、甑形土器以上に出土例が少なく、具体的な記述をすることがむずかしいところであるが、甕形土器Cを小形化した形状のものと(D018－2)、D083－4のように胴部から口唇部まで直線的になる形状のものがある。前者は、胴部に叩きじめ痕を有し、胴部下半はヘラ削り調整されており、明らかに甕、甑形土器と共通する製作手法が認められる[註3]。これに対し、後者はロクロを使用したもので、わずか胴部下半のヘラ削り調整が甕、甑形土器と共通する要素である。

④ 坏形土器

坏形土器も出土例の少なく充分に検討できる状況でないが、4つに分類することが可能である。

A 平滑な底部から、直線的に開く体部を呈するもの（D045－6)。

B 体部が外反ぎみに開き、体部の立ちあがり部分が丸味を呈するもの（D017－18)。

C 体部の立ちあがり部分が丸味を呈し、体部が直線的に開くもの（D045－8)。

D 体部が外反ぎみに開き、比較的底部径が小さいもの（D022－19)。

A～Dの内、A、Bは底部が一方向のヘラ削り調整が施されており、切り離しの手法は明らかでないが、Aの内D065－4は無調整であるためヘラ切り痕が明瞭に認められる。よって、Aはヘラによる切り離しが行われたと考えて良いであろう。Cは回転ヘラ削り調整が施され、調整が体部下端に著しくおよんでいるため、体部の立ちあがりが丸味を帯びる。切り離しについ

ては明らかでない。Dは回転糸切りの後、周辺を回転ヘラ削り調整を施しているものと、糸切りのまま無調整のものがある。

坏形土器A～Cの形状を窺えるのは全部で11例であるが、切り離し技法は2次調整が施されるため明らかでないが、ヘラ切りが主流であると考えられる。底部の2次調整はヘラ削りによって底部を平滑に仕上げており、一方向の雑な削りが主流である。中には回転ヘラ削りによる調整が認められるが、形状的な相違より考えれば生産地の違い、あるいは時期的な違いによるものと考えられる。同様のことは糸切りによって切り離され、周辺を回転ヘラ削り調整されるものにも言えよう。一方向の雑な削りが主流であるAは、第IV群に集中して出土する傾向が認められる。

坏形土器においては、甕、甑、鉢形土器の製作手法である叩きじめが認められないため、還元焔焼成になるものに限り取り扱ったが、中には甕などと同様に酸化焔焼成されたものの存在が充分考えられる。そこで先に指摘した須恵器生産の特徴が、実際の集落内において明確に把握できるものであるか否かを検証することが重要な意味をもってくる。

まず、第1段階の作業として1軒の竪穴住居内において、共通する要素、即ち、同時生産された可能性のある土器の抽出作業を実施した。各群における結果は以下の通りとなる。

第I群

D007、D081、D083、D085、D093

第II群

D016、D017、D055、D188

第III群

D020、D087、D088、D160

第IV群

D051

65軒中14軒において明瞭に同時生産された土器を捉えることができた。他の51軒においては同時生産された土器はないものの、製作手法上の特徴や形態的な特徴が似る資料が存在しており等閑視するわけにはいかない。同時生産された土器の実態を今少し考えてみたい。

第I群においては23軒中5軒に同時生産された土器を捉えることができた。D007では、16・27、29・40、30・31・33・37、35・42、36・41、48・49が一個体ずつ対比して得られた結果である。全体に共通する点は、口唇部の引き出しが若干肥厚ぎみになると言うことと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。同時生産外の土器についても同一人による一連の土器製作の中に位置づけて考えることが可能である。切り離しは、糸切りを多用し、2次調整は回転ヘラ削り調整を施している特徴が指摘できる。

D081では、8、10、11・12が同時生産と考えられる。共通する点は、口唇部が尖る形状を呈

することと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。切り離し技法については、2次調整が施されているため明確に捉えることはできないが、同時生産以外の資料において同一人による土器製作にかかるものと考えて良い13には、糸切り後、回転ヘラ削調整が認められる点を考慮すれば、糸切りが多用されていた可能性は充分に考えなければならない。

D081の特徴は、D007で認められた特徴と比較した場合、異質であることが窺える。さらに7のような深身で、口唇部が外反に屈曲する形態を呈する土器が同一人製作になる土器群に混入している点からも指摘できよう。

D083では、10、11が同時生産と考えられる。共通する点は、口唇部が尖り、体部が内彎ぎみに開くことと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。しかし、内面に磨きが施されている点や、還元焔焼成される土器が2点あることなどからすれば、須恵器として生産された可能性はなく、土師器の蓋然性を有するものであると考えて良い。切り離し技法については、2次調整が施されているため明確に捉えることはできない。同時生産外の土器間において共通する点が認められないわけではないが、明確な決定はできない。

D085では、10、12が同時生産と考えられる。共通する点は、口唇部が尖る形状を呈することと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。この特徴はD081で認められた特徴にきわめて近いことを指摘できる。切り離し技法については、2次調整が施されているため明確に捉えることはできない。同時生産外の土器の内、13は同一人による一連の製作と考えられるが、他は明確に捉えられない。

D093では、6～9が同時生産を考えられる。共通する点は、口唇部が若干つぶれた形状を呈することと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。切り離し技法については、2次調整が施されているため明確に捉えることはできない。同時生産外の土器は1点と少なく、土器生産時の状況を良く反映していると言って良いであろう。

第II群においては10軒中4に同時生産された土器を捉えることができた。D016では、11、12が同時生産と考えられる。共通する点は、口唇部が若干肥厚する形状を呈することと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されているところにある。切り離し技法は糸切りであり、先に指摘した底部の回転ヘラ削りによって周辺が調整されている。同時生産外の土器も同一人による一連の製作にかかるものと考えるものが多く見られ、それ以外の製作になるものが混在しているという構成を呈している。

D017では、9、10、11が同時生産と考えられる。共通する点は、器壁が比較的厚く、口唇部までおよんでいることと、底部および体部下端部が回転ヘラ削り調整されているところにある。切り離し技法は、2次調整が施されているため明確に捉えられない。同時生産外の土器については2系統の生産が認められる。

D055では、9、11が同時生産と考えられる。共通する点は、比較的大形の割りに器壁が薄く、作出されていることと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されるところにある。また、11は雲母の混入量が砂粒より少ないものの、雲母を胎土中に混入することも共通する要素である。切り離し技法については2次調整が施されているため明確ではない。同時生産外の土器は4系統認められる。

D188では、9、10、14と12、13が同時生産と考えられる。共通する点は、9、10、14の口唇部が若干尖がる形状を呈し、12、13は口唇部が若干肥厚する形状を呈す。いずれも底部および体部下端は回転ヘラ削り調整されている。切り離しは10にヘラ切り痕が認められる以外は、2次調整が施されているため不明である。同時生産外の土器は2系統認められるが、内1系統は先に述べた土器と同一人による製作と考えられる。

第III群においては11軒の内4軒に同時生産された土器を捉えることができた。D020では、11、19と14、18と21、22の3系統が同時生産と考えられる。11、19は、底部、体部の器壁がほぼ均しく、口唇部が若干丸味を帯びる。14、18は、底部の器壁が厚く、体部が大きく開き、内面は磨きが施される。21、22は、全体的に器壁が厚く、口唇部が肥厚し、内面は磨きが施される。いずれも底部および体部が回転ヘラ削り調整されている。切り離し技法は、21、22は糸切りによるが他は2次調整が施されているため不明である。14、18と21、22は、内面に磨きが施されている点を考えれば須恵器として生産された可能性はなく、土師器の蓋然性を有するものであると言って良い。同時生産外の土器は2系統認められる。

D087では、8、15と9、11と10、13の3系統の同時生産が考えられる。8、15は、体部が直線的に構成され口唇部は丸味を帯びる。9、11は、器壁の厚さが若干異なるが、体部は直線的に構成され口唇部は丸味を帯びる。10、13は、体部が曲線的に構成されるもので、8、15の体部下端が静止ヘラ削り調整される以外は回転ヘラ削り調整される。また、底部も同様に回転ヘラ削り調整される。同時生産外の土器は2系統認められる。

D088では、4～6が同時生産と考えられる。共通する点は、器壁が比較的厚く、口唇部が若干尖ることと、底部および体部下端が回転ヘラ削りされるところにある。切り離し技法はいずれも糸切りをもって切り離されており、回転ヘラ削り調整が施されている。4は良く糸切り痕を残すが、5、6は中心部に若干認められる程度にヘラ削り調整が施されている。

D160では、5、6が同時生産と考えられる。共通する点は、口唇部が若干つぶれた形状を呈すことと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されるところにある。切り離し技法は、5にヘラ切り痕が若干認められるため、いずれもこの方法によった切り離しであると考えられる。

第IV群においては23軒の内1軒に同時生産された土器を捉えることができた。1軒と言う数は他群に比較すると少ないが、その原因は、総体的な遺物の出土量が第IV群では少ないからであると判断できよう。D051では、7～10が同時生産されたと考えられる。共通する点は、いず

れも口径が 3 cm 前後であること、体部が口唇部近くで外反する形状を呈すことと、底部および体部下端が回転ヘラ削り調整されるところにある。また、切り離し技法がいずれも糸切りである点も共通する要素である。さらに製作上の特徴ではないが、口唇部から体部の一部にかけてタール状の付着物を認めることができる。タール状の付着が認められるのは11、13も同様であるが、7～10は、供膳用以外の使用目的で当初から小形な土器として製作されたと考えて良い土器である。同時生産外の土器は5系統認められる。

同時生産された土器を保有する住居跡は14軒であり、1軒の住居跡に同時生産が認められるのは、多い場合で4例あるが、平均的には2例と、その数は少ない。数量の少ないのは、使用時の破損等も考慮しなければならないが、土器生産時の量と関連するものと考えられ、少なくとも登り窯を用いて大量生産された土器ではないと判断できる。したがって、坏形土器の内、還元焔焼成された土器以外は甕等に認められる本来還元焔焼成されるものが酸化焔焼成されたような事実は、権現後遺跡出土の坏形土器には認められず、土師器として集落内で小規模な生産にかかわる土器である蓋然性が高いと言えよう。

以上の分析を通して権現後遺跡における搬入土器[註4]は、叩きじめ痕の認められる甕、甑、鉢形土器と、還元焔焼成される坏形土器があるが、出土遺物全体から見れば量的に少ない点が指摘できる。このことは、生産地に遠く充分な供給が受けられなかったのか、あるいはその必要がなかったのか明確でないが、実態としては、供膳形態は土師器が多く、須恵器は貯蔵形態や煮沸形態の一部を供用している点を指摘できる。

(2) 土師器

① 甕形土器

甕形土器は大きく6つに分類できる。

A 器壁がヘラ削り調整によって極端に薄く仕上げられているもので、口縁部の形状によって、「く」字状を呈すもの、緩やかに外反するもの、逆「コ」の字状を呈するものがある（D048－1、D025－1、D022－3）。

B 口唇部が突出する形状を呈し、底部から胴部中位まで条痕状の磨きが施され、底部にしばしば木葉痕が認められるもの（D065－1）。

C 口唇部が突出する形状を呈すがBほどでなく、胴部は長胴を呈し、器面はヘラ削り調整されるもの（D082－1）。

D 口唇部の形状がBに似るが、胴部はナデによる調整が施されているため痕跡が明瞭でないもの（D020－1）。

E 口唇部の形状がBに似るが、胴部はヘラ削り調整され、長胴を呈するもの（D188－2）。

F 口径 12 cm 前後の小形のもので、口縁部等の特徴によって、緩やかに外反するもの（D

042－1）、「く」字状を呈し口唇部が突出するもの（D007－2）、「く」字状を呈するもの（D021－1）がある。器面調整はヘラ削りとナデが認められる。

A～Fは、いずれも酸化焔焼成される土器であるが、かなり器種に富んでいる。Aは武蔵国を中心として分布する傾向が認められるところから武蔵型と呼ばれる土器群で、器壁が極端に薄いことが大きな特徴と言える。武蔵地域においては、在地生産の須恵器としばしば伴出するため、年代が明確に捉えられているところである。

Bは胴部が認められる条痕状の磨きに特徴があり、叩き目痕が認められる土器と同様に分類が容易である。この特徴を有する土器は古墳時代後期の鬼高期の土器群にも散見できるものであり、系統的な生産体制下における所産であることと判断できる。しかし、甕形土器において主体を占める状況はなく、他の甕形土器と共存して機能を果していると考えられる。胴部に認められる条痕状の磨きは、肩部に認められる圧痕から、土器自体を横臥させ、底部方向から胴部中位に向けて施しているのが窺える。

Cは口唇部が突出する形状を呈しているがBのように段を有することはない。胴部は長胴で、器面はヘラ削り調整される。内には肩部の張りが認められるものもある。また、底部に木葉痕が認められるものもあり、Bと共通する点が窺える。法量的には口径21cm前後のものと口径17cm前後のものがあり、大、小が認められる。

Dは口唇部がBと同様な形状を呈しており、かなり両者は接近した製作手法になるものと考えて良いであろう。またDには条痕状の磨きが認められないものの、胴部の調整は痕跡が明瞭に把握できないナデの手法を用いていることも共通する点であると言って良いであろう。形状的にDは長胴を呈している。

Eは口唇部がBに類似するが、中にはかなり口唇部が肥厚する形状を呈しているものも認められる。側面より観察すれば、口唇部が面を呈するかのような形状を呈している。この特徴は須恵器の甕形土器に通じる面があり、出土量は多いとは言えない。したがって、甕形土器の主体となるものでないことが指摘できよう。胴部は長胴を呈し、肩部の張りはほとんど認められない。器面調整はヘラ削りが施されている。

Fは小形の土器で、口縁部等の特徴によって3つに細分できる。この内口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が突出する形状の土器（F－2）は、甕形土器DないしEの形状に近い。したがって、同一の製作手法によって生産されたと考えて良いであろう。反面F－1、F－3については明確に捉えることはできないが、3例に糸切り技法による切り離しが認められるものと、木葉痕が認められるものが1例ある。糸切りのものは坏形土器に認められる手法であり、木葉痕は甕形土器Bに認められる特徴に近いものであり、何らかの関連性が窺えるが明確でない。

② 鉢形土器

鉢形土器は形状の違いによって2つに分類できる。

A 坏形土器の形状を呈し、坏形土器より大形の土器でロクロ成形されるもの。

B 「く」字状に外反する口縁部を呈し、胴部はしりすぼまりに底部に続くもの。

Aは口径約 20 cm 以上のもので、最大 29 cm のものもある。形状的には坏形であり、製作手法から見ても共通する点が認められる。底部および体部下半はヘラ削り調整される。切り離し技法は2次調整によって明確に把握できないが、糸切り技法によるものが数点認められる。内面に磨きが施される例があり、中には黒色処理される例も認められる。

Bは完形品が1例もないため危惧される面があることを否めないが、口縁部や口唇部の特徴を見れば甕形土器に接近する製作手法にかかるものと判断できよう。胴部の調整はヘラ削り調整が施されている。口径 22 cm 前後を計る。

③ 坏形土器

坏形土器については、須恵器の坏形土器の問題の中で、同時生産にかかる資料の抽出作業を試みた結果、権現後遺跡においては還元焔焼成される以外には、甕等で認められる酸化焔焼成の土器が無く、坏形土器については土師器の蓋然性が高いことを指摘した。

この作業を通して同時生産される土器の生産量が、破損等を充分に考慮したとしても、出土遺物から窺える状況は少量であることが指摘できる。土師器の坏形土器にあっては、このような状況が生産体制の実態を示していると言って良いであろう。

この生産体制の実態についてさらに具体的に検証できる遺構として、P001号遺構をはじめとする土器焼成窯や水簸した粘土塊を検出できた遺構がある。これらは、第Ⅰ、Ⅱ群に限られている点については既に指摘したところであるが、特に第Ⅰ群においては、遺構の分布状況から見ても両者の有機的関係が認められるところである。

第Ⅰ群における遺構の分布状況は、15軒の竪穴住居跡が環状形を呈し、他群には認められない特徴を示している。その遺構群の中にあって、ほぼ中央部にP002、P003が位置し、これより少し南に偏してD077、D090が位置している。中央部の空白地帯が集落の共同作業場であると考えるならば、まさに土器生産にかかる位置を占めていたと考えて良いであろう。

窯業遺跡における機能は、窯、工房、灰原等の一連の遺構によって成立しているのが一般的なあり方であり、また、生産体制を追究する上で不可欠なものである点からすれば、灰原としての機能を有する遺構を検出できなかった点や、工房が明確でない点が危惧されるところである。しかし、土器の同時生産の状況を一瞥した限りにおいては、大量に生産された痕跡が認められなく、しかも継続的な生産が行われた状況も看取できないことからすれば、特に灰原としての機能を有するような遺構の構築、あるいは灰原を形成するほどの状況ではなかったかと考えられ、灰原の有無については、須恵器生産等に対比して考える必要性はないと考えて良いで

あろう。また、工房については、直接生産に結びつく具体的な資料を得ていないが、水簸した粘土塊を検出した住居が、その機能を果していたと考えて差し支えないであろう。

P002、P003やD077、D090が実際にどのような特徴を有する土器を生産していたか、明確に捉えることはできないが、同時生産された土器の分析においてはかなり特徴に多様性が認められるところであり、集落内に残る土器は、専業的に継続した生産体制下において生産された可能性は少ないと言える。[註5]

このことを象徴するかのように、内面に磨きを施した坏形土器における磨きの手法は、内面黒色処理される土器を含めて多様であることを看取できる。基本的な磨きの手法は、大きく4つに分類できる。

① 口唇部、あるいは底部に並行するかのように回転しながら施すもの。

② 弧状に4ピッチないし5ピッチの単位で施すもの。

③ 放射状の渦巻きのように施すもの。

④ ③に①を重ねるように施すもの。

①～④が基本的な手法と考えられるが、この体部内面に施される手法に、底部に施す手法を組み合わせると一つとして同じ手法で内面に磨きを施した例は認めることはできないほど多様で、極端に言えば、一個体が個有の磨き手法の特徴を有しており、制作者が個体数だけ存在するかのような状況を呈していることからも先に指摘した生産体制の実態が妥当性を有するものであると考える。

④ 皿形土器

皿形土器は形状の相違によって5つに分類できる。

A 体部が大きく開き、底部は平底を呈す。中には若干上げ底状を呈するものもある(D007—56、D084—9)。

B 体部が大きく開き、底部は平底を基本としながら、中には周辺を高台風に作出するものもある(D072—15、D007—73)。

C Bの底部に近いが、かなり意識的に高台を作出しているようで、未発達ながら高台が引き出されている。

D ほぼ直立する短かい高台が造り付けられているもの(D007—77)。

E 盤形の形状を呈するものであるが皿形土器として便宜的に取り扱う。体部の先端が若干外反する。「ハ」の字状に開く高台を有するもの(D019—15)。

Aは口径が13cm前後のもので、体部は大きく開くが、底部は比較的小形になっている。切り離しは2次調整が施されているため明瞭に捉えられないが、中に糸切りによる技法が認められる。2次調整は回転ヘラ削り調整が施されるものが多いが、一方向のヘラ削り調整も認めることができる。

Bは高台が作出される段階に相当するものと思われる土器で、高台風に底部周辺が引き出されているものがある。全体的に底部が肥厚する点が特徴となる。切り離しは糸切り技法が用いられている。２次調整は特に施されていない。

Cは明らかに高台を有する土器であるが、未発達なものに終止している。底部は肥厚する傾向が認められる。切り離しは糸切り技法が用いられており、２次調整は特に施されていない。

Dはほぼ直立する短かい高台を有する土器であるが、形状的に整っていると言える。身が若干深い形状を呈している。切り離しは糸切り技法が用いられており、２次調整が施される例は少ないが回転ヘラ削り調整される例が認められる。

Eは盤形の土器で「ハ」字状の高台を有している。盤の内面は磨きが施されている例が多く、全体的に丁寧な作りである。切り離しは回転ヘラ削り調整が施されているため明瞭に把握することはできない。

皿形土器は、器種構成の変遷を考えるうえで注目できる器種で、その出土傾向においても見逃すことのできない側面を有している。土器生産はほぼ坏形土器と同様な体制下において行われていたと考えて良いであろうが、生産が開始される時期が、かなり限定できるものであり、この点においては、坏形土器と性格を異にするものと考えられる。また、坏形土器の生産体制下において生産されたものであるか否かについては胎土分析等の自然科学的手法をもって追究して行く必要があるところである。

２．器種構成の変遷について

器種構成の変遷については、出土土器のすでてにわたり分類したわけではないので、かなり大雑把な変遷をたどることになるであろうが、全体的な傾向としては誤りのないものと考えている。

器種構成の変遷を考えるうえで、皿形土器が注目できることについては既に指摘したところであるが、これに加えて内面に磨きを施した坏形土器についても良好な資料であることを指摘できる。それでは各群において、皿形土器と磨きを施した坏形土器が器種構成上どのように台頭してくるかを中心に見て行きたいと思う。

第Ⅰ群

第Ⅰ群においては23軒の中で、皿形土器を保有する住居は13軒で、半数以上の住居に認められる。一方磨きを施した坏形土器を保有する住居は14軒で、ほぼ皿形土器を保有する数値に近い。なお、両者の共伴関係を見れば内面に磨きを施す例に皿形土器が共伴しない場合があるが、その逆は認めがたい。皿形土器、磨きを施した坏形土器の両者を保有しない４軒の住居（D091～D093、D163）にあっては、小形の甕形土器を保有するが、大形の甕は皆無である。また、坏形土器の内、口径 12 cm 前後の小形なものは認められるものの、口径 15 cm 前後の大

形なものは認められず、供膳形態に著しい相違を見せている。D163においては須恵器の坏、非ロクロの坏が認められるところであり、相対的な器種構成のうえから見れば、かなり古い様相を示していると言って良いであろう。また、内面磨きを施す坏形土器は保有するが、皿形土器は保有していない4軒の住居（D012、D071、D082、D086）は、坏形土器の大、小の区分が明瞭であり、先の4軒とは明らかな器種構成の変化が認められる。そして最も新しい様相を見せるのが、皿形土器と、内面磨きを施した坏形土器を保有する残りの住居であると考えられる。その中にあってD007には灰釉陶器が共伴していることから明らかであろう。

第II群

第II群においては10軒の中で、皿形土器を保有する住居は5軒で、半数の住居に認めることができる。一方磨きを施した坏形土器を保有する住居は10軒すべてに認めることができる。両者の共伴関係を見れば内面磨きを施す例に皿形土器が共伴しない場合があるが、その逆は認めがたく、第I群における傾向と同様であることが指摘できる。

第II群では既に坏形土器の大、小の区分が明確に成立しており、内面磨きを施した坏形土器を保有し、皿形土器は皆無である段階から展開し、皿形土器が器種構成上認められる段階まで至っている。D190では灰釉陶器を伴っており、第I群で認められた傾向とほぼ一致している。

第III群

第III群においては11軒の中で、皿形土器を保有する住居は10軒で、半数以上の住居に認められる。一方磨きを施した坏形土器を保有する住居は11軒すべてに認めることができ、その率の高いことが窺える。両者の共伴関係は皿形土器を保有しない1軒を除いて認められるところである。

第III群では既に坏形土器の大、小の区分が明確に成立しており、内面磨きを施した坏形土器を保有し、皿形土器を保有しないD022から展開するようであるが、相対的な傾向は皿形土器を保有する段階に至っていると言って良く、他群にない傾向を示している。

第IV群

第IV群においては21軒の中で、皿形土器を保有する住居は4軒で、全体の2割にすぎない。一方内面に磨きを施す坏形土器は5軒であり、皿形土器の示す傾向とほぼ同様に2割程度の保有率である。両者の共伴関係は、1例が認められるだけである。

第IV群は相対的に出土遺物量が少ないためこのような傾向を示している可能性もあるが、他群とはまったく異質な状況を呈していると言って良いであろう。反面、須恵器の坏形土器が多く出土していることが特徴的であり、第I群のD163に近い状況を呈していると考えられる。

坏形土器の大、小の区分がなく、小形の坏のみで、須恵器の坏を共伴する段階から展開するようである。次の段階は、坏形土器の大、小の区分が成立し、しかも内面磨きを施した坏形土器と皿形土器を保有する段階に至っており、他群で認められた。内面磨きを施した坏形土器の

みを保有する段階は認められない。

以上の結果から器種構成の変遷について要約すれば以下のようになる。

① 非ロクロの坏形土器と須恵器の坏が共伴し、甕形土器と須恵器の坏が共伴し、甕形土器は小形なものが伴う。

② 坏形土器の大、小の区分が成立せず、小形な坏を主体とし、甕形土器は小形なものが伴う。

③ 坏形土器の大、小の区分が成立し、大形の坏は内面に磨きが施され、小形の甕形土器が伴い、内には叩き目のある甕も伴うが、皿形土器は伴うことはない。

④ 坏形土器の内面に磨きが施され、皿形土器が伴い、灰釉陶器も伴う場合もある。

3．墨書土器について

千葉県内の歴史時代の集落遺跡から多量の墨書土器が出土しているように権現後遺跡からも多量の墨書土器が出土している。墨書された字数は判読可能なもの36字、判読不可能なもの5字、記号と思われるもの3例の合計44字に達する。さらにヘラ書きも含めれば46字である。

墨書される土器は坏形土器が最も多く、次いで皿形土器、そして鉢形土器の順となっており、甕形土器等には皆無である。坏形土器等に墨書された位置は以下のようである。

① 体部外面で口唇部を上に墨書したもの。

② 体部外面で口唇部を右に墨書したもの。

③ 体部外面で口唇部を左に墨書したもの。

④ 体部外面で口唇部を下に墨書したもの。

⑤ 外面底部に墨書したもの。

⑥ 内面体部で口唇部を上に墨書したもの。

⑦ 内面底部に墨書したもの。

以上のようであるが①から⑦までの数量を見ると、①が96例、②が11例、③が21例、④が7例、⑥が1例、⑦が17例で、①が6割以上の比率で墨書され、次で③、⑦、②、④、⑥の順となっている。

実際に墨書きされた書体は、「主」が最も多く83例に達しており、分布状況も第Ⅰ群から第Ⅳ群まで隅無く認めることができる。特に第Ⅲ群においては11軒中10軒が保有している状況である。「主」以外の書体は量的に少なく、「大」が8例、「南」が7例、「岡」が5例、「匡」、「継」が3例と比較にならぬ出土状況で、他は1例が多い。「大」は第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群に分布しており、「主」と共伴する傾向も認められる。「南」は第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ群に分布しており、「大」がⅣ群に認められないのに対して対称的である。「岡」は第Ⅳ群に限って認められる。「匡」は第Ⅰ、Ⅳ群に分布している。「継」は第Ⅰ群に限って認められる。判読不可能な書体の内、刀の字に近い

ものが第III、IV群に分布し、記号の内、花模様に近いものが第III、IV群に分布している。

出土量が最も多く、また広範囲に分布する「主」を中心に他の墨書体とのかかわりについて、その共伴関係について見てみたい。

第Ⅰ群では「大」、「継」、「十」、「匡」、「山」、「神」である。第II群では、「大」、「堤」、「生」、「奉」である。第IV群では「家」、花模様の記号、「南」、「大」、「福」、「盛」である。第IV群では、「岡」、花模様の記号、刀に近い書体、「成」、「方」である。

第Ⅰ、IV群において「南」と共伴しないが第III群で認められる。また第III群では「大」と花模様の記号が共伴しているが、第Ⅰ、II群では「大」は共伴するが花模様の記号は共伴しない。これとは対称的に第IV群においては、花模様の記号とは共伴するが「大」は共伴しないという傾向が窺える。

このような傾向が何に原因しているかは明確にすることができないが、多量に出土する二書体を中心に数種類の書体がかかわりをもって共伴すると言う何らかの組み合せが察せられることを指摘しておきたい。

墨書体は一文字が圧倒的に多いが、中には二文字、あるいは数文字からなる墨書が認められる例がある。特に人面を伴う墨書土器はきわめて希有なものであると同時に墨書される内容から考えられる歴史的背景は紙数に限りのないところである。[註6]

註

1　北総地域においては須恵器生産の実態についてかなり断片的であり、窯業遺跡の資料と集落遺跡の資料を直接対比させることはできない。よって集落遺跡の資料を分析することによって須恵器生産の一端を理解する必要がある。

2　須恵器にあっても酸化焔焼成される例が多い。

3　製作手法上は須恵器の特徴が現われているが、焼成は酸化焔である。

4　ここに言う搬入土器とは、生産地から集落に供給された土器を意味しており、須恵器を指すが、灰釉陶器、あるいは他集落よりの移動に伴う土器は別に考えている。

5　専業的に継続した生産体制下において生産された土器が他集落に供給された結果、断片的な遺存に止ったことが原因していることも考えなければならない。

6　墨書土器については、従来さまざまなことが言われて来ているが、集落遺跡出土の墨書土器は集落構造を考えるうえで貴重な資料であると考えられる。

終　　章

第1節　鉱物分析の結果とその評価

権現後遺跡の関東ローム層の層序区分と、遺物を包含する地層の層位学的性質を明らかにする目的で試料を採取し、鉱物分析を行った。

試料の採取地点は、台地の平坦部より傾斜部にかかる地点で(S—11—54)、表土より約4m掘り下げ、常総粘土層上部（下末吉ローム層）を露呈させた。

採取試料は計31点をかぞえそれぞれに略号Cを与え、C－1からC—31という表示を行った。分析については、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、同社による分析報告を掲載し、考察を加えるものである。

1．鉱物分析の結果（図8、図版5、表119、120）

(1)　はじめに

千葉県文化財センター殿より、権現後遺跡試料31点について重鉱物分析のご依頼を受けました。

このたび、分析が終了しましたので、その結果をご報告致します。

(2)　分析法

重鉱物の偏光顕微鏡下での判定は、¼～⅛ mmの粒度のものについて行った。そのため、沈澱法による機械分析の対象としては、全試料を粉砕して½ mm以下のものに限定した。

乾燥した½ mm以下の試料50.0gにアンモニア溶液を加えて粘土鉱物を分散し、沈澱法によってシルトや粘土粒子を除いた。

水洗の仕上げに超音波洗浄を行い、乾燥後、60 mesh (¼ mm) と 120 mesh (⅛ mm) の篩を用いて¼～⅛ mmの粒度のものだけを抽出した。

¼～⅛ mmの粒度の試料を秤量後、テトラブロムエタン（比重≒2.95）を用いて重液分離をした。重液（テトラブロムエタン）に沈んだ重鉱物を秤量後、その一部を封入してプレパラートを作製した。

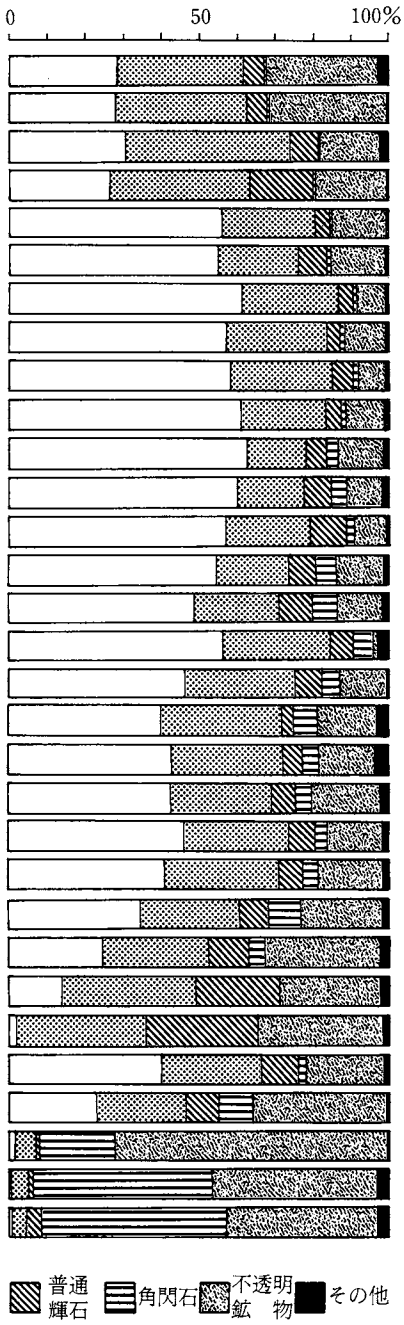
偏光顕微鏡下にてプレパラート内の重鉱物を300個体程度を観察し、それぞれの鉱物の比重を考慮して重量による鉱物組成を算出した。

①　産出鉱物

A　カンラン石 (Olivine) は下位のC—31からC—29およびC—26では少ないが、それ以外の試料では最も普通にみられる無色透明（偏光顕微鏡下での色、以下同じ）な鉱物である。一般

表119 ローム層の鉱物組成表

試料番号				重鉱物組成 (W%)					
				カンラン石	シソ輝石	普通輝石	角閃石	不透明鉱物	その他
C－1	50.0	4.4	41.0	28.6	33.0	5.8	0.3	29.3	3.0
C 2	50.0	3.0	56.6	27.9	34.7	5.4	0.5	31.0	0.5
C 3	50.0	4.0	57.2	30.6	43.5	7.4	0.3	15.6	2.6
C 4	50.0	5.2	47.0	26.5	36.9	16.5	0.5	18.8	0.8
C 5	50.0	2.8	67.2	55.8	24.7	4.2	0.3	14.2	0.8
C 6	50.0	2.6	64.7	54.8	21.5	7.3	0.9	14.5	1.0
C 7	50.0	2.6	64.6	61.1	25.5	4.2	0.8	7.3	1.1
C 8	50.0	2.9	59.1	56.9	26.7	3.3	1.6	10.5	1.0
C 9	50.0	3.4	52.4	58.1	26.9	5.7	1.3	7.1	0.9
C 10	50.0	3.6	46.0	61.0	22.7	4.1	1.1	9.8	1.3
C 11	50.0	4.2	39.0	62.6	15.8	5.2	8.3	11.5	1.6
C 12	50.0	5.4	29.8	60.0	18.0	7.0	4.2	9.0	1.8
C 13	50.0	6.3	25.0	57.3	22.2	9.5	2.2	8.3	0.5
C 14	50.0	7.9	18.1	54.7	19.2	7.3	5.6	12.1	1.1
C 15	50.0	8.2	19.4	48.7	22.7	8.7	6.4	11.9	1.6
C 16	50.0	7.6	19.0	56.2	28.5	6.1	5.1	1.0	3.1
C 17	50.0	8.1	12.7	46.2	29.2	7.4	4.6	12.2	0.4
C－18	50.0	8.6	12.9	40.3	32.0	3.1	6.2	15.3	3.1
C 19	50.0	9.1	13.9	43.1	29.3	5.4	4.2	14.6	3.4
C－20	50.0	8.8	17.3	42.7	26.7	6.2	4.2	18.1	2.1
C 21	50.0	8.1	24.8	46.2	27.3	7.2	3.5	14.1	1.7
C－22	50.0	9.1	23.5	40.9	30.2	6.4	4.2	16.5	1.8
C－23	50.0	7.8	14.3	34.5	26.3	7.8	8.3	21.3	1.8
C－24	50.0	12.0	11.0	24.8	27.7	10.5	4.8	29.9	2.3
C－25	50.0	7.6	40.6	13.9	35.3	2.1	0.3	26.1	2.3
C－26	50.0	16.6	37.6	2.2	34.0	29.4	0.0	33.0	1.4
C－27	50.0	4.3	30.9	40.1	26.4	10.1	1.8	20.2	1.4
C－28	50.0	3.7	11.6	23.4	23.0	8.5	9.4	34.8	0.9
C 29	50.0	2.3	2.9	1.8	5.4	1.0	19.8	71.5	0.5
C－30	50.0	2.7	1.3	0.5	4.6	1.3	47.1	43.0	3.5
C－31	50.0	7.5	0.9	0.9	3.9	3.9	48.6	39.5	3.2



的に上位の試料のカンラン石ほど新鮮で半自形～自形のものが多い。カンラン石の風化によって赤褐色のイディングス石 (iddingsite) が磐開面に沿い生成する。下位の方の試料に含まれるカンラン石は、イディングス石が生成しているものや、他形～半自形のものがみられる。

B．シソ輝石 (Hypersthene) はカンラン石に次いで多く含まれている緑色～褐色の多色性の

表120 鉱物分析試料表

試料番号	湿時色調	層位		粘性	密度	含有物
C－1	暗褐	II	漸移層	中	やや疎	炭化物
C－2	褐	III	ソフトローム層	〃	中	
C－3	〃	IV～VI	給良 Tn	強	密	スコリア 白スコリア (俗称)
C－4	〃					
C－5	〃					
C－6	〃	VII a	第II B．B	〃	〃	酸化鉄 スコリア 炭化物
C－7	〃					
C－8	〃	VII b		〃	〃	〃
C－9	〃	VII c	第II B．B	特に強	〃	〃
C－10	〃					
C－11	〃					
C－12	〃					
C－13	〃	VIII		強	〃	〃
C－14	〃	IX		〃	〃	〃
C－15	〃					
C－16	〃					
C－17	〃	X		〃	やや疎	〃
C－18	〃					
C－19	〃					
C－20	〃					
C－21	〃	XI		〃	密	〃
C－22	〃					
C－23	〃	XII		強	密	酸、化鉄 スコリア 炭化物
C－24	〃					
C－25	〃					
C－26	〃	XIII	東京パミス層	弱	中	ブロック状軽石
C－27	〃	XIV		強	密	炭化物・砂粒
C－28	〃	XV	粘土層	特に強	特に密	炭化物・ ロームブロック
C－29	〃	XVI	〃	〃	〃	褐鉄鉱 炭化物
C－30	〃					
C－31	鈍い黄橙	XVII	〃	〃	〃	高師小僧

(注) 湿時色調は新版標準土色帖(日本色彩研究所発行) による。

強い柱状の鉱物である。C－29からC－31にかけての試料に含まれるシソ輝石は他形のものが多く、それ以外の試料にみられるものは半自形～自形のものが一般的である。

C．普通輝石 (Augite) は全試料を通じて、ほぼ一定の割合で認められる淡緑色～無色の鉱物である。全体的に他形～半自形のものが多く観察されたが、C－25、C－26の試料では量的にも多く、また半自形～自形の新鮮な普通輝石がみられた。

D．角閃石 (Hornblende) は、鈍い緑色～暗褐色の柱状の鉱物である。C－29からC－31までの試料では19.8～48.6%と大きな割合を占め、半自形～自形の結晶がみられるが、それ以外の試料に於ては産出が少なく半自形のものが多い。

E．不透明鉱物

これには磁鉄鉱、赤鉄鉱などを含む。

F．その他

風化物や不明な鉱物を含む。

② 鉱物組成の垂直変化

各鉱物について下位から上位に向っての組成の変化を以下に述べる。

A．カンラン石

カンラン石は特長的な変化を示している。C－29とC－28の間、C－27とC－26との間、C－17とC－16との間、およびC－5とC－4との間に、それぞれカンラン石の割合の大きな変化が認められる。

C－31、C－30、およびC－29は1％前後で微量である。C－28が23.4％、C－27が40.1％と増加するが、C－26で2.2％と激減する。C－25、C－24、C－23と再増がみられ、C－22からC－17まで40％以上の安定した値を示す。C－16からC－5までは50～60％台の安定した大きい値である。C－4を境にC－1までは30％前後の割合で一定している。

B．シソ輝石

シソ輝石についてみると、大きな変化が認められるのはC－29とC－28との境、およびC－5とC－4との境であろう。C－31、C－30およびC－29は4～5％前後で変化がない。C－28からC－5の間の試料において約15～約35％の範囲で緩かな増減がみられる。即ち、C－28から増加し始め、C－25で35.3％のピークに達し、C－24からC－16まではほぼ一定の値を示し、C－11の15.8％を最少にして再び増加し、C－9からC－5までほぼ一定している。C－4を境に急増し、C－3で43.5％と全試料中最高の割合を示し、C－2、C－1は減少傾向にある。

C．普通輝石

普通輝石においては、全体を通じて10％未満のものが非常に多い。その中にあってC－26の29.4％、C－25の22.1％、およびC－4の16.5％の高率が注目される。C－31からC－29は1～4％と非常に低い値を示しており、またC－28からC－1までは前述の3点を除いて、ほぼ10％以下の一定した範囲にある。

D．角閃石

角閃石の変化を上位へみていくと、C－31からC－29は大きな値を示すが、それ以上は10％未満の安定した値を示しながら、上位においては次第に減少する傾向にある。即ち下位においてC－31が48.6％、C－30が47.1％、およびC－29が19.8％と高率ながら次第に減少している。C－26の付近において角閃石の出現が非常に少なくなり、C－24からC－11までは数％で比較的一定しているが、C－10以上に於ては1％前後の値で減少傾向にある。

E．不透明鉱物

不透明鉱物はC－29の71.5％をピークに減少し、中位にあっては10％前後の値で安定し、C－6の試料以上に於ては次第に増加する。即ち下位と上位が大きな割合を占め、中位に於ては出現が少ない。

③　各層別の特長

各層ごとに、それぞれの重鉱物の特長を下位から順次、以下に述べる。

XVII　層

C－31は半自形～自形の角閃石が、ほぼ½を占め、不透明鉱物が40％を占める。カンラン石、シソ輝石および普通輝石は少なく他形を示す。その他の中には1.4％のザクロ石が含まれる。

XVI　層

C－30は殆どC－31と同様であり、C－29は不透明鉱物の割合が71.5％と急増するが、両者とも角閃石と不透明鉱物が大部分を占める。微量ではあるが、2つの試料にザクロ石が認められる。

XV　層

C－28はカンラン石とシソ輝石の増加によって特長づけられる。カンラン石は半自形～自形で赤褐色に風化しているものもみられる。またこれから上位の層に於てはザクロ石はみられない。

XIV　層

C－27は角閃石が減少し、カンラン石が40.1％を占める。カンラン石は半自形～自形のもので赤褐色に風化したものが多い。

XIII　層

C－26は新鮮な試料であり、下位の試料に比べ鉱物組成が著しく異なる。シソ輝石および普通輝石が、それぞれ34.0％、29.4％と非常に多く、かつ半自形～自形の新鮮なものである。カンラン石が2.2％と減少し、角閃石は含まれない。シソ輝石＞不透明鉱物＞普通輝石で特長づけられる。本試料の鉱物組成は全試料の中でも特異な存在である。

XII　層

C－25はC－26に比べてカンラン石が増加した外は、半自形～自形のシソ輝石と普通輝石とが多く、角閃石が微量であることなど、C－26と類似性が強い。

C－24はC－25と比較すると違いが明瞭である。カンラン石は2倍近く増加し、シソ輝石と普通輝石とが減少し、また角閃石は増加している。シソ輝石は半自形～自形のものが多いが、カンラン石、普通輝石および角閃石は半自形のものが中心である。C－24を境にしてカンラン石とシソ輝石が多く、普通輝石と角閃石は少ない内容の一連の鉱物組成が上位にみられる。

C－23はC－24よりカンラン石が増加しているが、ほぼC－24に同じである。

XI　層

C－22とC－21とは、カンラン石がやや増加の傾向にある以外は、殆ど組成上の変化がない。2つの試料に含まれるカンラン石は、半自形～自形の比較的新鮮なものが多い。

X　層

C－20からC－17を通じて各鉱物の組成は安定している。カンラン石は赤褐色に風化した半自形のものが多く、シソ輝石は半自形～自形のものがみられる。普通輝石と角閃石は他形～半自形である。

C－18を上下の試料と比較してみると、シソ輝石、角閃石および不透明鉱物が上下の試料より大きな値を示し、普通輝石とカンラン石とは小さな値を示している。

IX　層

C－15に於てカンラン石が48.7%とやや低い値を示すが、C－16を境に50%以上の値を占める。シソ輝石は上位ほど減少する傾向にある。IX層を通じてカンラン石とシソ輝石は半自形～自形のものが多く、普通輝石は他形～半自形、角閃石は半自形のものが多くみられる。

C－16はカンラン石が56.2%と多く、不透明鉱物が非常に少ないことが特長である。

C－15はカンラン石が48.7%と、上下の試料よりやや少ない。

C－14はカンラン石の値が54.7%と増大し、シソ輝石が19.2%と少ない。

VIII　層

C－13はカンラン石が57.3%と高い値を示し、半自形～自形の比較的新鮮なものが多い。その他の組成にあまり変化はない。

VIIc　層

XVII層からII層までを通じてカンラン石の割合が最も高い部分でありC－11で62.6%とピークに達する。

C－12からC－9の試料に含まれるカンラン石は、半自形～自形の結晶で新鮮である。シソ輝石は半自形～自形であり、C11に於て15.8%の最低値を示す。普通輝石および角閃石は他形～半自形のものが多い。

C－10の試料は、鉱物の形態や組成において他と顕著な相違は認められない。

VIIb　層

C－8はカンラン石が56.9%を占め、シソ輝石が26.7%を示している。鉱物の形態についてはVIIc層と同様である。

VIIa　層

C－7はカンラン石がC－8やC－6に比べ多く、61.1%を占めるが、シソ輝石は25.5%と変らない。カンラン石は自形のものが多くかつ新鮮である。シソ輝石は半自形～自形のものが、普通輝石は他形～半自形のものが多い。角閃石は極めて少ない。

C－6の試料ではカンラン石とシソ輝石の割合が、やや減少しているが、C－7とほぼ同様である。

IV～V　層

C－5の試料はカンラン石が55.8%、シソ輝石が24.7%と、これより下位の試料の鉱物組成と類似する。

C－4およびC－3は、C－5以下の試料とは組成が変化している。すなわち、カンラン石が26.5～30.6%に減り、シソ輝石、普通輝石及び不透明鉱物が増えたのが特長である。しかし形態上の変化は無く、カンラン石は半自形～自形の新鮮なもの、シソ輝石は半自形～自形、普通輝石は他形～半自形のものが多くみられる。

III　層

C－2の試料はIV層に比べシソ輝石が減少し、不透明鉱物が増加している。カンラン石の割合は変化が無く新鮮なものが多い。シソ輝石は半自形～自形、普通輝石は他形～半自形である。角閃石は極めて少ない。

II　層

C－1の試料は、組成及び形態に於て、C－2と殆ど変化が無い。

④　対　比

従来、関東に於けるローム層は、関東ローム研究グループをはじめ多くの人々によって研究がなされている。これまでの研究結果から、立川ローム層は新鮮なカンラン石が多く、それに次いでシソ輝石が多く、普通輝石は少ないとされている。

また武蔵野ローム層は比較的風化の進んだカンラン石、シソ輝石、普通輝石より成り、武蔵野ローム層下部にある東京パミス層はカンラン石を含まず、シソ輝石、普通輝石および鉄鉱物が相当量含まれている。

下末吉ローム層は上部で風化したカンラン石が多く、下部では角閃石が含まれ、他にシソ輝石、普通輝石も存在する（関東ローム研究グループ、1965）。

以上の様な研究結果と今回の分析結果を比較してみると、XI層はカンラン石が2.2%と極めて少ないことと、シソ輝石、普通輝石および不透明鉱物がそれぞれ30%前後と多量に含まれていることが特長であり、従来の東京パミス層の鉱物組成と類似する。従って層位および岩相によって東京パミス層に相当するとされていた本層は、重鉱物組成に於ても東京パミス層に対比されることが裏付けられた。このことは今回の調査に於て重要な意味を持っている。カンラン石が僅かに含まれることは、何らかの要因で他から混入した可能性が考えられる。

XI層よりも上位の地層に於てはカンラン石が多く、シソ輝石、普通輝石が、それに次ぐことから、重鉱物組成上これらの地層が武蔵野ローム層および立川ローム層に相当すると考えられる。武蔵野ローム層に対比される下部の試料は、カンラン石が上部の立川ローム層に対比され

る試料よりも少ない傾向がみられる。

XIII～XV層に於て、上部のXIII層で風化したカンラン石がみられ、下部のXIV層、XV層は角閃石と不透明鉱物が多いことから、下末吉ローム層に相当するものと推定される。

なお、立川ローム層および武蔵野ローム層の供給源としては、主に富士山と箱根の両火山とされている。

⑤ まとめ

本地域の試料は、最下部の角閃石と不透明鉱物が多いものと、それ以外のカンラン石、シソ輝石、普通輝石などが多く含まれるものとがある。前者は下末吉ローム層に、後者は武蔵野ローム層および立川ローム層に対比される。XI層は東京パミス層に対比される。そしてこれらの地層の火山物質の噴出源を富士、箱根の両火山に求められる。

2．鉱物分析についての評価

本県におけるローム層の鉱物分析は昭和46年の新東京国際空港建設予定地内No.55遺跡においてはじめて実施され、その後、印西町地国穴台遺跡、白井町復山谷遺跡、千葉市誉田県立コロニー内遺跡、同荒屋敷貝塚、同六通金山遺跡、佐倉市星谷津遺跡、成田市三里塚No.61遺跡、同No.5遺跡、柏市花前II－1遺跡、同、聖人塚遺跡、流山市江戸川台I遺跡、等の下総台地の諸遺跡において多くの分析結果を得ており、その成果をまとめあげた報告として、昭和56年に千葉県文化財センター『研究紀要6』が刊行された。[註1]

本稿では、本遺跡の重鉱物組成を軸に各遺跡の分析結果との比較検討を行い、鉱物分析の有効性について論述することにしたい。

まず、本遺跡の鉱物分析の目的と鉱物組成の垂直的変化を検討してみることにする。

鉱物分析の目的が層序区分を補強発展させることにあることは論をまたないが、考古学的な視点と土壌学、あるいは地質学的なそれとを比較するとそのレベルには大きな違いが存在する。数万年あるいは数百万年をタイムスケールとする自然科学と、数百年あるいは四半世紀をタイムスケールとするわれわれとではおのずから層序区分に対する認識にずれがあり、また、火山灰の一回の降灰のサイクル（降下ユニット）を根幹におく地質学者と、現場で感覚的な線引きを行っているわれわれとでは、おのずから同様の結果が得られそうもない。

例えば黒色帯については、数回の降下ユニットを包括しており、しかも黒色帯の上限の旧地表面が露呈していた当時の腐植の集積量によって黒色帯の幅に変動がみられることは充分に予想されることである。その場合には、地域によっては黒色帯の下部より出土した石器群と、黒色帯の直下より出土した石器群とが同一の時期であることもあり得ないことではないだろう。

そのような意味で、鉱物分析は、考古学と地質学、土壌学をつなぐパイプとしての意義はある程度認める必要性はあるかもしれない。また逆に、考古学の精緻な編年網は年代的な指標と

して地質学、土壌学者に与える影響も充分考えられることである。しかしながら、鉱物分析の限界性もその影に横にわっていることも事実である。この点については後述する。

さて、本遺跡の層序区分にあたっては、まず肉眼的な層序区分と鉱物組成の垂直的な変化が貝塚爽平[註2]、あるいは下総台地をフィールドとしている明治大学地理学教室杉原重夫[註3]のデータとどのように対応しているかを検討してみたい。

立川ローム層、武蔵野ローム層、下末吉ローム層については、貝塚爽平によれば以下のように述べられている。立川ローム層は主として重鉱物、カンラン石、シリ輝石、普通輝石、磁鉄鉱が多く玄武岩質の火山灰、また武蔵野ローム層は石英や角閃石をまじえ、カンラン石は風化して赤味を帯びたものが多い。さらに、下末吉ローム層はシソ輝石が多く、普通輝石、カンラン石を伴う。そして、立川ローム層の黒色帯付近では、鉱物組成として火山ガラスが特に多く、カンラン石が多いこと。二つの黒色帯の部分ではカンラン石の量比が小さく、輝石が多いことなどが特徴となっている。

一方、杉原重夫は下総台地西部の市川市宮久保にある市川市立第三中学校の露頭における鉱物分析の結果、以下の事実を指摘している。

立川ローム層の上限にあたる赤褐色部（ソフトローム）ではシソ輝石が過半数を占め、カンラン石が少なく、それ以下の立川ローム層ではカンラン石が多くなる。

武蔵野ローム層ではカンラン石がほとんどみあたらず、特に武蔵野ローム層の上限のクラック帯では、カンラン石がほとんどみあたらない。

下末吉ローム層中に含まれている鉱物としては長石、石英、磁鉄鉱、シソ輝石、普通輝石、角閃石などがあり、カンラン石は稀にしかはいってこない。

杉原は、以上の結果をふまえてこの地点での立川ローム層、武蔵野ローム層でカンラン石が一般に少ないのは武蔵野台地と大きく異なる点とし、北関東系火山の降灰の可能性を示唆している。

さて、両者の見解を総合し、これを本遺跡のデータに照らしあわせると、まず、立川ローム層上部（ソフトローム層）では立川ローム層の他の層準に比べ、相対的にカンラン石が少なく、シソ輝石が多いことや、以下の層準ではカンラン石の量が増大すること、また黒色帯の付近でカンラン石の量が増大することなどが共通点として指摘でき、立川ローム層全体としてはその所見に大きな隔たりはない。

ただし、最上位の腐植土ではカンラン石の量が組成上、下位に比べ大きな変化がみられないことが指摘できる。

次に武蔵野ローム層上限では市川市立第三中学校の例に比べ、カンラン石の量比に大きな変動がみられず、漸移的で小規模な変化にとどまっている。したがって、この層準に関しては鉱物分析によって層序区分についての成果は得られなかったものと言えよう。ただし、東京軽石

層の部分ではカンラン石がほとんどでなく、それ以外では、シソ輝石、普通輝石が多くみられる点が指摘でき、鉱物分析の成果の一つとして付記したい。

下末吉ローム層については上部を分析したが、カンラン石がほとんどないか、全くみられず、その他のシソ輝石、普通輝石、角閃石等の量が増大し肉眼的な層序区分とあわせ、貝塚、杉原との所見と全く矛盾しない。ただし、杉原によれば、立川ローム層と武蔵野ローム層との境界では武蔵野ローム層上限に縦方向のクラック(割れ目)が生じ、また、東京軽石層直下の 10～20 cm 付近には下末吉ローム層上限を示すチョコレート状のクラック帯があるが、これは過去の地表間が風化したものであるという。それにしても割れ目の多いことは過去の風化作用によって粘土質になっていることを示しているが、このような点については、調査時に看取することはできなかった。

次に本遺跡と他の旧石器時代遺跡との鉱物組成の比較検討を行うことにする。その際、対象とする遺跡は以下のような条件によって選定した。これらは、権現後遺跡のサンプリング方法と対応関係を持っている遺跡群である。

a　下総台地にある遺跡

b　サンプルの数量が一定量存在するもので立川ローム層以下を連続的にサンプリングしている遺跡

以上のような条件をみたす報告例としては、成田市新東京国際空港用地内No.55遺跡、同No. 5遺跡、印西町地国穴台遺跡、白井町復山谷遺跡、佐倉市星谷津遺跡、柏市花前II－1遺跡など6遺跡である。

これらの遺跡の土壌の分析の方法は、重鉱物分析が基調となっているが、三里塚No.55遺跡では、粘土鉱物分析が実施され、この種の分析方法としては唯一の例として注目される。その他の分析例としては星谷津、復山谷遺跡で、重鉱物組成の他に、重鉱物、長石、石英、火山ガラス、黒雲母などの組成を示した鉱物組成を対照してあることを特記すべきであろう。また、新東京国際空港用地内No. 5 遺跡では、風化したカンラン石と風化をこうむらないカンラン石とを分類してあり、立川ローム層と武蔵野ローム層の層序区分について明瞭な一線を画している点が注目される。

さて、以上 6 遺跡のデータと本遺跡のデータとを比較すると重鉱物組成の垂直変化は非常によく一致している。したがって、重鉱物分析については下総台地に限定してみれば、現状のサンプリング方法ではその答えがでたと結論づけても過言ではあるまい。

ただし、土壌の分析方法としては風化と主成学的特性の理化学的研究として鉱物組成の他に粘土鉱物組成、化学組成、ローム層の腐植の質と量、塩基組成を調べる解析的方法があり、これらの土壌学的方法を構造的に実施することも一案と考えられる[註4]。このうち、粘土鉱物分析は先述のとおり、三里塚No.55遺跡一例であり、今後、この種の分析方法を集積する必要性がある

かもしれない。

本遺跡の鉱物分析は、重鉱物分析を実施し、サンプリングの位置は、各層位の上下（層厚の大きいものについては上、中、下）に設定した。その際、気づいたことについてまとめあげ、結論としたい。

まず、サンプリングの位置についてであるが、調査時の層序区分は、主観的な性格を持っている面もあるため、これを客観化すべく、位置の設定を行なった。しかしながら、これには一回の降灰の規模やその後の土壌生成作用等の不確定要素が存在した。

したがって、ローム層よりサンプリングをした場合、数回の降下ユニットを含んでいる可能性がある。このことはすでに述べた。

重鉱物分析のみによってこのような状況を打破することはできず、分析からは下末吉ローム層、武蔵野ローム層の分層、東京軽石層の固定をなし得たにすぎない。今後は、先に述べたようにさまざまな分析方法を駆使し、立川ローム層と武蔵野ローム層の完全な分層、さらに進んで個々のローム層の細分をすることが必要かもしれない。しかし、その一方で、自然科学的な分折方法についてはおのずから限界があり、鍵層の固定によってわれわれの層序区分が補完されることはあってもその逆は望めそうもない。自然科学的分折方法とわれわれの要求するより細かな層序区分との懸隔をどのように埋めていくかは、今後の課題となっていこう。

註

1　㈶千葉県文化財センター『研究紀要』6　昭和56年

2　貝塚爽平「日本第四紀の自然」『日本の考古学』1　昭和40年

3　杉原重夫　「地形の発達」『市川市史』第1巻　昭和51年

4　松井　健『ペドロジーへの道』昭和54年

参考文献

①杉原重夫、細野衛、大原正義「星谷津遺跡の自然地理」『佐倉市星谷津遺跡』昭和53年

②鈴木定明「鉱物分析」『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ昭和57年

③加瀬靖之「鉱物分析№5遺跡関東ローム層中の鉱物分析」『木の根』昭和56年

④杉原重夫、細野　衛、大原正義「白井町復山谷遺跡の関東ローム層」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅵ昭和53年

⑤杉原重夫、細野　衛「千葉ニュータウン（地国穴台遺跡）における関東ローム層の鉱物組成について」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ昭和49年

⑥田尻貞二、「№55、遺跡の関東ローム」『三里塚』昭和46年

第2節　花粉分析の結果とその評価

旧石器時代をはじめ、弥生時代、古墳時代、歴史時代における遺跡の自然環境を復元する目的のため、ローム層および各時代の住居跡覆土中に含まれる花粉、胞子化石の分析を行った。

試料は、ローム層より8点、住居跡覆土より3点を採取した。分析については、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、同社による分析報告を掲載し、考察を加えるものである。

1．花粉分析の結果

(1)　はじめに

千葉県文化財センター殿より、千葉県八千代市権現後遺跡の花粉分析の御依頼を受けました。このほど分析が終了し、結果が出ましたので御報告致します。

(2)　試料

試料は、11点、No.2（III層）～No.7（VIII層）は立川ローム層に、No.8（IX層）は武蔵野ローム層に対比される。

(3)　分析方法

花粉分析方法は、対象とする試料が火山灰等であったので、一般試料に比べて大量に分析した。まず試料を乾燥粉砕したあと32 meshの篩で篩分する。篩分した試料50 grを分析に用いた。分析工程は次のとおりである。

① 試料に塩酸、弗化水素酸の順に加え、湯煎しながら鉱物を分解する。

② 反応がおさまったら蒸留水を満たし1昼夜放置する。傾斜法を用いて、上澄みを除く。

③ 再度、弗化水素酸による分解を行ない1昼夜放置したあと上澄みを除く。残渣を遠沈管に移し、重液分離（比重2.2の臭化亜鉛）を行ない有機物（花粉・胞子、植物片）を浮上させる。

④ 浮上した有機物をピペットで別の遠沈管へ移す。後、水洗。

⑤ 残渣に酢酸を加え処理する。遠心分離し上澄みをすてる。残渣にアセトリシス液（無水酢酸：濃硫酸＝9：1の混液）を静かに加え、アセトリシス処理を行なう。後、遠心分離する。

⑥ 残渣に、10%水酸化カリウム溶液を加え湯煎器で加熱しながら処理する。

⑦ 充分水洗した後、グリセリンゼリーで封入する。この時、ビスマルクブラウンで染色した。

検鏡に際しては、200倍～400倍にて化石の所在を明らかにし、600倍～1000倍で鑑定した。また、各試料の花粉・胞子は、総化石数を基数としたパーセントであらわした。

(4)　分析結果

各試料に於ける花粉・胞子化石の内容は、表121「花粉分析成果表」に示したように、微化石

表121 花粉分析成果表

Genus Name / Sample Loc.		(II)	(III)	(IV～VI)	(VIIa)	(VIIb)	(VIIc)	(VIII)	(IX)	(D004)	(D035)	(D007)
Pinus	(マツ属)			1		1.3						
Taxodiaceae	(スギ科)				1				1			
Cryptomeria	(スギ属)			1	1							
T.G.T	(イチイ科)(ヒノキ科)(スギ科)	15.4	16.2		3	4.0	5			24.5		
ΣAP－1(N)	(針葉樹類花粉)	12	22	2	5	4	5		1	26		
(%)		15.4	16.2			5.3				24.5		
Salix	(ヤナギ属)	1.3										
Alnus	(ハンノキ属)	1.3	1.4	1						1.9		
Betula	(シラカンバ属)			1		1.3						
Corylus	(ハシバミ属)		4.4			1.3	1					
Gyclobalanopsis	(アカガシ亜属)			1						1.9		
Lepidobalanus	(コナラ亜属)	1.3	3.7			2.6				1.9		
Aphananthe－Celtis	(ムクノキ属)(エノキ属)		1.5			2.6						
Zelkova－Umus	(ケアキ属)(ニレ属)					2.6						
Moraceae	(クワ科)		2.9									
Elaeaguns	(グミ属)					1.3						
Fagus	(ブナ属)					1.3						
ΣAP－2(N)	(広葉樹類花粉)	3	19	3		10	1			6		
(%)		3.9	13.9			13.0				5.7		
ΣAP (N)	(木本類花粉)	15	41	5	5	14	6		1	32		
(%)		19.3	30.1			18.3				30.2		
Thalictrum	(カラマツソウ属)		1.5									
Haloragis	(アリノトウグサ属)					2.6						
Carduoideae	(キク亜科)	23.1	15.4	3		2.6				6.6	1	
Artemisia	(ヨモギ属)	6.4	6.6			11.8	1			5.7		1
Cichorioideae	(タンポポ亜科)	9.0	2.2			1.3					5	
Gramineae	(イネ科)	6.4	6.6	3	2	23.7	4			15.1	1	1
Cyperaceae	(スゲ科)	3.9	6.6			5.3	2			3.4		
Plantago	(オオバコ属)		0.7									
ΣNAP (N)	(草本類花粉)	38	54	6	2	36	7			33	7	2
(%)		48.8	39.6			47.3				30.8		
Triporopollenites	(三口型花粉)		0.7									
Tricolporopollenites	(三溝口型花粉)		1.5			2.6	1			47		
Inaperturopollenites	(無口溝型花粉)	28.2	24.3	3	5	10.5	7	2	4	17.0	6	1
Tricolpopollenites	(三溝型花粉)		2.9			2.6	1			4.7		1
ΣFGP (N)	(形態分類花粉)	22	40	3	5	12	9	2	4	28	6	2
(%)		28.2	29.4			15.7				26.4		
Osmundaceae	(ゼンマイ科)					1.3				0.9		
Monolete Spore	(単条溝型胞子)	3.9		3		13.2	6		1	7.6		
Trilete Spore	(三条溝型胞子)		0.7			4.0	1			3.4		
ΣFS (N)	(羊菌類胞子)	3	1	3		14	7		1	13		
(%)		39	0.7			18.5				11.9		
Σpollen＋Σspore (N)		78	13.6	17	12	76	29	2	6	106	13	4
Concentricystes	(淡水性藻類)	1								1		8

産出状況は「少い」か「極く少い」がほとんどであった。原因としては、花粉・胞子化石の混入の少ない火山灰であることが考えられる。

検出された花粉・胞子化石は、T.C.T.（Taxaceae　イチイ科、Cupressaceae　ヒノキ科、Taxodiaceae スギ科）などの針葉樹類、Carduoideae（キク亜科)、Artemisia（ヨモギ属)、Gramineae（イネ科）などの草本類の花粉が多く検出された。

針葉樹花粉（ＡＰ－１）…Pinus（マツ属)、Taxodiaceae Cryptomeria（スギ属)、T.C.T（Taxaceae イチイ科、Cupressaceae ヒノキ科、Taxodiaceae スギ科）

広葉樹花粉（ＡＰ－２）…Salix（ヤナギ属)、Alnns（ハンノキ属)、Betula（シラカンバ属)、Corylus（ハシバミ属)、Cyclobalanopsis（アカガシ亜属)、Lepidobalanus（コナラ亜属)、Aphananthe（ムクノキ属）—Celtis（エノキ属)、Zelkova（ケヤキ属）—Ulmus（ニレ属）等。

草本類花粉（ＮＡＰ）…Carduoideae（キク亜科)、Artemisia（ヨモギ属)、Cichorioideae（タンポポ亜科)、Gramineae（イネ科)、Cyperaceae（スゲ科）等。

形態分類花粉（ＦＧＰ）…Tricolporopollenites（三溝口型花粉)、Tricolpopollenites（三溝型花粉)、Inaperturopollenites（無口型花粉）等。

羊歯類胞子（ＦＳ）…Morolete Spore（単条溝型胞子)、Trilete Spore（三条溝型胞子）等。

試料のNo.３、No.４、No.６、No.７、No.８及びNo.２（035号址)、No.３（007号址）の７点については有機物は多数検出されるものの花粉・胞子化石は非常に少なかった。従って、充分な考察は不可能であった。次に、各試料について、花粉・胞子構成の特徴を述べる。

○No.１（II）

この試料の特徴としては、草本花粉の割合が高いことである。主なものとして、Carduoideae、Cichorioideae、Artenisia などのキク科の割合が高かった。針葉樹花粉は、T.C.T が多く検出された。広葉樹花粉では、Salix、Alnus、Lepidobalanus が若干検出された。

○No.２（III）

No.１と近似した構成を示し、キク科、イネ科の割合が高かった。

樹木花粉では、T.C.T. が優勢し、加えて、Corylus、Lepidobalanus Alnus、Aphananthe-Celtis が若干検出された。

○No.３（IV）

表121で明らかな通りこの試料では、花粉・胞子化石が非常に少なく、合計で17個体であった。検出された花粉化石は次の通りである。Pinus、Cryptomeria、Alnus、Betula、Cyclobalanopsis、Cardnoideae、Gramineae、Monolete Spore.

内容的には、No.１（II)、No.２（III）と近似した構成を示す。

○No.4 (V)

No.3と同様、含有化石が少なかった。主なものは、T.C.T、Taxodiaceae 等である。

○No.5 (VI)

検出割合の高い花粉は、Gramineae で23.7%検出された。キク科花粉は Artemisin を除いて少ない。羊歯類胞子としては Monolete spore の割合が高かった。花粉、胞子構成はNo.1、2と異なるものである。

○No.6 (VII)

表121で明らかな通り、含有化石に乏しかった。主な花粉は、T.C.T.、Gramineae、Cyperaceae である。

○No.7 (VIII)

やはり、含有化石に乏しく、充分な結果は得られなかった。

○No.8 (IX)

含有化石に乏しく、充分な結果は得られなかった。

○No.1 (004号址)

全体的には、No.1、No.2に近似したものであり、T.C.T が優勢する。次いで多く検出されるものは、Gramineae、Artemisia、Cyperaceae、Carduoideae で、草本の割合が高い。

○No.2 (035号址)

表121で明らかな通り、含有化石が少なく、充分なものとはいえない。検出される花粉は草本のものである。

○No.3 (007号址)

やはり、含有化石に乏しく充分なものとはいえない。

(5) 考 察

花粉構成の特徴はこれまで述べて来た通りである。次に、これらの特徴から各遺跡について古環境、古植生について考察する。

花粉・胞子化石の非常に少ない試料は別として、No.1 (II)、No.2 (III) では、スギ科・ヒノキ科の花粉が優勢して検出されることより、それらの樹木から成る古植生が存在した可能性が考えられる。また、キク亜科を中心としてヨモギ属、イネ科、スゲ科などの草本も可成り生育した草地の植生も合わせて考えられる。

また、No.5 (VI) では、イネ科、ヨモギ属、スゲ科が多く検出し、樹木花粉が少ないことより、むしろ草地的環境が推定されよう。

004号床面覆土は、時代的に弥生時代後期のものとされるが、花粉構成的には、No.1 (II)、No.2 (III) に近似した構成を示す。

表121にも記載したが、今回の分析結果の中に Concentricyotes なる所属不明の微化石が検出

された。これは淡水性の微化石で、淡水の影響が加わった。ローム質の堆積物中から多く検出されるものである。

2．ローム層の花粉

検出された花粉は、木本植物87点で草本植物143点、胞子植物29点、その他98点、(形態分類花粉97点、淡水性藻類１点)計357点である。全体的に数量が乏しく、当時の古植物復元に至らない。特に木本類にその傾向が著しい。一方、相対的に草本類は多くみられ、花粉全体の40％内外を占める。しかしながら当時のこの付近が草原性の環境にあったか否かは花粉の絶対量が少ないため即断できない。

各層位の中で花粉が比較的多く検出されたのはII層（ローム層に至る漸移層)、III層（ソフトローム層)、VIIb層（第二黒色帯間層帯）である。その他の層位からはあまり検出されていない。ローム層は一般的に花粉があまり検出されないが、これはローム層が花粉の保存に適さない強酸性土壌であることと、ローム層を構成する火山灰が降下堆積物であり、盛んな降灰のため花粉を介在する余地があまりないこととなどが複合した結果と推測される。逆にシルト、粘土などは保存に適している[註1]。ローム層の堆積時の古気候については、過去にさまざまなデータが提示されているが、この時期はヴェルム氷期に相当し寒冷期を示すトウヒ属、ツガ属、ブナ属などが特徴的にあらわれている。しかしながらこれらの寒系植物はいずれも検出されていない。

古植物は自然環境を復元する場合に最も重要な要素であるが、気候の変化につれて植生は変化し、これに付随して動物相の変化もみられる。つまり、古植生を復元することは自然環境の復元にみとおしをたてることにつながる。今後は花粉分析を実施する際には条件の良い泥炭地、沼地などを選択するとともに、花粉分析の不備[註2]を補うべく樹種同定を併用して古植性復元にむけて調査を実施していく必要があろう。

註

1　この点から言えば千葉県富里村東内野遺跡『東内野遺跡発掘調査概報』昭和52年のデータは興味深い。ここでは同一層位でも沼地と陸地との堆積条件によって、花粉の出現頻度が大きく異なっていた。

2　花粉は異地性で遠方より飛来してくるものであり、当時の風向、水流などによって遺跡周辺とは異なった結果があらわれる場合がある。さらに種子について生産量に差異がみられ、マツ属、ハンノキ属、カンバ属などは中でも大きな生産量を持つものと言われている。したがって数量的評価については注意を要する。

3．住居跡より検出された花粉

弥生時代から歴史時代に至る古植性復元を目的として、住居跡内の花粉分析を実施した。分析した住居跡はD004号遺構（弥生時代後期の竪穴住居跡）、D035号遺構（古墳時代中期の竪穴住居跡）、D007号遺構（歴史時代の竪穴住居跡）である。

サンプリングの位置は、いずれも床面直上の有機質土壌である。全般的に花粉は少なく、特にD035号遺構、D007号遺構はいずれも木本植物が全く検出されていない。その中でD004号遺構は数量的には比較的多くの花粉が検出された例である。しかしながらそれでも当時の植生を具体化するに至らない。

このように住居跡の花粉分析もローム層の花粉分析と同様に成果があがったとは言いがたい。

なお、今回は古植生復元を目的としたが、焼失住居などに残された炭化材の樹種同定と付近の花粉分析などをからめて、古植生と有用材（薪炭材、住居跡の構築材等）との比較検討を実施するのも有効な方法であろう。

第3節　旧石器時代の総括

本県では昭和30年の市川市丸山遺跡発掘調査以来、旧石器時代の調査はすでに30年が経過しようとしている。当初は小範囲のグリッド発掘による調査であり、その結果得られた成果は主として石器群の時間的な変遷をたどるものであり、一つの遺跡内における人間の行動様式をたどり得る面的な調査は実施されていない。

やがて、昭和49年に木苅峠遺跡の大規模な調査をはじめとする千葉ニュータウン建設予定地内の一連の調査により、如上の研究志向がたかまってきた。こうした考古学的な研究とともに自然科学的な分析として年代測定、花粉分析、鉱物分析等々が、実施され、いくたの成果があげられている。

今回、本遺跡では広範囲に調査した6枚の文化層より24のブロックを検出した。各文化層とも母岩別資料、接合資料、石器組成より種々の検討を行ってきたが、この中で特に第4文化層について有機的な関連性をうかがわせるブロックを検出した。

石器群の集中箇所をブロックとして捉えたが、その実態が多様であることが想定された。ブロック内の石器組成は当時の人間活動の一側面にすぎないものであり、個別のブロックでは解明が出来ず、複数のブロック間の相関関係より導きだされるものと考えられる。そのような意味で砂川遺跡の如く、その場の人間の行動様式を語るに都合の良い遺跡は少ない。また、ブロックの性格が石器製作の場という一義的な考え方がとかく支配的であるが、旧石器時代人が狩猟—解体—調理という生活の流れ、および居住空間の存在が想定される。しかしながら本遺跡でも遺構が検出できず、ブロックの性格づけは困難を極めた。ブロックの性格を探る研究は小

林達雄[註1]、小田静夫[註2]、加藤晋平、安蒜正雄[註4]、岡村道雄らの業績があるが、彼らによって充分に語り尽くされたとは言いがたく、今後の研究の進展がまたれる。

ブロック内の石器群は完全な石器組成を示していない。トータルに石器製作工程を見てみると、原石一剝片生産一石器調整一使用一廃棄の流れが考えられるが、これらの工程の一部が遺跡内のブロックに反映されているものと考えられるが、それを決定づける方法論が確立されていない。したがって、現状ではとりあえず母岩別資料、接合資料等の細かな分析を基本として人間の行動様式を復元するにしても、新たな方法論の開発がまたれる。

その中で岡村の実施した石器の飛散実験による石器製作の場の追究は今後に発展する可能性を秘めている方法論の一つと思われる[註5]。

ブロックの性格が多様であることはすでに述べたが、本遺跡では出土状態より石器製作の場（第10ブロック）、調理場（第19ブロック）、ゴミ捨て場（第３、第15ブロック）などの性格を推定し得るブロックが存在する。遺構は礫群（第19ブロック）のみ検出されたが、第２ブロックでは逆梯形を呈する石器群の垂直分布が知られ、凹地に石器群の堆積している状況が推測された。しかしながら、炉跡、柱穴等の住居跡を具体化する要素に欠け自然地形とも考えられるなど明確な結論は断じ得ない。

礫群は、第15、第19ブロックでみられるが、いずれも破砕礫で構成されブロック内で良く接合している。

最後に本遺跡のブロック群の特徴を概括的にまとめ総括としたい。

① ブロックの大きさは４m×５m程度を標準クラスとしており、最小は第18ブロックで、2.70m×1.70m、最大は第15ブロックで、18.50m×12.00mである。本遺跡の場合の石器群はブロックとして極めて良くまとまり、集中度が高い。

② １つのブロックで１つの石材であることは少くない。ただし、第１～３、４・５、６、７・８ブロックに関してはほとんど黒曜石でありこの点について偏りがみられる。

③ 石器群はナイフ形石器を主体とするブロックが多い。

④ 石器製作工程では、剝片生産の段階を示すブロックが多く、同一のブロック内で複数の剝片生産技術を保有するブロックは少くない。また、石器の素材として有用な剝片はブロック外あるいは遺跡外へ搬出されている場合が多く、その結果、ブロック内に残された剝片は小形で不定形を呈する資料であることが多い。ただし、第１～３、４・５、６、７・８ブロックに関しては自然面を有する剝片、ナイフ形石器、石核がみられ、この地域で母岩が消費された可能性が高い。

註

1　小林達雄、小田静夫他「野川先土器遺跡の研究」『第四紀研究』10—4　昭和46年

2　加藤晋平他「中本遺跡―北海道先土器時代遺跡の発掘調査」昭和44年

3　安藤政雄『砂川先土器遺跡』所沢教育委員会　昭和49年

4　岡村道雄「長野県石子原遺跡の再検討」『中部高地の考古学』昭和53年

5　註4の文献に同じ

第4節　縄文時代の総括

本遺跡では、縄文時代早期～後期に至る土器群および石器群が出土したが、土器群については時期ごとの数量的変動がはげしく早期および後期の土器が大勢を占めていることは繰り返し述べた。

土器群の出現頻度より、本遺跡で生活してきた集団の時期的な興隆、衰退を間接的に読みとれるが、石器群は概して少ない。この点が生業を知るうえで支障となっている。また、遺構が検出されていないため、縄文包含層として把握せざるを得なかったり、遺跡内に広範囲に広がる弥生～奈良、平安時代の遺構によって、プライマリーな出土層位を決定し得る条件に恵まれていなかった。このように当時の人間の営みを具体的に論証し得る要素が不充分であった。

本遺跡周辺では、縄文時代の遺構が検出される例が少なく、当然遺構に伴う遺物の充分な解析が行えない。

今後、こうした不確定な要素を補完すべく、萱田地区内において良好な遺跡の調査を期待したい。

第5節　弥生時代の総括

第III部、第3章で述べてきたことをとりまとめて総括としたい。

① 第Ⅰ群～第IV群A・Bにおいて、久が原式、弥生町式と印手式の出土に一部偏在性が認められる。

② 前者は概して大形で構造的にしっかりした住居跡（主柱穴を有し、床面が硬い）に出土し、後者は柱穴をもたない小形の住居跡に多い(両者が共伴する住居もあるが)。ただし、第II群では若干様相が異なる。

③ ①、②の現象は、久が原式、弥生町式と印手式の機能的格差からその所有をめぐる住居跡ごとの構造的格差は、集落内での階層分化の事実を裏づけるものかも知れない。

④ 第IV群B五領期への変遷は、第IV群A内でのそうした階層分化が引きつがれ、小形の住居跡では印手式の所有が一部で続いていたと思われる。これに対し、大形の住居には、小形精製土器群をはじめ祭祀的な手づくね土器のセットが見られ、集落内の階層分化はいちだんと

顕在化したと言える。

⑤　そうした中で、本遺跡の北側及び西側地域（ヲサル山遺跡）に主体部及び副葬品を伴う方形周溝墓が出現したと考えられる。

権現後遺跡で見られた弥生時代後期終末期集落の分立の背景は、各群内の久が原、弥生町式土器と、印手式土器の在り方に一部反映されていたようである。即ち、いずれの群においても久が原、弥生町式を主体とする中核的住居が存在しており、それとは区別される形で印手式を伴う住居（小形住居を含む）が出現しているのである。その様相が最も明確なのは、第Ⅰ群であり、逆に第II、III群では印手式もある程度の中心的機能を果たしていると思われる。弥生時代の各群は、その後どのように展開したかは定かではない。しかし、第IV群Aにおいては、五領式土器との混在、共伴事実から継続的な展開が予想できる。第Ⅰ～III群は、弥生時代終末期頃にその機能を失い、当地に集落を継続することもなく廃絶されたのかも知れない。

弥生時代後期から終末期にかけての集落の分立と、階層的分化は、おそらく稲作農耕の発展に伴う共同体内の矛盾が顕在化したものであろう。権現後遺跡では、鉄器の出土は無かったものの、稲作の事実は底部についたモミ痕が証明していると言える。生産地の推定はむずかしいが、新川の支流域に求めていたと考える。

弥生時代後期以降におけるいわゆる「単位集団」は、生産基盤を独自に確立し、内部に階層分化を顕在化させながらも小集落を形成していたと思われる。ところで久が原式、弥生町式と印手式の集落内での偏在性を基本的に、生活様式の機能的格差として捉えるならば、第II群における印手式の主体化は、他群とは異なる印手式独自の機能に基づく生産基盤が存在していたとも言えるだろう。そこでは稲作、即ち、水田経営とは限定できない他の生産活動がなされていたのかも知れない。印手式の土器の形状も久が原式、弥生町式とは異なる生産基盤により、必然的に決定されたと考えておきたい。

第6節　古墳時代の総括

古墳時代の遺構は、前期、中期、そして後期に比定されるが、この内前期の遺構群については弥生時代最終末期との関連性から弥生時代において記述したところである。残る中期、後期の遺構群は、集落立地において自然地形等の影響もあろうが類似する相様を呈している傾向が窺われる。

中期の遺構群は滑石模造品の工房跡として特徴を有し、2群から構成されている。工房跡出土の石製品は、剣形品、有孔円板、臼玉、勾玉があるが、臼玉、および臼玉未成品が他の品目を凌駕しており、あたかも臼玉のみを製作していた工房跡と言う印象を受ける。この点は、臼玉以外の品目について、その製作過程を反映する未成品の出土が皆無に近い状況によるものと

考えられる。しかしながら出土点数はごく少量であっても臼玉以外の成品が出土した事実は、生産量の問題は別としても、剣形品、有孔円板、勾玉を製作していたと考えて良いであろう。

玉類の製作過程後半に位置づけられる穿孔作業について、未成品等の孔痕の観察から、2段階の手順が想定できた。第1段階は、本穿孔に先立って、当り付が行われ、第2段階に進む。第2段階は本穿孔であり、本穿孔は終孔部直前で割れて貫通しており、攻玉技術における修正穿孔は施されていないのが通有の傾向として理解できる。また、研磨を施して修正する方法もとられていないのを特徴としている。

後期の遺構群は10軒の竪穴住居跡から構成されているが、この10軒をもって集落の全容が検出できたと言うわけでないことは再三述べたとおりである。時期的には遺物や、その出土状況等によって3段階の集落変遷を呈しており、等II群では単位集団が確認できたところである。しかしながら、新川上流域の沖積池を媒介とした古墳文化の実態が今日のところ充分に言究できる状況に至っておらず、わずか菅地台古墳が所在する程度である。菅地台古墳については未調査のため外見上から判断しなければならないが、径12m、高さ1.5mの円墳であるが、にわかに族長層の墳墓であると断定はできない。

当地域における古墳時代中期、後期の集落遺跡は少なく、萱田地区内においても遺構数はきわめて少ないと言える。今後における資料の増加に期待したい。

第7節　歴史時代の総括

歴史時代の集落跡は、律令制下における東国の実態を知るうえで貴重な資料を提供したものと思われる。と同時に土師器の生産体制や搬入土器の様相について、不充分な点は免れないにしてもその一端を言究できたことと思われる。残る問題点については今後の課題とし、最後に墨書土器について若干触れて総括としたい。

墨書土器については既に若干のまとめをしたところであるが、資料中、D189号遺構出土の墨書人面土器はきわめて希有な資料であるとともに古代社会を考えるうえで貴重である。墨書は「村神郷丈部国依甘魚」の9文字があり、それに加えて人面が描かれている。

墨書に見られる「村神郷」は、『倭名類聚抄』に、下総国印旛郡11郷の一つに村神郷とあるので、古代における郷名として考えて良いであろう。村神郷については『大日本地名辞書』や『日本地理志料』では、現在の八千代市村上を中心とする地域に比定地を求めており、新川（旧平戸川）より東側の地域に相当する。では新川の西側地域である萱田地区についてはどうであろうか。『日本地理志料』によればこの地域を千葉郡の草田郷にしている。草田郷は、加夜多と読せており、萱田と考えて差し支えないであろう。草田郷については『倭名抄』によれば武蔵国児玉郡の一郷として認められるだけであり、他に同郷名は認められない。萱田地区は『地理志

料』に言う草田郷とする地域であるが、千葉郡とされている。この由来について、同書は『神鳳抄』に下総国萱田神保御厨とあるのを引用したもので、明らかに『地理志料』の作郷と判断できる。ただし、草田郷が千葉郡の一郷として作郷された理由は明らかでないが、『地理志料』が邨岡良弼により作られた明治36年頃の萱田地区は、明治11年郡区町村編制法施行により千葉郡大和田村萱田となっている[註1]関係から千葉郡内に入られたものと考えられる。いずれにしても『倭名抄』の欠を補うための所産であることは誤りのないところであろう。

さて、村神郷の範囲であるが、先にも触れたように、新川の東側に村上の地名があり、『地名辞書』や『地理志料』が説くように村神の遺制と考えて良いであろう。この地域には歴史時代の集落跡として著名な村上込の内遺跡が位置しており充分に納得できるものである[註2]。一方萱田地区は墨書人面土器の墨書銘が示すとおり村神郷の範囲として考えて良いであろう。墨書される土器は坏形土器であるため、他地域から容易に搬入できる要素があり、断定することに多少の無理が生じるところであるが、逆にこの土器一点が、あるいはD189号遺構出土遺物すべてが他地域から搬入されたと考えられる具体的な証拠はない。したがって、北海道遺跡出土の墨書土器「丈部乙刀自女形代」や「承和五年二月十」銘の人面土器[註3]などとの関連において、本来的に権現後遺跡での所産と考えて差し支えないであろう。ただし、村神郷と言う郷名を併記した理由については意味のあるところであると考えられるが具体的な資料がないため明らかにすることはできない。

萱田地区においては、権現後遺跡はじめ北海道遺跡、井戸向遺跡、白幡前遺跡など歴史時代の集落遺跡が調査されており、さらに萱田地区より南側の地域には、池ノ台遺跡[註4]、高津新山遺跡[註5]などが位置しており、「堤」の墨書、あるいはヘラ書された土器が共通して出土しているとは注目できる。

村神郷の郷域は、およそこれらを包括する地域を考えて良く、萱田地区遺跡群の整理作業が進展するに従ってさらに具体的になると考えられる。

註

1　八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史』　昭和53年

2　千葉県都市公社『村上遺跡群』　昭和50年

3　阪田正一　「八千代市権現後遺跡出土の墨書人面土器について」『千葉史学』　昭和58年

4　八千代市遺跡調査会『池ノ台遺跡』　昭和55年

5　八千代市教育委員会　『高津新山遺跡』　昭和57年

第8節　結　　言

権現後遺跡は、昭和52年度から本格的な発掘調査を開始して以来今日まで検出した遺構および遺物は膨大な量に達している。また、実際の発掘作業において実測した図面をはじめ写真、遺物台帳、発掘調査日誌などの記録類も膨大な量に達している。

調査報告書の作成にあたっては、これら膨大な資料を整理し、分類、分析し作業を進めてきたわけであるが、整理過程で作成した種々な台帳類をはじめとするバックデータについては報告書に掲載することは不可能なため、記述することによってその欠を補うように努めたところであるが、すべてにわたり充分であるかどうか危惧されるところである。したがって、報告書の活用にあたっては記録をはじめ実際の遺物も併せて活用いただければと考えている。

検出した遺構、遺物からは新知見を多く認めることができた。旧石器時代にあっては、面的な発掘調査をとおして検出したブロック間の相関関係の把握によって石器制作の場、調理場、ゴミ捨て場等の性格を推定できるブロックを見い出すことができた。弥生時代にあっては群ごとの分析によって第IV群において弥生時代から古墳時代に推移する集落変遷を捉えることができた。古墳時代にあっては滑石模造品工房跡群を検出でき、専業的生産集団の一端を明らかにすることができた。歴史時代にあっては土師器の生産体制を須恵器の分析と遺構との関係から権現後遺跡での状況を捉えることができた。

権現後遺跡における成果については各章各節において記述してきたとおりであるが、今後刊行予定の萱田地区遺跡群の調査報告書をとおして萱田地区の遺跡群が理解いただければ誠に幸甚である。

Summary

Gongen-Ushiro Site is located at Kayata, Yachiyo city, on the Shimofusa Upland in the north-west,Chiba prefecture. Shimofusa is one of several uplands comprising the vast Kanto Plain of eastern Japan. It is relatively youthful platean, dissected by a complex system of steep-sided stream-cat valleys that drain into the Inba Swamp.

This site looks to the east the Shinkawa (the Hirado river in former days) that flow out of the Inba Swamp, and is located in the south end of the upland jutting out into the east. In the consequense of excavation, the village in old times was found, it was ascertained that the ancients had been making living for about thirty thousand years here.

The outline of remains and features is as follows.

The features of palaeolithic period were found 24 Blocks of stone implements, 55 charcoal clusters, and 1 pebble heap. After all it was acertain that the palaedithic men had been lived in this site for twenty thousaud years (=six cultural phases).

In Jomon period, 2.911 pottery fragments and, 36 stone tools from Intial to Late Jomon were unearthed, but there was no feature at all.

In Yayoi period there were 106 pit-dwellings, 3 tombs surrounded by square ditch. 32 pit -dwellings of all belong Early Kofun in itself, but we assumed that they belonged late Yayoi for convenience' sake of understanding of transition of Village in Yayoi period.

In Kofun period 5 pit-dwellings of middle. Kofun and 10 of late Kofun were found. It was ascertained that all pit-dwelling of Middle Kofun were workshops of imitation of stone accessory.

In Historical period 67 pit-dwelling, 2 surrounded by square ditch, 10 Hottatebashira Buildings (Building on the ground with several poles), 17 pits including 6 Kilns for producing of Haji pottery was found.

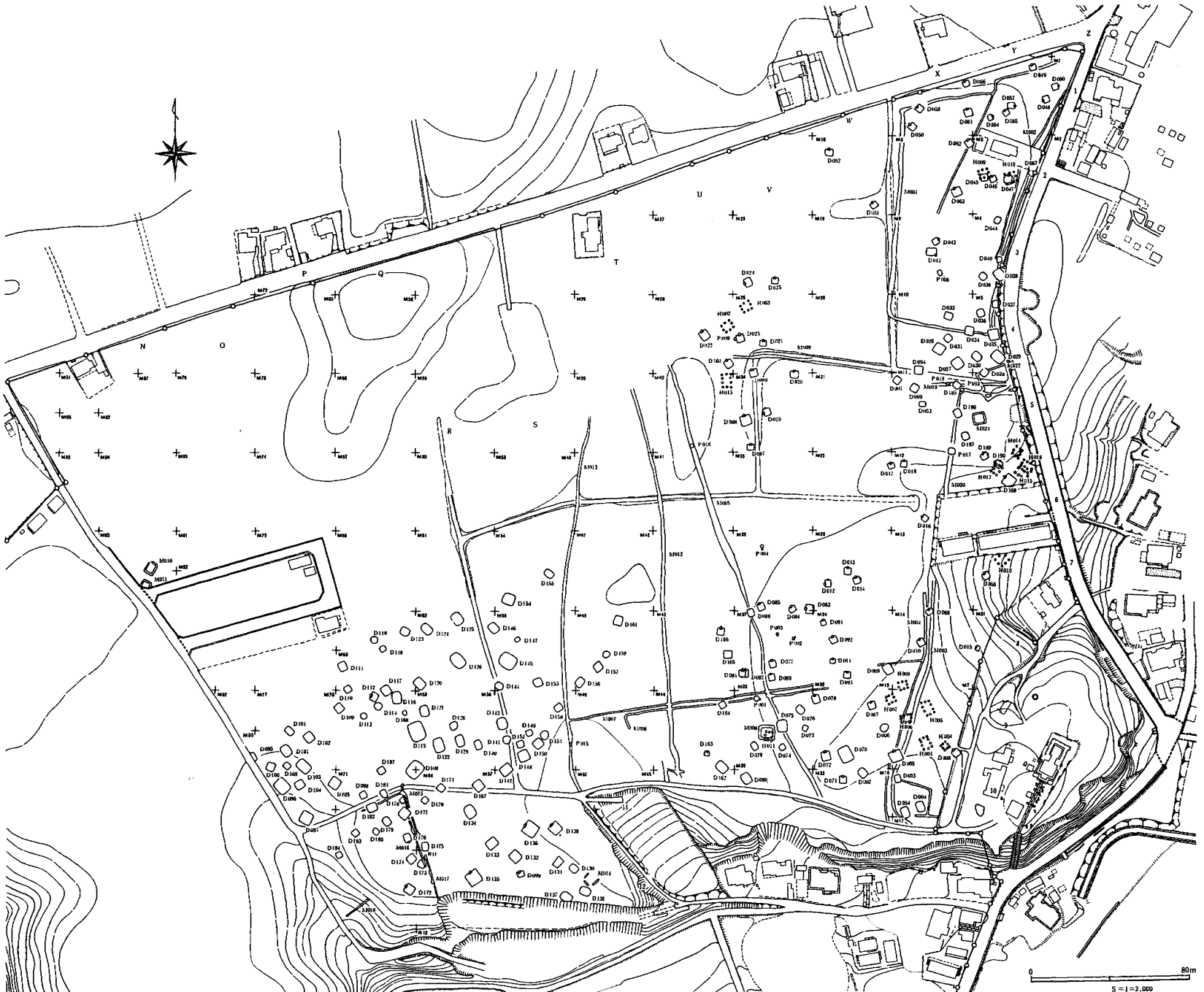
Besides archaeological research, we carried out natural scientific analyses, pollen analysis and soil analysis in pit-dwelling from Yayoi to Historical period and Kanto Loam from Shimosueyoshi to Tachikawa Loam.

We wish the above will contribute to archaeological study not only in Chiba prefecture but also in Kanto District after this.

権現後遺跡方眼杭成果一覧

杭名 (測点)	X	Y	H (杭標高)
M 1	−29,122.227	25,126.545	23.554
M 5	−29,242.227	25,086.545	24.622
M 10	−29,242.227	25,046.545	24.836
M 15	−29,442,227	25,046.545	23.593
M 20	−29,242.227	25,006.545	24.490
M 25	−29,202.227	24,966.545	24.472
M 30	−29,282.227	24,886.545	24,554
M 35	−29,322.227	24,966.545	24.508
M 40	−29,282.227	24,926.545	24.733
M 45	−29,482.227	24,926.545	24.214
M 50	−29,482.227	24,886.545	24.266
M 55	−29,402.227	24,846.545	24.330
M 60	−29,322.227	24,806,545	24.544
M 65	−29,242.227	24,766.545	22.432
M 70	−29,442.227	24,766.545	24.595
M 75	−29,362.227	24,726,545	24,403
M 80	−29,322.227	24,686.545	24,321
M 85	−29,362.227	24,646.545	24.496
M 90	−29,302.227	24,626.545	24,538
M 95	−29,482.227	24,746.545	24.055

測量は日経コンサルタント株式会社に委託したものである。



図A 遺構配置図

昭和59年３月21日　印刷
昭和59年３月31日　発行

八千代市権現後遺跡

発行　住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿４丁目３番17号

財団法人千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１丁目３番13号

印刷　株式会社　弘　　文　　社
千葉県市川市市川南２丁目７番２号

八千代市権現後遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—

1984

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

八千代市権現後遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—

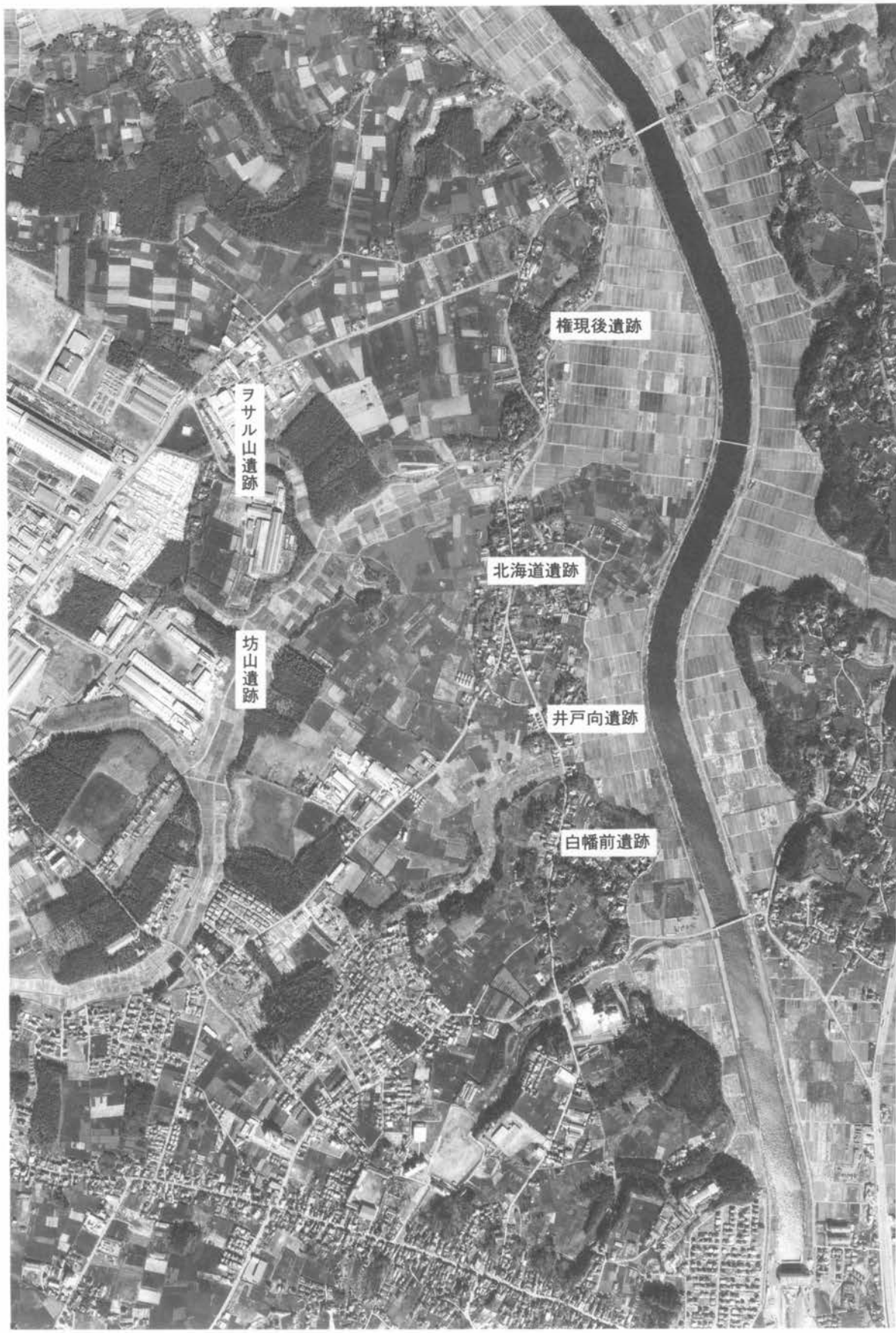
図版編

1984

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

図　版

D189-23



遺跡

萱田地区遺跡群と周辺の空中写真 S＝1:13,000(千葉日報社撮影)

1．昭和52年度調査区全景（南東より）

2．昭和52年度調査区全景（南西より）

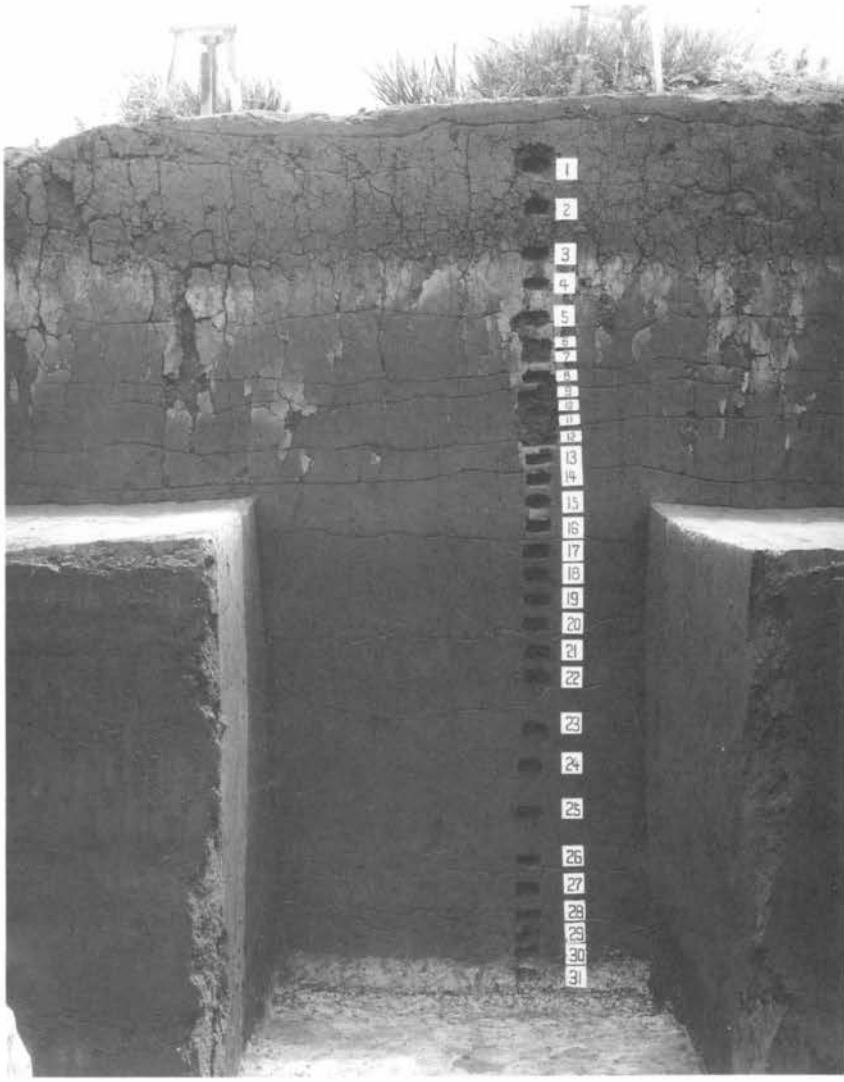
1．昭和53年度調査区全景（西より）

2．昭和53年度調査区全景（南西より）

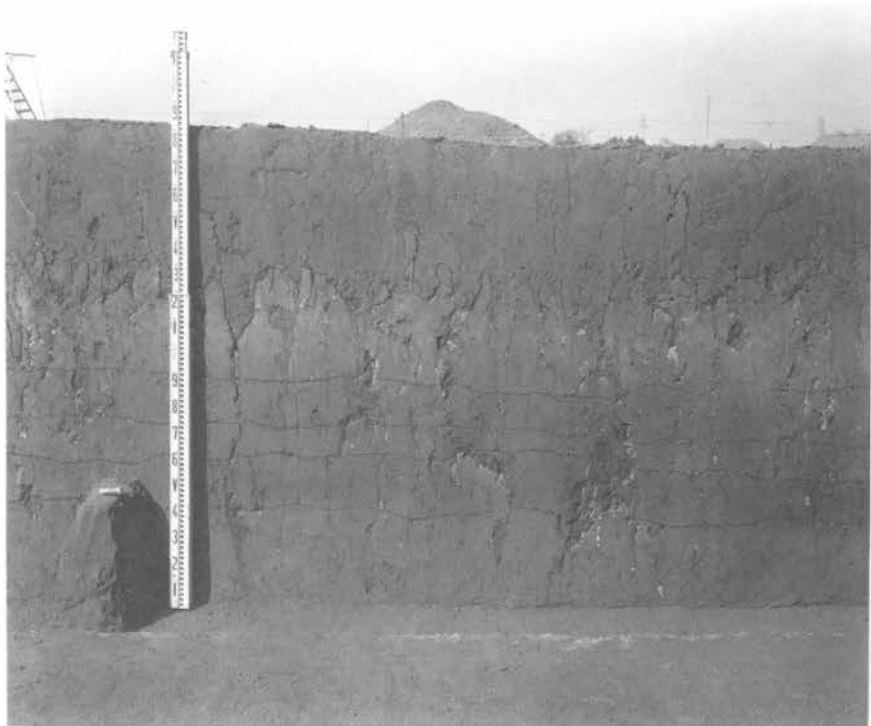
1．旧石器時代調査風景（東より）

2．旧石器時代調査風景（西より）

3．旧石器時代調査風景（北より）



1．土層断面（数字は鉱物分析サンプル採取位置）



2．ローム層土層断面

1．第２文化層第23ブロック
石器出土状況(北西より)

S-23,1

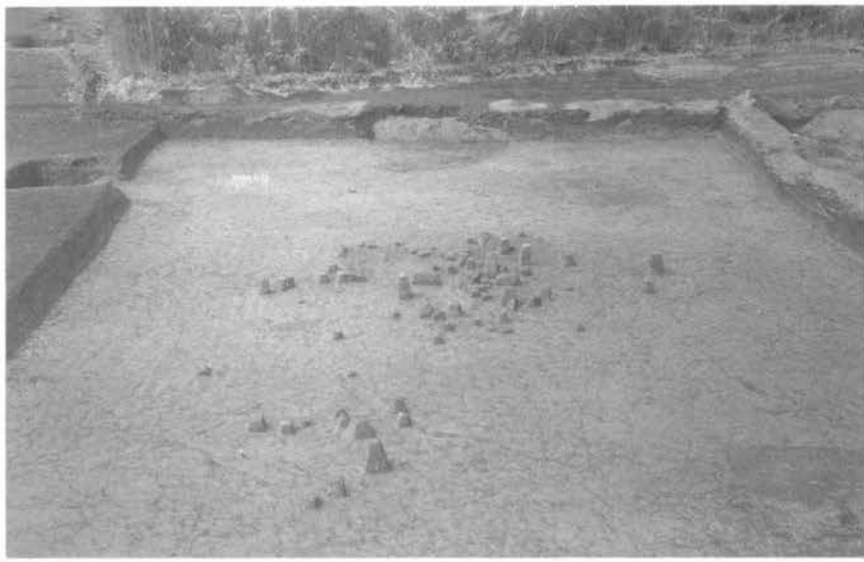
S-23,2

S-23,3

2．第２文化層第23ブロック
出土石器群

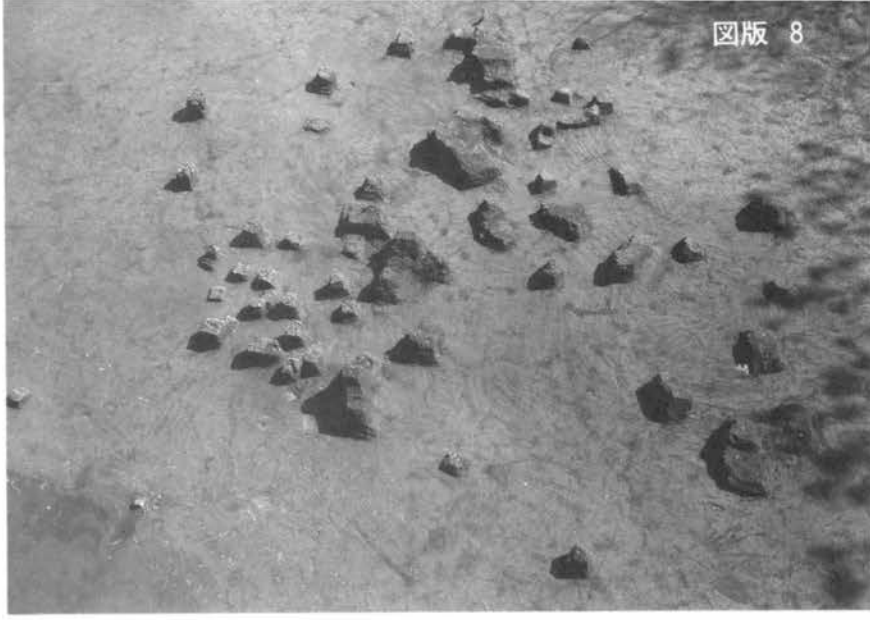
3．第３文化層第12ブロック
石器出土状況(南西より)

1．第３文化層第13ブロック
石器出土状況（東より）

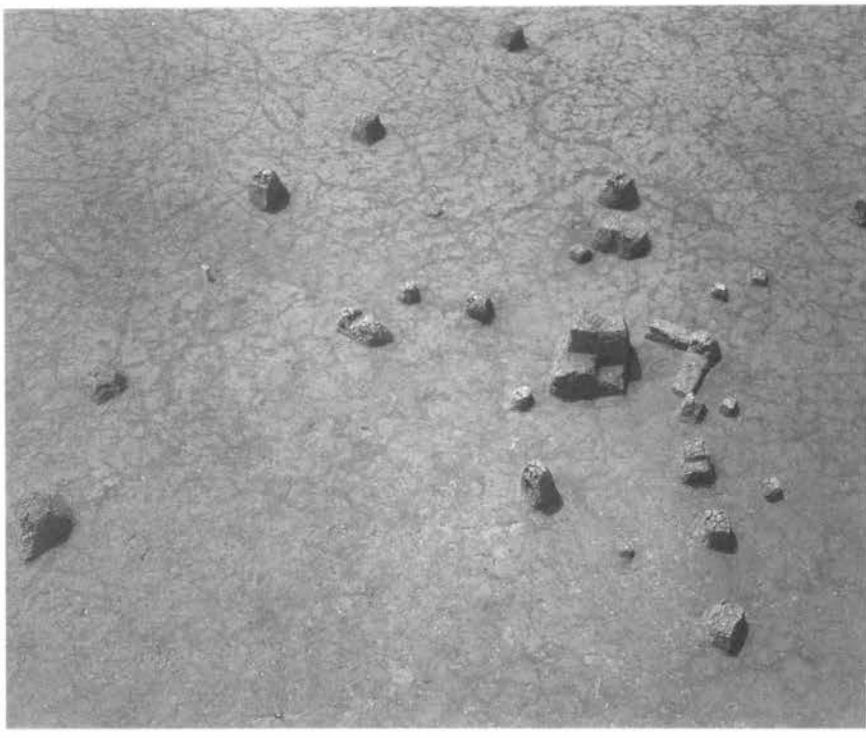


2．第３文化層第14ブロック
石器出土状況（東より）

3．第３文化層第15ブロック
石器出土状況（北より）



1．第３文化層第16ブロック
石器出土状況（北より）



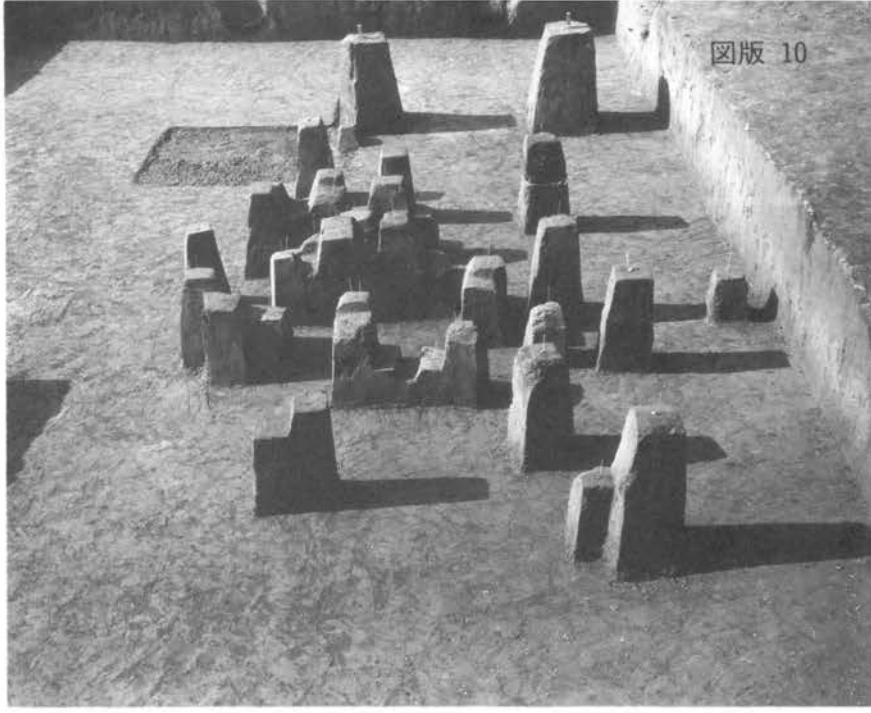
2．第３文化層第17ブロック
石器出土状況（東より）

3．第３文化層第18ブロック
石器出土状況（南より）

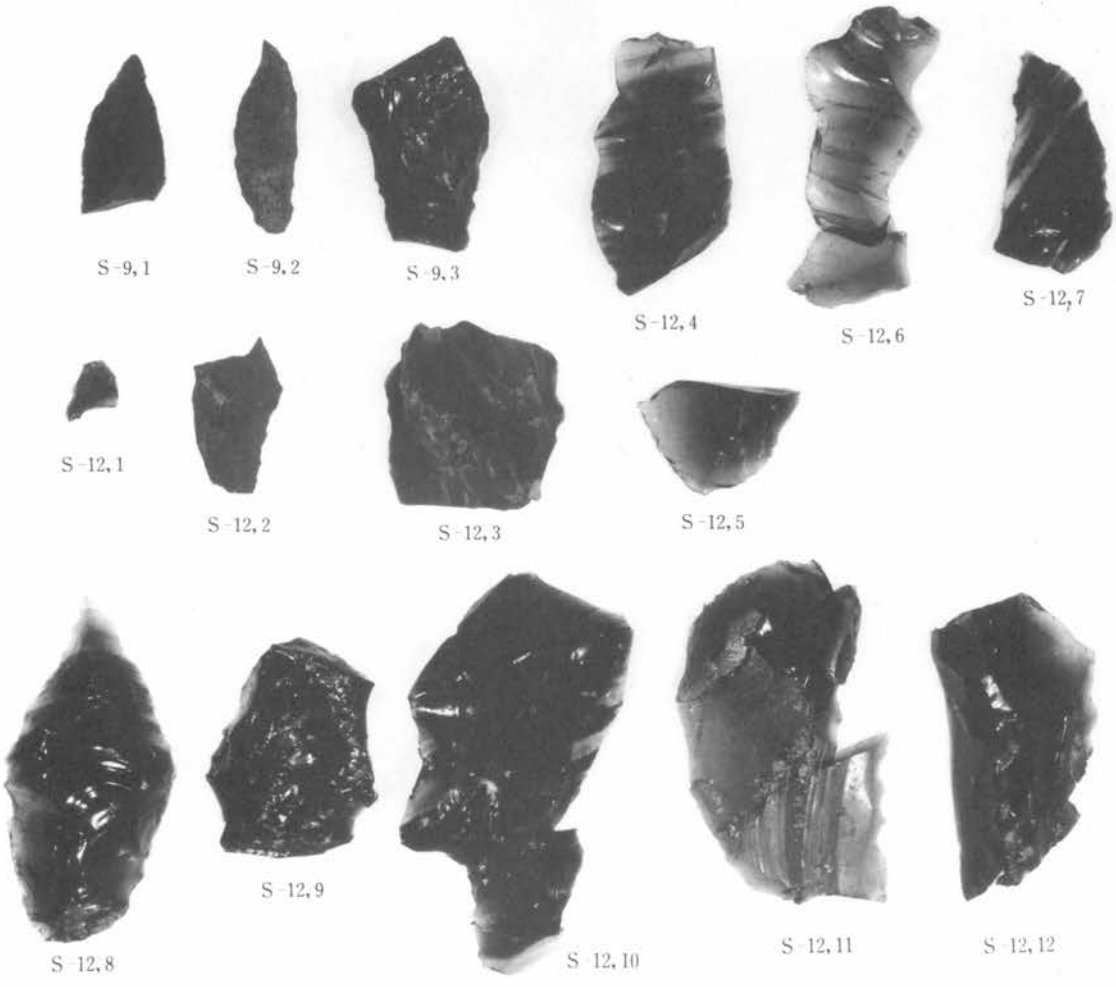
1．第３文化層第20ブロック
石器出土状況（北より）

2．第３文化層第21ブロック
石器出土状況（北より）

3．第３文化層第22ブロック
石器出土状況（東より）



1．第３文化層第27ブロック
石器出土状況（南より）



2．第３文化層第９，12ブロック出土石器群

S-13,1

S-13,2

S-13,3

S-14,1

S-14,2

S-14,3

S-14,4

S-14,5

S-14,6

S-14,7

S-14,8

S-14,9

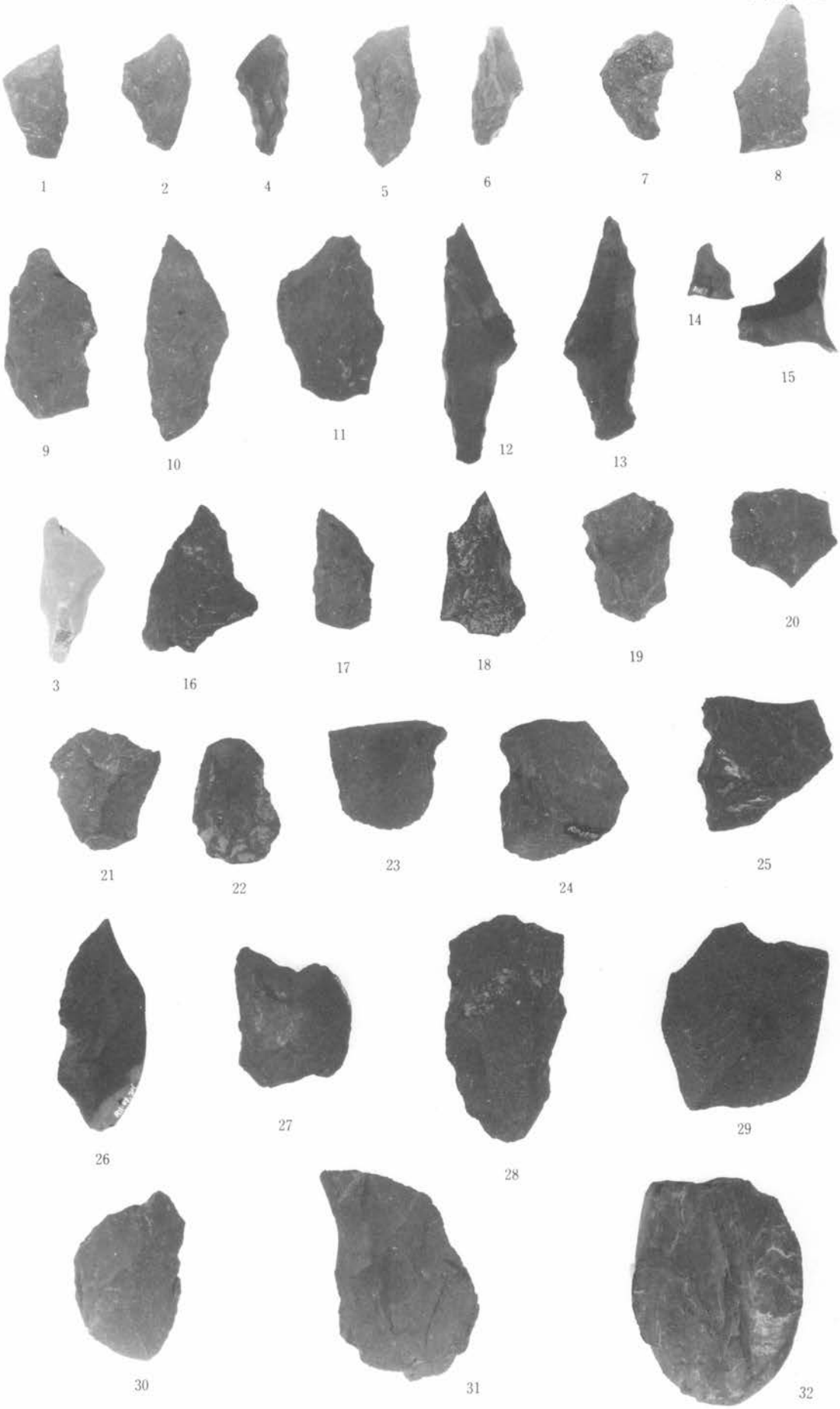
S-14,10

S-15,33

S-15,34

旧石器時代第3文化層遺物

第3文化層第13～15ブロック出土石器群



第3文化層第15ブロック出土石器群

S-16, 1

S-16, 2

S-16, 3

S-16, 4

S-16, 5

S-16, 6

S-17, 1

S-17, 2

S-17, 3

S-17, 4

S-17, 5

S-17, 6

S-18, 1

S-18, 2

S-18, 3

S-18, 4

S-20, 1

S-20, 2

S-20, 3

第３文化層第16～18，20ブロック出土石器群

S-20,4

S-20,5

S-21,1

S-21,2

S-21,3

S-22,1

S-22,2

S-27,1

S-27,2

S-27,3

S-27,4

S-27,5

S-27,6

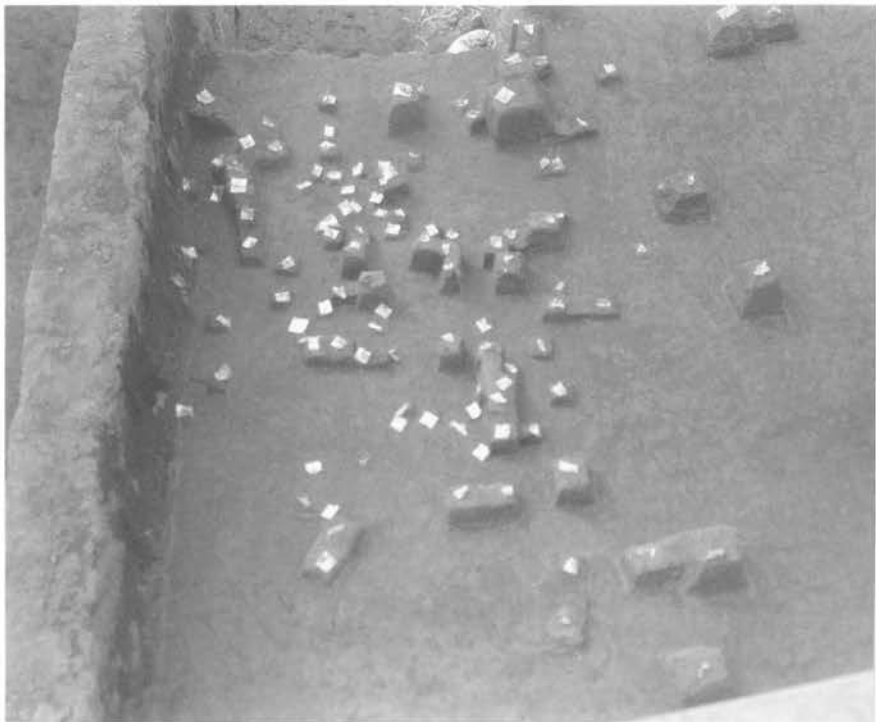
S-27,7

1．第３文化層第20，21，27
ブロック出土石器群

2．第4文化層第1，2ブロック
石器出土状況（北より）

1．第4文化層第1ブロック
石器出土状況（南より）

2．第4文化層第1ブロック
石器出土状況（南より）

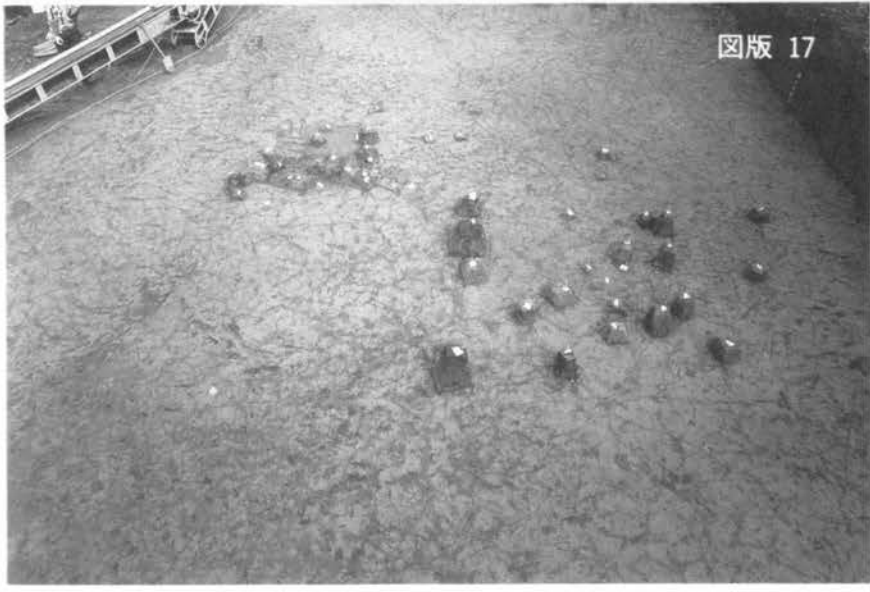


3．第4文化層第2ブロック
石器出土状況（南より）

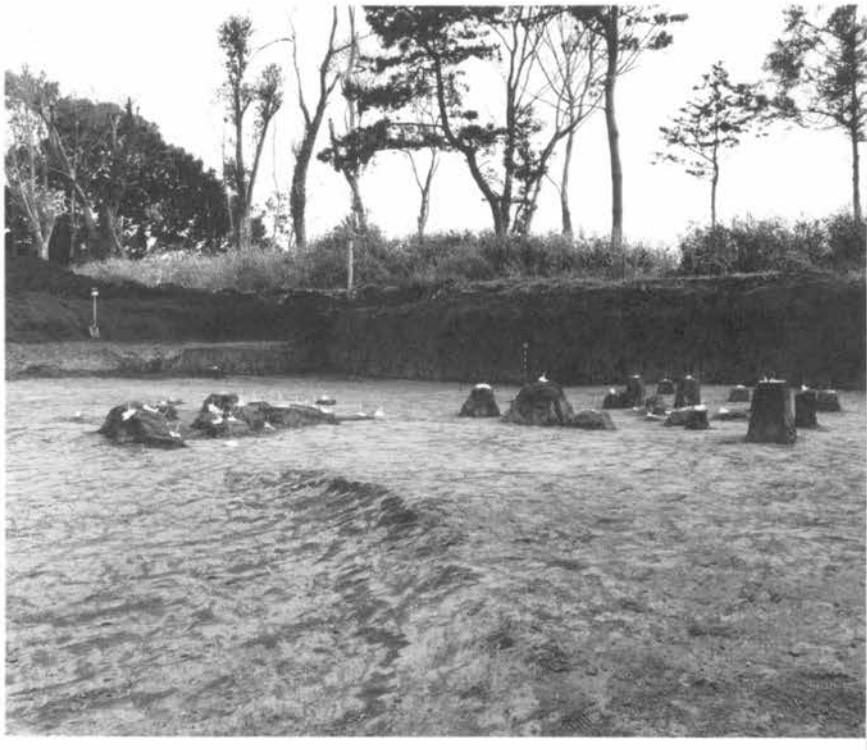
1.第4文化層第4・5ブロック石器出土状況(南より)

2．第4文化層第6ブロック石器出土状況（南より）

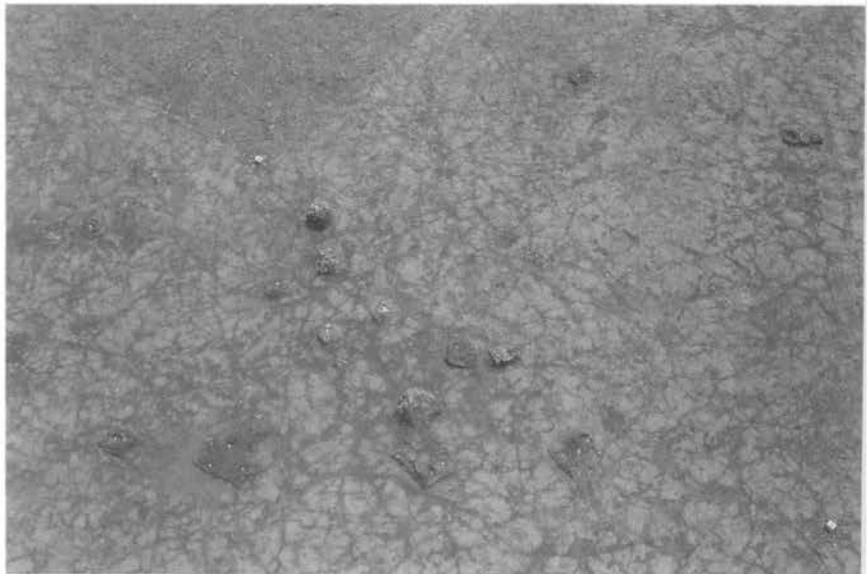
3．第4文化層第6ブロック石器出土状況（西より）



1．第４文化層第7・8ブロック石器出土状況(南より)

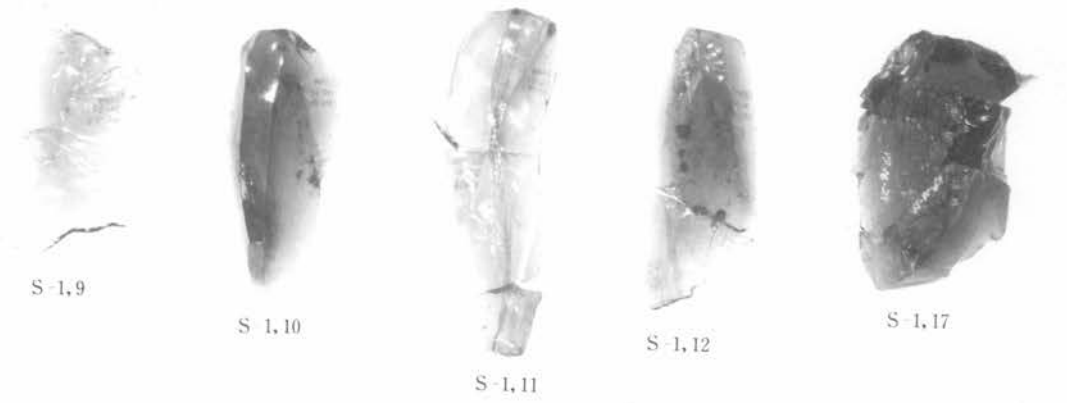


2．第４文化層第7・8ブロック石器出土状況(北より)

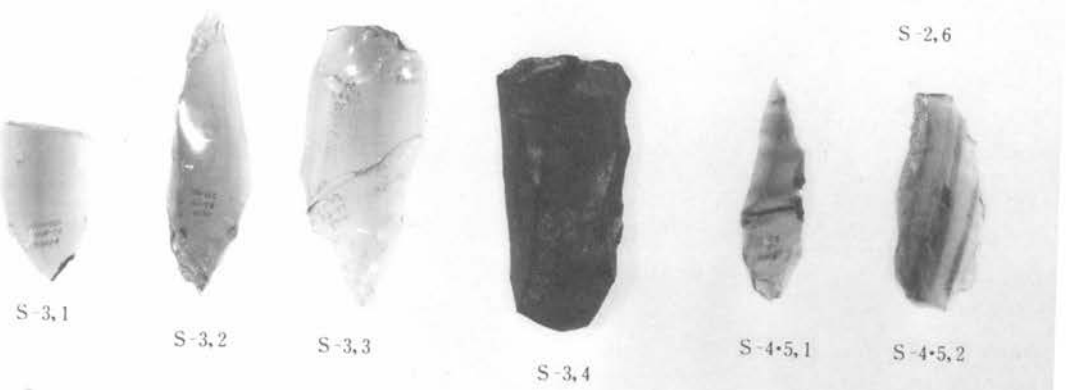


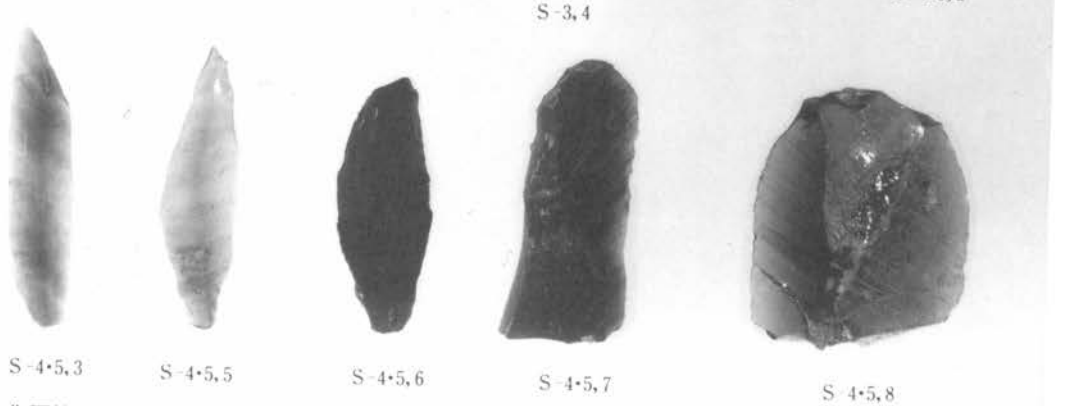
3．第４文化層第19ブロック石器出土状況（南より）

S-1,1 S-1,2 S-1,3 S-1,4 S-1,5 S-1,6 S-1,7 S-1,8

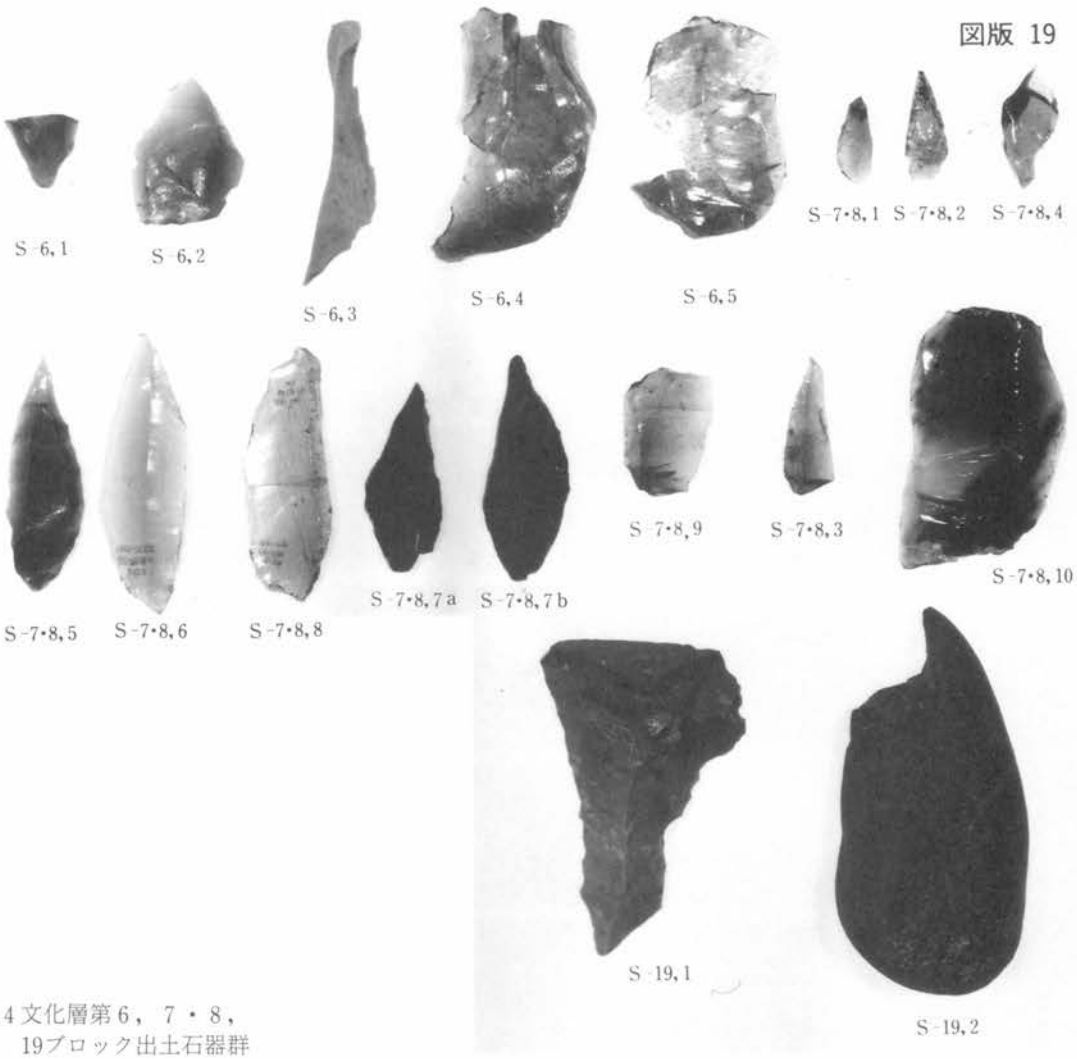

S-1,9 S-1,10 S-1,11 S-1,12 S-1,17

S-2,1 S-2,2 S-2,3 S-2,4 S-2,5 S-2,6


S-3,1 S-3,2 S-3,3 S-3,4 S-4·5,1 S-4·5,2


S-4·5,3 S-4·5,5 S-4·5,6 S-4·5,7 S-4·5,8

第4文化層第1～3，4・5ブロック出土石器群



1．第4文化層第6，7・8，
19ブロック出土石器群

2．第5文化層第24，25ブロック
石器出土状況（北より）

1．第５文化層第24ブロック
石器出土状況（西より）

2．第５文化層第24ブロック
石器出土状況（東より）

3．第５文化層第24ブロック
石器出土状況（西より）

1．第５文化層第25ブロック
石器出土状況（西より）

2．第５文化層第25ブロック
石器出土状況(北西より)

S-24,1

S-24,2

S-24,3

3．第５文化層第24ブロック
出土石器群

S-24, 4

S-24, 5

S-25, 1

S-25, 2

S-25, 5

S-25, 4

S-25, 3

S-25, 6

S-25, 7

S-25, 8

S-25, 9

S-25, 10

S-25, 11

第5文化層第24，25ブロック出土石器群

1．第６文化層第10ブロック
石器出土状況（西より）

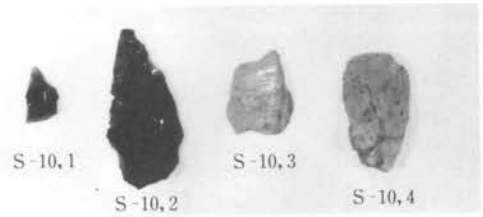
2．第６文化層第10ブロック
石器出土状況（東より）

3．第６文化層第11ブロック
石器出土状況（南より）

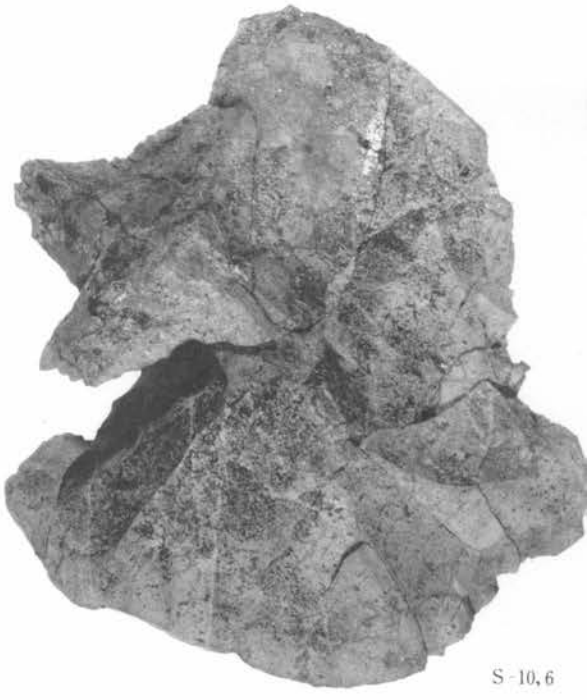
1．第６文化層第11ブロック
石器出土状況（南より）

S-10,5

2．第６文化層第10ブロック
出土石器


S-10,1
S-10,2
S-10,3
S-10,4

S-11,1
S-11,2
S-11,3


S-10,6

S-11,4

S-11,6

S-11,5

S-11,7

S-11,8

S-11,9

S-11,11

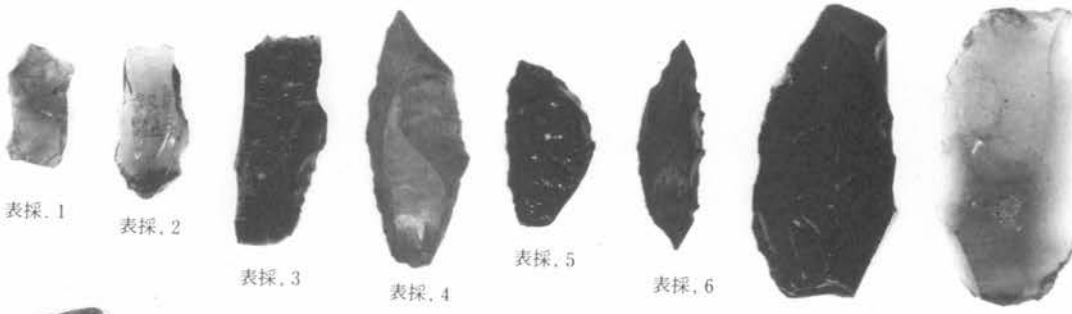
S-11,14

S-11,10

S-11,13

旧石器時代第6文化層遺物

第6文化層第10，11ブロック出土石器群


表採．1

表採．2

表採．3

表採．4

表採．5

表採．6

表採．7

表採．8

表採．9

表採．10

第２文化層．1

第２文化層．2

第１文化層．1

第１文化層．2

第１文化層．3

第２文化層．3

第２文化層．4

第２文化層．5

第３文化層．9

第３文化層．10

第５文化層．1

第３文化層．1

第３文化層．2

第６文化層．1

第３文化層．12

第３文化層．11

第３文化層．4

第３文化層．3

第３文化層．5

第３文化層．6

第３文化層．7

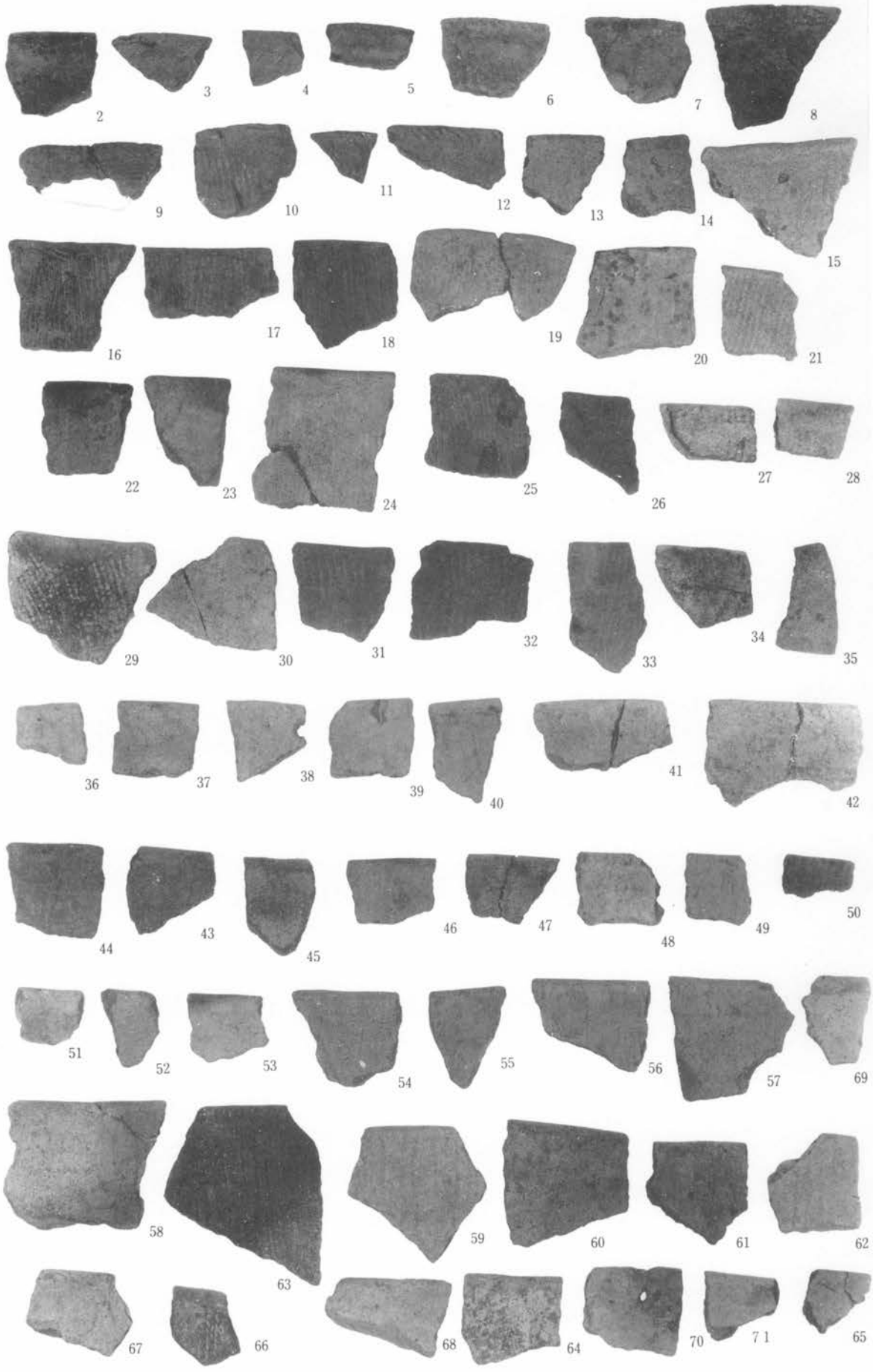
旧石器時代遺物

第３文化層．8

ブロック外出土石器群

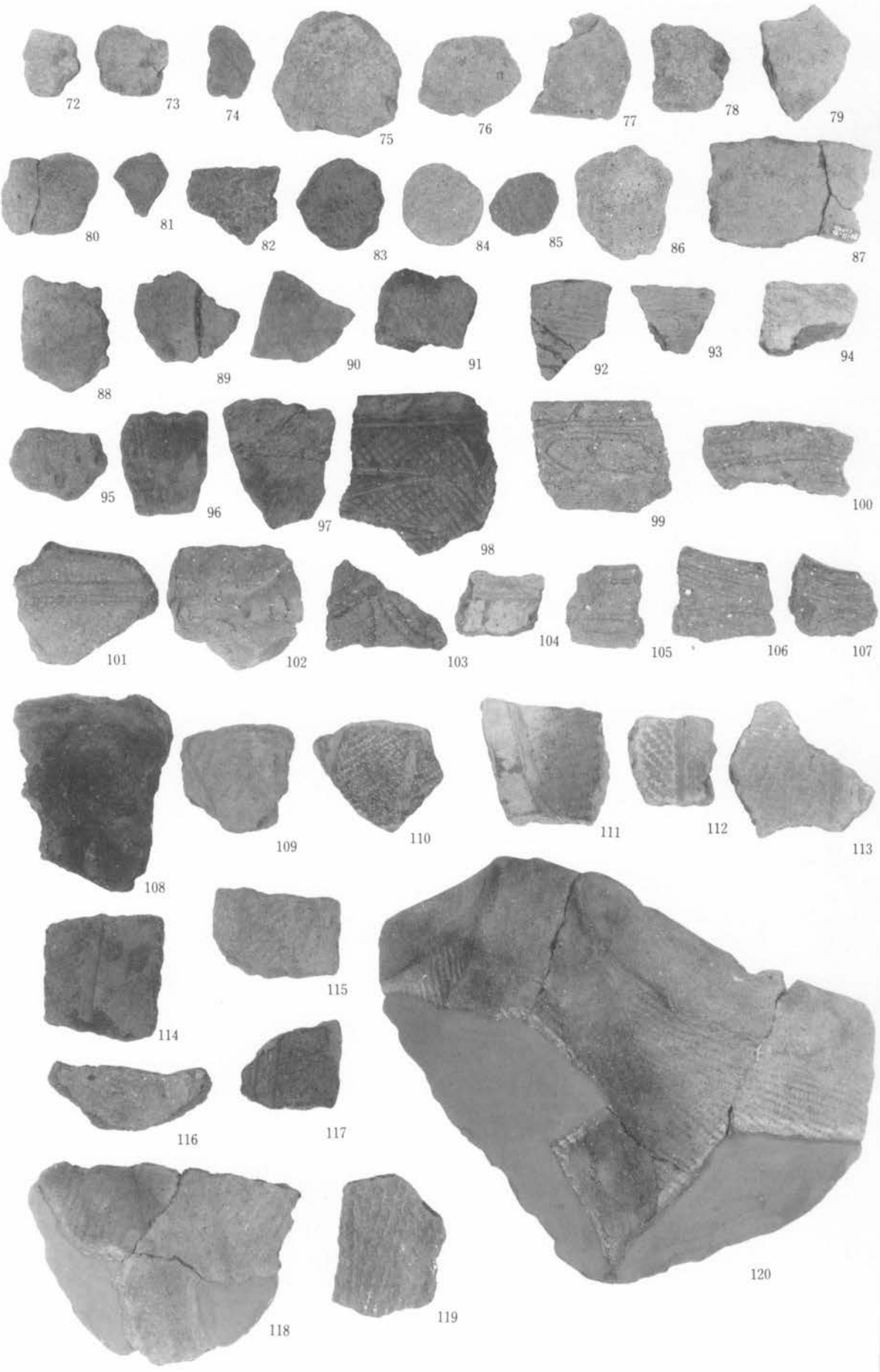
1．縄文包含層遺物
出土状況

2．縄文土器　早期



縄文時代遺物

縄文土器　早期



縄文時代遺物

縄文土器　早期（72～93），前期（94～97），中期（98～120）

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

141

140

142

143

144

145

146

147

148

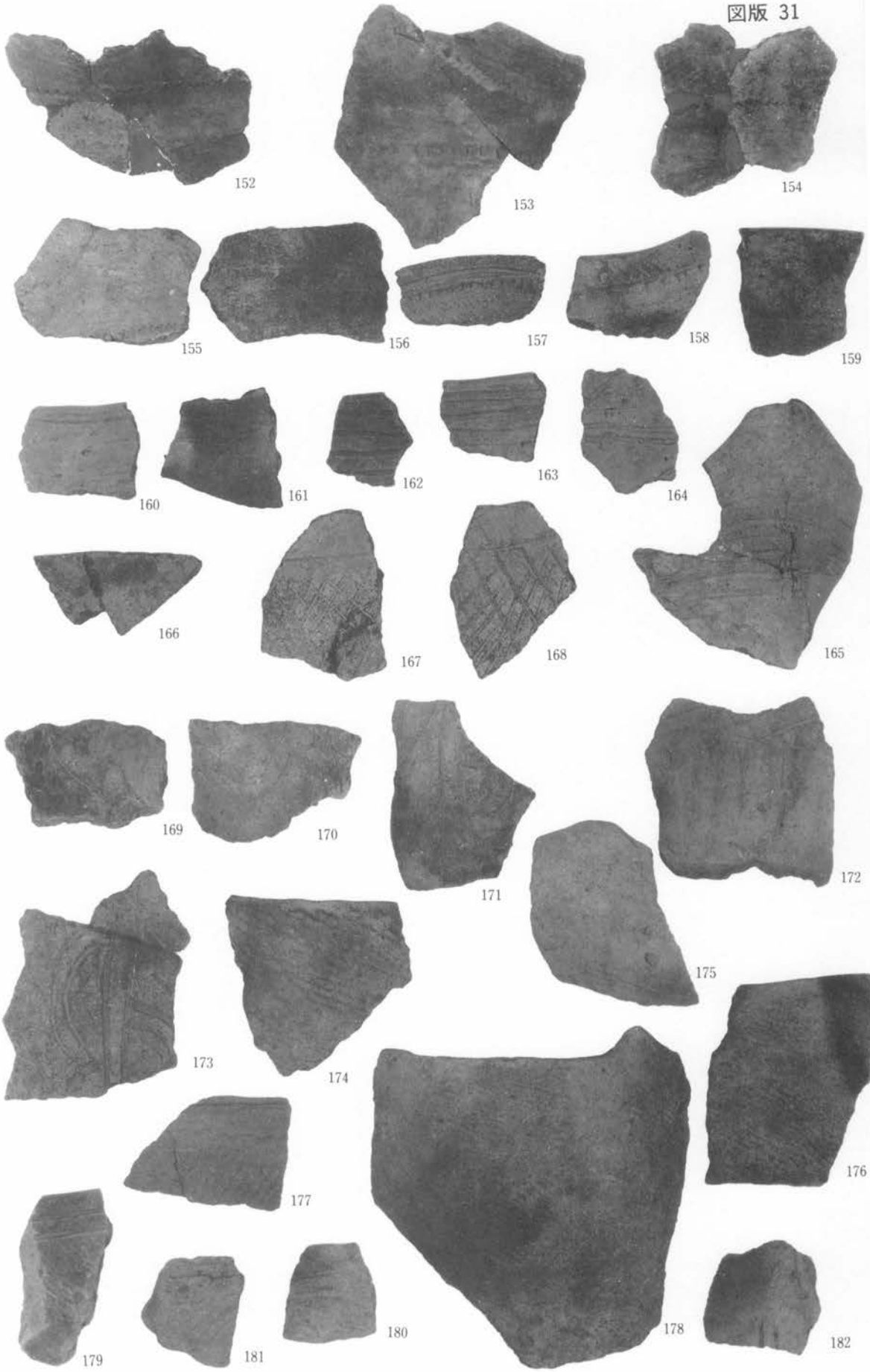
149

150

151

縄文時代遺物

縄文土器　後期

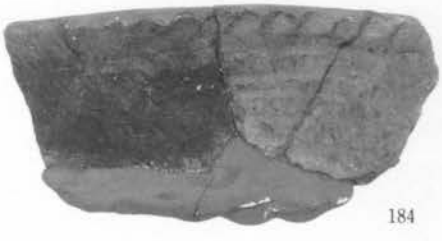


縄文時代遺物

縄文土器　後期

122

183


184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

縄文時代遺物

縄文土器　後期

121

208

209

210

211

212

213

214

218

215

216

217

219

220

221

222

223

224

225

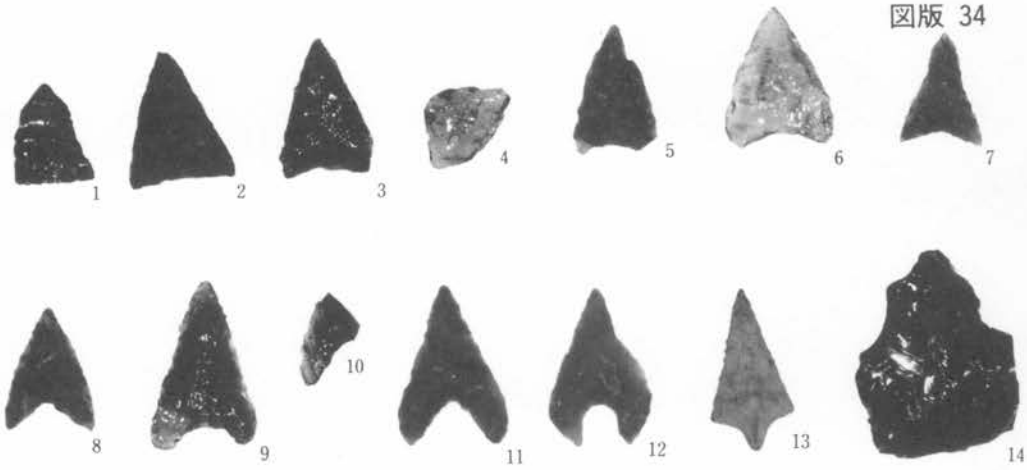
226

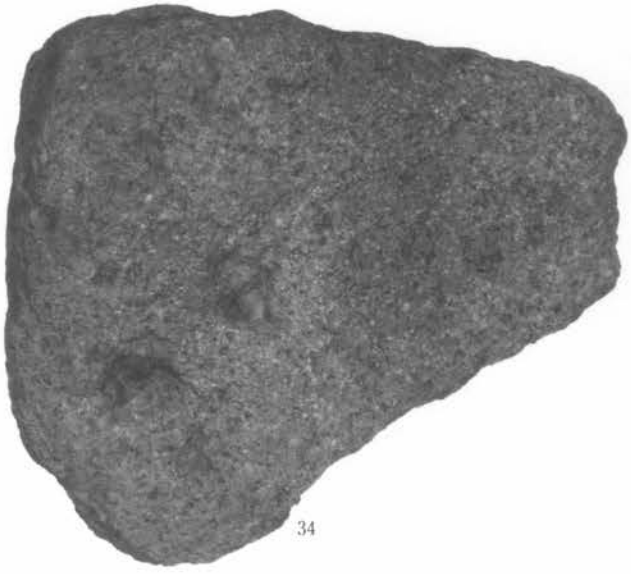
227

228

縄文時代遺物

縄文土器　後期





縄文時代遺物

縄文時代　石器

15

20

17

16

18

19

21

28

29

26

27

24

22

23

25

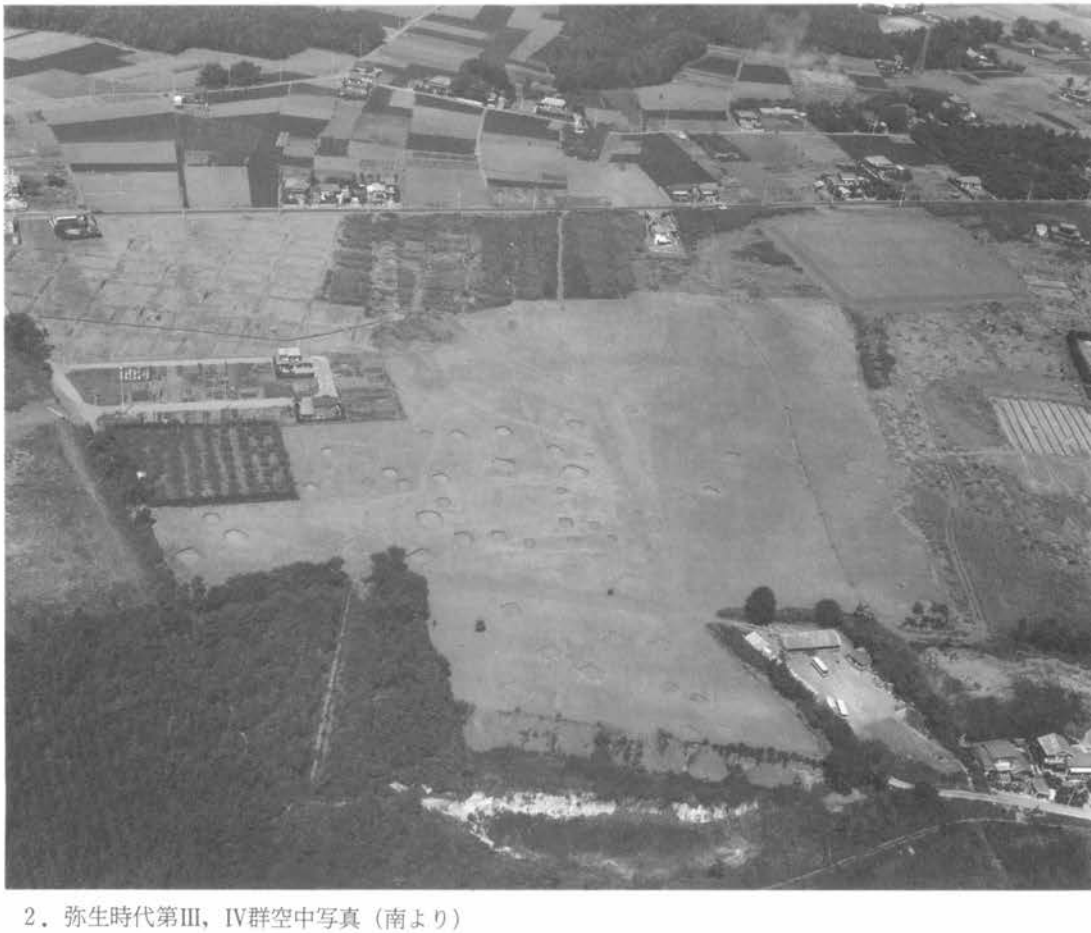
縄文時代遺物

縄文時代　石器

1．弥生時代第Ⅰ群空中写真（南より）

2．弥生時代第Ⅰ群空中写真（東より）

1．弥生時代第II群空中写真（南より）



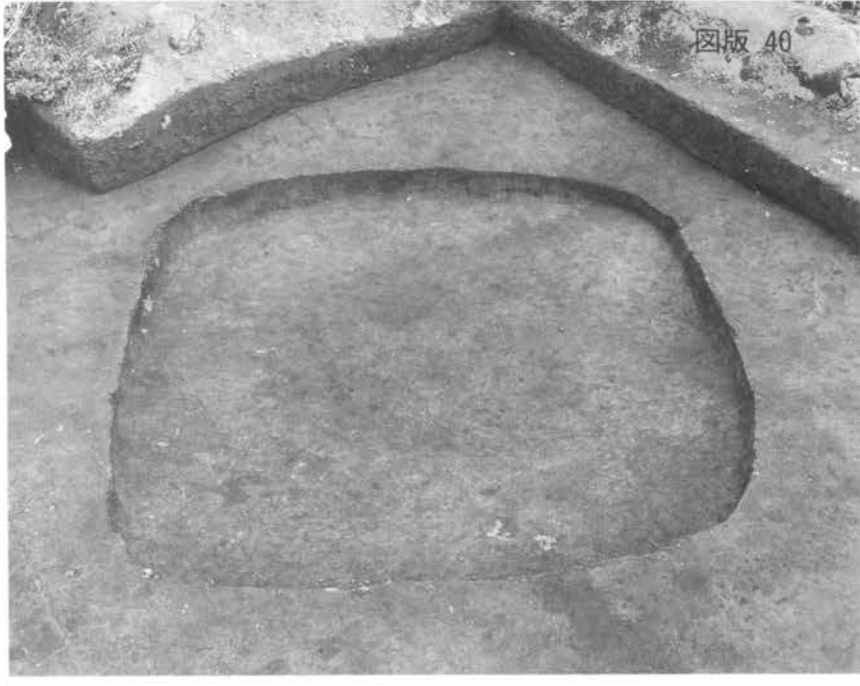
2．弥生時代第III，IV群空中写真（南より）

1．弥生時代第III，IV群空中写真（西より）

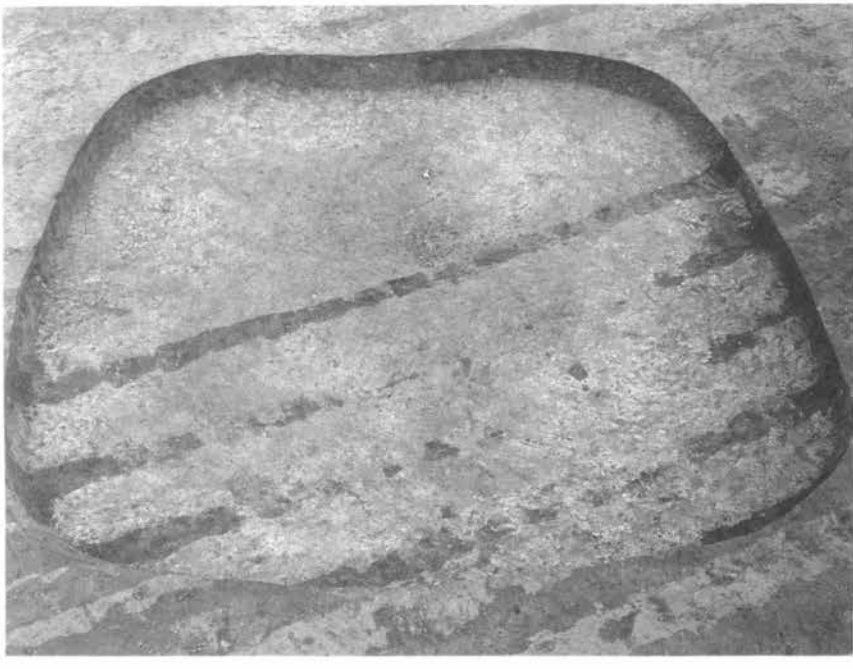
2．弥生時代第IV群空中写真（南西より）

1．弥生時代第IV群空中写真（南西より）

2．弥生時代第III，IV群遺構分布状況

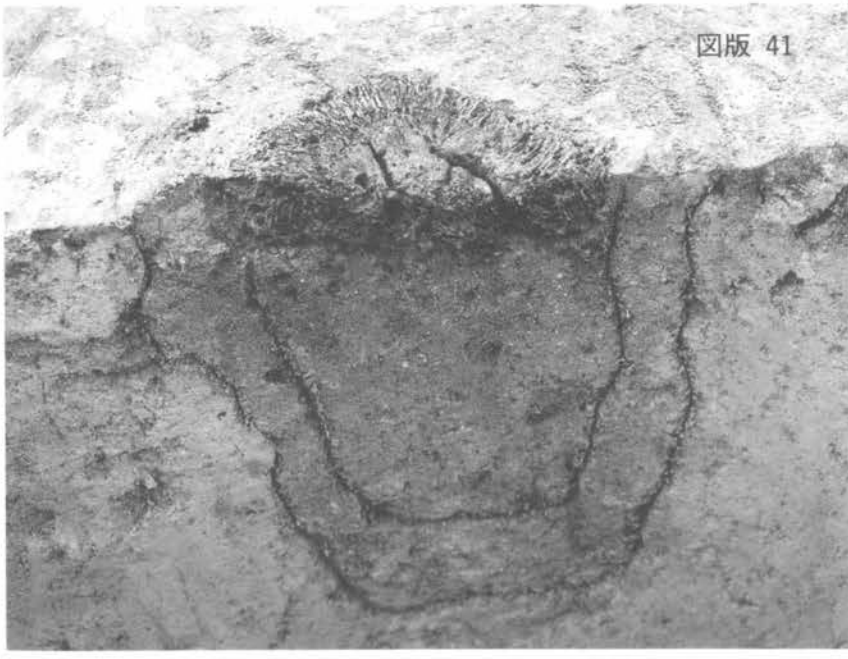


1．D001号遺構全景

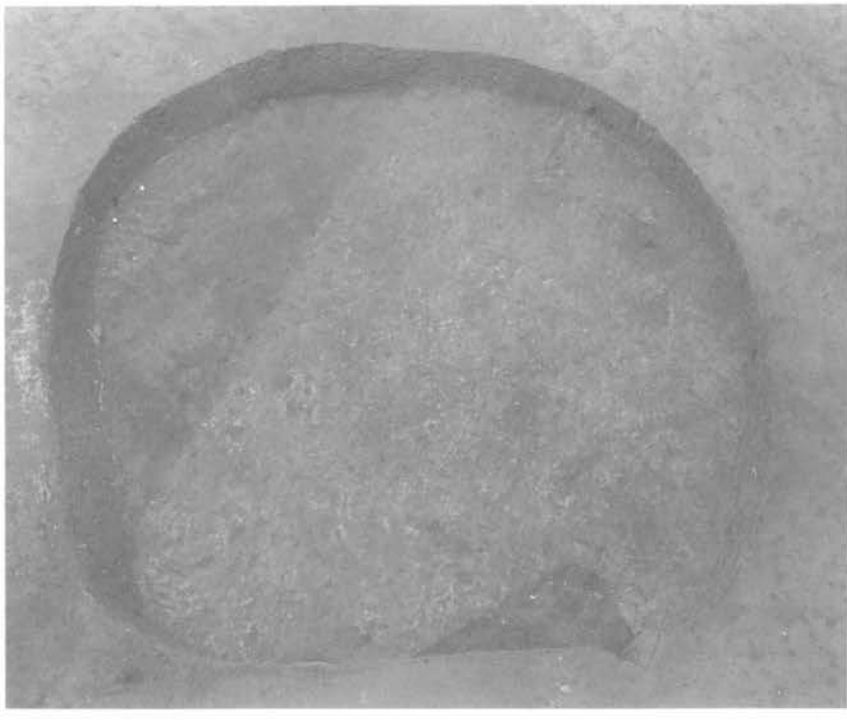


2．D026号遺構全景

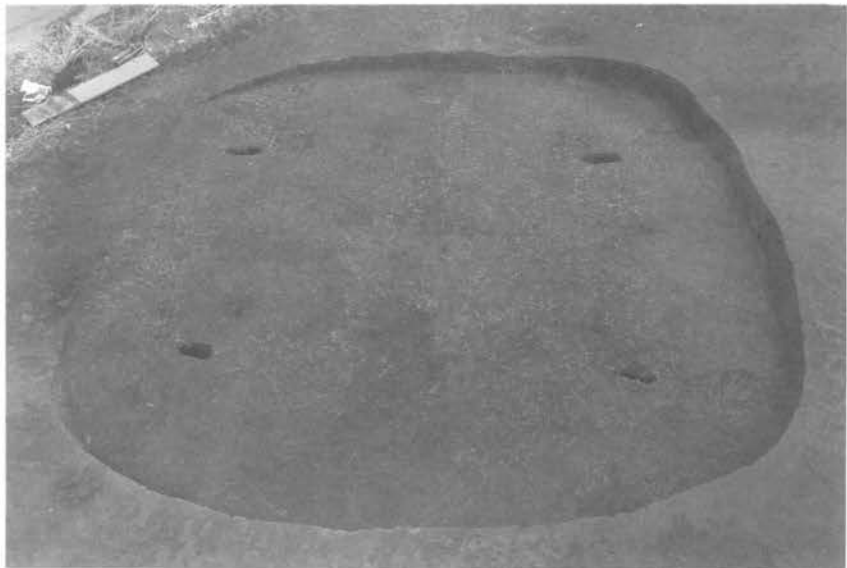
3．D027号遺構全景



1．D027号遺構炭化柱
検出状況



2．D028号遺構全景



3．D029号遺構全景

1．D029号遺構炭化物
出土状況

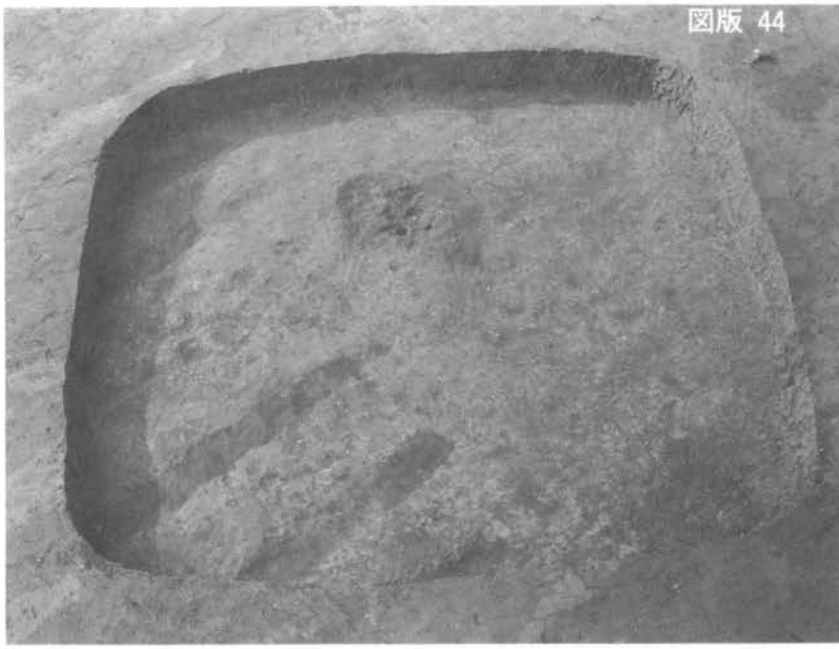
2．D029号遺構遺物
出土状況

3．D029号遺構遺物
出土状況

1．D030号遺構全景

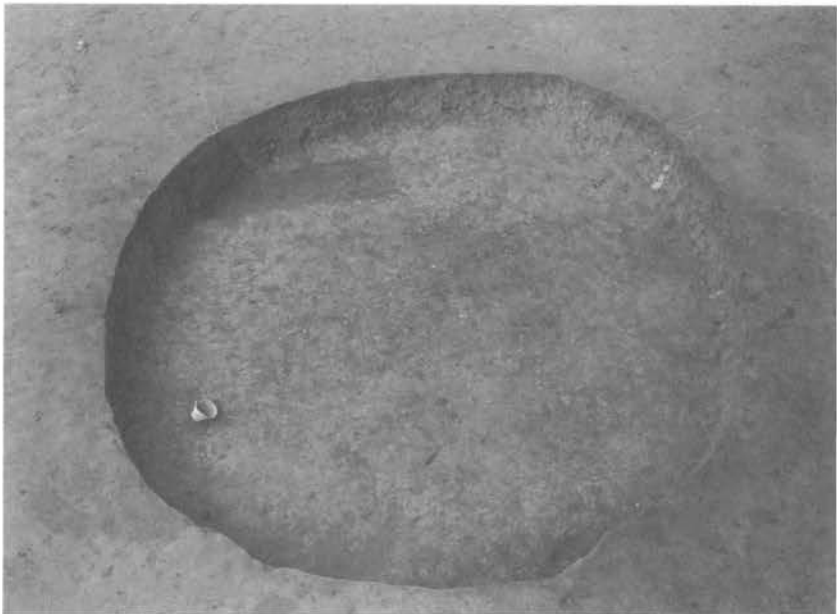
2．D030号遺構遺物
出土状況

3．D030号遺構遺物
出土状況

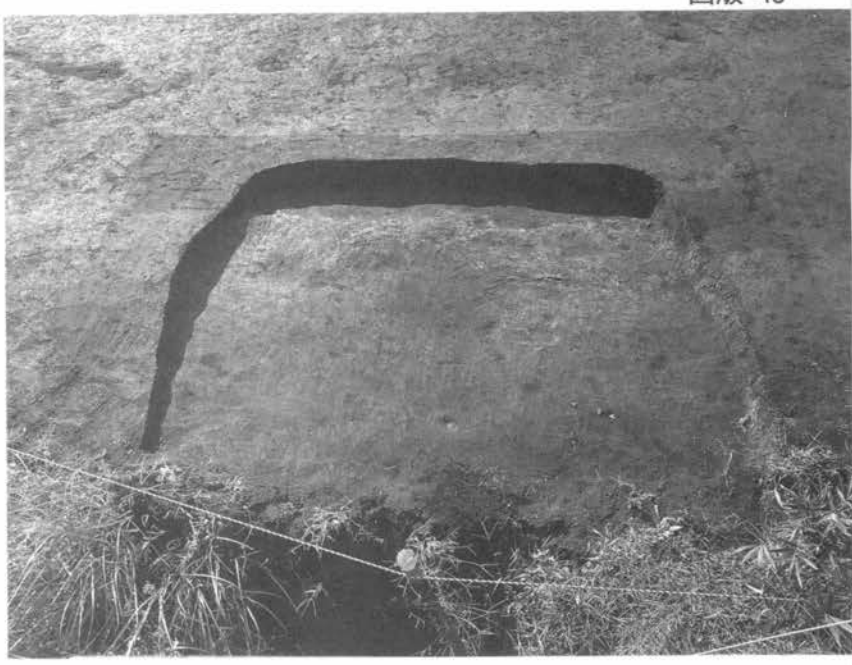


1．D031号遺構全景

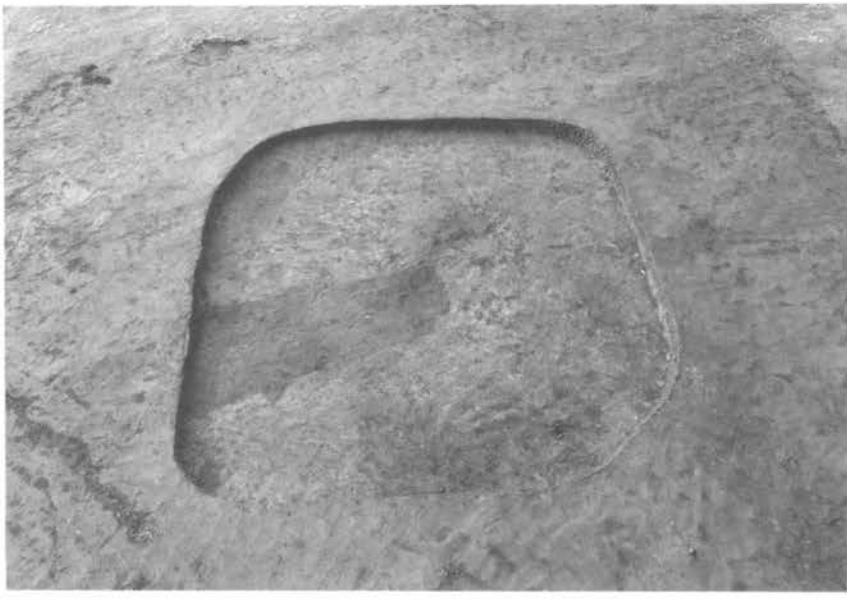
2．D033号遺構全景



3．D036号遺構全景

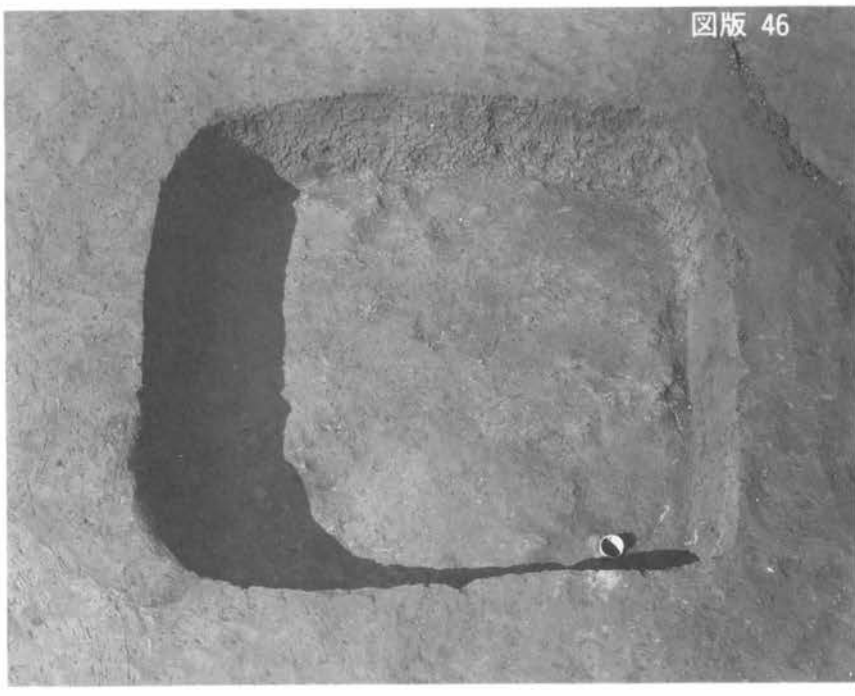


1．D037号遺構全景



2．D038号遺構全景

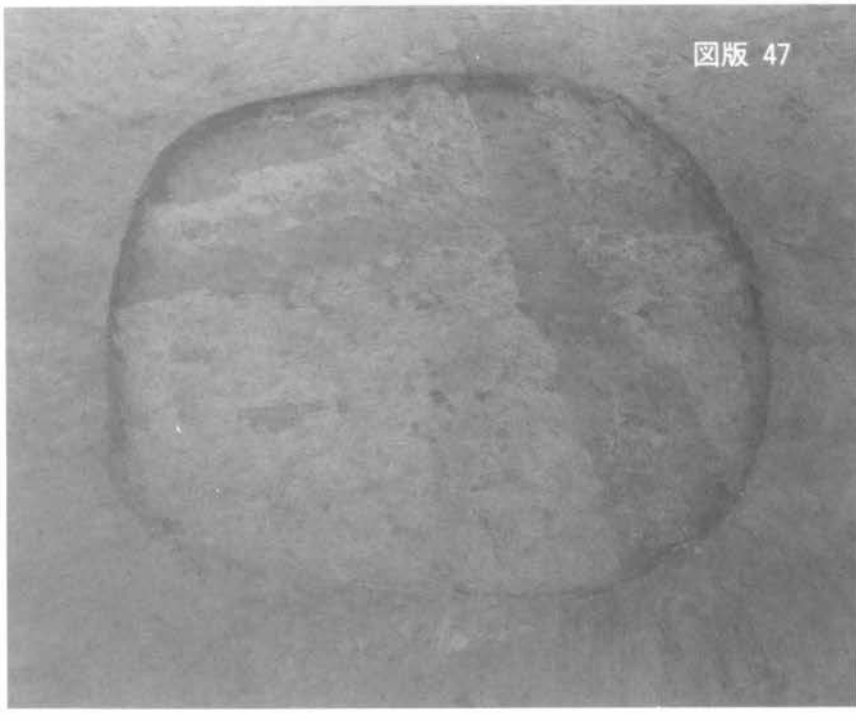
3．D039号遺構全景



1．D040号遺構全景

2．D044号遺構全景

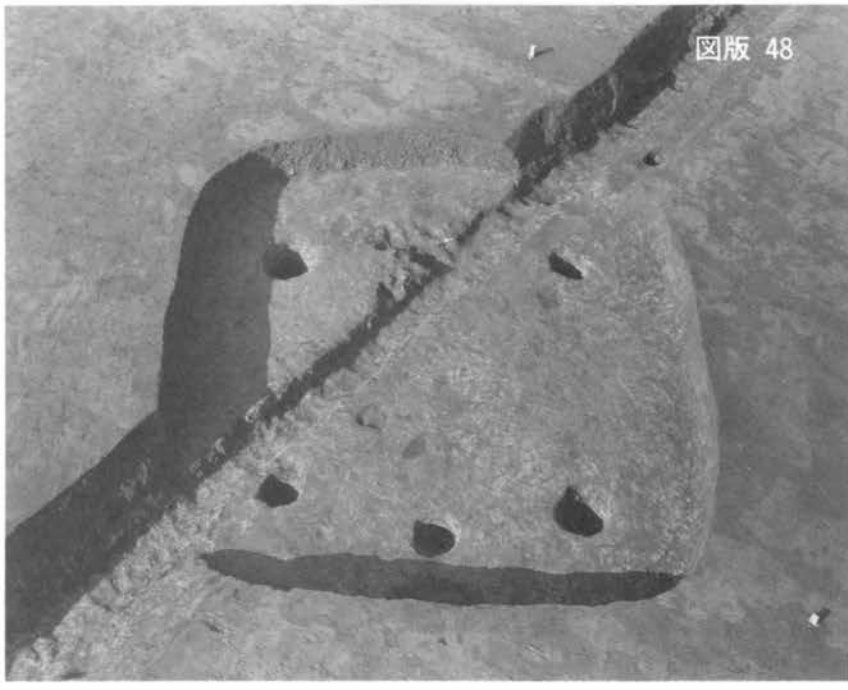
3．D053号遺構全景



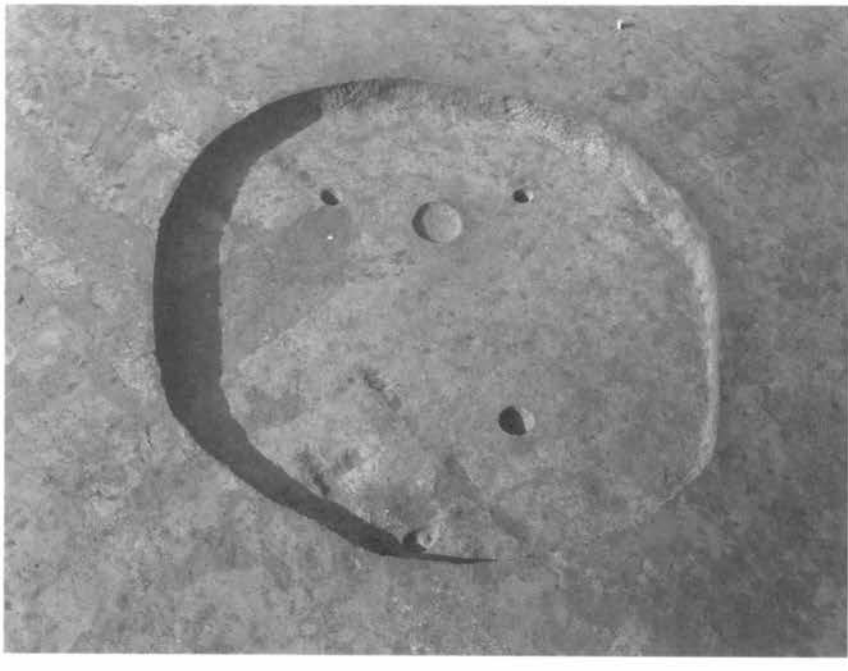
1．D069号遺構全景

2．D094号遺構全景

3．D185号遺構全景



1．D186号遺構全景



2．D187号遺構全景

D027,2(⅓)

D027,3(⅓)

D027,5(⅓)

D029,4(⅓)

D029,7(⅓)

D029,8(⅓)

D029,3(⅓)

D029,1(⅓)

弥生時代第Ⅰ群遺物

D029,2(⅓)

D037,1(⅓)

D030,4(⅓)

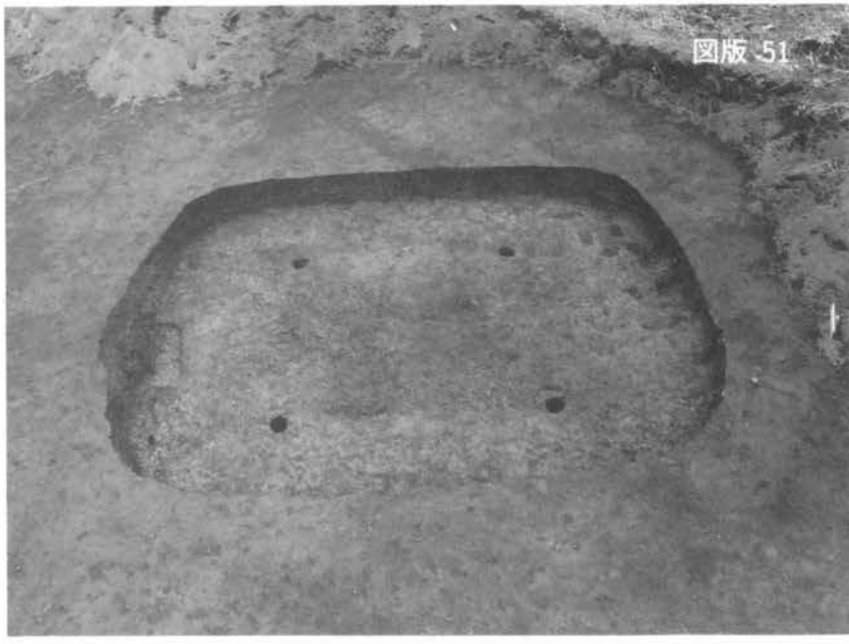
D030,8(⅓)

D030,10(½)

D030,1(¼)

D030,9(½)

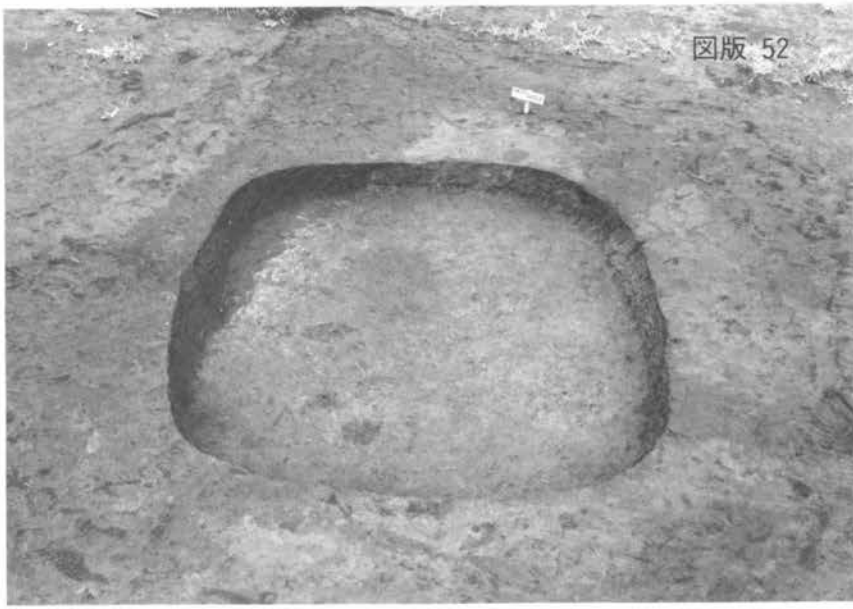
弥生時代第Ⅰ群遺物



1．D002号遺構全景

2．D002号遺構炭化物
出土状況

3．D002号遺構炭化柱
検出状況



1．D003号遺構全景

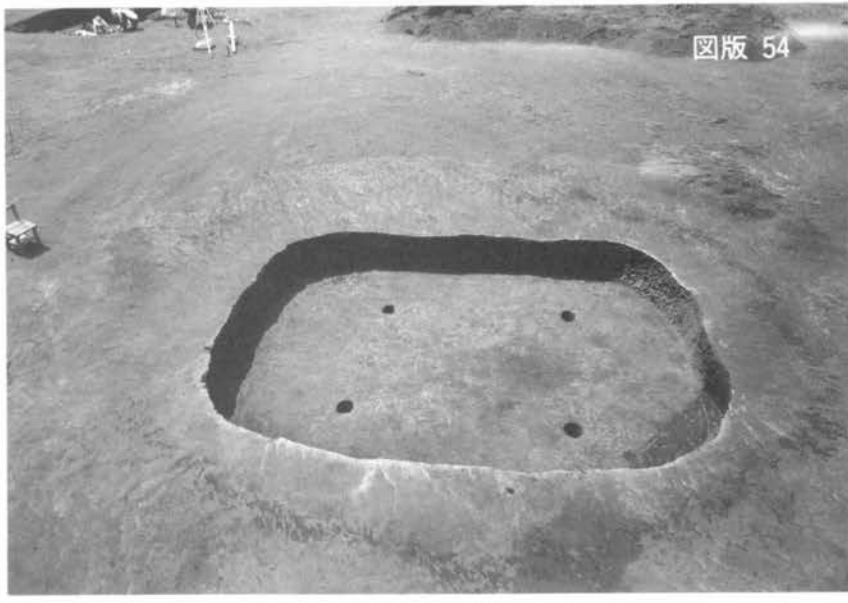
2．D004A号遺構全景

3．D004A号遺構遺物
出土状況

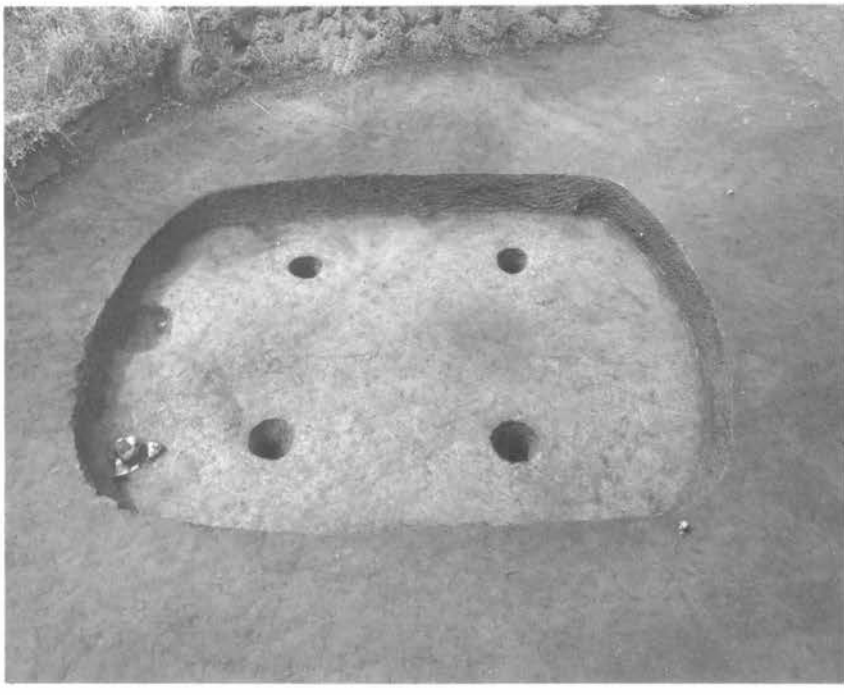
1．D004B号遺構全景

2．D004，054号遺構
分布状況

3．D006号遺構全景

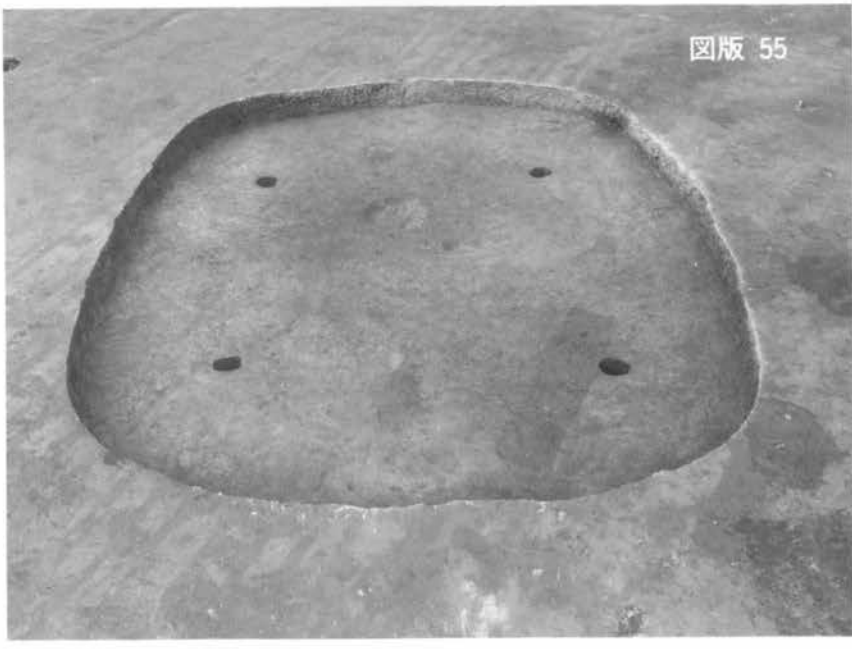


1．D009号遺構全景

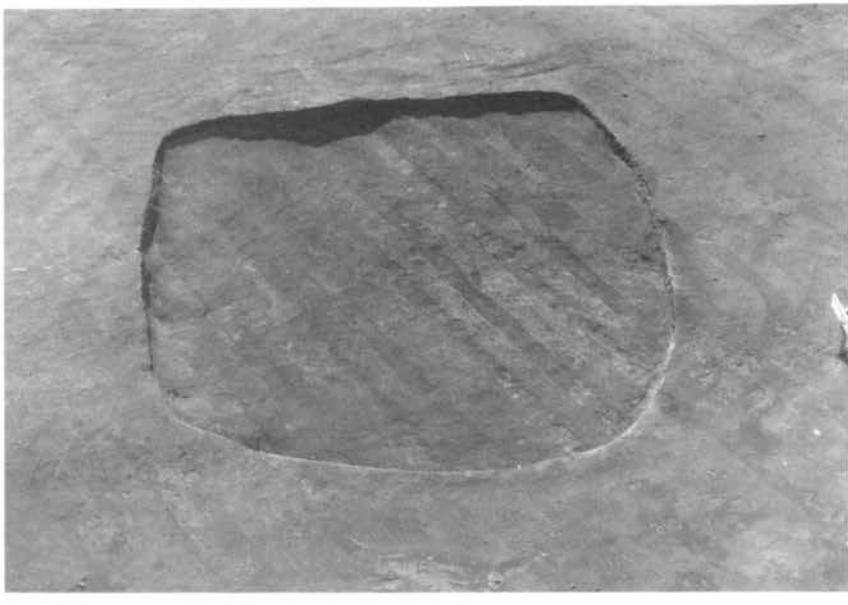


2．D054号遺構全景

3．D054号遺構遺物
出土状況

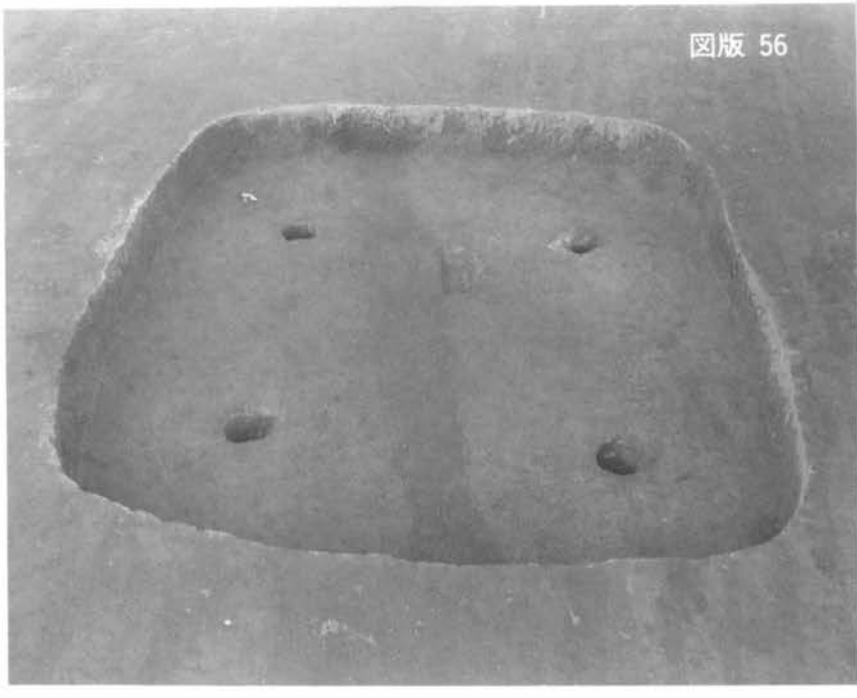


1．D070号遺構全景



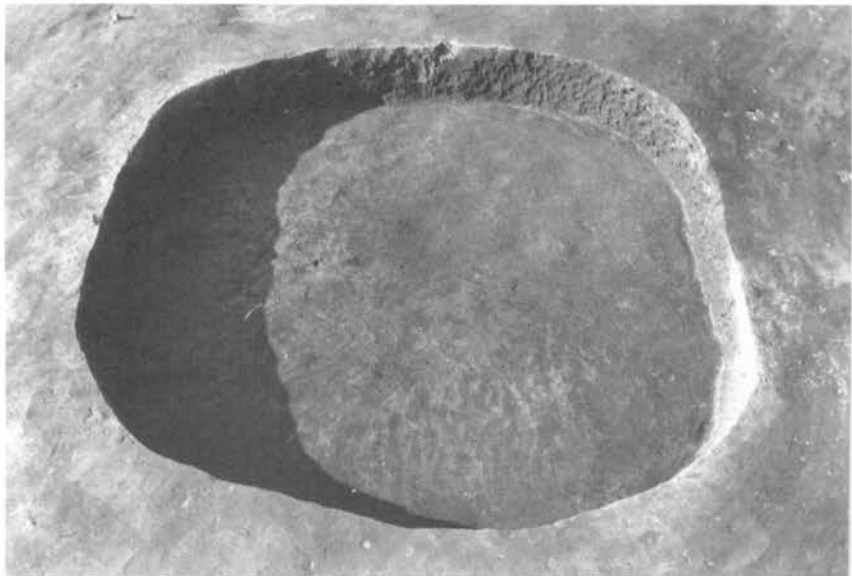
2．D073号遺構全景

3．D074号遺構全景



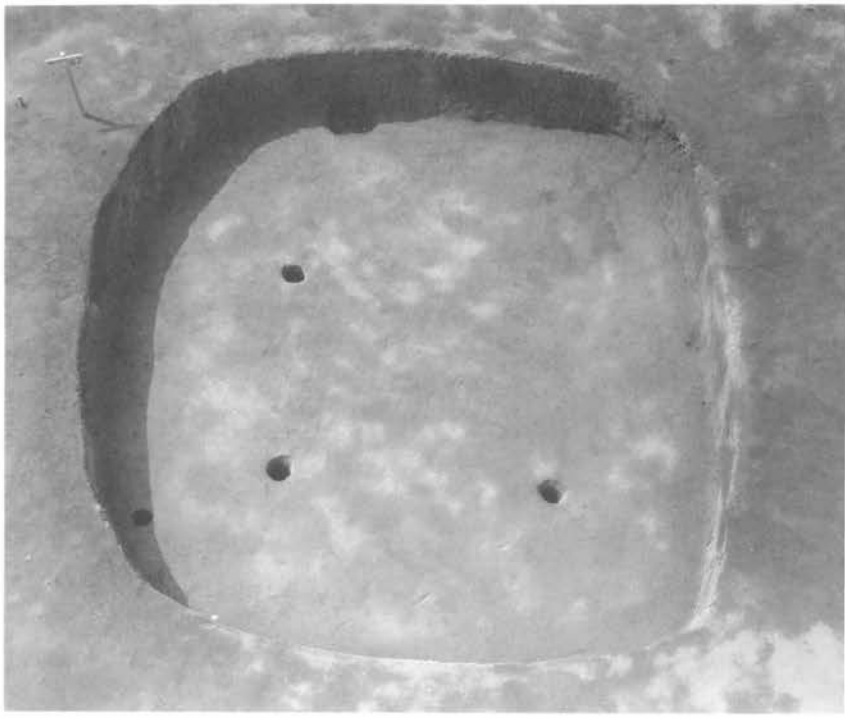
1．D075号遺構全景

2．D076号遺構全景



3．D079号遺構全景

1．D080号遺構全景



2．D162号遺構全景

D003,1(⅓)

D004,1(⅓)

D054,1(¼)

D075,5(½)

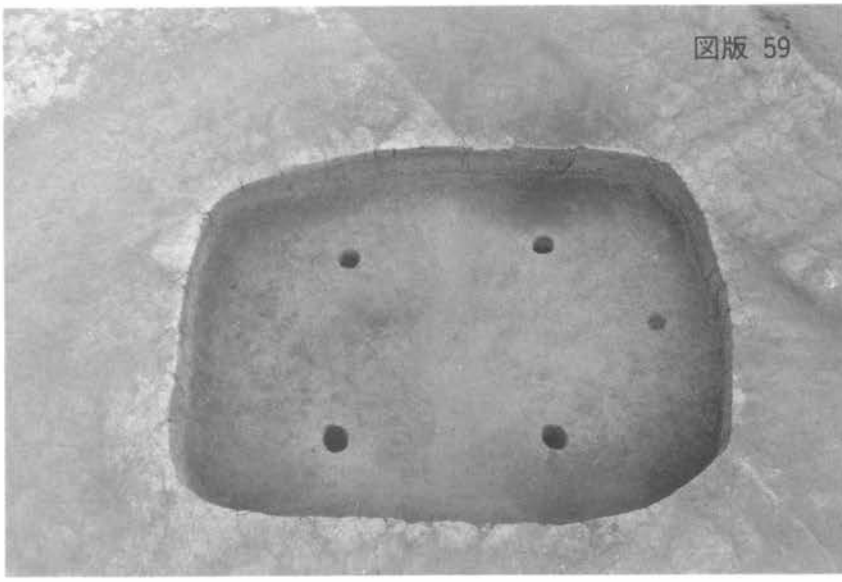
D162,3(⅓)

D080,1(⅓)

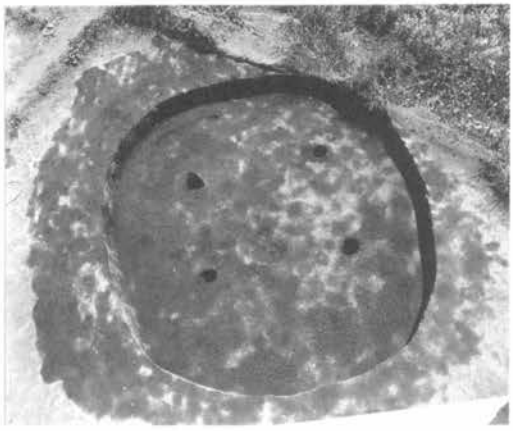
D162,1(⅓)

D080,2(⅓)

弥生時代第II群遺物

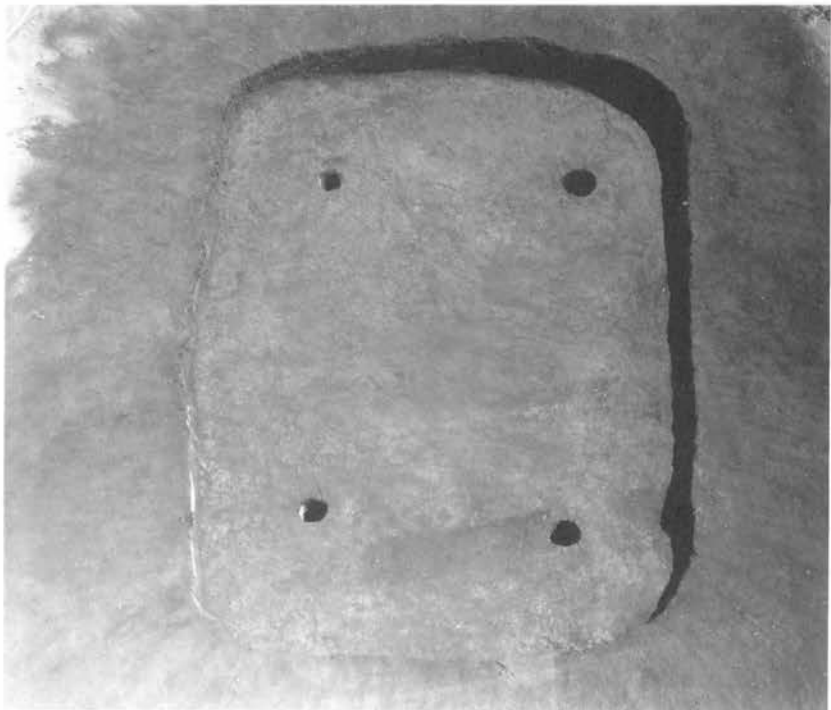


1．D130号遺構全景

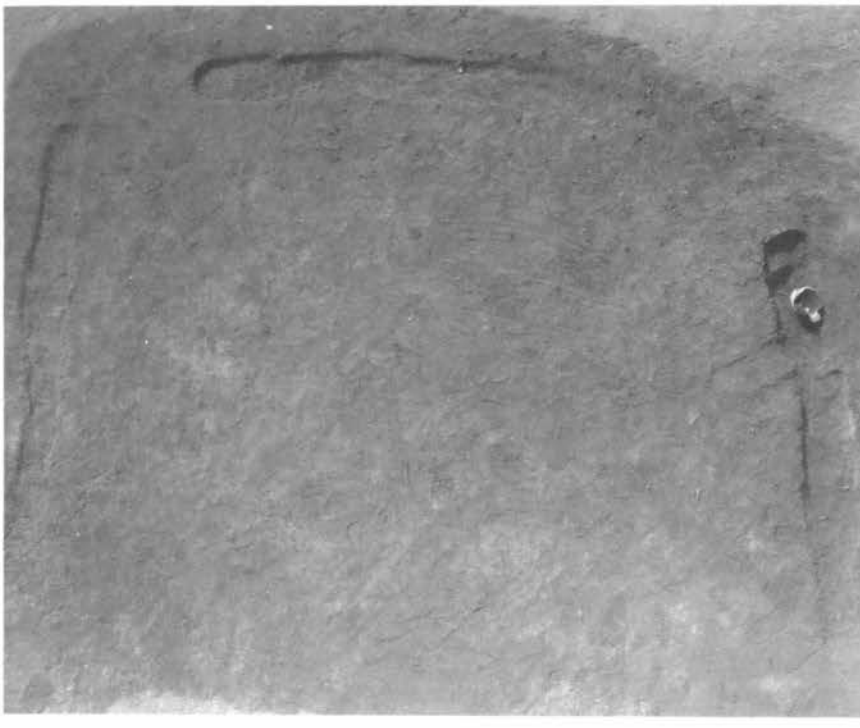


2．D137号遺構全景

3．D137号遺構炭化物
出土状況



4．D138号遺構全景

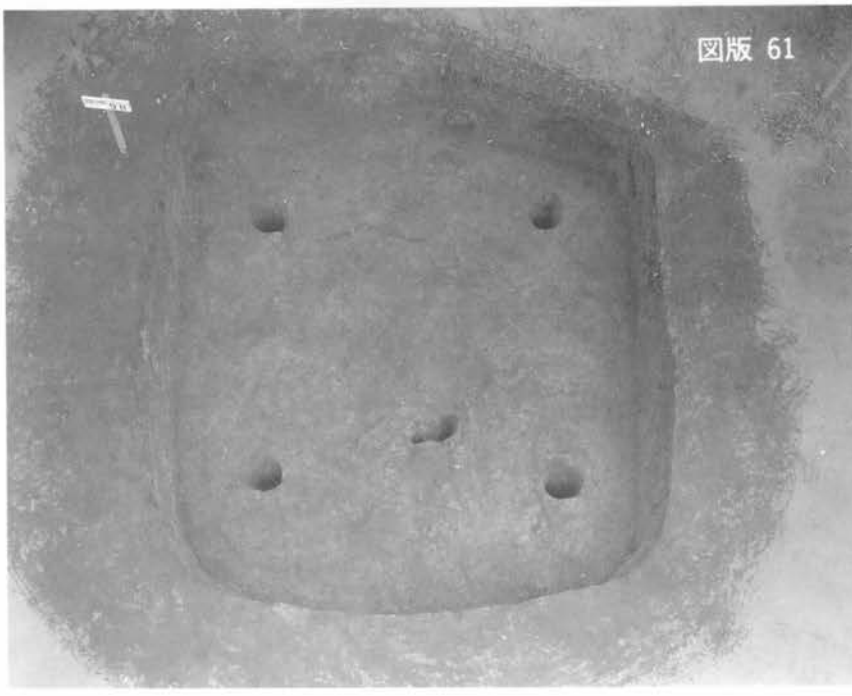


1．M014号遺構全景

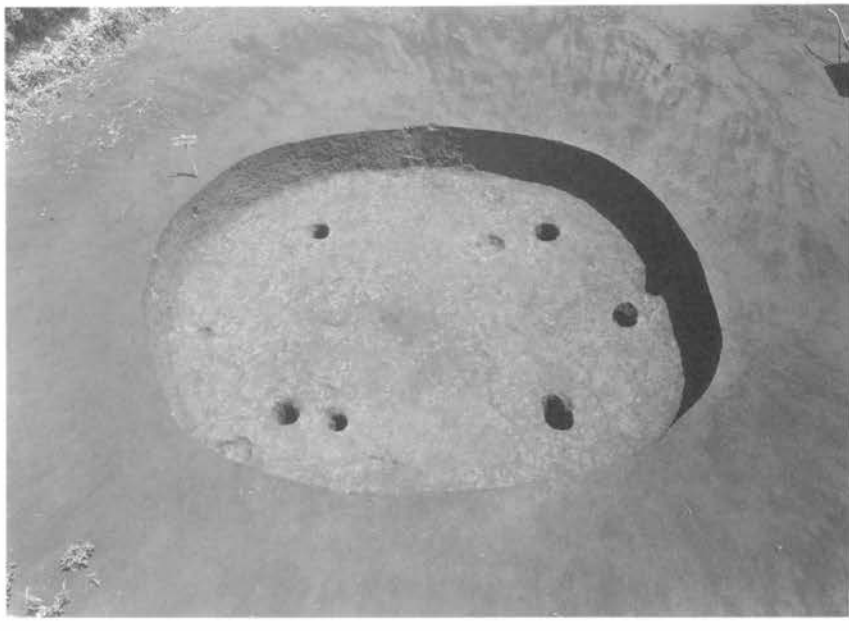
2．M014号遺構遺物出土状況

M014,1(⅓)

D130,1(⅓)

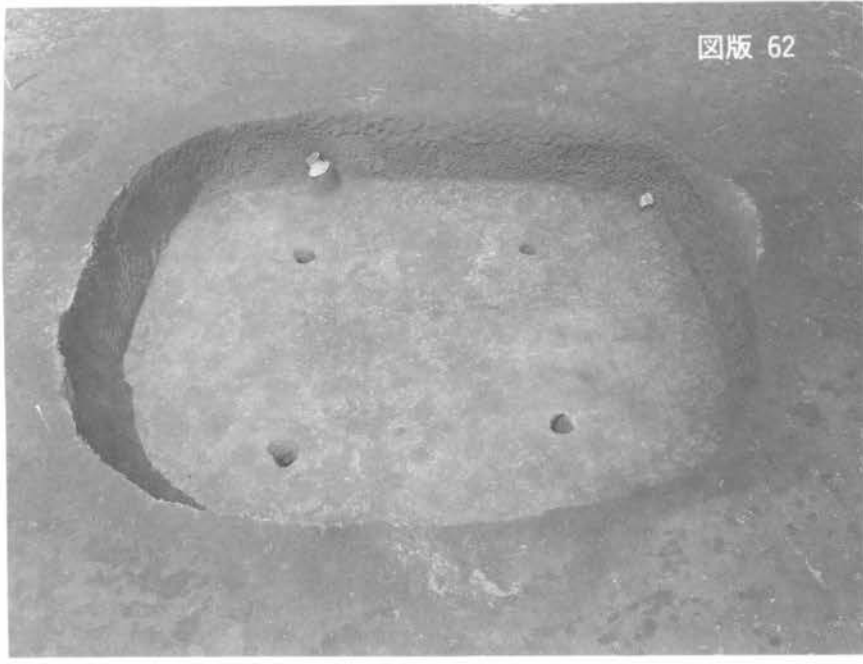


1．D098号遺構全景



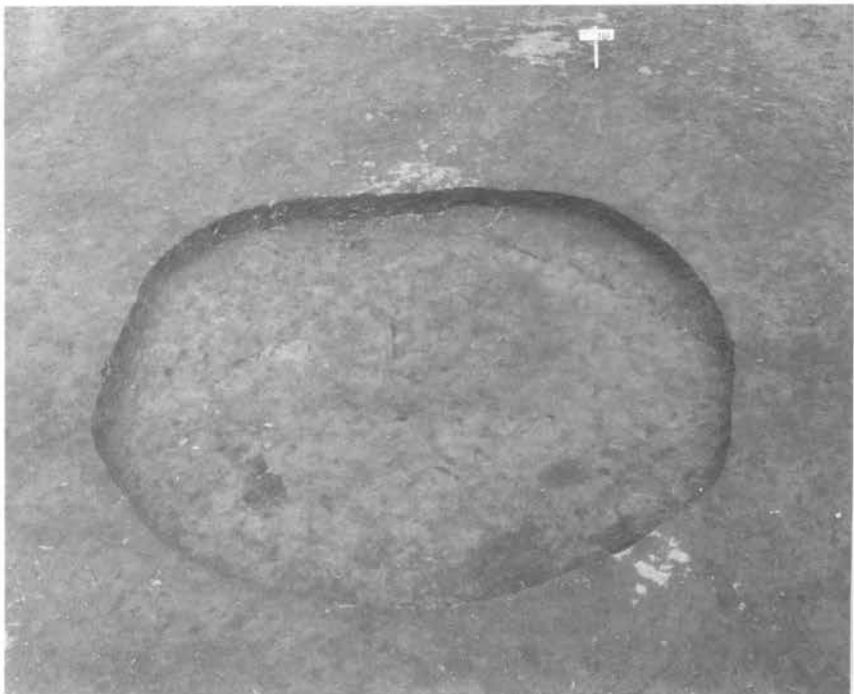
2．D101号遺構全景

3．D103号遺構全景

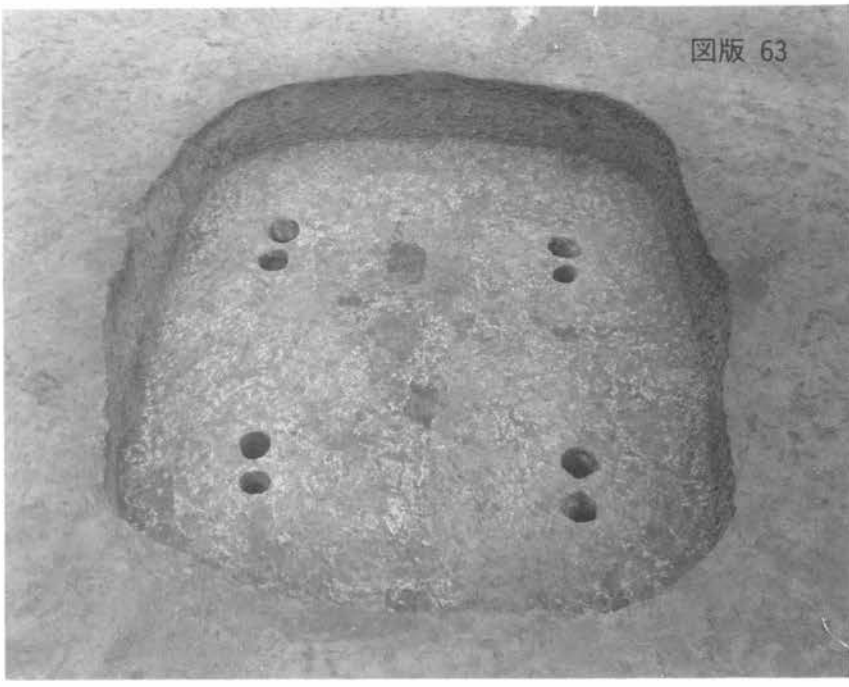


1．D109号遺構全景

2．D109号遺構遺物
出土状況

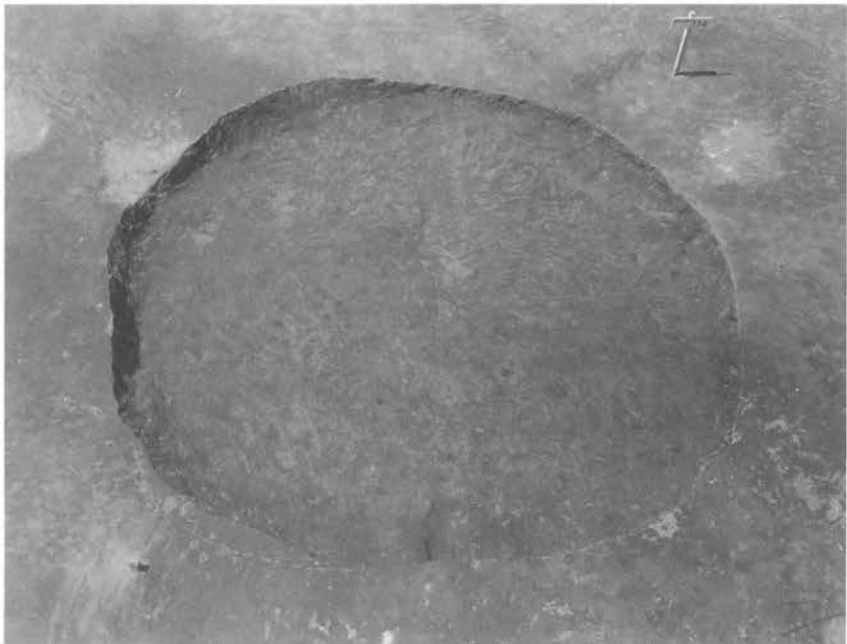


3．D110号遺構全景

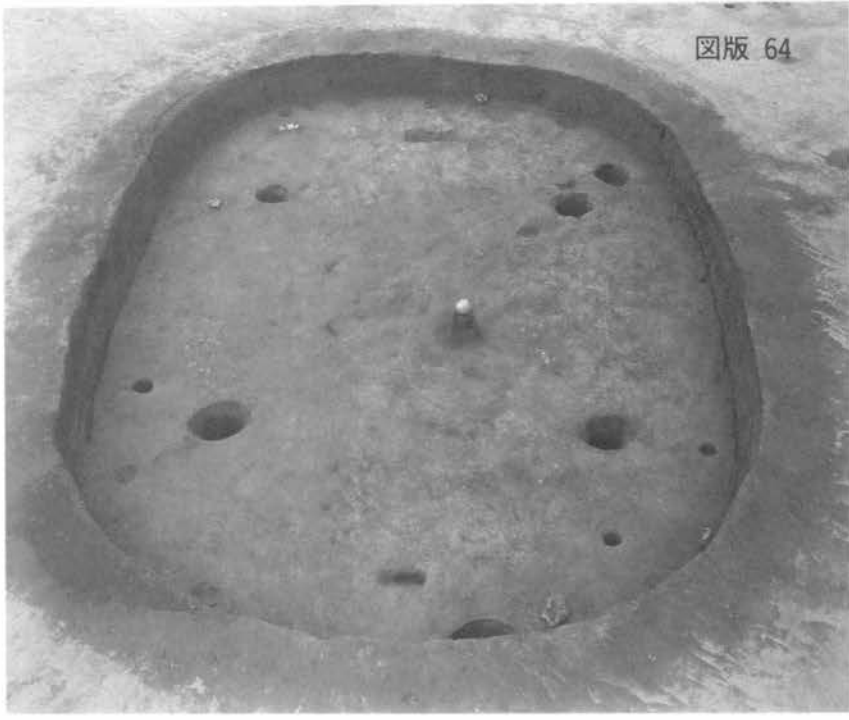


1．D111号遺構全景

2．D113号遺構全景

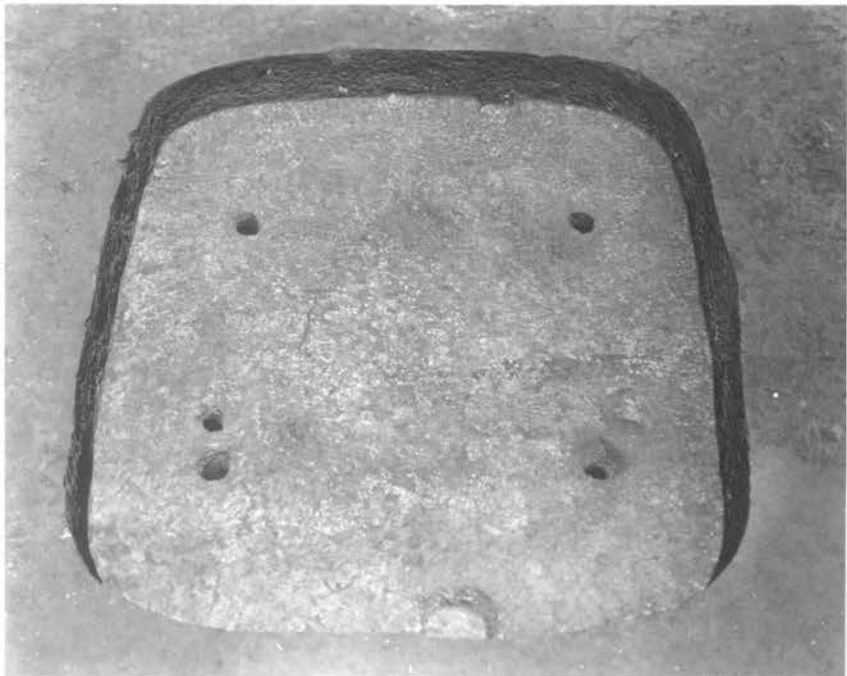


3．D114号遺構全景

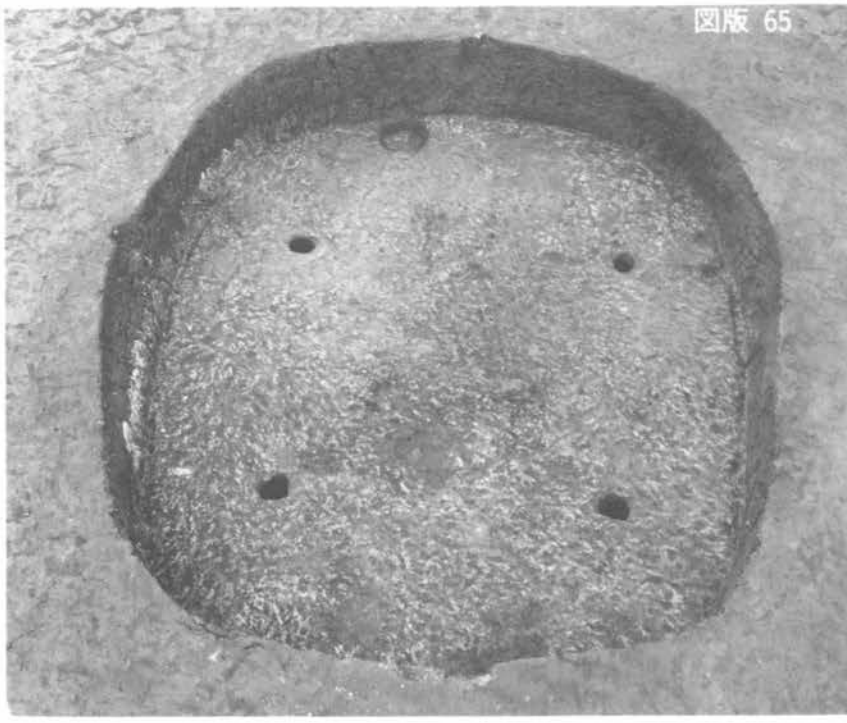


1．D115号遺構全景

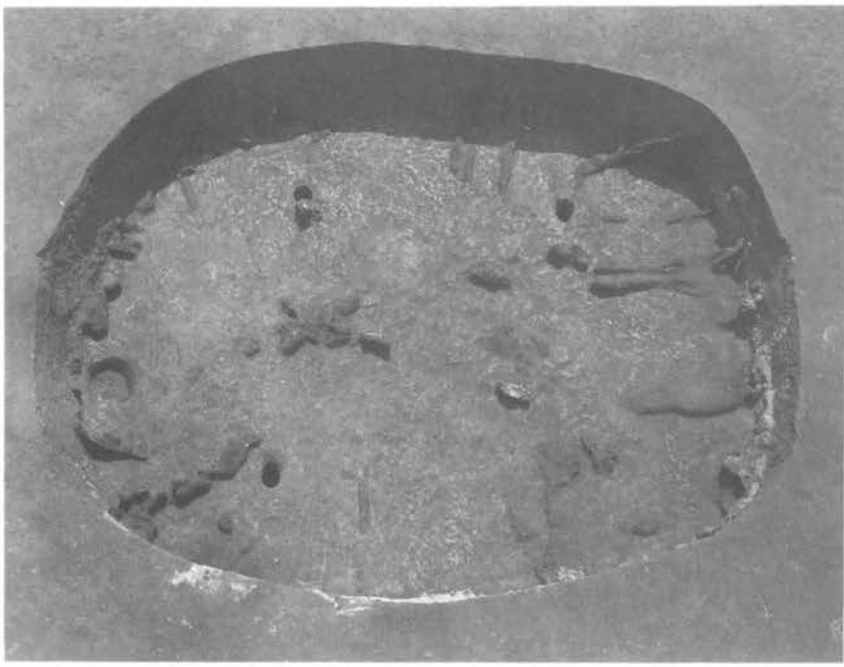
2．D115号遺構遺物
出土状況



3．D116号遺構全景

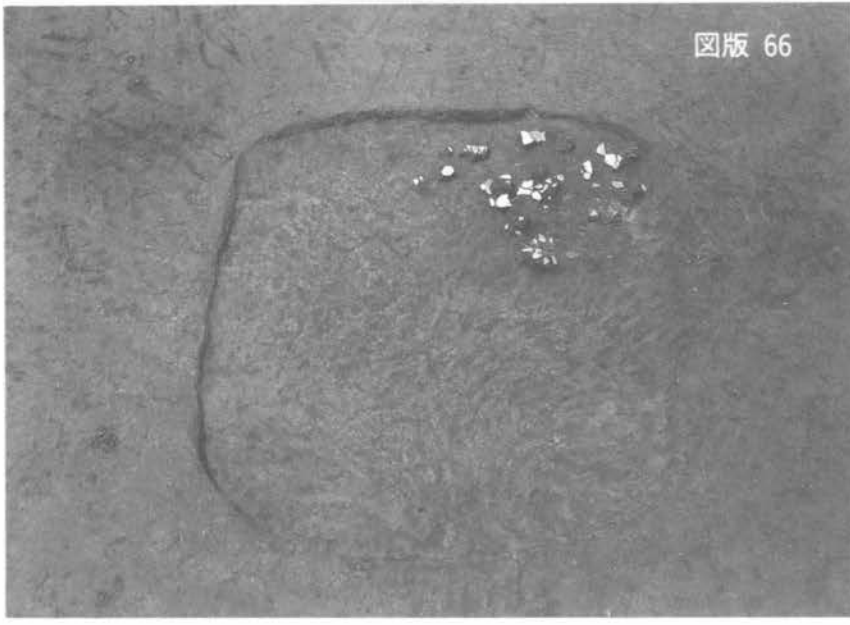


1．D117号遺構全景

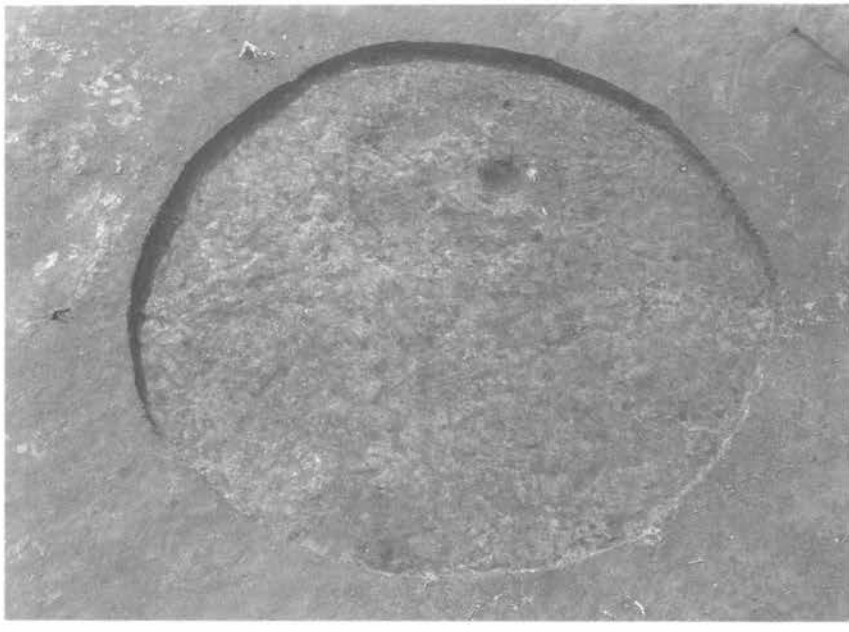


2．D117号遺構炭化物
出土状況

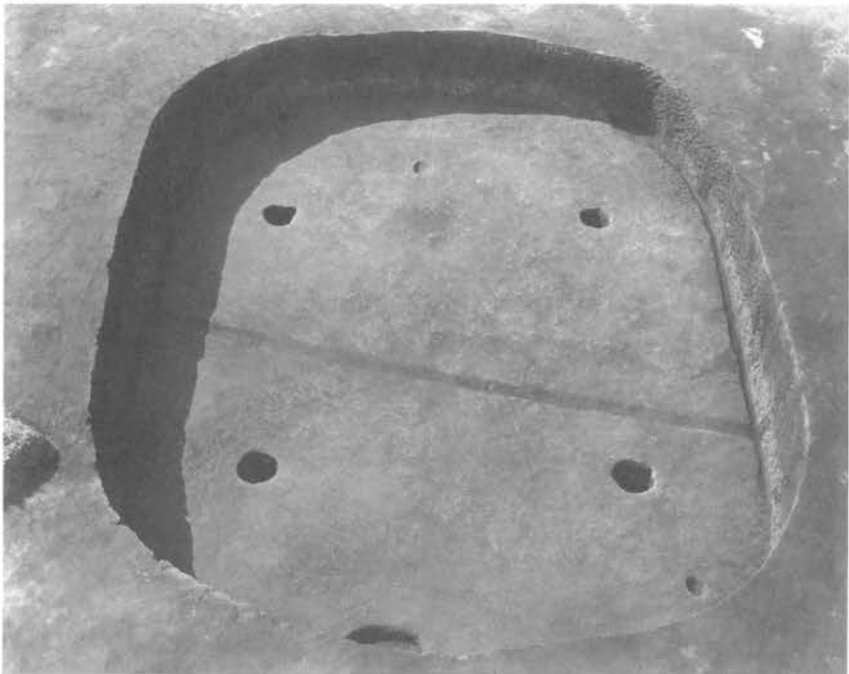
3．D117号遺構炭化物
出土状況



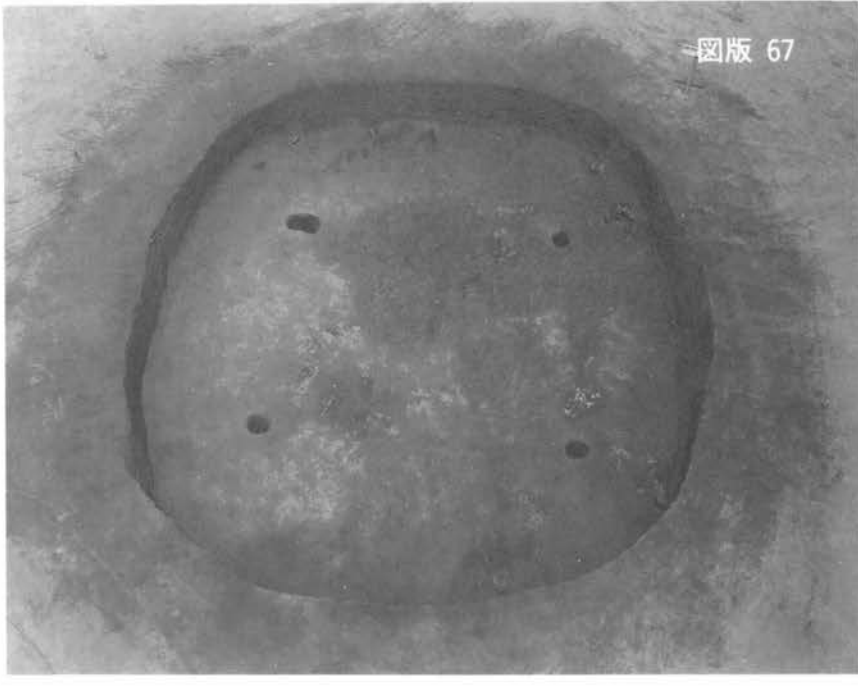
1．D118号遺構全景



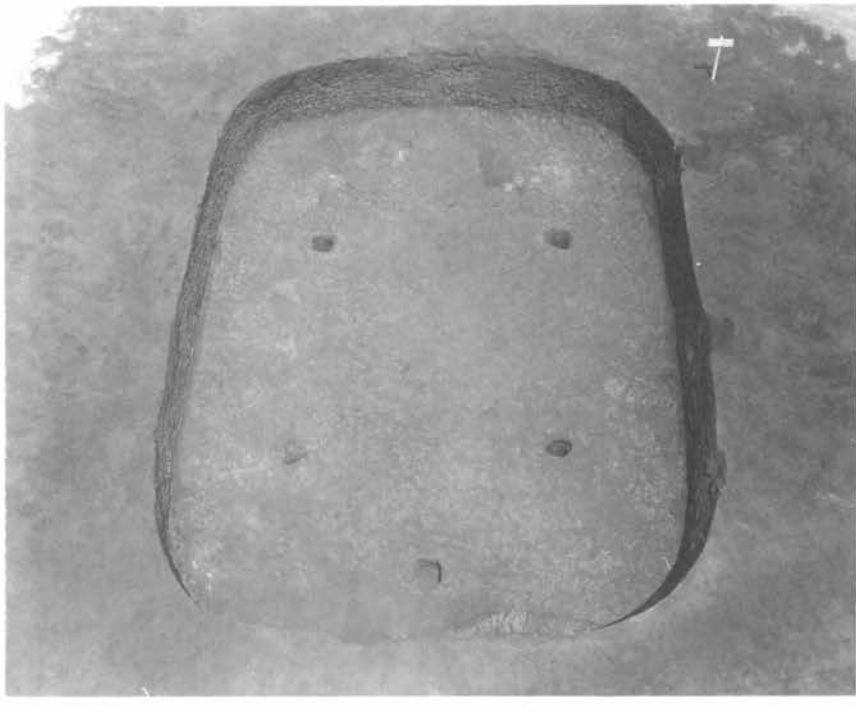
2．D119号遺構全景



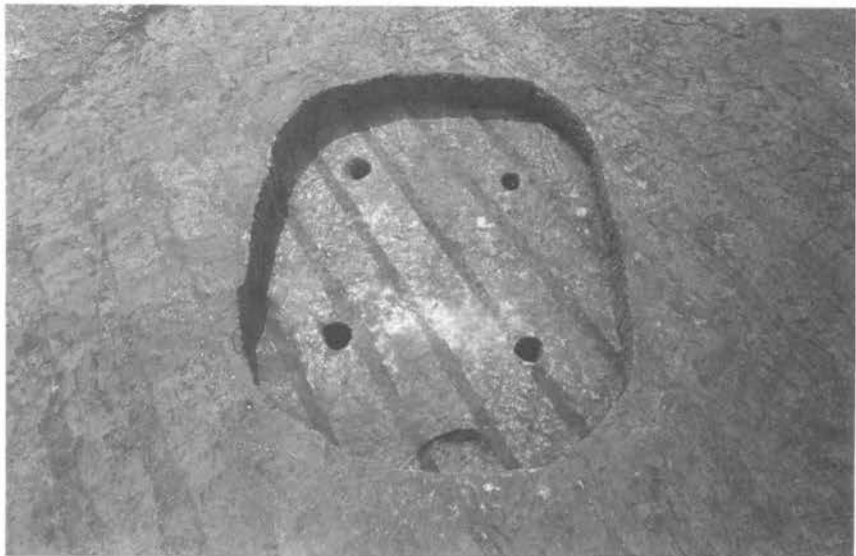
3．D120号遺構全景



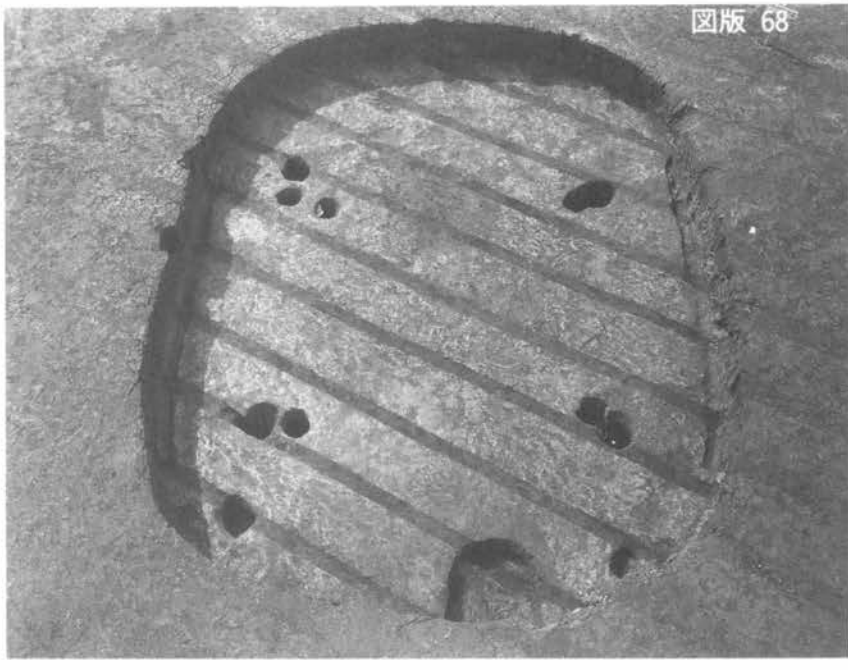
1．D121号遺構全景



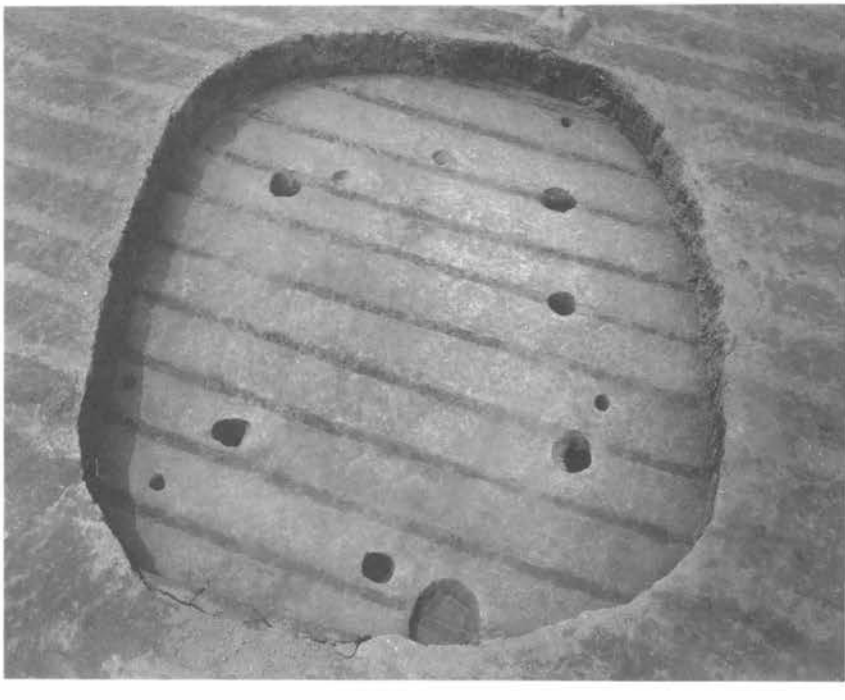
2．D122号遺構全景



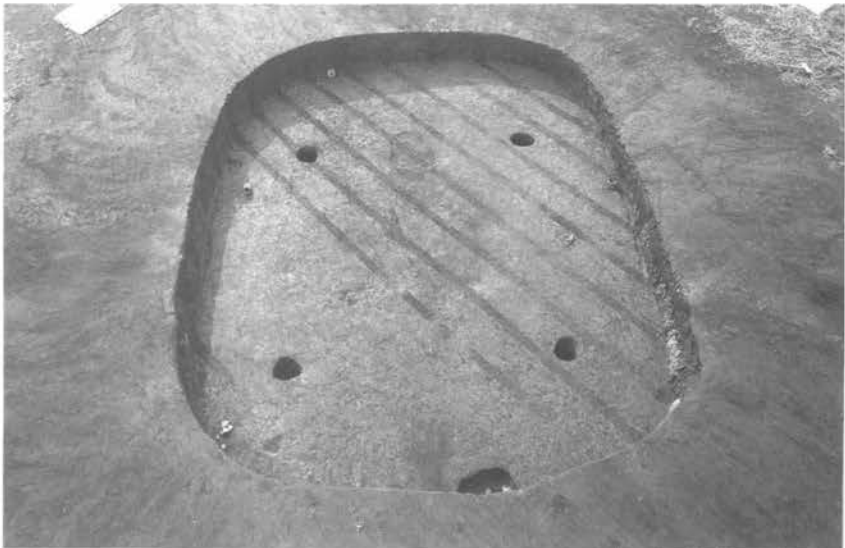
3．D123号遺構全景



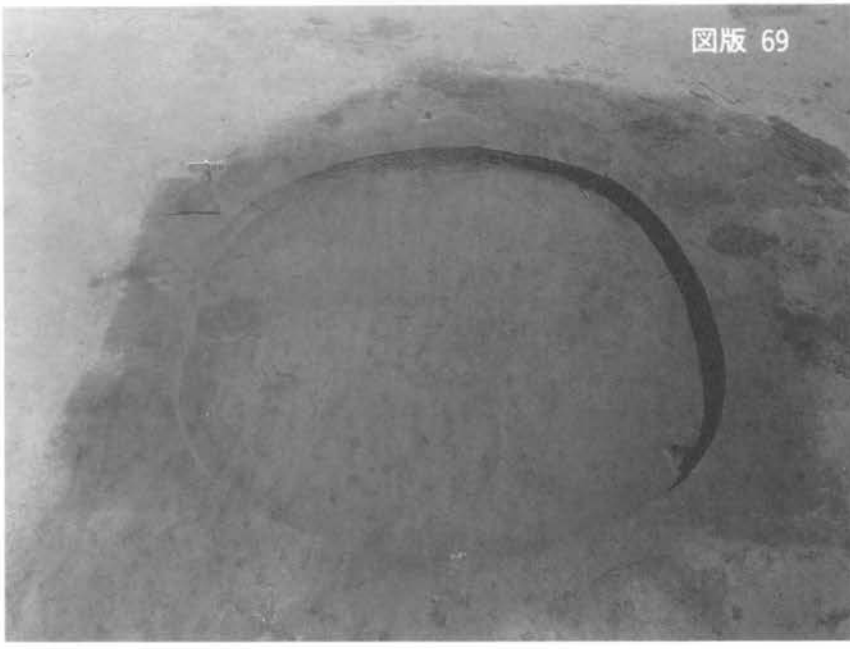
1．D124号遺構全景



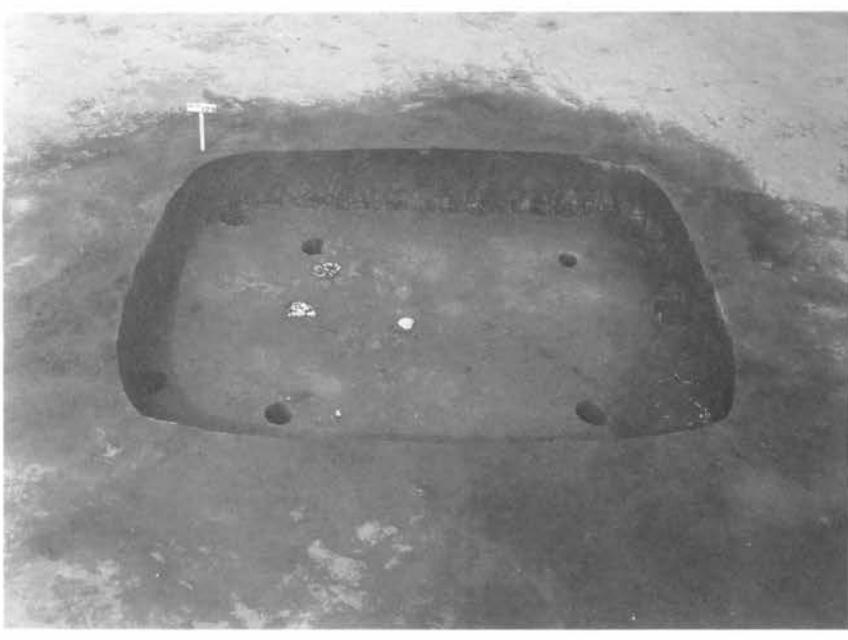
2．D125号遺構全景



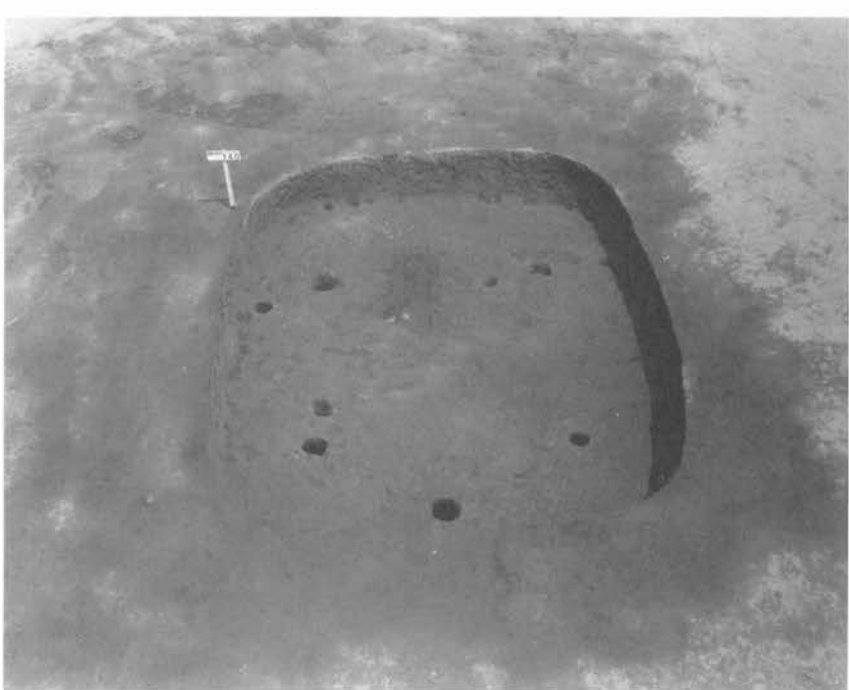
3．D126号遺構全景



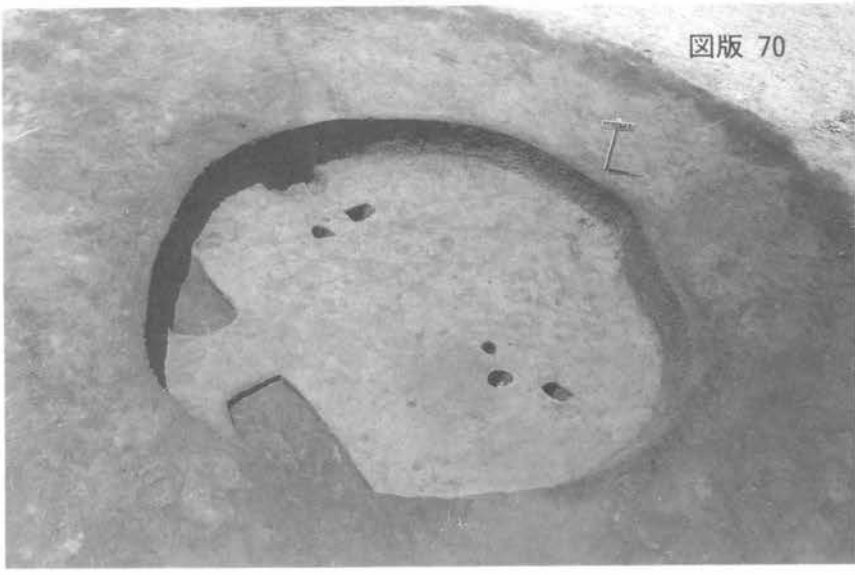
1．D128号遺構全景



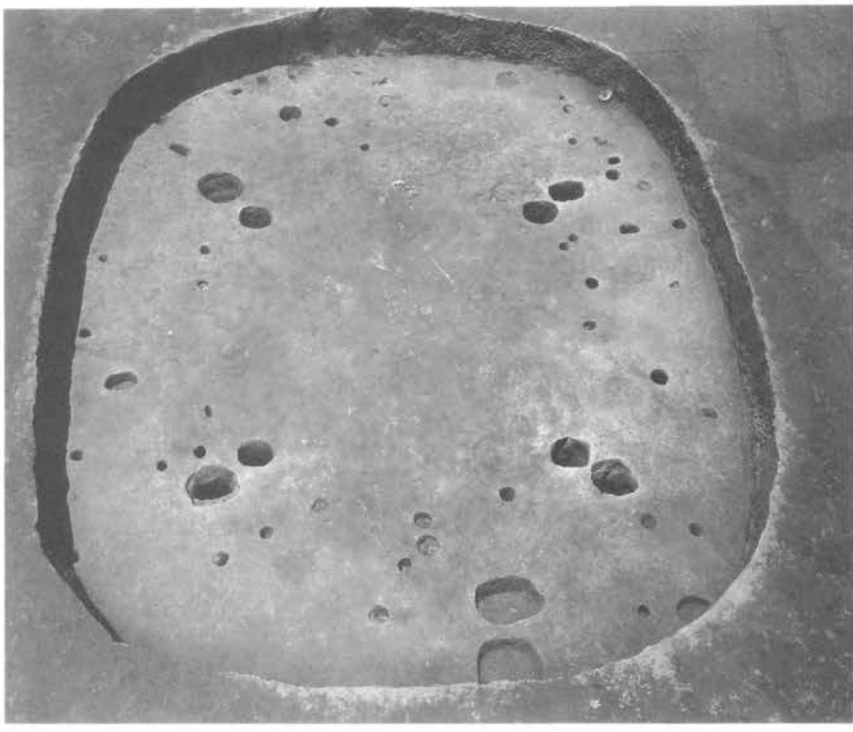
2．D129号遺構全景



3．D140号遺構全景

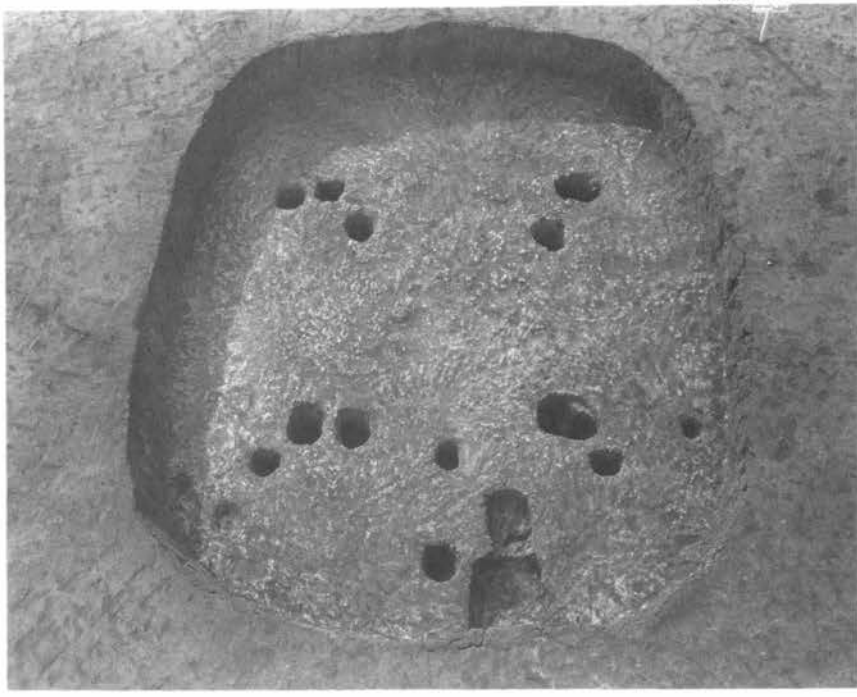


1．D141号遺構全景

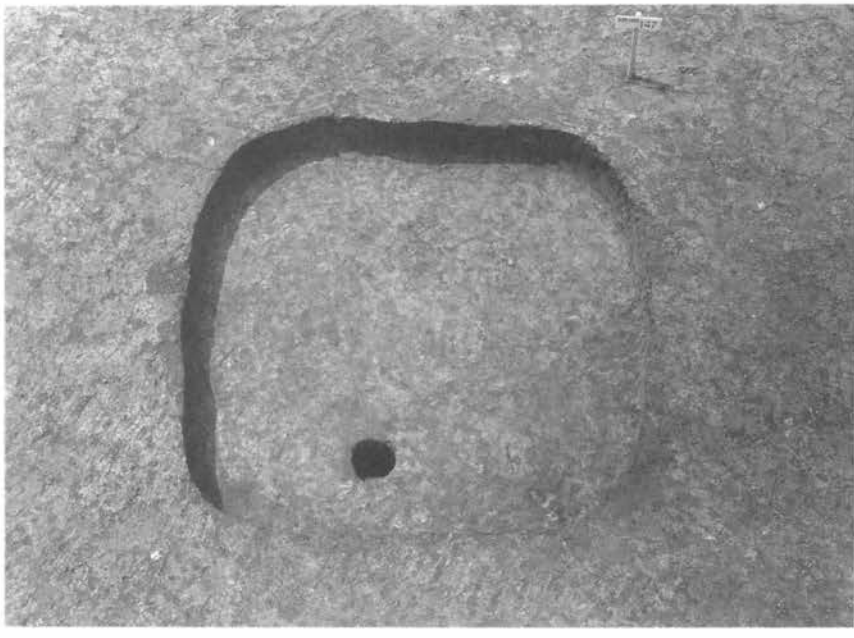


2．D145号遺構全景

3．D145号遺構遺物
出土状況

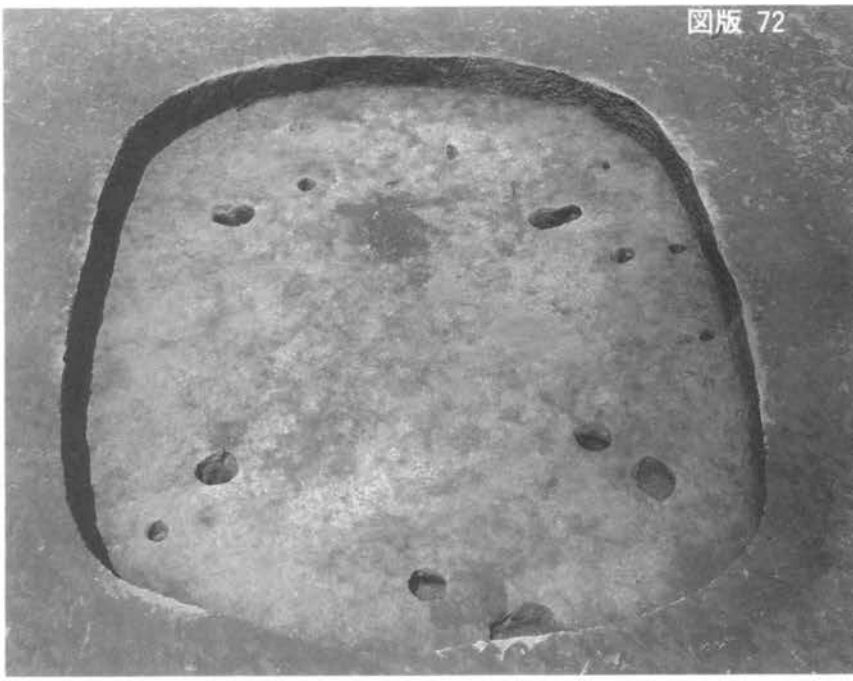


1．D146号遺構全景

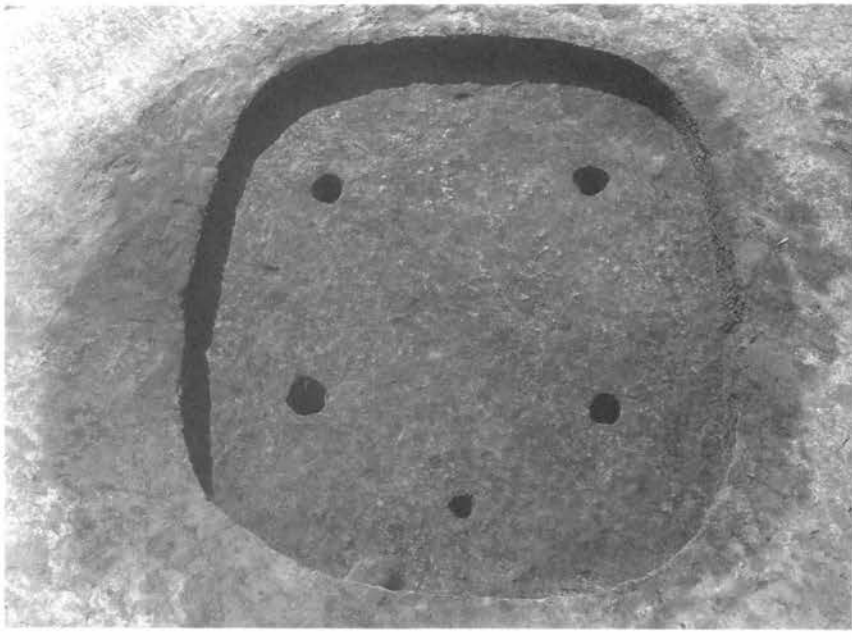


2．D147号遺構全景

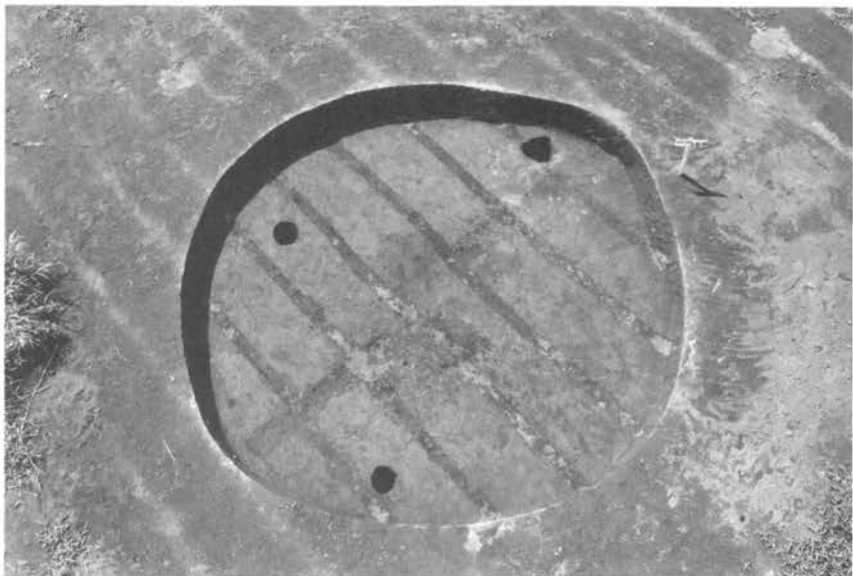
3．D151号遺構全景



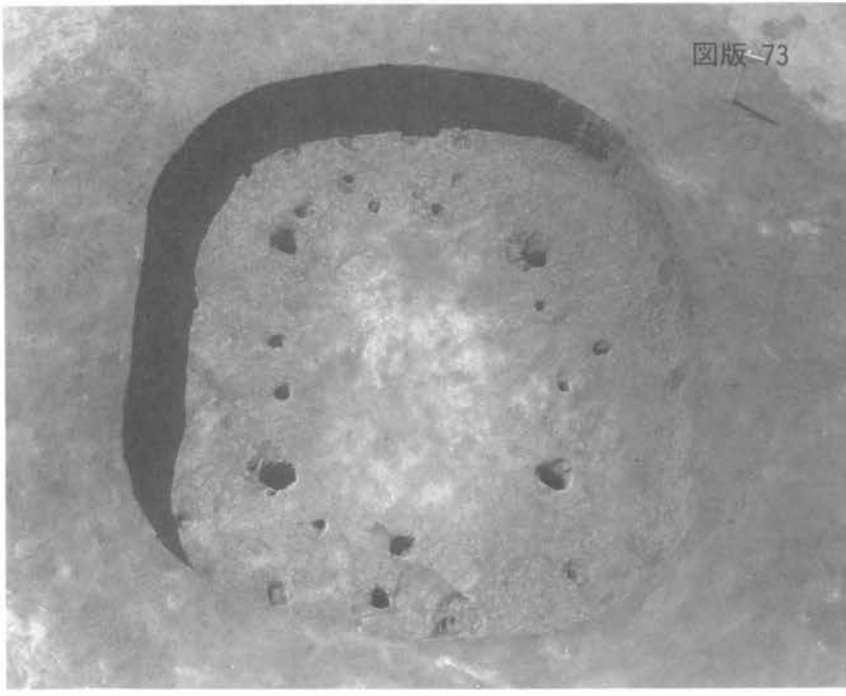
1．D154号遺構全景



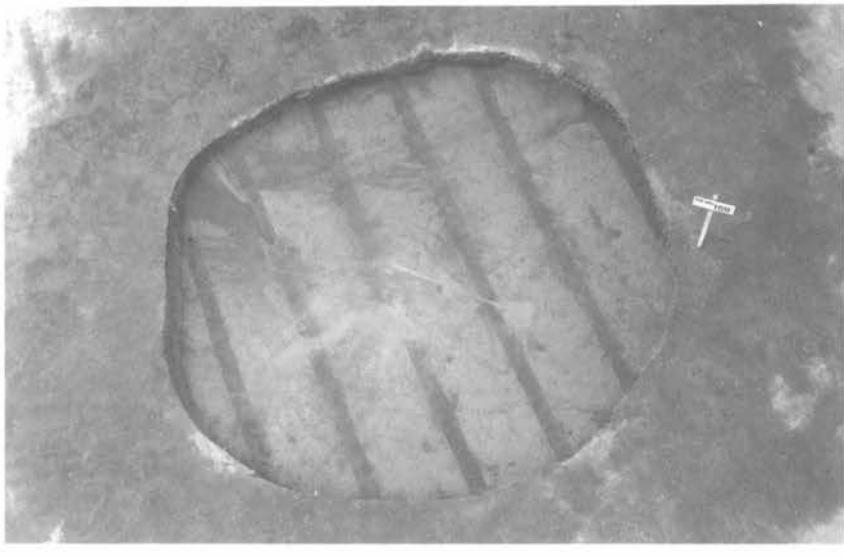
2．D155号遺構全景



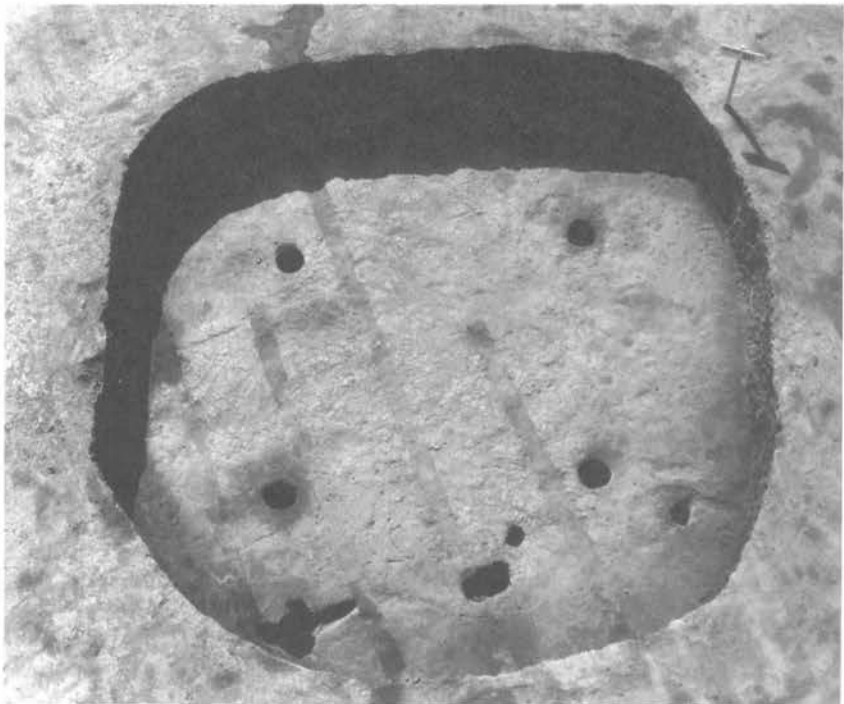
3．D156号遺構全景



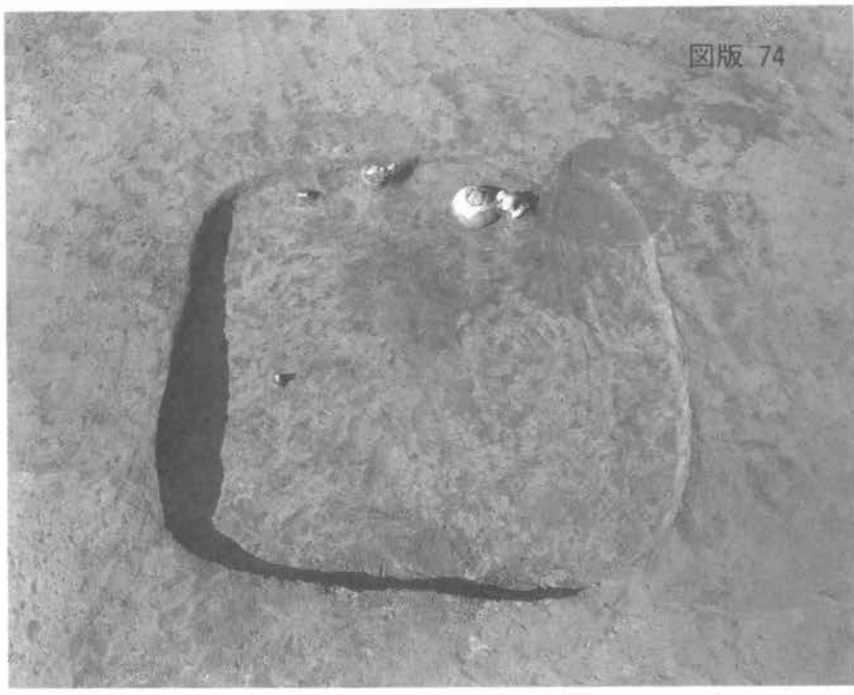
1．D157号遺構全景



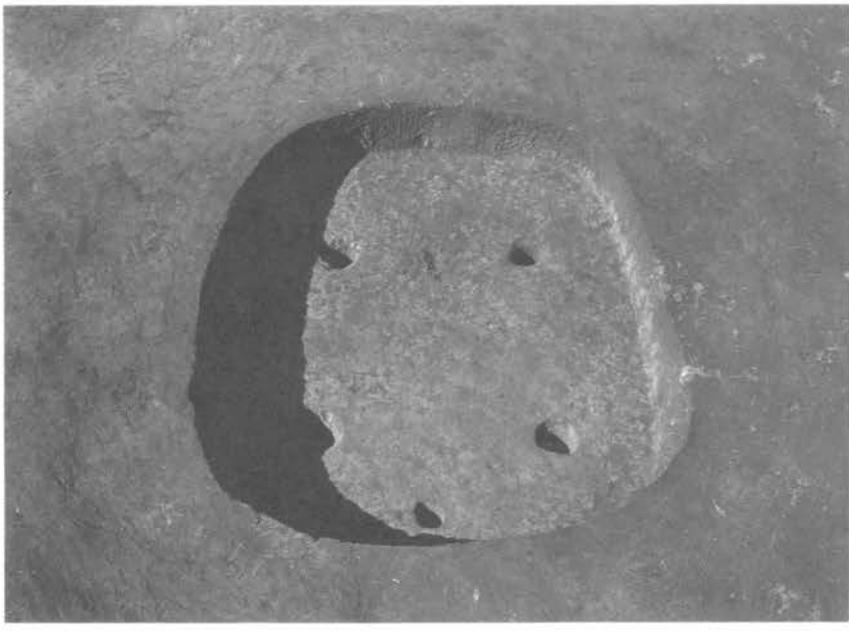
2．D159号遺構全景



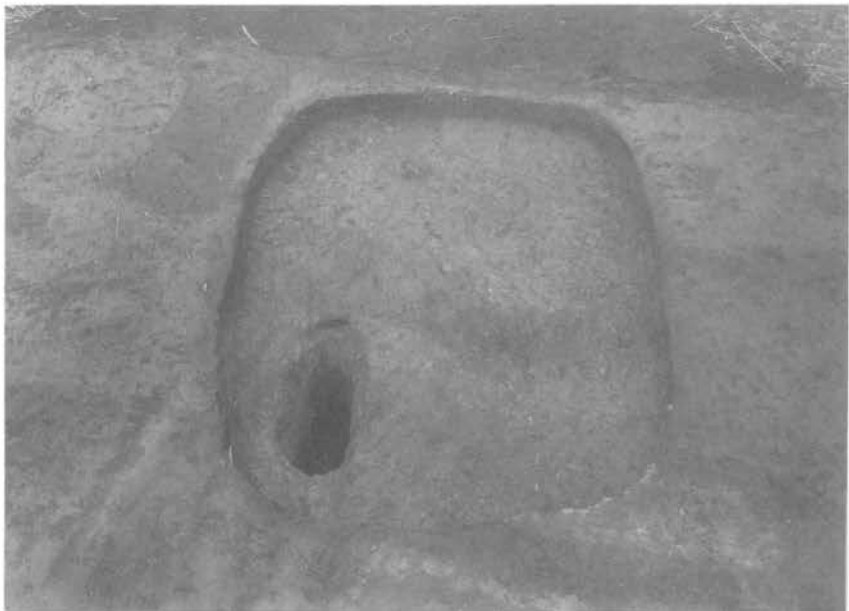
3．D161号遺構全景



1．D168号遺構全景



2．D179号遺構全景



3．D181号遺構全景

D098,2(⅓)

D101,3(⅓)

D101,2(⅓)

D101,1(⅓)

D109,6(⅓)

D110,2(⅓)

D103,1(⅓)

D115,2(⅓)

D115,1(¼)

弥生時代第Ⅳ群A遺物

D115,3(⅓)

D117,2(⅓)

D115,4(⅓)

D115,9(⅓)

D120,1(⅓)

D115,7(⅓)

D121,1(⅓)

D115,12(½)

D145,4(⅓)

弥生時代第Ⅳ群A遺物

D124,1(⅓)

D151,1(⅓)

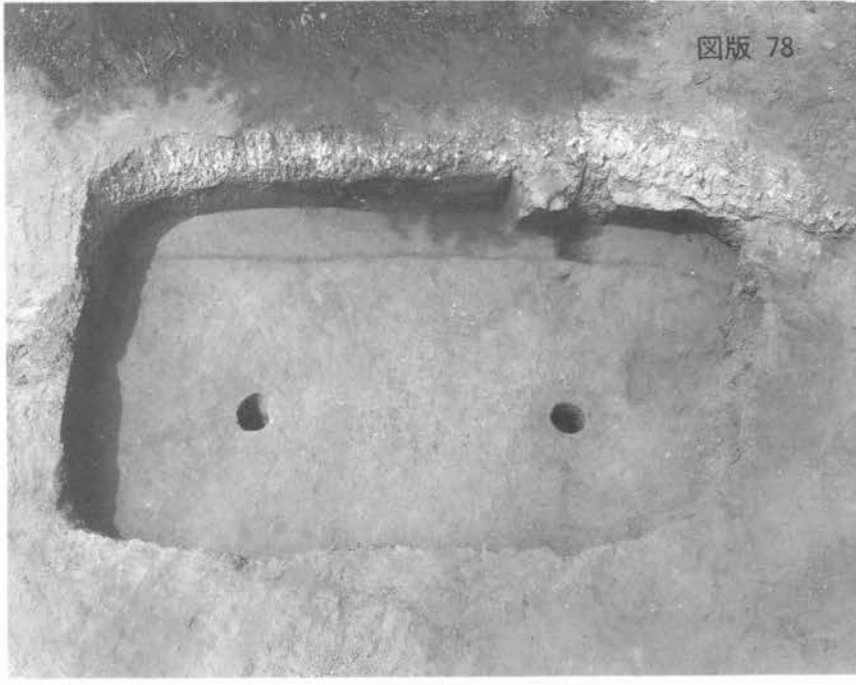
D126,1(⅓)

D155,2(⅓)

D126,2(⅓)

D168,1(½)

D140,1(⅓)



1．D095号遺構全景

2．D096号遺構全景

3．D096号遺構遺物
出土状況

1．D096号遺構遺物
出土状況

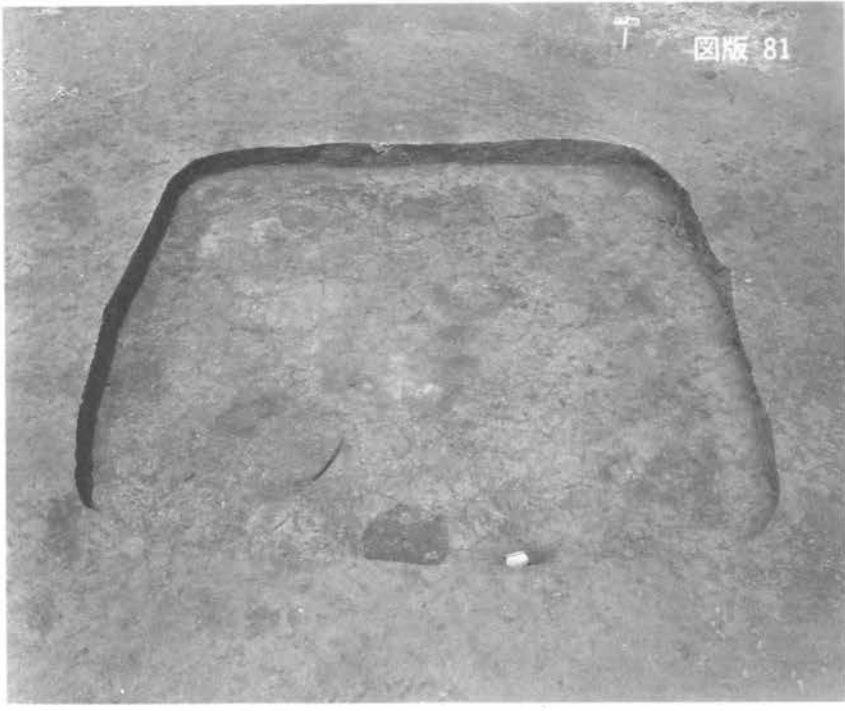
2．D096号遺構遺物
出土状況

3．D097号遺構全景

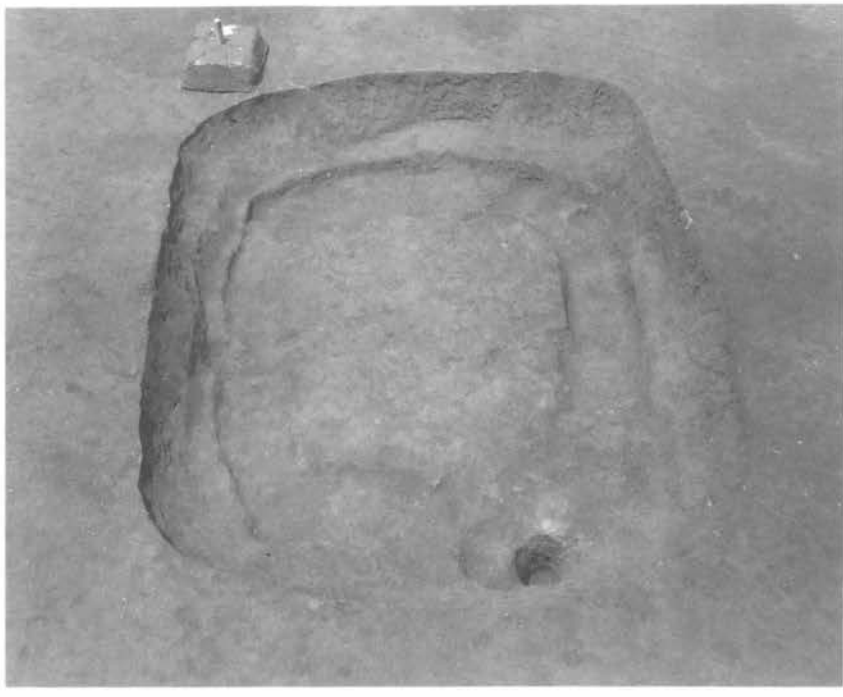
1．D100号遺構全景

2．D102号遺構全景

3．D104号遺構全景



1．D105号遺構全景

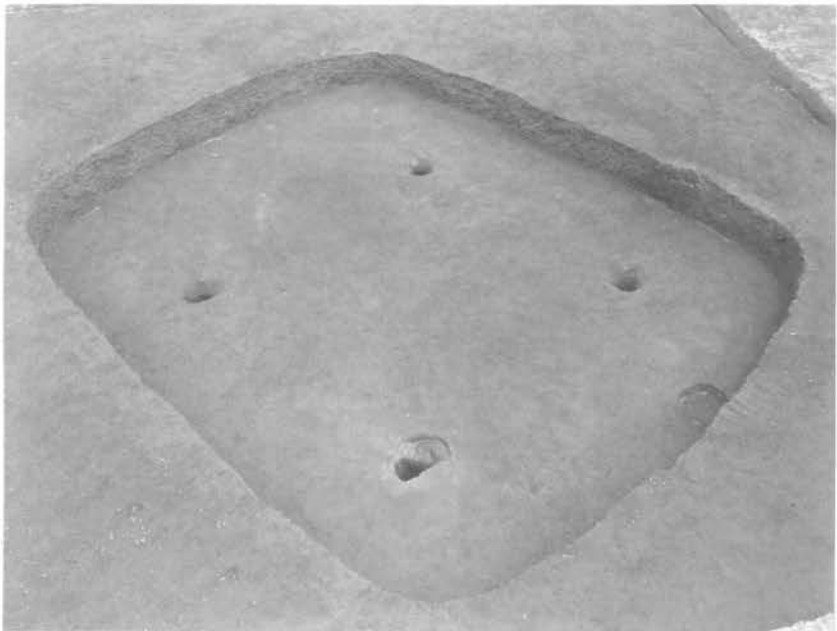


2．D107号遺構全景

3．D107号遺構遺物
出土状況

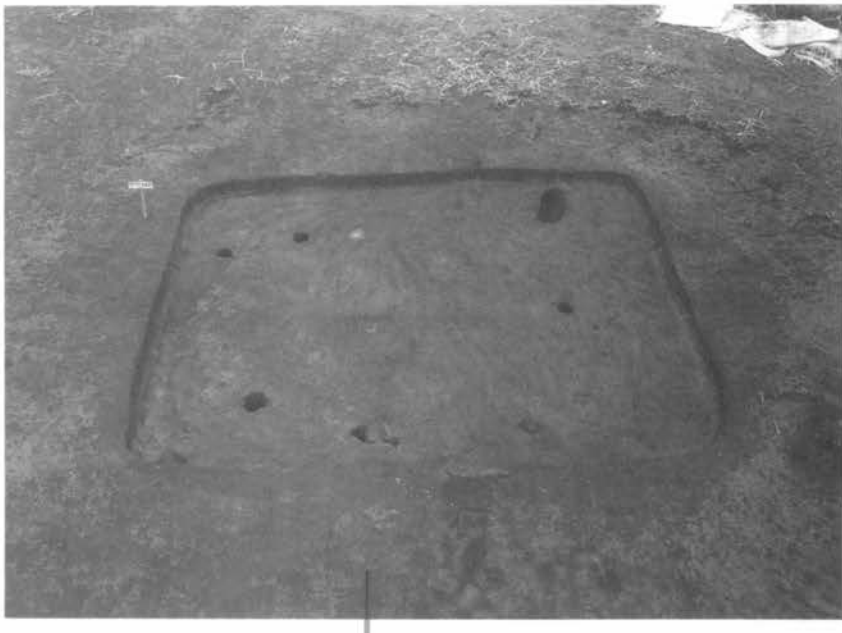
1．D108号遺構全景

2．D108号遺構遺物
出土状況

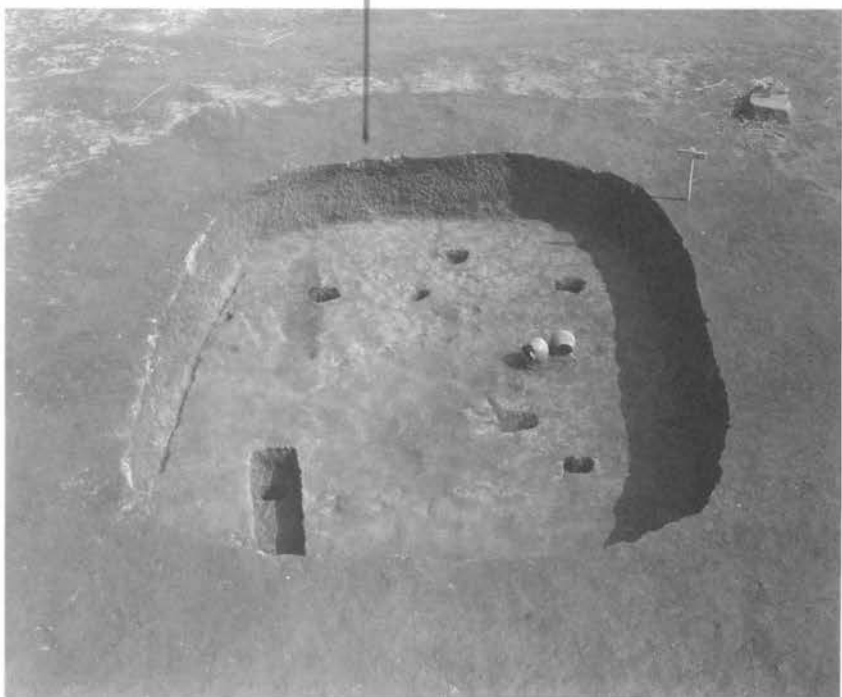


3．D134号遺構全景

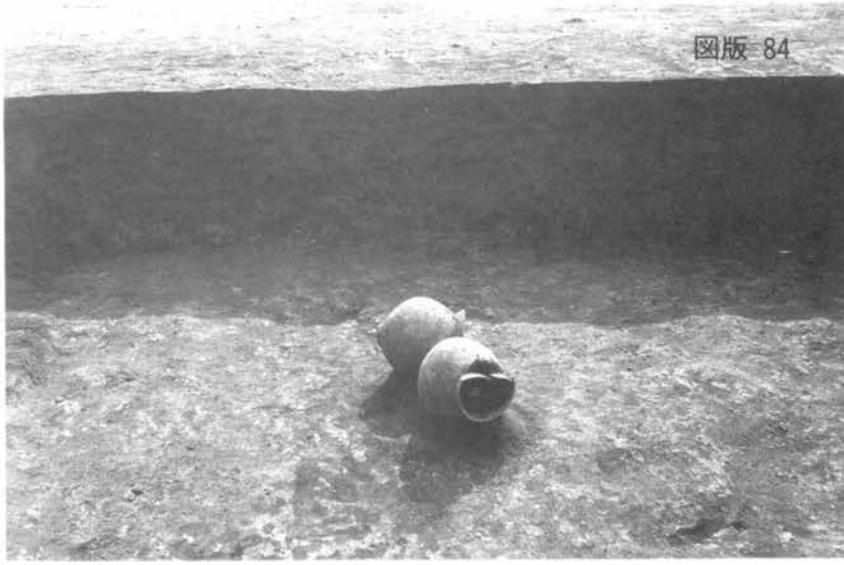
1．D134号遺構遺物
出土状況



2．D142号遺構全景

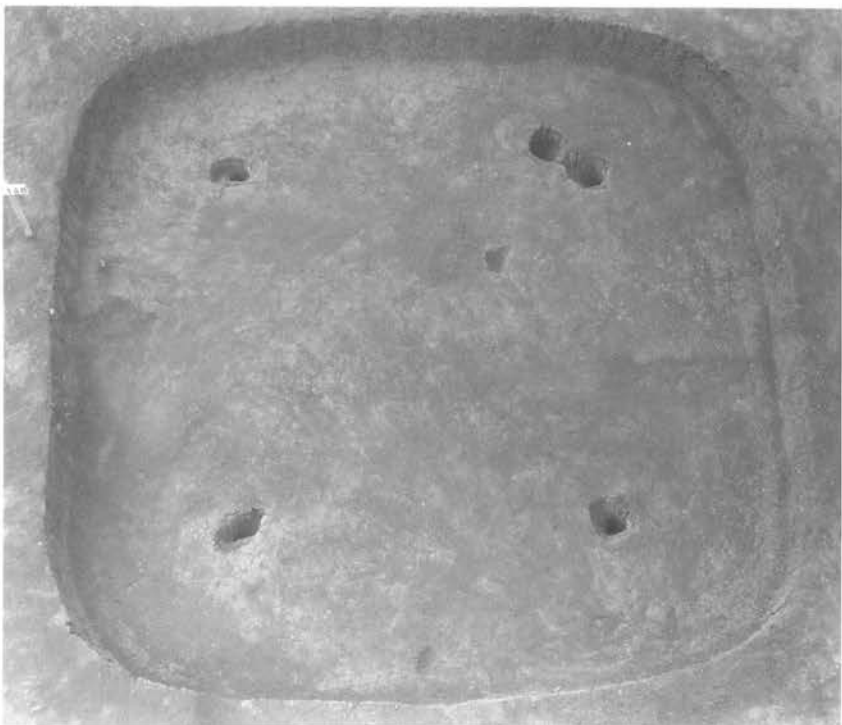


3．D143号遺構全景

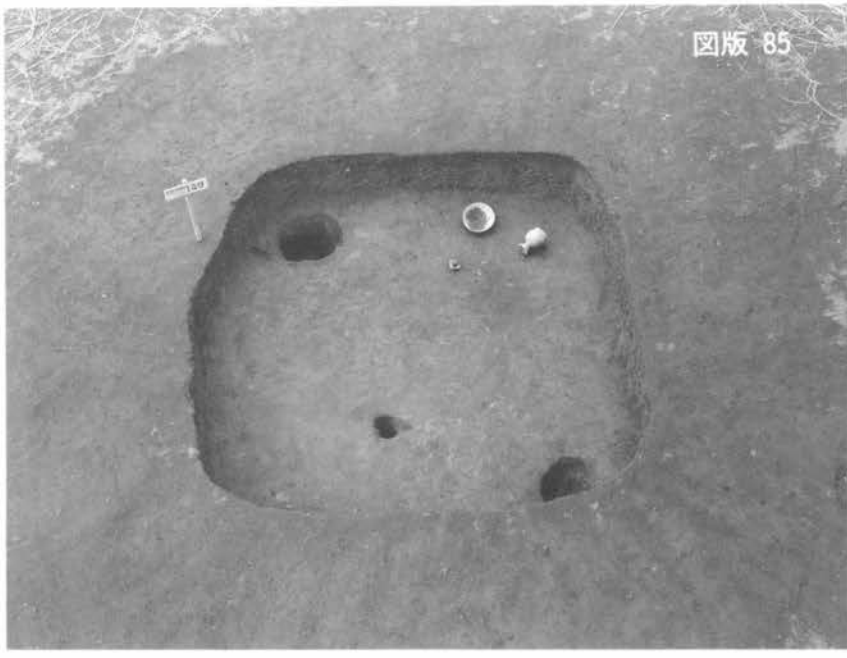


1．D143号遺構遺物
出土状況

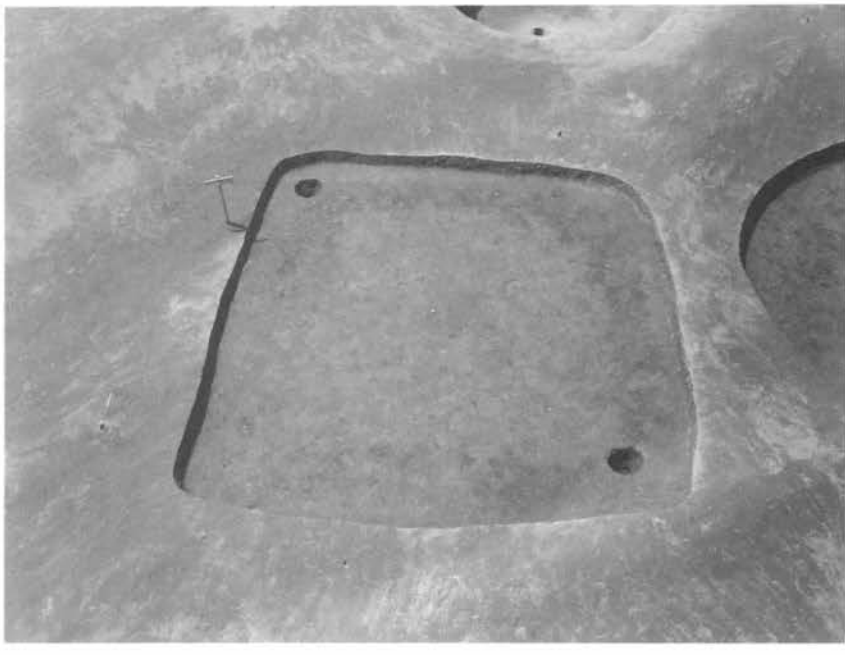
2．D144号遺構全景



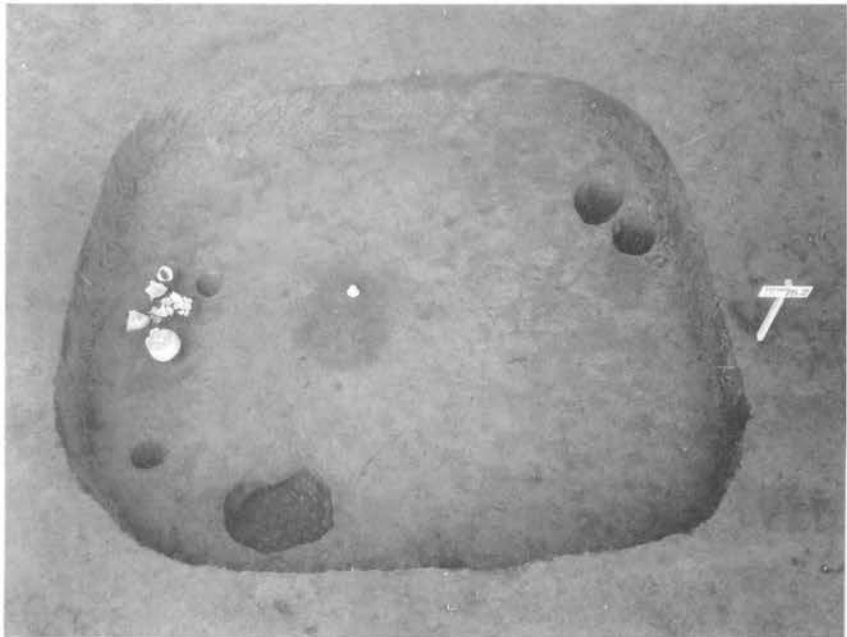
3．D148号遺構全景



1．D149号遺構全景

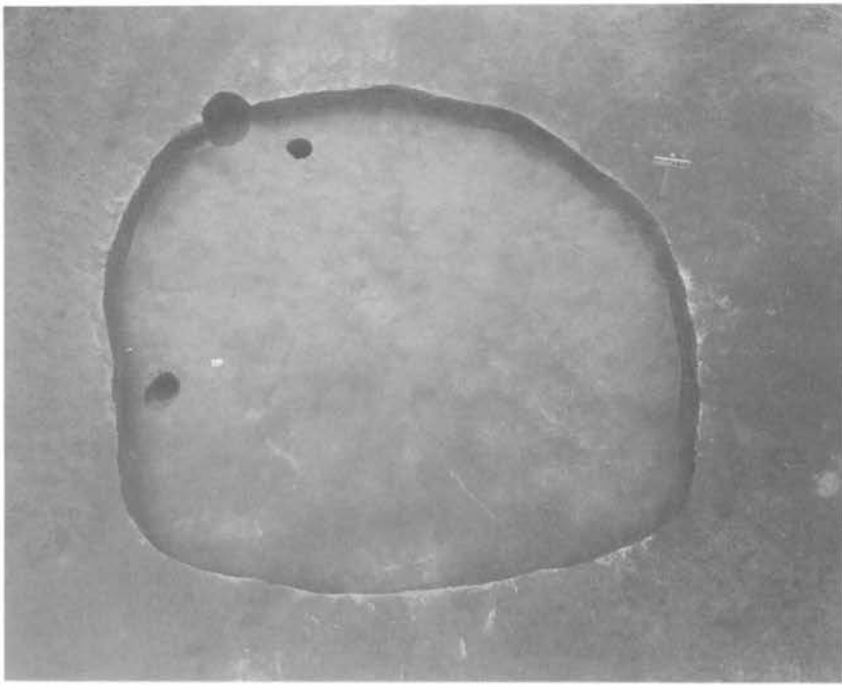


2．D150号遺構全景

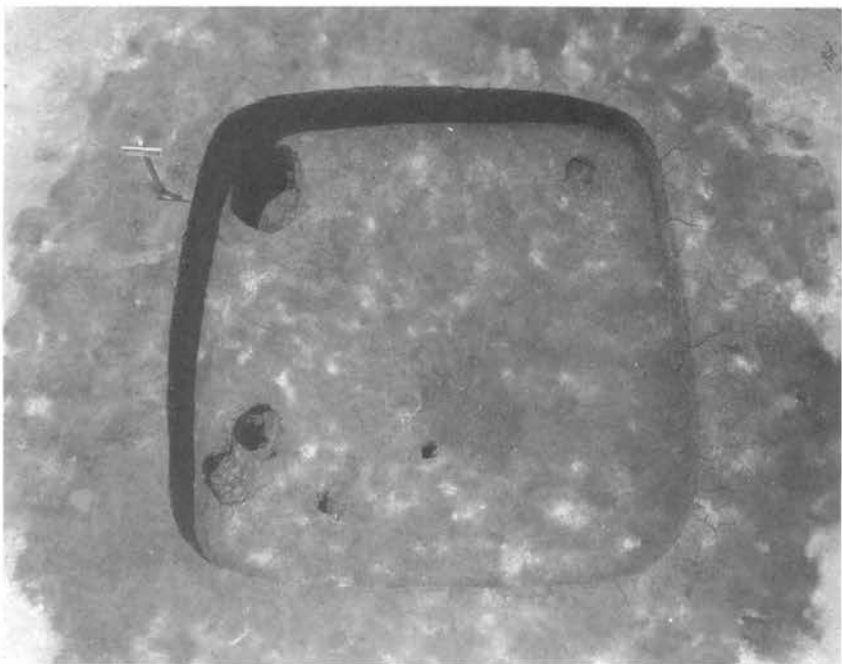


3．D152号遺構全景

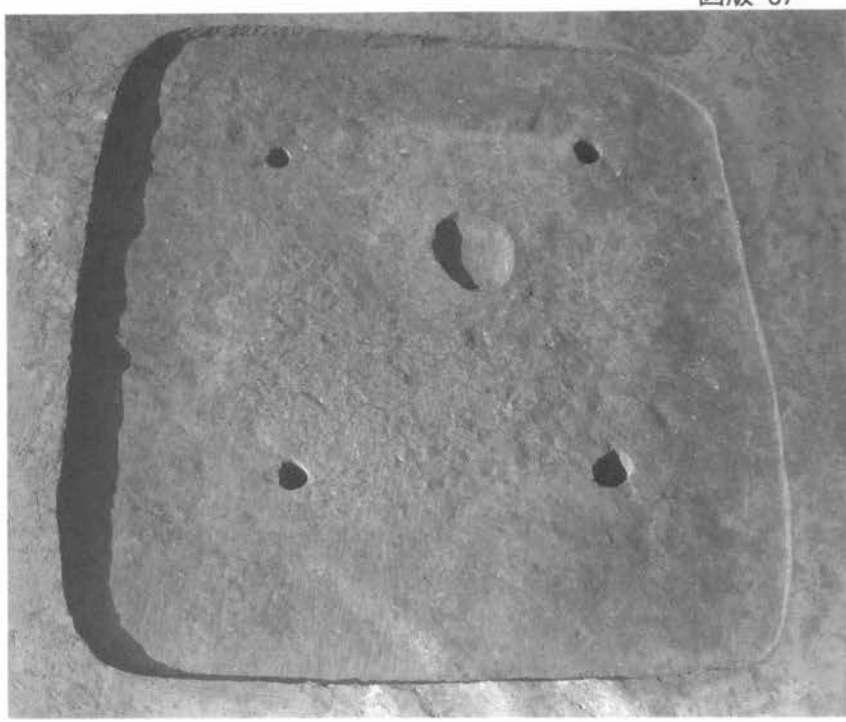
1．D152号遺構遺物
出土状況



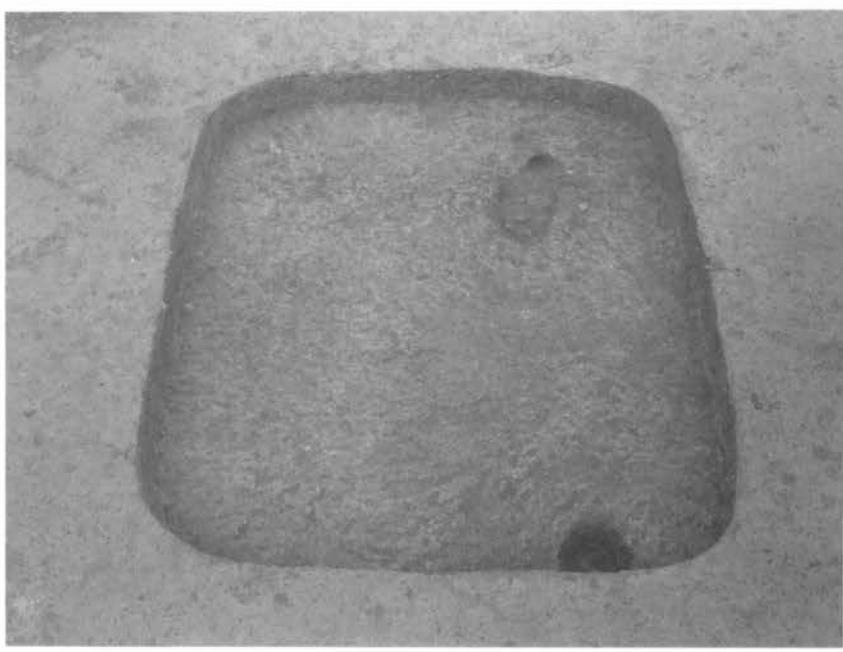
2．D153号遺構全景



3．D158号遺構全景

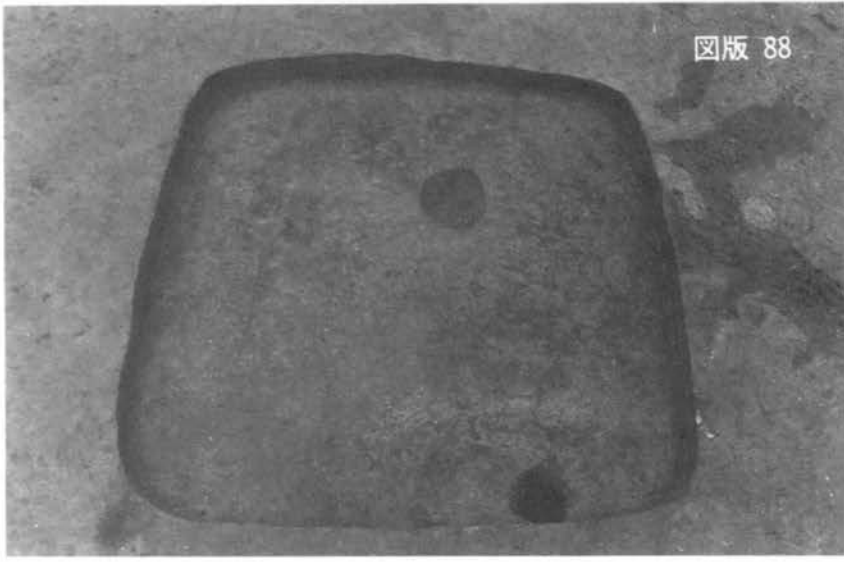


1．D167号遺構全景



2．D170号遺構全景

3．D170号遺構遺物
出土状況

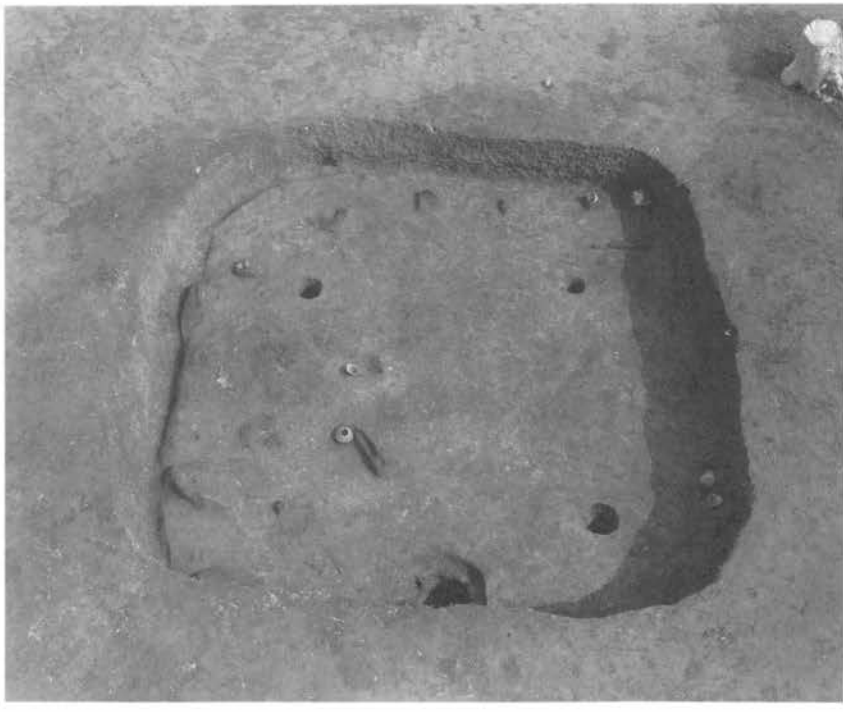


1．D171号遺構全景

2．D173号遺構全景

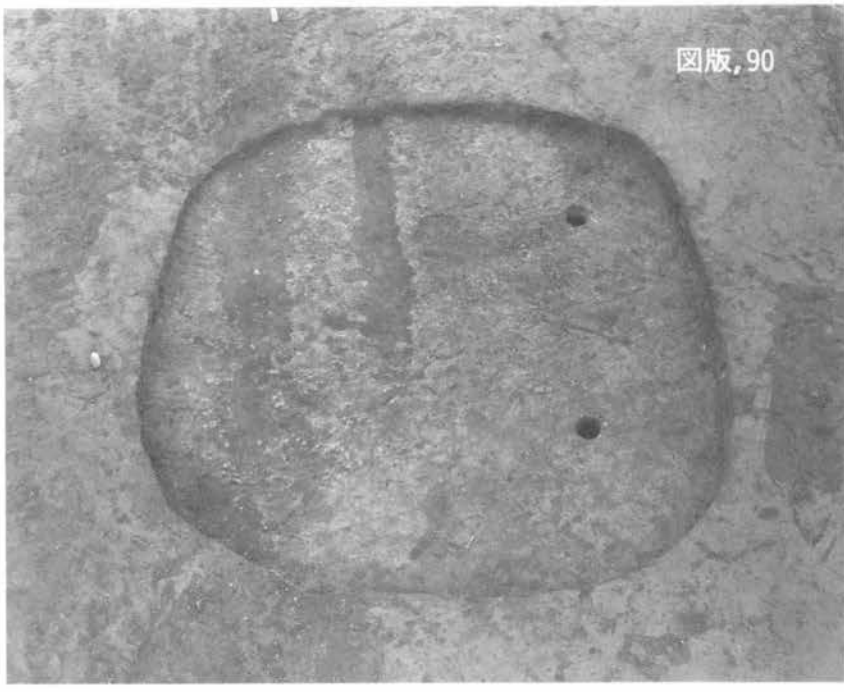
3．D173号遺構炉
検出状況

1．D173号遺構遺物
出土状況



2．D174号遺構全景

3．D174号遺構炉
検出状況

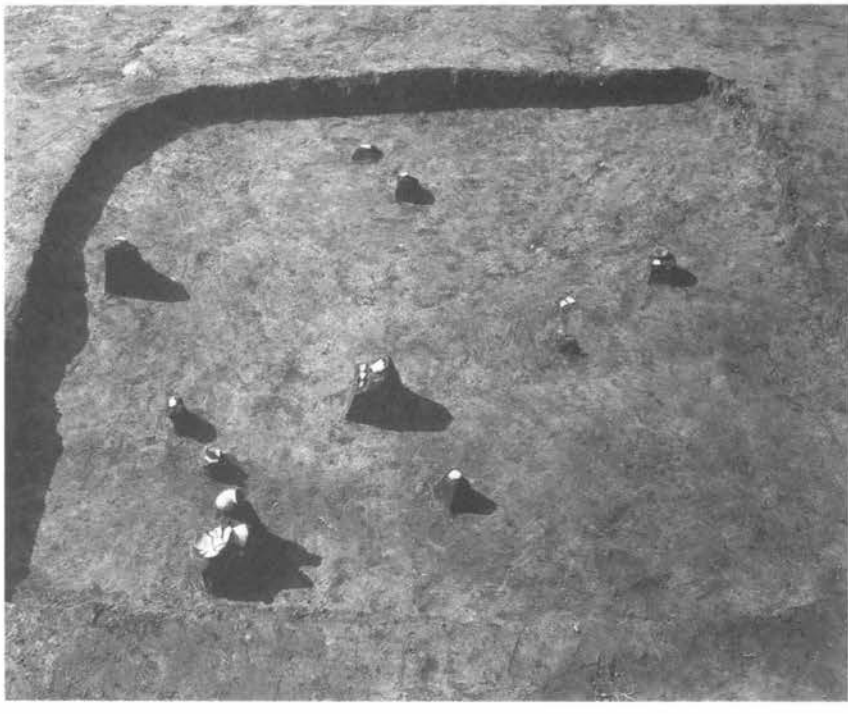


1．D175号遺構全景

2．D175号遺構遺物
出土状況

3．D175号遺構炉
検出状況

1．D178号遺構全景

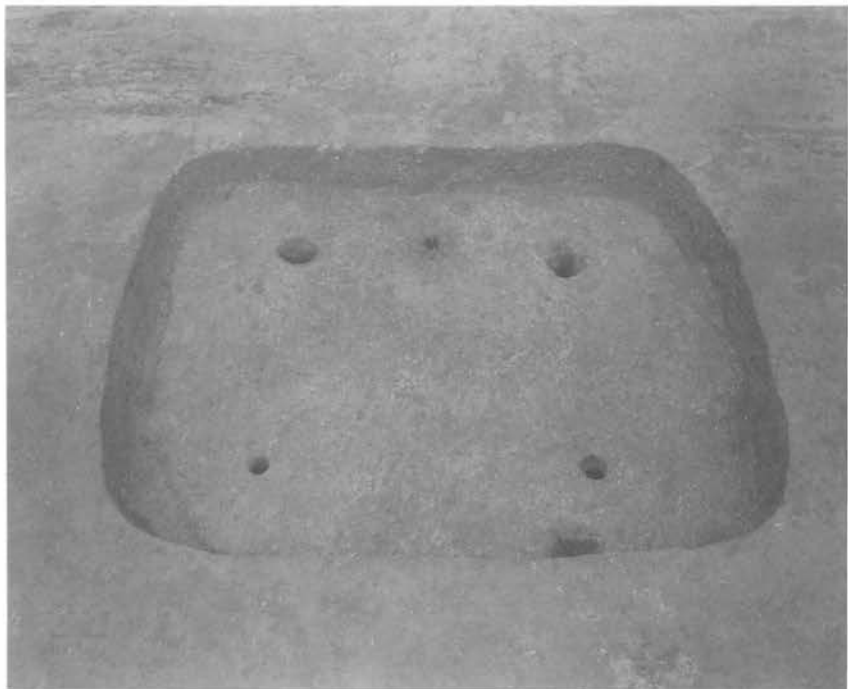


2．D178号遺構遺物
出土状況

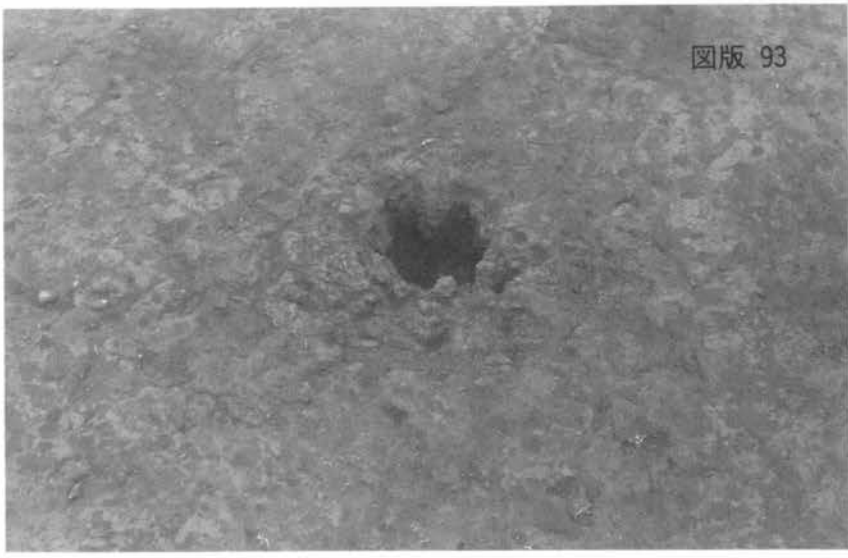
3．D178号遺構遺物
出土状況

1．D180号遺構全景

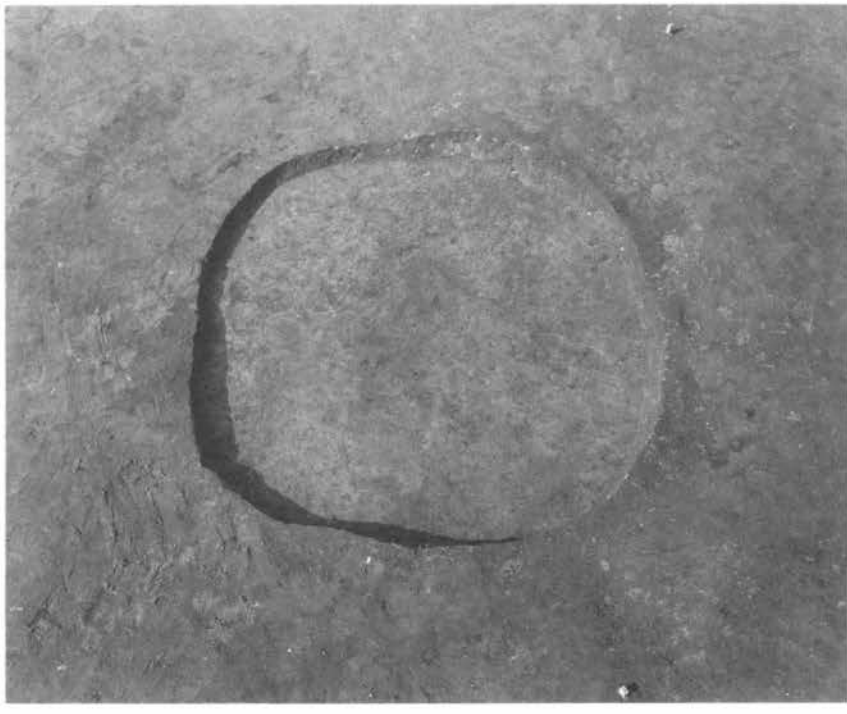
2．D180号遺構炉
検出状況



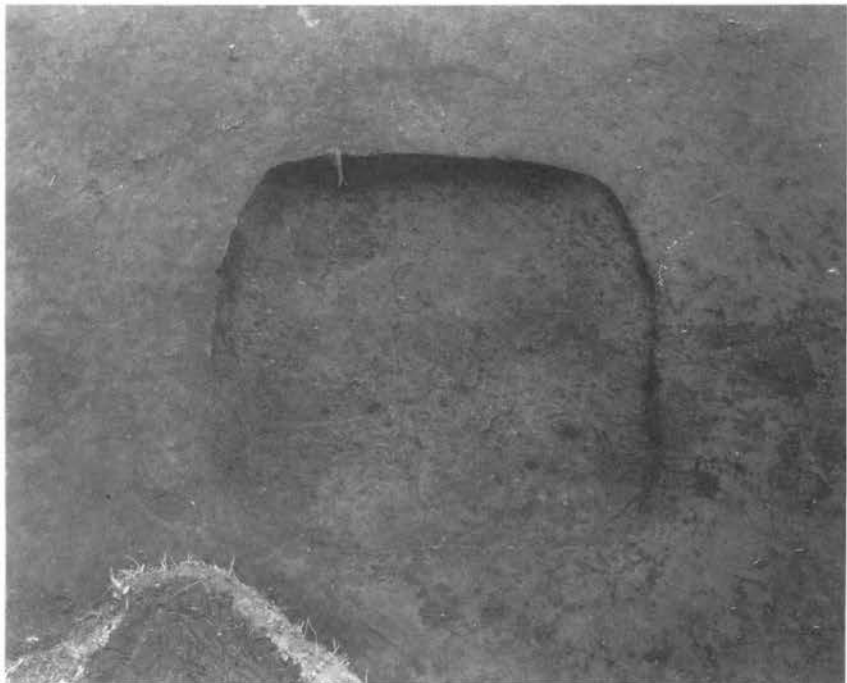
3．D182号遺構全景



1．D182号遺構炉
検出状況



2．D183号遺構全景



3．D184号遺構全景

1．D184号遺構遺物
出土状況

2．D184号遺構遺物
出土状況

3．D191号遺構全景

D095,1(⅓)

D096,1(⅓)

D096,6(⅓)

D096,5(⅓)

D096,3(⅓)

D096,9(½)

D096,8(½)

D097,2(⅓)

D096,10(½)

D096,7(½)

弥生時代第Ⅳ群B遺物

D100,1(⅓)

D104,4(⅓)

D108,12(½)

D107,2(⅓)

D107,3(⅓)

D107,4(½)

D105,1(⅓)

D108,7(½)

D108,8(½)

D134,1(½)

D108,6(½)

D142,6(½)

D142,7(½)

D143,3(⅓)

D143,1(⅓)

D143,2(⅓)

D148,5(⅓

D152,2(⅓)

D150,2(⅓)

D152,5(½)

D152,1(⅓)

D158,2(½)

D158,1(⅓)

D158,3(½)

D170,6(½)

D167,1(⅓)

D170,7(½)

D170,3(⅓)

D170,1(⅓)

弥生時代第Ⅳ群B遺物

D171,1(⅓)

D171,2(⅓)

D173,3(½)

D178,3(½)

D174,4(½)

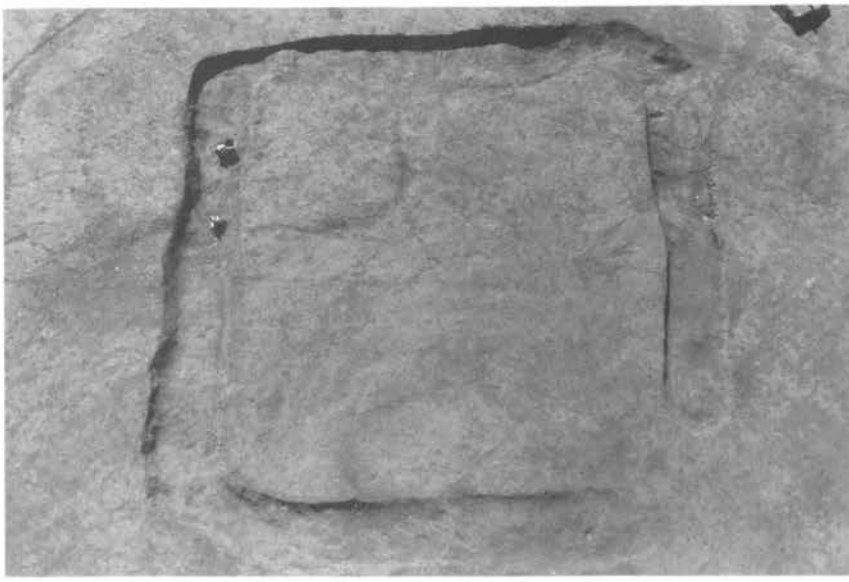
D174,3(½)

D182,1(½)

弥生時代第Ⅳ群B遺物

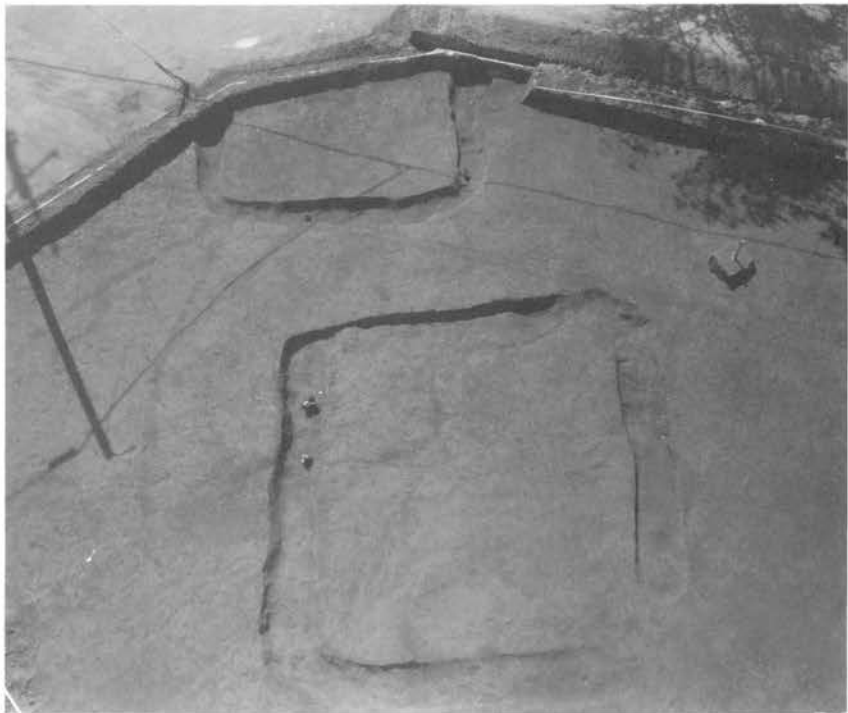
D183,3(⅓)

D184,7(½)



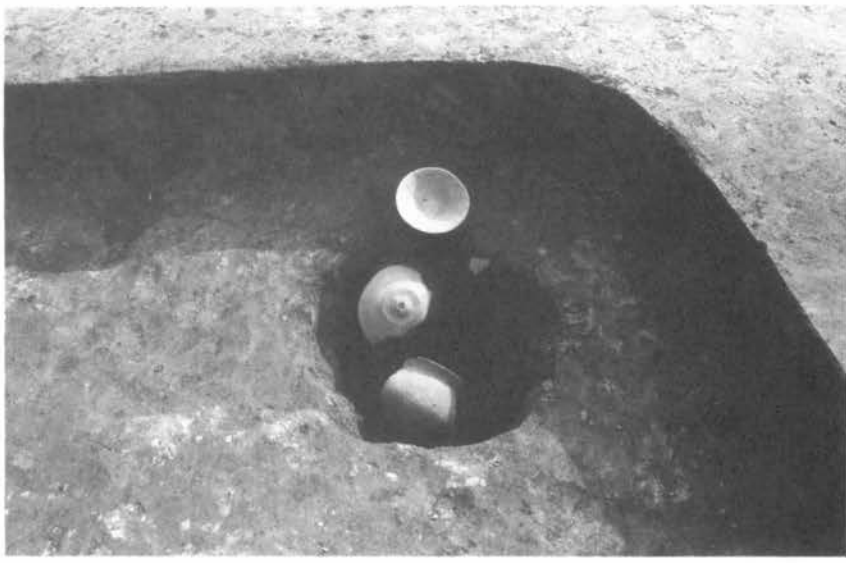
1．M010号遺構全景

2．M010号遺構遺物
出土状況

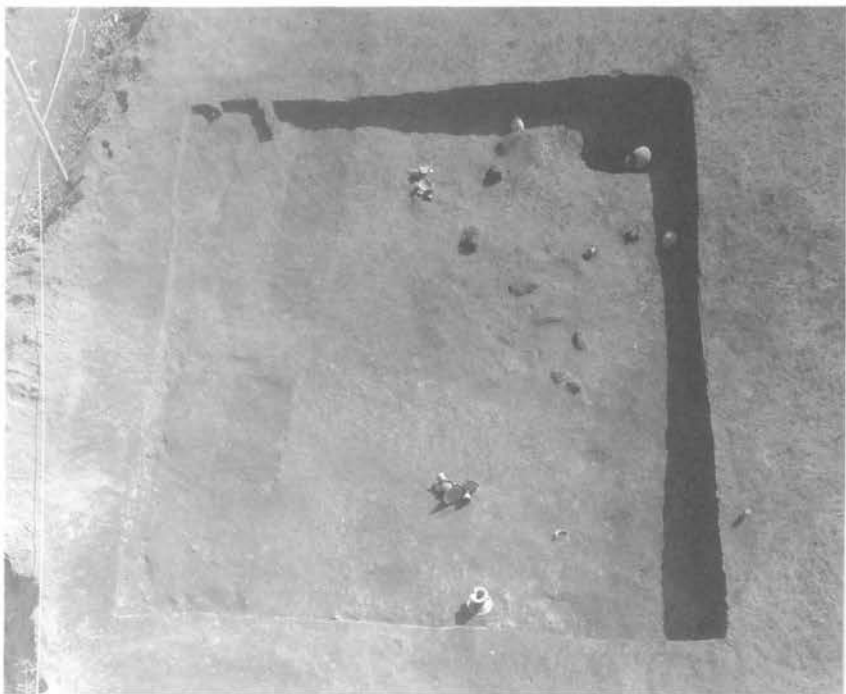


3．M010，011号遺構
分布状況

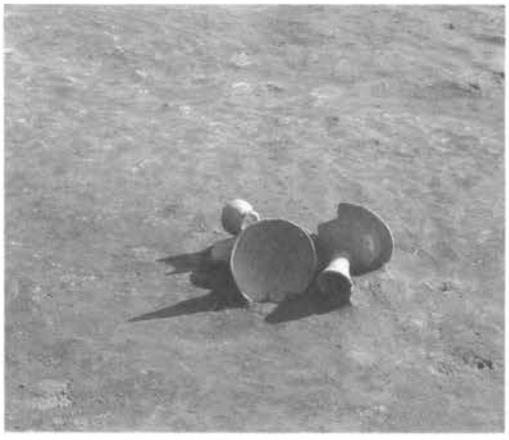
1．D034号遺構全景



2．D034号遺構遺物
出土状況



3．D035号遺構全景



D035号遺構遺物出土状況

D034,1(½)

D034,5(½)

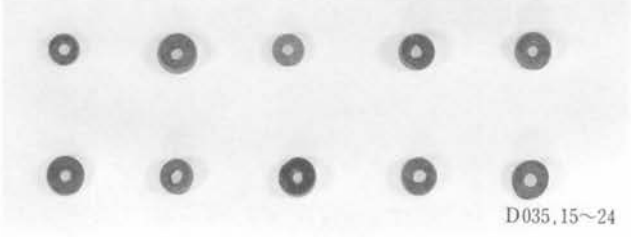
D034,4(½)

D035,5(⅓)

D034,3(⅓)

D035,6(½)

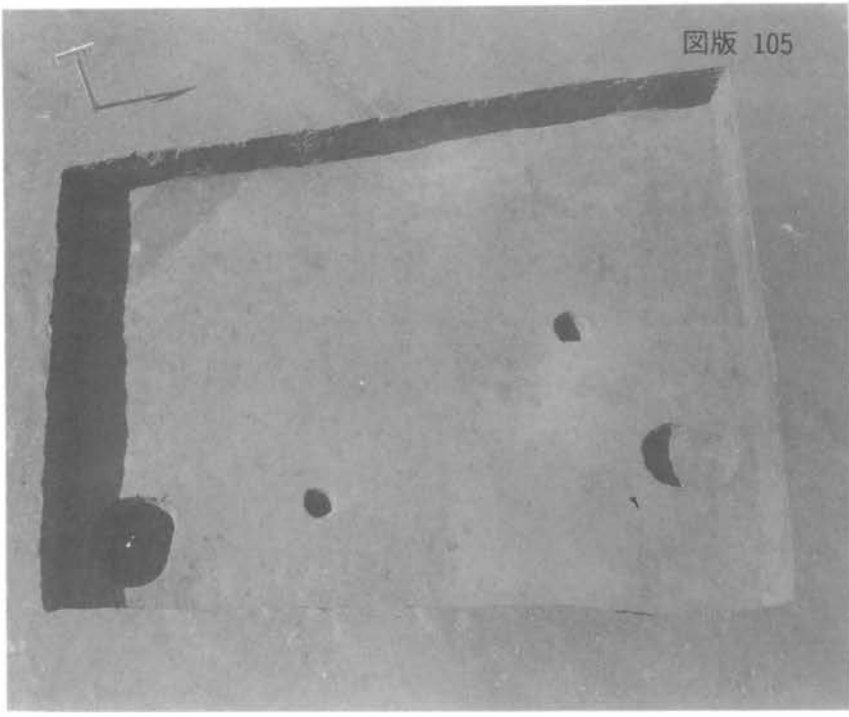
古墳時代中期第Ⅰ群遺物



D035,15～24

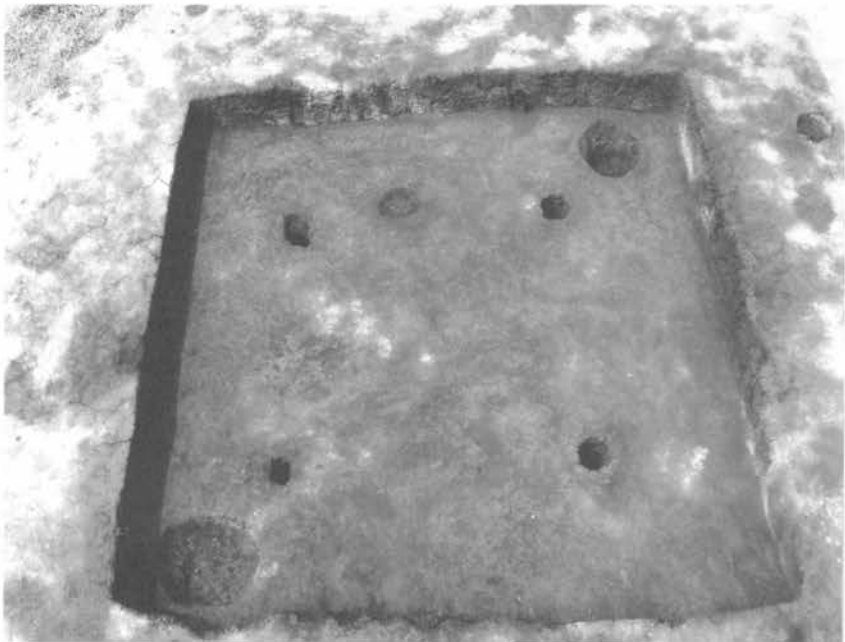
D035,12

D035,11



1．D131号遺構全景

2．D131号遺構遺物
出土状況



3．D132号遺構全景

1．D132号遺構遺物
出土状況

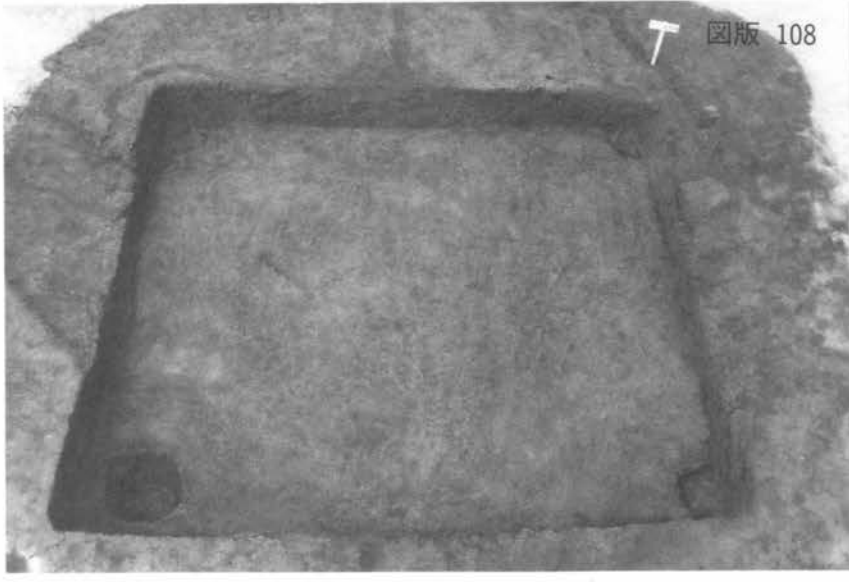
2．D132号遺構遺物
出土状況

3．D132号遺構遺物
出土状況

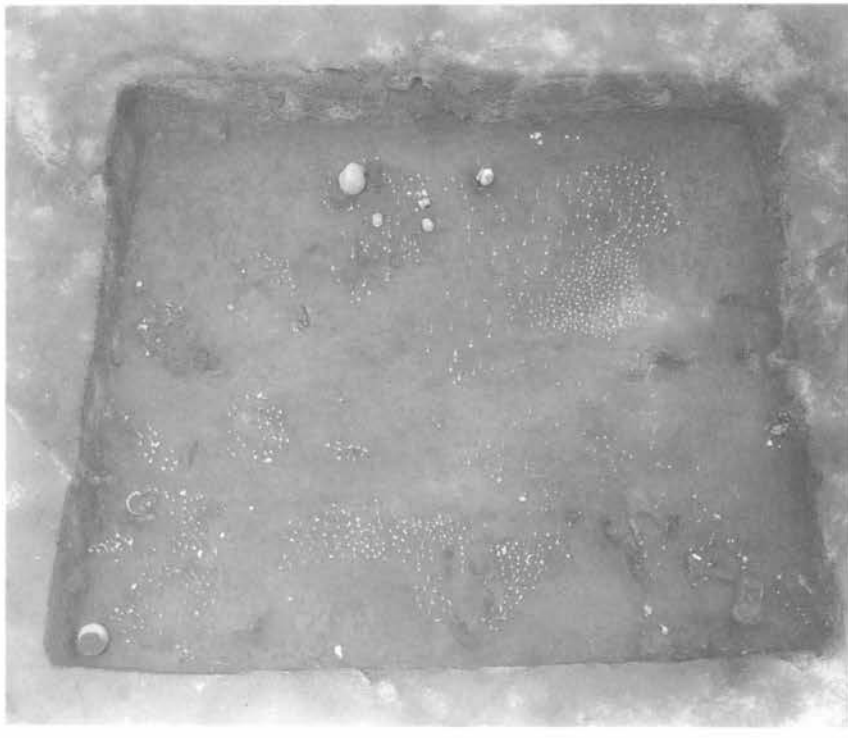
1．D132号遺構遺物
出土状況

2．D132号遺構遺物
出土状況

3．D132号遺構遺物
出土状況

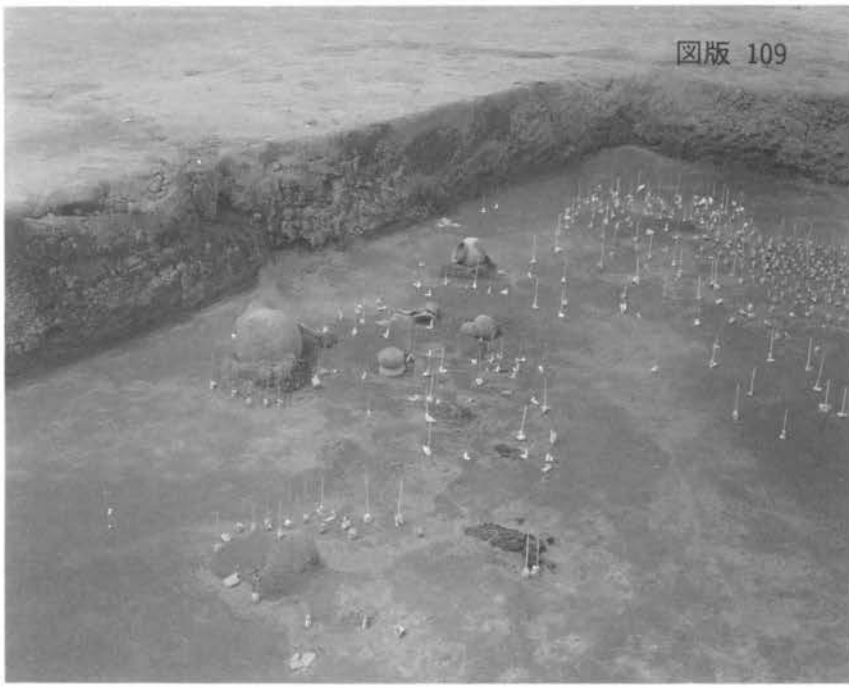


1．D133号遺構全景



2．D133号遺構遺物
出土状況

3．D133号遺構遺物
出土状況



1．D133号遺構遺物
出土状況

D131,3(1/2)

D131,8

D131,10

D131,9

D131,11, 16, 17, 19, 21
22, 25, 26, 28, 32

D131,1(1/3)

D131,7(1/3)

D131,2(½)

D132,32(½)

D132,5(⅓)

D132,7(¼)

D132,2(⅓)

D132,6(⅓)

古墳時代中期第II群遺物

D132,3(⅓)

D132,9(⅓)

D132,1(⅓)

D132,4(⅓)

古墳時代中期第II群遺物

D132,8(⅓)

D132,12(⅓)

D133,1(⅓)

D132,29(½)

D132,28(⅓)

D132,10(⅓)

D132,26(⅓)

D132,31(⅓)

D132,27(⅓)

D132,33(⅓)

古墳時代中期第II群遺物

D132, 39～43
44, 46, 47, 52, 61

D132,69

D132,35

D133,3(⅓)

D133,2(⅓)

D133,7(½)

D133,6(½)

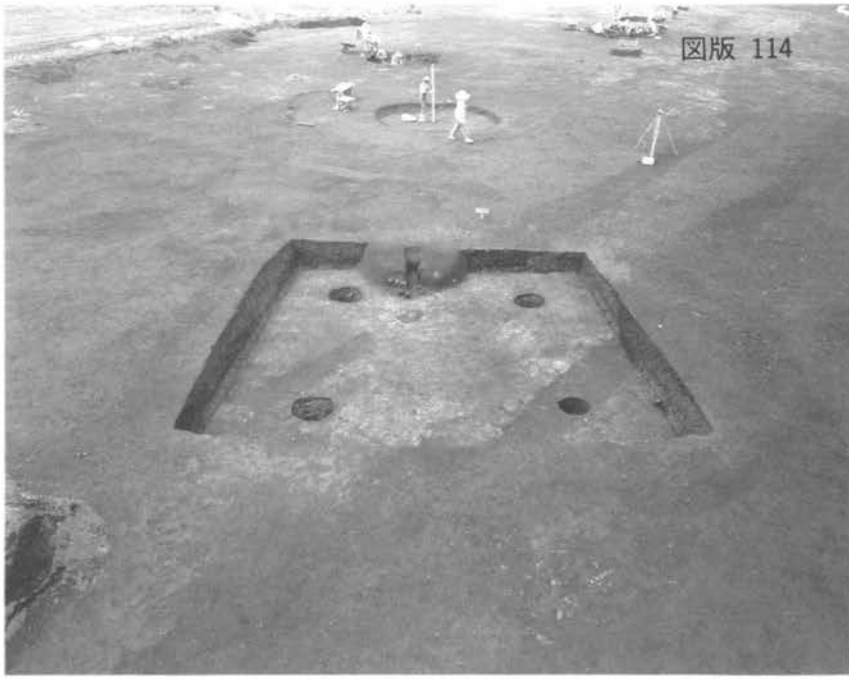
D133,8(½)

古墳時代中期第Ⅱ群遺物

D133, 26, 32, 35, 36, 39
42～46

D133,11

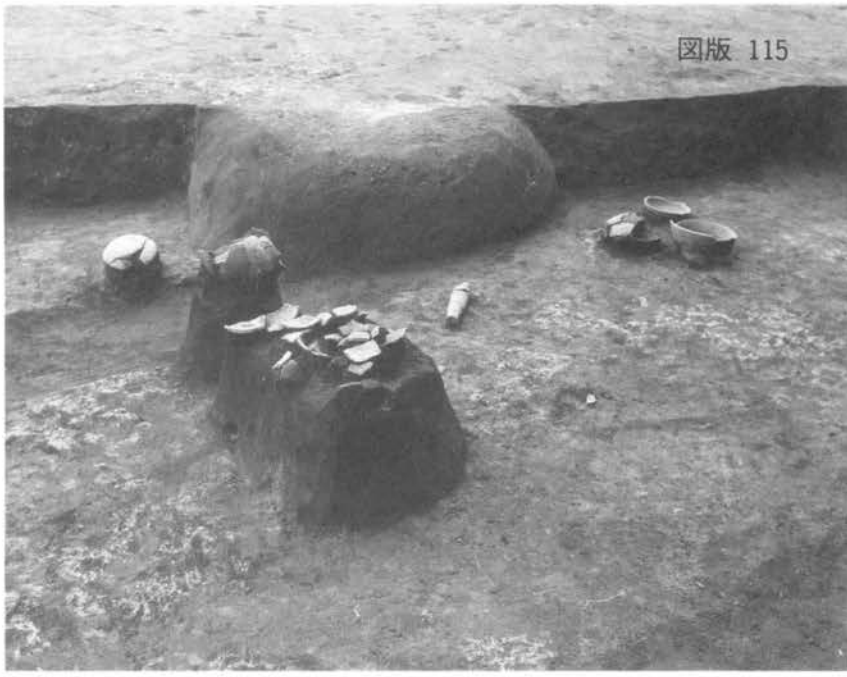
D133,12



1．D005号遺構全景

2．D008号遺構全景

3．D008号遺構遺物
出土状況



1．D008号遺構遺物
出土状況

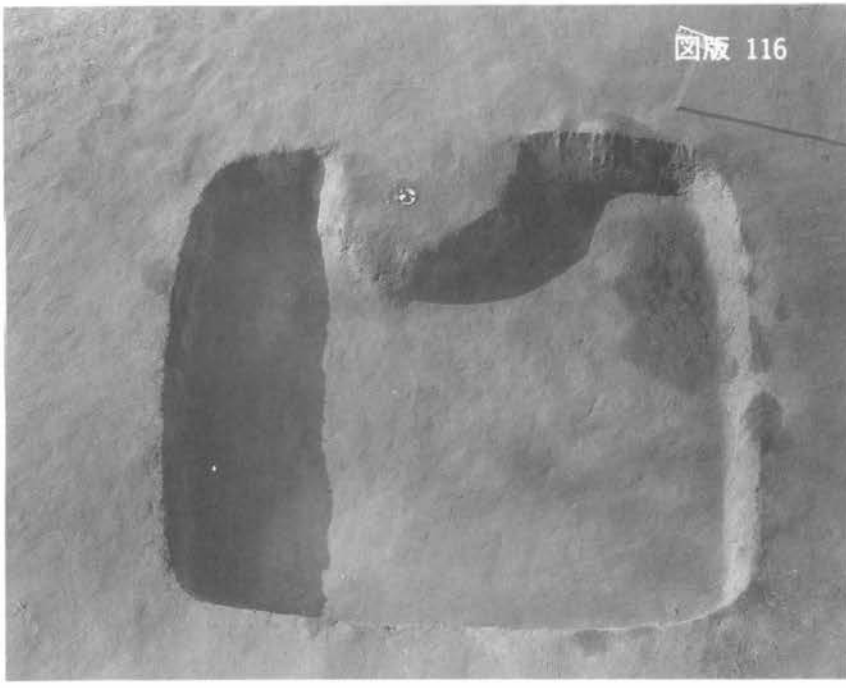
D005,1(½)

D008,1(⅓)

D008,4(⅓)

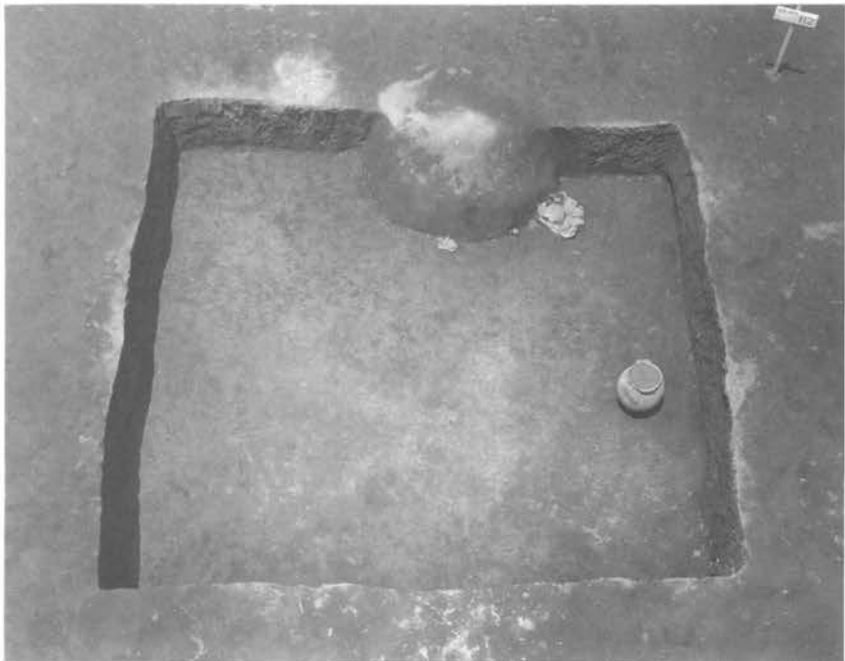
D008,3(⅓)

D008,7(½)

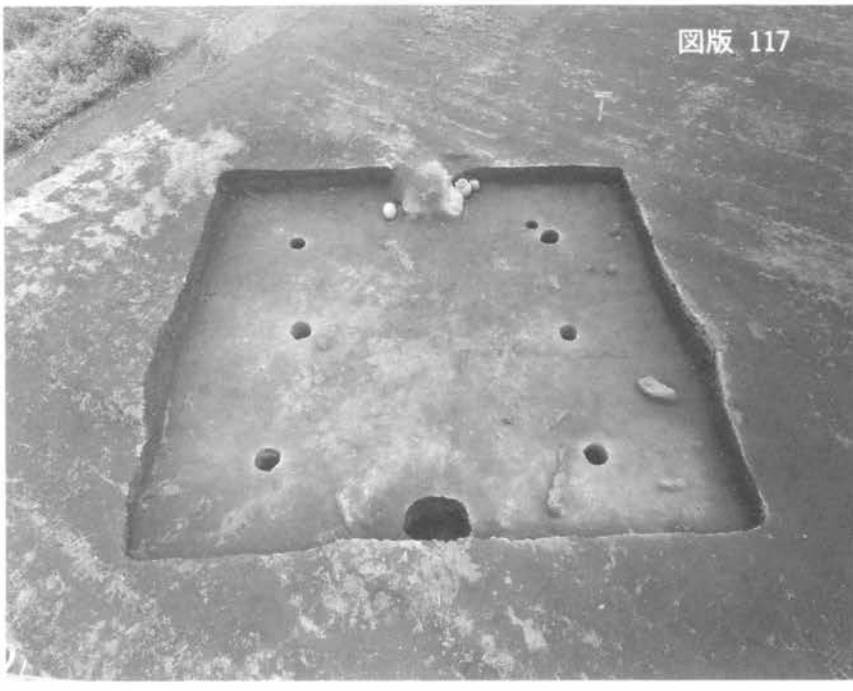


1．D099号遺構全景

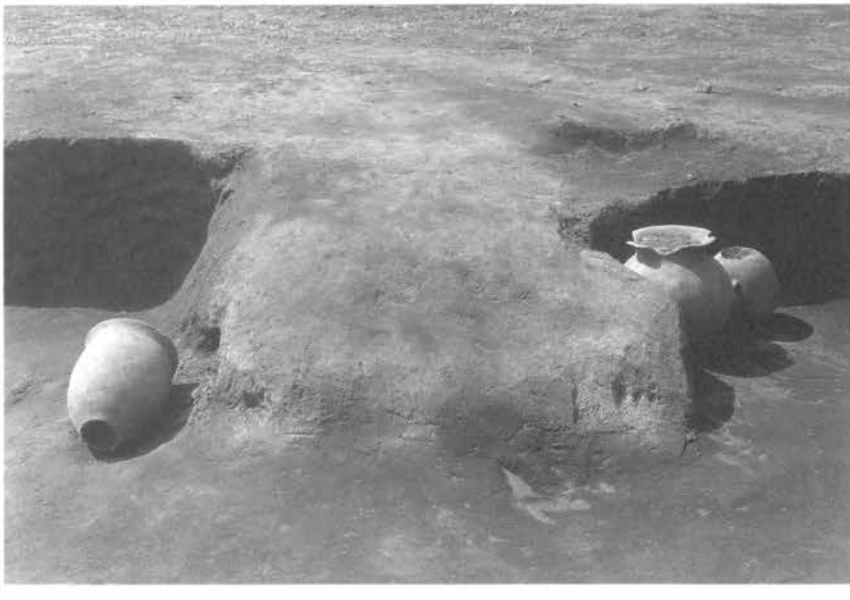
2．D099号遺構遺物
出土状況



3．D112号遺構全景



1．D135号遺構全景



2．D135号遺構遺物
出土状況

3．D136号遺構全景

1．D136号遺構炭化物
出土状況

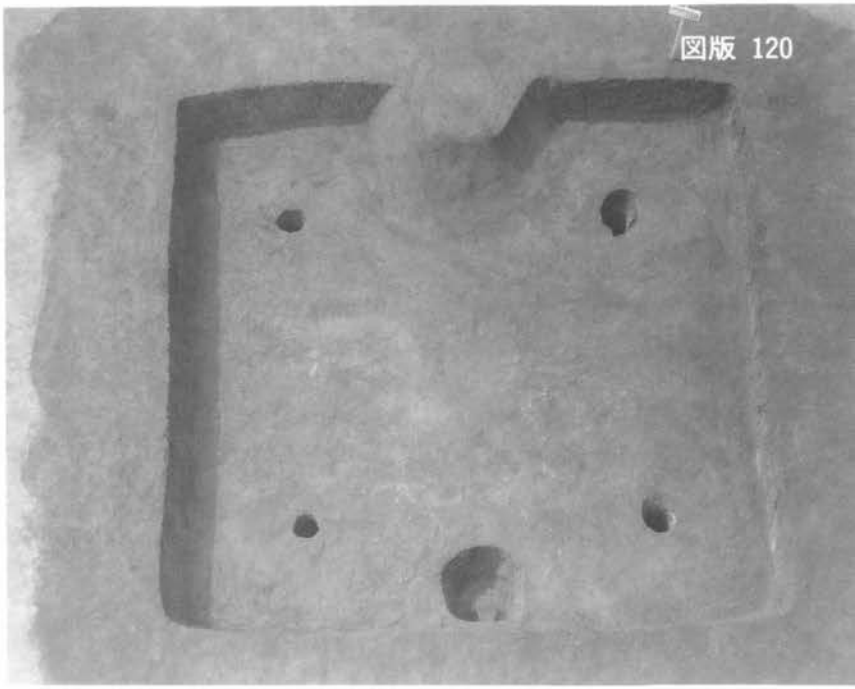
2．D136号遺構遺物
出土状況

3．D136号遺構遺物
出土状況

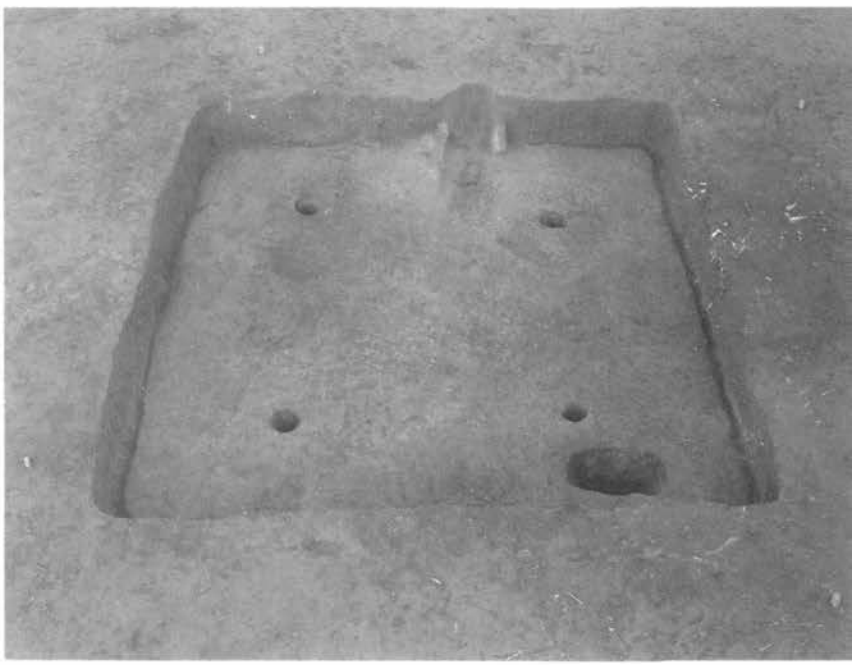
1．D136号遺構炭化物
出土状況

2．D136号遺構遺物
出土状況

3．D136号遺構遺物
出土状況

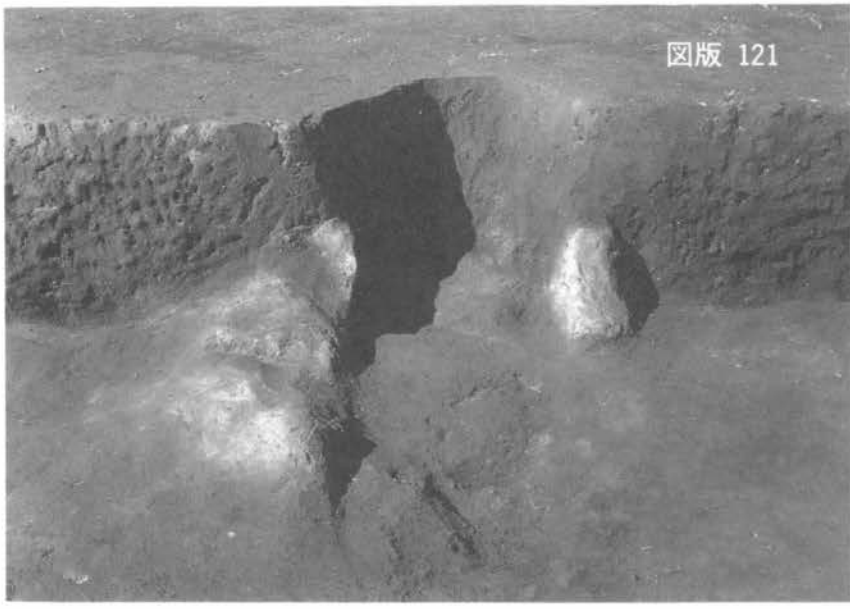


1．D139号遺構全景

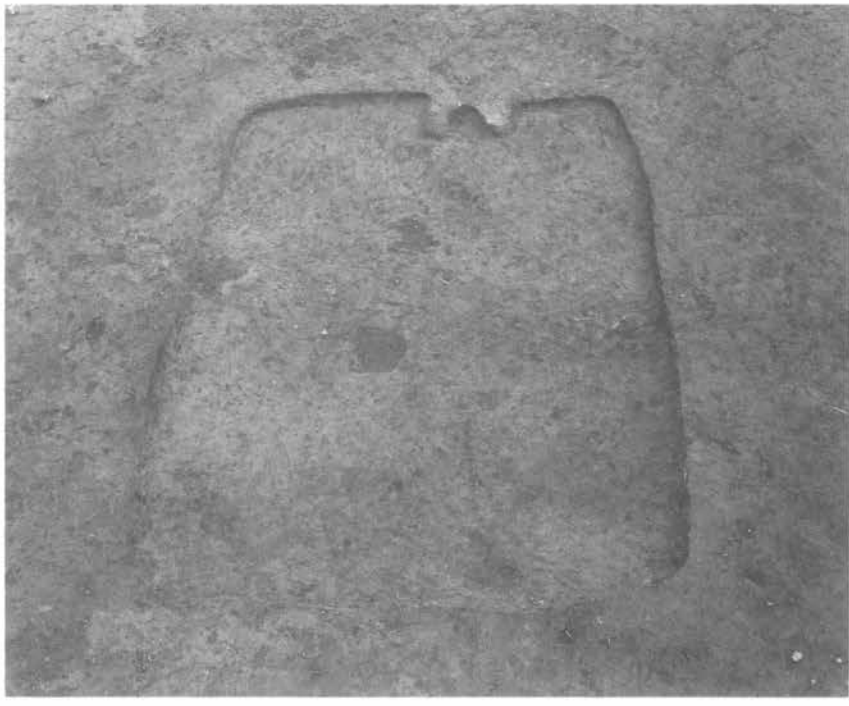


2．D172号遺構全景

3．D172号遺構ピット
検出状況

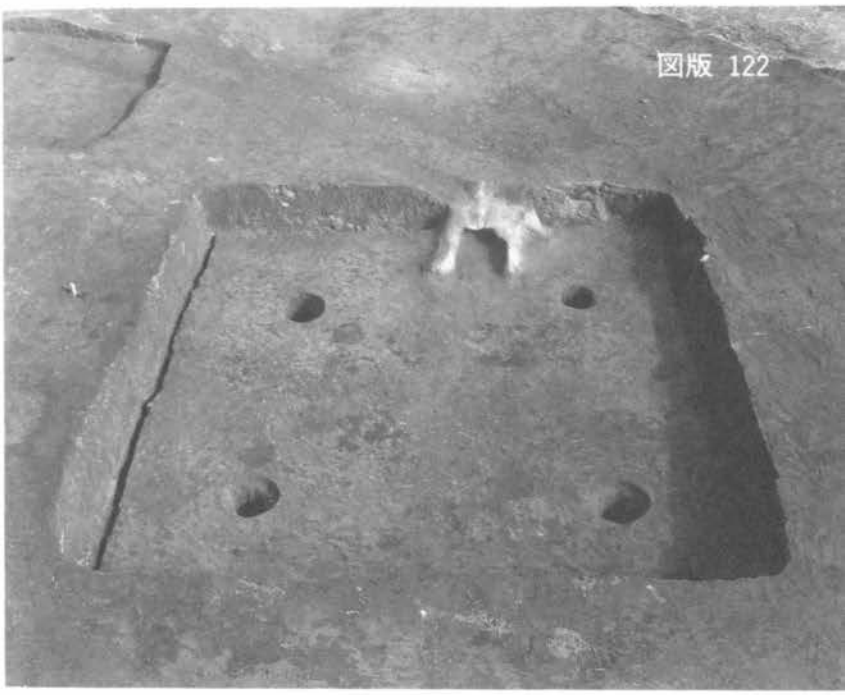


1．D172号遺構カマド
検出状況



2．D176号遺構全景

3．D176号遺構カマド
検出状況



1．D177号遺構全景

2．D177号遺構カマド
検出状況

D099,4(⅓)

D099,5(⅓)

D099,1(⅓)

D099,7(⅓)

D099,6(½)

D099,11

D112,2(⅓)

D099,3(¼)

古墳時代後期第II群遺物

D099,10(½)

D112,1(⅓)

D112,3(⅓)

D135,4(⅓)

D135,2(⅓)

D135,5(⅓)

D136,1(⅓)

D136,2(¼)

古墳時代後期第II群遺物

D136,3(⅓)

D136,10(⅓)

D136,12(½)

D136,28(½)

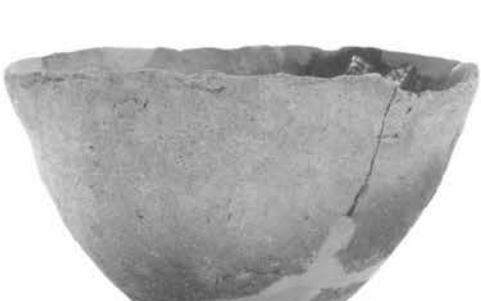
D136,9(¼)

D136,25(½)

古墳時代後期第II群遺物

D136,11(½)

D136,4(¼)



D136,8(⅓)

D136,15(½)

D172,2(⅓)

D139,1(⅓)

D177,2(½)

1．歴史時代第Ⅰ群空中写真（南より）

2．歴史時代第Ⅰ，Ⅱ群空中写真（東より）

1．歴史時代第II群遺構分布状況（北西より）

2．歴史時代第III群空中写真（東より）

1．歴史時代第IV群空中写真（南東より）

2．歴史時代第IV群空中写真（西より）

1．D007号遺構全景

2．D007号遺構遺物
出土状況

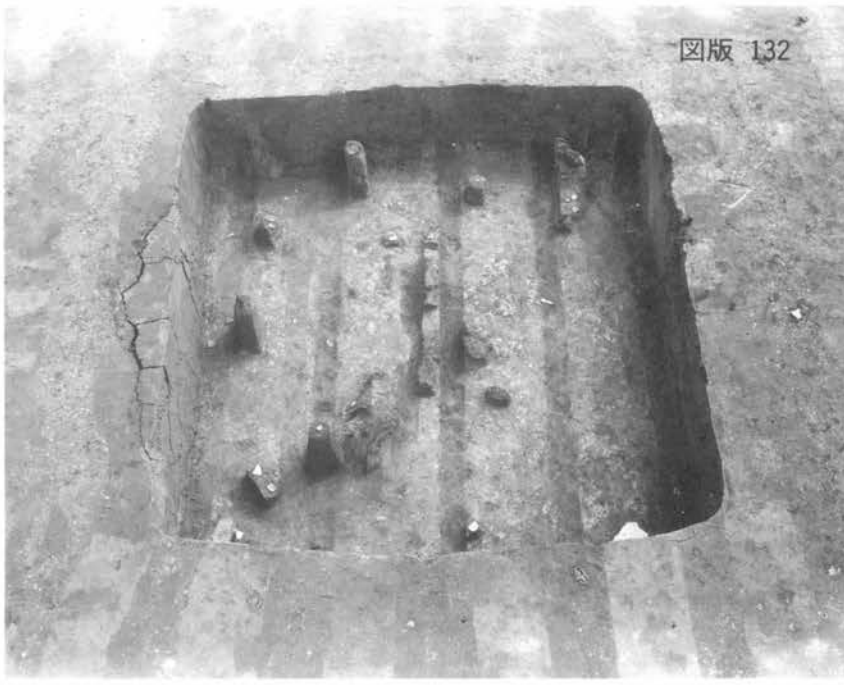
3．D007号遺構カマド
検出状況

1．D007号遺構遺物出土状況

2．D007号遺構遺物出土状況

3．D007号遺構遺物
出土状況

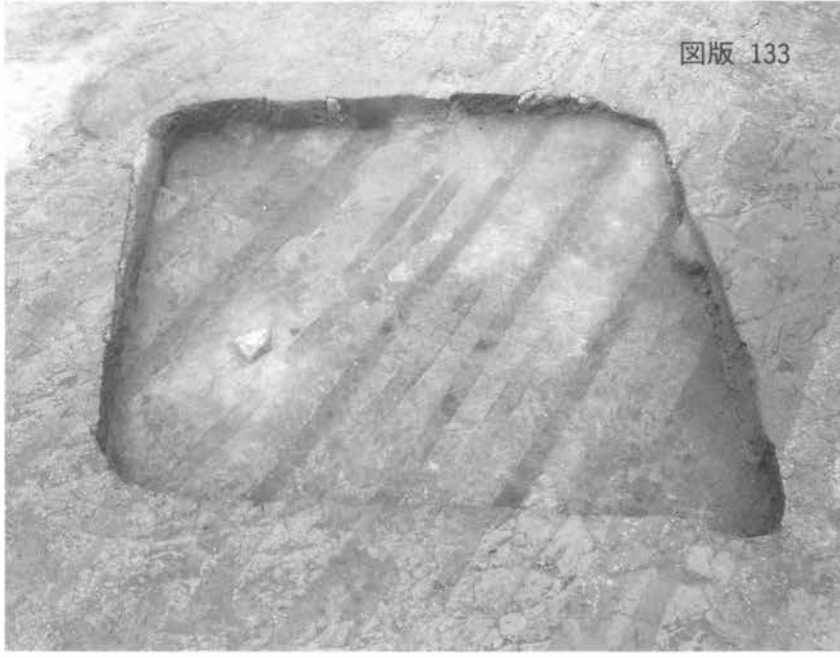
4．D007号遺構遺物
出土状況



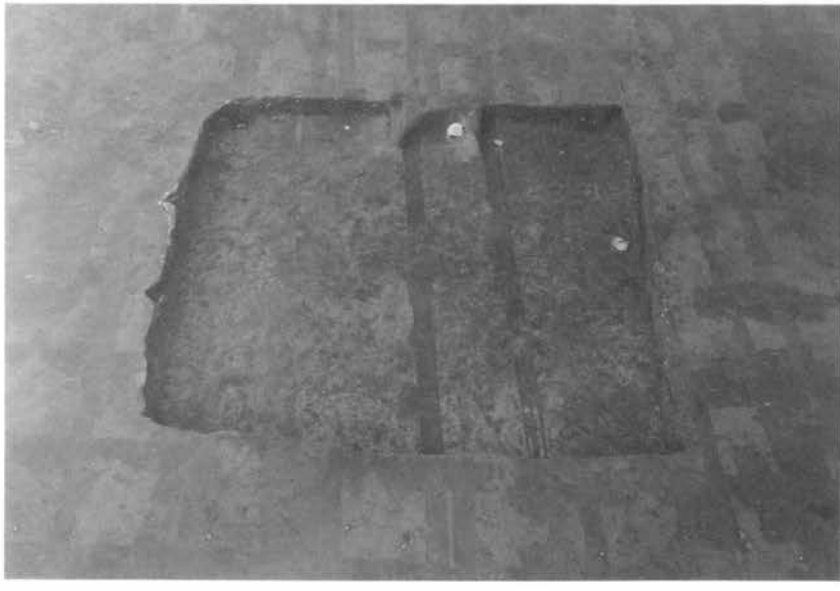
1．D011号遺構全景

2．D012号遺構全景

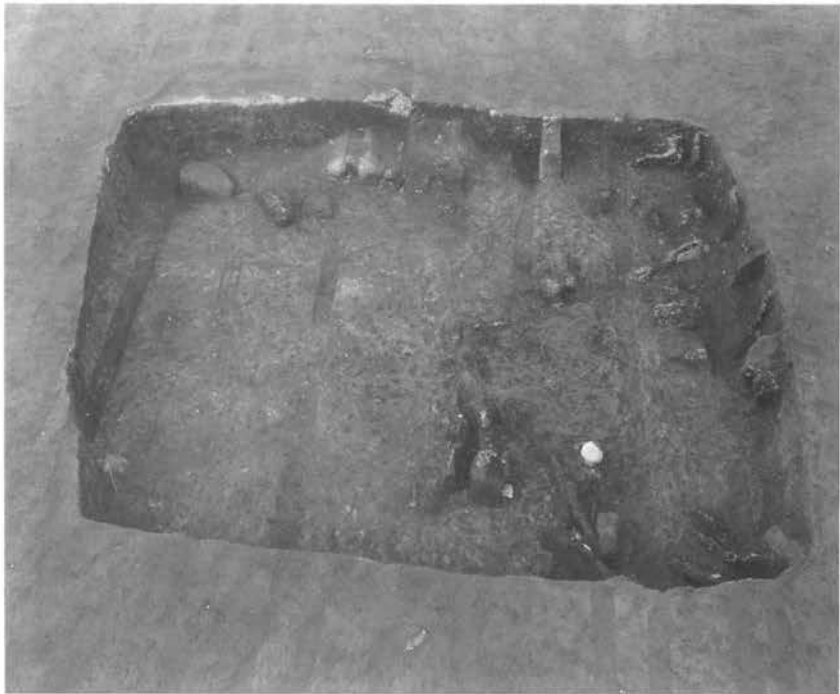
3．D013号遺構全景



1．D014号遺構全景



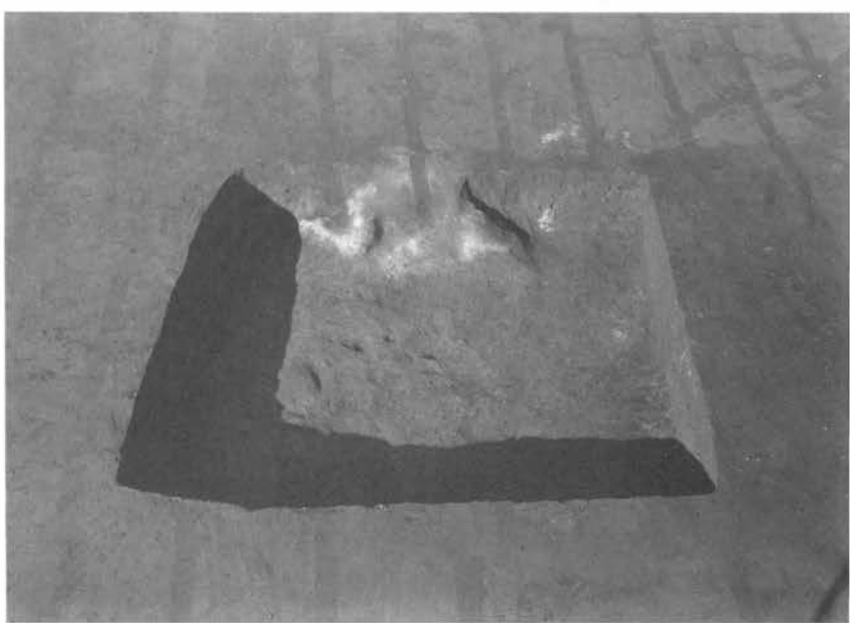
2．D071号遺構全景



3．D072号遺構全景

1．D077号遺構全景

2．D078号遺構全景

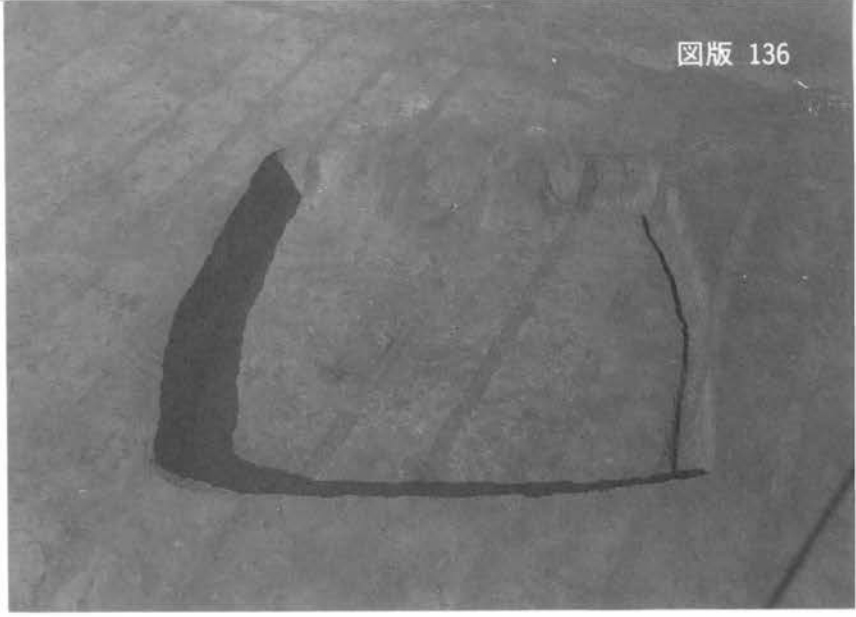


3．D081号遺構全景

1．D082号遺構全景

2．D083号遺構全景

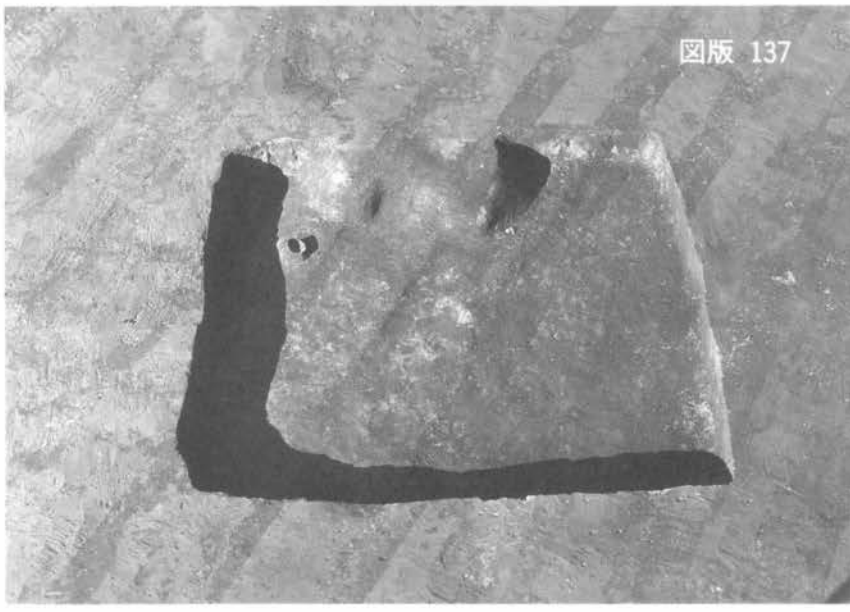
3．D084号遺構全景



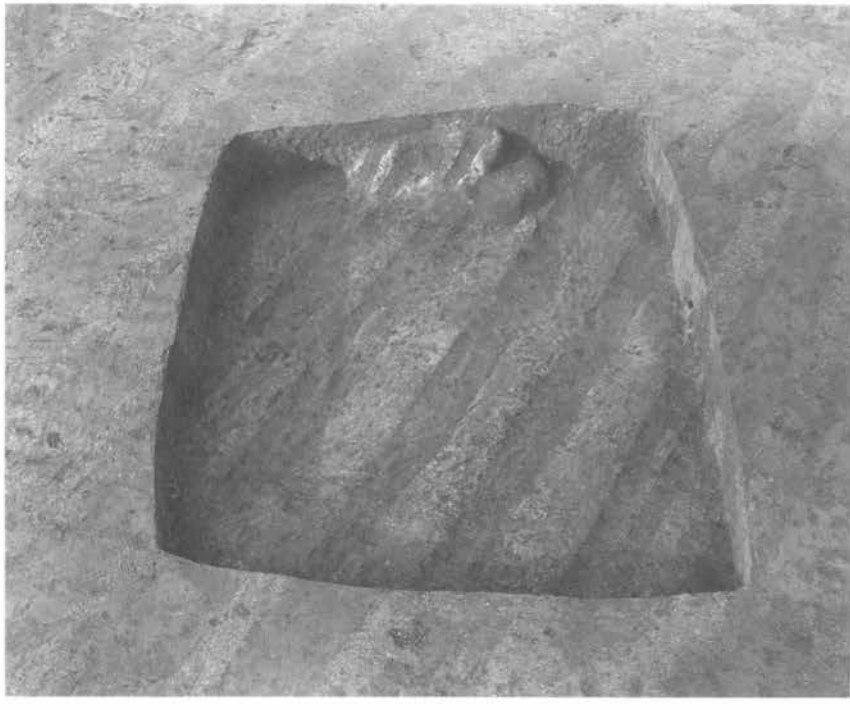
1．D085号遺構全景

2．D086号遺構全景

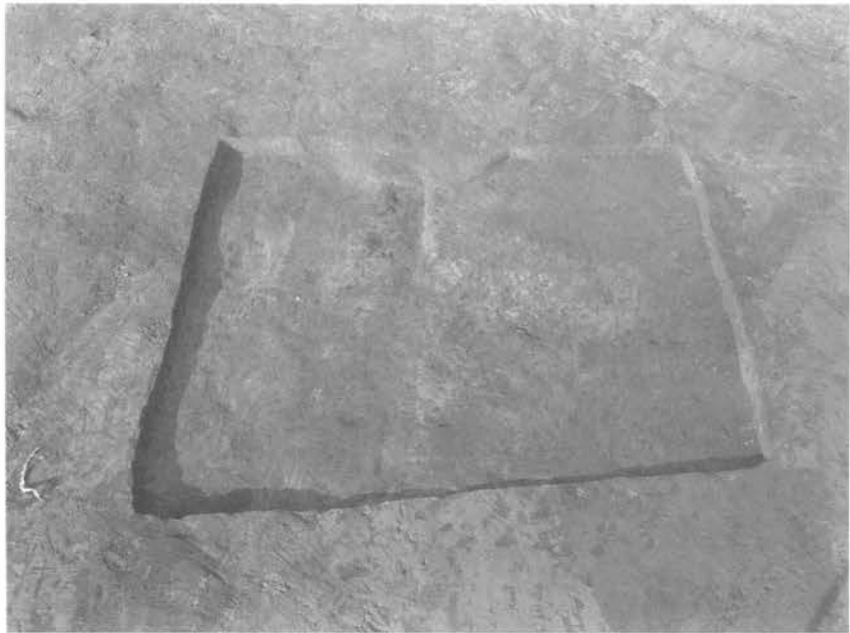
3．D090号遺構全景



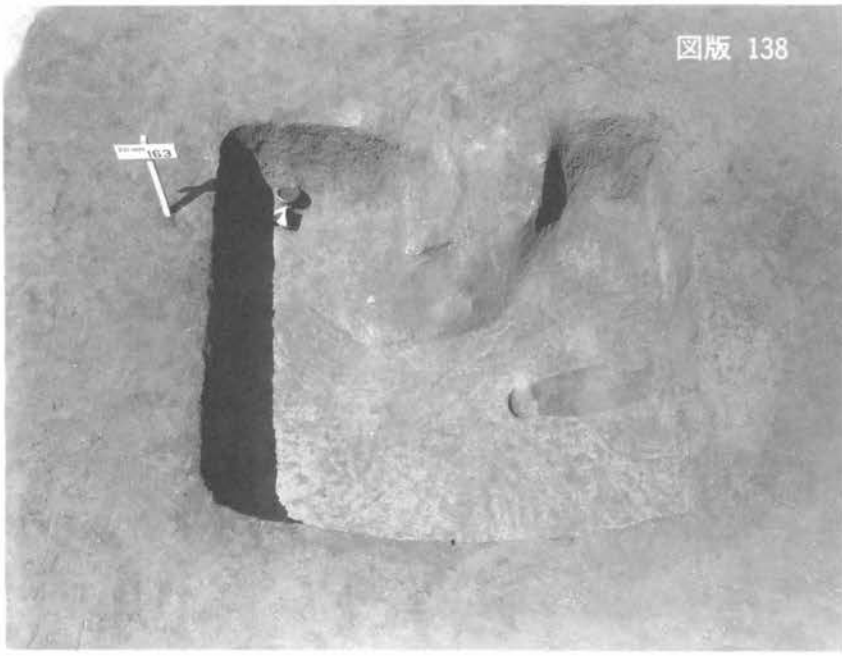
1．D091号遺構全景



2．D092号遺構全景

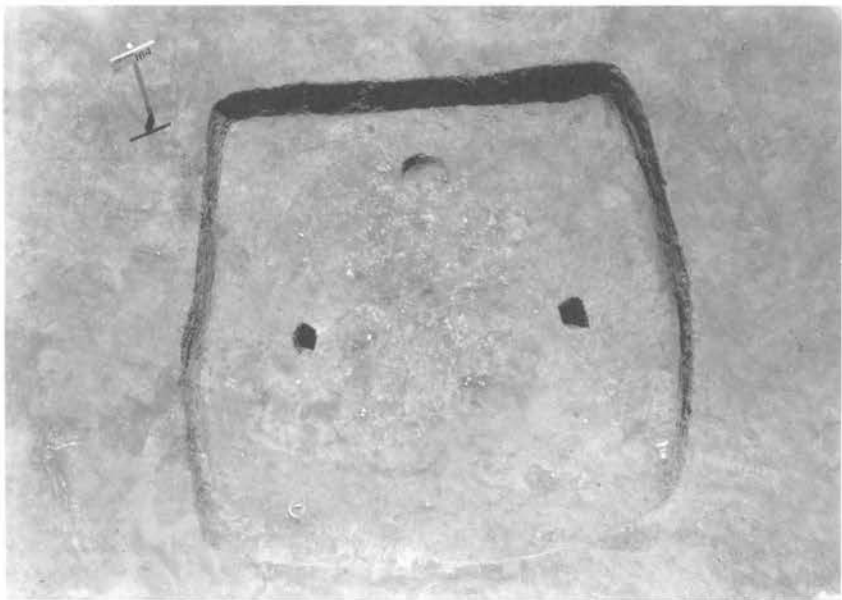


3．D093号遺構全景

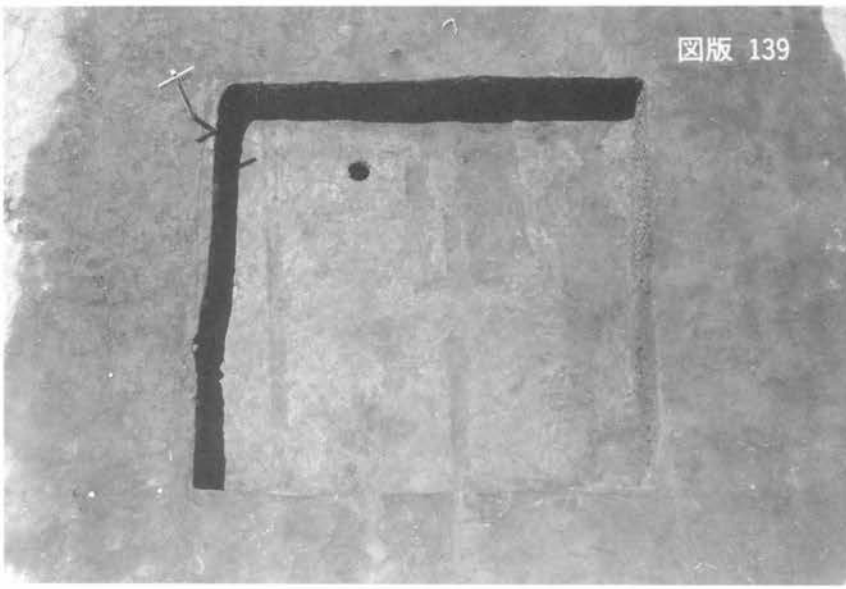


1．D163号遺構全景

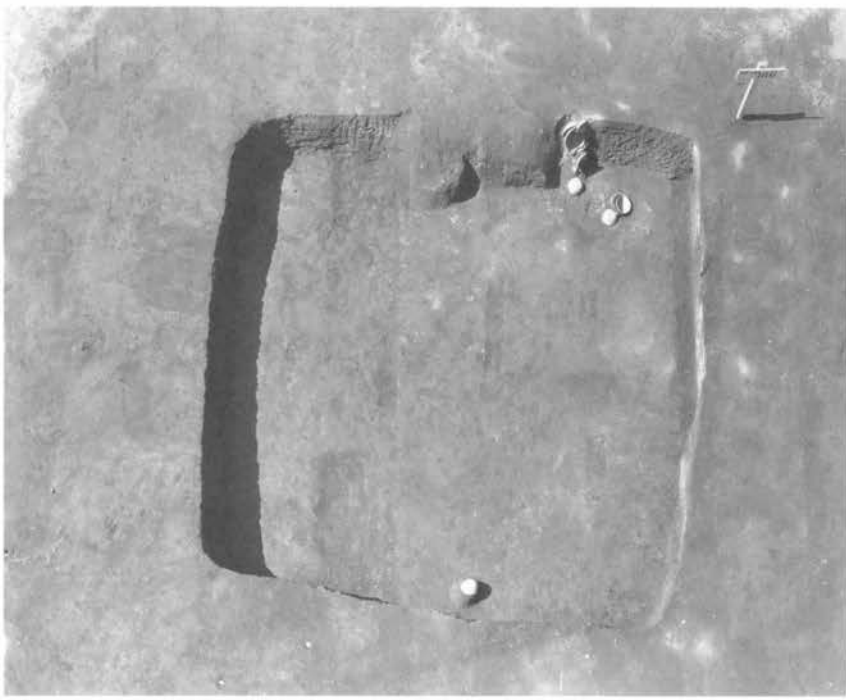
2．D163号遺構カマド
検出状況



3．D164号遺構全景



1．D165号遺構全景



2．D166号遺構全景

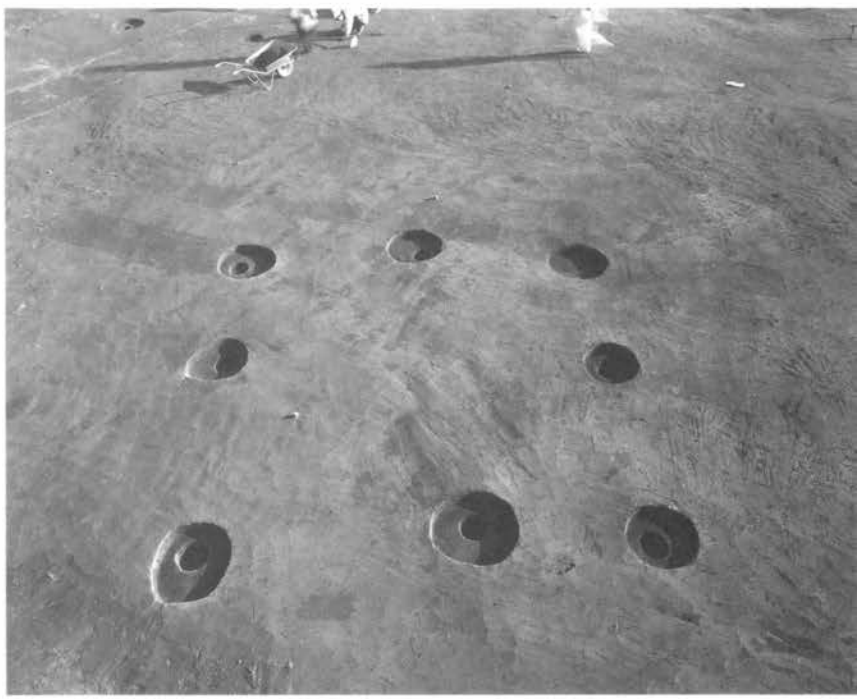
3．D166号遺構遺物
出土状況

1．H001号遺構全景

2．H004号遺構全景

3．H005号遺構全景

1．H006号遺構全景



2．H007号遺構全景

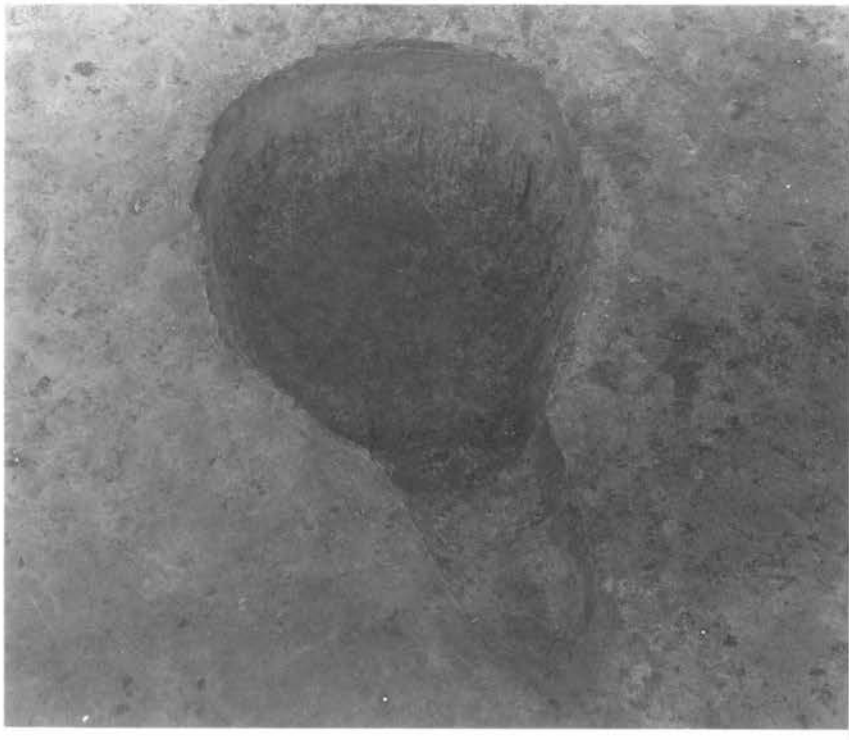
3．H008号遺構全景

1．H011号遺構全景

2．P001号遺構全景

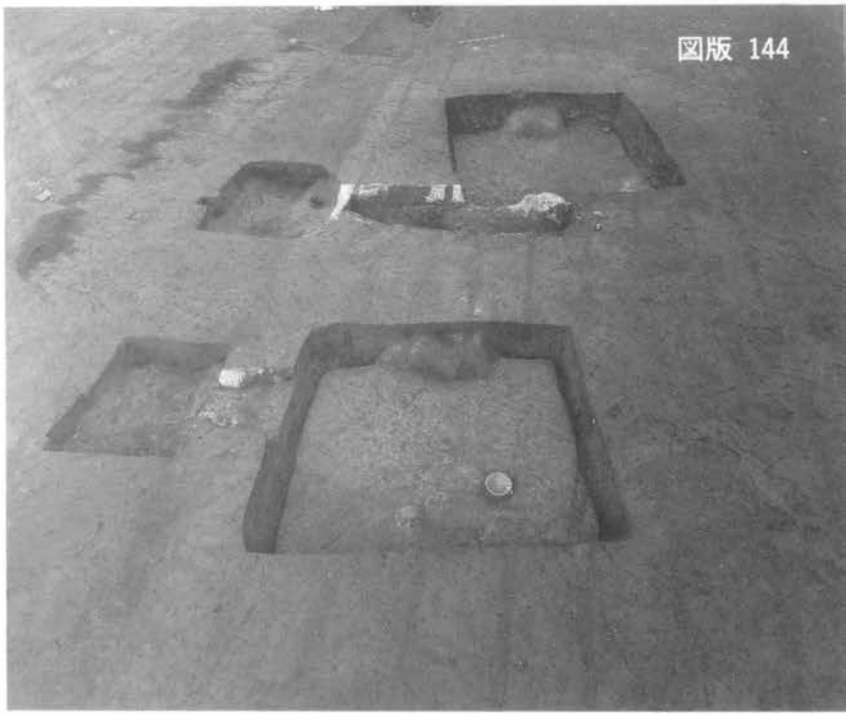
3．P002号遺構全景

1．P003号遺構全景



2．P004号遺構全景

3．P001，D007，090号
遺構分布状況



1．D077，090号遺構
分布状況

D007,6(½)

D007,2(⅓)

D007,1(½)

D007,41(½)

D007,19(½)

D007,35(½)

D007,27(½)

D007,31(½)

D007,28(½)

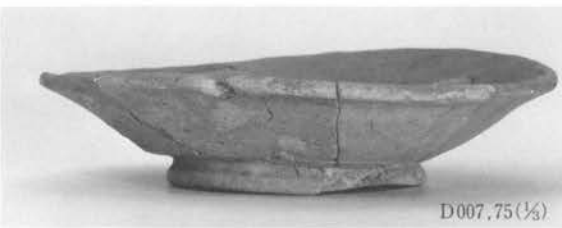
D007,37(½)

D007,33(½)

D007,44(½)

D007,45(½)

D007,46(½)


D007,75(⅓)

D007,74(½)

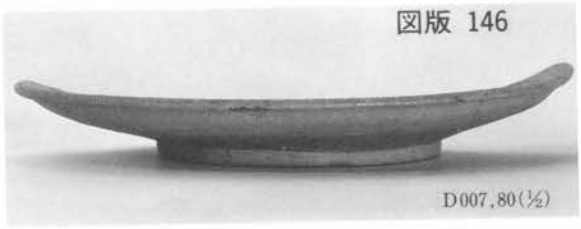
D007,57(½)

D007,77(½)

D007,53(½)

歴史時代第Ⅰ群遺物

D007,81(½)


D007,80(½)

D011,3(¼)

D012,12(½)

D012,10(½)

D078,23(½)

D014,5(½)

D077,8(½)

D013,8(½)

D078,1(⅓)

D078,9(½)

D081,11(½)

D081,17(½)

D081,15(½)

D082,1(¼)

D081,12(½)

D082,4(½)

D083,4(⅓)

D083,16(½)

D084,2(½)

D084,4(½)

D093,13(⅓)

D093,6(½)

D085,10(½)

D093,7(½)

D090,6(½)

D163,1(⅓)

D090,5(½)

D091,1(½)

D164,4(½)

D164,9(½)

D163,3(⅓)

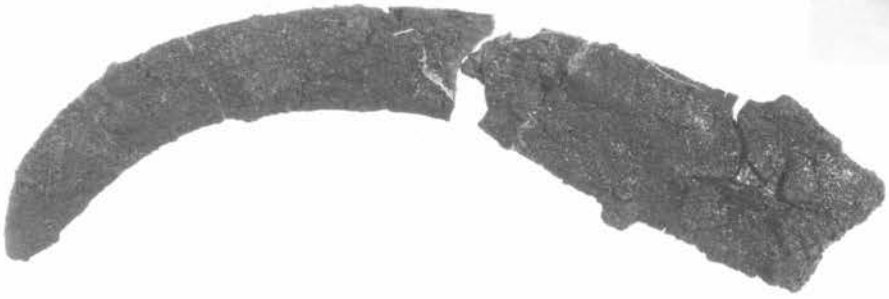
歴史時代第Ⅰ群遺物

D163,4(½)

D163,5(½)

D166,16(½)

D078,33



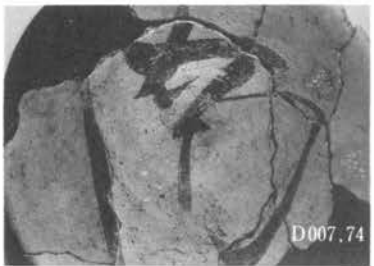
D007,86

D086,13

D081,19

D083,20

D007,96



D007,74

D007

D007,28

D007,75

D011,7

D012

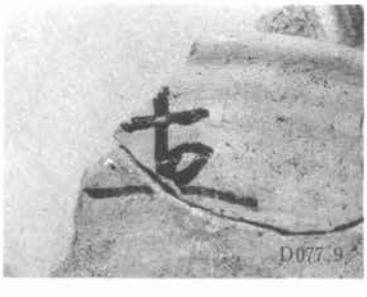
D032,13

D014,6

D072,6

D072,9

D072,17


D077,9

D077,14

D077,15

D078,29

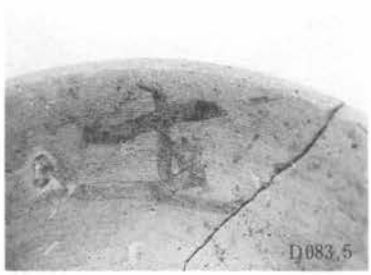
D082,5

D082,5

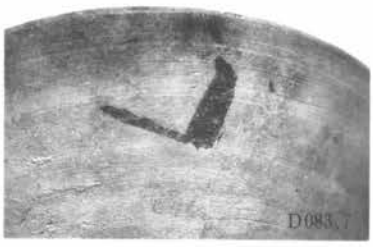
D082,9

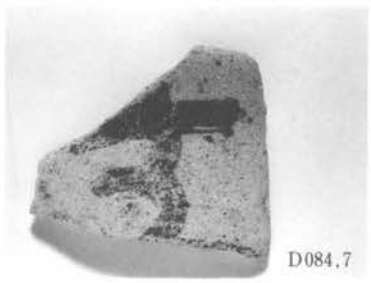
D083,19

D083,17


D083,5

D083,6


D083,7


D084,7

D091,2

D086

D086,7

D091,3

D093,12

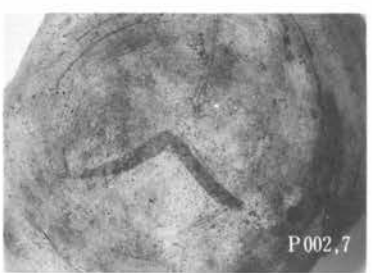
D093,13

D166,9

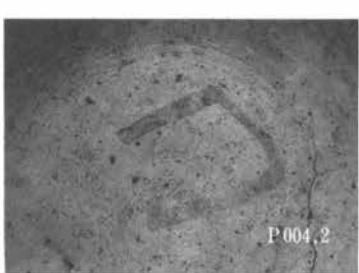
H008

H008,1

P002,12

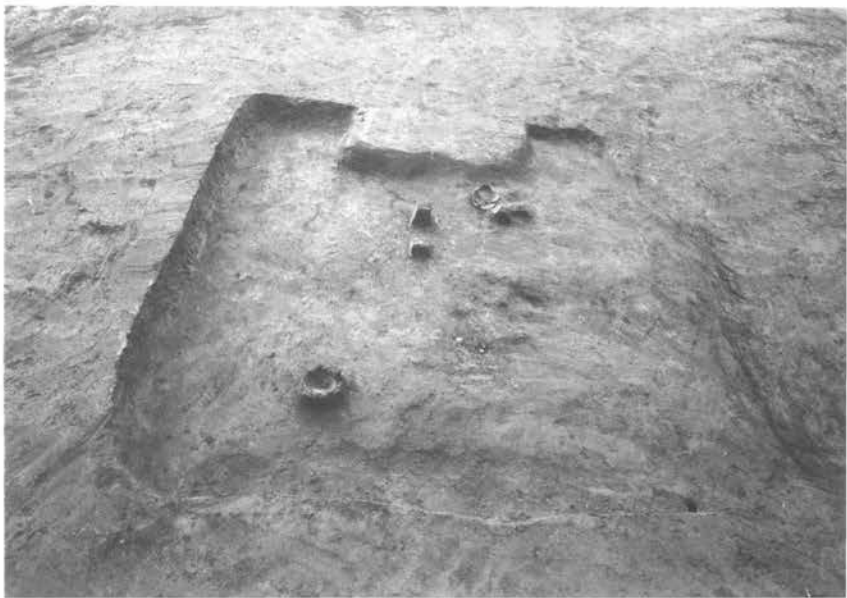

P002,7

P004,5

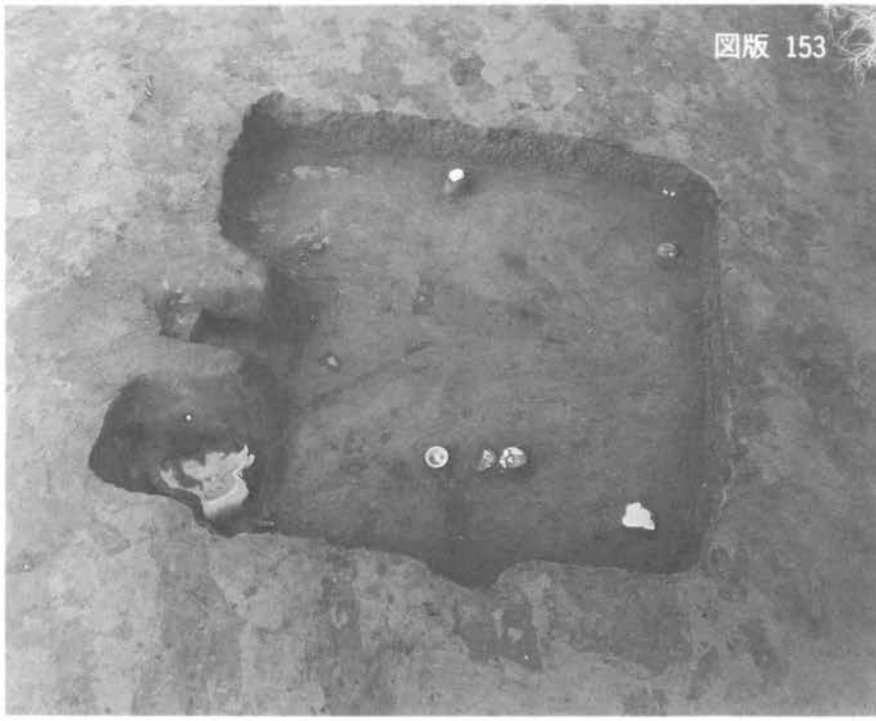

P004,2

1．D010号遺構全景

2．D010号遺構遺物
出土状況



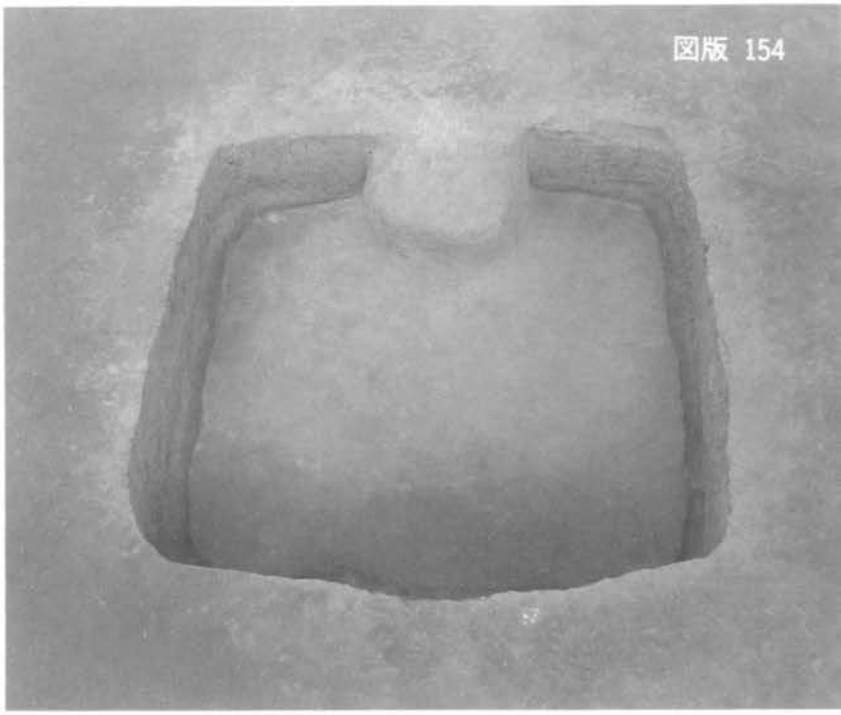
3．D015号遺構全景



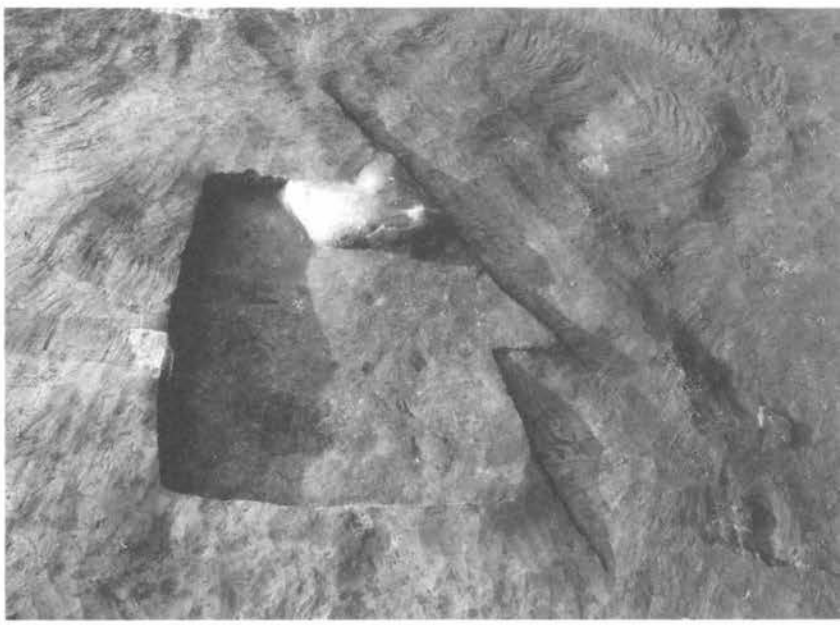
1．D016号遺構全景

2．D016号遺構遺物
出土状況

3．D017号遺構全景

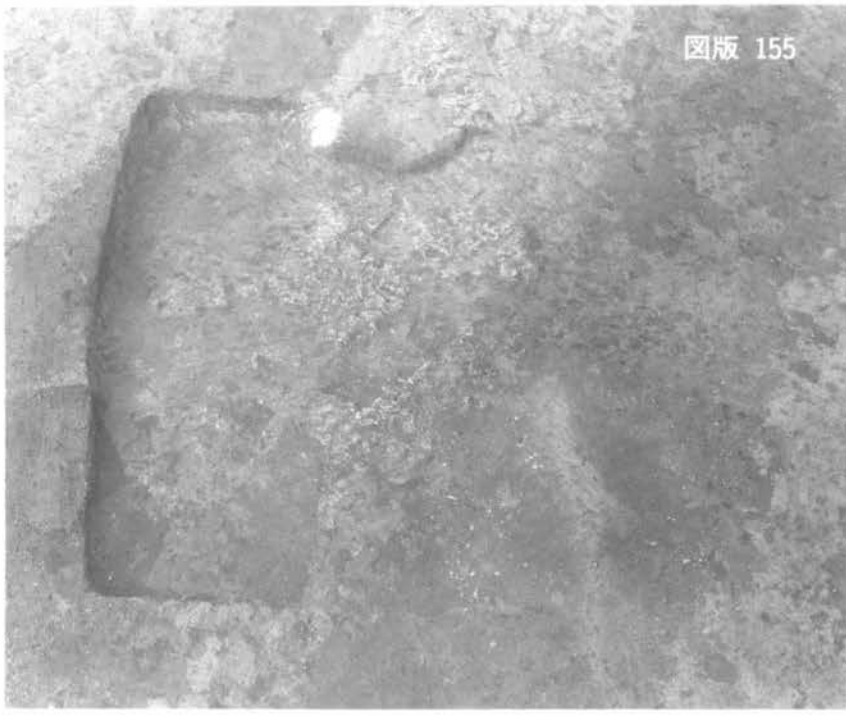


1．D018号遺構全景



2．D055号遺構全景

3．D055号遺構遺物
出土状況



1．D068号遺構全景

2．D188号遺構全景

3．D188号遺構カマド
検出状況

1．D188号遺構遺物
出土状況

2．D188号遺構遺物
出土状況

3．D189号遺構全景

1．D189号遺構遺物
出土状況

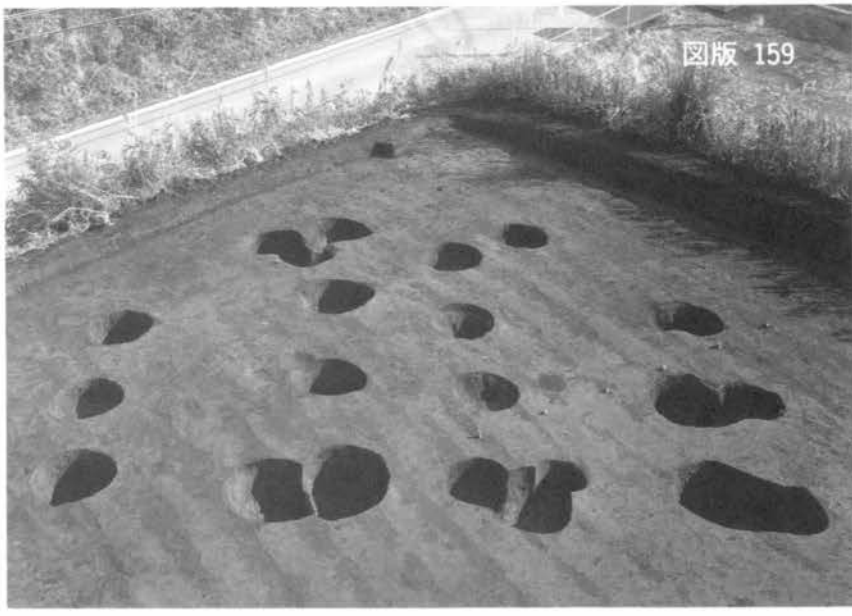
2．D189号遺構カマド
検出状況

3．D190号遺構全景

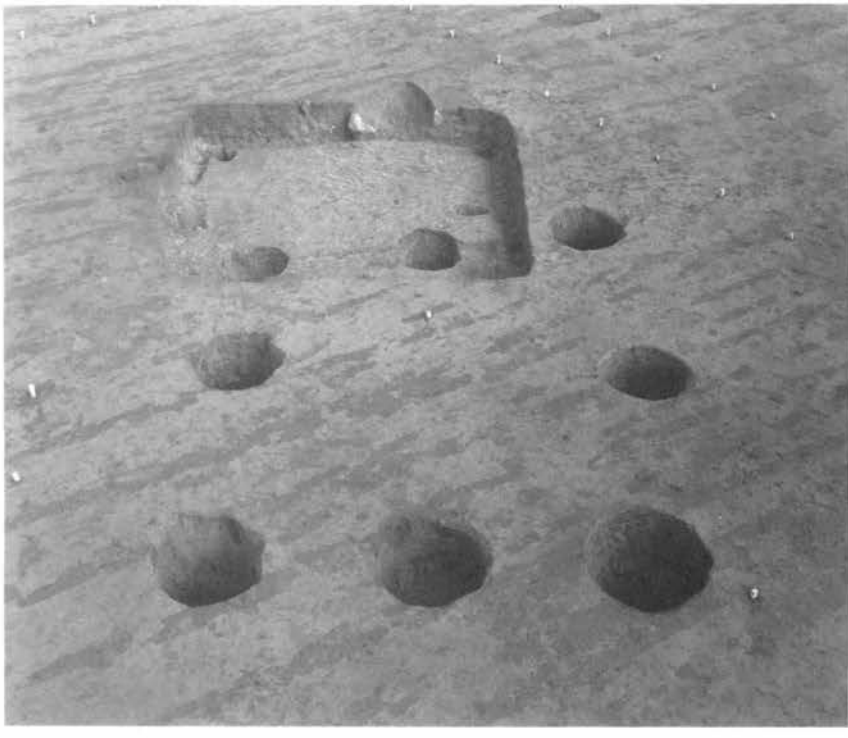
1．D190号遺構カマド
検出状況

2．D190号遺構遺物
出土状況

3．H014号遺構全景



1．H015,016号
遺構全景



2．H017号遺構全景

3．P017号遺構全景

1．P018号遺構全景

2．P019号遺構全景

3．M021号遺構全景

D010,1・2(1/6)

D016,1(1/3)

D010,11(1/2)

D016,6(1/6)

D015,2(1/3)

D015,1(1/2)

D016,14(1/2)

D016,21(1/2)

D017,14(1/2)

歴史時代第II群遺物

D017,18(½)

D055,1(⅓)

D018,2(⅓)

D055,6(½)

D055,7(½)

D055,15(½)

D018,5(½)

D188,35(½)

D190,6(½)

D190,31(½)

D190,14(½)

D190,35(⅓)

D016,28

D188,36

D015,3

D015

D016,13

D017,16

D017,13

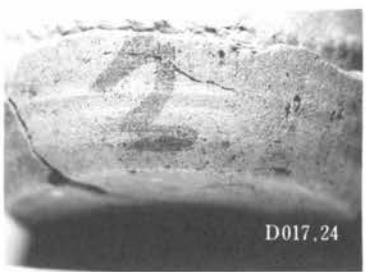
D017,23

D017,12

D017,13

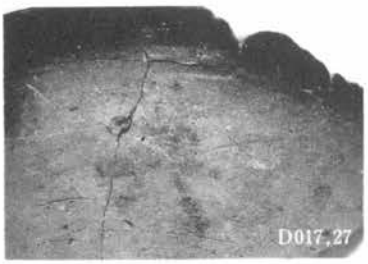
D017,

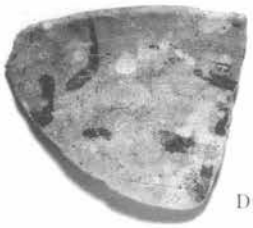
D017,19



D017,24

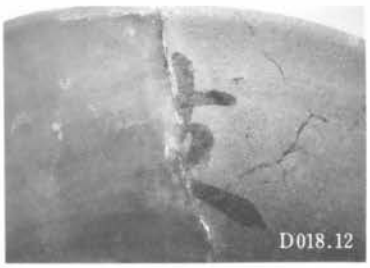
D017,25


D017.27


D017.29

D018.16

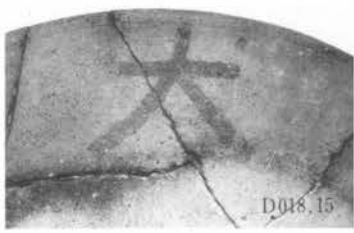
D018.12


D018.12

D018.19

D018.18

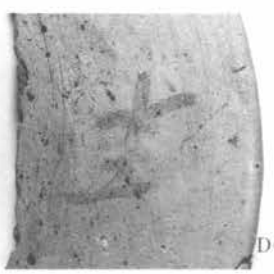
D018.22


D018.15

D018.20

D018

D055.13


D055.12

D068.3

D188.12

D188.19

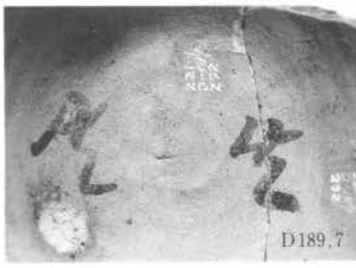
D188.20

D188.22

歴史時代第II群墨書土器

D188,34

D189,22


D189,7

D189,15

D189,15

D189,7

D189,7

D189,23

D190,25

D190,19

D190,28

D190,32

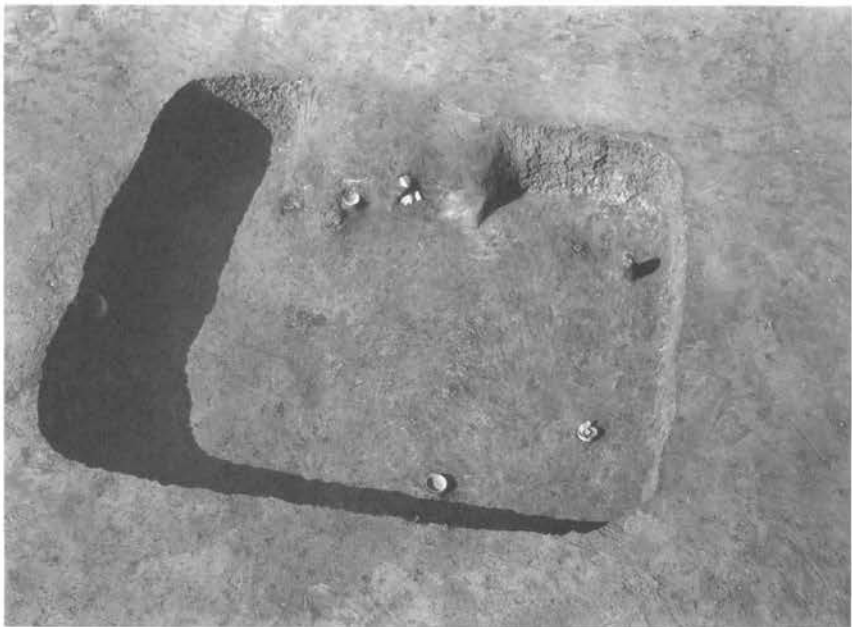
1．D019号遺構全景

2．D019号遺構遺物
出土状況

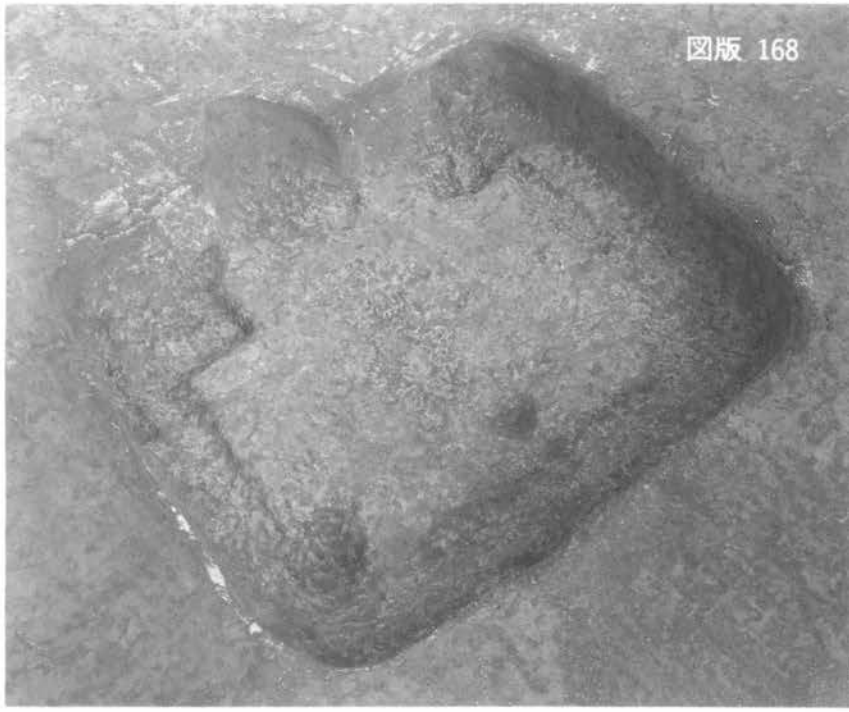
3．D019号遺構下部
検出ピット

1．D019号遺構下部検出
ピット遺物出土状況

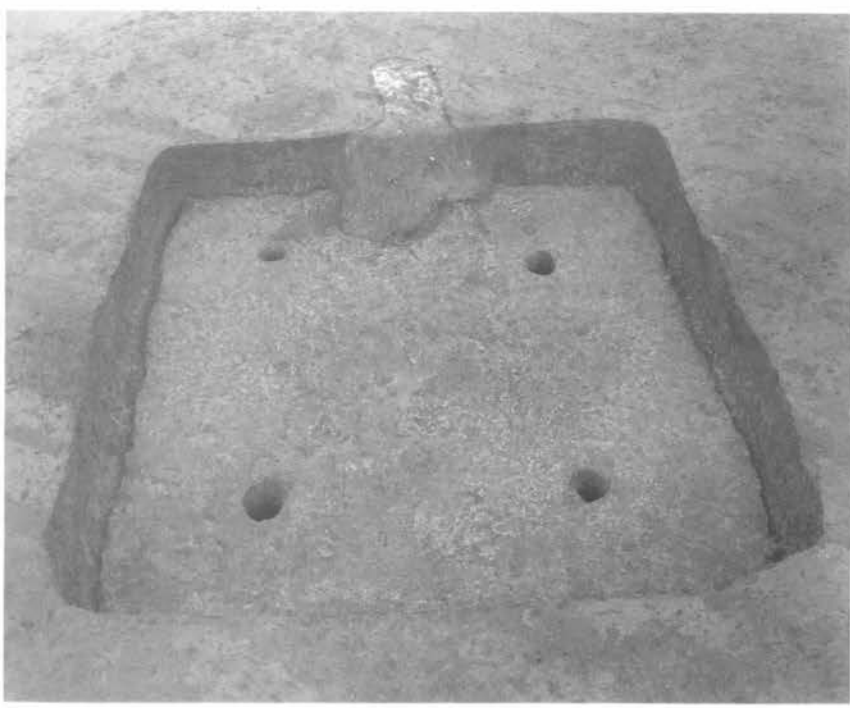
2．D020号遺構全景



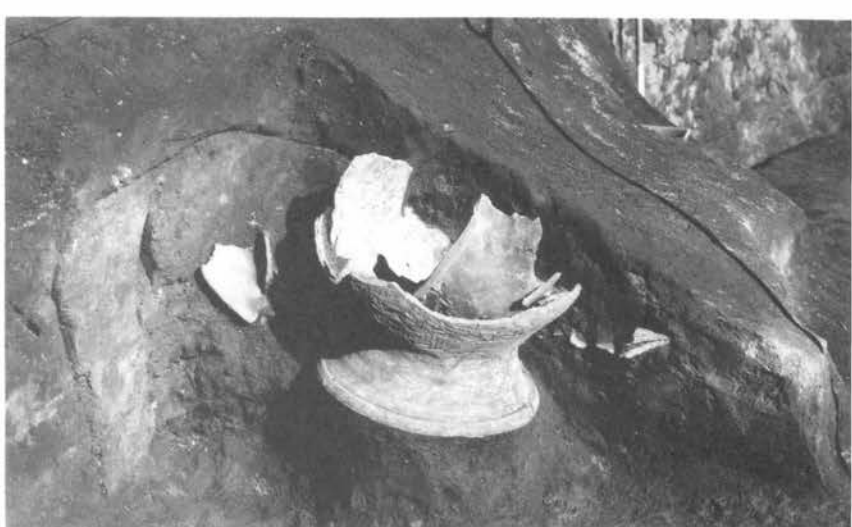
3．D021号遺構全景



1．D021号遺構掘りかた
検出状況



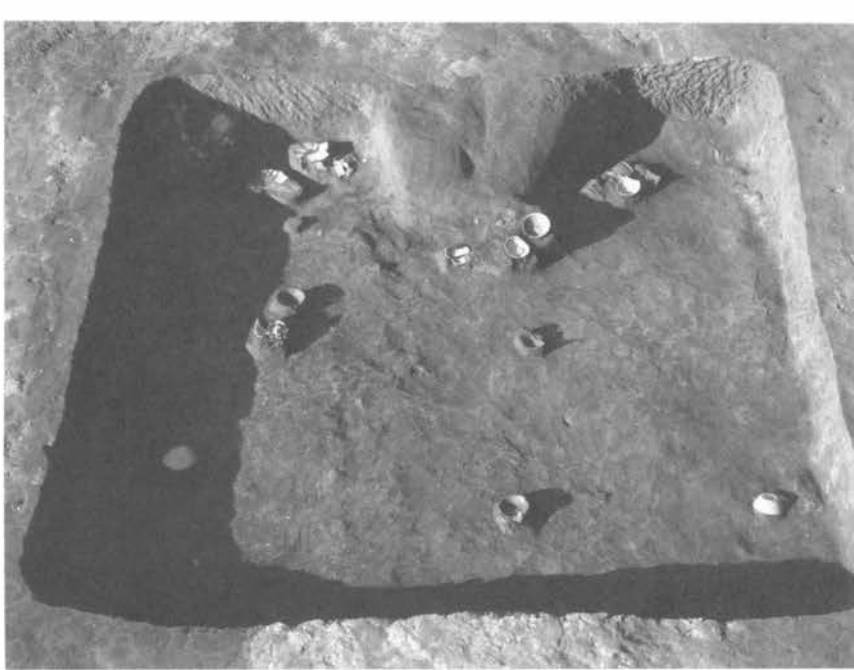
2．D022号遺構全景



3．D022号遺構カマド
検出状況

1．D023号遺構全景

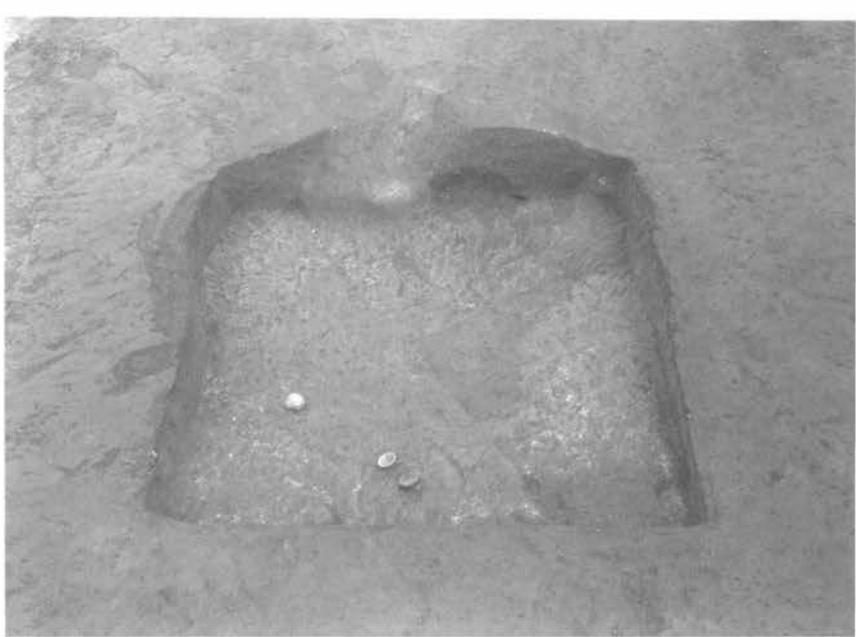
2．D024号遺構全景



3．D025号遺構全景

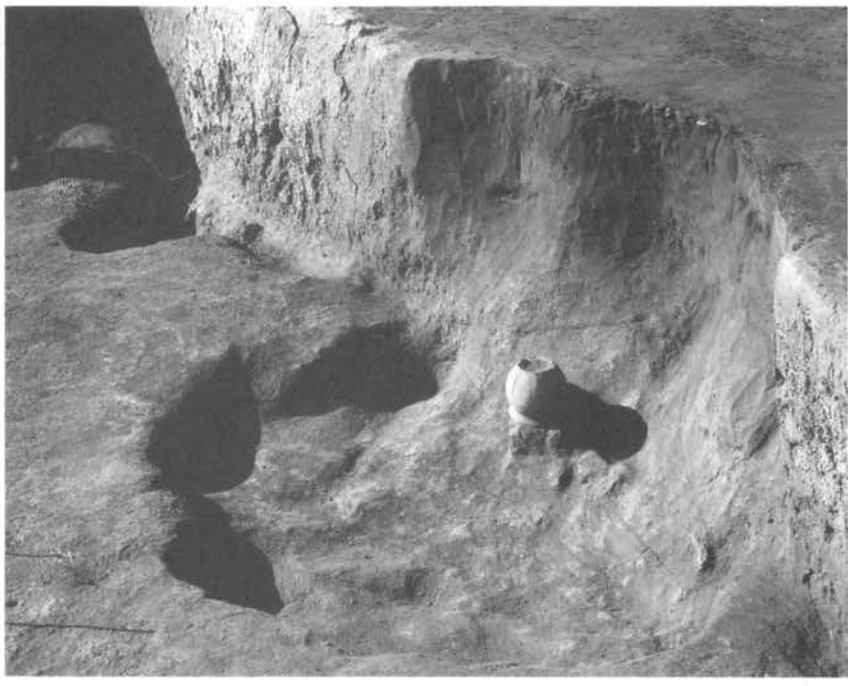
1．D025号遺構貝殻
検出状況

2．D025号遺構掘りかた
検出状況



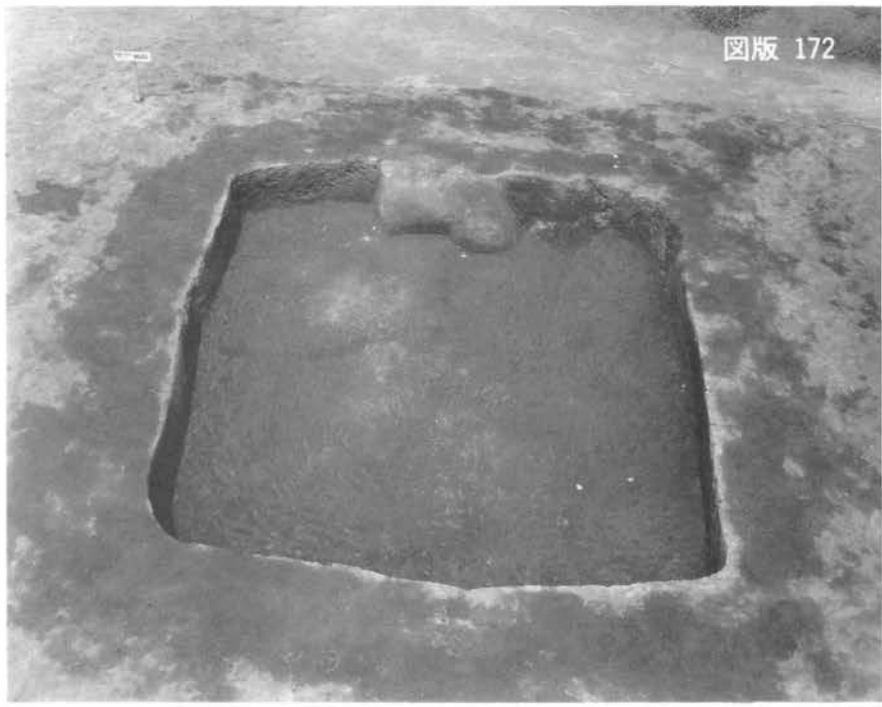
3．D087号遺構全景

1．D088号遺構全景



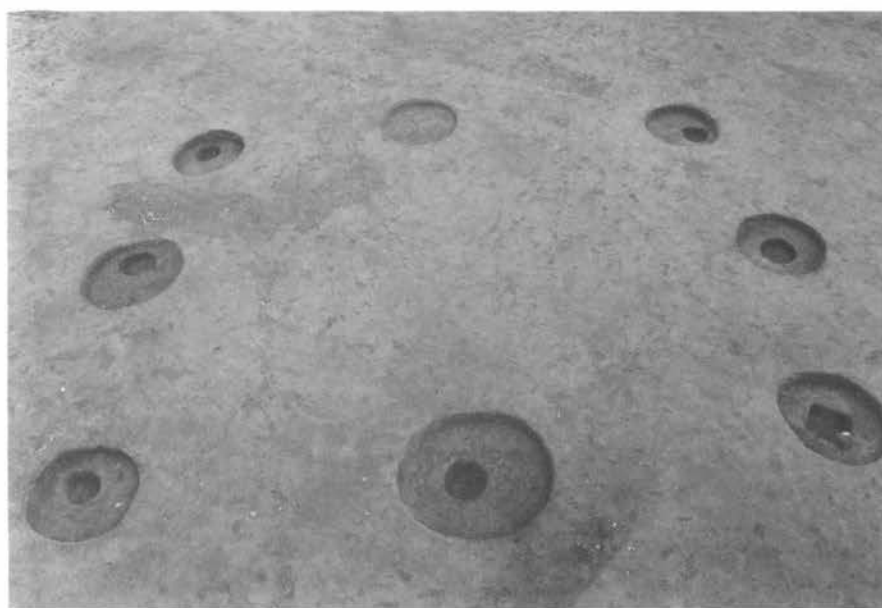
2．D088号遺構カマド
検出状況

3．D089号遺構全景

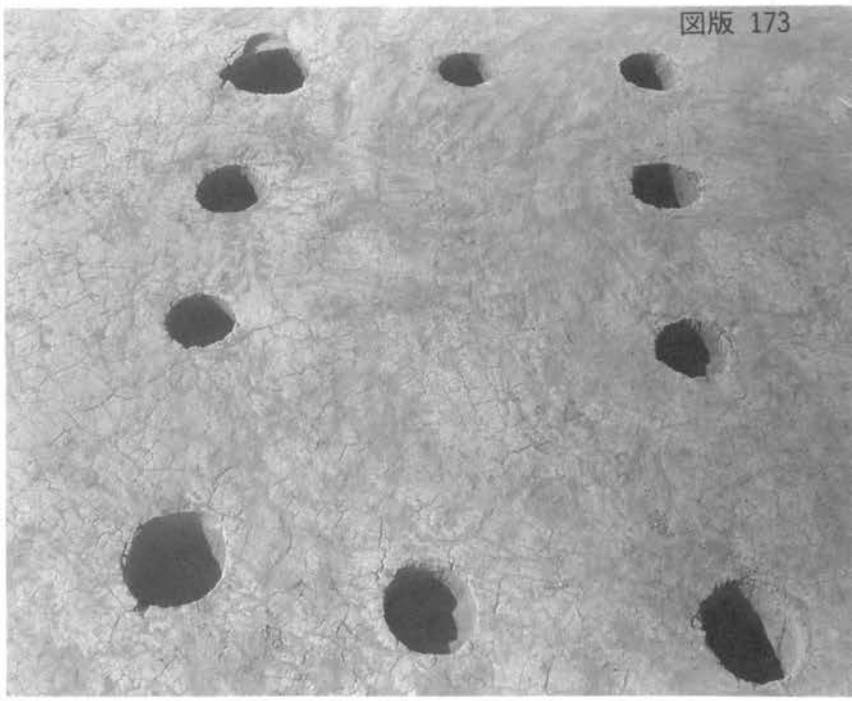


1．D160号遺構全景

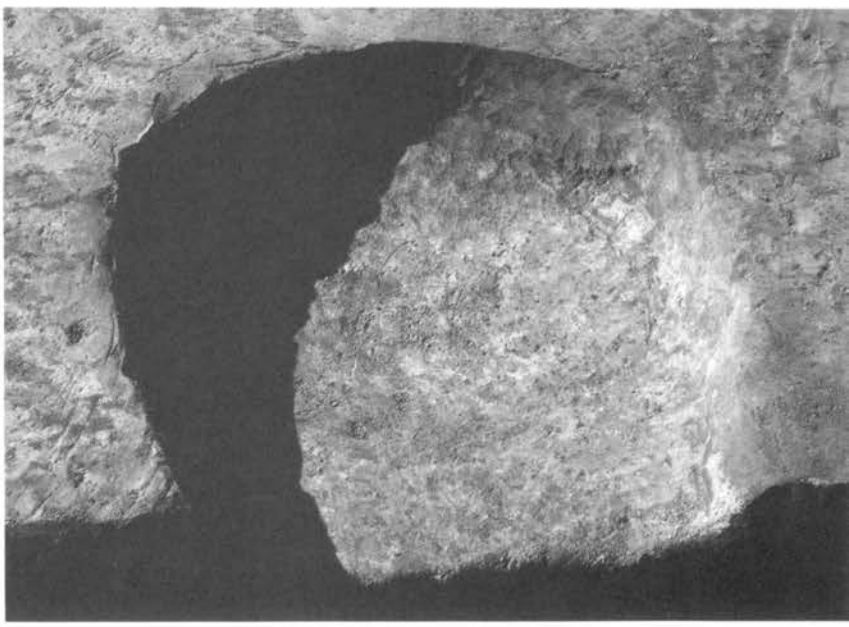
2．H002号遺構全景



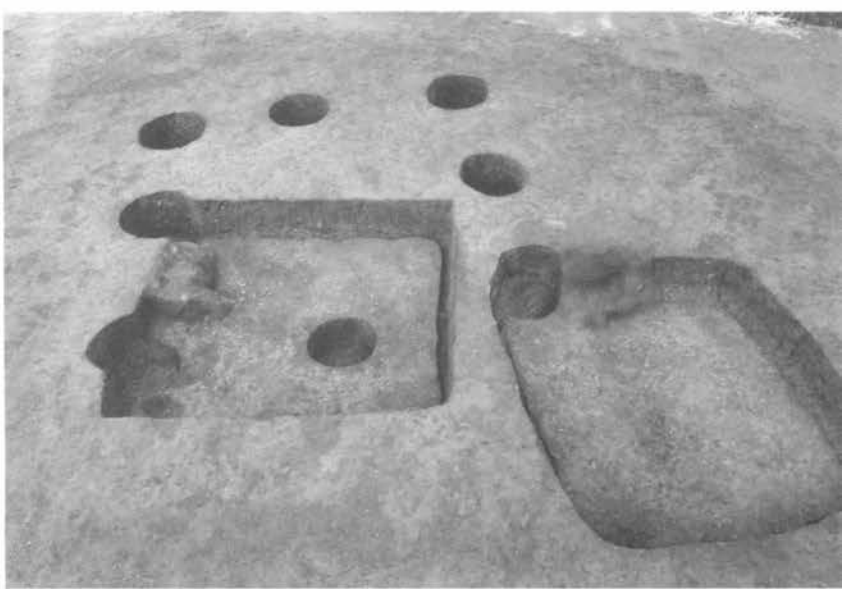
3．H003号遺構全景



1．H013号遺構全景



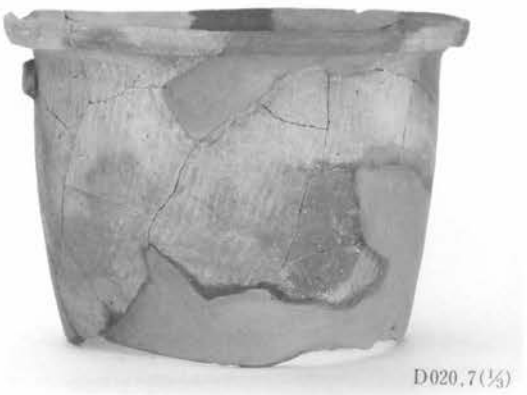
2．P009号遺構全景



3．D045，046，H009号
遺構分布状況

D019,6(½)

D019,9(½)



D020,7(⅓)

D020,1(¼)

D020,14(½)

D021,1(½)

D020,18(½)

D020,24(½)

D021,8(½)

D021,11(½)

D022,14(½)

歴史時代第Ⅲ群遺物

D022,15(½)

D022,1(¼)

D023,12(½)

D023,16(½)

D025,1(⅓)

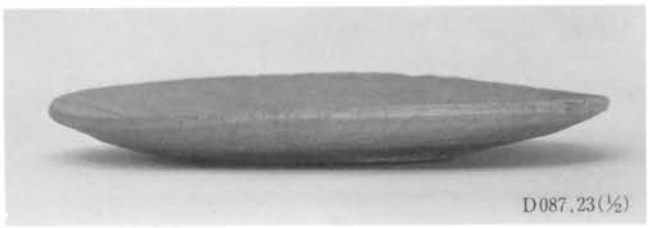
D023,9(½)

D024,10(½)

D025,15(½)

D087,8(½)

D087,6(½)


D087,23(½)

D087,21(½)

D088,9(½)

D089,4(½)

D088,1(⅓)

D020,27

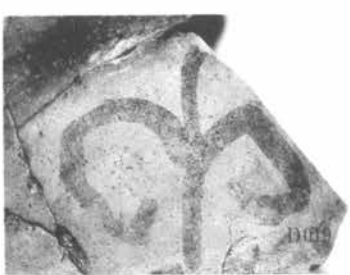
D022,23

D021,18

D089,22

D020,26

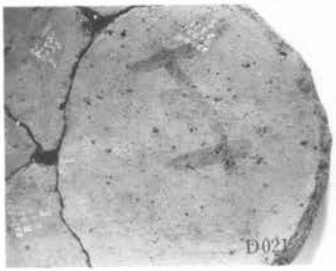
D019


D019

D020,13

D020_12

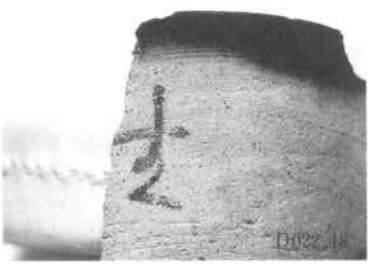
D021


D021

D021

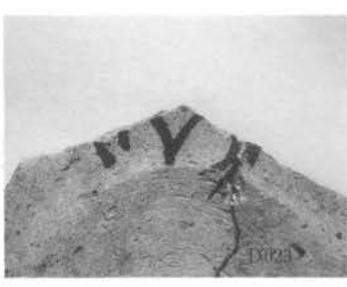
D022_9

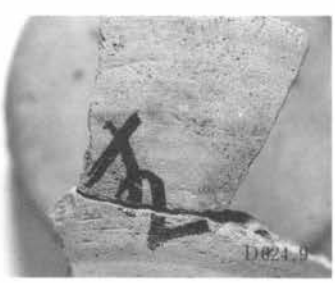
D022_9


D022_18

D023_10

D023_7


D023


D024_9

D024

D024

D024

D024

D024_8

歴史時代第Ⅲ群墨書土器

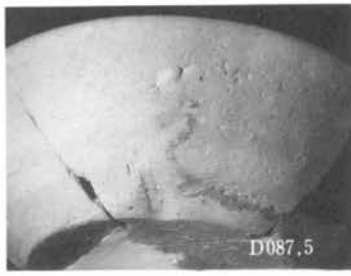
D024,6

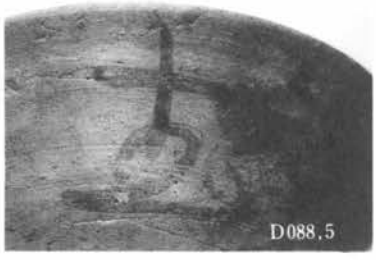
D024,9

D025,16

D087,12

D087,12

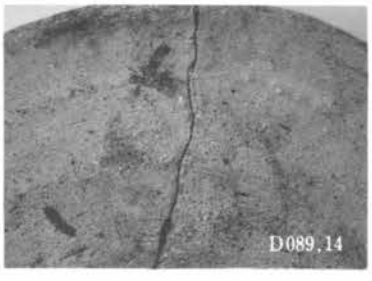

D087,5


D088,5

D088,4

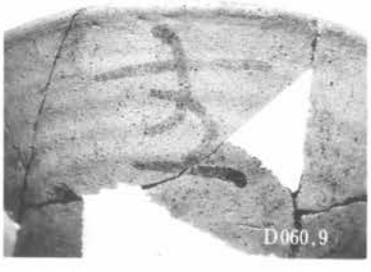
D089,14

D089,9


D089,14

D089,11

D089,10


D060,9

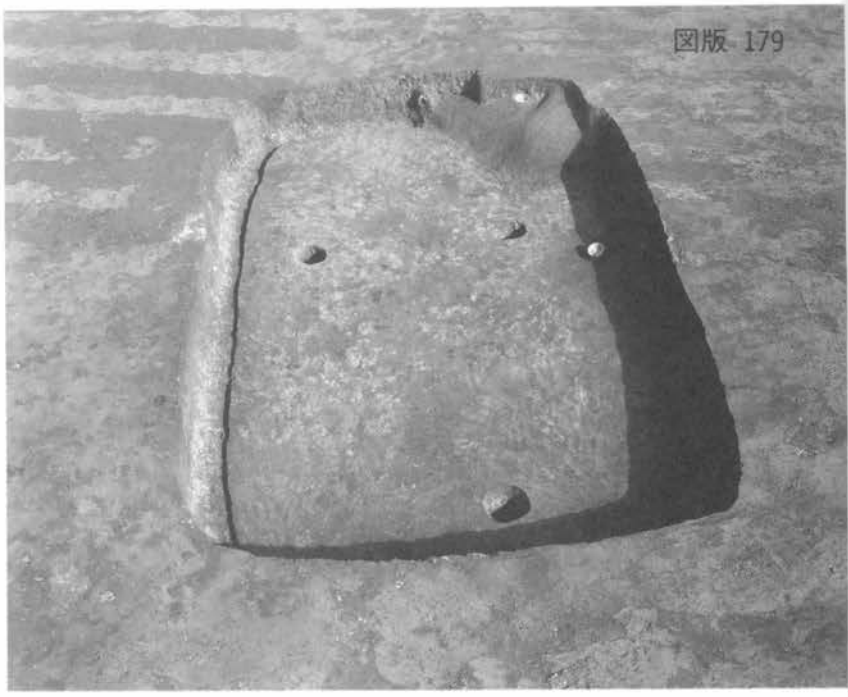
D160

D160

D160

D160

歴史時代第Ⅲ群墨書土器

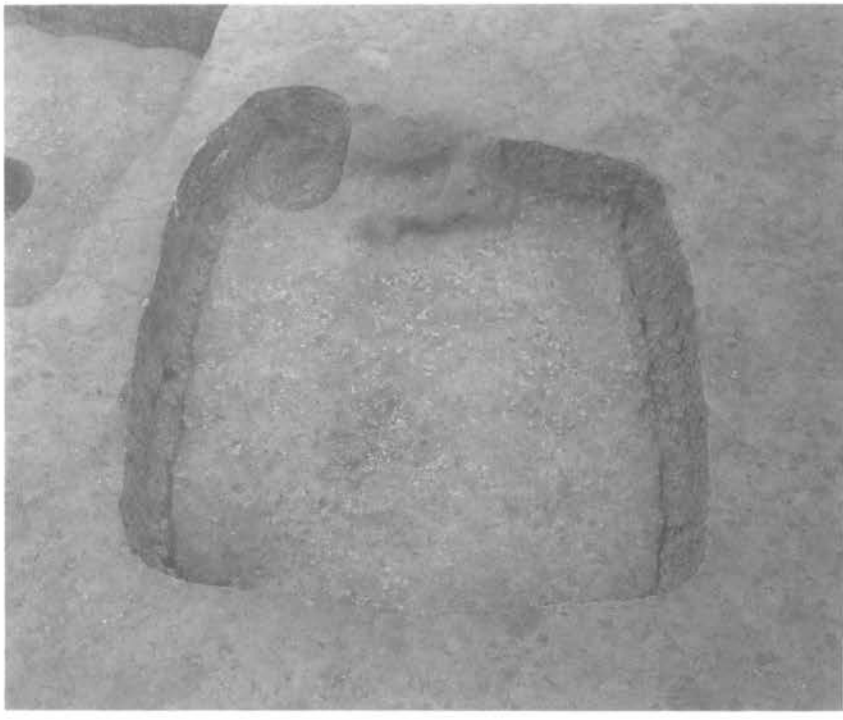


1．D041号遺構全景

2．D041号遺構カマド
検出状況

3．D042号遺構全景

1．D045号遺構全景



2．D046号遺構全景

3．D047号遺構全景

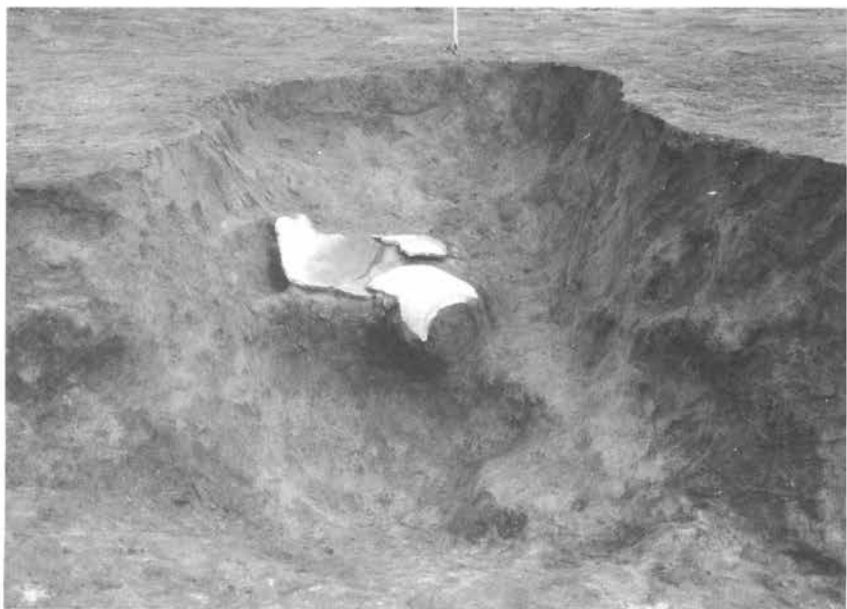
1．D048号遺構全景

2．D050号遺構全景

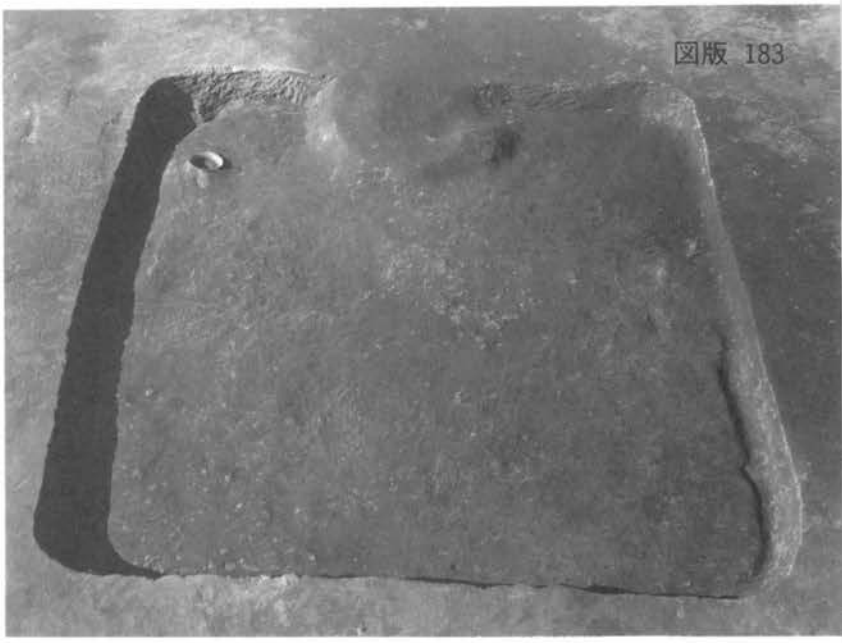
3．D051号遺構全景

1．D052号遺構全景

2．D057号遺構全景



3．D057号遺構カマド
検出状況



1．D059号遺構全景

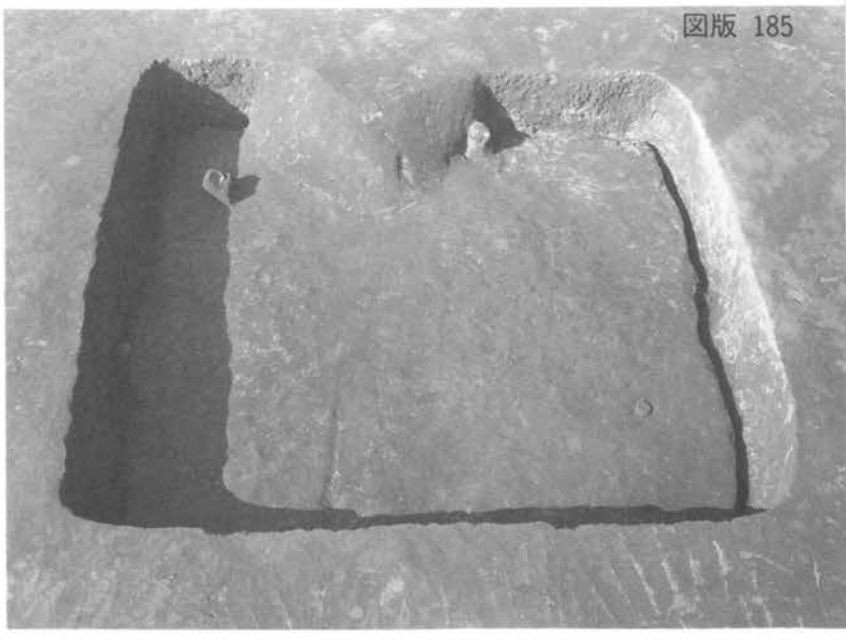
2．D060号遺構全景

3．D061号遺構全景

1．D061号遺構カマド
検出状況

2．D062号遺構全景

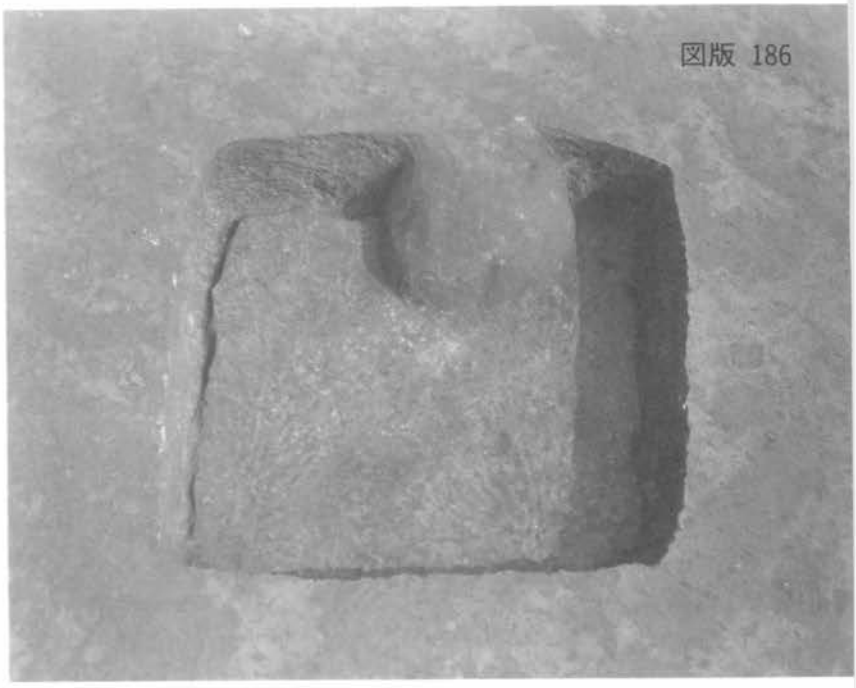
3．D062号遺構カマド
検出状況



1．D063号遺構全景

2．D063号遺構遺物
出土状況

3．D063号遺構遺物
出土状況



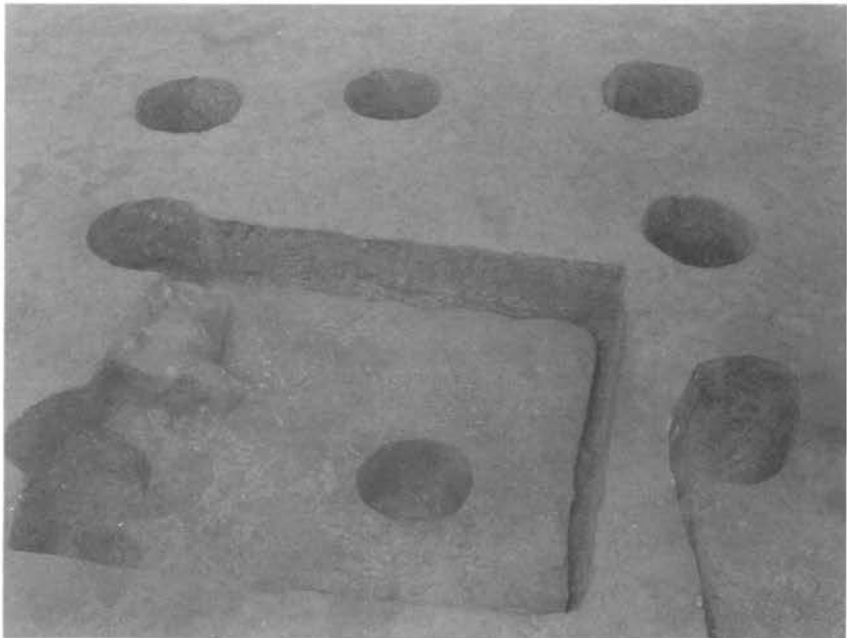
1．D064号遺構全景

2．D065号遺構全景

3．D065号遺構カマド
検出状況

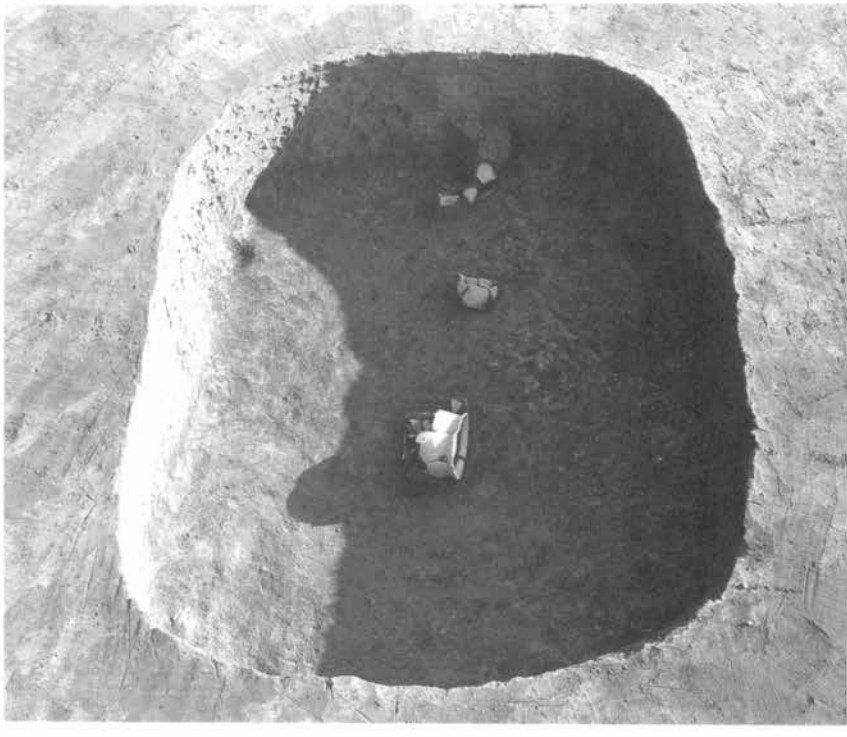
1．D066号遺構全景

2．D067号遺構全景
（部分調査）



3．H009号遺構全景

1．H012号遺構全景



2．P006号遺構全景

3．P006号遺構遺物
出土状況

D041,4(½)

D046,1(⅓)

D042,8(½)

D046,12(½)

D042,1(⅓)

D046,5(½)

D045,6(½)

D047,9(½)

D046,15(½)

D048,1(⅓)

D046,9(½)

D048,2(⅓)

D051,10(½)

D051,9(½)

D051,7(½)

D048,7(½)

D051,11(½)

歴史時代第Ⅳ群遺物

D062,1(⅓)

D065,1(¼)

P006,1(¼)

D065,3(⅓)

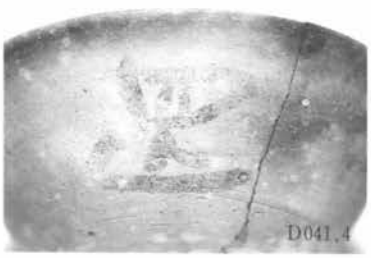
D047,36

D067,3(½)

D063,9

D040,5

D041,10


D041,4

D041

D041,3

D041

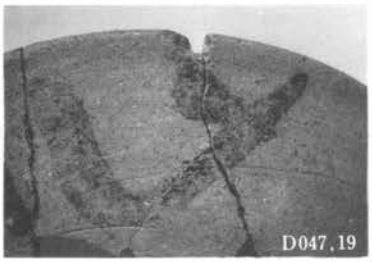
D045,6

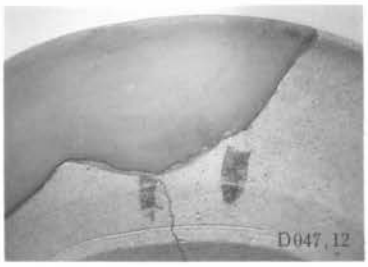
D047,15

D046,6

D047,26

D047,19


D047,19


D047,12

D047,20

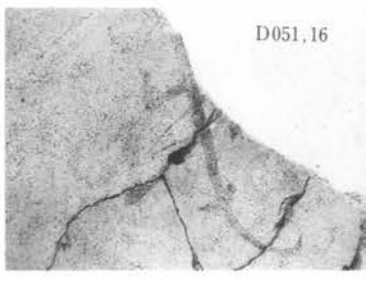
D047,12

D051,20

D051,18

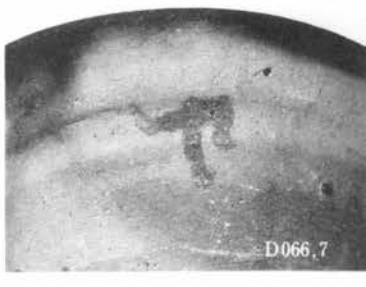
D051,24

D051,16

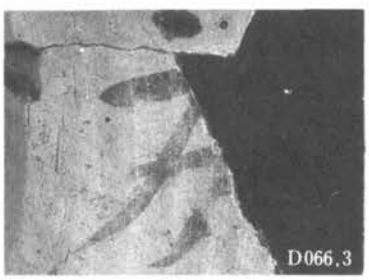

D051,16

D066,4

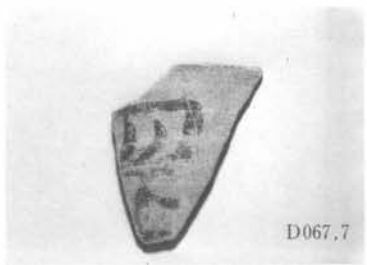
D066,2


D066,7

D066

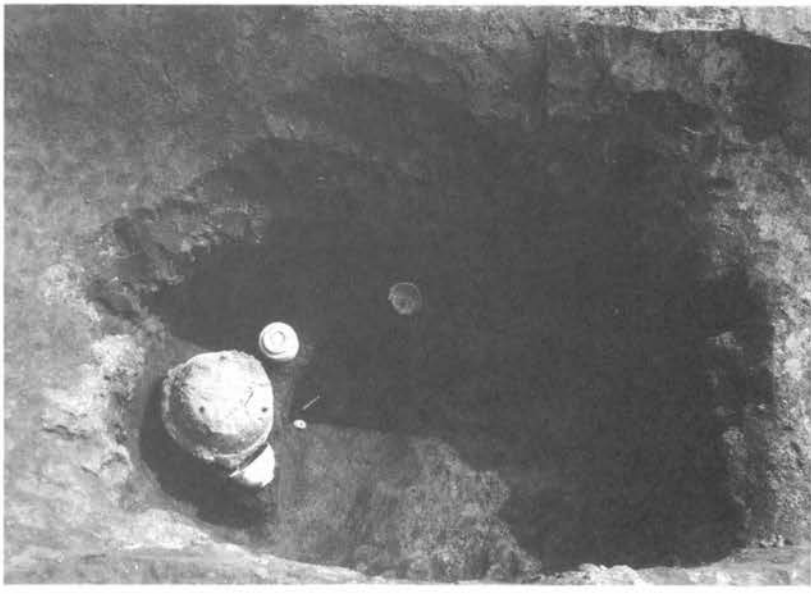

D066,3

D067


D067,7

D067,6

1．P015号遺構全景

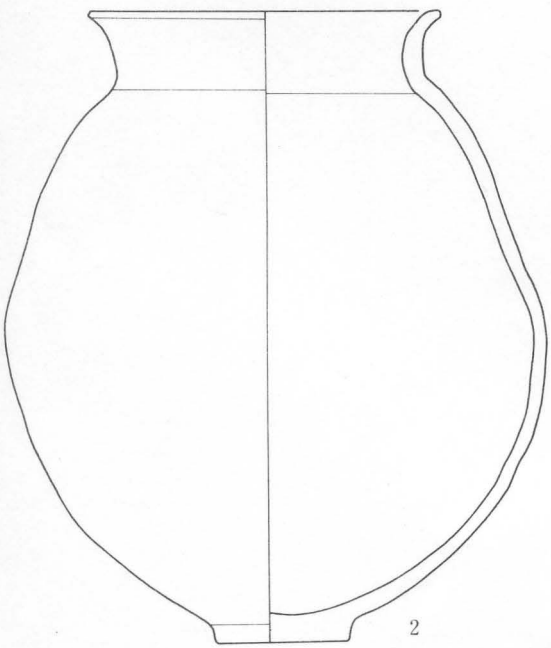


2．P015号遺構遺物
出土状況

3．P015号遺構遺物
出土状況

八千代市権現後遺跡　正 誤 表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
xxii	左21	所にかる。	所になる。	587	9	確められる。	認められる。
207	13	厚さ0.6m	厚さ0.06m	619	13	土器を石製品、	土器と石製品、
242	4	溝に攪乱	溝の攪乱	634	8	が終点する	が終了する
292	2	は竪緻	は堅緻	656	10	の宅住部分	の住宅部分
296	1	は外角線	は対角線	700	15	や楕円形の	の楕円形で
302	2	は外角線	は対角線	720	7	南壁辺表が	南壁辺長が
360	3	は３つの	は３の	722	12	解られていない	触られていない
452	5	石製器は	石製品は	723	24	出土例の少なく	出土例が少なく
466	21	未成品の	未成品の	728	7	胴部が認め	胴部に認め
469	26	ことがでず、	ことができず、	732	33	認められた。内面	認められた内面
495	16	が明瞭で	が明瞭で	X	30	風化と主成学的	風化と生成学的
543	12	内には	中には	xi	14、15	分折	分析



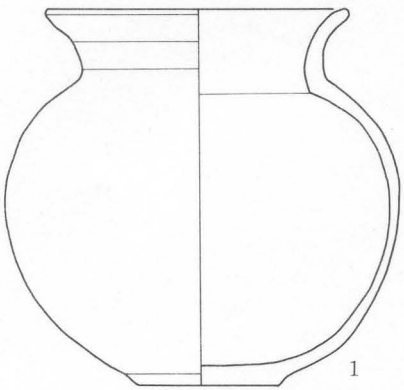


図510